

IBM Spectrum Protect
UNIX および Linux バックアップ/アーカイ
ブ・クライアント
8.1.12

インストールとユーザーのガイド



お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、[793 ページの『特記事項』](#)に記載されている情報をお読みください。

本書は、このエディションは、バージョン 8、リリース 1、モディフィケーション 12 に適用されます。IBM Spectrum® Protect (製品番号 5725-W98、5725-W99、および 5725-X15)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

© Copyright International Business Machines Corporation 1993, 2021.

目次

表.....	xvii
--------	------

本書について	xxiii
本書の対象読者.....	xxiii
資料.....	xxiv
本書で使用する規則.....	xxiv
構文図の読み取り.....	xxiv

バックアップ/アーカイブ・クライアントの更新.....	xxvii
-----------------------------	-------

第 1 章 IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール	1
バックアップ/アーカイブ・クライアントのアップグレード.....	1
クライアントとサーバーのアップグレード方法.....	1
アップグレードの追加情報.....	1
自動バックアップ/アーカイブ・クライアント・デプロイメント.....	2
クライアント環境の要件.....	3
AIX クライアント環境.....	3
HP-UX Itanium 2 API 環境.....	4
Linux on Power Systems クライアント環境.....	5
Linux x86_64 クライアント環境.....	6
Linux on System z クライアント環境.....	6
Mac OS X クライアント環境.....	7
Oracle Solaris クライアント環境.....	8
NDMP サポートの要件 (Extended Edition のみ).....	9
Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップおよびアーカイブするためのインストール要件.....	9
UNIX および Linux バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール.....	10
AIX クライアントのインストール.....	10
AIX クライアントをアンインストール.....	13
HP-UX Itanium 2 API のインストール.....	14
HP-UX Itanium 2 API のアンインストール.....	16
Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) のクライアントのインストール.....	16
Linux on Power (リトル・エンディアン) のクライアントのアンインストール.....	20
Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) のクライアントのインストール.....	22
Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) のクライアントのアンインストール.....	25
Linux on Power Systems (ビッグ・エンディアン) の API のインストール.....	26
Linux on Power Systems (ビッグ・エンディアン) の API のアンインストール.....	28
Linux x86_64 クライアントのインストール.....	30
Linux x86_64 クライアントのアンインストール.....	34
Ubuntu Linux x86_64 クライアントのインストール.....	36
Ubuntu Linux x86_64 クライアントのアンインストール.....	39
Linux on System z クライアントのインストール.....	41
Linux on System z クライアントのアンインストール.....	44
Mac OS X クライアントのインストール.....	46
Mac OS X クライアントのアンインストール.....	47
Oracle Solaris x86_64 クライアントのインストール.....	48
Oracle Solaris x86_64 クライアントのアンインストール.....	50
Oracle Solaris SPARC API のインストール.....	51
Oracle Solaris SPARC API のアンインストール.....	52

ソフトウェア更新 (AIX、Linux、Mac、および Solaris クライアント).....	53
クライアント管理サービスのインストール.....	53
第 2 章 IBM Spectrum Protect クライアントの構成.....	55
UNIX および Linux クライアントの root ユーザーおよび許可ユーザーのタスク.....	55
非 root ユーザーによる自分のデータの管理の有効化.....	57
バックアップ/アーカイブ・クライアント・ユーザーに対する暗号化の使用可能化.....	58
非 root ユーザーによる共有データの管理の有効化.....	58
クライアント・オプション・ファイルの概要.....	59
クライアント・システム・オプション・ファイルの作成と変更.....	61
デフォルトのクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの作成.....	63
カスタマイズされたクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの作成.....	65
環境変数 (AIX、Linux、Mac、Solaris).....	66
言語環境変数の設定.....	66
処理環境変数の設定.....	67
Bourne および Korn シェル変数の設定.....	68
C シェル変数の設定.....	69
API 環境変数の設定.....	69
Web クライアントの構成の概要.....	69
AIX、Linux、Mac、および Solaris システムでの Web クライアントの構成.....	70
スケジューラーの構成.....	71
クライアント・アクセプター管理サービスと従来のスケジューラー・サービスの比較.....	71
スケジューラーを管理するクライアント・アクセプター・サービスを使用するためのクライアントの構成.....	72
クライアント・スケジューラーの開始 (AIX、Linux、Mac、Solaris).....	74
コマンド・ライン・クライアントを使用したイベントのスケジュール.....	74
IBM Spectrum Protect クライアント/サーバーのファイアウォールを介した通信の構成.....	76
Secure Sockets Layer (SSL) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成.....	78
最新の GSKit ライブラリーにアクセスするためのシンボリック・リンクの作成.....	81
認証局ルート証明書.....	83
システムのジャーナル・ベース・バックアップの構成.....	84
ジャーナル・デーモンの構成.....	84
クライアント・サイドのデータ重複排除.....	90
クライアントのデータ重複排除の構成.....	94
データ重複排除からのファイルの除外.....	96
自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途.....	97
自動クライアント・フェイルオーバーの概要.....	97
自動フェイルオーバー用のクライアントの構成.....	100
複製されたクライアント・データの状況の判別.....	103
自動クライアント・フェイルオーバーの回避.....	104
クライアントのフェイルオーバーの強制.....	104
Tivoli Storage Manager FastBack データをバックアップおよびアーカイブするためのクライアントの構成.....	105
クラスター環境の構成および使用.....	106
クラスター環境の概要.....	107
クラスター環境でのバックアップ/アーカイブ・クライアントの構成.....	107
クラスター環境での Web クライアント・アクセスの使用可能化.....	113
レガシー AIX IBM PowerHA SystemMirror セットアップのマイグレーション.....	114
スナップショット・ベースのファイル・バックアップ/アーカイブを実行する前に必要な AIX 構成の考慮事項.....	115
スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成..	116
Clustered Data ONTAP NetApp ファイル・サーバー・ボリュームの保護.....	117
スナップショットを使用した NetApp プログレッシブ増分バックアップに対する SnapMirror サポート (snapdiff).....	121
サーバーへのワークステーションの登録.....	123
クローズされた登録.....	124
オープン登録.....	124

include-exclude リストの作成	125
include-exclude オプション.....	126
シンボリック・リンクおよび別名処理.....	133
圧縮処理および暗号化処理の決定.....	134
include-exclude リスト・ファイルのプレビュー.....	135
include-exclude オプション処理.....	136
第 3 章始めに.....	139
IBM Spectrum Protect サーバーのバージョン 8.1.2 以降に接続するためのクライアント・セキュリ	
ティー設定の構成.....	139
デフォルト・セキュリティ設定 (ファスト・パス) を使用した構成.....	139
自動証明書配布を使用しない構成.....	142
セキュア・パスワード・ストレージ.....	144
IBM Spectrum Protect クライアント認証.....	146
Java GUI セッションの開始.....	147
IBM Spectrum Protectpassword.....	147
セットアップ・ウィザード.....	148
コマンド・ライン・セッションの開始.....	148
バッチ・モードの使用.....	149
対話モードを使用した一連のコマンドの発行.....	149
ブランク・スペースまたは引用符を含む入力ストリングの指定.....	150
開始: その他の考慮事項.....	150
新しいセキュリティ環境における Web クライアントの使用.....	151
Web クライアント・セッションの開始.....	151
ファイル・リストア操作のための Web ユーザー・インターフェース・セッションの開始.....	153
システム・ログのダウンロード.....	154
クライアント・スケジューラーの自動開始.....	156
パスワードの変更.....	156
バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用したファイル・リストのソート.....	158
オンライン・ヘルプの表示.....	159
セッションの終了.....	159
オンライン・フォーラム.....	160
第 4 章データのバックアップ.....	161
バックアップの計画	161
どのファイルをバックアップするか.....	161
いつファイルをバックアップおよびアーカイブするか.....	162
バックアップ前の考慮事項 (UNIX および Linux).....	163
LAN フリー・データ移動.....	163
メモリー制約があるシステムでの増分バックアップ.....	164
ファイル数が多いシステムでの増分バックアップ.....	165
処理を制御するための include-exclude オプション.....	166
バックアップまたはアーカイブ操作時のデータの暗号化.....	167
ファイル・システムおよび ACL サポート.....	168
操作の最大ファイル・サイズ.....	172
長いユーザー名およびグループ名.....	172
Mac OS X ボリューム名.....	173
Mac OS X ユニコード使用可能.....	174
Mac OS X Time Machine のバックアップ・ディスク.....	174
増分、選択、または日付による増分バックアップの実行 (UNIX および Linux).....	175
フル増分バックアップと部分増分バックアップ.....	175
日付による増分バックアップ.....	179
日付による増分、ジャーナル・ベース、および NetApp スナップショット差分とフル増分およ	
び部分増分のバックアップの比較.....	180
HTTPS を使用したスナップショット差分バックアップ (Linux).....	181
選択バックアップ.....	183
Solaris グローバル・ゾーン・バックアップおよび非グローバル・ゾーン・バックアップ.....	183

アクセス許可の保管.....	184
仮想マウント・ポイントの設定.....	184
Java GUI を使用したデータのバックアップ.....	184
コマンド・ラインを使用したデータのバックアップ.....	185
バックアップ・データの削除.....	189
ファイル・スペースの削除.....	190
グループ・バックアップのための 1 つ以上のファイル・スペースからのファイルのバックアップ (UNIX および Linux).....	190
クライアント・ノード・プロキシ・サポートによるバックアップ (UNIX および Linux).....	191
GUI からのマルチノード操作を使用可能にする.....	192
暗号化のセットアップ.....	193
クライアント・ノード・プロキシ・サポートによるバックアップのスケジュール.....	193
ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け (UNIX および Linux).....	197
イメージ・バックアップ.....	197
イメージ・バックアップの作成前の前提タスクの実行.....	198
イメージ・バックアップを使用したファイル・システムの増分バックアップの実行.....	201
GUI を使用したイメージ・バックアップの実行.....	203
コマンド・ラインを使用したイメージ・バックアップの実行.....	205
スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブとスナップショット・ベ ースのイメージ・バックアップ.....	205
Btrfs ファイル・システムの保護.....	206
Btrfs ファイル・システムのバックアップとリストア.....	207
Btrfs サブボリュームのバックアップとリストア.....	209
Network Data Management Protocol を使用した NAS ファイル・システムのバックアップ.....	210
NDMP プロトコルを使用したバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI での NAS ファイ ル・システムのバックアップ.....	211
コマンド・ラインを使用した NAS ファイル・システムのバックアップ.....	213
ネットワーク・ファイル・システムのバックアップ.....	215
グローバル名前空間機能を使用した NFS ファイル・システムのバックアップ.....	215
AIX ワークロード区画ファイル・システムのバックアップ.....	216
Solaris Zettabyte ファイル・システムのバックアップ.....	217
AIX JFS2 暗号化ファイル・システムのバックアップ.....	218
AIX JFS2 拡張属性のバックアップ.....	219
VMware 仮想マシンのバックアップ.....	219
VMware 仮想マシンのフルバックアップのための環境の準備.....	221
VMware 仮想マシンのフルバックアップの作成.....	222
仮想マシンの並列バックアップ.....	224
Tivoli Storage Manager FastBack のデータのバックアップおよびアーカイブ.....	224
バックアップ処理の状況の表示.....	225
バックアップ (UNIX および Linux): その他の考慮事項.....	228
保管されたファイル.....	228
特殊ファイル・システム.....	229
NFS または仮想マウント・ポイント.....	229
管理クラス.....	229
シンボリック・リンクのバックアップ.....	230
ハード・リンク.....	232
スパース・ファイル.....	232
NFS ハード・マウントおよびソフト・マウント.....	233
削除済みファイル・システム.....	233
オープンされたファイル.....	234
ワイルドカード文字.....	235
第 5 章データのリストア.....	237
イメージのリストア.....	237
GUI を使用したイメージのリストア.....	239
コマンド・ラインを使用したイメージのリストア.....	240
バックアップ・セットからのデータのリストア.....	240

バックアップ・セットのリストア: 考慮事項および制約事項.....	242
バックアップ・セットのリストア.....	244
GUI を使用したバックアップ・セットのリストア.....	244
クライアント・コマンド・ライン・インターフェースを使用したバックアップ・セットのリストア.....	245
フェイルオーバー時のデータのリストアまたはリトリート.....	246
ファイルへのイメージのリストア.....	247
ストレージ・プールを使用した GPFS ファイル・システム・データの管理.....	248
特定時点へのデータのリストア.....	249
保存セットからのデータのリストア.....	251
AIX 暗号化ファイルのリストア.....	252
AIX ワークロード区画のファイル・システムのリストア.....	252
NAS ファイル・システムのリストア.....	254
バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用した NAS ファイル・システムのリストア.....	254
コマンド・ラインから NAS ファイル・システムをリストアするためのオプションおよびコマンド.....	255
アクティブまたは非アクティブ・バックアップのリストア.....	256
GUI を使用したデータのリストア.....	256
コマンド・ライン・リストアの例.....	257
例: コマンド・ラインを使用した大量のデータのリストア.....	259
標準照会リストア、無照会リストア、および再始動可能リストア.....	260
Solaris Zettabyte (ZFS) ファイル・システムのリストア.....	262
リストアの追加タスク.....	262
別のユーザーへの、ファイルのリストアまたはリトリートの許可.....	262
別のクライアント・ノードからのファイルのリストアまたはリトリート.....	264
別のワークステーションへのファイルのリストアまたはリトリート.....	265
ディスク損失の場合のディスクのリストア.....	265
ファイル・スペースの削除.....	266
SELinux を使用した Red Hat Enterprise Linux 5 クライアントのファイルのリストア.....	267
第 6 章データのアーカイブとリトリート (UNIX および Linux).....	269
ファイルのアーカイブ.....	269
GUI を使用したデータのアーカイブ.....	269
コマンド・ラインを使用したデータのアーカイブの例.....	270
クライアント・ノード・プロキシを使用したデータのアーカイブ.....	272
アーカイブ・データの削除.....	274
その他のアーカイブ・タスク.....	275
アーカイブのリトリート.....	276
GUI を使用したデータのリトリート.....	277
コマンド・ラインを使用したデータのリトリートの例.....	277
管理クラスのアーカイブ.....	278
第 7 章 IBM Spectrum Protect スケジューラーの概要.....	281
例: スケジュール定義でのブランク・スペースを含むファイル名.....	282
特定ノードに対する優先開始時刻.....	282
スケジューラー処理オプション.....	283
スケジュール・スクリプトのスケジュール戻りコードを評価.....	284
preschedulecmd および postschedulecmd スクリプトからの戻りコード.....	285
クライアント・アクセプターのスケジューラー・サービスと従来のスケジューラー・サービスの比較.....	286
クライアント・スケジューラー・プロセスをバックグラウンド・タスクとして実行し始動時に自動 的に開始するための設定.....	286
例: スケジュールされた作業に関する情報の表示.....	288
完了した作業に関する情報の表示.....	290
スケジューリング・オプションの指定.....	291
コマンドのオプションのスケジューリング.....	291
スケジュールされたコマンドの使用可能化と使用不能化.....	291
複数スケジュール要件の単一システム上での管理.....	292
第 8 章クライアント戻りコード.....	295

第 9 章ストレージ管理ポリシー	297
ポリシー・ドメインおよびポリシー・セット.....	297
管理クラスおよびコピー・グループ.....	298
管理クラスおよびコピー・グループについての情報の表示.....	299
コピー・グループ名属性.....	300
コピー・タイプ属性.....	300
コピー頻度属性.....	300
versions data exists (データが存在するバージョン) 属性.....	300
versions data deleted (データが削除されたバージョン) 属性.....	300
非アクティブ・バックアップ・バージョン保存属性.....	301
バックアップ・バージョンのみ保存属性.....	301
コピーの逐次化属性.....	301
コピーの mode パラメーター.....	302
コピーの宛先属性.....	302
バージョン保持属性.....	302
重複排除データ属性.....	302
ファイルの管理クラスの選択.....	303
ファイルへの管理クラスの割り当て.....	303
アーカイブ済みファイルの管理クラスの指定変更.....	304
ディレクトリーの管理クラスの選択.....	305
ファイルへの管理クラスのバインド.....	305
ファイルのバックアップ・バージョンの再バインド.....	306
保存猶予期間.....	306
イベント・ベースのポリシー保存保護.....	307
データ保存サーバー上のファイルのアーカイブ.....	307
第 10 章処理オプション	309
処理オプション概要.....	309
通信オプション.....	310
TCP/IP オプション.....	310
共用メモリー・オプション.....	311
サーバーのオプション.....	311
バックアップおよびアーカイブ処理のオプション.....	312
リストアおよびリトリート処理のオプション.....	323
スケジュール・オプション.....	326
形式および言語のオプション.....	327
コマンド処理オプション.....	328
権限オプション.....	328
エラー処理オプション.....	329
トランザクション処理オプション.....	329
Web クライアント・オプション.....	330
診断オプション.....	330
コマンドでのオプションの使用.....	331
コマンドでのオプションの入力.....	331
初期コマンド・ラインのみのオプション.....	338
IBM Spectrum Protect サーバーが設定できるクライアント・オプション.....	339
クライアント・オプションの解説.....	341
Absolute.....	341
Afmskipuncachedfiles.....	342
Archmc.....	343
Archsymlinkasfile.....	344
Asnodename.....	344
Auditlogging.....	346
Auditlogname.....	348
Autodeploy.....	350

Autofsrename.....	351
Automount.....	353
Backmc.....	353
Backupsetname.....	354
Basesnapshotname.....	355
Cadlistenonport.....	356
Changingretries.....	357
Class.....	358
Collocatebyfilespec.....	359
Commmethod.....	360
Commrestartduration.....	361
Commrestartinterval.....	362
Compressalways.....	363
Compression.....	363
Console.....	365
Createnewbase.....	366
Csv.....	368
Datacenter.....	371
Datastore.....	371
Dateformat.....	371
Dedupcachepath.....	375
Dedupcachesize.....	376
Deduplication	377
Defaultserver.....	378
Deletefiles.....	379
Description.....	379
Detail.....	380
Diffsnapshot.....	382
Diffsnapshotname.....	383
Dirmc.....	384
Dironly.....	385
Disablenqr.....	386
Diskbuffsize.....	387
Diskcachelocation.....	387
Domain.....	388
Domain.image.....	393
Domain.nas.....	394
Domain.vmfull.....	395
Dontload.....	401
Dynamicimage.....	402
Efsdecrypt.....	403
Enablearchiveretentionprotection.....	404
Enablededupcache.....	405
Enableinstrumentation.....	406
Enablelanfree.....	408
Encryptiontype.....	410
Encryptkey.....	410
Errorlogmax.....	412
Errorlogname.....	414
Errorlogretention.....	414
Exclude オプション.....	416
Fbbranch.....	423
Fbclientname.....	424

Fbpolicyname.....	425
Fbreposlocation.....	426
Fbserver.....	427
Fbvolumename.....	428
Filelist.....	429
Filename.....	432
Filesonly.....	433
Followsymbolic.....	434
Forcefailover.....	435
Fromdate.....	436
Fromnode.....	437
Fromowner.....	438
Fromtime.....	439
Groupname.....	439
Groups (非推奨).....	440
Host.....	440
Httpport.....	440
Hsmreparsetag.....	441
Ieobjtype.....	442
Ifnewer.....	443
Imagegapsize.....	444
Imagetofile.....	445
Inactive.....	445
Incllexcl.....	446
include オプション.....	447
Incrbydate.....	465
Incremental.....	466
Instrlogmax.....	467
Instrlogname.....	468
Lanfreecommmethod.....	469
Lanfreeshmport.....	470
Lanfreetcpport.....	471
Lanfreessl.....	472
Lanfreetcpserveraddress.....	473
Latest.....	474
Localbackupset.....	474
Makesparsefile.....	475
Managedservices.....	476
Maxcmdretries.....	478
Mbobjrefreshthresh.....	479
Mbpctrefreshthresh.....	480
Memoryefficientbackup.....	480
mode.....	482
Monitor.....	485
Myreplicationserver.....	485
Nasnodename.....	487
Nfstimeout.....	488
Nodename.....	489
nojurnal (AIX、Linux).....	490
Noprompt.....	491
Nrtablepath.....	491
Numberformat.....	492
Optfile.....	494

Password.....	495
Passwordaccess.....	497
Passworddir.....	498
Pick.....	499
Pitdate.....	500
Pittime.....	501
Postschedulecmd/Postnschedulecmd.....	502
Postsnapshotcmd.....	503
Preschedulecmd/Prenschedulecmd.....	505
Preservelastaccessdate.....	506
Preservepath.....	507
Presnapshotcmd.....	510
Queryschedperiod.....	511
Querysummary.....	512
Quiet.....	513
Quotesareliteral.....	514
Removeoperandlimit.....	515
Replace.....	516
Replserverguid.....	517
Replservername.....	519
Replsslport.....	520
Repltcpport.....	522
Repltcpserveraddress.....	523
Resourceutilization.....	525
Retryperiod.....	527
Revokeremoteaccess.....	528
Schedcmddisabled.....	529
Schedcmddexception.....	530
Schedgroup.....	530
Schedlogmax.....	532
Schedlogname.....	533
Schedlogretention.....	534
Schedmode.....	536
Schedrestretrdisabled.....	537
Scrolllines.....	538
Scrollprompt.....	539
Servername.....	540
Sessioninitiation.....	541
setwindowtitle.....	543
Shmport.....	544
Showmembers.....	544
Skipacl.....	545
Skipaclupdatecheck.....	545
Snapdiff.....	546
Snapdiffchangelogdir.....	552
Snapdiffhttps.....	553
Snapshotcachesize.....	554
Snapshotproviderfs.....	556
Snapshotproviderimage.....	556
Snapshotroot.....	557
Srvoptsetencryptiondisabled.....	559
Srvprepostscheddisabled.....	560
Srvprepostsnapdisabled.....	561

Ssl.....	562
Sslacceptcertfromserv.....	563
Ssldisablelegacytls.....	564
Sslfipsmode.....	565
Sslrequired.....	566
Stagingdirectory.....	568
Subdir.....	569
Tagschedule.....	571
Tapeprompt.....	575
Tcpadminport.....	576
Tcpbuffsize.....	577
Tcpcadaddress.....	578
Tcpclientaddress.....	578
Tcpclientport.....	579
Tcpnodelay.....	580
Tcpport.....	581
Tcpserveraddress.....	581
Tcpwindowssize.....	582
Timeformat.....	583
Toc.....	586
Todate.....	587
Totime.....	588
Txnbytelimit.....	588
Type.....	589
Updatectime.....	590
Useexistingbase.....	591
Usereplicationfailover.....	592
Users (非推奨).....	592
V2archive.....	593
Verbose.....	594
Verifyimage.....	594
Virtualfsname.....	595
Virtualmountpoint.....	595
Virtualnodename.....	597
Vmbackdir.....	598
vmbackuplocation.....	599
Vmbackupmailboxhistory.....	600
Vmbackuptype.....	601
Vmchost.....	602
Vmcpw.....	602
Vmctlmc.....	603
Vmcuser.....	604
Vmdatastorethreshold.....	605
Vmdefaultdvportgroup.....	607
Vmdefaultdvswitch.....	608
Vmdefaultnetwork.....	608
Vmenabletemplatebackups.....	609
Vmlimitperdatastore	611
Vmlimitperhost.....	612
Vmmaxbackupsessions.....	613
Vmmaxparallel.....	615
Vmmaxrestoresessions.....	617
Vmmaxrestoreparalleldisks.....	618

Vmmaxrestoreparallelvms.....	619
Vmmaxvirtualdisks.....	620
Vmmc.....	621
Vmnocbtcontinue.....	622
Vmnoprmdmdisks.....	623
Vmnovrdmdisks.....	624
Vmpreferdagpassive.....	625
Vmprocessvmwithindependent.....	626
Vmprocessvmwithprdm.....	627
Vmskipctlcompression.....	628
Vmskipmaxvirtualdisks.....	629
Vmskipmaxvmdks	630
Vmtagdatamover.....	630
Vmtagdefaultdatamover.....	633
Vmverifyifaction.....	635
Vmverifyiflatest.....	637
vmvstorcompr.....	638
Vmvstortransport.....	639
Vmtimeout.....	640
Webports.....	641
Wildcardsareliteral.....	642
第 11 章 コマンドの使用.....	645
クライアント・コマンド・セッションの開始と終了.....	648
バッチ・モードでのコマンドの処理.....	648
対話モードでのコマンドの処理.....	649
クライアント・コマンド名、オプション、およびパラメーターの入力.....	650
コマンド名.....	650
オプション.....	650
パラメーター.....	651
ファイル指定の構文.....	651
ワイルドカード文字.....	653
クライアント・コマンドの解説.....	653
Archive.....	654
Archive FastBack.....	656
Backup FastBack.....	658
Backup Group.....	661
Backup Image.....	663
静的、動的、およびスナップショット・イメージ・バックアップ.....	666
イメージ・バックアップを使用したファイル・システムの増分バックアップの実行.....	667
Backup NAS.....	668
Backup VM.....	670
Cancel Process.....	677
Cancel Restore.....	677
Delete Access.....	678
Delete Archive.....	679
Delete Backup.....	680
Delete Filespace.....	684
Delete Group.....	685
Expire.....	686
Help.....	688
Incremental.....	689
ジャーナル・ベースのバックアップ (AIX、Linux).....	693
日付による増分.....	695
ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け.....	695

Loop.....	696
Macro.....	697
Monitor Process.....	698
Preview Archive.....	698
Preview Backup.....	699
Query Access.....	700
Query Archive.....	701
Query Backup.....	703
NAS ファイル・システム・イメージの照会.....	706
Query Backupset.....	706
backupsetname パラメーターを指定しない Query Backupset.....	708
Query Filespace.....	710
NAS ファイル・スペースの照会.....	712
Query Group.....	712
Query Image.....	714
Query Inclexcl.....	716
Query Mgmtclass.....	717
Query Node.....	718
Query Options.....	719
Query Restore.....	720
Query Schedule.....	721
Query Session.....	721
Query Systeminfo.....	722
Query VM.....	723
Restart Restore.....	727
Restore.....	728
ユニコード対応でないファイル・スペースからのリストア.....	732
Restore Backupset.....	733
バックアップ・セットのリストア: 考慮事項および制約事項.....	736
SAN 環境でのバックアップ・セットのリストア.....	737
backupsetname パラメーターを指定しない Restore Backupset.....	737
Restore Group.....	740
Restore Image.....	742
restore NAS.....	745
Restore VM.....	747
仮想マシンのリストア操作のプレビュー.....	757
Retrieve.....	759
ユニコード対応でないファイル・スペースからのアーカイブのリトリブ.....	762
Schedule.....	762
Selective.....	764
ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け.....	766
Set Access.....	767
Set Event.....	769
Set Netappsvm.....	771
Set Password.....	772
set vmtags.....	778
データ保護のタグ付けの概要.....	779

付録 A アクセシビリティ 791

特記事項..... 793

用語集..... 797

索引.....	799
---------	-----

表

1. さまざまなサーバー・バージョンからのクライアントのアップグレード	2
2. AIX クライアントの通信方式.....	4
3. AIX でサポートされるフィーチャー	4
4. HP-UX Itanium 2 API の通信方式.....	5
5. Linux on Power Systems クライアントの通信方式.....	5
6. Linux on Intel x86_64 クライアントの通信方式.....	6
7. Linux on System z クライアントの通信方式.....	7
8. Mac OS X クライアントの通信方式.....	8
9. Oracle Solaris クライアントの通信方式.....	8
10. HP-UX Itanium 2 クライアント: インストール・パッケージの言語コード	14
11. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー	17
12. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー	22
13. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー	26
14. 言語パック ID.....	29
15. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー	31
16. 言語パック ID.....	35
17. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー	36
18. 言語パック ID.....	40
19. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー	41
20. 言語パック ID.....	45
21. インストール・パッケージ名および説明.....	48
22. インストール・パッケージ名および説明.....	51
23. root ユーザーおよび許可ユーザーのタスク	55

24. Mac OS X 許可ツールおよび関連する IBM Spectrum Protect アプリケーション.....	57
25. クライアント・アクセプター管理サービスと従来のスケジューラー・サービス.....	72
26. データ重複排除の設定: クライアントとサーバー.....	92
27. include-exclude ステートメントを使用した処理を制御するオプション.....	127
28. ワイルドカードとその他の特殊文字.....	131
29. 包含および除外パターンでのワイルドカード文字の使用例.....	132
30. シンボリック・リンクおよび別名の処理を制御するためのオプション.....	134
31. 圧縮および暗号化を制御するためのオプション.....	134
32. バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用したファイルの処理.....	158
33. サポートされるファイル・システムおよび ACL サポート.....	168
34. 最大ファイル・サイズ.....	172
35. コマンド・ライン・バックアップの例.....	185
36. イメージ・バックアップ用ボリューム・デバイス・タイプ・サポート.....	200
37. 各種増分イメージ・バックアップの方法の比較.....	203
38. LVM1 および LVM2 イメージ操作の比較.....	204
39. NAS オプションとコマンド.....	213
40. Linux プラットフォームの VMware 仮想マシンのバックアップおよびリストア機能.....	220
41. クライアント・コマンド・ライン通知メッセージ.....	225
42. バックアップ・セットの GUI によるリストアの制約事項.....	241
43. バックアップ・セットのコマンド・ラインによるリストアの制約事項.....	242
44. dsm.opt ファイルを使用する WPAR リストア・コマンドのサンプル.....	253
45. NAS オプションとコマンド.....	255
46. コマンド・ライン・リストアの例.....	258
47. コマンド・ライン・アーカイブの例.....	270
48. アーカイブおよびリトリブのためのシンボリック・リンク管理表.....	275

49. アーカイブのリトリブのコマンド・ラインの例.....	278
50. クラシックの query schedule の出力サンプル.....	289
51. 拡張された query schedule 出力のサンプル.....	290
52. クライアント戻りコードとその意味.....	295
53. 標準管理クラスのデフォルト属性値.....	299
54. TCP/IP オプション.....	310
55. 共用メモリー通信オプション.....	311
56. クライアント・システム・オプション・ファイルの例.....	312
57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション.....	312
58. リストアおよびリトリブ処理のオプション.....	323
59. スケジューリング・オプション.....	326
60. 形式および言語のオプション.....	327
61. コマンド処理オプション.....	328
62. 権限オプション.....	328
63. エラー処理オプション.....	329
64. トランザクション処理オプション.....	329
65. Web クライアント・オプション.....	330
66. 診断オプション.....	331
67. クライアント・コマンド・オプション.....	332
68. 初期コマンド・ラインでのみ有効なオプション.....	339
69. IBM Spectrum Protect サーバーが設定できるオプション.....	340
70. 列見出しの名前.....	369
71. ロケール構成での時刻形式設定のサンプル (t_fmt 行).....	375
72. ロケール構成での日付形式設定のサンプル (d_fmt 行).....	375
73. 複数ソースからのドメイン定義の相互作用.....	392

74. その他のオプション・パラメーター.....	451
75. Incremental コマンド: 関連オプション.....	548
76. サーバーおよびクライアントの SSL 設定がログイン試みの成功または失敗に及ぼす影響.....	567
77. ロケール構成での時刻形式設定のサンプル (t_fmt 行).....	585
78. ロケール構成での日付形式設定のサンプル (d_fmt 行).....	586
79. コマンド.....	645
80. ワイルドカード文字.....	653
81. Archive コマンド: 関連オプション.....	655
82. Archive FastBack コマンド: 関連オプション.....	657
83. Backup FastBack コマンド: 関連オプション.....	659
84. Backup Group コマンド: 関連オプション.....	662
85. Backup Image コマンド: 関連オプション.....	665
86. Backup NAS コマンド: 関連オプション.....	669
87. Delete Archive コマンド: 関連オプション.....	679
88. Delete Backup コマンド: 関連オプション.....	683
89. Delete Filespace コマンド: 関連オプション.....	685
90. Delete Group コマンド: 関連オプション.....	686
91. Expire コマンド: 関連オプション.....	687
92. Incremental コマンド: 関連オプション.....	691
93. Query Archive コマンド: 関連オプション.....	702
94. Query Backup コマンド: 関連オプション.....	704
95. Query Backupset コマンド: 関連オプション.....	708
96. Query Backupset コマンド: 関連オプション.....	709
97. Query Filespace コマンド: 関連オプション.....	710
98. Query Group コマンド: 関連オプション.....	713

99. Query Image コマンド: 関連オプション.....	715
100. Query Mgmtclass コマンド: 関連オプション.....	717
101. Query Node コマンド: 関連オプション.....	718
102. Query Options コマンド: 関連オプション.....	719
103. Query Systeminfo コマンド: 関連オプション.....	723
104. Query VM コマンド: VMware 仮想マシン照会の関連オプション.....	724
105. Restore コマンド: 関連オプション.....	730
106. Restore Backupset コマンド: 関連オプション.....	734
107. Restore Group コマンド: 関連オプション.....	740
108. Restore Image コマンド: 関連オプション.....	743
109. Restore NAS コマンド: 関連オプション.....	746
110. Restore VM コマンド: VMware 仮想マシンのリストのために使用される関連オプション.....	752
111. Retrieve コマンド: 関連オプション.....	760
112. スケジュール・コマンド: 関連オプション.....	763
113. Selective コマンド: 関連オプション.....	765
114. vSphere インベントリー・オブジェクトの優先順位.....	788

本書について

IBM Spectrum Protect は、マルチプラットフォーム・コンピューター環境でストレージ管理サービスを提供するクライアント/サーバーのライセンス製品です。

バックアップ/アーカイブ・クライアント・プログラムの使用により、ワークステーションやファイル・サーバーからストレージにファイルのバックアップやアーカイブを行ったり、ローカル・ワークステーションにファイルのバックアップ・バージョンやアーカイブ・コピーのリストアやリトリブを行うことができます。

さらに、IBM Spectrum Protect には、バックアップ/アーカイブ・クライアントの他に、次のコンポーネントが組み込まれています。

- **サーバー・プログラム:** このプログラムは、分散型ワークステーションおよびファイル・サーバーのためのバックアップおよびアーカイブのサーバーとして機能します。

このサーバー・プログラムは、階層ストレージ管理 (HSM) サービスも提供し、これによりシステムはマイグレーション・サーバーとして機能することができます。

- **管理クライアント・プログラム:** このプログラムは、Web ブラウザーまたはコマンド・ラインからアクセスできます。このプログラムを使用して、IBM Spectrum Protect 管理者は、サーバーのアクティビティを制御およびモニターし、バックアップ、アーカイブ、スペース管理の各サービスのストレージ管理ポリシーを定義し、これらのサービスの定期的な実行スケジュールをセットアップすることができます。
- **アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API):** この機能を使用して、ストレージ管理サービスを使って既存のアプリケーションを拡張できます。アプリケーションをクライアント・ノードとしてサーバーに登録すると、そのアプリケーションは、ストレージからオブジェクトのバックアップ、リストア、アーカイブ、およびリトリブを行うことができます。
- **Web バックアップ/アーカイブ・クライアント:** この機能により、許可された管理者、ヘルプ・デスク担当者、またはその他のユーザーは、リモート・システム上で Web ブラウザーを使用して、バックアップ、リストア、アーカイブ、およびリトリブの各サービスを実行することができます。

クライアント・プログラム IBM Spectrum Protect for Space Management および IBM Spectrum Protect HSM for Windows は、IBM Spectrum Protect の関連製品ですが、別個に販売されています。これらの製品は、ローカル・ファイル・システム上のフリー・スペースを特定のレベルに維持するために適格なファイルを自動的にストレージにマイグレーションし、マイグレーションしたファイルへのアクセスが行われるときに、自動的にそれらのファイルを再呼び出しします。また、特定のファイルのマイグレーションと再呼び出しを行うこともできます。

階層ストレージ管理 およびスペース管理 の用語は、本書を通じて同じ意味で使用されます。

関連概念

バックアップの計画

初めてのユーザーや、あまり頻繁にファイルのバックアップを行わない方の場合、データのバックアップ前に検討する準備手順のチェックリストとして、このトピックの表を利用してください。

バージョン 8.1.12 の新機能

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 には新機能と更新が含まれています。

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ワークステーション上の情報を保護するために役立ちます。

本書の対象読者

本書には、ユーザーが IBM Spectrum Protect クライアントをインストール、構成、使用するための手順が記載されています。

資料

IBM Spectrum Protect 製品ファミリーには、IBM Spectrum Protect Plus、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments、IBM Spectrum Protect for Databases、およびその他の IBM® のストレージ管理製品が含まれています。

IBM 製品の資料については、[IBM Knowledge Center](#) を参照してください。

本書で使用される規則

本書では、以下の書体の規則を使用します。

例	説明
autoexec.ncf hsmgui.exe	拡張子の付いた一連の小文字は、プログラム・ファイル名を示します。
DSMI_DIR	一連の大文字は、戻りコードおよびその他の値を示します。
dsmQuerySessInfo	太字体は、コマンド・ラインに入力するコマンド、関数呼び出しの名前、あるいは構造体、構造体内のフィールド、またはパラメーターの名前を示します。
<i>timeformat</i>	太字イタリック体は、バックアップ/アーカイブ・クライアントのオプションを示します。太字体は、オプションの紹介に使用されるか、または例の中で使用されます。
<i>dateformat</i>	イタリック体は、オプション、オプションの値、新規用語、指定する情報のプレースホルダー、またはテキスト内の特殊な強調のためのプレースホルダーを示します。
maxcmdretries	モノスペース体は、プログラム、または画面に表示される情報 (例えば、コマンド例) の一部を示します。
正符号 (+)	2 つのキーの間の正符号は、両方のキーを同時に押すことを示します。

構文図の読み取り

コマンドを入力するために構文図を読み取るには、線の経路に従ってください。左から右へ、上から下へと読んでください。

- ▶— 記号は、構文図の始まりを示します。
- 行の終わりの —▶ 記号は、構文図が次の行に続いていることを示します。
- 行の始めの ▶— 記号は、構文図が前の行から続いていることを示します。
- —▶◀ 記号は、構文図の終わりを示します。

キーワードや変数などの構文項目は、次の位置にあります。

- 主経路の線上 (必須要素)
- 主経路より上 (デフォルト要素)
- 主経路より下 (オプション要素)

記号

以下の記号は、構文図に示されているとおりに入力してください。

- * アスタリスク
- {} 中括弧
- : コロン
- , コンマ

- = 等号
- -ハイフン
- () 括弧
- . ピリオド
- スペース
- " 引用符
- ' 単一引用符

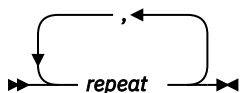
変数

イタリック体の小文字の項目 (<var_name> など) は、変数を表しています。この例では、**cmd_name** コマンドを入力する際に <var_name> を指定できます。

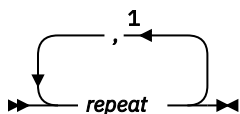
➡ cmd_name — <var_name> ➡

繰り返し

左へ戻る矢印は、その項目を繰り返して使用できることを意味しています。その矢印の中にある文字は、反復使用される項目をその文字で区切る必要があることを示しています。



矢印の近辺にある脚注 (1) は、その項目を反復できる回数を示しています。



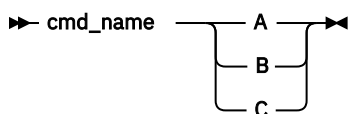
注:

¹ repeat は 5 回まで指定します。

必須選択項目

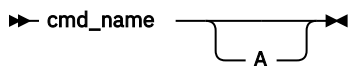
複数の項目が縦に並んでおり、そのうち 1 つが主経路 (水平の直線) 上にある場合は、その中から項目を 1 つ指定する必要があります。

この例では、A、B、または C を選択する必要があります。

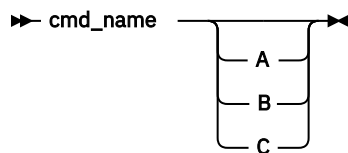


オプション項目

項目が主経路よりも下に示されている場合、その項目はオプションです。最初の例では、A を選択するか、または何も選択しなくてもかまいません。



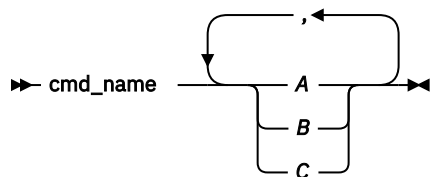
主経路より下に複数の項目が縦に並んでいる場合、それらの項目はすべてオプション項目です。2 番目の例では、A、B、または C を選択するか、あるいは何も選択しなくてもかまいません。



反復可能項目

複数の項目が縦に並び、その後に左に戻る矢印がある場合は、その中から複数の項目を選択できるか、場合によっては1つの項目を繰り返し指定できることを示しています。

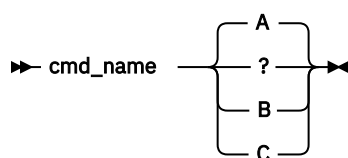
この例では、A、B、またはCを任意の組み合わせで選択できます。



デフォルト値

デフォルト値は主経路より上にあります。変更がない限りデフォルトが選択されます。または、デフォルトを明示的に選択できます。デフォルトを変更するには、主経路より下に縦に並んでいるオプションを指定します。

次の例ではAがデフォルト値です。Aを変更するには、BまたはCを選択します。



バージョン 8.1.12 の新機能

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 には新機能と更新が含まれています。

この製品資料で新規の情報および変更された情報は、変更箇所の左側に縦棒 (|) を付けて示しています。

このリリースでの新しい機能および更新機能は、以下のとおりです。

圧縮オプションの機能拡張

このリリースでは、「圧縮」オプションが、圧縮タイプ LZ4 に関して機能拡張されました。詳しくは、[363 ページの『Compression』](#)を参照してください。

互換性レベル

IBM Spectrum Protect クライアント・バージョン 8.1.12 でバックアップまたはアーカイブしたデータは、バージョン 8.1.12 以降のレベルでのみリストアまたはリトリブできます。

保守の更新

APAR の更新が提供されました。

前の V8.1 リリースの新機能と更新のリストについては、[バックアップ/アーカイブ・クライアントの更新](#)を参照してください。

関連情報

本書について

IBM Spectrum Protect は、マルチプラットフォーム・コンピューター環境でストレージ管理サービスを提供するクライアント/サーバーのライセンス製品です。

第 1 章 IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ワークステーション上の情報を保護するために役立ちます。

ファイルのバックアップ・バージョンを保持することができるので、オリジナル・ファイルが損傷または消失した場合にリストアできます。あまり使用されていないファイルをアーカイブして現在の状態のまま保存し、必要に応じてリトリブすることもできます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーと連動して機能します。サーバーに対するバックアップ・アクセスまたはアーカイブ・アクセスを行う場合は、IBM Spectrum Protect サーバー管理者にお問い合わせください。また、IBM Spectrum Protect サーバーのインストールと構成については、サーバー資料を参照してください。

関連概念

[バージョン 8.1.12 の新機能](#)

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 には新機能と更新が含まれています。

[バックアップの計画](#)

初めてのユーザーや、あまり頻繁にファイルのバックアップを行わない方の場合、データのバックアップ前に検討する準備手順のチェックリストとして、このトピックの表を利用してください。

バックアップ/アーカイブ・クライアントのアップグレード

以下のセクションでは、以前のバージョンから IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのバージョン 8.1.12 にアップグレードする場合に行わなければならないことについて説明します。

クライアントとサーバーのアップグレード方法

IBM Spectrum Protect クライアントおよびサーバーは、さまざまな時点でアップグレードできます。デプロイするサーバーとクライアントの組み合わせは、相互に互換性があるものでなければなりません。

1 つのリリースから別のリリースへのアップグレード中にバックアップおよびアーカイブのアクティビティが中断するのを防ぐため、[技術情報 1053218](#)にある IBM Spectrum Protect クライアントおよびサーバーの互換性に関するガイドラインに従ってください。

現行の AIX® IBM PowerHA® SystemMirror® セットアップのアップグレードについては、[114 ページの『レガシー AIX/IBM PowerHA SystemMirror セットアップのマイグレーション』](#)を参照してください。

アップグレードの追加情報

バックアップ/アーカイブ・クライアントをアップグレードする場合、新しいクライアント・ソフトウェアを使用する前に考慮すべき追加情報があります。

バックアップ/アーカイブ・クライアントをアップグレードする際、以下の情報に注意してください。

- クライアントをアップグレードし、それを IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルと同じシステムにインストールする場合、クライアントをアップグレードする前に必ず IBM Spectrum Protect サーバーを停止してください。このアクションにより、クライアントのインストール・プロセスでシステムのリブートを強制されることがなくなります。クライアントをアップグレードした後、IBM Spectrum Protect サーバーを再始動できます。

この情報は、AIX および Linux クライアントにのみ適用されます。

- Oracle Solaris オペレーティング・システムで、IBM Tivoli® Storage Manager バージョン 7.1.2 以前のバックアップ/アーカイブ・クライアントからアップグレードする場合、アップグレードを進める前に、以前にインストールしたすべての言語パッケージをアンインストールする必要があります。

- Mac ユーザーの場合、IBM Spectrum Protect V6.3 以降のバージョンに含まれている Mac OS X クライアントに更新するには、以下の項目を考慮する必要があります。
 - このリリースで提供される Mac OS X クライアントを使用する場合は、`dsm.sys` ファイルと `dsm.opt` ファイルがユニコード (UTF-8) を使用してエンコードされていることを確認してください。UTF-8 エンコードを使用すると、オプション・ファイル内のどの言語の文字でも使用できるようになります。ご使用の `dsm.sys` または `dsm.opt` ファイルが以前に MacRoman (または UTF-8 以外の任意の文字) でエンコードされていた場合、そのファイルをエディター (TextEdit など) で開き、`.txt` 拡張子を付けずに UTF-8 エンコードで保存します。include-exclude リストは UTF-8 または UTF-16 のいずれでもエンコードできます。ユニコードの使用について詳しくは、[447 ページの『ユニコード対応クライアントの考慮事項』](#)を参照してください。
 - Mac OS 9 クライアントによって作成された IBM Spectrum Protect サーバー・ファイル・スペースは、IBM Spectrum Protect V6.3 で提供された Mac OS X クライアントによって管理できません。サーバーで `q file node f=d` を使用すると、ノードに保管されているファイルをリストできます。スラッシュ (/) で始まっていない Mac プラットフォーム・ファイルは、旧バージョンの Mac クライアントで作成されている可能性があります。このようなファイルは、このリリースで提供される Mac OS X クライアントを使用してリストアップすることはできず、管理もできません。これらのファイルを管理することはできますが、バージョン 6.2.2 以前のクライアント・ノードにインストールされた Mac クライアントを使用する必要があります。
- IBM Spectrum Protect の前のリリース以降の新規メッセージおよび変更済みメッセージのリストについては、クライアント・パッケージの `client_message.chg` ファイルを参照してください。

自動バックアップ/アーカイブ・クライアント・デプロイメント

IBM Spectrum Protect サーバー管理者は、バックアップ/アーカイブ・クライアントを自動的にデプロイして、バックアップ/アーカイブ・クライアントが既にインストールされたワークステーションを更新することができます。

IBM Spectrum Protect サーバーは、クライアント・ワークステーション上のバックアップ/アーカイブ・クライアントを自動的に更新するように構成することができます。既存のバックアップ/アーカイブ・クライアントはバージョン 6.4.3 以降でなければなりません。

クライアント・アップグレードを自動デプロイする手順は、クライアントのアップグレードを行う IBM Spectrum Protect サーバーのバージョンによって異なります。以下の表は、各バージョンのサーバーでのクライアント・アップグレード手順を示しています。

表 1. さまざまなサーバー・バージョンからのクライアントのアップグレード		
サーバー・バージョン	ターゲット・クライアントのバージョン	手順
V8.1.3 以降	V7.1.8 以降の V7 リリース V8.1.2 以降の V8 リリース	IBM Spectrum Protect Operations Center を使用します。詳しくは、 クライアント更新のスケジューリング を参照してください。
V8.1.2	V7.1.8 以降の V7 リリース V8.1.2 以降の V8 リリース	技術情報 2004596 を参照してください。
V7.1.8 以前の V7 リリース V8.1.1 以前の V8 サーバー	V7.1.6 以前の V7 リリース V8.1.0	技術情報 1673299 を参照してください。

制約事項: 自動クライアント・デプロイメントには以下の制約事項が適用されます。

- Windows クラスター・サービス環境はサポートされません。
- IBM Spectrum Protect サーバーからデプロイできるのは、バックアップ/アーカイブ・クライアントのみです。IBM Spectrum Protect for Space Management、IBM Spectrum Protect HSM for Windows、IBM

Spectrum Protect for Virtual Environments などのその他の関連製品、およびその他の Data Protection 製品はサポートされません。サポートされない製品をデプロイしようとすると、失敗メッセージを出してデプロイメント・プロセスが停止します。

- 以下のいずれかのアプリケーションがインストールされているシステムに対しては、自動クライアント・デプロイメントをスケジュールしないでください。
 - IBM Spectrum Protect for Virtual Environments
 - IBM Spectrum Protect for Databases
 - IBM Spectrum Protect for Mail
 - IBM Spectrum Protect for Enterprise Resource Planning

関連資料

350 ページの『Autodeploy』

autodeploy オプションを使用して、再始動が必要な場合にクライアントの自動デプロイメントを有効または無効にします。

クライアント環境の要件

各 IBM Spectrum Protect クライアントには、ハードウェア要件とソフトウェア要件があります。

以下のリストは、サポートする各プラットフォームの環境の前提条件が記載されている位置を示します。

- [3 ページの『AIX クライアント環境』](#)
- [4 ページの『HP-UX Itanium 2 API 環境』](#)
- [5 ページの『Linux on Power Systems クライアント環境』](#)
- [6 ページの『Linux x86_64 クライアント環境』](#)
- [6 ページの『Linux on System z クライアント環境』](#)
- [7 ページの『Mac OS X クライアント環境』](#)
- [8 ページの『Oracle Solaris クライアント環境』](#)
- [9 ページの『NDMP サポートの要件 \(Extended Edition のみ\)』](#)

サポートされているすべてのバックアップ/アーカイブ・クライアント・プラットフォームのクライアント環境前提条件に関する現行情報については、[技術情報 1243309](#) を参照してください。

AIX クライアント環境

このセクションでは、AIX プラットフォームに関するクライアント環境情報、バックアップ/アーカイブ・クライアントのコンポーネント、およびハードウェアとソフトウェアの要件を示します。

AIX クライアントのインストール可能コンポーネント

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、いくつかのインストール可能コンポーネントで構成されます。

AIX クライアントのインストール可能なコンポーネントは次のとおりです。

- バックアップ/アーカイブ・コマンド・ライン・クライアント
- 管理クライアント
- バックアップ/アーカイブ・クライアント・グラフィカル・ユーザー・インターフェース (Oracle Java™ テクノロジーを使用)
- バックアップ/アーカイブ Web クライアント
- IBM Spectrum Protect 64 ビット API

API は別個にインストールすることができます。その他のコンポーネントはすべて、AIX パッケージ (tivoli.tsm.client.api.64bit) をインストールするときにインストールされます。

AIX クライアントのシステム要件

IBM Spectrum Protect AIX クライアントには、最小限必要なハードウェア、ディスク・スペース、メモリ、およびソフトウェアの容量があります。

サポートされるすべてのバージョンの AIX クライアント (最新のフィックスパックを含む) のソフトウェア要件およびハードウェア要件については、[技術情報 1052226](#) を参照してください。

AIX クライアントの通信方式

AIX バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、TCP/IP および共有メモリ通信方式が使用可能です。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 の AIX クライアントでは、以下の通信方式を使用できます。

表 2. AIX クライアントの通信方式		
使用する通信方式	インストールするソフトウェア	接続する IBM Spectrum Protect サーバー:
TCP/IP	TCP/IP (サポートされる AIX プラットフォームでは標準)	AIX、Linux、Windows
共有メモリ	TCP/IP (サポートされる AIX プラットフォームでは標準)	AIX

AIX で使用可能なバックアップ/アーカイブ・クライアント・フィーチャー

このトピックでは、AIX でサポートされるフィーチャーをリストします。

表 3. AIX でサポートされるフィーチャー	
フィーチャー	AIX でのサポートの有無
バックアップ/アーカイブのコマンド・ラインおよび GUI	yes
ジャーナル・ベースのバックアップ	yes
LAN フリー操作	yes
オンライン・イメージ・バックアップ	yes
オフライン・イメージ・バックアップ	yes

HP-UX Itanium 2 API 環境

HP-UX Itanium 2 プラットフォームの API 環境情報、インストール可能コンポーネント、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を確認します。

HP-UX Itanium 2 API のインストール可能コンポーネント

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 には、HP-UX Itanium 2 API のみをインストールすることができます。

HP-UX Itanium 2 API のシステム要件

IBM Spectrum Protect HP-UX Itanium 2 API には、最小限必要なハードウェア、ディスク・スペース、メモリ、およびソフトウェアの容量があります。

サポートされているすべてのバージョンの HP-UX Itanium 2 API に関するソフトウェア要件とハードウェア要件 (最新のフィックスパックを含む) については、[技術情報 1197146](#) を参照してください。

HP-UX Itanium 2 API の通信方式

TCP/IP および共有メモリー通信方式は、HP-UX Itanium 2 API で使用可能です。

表 4. HP-UX Itanium 2 API の通信方式		
使用する通信方式	インストールするソフトウェア	接続する IBM Spectrum Protect サーバー:
TCP/IP	TCP/IP (HP-UX では標準)	AIX、Linux、Windows

Linux on Power Systems クライアント環境

このセクションでは、Linux on Power Systems クライアント・プラットフォームに関するクライアント環境情報、バックアップ/アーカイブ・クライアントのコンポーネント、およびハードウェアとソフトウェアの要件を示します。

Linux on Power Systems クライアントのインストール可能コンポーネント

Linux on Power Systems バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール可能コンポーネントは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンド・ライン、Java GUI、Web バックアップ/アーカイブ、および API で構成されます。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 と共に、以下のコンポーネントをインストールできます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアント
- 管理クライアント
- バックアップ/アーカイブ Java グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI)
- Web バックアップ/アーカイブ・クライアント
- IBM Spectrum Protect API (64 ビット)

Linux on Power Systems のクライアントのシステム要件

Linux on Power Systems の IBM Spectrum Protect クライアントには、最小限必要なハードウェア、ディスク・スペース、メモリー、およびソフトウェアの容量があります。

サポートされているすべてのバージョンの Linux on Power Systems のクライアントのハードウェア要件とソフトウェア要件 (最新のフィックスパックを含む) については、[技術情報 1169963](#) を参照してください。

Linux on Power Systems クライアントの通信方式

Linux on Power Systems のバックアップ/アーカイブ・クライアントでは、クライアント/サーバー通信の通信方式として TCP/IP または共有メモリーのいずれかを使用できます。

[5 ページの表 5](#) には、Linux on Power Systems クライアントで使用可能な通信方式と、それと共に使用できる IBM Spectrum Protect サーバーのオペレーティング・システムを示します。

表 5. Linux on Power Systems クライアントの通信方式		
使用する通信方式	インストールするソフトウェア	接続する IBM Spectrum Protect サーバー:
TCP/IP	TCP/IP (Linux では標準)	AIX、Linux、Windows
共有メモリー	TCP/IP (Linux では標準)	Linux on Power® Systems

Linux x86_64 クライアント環境

このセクションでは、Linux on Intel (Linux x86_64) プラットフォームに関するクライアント環境情報、バックアップ/アーカイブ・クライアントのコンポーネント、およびハードウェアとソフトウェアの要件を示します。

Linux x86_64 クライアントのインストール可能コンポーネント

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、いくつかのインストール可能コンポーネントで構成されます。Linux バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール可能なコンポーネントは次のとおりです。

- バックアップ/アーカイブ・クライアント Web ファイル
- バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI ファイル
- 管理クライアント・コマンド・ライン・ファイル
- クライアント API SDK ファイル
- クライアント API (64 ビット) ランタイム・ファイル
- WEBGUI (Web ユーザー・インターフェースを使用したファイル・リストア操作)

Linux x86_64 クライアントのシステム要件

IBM Spectrum Protect Linux x86_64 クライアントには、最小限必要なハードウェア、ディスク・スペース、メモリー、およびソフトウェアの容量があります。

サポートされているすべてのバージョンの Linux x86_64 クライアントに関するソフトウェア要件とハードウェア要件 (最新のフィックスパックを含む) については、[技術情報 1052223](#) を参照してください。

Linux x86_64 クライアントの通信方式

Linux on Intel (Linux x86_64) バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、TCP/IP および共用メモリー通信方式が使用可能です。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 Linux on Intel (Linux x86_64) クライアントでは、以下の通信方式を使用できます。

表 6. Linux on Intel x86_64 クライアントの通信方式		
使用する通信方式	インストールするソフトウェア	接続する IBM Spectrum Protect サーバー:
TCP/IP	TCP/IP (Linux では標準)	AIX、Linux、Windows
共有メモリー	TCP/IP (Linux では標準)	Linux x86_64

Linux on System z クライアント環境

このセクションでは、Linux on System z プラットフォームに関するクライアント環境情報、バックアップ/アーカイブ・クライアントのコンポーネント、およびハードウェアとソフトウェアの要件を示します。

Linux on System z クライアントのインストール可能コンポーネント

Linux on System z バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール可能コンポーネントは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンド・ライン、管理クライアント、Web バックアップ/アーカイブ・クライアント、および API で構成されます。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 と共に、以下のコンポーネントをインストールできます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアント
- 管理クライアント
- Web バックアップ/アーカイブ・クライアント

- IBM Spectrum Protect API

Linux on System z クライアントのシステム要件

IBM Spectrum Protect Linux System z クライアントには、最小限必要なハードウェア、ディスク・スペース、メモリー、およびソフトウェアの容量があります。

サポートされているすべてのバージョンの Linux System z クライアントに関するソフトウェア要件とハードウェア要件 (最新のフィックスパックを含む) については、[技術情報 1066436](#) を参照してください。

Linux on System z クライアントの通信方式

Linux on System z バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、TCP/IP および共用メモリー通信方式が使用可能です。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 の Linux on System z クライアントでは、以下の通信方式を使用できます。

表 7. Linux on System z クライアントの通信方式		
使用する通信方式	インストールするソフトウェア	接続する IBM Spectrum Protect サーバー:
TCP/IP	TCP/IP (Linux では標準)	AIX、Linux、Windows
共有メモリー	TCP/IP (Linux では標準)	Linux on System z

Mac OS X クライアント環境

このセクションでは、Mac OS X クライアントに関する、クライアント環境情報、バックアップ/アーカイブ・クライアントのコンポーネント、およびハードウェアとソフトウェアの要件を示します。

Mac OS X クライアントのインストール可能コンポーネント

Mac OS X バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール可能コンポーネントは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンド・ライン、Java GUI、Web バックアップ/アーカイブ、および API で構成されます。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 では、以下のコンポーネントがインストールされます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアント
- 管理クライアント
- Web バックアップ/アーカイブ・クライアント
- IBM Spectrum Protect API
- バックアップ/アーカイブ Java グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI)

ヒント: Java GUI の dsmj シェル・スクリプト・ファイルは、次の場所にインストールされています。

```
/Library/Application Support/tivoli/tsm/client/ba/bin
```

Mac OS X クライアントのシステム要件

IBM Spectrum Protect Mac OS X クライアントには、最小限必要なハードウェア、ディスク・スペース、メモリー、およびソフトウェアの容量があります。

サポートされるすべてのバージョンの Mac OS X クライアント (最新のフィックスパックを含む) のソフトウェア要件およびハードウェア要件については、[技術情報 1053584](#) を参照してください。

Mac OS X クライアントの通信方式

Mac OS X バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、TCP/IP 通信方式が使用可能です。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 の Mac OS X クライアントでは、以下の通信方式を使用できます。

表 8. Mac OS X クライアントの通信方式		
使用する通信方式	インストールするソフトウェア	接続する IBM Spectrum Protect サーバー:
TCP/IP	TCP/IP (Mac OS X では標準)	AIX、Linux、Windows

Oracle Solaris クライアント環境

Oracle Solaris プラットフォームのクライアント 環境情報、クライアント・コンポーネント、およびハードウェアとソフトウェアの要件を検討します。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.0 から、Oracle Solaris バックアップ/アーカイブ・クライアントは、Oracle Solaris x86_64 プラットフォームでのみ使用できます。Oracle Solaris API は Oracle Solaris x86_64 プラットフォームおよび Oracle Solaris SPARC プラットフォームで使用できます。

Oracle Solaris クライアントのインストール可能コンポーネント

Solaris バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール可能コンポーネントは、IBM Spectrum Protect コマンド・ライン、Java GUI、Web バックアップ/アーカイブ、および API で構成されます。

以下のクライアント・コンポーネントを Oracle Solaris x86_64 にインストールすることができます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアント
- 管理クライアント
- バックアップ/アーカイブ Java グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI)
- Web バックアップ/アーカイブ・クライアント
- IBM Spectrum Protect API

Oracle Solaris SPARC に IBM Spectrum Protect API をインストールすることができます。

Oracle Solaris クライアントのシステム要件

IBM Spectrum Protect Oracle Solaris クライアントには、最小限必要なハードウェア、ディスク・スペース、メモリー、およびソフトウェアの容量があります。

サポートされているすべてのバージョンの IBM Spectrum Protect Oracle Solaris クライアントに関するソフトウェア要件とハードウェア要件 (最新のフィックスパックを含む) については、以下の IBM サポート・ページを参照してください。

- Oracle Solaris x86_64 クライアント要件については、[技術情報 1232956](#) を参照してください。
- Oracle Solaris SPARC API 要件については、[技術情報 1052211](#) を参照してください。

Oracle Solaris クライアントの通信方式

Oracle Solaris バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、TCP/IP および共用メモリー通信方式が使用可能です。

Oracle Solaris クライアントでは、以下の通信方式を使用できます。

表 9. Oracle Solaris クライアントの通信方式		
使用する通信方式	インストールするソフトウェア	接続する IBM Spectrum Protect サーバー:
TCP/IP	TCP/IP (Solaris では標準)	AIX、Linux、Windows

NDMP サポートの要件 (Extended Edition のみ)

Network Data Management Protocol (NDMP) を使用すると、Network Attached Storage (NAS) ファイル・システムを、ネットワーク・アプライアンスおよび EMC Celerra NAS ファイル・サーバーにローカル接続されている磁気テープ装置またはライブラリーにバックアップおよびリストアすることができます。

NDMP サポートは、*IBM Spectrum Protect Extended Edition* でのみ使用可能です。

NDMP サポートには、以下のハードウェアおよびソフトウェアが必要です。

- IBM Spectrum Protect Extended Edition
- 磁気テープ装置およびテープ・ライブラリー。サポートされる組み合わせについては、[製品情報](#)を参照してください。

Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップおよびアーカイブするためのインストール要件

FastBack クライアント・データをバックアップまたはアーカイブするには、必要なソフトウェアを事前にインストールしておく必要があります。

以下のソフトウェアをインストールする必要があります。

- Tivoli Storage Manager FastBack バージョン 6.1
- Tivoli Storage Manager クライアント V6.1.3.x (x は 1 以上) または V6.2 以降
- Tivoli Storage Manager サーバー V6.1.3 以降
- Tivoli Storage Manager 管理センター V6.1.3
- 統合された Tivoli Storage Manager FastBack - 管理を使用する場合のみに必須です。

バージョン 7.1 以降では、Administration Center コンポーネントは、Tivoli Storage Manager または IBM Spectrum Protect の配布に含まれなくなりました。前のサーバー・リリースの管理センターを保有する FastBack ユーザーは、引き続きその管理センターを使用して FastBack スケジュールの作成と変更を行うことができます。

管理センターをまだインストールしていない場合は、前にリリースされたバージョンを [ftp://public.dhe.ibm.com/storage/tivoli-storage-management/maintenance/admincenter/v6r3/](http://public.dhe.ibm.com/storage/tivoli-storage-management/maintenance/admincenter/v6r3/) からダウンロードできます。管理センターをまだインストールしていない場合、IBM Spectrum Protect サーバーで FastBack スケジュールの作成と変更を行う必要があります。サーバーでのスケジュールの作成については、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

Tivoli Storage Manager FastBack 環境が稼働している必要があります。Tivoli Storage Manager FastBack のインストールおよびセットアップについては、<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS9NU9/> の製品情報を参照してください。

IBM Spectrum Protect および Tivoli Storage Manager FastBack の統合については、[との統合](#)を参照してください。

IBM Spectrum Protect クライアントは、以下のいずれかの方法でインストールできます。

- FastBack 災害復旧ハブがインストールされているワークステーションにバックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールします。この場合の前提条件は、FastBack 災害復旧ハブのセットアップ、および FastBack シェルです。
- FastBack サーバーも FastBack 災害復旧ハブもインストールされていないワークステーションにバックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールします。この場合も、FastBack シェルは必要です。

関連概念

[105 ページの『Tivoli Storage Manager FastBack データをバックアップおよびアーカイブするためのクライアントの構成』](#)

Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップあるいはアーカイブする前に、構成タスクを完了する必要があります。

UNIX および Linux バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール

このセクションでは、IBM Spectrum Protect UNIX および Linux クライアントのインストールとセットアップの手順について説明します。

注: バックアップ/アーカイブ・クライアントを UNIX または Linux ワークステーションにインストールするには、root ユーザーとしてログオンする必要があります。

サポートされる UNIX および Linux クライアントと、各クライアントのインストール手順の記載箇所は次のとおりです。

- [10 ページの『AIX クライアントをインストール』](#)
- [14 ページの『HP-UX Itanium 2 API のインストール』](#)
- [16 ページの『Linux on Power Systems \(リトル・エンディアン\) のバックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール』](#)
- [22 ページの『Ubuntu Linux on Power Systems \(リトル・エンディアン\) へのバックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール』](#)
- [26 ページの『Linux on Power Systems \(ビッグ・エンディアン\) の API のインストール』](#)
- [30 ページの『Linux x86_64 クライアントのインストール』](#)
- [36 ページの『Ubuntu Linux x86_64 クライアントのインストール』](#)
- [41 ページの『Linux on System z クライアントのインストール』](#)
- [46 ページの『Mac OS X クライアントのインストール』](#)
- [48 ページの『Oracle Solaris x86_64 クライアントのインストール』](#)
- [51 ページの『Oracle SPARC API のインストール』](#)

関連概念

[55 ページの『IBM Spectrum Protect クライアントの構成』](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

AIX クライアントをインストール

製品インストール・メディアから AIX バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

始める前に

IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルと同じシステムにクライアントをインストールする予定の場合は、クライアントをインストールする前に、必ず IBM Spectrum Protect サーバーを停止してください。このアクションにより、クライアントのインストール・プロセスでシステムのリブートを強制されることがなくなります。クライアントをインストールした後、IBM Spectrum Protect サーバーを再始動できます。

このタスクについて

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.12 では、配布ライブラリーで 64 ビット・バージョンの AIX クライアントを提供しています。

前にインストールした 32 ビット AIX クライアントを新しい 64 ビット AIX クライアントにアップグレードすることはできません。旧バージョンの IBM Spectrum Protect から 32 ビット・クライアントをインストールしている場合は、SMIT を使用して以下の手順を実行します。

1. 32 ビット・クライアント (tivoli.tsm.client.ba) をアンインストールします。

10 IBM Spectrum Protect UNIX および Linux バックアップ/アーカイブ・クライアント: インストールとユーザーのガイド

2. 前にインストールした各国語ファイルをすべてアンインストールします。

3. API (tivoli.tsm.client.api.32bit) をアンインストールします。

次に、SMIT を使用して、IBM Spectrum Protect V8.1.12 配布ライブラリー内の以下のパッケージを、示された順序でインストールします。

1. 64 ビット API (tivoli.tsm.client.api.64bit) をインストールします。

2. 64 ビット・クライアント (tivoli.tsm.client.ba.64bit) をインストールします。

IBM Spectrum Protect V6.3 以降の 64 ビット・クライアントが既にインストールされている場合は、アンインストールして再インストールする代わりに、そのクライアントをアップグレードすることができます。

旧バージョンの IBM Spectrum Protect (V6.1 または V6.2 など) がインストールされている場合は、クライアント、言語パック、および API をアンインストールする必要があります。その後に、新規の IBM Spectrum Protect API およびクライアントをインストールします。

クライアントのインストールに必要なすべてのパッケージは AIX クライアント・パッケージに入っており、ご使用のシステム上の古いランタイム・アプリケーションは、インストール時にこれらのパッケージによって上書きされます。LibC (C Set++) ランタイム・ライブラリーが必要です。

このクライアントをインストールするのに **installp** コマンドを使用する場合、次の 2 つの選択項目に対するデフォルトのフィールド値を変更しないでください。

・「必要条件ソフトウェアを自動的にインストールする (AUTOMATICALLY install requisite software?)」

・「同一または新しいバージョンを上書きしますか? (OVERWRITE same or newer versions?)」

これらの値を使用不可にしたり、変更すると、現在インストール済みの上位コンポーネントの上に下位レベルのクライアント・コンポーネントがインストールされます。そのような状況では、異なるレベルのコンポーネント間での機能呼び出しが有効でなくなる可能性があります。

以下のパッケージをインストールします。これらはすべて、インストール・メディアに入っています。NAS クライアントを使用するには、Extended Edition ライセンスが必要です。

以下に、これらのファイルを従属順にリストします。例えば、API はグローバル・セキュリティー・キット (GSKit) に従属しています。SMIT を使用してこれらをすべてインストールしたら、任意の順で選択 (F7) できます。

GSKit8.gskcrypt64.ppc.rte および GSKit8.gskssl64.ppc.rte

IBM GSKit 64 ビット (64 ビット・クライアント API で必要)。

tivoli.tsm.client.api.64bit

64 ビット API をインストールします。

tivoli.tsm.client.ba.64bit

以下の 64 ビット・クライアント・ファイルをインストールします。

- ・ バックアップ/アーカイブ Java クライアント (GUI)
- ・ バックアップ/アーカイブ Web クライアント
- ・ NAS バックアップ・クライアント

tivoli.tsm.filepath_aix

ジャーナル・ベースのバックアップに必要な、ファイル・パス・カーネル拡張機能をインストールします。

tivoli.tsm.client.jbb.64bit

ジャーナル・ベースのバックアップ・コンポーネントをインストールします。

tivoli.tsm.client.webgui

Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するために必要なファイルをインストールします。

各パッケージは、以下のデフォルトのインストール・ディレクトリーにインストールされます。

- ・ バックアップ/アーカイブ、Web クライアント、および管理クライアント (**dsmadmc**) 64 ビットファイルが、/usr/tivoli/tsm/client/ba/bin64 ディレクトリーにインストールされます。

- IBM Spectrum Protect 64 ビット API ファイルが `/usr/tivoli/tsm/client/api/bin64` ディレクトリーにインストールされます。
- サンプルのシステム・オプション・ファイル `dsm.sys.smp` が、インストール・ディレクトリーに配置されます。

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#) または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#) にアクセスしてください。

クライアント・ファイルを最初にローカル・ディレクトリーにコピーする場合は、**installp** コマンドによって `.toc` ファイルが自動的に作成されます。IBM Spectrum Protect イメージをコピーしたローカル・ディレクトリーにある `/usr/sbin/inutoc` を実行して、手動で `.toc` ファイルを作成することができます。AIX コマンド行から以下を入力します。

```
/usr/sbin/inutoc /usr/sys/inst.images
```

そのディレクトリーに `.toc` ファイルが作成されます。

手順

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールに使用するボリュームをマウントします。
3. AIX コマンド・ラインから `smitty install` と入力し、Enter キーを押します。
4. 「ソフトウェアのインストールと更新 (**Install and Update Software**)」を選択し、Enter キーを押します。
5. 「使用できるソフトウェアすべてのインストールと更新 (**Install and Update From ALL Available Software**)」を選択し、Enter キーを押します。
6. 「ソフトウェアの装置/ディレクトリーを入力してください (INPUT device/directory for software)」というプロンプトで、F4 キーを押し、インストール・イメージが入っているディレクトリーを指定して、Enter キーを押します。
7. 「インストールするソフトウェア (SOFTWARE to install)」のプロンプトで F4 キーを押します。F7 キーを押して、インストールする IBM Spectrum Protect ファイル・セットを選択します。次に Enter (実行) キーを押します。
8. 「使用できるソフトウェアすべてのインストールと更新 (**Install and Update From ALL Available Software**)」パネルで、F4 キーを押して入力フィールドを変更するか、デフォルトのフィールドを使用します。Enter キーを 2 回押してインストールを開始します。
9. インストールが完了したら、F10 キーを押して終了します。

タスクの結果

ファイル・セットがインストールされると、そのファイル・セットは自動的にシステム上でコミットされます。以前のバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアント・ソフトウェアは、新しくインストールされたバージョンによって置き換えられます。

バックアップ/アーカイブ・クライアント・ファイルは、`/usr/tivoli/tsm/client/ba/bin64` ディレクトリーにインストールされます。クライアント・ファイルを別のディレクトリーに移動させるときは、以下のステップも実行する必要があります。

1. インストールしたファイルの許可が変更されていないことを確認します。
2. 以下のディレクトリーにあるインストール済みファイルのシンボリック・リンクを更新します。

- /usr/bin ディレクトリー
 - IBM Spectrum Protect ライブラリーの /usr/lib ディレクトリー
3. バックアップ/アーカイブ・クライアントのすべてのユーザーが、新しくインストールしたディレクトリーに DSM_DIR 環境変数を設定するようにします。

次のタスク

インストールが完了したら、バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用する前に行う必須タスクおよびオプションのタスクについて [55 ページの『第 2 章 IBM Spectrum Protect クライアントの構成』](#)を参照してください。

注:

- AIX ワークロード区画 (WPAR) は次のようにサポートされます。
 - グローバル環境でサポート
 - 非共有システム WPAR でサポート
 - 共有システム WPAR でサポート (バックアップ/アーカイブ・クライアント・ログおよび構成ファイルをデフォルト以外の位置に定義する必要があります)
 - アプリケーション WPAR についてはサポートなし
 - イメージ・バックアップについてはサポートなし
 - テープからリストアされるバックアップ・セットについてはサポートなし
- AIX バージョン 6.1 では、バックアップ/アーカイブ・クライアントで暗号化ファイル・システム (EFS) を使用している場合、および EFS ユーザー鍵ストア・パスワードがユーザー・ログイン・パスワードと異なる場合、EFS 鍵ストアはログオン時に自動的に開きません。EFS 鍵ストアがログオン時に開かない場合、クライアントは EFS ファイル以外のファイルを EFS ファイル・システムにリストアしないことがあります。EFS ファイル・システムのリストアの問題は、次のいずれかの方法で回避できます。
 - **efskeymgr -o** コマンドを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントを開始します。例えば、**efskeymgr -o ./dsmj** です。
 - **efskeymgr -n** コマンドを使用して、鍵ストア・パスワードをユーザー・ログイン・パスワードと同じにします。例えば、**efskeymgr -n** です。

AIX クライアントをアンインストール

以下の手順を使用して、IBM Spectrum Protect AIX バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールできます。

始める前に

IBM Spectrum Protect クライアント・モジュールおよびコンポーネントは密に統合されており、インストールされたファイル・セットは自動的にコミットされます。アンインストールされたコンポーネントをロールバックするオプションはありません。

手順

1. AIX コマンド **smitty remove** を入力します。
2. ENTER キーを押します。
3. 「ソフトウェア名」フィールドで、F4 キーを押して、アンインストールする IBM Spectrum Protect ファイル・セットをリストし、Enter キーを押します。
4. アンインストールする IBM Spectrum Protect ファイル・セットを選択します。Enter キーを押します。

注: ジャーナル・ベースのバックアップ・フィーチャーは 2 つのファイル・セットに含まれています。tivoli.tsm.client.jbb.64bit および tivoli.tsm.filepath_aix の両方を選択します。ファイル・セットを一度に 1 つずつアンインストールする場合は、最初に tivoli.tsm.client.jbb.64bit ファイル・セットをアンインストールします。

5. 「プレビューのみ (PREVIEW only?)」フィールド (削除操作は行われたい) で、「いいえ」を選択し、ENTER キーを押します。

HP-UX Itanium 2 API のインストール

製品 インストール・メディアから、HP-UX Itanium 2 API をインストールすることができます。

このタスクについて

インストール・メディアには、以下のソース・パッケージが入っています。

tsmcli/hp11ia64/gskcrypt64-8.x.x.x.hpux.ia64.tar.Z および **tsmcli/hp11ia64/gskssl64-8.x.x.x.hpux.ia64.tar.Z**

GSKit が含まれます。以前のバージョンの GSKit がインストールされている場合は、これをアンインストールから新規バージョンをインストールします。

tsmcli/hp11ia64/TIVsmCapi64

このパッケージで、最上位のプロダクト名として **swlist** が使用するソフトウェア選択名は TIVsm64 です。TIVsm64 の元での構成要素は、TIVsm.CLIENT_API64 です。

デフォルトのインストール・ディレクトリー

ここに、複数のファイルがクライアント・インストールの一部として格納されているデフォルトのディレクトリーがあります。

- IBM Spectrum Protect API ファイルが /opt/tivoli/tsm/client/api/bin64 ディレクトリーにインストールされます。
- サンプルのシステム・オプション・ファイル dsm.sys.smp が、インストール・ディレクトリーに配置されます。

前のバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアントを削除するには、root ユーザーとしてログインし、次のコマンドを入力します。

```
/usr/sbin/swremove -x mount_all_filesystems=false -v TIVsm64
```

追加の言語をバージョン Version 7.1.2 以前のクライアントにインストールしている場合は、以下のコマンドを実行して、除去してください。

```
/usr/sbin/swremove -x mount_all_filesystems=false -v TIVsm64.CLIENT_msg_lang
```

lang の部分は、[14 ページの表 10](#) からの適切な言語コードで置き換えます。

表 10. HP-UX Itanium 2 クライアント: インストール・パッケージの言語コード

言語	言語コード
中国語 (簡体字)	ZH_CN
中国語 (繁体字)	ZH_TW
チェコ語	CS_CZ
フランス語	FR_FR
ドイツ語	DE_DE
ハンガリー語	HU_HU
イタリア語	IT_IT
日本語	JA_JP
韓国語	KO_KR
ポーランド語	PL_PL

表 10. HP-UX Itanium 2 クライアント: インストール・パッケージの言語コード (続き)

言語	言語コード
ブラジル・ポルトガル語	PT_BR
ロシア語	RU_RU
スペイン語	ES_ES

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#)または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

手順

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールに使用するボリュームをマウントします。
3. GSKit をインストールするには、以前のバージョンの GSKit がインストールされている場合、これを除去してから新規バージョンをインストールします。gskcrypt64-8.x.x.x.hpux.ia64.tar.Z および gskssl64-8.x.x.x.hpux.ia64.tar.Z の内容をハード・ディスク上のディレクトリーに解凍します。次のコマンドを入力してパッケージをインストールします。

```
/usr/sbin/swinstall -x mount_all_filesystems=false -v -s `pwd`
/gskcrypt64 gskcrypt64
/usr/sbin/swinstall -x mount_all_filesystems=false -v -s `pwd`
/gskssl64 gskssl64
```

4. FTP からダウンロードしていたら、インストール可能イメージが置かれているディレクトリーへ進みます。以下のコマンドを入力します。

```
/usr/sbin/swinstall -x mount_all_filesystems=false -v -s `pwd`/TIVsmCapi64
TIVsm64
```

現行ディレクトリーの絶対名の代わりに、`pwd` を使用することができます。

関連概念

55 ページの『[IBM Spectrum Protect クライアントの構成](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

データ・セグメント・サイズ限界のデフォルトの増大

HP-UX 11i v2 でのプロセスのデータ・セグメント・サイズ限界のデフォルトは 64 MB です。大規模なファイル・システムをバックアップしたときに、API がこの限界を超えて、メモリー不足になる場合があります。

この限界を増大するには、以下のようにカーネルを変更します。

1. root ユーザーとして、**sam** を開始します。
2. 「**カーネル構成 (Kernel Configuration)**」を選択します。
3. 「**構成可能パラメーター (Configurable Parameters)**」を選択する。

4. **maxdsize** を探し出し、「アクション/構成可能パラメーターの変更... (Actions/Modify Configurable Parameter...)」メニュー項目を使用してその値を増やします (例えば、最大サイズが 256 MB のデータ・セグメントの場合は **maxdsize** を 268435456 に設定)。
5. この変更後、カーネルは **sam** によって再構築されます。新しい設定を有効にするためには、マシンをリブートする必要があります。

HP-UX Itanium 2 API のアンインストール

以下の手順を使用して、IBM Spectrum Protect HP-UX Itanium 2 API をアンインストールできます。

始める前に

重要: パッケージのアンインストールは、必ず示されている順序で行ってください。

手順

1. CLIENT_API ファイル・セットを削除するには、次のコマンドを入力します。

```
/usr/sbin/swremove -x mount_all_filesystems=false -v TIVsm64
```

2. Global Security Kit (GSKit) を削除するには、次のコマンドを入力します。

```
/usr/sbin/swremove -x mount_all_filesystems=false gskssl64  
/usr/sbin/swremoveswremove -x mount_all_filesystems=false gskcrypt64
```

次のタスク

HP-UX API をアンインストールした後、複数の空のディレクトリーがファイル・システムに残ります。例えば、次のディレクトリーです。

- ライセンス・ディレクトリー (/opt/tivoli/tsm/license)
- 1つ以上の言語ディレクトリー (/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/xx_XX)。ここで、xx_XX は、言語コード cs_CZ、de_DE、es_ES、it_IT、fr_FR、hu_HU、ja_JP、ko_KR、pl_PL、pt_BR、ru_RU、zh_CN and zh_TW のいずれかを表します。
- /opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/cit
- /opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/images
- /opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/plugin

これらの空のディレクトリーを削除したい場合は、手動で削除できます。

Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) の バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール

製品インストール・メディアから、バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

始める前に

- 製品をインストールするには root ユーザーとしてログインする必要があります。
- IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルと同じシステムにクライアントをインストールする予定の場合は、クライアントをインストールする前に、必ず IBM Spectrum Protect サーバーを停止してください。このアクションにより、クライアントのインストール・プロセスでシステムのリブートを強制されることがなくなります。クライアントをインストールした後、IBM Spectrum Protect サーバーを再始動できます。

このタスクについて

以下のインストール・オプションが、インストール・メディアに圧縮されないパッケージとして入っています。

表 11. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
gskcrypt64-8.x.x.x.linux.ppcle.rpm gskssl64-8.x.x.x.linux.ppcle.rpm	64 ビット・グローバル・セキュリティ・キット (GSKit) パッケージ	/usr/local/ibm/gsk8
TIVsm-API64.ppc64le.rpm	アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)。IBM Spectrum Protect API の共有ライブラリーとサンプルが含まれています。	/opt/tivoli/tsm/client/api/bin64
TIVsm-BA.ppc64le.rpm	バックアップ/アーカイブ・クライアント (コマンド・ラインおよび GUI)、管理クライアント (dsmadm)、および Web クライアント。	<p>/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin</p> <p>このディレクトリーは、通常、多くのバックアップ/アーカイブ・クライアント・ファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリーです。サンプルのシステム・オプション・ファイル (dsm.sys.smp) は、このディレクトリーに書き込まれます。</p> <p>DSM_DIR 環境変数を設定しないと、dsmc 実行可能ファイル、リソース・ファイル、および dsm.sys ファイルは、このディレクトリーに格納されます。</p> <p>DSM_CONFIG 環境変数を設定しない場合、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルは、このディレクトリー内になければなりません。</p> <p>DSM_LOG 環境変数を設定しないと、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、現行作業ディレクトリー内の dsmererror.log および dsmsched.log ファイルにメッセージを書き込みます。</p>

表 11. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー (続き)		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
TIVsm-APIcit.ppc64le.rpm TIVsm-BAcit.ppc64le.rpm	これらのファイルには、システムに接続されているクライアント装置およびサーバー装置の数と、サーバー装置別のプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) の使用状況に関する情報を取得するために使用できる Common Inventory Technology コンポーネントが用意されています。これらのファイルはオプションです。PVU については、IBM Spectrum Protect サーバー資料の プロセッサ・バリュー・ユニットの見積もり を参照してください。	APIcit は /opt/tivoli/tsm/client/api/bin64/cit にインストールされます BAcit は tivoli/tsm/client/ba/bin/cit/ にインストールされます
TIVsm-filepath-source.tar.gz TIVsm-JBB.ppc64le.rpm	ジャーナル・ベース・バックアップに必要なファイル。	ファイル・パスは /opt/filepath にインストールされます TIVsm-JBB.ppc64le.rpm パッケージは、/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin にインストールされます。
TIVsm-WEBGUI.ppc64le.rpm	Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するために必要なファイルを提供します。	/opt/tivoli/tsm/tdpvmware

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- パスポート・アドバンテージまたは [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#) にアクセスしてください。

インストールする前に、まず、次のようにして rpm パッケージの GSKit シグニチャーを確認する必要があります。

1. クライアント・パッケージも格納されているダウンロード・サイトから GSKit PGP 公開鍵 GSKit.pub.pgp をダウンロードします。

2. 次のコマンドを入力して、GSKit 公開鍵をインポートします。

```
rpm --import GSKit.pub.gpg
```

3. 次のコマンドを入力して、GSKit rpm ファイルを確認します。

```
rpm --checksig <GSKit rpm file> verbose
```

ここで、<GSKit rpm file> は、表 1 のパッケージ名、コンテンツ、およびデフォルトのディレクトリーにリストされている GSKit rpm パッケージの名前です。

まず、次のようにしてクライアント・パッケージのシグニチャーを確認する必要があります。

1. クライアント・パッケージも格納されているダウンロード・サイトから生成された gpk キー RPM-GPG-KEY-ibmpkg をダウンロードします。
2. 次のコマンドを入力して、生成された gpk 鍵をインポートします。

```
rpm --import RPM-GPG-KEY-ibmpkg
```

3. 次のコマンドを入力して、クライアント・パッケージを確認します。

```
rpm -K <client_package>.rpm
```

ここで、<client_package> は、表 1 のパッケージ名、コンテンツ、およびデフォルトのディレクトリーにリストされている rpm パッケージの名前です。

手順

1. パッケージのインストールに使用するボリュームをマウントします。
2. インストール・パッケージが格納されているディレクトリーに移動します。
3. 64 ビット GSKit パッケージをインストールします。以下のコマンド例の「8.x.x.x」という文字は、GSKit のバージョンを表します。

```
rpm -U gskcrypt64-8.x.x.x.linux.ppcle.rpm gskssl64-8.x.x.x.linux.ppcle.rpm
```

4. IBM Spectrum Protect API をインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。
 - a) 必須: 次のようにして API をインストールします。

```
rpm -ivh TIVsm-API64.ppc64le.rpm
```

- b) オプション: API で使用する Common Inventory Technology パッケージをインストールします。このパッケージは、API に依存するため、API パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
rpm -ivh TIVsm-APIcit.ppc64le.rpm
```

ヒント: API と以前にインストールされた Common Inventory Technology パッケージをアップグレードする場合、API と Common Inventory Technology のパッケージを両方共アップグレードする必要があります。例えば、以下のコマンドを実行できます。

```
rpm -U TIVsm-API64.ppc64le.rpm TIVsm-APIcit.ppc64le.rpm
```

API のインストールのみが必要な場合は、ここで停止できます。この手順の残りの部分では、クライアントによってサーバーに PVU メトリックを送信する場合にのみ必要とされる バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントおよびオプションのクライアント・パッケージのインストール方法について説明します。また、ジャーナル・ベースのバックアップを実行する際に必要なパッケージのインストールについても、後続のステップで説明します。

5. バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。

- a) バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントをインストールします。

```
rpm -ivh TIVsm-BA.ppc64le.rpm
```

- b) オプション: Common Inventory Technology パッケージを使用します。このパッケージは、クライアントが PVU メトリックをサーバーに送信する際に使用します。このパッケージはクライアント・パッケージに依存するため、クライアント・パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
rpm -ivh TIVsm-BACit.ppc64le.rpm
```

6. オプション: ジャーナル・ベースのバックアップを使用する場合は、ファイル・パス・コンポーネントおよびジャーナル・ベースのバックアップに必要なパッケージをインストールします。

- a) TIVsm-filepath-source.tar.gz を解凍し、README ファイルを参照してコンパイルとインストールの方法を見つけます。

Filepath カーネル・モジュールは、GNU General Public License ("GPL") の条件に従ってライセンス交付されています。

Linux カーネルの動的性質が原因で、ビルドの問題が発生することがあります。Linux ディストリビューションでソースが正常にビルドされない場合は、tsmosreq@us.ibm.com に E メールを送信して、最新のソース・ファイルを要求してください。その際、Linux ディストリビューションのバージョン、**uname -a** コマンドの出力、およびインストールする IBM Spectrum Protect クライアントのバージョンを記載してください。

- b) ジャーナル・ベース・バックアップ・パッケージをインストールします。

```
rpm -ivh TIVsm-JBB.ppc64le.rpm
```

7. 以下のコマンドを入力し、Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するために必要なファイルをインストールします。

```
rpm -ivh TIVsm-WEBGUI.ppc64le.rpm
```

関連概念

55 ページの『IBM Spectrum Protect クライアントの構成』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) のバックアップ/アーカイブ・クライアントのアンインストール

Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) の IBM Spectrum Protect クライアントをアンインストールできます。

始める前に

製品をアンインストールするには root ユーザーとしてログインする必要があります。以下に示す順序でパッケージをアンインストールする必要があります。そうしないとアンインストールが失敗します。

手順

バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールするには、以下のコマンドを入力して、ジャーナル・ベースのバックアップ、ファイル・パス・コンポーネント、バックアップ/アーカイブ・クライアント、API、および IBM Global Security Kit (GSKit) のパッケージを削除します。

ヒント: パッケージのバージョン番号は不要です。

- ジャーナル・ベースのバックアップ・コンポーネントのみをアンインストールする場合も、両方のパッケージ (ジャーナル・ベースのバックアップおよびファイル・パス) を削除します。TIVsm-JBB パッケージは、ファイル・パス・パッケージに依存しています。2つの別個の **rpm -e** コマンドを使用してコ

ンポーネントを一度に1つずつアンインストールする場合は、最初に TIVsm-JBB パッケージをアンインストールしてください。

```
rpm -e TIVsm-JBB TIVsm-filepath
```

2. Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するパッケージを削除するには、以下のコマンドを入力します。

```
rpm -e TIVsm-WEBGUI
```

3. バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-BA
```

4. バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージをアンインストールします。

- a) クライアント共通インベントリー・パッケージ (TIVsmBAcit) をインストールしてある場合は、それをアンインストールしてください。

```
rpm -e TIVsm-BAcit
```

- b) バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-BA
```

5. API に依存する製品 (IBM Spectrum Protect for Databases や IBM Spectrum Protect for Mail など) をアンインストールします。API パッケージをアンインストールする前に、API 依存製品をすべてアンインストールする必要があります。API 依存製品をアンインストールした場合は、新しいバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアントと API パッケージをインストールした後に、その API 依存製品を再インストールする必要があります。この製品をアンインストールし、再インストールする場合にデータの損失を防ぐために必要な作業を確認するには、API 依存製品の指示に従ってください。

6. 以下のコマンドを使用して、API パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-API64
```

7. API パッケージをアンインストールします。

- a) API 共通インベントリー・パッケージ (TIVsm-APIcit) をインストールしてある場合は、それをアンインストールしてください。

```
rpm -e TIVsm-APIcit
```

- b) 以下のコマンドを使用して、API パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-API64
```

8. 以下のコマンドを入力して、GSKit をアンインストールします。

```
rpm -e gskcrypt64 gskssl64
```

関連タスク

16 ページの『Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) のバックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール』

製品インストール・メディアから、バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) へのバックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール

製品インストール・メディアから、バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

始める前に

製品をインストールするには root ユーザーとしてログインしている必要があります。

IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルと同じシステムにクライアントをインストールする予定の場合は、クライアントをインストールする前に、必ず IBM Spectrum Protect サーバーを停止してください。このアクションにより、クライアントのインストール・プロセスでシステムのリブートを強制されることがなくなります。クライアントをインストールした後、IBM Spectrum Protect サーバーを再始動できます。

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#)または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

このタスクについて

インストール・メディアでは、以下のインストール・パッケージが使用可能です。

表 12. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
gskcrypt64_8.x.x.x.ppc64el.deb gskssl64_8.x.x.x.ppc64el.deb	64 ビット・グローバル・セキュリティー・キット (GSKit) パッケージ	/usr/local/ibm/gsk8
tivsm-api64.ppc64el.deb	アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)。IBM Spectrum Protect API の共有ライブラリーとサンプルが含まれています。	/opt/tivoli/tsm/client/api/bin64

表 12. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー (続き)

パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
tivsm-ba.ppc64el.deb	バックアップ/アーカイブ・クライアント (コマンド・ラインおよび GUI)、管理クライアント (dsmadm)、および Web クライアント。	<p>/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin</p> <p>このディレクトリーは、通常、多くのバックアップ/アーカイブ・クライアント・ファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリーです。サンプルのシステム・オプション・ファイル (dsm.sys.smp) は、このディレクトリーに書き込まれます。</p> <p>DSM_DIR 環境変数を設定しないと、dsmc 実行可能ファイル、リソース・ファイル、および dsm.sys ファイルは、このディレクトリーに格納されます。</p> <p>DSM_CONFIG 環境変数を設定しない場合、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルは、このディレクトリー内になければなりません。</p> <p>DSM_LOG 環境変数を設定しない場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、現行作業ディレクトリー内の dsmererror.log および dsmsched.log ファイルにメッセージを書き込みます。</p>
tivsm-apicit.ppc64el.deb tivsm-bacit.ppc64el.deb	オプションです。これらのファイルには、システムに接続されているクライアント装置およびサーバー装置の数と、サーバー装置別のプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) の使用状況に関する情報を取得するために使用できる Common Inventory Technology コンポーネントが用意されています。PVU について詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバー資料の プロセッサ・バリュー・ユニットの見積もり を参照してください。	<p>APIcit は /opt/tivoli/tsm/client/api/bin64/cit にインストールされます</p> <p>BACit は tivoli/tsm/client/ba/bin/cit/ にインストールされます</p>

表 12. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー (続き)		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
TIVsm-filepath-source.tar.gz tivsm-jbb.ppc64el.deb	ジャーナル・ベース・バックアップに必要なファイル。	TIVsm-filepath-source.tar.gz パッケージは、/opt/filepath ディレクトリーにインストールされます。 tivsm-jbb.ppc64el.rpm パッケージは、/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin ディレクトリーにインストールされます。

手順

1. パッケージのインストールに使用するボリュームをマウントします。
2. インストール・パッケージが格納されているディレクトリーに移動します。
3. 64 ビット GSKit パッケージをインストールします。以下のコマンド例の「8.x.x.x」という文字は、GSKit のバージョンを表します。

```
dpkg -i gskcrypt64_8.x.x.x.ppc64el.deb gskssl64_8.x.x.x.ppc64el.deb
```

4. IBM Spectrum Protect API をインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。

- a) 必須: 次のようにして API をインストールします。

```
dpkg -i tivsm-api64.ppc64el.deb
```

- b) オプション: API で使用する Common Inventory Technology パッケージをインストールします。このパッケージは、API に依存するため、API パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
dpkg -i tivsm-apicit.ppc64el.deb
```

ヒント: API と以前にインストールされた Common Inventory Technology パッケージをアップグレードする場合、API と Common Inventory Technology のパッケージを両方共アップグレードする必要があります。例えば、以下のコマンドを実行できます。

```
dpkg -i tivsm-api64.ppc64el.deb  
tivsm-apicit.ppc64el.deb
```

API のインストールのみが必要な場合は、ここで停止できます。この手順の残りの部分では、クライアントによってサーバーに PVU メトリックを送信する場合にのみ必要とされる バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントおよびオプションのクライアント・パッケージのインストール方法について説明します。また、ジャーナル・ベースのバックアップを実行する際に必要なパッケージのインストールについても、後続のステップで説明します。

5. バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールします。

```
dpkg -i tivsm-ba.ppc64el.deb
```

6. オプション: ジャーナル・ベース・バックアップを使用したい場合、以下のパッケージをインストールします。

- a) TIVsm-filepath-source.tar.gz を解凍し、ソフトウェアをコンパイルしてインストールする手順について README ファイルを確認します。Linux Filepath カーネル・モジュールは、GNU General Public License ("GPL") の条件に従ってライセンス交付されています。

Linux カーネルの動的性質が原因で、ビルドの問題が発生することがあります。Linux ディストリビューションでソースが正常にビルドされない場合は、tsmosreq@us.ibm.com に E メールを送信して、最新のソース・ファイルを要求してください。その際、Linux ディストリビューションのバージョン

ョン、**uname -a** コマンドの出力、およびインストールする IBM Spectrum Protect クライアントのバージョンを記載してください。

- b) ジャーナル・ベース・バックアップ・パッケージをインストールします。

```
dpkg -i tivsm-jbb.ppc64el.deb
```

関連概念

55 ページの『[IBM Spectrum Protect クライアントの構成](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) 上のクライアントのアンインストール

Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) の IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールできます。

始める前に

製品をアンインストールするには root ユーザーとしてログインしている必要があります。

要件: 以下に示す順序でパッケージをアンインストールする必要があります。そうしないとアンインストールが失敗します。

手順

バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールするには、以下のコマンドを入力して、ジャーナル・ベースのバックアップ、バックアップ/アーカイブ・クライアント、API、および IBM Global Security Kit (GSKit) のパッケージを削除します。IBM からソフトウェアを入手する際に、ファイル・パスのソース・コードと一緒にファイル・パス・コンポーネントのアンインストール手順が提供されます。

ヒント: パッケージのバージョン番号は不要です。

1. ジャーナル・ベースのバックアップ・コンポーネントのみをアンインストールするには、tivsm-jbb とファイル・パス・パッケージの両方を削除します。tivsm-jbb パッケージは、ファイル・パス・パッケージに依存しています。tivsm-jbb パッケージを最初にアンインストールします。

a) `dpkg -r tivsm-jbb`

b) `dpkg -r TIVsm-filepath`

2. バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージをアンインストールします。

```
dpkg -r tivsm-ba
```

3. API に依存するすべての製品 (IBM Spectrum Protect for Databases や IBM Spectrum Protect for Mail など) をアンインストールします。

API 依存製品をアンインストールした場合は、新しいバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアントと API パッケージをインストールした後に、その API 依存製品を再インストールする必要があります。この製品をアンインストールし、再インストールする場合にデータの損失を防ぐために必要な作業を確認するには、API 依存製品の指示に従ってください。

4. 以下のコマンドを発行して、API パッケージをアンインストールします。

```
dpkg -r tivsm-api64
```

5. GSKit パッケージを削除します。

```
dpkg -r gskcrypt64 gskssl64
```

関連タスク

22 ページの『[Ubuntu Linux on Power Systems \(リトル・エンディアン\) へのバックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール](#)』

製品インストール・メディアから、バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

Linux on Power Systems (ビッグ・エンディアン) の API のインストール

製品 インストール・メディアから、IBM Spectrum Protect API をインストールすることができます。

始める前に

- 製品をインストールするには root ユーザーとしてログインしている必要があります。
- IBM Spectrum Protect バージョン 6.2 (またはそれ以前のバージョン) をインストールしてある場合は、それを削除し (**xpm -e**)、その他の依存ソフトウェア・プログラムもすべて削除してから、最新バージョンをインストールしてください。
- IBM Spectrum Protect V6.3 (またはそれ以降) をインストールしてある場合は、rpm upgrade オプション (**xpm -U**) または rpm freshen オプション (**xpm -F**) を使用して、既存のソフトウェアを最新のソフトウェアにアップグレードできます。**xpm -U** コマンドを使用すると、新規パッケージのインストールまたは既存のパッケージのアップグレードを行うことができます。**xpm -F** では、既にインストールされているパッケージのみを更新できます。
- IBM Spectrum Protect API またはバックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールまたはアップグレードする前に、実行中のクライアント・プロセスをすべて停止してください。
- V7.1.2 以前のクライアントを実行している場合は、アップグレードを先に進める前に、言語パッケージをアンインストールする必要があります。

このタスクについて

以下のインストール・オプションが、インストール・メディアに圧縮されないパッケージとして入っています。

表 13. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
gskcrypt64-8.x.x.x.linux.ppc.rpm gskssl64-8.x.x.x.linux.ppc.rpm	64 ビット・グローバル・セキュリティ・キット (GSKit) パッケージ	/usr/local/ibm/gsk8
TIVsm-API64.ppc64.rpm	アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)。IBM Spectrum Protect API 共用ライブラリーおよびサンプルが入っています。	/opt/tivoli/tsm/client/api/bin64

表 13. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー (続き)

パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
TIVsm-APIcit.ppc64.rpm	オプションです。これらのファイルには、システムに接続されているクライアント装置およびサーバー装置の数と、サーバー装置別のプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) の使用状況に関する情報を取得するために使用できる Common Inventory Technology コンポーネントが用意されています。PVU について詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバー資料の プロセッサ・バリュー・ユニットの見積もり を参照してください。	APIcit は /opt/tivoli/tsm/client/api/bin64/cit にインストールされます

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#)または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

インストールする前に、まず、次のようにして rpm パッケージの GSKit シグニチャーを確認する必要があります。

1. クライアント・パッケージも格納されているダウンロード・サイトから GSKit PGP 公開鍵 GSKit.pub.pgp をダウンロードします。
2. 次のコマンドを入力して、GSKit 公開鍵をインポートします。

```
rpm --import GSKit.pub.pgp
```

3. 次のコマンドを入力して、GSKit rpm ファイルを確認します。

```
rpm --checksig <GSKit rpm file> verbose
```

ここで、<GSKit rpm file> は、表 1 のパッケージ名、コンテンツ、およびデフォルトのディレクトリーにリストされている GSKit rpm パッケージの名前です。

まず、次のようにしてクライアント・パッケージのシグニチャーを確認する必要があります。

1. クライアント・パッケージも格納されているダウンロード・サイトから生成された gpk キー RPM-GPG-KEY-ibmpkg をダウンロードします。
2. 次のコマンドを入力して、生成された gpk 鍵をインポートします。


```
rpm --import RPM-GPG-KEY-ibmpkg
```

3. 次のコマンドを入力して、クライアント・パッケージを確認します。

```
rpm -K <client_package>.rpm
```

ここで、<client_package> は、表 1 のパッケージ名、コンテンツ、およびデフォルトのディレクトリーにリストされている rpm パッケージの名前です。

手順

1. インストールに使用するボリュームをマウントします。
2. インストール・パッケージが格納されているディレクトリーに移動します。
3. 64 ビット GSKit パッケージをインストールします。以下の例の「8.x.x.x」という文字は、GSKit のバージョンを表します。

```
rpm -U gskcrypt64-8.x.x.x.linux.ppc.rpm gskssl64-8.x.x.x.linux.ppc.rpm
```

4. IBM Spectrum Protect API をインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。
 - a) 必須: 次のようにして API をインストールします。

```
rpm -i TIVsm-API64.ppc64.rpm
```

- b) オプション: API で使用する Common Inventory Technology パッケージをインストールします。このパッケージは API に依存するため、API パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
rpm -i TIVsm-APIcit.ppc64.rpm
```

ヒント: API と以前にインストールされた Common Inventory Technology パッケージをアップグレードする場合、API と Common Inventory Technology のパッケージを両方共アップグレードする必要があります。例えば、以下のコマンドを実行できます。

```
rpm -U TIVsm-API64.ppc64.rpm TIVsm-APIcit.ppc64.rpm
```

関連概念

55 ページの『[IBM Spectrum Protect クライアントの構成](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

Linux on Power Systems (ビッグ・エンディアン) の API のアンインストール

IBM Spectrum Protect Linux on Power Systems (ビッグ・エンディアン) の IBM Spectrum Protect API をアンインストールできます。

始める前に

製品をアンインストールするには root としてログインしている必要があります。パッケージは示されている順序でアンインストールしてください。

手順

以前にインストールした IBM Spectrum Protect パッケージをアンインストールするには、次のコマンドを入力して、ジャーナル・ベースのバックアップ、ファイル・パス・コンポーネント、バックアップ/アーカイブ・クライアント (該当する場合)、API、および IBM Global Security Kit (GSKit) のパッケージを削除します。

ヒント: アンインストールには、パッケージのバージョン番号は不要です。

1. 以前にバージョン 7.1 以前のクライアントがインストールされている場合は、このステップを完了してください。

ジャーナル・ベースのバックアップ・コンポーネントのみをアンインストールする場合も、両方のパッケージ (ジャーナル・ベースのバックアップおよびファイル・パス) を削除します。TIVsm-JBB パッケージは、ファイル・パス・パッケージに依存しています。2 つの別個の **rpm -e** コマンドを使用してコンポーネントを一度に 1 つずつアンインストールする場合は、最初に TIVsm-JBB パッケージをアンインストールしてください。

```
rpm -e TIVsm-JBB TIVsm-filepath
```

2. 以前にバージョン 7.1 以前のクライアントがインストールされた場合は、バックアップ/アーカイブ・クライアントのパッケージをアンインストールします。

- a) オプションの TIVsmBAcit パッケージをインストールした場合は、次のコマンドを使用して、そのパッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-BAcit
```

- b) バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-BA
```

注: 言語パッケージがバージョン 7.1.2 以前のクライアントにインストールされている場合は、API パッケージを削除する前に言語パッケージを削除する必要があります。以下のコマンドを入力します。xx_xx は、インストールしたそれぞれの追加言語の言語コードに置き換えてください。言語コード ID のリストについては、[29 ページの表 14](#) を参照してください。

```
rpm -e TIVsm-BA.msg.xx_xx
```

表 14. 言語パック ID	
言語	言語 ID
チェコ語	CS_CZ
フランス語	FR_FR
ドイツ語	DE_DE
ハンガリー語	HU_HU
イタリア語	IT_IT
日本語	JA_JP
韓国語	KO_KR
ポーランド語	PL_PL
ポルトガル語	PT_BR
ロシア語	RU_RU
スペイン語	ES_ES
中国語 (繁体字) (EUC)	ZH_CN
中国語 (繁体字) Big5	ZH_TW

3. API に依存するすべての製品 (IBM Spectrum Protect for Databases や IBM Spectrum Protect for Mail など) をアンインストールします。API パッケージをアンインストールする前に、API 依存製品をすべてアンインストールする必要があります。API 依存製品をアンインストールした場合は、新しいバージョンの API パッケージをインストールした後に、その API 依存製品を再インストールする必要があります。この製品をアンインストールし、再インストールする場合にデータの損失を防ぐために必要な作業を確認するには、依存製品の資料を参照してください。

4. オプションの API 共通インベントリ・パッケージ (TIVsm-APIcit) をインストールした場合は、次のコマンドを使用して、パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-APIcit
```

5. 以下のコマンドを使用して、API パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-API64
```

6. 以下のコマンドを使用して、GSKit をアンインストールします。

```
rpm -e gskcrypt64 gskssl64
```

関連タスク

26 ページの『Linux on Power Systems (ビッグ・エンディアン) の API のインストール』

製品 インストール・メディアから、IBM Spectrum Protect API をインストールすることができます。

Linux x86_64 クライアントのインストール

製品インストール・メディアから Linux x86_64 バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

始める前に

- 製品をインストールするには root としてログインしている必要があります。
- IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルと同じシステムにクライアントをインストールする予定の場合は、クライアントをインストールする前に、必ず IBM Spectrum Protect サーバーを停止してください。このアクションにより、クライアントのインストール・プロセスでシステムのリブートを強制されることがなくなります。クライアントをインストールした後、IBM Spectrum Protect サーバーを再始動できます。
- IBM Spectrum Protect バージョン 6.2 (またはそれ以前のバージョン) をインストールしてある場合は、それを削除し (**xpm -e**)、その他の依存ソフトウェア・プログラムもすべて削除してから、最新バージョンをインストールしてください。
- IBM Spectrum Protect V6.3 (またはそれ以降) をインストールしてある場合は、rpm upgrade オプション (**xpm -U**) または rpm freshen オプション (**xpm -F**) を使用して、既存のソフトウェアを最新のソフトウェアにアップグレードできます。**xpm -U** コマンドを使用すると、新規パッケージのインストールまたは既存パッケージの更新を行うことができます。ただし、以前に言語パッケージをインストールしたことがない場合に限られます。**xpm -F** コマンドは、既にインストールされているパッケージのみを更新できます。
- IBM Spectrum Protect API またはバックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールまたはアップグレードする前に、実行中のクライアント・プロセスをすべて停止してください。
- 言語パッケージがインストールされている場合は、IBM Spectrum Protect API またはバックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールまたはアップグレードする前に、言語パッケージをアンインストールする必要があります。

このタスクについて

以下のインストール・オプションが、インストール・メディアに圧縮されないパッケージとして入っています。

表 15. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
gskcrypt64-8.x.x.x.linux.x86_64.rpm gskssl64-8.x.x.x.linux.x86_64.rpm	64 ビット・グローバル・セキュリティ・キット (GSKit) パッケージ	/usr/local/ibm/gsk8
TIVsm-API64.x86_64.rpm	アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)。IBM Spectrum Protect API 共用ライブラリーおよびサンプルが入っています。	/opt/tivoli/tsm/client/api/bin64
TIVsm-BA.x86_64.rpm	バックアップ/アーカイブ・クライアント (コマンド・ラインおよび GUI)、管理クライアント (dsmadm)、および Web クライアント。	<p>/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin</p> <p>このディレクトリーは、多くのバックアップ/アーカイブ・クライアント・ファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリーと見なされます。サンプルのシステム・オプション・ファイル (dsm.sys.smp) は、このディレクトリーに書き込まれます。DSM_DIR 環境変数を設定しないと、dsmc 実行可能ファイル、リソース・ファイル、および dsm.sys ファイルは、このディレクトリーに格納されます。</p> <p>DSM_CONFIG を設定しない場合、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルは、このディレクトリーになければなりません。</p> <p>DSM_LOG を定義しない場合、現行作業ディレクトリー内の dsmerror.log および dsmsched.log ファイルにメッセージを書き込みます。</p>

表 15. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー (続き)		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
TIVsm-APIcit.x86_64.rpm TIVsm-BAcit.x86_64.rpm	オプションです。これらのファイルには、システムに接続されているクライアント装置およびサーバー装置の数と、サーバー装置別のプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) の使用状況に関する情報を取得するために使用できる Common Inventory Technology コンポーネントが用意されています。PVU について詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバー資料の プロセッサ・バリュー・ユニットの見積もり を参照してください。	APIcit は /opt/tivoli/tsm/client/api/bin64/cit/ にインストールされます BAcit は /opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/cit/ にインストールされます
TIVsm-filepath-source.tar.gz TIVsm-JBB.x86_64.rpm	ジャーナル・ベースのバックアップをサポートするために必要なファイル。	ファイル・パスは /opt/filepath にインストールされます JBB は /opt/tivoli/tsm/client/ba/bin にインストールされます
TIVsm_BAhdw.x86_64.rpm	NetAPP および N-Series ファイル・サーバーのスナップショット増分バックアップについてのサポートを提供します。	/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/plugins
TIVsm-WEBGUI.x86_64.rpm	Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するために必要なファイルを提供します。	/opt/tivoli/tsm/tdpvmware

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#)または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

インストールする前に、まず、次のようにして rpm パッケージの GSKit シグニチャーを確認する必要があります。

1. クライアント・パッケージも格納されているダウンロード・サイトから GSKit PGP 公開鍵 `GSKit.pub.pgp` をダウンロードします。
2. 次のコマンドを入力して、GSKit 公開鍵をインポートします。

```
rpm --import GSKit.pub.pgp
```

3. 次のコマンドを入力して、GSKit rpm ファイルを確認します。

```
rpm --checksig <GSKit rpm file> verbose
```

ここで、`<GSKit rpm file>` は、表 1 のパッケージ名、コンテンツ、およびデフォルトのディレクトリーにリストされている GSKit rpm パッケージの名前です。

まず、次のようにしてクライアント・パッケージのシグニチャーを確認する必要があります。

1. クライアント・パッケージも格納されているダウンロード・サイトから生成された gpk キー `RPM-GPG-KEY-ibmpkg` をダウンロードします。
2. 次のコマンドを入力して、生成された gpk 鍵をインポートします。

```
rpm --import RPM-GPG-KEY-ibmpkg
```

3. 次のコマンドを入力して、クライアント・パッケージを確認します。

```
rpm -K <client_package>.rpm
```

ここで、`<client_package>` は、表 1 のパッケージ名、コンテンツ、およびデフォルトのディレクトリーにリストされている rpm パッケージの名前です。

手順

Linux x86_64 バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールするには、以下の手順を実行します。

1. インストールに使用するボリュームをマウントします。
2. インストール・パッケージが格納されているディレクトリーに移動します。
3. 64 ビット GSKit パッケージをインストールします。以下の例の「8.x.x.x」という文字は、GSKit のバージョンを表します。

```
rpm -U gskcrypt64-8.x.x.x.linux.x86_64.rpm gskssl64-8.x.x.x.linux.x86_64.rpm
```

4. IBM Spectrum Protect API をインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。

a) 必須: 次のようにして API をインストールします。

```
rpm -i TIVsm-API64.x86_64.rpm
```

b) オプション: API で使用する Common Inventory Technology パッケージをインストールします。このパッケージは、API に依存するため、API パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
rpm -i TIVsm-APIcit.x86_64.rpm
```

ヒント: API と以前にインストールされた Common Inventory Technology パッケージをアップグレードする場合、API と Common Inventory Technology のパッケージを両方共アップグレードする必要があります。例えば、以下のコマンドを実行できます。

```
rpm -U TIVsm-API64.x86_64.rpm TIVsm-APIcit.x86_64.rpm
```

API のインストールのみが必要な場合は、ここで停止できます。この手順の残りの部分では、クライアントによってサーバーに PVU メトリックを送信する場合にのみ必要とされる バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントおよびオプションのクライアント・パッケージのインストール方法について説明します。また、ジャーナル・ベースのバックアップを実行する際に必要なパッケージのインストールについても、後続のステップで説明します。

5. バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。

a) バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントをインストールします。

```
rpm -i TIVsm-BA.x86_64.rpm
```

- b) オプション: Common Inventory Technology パッケージを使用します。このパッケージは、クライアントが PVU メトリックをサーバーに送信する際に使用します。このパッケージはクライアント・パッケージに依存するため、クライアント・パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
rpm -i TIVsm-BACit.x86_64.rpm
```

6. オプション: ジャーナル・ベースのバックアップを使用する場合は、ご使用のクライアント・コンピューター上の Linux カーネルと一致するファイル・パス・コンポーネントをコンパイルしてインストールする必要があります。TIVsm-filepath-source.tar.gz を解凍し、README ファイルを参照してコンパイルとインストールの方法を見つけます。Linux filepath カーネル・モジュールは、GNU General Public License ("GPL") の条件に従ってライセンス交付されています。

Linux カーネルの動的性質が原因で、ビルドの問題が発生することがあります。Linux ディストリビューションでソースが正常にビルドされない場合は、tsmosreq@us.ibm.com に E メールを送信して、最新のソース・ファイルを要求してください。その際、Linux ディストリビューションのバージョン、**uname -a** コマンドの出力、およびインストールする IBM Spectrum Protect クライアントのバージョンを記載してください。

7. 次のコマンドを入力して NetApp と N シリーズのファイル・サーバー用のスナップショット差分の増分バックアップ・サポートをインストールしてください。

```
rpm -i TIVsm-BAhdw.x86_64.rpm
```

8. 以下のコマンドを入力し、Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するために必要なファイルをインストールします。

```
rpm -ivh TIVsm-WEBGUI.x86_64.rpm
```

関連概念

55 ページの『IBM Spectrum Protect クライアントの構成』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

Linux x86_64 クライアントのアンインストール

以下の手順を使用して、IBM Spectrum Protect Linux x86_64 クライアントをアンインストールできます。

始める前に

製品をアンインストールするには root としてログインしている必要があります。パッケージは示されている順序でアンインストールしてください。

手順

以前にインストールした IBM Spectrum Protect クライアント・パッケージをアンインストールするには、以下のコマンドを入力して、Web ユーザー・インターフェース、ジャーナル・ベースのバックアップ、ファイル・パス・コンポーネント、バックアップ/アーカイブ・クライアント、API、および IBM Global Security Kit (GSKit) のパッケージを削除します。

ヒント: アンインストールには、パッケージのバージョン番号は不要です。

1. ジャーナル・ベースのバックアップ・コンポーネントのみをアンインストールする場合も、両方のパッケージ (ジャーナル・ベースのバックアップおよびファイル・パス) を削除します。TIVsm-JBB パッケージは、ファイル・パス・パッケージに依存しています。2つの別個の **rpm -e** コマンドを使用してコンポーネントを一度に1つずつアンインストールする場合は、最初に TIVsm-JBB パッケージをアンインストールしてください。

```
rpm -e TIVsm-JBB TIVsm-filepath
```

2. Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するパッケージを削除するには、以下のコマンドを入力します。

```
rpm -e TIVsm-WEBGUI
```

3. バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージをアンインストールします。

- a) オプションの TIVsm-BAcit パッケージをインストールしてある場合は、それをアンインストールしてから、クライアントをアンインストールしてください。

```
rpm -e TIVsm-BAcit
```

- b) バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-BA
```

注: 言語パッケージがバージョン 7.1.2 以前のクライアントにインストールされている場合は、API パッケージを削除する前に言語パッケージを削除する必要があります。以下のコマンドを入力します。xx_xx は、インストールしたそれぞれの追加言語の言語コードに置き換えてください。言語コード ID のリストについては、[35 ページの表 16](#) を参照してください。

```
rpm -e TIVsm-msg.xx_xx
```

表 16. 言語パック ID	
言語	言語 ID
チェコ語	CS_CZ
フランス語	FR_FR
ドイツ語	DE_DE
ハンガリー語	HU_HU
イタリア語	IT_IT
日本語	JA_JP
韓国語	KO_KR
ポーランド語	PL_PL
ポルトガル語	PT_BR
ロシア語	RU_RU
スペイン語	ES_ES
中国語 (繁体字) (EUC)	ZH_CN
中国語 (繁体字) Big5	ZH_TW

4. API に依存するすべての製品 (IBM Spectrum Protect for Databases や IBM Spectrum Protect for Mail など) をアンインストールします。API パッケージをアンインストールする前に、API 依存製品をすべてアンインストールする必要があります。API 依存製品をアンインストールした場合は、新しいバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアントと API パッケージをインストールした後に、その API 依

存製品を再インストールする必要があります。この製品をアンインストールし、再インストールする場合にデータの損失を防ぐために必要な作業を確認するには、依存製品の資料を参照してください。

- a) オプションの API 共通インベントリー・パッケージ (TIVsm-APIcit) をインストールしてある場合は、それをアンインストールしてから、API パッケージをアンインストールしてください。以下のコマンドを使用して、パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-APIcit
```

- b) 以下のコマンドを使用して、API パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-API64
```

5. GSKit 64 ビット・パッケージを削除するには、以下のコマンドを入力します。

```
rpm -e gskcrypt64 gskssl64
```

関連タスク

30 ページの『Linux x86_64 クライアントのインストール』

製品インストール・メディアから Linux x86_64 バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

Ubuntu Linux x86_64 クライアントのインストール

製品インストール・メディアから Ubuntu Linux 64 ビット・バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

始める前に

IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルと同じシステムにクライアントをインストールする予定の場合は、クライアントをインストールする前に、必ず IBM Spectrum Protect サーバーを停止してください。このアクションにより、クライアントのインストール・プロセスでシステムのリブートを強制されることがなくなります。クライアントをインストールした後、IBM Spectrum Protect サーバーを再始動できます。

このタスクについて

以下のインストール・オプションが、インストール・メディアに圧縮されないパッケージとして入っています。

表 17. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
gskcrypt64_8.0-50.40.linux.x86_64.deb gskssl64_8.0-50.40.linux.x86_64.deb	64 ビット・グローバル・セキュリティ・キット (GSKit) パッケージ	/usr/local/ibm/gsk8
tivsm-api64.amd64.deb	アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)。IBM Spectrum Protect API 共用ライブラリーおよびサンプルが入っています。	/opt/tivoli/tsm/client/api/bin64

表 17. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー (続き)

パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
tivsm-ba.amd64.deb	バックアップ/アーカイブ・クライアント (コマンド・ラインおよび GUI)、管理クライアント (dsmadm)、および Web クライアント。	<p>/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin</p> <p>このディレクトリーは、多くのバックアップ/アーカイブ・クライアント・ファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリーと見なされます。サンプルのシステム・オプション・ファイル (dsm.sys.smp) は、このディレクトリーに書き込まれます。DSM_DIR 環境変数を設定しないと、dsmc 実行可能ファイル、リソース・ファイル、および dsm.sys ファイルは、このディレクトリーに格納されます。</p> <p>DSM_CONFIG を設定しない場合、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルは、このディレクトリーになければなりません。</p> <p>DSM_LOG を定義しない場合、現行作業ディレクトリー内の dsmererror.log および dsmsched.log ファイルにメッセージを書き込みます。</p>
tivsm-apicit.amd64.deb tivsm-bacit.amd64.deb	オプションです。これらのファイルには、システムに接続されているクライアント装置およびサーバー装置の数と、サーバー装置別のプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) の使用状況に関する情報を取得するために使用できる Common Inventory Technology コンポーネントが用意されています。PVU について詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバー資料の プロセッサ・バリュー・ユニットの見積もり を参照してください。	<p>APIcit は /opt/tivoli/tsm/client/api/bin64/cit にインストールされます</p> <p>BAcit は tivoli/tsm/client/ba/bin/cit/ にインストールされます</p>
tivsm-filepath-source.tar.gz tivsm-jbb.amd64.deb	ジャーナル・ベースのバックアップをサポートするために必要なファイル。	<p>ジャーナル・ベースのバックアップを使用することを予定している場合にのみ filepath パッケージおよび tivsm-jbb パッケージが必要になります。</p> <p>tivsm-jbb.x86_64.deb パッケージは、/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin にインストールされます。</p>

表 17. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー (続き)		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
tivsm-bahdw.amd64.deb	NetAPP および N-Series ファイル・サーバーのスナップショット増分バックアップについてのサポートを提供します。	/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/plugins

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#)または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

手順

Ubuntu Linux x86_64 バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールするには、以下の手順を実行します。

1. インストールに使用するボリュームをマウントします。
2. インストール・パッケージが格納されているディレクトリーに移動します。
3. 64 ビット GSKit パッケージをインストールします。

```
sudo dpkg -i gskcrypt64_8.0-50.40.linux.x86_64.deb
gskssl64_8.0-50.40.linux.x86_64.deb
```

4. IBM Spectrum Protect API をインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。

a) 必須: 次のようにして API をインストールします。

```
sudo dpkg -i tivsm-api64.amd64.deb
```

b) オプション: API で使用する Common Inventory Technology パッケージをインストールします。このパッケージは、API に依存するため、API パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
sudo dpkg -i tivsm-apicit.amd64.deb
```

ヒント: API と以前にインストールされた Common Inventory Technology パッケージをアップグレードする場合、API と Common Inventory Technology のパッケージを両方共アップグレードする必要があります。例えば、以下のコマンドを実行できます。

```
sudo dpkg -i tivsm-api64.amd64.deb
tivsm-apicit.amd64.deb
```

API のインストールのみが必要な場合は、ここで停止できます。この手順の残りの部分では、クライアントによってサーバーに PVU メトリックを送信する場合にのみ必要とされる バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントおよびオプションのクライアント・パッケージのインストール方法について説明します。また、ジャーナル・ベースのバックアップを実行する際に必要なパッケージのインストールについても、後続のステップで説明します。

5. バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。

- a) バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントをインストールします。

```
sudo dpkg -i tivsm-ba.amd64.deb
```

- b) オプション: Common Inventory Technology パッケージをインストールします。このパッケージは、クライアントが PVU メトリックをサーバーに送信する際に使用します。このパッケージはクライアント・パッケージに依存するため、クライアント・パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
sudo dpkg -i tivsm-bacit.amd64.deb
```

6. オプション: このステップは、ジャーナル・ベースのバックアップを使用することを予定している場合にのみ実行します。

- a) `tivsm-filepath-source.tar.gz` を解凍し、README ファイルを参照してコンパイルとインストールの方法を見つけます。

Filepath カーネル・モジュールは、GNU General Public License ("GPL") の条件に従ってライセンス交付されています。

Linux カーネルの動的性質が原因で、ビルドの問題が発生することがあります。Linux ディストリビューションでソースが正常にビルドされない場合は、tsmosreq@us.ibm.com に E メールを送信して、最新のソース・ファイルを要求してください。その際、Linux ディストリビューションのバージョン、`uname -a` コマンドの出力、およびインストールする IBM Spectrum Protect クライアントのバージョンを記載してください。

- b) ジャーナル・ベースのバックアップ・パッケージ `dpkg -i tivsm-jbb.amd64.deb` をインストールします。

7. 次のコマンドを入力して NetApp と N シリーズのファイル・サーバー用のスナップショット差分の増分バックアップ・サポートをインストールしてください。

```
sudo dpkg -i tivsm-bahdw.amd64.deb
```

関連概念

55 ページの『IBM Spectrum Protect クライアントの構成』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

Ubuntu Linux x86_64 クライアントのアンインストール

以下の手順を使用して、IBM Spectrum Protect Ubuntu Linux 64 ビット・クライアントをアンインストールします。

手順

以前にインストールした IBM Spectrum Protect クライアント・パッケージをアンインストールするには、以下のコマンドを入力して、ジャーナル・ベースのバックアップ、バックアップ/アーカイブ・クライアント、API、および IBM Global Security Kit (GSKit) のパッケージを削除します。IBM からソフトウェア入手する際に、ファイル・パス・コンポーネントのアンインストールの説明が、ファイル・パスのソース・コードと一緒に提供されます。

- ジャーナル・ベースのバックアップ・コンポーネントのみをアンインストールするには、`tivsm-jbb` コンポーネントとファイル・パス・コンポーネントを両方とも削除します。`tivsm-jbb` パッケージは、ファイル・パス・パッケージに依存しています。`tivsm-jbb` パッケージを最初にアンインストールします。
 - `sudo dpkg -r tivsm-jbb`
 - `sudo dpkg -r tivsm-filepath`
- バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージをアンインストールします。
 - オプションの `tivsm-bacit` パッケージをインストールしてある場合は、それをアンインストールしてから、クライアントをアンインストールしてください。

```
sudo dpkg -r tivsm-bacit
```

- b) バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールします。

```
sudo dpkg -r tivsm-ba
```

注：言語パッケージがバージョン 7.1.2 以前のクライアントにインストールされている場合は、API パッケージを削除する前に言語パッケージを削除する必要があります。以下のコマンドを入力します。xx-xx は、インストールしたそれぞれの追加言語の言語コードに置き換えてください。言語コード ID のリストについては、[40 ページの表 18](#) を参照してください。

```
dpkg -r tivsm-msg.xx-xx
```

表 18. 言語パック ID	
言語	言語 ID
チェコ語	cs-cz
フランス語	fr-fr
ドイツ語	de-de
ハンガリー語	hu-hu
イタリア語	it-it
日本語	ja-jp
韓国語	ko-kr
ポーランド語	pl-pl
ポルトガル語	pt-br
ロシア語	ru-ru
スペイン語	es-es
中国語 (繁体字) (EUC)	zh-cn
中国語 (繁体字) Big5	zh-tw

3. API に依存する製品 (IBM Spectrum Protect Data Protection 製品など) をすべてアンインストールします。API パッケージをアンインストールする前に、API 依存製品をすべてアンインストールする必要があります。API 依存製品をアンインストールした場合は、新しいバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアントと API パッケージをインストールした後に、その API 依存製品を再インストールする必要があります。この製品をアンインストールし、再インストールする場合にデータの損失を防ぐために必要な作業を確認するには、依存製品の資料を参照してください。
- a) オプションの API 共通インベントリー・パッケージ (tivsm-apicit) をインストールしてある場合は、それをアンインストールしてから、API パッケージをアンインストールしてください。以下のコマンドを使用して、パッケージをアンインストールします。

```
sudo dpkg -r tivsm-apicit
```

- b) 以下のコマンドを使用して、API パッケージをアンインストールします。

```
sudo dpkg -r tivsm-api64
```

4. GSKit 64 ビット・パッケージを削除するには、以下のコマンドを入力します。

```
sudo dpkg -r gskcrypt64 gskssl64
```

関連タスク

[36 ページの『Ubuntu Linux x86_64 クライアントのインストール』](#)

製品インストール・メディアから Ubuntu Linux 64 ビット・バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

Linux on System z クライアントのインストール

製品インストール・メディアから、Linux on System z バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

始める前に

- 製品をインストールするには root としてログインしている必要があります。
- IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルと同じシステムにクライアントをインストールする予定の場合は、クライアントをインストールする前に、必ず IBM Spectrum Protect サーバーを停止してください。このアクションにより、クライアントのインストール・プロセスでシステムのリブートを強制されることがなくなります。クライアントをインストールした後、IBM Spectrum Protect サーバーを再始動できます。
- IBM Spectrum Protect バージョン 6.2 (またはそれ以前のバージョン) をインストールしてある場合は、それを削除し (**rpm -e**)、その他の依存ソフトウェア・プログラムもすべて削除してから、最新バージョンをインストールしてください。
- IBM Spectrum Protect V6.3 (またはそれ以降) をインストールしてある場合は、rpm upgrade オプション (**rpm -U**) または rpm freshen オプション (**rpm -F**) を使用して、既存のソフトウェアを最新のソフトウェアにアップグレードできます。**rpm -U** コマンドを使用すると、新規パッケージのインストールまたは既存のパッケージのアップグレードを行うことができます。**rpm -F** では、既にインストールされているパッケージのみを更新できます。
- IBM Spectrum Protect API またはバックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールまたはアップグレードする前に、実行中のクライアント・プロセスをすべて停止してください。
- V7.1.2 以前のクライアントを実行している場合は、アップグレードを先に進める前に、言語パッケージをアンインストールする必要があります。

このタスクについて

以下のインストール・オプションが、インストール・メディアに圧縮されないパッケージとして入っています。

表 19. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
gskcrypt64-8.x.x.x.linux.s390x.rpm gskssl64-8.x.x.x.linux.s390x.rpm	64 ビット・グローバル・セキュリティ・キット (GSKit) パッケージ	/usr/local/ibm/gsk8
TIVsm-API64.s390x.rpm	アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)。IBM Spectrum Protect API 共用ライブラリーおよびサンプルが入っています。	/opt/tivoli/tsm/client/api/bin64

表 19. パッケージ名、内容、およびデフォルト・ディレクトリー (続き)		
パッケージ名	内容	デフォルト・ディレクトリー
TIVsm-BA.s390x.rpm	バックアップ/アーカイブ・クライアント (コマンド・ラインおよび GUI)、管理クライアント (dsmadm)、および Web クライアント。	<p>/opt/tivoli/tsm/client/ba</p> <p>このディレクトリーは、多くのバックアップ/アーカイブ・クライアント・ファイルのデフォルトのインストール・ディレクトリーと見なされます。サンプルのシステム・オプション・ファイル (dsm.sys.smp) は、このディレクトリーに書き込まれます。DSM_DIR 環境変数を設定しないと、dsmc 実行可能ファイル、リソース・ファイル、および dsm.sys ファイルは、このディレクトリーに格納されます。</p> <p>DSM_CONFIG を設定しない場合、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルは、このディレクトリーになければなりません。</p> <p>DSM_LOG を定義しない場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、現行作業ディレクトリー内の dsmerror.log および dsmsched.log ファイルにメッセージを書き込みます。</p>
TIVsm-APIcit.s390x.rpm TIVsm-BAcit.s390x.rpm	オプションです。これらのファイルには、システムに接続されているクライアント装置およびサーバー装置の数と、サーバー装置別のプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) の使用状況に関する情報を取得するために使用できる Common Inventory Technology コンポーネントが用意されています。PVU について詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバー資料の <u>プロセッサ・バリュー・ユニットの見積もり</u> を参照してください。	<p>APIcit は /opt/tivoli/tsm/client/api/bin64/cit にインストールされます</p> <p>BAcit は tivoli/tsm/client/ba/bin/cit/ にインストールされます</p>
TIVsm-filepath-source.tar.gz TIVsm-JBB.s390x.rpm	ジャーナル・ベースのバックアップをサポートするために必要なファイル。	<p>ファイル・パスは /opt/filepath にインストールされます</p> <p>JBB は /opt/tivoli/tsm/client/ba/bin にインストールされます</p>
TIVsm-WEBGUI.s390x.rpm	Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するために必要なファイルを提供します。	/opt/tivoli/tsm/tdpvmware

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイ

ルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#)または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

インストールする前に、まず、次のようにして rpm パッケージの GSKit シグニチャーを確認する必要があります。

1. クライアント・パッケージも格納されているダウンロード・サイトから GSKit PGP 公開鍵 GSKit.pub.pgp をダウンロードします。
2. 次のコマンドを入力して、GSKit 公開鍵をインポートします。

```
rpm --import GSKit.pub.pgp
```

3. 次のコマンドを入力して、GSKit rpm ファイルを確認します。

```
rpm --checksig <GSKit rpm file> verbose
```

ここで、<GSKit rpm file> は、表 1 のパッケージ名、コンテンツ、およびデフォルトのディレクトリーにリストされている GSKit rpm パッケージの名前です。

まず、次のようにしてクライアント・パッケージのシグニチャーを確認する必要があります。

1. クライアント・パッケージも格納されているダウンロード・サイトから生成された gpk キー RPM-GPG-KEY-ibmpkg をダウンロードします。
2. 次のコマンドを入力して、生成された gpk 鍵をインポートします。

```
rpm --import RPM-GPG-KEY-ibmpkg
```

3. 次のコマンドを入力して、クライアント・パッケージを確認します。

```
rpm -K <client_package>.rpm
```

ここで、<client_package> は、表 1 のパッケージ名、コンテンツ、およびデフォルトのディレクトリーにリストされている rpm パッケージの名前です。

手順

1. インストールに使用するボリュームをマウントします。
2. パッケージが格納されているディレクトリーに移動する。
3. 64 ビット GSKit パッケージをインストールします。以下の例の「8.x.x.x」という文字は、GSKit のバージョンを表します。

```
rpm -U gskcrypt64-8.x.x.x.linux.s390x.rpm gskssl64-8.x.x.x.linux.s390x.rpm
```

4. IBM Spectrum Protect API をインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。
 - a) 必須: 次のようにして API をインストールします。

```
rpm -i TIVsm-API64.s390x.rpm
```

- b) オプション: API で使用する Common Inventory Technology パッケージをインストールします。このパッケージは API に依存するため、API パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
rpm -i TIVsm-APIcit.s390x.rpm
```


ヒント: API と以前にインストールされた Common Inventory Technology パッケージをアップグレードする場合、API と Common Inventory Technology のパッケージを両方共アップグレードする必要があります。例えば、以下のコマンドを実行できます。

```
rpm -U TIVsm-API64.s390x.rpm TIVsm-APIcit.s390x.rpm
```

API のインストールのみが必要な場合は、ここで停止できます。この手順の残りの部分では、クライアントによってサーバーに PVU メトリックを送信する場合にのみ必要とされる バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントおよびオプションのクライアント・パッケージのインストール方法について説明します。また、ジャーナル・ベースのバックアップを実行する際に必要なパッケージのインストールについても、後続のステップで説明します。

5. バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールし、必要に応じてプロセッサ・バリュー・ユニット (PVU) 計算をサポートするために必要な Common Inventory Technology パッケージをインストールします。

a) バックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントをインストールします。

```
rpm -i TIVsm-BA.s390x.rpm
```

- b) オプション: Common Inventory Technology パッケージを使用します。このパッケージは、クライアントが PVU メトリックをサーバーに送信する際に使用します。このパッケージはクライアント・パッケージに依存するため、クライアント・パッケージをインストールした後でインストールする必要があります。

```
rpm -i TIVsm-BAcit.s390x.rpm
```

6. オプション: ジャーナル・ベースのバックアップを使用する場合は、ご使用のクライアント・コンピューター上の Linux カーネルと一致するファイル・パス・コンポーネントをコンパイルしてインストールする必要があります。TIVsm-filepath-source.tar.gz を解凍し、README ファイルを参照してコンパイルとインストールの方法を見つけます。Linux filepath カーネル・モジュールは、GNU General Public License ("GPL") の条件に従ってライセンス交付されています。

Linux カーネルの動的性質が原因で、ビルドの問題が発生することがあります。Linux ディストリビューションでソースが正常にビルドされない場合は、tsmosreq@us.ibm.com に E メールを送信して、最新のソース・ファイルを要求してください。その際、Linux ディストリビューションのバージョン、**uname -a** コマンドの出力、およびインストールする IBM Spectrum Protect クライアントのバージョンを記載してください。

7. 以下のコマンドを入力し、Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するために必要なファイルをインストールします。

```
rpm -ivh TIVsm-WEBGUI.s390x.rpm
```

関連概念

55 ページの『IBM Spectrum Protect クライアントの構成』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

Linux on System z クライアントのアンインストール

以下の手順を使用して、IBM Spectrum Protect Linux on System z クライアントをアンインストールできます。

始める前に

製品をインストールするには root としてログインしている必要があります。パッケージは示されている順序でアンインストールしてください。

このタスクについて

以前にインストールした IBM Spectrum Protect クライアント・パッケージをアンインストールするには、以下のコマンドを入力して、ジャーナル・ベースのバックアップ、ファイル・パス・コンポーネント、バ

ックアップ/アーカイブ・クライアント、API、および IBM Global Security Kit (GSKit) のパッケージを削除します。

ヒント: アンインストールには、パッケージのバージョン番号は不要です。

手順

1. ジャーナル・ベースのバックアップ・コンポーネントのみをアンインストールする場合も、両方のパッケージ (ジャーナル・ベースのバックアップおよびファイル・パス) を削除します。TIVsm-JBB パッケージは、ファイル・パス・パッケージに依存しています。2 つの別個の **rpm -e** コマンドを使用してコンポーネントを一度に 1 つずつアンインストールする場合は、最初に TIVsm-JBB パッケージをアンインストールしてください。

```
rpm -e TIVsm-JBB TIVsm-filepath
```

2. Web ユーザー・インターフェースを使用して、ファイル・リストア操作を実行するパッケージを削除するには、以下のコマンドを入力します。

```
rpm -e TIVsm-WEBGUI
```

3. バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージをアンインストールします。

- a) オプションの TIVsm-BAcit パッケージをインストールしてある場合は、それをアンインストールしてから、クライアントをアンインストールしてください。

```
rpm -e TIVsm-BAcit
```

- b) バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-BA
```

注: 言語パッケージがバージョン 7.1.2 以前のクライアントにインストールされている場合は、API パッケージを削除する前に言語パッケージを削除する必要があります。以下のコマンドを入力します。xx_xx は、インストールしたそれぞれの追加言語の言語コードに置き換えてください。言語コード ID のリストについては、[45 ページの表 20](#) を参照してください。

```
rpm -e TIVsm-msg.xx_xx
```

表 20. 言語パック ID	
言語	言語 ID
チェコ語	CS_CZ
フランス語	FR_FR
ドイツ語	DE_DE
ハンガリー語	HU_HU
イタリア語	IT_IT
日本語	JA_JP
韓国語	KO_KR
ポーランド語	PL_PL
ポルトガル語	PT_BR
ロシア語	RU_RU
スペイン語	ES_ES
中国語 (繁体字) (EUC)	ZH_CN

表 20. 言語パック ID (続き)	
言語	言語 ID
中国語 (繁体字) Big5	ZH_TW

4. API に依存するすべての製品 (IBM Spectrum Protect for Databases や IBM Spectrum Protect for Mail など) をアンインストールします。API パッケージをアンインストールする前に、API 依存製品をすべてアンインストールする必要があります。API 依存製品をアンインストールした場合は、新しいバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアントと API パッケージをインストールした後に、その API 依存製品を再インストールする必要があります。この製品をアンインストールし、再インストールする場合にデータの損失を防ぐために必要な作業を確認するには、依存製品の資料を参照してください。

- a) オプションの API 共通インベントリー・パッケージ (TIVsm-APIcit) をインストールしてある場合は、それをアンインストールしてから、API パッケージをアンインストールしてください。以下のコマンドを使用して、パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-APIcit
```

- b) 以下のコマンドを使用して、API パッケージをアンインストールします。

```
rpm -e TIVsm-API64
```

5. GSKit 64 ビット・パッケージを削除するには、以下のコマンドを入力します。

```
rpm -e gskcrypt64 gskssl64
```

関連タスク

41 ページの『Linux on System z クライアントのインストール』

製品インストール・メディアから、Linux on System z バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

Mac OS X クライアントのインストール

製品インストール・メディアから、IBM Spectrum Protect Mac OS X バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

始める前に

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールするには、システム管理者でなければなりません。

このタスクについて

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#)または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

MAC OS X クライアントの場合、インストール・ウィザード (製品をインストールしながら情報の入力が必要になります) を使用することも、クライアントをコマンド・ラインからインストールすることもできます。コマンド・ラインのインストール手順を使用してクライアントをインストールする場合、ユーザー対話を行わずにインストールが実行されます。コマンド・ラインの手順は、インストールをスクリプトとして記述して多くのノードでそのスクリプトを実行する場合や、モニターのないシステムにソフトウェアをインストールする必要がある場合に役立ちます。

手順

インストール方式を選択し、クライアントをインストールします。インストール・ウィザード方式を使用するか、クライアントをコマンド・ラインからインストールします。

インストール方式	手順
インストール・ウィザード	<p>a. 8.1.12.0.0-TIV-TSMBAC-Mac.dmg ファイルをダブルクリックしてディスク・イメージをマウントします。</p> <p>b. IBM Spectrum Protect インストール・パッケージ・アイコンをダブルクリックし、プロンプトに従ってインストールを完了します。</p>
コマンド・ライン	<p>a. IBM Spectrum Protect インストーラーがあるディレクトリーに移動します。</p> <p>b. 次のコマンドを使用してカスタム・インストール・パッケージをインストールします。</p> <pre>/usr/sbin/installer -pkg "/Volumes/IBM Spectrum Protect/ IBM Spectrum Protect.pkg" -target /</pre>

次のタスク

インストール・ディレクトリーに `dsm.sys.smp` というサンプルのクライアント・システム・オプション・ファイルが作成されます。このファイルをコピーし、変更することで、ご使用のノード用のクライアント・システム・オプション・ファイルを作成できます。クライアント・システム・オプション・ファイルのデフォルト名は `dsm.sys` です。

クライアントをインストールした後、その使用前に環境変数の設定が必要になる場合があります。環境変数の設定について詳しくは、[67 ページの『処理環境変数の設定』](#)を参照してください。

Mac OS X クライアントのアンインストール

IBM Spectrum Protect Mac OS X クライアントは、不要になった場合にアンインストールできます。

始める前に

IBM Spectrum Protect スケジューラーがスタートアップ項目として構成されている場合は、IBM Spectrum Protect Tools for Administrators 機能または `StopCad.sh` シェル・スクリプトを使用して、この手順を開始する前にそのスケジューラーを停止してアンインストールします。

このタスクについて

シェル・スクリプトを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールできます。このシェル・スクリプトの名前は `uninstall.sh` で、これはデフォルトのインストール・ディレクトリー (`/Library/Application Support/tivoli/tsm/client/ba/bin`) にあります。**sudo** コマンドを使用して、スクリプトを実行します。

また、スクリプトを使用する代わりに、以下の手順を実行することもできます。

手順

- 以下のフォルダーをごみ箱に移動します。
 - `/Applications/IBM Spectrum Protect`
 - `/Library/Application Support/tivoli`
- 以下のシンボリック・リンクを除去します。
 - `/usr/bin/dsmc`

- /usr/bin/dsmcad
- /usr/bin/dsmadm
- /usr/bin/dsmtrace
- /usr/bin/dsmagent
- /usr/lib/libxmlutil-6.2.0.dylib
- /usr/lib/libtsm620xerces-c1_6_0.dylib

3. オプション: ログ・ファイルとオプション・ファイルを削除します (保存しない場合)。アンインストール処理ではこれらがディスク上に残されるため、後で製品を再インストールした場合に設定が保持されています。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは以下のロケーションにログ・ファイルを作成している場合があります。

- a. /Library/Logs/tivoli
- b. ~/Library/Logs/tivoli

クライアントのオプション・ファイル (dsm.opt および dsm.sys) は通常、以下の場所に保存されます。

- a. /Library/Preferences/Tivoli Storage Manager
- b. ~/Library/Preferences/Tivoli Storage Manager

Oracle Solaris x86_64 クライアントのインストール

製品インストール・メディアから、IBM Spectrum Protect Oracle Solaris x86_64 バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすることができます。

始める前に

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.0 から、Oracle Solaris バックアップ/アーカイブ・クライアントは、Oracle Solaris x86_64 プラットフォームでのみ使用できます。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、Oracle Solaris SPARC プラットフォームでは使用できなくなりました。IBM Spectrum Protect API のみが Oracle Solaris SPARC で使用可能です。Solaris SPARC API をインストールする方法については、[51 ページ](#)の『Oracle SPARC API のインストール』を参照してください。

このタスクについて

以前のバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアントがインストールされている場合は、それを削除してから新規バージョンをインストールしてください。以前の Solaris クライアント・パッケージの削除については、[50 ページ](#)の『Oracle Solaris x86_64 クライアントのアンインストール』を参照してください。

IBM Spectrum Protect インストール管理ファイル (tsmadmin) がデフォルトの管理ファイル (/var/sadm/install/admin) の代わりに使用されるので、インストール中に、setuid、setgid、または superuser 権限について質問されることはありません。デフォルトの管理ファイルを使用する場合は、表示されているコマンドから -a ./tsmadmin オプションを削除して、インストール中に、setuid、setgid、または superuser 権限についての質問に対して Y を入力します。

表 21. インストール・パッケージ名および説明		
パッケージ	パッケージ名	パッケージの説明
IBM Global Security Kit (GSKit) 64 ビット	gsk8cry64.pkg および gsk8ssl64.pkg	IBM Spectrum Protect のクライアントとサーバー間の Secure Sockets Layer (SSL) 64 ビット・データ暗号化を可能にする IBM GSKit が含まれます。

表 21. インストール・パッケージ名および説明 (続き)

パッケージ	パッケージ名	パッケージの説明
IBM Spectrum Protect アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)	TIVsmCapi.pkg	IBM Spectrum Protect 64 ビット API 共用ライブラリーおよびサンプルが入っています。
バックアップ/アーカイブ・クライアント	TIVsmCba.pkg	<p>以下の 64 ビット・コンポーネントが入っています。</p> <ul style="list-style-type: none"> バックアップ/アーカイブ・クライアント (コマンド・ラインおよび GUI) 管理クライアント (コマンド・ライン) Web バックアップ/アーカイブ・クライアント <p>注:</p> <ol style="list-style-type: none"> TCP/IP および共用メモリーは通信方式としてサポートされます。 Web クライアントは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージの一部であり、Web クライアントを使用しないとインストールできません。

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- [パスポート・アドバンテージ](#)または [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

パッケージは示されている順序でインストールしてください。パッケージによっては、他のパッケージの存在が前提となるものがあります。例えば、GSKit は API の前提条件であり、API はバックアップ/アーカイブ・クライアント・パッケージの前提条件です。

手順

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールに使用するボリュームをマウントします。
3. パッケージが格納されているディレクトリに移動する。
4. IBM GSKit。これは IBM Spectrum Protect API パッケージの前提条件です。以下のコマンドを使用して GSKit をインストールします。

```
pkgadd -n -a ./tsmadmin -d ./gsk8cry64.pkg gsk8cry64
pkgadd -n -a ./tsmadmin -d ./gsk8ssl64.pkg gsk8ssl64
```

注: Solaris 10 では、これらのコマンドにより、64 ビット GSKit がグローバル・ゾーンと実行中のすべての非グローバル・ゾーンにインストールされます。クライアントを疎ルートの非グローバル・ゾーン

のみにインストールするには、最初に GSKit をグローバル・ゾーンにインストールする必要があります。Solaris 11 では、パッケージはこれらのコマンドが実行されるゾーンにのみインストールされます。

5. 以下のコマンドを使用して、IBM Spectrum Protect API をインストールします。

```
pkgadd -n -a ./tsmadmin -d ./TIVsmCapi.pkg TIVsmCapi
```

注：Solaris 10 では、このコマンドにより、IBM Spectrum Protect 64 ビット API がグローバル・ゾーンと実行中のすべての非グローバル・ゾーンにインストールされます。これをグローバル・ゾーンのみにインストールする場合は、**pkgadd** コマンドの **-G** パラメーターを使用します。Solaris 11 では、API はこれらのコマンドが実行されるゾーンにのみインストールされます。

6. 次のコマンドを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールします。

```
pkgadd -n -a ./tsmadmin -d ./TIVsmCba.pkg TIVsmCba
```

注：Solaris 10 では、このコマンドによりバックアップ/アーカイブ・クライアント・コンポーネントがグローバル・ゾーンと実行中のすべての非グローバル・ゾーンにインストールされます。これらをグローバル・ゾーンのみにインストールする場合は、**pkgadd** コマンドの **-G** パラメーターを使用します。Solaris 11 では、クライアント・コンポーネントはこのコマンドが実行されるゾーンにのみインストールする必要があります。

タスクの結果

重要：Solaris 10 の疎ルートの非グローバル・ゾーンの場合、/usr ファイル・システムは通常はグローバル・ゾーンから読み取り専用 (LOFS) としてマウントされ、次の条件が適用されます。

- ・クライアントがグローバル・ゾーンにインストールされていない場合は、インストールの終了時に警告メッセージが表示されます。このメッセージでは、警告メッセージの一部に示されている必要なリンクをグローバル管理者が作成するように要求されます。
- ・クライアントが既にグローバル・ゾーンにインストールされている場合は、これらのリンクを作成する必要はありません。これらのリンクは既に存在しており、正しい実行可能ファイルとライブラリーを指しています。

関連概念

[55 ページの『IBM Spectrum Protect クライアントの構成』](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

Oracle Solaris x86_64 クライアントのアンインストール

IBM Spectrum Protect Oracle Solaris x86_64 クライアントに関連するすべてのパッケージ (コマンド・ライン、GUI、Web GUI、管理クライアント・コンポーネントなど) をアンインストールすることができます。

このタスクについて

重要：必ず指定されている順序でパッケージをアンインストールしてください。

IBM Spectrum Protect インストール管理ファイル (tsmadmin) がデフォルトの管理ファイル (/var/sadm/install/admin) の代わりに使用されるので、インストール中に **setuid**、**setgid**、または **superuser** 権限について質問するプロンプトが表示されることはありません。デフォルトの管理ファイルを使用する場合は、以下のコマンドから **-a ./tsmadmin** オプションを削除し、インストール時に、**setuid**、**setgid**、または **superuser** 権限についての質問に対して **y** を入力します。

手順

1. 以下のコマンドを入力して、バックアップ/アーカイブ・クライアントをアンインストールします。

```
pkgrm -n -a ./tsmadmin TIVsmCba
```


このコマンドにより、バックアップ/アーカイブ・クライアントのすべてのコンポーネント (コマンド・ライン、GUI、Web クライアント、および管理クライアント) がアンインストールされます。このパッケージのコンポーネント (コマンド・ライン・クライアントなど) を個別にアンインストールすることはできません。

注: 1 つ以上の言語メッセージ・パッケージがバージョン 7.1.2 以前のクライアントにインストールされている場合、それらを除去してから API パッケージを除去してください。root ユーザーとして以下のコマンドを入力します。

```
pkgrm -n -a ./tsmadmin TIVsmClCs TIVsmClDe TIVsmClEs TIVsmClFr Y  
TIVsmClHu TIVsmClIt TIVsmClJa TIVsmClKo Y  
TIVsmClPl TIVsmClPt TIVsmClRu TIVsmClSc TIVsmClTc
```

2. 以下のコマンドを入力して、IBM Spectrum Protect API をアンインストールします。

```
pkgrm -n -a ./tsmadmin TIVsmCapi
```

バックアップ/アーカイブ・クライアントがインストールされている場合、API を除去することはできません。バックアップ/アーカイブ・クライアントを先に除去する必要があります。

3. 以下のコマンドを入力して、GSKit をアンインストールします。

```
pkgrm -n -a ./tsmadmin gsk8ssl64  
pkgrm -n -a ./tsmadmin gsk8cry64
```

Oracle SPARC API のインストール

製品インストール・メディアから、IBM Spectrum Protect Oracle Solaris SPARC API をインストールすることができます。

このタスクについて

以前のバージョンの API がインストールされている場合は、それを削除してから新規バージョンをインストールしてください。以前の Solaris API パッケージの削除については、[52 ページの『Oracle Solaris SPARC API のアンインストール』](#)を参照してください。

IBM Spectrum Protect インストール管理ファイル (tsmadmin) がデフォルトの管理ファイル (/var/sadm/install/admin) の代わりに使用されるので、インストール中に、setuid、setgid、または superuser 権限について質問されることはありません。デフォルトの管理ファイルを使用する場合は、表示されているコマンドから -a ./tsmadmin オプションを削除して、インストール中に、setuid、setgid、または superuser 権限についての質問に対して Y を入力します。

表 22. インストール・パッケージ名および説明		
パッケージ	パッケージ名	パッケージの説明
IBM Global Security Kit (GSKit) 64 ビット	gsk8cry64.pkg および gsk8ssl64.pkg	IBM Spectrum Protect の API とサーバー間の Secure Sockets Layer (SSL) 64 ビット・データ暗号化を可能にする IBM GSKit が含まれます。
IBM Spectrum Protect アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)	TIVsmCapi.pkg	IBM Spectrum Protect 64 ビット API 共用ライブラリーおよびサンプルが入っています。

このインストール手順は、新規の配布または更新をダウンロードしたインストール・メディアからインストールする場合に使用できます。クライアントのインストールに使用するためにダウンロードしたファイルは、圧縮されている場合があります。パッケージのファイル・フォーマットに応じて、ファイルをディスクにコピーまたは解凍し、これらの手順を使用してコンポーネントをインストールしてください。

以下のいずれかの Web サイトから、適切なパッケージ・ファイルをダウンロードすることができます。

- パスポート・アドバンテージまたは [Fix Central](#) からクライアント・パッケージをダウンロードします。
- 最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM サポート・ポータル](#)にアクセスしてください。

パッケージは示されている順序でインストールしてください。

手順

1. root ユーザーとしてログインします。
2. インストールに使用するボリュームをマウントします。
3. パッケージが格納されているディレクトリーに移動する。
4. IBM GSKit。これは IBM Spectrum Protect API パッケージの前提条件です。以下のコマンドを使用して GSKit をインストールします。

```
pkgadd -n -a ./tsmadmin -d ./gsk8cry64.pkg gsk8cry64
pkgadd -n -a ./tsmadmin -d ./gsk8ssl64.pkg gsk8ssl64
```

注：Solaris 10 では、これらのコマンドにより、64 ビット GSKit がグローバル・ゾーンと実行中のすべての非グローバル・ゾーンにインストールされます。API を疎ルートの非グローバル・ゾーンのみインストールするには、最初に GSKit をグローバル・ゾーンにインストールする必要があります。Solaris 11 では、パッケージはこれらのコマンドが実行されるゾーンにのみインストールされます。

5. 以下のコマンドを使用して、IBM Spectrum Protect API をインストールします。

```
pkgadd -n -a ./tsmadmin -d ./TIVsmCapi.pkg TIVsmCapi
```

注：Solaris 10 では、このコマンドにより、IBM Spectrum Protect 64 ビット API がグローバル・ゾーンと実行中のすべての非グローバル・ゾーンにインストールされます。これをグローバル・ゾーンのみインストールする場合は、**pkgadd** コマンドの **-G** パラメーターを使用します。Solaris 11 では、API はこれらのコマンドが実行されるゾーンにのみインストールされます。

タスクの結果

重要：Solaris 10 の疎ルートの非グローバル・ゾーンの場合、**/usr** ファイル・システムは通常はグローバル・ゾーンから読み取り専用 (LOFS) としてマウントされ、次の条件が適用されます。

- API がグローバル・ゾーンにインストールされていない場合は、インストールの終了時に警告メッセージが表示されます。このメッセージでは、警告メッセージの一部に示されている必要なリンクをグローバル管理者が作成するように要求されます。
- API が既にグローバル・ゾーンにインストールされている場合は、これらのリンクを作成する必要はありません。これらのリンクは既に存在しており、正しい実行可能ファイルとライブラリーを指しています。

関連概念

55 ページの『[IBM Spectrum Protect クライアントの構成](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

Oracle Solaris SPARC API のアンインストール

IBM Spectrum Protect Oracle Solaris SPARC API に関連するすべてのパッケージをアンインストールすることができます。

このタスクについて

重要：必ず指定されている順序でパッケージをアンインストールしてください。

IBM Spectrum Protect インストール管理ファイル (tsmadmin) がデフォルトの管理ファイル (/var/sadm/install/admin) の代わりに使用されるので、インストール中に **setuid**、**setgid**、または **superuser** 権限について質問するプロンプトが表示されることはありません。デフォルトの管理ファイル

を使用する場合は、以下のコマンドから `-a ./tsmadmin` オプションを削除し、インストール時に、`setuid`、`setgid`、または `superuser` 権限についての質問に対して `y` を入力します。

手順

1. 以下のコマンドを入力して、IBM Spectrum Protect API をアンインストールします。

```
pkgrm -n -a ./tsmadmin TIVsmCapi
```

2. 以下のコマンドを入力して、GSKit をアンインストールします。

```
pkgrm -n -a ./tsmadmin gsk8ssl64  
pkgrm -n -a ./tsmadmin gsk8cry64
```

ソフトウェア更新

ソフトウェア更新が IBM によってダウンロード用に定期的に提供される場合があります。

最新の情報、更新、および保守フィックスについては、[IBM Support Portal for IBM Spectrum Protect](#) を参照してください。

診断情報を収集するためのクライアント管理サービスのインストール

バックアップ/アーカイブ・クライアントに関する診断情報を収集するために、IBM Spectrum Protect クライアント管理サービスをインストールできます。クライアント管理サービスは、基本モニター機能を提供する IBM Spectrum Protect Operations Center が情報を使用できるようにします。

このタスクについて

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、同じコンピューターにクライアント管理サービスをインストールして、IBM Spectrum Protect サーバー 管理者が Operations Center で診断情報を表示できるようにします。

クライアント管理サービスは、Linux バックアップ/アーカイブ・クライアント・システムのインストール済み環境で使用できます。

クライアント管理サービスのインストール手順および詳細については、[での診断情報の収集](#)を参照してください。

第 2 章 IBM Spectrum Protect クライアントの構成

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

ヒント: バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、IBM License Metric Tool は、IBM Spectrum Protect サーバーに接続され、データ操作に使用されているクライアントのみをカウントします。その後は、そのクライアントは常にライセンスの計算に含まれます。サーバーに接続されておらず、データ操作に使用されていないクライアントは、ライセンスの計算から除外されます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントをアップグレードしている場合は、スケジューラー、Web クライアントなどの構成設定を再構成する必要はありません。デフォルトのインストール・ディレクトリまたは DSM_CONFIG および DSM_DIR 環境変数が指すディレクトリまたはファイルで、以前のクライアント・インストールが使用していた dsm.opt および dsm.sys ファイルが使用可能な場合、クライアントはこれらのファイルにアクセスして構成情報を取得します。

構成タスクには、必須のものとオプションのものがあります。以下の構成タスクは必須です。

- [61 ページの『クライアント・システム・オプション・ファイルの作成と変更』](#)
- [123 ページの『サーバーへのワークステーションの登録』](#)

以下の構成タスクはオプションです。

- [63 ページの『デフォルトのクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの作成』](#)
- [65 ページの『カスタマイズされたクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの作成』](#)
- [66 ページの『環境変数』](#)
- [70 ページの『AIX、Linux、Mac、および Solaris システムでの Web クライアントの構成』](#)
- [71 ページの『スケジューラーの構成』](#)
- [125 ページの『include-exclude リストの作成』](#)
- [VMware 仮想マシンの並列バックアップの構成。224 ページの『仮想マシンの並列バックアップ』を参照してください。](#)

UNIX および Linux クライアントの root ユーザーおよび許可ユーザーのタスク

許可ユーザーとは、保管されているパスワード (TSM.sth ファイル) に対する読み取り権限および書き込み権限を持つ root 以外のユーザー、またはパスワードを知っていて、そのパスワードを対話式に入力する root 以外のユーザーです。許可ユーザーは、passworddir オプションを使用して、パスワード・ファイルのコピーを保存するディレクトリを定義します。

55 ページの表 23 では、root ユーザー、許可ユーザー、およびその他のユーザーが実行できるタスク、および実行できないタスクを示します。

表 23. root ユーザーおよび許可ユーザーのタスク		
タスク	root ユーザー	許可ユーザー
資格情報の認証のための LDAP サーバーを使用した IBM Spectrum Protect サーバーへのログオン。	Yes	Yes
新規ノードの IBM Spectrum Protect サーバーへの登録 (サーバー上で登録がオープンに設定されている場合)。	Yes	Yes

表 23. root ユーザーおよび許可ユーザーのタスク (続き)		
タスク	root ユーザー	許可ユーザー
クライアント・ワークステーション用の IBM Spectrum Protect パスワードの設定または再作成	Yes	Yes
バックアップ	<p>Yes</p> <p>注: IBM Spectrum Protect 管理者は、Register Node または Update Node コマンドのどちらかでオプションを指定して、ノードのデータのバックアップができるユーザーを指定することができます。BACKUPINITiation を root に設定すると、バックアップが制限され、ノードのファイルをバックアップできるのは root ユーザーまたは許可ユーザーのみになります。BACKUPINITiation を all に設定すると、すべてのユーザーがノードのデータをバックアップできるようになります。これらのコマンドおよびオプションについては、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。</p>	読み取り許可を所有している場合は、所有権に関わりなく可能
リストア	可能。新規の場所または同じ場所にリストアする場合、ファイル許可および所有権は保持されます	可能。ただし、ファイルが読み取り専用許可しか所有していない場合は、オペレーティング・システムが同じ場所への書き込みを阻止します。同じ場所にリストアする場合、ファイル許可および所有権は保持されます。別の場所にリストアする場合、リストアされたファイルの許可は保持されますが、所有権は現行ユーザーに変更されます。
アーカイブ	Yes	読み取り許可を所有している場合は、所有権に関わりなく可能
リトリート	可能。新しい場所または同じ場所にリトリートする場合、ファイルのアクセス権と所有権は保持されます。	可能。ただし、ファイルが読み取り専用許可しか所有していない場合は、オペレーティング・システムが同じ場所への書き込みを阻止します。リトリートされたすべてのオブジェクトの所有権は現行ユーザーに変更されます。
クライアント・スケジューラー	Yes	<p>クライアント・アクセプター・デーモンを使用していない場合は可能。</p> <p>クライアント・アクセプター・デーモンを管理するには、root でなければなりません。root 以外の許可ユーザーはスケジューラー (dsmc sched) を使用できます。</p>

表 23. root ユーザーおよび許可ユーザーのタスク (続き)		
タスク	root ユーザー	許可ユーザー
IBM Spectrum Protect サーバー上のファイルへのユーザー・アクセス権の付与	Yes	Yes
IBM Spectrum Protect サーバーのファイル・スペースの削除	IBM Spectrum Protect サーバー管理者によってノードにバックアップまたはアーカイブの削除権限が付与されている場合は可能。	IBM Spectrum Protect サーバー管理者によってノードにバックアップまたはアーカイブの削除権限が付与されている場合は可能。

Mac OS X システムで、システム管理者は、システムの管理を許可されたユーザーです。アカウントのタイプは、「システム・プリファレンス」>「アカウント」ツールを使用して確認できます。システム管理者のアカウント・タイプは **Admin** になります。

システム管理者は、非管理者が自分のデータを管理できるように、バックアップ/アーカイブ・クライアントを構成する責任があります。非管理者 (または非許可ユーザー) は、以下の基準を満たします。

- 0 のユーザー ID を持ちません。root ユーザーではないためです。
- ユーザー・アカウントは、システム管理者として構成されていません。

タスクを完了するために追加の権限が必要になる場合は、許可アプリケーションを実行して、バックアップ/アーカイブ・クライアントを開始する必要があります。これにより、クライアントはタスクを完了させるために、十分なシステム特権を持って実行できるようになります。使用する許可ツールを以下の表にリストします。

表 24. Mac OS X 許可ツールおよび関連する IBM Spectrum Protect アプリケーション

Mac OS X 許可ツール	関連する IBM Spectrum Protect アプリケーション
IBM Spectrum Protect For Administrators	IBM Spectrum Protect StartCad.sh StopCad.sh
sudo	dsmc

非 root ユーザーによる自分のデータの管理の有効化

非 root ユーザーがバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用して各自が所有するデータを管理できるようにするために、システム管理者は、非 root ユーザーに対して初めて許可ユーザーをセットアップする際に、通常の構成ステップに加えていくつかのステップを実行する必要があります。

通常の構成ステップに加えて、システム管理者は、以下のステップを実行して非 root ユーザーに対して許可ユーザーをセットアップする必要があります。

1. 非 root ユーザーについて、クライアント・システム・オプション・ファイル `dsm.sys` にスタンザを追加します。
2. このスタンザで、`passworddir` オプションを使用して非 root ユーザーが所有するディレクトリーを指すようにします。これにより、非 root ユーザーは、この `passworddir` ディレクトリー内にファイルを作成できるようになります。
3. 非 root ユーザーに固有の TSM ノード名を割り当てます。
4. 非 root ユーザーが所有していない以前の TSM.PWD ファイルが `passworddir` ディレクトリーに存在していないことを確認します。そのようなファイルが存在する場合は、このファイルの所有権を非 root ユーザーに変更するか、ファイルを削除します。

5. 非 root ユーザーが所有していない TSM.KDB、TSM.IDX、あるいは TSM.sth ファイルが passworddir ディレクトリー内に存在していないことを確認します。これらのファイルが存在する場合は削除します。

システム管理者が上記のステップを完了した後、非 root ユーザーが以下のステップを実行する必要があります。

1. クライアント・システム・オプション・ファイル dsm.opt を作成し、servername オプションを使用してスタンザ名を指定します。
2. DSM_CONFIG 環境変数によって dsm.opt ファイルをデフォルトで読み取れることを確認します。確認するには、シェル・コマンド・ウィンドウから **export DSM_CONFIG=<dsm.opt>** コマンドを発行します。
3. **dsmc q f** コマンドを実行して、passworddir オプションで指されたパスワード・ファイルを使用します。パスワード・ファイルが存在しない場合、ユーザーに対してプロンプトが表示されます。

バックアップ/アーカイブ・クライアント・ユーザーに対する暗号化の使用可能化

バックアップおよびアーカイブ操作中にデータを暗号化するようにバックアップ/アーカイブ・クライアントを構成しており、暗号鍵パスワードを保管するためのオプション (**encryptkey save**) を指定している (デフォルト設定) 場合は、root ユーザーおよび IBM Spectrum Protect 許可ユーザーのみが、保管されたパスワードを使用してファイルの暗号化または暗号化解除を行うことができます。許可ユーザーとは、保管されているパスワード TSM.sth ファイル) に対する読み取り権限および書き込み権限を持つ root 以外のユーザー、またはパスワードを知っていて、そのパスワードを対話式に入力する root 以外のユーザーです。

非 root ユーザーによる共有データの管理の有効化

場合により、共有ノードへのデータのバックアップと共有ノードからのデータのリストアを非 root ユーザーのグループによって実行できるようにする必要があります。この操作を行うには、固有のノード名とパスワード・ディレクトリーを指定して dsm.sys ファイル内にスタンザを作成します。このノードを使用できるユーザーを制御するには、ユーザーを共有の UNIX グループに追加し、そのグループに対して保存済みパスワード・ファイルへの権限を付与します。

dsm.sys ファイルのスタンザの例

次のスタンザ例では、非 root ユーザーのグループの中で共有されるノード名が指定されています。このノード名は、他のノード名 (やはり複数の異なるユーザーによってシステム上で使用できる名前) とは異なります。例えば、root ユーザーが使用する別のスタンザが存在する場合があります。また、passworddir オプションによって指定されるディレクトリーは、dsm.sys ファイル内の複数の異なるユーザー向けの他のスタンザによって使用されるパスワード・ディレクトリーと異なっている必要があります。

異なるスタンザが異なる IBM Spectrum Protect サーバーを参照できます。同じ非 root ユーザー・グループがそのすべてのサーバーにアクセスする必要がある場合、各スタンザが同じパスワード・ディレクトリーを参照できます。

root ユーザーとして次の例のようなスタンザを作成します。

```
servername spserver_dbgrp
tcps tapsrv14
tcpp 1500
nodename server1_dbgrp
passworddir /etc/spdbgrp
passworda generate
```

AIX の場合は、次の passworddir オプションを使用します。

```
passworddir /etc/security/spdbgrp
```

root ユーザーとしてスタンザを作成したら、**query session** コマンドを実行して、新規パスワード・ディレクトリーおよび初回に保管されるパスワードを作成します。例えば、サーバー名が **tapsrv14** であれば、次のコマンドを発行します。

```
dsmc query session -server=tapsrv14_dbgrp
```

新規作成パスワード・ディレクトリーへの権限のグループに対する割り当て

ユーザー・グループが共通のパスワード・ファイルを共有できるようにするには、グループを作成します。ユーザーはこの新規グループ (2 次グループ) に割り当てられ、保管済みパスワードの権限が変更されます。この変更により、その新規グループは保管済みパスワードの読み取りと変更ができるようになりますが、そのグループの外部のユーザーにはアクセス権限は許可されません。ご使用のオペレーティング・システムの例を確認してください。

AIX の例

この例では、グループ **dbadm** は既存のデータベース・グループ (1 次グループ) を表します。 **spdbgrp** という名前の 2 次グループは、IBM Spectrum Protect パスワード・ファイルへのアクセスを制御するために作成されます。

```
mkggroup spdbgrp
usermod -g dbadm -G spdbgrp user1
usermod -g dbadm -G spdbgrp user2
```

パスワード・ファイルへの権限をグループに付与するには、以下のコマンドを実行します。

```
chmod 770 /etc/security/spdbgrp
chmod -R 660 /etc/security/spdbgrp/*
chmod 770 /etc/security/spdbgrp/Nodes
chgrp -R spdbgrp /etc/security/spdbgrp
```

Linux の例

この例では、グループ **dbadm** は既存のデータベース・グループ (1 次グループ) を表します。 **spdbgrp** という名前の 2 次グループは、IBM Spectrum Protect パスワード・ファイルへのアクセスを制御するために作成されます。

```
mkggroup spdbgrp
usermod user1 -g dbadm -G spdbgrp
usermod user2 -g dbadm -G spdbgrp
```

パスワード・ファイルへの権限をグループに付与するには、以下のコマンドを実行します。

```
chmod 770 /etc/spdbgrp
chmod -R 660 /etc/spdbgrp/*
chmod 770 /etc/spdbgrp/Nodes
chgrp -R spdbgrp /etc/spdbgrp
```

クライアント・オプション・ファイルの概要

クライアント・オプションおよび値をクライアント・オプション・ファイルで設定 (指定) することができます。クライアント・オプションは、サーバーのクライアント・オプション・セットでも設定できます。サーバーのクライアント・オプション・セットで設定されたクライアント・オプションは、クライアント・オプション・ファイルで設定されたクライアント・オプションをオーバーライドします。

AIX、Linux、Mac、および Solaris システムでは、デフォルトのクライアント・オプション・ファイルの名前は **dsm.opt** です。これらのオペレーティング・システムでは、以下の 2 つのファイルにバックアップ/アーカイブ・クライアント・オプションが含まれています。

- クライアント・ユーザー・オプション・ファイル。このファイルのデフォルト名は、**dsm.opt** です。このファイルは多くの場合、簡略化してクライアント・オプション・ファイルと呼ばれます。
- クライアント・システム・オプション・ファイル。このファイルのデフォルト名は、**dsm.sys** です。クライアント・システム・オプション・ファイルは、編集可能なファイルで、サーバーと通信方式を識別

し、バックアップ、アーカイブ、階層ストレージ管理、およびスケジューリングの構成を提供します。
このファイルは多くの場合、簡略化してシステム・オプション・ファイルと呼ばれます。

クライアント・オプション・ファイルは複数作成できます。クライアント・オプション・ファイルを `dsm.opt` という名前にしない場合、または `dsm.opt` をデフォルト・ディレクトリー内に配置しない場合は、OPTFILE クライアント・オプションを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントの開始時にどのファイルからオプションおよびパラメーターを読み取るのかをバックアップ/アーカイブ・クライアントに通知する必要があります。

クライアント・システム・オプション・ファイルの名前を変更することはできません。これは、`dsm.sys` という名前であればなりません。

テキスト・エディター・アプリケーションを使用して、クライアント・オプション・ファイルを直接編集することができます。また、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用して、オプションを設定することもできます。GUI で、「編集」>「プリファレンス」を選択し、プリファレンス・エディターを使用してクライアント・オプションを設定します。プリファレンス・エディターで設定したオプションは、クライアント・オプション・ファイルに保管されます。一部のクライアント・オプションは、プリファレンス・エディターを使用して設定することはできません。

制約事項: Mac OS X の場合、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルおよびクライアント・システム・オプション・ファイルは、Unicode (UTF-8) としてエンコードされたプレーン・テキスト・ファイルにする必要があります。TextEdit は、デフォルトでは、ファイルをプレーン・テキストとして保存しません。「フォーマット」>「プレーン・テキストの作成」を選択して、ファイルをプレーン・テキスト・ファイルとして保存します。「プレーン・テキストのエンコード方式」ドロップダウン・リストで、「Unicode (UTF-8)」を選択します。ファイルを保存する際に、.txt 拡張子を追加しないでください。

query options コマンドを使用して、ご使用のオプションおよびその現在の設定値のすべてまたは一部を表示できます。このコマンドは、複数のオプションから成るサブセットを指定する引数を受け入れます。デフォルトは、すべてのオプションを表示します。

`verbose` や `quiet` など、一部のオプションはオプション名のみで構成されます。オプション名は、全体を入力することも省略形を入力することもできます。例えば、`verbose` オプションは、以下のいずれの方法でも指定できます。

```
verbose
ve
```

オプション・ファイルにオプションを追加する場合は、以下のルールに従ってください。

- オプション・ファイルにコメントを追加することにより、オプション設定に注釈を付けることができます。各コメントは、行の先頭文字としてアスタリスク (*) を指定して開始します。
- コメントを含む行にオプションは指定しないでください。
- 任意で、ファイル内に指定したオプションおよび値を見やすくするために、スペースやタブを使用してオプションを字下げすることができます。
- 以下の例に示すように、各オプションは別個の行に入力し、特定のオプションに対するパラメーターはすべて同じ行に入力します。

```
domain /home /mfg /planning /mrkting /mgmt
domain / /Volumes/fs2 /Volumes/fs2 /Volumes/fs3 /Volumes/fs4
```

- このファイルにオプションを設定するには、オプション名と 1 つ以上のブランク・スペースの後にオプション値を入力します。
- パラメーターの間には 1 つ以上のブランク・スペースを入力します。
- クライアント・オプション・ファイル内のファイル名およびパス名の長さは、以下の制限を超えてはなりません。
 - AIX、Mac OS、および Solaris では、ファイル名の最大長は 255 バイトです。ファイル名とパス名の最大結合長は 1024 文字です。1 文字の Unicode 表記が複数のバイトを占める場合があるため、ファイル名に含まれる最大文字数は変化する可能性があります。

- Linux の場合は、ファイル名の最大長は 255 バイトです。ファイル名とパス名を結合した最大長は 4096 バイトです。これは、オペレーティング・システムがサポートしている **PATH_MAX** と一致します。1 文字の Unicode 表記が複数のバイトを占める場合があるため、パス名とファイル名を構成する最大文字数は変化する可能性があります。この制限はパス・コンポーネントとファイル・コンポーネント内のバイト数であり、これが同じ文字数に対応するかどうかはわかりません。
- アーカイブ操作またはリトリート操作の場合、パス名とファイル名 (結合したもの) に指定できる最大長は 1024 バイトです。

セッションがアクティブな間にクライアント・ユーザー・オプション・ファイルを更新した場合は、セッションを再始動して、変更を適用する必要があります。

関連資料

494 ページの『Optfile』

optfile オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・セッションの開始時に使用するクライアント・オプション・ファイルを指定します。

719 ページの『Query Options』

query options コマンドは、コマンド・ライン・クライアントに関連するオプションとその現在の設定をすべてまたは部分的に表示する場合に使用します。

クライアント・システム・オプション・ファイルの作成と変更

クライアント・システム・オプション・ファイルは編集可能なファイルで、サーバーと通信方式を識別し、バックアップ、アーカイブ、階層ストレージ管理、およびスケジューリングの構成を提供します。

このタスクについて

クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) の作成と変更は、必須タスクです。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI の構成ウィザードを使用して、基本構成ファイルを作成し、IBM Spectrum Protect サーバーへの接続をテストできます。GUI の開始時に構成ファイルが見つからないと、構成ウィザードが自動的に開始されます。構成ファイルを作成した後に構成ファイルを変更するには、GUI の「ツール」メニューから「**セットアップ・ウィザード**」をクリックします。

構成ウィザードを使用しない場合は、クライアント・オプション・ファイルを手動で作成および変更することができます。

Mac OS X の場合、次のいずれかのロケーションにある dsm.sys に dsm.sys.smp ファイルをコピーしてください。デフォルト・ロケーションは、検索される順序でリストされています。

1. DSM_DIR 環境変数で識別されるロケーション
2. /Library/Application Support/tivoli/tsm/client/ba/bin/
3. /Library/Preferences/Tivoli Storage Manager/

クライアントは、最初に検出されたオプション・ファイルを使用します。このファイルの名前は dsm.sys にする必要があります。dsm.sys ファイルは、システム管理者が管理します。

Oracle Solaris システムの場合、dsm.sys.smp を dsm.sys にコピーする必要はありません。クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt および dsm.sys) は、まだ存在していなければ自動的に /usr/bin に作成され、クライアントをインストールするときにクライアントのインストール・ディレクトリーにリンクされます。クライアントをアンインストールしてもファイルは削除されないため、クライアントをアップグレードまたは再インストールする場合に、ご使用の設定を再利用することができます。

その他のプラットフォームの場合は、root ユーザーとして dsm.sys.smp ファイルを dsm.sys にコピーし、そのファイルを編集して設定を構成します。クライアントは、**DSM_DIR** 環境変数 (設定されていてエクスポートされている場合) で指定されたディレクトリー内で dsm.sys を探し、次にインストール・ディレクトリー内を探します。

重要: 再インストールをして、既存オプション dsm.sys ファイルを変更したくない場合は、dsm.sys.smp ファイルを dsm.sys にコピーしないでください。

dsm.sys ファイルを使用して、サービスのために接続する 1 台以上のサーバーを指定し、各サーバーの通信オプションを指定します。このファイルには、許可オプション、バックアップとアーカイブの処理オプション、およびスケジューリング・オプションを含むことができます。

dsm.sys を編集して、接続するサーバー (複数可) を組み込みます。以下は、ユーザーに接続させるサーバーの必須指定のオプションが含まれたクライアント・システム・オプション・ファイル・スタンザの例を示しています。1 台を超えるサーバーについて、オプションを指定できます。

Servername	server_a
COMMMethod	TCPip
TCPPort	1500
TCPServeraddress	node.domain.company.com

重要: Web クライアントを使用する場合は、passwordaccess=**generate** オプションも指定し、クライアントでログインしてパスワードを保存する必要があります。

デフォルトでは、クライアント・ノードは dsm.sys ファイル内で識別された最初のサーバーに接続します。自分のクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に servername オプションを入力するか、またはコマンドを使用してそのオプションを入力すると、接続先として別のサーバーを指定できます。

デフォルト・サーバーとマイグレーション・サーバーを dsm.sys ファイルに指定することもできます (ワークステーションに HSM クライアントがインストールされている場合)。

dsm.sys ファイルには、次のオプション・カテゴリーを含めることができます。

- 通信オプション
- バックアップおよびアーカイブ処理のオプション
- リストアおよびリトリブ処理のオプション
- スケジュール・オプション
- 権限オプション
- エラー処理オプション
- トランザクション処理オプション
- Web クライアント・オプション

dsm.sys ファイルは、次のいずれかの方法で変更できます。

- クライアント Java GUI のメイン・ウィンドウから、「編集」 > 「クライアント・プリファレンス」を選択します。
- 好みのテキスト・エディターを使用します。

重要: Mac OS X の場合、システム・オプション・ファイルは Unicode (UTF-8) としてエンコードされたプレーン・テキスト・ファイルにする必要があります。TextEdit は、デフォルトでは、ファイルをプレーン・テキストとして保存しません。「フォーマット」 > 「プレーン・テキストの作成」を選択して、ユーザー・オプション・ファイルをプレーン・テキスト・ファイルとして保存します。「プレーン・テキストのエンコード方式」を Unicode (UTF-8) に設定します。拡張子の .txt を追加しないでください。

クライアントが実行中に dsm.sys ファイルを更新した場合は、プロセスを再始動して変更内容を適用する必要があります。

関連概念

[59 ページの『クライアント・オプション・ファイルの概要』](#)

クライアント・オプションおよび値をクライアント・オプション・ファイルで設定 (指定) することができます。クライアント・オプションは、サーバーのクライアント・オプション・セットでも設定できます。サーバーのクライアント・オプション・セットで設定されたクライアント・オプションは、クライアント・オプション・ファイルで設定されたクライアント・オプションをオーバーライドします。

[309 ページの『処理オプション』](#)

クライアントの処理オプションのデフォルトを使用することも、特定のニーズに合わせて処理オプションを調整することもできます。処理オプションの概要を読み、オプションの解説を参照して各オプションの詳細を確認してください。

関連資料

378 ページの『Defaultserver』

dsm.sys ファイルで複数のサーバーが定義されている場合、バックアップ・アーカイブ・サービスのために接続する IBM Spectrum Protect サーバーの名前を指定するには、defaultserver オプションを使用します。

497 ページの『Passwordaccess』

passwordaccess オプションは、パスワードを自動的に生成したいか、あるいはユーザー・プロンプトに応じて設定したいかを指定します。

デフォルトのクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの作成

クライアント・ユーザー・オプション・ファイルは、バックアップ/アーカイブ・クライアント処理オプションを保管します。バックアップ/アーカイブ・インストール・プログラムは、バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール時に、サンプル・クライアント・ユーザー・オプション・ファイルをディスク上に配置します。システム管理者または root ユーザーは、このファイルを編集して、デフォルトのクライアント・オプション・ファイルを作成できます。その際に、バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用するワークステーション・ユーザーがこのファイルにアクセスできるようにします。個々のユーザーは、ユーザー独自のクライアント・オプション・ファイルを作成して使用することができます。

始める前に

この手順を実行するには、root ユーザーまたはシステム管理者でなければなりません。

このタスクについて

デフォルトのクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの作成は、オプションの作業です。

デフォルトでは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルは dsm.opt という名前であり、このファイルには以下のタイプのクライアント・オプションが含まれます。

- バックアップおよびアーカイブ処理のオプション
- リストアおよびリトリブ処理のオプション
- スケジュール・オプション
- 形式オプション
- コマンド処理オプション
- 権限オプション
- エラー処理オプション
- トランザクション処理オプション
- Web クライアント・オプション

Mac クライアントの場合、クライアント・インストール・プログラムは、dsm.opt.smp という名前のサンプル・クライアント・ユーザー・オプション・ファイルを /Libraries/Preferences/Tivoli Storage Manager/ に配置します。このディレクトリーは、インストール・プログラムがサンプル・クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys.smp) を配置するディレクトリーと同じです。

AIX および Linux クライアントの場合、クライアント・インストール・プログラムは、dsm.opt.smp という名前のサンプル・クライアント・ユーザー・オプション・ファイルをデフォルトのクライアント・インストール・ディレクトリーに配置します。このディレクトリーは、インストール・プログラムがサンプル・クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys.smp) を配置するディレクトリーと同じです。

Oracle Solaris クライアントの場合、インストール・プログラムは、dsm.opt という名前の初期クライアント・ユーザー・オプション・ファイルを /usr/bin ディレクトリーに配置します。このディレクトリー

は、インストール・プログラムがサンプル・クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) を配置するディレクトリーと同じです。

すべてのクライアント・オペレーティング・システムについて、サンプル・クライアント・ユーザー・オプション・ファイルを編集して、デフォルト名 dsm.opt で保存する手順を以下に説明します。別の名前またはパスでファイルを保存することもできますが、ファイル名を変更したり、ファイルをデフォルトのインストール・ディレクトリーから移動したりする場合は、以下のいずれかの方法を使用して、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルのパスおよび名前を指定する必要があります。

- DSM_CONFIG 環境変数を設定して、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) のパスおよびファイル名を指定します。DSM_DIR 環境変数を設定して、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) のパスおよびファイル名を指定します。環境変数について詳しくは、[67 ページの『処理環境変数の設定』](#)を参照してください。
- バックアップ/アーカイブ・クライアントの optfile オプションを指定して、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルのパスおよびファイル名を指定します。

注: すべてのノード・ユーザーが、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルが保管されているディスク・ロケーションに対する読み取りアクセス権限を持っている必要があります。

手順

1. サンプル・クライアント・ユーザー・オプション・ファイルが含まれているディレクトリーに移動します。
2. このファイルを dsm.opt にコピーします。
3. ユーザーのノード用のオプションを dsm.opt ファイルに追加します。

以下のいずれかの方法を使用して、クライアント・ユーザー・オプションを設定します。

- テキスト・エディターで dsm.opt を編集して、ノードに必要なオプションを追加します。

注: Mac OS X の場合、dsm.opt ファイルは、プレーン・テキスト・ファイルとして保存し、エンコード・スキームとして Unicode (UTF-8) を使用する必要があります。TextEdit は、デフォルトでは、ファイルをプレーン・テキストとして保存しません。TextEdit で dsm.opt を保存するには、「**フォーマット**」>「**プレーン・テキストの作成**」を選択します。「**プレーン・テキストのエンコード方式**」ドロップダウン・リストで、「**Unicode (UTF-8)**」を選択します。ファイル名に .txt 拡張子を追加しないでください。

- プリファレンス・エディターを使用して、クライアント・オプションを設定します。バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI で、「**編集**」>「**クライアント・プリファレンス**」を選択して、構成したいオプションを選択します。プリファレンス・エディターは、ユーザーがオプションを追加、変更、または削除すると、クライアント構成ファイル dsm.opt および dsm.sys を更新します。バックアップ/アーカイブ・クライアントの実行中に dsm.opt ファイルを更新する場合は、更新が認識されるようにバックアップ/アーカイブ・クライアントを再始動する必要があります。

プリファレンス・エディターは、DSM_DIR 環境変数を使用してクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) を見つけ、DSM_CONFIG 環境変数を使用してクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) を見つけます。dsm.opt をデフォルト以外のロケーションに配置したい場合は、バックアップ/アーカイブ・クライアントを開始する前に DSM_CONFIG を設定してから、プリファレンス・エディターを使用してオプションを設定してください。プリファレンス・エディターはサーバー上のオプションに対してサーバーを照会しますが、サーバー・オプション・ファイルを変更することはできません。

関連概念

[309 ページの『処理オプション』](#)

クライアントの処理オプションのデフォルトを使用することも、特定のニーズに合わせて処理オプションを調整することもできます。処理オプションの概要を読み、オプションの解説を参照して各オプションの詳細を確認してください。

[67 ページの『処理環境変数の設定』](#)

状況によっては、IBM Spectrum Protect アプリケーションがクライアント 操作の実行に必要なファイルを見つけることができ、クライアント 操作中に発生するイベントとエラーを記録するログ・ファイルを作成できるように、環境変数の設定が必要になることがあります。

関連タスク

61 ページの『クライアント・システム・オプション・ファイルの作成と変更』

クライアント・システム・オプション・ファイルは編集可能なファイルで、サーバーと通信方式を識別し、バックアップ、アーカイブ、階層ストレージ管理、およびスケジューリングの構成を提供します。

カスタマイズされたクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの作成

デフォルトのクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) で指定されたオプションとは異なるオプションを使用したい場合は、ユーザー独自のクライアント・ユーザー・オプション・ファイルを作成することができます。

このタスクについて

デフォルトのユーザー・オプション・ファイルに設定できるオプションをすべて設定することができます。カスタマイズされたクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) の作成は、オプションのタスクです。クライアント・ユーザー・オプション・ファイルを作成または変更するには、以下の方法を使用します。

手順

1. ご使用のワークステーションの IBM Spectrum Protect 管理者に連絡して、サンプル・クライアント・ユーザー・オプション・ファイル dsm.opt.smp がある場所を調べ、接続しようとしているバックアップ・サーバーの TCP/IP アドレスおよびそれが listen しているポートについての情報を入手してください。
2. dsm.opt.smp を、dsm.opt またはユーザーが選択した新しいファイル名でホーム・ディレクトリーにコピーします。書き込みアクセス権を持つ任意のディレクトリーに、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルを保管します。
3. 新しいクライアント・ユーザー・オプション・ファイルを指す DSM_CONFIG 環境変数を設定します。
4. ご使用のシステムに合わせて dsm.opt ファイルを編集するか、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI から「編集」>「クライアント・プリファレンス」を選択してプリファレンス・エディターを使用します。

タスクの結果

オプション・ファイルを作成した後は、以下の手順で GUI からオプション・ファイルを編集することができます。

1. 「編集」メニューを開いて、「クライアント・プリファレンス」を選択します。
2. 必要に応じて変更を行い、「OK」をクリックして変更内容を保存します。

重要: Mac OS X の場合、システム・オプション・ファイルは Unicode (UTF-8) としてエンコードされたプレーン・テキスト・ファイルにする必要があります。TextEdit は、デフォルトでは、ファイルをプレーン・テキストとして保存しません。「フォーマット」>「プレーン・テキストの作成」を選択して、ユーザー・オプション・ファイルをプレーン・テキスト・ファイルとして保存します。「プレーン・テキストのエンコード方式」ドロップダウン・リストで、「Unicode (UTF-8)」を選択して設定します。拡張子 .txt は追加しないでください。

関連概念

66 ページの『環境変数』

普通、環境変数の設定は、オプションのタスクです。これらの変数を設定すると、コマンド・ラインを使用するのがより便利になります。

59 ページの『クライアント・オプション・ファイルの概要』

クライアント・オプションおよび値をクライアント・オプション・ファイルで設定 (指定) することができます。クライアント・オプションは、サーバーのクライアント・オプション・セットでも設定できます。

サーバーのクライアント・オプション・セットで設定されたクライアント・オプションは、クライアント・オプション・ファイルで設定されたクライアント・オプションをオーバーライドします。

環境変数

普通、環境変数の設定は、オプションのタスクです。これらの変数を設定すると、コマンド・ラインを使用するのがより便利になります。

言語環境変数の設定

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、システム・ロケールの言語を自動的に検出し、その言語で表示します。

例えば、デフォルトでは、フランス語のオペレーティング・システムはフランス語でバックアップ/アーカイブ・クライアントを表示します。バックアップ/アーカイブ・クライアントがフランス語メッセージ・カタログをロードできなければ、デフォルトの動作により米国英語の言語が使用されます。例えば、クライアントが、カナダ・フランス語またはメキシコ・スペイン語など、サポートされない言語/ロケールの組み合わせで実行されている場合には、クライアントはデフォルトの動作により米国英語を使用します。

LANG 環境変数を使用して、UNIX および Linux クライアント用の言語を指定することができます。

注: ファイル名を正しく表示または入力するためには、オペレーティング・システムのロケール、端末の文字セット、およびファイル名の文字セット・エンコードが一致している必要があります。

LANG 環境変数をフランス語に設定するには、以下のステートメントを入力します。

```
export LANG=fr_FR
```

注:

- このタスクは、Mac OS X には適用されません。
- 現在ご使用のロケールの言語で IBM Spectrum Protect ヘルプ・ブラウザー・メニューを表示するには、/etc/profile ファイル内の NLSPATH 環境変数に以下のパスを組み込んでください。

```
NLSPATH=/usr/dt/lib/nls/msg/%L/%N.cat:$NLSPATH  
export NLSPATH
```

バックアップ/アーカイブ・クライアントのロケールが、ファイル名の文字エンコードと同じであれば、これらのファイルはすべて正しくバックアップまたはリストアされます。1 バイト文字セットで稼働している場合、すべてのファイル名は有効であり、バックアップ/アーカイブ・クライアントによってバックアップまたはリストアされます。

DBCS または UTF-8 のロケールで稼働している場合は、DBCS や UTF-8 のロケールに無効な文字で構成されているファイル名をバックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンド・ラインで入力することはできません。ワイルドカード ("*") 指定が使用されたバックアップを実行する場合に、それらのファイルがスキップされることがあります。ファイルがスキップされると、次の例のようなエラー・メッセージが発行されます。

```
ANS4042E オブジェクト名「/testData/en_US_files/file3?」に  
認識されない文字が 1 つ以上含まれているため無効です。
```

すべてのディレクトリーおよびファイルが同じロケールで作成されていない場合は、1 バイト文字セット・ロケールを使用してスケジュール・バックアップを実行してください。そうすることにより、ファイル名に現行ロケールで定義されていない文字が含まれているためにファイルがスキップされることがなくなります。ファイルをリストアするときは、ファイル名のロケール・エンコードと同じロケールで実行します。

例えば、日本語文字から成るファイル名には、中国語ロケールで表示された場合には無効なマルチバイト文字が含まれている可能性があります。これらのファイルはバックアップされず、グラフィカル・ユーザー・インターフェースによって表示されることもありません。そうしたファイルがバックアップ中に検出された場合は、スキップされたファイルのリストが dsmerror.log ファイルによって表示されます。

ヒント: バックアップ/アーカイブ・クライアントのスケジューリング・モードを使用してシステム全体をバックアップする場合は、ファイルがスキップされないように、**LANG** 環境変数を en_US (または他の SBCS 言語) に設定してください。

処理環境変数の設定

状況によっては、IBM Spectrum Protect アプリケーションがクライアント 操作の実行に必要なファイルを見つけることができ、クライアント 操作中に発生するイベントとエラーを記録するログ・ファイルを作成できるように、環境変数の設定が必要になることがあります。

以下のどの状況でも環境変数の設定が必要になります。

- バックアップ/アーカイブ・クライアントがインストールされているディレクトリー 以外のディレクトリーからバックアップ/アーカイブ・クライアントを呼び出す場合。
- バックアップ/アーカイブ・クライアント、管理クライアント、あるいはその両方に異なるオプション・ファイルを指定する場合。
- ログ・ファイルをデフォルトのインストール・ディレクトリーに書き込まない場合。

ヒント: optfile オプションを使用してコマンド・ライン・クライアント (管理クライアントでなく) の代替クライアント・オプション・ファイルを指定することもできます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントの処理に関係する設定可能な環境変数には、次の 4 つがあります。

PATH

実行可能ファイル (dsmc、dsmadm、dsmj) が常駐するディレクトリーを組み込みます。

DSM_DIR

実行可能ファイル (dsmc、dsmadm、dsmj) リソース・ファイル、および dsm.sys ファイルが入っているディレクトリーを指定します。DSM_DIR にルート (/) ディレクトリーを指定することはできません。

デフォルトのインストール・ディレクトリーについて詳細は、使用するオペレーティング・システムのインストールのセクションを参照してください。

イメージ・バックアップ、イメージ・リストア、スナップショット・ベースのファイル・バックアップ、NAS バックアップ、または NAS リストアを要求すると、クライアントは DSM_DIR 環境変数を使用して対応するプラグイン・ライブラリーを見つけます。DSM_DIR が設定されていない場合、クライアントは、次のディレクトリーでプラグイン・ライブラリーを探します。

AIX

/usr/tivoli/tsm/client/ba/bin/plugins

Oracle Solaris およびすべての Linux クライアント

/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/plugins

DSM_CONFIG

独自の個人情報設定オプション・ファイルを作成するユーザーのためのクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの完全修飾パスおよびファイル名を指定します。DSM_CONFIG が設定されていない場合、または optfile オプションが使用されていない場合、クライアント・ユーザー・オプション・ファイルは以下の要件を満たすことが求められます。

1. オプション・ファイルは dsm.opt という名前にする必要があります。
2. Mac OS X 以外の UNIX クライアントの場合、DSM_DIR を設定しない場合、ファイルはデフォルトのインストール・ディレクトリーになければなりません。DSM_DIR を設定する場合、ファイルは DSM_DIR によって指定されるディレクトリーになければなりません。
3. Mac OS X の場合、ファイルは次のロケーションのどこにでも置くことができます。これらのディレクトリーは順番に検索され、最初に検索されたオプション・ファイルが使用されます。~/Library Preferences /Tivoli Storage Manager、/Library Preferences/Tivoli Storage Manager、または /Library/Application Support/tivoli/tsm/client/ba/bin。

デフォルトのインストール・ディレクトリーについて詳細は、使用するオペレーティング・システムのインストールのセクションを参照してください。

DSM_LOG

IBM Spectrum Protect ログ・ファイルを格納するディレクトリーを指します。DSM_LOG にルート (/) ディレクトリーを指定することはできません。ログ・ファイルには、処理中に発生するエラーとイベントに関する情報が含まれます。クライアントは、テクニカル・サポート・チームが重大エラーを診断する場合に役立つ、ログを作成します。

デフォルトのインストール・ディレクトリーについて詳細は、使用するオペレーティング・システムのインストールのセクションを参照してください。

重要: ユーザーがログ・ファイルを作成し、それに書き込みを行うために必要な書き込みアクセス権を読み取り/書き込み許可が許可しているディレクトリーを指定するために、DSM_LOG 環境変数を設定してください。これによって、ログの書き込みの失敗およびプロセスの終了を避けることができます。すべてのクライアント・ユーザー ID にファイルの読み取りおよび書き込みを許可するファイル・アクセス権を付与するには、**chmod** または **setacl** コマンドを使用します。ログ名がデフォルトの名前の場合は、DSM_LOG 環境変数だけを設定して、それらのファイルが存在しているディレクトリーを指します。クライアントがログ・ファイルに書き込めない場合、エラー・メッセージが **stderr** および **syslog** デーモンに書き込まれます。エラー・メッセージがシステム・ログに書き込まれるようにするには、**syslog** デーモンが実行中で、LOG_ERR の優先順位のメッセージを処理するように構成されている必要があります。**syslog** デーモンの開始と構成はシステム固有です。**syslog** デーモンの開始については、**man syslogd** コマンドを使用して確認してください。**syslog** デーモンの構成については、**man syslog.conf** コマンドを使用して確認してください。

注:

1. **errorlogname** および **schedlogname** オプションは DSM_LOG を指定変更します。**errorlogname** クライアント・オプションを指定する場合、ファイルは DSM_LOG によって指定されたロケーションではなく、**errorlogname** オプションによって指定されたディレクトリーに保管されます。**schedlogname** クライアント・オプションを指定する場合、ファイルは DSM_LOG によって指定されたロケーションではなく、**schedlogname** オプションによって指定されたディレクトリーに書き込まれます。
2. ログ・ファイルをシンボリック・リンクにすることはできません。クライアントは、そのようなリンクがあれば検出し、そのリンクを削除してから操作を終了します。このアクションにより、クライアントが保護データを上書きするのを防ぐことができます。関連するログが、後続の操作でファイルとして作成されます。

バックアップ/アーカイブ・クライアント Java GUI プログラムを使用するには、Java バイナリー・ファイルをインストールしたディレクトリーをエクスポートする必要があります。例えば、次のコマンドを入力します。

```
export PATH=$PATH:java_bin_dir
```

ここで、**java_bin_dir** は、ご使用のファイル・システム内の実行可能 Java バイナリー・ファイルへのパスです。

関連資料

494 ページの『[Optfile](#)』

optfile オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・セッションの開始時に使用するクライアント・オプション・ファイルを指定します。

Bourne および Korn シェル変数の設定

\$HOME ディレクトリーにある **.profile** ファイル (Korn シェル) または **.bash_profile** ファイル (Bourne シェル) に、環境変数を入力します。

以下の例で、**/home/davehil/dsm.opt** はクライアント・ユーザー・オプション・ファイルのパスおよびファイル名であり、**/home/davehil** は **dsmerror.log** ファイル、実行可能ファイル、リソース・ファイル、および **dsm.sys** ファイルを格納したいディレクトリーです。

```
DSM_DIR=/home/davehil
DSM_CONFIG=/home/davehil/dsm.opt
```



```
DSM_LOG=/home/davehil  
export DSM_DIR DSM_CONFIG DSM_LOG
```

C シェル変数の設定

C シェルの場合は、\$HOME ディレクトリーの .cshrc ファイルに、DSM_CONFIG、DSM_LOG、および DSM_DIR 変数を追加します。

以下の例で、/home/davehil/dsm.opt はクライアント・ユーザー・オプション・ファイルのパスおよびファイル名であり、/home/davehil は dsmererror.log ファイル、実行可能ファイル、リソース・ファイル、および dsm.sys ファイルを格納したいディレクトリーです。

```
setenv DSM_DIR /home/davehil  
setenv DSM_CONFIG /home/davehil/dsm.opt  
setenv DSM_LOG /home/davehil
```

API 環境変数の設定

IBM Spectrum Protect API をインストールしている場合は、以下の環境変数を設定します。

DSMI_DIR

インストール・ディレクトリーを指し示します。ファイル dsm.sys は、DSMI_DIR が指し示すディレクトリーになければなりません。この環境変数は、必ず存在しなければなりません。

DSMI_CONFIG

ユーザー独自のクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) の絶対パス。

DSMI_LOG

dsmererror.log のパス (このパスはシンボリック・リンクにはできません)。

注: API を使用して開発されたアプリケーションのエンド・ユーザーは、そのアプリケーション用のインストール指示を調べて、特別なパス名やオプションのガイドラインの有無をチェックすることができます。

IBM Spectrum Protect API の詳細については、「[アプリケーション・プログラミング・インターフェースを使用した開発ソリューション](#)」を参照してください。

Web クライアントの構成の概要

IBM Spectrum Protect Web クライアントは、Web ブラウザーからのクライアント・ノードのリモート管理機能を提供します。Web クライアントの構成手順は、クライアント・ノードのオペレーティング・システムによって異なります。

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.2 から、Web クライアント GUI を使用して IBM Spectrum Protect V8.1.2 以降のサーバーに接続できなくなりました。詳しくは、[151 ページの『新しいセキュリティ環境における Web クライアントの使用』](#)を参照してください。

Web クライアントの設定の構成には、バックアップ/アーカイブ・クライアントのオプションを使用します。このオプションとしては、httpport、managedservices、webports、および revokeremoteaccess があります。

AIX、Linux、Mac、および Solaris の各クライアント・ノードでは、Web クライアント・オプションをクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に追加します。

IBM Spectrum Protect Operations Center インターフェースから Web クライアントを使用するには、**REGISTER NODE** コマンドまたは **UPDATE NODE** コマンドの URL パラメーターに Web クライアントのアドレスを指定します。Web アドレスには、ノードの DNS 名または IP アドレス、および Web クライアントが使用するポート番号を含める必要があります。例えば、<http://node.example.com:1581> などです。この例のホスト名を、ご使用のクライアント・ノードの IP アドレスまたはホスト名に置き換えてください。Web ブラウザーを使用して Web クライアントにアクセスする場合は、ブラウザーのアドレス・バーに同じ URL 構文を入力します。

すべての Web クライアント・メッセージは、dsmwebc1.log という名前の Web クライアント・ログ・ファイルに書き込まれます。デフォルトで、dsmwebc1.log ファイルおよびバックアップ/アーカイブ・ク

クライアント・エラー・ログ・ファイル (dsmerror.log) は、クライアント・インストール・ディレクトリに作成されます。DSM_LOG 環境変数を使用して、エラー・ログのデフォルト・ロケーションを指定変更できます。DSM_LOG 環境変数を設定する場合は、エラー・ログのロケーションとしてルート・ディレクトリを指定しないでください。また、バックアップ/アーカイブ・クライアントの errorlogname オプションを使用して、エラー・ログ・ファイルのロケーションを変更することもできます。このオプションを指定した場合、DSM_LOG 環境変数の設定は指定変更されます。

関連概念

[330 ページの『Web クライアント・オプション』](#)

IBM Spectrum Protect Web クライアントの構成には、いくつかのバックアップ/アーカイブ・クライアントのオプションを使用します。

関連タスク

[70 ページの『AIX、Linux、Mac、および Solaris システムでの Web クライアントの構成』](#)

Web クライアントを構成するには、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) を編集して、必要なオプションを指定した後、クライアント・アクセプター・デーモンを開始します。

AIX、Linux、Mac、および Solaris システムでの Web クライアントの構成

Web クライアントを構成するには、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) を編集して、必要なオプションを指定した後、クライアント・アクセプター・デーモンを開始します。

手順

1. dsm.sys ファイルで `manageservices webclient schedule` オプションおよび `passwordaccess generate` オプションを設定します。
2. IBM Spectrum Protect パスワードを生成します。 `dsmc query session` と入力します。資格情報を要求するプロンプトが出されたら、IBM Spectrum Protect ユーザー名およびパスワードを入力します。

Mac OS X システムの場合、IBM Spectrum Protect Tools for Administrators アプリケーションを使用してパスワードを生成することもできます。アプリケーションで、**IBM Spectrum Protect** を選択してクライアントを開始します。
3. クライアント・アクセプター・デーモンを開始します。 `dsmcad` と入力します。

Mac OS X の場合、IBM Spectrum Protect Tools for Administrators アプリケーションを使用してクライアント・アクセプター・デーモンを開始することもできます。アプリケーションで、「**クライアント・アクセプター・デーモンの開始 (Start the Client Acceptor Daemon)**」を選択します。
4. ブラウザーから Web クライアントにアクセスするには、ブラウザーのアドレス・バーで、クライアント・ノードのホスト名または IP アドレスの後に Web クライアント・ポート番号を指定します。デフォルトのポート番号は 1581 です。
例えば、 `myserver.example.com` という名前のノードの Web クライアントにアクセスするには、`http://myserver.example.com:1581` と指定します。

デフォルトの Web クライアント・ポート番号を変更する必要がある場合は、バックアップ/アーカイブ・クライアントの `httpport` オプションを使用して別のポート番号を割り当てます。

次のタスク

Web クライアントを構成した後、IBM Spectrum Protect Operations Center またはブラウザーを使用して、ノード上のデータのバックアップ/リストアやアーカイブ/リトリブを行うことができます。

関連概念

[326 ページの『スケジュール・オプション』](#)

ここでは、セントラル・スケジューリングを制御するのに使用するオプションについて説明します。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、スケジューラーが実行されている場合にのみスケジューリング・オプションを使用します。

[330 ページの『Web クライアント・オプション』](#)

IBM Spectrum Protect Web クライアントの構成には、いくつかのバックアップ/アーカイブ・クライアントのオプションを使用します。

関連タスク

151 ページの『Web クライアント・セッションの開始』

Web クライアントは、Web ブラウザー・ソフトウェアとは別に開始および管理することができる Java Web Start アプリケーションです。ワークステーション上で Web クライアントをインストールおよび構成した後、Web クライアントを使用してリモート・アクセスし、クライアント・ノード上のデータをリモートからバックアップ、リストア、アーカイブ、あるいはリトリブすることができます。Web クライアントは、身体障害のあるユーザーを支援する装置を使用する機能を備え、キーボード・ナビゲーションが改善されています。

関連資料

440 ページの『Httpport』

httpport オプションは、Web クライアント用の TCP/IP ポート・アドレスを指定します。

497 ページの『Passwordaccess』

passwordaccess オプションは、パスワードを自動的に生成したいか、あるいはユーザー・プロンプトに応じて設定したいかを指定します。

スケジューラーの構成

IBM Spectrum Protect 管理者はクライアントがタスクを自動的に実行するようにスケジュールできます。スケジュールされたイベントをクライアントで実施するためには、クライアント・スケジューラーを構成して IBM Spectrum Protect サーバーと通信する必要があります。

このタスクについて

例えば、毎日の終わりに自動的にファイルのバックアップをとったり、毎週金曜日にいくつかのファイルをアーカイブしたりすることができます。この手順はセントラル・スケジューリングと呼ばれるもので、サーバーとクライアント・ノードとの共同作業です。管理者がクライアントを 1 つ以上のスケジュール (サーバー・データベースに維持管理されている ポリシー・ドメインの一部) に関連付けます。IBM Spectrum Protect 管理者はサーバーでセントラル・スケジューリングを定義し、ユーザーは自分のワークステーションでクライアント・スケジューラーを開始します。クライアント・スケジューラーを開始した後は、それ以上の介入は必要ありません。

クライアント・スケジューリングを使用すると、以下の操作をすることができます。

- 使用可能なスケジュールに関する情報を表示する。
- スケジュールが完了した作業に関する情報を表示する。
- dsm.sys ファイルのスケジュール・オプションを変更する。

クライアント・スケジューラーを管理する最も効率的な方法は、クライアント・アクセプター・サービスを使用する方法です。スケジューラーの管理に、クライアント・アクセプター・サービスと従来のスケジューラー・サービスのそれぞれを使用したときの比較についても確認できます。また、スケジューラーの管理にクライアント・アクセプターを使用するようクライアントを構成する方法について確認できます。

クライアント・アクセプター管理サービスと従来のスケジューラー・サービスの比較

IBM Spectrum Protect スケジューラーを管理するために、クライアント・アクセプター・サービスまたは従来のスケジューラー・サービスのどちらかを使用できます。これらの方法の比較について示します。

以下のテーブルには、クライアント・アクセプター管理サービスとデフォルトの従来のスケジューラー・サービスの方法の違いを示しています。

表 25. クライアント・アクセプター管理サービスと従来のスケジューラー・サービス	
クライアント・アクセプター管理サービス	IBM Spectrum Protect の従来のスケジューラー・サービス
manageservices schedule オプションで定義し、クライアント・アクセプター・サービスを使用して開始します。 クライアント・アクセプター・デーモンは、 dsmcad コマンドで開始されます	dsmc sched コマンドで開始します。
クライアント・アクセプター・サービスは、スケジュールされたアクションごとに必要に応じてスケジューラー・プロセスを開始および停止します。	スケジュールされたバックアップが完了した後も、アクティブ状態のままになります。
アイドル状態のときは必要なシステム・リソースが少なくなります。	アイドル状態のときでもより多くのシステム・リソースを必要とします。
クライアント・オプションおよび IBM Spectrum Protect サーバー指定変更オプションは、クライアント・アクセプター・サービスが、スケジュールされたバックアップを開始するたびに更新されます。	クライアント・オプションおよび IBM Spectrum Protect サーバー指定変更オプションは、 dsmc sched が開始された後にのみ処理されます。
SESSIONINITiation=SERVEROnly バックアップと一緒に使用できません。	更新されたクライアント・オプションを有効にするには、スケジューラー・プロセスを再始動する必要があります。 重要: コマンド・ラインでクライアント・スケジューラーを実行した場合、スケジューラーはバックグラウンド・サービスとして実行されません。 ヒント: 以前にシステム呼び出しで 使用されていたシステム・リソースを解放するために、定期的に従来のスケジューラーを再始動してください。

スケジューラーを管理するクライアント・アクセプター・サービスを使用するためのクライアントの構成

クライアント・スケジューラーを管理する最も効率の良い方法の 1 つは、クライアント・アクセプターを使用する方法です。スケジューラーを管理するクライアント・アクセプターを使用するためには、クライアントを構成する必要があります。

始める前に

- ファイルを暗号化の対象に含める場合は、必ずオプション・ファイルで **encryptkey** オプションを **save** に設定します。このオプションを設定するには、プリファレンス・エディターの「許可」タブで「**暗号鍵パスワードをローカルで保管する (Save Encryption Key Password Locally)**」を選択します。このオプションを設定するとスケジュールされた不在実行サービスが可能になります。暗号鍵が事前に保存されていない場合は、暗号化のプロンプトが表示されて暗号鍵を保存できるように、少なくとも 1 つのファイルの手動バックアップを実行する必要があります。
- **sessioninitiation** オプションが **serveronly** に設定されている場合は、スケジューリングにクライアント・アクセプターを使用できません。

このタスクについて

クライアント・アクセプターは、スケジューラーの外部タイマーとして役立ちます。スケジューラーが開始されると、スケジュールされた次のイベントをサーバーに照会します。イベントがすぐに実行されるか、またはスケジューラーが終了します。クライアント・アクセプターは、スケジュールされたイベントを実行する時刻になると、スケジューラーを再始動します。このアクションによって、ワークステーションの

バックグラウンド・プロセスの数が削減され、クライアント・アクセプター管理を使用せずにスケジューラーを実行するときに発生する可能性のあるメモリー保持の問題が解決されます。

クライアント・アクセプター・サービスは、クライアント・アクセプター・デーモンとも呼ばれます。

手順

- クライアント・スケジューラーを管理するためにクライアント・アクセプターを使用するには、次の手順を実行します。
 - バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI から、「編集」 > 「プリファレンス」を選択します。
 - 「**Web クライアント**」タブをクリックします。
 - 「管理対象サービス・オプション」フィールドで、「**スケジュール**」をクリックします。クライアント・アクセプターによっても Web クライアントを管理する場合は、「**両方**」オプションをクリックします。
 - コマンド・ラインで以下のコマンドを実行して、クライアント・アクセプター・デーモンを始動します。

```
dsmcad
```

ヒント：

- クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) で **managedservices** オプションを使用しても、クライアント・アクセプターがスケジューラーを管理するかどうかを指定できます。
- listen ポートを開かずにポーリング・モードでスケジューラーを管理するためにクライアント・アクセプターが必要である場合は、dsm.sys ファイルの **cadlistenonport** オプションを使用します。

関連概念

[69 ページの『Web クライアントの構成の概要』](#)

IBM Spectrum Protect Web クライアントは、Web ブラウザーからのクライアント・ノードのリモート管理機能を提供します。Web クライアントの構成手順は、クライアント・ノードのオペレーティング・システムによって異なります。

[291 ページの『スケジュールされたコマンドの使用可能化と使用不能化』](#)

schedcmddisabled オプションを使用してサーバーによるコマンドのスケジューリングを使用不可にできます。

[326 ページの『スケジュール・オプション』](#)

ここでは、セントラル・スケジューリングを制御するのに使用するオプションについて説明します。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、スケジューラーが実行されている場合にのみスケジューリング・オプションを使用します。

関連タスク

[286 ページの『クライアント・スケジューラー・プロセスをバックグラウンド・タスクとして実行し始動時に自動的に開始するための設定』](#)

IBM Spectrum Protect クライアント・スケジューラーを構成し、システムの開始時に自動的に開始するバックグラウンド・システム・タスクとして実行することができます。

関連資料

[356 ページの『Cadlistenonport』](#)

cadlistenonport オプションは、クライアント・アクセプターの listen ポートを開くかどうかを指定します。

[476 ページの『Managedservices』](#)

managedservices オプションは、IBM Spectrum Protect クライアント・アクセプター・サービスが、スケジューラー、Web クライアント、またはその両方のいずれを管理するかを指定します。

[541 ページの『Sessioninitiation』](#)

sessioninitiation オプションは、サーバーまたはクライアントがファイアウォール 経由でセッションを開始するかどうかを制御するために使用します。デフォルト値では、クライアントがセッションを開始します。このオプションは、**schedule** コマンドで使用できます。

クライアント・スケジューラーの開始

このタスクでは、GUI とコマンド・ライン・クライアントを使用してイベントをスケジュールする方法を説明します。

コマンド・ライン・クライアントを使用したイベントのスケジュール

このタスクでは、コマンド・ライン・クライアントを使用してイベントをスケジュールする方法を説明します。

このタスクについて

コマンド・ライン・クライアント・インターフェースを使用して、スケジュールされたイベントを処理できるように、バックアップ/アーカイブ・クライアントを構成するには、システム管理者でなければいけません。この機能を使用可能にするには、コマンド・ライン・ツールをインストールする必要があります。

注: コマンド・ラインでクライアント・スケジューラーを実行した場合、スケジューラーはバックグラウンド・サービスとして実行されません。

クライアント・アクセプター・デーモンを使用してクライアント・スケジューラーを開始する前に、以下のステップを実行する必要があります。

手順

1. クライアント・システム・オプション (dsm.sys) ファイルで、managedservices オプションに **schedule** が含まれていることを確認します。
2. クライアント・システム・オプション (dsm.sys) ファイルで、passwordaccess オプションを **generate** に設定します。

タスクの結果

ファイルを暗号化処理の対象に含める場合は、「権限プリファレンス」ウィンドウで「暗号鍵パスワードをローカルに保存」オプションを選択して、クライアント・スケジューラーがユーザーに暗号鍵の入力を要求するプロンプトを表示せずに、スケジュールされた不在実行サービスを実行できるようにする必要があります。暗号鍵が事前に保存されていない場合、暗号化プロンプトが表示され、暗号鍵が保管されるように、少なくとも 1 ファイルの在籍バックアップを実行する必要があります。

クライアント・ノードでクライアント・スケジューラーを開始して、サーバー・スケジュールに接続するには、以下のとおりにします。

1. バックアップ/アーカイブ・クライアント・インストール・ディレクトリに移り、次のコマンドを入力します。

```
dsmc schedule
```

クライアント・スケジューラーを開始すると、ウィンドウを閉じるか、プロセスを終了するか、またはシステムをログオフするまで、クライアント・スケジューラーは継続的に実行されます。

2. クライアントの実行可能ディレクトリが PATH 環境変数にない場合は、インストール・ディレクトリに移動して、以下のコマンドを入力します。

```
./dsmc schedule
```

3. **schedule** コマンドをバックグラウンドで実行して、ユーザーがシステムからログオフした後も継続してクライアント・スケジューラーを実行させるには、次のようにコマンドを入力します。

```
nohup dsmc schedule 2> /dev/null &
```

ワークステーションに IBM Spectrum Protect パスワードが必要で、**schedule** コマンドをバックグラウンドで実行したい場合は、このコマンドと共にパスワードを渡す必要があります。

root ユーザー：クライアント・スケジューラーを自動的に開始するには、`dsm.sys` で `passwordaccess` オプションが `generate` に設定されていることを確認し、次にユーザーのオペレーティング・システムで以下の手順に従います。

各クライアント・スケジューラーを自動的に開始するには、`/etc/inittab` ファイルに項目を追加します。通常、使用する実行レベルは、オペレーティング・システムとその構成に応じて 2、3、4、5、または 6 のいずれかです。実行レベルの詳細については、オペレーティング・システムの資料を参照してください。

項目の正しい構文を確認するには、オペレーティング・システムの資料を参照してください。

以下にいくつかの例を挙げます。

AIX の場合、次の項目を `/etc/inittab` ファイルに追加します。

```
itsm:2:once:/usr/bin/dsmc sched > /dev/null 2>&1 # TSM scheduler
```

この例では、実行レベルは 2 に設定されています。

Solaris の場合、次の項目を `/etc/inittab` ファイルに追加します。

```
itsm:23:once:/usr/bin/dsmc sched > /dev/null 2>&1 # TSM scheduler
```

この例では、実行レベルは 2 および 3 に設定されています。

注：コマンドで、`/dev/null` へのリダイレクトを含める必要があります。

Mac OS X の場合:

システム管理者はパスワードを必ず生成して、クライアントがパスワードをパスワード (TSM.sth) ファイル内に保存できるようにします。これを実行するには、IBM Spectrum Protect Tools for Administrators を使用するか、またはコマンド・ラインを使用します。

システム管理者は、以下のどちらかの方法を使用して、クライアント・アクセプター・デーモンがコマンド・ライン・クライアントをスケジュール・モードで起動し、システムの開始時にスケジュールされたイベントを処理できるようにする必要があります。

方法 1 (推奨)

- IBM Spectrum Protect Tools for Administrators を使用してクライアント・アクセプター・デーモン・アプリケーションを開始します。これでクライアント・アクセプター・デーモンがシステム再始動項目としてインストールされ、システムを再始動するとクライアント・アクセプター・デーモンが開始します。クライアント・アクセプター・デーモンは直ちに開始するので、スケジュール・イベントを処理するためにシステムを再始動する必要はありません。

方法 2

- `"/Library/Application Support/tivoli/tsm/client/ba/bin"` にあるシェル・スクリプトを使用して、クライアント・アクセプター・デーモンをスタートアップ項目としてインストールします。スクリプト名は `StartCad.sh` です。

次のステップを実行して、クライアント・アクセプター・デーモンを手動で開始し、このデーモンが開始していることを確認します。

- クライアント・アクセプター・デーモンが実行されていることを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
sudo ps -x | grep dsmcad
```

クライアント・アクセプター・デーモンが実行されている場合は、リストされる処理の 1 つに、`/usr/bin/dsmcad` パスが付きます。

- クライアント・アクセプター・デーモンを手動で開始するには、端末ウィンドウに次のコマンドを入力します。

```
sudo /sbin/SystemStarter start dsmcad
```

TCP/IP が完全に初期化されていないため、クライアント・スケジューラーがシステム開始時に正しく初期化されない場合があります。TCP/IP を初期化する時間を確保するために、スケジューラー・サービスの開始を遅らせることが必要になる場合があります。

クライアントは、クライアント・スケジューラーの稼働中に `dsm.opt` または `dsm.sys` ファイルに加えられた変更を認識しません。クライアント・スケジューラーの稼働中にこれらのファイルへの変更を行い、ただちに新しい値を使用したい場合は、クライアント・スケジューラーを停止して、再始動しなければなりません。例えば、`dsm.sys` ファイルの `inclexcl` オプションを変更して、別の `include-exclude` オプション・ファイルを指すようにした場合は、クライアント・スケジューラーをいったん停止し、再始動してからでないと、クライアントで新規ファイルの使用は開始できません。

手動でクライアント・スケジューラーを停止するには、クライアント・スケジューラーがバックグラウンドで稼働している場合は **kill** コマンドを使用し、フォアグラウンドで稼働している場合は **q** または **Ctrl +C** を使用します。クライアント・スケジューラーを再始動するには、**schedule** コマンドを再度出します。

テープ・プロンプトは、スケジュールされたイベントのときは、オプション・ファイルでの `tapeprompt` オプションの設定値に関係なく、出されません。

関連タスク

71 ページの『[スケジューラーの構成](#)』

IBM Spectrum Protect 管理者はクライアントがタスクを自動的に実行するようにスケジュールできます。スケジュールされたイベントをクライアントで実施するためには、クライアント・スケジューラーを構成して IBM Spectrum Protect サーバーと通信する必要があります。

関連資料

476 ページの『[Managedservices](#)』

`managedservices` オプションは、IBM Spectrum Protect クライアント・アクセプター・サービスが、スケジューラー、Web クライアント、またはその両方のいずれを管理するかを指定します。

497 ページの『[Passwordaccess](#)』

`passwordaccess` オプションは、パスワードを自動的に生成したいか、あるいはユーザー・プロンプトに応じて設定したいかを指定します。

IBM Spectrum Protect クライアント/サーバーのファイアウォールを介した通信の構成

ほとんどの場合、IBM Spectrum Protect サーバーとクライアントはファイアウォールを介して働くことができます。

このタスクについて

ファイアウォールはそれぞれ異なるため、ファイアウォール管理者は、使用しているファイアウォールのソフトウェアとハードウェアに関する説明書を参照する必要があります。

ファイアウォールを介したクライアントおよびサーバー操作を可能にするには、次の2つの方法があります。

方法 1:

クライアントがファイアウォールを介してサーバーと通信できるようにするには、ファイアウォール管理者は、以下のポートでファイアウォールをオープンする必要があります。

TCP/IP ポート

バックアップ/アーカイブ・クライアント、コマンド・ライン管理クライアント、およびスケジューラーが、ファイアウォールの外部で稼働できるようにするには、サーバー・オプション **tcpport** で指定されたポート (デフォルトでは 1500) をファイアウォール管理者がオープンする必要があります。このポートは、**tcpport** オプションを使用してクライアントとサーバーに設定されます。クライアントとサーバーの設定は同じでなければなりません。これにより、ポーリング・モードおよびプロンプト・モードの両方での IBM Spectrum Protect スケジューラーの通信、クライアント・アク

セプター管理下のスケジューラー、通常のバックアップ/アーカイブ・クライアント操作が可能になります。

注: クライアントは、**tcpadminport** オプション (サーバー上) で指定されているポートをクライアント・セッションに使用できません。このポートを使用できるのは、管理セッションのみです。

HTTP ポート

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI がファイアウォールを介してリモート・ワークステーションと通信できるようにするには、リモート・ワークステーション用の HTTP ポートをオープンする必要があります。このポートを指定するには、リモート・ワークステーションのクライアント・オプション・ファイルで **httpport** オプションを使用します。デフォルトの HTTP ポートは 1581 です。

リモート・ワークステーション用の TCP/IP ポート

リモート・ワークステーション・クライアント用の 2 つの TCP/IP ポートをオープンする必要があります。リモート・ワークステーションのクライアント・オプション・ファイルで **webports** オプションを使用して、これらのポートを指定します。**webports** オプションの値が指定されていない場合は、デフォルトがゼロ (0) になるため、TCP/IP が 2 つの空きポート番号をランダムに割り当てることになります。

管理セッション用の TCP/IP ポート

サーバーが管理クライアント・セッション用の要求を待機するための専用の TCP/IP ポート番号を指定します。これにより、プライベート・ネットワーク内での安全な管理セッションが可能になります。

方式 2:

クライアント・スケジューラーがプロンプト・モードである場合は、ファイアウォール上でどのポートもオープンする必要はありません。**sessioninitiation** オプションを **serveronly** に設定した場合は、クライアントはサーバーに接続しません。すべてのセッションは、**tcpclientport** オプションを使ってクライアント側で定義されたポートで、サーバー主導スケジューリングによって開始します。

sessioninitiation オプションは、プロンプト・モードで実行しているクライアント・スケジューラーの動作のみに影響します。

IBM Spectrum Protect サーバーでは、それぞれのノードごとに **register node** および **update node** コマンドで **SESSIONINITiation** パラメーターを設定する必要があります。サーバーで **SESSIONINITiation=clientorserver** (デフォルト) を指定している場合、使用する方式をクライアント側で決定できます。サーバーが **SESSIONINITiation=serveronly** を指定している場合は、すべてのセッションはサーバーによって開始されます。

この方式を使用して、クライアント・スケジューラーをセットアップする場合、以下のパラメーターを **serveronly** および **SESSIONSECURITY=transitional** として設定する必要があります。

注:

1. **sessioninitiation** が **serveronly** に設定された場合、**tcpclientaddress** クライアント・オプションの値は、**update node** または **register node** サーバー・コマンドの **HAddress** オプションの値と同じにする必要があります。**tcpclientport** クライアント・オプションの値は、**update node** または **register node** サーバー・コマンドの **LAddress** オプションの値と同じにする必要があります。
2. **sessioninitiation** オプションを **serveronly** に設定した場合、クライアント・アクセプター管理下のスケジューラーを除き、コマンド・ライン・クライアントおよびバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI は、引き続きセッションの開始を試行しますが、**sessioninitiation** オプションが **serveronly** に設定されているノードに対しては、IBM Spectrum Protect サーバーによってブロックされます。
3. 最初にクライアント・ワークステーション上でスケジューラーを構成する場合、スケジュールを実行しようとしてサーバーがクライアント・スケジューラーにアクセスしたときに、スケジューラー・サービスがサーバーに対する認証に失敗することがあります。これは、**passwordaccess** が **generate** に設定され、IBM Spectrum Protect サーバーがファイアウォールの背後にあり、スケジューラーの開始前に暗号化されたパスワードがローカルに格納できない場合に発生します。この問題を訂正するには、コマンド・ラインからスケジューラーを実行し (**dsmc schedule**)、スケジュールされた操作が開始されるまで待ち、プロンプトが出されたらノードのパスワードを入力します。

4. クライアントは、スケジューラー・モードでは暗号鍵パスワードを求めるプロンプトを出すことができません。IBM Spectrum Protect データ暗号化を使用している場合は、初期対話式バックアップを 1 回実行して、クライアント・ワークステーションからサーバー・ワークステーションへの TCP/IP 接続を開くことによって、暗号鍵をセットアップする必要があります。この通信のセットアップについて詳しくは、**方法 1** を参照してください。暗号鍵を設定したら、サーバー開始セッションによって、暗号化を使用してファイルをバックアップすることができます。

sessioninitiation オプションを *client* に設定すると、クライアントは、サーバー・オプション **tcpport** で定義された TCP/IP ポートで通信することによってサーバーとのセッションを開始します (**方法 1**)。これがデフォルトです。サーバー主導スケジューリングを使用してクライアントにサーバーへの接続を促すことができます。

prompted モードでファイアウォール経由でバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用する場合、IBM Spectrum Protect サーバーがクライアントに接続する必要があります。このアクションを完了するためには、ファイアウォールを介して要求を経路指定するためのソフトウェアを IBM Spectrum Protect サーバーにインストールしなければならない場合があります。このソフトウェアは、ファイアウォール上の Socks ポートを通じて、要求をサーバーに経路指定します。この方法は通常システムの Socks 化と呼ばれます。プロキシは、一部の通信プロトコル (HTTP, FTP, GOPHER) の経路指定のみを行うため、サポートされていません。IBM Spectrum Protect 通信はプロキシによって経路指定されません。クライアントはプロンプトが出されたときに、IBM Spectrum Protect サーバーに新しい接続を作成するということを知っていることが重要です。これは上記のファイアウォール構成が適切であることを意味しています。

関連タスク

[71 ページの『スケジューラーの構成』](#)

IBM Spectrum Protect 管理者はクライアントがタスクを自動的に実行するようにスケジュールできます。スケジュールされたイベントをクライアントで実施するためには、クライアント・スケジューラーを構成して IBM Spectrum Protect サーバーと通信する必要があります。

関連資料

[541 ページの『Sessioninitiation』](#)

sessioninitiation オプションは、サーバーまたはクライアントがファイアウォール経由でセッションを開始するかどうかを制御するために使用します。デフォルト値では、クライアントがセッションを開始します。このオプションは、**schedule** コマンドで使用できます。

[576 ページの『Tcpadminport』](#)

tcpadminport オプションは、管理クライアント・セッションでサーバーが要求を待機する TCP/IP ポート番号を個々に指定するときに使用します。これにより、プライベート・ネットワーク内で管理セッションを安全に実行できます。

[581 ページの『Tcpport』](#)

tcpport オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP ポート・アドレスを指定します。このアドレスは管理者から入手することができます。

[641 ページの『Webports』](#)

webports オプションを使用すると、ファイアウォールの外側にある Web クライアントを使用できるようになります。

Secure Sockets Layer (SSL) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成

Secure Sockets Layer (SSL) を使用すると、IBM Spectrum Protect のクライアントとサーバー間で業界標準の SSL ベースのセキュア通信を行うことができます。

このタスクについて

以下のクライアント・コンポーネントは SSL をサポートしています。

- コマンド・ライン・クライアント
- 管理コマンド・ライン・クライアント
- クライアント GUI

- クライアント API

SSLをサポートしているのは、発信側のクライアント/サーバー接続のみです。ダウン・レベルのサーバーと通信している V8.1.2 クライアントは、SSLをサポートします。V8.1.2 サーバーと通信している V8.1.2 クライアントは SSL を使用する必要があります。着信側の接続 (例えば、クライアント・アクセプター、サーバー開始スケジュール接続など) は SSL をサポートしていません。クライアント間通信は SSL をサポートしています。Web GUI は SSL をサポートしていません。Web GUI は、V8.1.2 サーバーとの通信時にはサポートされなくなりました。

SSL が使用可能な各 IBM Spectrum Protect サーバーには固有の証明書が必要です。証明書は次のいずれかのタイプとなります。

- IBM Spectrum Protect により自己署名された証明書。
- 認証局 (CA) により発行された証明書。CA は VeriSign や Thawte などの企業、または社内で管理される内部の CA などがあります。

自己署名証明書による SSL 通信を使用可能にするには、次の手順を実行します。

1. IBM Spectrum Protect サーバーの自己署名証明書 (cert256.arm) を取得します。サーバーが Transport Layer Security (TLS) 1.2 以上を使用するようにセットアップされていない場合は cert.arm 証明書ファイルを使用します。それ以外の場合は cert256.arm ファイルを使用してください。クライアントの証明書ファイルは、サーバーが使用する証明書ファイルと同じでなければなりません。
2. クライアントを構成します。SSL を使用するには、各クライアントが自己署名サーバー証明書をインポートする必要があります。
dsmcert ユーティリティを使用して、証明書をインポートします。
3. IBM Spectrum Protect サーバーの災害復旧では、証明書を失うと、新規の証明書がサーバーにより自動的に生成されます。各クライアントがその新規の証明書を取得してインポートする必要があります。

V8.1.2 クライアントと V8.1.2 サーバー間の通信のファスト・パスの詳細を参照して、SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションを使用し、自己署名証明書を自動的に受け入れることができます。詳しくは、[139 ページの『デフォルト・セキュリティ設定 \(ファスト・パス\) を使用した構成』](#)を参照してください。

CA 署名証明書による SSL 通信を使用可能にするには、次の手順を実行します。

1. CA ルート証明書を取得します。
2. クライアントを構成します。SSL を使用するには、各クライアントが自己署名サーバー証明書をインポートする必要があります。
dsmcert ユーティリティを使用して、証明書をインポートします。
ヒント: この手順を実行すると、サーバーが同じ CA により署名された新規の証明書を取得した場合に、クライアントはルート証明書を再度インポートする必要がありません。
3. 災害復旧の一環としてバックアップ/アーカイブ・クライアントをリカバリーする場合は、SSL 証明書をサーバーに再度インストールする必要があります。証明書を失った場合は、新規の証明書を取得する必要があります。新規の証明書が CA により署名されている場合は、クライアントを再構成する必要はありません。

次に、サーバー証明書または CA ルート証明書をインポートする必要があります。

自己署名証明書を使用する場合

各 IBM Spectrum Protect サーバーが独自の証明書を生成します。この証明書には、cert.arm または cert256.arm のいずれかの固定ファイル名が付きます。この証明書は、サーバー・ワークステーション上のサーバー・インスタンス・ディレクトリー (例: /opt/tivoli/tsm/server/bin/cert256.arm) に格納されます。証明書ファイルが存在せず、**SSLTCPPOINT** または **SSLTCPADMINPORT** サーバー・オプションを指定する場合、これらのオプションを設定した状態でサーバーを再始動すると証明書ファイルが作成されます。IBM Spectrum Protect V6.3 サーバー (およびそれ以降のバージョン) は、cert256.arm および cert.arm という名前のファイルを生成します。

V6.3 より古い IBM Spectrum Protect サーバーは、`cert.arm` という名前の証明書ファイルのみを生成します。サーバー上でデフォルトとして設定されている証明書を選択する必要があります。

サーバーへの SSL 接続をセットアップするには、次の手順を実行します。

1. サーバー管理者から証明書を取得します。
2. 以下のコマンドを使用して、クライアントの鍵データベースに証明書をインポートします。

```
dsmcert -add -server <servername> -file <path_to_cert256.arm>
```

認証局の証明書を使用する場合

証明書が VeriSign や Thawte などの認証局 (CA) により発行されている場合、クライアントは SSL に対応済みであるため、次の手順を省略することができます。

外部認証局からのプリインストール済みルート証明書のリストについては、[83 ページの『認証局ルート証明書』](#)を参照してください。

証明書がよく知られている認証局により発行されていない場合は、次の手順を実行します。

1. 署名 CA のルート証明書を取得します。
2. 以下のコマンドを使用して、クライアントの鍵データベースに証明書をインポートします。

```
dsmcert -add -server <servername> -file <path_to_cert256.arm>
```

重要:

1. 疑似ランダム・パスワードを使用して鍵データベースが暗号化されます。パスワードは暗号化されて自動的に `stash` ファイル (`dsmcert.sth`) に格納されます。この `stash` ファイルは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが鍵データベース・パスワードをリトリブするために使用します。
2. クライアントが複数の異なるサーバーに接続できるように、複数のサーバー証明書をクライアント鍵データベース・ファイルに追加できます。また、複数の CA ルート証明書もクライアント鍵データベースに追加できます。
3. 前述のコマンドをバックアップ/アーカイブ・クライアント・ディレクトリーから実行しない場合は、`dsmcert.kdb` および `dsmcert.sth` をそのディレクトリーにコピーする必要があります。
4. デフォルトでは、ローカル鍵データベース・ファイルには `root` の所有権および許可があり、他のユーザーから読み取ることはできません。クライアントを非 `root` ユーザーとして実行する場合は、許可を更新する必要があります。例えば、読み取り権限をすべてのユーザーおよびグループに与えるには、以下のコマンドを実行します。

```
# chmod go+r dsmcert.*
```

5. パフォーマンス上の理由で、SSL はそれが必要なセッションにのみ使用してください。V8.1.2 サーバーと通信している V8.1.2 クライアントは SSL を使用する必要があります。SSL No (デフォルト値) を使用すると、クライアントと V8.1.2 より前のサーバー間でデータが転送される場合に、暗号化が使用されないことを指定します。クライアントが V8.1.2 以降のサーバーに接続する場合、デフォルト値 No を使用すると、オブジェクト・データが暗号化されないことを指定します。クライアントがサーバーと通信する際に、他のすべての情報は暗号化されます。クライアントが V8.1.2 以降のサーバーに接続する場合、値 Yes を使用すると、クライアントがサーバーと通信する際に、オブジェクト・データを含むすべての情報を暗号化するために SSL が使用されることを指定します。所要量の増加を管理するために、IBM Spectrum Protect サーバー・システムにプロセッサー・リソースをさらに追加することを検討してください。
6. クライアントが Transport Layer Security (TLS) バージョン 1.2 以上を使用するサーバーに接続するには、証明書のシグニチャー・アルゴリズムは SHA-1 またはそれより強力なものである必要があります。自己署名証明書を使用する場合は、`cert256.arm` 証明書を使用する必要があります。IBM Spectrum Protect 管理者は、IBM Spectrum Protect サーバー上のデフォルトの証明書を変更しなければならない場合があります。詳しくは、SSLTLS12 サーバー・オプション・トピックを参照してください。

サーバーの **V8.1.1** 以前の **V8** レベル、および **V7.1.7** 以前のレベルと通信する **V8.1.2** クライアントの追加の詳細。

サーバー証明書をクライアント鍵データベースに追加したら、クライアント・オプション・ファイルに **SSL Yes** オプションを追加し、**TCPPORT** オプションの値を更新します。SSL 接続用には別のポートを使用してサーバーをセットアップするのが一般的だということを理解しておくことが重要です。すなわち、2つのポートがサーバー上で開かれることになります。

1. 1つのポートが通常の非 SSL クライアント接続を受け入れます。
2. もう1つのポートが SSL 接続のみを受け入れます。

SSL 対応クライアントで非 SSL ポートへ接続することはできません。その逆も同様です。

tcpport の値が正しくない場合、クライアントはサーバーに接続できません。**tcpport** オプションに正しいポート番号を指定してください。

TLS 1.2 以上より安全性が低いセキュリティー・プロトコルを使用不可にするには、**SSLDISABLELEGACYtls yes** オプションをクライアント・オプション・ファイルに追加するか、Java GUI 内の、「プリファレンス・エディター」の「通信」タブ上の「**TLS 1.2 以上が必要**」チェック・ボックスを選択してください。「TLS 1.2 以上が必要」を選択すると、悪意のあるプログラムによる攻撃の防止に役立ちます。

関連資料

562 ページの『Ssl』

ssl オプションを使用すると、セキュアなクライアント/サーバー間通信を行うための Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーの **V8.1.1** 以前の **V8** レベル、および **V7.1.7** 以前のレベルと通信する場合、SSL を有効にするかどうかを決定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバー **V8.1.2** 以降のレベルおよび **V7.1.8** 以降の **V7** レベルと通信する場合、SSL は常に使用されるため、このオプションはオブジェクト・データが暗号化されるかどうかを制御します。パフォーマンス上の理由から、オブジェクト・データは暗号化しないことを推奨します。

565 ページの『Sslfipsmode』

sslfipsmode オプションは、クライアントがサーバーとの Secure Sockets Layer (SSL) 通信に SSL 連邦情報処理標準 (FIPS) モードを使用するかどうかを指定します。デフォルトは **no** です。

最新の GSKit ライブラリーにアクセスするためのシンボリック・リンクの作成

旧バージョンの GSKit がインストールされているディレクトリーを、システムの最新の GSKit ライブラリーの場所にポイントするシンボリック・リンクを作成できます。

始める前に

- IBM Spectrum Protect クライアント **V8.1.2** 以降のレベル、および **V7.1.8** 以降の **V7** レベルには、GSKit バージョン **8.0.50.78** が必要です。
- IBM Spectrum Protect クライアント **V8.1.1** 以降の **V8** レベル、および **V7.1.7** 以降のレベルには、バージョン **8.0.50.78** より前のバージョンの GSKit が必要です。

このタスクについて

Db2® for Linux, UNIX, and Windows を UNIX および Linux にインストールする場合、ローカルの GSKit ライブラリーもインストールされます。それらのライブラリーは、<db2_install_path>/lib64/gskit_db2 または <db2_install_path>/lib32/gskit_db2 に保管されます。Windows では、デフォルトの場所は **C:\Program Files\ibm\gsk8** になります。

IBM Spectrum Protect など、別の IBM 製品をインストール中に GSKit ライブラリーの別のコピーがインストールされる場合もあります。製品によっては、これらのライブラリーはローカル GSKit ライブラリーの場合とグローバル GSKit ライブラリーの場合があります。GSKit ライブラリーを含む、Db2 for Linux, UNIX, and Windows と別の IBM 製品が両方とも同じシステムにインストールされると、相互運用性の問題が発生する可能性があります。これらの相互運用性の問題は、GSKit が 1つのプロセスで 1つの GSKit ソースの

ライブラリーしか許可しないことが原因で発生します。相互運用性の問題は、予測不能の動作やランタイム・エラーを引き起こす可能性があります。

単一の GSKit ライブラリー・ソースが確実に使用されるように、シンボリック・リンクのアプローチを使用することができます。Db2 for Linux, UNIX, and Windows の最初のインストール時、インストーラーは <db2_install_path>/lib64/gskit または <db2_install_path>/lib32/gskit から <db2_install_path>/lib64/gskit_db2 または <db2_install_path>/lib32/gskit_db2 へのシンボリック・リンクを作成します。これらのシンボリック・リンクは、GSKit ライブラリーのロード元になるデフォルト・ロケーションです。Db2 for Linux, UNIX, and Windows がバンドルされている製品が、シンボリック・リンクをデフォルトのディレクトリーから別の GSKit コピーのライブラリー・ディレクトリーに変更する場合は、新しくインストールされた GSKit が、同じレベルかより新しいレベルのものでなければなりません。この制約事項は、そのライブラリーがグローバルであってもローカルであっても適用されます。Db2 for Linux, UNIX, and Windows をアップグレードまたは更新する間、シンボリック・リンクは保持されます。新しくインストールされたコピーにデフォルト・ロケーションへのシンボリック・リンクがある場合、古いインストール・コピーに関連付けられているシンボリック・リンクが保持されます。新しくインストールされたコピーにデフォルト・ロケーションへのシンボリック・リンクがない場合、新しいインストール・コピーに関連付けられているシンボリック・リンクが保持されます。

シンボリック・リンク <db2_install_path>/lib64/gskit または <db2_install_path>/lib32/gskit が Db2 for Linux, UNIX, and Windows インストール・コピーのパス内にあるため、いくつかの制限が存在します。例えば、いずれかの Db2 コピー用に作成されたインスタンスが複数存在する場合、シンボリック・リンクを変更するとそれらのすべてのインスタンスに影響します。

同様の方法で Domino Server GSKit も変更できます。Domino Server には GSKit フォルダーがありませんが、フォルダー C と N、およびライブラリー libgsk8iccs_64.so があります。まず、これらのフォルダーおよびファイルのソフト・リンクを作成して、IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアント V8.1.2 がインストールされている GSKit パッケージの該当フォルダーを以下のようにポイントできます。

- ln -s /usr/local/ibm/gsk8_64/lib64/C /opt/ibm/lotus/notes/90010/zlinux
- ln -s /usr/local/ibm/gsk8_64/lib64/N /opt/ibm/lotus/notes/90010/zlinux
- ln -s /usr/local/ibm/gsk8_64/lib64/libgsk8iccs_64.so /opt/ibm/lotus/notes/90010/zlinux

次に、DPD ノードのパスワードを domdsmc CHANGEADSMpwd tvt1054_domnote2 tvt1054_domnote2 tvt1054_domnote2 に変更します。最後に domdsmc query adsm を実行します。

他のアプリケーションで IBM Spectrum Protect API で提供されるものより新しいバージョンの GSKit が提供される場合は、クライアントのアップグレードを実行するか次の手順を実行することをお勧めします。

手順

1. 管理者特権を持っている場合、Windows でシンボリック・リンクを作成します。デフォルト・ロケーション C:\Program Files\IBM\gsk8 にある lib64 ディレクトリーの Db2 GSKit コピーの名前を変更します。DOS シェルを開始し、Db2 GSKit の場所にナビゲートしてから、以下のようにディレクトリーの名前を変更します。

```
cd "c:\Program Files\Common Files\Tivoli\TSM\api64\gsk8"
```

```
rename lib64 lib64-api
```

2. DOS シェルで以下のコマンドを実行することで、Db2 GSKit コピーの場所でシンボリック・リンクを作成して、TSM GSKit コピーの場所をポイントします。以下のように Db2 GSKit コピーの場所にナビゲートしてから、シンボリック・リンクを作成します。

```
cd "c:\Program Files\Common Files\Tivoli\TSM\api64\gsk8"
```

```
mklink /d lib64 "C:\Program Files\IBM\gsk8\lib64"
```

3. 変更を有効にするために、Db2 を再始動してください。始動時に Db2 は、GSKit の IBM Spectrum Protect コピーをポイントする新規ロケーションから GSKit をロードします。Db2 コマンド・プロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
db2stop
```

```
db2start
```

認証局ルート証明書

バックアップ/アーカイブ・クライアントには、いくつかの一般的な認証局のルート証明書のリストが含まれています。

以下に、このクライアントと一緒に提供される、いくつかの一般的な認証局のルート証明書のリストを示します。

- Entrust.net Global Secure Server Certification Authority
- Entrust.net Global Client Certification Authority
- Entrust.net Client Certification Authority
- Entrust.net Certification Authority (2048)
- Entrust.net Secure Server Certification Authority
- VeriSign Class 3 Public Primary Certification Authority
- VeriSign Class 2 Public Primary Certification Authority
- VeriSign Class 1 Public Primary Certification Authority
- VeriSign Class 4 Public Primary Certification Authority - G2
- VeriSign Class 3 Public Primary Certification Authority - G2
- VeriSign Class 2 Public Primary Certification Authority - G2
- VeriSign Class 1 Public Primary Certification Authority - G2
- VeriSign Class 4 Public Primary Certification Authority - G3
- VeriSign Class 3 Public Primary Certification Authority - G3
- VeriSign Class 2 Public Primary Certification Authority - G3
- VeriSign Class 1 Public Primary Certification Authority - G3
- Thawte Personal Premium CA
- Thawte Personal Freemail CA
- Thawte Personal Basic CA
- Thawte Premium Server CA
- Thawte Server CA
- RSA Secure Server Certification Authority

他の認証局から発行された証明書を使用するには、クライアント構成の一部として、すべてのクライアントにその認証局のルート証明書をインストールする必要があります。

システムのジャーナル・ベース・バックアップの構成

ジャーナル・ベースのバックアップを実行する前に、ジャーナル・デーモン (Linux の場合) またはジャーナル・エンジン・サービス (Windows の場合) をインストールして構成しておく必要があります。

ジャーナル・デーモンの構成

ジャーナル・ベースのバックアップは、IBM Spectrum Protect ジャーナル・デーモンをインストールして構成することによって使用可能になります。

ジャーナル・デーモンを構成するには、ジャーナル・デーモン構成サンプル・ファイル `tsmjbbd.ini.smp` を編集し、それを `tsmjbbd.ini` として保存します。両方のファイルをデフォルトのインストール・ディレクトリーに置く必要があります。

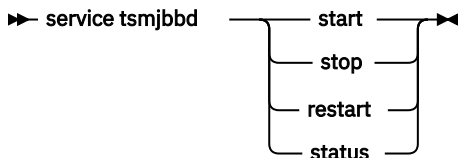
`tsmjbbd.ini` ファイルを構成した後、**tsmjbbd** 実行可能ファイルを開始してジャーナル・デーモンを開始します。

AIX でシステムの再始動後にジャーナル・デーモンを開始するには、`jbbinittab` スクリプト・ファイルを実行して、`/etc/inittab` ファイルに項目を追加します。`tsmjbbd` 実行可能ファイルおよび `jbbinittab` スクリプト・ファイルは、デフォルトのインストール・ディレクトリーにあるはずです。

AIX でジャーナル・デーモンを停止するには、`kill nnnn` コマンドを発行します。ここで、*nnnn* は、**tsmjbbd** のプロセス ID です。ジャーナル・デーモン・プロセス (**tsmjbbd**) はシャットダウンする前に、ファイル変更のバッファリングを停止するように Filepath カーネル拡張機能に通知します。

重要: `kill -9` コマンドは、ファイル変更のバッファリングを停止するように Filepath に通知することなくプロセスを即時に終了するため、`kill -9 nnnn` コマンドを使用しないでください。

Linux の場合は、インストーラーが `/etc/init.d` に `tsmjbbd` サービスを作成します。このサービスを制御するには、以下のコマンドを root ユーザーとして実行して、サービスの停止、開始、再始動、またはサービスの状況の検査を行います。



Linux オペレーティング・システムで `systemd` 初期化サービスを実行する場合、以下のステップを実行してジャーナル・デーモンを開始します。

1. 提供された `systemd` ユニット・ファイル `/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin/tsmjbbd.service` を `/etc/systemd/system/` ディレクトリーにコピーします。
2. `systemd` ユニット・リストを最新表示するには、次のコマンドを実行します。

```
systemctl daemon-reload
```

3. システム・ブート時にジャーナル・デーモンを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
systemctl enable tsmjbbd.service
```

4. ジャーナル・デーモンを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
systemctl start tsmjbbd.service
```

注:

1. ネットワークおよび取り外し可能なファイル・システムはサポートされていません。
2. フル増分バックアップを定期的に行うと、ジャーナル・ベースの日次バックアップを補完する必要があります。フル・プログレッシブ増分バックアップの実行には、ジャーナル・ベース・バックアップより長い時間がかかる可能性があります。スケジューリングの際にはこの情報を考慮して、増分バックアップをオフピーク時にスケジュールするようお勧めします。お客様のビジネス・ニーズに従って、これ

ら2つのバックアップ手法をバランスよく使用してください。例えば、ジャーナル・ベースのバックアップを毎晩のスケジュールに入れ、フル・プログレッシブ増分バックアップを毎週のスケジュールに入れることができます。

3. ジャーナル・ベースのバックアップでは、ファイル・システムの変更をモニターするために Filepath カーネル拡張機能を使用します。ジャーナル・ベースのバックアップのパフォーマンス向上のため、ユーザー・ファイルが含まれていないディレクトリの変更はモニターされず、ジャーナル・ベースのバックアップには含まれません。AIX および Linux システムでジャーナル・ベースのバックアップに含まれないディレクトリを以下にリストします。**incremental** コマンドに **-nojournal** オプションを指定して定期的にフル増分バックアップを実行すると、これらのディレクトリに対する変更が処理されます。

AIX	Linux
<pre> /bin /dev /etc /lib /usr/bin /usr/lib /usr/share </pre>	<pre> /bin /boot /dev /etc /lib /proc /sbin /sys /usr/bin /usr/lib /usr/share /var </pre>

ジャーナル・デーモン構成ファイルは、ジャーナル・ファイル・システムのリストに照らして、更新があるかどうか定期的に検査されます。モニター対象ファイル・システムのリストでのファイル・システムの追加または削除は、ジャーナル・デーモンを停止せずに実行できます。



重要: ジャーナル・デーモンでモニター中のファイル・システムをオフラインにした場合、そのファイル・システムのジャーナル・データベースは削除されます。データベースを保存するには、ジャーナル・ファイル・システム設定スタンザで **PreserveDbOnExit=1** を設定します。この設定により、ジャーナル・データベースはオフラインになっても保存され、ファイル・システムがオンラインに戻ったときにそのジャーナル・データベースが有効になります。詳しくは、[87 ページの『JournaledFileSystemSettings スタンザ』](#)を参照してください。

スタンザの構文およびスタンザ設定は、以下のとおりです。

スタンザの構文:

[StanzaName]

スタンザ設定値の構文:

stanzaSetting=value

注:

1. ファイルでコメントを指定するには、行の先頭にセミコロンを付けます。
2. スタンザおよび値の名前は、大文字小文字を区別しません。
3. 数値は、値の前に 0x を付けて 16 進数で指定することができます。これが付いていなければ、10 進数と解釈されます。
4. これらのジャーナル・ファイル・システム設定は、クライアント・オプション・ファイル内のいずれの設定とも関連付けされません。ジャーナル・デーモンは独立処理であり、クライアント・オプション・ファイル内のオプションは処理しません。

JournalSettings スタンザ

このスタンザのもとで指定される設定値はグローバルで、ジャーナル・デーモン全体に適用されます。

以下に、JournalSettings スタンザの構文を示します。

JournalSettings スタンザの構文:

[JournalSettings]

スタンザ設定値の構文:

JournalSettings=value

以下の JournalSettings 値を指定することができます。

ErrorLog

ジャーナル・デーモンが生成する詳細エラー・メッセージが書き込まれるログ・ファイルを指定します。デフォルト値は、実行可能デーモンのディレクトリー内の `jbberror.log` です。例えば次のとおりです。

```
ErrorLog=/logs/jbberror.log
```

JournalDir

ジャーナル・データベース・ファイルの保管および書き込みが行われるディレクトリー。

指定されたパスが絶対 (例えば、先頭に `dir` という区切り文字がある) `pathname` である場合、このディレクトリーが使用されます。指定されたパスが相対ディレクトリー名である場合、このパスが各ファイル・システム名に付加され、それで作成されたパス名が使用されます。

デフォルトは、(ジャーナルされる各ファイル・システム内で使用される) `.tSm_JoUrNaL` というディレクトリーです。

ジャーナル・データベースがモニター対象のファイル・システム上にあることの利点は、データベースがファイル・システムと一緒に置かれる点です。欠点は、データベースに対する更新を処理して、それを破棄する作業が必要になる点です。

重要: このファイル・システムがクラスター環境で共有されていない限り、データベースは非ジャーナル・ファイル・システムに送信してください。

この設定はすべてのジャーナル・ファイル・システムに適用されますが、各ジャーナル・ファイル・システムの指定変更スタンザにより指定変更することができます。

JournalExcludeList スタンザ

この `exclude` ステートメントのリストによって、変更をフィルターに掛けて、ジャーナル・データベースに記録されないようにします。

このスタンザのステートメントと一致するオブジェクトへの変更は無視され、ジャーナル・データベースに記録されません。

注:

1. ジャーナルから各ファイルを除外することは、バックアップ・クライアントが除外対象とするこれらのファイルには何も影響を与えません。ただし例外としては、ジャーナル・ベースのバックアップ中にこれらのファイル名が、処理されるバックアップ・クライアントに送信されないようにすることについてはその限りではありません。ジャーナルから除外されないファイルでも、一致する除外ステートメントがクライアント・オプション・ファイルにある場合は、バックアップ /アーカイブ・クライアントによって除外する必要があります。
2. ジャーナル・デーモンが提供するものは、バックアップ /アーカイブ・クライアントが提供する `INCLUDE/EXCLUDE` 機能のサブセットだけです。ジャーナル・デーモンは `INCLUDE` ステートメントも `exclude.dir` オプションもサポートしていません。

ジャーナルの除外リストとバックアップ /アーカイブ・クライアントの除外リスト間には、相関関係はありません。

以下のパターン・マッチング・メタ文字がサポートされています。

%

正確に 1 文字と一致します。

ゼロ個または 1 個以上の文字と突き合わせます。

%EnvVar%

環境変数を展開します。

以下に、exclude ステートメントの構文例を示します。

```
[JournalExcludeList]
*.jbb.jbbdb
*.jbbInc.jbbdb
```

JournaledFileSystemSettings スタンザ

このスタンザの設定値は、指定変更スタンザで個々のファイル・システムに合わせて指定変更されない限り、指定された各ジャーナル済みファイル・システムに適用されます。

JournalFileSystems.Extended スタンザに指定するファイル・システムは、それ以前に JournaledFileSystemSettings スタンザに指定したジャーナル・ファイル・システムのリストに指定されているすべてのファイル・システムを指定変更します。 JournaledFileSystemsSettings スタンザに指定したその他のオプションは保存されます。

JournaledFileSystemSettings スタンザの構文は以下のとおりです。

JournaledFileSystemSettings スタンザの構文:

[JournaledFileSystemSettings]

スタンザ設定値の構文:

JournaledFileSystemSetting=value

以下の **JournaledFileSystemSettings** 値を指定することができます。

JournaledFileSystems

ジャーナルするファイル・システムのスペース区切りリストを指定します。完全ファイル・システムの指定および Windows ジャンクション がサポートされています。デフォルト値はありません。実行するジャーナル・デーモンに対して、少なくとも 1 つはジャーナル・ファイル・システムを指定する必要があります。ジャーナル・ファイル・システムは、デーモンを再始動しなくても オンラインで追加や除去が可能です。例えば次のとおりです。

```
JournaledFileSystems=/home /other
```

重要: ジャーナルは、厳密にストリングの一致に基づいてオブジェクト名を選択します。したがって、ジャーナルするファイル・システムを選択する際には、ユーザーは注意を払う必要があります。例えば、ファイル・システム /jbb があり、/jbb/mnt1 という別のファイルがあるとします。ジャーナルに /jbb のみをモニターするように要求すると、/jbb/mnt1 に対する変更もすべてこのストリングと一致し、データベースに入力されてしまいます。しかし、クライアントでバックアップを行うと、クライアントはファイル・システムに基づいて名前を解析し、ジャーナルがこのファイル・システムをモニターしていないことに気づき、ジャーナルに対して、/jbb/mnt1 ファイルをデータベースから除去するように指示します。これに対する解決策は、両方ともモニターするか、または JournalExcludeList を使用することです。仮想マウント・ポイント・オプションでも同じことが該当します。このリストと整合することが求められます。例えば、dsm.sys オプション・ファイルに仮想マウント・ポイントとして /home/student1 を指定した場合に、/home をジャーナルするには、JournaledFileSystems=/home /home/student1 と指定する必要があります。この場合、2 つの別個のデータベースが作成されます。

JournalDbSize

ジャーナル・データベースを拡大できる最大サイズを指定します。ジャーナル・データベースのサイズは、バイトで表されます。値がゼロ (0) の場合は、データベース・サイズを制限するのは、ジャーナル・データベースが入るファイル・システムの容量のみであることを示します。デフォルトは 0 (無限) です。例えば次のとおりです。

```
JournalDbSize=0x100000000
```

NotifyBufferSize、DirNotifyBufferSize

ジャーナル・ファイル・システムの変更通知バッファ・サイズを指定します。ジャーナル・ファイル・システムで大量の変更アクティビティが行われている場合、このサイズを増やさなければなら

いことがあります。デフォルトは、ファイルの場合は 0x00020000 (128 k)、ディレクトリーの場合は 0x00010000 (64 k) です。

```
NotifyBufferSize=0x00200000
```

PreserveDbOnExit 設定

この設定により、ジャーナルは、ジャーナル・ファイル・システムがいったんオフラインになり、その後オンラインに戻ったときに有効な状態に保つことができます。これは、システムのリブートおよびリソースの移動時に、ジャーナルを保持するのに役立ちます。

この設定により、ジャーナル・ベースのバックアップは、フル増分バックアップを行わないで、デーモンが再始動された (あるいはファイル・システムがオンラインに戻った) ときに処理を続行することができます。

注: ジャーナル・デーモンが稼働していない (あるいはファイル・システムがオフラインの) 間に起こる変更アクティビティーは、ジャーナルに記録されません。

値 1 は、ジャーナル・ファイル・システムがオフラインの場合は、ジャーナル・ファイル・システムのジャーナル・データベースが削除されないことを指定します。そのデータベースは、ジャーナル・ファイル・システムがオンラインに戻ったときも有効です。この値は、ジャーナル・ファイル・システムがオフラインの間に起こる任意のファイル・システムの変更アクティビティーがジャーナル・データベースに反映されないので、使用には注意が必要です。デフォルト 0 の場合、ジャーナル済みファイル・システムのジャーナル・データベースは削除されます。

注: ジャーナルは、ジャーナル・ファイル・システムが正常にオフラインになった場合にのみ保存されます。リソースが使用できなくなり、deferFsMonStart 設定が指定された場合にはオフラインにされます。通知バッファのオーバーランなどのエラーによりファイル・システムがオフラインになった場合、ジャーナルは保存されません。

注: PreserveDBOnExit を設定するのは、ジャーナル・サービスの制御シャットダウンを確実に実行できる場合のみにしてください。「制御シャットダウン」の適用範囲には、システムをリブートするためのジャーナル・サービスの停止、クラスター・リソースのフェイルオーバー、またはクラスター・リソースの移動が含まれます。シャットダウンが制御されていないと、ジャーナル・データベースは破損する場合があります。したがって、ジャーナル・サービスが制御された方法でシャットダウンされなかった場合、またはジャーナル・データベースが制御されていない方法でオフラインになった場合は、以下のステップを実行してください。

1. ジャーナル・サービス (稼働している場合) を停止します。
2. 破損したジャーナル・データベースを削除します。
3. ジャーナル・サービスを再始動します。
4. 増分バックアップを実行します。

出口ルーチンでジャーナル・データベースを削除しない例は、以下のとおりです。

```
preserveDBOnExit=1
```

deferFSMonStart 設定

この設定では、次の場合にファイル・システムのモニター開始の試行が据え置かれます。

- 指定したジャーナル・ファイル・システムが無効か、使用可能ではない場合
- 指定したジャーナル・ファイル・システムのジャーナル・ディレクトリーがアクセスできないか、作成できない場合

リソースは、deferRetryInterval 設定を使用して指定した間隔で検査されます。

値 1 は、設定がオンであることを示します。値 0 は、設定がオフであることを示します。デフォルトはオフ (0 にセット) です。

deferRetryInterval 設定

この設定値では秒数を設定して、その値は、deferRetryInterval 設定を使用可能としている遅延対象のファイル・システムが使用可能かどうかをチェックされて、オンラインになる秒数値を指定します。デフォルト値は 5 秒です。

logFSErrors 設定

値を 1 に設定すると、ジャーナル・ファイル・システムまたはジャーナル・ディレクトリーへのアクセス時に検出されたすべてのエラーをログに記録する必要があることを示します。値をゼロに設定すると、据え置きファイル・システムおよびジャーナル・ディレクトリーの検査中に検出されたエラーの記録が抑止されることを示します。これは通常、*deferFSMonStart* 設定と共に使用して、ジャーナル・ファイル・システムのオンラインへの切り替えが据え置かれた場合に「File System Unavailable (ファイル・システムは使用不能)」というメッセージがログに大量に書き込まれないようにします。デフォルト値は 1 (すべてのエラーを記録) です。

関連概念

89 ページの『スタンザの指定変更』

バッファ・サイズを除く、**JournaledFileSystemSettings** スタンザのどの設定値も、指定変更スタンザを作成することによって、特定のジャーナル済みファイル・システムに合わせて指定変更することができます。

89 ページの『JournaledFileSystems.Extended スタンザ』

JournaledFileSystems.Extended スタンザは、JournaledFileSystems スタンザに含まれているすべてのファイル・システムを指定変更します。JournaledFileSystem スタンザによる 1023 文字の制限も取り外します。

JournaledFileSystems.Extended スタンザ

JournaledFileSystems.Extended スタンザは、JournaledFileSystems スタンザに含まれているすべてのファイル・システムを指定変更します。JournaledFileSystem スタンザによる 1023 文字の制限も取り外します。

JournaledFileSystems スタンザにファイル・システムを含める場合、そのスタンザで使用できる文字の総数は 1023 文字です。多数のファイル・システムを持つ大規模な構成の場合、1023 文字という制限は、すべてのファイル・システムを指定するには小さすぎます。ジャーナル・ベースのバックアップに入れたいすべてのファイル・システムを含めるために使用しなければならない文字の数が 1023 文字を超える場合は、それらのファイル・システムを JournaledFileSystems.Extended スタンザに指定してください。この拡張スタンザには、1023 文字の制限はありません。JournaledFileSystems.Extended の値は、他のスタンザに指定されたすべての値を指定変更します。同じファイル・システムが JournaledFileSystems スタンザと JournaledFileSystems.Extended スタンザの両方に指定されていた場合、JournaledFileSystems スタンザに指定されたファイル・システムは無視されます。

JournaledFileSystems.Extended の構文は、単純なリスト形式です。ジャーナル・ベースのバックアップにファイル・システムを組み込むには、ジャーナル・デーモン構成ファイル (デフォルト名は `tmsjbbd.ini`) を編集します。

JournaledFileSystems.Extended スタンザの構文:

[JournaledFileSystems.Extended]

スタンザ設定値の構文:

```
/filesystem_1  
/filesystem_2  
.  
.  
/filesystem_n
```

ジャーナル・ベースのバックアップに含めたい個々のファイル・システムをリストします。

スタンザの指定変更

バッファ・サイズを除く、**JournaledFileSystemSettings** スタンザのどの設定値も、指定変更スタンザを作成することによって、特定のジャーナル済みファイル・システムに合わせて指定変更することができます。

HookFileName

ジャーナルがファイル・システムのモニターを開始するには、そのファイル・システム内の既存ファイルの名前を知っている必要があります。この設定は既存ファイルを指定します。これにより、このファイルへのアクセスが、このファイル・システムがオンラインかどうかのテストとして利用されます。

(バックアップ/アーカイブ・クライアントでは仮想マウント・ポイントの使用が許可されるため、マウント済みのシステム定義は使用できません。つまり、バックアップ/アーカイブ・クライアント・システムはディレクトリーを (仮想) ファイル・システムとして処理できるということです。)

そのため、このファイル・システムをマウントおよびアンマウントできる場合、**HookFileName** を指定する必要があります。

HookFileName を入力しない場合、ジャーナル・デーモンは一時ファイルを最高位のディレクトリーに作成し、それを使用してモニターを開始し、その後にその一時ファイルを削除する、という動作を試みます。

以下に **JournaledFileSystemSettings** スタンザの構文を示します。

JournaledFileSystemSettings スタンザの構文:

[JournaledFileSystemSettings.fs]

スタンザ設定値の構文:

JournaledFileSystemSetting=override value

例えば、/home の指定変更スタンザ名は次のようになります。

```
JournaledFileSystemSettings./home
HookFileName=/home/doNotDeleteThisFile
```

クライアント・サイドのデータ重複排除

データ重複排除 は、冗長データを除去してストレージ必要量を削減する方法です。

概説

クライアント・サイドのデータ重複排除 とサーバー・サイドのデータ重複排除 の 2 つのタイプのデータ重複排除を使用できます。

クライアント・サイドのデータ重複排除は、バックアップおよびアーカイブ 処理中、データが IBM Spectrum Protect サーバーに転送される前に、バックアップ/アーカイブ・クライアントが冗長データを削除するために使用するデータ重複排除技法です。クライアント・サイドのデータ重複排除を使用すると、ローカル・エリア・ネットワーク上で送信されるデータの容量を削減できます。

サーバー・サイドのデータ重複排除は、サーバーによって行われるデータ重複排除技法です。IBM Spectrum Protect の管理者は、**REGISTER NODE** または **UPDATE NODE** サーバー・コマンドで **DEDUP** パラメーターを指定して、使用するデータ重複排除のロケーション (クライアントまたはサーバー) を指定することができます。

機能拡張

クライアント・サイドのデータ重複排除では、以下の操作を実行できます。

- クライアント上の特定のファイルをデータ重複排除から除外します。
- クライアントとサーバー間のネットワーク・トラフィックを削減する、データ重複排除キャッシュを使用可能にします。このキャッシュには、以前の増分バックアップ操作でサーバーに送信された エクステントが含まれています。クライアントは、サーバーに照会してエクステントがあるかどうかを確認する代わりに、クライアント自体のキャッシュに照会します。

クライアント・キャッシュのサイズと場所を指定します。サーバーとローカル・キャッシュ間に不整合が検出される場合、ローカル・キャッシュは除去され、再取り込みされます。

注: IBM Spectrum Protect API を使用するアプリケーションの場合は、データ重複排除キャッシュを使用してはなりません。キャッシュが IBM Spectrum Protect サーバーと同期していないことが原因でバックアップ障害が起きる可能性があるためです。複数の同時バックアップ/アーカイブ・クライアント・セッションが構成されている場合、セッションごとに別々のキャッシュが構成されていなければなりません。

- サーバーによって保管されるデータの容量を削減するために、クライアント・サイドのデータ重複排除と圧縮の両方を使用可能にします。各エクステントは、サーバーに送信される前に圧縮されます。スト

レーズの節約と、クライアント・データの圧縮に必要な処理能力との間には、トレードオフがあります。一般に、クライアント・システムでデータの圧縮と重複排除を行う場合、データ重複排除のみを行う場合の約2倍の処理能力を使用します。

サーバーは、重複排除と圧縮が行われたデータを処理できます。さらに、V6.2より前のバックアップ・アーカイブ・クライアントは、重複排除と圧縮が行われたデータをリストアできます。

クライアント・サイドのデータ重複排除では、以下のプロセスが使用されます。

- クライアントがエクステントを作成します。エクステントとは、重複を識別するために、他のファイル・エクステントと比較されるファイルの部分です。
- クライアントとサーバーが連携して重複エクステントを識別します。クライアントが、非重複エクステントをサーバーに送信します。
- それ以降のクライアント・データ重複排除操作で新しいエクステントが作成されます。それらのエクステントの一部または全部が、以前のデータ重複排除操作で作成され、サーバーに送信されたエクステントと一致する可能性があります。一致するエクステントは、サーバーに再送信されません。

利点

クライアント・サイドのデータ重複排除には、以下のようないくつかの利点があります。

- ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) 経由で送信されるデータの容量を削減できます。
- 重複データの識別に必要な処理能力が、サーバーからクライアント・ノードにオフロードされます。重複排除対応のストレージ・プールでは、サーバー・サイドのデータ重複排除は常に使用可能です。しかし、重複排除対応のストレージ・プール内にあるファイルで、クライアントによって重複排除されたものには、追加の処理は必要ありません。
- サーバー上の重複データの除去に要求される処理能力が不要になります。そのため、サーバー上のスペースが即時に節約できます。

クライアント・サイドのデータ重複排除には、潜在的な欠点があります。クライアント・エクステントを含む1次ストレージ・プールを、重複排除されていないコピー・ストレージ・プールにバックアップするまで、サーバーにはクライアント・ファイル全体のコピーはありません。(エクステントは、データ重複排除プロセス中に作成されるファイルの部分です。) 非重複排除ストレージ・プールへのストレージ・プール・バックアップ中に、クライアント・エクステントは再組み立てされて連続したファイルになります。

デフォルトでは、データ重複排除用にセットアップされた1次順次アクセス・ストレージ・プールは、レクラメーション処理の前、および重複データの削除前に、重複排除されていないコピー・ストレージ・プールにバックアップしておく必要があります。このデフォルトの処理によって、サーバーでは常に1次ストレージ・プールまたはコピー・ストレージ・プールのどちらかにファイル全体のコピーが存在するようになります。

重要: さらにデータを削減するために、クライアント・サイドのデータ重複排除と圧縮を併せて有効にすることができます。各エクステントは、サーバーに送信される前に圧縮されます。圧縮によりスペースは削減されますが、クライアント・ワークステーションでの処理時間は増大します。

データ重複排除が有効なストレージ・プール (ファイル・プール) では、データ・エクステントのインスタンスが1つだけ保存されます。同じデータ・エクステントの他のインスタンスは、保存されたインスタンスへのポインターに置き換えられます。

クライアント・サイドのデータ重複排除が有効になっていて、サーバーの宛先プールがストレージ不足になっていますが、次のプールが定義されている場合、サーバーはトランザクションを停止します。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、クライアント・サイドのデータ重複排除を行わずにトランザクションを再試行します。リカバリーするには、IBM Spectrum Protect 管理者が元のファイル・プールにスクラッチ・ボリュームを追加するか、重複排除を無効にして操作を再試行する必要があります。

クライアント・サイドのデータ重複排除を行うには、IBM Spectrum Protect サーバーがバージョン 6.2 以上でなければなりません。

前提条件

クライアント・サイドのデータ重複排除を構成する場合は、以下の要件を満たす必要があります。

- クライアントとサーバーのバージョンが 6.2.0 以降でなければなりません。必ず最新の保守バージョンを使用する必要があります。
- クライアントがファイルをバックアップまたはアーカイブすると、データにバインドされている管理クラスのコピー・グループで指定された 1 次ストレージ・プールにデータが書き込まれます。クライアント・データを重複排除するには、1 次ストレージ・プールは、データ重複排除が有効に設定された 順次アクセス・ディスク (FILE) ストレージ・プールまたはコンテナ・ストレージ・プールでなければなりません。
- クライアント上の DEDUPLICATION オプションの値が YES に設定されている必要があります。
DEDUPLICATION オプションは、クライアント・オプション・ファイル、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI のプリファレンス・エディター、または IBM Spectrum Protect サーバーのクライアント・オプション・セットで設定することができます。クライアント・オプション・セットで DEDUPLICATION オプションを設定するには、**DEFINE CLIENTOPT** コマンドを使用します。クライアント・オプション・セット内の値をクライアントが指定変更しないようにするには、**FORCE=YES** を指定します。
- クライアント・サイドのデータ重複排除がサーバーで有効でなければなりません。クライアント・サイドのデータ重複排除を有効にするには、**REGISTER NODE** または **UPDATE NODE** サーバー・コマンドの **DEDUPLICATION** パラメーターを使用します。パラメーターの値を CLIENTORSERVER に設定します。
- クライアント上のファイルが、クライアント・サイドのデータ重複排除処理から除外されないようにします。デフォルトでは、すべてのファイルが含まれます。オプションで、`exclude.dedup` クライアント・オプションを使用して、特定のファイルをクライアント・サイドのデータ重複排除から除外することができます。
- クライアント上のファイルを暗号化してはなりません。暗号化されたファイル、および暗号化されたファイル・システムからのファイルを重複排除することはできません。
- ファイルは 2 KB より大きく、トランザクションは CLIENTDEDUPTXNLIMIT オプションで指定された値より少なくなければなりません。2 KB 以下のファイルは重複排除されません。

サーバー上の CLIENTDEDUPTXNLIMIT オプションを設定することによって、データ重複排除の最大トランザクション・サイズをサーバーが制限できる。このオプションについて詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

次の操作は、クライアント・サイドのデータ重複排除よりも優先されます。

- LAN フリー・データ移動
- 同時書き込み操作
- データ暗号化

重要: クライアント・サイドのデータ重複排除時に、上記の操作をスケジュールに入れたり、使用可能にしたりしないでください。クライアント・サイドのデータ重複排除中に上記の操作のいずれかが行われると、クライアント・サイドのデータ重複排除はオフになり、メッセージがエラー・ログに書き込まれます。

クライアント・サイドのデータ重複排除を有効にするかどうかは、サーバー上の設定によって最終的に決まります。92 ページの表 26 を参照してください。

表 26. データ重複排除の設定: クライアントとサーバー		
クライアント DEDUPLICATION オプションの値	サーバー上の設定	データ重複排除のロケーション
Yes	サーバー上またはクライアント上	クライアント
Yes	サーバーのみ	サーバー
No	サーバー上またはクライアント上	サーバー

表 26. データ重複排除の設定: クライアントとサーバー (続き)

クライアント DEDUPLICATION オプションの値	サーバー上の設定	データ重複排除のロケーション
No	サーバーのみ	サーバー

暗号化ファイル

IBM Spectrum Protect サーバーと バックアップ/アーカイブ・クライアントは、暗号化されたファイルを重複排除することはできません。データ重複排除処理中に暗号化ファイルが検出された場合、そのファイルは重複排除されず、メッセージがログに記録されます。

ヒント: 暗号化されたファイルを、クライアント・サイドの データ重複排除に適格なファイルと別個に処理する必要はありません。両方のタイプのファイルを同一操作で処理できます。ただし、別々のトランザクションでサーバーに送信されます。

セキュリティ上の予防措置として、以下のステップを 1 つ以上実行することができます。

- ストレージ装置の暗号化と、クライアント・サイドのデータ重複排除を共に有効にしておきます。
- 安全なノードにのみクライアント・サイドのデータ重複排除を使用します。
- ネットワーク・セキュリティに関する情報が不明確な場合は、Secure Sockets Layer (SSL) を使用可能にします。
- 特定のオブジェクト (例えば、イメージ・オブジェクト) をクライアント・サイドのデータ重複排除で処理したくない場合は、それらをクライアントで処理対象から除外できます。オブジェクトがクライアント・サイドのデータ重複排除から除外され、データ重複排除用にセットアップされたストレージ・プールに送信されると、そのオブジェクトはサーバーで重複排除されます。
- **SET DEDUPVERIFICATIONLEVEL** コマンドを使用して、クライアント・サイドのデータ重複排除中にサーバーへの潜在的なセキュリティ・アタックを検出します。このコマンドを使用すると、サーバーが検証するクライアント・エクステントの割合を指定できます。サーバーがセキュリティ・アタックの可能性を検出すると、メッセージが表示されます。

関連タスク

94 ページの『[クライアントのデータ重複排除の構成](#)』

データ重複排除を使用してファイルをバックアップまたはアーカイブできるようにクライアントを構成します。

関連資料

377 ページの『[Deduplication](#)』

deduplication オプションを使用して、バックアップおよびアーカイブ処理中 IBM Spectrum Protect サーバーにデータを転送するときに、冗長クライアント・サイド・データ除去を有効にするかどうかを指定します。

416 ページの『[Exclude オプション](#)』

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

375 ページの『[Dedupcachepath](#)』

dedupcachepath オプションを使用して、クライアント・サイド・データのデータ重複排除キャッシュ・データベースが作成されるロケーションを指定します。

376 ページの『[Dedupcachesize](#)』

dedupcachesize オプションは、データ重複排除のキャッシュ・ファイルの最大サイズを決定するために使用します。キャッシュ・ファイルがその最大サイズに達すると、キャッシュの内容が削除されて新規項目が追加されます。

405 ページの『[Enablededupcache](#)』

enablededupcache オプションは、クライアント・サイドのデータ重複排除中にキャッシュを使用するかどうかを指定するために使用します。ローカル・キャッシュを使用すると、IBM Spectrum Protect サーバーとクライアントの間のネットワーク・トラフィックを削減できます。

ieobjtype オプションは、include/exclude ステートメント内にクライアント・サイドのデータ重複排除操作のオブジェクト・タイプを指定するために使用します。

クライアントのデータ重複排除の構成

データ重複排除を使用してファイルをバックアップまたはアーカイブできるようにクライアントを構成します。

始める前に

データ重複排除を使用するようにクライアントを構成する前に、90 ページの『クライアント・サイドのデータ重複排除』に示されている要件を満たしていることを確認してください。

- サーバーでは **REGISTER NODE** または **UPDATE NODE** コマンドで **DEDUP=CLIENTORSERVER** パラメーターを使用して、クライアント・サイドのデータ重複排除をクライアントに対して使用可能にしなければならない。
- データのストレージ・プール宛先が、データ重複排除が使用可能なストレージ・プールでなければならない。
- ユーザーのファイルが必ず正しい管理クラスにバインドされるようになっている。
- ファイルが 2 KB より大きくななければならない。

クライアント・サイドのデータ重複排除処理からファイルを除外することができます。デフォルトでは、すべてのファイルが処理対象に含まれます。詳しくは、exclude.dedup オプションを参照してください。

サーバー上の CLIENTDEDUPTXNLIMIT オプションを設定することによって、データ重複排除の最大トランザクション・サイズをサーバーが制限できる。

手順

以下のいずれかの方法を使用して、クライアントでデータ重複排除を使用可能にします。

オプション	説明
クライアント・オプション・ファイルを編集する	<ul style="list-style-type: none"> • dsm.sys ファイルに deduplication yes オプションを追加します。
プリファレンス・エディター	<ol style="list-style-type: none"> IBM Spectrum Protect ウィンドウから、「編集」 > 「クライアント・プリファレンス」をクリックします。 「重複排除」をクリックします。 「重複排除を使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。 「OK」をクリックして選択内容を保存し、プリファレンス・エディターを閉じます。

タスクの結果

クライアントにデータ重複排除を構成したら、バックアップまたはアーカイブ操作を開始します。操作が完了すると、バックアップまたはアーカイブ・レポートに、この操作で重複排除されたデータの量、およびクライアント・サイドのデータ重複排除により処理されたファイルの数が表示されます。

バックアップまたはアーカイブ操作に十分なディスク・スペースがない場合は、次の手順を実行してクライアントでローカル・データ重複排除キャッシュを使用しないでクライアント・サイドのデータ重複排除を使用可能にすることができます。

1. クライアント・オプション・ファイルに deduplication yes オプションを追加します。
 - dsm.sys ファイルに deduplication yes オプションを追加します。このオプションは GUI でも設定できます。

2. 以下のいずれかの手順を実行して、ローカル・データ重複排除キャッシュをオフにします。

- dsm.sys ファイルに ENABLEDEDUPCACHE NO オプションを追加します。

このオプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントのプリファレンス・エディターで「重複排除キャッシュを使用可能にする」チェック・ボックスの選択を解除しても設定できます。

例

次の例では、セッションの照会コマンドを使用して、データ重複排除に対して処理されたデータのタイプを表示しています。

```
Protect> q sess
IBM Spectrum Protect Server Connection Information

Server Name.....: SERVER1
Server Type.....: Windows
Archive Retain Protect...: "No"
Server Version.....: Ver. 6, Rel. 2, Lev. 0.0
Last Access Date.....: 08/25/2009 13:38:18
Delete Backup Files.....: "No"
Delete Archive Files.....: "Yes"
Deduplication.....: "Client Or Server"

Node Name.....: AVI
User Name.....:
```

次の例では、管理クラスの照会コマンドを使用して、データ重複排除に対して処理されたデータのタイプを表示しています。

```
Protect> q mgmt -det
Domain Name : DEDUP
Activated Policy Set Name : DEDUP
Activation date/time : 08/24/2009 07:26:09
Default Mgmt Class Name : DEDUP
Grace Period Backup Retn. : 30 day(s)
Grace Period Archive Retn.: 365 day(s)

MgmtClass Name : DEDUP
Description : dedup - values like standard
Space Management Technique : None
Auto Migrate on Non-Usage : 0
Backup Required Before Migration: YES
Destination for Migrated Files : SPACEMGP00L
Copy Group
Copy Group Name.....: STANDARD
Copy Type.....: Backup
Copy Frequency.....: 0 day(s)
Versions Data Exists...: 2 version(s)
Versions Data Deleted...: 1 version(s)
Retain Extra Versions...: 30 day(s)
Retain Only Version....: 60 day(s)
Copy Serialization.....: Shared Static
Copy Mode.....: Modified
Copy Destination.....: AVIFILEP00L
Lan Free Destination...: NO
Deduplicate Data.....: YES

Copy Group Name.....: STANDARD
Copy Type.....: Archive
Copy Frequency.....: Cmd
Retain Version.....: 365 day(s)
Copy Serialization.....: Shared Static
Copy Mode.....: Absolute
Retain Initiation.....: Create
Retain Minimum.....: 65534 day(s)
Copy Destination.....: FILEP00L
Lan Free Destination...: NO
Deduplicate Data.....: YES

ANS1900I 戻りコード 0。
```

関連概念

[90 ページの『クライアント・サイドのデータ重複排除』](#)

データ重複排除 は、冗長データを除去してストレージ必要量を削減する方法です。

関連資料

[CLIENTDEDUPTXNLIMIT オプション](#)

[REGISTER NODE コマンド](#)

[UPDATE NODE \(ノード属性の更新\)](#)

377 ページの『Deduplication』

deduplication オプションを使用して、バックアップおよびアーカイブ 処理中 IBM Spectrum Protect サーバーにデータを転送するときに、冗長クライアント・サイド・データ除去を有効にするかどうかを指定します。

405 ページの『Enablededupcache』

enablededupcache オプションは、クライアント・サイドのデータ重複排除中にキャッシュを使用するかどうかを指定するために使用します。ローカル・キャッシュを使用すると、IBM Spectrum Protect サーバーとクライアントの間のネットワーク・トラフィックを削減できます。

416 ページの『Exclude オプション』

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

データ重複排除からのファイルの除外

バックアップまたはアーカイブ 処理中に、データ重複排除からファイルを除外することができます。

このタスクについて

アーカイブのデータ重複排除の場合は、ファイルのみを除外できます。バックアップのデータ重複排除の場合は、ファイルとイメージ (該当する場合) を除外できます。

手順

特定のファイルをクライアント・サイドのデータ重複排除で処理したくない場合は、GUI を使用してデータ重複排除処理からファイルを除外することができます。

1. 「編集」 > 「クライアント・プリファレンス」 をクリックします。
2. 「包含/除外」 タブをクリックします。
3. 「追加」 をクリックして、「include-exclude オプションの定義 (Define Include-Exclude Options)」 ウィンドウを開きます。
4. 処理のカテゴリを選択します。
 - ・ アーカイブ 処理中にデータ重複排除からファイルを除外するには、「カテゴリ」 リストで「アーカイブ」を選択します。
 - ・ バックアップ 処理中にデータ重複排除からファイルを除外するには、「カテゴリ」 リストで「バックアップ」を選択します。
5. 「タイプ」 リストで「Exclude.Dedup」を選択します。
6. 「オブジェクト・タイプ」 リストから項目を選択します。
 - ・ アーカイブ 処理の場合は、「ファイル」 のオブジェクト・タイプのみが使用可能です。
 - ・ バックアップ 処理の場合は、次のいずれかのオブジェクト・タイプを選択します。
 - File
 - Image
7. 「ファイルまたはパターン」 フィールドで、ファイルまたはパターンを指定します。ワイルドカード文字を使用することができます。ファイルまたはパターンを入力したくない場合は、「参照」 をクリックして選択ウィンドウを開いてからファイルを選択します。マウント済みのファイル・スペースの場合は、選択ウィンドウからディレクトリーのマウント・ポイントを選択できます。
8. 「OK」 をクリックして、「include-exclude オプションの定義 (Define Include-Exclude Options)」 ウィンドウを閉じます。定義した除外オプションは、「include-exclude プリファレンス (Include-Exclude

Preferences)』 タブの「ステートメント」 リスト・ボックスの下部にある除外ステートメントにあります。

9. 「**OK**」をクリックして選択内容を保存し、プリファレンス・エディターを閉じます。

次のタスク

dsm.sys ファイルを編集して、データ重複排除処理からファイルを除外することもできます。

1. deduplication yes オプションを追加します。
2. ディレクトリー上のファイルをデータ重複排除から除外します。例えば、/Users/Administrator/Documents/Taxes/ ディレクトリーのファイルを除外するには、以下のステートメントを追加します:
EXCLUDE.dedup /Users/Administrator/Documents/Taxes/.../*
3. ファイル・システムのイメージ・バックアップに対して、クライアント・サイドのデータ重複排除を除外します。例えば、/home ファイル・システムを除外するには、以下のステートメントを追加します。
EXCLUDE.DEDUP /home/*/* IEOBJTYPE=Image

重要: オブジェクトがデータ重複排除プールに送られると、そのオブジェクトがクライアント・サイドのデータ重複排除から除外されていても、サーバー上でデータ重複排除が実行されます。

関連概念

90 ページの『[クライアント・サイドのデータ重複排除](#)』

データ重複排除は、冗長データを除去してストレージ必要量を削減する方法です。

関連資料

377 ページの『[Deduplication](#)』

deduplication オプションを使用して、バックアップおよびアーカイブ処理中 IBM Spectrum Protect サーバーにデータを転送するときに、冗長クライアント・サイド・データ除去を有効にするかどうかを指定します。

405 ページの『[Enablededupcache](#)』

enablededupcache オプションは、クライアント・サイドのデータ重複排除中にキャッシュを使用するかどうかを指定するために使用します。ローカル・キャッシュを使用すると、IBM Spectrum Protect サーバーとクライアントの間のネットワーク・トラフィックを削減できます。

416 ページの『[Exclude オプション](#)』

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判断することもできます。

関連タスク

[フェイルオーバー時のデータのリストアまたはリトリブ](#)

クライアントが 2 次サーバーにフェイルオーバーした場合、複製されたデータを 2 次サーバーからリストアまたはリトリブすることができます。

自動クライアント・フェイルオーバーの概要

IBM Spectrum Protect サーバーで障害が発生すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントはデータ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。

通常の実動プロセス中にクライアントが接続する IBM Spectrum Protect サーバーは、1 次サーバーと呼ばれます。1 次サーバーとクライアント・ノードがノード複製用にセットアップされると、そのサーバーはソース複製サーバーとも呼ばれるようになります。

ソース複製サーバー上のクライアント・データは別の IBM Spectrum Protect サーバー (すなわち、ターゲット複製サーバー) に複製できます。このサーバーは 2 次サーバー とも呼ばれ、1 次サーバーに障害が発生したときにクライアントが自動的にフェイルオーバーするサーバーです。

クライアントが 2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするには、このサーバーの接続情報がクライアントに提供されている必要があります。通常の操作では、2 次サーバーの接続情報はログオン・プロセス中に 1 次サーバーからクライアントに自動送信されます。2 次サーバー情報は、クライアント・オプション・ファイルに自動的に保存されます。このサーバーの情報を追加するための手操作による介入は不要です。

クライアントがサーバーにログオンするたびに、クライアントは 1 次サーバーへの接続を試みます。1 次サーバーが使用できない場合、クライアントは、クライアント・オプション・ファイルの 2 次サーバー情報に従って自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーします。

このフェイルオーバー・モードでは、複製された任意のクライアント・データをリストアあるいはリトリブすることができます。1 次サーバーが再びオンラインになると、クライアントは次の始動時に自動的に 1 次サーバーにフェイルバックします。

例えば、次のサンプル・テキストは、クライアントに送信され、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に保存される、2 次サーバーに関する接続情報です。

```
*** These options should not be changed manually
REPLSERVERNAME      TARGET
REPLTCPSEVERADDRESS 192.0.2.9
REPLTCPSEVERADDRESS 1501
REPLTCPSEVERADDRESS 1502
REPLSSLPORT          60.4a.c3.e1.85.ba.11.e2.af.ce.00.0c.29.2f.07.d3
REPLSERVERGUID

MYREPLICATIONServer TARGET
*** end of automatically updated options
```

自動クライアント・フェイルオーバーの要件

自動クライアント・フェイルオーバー用にクライアントを構成または使用するには、バックアップ/アーカイブ・クライアントと IBM Spectrum Protect サーバーが事前にいくつかの要件を満たしている必要があります。

自動クライアント・フェイルオーバーを可能にするには、クライアントが以下の要件を満たしていることを確認してください。

- 1 次サーバー、2 次サーバー、およびバックアップ/アーカイブ・クライアントは IBM Spectrum Protect バージョン 7.1 以降のバージョンを稼働している必要があります。
- 1 次サーバーと 2 次サーバーがノード複製用にセットアップされている必要があります。
- `REGISTER NODE REPLSTATE=ENABLED` または `UPDATE NODE REPLSTATE=ENABLED` サーバー・コマンドを使用して、クライアント・ノードがソース複製サーバーでノード複製用に構成されている必要があります。
- デフォルトでは、クライアントは自動クライアント・フェイルオーバーを実行できるように設定されています。ただし、クライアント・オプション・ファイルで `usereplicationfailover no` オプションが指定されている場合は、値を `yes` に変更するか、そのオプションを削除してください。
- クライアント・オプション・ファイルに 2 次サーバーに関する有効な接続情報が存在している必要があります。通常の操作では、この情報は 1 次サーバーからクライアントに自動送信されます。
- 1 次サーバーから送信される 2 次サーバーの接続情報を保存するには、クライアントに `dsm.opt` ファイル (Windows クライアントの場合)、および `dsm.sys` ファイル (AIX、Linux、Mac OS X、Oracle Solaris の各クライアントの場合) に対する書き込み権限が必要です。これらのファイルに対する書き込み権限がクライアントにない場合、2 次サーバーの情報はクライアント・オプション・ファイルに保存されず、エラー・ログにエラーが追加されます。
- `root` 以外のユーザーは、ノード複製テーブルのデフォルト・ロケーションを使用できません。
nrttablepath オプションを `dsm.sys` ファイルに追加して、別のロケーションを指定する必要があります。詳しくは、491 ページの『[Nrttablepath](#)』を参照してください。
- 2 次サーバーの接続情報がオプション・ファイルに送信される前に、以下の処理が行われる必要があります。

- クライアントを少なくとも 1 回、ソース複製サーバーにバックアップする必要があります。
- クライアント・ノードを少なくとも 1 回、ターゲット複製サーバーに複製する必要があります。
- ターゲット・ノードとエージェント・ノードの両方がターゲット複製サーバーへの複製用に構成されている場合、クライアント・ノード・プロキシー・サポートによってバックアップされているクライアント・ノードのフェイルオーバーが行われます。ターゲット・ノードが明示的に複製されると、プロキシー関係と共に、エージェント・ノードも暗黙的にターゲット複製サーバーに複製されます。

例えば、次のサーバー・コマンドによって、Node_B が Node_A に代わってクライアント操作を実行する権限を認可されているとします。

```
grant proxynode target=Node_A agent=Node_B
```

ノード定義で replstate=enabled オプションを使用して両方のノードが複製用に構成されている場合、Node_A が複製されると、Node_B とプロキシー関係も複製されます。

自動クライアント・フェイルオーバーの制約事項

自動クライアント・フェイルオーバーに適用されるプロセスおよび制約事項について理解を深めるには、次の情報を確認してください。

自動クライアント・フェイルオーバーには、以下の制約事項が適用されます。

- クライアントがフェイルオーバー・モードのときは、データを 2 次サーバーに保管する必要がある機能 (例えば、バックアップ操作やアーカイブ操作) はどれも使用できません。使用できるのは、データ・リカバリー機能 (例えば、リストア操作、リトリブ操作、照会操作) のみです。クライアント・オプションの編集と IBM Spectrum Protect クライアント・パスワードの変更も可能です。
- スケジュールは 2 次サーバーに複製されません。したがって、1 次サーバーが使用不可の間はスケジュールは実行されません。
- フェイルオーバー・モードでクライアントが 2 次サーバーに接続した後、サーバーへの次の初期ログオンが行われるまで、クライアントは 1 次サーバーへの接続を試みません。クライアントが 2 次サーバーへのフェイルオーバーを試みるのは、1 次サーバーへの初期接続に失敗した場合のみです。初期接続とは、クライアントがサーバーとの間で行う最初の接続です。

クライアント操作中に 1 次サーバーが使用できなくなった場合、クライアントは 2 次サーバーにフェイルオーバーせず、操作は失敗します。2 次サーバーにフェイルオーバーできるようにクライアントを再始動してから、クライアント操作を再実行する必要があります。

1 次サーバーが停止したときに中断されたリストア操作は、クライアントのフェイルオーバー後に再開できません。クライアントが 2 次サーバーにフェイルオーバーした後にリストア操作全体を再実行する必要があります。

- クライアント・ノードの複製前に IBM Spectrum Protect パスワードが変更されると、1 次サーバーと 2 次サーバーの間でパスワードが同期されなくなります。この時間中にフェイルオーバーが行われた場合は、2 次サーバーとクライアントでパスワードを手動で再設定する必要があります。1 次サーバーが再びオンラインになると、クライアントが 1 次サーバーに接続するためにパスワードの再設定が必要になります。

クライアントが 2 次サーバーに接続されている間にパスワードが再設定された場合、クライアントが 1 次サーバーにログオンできるようにするには、事前に 1 次サーバーでパスワードを再設定しておく必要があります。この制約事項が該当するのは、**passwordaccess** オプションが **generate** に設定されている場合、またはパスワードが手動で再設定されている場合です。

- クライアント・データのバックアップまたはアーカイブが完了していても、1 次サーバーがクライアント・ノードを複製する前に停止すると、最新のバックアップ・データまたはアーカイブ・データが 2 次サーバーに複製されません。ファイル・スペースの複製状況は最新ではありません。フェイルオーバー・モードでデータのリストアまたはリトリブを試みていて、複製状況が最新でない場合、リカバリーしようとしているデータが古いことを示すメッセージが表示されます。リカバリーを続行するか、1 次サーバーがオンラインに復帰するまで待つかを決めることができます。
- クライアント所有者権限がある管理ユーザー ID がソース複製サーバーに存在し、そのユーザー ID の名前がクライアント・ノードと同じ場合、サーバーでのノード複製プロセス中に管理ユーザー ID が複製さ

れます。ソース複製サーバーにこのようなユーザー ID が存在しない場合、複製プロセスによってターゲット複製サーバーにこの管理者定義が作成されません。

他の管理ユーザー ID がノードに割り当てられている場合、IBM Spectrum Protect 管理者はターゲット複製サーバーで管理ユーザー ID を手動で構成する必要があります。これを行わない場合、その管理ユーザーは、Web クライアントを使用してターゲット複製サーバー (2 次サーバー) に接続できません。

- ファイルを IBM Spectrum Protect からリストアする際に、そのファイル・システムが IBM Spectrum Protect for Space Management で管理されている場合、そのファイルはスタブ・ファイルとしてリストアしてはなりません。完全ファイルをリストアする必要があります。完全ファイルをリストアするには `restoremigstate=no` オプションを使用してください。ファイルを、ターゲット・サーバーからスタブとしてリストアする場合、次のような結果になる場合があります。
 - IBM Spectrum Protect for Space Management クライアントを使用して IBM Spectrum Protect ソース・サーバーからファイルを再呼び出しできない。
 - IBM Spectrum Protect ソース・サーバーに対して実行される IBM Spectrum Protect for Space Management 調整プロセスによりファイルが有効期限切れになる。調整プロセスによってファイルが有効期限切れになる場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントと `restoremigstate=no` オプションで、完全ファイルをリストアすることができます。

IBM Spectrum Protect コンポーネントのフェイルオーバー機能

IBM Spectrum Protect のコンポーネントと製品は、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは API に依存することで、データを 1 次 IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップします。1 次サーバーが使用できなくなった場合、これらの製品とコンポーネントの一部は 2 次サーバーにフェイルオーバーできますが、その他の製品とコンポーネントはフェイルオーバーができません。

IBM Spectrum Protect のコンポーネントと製品のフェイルオーバー機能の詳細については、[技術情報 1649484](#) を参照してください。

関連タスク

[複製されたクライアント・データの状況の判別](#)

2 次サーバーからクライアント・データをリストアまたはリトリブする前に、クライアントの最新のバックアップが 2 次サーバーに複製されているかどうかを確認することができます。

自動フェイルオーバー用のクライアントの構成

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

始める前に

構成を開始する前に:

- クライアント・ノードが 1 次サーバーのノード複製に参加していることを確認します。

注: 複製サーバーが V8.1.1 以前で、SSL が有効にされている場合、コマンド `gsk8capicmd_64 -cert -add -db dsmcert.kdb -stashed -label "TSM server STSM01 self-signed key" -file <certificate_file> -format ascii` を使用して、クライアントに SSL 証明書を手動でインストールする必要があります。ここで、<certificate_file> は対応する証明書へのパスです。
- クライアントが [自動クライアント・フェイルオーバー](#) の要件を満たしていることを確認します。
- この手順を使用するのは、2 次サーバーの接続情報が最新でない場合、またはその情報がクライアント・オプション・ファイル内にない場合に限ります。

このタスクについて

クライアントを自動フェイルオーバー用に手動で構成する可能性がある状況は、以下のとおりです。

- 2 次サーバーの構成が変更され、クライアントが 1 次サーバーにログオンする前にこのサーバーが停止した。接続情報を手動で追加すると、クライアントは 2 次サーバーにフェイルオーバーできるようになります。

- ・クライアント・オプション・ファイル内の 2 次サーバーの接続情報を一部またはすべて誤って消去した。

ヒント: クライアント・オプション・ファイルを手動で構成する代わりに、**dsmc q session** コマンドを実行できます。これにより、1 次サーバーへのログオン用のプロンプトが出されます。2 次サーバーの接続情報は、クライアント・オプション・ファイルに自動的に送信されます。

手順

自動フェイルオーバー用にクライアントを手動で構成するには、以下の手順を実行します。

1. **usereplicationfailover** オプションがクライアント・オプション・ファイル内にないか、またはこのオプションが **yes** に設定されているかを検証することにより、クライアントが自動クライアント・フェイルオーバー可能であることを確認できます。デフォルトでは、クライアントは自動クライアント・フェイルオーバー可能になっているため、クライアント・オプション・ファイルに **usereplicationfailover** は必要ありません。
2. 2 次サーバーに関する接続情報を IBM Spectrum Protect サーバー管理者から入手し、その情報をクライアント・オプション・ファイルの先頭に追加します。**replservername** ステートメントの下でステートメントをグループ化してスタンザを作成します。

例えば、以下のステートメントを **dsm.sys** ファイルに追加します。

```
REPLSERVERNAME      TARGET
REPLTCPSERVERADDRESS 192.0.2.9
REPLTCPPOrt         1501
REPLSSLPORT         1502
REPLSERVERGUID      60.4a.c3.e1.85.ba.11.e2.af.ce.00.0c.29.2f.07.d3

SErvername          server_a
COMMMethod          TCPip
TCPPOrt             1500
TCPSErveraddress    server_hostname1.example.com
PASSWORDAccess      prompt
MYREPLICATIONServer TARGET
```

3. ルート以外のユーザーは、**nrtablepath** オプションを **dsm.sys** ファイルに追加して、ノード複製テーブルのロケーションを指定する必要があります。バックアップ/アーカイブ・クライアントはこのテーブルを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーへの各バックアップ操作またはアーカイブ操作に関する情報を保管します。

必ず、自分のユーザー ID に書き込み権限があるロケーションを指定してください。例えば、次のようにします。

```
nrtablepath /Volumes/nrtbl
```

制約事項: ノード複製テーブルのロケーションとしてルート・ディレクトリー (/) を指定しないでください。

4. クライアント・オプション・ファイルを保存して閉じます。
5. バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を再始動するか、コマンド・ライン・インターフェースから IBM Spectrum Protect サーバーにログオンします。
クライアントは 2 次サーバーに接続されます。

例

自動クライアント・フェイルオーバー用にクライアントを構成し、クライアントがサーバーへのログオンを試みると、次のコマンド出力例が表示されます。

```
IBM Spectrum Protect
Command Line Backup-Archive Client Interface
  Client Version 8, Release 1, Level 0.0
  Client date/time: 12/16/2016 12:05:35
(c) Copyright by IBM Corporation and other(s) 1990, 2016. All Rights Reserved.
```

```
Node Name: MY_NODE_NAME
ANS2106I 1 次サーバー IBM Spectrum Protect server 192.0.2.1 への接続が失敗しました
```

```
ANS2107I 192.0.2.9 : 1501 にある 2 次サーバー TARGET への 接続を試行しています。
```

```
Node Name: MY_NODE_NAME
Session established with server TARGET: Windows
  Server Version 8, Release 1, Level 0.0
  Server date/time: 12/16/2016 12:05:35 Last access: 12/15/2016 09:55:56
```

```
Session established in failover mode to secondary server
ANS2108I 2 次サーバー TARGET に接続しました。
```

次のタスク

フェイルオーバー・モードでは、複製されたどのデータもリストアまたはリトリブが可能です。

関連概念

[自動クライアント・フェイルオーバーの概要](#)

IBM Spectrum Protect サーバーで障害が発生すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントはデータ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。

関連タスク

[フェイルオーバー時のデータのリストアまたはリトリブ](#)

クライアントが 2 次サーバーにフェイルオーバーした場合、複製されたデータを 2 次サーバーからリストアまたはリトリブすることができます。

関連資料

[Forcefailover](#)

`forcefailover` オプションを使用すると、クライアントを即時に 2 次サーバーにフェイルオーバーさせることができます。

[Myreplicationserver](#)

`myreplicationserver` オプションは、クライアントがフェイルオーバー時に使用する 2 次サーバー・スタンザを指定します。

[Nrtablepath](#)

`nrtablepath` オプションは、クライアント上のノード複製テーブルのロケーションを指定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントはこのテーブルを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーへの各バックアップ操作またはアーカイブ操作に関する情報を保管します。

[Replserverguid](#)

`replserverguid` オプションは、フェイルオーバー時にクライアントが 2 次サーバーに接続する際に使用されるグローバル固有 ID (GUID) を指定します。GUID は、2 次サーバーが予期されたサーバーであることを確認するための検証に使用されます。

[Replservername](#)

`replservername` オプションは、フェイルオーバー時にクライアントが接続する 2 次サーバーの名前を指定します。

[Replsslport](#)

`replsslport` オプションは、SSL に対応した 2 次サーバー上の TCP/IP ポートを指定します。

`replsslport` オプションは、フェイルオーバー時にクライアントが 2 次サーバーに接続する際に使用されます。IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと接続している場合、このオプションは非推奨です。

[Repltcpport](#)

repltcpport オプションは、クライアントがフェイルオーバー時に2次サーバーに接続する際に使用する2次サーバー上のTCP/IPポートを指定します。

Repltcpserveraddress

repltcpserveraddress オプションは、クライアントがフェイルオーバー時に2次サーバーに接続する際に使用する2次サーバーのTCP/IPアドレスを指定します。

Usereplicationfailover

usereplicationfailover オプションは、クライアント・ノードで自動クライアント・フェイルオーバーを行うかどうかを指定します。

複製されたクライアント・データの状況の判別

2次サーバーからクライアント・データをリストアまたはリトリブする前に、クライアントの最新のバックアップが2次サーバーに複製されているかどうかを確認することができます。

このタスクについて

複製されたクライアント・データの状況を取得して、最新のクライアント・バックアップが2次サーバーに複製されたかどうかを判別することができます。

クライアント上の最新のバックアップ操作のタイム・スタンプが2次サーバー上のバックアップのタイム・スタンプと一致する場合、複製状況は最新です。

最新のバックアップ操作のタイム・スタンプが2次サーバー上のバックアップのタイム・スタンプと異なる場合、複製状況は最新ではありません。この状況が発生するのは、クライアントをバックアップしたものの、クライアント・ノードが複製可能になる前に1次サーバーが停止した場合です。

手順

dsmc query filespace -detail

次の出力例は、サーバー上とクライアント上のタイム・スタンプが一致しているため、複製状況が最新であることを示しています。

#	Last Incr Date	Type	fsID	Unicode	Replication	File Space Name
---	-----	-----	----	-----	-----	-----
1	00/00/0000 00:00:00	HFS	9	Yes	Current	/
	Last Store Date	Server		Local		
	-----	-----		-----		
	Backup Data :	04/22/2013 19:39:17		04/22/2013 19:39:17		
	Archive Data :	No Date Available		No Date Available		

次の出力例は、サーバー上とクライアント上のタイム・スタンプが一致していないため、複製状況が最新でないことを示しています。

#	Last Incr Date	Type	fsID	Unicode	Replication	File Space Name
---	-----	-----	----	-----	-----	-----
1	00/00/0000 00:00:00	HFS	9	Yes	Not Current	/
	Last Store Date	Server		Local		
	-----	-----		-----		
	Backup Data :	04/22/2013 19:39:17		04/24/2013 19:35:41		
	Archive Data :	No Date Available		No Date Available		

次のタスク

フェイルオーバー・モードでデータのリストアを試みていて、複製状況が最新でない場合、リストアしようとしているデータが古いことを示すメッセージが表示されます。 リストアを続行するか、1次サーバーがオンラインになるまで待つかを決めることができます。

関連タスク

[フェイルオーバー時のデータのリストアまたはリトリブ](#)

クライアントが 2 次サーバーにフェイルオーバーした場合、複製されたデータを 2 次サーバーからリストアまたはリトリブすることができます。

関連資料

[Nrtablepath](#)

nrtablepath オプションは、クライアント上のノード複製テーブルのロケーションを指定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントはこのテーブルを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーへの各バックアップ操作またはアーカイブ操作に関する情報を保管します。

自動クライアント・フェイルオーバーの回避

2 次サーバーへの自動クライアント・フェイルオーバーを回避するようにクライアントを構成することができます。

このタスクについて

場合により (例えば、1 次サーバーがオフラインになる前に、クライアント・ノード上のデータが 2 次サーバーに複製されなかったことがわかっている場合)、自動クライアント・フェイルオーバーを回避する必要があります。この場合、古い可能性のある複製済みデータを 2 次サーバーからリカバリーしたくはありません。

手順

クライアント・ノードが 2 次サーバーにフェイルオーバーしないようにするには、クライアント・オプション・ファイルに次のステートメントを追加します。

```
usereplicationfailover no
```

この設定は、IBM Spectrum Protect サーバー管理者によって指定されている 1 次サーバー上の構成を指定変更します。

タスクの結果

クライアント・ノードは、次回オフラインの 2 次サーバーへの接続を試みるときに、自動的に 1 次サーバーにフェイルオーバーしません。

関連タスク

[複製されたクライアント・データの状況の判別](#)

2 次サーバーからクライアント・データをリストアまたはリトリブする前に、クライアントの最新のバックアップが 2 次サーバーに複製されているかどうかを確認することができます。

関連資料

[Usereplicationfailover](#)

usereplicationfailover オプションは、クライアント・ノードで自動クライアント・フェイルオーバーを行うかどうかを指定します。

クライアントのフェイルオーバーの強制

1 次サーバーが作動可能であっても、クライアントを即時に 2 次サーバーにフェイルオーバーさせることができます。例えば、この手法を使用すると、想定された 2 次サーバーにクライアントがフェイルオーバーすることを確認できます。

手順

2 次サーバーに即時にフェイルオーバーすることをクライアントに強制するには、以下の手順を実行します。

1. クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に **forcefailover yes** オプションを追加します。
2. バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を再始動するか **dsmc** コマンドとのコマンド・セッションを開始して、2 次サーバーに接続します。
3. オプション: オプション・ファイルを更新する代わりに、コマンドに **-forcefailover=yes** オプションを指定して、2 次サーバーとの接続を確立することができます。例えば次のとおりです。

```
dsmc q sess -forcefailover=yes
```

次のタスク

以下のいずれかの方法で、2 次サーバーに接続されたことを確認できます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI の「**接続情報**」ウィンドウにある「**2 次サーバー情報 (Secondary Server Information)**」フィールドを確認します。
- コマンド・セッションを開始したら、コマンド出力を確認します。出力に 2 次サーバーの状況が表示されます。

関連資料

435 ページの『[Forcefailover](#)』

forcefailover オプションを使用すると、クライアントを即時に 2 次サーバーにフェイルオーバーさせることができます。

Tivoli Storage Manager FastBack データをバックアップおよびアーカイブするためのクライアントの構成

Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップあるいはアーカイブする前に、構成タスクを完了する必要があります。

最初に、バックアップ/アーカイブ・クライアントを構成しており、Tivoli Storage Manager FastBack クライアントをインストールしていることを確認します。

<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS9NU9/>の情報をを使用して、FastBack クライアントをインストールします。

FastBack クライアントをインストールしたら、以下のタスクを実行します。

1. データがバックアップまたはアーカイブされる FastBack クライアントごとにノードを登録します。このノード名は、FastBack クライアントの短いホスト名でなければなりません。

これは、バックアップまたはアーカイブする必要があるボリュームを含む各 FastBack クライアントで 1 回ずつ実行する、一回限りの構成です。

この登録ステップを手動で行う必要があるのは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがスタンドアロン・アプリケーションとして使用されている場合のみです。

管理センターは、ユーザーが管理センターを使用して FastBack データをアーカイブまたはバックアップするスケジュールを作成すると、このノード登録を自動的に行います。バージョン 7.1 以降では、Administration Center コンポーネントは、Tivoli Storage Manager または IBM Spectrum Protect の配布に含まれなくなりました。

前のサーバー・リリースの管理センターを保有する FastBack ユーザーは、引き続きその管理センターを使用して FastBack スケジュールの作成と変更を行うことができます。管理センターをまだインストールしていない場合は、前にリリースされたバージョンを <ftp://public.dhe.ibm.com/storage/tivoli-storage-management/maintenance/admincenter/v6r3/> からダウンロードできます。管理センターをインストールしていない場合、IBM Spectrum Protect サーバーで FastBack スケジュールの作成と変更を行う必要があります。サーバーでのスケジュールの作成については、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

2. サーバーの **GRANT PROXY** コマンドを使用して、ステップ 1 で作成した FastBack クライアントを表す各ノード上の現行のバックアップ/アーカイブ・クライアント・ノードにプロキシ権限を付与します。FastBack ノードをターゲットにし、現行のクライアント・ノードをプロキシにしてください。

これは一回限りの構成であり、バックアップまたはアーカイブが管理センターによって開始された場合は管理センターによって実行されます。

3. **set password** コマンドを実行して、バックアップ/アーカイブ・クライアントが接続する FastBack リポジトリの資格情報を保管します。バックアップ/アーカイブ・クライアントが接続すると想定されている各リポジトリごとに **set password -type=fastback** コマンドを 1 回実行します。

保管される資格情報は、以下の構成によって異なります。

- FastBack サーバー上のバックアップ/アーカイブ・クライアント
- FastBack 災害復旧ハブ上のバックアップ/アーカイブ・クライアント
- 専用プロキシ・ワークステーション上のバックアップ/アーカイブ・クライアント

IBM Spectrum Protect および Tivoli Storage Manager FastBack の統合については、[との統合](#)を参照してください。

関連概念

9 ページの『[Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップおよびアーカイブするためのインストール要件](#)』

FastBack クライアント・データをバックアップまたはアーカイブするには、必要なソフトウェアを事前にインストールしておく必要があります。

関連資料

772 ページの『[Set Password](#)』

set password コマンドを使用して、ワークステーションの IBM Spectrum Protect パスワードの変更、別のサーバーへのアクセスに使用する資格情報の設定を行います。

クラスター環境の構成および使用

クラスターという用語は、環境が異なると意味も違ってきます。この用語は、高可用性、ハイパフォーマンス、ロード・バランシング、グリッド・コンピューティング、またはこれらすべての用語のいくつかの組み合わせを意味するものです。

現在、UNIX および Linux に使用可能なクラスタリング製品がいくつかあります。このセクションでは、このバックアップ方式を正しく機能させるために必要なクラスタリング環境の局面を定義します。ご使用のクラスター・ソフトウェアがどのような働きをするかについて、基本的な知識を持っていることが必要です。アプリケーションの開始および停止スクリプトの開発など、クラスター・ソフトウェア関連の活動については、このセクションでは説明しません。

クラスター環境とは、以下の特性を示す UNIX または Linux 環境を指します。

- ディスクは、排他的方式 (どの時点をとっても、1 つのホストのみが論理ディスクへのアクセス権限を持つ) または並行方式で、物理ワークステーション間で共有されます。
- ディスクは、ネットワーク・リソースとしてではなく、ローカル・ディスクとしてホストに表示されます。

重要: ファイル・システムは、ネットワーク・ファイル・システム (NFS) などの LAN ベースのファイル共有プロトコルを使用せず、ローカルでシステムにマウントしてください。

- 環境内の各物理ホストでは、ローカル・ディスクのマウント・ポイントは同一になります (NodeA から NodeB の間でファイル・システム `/group1_disk1` に障害が発生すると、このファイル・システムは NodeB に `/group1_disk1` としてマウントされます)。

クラスター環境の概要

クラスター環境は、さまざまな構成でセットアップできます。このセクションでは、最も一般的なクラスター構成について説明します。

アクティブ/アクティブ: プール・クラスター・リソース

アクティブ/アクティブ構成の場合、各ノードは、少なくとも1つのリソースをアクティブに管理し、クラスター内の1つ以上のリソースのバックアップとして構成されます。アクティブ/アクティブは、クラスター環境の形式として最も一般的です。

アクティブ/パッシブ: フォールト・トレラント

アクティブ/パッシブ構成では、1つのノードがリソースをアクティブに管理します。

その他のノードは、1次ノードに障害が発生し、リソースのフェイルオーバーが必要な場合にのみ使用されます。アクティブ/パッシブ・クラスターは、アクティブ/アクティブ・クラスターのサブタイプです。

並行アクセス

並行構成では、複数のノードがリソースを管理します。障害が発生した場合は、他のノードがリソースの管理を続行します。

クラスター環境でのバックアップ/アーカイブ・クライアントの構成

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、クラスターのリソース・グループのコンテキスト内にバックアップ/アーカイブ・クライアントを置くことで、クラスター・ドライブのバックアップを管理できるように設計されています。

このタスクについて

これには、ローカル・リソースからデータをバックアップできるという利点があります(ネットワーク経由でデータにアクセスする場合とは対照的です)。これによって、バックアップ操作でのパフォーマンスの最大化を図り、リソース・グループと関連させてバックアップ・データを管理することができます。したがって、バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、常にデータはローカル・データであるものとみなしてクラスター・リソースのデータをバックアップでき、最大のバックアップ・パフォーマンスを達成することができます。これにより、システム障害が発生した後でも、重要なデータのバックアップを確保しておくことができます。

例えば、アクティブ/アクティブ・クラスター環境で、クラスター内に NodeA、NodeB、および NodeC という名前の3つの物理ホストがあるとします。

これらのノードには、以下の性質があります。

- NodeA は、ファイル・システム /A1 および /A2 を持つクラスター・リソースを所有している。
- NodeB は、ファイル・システム /B1 および /B2 を持つクラスター・リソースを所有している。
- NodeC は、ファイル・システム /C1 および /C2 を持つクラスター・リソースを所有している。

注: NodeA には、/fs1 および /fs2 という2つの非クラスター化ボリュームもある可能性があります。これは、バックアップする必要があります。

最良のバックアップ・パフォーマンスを得るために、クラスター内のすべてのノードが、それぞれが所有する共用ファイル・システムのバックアップを実行するようにしたいとします。ノードのフェイルオーバーが発生した場合、障害が起きたノードのバックアップ・タスクは、フェイルオーバー先のノードにシフトします。例えば、NodeA が NodeB にフェイルオーバーすると、/A1 および /A2 のバックアップは NodeB に移動します。

クラスター・ボリュームおよび非クラスター・ボリュームをバックアップするためにバックアップ/アーカイブ・クライアントを構成する前に、以下の知識が前提条件として必要です。

- 保護対象の個々のリソース・グループごとに、別個のバックアップ/アーカイブ・クライアント・スケジューラー・プロセスを実行する必要があります。通常の状態では、各ノードには、クラスター・リソー

ス用とローカル・ファイル・システム用の2つのスケジューラー・プロセスがあります。障害が発生した後は、別のノードから移したリソースを保護するために、ノード上で追加スケジューラー・プロセスが開始されます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアント・パスワード・ファイルは、クラスター・ディスクに保管する必要があります。これは、障害が発生した後で、生成されたバックアップ/アーカイブ・クライアント・パスワードをテークオーバー・ノードが使用できるようにするためです。
- リソース・グループの一部として保護されるファイル・システムは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・ドメイン・オプションを使用して定義されます。ドメイン・オプションは、`dsm.sys` ファイルの中で指定します。このファイルは、テークオーバー・ノードからもアクセスできるように、クラスター・ディスクにも保管する必要があります。

クラスター環境にバックアップ/アーカイブ・クライアントを構成するには、以下のようになります。

手順

1. IBM Spectrum Protect サーバーに、バックアップ/アーカイブ・クライアント・ノード定義を登録します。クラスター内のすべてのノードを IBM Spectrum Protect サーバーに定義する必要があります。複数のクラスター・リソースを同じクラスター環境内に定義して、それぞれ独立してフェイルオーバーを行う場合は、リソース・グループごとに固有のノード名を定義する必要があります。上に例として挙げたアクティブ/アクティブ・クラスター構成の3つの方法について、(1) Protect: IBM>register node nodeA nodeApw domain=standard、(2) Protect: IBM>register node nodeB nodeBpw domain=standard、(3) Protect: IBM>register node nodeC nodeCpw domain=standard のように、3つのノード (リソースごとに1つ) を定義します。
2. バックアップ/アーカイブ・クライアントのシステム・オプション・ファイルを構成します。クラスター内の各ノードは、対応するそれぞれの `dsm.sys` ファイルにバックアップするために、クラスター・リソース・グループごとに別々のサーバー・スタンザを持っている必要があります。サーバー・スタンザが各ノードのシステム・オプション・ファイルと一致していることを確認してください。代わりに、共用クラスター・ロケーションに `dsm.sys` ファイルを置くこともできます。クラスター化されたボリュームをバックアップするために定義されたサーバー・スタンザは、次の特性を持っている必要があります。
 - `nodename` オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーに登録されたクライアント・ノード名を参照する必要があります。クライアント・ノード名が定義されていないと、ノード名は、デフォルトでノードのホスト名になります。これは、同一のクライアント・システムに使用されている他のノード名と競合する可能性があります。

重要: クライアント・ノードを明示的に定義するには、`nodename` オプションを使用します。

 - `tcpclientaddress` オプションは、クラスター・ノードのサービス IP アドレスを参照する必要があります。
 - `passworddir` オプションは、クラスター・リソース・グループの一部である共有ボリューム上のディレクトリーを参照する必要があります。
 - 単一の連続ログ・ファイルを維持するためには、`errorlogname` および `schedlogname` オプションは、クラスター・リソース・グループの一部である共有ボリューム上のファイルを参照する必要があります。
 - すべての `include/exclude` ステートメントは、クラスター・リソース・グループの一部である共有ボリューム上のファイルを参照する必要があります。
 - `incl excl` オプションを使用する場合、このオプションは、クラスター・グループの一部である共有ボリューム上のファイル・パスを参照する必要があります。
 - `servername` オプションで識別されるスタンザ名は、すべてのシステムで同一でなければなりません。
3. 他のバックアップ/アーカイブ・クライアント・オプションは、必要に応じて設定できます。次の例では、NodeA、NodeB、NodeC の3つのすべてのノードで、`dsm.sys` ファイル内に以下の3つのサーバー・スタンザが含まれています。

```

Servername      server1_nodeA
nodename        NodeA
commmethod      tcpip
tcpport         1500
tcpserveraddress server1.example.com
tcpclientaddress nodeA.example.com
passwordaccess  generate
passworddir     /A1/tsm/pwd
manageservices  schedule
schedlogname    /A1/tsm/dsmsched.log
errorlogname    /A1/tsm/errorlog.log

Servername      server1_nodeB
nodename        NodeB
commmethod      tcpip
tcpport         1500
tcpserveraddress server1.example.com
tcpclientaddress nodeB.example.com
passwordaccess  generate
passworddir     /B1/tsm/pwd
manageservices  schedule
schedlogname    /B1/tsm/dsmsched.log
errorlogname    /B1/tsm/errorlog.log

Servername      server1_nodeC
nodename        NodeC
commmethod      tcpip
tcpport         1500
tcpserveraddress server1.example.com
tcpclientaddress nodeC.example.com
passwordaccess  generate
passworddir     /C1/tsm/pwd
manageservices  schedule
schedlogname    /C1/tsm/dsmsched.log
errorlogname    /C1/tsm/errorlog.log

```

4. バックアップ/アーカイブ・クライアントのユーザー・オプション・ファイルを構成します。オプション・ファイル (dsm.opt) は、クラスター・リソース・グループ内の共有ボリューム上に常駐する必要があります。このファイルを参照する DSM_CONFIG 環境変数を定義してください。dsm.opt ファイルに以下の設定があることを確認してください。

- **servername** オプションの値は、クラスター化されたボリュームをバックアップする パラメーターを定義する dsm.sys ファイル内のサーバー・スタンザである必要があります。
- **domain** オプションでバックアップする 対象の、クラスター化されたファイル・システムを定義します。

注: 必ず、dsm.opt ファイルにドメイン・オプションを定義するか、スケジュールあるいはバックアップ/アーカイブ・クライアントのコマンド・ラインでオプションを指定してください。これは、クラスター化操作をクラスター化リソースに限定し、非クラスター化操作を非クラスター化リソースに限定するためのものです。

この例では、ノード NodeA、NodeB、および NodeC は、対応する dsm.opt ファイルと DSM_CONFIG 環境変数を次のようにセットアップします。

NodeA:

- 1) Set up the /A1/tsm/dsm.opt file:

```

servername server1_nodeA
domain      /A1 /A2

```

- 2) Issue the following command or include it in your user profile:

```
export DSM_CONFIG=/A1/tsm/dsm.opt
```

NodeB:

- 1) Set up the /B1/tsm/dsm.opt file:

```

servername server1_nodeB
domain      /B1 /B2

```

- 2) Issue the following command or include it in your user profile:

```
export DSM_CONFIG=/B1/tsm/dsm.opt
```

NodeC:

1) Set up the /C1/tsm/dsm.opt file:

```
servername server1_nodeC  
domain      /C1 /C2
```

2) Issue the following command or include it in your user profile:

```
export DSM_CONFIG=/C1/tsm/dsm.opt
```

5. クラスター・リソース・グループごとに、スケジュールの定義をセットアップします。基本的なセットアップが完了した後、バックアップ要件に合わせてクラスター・リソースをバックアップするための自動化スケジュールを定義します。以下の手順では、標準装備の IBM Spectrum Protect スケジューラーを使用して、スケジュールのセットアップを示します。ベンダー提供のスケジューラーを使用する場合は、そのスケジューラーのベンダーから提供されている資料を参照してください。

- ・クラスター・ノードが定義されているポリシー・ドメイン内に、スケジュールを定義します。スケジュールの開始時間帯は、障害やフォールバック・イベントが発生した場合にフェイルオーバー・ノードでスケジュールを再開するために十分な長さになるように設定してください。これは、スケジュールの所要時間を、通常の下でノードのクラスター・データのバックアップが完了するまでに要する時間よりも長く設定する必要があるということです。

再接続が、そのイベントの開始時間帯内で起こる場合は、スケジュールされたコマンドが再始動されます。このスケジュールされた増分バックアップでは、フェイルオーバー前にそのサーバーに送信されたファイルを再調査します。そして、フェイルオーバー状況が発生する前にバックアップが停止した位置まで「追いつき」ます。

次の例では、clus_backup スケジュールは、標準ドメインで定義され、毎日午前 12 時 30 分にバックアップを開始します。所要時間は 2 時間に設定されています (これは、各ノードのデータのバックアップ時間としては通常の時間です)。

```
Protect: IBM>define schedule standard clus_backup action=incr  
starttime=00:30 startdate=TODAY Duration=2
```

- ・クラスター・リソースをバックアップするために定義されたすべてのバックアップ/アーカイブ・クライアント・ノードに、(1) Protect: IBM>define association standard clus_backup nodeA、(2) Protect: IBM>define association standard clus_backup nodeB、(3) Protect: IBM>define association standard clus_backup nodeC のようにスケジュールを関連付けます。
6. バックアップ用のスケジューラー・サービスをセットアップします。各クライアント・ノードで、通常の下でそのノードがバックアップを担当する個々のリソースについて、スケジューラー・サービスを構成する必要があります。各リソース・スケジューラー・サービスの DSM_CONFIG 環境変数は、リソースに対応する dsm.opt ファイルを参照するように設定する必要があります。このサンプルの構成の場合、必要に応じてクラスター内のどのノードからでも dsmcad プロセスを開始できるようにするには、以下のシェル・スクリプトを作成する必要があります。

```
NodeA: /A1/tsm/startsched  
#!/bin/ksh  
export DSM_CONFIG=/A1/tsm/dsm.opt  
dsmcad  
NodeB: /B1/tsm/startsched  
#!/bin/ksh  
export DSM_CONFIG=/B1/tsm/dsm.opt  
dsmcad  
NodeC: /C1/tsm/startsched  
#!/bin/ksh  
export DSM_CONFIG=/C1/tsm/dsm.opt  
dsmcad
```

7. クラスター・アプリケーションにバックアップ/アーカイブ・クライアントを定義します。フェイルオーバー状態の後で、障害が起きたリソースのバックアップを続行するには、IBM Spectrum Protect スケジューラー・サービス (各クラスター・クライアント・ノードの) をリソースとしてクラスター・アプリケーションに定義し、フェイルオーバー処理に参加できるようにする必要があります。これは、リソースを引き継ぐノードから障害リソースのバックアップを継続するために必要です。こうしてお

かないと、障害リソースのバックアップは不完全なものになります。ステップ 5 のサンプル・スクリプトをクラスター・リソースに関連付けることによって、クラスター内のノード上でそれらのクラスター・リソースを確実に開始する一方、保護対象のディスク・リソースをノードから別のノードに移動させることができます。スケジューラー・サービスをクラスター・リソースとしてセットアップするために必要な実際の手順は、クラスター・ソフトウェアによって異なります。追加情報については、ご使用のクラスター・アプリケーションの資料を参照してください。

8. 各ノードのパスワードが生成され、`passworddir` オプションを使用して指定された位置に正しくキャッシュされていることを確認します。これは、以下のステップを実行することによって確認できます。

- a) パスワードを求めるプロンプトが表示されずに各ノードが IBM Spectrum Protect サーバーに接続できることを確認します。これを確認するには、バックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンド・ライン・インターフェースを実行し、各ノードに対して次のコマンドを出します。

```
#dsmc query session
```

パスワードの送信を求めるプロンプトが出た場合は、まずパスワードを入力してコマンドを正常に実行し、その後そのコマンドを再実行します。2 回目はパスワードを求めるプロンプトは表示されず、コマンドが実行されるはずです。パスワード用のプロンプトが出る場合は、構成を確認してください。

- b) フェイルオーバー・ノードのための IBM Spectrum Protect サーバーに対するセッションを、クラスター内の他のノードが開始できることを確認します。これは、上記のステップで説明したものと同一コマンドをバックアップ・ノードに対して実行することで確認できます。例えば、フェイルオーバー・イベントの発生時に NodeB および NodeC が、パスワードを要求されずに NodeA としてのセッションを開始できるかどうかを確認するには、NodeB および NodeC に対して次のコマンドを実行します

```
#export DSM_CONFIG=/A1/tsm/dsm.opt  
#dsmc query session
```

この時点でパスワードを要求するプロンプトが表示される場合がありますが、これはめったにないことです。プロンプトが出る場合は、パスワードが共用ロケーションに正しく保管されていなかったと考えられます。NodeA に使用した `passworddir` オプションの設定を確認し、以下のステップに従ってもう一度構成してください。

- c) 各ノードによってスケジュールが正しく実行されていることを確認します。スケジュールの開始時刻を `now` に設定することで、スケジュールを起動できます。テストが完了した後で、開始時刻を元通り再設定するのを忘れないでください。

```
Protect: IBM>update sched standard clus_backup starttime=now
```

- d) nodeA が「スケジュールの開始」ウィンドウでバックアップを実行している最中に nodeA と nodeB の間にフェイルオーバーおよびフォールバックが発生しても、処理は有効です。フェイルオーバーおよびフォールバックの後、増分バックアップの実行が継続され、正常に完了することを確認してください。
- e) 下記のコマンドを実行して、ノード (nodeA) のパスワードを無効にします。フェイルオーバーおよびフォールバックの場合と同様に、通常のクラスター操作でバックアップが正常に継続することを確認します。

```
Protect: IBM>update node nodeA forcep=yes
```

9. ローカル・リソースをバックアップするために、バックアップ/アーカイブ・クライアントを構成します。

- a) IBM Spectrum Protect サーバーにクライアント・ノードを定義します。ローカル・リソースをバックアップまたはアーカイブする際には、クラスター・データをバックアップするために定義したノード名は、決して使用しないでください。クラスター・リソースとして定義されていないローカル・ボリュームをバックアップする場合は、非クラスター化ボリュームとクラスター化ボリュームの両方に対して、別々のノード名 (および別々のクライアント・インスタンス) を使用する必要があります。

次の例では、NodeA にのみ、バックアップするローカル・ファイル・システム /fs1 および /fs2 があるものとします。ローカル・リソースを管理するために、ノード NodeA_local を IBM Spectrum Protect サーバー Protect: IBM>register node nodeA_local nodeA_localpw domain=standard に登録します。

- b) 各ノードのシステム・オプション・ファイル dsm.sys に別々のスタンザを追加します。このシステム・オプション・ファイルでは、以下のような特殊な性質を持つローカル・リソースをバックアップする必要があります。

- tcpclientaddress オプションの値は、ローカル・ホスト名か IP アドレスである必要があります。この IP アドレスは、ノード間の 1 次トラフィック用です。
- クライアントが、クラスターに接続せずに非クラスター化ボリュームをバックアップおよびリストアする場合は、tcpclientaddress オプションの値はブート IP アドレスでなければなりません。この IP アドレスを使用して、システム (ノード) を始動し、クラスターに再結合します。

Example stanza for NodeA_local:

```
Servername      server1_nodeA_local
nodename        nodeA_local
commmethod      tcpip
tcpport         1500
tcpserveraddress server1.example.com
tcpclientaddress nodeA_host.example.com
passwordaccess  generate
managedservices schedule
```

- c) 非クラスター化リソースのパスに、ユーザー・オプション・ファイル dsm.opt を定義します。

- servername オプションの値は、dsm.sys ファイル (非クラスター化ボリュームをバックアップするためのパラメータを定義したファイル) 内のサーバー・スタンザである必要があります
- ドメイン・オプションを使用して、バックアップする非クラスター化ファイル・システムを定義します。

注: バックアップ/アーカイブ操作の対象を非クラスター化ボリュームに限定するために、dsm.opt ファイルにドメイン・オプションを定義してあること、またはスケジュール内かバックアップ/アーカイブ・クライアントのコマンド・ラインでオプションを指定してあることを確認してください。

以下の例では、nodeA は、次の /home/admin/dsm.opt ファイルを使用して、/home/admin/A1.dsm.opt を参照する DSM_CONFIG 環境をセットアップします。

/home/admin/A1.dsm.opt

```
servername ibm_nodeA_local
domain      /fs1 /fs2

export DSM_CONFIG=/home/admin/A1.dsm.opt
```

- d) 非クラスター化ファイル・システムの増分バックアップを実行するには、スケジュールを定義してセットアップします。

```
Protect: IBM>define schedule standard local_backup action=incr
starttime=00:30 startdate=TODAY Duration=2
```

非クラスター化リソースをバックアップするように定義されたすべてのバックアップ/アーカイブ・クライアント・ノードに、スケジュールを関連付けます。

```
Protect: IBM>define association standard nodeA_local
```

10. クラスター・ファイル・システムのデータをリストアします。クラスター・リソース内のすべてのボリュームが、そのクラスター・リソース用に定義されたターゲット・ノードでバックアップされます。クラスター・ボリュームにあるデータをリストアする必要がある場合は、リストア時にクラスター・リソースを所有しているクライアント・ノードから、データをリストアできます。データをリストアするには、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップ中に使用したものと同一のユー

ザー・オプション・ファイル (dsm.opt) を使用しなければなりません。クラスター・ボリュームにデータをリストアするために必要な、追加セットアップ要件はありません。

11. ローカル・ファイル・システムのデータをリストアします。非クラスター化ボリュームは、非クラスター化操作のためにセットアップされた別のノード名でバックアップされます。このデータをリストアするためには、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップ中に使用されたものと同じのユーザー・オプション・ファイル dsm.opt を使用する必要があります。この例では、ローカル・ノード nodeA_local のクライアント・リストアを実行する前に、環境変数 DSM_CONFIG が /home/admin/A1.dsm.opt を参照するように設定しています。

関連概念

237 ページの『データのリストア』

IBM Spectrum Protect を使用して、特定のファイル、類似した名前を持つファイルのグループ、またはディレクトリー全体のバックアップ・バージョンをリストアします。

クラスター環境での Web クライアント・アクセスの使用可能化

フェイルオーバー状態が発生したときに IBM Spectrum Protect Web クライアント・アクセスが必要な場合は、クラスターに関連付けられる Web クライアント・アクセプター・デーモンを、クラスター・リソースと共にフェイルオーバーするように構成する必要があります。

始める前に

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.2 から、Web クライアント GUI を使用して IBM Spectrum Protect V8.1.2 以降のサーバーに接続できなくなりました。詳しくは、151 ページの『新しいセキュリティー環境における Web クライアントの使用』を参照してください。

このタスクについて

『クラスター環境でのバックアップ/アーカイブ・クライアントの構成』のセクションで説明したステップに従って構成を終えた後で、下記の追加ステップを実行して Web クライアント・アクセスのセットアップを完了してください。

手順

1. Web クライアントとスケジューラーを管理するようにクライアント・アクセプター・デーモンをセットアップします。クライアント・アクセプター・デーモンは、Web クライアント・アクセスに加えてスケジューラーも管理するようにセットアップする必要があります。そうすることで、クラスター・アプリケーションとして構成しなければならないデーモンの数が少なくなるので、構成と管理が簡単になります。フェイルオーバーが発生すると、テークオーバーを管理しているノード上でクライアント・アクセプターが始動します。
2. それぞれのノードのシステム・オプション・ファイル dsm.sys 内で、各サーバー・スタンザについて、managedservices オプションを更新します (以下の NodeA の例を参照)

```
Servername      server1_NodeA
nodename        NodeA
commmethod      tcpip
tcpip           1500
tcps            server1.example.com
tcpclientaddress nodeA.example.com
passwordaccess  generate
passworddir     /A1/tsm/pwd
schedlog        /A1/tsm/dsmsched.log
errorlogname    /A1/tsm/errorlog.log
managedservices webclient schedule
```

3. クライアント・アクセプター・デーモンを、既知の HTTP ポートを使用するようにセットアップします。デフォルトでは、クライアント・アクセプター・デーモンは、HTTP ポート 1581 (使用可能な場合) を Web クライアント・アクセス用に使用します。このポートを使用できない場合、クライアント・アクセプターは 1581 から検索を始め、最初に見つかった使用可能なポートを使用します。アクティブ/アクティブ・クラスター構成でフェイルオーバー状態が発生した場合、フェイルオーバー・クラスターのホ

スト・システムでは、複数のクライアント・アクセプター・インスタンスが実行される可能性があります。HTTP ポートにデフォルト設定が使用されている場合は、フェイルオーバー・ノードは、任意の使用可能なポートをフェイルオーバー先のクライアント・アクセプターに使用します。これは、デフォルトのポートは、フェイルオーバー・ホストの現行のクライアント・アクセプター・プロセスが使用している可能性が高いためです。この結果、新規の HTTP ポートが Web クライアント・ユーザーに認識されていないため、フェイルオーバー先のクライアント・アクセプターに関連付けられた Web クライアントに問題が生じます。httpport オプションを使用して、リソースごとに Web クライアント・アクセス用の特定のポートを指定することができます。この指定により、クラスター・リソースにサービスを提供するノードがどれであるかに関係なく、Web ブラウザーから接続する場合は常に同一のポートを使用することができます。次のようにして、それぞれのノードのシステム・オプション・ファイル (dsm.sys) の中で、各サーバー・スタンザについて httpport オプションを追加します。各スタンザが固有値を使用していることを確認してください。

```
Servername      server1_NodeA
nodename        NodeA
commmethod      tcpip
tcpp            1500
tcps            server1.example.com
tcpclientaddress nodeA.example.com
passwordaccess  generate
passwordddir    /A1/tsm/pwd
manageservices  webclient schedule
schedlogn       /A1/tsm/dsmsched.log
errorlogname    /A1/tsm/errorlog.log
httpport        1510
```

```
Servername      server1_NodeB
nodename        NodeB
commmethod      tcpip
tcpp            1500
tcps            server1.example.com
tcpclientaddress nodeB.example.com
passwordaccess  generate
passwordddir    /B1/tsm/pwd
manageservices  webclient schedule
schedlogn       /B1/tsm/dsmsched.log
errorlogname    /B1/tsm/errorlog.log
httpport        1511
```

```
Servername      server1_NodeC
nodename        NodeC
commmethod      tcpip
tcpp            1500
tcps            server1.example.com
tcpclientaddress nodeC.example.com
passwordaccess  generate
passwordddir    /C1/tsm/pwd
manageservices  webclient schedule
schedlogn       /C1/tsm/dsmsched.log
errorlogname    /C1/tsm/errorlog.log
httpport        1512
```

レガシー AIXIBM PowerHA SystemMirror セットアップのマイグレーション

現在、clusternode オプションを使用する IBM PowerHA SystemMirror 環境でバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用している場合は、現行の構成を更新する必要があります。clusternode オプションはサポートされなくなりました。

このタスクについて

以下のステップを実行して、現行の構成を更新します。

手順

1. バックアップ/アーカイブ・クライアントのシステム・オプション・ファイルを更新します。
clusternode オプションの場合と同様に、クラスター内の各ノードは、対応するそれぞれの dsm.sys

ファイル内に、バックアップ対象のクラスター・リソース・グループごとに別々のサーバー・スタンザを持っている必要があります。既存の NodeA の `dsm.sys` ファイルは、以下のようになります。

```
Servername      server1_nodeA
commethod      tcpip
tcpip          1500
tcps           server1.example.com
tcpclientaddress nodeA.example.com
passwordaccess generate
passworddir    /A1
clusternode     yes
manageservices schedule
schedlogn      /A1/dsmsched.log
errorlogname    /A1/errorlog.log
```

2. この例の中で `nodename` オプションが使用されていないことに注意してください。既存の NodeA の `dsm.sys` ファイルを次のように変更します。

- `clusternode` オプションを削除します。
- まだ `nodename` オプションを指定していない場合は、このオプションを指定します。

3. NodeA の新しい `dsm.sys` ファイルは、次のようになります。

```
Servername      server1_nodeA
commethod      tcpip
nodename        myclus (myclus is the existing cluster name )
tcpip          1500
tcps           server1.example.com
tcpclientaddress nodeA.example.com
passwordaccess generate
passworddir    /A1
manageservices schedule
schedlogn      /A1/dsmsched.log
errorlogname    /A1/errorlog.log
```

4. IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップ/アーカイブ・クライアント・ノードを登録します。最初のステップで新規のバックアップ/アーカイブ・クライアント・ノードを追加して現行のクラスター・ノード名のデフォルト値を置き換える場合は、それらのノードを IBM Spectrum Protect サーバーに登録してください。
5. スケジュール定義を更新します。前のステップで新規のバックアップ/アーカイブ・クライアント・ノードを追加した場合は、このノードのデータをバックアップするために以前に使用したスケジュール定義が、現在新規のクライアント・ノード名に関連付けられていることを確認してください。
6. セットアップを検証します。詳しくは、[107 ページの『クラスター環境でのバックアップ/アーカイブ・クライアントの構成』](#)を参照してください

スナップショット・ベースのファイル・バックアップ/アーカイブを実行する前に必要な AIX 構成の考慮事項

スナップショット・ベースのファイル・バックアップ/アーカイブを実行するために IBM Spectrum Protect AIX クライアントを構成しようとしている場合は、考慮する必要がある項目がいくつかあります。

- スナップショット対象のファイル・システムが含まれているボリューム・グループに、ファイル・システム用の JFS2 外部スナップショットを作成できるだけの十分なディスク・スペースがあることを確認してください。
- クライアントは、デフォルトで、ファイル・システム・サイズの 100% のサイズをスナップショット・サイズとして使用します。普通程度のファイル・システム・アクティビティーを持つファイル・システムの場合でさえ、この値が最も適切であることが分かっています。お客様自身のファイル・システム・アクティビティー経験に基づき、この値を低くする必要がある場合は、`snapshotcachesize` オプションを使用してこの値を微調整することができます。
- AIX 6.1 以降で、IBM Spectrum Protect が管理するすべてのファイル・システムについて新規 JFS2 ファイル・システムを作成する場合には、内部スナップショットを使用可能にはしないでください。クライアントは外部スナップショットを使用します。JFS2 では、同一ファイル・システムについて外部および内部のスナップショットを同時に作成することはできません。

関連資料

554 ページの『Snapshotcachesize』

snapshotcachesize オプションを使用して、スナップショットを作成するための適切なサイズを指定します。

スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成

バックアップ/アーカイブ・クライアントでスナップショット 差分増分バックアップ・コマンドを実行するには、NetApp ファイル・サーバー接続情報を構成する必要があります。また、**set password** コマンドを使用して、ファイル・サーバーのホスト名、 およびファイル・サーバーにアクセスするために使用されるユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

手順

1. 以下の手順を実行して、NetApp ファイラー上でコンソール・セッションを確立し、ファイル・サーバーで新規ユーザーを定義します。
 - a) ユーザーが http を使用し API コマンドを実行してファイル・サーバーにログインするのを許可するグループに、ユーザー ID を追加します。
 - b) ファイル・サーバーから次のコマンドを入力して、ユーザー ID をリストして設定を検証し、出力が似ていることを確認します。

```
useradmin user list snapdiff_user
```

```
Name: snapdiff_user
Info:
Rid: 131077
Groups: snapdiff_group
Full Name:
```

7 モード NetApp ファイラーの場合:

```
Allowed Capabilities: login-http-admin,api-*
```

クラスター・データ ONTAP NetApp ファイラーの場合、必要な唯一の機能は、admin 役割による ontapapi です。

- c) NetApp サーバーでユーザー ID の **security.passwd.firstlogin.enable** オプションが on に設定されている場合は、必ずすべてのグループに **login-telnet** および **cli-passwd*** 機能があることを確認してください。

ヒント: **security.passwd.firstlogin.enable** オプションが使用可能になっている場合、ユーザー ID は作成時に **expired** に設定されます。ユーザーはパスワードが変更されるまで、スナップショット差分の増分を含むすべてのコマンドを実行することができません。これらの機能を持っていないグループのユーザーは、ストレージ・システムにログインできません。NetApp ファイル・サーバーでのユーザー ID とパスワードの定義について詳しくは、NetApp 資料を参照してください。

2. NetApp ファイラーへのリモート管理セッションを許可するように NetApp Data ONTAP 組み込み HTTP サーバーを構成します。
 - a) スナップショット差分バックアップにプレーン HTTP 接続を使用することを予定している場合は、NetApp ファイラーで **httpd.admin.enable** オプションをオンにします。
 - b) スナップショット差分バックアップにセキュア HTTPS 接続を使用する (**-snapdiffhttps** オプションを指定する) ことを予定している場合は、NetApp ファイラーで **httpd.admin.ssl.enable** オプションをオンにします。
 - c) IBM Spectrum Protect クライアント・ノードから、IBM Spectrum Protect クライアント・コンピューターと NetApp ONTAP サーバー間の接続をテストして、ファイアウォールまたは他の NetApp 構成オプションが NetApp サーバーへの接続を妨げていないことを確認します。

ヒント: 接続のテスト方法については、NetApp ONTAP の資料を参照してください。

3. NetApp ボリュームをエクスポートし、以下の設定を検討します。

ヒント: Linux ホストで使用するための NetApp ボリュームのエクスポートについて詳しくは、NetApp の資料を参照してください。

- NFS マウントを使用して NetApp ボリュームをマップする。
 - 必ず、NetApp ボリュームに UNIX セキュリティー設定があることを確認します。
4. 以下のステップを使用して、ステップ [116 ページ](#) の『[1](#)』で作成したユーザー ID について、バックアップ/アーカイブ・クライアント上にユーザー ID とパスワードを設定します。
- a) root ユーザー ID としてログインします。
 - b) バックアップ/アーカイブ・クライアントのコマンド・ラインから、次のコマンドを入力します。

```
dsmc set password -type=fileserver my_file_server snapdiff_user newPassword
```

以下の値を置換します。

my_file_server

この値は、ご使用の NetApp ファイル・サーバーの完全修飾ホスト名です。

snapdiff_user

この値は、ステップ [116 ページ](#) の『[1](#)』で作成したユーザー ID です。

newPassword

この値は、ステップ [116 ページ](#) の『[1](#)』で作成したユーザー ID のパスワードです。

関連タスク

[117 ページ](#) の『[Clustered Data ONTAP NetApp ファイル・サーバー・ボリュームの保護](#)』

Clustered Data ONTAP 構成の一部である NetApp ファイル・サーバー (C-Mode ファイル・サーバー) 上にあるボリュームのスナップショット差分増分バックアップを作成できます。

関連資料

[546 ページ](#) の『[Snapdiff](#)』

snapdiff (スナップショット差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

[553 ページ](#) の『[Snapdiffhttps](#)』

snapdiffhttps オプションは、スナップショット差分バックアップ時の NetApp ファイラーとの通信にセキュア HTTPS 接続を使用する場合に指定します。

[366 ページ](#) の『[Createnewbase](#)』

createnewbase オプションは基本スナップショットを作成し、それをソースとして使用してフル増分バックアップを実行します。

Clustered Data ONTAP NetApp ファイル・サーバー・ボリュームの保護

Clustered Data ONTAP 構成の一部である NetApp ファイル・サーバー (C-Mode ファイル・サーバー) 上にあるボリュームのスナップショット差分増分バックアップを作成できます。

始める前に

- [116 ページ](#) の『[スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成](#)』の手順を実行します。
- NetApp ストレージ仮想マシンの管理者によって Clustered Data ONTAP 環境が適切にセットアップされていることを確認します。

制約事項: Clustered Data ONTAP ボリュームのスナップショット差分増分バックアップに対する IBM Spectrum Protect のサポートは、NetApp ONTAP 8.2.1 およびそれ以降のバージョンでのみサポートされます。

このタスクについて

Clustered Data ONTAP 環境では、ストレージ仮想マシン (データ vServer と呼ばれる) にデータ・ボリュームが含まれます。このデータ・ボリュームは、バックアップ/アーカイブ・クライアントによって保護することができます。

ストレージ仮想マシンは、単一の無限ボリュームまたは 1 つ以上のフレックス・ボリュームから構成されます。ボリュームには、ファイル共有 (Windows オペレーティング・システムの Linux オペレーティング・システムの NFS) を使用してリモートからアクセスできます。

ストレージ仮想マシンは、クラスター管理ファイラーによって管理されます。これは、仮想マシンが存在している物理ファイラー (C モード・ファイラー) です。バックアップ・クライアントは、ボリュームにアクセスするリモート・マシン上にインストールされます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップ操作でアクセスされる NetApp C モード・ファイラーの資格情報を使用して構成されている必要があります。

要件:

- この手順を行うには、以下の情報が必要です。
 - クラスター管理ファイラーのホスト名または IP アドレス。
 - ストレージ仮想マシンのホスト名または IP アドレス。
 - ストレージ仮想マシン名。
 - クラスター管理ファイラーの資格情報 (ユーザー名とパスワード)。
- クライアントによって構成されたクラスター管理ファイラー・ユーザーには、ontapapi 機能と admin の役割が割り当てられている必要があります。

ontapapi 機能では、telnet、ssh、または http/https などの方法を使用してファイラーに対話式的アクセスを行うことはできません。スナップショット差分増分バックアップを実行するために、その他のユーザー機能は不要です。

手順

バックアップ/アーカイブ・クライアントがインストールされているリモート・マシン上で以下のステップを実行します。

1. クラスター管理ファイラーの資格情報を使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントを構成します。**dsmc set password** コマンドを使用して、ストレージ仮想マシンに関連付けられた管理ファイラーの資格情報を保管します。
例えば、次のコマンドを入力します。

```
dsmc set password -type=filer management_filer_hostname  
management_filer_username management_filer_password
```

各構成要素について説明します。

management_filer_hostname

クラスター管理ファイラーのホスト名または IP アドレス。

management_filer_username

クラスター管理ファイラーのユーザー名。

management_filer_password

管理ファイラーのユーザーのパスワード。

ヒント: クラスター管理ファイラーのパスワードは、バックアップ/アーカイブ・クライアントによって保管されるときに暗号化されます。

2. **dsmc set netappsvm** コマンドを使用して、各ストレージ仮想マシンを管理ファイラーに関連付けます。
例えば、次のコマンドを入力します。

```
dsmc set netappsvm storage_virtual_machine_hostname  
management_filer_hostname storage_virtual_machine_name
```

各構成要素について説明します。

storage_virtual_machine_hostname

バックアップするボリュームをマウントするために使用するストレージ仮想マシンのホスト名または IP アドレス。

management_filer_hostname

クラスター管理ファイラーのホスト名または IP アドレス。

storage_virtual_machine_name

ストレージ仮想マシンの名前。

注: ボリュームのマウントに使用するストレージ仮想マシンのホスト名または IP アドレスは、**dsmc set** コマンドで指定するものと一致している必要があります。例えば、ストレージ仮想マシンの IP アドレスを使用してボリュームをマウントしている場合、**dsmc set** コマンドでは (ホスト名ではなく) IP アドレスを使用する必要があります。そうしないと、クラスター管理ファイラーを使用するクライアント認証は失敗します。

dsmc set netappsvm コマンドは、各ストレージ仮想マシンに対して 1 回指定するのみですみます。ストレージ仮想マシンが別のクラスター管理ファイラーに移動された場合、このコマンドを使用して、関連付けられたクラスター管理ファイラーのホスト名を更新する必要があります。

- リモート・ストレージ仮想マシンをローカル・ファイル・システムにマウントします。
例えば、各ストレージ仮想マシンに対して次のコマンドを入力します。

```
mount storage_virtual_machine_hostname /tmp/fs1
```

各構成要素について説明します。

storage_virtual_machine_hostname

ストレージ仮想マシンのホスト名または IP アドレス。

/tmp/fs1

ストレージ仮想マシンのボリュームのマウント先のファイル・システムの例。

- フレックス・ボリュームまたは無限ボリュームのフル・プログレッシブ増分バックアップを開始します。

デフォルトでは、NetApp ファイル・サーバーへの HTTP アクセスは有効にされていません。HTTP を使用したアクセスを許可するようにファイル・サーバーを構成していない場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントの **snapdiffhttps** オプションを使用して、HTTPS プロトコルを使用したクラスター管理サーバーへのアクセスを有効にしてください。

例えば、Linux クライアントの場合、次のコマンドを入力します。

```
dsmc incr /tmp/fs1 -snapdiff -snapdiffhttps
```

ヒント: フル・プログレッシブ増分バックアップは、1 回だけ実行する必要があります。このバックアップが正常に完了した後、将来のバックアップ操作では差分バックアップを実行します。

- フレックス・ボリュームまたは無限ボリュームのスナップショット差分バックアップを開始します。

例えば、Linux クライアントの場合、次のコマンドを入力します。

```
dsmc incr /tmp/fs1 -snapdiff -snapdiffhttps
```

例

バックアップ/アーカイブ・クライアントのユーザーが、C モード・ファイル・サーバー上のボリュームのスナップショット差分増分バックアップを実行したいと考えています。このユーザーは、Windows バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してバックアップを実行しており、ボリュームは CIFS 共有としてマウントされています。C モード・ファイラー構成は、以下のとおりです。

ONTAP 8.31 管理ファイラー

```
Hostname: netapp1mgmt.example.com
User: netapp1mgmt_user
Password: pass4netapp1mgmt
CIFS Domain Controller: WINDC
Domain User: domainuser
```

フレックス・ボリュームのストレージ仮想マシン

```
Hostname: netapp1-v1.example.com
Storage virtual machine name: netapp1-client1
CIFS share: demovol
Volume name: demovol
```

無限ボリュームのストレージ仮想マシン

```
Hostname: netapp1-v4.example.com
Storage virtual machine name: netapp1-infiniteVolume1
CIFS Share: InfiniteVol
```

ユーザーは、バックアップ/アーカイブ・クライアント上の以下のステップを実行します。

1. 次のコマンドを発行して、管理ファイラーの資格情報を使用してクライアントを構成します。

```
dsmc set password -type=filer netapp1mgmt.example.com netapp1mgmt_user
pass4netapp1mgmt
```

2. 次のコマンドを使用して、各ストレージ仮想マシンのストレージ仮想マシン・アソシエーションを定義します。

```
dsmc set netappsvm netapp1-v1.example.com netapp1mgmt.example.com netapp1-
client1
```

```
dsmc set netappsvm netapp1-v4.example.com netapp1mgmt.example.com netapp1-
infiniteVolume1
```

3. 次のように、各ストレージ仮想マシンについて、リモート・ボリュームをドライブ名にマップします。

```
net use y: ¥¥netapp1-v1.example.com¥demovol WINDC¥domainuser
```

```
net use z: ¥¥netapp1-v4.example.com¥InfiniteVol WINDC¥domainuser
```

4. フレックス・ボリュームおよび無限ボリュームのフル・プログレッシブ増分バックアップを実行します。

```
dsmc incr y: -snapdiff -snapdiffhttps
```

```
dsmc incr z: -snapdiff -snapdiffhttps
```

フル・プログレッシブ増分バックアップは、1 回だけ実行する必要があります。このバックアップが正常に完了した後、将来のバックアップ操作では差分バックアップを実行します。

5. 次のように、フレックス・ボリュームおよび無限ボリュームのスナップショット差分バックアップを実行します。

```
dsmc incr y: -snapdiff -snapdiffhttps
```

```
dsmc incr z: -snapdiff -snapdiffhttps
```

スナップショットを使用した NetApp プログレッシブ増分バックアップに対する SnapMirror サポート (snapdiff)

NetApp の SnapDiff バックアップ処理を NetApp の SnapMirror 複製と併用して、NetApp ソース・ファイラー・ボリュームまたは宛先ファイラー・ボリュームをバックアップできます。

NetApp SnapMirror 環境では、1 次データ・センターに接続されているボリューム上のデータは、災害復旧サイトのリモート・サーバーに接続されているボリュームにミラーリングされます。1 次データ・センターにある NetApp ファイラーはソース・ファイラーと呼ばれ、災害復旧サイトにある NetApp ファイラーは宛先ファイラーと呼ばれます。バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用して、ソース・ファイラー・ボリュームまたは宛先ファイラー・ボリュームのスナップショット差分バックアップを作成できます。

シナリオ: ソース・ファイラー・ボリューム上のデータのバックアップ

ソース・ファイラー・ボリュームからデータをバックアップするようにバックアップ/アーカイブ・クライアントを構成できます。このシナリオでは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・ノードが NFS エクスポート共用を使用して NetApp ソース・ファイラー・ボリュームにアクセスし、ファイラー・ボリュームをマウントできるように、このクライアント・ノードを構成する必要があります。

例えば、ソース・ファイラーの名前が ProdFiler である構成を考えてみましょう。ProdFiler ファイラーに UserDataVol というボリュームが存在し、そのボリュームがバックアップ/アーカイブ・クライアント・ノードから NFS を使用してアクセス可能であると仮定します。また、その共用は UserDataVol_Share としてマウントされると仮定します。

スナップショット差分バックアップを開始すると、NetApp ファイラーは、バックアップされるボリューム上に新しい差分スナップショットを作成します。この差分スナップショットは、基本 (前回) のスナップショットと比較されます。基本スナップショットの名前は、前回のバックアップが完了したときに IBM Spectrum Protect サーバーに登録されました。その基本スナップショットの内容は、ソース・ファイラー・ボリュームに作成された差分スナップショットと比較されます。2 つのスナップショットの差分はサーバーにバックアップされます。

スナップショット差分バックアップを開始するには、以下のコマンドを使用します。このコマンドは、ソース・ファイラー・ボリュームにアクセスしてこれを保護するように構成されているクライアント・ノードのコンソールで入力します。このコマンドはソース・ファイラー上のボリュームをバックアップするために発行されるため、新しいスナップショット (差分スナップショット) が作成され、IBM Spectrum Protect サーバーに登録されたスナップショットが基本スナップショットとして使用されます。デフォルトの動作では、差分スナップショットと基本スナップショットの両方が作成されます。-diffsnapshot=create オプションはデフォルト値であり、このコマンドで明示的に指定する必要はありません。

```
dsmc incr ¥¥ProdFiler¥UserDataVol_Share -snapdiff -diffsnapshot=create
```

宛先ファイラー上のデータのバックアップ

より標準的な構成では、宛先ファイラーに保管されている複製ボリューム・スナップショットを使用してソース・ボリュームのバックアップを作成することにより、ソース・ファイラーからバックアップをオフロードします。スナップショット差分バックアップの作成では、バックアップするボリュームに新しいスナップショットを作成する必要があるため、通常、宛先ファイラーのバックアップでは問題が生じます。ソース・ボリュームの内容をミラーリングする宛先ファイラー・ボリュームは読み取り専用であるため、これらのボリュームにスナップショットを作成することはできません。

この読み取り専用の制限を取り除くために、いくつかのクライアント構成オプションが提供されています。これらのオプションにより、読み取り専用の宛先ボリュームにある既存の基本スナップショットと差分スナップショットを使用して、変更内容を IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップできます。

ソース・ファイラーのシナリオと同様に、宛先ファイラー・ボリュームには NFS エクスポート共用を使用してアクセスします。

スナップショット差分オプションの要約

useexistingbase オプションを指定すると、基本スナップショットの確立時に、基本スナップショットとしてボリューム上の最新のスナップショットが使用されます。以下のいずれかの条件に該当する場合には、新しい基本スナップショットが確立されます。

- このバックアップが初期バックアップである場合。
- createnewbase=yes が指定されている場合。
- 前回の差分スナップショットによって登録された基本スナップショットが現在は存在せず、欠落している基本スナップショットより古い既存スナップショットが存在しない場合。

このオプションを指定しない場合は、バックアップされるボリューム上に新しいスナップショットが作成されます。宛先ファイラー・ボリュームは読み取り専用であるため、宛先ファイラー・ボリュームのスナップショット差分バックアップを作成するときは useexistingbase を指定する必要があります。

useexistingbase を指定しないと、読み取り専用のボリュームでは新しいスナップショットを作成できないため、宛先ファイラー・ボリュームのスナップショット差分バックアップは失敗します。

宛先ファイラー・ボリュームをバックアップする場合は、useexistingbase オプションと diffsnapshot=latest オプションの両方を使用して、最新の基本スナップショットと最新の差分スナップショットがボリューム・バックアップ中に使用されるようにします。

宛先ファイラー・ボリュームで基本スナップショットとして使用するスナップショットを指定するには、basesnapshotname オプションを使用します。このオプションを指定しない場合は、基本スナップショットとして宛先ファイラー・ボリュームにある最新のスナップショットが使用されます。ワイルドカードを使用して基本スナップショットの名前を指定できます。

宛先ファイラー・ボリュームでスナップショット差分バックアップ中に使用する差分スナップショットを指定するには、diffsnapshotname オプションを使用します。このオプションは、diffsnapshot=latest も指定する場合のみ、指定されます。ワイルドカードを使用して差分スナップショットの名前を指定できます。

diffsnapshot=latest オプションは、ソース・スナップショットとしてファイル・サーバーで検出された最新のスナップショットを使用することを指定します。

これらの各オプションに関する追加情報は、『クライアント・オプションの解説』のトピックに記載されています。

スナップショット差分バックアップ・コマンドの例

以下の例では、ソース・ファイラー上のボリュームが NetApp の SnapMirror テクノロジーを使用して災害復旧ファイラーに複製されていると仮定します (ホスト名は DRFiler)。DRFiler ボリュームは読み取り専用であるため、基本スナップショットとして使用する複製スナップショット、および差分スナップショットとして使用するスナップショットを指定するためのオプションを使用します。宛先ファイラーのスナップショット差分バックアップを作成するときに使用するスナップショットを指定することにより、読み取り専用のボリュームへのスナップショットの作成は試行されません。

スナップショット差分バックアップを開始するには、以下のコマンドを使用します。これらのほとんどのコマンドでは、宛先ファイラー・ボリュームに保管されているスナップショットを使用してスナップショット差分バックアップが作成されます。-useexistingbase オプションを指定すると読み取り専用の宛先ファイラー・ボリュームに新しいスナップショットが作成されないため、宛先ファイラー・ボリュームからバックアップする場合は、必ずこのオプションを指定してください。

例 1: NetApp スナップショット・スケジューラーによって作成されたデフォルトの nightly (毎晩) バックアップを使用して宛先ファイラーをバックアップする

```
dsmc incr ¥¥DRFiler¥UserDataVol_Share -snapdiff -useexistingbase  
-diffsnapshot=latest -basesnapshotname="nightly.?"
```

疑問符 (?) は単一の文字と一致させるために使用します。この例では、basesnapshotname=nightly.? は『nightly.』の後に単一の文字が続く名前 (nightly.0、nightly.1 など) を持つ最新の基本スナップショットを使用します。

例 2. 手動で作成された (NetApp スナップショット・スケジューラーで作成されていない) スナップショットを使用して宛先ファイラー・ボリュームをバックアップする

```
dsmc incr \\DRFiler\UserDataVol_Share -snapdiff -useexistingbase
-diffsnapshot=latest -basesnapshotname="share_vol_base?"
-diffsnapshotname="share_vol_diff?"
```

この例でも、基本スナップショットと差分スナップショットの名前の一部に異なる番号がある場合に疑問符 (?) のワイルドカードを使用して構文を示しています。

例 3. 宛先ファイラー・ボリュームをバックアップし、基本スナップショットと差分スナップショットに使用するスナップショットを指定する

```
dsmc incr ¥¥DRFiler¥UserDataVol_Share -snapdiff -useexistingbase
-diffsnapshot=latest -basesnapshotname="share_vol_base"
-diffsnapshotname="share_vol_diff_snap"
```

例 4: スクリプトによって生成された、命名規則を使用するスナップショットをバックアップする

この例では、NetApp ファイラーで実行されているスクリプトによって、日時のタイム・スタンプがスナップショット名に追加されます。例えば、2012 年 11 月 3 日 11:36:33 PM に作成されたスナップショットの名前は、UserDataVol_20121103233633_snapshot になります。オプションと一緒にワイルドカードを使用して、最新の基本スナップショットと差分スナップショットを選択できます。例えば次のとおりです。

```
dsmc incr ¥¥DRFiler¥UserDataVol_Share -snapdiff -useexistingbase
-basesnapshotname="UserDataVol_Share_*_snapshot" -diffsnapshot=latest
-diffsnapshotname="UserDataVol_Share_*_snapshot"
```

-useexistingbase は最新の基本スナップショットを選択します。-basesnapshotname にアスタリスク (*) のワイルドカードを追加すると、スクリプト命名規則に従った最新の基本スナップショットが選択されます。-diffsnapshot=latest オプションを使用することで新しい差分スナップショットが作成されず、-diffsnapshotname= オプションを使用することでスクリプト命名規則に従った最新の既存差分スナップショットが選択されます。(アスタリスクのワイルドカードは、任意のストリングと一致します)。

例 5: ソース・ファイラーにある既存の差分スナップショットを使用してスナップショット差分バックアップを実行する

ソース・ファイラーにある既存の差分スナップショットを使用するには、-diffsnapshot=latest を使用して新しい差分スナップショットが作成されないようにします。また、-diffsnapshotname オプションを使用して、使用する既存の差分スナップショットを指定します。指定したスナップショットは、前回のバックアップの作成時に IBM Spectrum Protect サーバー・データベースに登録された基本スナップショットと比較されます。例えば、次のようにします。

```
dsmc incr ¥¥ProdFiler¥UserDataVol_Share -snapdiff -diffsnapshot=latest
-diffsnapshotname="share_vol_diff_snap"
```

サーバーへのワークステーションの登録

IBM Spectrum Protect を使用する前に、ノード名とパスワードをセットアップし、ノード名をサーバーに登録しておく必要があります。

ノード名とパスワードの設定プロセスを登録と呼びます。登録のタイプには、オープン とクローズ の 2 つが使用できます。

IBM Spectrum Protect サーバー管理者がユーザー・サイトの登録のタイプを選択します。

制約事項: IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.2 以降のサーバーでは、オープン登録は使用できなくなりました。クローズ登録を使用する必要があります。オープン登録は、IBM Spectrum Protect V8.1.1、V8.1.0、V7.1.7 以前のサーバーでのみ使用できます。

この必須タスクを実行するには、root ユーザーまたは許可ユーザーでなければなりません。

Web クライアントの使用を計画している場合は、システム特権、ポリシー特権、クライアント・アクセス権限、またはクライアント所有者権限を備えた管理ユーザー ID を持っている必要があります。新規ノード

が登録されると、サーバー管理者はそのノード名に一致する管理ユーザー ID を作成する必要があります。デフォルトでは、このノードは、クライアント所有者権限を持ちます。

IBM Spectrum Protect サーバー管理者は、**REGISTER NODE** サーバー・コマンドで **userid** パラメーターを指定する必要があります。

```
REGISTER NODE node_name password userid=user_id
```

ここで、ノード名と管理ユーザー ID は同じでなければなりません。例えば、次のようにします。

```
REGISTER NODE node_a mypassw0rd userid=node_a
```

クローズされた登録

クローズ登録では、IBM Spectrum Protect 管理者が、ユーザーのワークステーションをクライアント・ノードとしてサーバーに登録する必要があります。企業でクローズ登録を使用している場合、ユーザーは IBM Spectrum Protect 管理者に情報をいくつか提供する必要があります。

このタスクについて

次の項目を IBM Spectrum Protect アドミニストレーターに提供する必要があります。

- ノード名 (**hostname** コマンドによって戻された値、ワークステーションの名前、または **nodename** オプションを使用して指定したノード名)。**nodename** オプションでノード名を指定しない場合、デフォルトのログイン ID は **hostname** コマンドが返す名称になります。
- 使用したい初期パスワード (必要な場合)
- 連絡先 (名前、ユーザー ID、電話番号など)

IBM Spectrum Protect 管理者は以下を定義してくれます。

- クライアント・ノードが属するポリシー・ドメイン。ポリシー・ドメインには、ポリシー・セットと管理クラスが含まれており、これにより、ユーザーがバックアップおよびアーカイブしたファイルを IBM Spectrum Protect がどのように管理するかが制御されます。
- サーバーにファイルを送る前に、ファイルを圧縮できるかどうか
- サーバー・ストレージからのバックアップおよびアーカイブ・データを削除できるかどうか

オープン登録

オープン登録を使用して、システム管理者は、使用するワークステーションをクライアント・ノードとして IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.1、V8.1.0、V7.1.7 以前のサーバーに登録することができます。

このタスクについて

初めてセッションを開始すると、ご使用のワークステーションをクライアント・オプション・ファイルで指定された IBM Spectrum Protect サーバーに登録するために必要な情報の入力を求めるプロンプトが表示されます。ユーザーは自分のノード名、パスワード、および連絡用情報を提供する必要があります。

オープン登録を使用するときは、次のように行われます。

- クライアント・ノードが **standard** という名前のポリシー・ドメインに割り当てられます。
- サーバー・ストレージからファイルのアーカイブ・コピーを削除することはできますが、ファイルのバックアップ・バージョンを削除することはできません。

必要に応じて、IBM Spectrum Protect 管理者は、後でこれらのデフォルトを変更できます。

include-exclude リストの作成

include-exclude リストを作成しなければ、バックアップ/アーカイブ・クライアントはすべてのファイルがバックアップ・サービスの対象であると判断し、バックアップおよびアーカイブ・サービスにデフォルトの管理クラスを使用します。

このタスクについて

これはオプションのタスクですが、重要なものです。

include-exclude リストを作成すると、バックアップ・サービスから特定のファイルまたはファイル・グループを除外し、特定の管理クラスをファイルに割り当てることができます。クライアントは、明示的に除外されていない、すべてのファイルのバックアップをとります。IBM Spectrum Protect クライアントのディレクトリーをバックアップ・サービスの対象から除外する必要があります。 **query inclexcl** コマンドを使用すると、include と exclude ステートメント一覧を表示できます。その表示順序は、どのオブジェクトを包含対象とするかを TSM が決定時に調べる順序です。

dsm.sys ファイルに include-exclude リストを指定します。dsm.sys ファイルに複数のサーバーを定義している場合は、それぞれのサーバーに独自の include-exclude リストが必要です。このリストには、inclexcl オプションで指定した include-exclude ファイルから得られる include-exclude ステートメントを入れることもできます。

クライアントが include-exclude ステートメントを処理するとき、include-exclude ファイル内にある include-exclude ステートメントは、dsm.sys 内にある inclexcl オプションによって占有されている位置に同じ順序で置かれ、適宜処理されます。

手順

以下の方法を使用して、include-exclude リストを作成したり、include-exclude ファイルを指定したりすることができます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI または Web クライアント・ディレクトリー・ツリーに include-exclude ステートメントを追加することができます。詳細手順については、オンライン・ヘルプを参照してください。
 - a) 「編集」メニューを開いて、「クライアント・プリファレンス」を選択します。「プリファレンス」ダイアログで、「包含/除外」タブを選択します。プリファレンス・エディターを使用して INCLEXCL ファイルを指定できます。しかし、プリファレンス・エディターを使用して INCLEXCL ファイルを作成することはできません。
 - b) 以下の手順を実行して、include-exclude リストを手動で作成します。
- 以下のステップを実行することによって、include-exclude リストを手動で作成できます。
 - a) 包含および除外の要件を決定します。
 - b) dsm.sys ファイル内のサーバー・スタンザを見つけます。サーバー・スタンザごとに、その独自の include-exclude リストが必要です。
 - c) include および exclude ステートメントを入力します。クライアントは最初に、すべての exclude.fs ステートメントおよび exclude.dir ステートメントを (include-exclude リスト内でのステートメントの位置に関係なく) 評価して、除外されたファイル・スペース、ディレクトリー、およびファイルを、処理に使用できるオブジェクトのリストから除去します。他のすべての include-exclude ステートメントはリストの下から上に処理されます。したがって、include-exclude ステートメントはすべて正しい順序で入力してください。例えば、次のような include-exclude リストでは、includefile.cpp ファイルは、バックアップされません。

```
include /Users/user01/Documents/includefile.cpp
exclude /Users/user01/Documents/.../*
```

一方、次のような include-exclude リストでは、includefile.cpp ファイルは、バックアップされます。

```
exclude /Users/user01/Documents/.../*
include /Users/user01/Documents/includefile.cpp
```

d) ファイルを保管し、閉じます。

Mac OS X の場合、ファイルを Unicode (UTF-8 または UTF-16) でエンコードしたプレーン・テキストとして保存していることを確認します。拡張子の .txt を追加しないでください。

e) クライアントを再始動して、include-exclude リストを使用可能にします。

関連概念

[447 ページの『ユニコード対応クライアントの考慮事項』](#)

include-exclude ファイルはユニコード・フォーマットでも非ユニコード・フォーマットでもかまいません。

[129 ページの『除外するシステム・ファイル』](#)

除外するためにクライアント・オプション・ファイルに入れる必要があるシステム・ファイルがいくつかあります。

[297 ページの『ストレージ管理ポリシー』](#)

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

関連資料

[446 ページの『Incl excl』](#)

incl excl オプションは、include-exclude オプション・ファイルのパスとファイル名を指定します。

include-exclude オプション

ここでは、クライアント・オプション・ファイルに指定できる include および exclude オプション、システム・ファイルを除外する最小の include-exclude リスト、サポートされるワイルドカード文字のリスト、およびワイルドカード文字を包含および除外パターンで使用方法の例を簡単に説明します。

ファイル・スペースおよびディレクトリーの除外

指定したディレクトリー内のすべてのファイルおよびサブディレクトリーを処理から除外するには、exclude.dir ステートメントを使用します。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは最初に、(include-exclude リスト内の位置に関係なく) すべての exclude.dir ステートメントを評価して、除外されたディレクトリーおよびファイルを、処理に使用できるオブジェクトのリストから除去します。exclude.dir ステートメントは、パターンと一致するすべての include ステートメントを上書きします。

処理からファイル・スペースとディレクトリーを除外するために以下のオプションを使用できます。

exclude.fs

パターンと一致するファイル・スペースを除外します。クライアントは、指定されたファイル・スペースの処理を考慮しないので、通常の削除済みファイルの満了処理を行うことはできません。以前に包含したファイル・スペースを除外した場合に、既存のバックアップ・バージョンは、関連する管理クラス定義に保持規則が指定されていれば、サーバー上に残ります。

exclude.dir

ディレクトリー、そのファイル、およびそのすべてのサブディレクトリーとそのファイルをバックアップ処理から除外します。例えば、ステートメント exclude.dir /test/dan/data1 は、/test/dan/data1 ディレクトリーとその中のファイル、およびそのすべてのサブディレクトリーとその中のファイルを除外します。バックアップしないファイルを多数含む大規模なディレクトリーを除外するためには、標準の exclude オプションを使用するより、exclude.dir オプションの使用をお勧めします。exclude.dir ステートメントを上書きするために include オプションは使用できません。ディレクトリー分岐全体を除外する場合は exclude.dir のみを使用してください。

- 以下のステートメントを使用して、ボリューム /Volumes/disk2 全体をバックアップ処理から除外します。ボリューム (/Volumes/disk2) はバックアップされますが、/Volumes/disk2 にあるその他すべてのディレクトリーは除外されることに注意してください。

```
exclude /Volumes/disk2/*
exclude.dir /Volumes/disk2/*
```

- ドメイン増分バックアップからボリューム全体を除外する代替方法として、domain ステートメントを使用してボリュームを除外することができます。例えば次のとおりです。

```
domain "-/Volumes/disk2"
```

この代替方法でも、/Volumes/disk2 にあるファイルの選択バックアップを行うことができます。

関連資料

416 ページの『[Exclude オプション](#)』
 exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

ジャーナル・ベースのバックアップからのファイルおよびディレクトリーの除外

ジャーナル・ベース・バックアップからファイルおよびディレクトリーを除外する方法は2つあります。

- AIX および Linux の場合、1 つは、クライアント・オプション・ファイルに除外ステートメントを追加して、バックアップ処理中にファイルまたはディレクトリーがバックアップされないようにする 方法です。
- AIX および Linux の場合、もう 1 つは、ジャーナル構成ファイル tsmjbbd.ini に除外ステートメントを追加し、ファイルまたはディレクトリーにジャーナル 項目が追加されないようにして、ジャーナル・ベース・バックアップ中にジャーナル項目が処理されないようにする方法です。

AIX バージョン 6.1 以上を実行している場合は、tsmjbbd.ini ファイルに exclude.snapshot ステートメントを追加して、ジャーナル・ベースのバックアップ・デーモンが JFS2 内部スナップショット・ディレクトリーをモニターできないようにします。

注: 2 つの除外ステートメントに相関関係はありません。除外ステートメントは tsmjbbd.ini に格納することをお勧めします。そうすることで、除外ステートメントがジャーナル・データベースに入力されてジャーナル・ベースのバックアップ中に処理されるのを防止することができます。

除外ステートメントによる処理の制御

クライアントがすべての exclude ステートメントを評価した後、以下のオプションが、処理に使用できるオブジェクトの残りのリストに照らして 評価されます。

127 ページの表 27 では、包含および除外ステートメントを使用して処理を制御するために使用できるオプションを示しています。

表 27. include-exclude ステートメントを使用した処理を制御するオプション		
オプション	説明	ページ
バックアップ処理		
exclude exclude.backup exclude.file exclude.file.backup	これらのオプションは、同じような機能を果たします。これらのオプションは、ファイルまたはファイルのグループをバックアップ・サービスおよびスペース管理サービス (HSM クライアントがインストールされている場合) から除外するために使用します。exclude.backup オプションでは、ファイルは通常バックアップから除外されるだけで、HSM からは除外されません。	416 ページの『 Exclude オプション 』

表 27. include-exclude ステートメントを使用した処理を制御するオプション (続き)

オプション	説明	ページ
include include.backup include.file	これらのオプションは、バックアップ処理のためにファイルを組み込んだり、管理クラスを割り当てるために使用します。	447 ページの『include オプション』
include.fs	クライアントが増分バックアップのファイル・スペースを処理する方法を制御します。	447 ページの『include オプション』
アーカイブ処理		
exclude.archive	アーカイブ・サービスからファイルまたはファイルのグループを除外します。	416 ページの『Exclude オプション』
include include.archive	これらのオプションは、同じような機能を果たします。これらのオプションは、アーカイブ処理のためにファイルを含めたり、管理クラスを割り当てるために使用します。	447 ページの『include オプション』
イメージ処理		
exclude.fs.nas	backup nas コマンドで使用された場合に、NAS ファイル・サーバー上のファイル・システムをイメージ・バックアップから除外します。NAS ノード名を指定しないと、識別されたファイル・システムがすべての NAS ファイル・サーバーに適用されます。 backup nas コマンドは、exclude.fs および exclude.dir ステートメントを含めて、他のすべての exclude ステートメントを無視します。このオプションは、AIX および Solaris クライアントの場合にのみ使用します。	416 ページの『Exclude オプション』
exclude.image	指定のパターンと一致するマウント済みのファイル・システムとロー論理ボリュームをフルイメージ・バックアップ操作から除外します。増分イメージ・バックアップ操作は、exclude.image の影響を受けません。このオプションは、AIX、Solaris、およびすべての Linux クライアントに有効です。	416 ページの『Exclude オプション』
include.fs.nas	include.fs.nas オプションは、管理クラスを Network Attached Storage (NAS) ファイル・システムにバインドするために使用します。NAS ファイル・システム・イメージのバックアップ中にクライアントが目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定するには、dsm.sys ファイルで include.fs.nas オプションとともに toc オプションを使用します。詳しくは、586 ページの『Toc』を参照してください。このオプションは、AIX および Solaris クライアントでのみ有効です。	447 ページの『include オプション』

表 27. include-exclude ステートメントを使用した処理を制御するオプション (続き)

オプション	説明	ページ
include.image	<p>backup image コマンドと共に使用した場合、ファイル・スペースまたは論理ボリュームを含めたり、管理クラスを割り当てたり、あるいは特定の論理ボリュームに各種イメージ・バックアップの処理オプションの 1 つを割り当てることができます。</p> <p>backup image コマンドは、他の組み込みオプションをすべて無視します。このオプションは、AIX、Solaris、Linux x86_64、および Linux on POWER® のみで有効です。</p>	447 ページの『include オプション』

除外するシステム・ファイル

除外するためにクライアント・オプション・ファイルに入れる必要があるシステム・ファイルがいくつかあります。



重要: これらのシステム・ファイルは、オペレーティング・システムによってロックされているか、リストア時に問題の原因となる可能性があるものです。これらは、回復しようとするオペレーティング・システムを破壊する恐れのあるシステム・ファイル、または容易に再作成できるデータを含む一時ファイルです。

注: このセクションは、Mac OS X にのみ適用されます。

暗黙的に生成されるこれらのステートメントは、**query inclexcl** コマンドの出力の行にソース「operating system」と共に表示されます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、dsm.sys ファイルから include-exclude リストに次の exclude ステートメントを追加します。これらのステートメントは、いずれも dsm.sys ファイルに包含しないでください。包含すると、重複項目が発生します。

```
EXCLUDE.ARCHIVE "/.../Desktop DB"
EXCLUDE.BACKUP "/.../Desktop DB"
EXCLUDE.ARCHIVE "/.../Desktop DF"
EXCLUDE.BACKUP "/.../Desktop DF"
EXCLUDE.ARCHIVE /.vol
EXCLUDE.BACKUP /.vol
EXCLUDE.ARCHIVE /automount
EXCLUDE.BACKUP /automount
EXCLUDE.ARCHIVE /Network
EXCLUDE.BACKUP /Network
EXCLUDE.ARCHIVE /dev
EXCLUDE.BACKUP /dev
EXCLUDE.BACKUP /.vol/.../*
EXCLUDE.ARCHIVE /.vol/.../*
EXCLUDE.BACKUP /automount/.../*
EXCLUDE.ARCHIVE /automount/.../*
EXCLUDE.BACKUP /Network/.../*
EXCLUDE.ARCHIVE /Network/.../*
EXCLUDE.BACKUP /dev/.../*
EXCLUDE.ARCHIVE /dev/.../*
EXCLUDE.DIR /.vol
EXCLUDE.DIR /automount
EXCLUDE.DIR /Network
EXCLUDE.DIR /dev
```

注:

1. 名前にピリオド (...) が含まれるボリュームを指定しないでください。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ピリオドのシーケンスを include-exclude 処理の一部として使用します。クライアントは、ボリュームの名前にピリオドのシーケンスが含まれている場合、無効な include-exclude ステートメントを報告します。そのようなボリュームの名前を変更する必要があります。
2. タイプ rhap および作成者 lcmt のオブジェクトは、処理から除外されます。通常は、これらは特殊ファイル・システム・オブジェクトであり、**mknod** コマンドでも作成できます。あるいは、これらは UNIX マウント・ポイントです。完全システム・リストアの一環として、オブジェクトまたはマウント・ポイントを手動で再作成する必要があります。

include-exclude オプション・ファイルに、以下の最小 include-exclude リストを指定してください。

```
EXCLUDE    /.../dmsched.log
EXCLUDE    /.../dsmprune.log
EXCLUDE    /.../dsmj.log
EXCLUDE    /.../dsmerror.log
EXCLUDE    /.../.hotfiles.bTree

EXCLUDE.DIR /private/tmp
EXCLUDE.DIR /private/var/vm
EXCLUDE.DIR /private/var/tmp
EXCLUDE.DIR /private/var/db/netinfo/local.nidb

EXCLUDE.DIR /.../.Trashes
EXCLUDE.DIR /.../.Spotlight-★
EXCLUDE.DIR /.../Library/Caches
EXCLUDE.DIR /.../.fsevents
```

ワイルドカード文字を含むファイルの包含および除外

ワイルドカード文字を含むファイルおよびディレクトリーを包含または除外する場合、特殊なエスケープ文字を使用する必要があります。

バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、プラットフォームごとにワイルドカード文字はそれぞれ異なる方法で扱われます。

ディレクトリーおよびファイルの名前には、さまざまなシンボルが含まれている可能性があります。使用できるシンボルのタイプは、オペレーティング・システムによって異なります。

例えば、AIX の場合、ディレクトリーまたはファイルの名前には以下を含めることができます。

```
* ? : [ ]
```

包含および除外ステートメントにファイルおよびディレクトリーを指定するには、エスケープ文字「¥」を使用してワイルドカードを指定する必要があります。ただし、エスケープ文字が使用できるのは、文字クラス「[]」の中でのみです。

以下の例は、ワイルドカード文字を含むファイルとディレクトリーを、include-exclude ステートメントにエスケープ文字と文字クラスを使用して指定する方法を示しています。

単一のディレクトリー /usr1/[dir2] をバックアップ処理から除外するには、dsm.sys ファイルまたは include-exclude ファイルに以下を入力します。

```
exclude.dir "/usr1/[¥[]dir2[¥]]"
```

単一のファイル /usr1/fi*le1 をバックアップ処理から除外するには、dsm.sys ファイルまたは include-exclude ファイルに次のステートメントを入力します。

```
exclude "/usr1/fi[¥*]le1"
```

ヒント：プリファレンス・エディターを使用して、ワイルドカード文字を含む単一のファイルまたはディレクトリーを包含または除外するには、包含または除外ステートメントを手動で編集して、ワイルドカード文字をエスケープする必要があります。プリファレンス・エディターは、ワイルドカード文字を自動的にエスケープしません。前の例に従って、dsm.sys ファイルまたは include-exclude ファイル内の包含または除外ステートメントを編集してください。

関連概念

[653 ページの『ワイルドカード文字』](#)

類似した名前を持つ複数のファイルを 1 つの コマンドで指定するためには、ワイルドカード文字を使用してください。ワイルドカード文字を使用しなければ、各ファイルごとにコマンドを繰り返す必要があります。

ワイルドカード文字を使用したファイル・グループの包含および除外

ワイルドカード文字を使用して、ファイルのグループを包含または除外できます。

包含または除外したいファイル・グループを指定するには、以下の表に示されているワイルドカード文字を使用します。この表は、include および exclude ステートメントにのみ使用できます。

大規模な include-exclude リストを処理すると、バックアップの効率が低下することがあります。このリストをできるだけ小さくするために、ワイルドカードを使用して、不要な include ステートメントを除去してください。

表 28. ワイルドカードとその他の特殊文字

文字	機能
?	この 1 文字一致のワイルドカード文字は、任意の 1 文字に一致します。ただし、ディレクトリー区切り文字は例外であり、ストリングの最後では一致しません。例えば次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">パターン ab? は、abc と一致するが、ab、abab、または abzzz とは一致しない。パターン ab?rs は、abrs と一致するが、abrs または abllrs とは一致しない。パターン ab?ef?rs は、abdefjrs と一致するが、abefrs、abdefrs、または abefjrs とは一致しない。パターン ab??rs は、abcdrs、abzzrs と一致するが、abrs、abjrs、または abkkkr とは一致しない。
*	全文字一致のワイルドカード文字。例えば次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">パターン ab* は、ab、abb、abxxx と一致するが、a、b、aa、bb とは一致しない。パターン ab*rs は、abrs、abtrs、abrsrs と一致するが、ars、aabrs、または abrss とは一致しない。パターン ab*ef*rs は、abefrs、abefghrs と一致するが、abefr、abers とは一致しない。パターン abcd.* は abcd.c、abcd.txt と一致するが、abcd、abcdc、または abcdtxt とは一致しない。
/...	n 文字一致文字は、ゼロ個以上のディレクトリーに一致します。
[左文字クラス文字は、文字クラスの列挙を開始します。例えば、次のようにします。 <div>xxx[abc] は xxxa、xxxb、または xxxc と一致する。</div>
-	文字クラス範囲は、指定された最初の文字から最後の文字までを含みます。例えば、次のようにします。 <div>xxx[a-z] は xxxa、xxxb、xxxc、... xxxz と一致する。</div>
\	リテラル・エスケープ文字。文字クラスの中で使用すると、その次の文字がリテラルとして扱われます。文字クラスの外側で使用すると、そのように扱われません。例えば、文字クラス内で ']' を使用したい場合は、[...¥]... と入力します。このエスケープ文字で、']' の右文字クラス文字としての通常の意味は除かれます。
]	右文字クラス文字は、文字クラスの列挙を終了します。

関連概念

[653 ページの『ワイルドカード文字』](#)

類似した名前を持つ複数のファイルを 1 つの コマンドで指定するためには、ワイルドカード文字を使用してください。ワイルドカード文字を使用しなければ、各ファイルごとにコマンドを繰り返す必要があります。

包含および除外パターンでのワイルドカード文字の使用例

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ディレクトリー項目を除外するために 使用できる `exclude.dir` オプションを受け入れます。ただし、`include` および `exclude.dir` オプションを一緒に 使用することはできません。

注: `dsm.sys` ファイルでは、`include` および `exclude` オプションは、ディレクトリーに対するシンボリック・リンクに使用できません。例えば、`/u` は `/home` ディレクトリー に対するシンボリック・リンクであるため、包含または除外ステートメントで `/u` を使用しないでください。代わりに、以下のように入力してください。

```
include /u/tmp/save.fil
```

以下のように入力してください。

```
include /home/tmp/save.fil
```

ただし、`exclude` オプションは シンボリック・リンクを含む絶対パスとともにバックアップ・コマンドを 入力する場合は、ディレクトリーに対するシンボリック・リンクに使用できます。

132 ページの表 29 では、ワイルドカード文字を使用してファイルを包含または除外する方法を示しています。

表 29. 包含および除外パターンでのワイルドカード文字の使用例

タスク	パターン
.doc で終わるファイルは、aleko のホーム・ディレクトリーである Documents ディレクトリーにあるファイルを除き、すべて除外します。	<pre>EXCLUDE /.../*.doc INCLUDE "/home/aleko/Documents/ *.doc"</pre>
バックアップの際、拡張子 bak を持つすべてのファイル (ただし、/usr ファイル・システムの dev ディレクトリーにあるファイル以外) を除外します。	<pre>exclude /.../*.bak include /usr/dev/*.bak</pre>
Documents ディレクトリーの下に存在する可能性があるすべてのファイルおよびディレクトリーを除外します。ただし、ユーザー aleko の Current ファイルは例外です。	<pre>EXCLUDE /.../Documents/.../* INCLUDE "/home/aleko/Documents/ Current"</pre>
「tmp」という名前のディレクトリーとそのサブディレクトリーにあるすべてのファイルを除外します。ただし、ファイル /home/tmp/save.fil は除きます。	<pre>exclude /.../tmp/.../* include /home/tmp/save.fil</pre>
Vol1、Vol2、Vol3、および Vol4 ボリューム上の任意のディレクトリーのすべての .cpp ファイルを除外します。	<pre>EXCLUDE /Volumes/Vol[1-4]/.../*.cpp</pre>
Vol1、Vol2、Vol3、および Vol4 ボリューム上の任意のディレクトリーのすべての .cpp ファイルを除外します。	<pre>EXCLUDE /Volumes/Vol[1-4]/.../*.cpp</pre>
/fs1、/fs2、/fs3、および /fs4 ファイル・システム上にあるすべてのディレクトリーの .cpp ファイルをすべて除外します。	<pre>EXCLUDE /fs[1-4]/.../*.cpp</pre>
/fs2/source ディレクトリーにある .cpp ファイルを除外します。	<pre>EXCLUDE /fs2/source/*.cpp</pre>

表 29. 包含および除外パターンでのワイルドカード文字の使用例 (続き)

タスク	パターン
/usr1、/usr2、および /usr3 ファイル・システムの 任意のディレクトリーの任意の .o ファイルを除外します。	<code>exclude /usr[1-3]/.../*.o</code>
usr2 ファイル・システムのルート・ディレクトリーにある .o ファイルのみを除外します。	<code>exclude /usr2/*.o</code>
すべてのファイル・システムで検出された tmp ディレクトリーの下にある ファイルをすべて除外します。	<code>exclude /.../tmp/.../*</code>
ディレクトリー構造 /var/spool 全体をすべての処理から除外します。	<code>exclude.dir /var/spool</code>
単一のファイル・システムをバックアップ処理から除外します。	<code>exclude.fs /fs1</code>
	<code>exclude.fs home:</code>
/test/myfs/fs01 および /test/myfs/fs02 ディレクトリー・ツリー内でマウントされているすべてのファイル・システムをバックアップ処理から除外します。	<code>exclude.fs /test/myfs/fs01/.../*</code> <code>exclude.fs /test/myfs/fs02/*</code>
/home/mydir/test1 ディレクトリーとその下にあるファイルおよびサブディレクトリーを除外します。	<code>exclude.dir /home/mydir/test1</code>
/home/mydir ディレクトリー 下にある、test で始まる名前を持つすべてのディレクトリーを除外します。	<code>exclude.dir /home/mydir/test*</code>
あらゆるファイル・システム上で直接 mydir ディレクトリー 下にある、test で始まる名前を持つすべてのディレクトリーを除外します。	<code>exclude.dir /.../mydir/test*</code>
ロー論理ボリュームをイメージ・バックアップから除外します。	<code>exclude.image /dev/hd0</code>
user1 の Docs ディレクトリーを除き、すべてのシンボリック・リンクまたは別名をバックアップ処理から除外します。	<code>EXCLUDE.ATTRIBUTE.SYMLINK /.../*</code> <code>INCLUDE.ATTRIBUTE.SYMLINK /Users/user1/Docs/*</code>

関連概念

132 ページの『包含および除外パターンでのワイルドカード文字の使用例』

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ディレクトリー項目を除外するために使用できる `exclude.dir` オプションを受け入れます。ただし、`include` および `exclude.dir` オプションを一緒に使用することはできません。

関連資料

416 ページの『Exclude オプション』

`exclude` オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

シンボリック・リンクおよび別名処理

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、すべての `exclude.fs` および `exclude.dir` ステートメントを評価し、除外されたファイル・スペースとディレクトリーを除去します。

この最初の評価の後、クライアントはシンボリック・リンクおよび別名の処理を制御する `include-exclude` ステートメント (`exclude.attribute.symlink` および `include.attribute.symlink`) を、処理に使用できる残りのオブジェクトのリストに照らして評価します。

別名処理は Mac OS X に適用されます。

134 ページの表 30 は、シンボリック・リンクおよび別名の処理を制御するためのオプションを定義します。

表 30. シンボリック・リンクおよび別名の処理を制御するためのオプション

オプション	説明	ページ
exclude.attribute.symlink	シンボリック・リンクまたは別名であるファイルまたはファイルのグループをバックアップ処理のみから除外します。	416 ページの『Exclude オプション』
include.attribute.symlink	バックアップ処理のみに対して除外されたファイルの幅広いグループ範囲内で、シンボリック・リンクまたは別名であるファイルまたはファイルのグループを包含させます。	447 ページの『include オプション』

圧縮処理および暗号化処理の決定

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、exclude.dir およびバックアップ処理とアーカイブ処理を制御するその他の include/exclude オプションを評価し、その後でどのファイルに圧縮処理と暗号化処理を行うかを決定します。

以下のオプションは、どのファイルに圧縮処理と暗号化処理を行うかを決定します。

表 31. 圧縮および暗号化を制御するためのオプション

オプション	説明	ページ
圧縮処理		
exclude.compression	compression=yes が指定されている場合、ファイルを圧縮処理の対象から除外します。このオプションは、バックアップおよびアーカイブに適用されます。	416 ページの『Exclude オプション』
include.compression	compression=yes が指定されている場合、ファイルを圧縮処理の対象に組み込みます。このオプションは、バックアップおよびアーカイブに適用されます。	447 ページの『include オプション』
暗号化処理		
exclude.encrypt	ファイルを暗号化処理から除外します。	416 ページの『Exclude オプション』

表 31. 圧縮および暗号化を制御するためのオプション (続き)

オプション	説明	ページ
include.encrypt	<p>ファイルを暗号化処理に含めます。</p> <p>含まれているデータは暗号化形式で保管されます。暗号化は送受信されるデータ量に影響を及ぼしません。</p> <p>重要: バックアップ/アーカイブ・クライアント上で暗号化を有効にする唯一の方法は、include.encrypt オプションを用いることです。include.encrypt ステートメントを使用しないと、暗号化は実行されません。</p> <p>制約事項: include.encrypt オプションを使用したクライアント暗号化は、IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.1 以降のレベルまたは V7.1.8 以降の V7 のレベルへの LAN フリーのバックアップとアーカイブの操作ではサポートされなくなりました。暗号化されたバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの LAN フリーのリストア操作およびリトリブ操作は引き続きサポートされます。データがサーバーへの送信前に暗号化される include.encrypt オプションを使用してデータを暗号化する必要がある場合は、LAN ベースのバックアップ操作またはアーカイブ操作を使用してください。</p>	447 ページの『include オプション』

include-exclude リスト・ファイルのプレビュー

サーバーにデータを送信する前に、include-exclude リストに従ってバックアップまたはアーカイブするオブジェクト・リストをプレビューすることができます。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI ディレクトリー・ツリーには、包含および除外オブジェクトの詳細情報が表示されます。バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI のディレクトリー・ツリー・ウィンドウを使用して、包含または除外するファイルおよびディレクトリーを選択することができます。正しいファイルが包含および除外されていることを確認するには、**preview** コマンドを使用する必要があります。以下に、include-exclude プレビュー機能を使用するシナリオ例を示します。

例えば、次のステップを実行して、/Users/home ファイル・スペース上のファイルをバックアップします。

1. バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を開始し、「バックアップ」ツリーを開きます。オプション・ファイルやその他のソースによって除外されたディレクトリーおよびファイルをすべて表示できます。
2. ツリーをスクロールダウンすると、/Volumes/home/mary/myobjdir 内の *.o ファイルがすべてバックアップ対象になっていることが分かります。
3. *.o ファイルをすべてバックアップする必要がないため、.o ファイルを右クリックして、ポップアップ・メニューから「**ファイル詳細の表示**」を選択します。
4. ダイアログにこれらのファイルが含まれていることが表示されるので、「**拡張**」ボタンをクリックして、DATA:¥home ファイル・スペースからすべての .o ファイルを除外するルールを作成します。
5. ルールはオプション・ファイルの一番下に作成されます。バックアップ・ツリーの現行ディレクトリーが更新されて、.o ファイルに、除外されたことを示す赤の「X」が付けられます。
6. その他のディレクトリーを参照すると、追加された新しい除外内容が表示されます。「バックアップ」をクリックして、/home ファイル・スペースのファイルをバックアップします。

関連資料

698 ページの『[Preview Archive](#)』

preview archive コマンドは、データをサーバーに送信せずに、アーカイブ・コマンドをシミュレートします。

699 ページの『[Preview Backup](#)』

preview backup コマンドは、データをサーバーに送信せずに、バックアップ・コマンドをシミュレートします。

include-exclude オプション処理

IBM Spectrum Protect サーバーは、クライアント・オプション・セットに **incl excl** パラメーターを使用して、include-exclude オプションを定義することができます。

サーバーで指定された include-exclude ステートメントは、クライアント・オプション・ファイル内のステートメントで評価されます。サーバーの包含/除外ステートメントは必ず実行され、include-exclude リストの下部に置かれて、クライアントの包含/除外ステートメントより前に評価されます。

dsm.sys ファイルの include-exclude リストに、include-exclude ファイルを指定する 1 つ以上の **incl excl** オプションが含まれていると、これらのファイルの include-exclude ステートメントは、**incl excl** オプションが占有するリスト位置に入れられ、適宜に処理されます。

大規模な include-exclude リストを処理すると、バックアップの効率が低下することがあります。このリストをできるだけ小さくするために、ワイルドカードを使用して、不要な include ステートメントを除去してください。

増分バックアップを行う際に、クライアントは、まず、すべての **exclude.fs** および **exclude.dir** ステートメントを評価してから、除外されるファイル・スペース、ディレクトリー、およびファイルを、処理に使用可能なオブジェクトのリストから除去します。

すべての **exclude.fs** および **exclude.dir** ステートメントを評価した後、クライアントは、シンボリック・リンクまたは別名処理を制御するための include-exclude ステートメント (**exclude.attribute.symlink** および **include.attribute.symlink**) をボトムアップ評価し、処理するファイルと一致する包含または除外ステートメントを見つけると停止します。シンボリック・リンクまたは別名処理を制御するための include-exclude ステートメントを処理した後、クライアントは、残りの include-exclude リストをボトムアップ評価し、処理するファイルと一致する包含または除外ステートメントを見つけると停止します。したがって、包含および除外オプションが入力される順序は、どのファイルを包含および除外するかに影響します。

クライアント・ワークステーションに、すべての include-exclude ステートメントのリストを、実際の処理順序で効果的に表示するには、**query incl excl** コマンドを使用します。

クライアント・プログラムは、以下の規則に従って包含/除外ステートメントのリストを処理します。

1. ファイルがチェックされます。(ディレクトリーは、**exclude.dir** オプションが指定されている場合にのみチェックされます。)
2. ファイル名が、include-exclude リストのパターンに突き合わせて下から順に比較されます。一致が見つかり、処理は停止し、オプションが **include** と **exclude** のどちらであるかが検査されます。このオプションが **include** の場合、このファイルはバックアップされます。オプションが **exclude** の場合、このファイルは、バックアップされません。

注: 一致が見つからない場合、リストされたファイルは暗黙的に包含され、バックアップされます。

3. ファイルがバックアップされる時、それが、デフォルトではない管理クラス名を指定した **include** ステートメントと一致しない場合は、デフォルトの管理クラスにバインドされます。一致している場合は、ファイルはその管理クラスにバインドされます。

以下の例は、ボトムアップ処理を示しています。

例 1

La Pomme が始動ディスクでないことを想定しています。

```
EXCLUDE /.../*.cpp
INCLUDE "/Volumes/La Pomme/Foo/.../*.cpp"
EXCLUDE "/Volumes/La Pomme/Foo/Junk/*.cpp"
```

処理されるファイルは、/Volumes/La Pomme/Foo/Dev/test.cpp です。処理は、以下のように行われます。

1. ボトムアップ処理により、最初に、規則 3 (最後に定義されている `include` か `exclude`) が検査されます。パターン `/Volumes/La Pomme/Foo/Junk/*.cpp` は、処理されるファイル名とは一致しません。
2. 処理は、規則 2 に移り、検査されます。今度は、パターン `/Volumes/La Pomme/Foo/.../*.cpp` は、処理されるファイル名と一致します。処理は停止し、オプションが検査されて包含されます。
3. ファイル `/Volumes/La Pomme/Foo/Dev/test.cpp` がバックアップされます。

例 2

La Pomme が始動ディスクでないことを想定しています。

```
EXCLUDE /.../*.cpp
INCLUDE "/Volumes/La Pomme/Foo/.../*.cpp"
EXCLUDE "/Volumes/La Pomme/Foo/Junk/*.cpp"
```

処理されるファイルは、`/Volumes/La Pomme/Widget/Sample File` です。処理は、以下のように行われます。

1. 規則 3 が検査され、一致が検出されません。
2. 規則 2 が検査され、一致が検出されません。
3. 規則 1 が検査され、一致が検出されません。
4. 一致が検出されないので、`Volumes/La Pomme/Widget/Sample File` は暗黙的に包含され、バックアップされます。

例 3

`include` および `exclude` オプション に以下のステートメントを定義したとします。

```
exclude *.o
include /home/foo/.../*.o
exclude /home/foo/junk/*.o
```

処理されるファイルは、`/home/foo/dev/test.o` です。処理は、以下のように行われます。

1. ボトムアップ処理により、規則 3 (最後に定義されているステートメント) が最初に検査されます。パターン `/home/foo/junk/*.o` は、処理されるファイル名とは一致しません。
2. 処理は、規則 2 に移り、検査されます。今度は、パターン `/home/foo/.../*.o` は、処理されるファイル名と一致します。処理は停止し、オプションが検査されて `include` であると判別されます。
3. ファイル `/home/foo/dev/test.o` がバックアップされます。

例 4

`include` および `exclude` オプション に以下のステートメントを定義したとします。

```
exclude *.obj
include /home/foo/.../*.o
exclude /home/foo/junk/*.o
```

処理されるファイルは、`/home/widg/copyit.txt` です。処理は、以下のように行われます。

1. 規則 3 が検査され、一致が検出されません。
2. 規則 2 が検査され、一致が検出されません。
3. 規則 1 が検査され、一致が検出されません。
4. 一致が検出されないため、ファイル `/home/widg/copyit.txt` は暗黙的に包含され、バックアップされます。

例 5

`include` および `exclude` オプション に以下のステートメントを定義したとします。

```
exclude /.../*.o
include /home/foo/.../*.o
exclude /home/foo/junk/*.o
```

処理されている現行ファイルは /home/lib/objs/printf.o です。処理は、以下のように行われます。

1. 規則 3 が検査され、一致が検出されません。
2. 規則 2 が検査され、一致が検出されません。
3. 規則 1 が検査され、一致が検出されました。
4. 処理は停止し、オプションが検査されて除外されます。
5. ファイル /home/lib/objs/printf.o はバックアップされません。

例 6

include および exclude オプション に以下のステートメントを定義したとします。

```
exclude.attribute.symlink /.../*
exclude /.../*.o
include /home/foo/.../*.o
exclude /home/foo/junk/*.o
```

処理される現行ファイルは、/home/lib/objs/printf.o です。処理は、以下のように行われます。

1. exclude.attribute.symlink ステートメントが最初に検査されます。printf.o ファイルがシンボリック・リンクである場合は、そのファイルを除外します。それ以外の場合は次のステップに進みます。exclude.attribute.symlink ステートメントは、include-exclude リストでの位置にかかわらず、必ず他の include-exclude ステートメントより前に処理されます。
2. 規則 3 が検査され、一致が検出されません。
3. 規則 2 が検査され、一致が検出されません。
4. 規則 1 が検査され、一致が検出されました。
5. 処理は停止し、オプションが検査されて除外されます。
6. ファイル /home/lib/objs/printf.o はバックアップされません。

関連概念

[126 ページの『ファイル・スペースおよびディレクトリーの除外』](#)

指定したディレクトリー内のすべてのファイルおよびサブディレクトリーを処理から除外するには、exclude.dir ステートメントを使用します。

[309 ページの『処理オプション』](#)

クライアントの処理オプションのデフォルトを使用することも、特定のニーズに合わせて処理オプションを調整することもできます。処理オプションの概要を読み、オプションの解説を参照して各オプションの詳細を確認してください。

関連資料

[416 ページの『Exclude オプション』](#)

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

[716 ページの『Query Inclexcl』](#)

query inclexcl コマンドは、include/exclude ステートメントのリストを、バックアップおよびアーカイブ操作中に処理される順序で表示します。このリストには、オプションのタイプ、オプションの有効範囲 (archive、ALL など)、およびソース・ファイルの名前が表示されます。

第3章 始めに

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用する前に、GUI またはコマンド・ライン・セッションを開始する方法、およびクライアント・スケジューラーを自動的に開始する方法について学習する必要があります。また、よく使用されるその他のタスクについても学習することができます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用する前に、以下のタスクを実行します。

- [147 ページの『Java GUI セッションの開始』](#)
- [148 ページの『コマンド・ライン・セッションの開始』](#)
- [151 ページの『Web クライアント・セッションの開始』](#)
- [156 ページの『クライアント・スケジューラーの自動開始』](#)
- [156 ページの『パスワードの変更』](#)

以下のタスクも実行できます。

- [158 ページの『バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用したファイル・リストのソート』](#)
- [159 ページの『オンライン・ヘルプの表示』](#)
- [159 ページの『セッションの終了』](#)

IBM Spectrum Protect サーバーのバージョン 8.1.2 以降に接続するためのクライアント・セキュリティ設定の構成

IBM Spectrum Protect サーバーのバージョン 8.1.2 以降に接続する際に適用される IBM Spectrum Protect クライアント・セキュリティ設定の構成オプションがいくつかあります。これらのオプションのデフォルト値を受け入れると、拡張セキュリティ用にクライアントを容易に構成できます。これは、ほとんどのユース・ケースで推奨されます。

デフォルト・セキュリティ設定 (ファスト・パス) を使用した構成

ファスト・パスは、デフォルト値が受け入れられた場合の、サーバーに対するクライアント接続のセキュリティに影響を与える構成オプション、および各種ユース・ケースの振る舞いを詳細に示します。ファスト・パス・シナリオでは、エンドポイントにおける構成プロセスの手順を最低限に抑えています。

このシナリオでは、クライアントが初めて接続するときにサーバーから自動的に証明書を入手します。これは、IBM Spectrum Protect サーバーの **SESSIONSECURITY** パラメーターが **TRANSITIONAL** (初回接続時のデフォルト値) に設定されていることを前提としています。このシナリオに従って、最初に IBM Spectrum Protect サーバーを V8.1.2 以降の V8 レベルにアップグレードした後、クライアントをこれらのレベルにアップグレードする (またはその逆) ことができます。

注: クライアントが V8.1.6 以降の V8 レベルを使用して IBM Spectrum Protect サーバーに接続し、通信に「共有メモリ」または「名前付きパイプ」のいずれかを使用している場合、このクライアントの **SESSIONSECURITY** パラメーター値は **STRICT** に遷移します。このときに、通信に「共有メモリ」または「名前付きパイプ」ではなく TCP/IP を使用することが必要で、クライアントにサーバーの証明書がまだない場合、まず **SESSIONSECURITY** パラメーターを **TRANSITIONAL** にリセットします。次に、サーバーに接続して証明書を自動的に取得する必要があります。



重要: IBM Spectrum Protect サーバーが LDAP 認証用に構成されている場合、このシナリオは使用できません。LDAP が使用されている場合、dsmcert ユーティリティを使用して必要な証明書を手動でインポートできます。詳しくは、[142 ページの『自動証明書配布を使用しない構成』](#)を参照してください。

セッション・セキュリティに影響するクライアント・オプション

以下のクライアント・オプションは、クライアントのセキュリティ設定を指定します。これらのオプションについて詳しくは、[341 ページの『クライアント・オプションの解説』](#)を参照してください。

- **SSLREQUIRED**。デフォルト値 **Default** を使用すると、V8.1.2 より前のバージョンのサーバーへの既存のセッション・セキュリティ接続が有効になり、認証に TLS を使用して V8.1.2 以降のサーバーに安全に接続するようにクライアントが自動的に構成されます。
- **SSLACCEPTCERTFROMSERV**。デフォルト値 **Yes** を使用すると、クライアントがサーバーからの自己署名パブリック証明書を自動的に受け入れ、V8.1.2 以降のサーバーにクライアントが接続する際に、その証明書を使用するように自動的に構成できます。
- **SSL**。デフォルト値 **No** を使用すると、クライアントと V8.1.2 より前のサーバー間でデータが転送される場合に、暗号化が使用されないことを指定します。クライアントが V8.1.2 以降のサーバーに接続する場合、デフォルト値 **No** を使用すると、オブジェクト・データが暗号化されないことを指定します。クライアントがサーバーと通信する際に、他のすべての情報は暗号化されます。値 **Yes** は、クライアントがサーバーと通信する際に、すべての情報 (オブジェクト・データを含む) の暗号化に SSL が使用されることを示します。
- **SSLFIPSMODE**。デフォルト値 **No** は、連邦情報処理標準 (FIPS) 認定 SSL ライブラリーが不要であることを示します。

また、以下のオプションはクライアントが V8.1.2 より前のサーバーに対して SSL 接続を使用する場合のみ適用されます。クライアントがそれらのバージョン以降のサーバーに接続する場合は、以下のオプションは無視されます。

- **SSLDISABLELEGACYTLS**。値 **No** は、クライアントが SSL セッションに TLS 1.2 を必要としないことを示します。TLS 1.1 以下の SSL プロトコルでの接続を許可します。クライアントが V8.1.1 以前の IBM Spectrum Protect サーバーと通信する場合は、**No** がデフォルトです。
- **LANFREESSL**。デフォルト値 **No** は、LAN フリー・データ転送が構成されている場合には、クライアントがストレージ・エージェントとの通信に SSL を使用しないことを示します。
- **REPLSSLPORT**。クライアントが複製ターゲット・サーバーと通信する場合、SSL に対応した TCP/IP ポート・アドレスを指定します。

デフォルト・セキュリティ設定のユース・ケース

- 最初に、サーバーが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、クライアントがアップグレードされます。既存のクライアントは、SSL 通信を使用していません。
 - クライアントのセキュリティ・オプションを変更する必要はありません。
 - クライアントがサーバーで認証されると、構成は TLS を使用するように自動的に更新されます。
- 最初に、サーバーが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、クライアントがアップグレードされます。既存のクライアントは、SSL 通信を使用しています。
 - クライアントのセキュリティ・オプションを変更する必要はありません。
 - 既存のサーバーのパブリック証明書との SSL 通信は引き続き使用されます。
 - SSL 通信は、サーバーで必要とされる TLS レベルを使用するように自動的に拡張されます。
- 最初に、クライアントが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、サーバーがアップグレードされます。既存のクライアントは、SSL 通信を使用していません。
 - クライアントのセキュリティ・オプションを変更する必要はありません。
 - V8.1.2 より前のレベルのサーバーに対して既存の認証プロトコルが引き続き使用されます。
 - サーバーが V8.1.2 以降に更新された後に、クライアントがサーバーで認証されると、構成は TLS を使用するように自動的に更新されます。
- 最初に、クライアントが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、サーバーがアップグレードされます。既存のクライアントは、SSL 通信を使用しています。
 - クライアントのセキュリティ・オプションを変更する必要はありません。
 - V8.1.2 より前のレベルのサーバーに対して、既存のサーバーのパブリック証明書との SSL 通信が引き続き使用されます。
 - サーバーが V8.1.2 以降に更新された後、SSL 通信は、サーバーで必要とされる TLS レベルを使用するように自動的に拡張されます。

- 最初に、クライアントが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、クライアントが複数のサーバーに接続されます。各サーバーは、異なるタイミングでアップグレードされます。
 - クライアントのセキュリティ・オプションを変更する必要はありません。
 - クライアントは、V8.1.2 より前のバージョンのサーバーに対して既存の認証とセッション・セキュリティのプロトコルを使用します。そして、最初に V8.1.2 以降のサーバーに接続したときに TLS 認証を使用するように自動的にアップグレードされます。セッション・セキュリティはサーバーごとに管理されます。
- 新規クライアント・インストール (サーバーが V8.1.2 以降の場合) :
 - 新規インストールに応じてクライアントを構成します。
 - セキュリティ・オプションのデフォルト値は、TLS 暗号化セッション認証用に、クライアントを自動的に構成します。
 - クライアントとサーバー間のすべてのデータ転送を暗号化する場合、SSL パラメーターを Yes 値に設定します。
- 新規クライアント・インストール (サーバーが V8.1.2 より前のバージョンの場合):
 - 新規クライアント・インストールに応じてクライアントを構成します。
 - すべてのデータ転送を SSL 暗号化する場合、クライアントのセッション・セキュリティ・パラメーターのデフォルト値を受け入れます。
 - サーバーが V8.1.2 以降にアップグレードされるまで 非 SSL 認証プロトコルが使用されます。
 - クライアントとサーバー間のすべてのデータ転送を暗号化する場合、SSL パラメーターを Yes 値に設定し、SSL 用に手動構成を続行します。
 - 構成の手順については、78 ページの『[Secure Sockets Layer \(SSL\) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成](#)』を参照してください。
 - サーバーが V8.1.2 以降に更新された後、SSL 通信は、サーバーで必要とされる TLS レベルを使用するように自動的に拡張されます。

関連資料

Sslrequired

sslrequired オプションは、クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーまたはストレージ・エージェントにログオンするときに、SSL が必要か、必要でないかの条件を指定します。クライアントからサーバーへ、およびクライアントからストレージ・エージェントへの通信がセキュアとなるように SSL を実際に設定するためには、クライアントの ssl オプションを yes に設定する必要があります。IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルと通信している場合、SSL が常に使用されるため、このオプションは適用されなくなります。

Sslacceptcertfromserv

sslacceptcertfromserv オプションを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは API アプリケーションが初回接続時に IBM Spectrum Protect サーバーの Secure Sockets Layer (SSL) パブリック証明書を受け入れ、信頼するかどうかを制御します。このオプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは API アプリケーションが初めて IBM Spectrum Protect サーバーに接続するときのみ適用されます。SSL パブリック証明書が受け入れられると、その証明書に対する以降の変更は自動的に受け入れられないため、手動でバックアップ/アーカイブ・クライアントにインポートする必要があります。このオプションを使用して、接続できるのは IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルのみです。

Ssl

ssl オプションを使用すると、セキュアなクライアント/サーバー間通信を行うための Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.1 以前の V8 レベル、および V7.1.7 以前のレベルと通信する場合、SSL を有効にするかどうかを決定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルと通信する場合、SSL は常に使用されるため、このオプションはオブジェクト・データが暗号化されるかどうかを制御します。パフォーマンス上の理由から、オブジェクト・データは暗号化しないことを推奨します。

Sslfipsmode

sslfipsmode オプションは、クライアントがサーバーとの Secure Sockets Layer (SSL) 通信に SSL 連邦情報処理標準 (FIPS) モードを使用するかどうかを指定します。デフォルトは no です。

Ssldisablelegacytls

ssldisablelegacytls オプションは、TLS 1.2 未満の SSL プロトコルの使用を禁止するために使用します。

Lanfreessl

lanfreessl オプションを使用すると、セキュアなクライアント/ストレージ・エージェント通信を可能にする Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと接続している場合、このオプションは非推奨です。

Replsslport

replsslport オプションは、SSL に対応した 2 次サーバー上の TCP/IP ポートを指定します。

replsslport オプションは、フェイルオーバー時にクライアントが 2 次サーバーに接続する際に使用されます。IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと接続している場合、このオプションは非推奨です。

自動証明書配布を使用しない構成

このシナリオでは、サーバーからの証明書の自動配布が受け入れられない場合に、クライアントのセキュリティに影響する構成オプションについて詳しく示します。例えば、サーバーが LDAP 認証を使用するように構成されている場合、または認証局 (CA) による署名が証明書に必要な場合には、サーバーからの証明書の自動配布が受け入れられません。

セッション・セキュリティに影響するオプション

セキュリティ設定のオプションは、クライアントが V8.1.2 以降のサーバーに初めて接続する際にサーバーから自己署名パブリック証明書を自動的に受け入れないようにするために、SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションを No に設定する必要があるという点を除き、[139 ページの『デフォルト・セキュリティ設定 \(ファスト・パス\) を使用した構成』](#)で説明されているものと同じです。

自動証明書配布を使用しないクライアントを構成するためのユース・ケース

自動証明書配布を行うことができない、あるいは必要ない場合は、dsmcert ユーティリティを使用して証明書をインポートします。IBM Spectrum Protect サーバーまたは CA から必要な証明書を入手します。CA には、VeriSign や Thawte などの企業、または社内で管理される内部の CA があります。

- 最初に、サーバーが V8.1.2 にアップグレードされます。次に、クライアントがアップグレードされます。既存のクライアントは、SSL 通信を使用していません。
 - SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションを値 No に設定します。
 - IBM Spectrum Protect サーバーまたは CA から必要な証明書を入手し、dsmcert ユーティリティを使用してその証明書をインポートします。構成の手順については、[78 ページの『Secure Sockets Layer \(SSL\) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成』](#)を参照してください。
- 最初に、サーバーが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、クライアントがアップグレードされます。既存のクライアントは、SSL 通信を使用しています。
 - クライアントのセキュリティ・オプションを変更する必要はありません。クライアントに SSL 通信のためのサーバー証明書が既にある場合、SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションは適用されません。
 - 既存のサーバーのパブリック証明書との SSL 通信は引き続き使用されます。
 - SSL 通信は、サーバーで必要とされる TLS レベルを使用するように自動的に拡張されます。
- 最初に、クライアントが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、サーバーがアップグレードされます。既存のクライアントは、SSL 通信を使用していません。
 - SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションを値 No に設定します。
 - V8.1.2 より前のレベルのサーバーに対して既存の認証プロトコルが引き続き使用されます。
 - クライアントが V8.1.2 以降のサーバーに接続する前に、以下を行います。

- IBM Spectrum Protect サーバーまたは CA から必要な証明書を入手し、dsmcert ユーティリティを使用してその証明書をインポートします。構成の手順については、78 ページの『[Secure Sockets Layer \(SSL\) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成](#)』を参照してください。
- 最初に、クライアントが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、サーバーがアップグレードされます。既存のクライアントは、SSL 通信を使用しています。
 - クライアントのセキュリティ・オプションを変更する必要はありません。クライアントに SSL 通信のためのサーバー証明書が既にある場合、SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションは適用されません。
 - V8.1.2 より前のレベルのサーバーに対して、既存のサーバーのパブリック証明書との SSL 通信が引き続き使用されます。
 - サーバーが V8.1.2 以降に更新された後、SSL 通信は、サーバーで必要とされる TLS レベルを使用するように自動的に拡張されます。
- 最初に、クライアントが V8.1.2 以降にアップグレードされます。次に、クライアントが複数のサーバーに接続されます。各サーバーは、異なるタイミングでアップグレードされます。
 - SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションを値 No に設定します。
 - V8.1.2 より前のレベルのサーバーに対して既存の認証プロトコルが引き続き使用されます。
 - クライアントが V8.1.2 以降のサーバーに接続する前に、あるいはサーバー・レベルに関係なく SSL 通信が必要な場合は、以下を行います。
 - IBM Spectrum Protect サーバーまたは CA から必要な証明書を入手し、dsmcert ユーティリティを使用してその証明書をインポートします。構成の手順については、78 ページの『[Secure Sockets Layer \(SSL\) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成](#)』を参照してください。
 - クライアントは、V8.1.2 より前のバージョンのサーバーに対して既存の認証とセッション・セキュリティのプロトコルを使用します。そして、最初に V8.1.2 以降のサーバーに接続したときに TLS 認証を使用するように自動的にアップグレードされます。セッション・セキュリティはサーバーごとに管理されます。
- 新規クライアント・インストール (サーバーが V8.1.2 以降の場合) :
 - 新規インストールに応じてクライアントを構成します。
 - SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションを値 No に設定します。
 - IBM Spectrum Protect サーバーまたは CA から必要な証明書を入手し、dsmcert ユーティリティを使用してその証明書をインポートします。構成の手順については、78 ページの『[Secure Sockets Layer \(SSL\) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成](#)』を参照してください。
 - クライアントとサーバー間のすべてのデータ転送を暗号化する場合がある場合、SSL パラメーターを Yes 値に設定します。
- 新規クライアント・インストール (サーバーが V8.1.2 より前のバージョンで、SSL 暗号化セッションが必要である 場合):
 - 新規インストールに応じてクライアントを構成します。
 - SSL パラメーターを Yes 値に設定します。
 - IBM Spectrum Protect サーバーまたは CA から必要な証明書を入手し、dsmcert ユーティリティを使用してその証明書をインポートします。構成の手順については、78 ページの『[Secure Sockets Layer \(SSL\) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成](#)』を参照してください。
- 新規クライアント・インストール (サーバーが V8.1.2 より前のバージョンで、SSL 暗号化セッションが必要でない 場合):
 - 新規インストールに応じてクライアントを構成します。
 - SSLACCEPTCERTFROMSERV オプションを値 No に設定します。
 - サーバーが V8.1.2 以降にアップグレードされるまで 非 SSL 認証プロトコルが使用されます。
 - クライアントが V8.1.2 以降のサーバーに接続する前に、以下を行います。

- IBM Spectrum Protect サーバーまたは CA から必要な証明書を手入れし、dsmcert ユーティリティを使用してその証明書をインポートします。構成の手順については、78 ページの『Secure Sockets Layer (SSL) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成』を参照してください。

関連資料

Sslrequired

sslrequired オプションは、クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーまたはストレージ・エージェントにログオンするときに、SSL が必要か、必要でないかの条件を指定します。クライアントからサーバーへ、およびクライアントからストレージ・エージェントへの通信がセキュアとなるように SSL を実際に設定するためには、クライアントの ssl オプションを yes に設定する必要があります。IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルと通信している場合、SSL が常使用されるため、このオプションは適用されなくなります。

Sslacceptcertfromserv

sslacceptcertfromserv オプションを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは API アプリケーションが初回接続時に IBM Spectrum Protect サーバーの Secure Sockets Layer (SSL) パブリック証明書を受け入れ、信頼するかどうかを制御します。このオプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは API アプリケーションが初めて IBM Spectrum Protect サーバーに接続するときのみ適用されます。SSL パブリック証明書が受け入れられると、その証明書に対する以降の変更は自動的に受け入れられないため、手動でバックアップ/アーカイブ・クライアントにインポートする必要があります。このオプションを使用して、接続できるのは IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルのみです。

Ssl

ssl オプションを使用すると、セキュアなクライアント/サーバー間通信を行うための Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.1 以前の V8 レベル、および V7.1.7 以前のレベルと通信する場合、SSL を有効にするかどうかを決定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルと通信する場合、SSL は常に使用されるため、このオプションはオブジェクト・データが暗号化されるかどうかを制御します。パフォーマンス上の理由から、オブジェクト・データは暗号化しないことを推奨します。

Sslfipsmode

sslfipsmode オプションは、クライアントがサーバーとの Secure Sockets Layer (SSL) 通信に SSL 連邦情報処理標準 (FIPS) モードを使用するかどうかを指定します。デフォルトは no です。

Ssldisablelegacytls

ssldisablelegacytls オプションは、TLS 1.2 未満の SSL プロトコルの使用を禁止するために使用します。

Lanfreessl

lanfreessl オプションを使用すると、セキュアなクライアント/ストレージ・エージェント通信を可能にする Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと接続している場合、このオプションは非推奨です。

Replsslport

replsslport オプションは、SSL に対応した 2 次サーバー上の TCP/IP ポートを指定します。replsslport オプションは、フェイルオーバー時にクライアントが 2 次サーバーに接続する際に使用されます。IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと接続している場合、このオプションは非推奨です。

セキュア・パスワード・ストレージ

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.2 および V7.1.8 では、IBM Spectrum Protect パスワードのロケーションが変更されました。

V8.1.0 および V7.1.6 以前のクライアントでは、IBM Spectrum Protect パスワードは Windows レジストリー (Windows クライアントの場合)、および TSM.PWD ファイル (UNIX クライアントおよび Linux クライアントの場合) に保管されていました。

V8.1.2 および V7.1.8 以降では、IBM Global Security Kit (GSKit) 鍵ストアを使用して、すべての IBM Spectrum Protect パスワードが保管されます。サーバー証明書のインポート・プロセスは簡素化されます。サーバー証明書のインポートについては、78 ページの『[Secure Sockets Layer \(SSL\) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成](#)』を参照してください。

古いパスワード・ロケーションを使用する以前のクライアントから IBM Spectrum Protect V8.1.2 以降のクライアントにアップグレードすると、既存のパスワードは新規パスワード・ストア内の以下のファイルにマイグレーションされます。

TSM.KDB

暗号化されたパスワードを保管するファイル。

TSM.sth

TSM.KDB ファイル内のパスワードを暗号化するために使用されるランダム暗号鍵を保管するファイル。このファイルはファイル・システムによって保護されています。このファイルは、自動操作に必要です。

TSM.IDX

TSM.KDB ファイル内のパスワードを追跡するために使用される索引ファイル。

Data Protection for VMware クライアントの場合、Data Protection for VMware GUI サーバー管理パスワードは、鍵ストアにマイグレーションされます。

UNIX および Linux クライアントのパスワード・ロケーション

UNIX および Linux クライアントでは、TSM.PWD ファイル内の既存のパスワードは、同じロケーションの新規のパスワード・ストアにマイグレーションされます。root ユーザーの場合、パスワード・ストアのデフォルト・ロケーションは /etc/adsm です。非 root ユーザーの場合、パスワード・ストアのロケーションは、passworddir オプションで指定されます。

TSM.PWD ファイルは、マイグレーション後に削除されます。

注：以下の状況の場合、新規パスワードはデフォルト・ロケーション (/etc/adsm) にありません。

- TSM.PWD ファイルが /etc/adsm ディレクトリー内でない場合。
- オプション・ファイルで指定する passworddir オプションが、異なるロケーションをポイントしている場合。

承認コミュニケーション・エージェントは使用不能

V8.1.0 および V7.1.6 以前のクライアントの非 root ユーザーに以前に使用されていた承認コミュニケーション・エージェント (TCA) は使用不可になりました。root ユーザーは、以下の方法を使用して、非 root ユーザーが自身のファイルを管理できるようにすることができます。

ヘルプ・デスク方式

ヘルプ・デスク方式では、root ユーザーはすべてのバックアップ操作およびリストア操作を実行することができます。非 root ユーザーは、root ユーザーに連絡して、特定のファイルをバックアップまたはリストアするように要求する必要があります。

許可ユーザー方式

許可ユーザー方式では、passworddir オプションを使用して、非 root ユーザーが読み取りおよび書き込み可能なパスワード・ロケーションを指定することで、非 root ユーザーにパスワード・ストアへの読み取り/書き込みアクセス権が付与されます。この方式を使用すると、非 root ユーザーは、自分が所有するファイルのバックアップおよびリストア、暗号化の使用、および passwordaccess generate オプションによる自身のパスワードの管理を行うことができます。

詳しくは、57 ページの『[非 root ユーザーによる自分のデータの管理の有効化](#)』を参照してください。

これらのいずれの方法でも不十分な場合は、TCA が含まれている以前のクライアントを使用する必要があります。

IBM Spectrum Protect クライアント認証

IBM Spectrum Protect クライアントのグラフィカル・ユーザー・インターフェースまたはコマンド・ライン・インターフェースを使用するときは、ノード名とパスワードまたは管理ユーザー ID とパスワードを使用してログオンすることができます。

クライアントはユーザー ID を要求し、そのユーザー ID を構成済みのノード名と比較する。一致した場合は、クライアントはユーザー ID をノード名として認証しようとする。認証に失敗した場合、またはユーザー ID が構成済みのノード名と一致しない場合は、クライアントは、ユーザー ID を管理ユーザー ID として認証しようとする。

バックアップ/アーカイブ・クライアントのいずれかで管理ユーザー ID を使用する場合は、ユーザー ID には次の権限のいずれか 1 つが必要です。

システム特権

システム全体に対する権限。システム特権を持つ管理者は任意の管理用タスクを実行できます。

ポリシー特権

ノード・ポリシー・ドメインに対する権限。この権限によって、管理者は、ポリシー・オブジェクトの管理、クライアント・ノードの登録、クライアント・ノードに対するクライアント操作のスケジュールを行えます。

クライアント所有者

登録済み IBM Spectrum Protect クライアント・ノードに対する権限。Web クライアントまたはバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してクライアントにアクセスできます。このクライアント所有者は、データを所有し、リモートからデータに物理的にアクセスする権限を持ちます。同じシステムまたは異なるマシンでのファイルのバックアップおよびリストア、ファイル・スペースの削除やデータのアーカイブを行うことができます。

クライアント・アクセス

Web クライアントを使用して、リモート・クライアント・システム上のファイルをバックアップおよびリストアするためには、リモート・クライアント・システム用のノード名に対するクライアント・アクセス権限付きの管理ユーザー ID を持っている必要があります。IBM Spectrum Protect 管理者があるノード名にわたるクライアント・アクセス権限を持っていたとしてもそのシステムにあるファイルのバックアップおよびリストアを行えないようにする場合は、クライアント・オプション・ファイルで `revokeremoteaccess` オプションを指定します。

IBM Spectrum Protect 管理者のクライアント・アクセス権限は、リモート・システム上のファイルのバックアップとリストアを許可するだけです。管理者はデータに対する物理アクセスは行えません。つまり、自分のシステムにリモート・システムに属するデータをリストアできません。自分のシステムにリモート・システムに属するデータをリストアするためには、少なくともクライアント所有者権限を所有している必要があります。

所有している権限を判別するには、以下のいずれかの方法を実施します。

- メイン IBM Spectrum Protect GUI ウィンドウから「ファイル」→「接続情報」を選択します。
- 管理コマンド・ライン・クライアントから IBM Spectrum Protect サーバーの QUERY ADMIN コマンドを使用します。

関連資料

Revokeremoteaccess

`revokeremoteaccess` オプションは、クライアント・アクセス特権を持った管理者が、Web クライアントを実行しているクライアント・ワークステーションにアクセスすることを制限します。

QUERY ADMIN コマンド

Java GUI セッションの開始

バックアップ/アーカイブ・クライアントのグラフィカル・インターフェース (GUI) プログラムを開始するために使用する手順は、オペレーティング・システムによって異なります。

手順

Java GUI を開始するには、ご使用のオペレーティング・システムに該当する手順を実行してください。

オペレーティング・システム	手順
Mac OS X	<ul style="list-style-type: none">IBM Spectrum Protect アプリケーションをダブルクリックし、システム 管理者特権を使用せずにバックアップ/アーカイブ・クライアントを始動する。システム 管理者特権を使用せずにクライアントを実行すると、現行ユーザーが所有するファイルを管理できます。「IBM Spectrum Protect for Administrators」をダブルクリックして、「IBM Spectrum Protect」を選択する。システム 管理者のユーザー名とパスワードを入力すると、クライアントはシステム 管理者特権を使用して始動します。システム 管理者特権を使用してクライアントを実行すると、システム上のすべてのユーザーが所有するファイルを管理できます。dsmj コマンドを使用してバックアップ/アーカイブ・クライアントを開始することもできます。このクライアントは、フォアグラウンド・プロセスとしてもバックグラウンド・プロセスとしても実行できます。dsmj スクリプトは /Library/Application Support/tivoli/tsm/client/ba/bin にインストールされています。
AIX, Linux, Solaris	Mac OS X 以外の UNIX システムの場合、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI は X Window System で稼働しなければなりません。デスクトップに IBM Spectrum Protect アイコンがある場合は、クライアントは既に実行中です。このアイコンをダブルクリックして IBM Spectrum Protect ウィンドウをオープンします。デスクトップに IBM Spectrum Protect アイコンが表示されない場合は、 dsmj コマンドを使用してバックアップ/アーカイブ・クライアントのグラフィカル・インターフェースを開始します。このクライアントは、フォアグラウンド・プロセスとしてもバックグラウンド・プロセスとしても実行できます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) およびクライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) に指定されているオプションを見つけ、それらのオプションを使用します。

関連概念

55 ページの『[IBM Spectrum Protect クライアントの構成](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールした後、操作を実行する前に構成する必要があります。

IBM Spectrum Protect password

IBM Spectrum Protect 管理者は、ユーザーに対して、パスワードを使用してサーバーに接続するように要求できます。

パスワードが必要な場合、IBM Spectrum Protect クライアントはパスワードを要求するプロンプトを表示します。パスワードがわからないときは、IBM Spectrum Protect 管理者に問い合わせてください。

関連タスク

156 ページの『[パスワードの変更](#)』

IBM Spectrum Protect 管理者は、ユーザーに対して、パスワードを使用してサーバーに接続するように要求できます。

セットアップ・ウィザード

クライアント GUI が開始するときに、クライアント・オプション・ファイルがあるかどうかの検査が行われます。

クライアント・オプション・ファイルがない場合 (一般に、この状況が発生するのはシステムに最初にクライアントをインストールしたとき) は、セットアップ・ウィザードが自動的に開始され、一連の構成プロセスを行うことになります。

クライアント・オプション・ファイルは `dsm.sys` です。

コマンド・ライン・セッションの開始

dsmc コマンドを実行してコマンド・ライン・セッションを開始できます。

注: `/usr/bin` ディレクトリーに IBM Spectrum Protect 実行可能ファイルへのシンボリック・リンクがあり、すべての DSM 環境変数が設定されている場合は、任意のディレクトリーから **dsmc** コマンドを入力できます。そうでない場合は、コマンドの完全修飾パスを入力します。

注: Mac OS X の場合、システム管理者は、**sudo** コマンドを使用してバックアップ/アーカイブ・クライアントがシステムのすべてのユーザーのファイルにアクセスできる追加の権限を得ることができます。

コマンド・ラインで、**dsmc** の後にコマンド (バッチ・モード) を続けて入力する。 `/usr/bin` または `opt/bin` ディレクトリーに IBM Spectrum Protect インストール・ディレクトリーへのシンボリック・リンクがある場合は、任意のディレクトリーから **dsmc** コマンドを入力できます。それ以外の場合は、完全修飾名を入力できます。

クライアント・ロケーションへのパスで `PATH` 環境変数を更新した場合にのみ、`"dsmc"` コマンドを使用してクライアントを開始することができます。

IBM Spectrum Protect 管理者は、ユーザーに対して、パスワードを使用してサーバーに接続するように要求できます。パスワードが必要な場合、クライアントはパスワードを要求するプロンプトを表示します。パスワードがわからないときは、管理者に問い合わせてください。

関連概念

650 ページの『対話モードでのオプション』

対話モードでは、初期コマンド・ラインに入力したオプションは、オプション・ファイルで指定した値を指定変更します。

55 ページの『UNIX および Linux クライアントの root ユーザーおよび許可ユーザーのタスク』

許可ユーザーとは、保管されているパスワード (`TSM.sth` ファイル) に対する読み取り権限および書き込み権限を持つ root 以外のユーザー、またはパスワードを知っていて、そのパスワードを対話式に入力する root 以外のユーザーです。許可ユーザーは、`passworddir` オプションを使用して、パスワード・ファイルのコピーを保存するディレクトリーを定義します。

645 ページの『コマンドの使用』

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) の代わりに使用できるコマンド・ライン・インターフェース (CLI) を提供します。ここでは、クライアント・コマンド・セッションの開始方法または終了方法、およびコマンドの入力方法について説明します。

バッチ・モードの使用

バッチ・モードは、単一のクライアント・コマンドを入力するときに使用します。バッチ・モードを使用するときは、コマンドの前に **dsmc** を付ける必要があります。

このタスクについて

例えば、**incremental** コマンドを出すためには、コマンド・プロンプトで以下を入力します。

```
dsmc incremental
```

一部のコマンドには引数が 1 つ以上必要です。例えば、ファイルをアーカイブするには以下のようにします。

```
dsmc archive /home/proj1/file1.txt
```

passwordaccess オプションの現行設定によっては、バッチ・モード・セッションでコマンドを処理する前に、クライアントからパスワードの入力を指示するプロンプトが出される場合があります。

パスワードを入力したとき、そのパスワードは画面に表示されません。

関連資料

497 ページの『[Passwordaccess](#)』

passwordaccess オプションは、パスワードを自動的に生成したいか、あるいはユーザー・プロンプトに応じて設定したいかを指定します。

対話モードを使用した一連のコマンドの発行

対話 モードは、一連のコマンドを入力したいときに使用します。

このタスクについて

対話式モードの場合、サーバーへの接続を確立するのは 1 回だけであるため、対話式モードでは、バッチ・モードより迅速に一連のコマンドを処理することができます。

対話モードでクライアント・コマンド・セッションを開始するには、以下のいずれかのコマンドを入力します。

- **dsmc**
- **dsmc loop**

次のプロンプトが画面に表示されます。

```
Protect>
```

対話モードのときは、コマンドの前に **dsmc** を付けません。例えば、ファイルをアーカイブする場合は、**dsmc archive** と入力するのではなく、**archive** と入力するだけです。

例えば、ファイルをアーカイブするには、以下のコマンドをファイルを指定して入力します。

```
archive /home/proj1/file1.txt
```

passwordaccess オプションの現行設定によっては、対話式セッションでコマンドを入力する前に、クライアントからパスワードの入力を指示するプロンプトが出される場合があります。

パスワードを入力したとき、そのパスワードは画面に表示されません。

ブランク・スペースまたは引用符を含む入力ストリングの指定

ブランクまたは引用符を含む入力ストリングを指定する場合は、特定のルールに従う必要があります。

ブランク・スペースまたは引用符を含む入力ストリングを指定する場合は、以下のルールに従ってください。

- 入力ストリングに 1 つ以上のスペースがある場合は、そのストリングを一重引用符または二重引用符で囲んでください。一重引用符または二重引用符は、両方の引用符が一致すればいずれも使用することができます。
- 入力ストリングに一重引用符がある場合は、そのストリングを次の例のように二重引用符で囲んでください。

```
-description="Annual backup of the accounting department's monthly reports"
```

- 入力ストリングに二重引用符がある場合は、そのストリングを次の例のように一重引用符で囲んでください。

```
-description='New translations of "The Odyssey" and "The Iliad"'
```

- 入力ストリングにスペースと引用符がある場合は、そのストリングを引用符で囲んでください。外側の引用符は、ストリング内の引用符と同じであってはなりません。

制約事項: 一重引用符と二重引用符を含む入力ストリングは、有効な入力ストリングではありません。

次のタイプのデータには、以下のルールが適用されます。

- 完全修飾名
- **archive** コマンドで指定する **description**
- 文字ストリングにスペースまたは引用符を含められるオプション値の任意の値

重要: 入力ストリングでエスケープ文字を使用することはできません。エスケープ文字は、他の文字と同様に処理されます。エスケープ文字が認識されない例をいくつか示します。

- 文字ストリングがオプション・ファイル内にある
- 文字ストリングがリスト・ファイル内にある
- 文字ストリングが対話式モードで入力された

開始: その他の考慮事項

dsmj および **dsmc** コマンドの引数としてオプションを組み込むことができます。例えば、オプションを使用して、日付、時刻、および番号を表示する形式を変更したり、パスワードを組み込んでバックアップ/アーカイブ・クライアントがパスワードのプロンプトを表示しなくてもよいようにすることができます。

このタスクについて

さらに、複数のサーバーが **dsm.sys** に定義されており、バックアップ/アーカイブ・サービスを使用するために (クライアント・ユーザー・オプション・ファイル **dsm.opt** で指定したものとは) 異なるサーバーに接続したい場合は、**servername** オプションでサーバーを指定します。

例えば次のとおりです。

```
dsmj -servername=server_b
```

Java GUI (**dsmj**) は、Java **-X** オプションなどのコマンド行パラメーターを受け入れるようになりました。これにより、Java のヒープ・サイズも変更できるようになりました。例えば、次のようにします。

```
dsmj -Xmx512M
```

新しいセキュリティ環境における Web クライアントの使用

IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.2 以降、IBM Spectrum Protect V8.1.2 以降の V8 サーバー、または V7.1.8 以降の V7 サーバーとの接続に Web クライアント GUI を使用できなくなりました。

IBM Spectrum Protect V8.1.2 以降の V8 サーバー、または V7.1.8 以降の V7 サーバーに接続する場合、Web クライアント GUI に代わる以下の方法を使用してください。

- データをバックアップおよびリストアするには、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI または コマンド・ライン・インターフェースを使用します。コマンド・ライン・インターフェースを開始するには、コマンド・ラインに **dsmc** と入力します。バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を開始するには、**dsmj** (UNIX および Linux クライアントの場合) または **dsm** (Windows クライアントの場合) と入力します。

詳しくは、以下を参照してください。

– [161 ページの『第 4 章 データのバックアップ』](#)

– [237 ページの『第 5 章 データのリストア』](#)

- データをリストアする場合、Web ユーザー・インターフェースを使用します。Web ユーザー・インターフェースを開始するには、以下を参照してください。

– [153 ページの『ファイル・リストア操作のための Web ユーザー・インターフェース・セッションの開始』](#)

- ネットワーク・データ管理プロトコル (NDMP) を使用して NAS ファイル・サーバーをバックアップおよびリストアするには、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用します。

詳しくは、以下を参照してください。

– [210 ページの『Network Data Management Protocol を使用した NAS ファイル・システムのバックアップ』](#)

– [254 ページの『NAS ファイル・システムのリストア』](#)

ヒント: 既にバックアップ/アーカイブ・クライアントを V8.1.2 以降にアップグレードしている場合は、それをアンインストールしてから V8.1.0 クライアントを再インストールすることで、引き続き Web クライアントを使用することができます。IBM Spectrum Protect サーバー管理者は、ノード上の SESSIONSECURITY パラメーターの設定を TRANSITIONAL に戻す必要があります。詳しくは、[UPDATE NODE](#) (ノード属性の更新) を参照してください。

Web クライアント・セッションの開始

Web クライアントは、Web ブラウザー・ソフトウェアとは別に開始および管理することができる Java Web Start アプリケーションです。ワークステーション上で Web クライアントをインストールおよび構成した後、Web クライアントを使用してリモート・アクセスし、クライアント・ノード上のデータをリモートからバックアップ、リストア、アーカイブ、あるいはリトリブすることができます。Web クライアントは、身体障害のあるユーザーを支援する装置を使用する機能を備え、キーボード・ナビゲーションが改善されています。

始める前に

Web クライアントは、使用する前に構成する必要があります。クライアント構成ウィザードを使用して、Web クライアントを構成することができます。

このソフトウェアによってサポートされているブラウザを確認するには、ご使用のオペレーティング・システムのソフトウェア要件のトピックを参照してください。

Firefox ブラウザーから Web クライアントを実行するには、「**JavaScript を有効にする**」のオプションが有効になっている必要があります。Firefox では、このオプションがデフォルトで有効になっています。

手順

1. Web ブラウザーに、Web クライアントをインストールしたクライアント・ワークステーションの URL を指定します。また、Web クライアントのクライアント・ワークステーションで定義されている HTTP ポート番号も指定します。

デフォルトのポート番号は 1581 です。

次の例は Web クライアント URL の構文を示しています。

```
http://myhost.mycompany.com:1581
```

別の URL を入力したり、操作中に「戻る」をクリックしたりすると、Web クライアントが切断され、現行の操作は終了します。

2. IBM Spectrum Protect Web クライアント 起動ページの指示に従って、Web クライアントを開始します。

Web クライアントを開始するたびに、Java Web Start アプリケーション (.jnlp ファイル) がブラウザーにダウンロードされます。dsm.jnlp ファイルを開き、Web クライアントを開始します。

Web クライアントを開始した後に、Web ブラウザーを閉じることができます。

ヒント: Web クライアントは、ワークステーションにローカルにインストールされている JRE を使用するため、Web ブラウザーのワークステーションの言語で実行されます。例えば、Web ブラウザーのワークステーションが英語ロケールで稼働しており、リモート・クライアント・ノードが日本語である場合、Web クライアントの起動ページは日本語で表示され、Web クライアントは英語で表示されます。

関連概念

[69 ページの『Web クライアントの構成の概要』](#)

IBM Spectrum Protect Web クライアントは、Web ブラウザーからのクライアント・ノードのリモート管理機能を提供します。Web クライアントの構成手順は、クライアント・ノードのオペレーティング・システムによって異なります。

ユーザー特権

Web クライアントの使用を計画している場合は、システム特権、ポリシー特権、クライアント・アクセス権限、またはクライアント所有者権限を備えた管理ユーザー ID が割り当てられているか、確認してください。

サーバーに新規ノードを登録すると、そのノードには、クライアント所有者権限を持つ、ノード名と同じ管理ユーザー ID が付与されます。

IBM Spectrum Protect サーバー管理者は、**REGISTER NODE** サーバー・コマンドで **userid** パラメーターを指定する必要があります。

```
REGISTER NODE node_name password userid=user_id
```

ここで、ノード名と管理ユーザー ID は同じでなければなりません。例えば、次のようにします。

```
REGISTER NODE node_a mypassw0rd userid=node_a
```

ヒント: クライアント・アクセス権限を持つ IBM Spectrum Protect 管理者が Web クライアントを通してユーザーのワークステーションでクライアント操作を行うことができないようにする場合は、**revokeremoteaccess** オプションを使用できます。クライアント所有者特権、システム特権、またはポリシー特権を持つ IBM Spectrum Protect 管理者に関しては、引き続き、Web クライアントを通じてユーザー・ワークステーションでクライアント操作を行うことができます。

関連概念

[146 ページの『IBM Spectrum Protect クライアント 認証』](#)

IBM Spectrum Protect クライアントのグラフィカル・ユーザー・インターフェースまたはコマンド・ライン・インターフェースを使用するときは、ノード名とパスワードまたは管理ユーザー ID とパスワードを使用してログオンすることができます。

関連資料

[528 ページの『Revokeremoteaccess』](#)

revokeremoteaccess オプションは、クライアント・アクセス特権を持った管理者が、Web クライアントを実行しているクライアント・ワークステーションにアクセスすることを制限します。

ファイル・リストア操作のための Web ユーザー・インターフェース・セッションの開始

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントには Web ユーザー・インターフェース・コンポーネントが用意されています。これは、Web ブラウザー・ソフトウェアとは別に開始および管理できます。ワークステーション上で Web ユーザー・インターフェースをインストールして構成した後、Web ユーザー・インターフェースを使用してファイル・リストア操作を実行できます。Web ユーザー・インターフェースの仮想マシンにアクセスしなくても、ユーザーに代わってファイルをリストアできます。Web ユーザー・インターフェースでは、Transport Layer Security (TLS) プロトコルまたは Secure Sockets Layers (SSL) プロトコルを使用するクライアントからサーバーへの通信のみがサポートされます。

始める前に

サポートされている Web ブラウザーを確認するには、ご使用のオペレーティング・システムのソフトウェア要件のトピックを参照してください。

Mozilla Firefox ブラウザーから Web ユーザー・インターフェースを実行するには、「**JavaScript を有効にする**」のオプションが有効になっている必要があります。このオプションはデフォルトで有効になっています。

手順

1. `dsmc query session` コマンドを実行して TLS または SSL プロトコルが使用されていることを確認します。出力を調べてセキュリティ情報を見つけます。この情報は次の例のようなものです。

```
SSL Information.....: TLSv1.2 TLS_RSA_WITH_AES_128_CBC_SHA
```

重要: セキュリティ情報が見つからない場合、セキュリティになっていないサーバーに接続しています。ファイル・リストア操作の Web ユーザー・インターフェース・セッションは、セキュリティになっていないサーバーでは使用できません。

2. ご使用のオペレーティング・システムで適切なアクションを実行して、クライアント・アクセプターを開始します。
 - コマンド・ラインから `dsmcad` コマンドを実行します。
 - `init.d` ベースの Linux ディストリビューションを使用している場合は、コマンド・ラインからコマンド `/etc/init.d/dsmcad start;` を入力します。

Linux ディストリビューションで `systemd` を使用してサービスを管理する場合は、コマンド・ラインから `systemctl start dsmcad` コマンドを使用してサービスを開始します。詳しくは、[クライアント・スケジューラー・プロセスをバックグラウンド・タスクとして実行し始動時に自動的に開始するための設定](#)を参照してください。

3. `dsmadm` を使用して以下の IBM Spectrum Protect サーバー・コマンドを入力して、クライアント・データにアクセスするために管理者を登録し、ノードに代わってファイル・リストア操作を実行します。

```
reg admin admin ID password
```

```
grant auth admin ID cl=node auth=access node=your node
```

ここで、*admin ID* は管理者の ID、*password* は管理者のパスワード、および *node* はファイル・リストア操作が実行されるノードです。

4. 新規ノードが登録済みで、そのノードに関するバックアップ・データが IBM Spectrum Protect サーバーに保管されていない場合は、バックアップを実行してください。このバックアップは、Web ユーザー・インターフェースでファイル・リストア操作に使用できるテスト・データを提供します。データをバックアップするには、以下のいずれかのアクションを実行します。

- コマンド・ラインから、**dsmc incremental** コマンドまたは **dsmc selective** コマンドを実行します。詳しくは、以下を参照してください。
 - [689 ページの『Incremental』](#)
 - [764 ページの『Selective』](#)
 - IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI で、「バックアップ」を選択します。
5. ファイル・リストア・ユーザー・インターフェースを開始するには、サポートされている Web ブラウザーに次の URL を入力します。

```
https://hostname:9081/bagui/
```

ここで、*hostname* は、ファイル・リストア・ユーザー・インターフェースをホストする 仮想マシンのアドレスです。

6. ログイン・ウィンドウで、(ステップ 3 で指定した) 管理者 ID およびパスワードを入力して、「サインイン」をクリックします。

システム・ログのダウンロード

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントと Web ユーザー・インターフェースの操作に関する問題判別情報 (システム・ログやトレース・ファイルなど) をダウンロードできます。デフォルトではこの機能は無効になっていますが、システム管理者が有効にすることができます。

手順

Web ユーザー・インターフェースから、「システム・ログのダウンロード (Download System Logs)」を選択します。

- 問題判別情報をダウンロードする権限がある場合、メッセージにより、ダウンロードが開始され、ログがバックグラウンドでダウンロードされることが通知されます。
- 問題判別情報をダウンロードする権限がない場合、メッセージにより、ダウンロードは許可されず、システム管理者がこの権限を変更できることが通知されます。この権限の変更について詳しくは、[155 ページの『ファイル・リストア・オプション』](#)の **enable_download_logs** オプションを参照してください。

制約事項: システム・ログのダウンロード要求を同時に複数処理することはできません。システム・ログの最初の収集が完了するまで、新たなシステム・ログの収集を開始できません。

タスクの結果

ログ・ファイルとトレース・ファイルのサイズによっては、システム・ログのダウンロードに数分かかる場合があります。

問題判別情報は圧縮ファイルに収集されます。このファイルは選択した場所に保存できます。また、ブラウザの構成で指定されているデフォルトの場所に保存することもできます。

圧縮ファイルの名前は次の形式になります。

```
TIV-logs-TSM_CAD-<NODE NAME>-YYYY-MM-DD_hh-mm-ss.zip
```

圧縮ファイルに含まれる問題判別情報は以下のとおりです。

- **ba/dsminfo.txt**。このファイルには、コマンド `query systeminfo` からの IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントの情報が含まれ、`dsmerror.log`、`dsmwebcl.log`、および `dsmsched.log` の情報が含まれます。
- **ba/trace.txt**。トレースが有効な場合、このファイルには IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのトレース・ファイルの情報が含まれます。
- **ba/dsminstr.log**。このファイルには、IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストールメンテーション情報が含まれます。
- **liberty_logs** フォルダーには、Liberty サーバーとファイル・リストア API に関連するすべてのログ・ファイルとトレース・ファイル (`fr_api.log` や `messages.log` など) が含まれます。

- `frGUI/FRLog.config`。このファイルには、ファイル・リストア API のロギングとトレースの構成情報が含まれます。
- `tsmVmGUI` フォルダーには、ファイル・リストア情報ファイルと、`api-jlog.properties`、`frConfig.props`、`traceConfig.properties`、`TsmApiLog.config`、および `tsmserver.props` が含まれます。
- `server.xml`。このファイルには、Liberty サーバーに関連する構成情報が含まれます。

ファイル・リストア操作のオプションの指定

ファイル・リストア操作を管理者が構成および制御できるようにするには、`frConfig.props` ファイル内のオプションを指定します。

始める前に

デフォルトでは、`frConfig.props` ファイルは存在しません。ただし、手順に概説されているように、指定した名前でファイルを作成して、関連するディレクトリーに保存できます。

このタスクについて

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアント がインストールされているシステムで、以下の手順を実行します。

手順

1. `frConfig.props` ファイルがあるディレクトリーに移動します。
例えば、コマンド・プロンプトを開いて、以下のコマンドを入力します。

AIX の場合:

```
cd /usr/tivoli/tsm/tdpvmware/common/webserver/usr/servers/veProfile/tsmVmGUI
```

Linux の場合:

```
cd /opt/tivoli/tsm/tdpvmware/common/webserver/usr/servers/veProfile/tsmVmGUI/
```

2. テキスト・エディターを使用して管理者モードで `frConfig.props` ファイルを開き、必要に応じてオプションを指定します。
指定するオプションを判別するには、[155 ページの『ファイル・リストア・オプション』](#)を参照してください。
3. 変更を保存して、`frConfig.props` ファイルを閉じます。

タスクの結果

変更したオプションが、IBM Spectrum Protect Web ユーザー・インターフェースに適用されます。

ファイル・リストア・オプション

`frConfig.props` ファイルによって、ファイル・リストア操作を制御します。`frConfig.props` ファイル内のオプションを構成できます。

`enable_download_logs=false | true`

IBM Spectrum Protect Web ユーザー・インターフェースを使用してシステム・ログをダウンロードできるかどうかを指定します。

false

IBM Spectrum Protect Web ユーザー・インターフェースを使用してシステム・ログをダウンロードできません。この値がデフォルトです。

true

IBM Spectrum Protect Web ユーザー・インターフェースを使用してシステム・ログをダウンロードできます。

クライアント・スケジューラーの自動開始

ワークステーションの始動時に、クライアント・スケジューラーを自動的に開始することができます。

IBM Spectrum Protect 管理者が ユーザー・ノードのスケジュールを定義してある場合は、クライアント・スケジューラーを開始すると、ワークステーションのバックアップ (または、スケジュールされているその他のアクションの実行) を自動的に行うことができます。

IBM Spectrum Protect クライアント・アクセプター・サービスを使用してスケジューラーを管理することもできます。

関連タスク

286 ページの『[クライアント・スケジューラー・プロセスをバックグラウンド・タスクとして実行し始動時に自動的に開始するための設定](#)』

IBM Spectrum Protect クライアント・スケジューラーを構成し、システムの開始時に自動的に開始するバックグラウンド・システム・タスクとして実行することができます。

パスワードの変更

IBM Spectrum Protect 管理者は、ユーザーに対して、パスワードを使用してサーバーに接続するように要求できます。

このタスクについて

パスワードが必要な場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントはパスワードを要求するプロンプトを表示します。パスワードがわからないときは、IBM Spectrum Protect 管理者に問い合わせてください。

重要: このトピックで説明されているパスワードは、ファイルの暗号化に使用するパスワードとは異なります。

GUI からユーザーのパスワードを変更するには、以下を実行します。

手順

1. Mac OS X の場合、IBM Spectrum Protect Tools for Administrators を使用してバックアップ/アーカイブ・クライアントを開始する。
2. メイン・ウィンドウから、「ユーティリティー」メニューをオープンし、「パスワードの変更」を選択する。
3. 現在のパスワードと新規パスワードを入力し、「パスワードの確認」フィールドに新規パスワードを入力する。
4. 「変更」をクリックする。

タスクの結果

コマンド・ライン・クライアントからパスワードを変更するには、以下のコマンドを入力します。

UNIX、Linux、および Windows クライアントの場合:

```
dsmc set password
```

Mac OS X クライアントの場合、コマンド・ライン・クライアントからパスワードを変更するには、以下のコマンドを入力します。

```
sudo dsmc set password
```

次に、プロンプトが出されたら、古いパスワードと新規パスワードを入力します。

パスワードの長さは、最大で 63 文字です。パスワードに関する制約は、パスワードが保管および管理されている場所、およびクライアントが接続する IBM Spectrum Protect サーバーのバージョンによって異なります。

ご使用の **IBM Spectrum Protect** サーバーがバージョン **6.3.3** 以降で、パスワードの認証に **LDAP** ディレクトリー・サーバーを使用する場合、以下が適用されます。

パスワードの作成には、以下に挙げる文字のいずれかを使用してください。

```
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 . ! @ # $ % ^ & * _ - + = ' ( )
| { } [ ] : ; < > , ? / ~
```

パスワードは大/小文字の区別があり、LDAP ポリシーにより設定されるより多くの制約事項に従います。

ご使用の **IBM Spectrum Protect** サーバーがバージョン **6.3.3** 以降で、パスワードの認証に **LDAP** ディレクトリー・サーバーを使用しない場合、以下が適用されます。

パスワードの作成には、以下に挙げる文字のいずれかを使用してください。

```
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 . ! @ # $ % ^ & * _ - + = ' ( )
| { } [ ] : ; < > , ? / ~
```

パスワードは、IBM Spectrum Protect サーバー・データベースに保管され、大文字小文字を区別しません。

ご使用の **IBM Spectrum Protect** サーバーがバージョン **6.3.3** より古い場合は、以下が適用されます。

パスワードの作成には、以下に挙げる文字のいずれかを使用してください。

```
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
_ - & + .
```

パスワードは、IBM Spectrum Protect サーバー・データベースに保管され、大文字小文字を区別しません。

要確認:

コマンド・ラインでは、1つ以上の特殊文字を含むすべてのパラメーターを引用符で囲んでください。引用符を指定しないと、特殊文字はシェルのエスケープ文字、ファイルのリダイレクト文字、またはオペレーティング・システムにとって重要なその他の文字として解釈される可能性があります。

AIX、Linux、および Solaris システムの場合:

コマンド・パラメーターを単一引用符 (') で囲みます。

コマンド・ライン例:

```
dsmc set password -type=vmguest 'Win 2012 SQL' 'tsml2dag¥administrator'
'7@#$$%^&7'
```

特殊文字が含まれるパスワードをオプション・ファイルに入力する場合は、引用符は必要ではありません。

関連概念

[156 ページの『クライアント・スケジューラーの自動開始』](#)

ワークステーションの始動時に、クライアント・スケジューラーを自動的に開始することができます。

関連タスク

[150 ページの『開始: その他の考慮事項』](#)

dsmj および **dsmc** コマンドの引数としてオプションを組み込むことができます。例えば、オプションを使用して、日付、時刻、および番号を表示する形式を変更したり、パスワードを組み込んでバックアップ/アーカイブ・クライアントがパスワードのプロンプトを表示しなくてもよいようにすることができます。

関連資料

[495 ページの『Password』](#)

password オプションは、IBM Spectrum Protect のパスワードを指定します。

[772 ページの『Set Password』](#)

set password コマンドを使用して、ワークステーションの IBM Spectrum Protect パスワードの変更、別のサーバーへのアクセスに使用する資格情報の設定を行います。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用したファイル・リストのソート

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用して、ファイルの表示、ソート、選択を行います。

このタスクについて

表 32. バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用したファイルの処理

タスク	手順
ファイルの表示	ディレクトリー内のファイルを表示するには、ディレクトリー名の横のフォルダー・アイコンをクリックします。ファイルは、右側の「ファイル・リスト」ボックスに表示されます。
ファイル・リストのソート	• 「ファイル・リスト」ボックスで該当する列見出しをクリックします。
アクティブ/非アクティブ・バックアップ・バージョンの表示	• 「表示」メニューから「 アクティブ/非アクティブ・ファイルの表示 」オプションをクリックします。 • ツールバーの「 アクティブ/非アクティブ・ファイルの両方を表示 (Display both active and inactive files) 」ツールをクリックします。
アクティブ・バックアップ・バージョンのみの表示	「表示」メニューから「 アクティブ・ファイルのみ表示 」オプションをクリックします。
リストアまたはリトリートするファイルの選択	• リストアまたはリトリートするディレクトリーまたはファイル名の横にある選択ボックスをクリックします。 • リストアまたはリトリートするファイルを強調表示させ、ツールバーの「 項目の選択 (Select Items) 」ツールをクリックします。 • リストアまたはリトリートするファイルを強調表示させ、「編集」メニューから「 項目の選択 (Select Items) 」オプションをクリックします。
ファイルの選択解除	• ディレクトリーまたはファイル名の横にあるチェックマークが付いた選択ボックスをクリックします。 • 選択解除するファイルを強調表示させ、ツールバーの「 項目の選択解除 (Deselect Items) 」ツールをクリックします。 • 選択解除するファイルを強調表示させ、「編集」メニューから「 項目の選択解除 (Deselect Items) 」オプションをクリックします。
ファイル情報の表示	• ファイル名を強調表示させ、ツールバーの「 ファイル詳細の表示 (View File Details) 」ボタンをクリックします。 • ファイル名を強調表示させ、「表示」メニューから「 ファイル詳細 」を選択します。

注:

- 特に注記がない限り、上記の表のタスクおよび手順はすべてのクライアント GUI に適用されます。
- クライアント GUI を使用して、名前、ディレクトリー、サイズ、または修正日付などの各種属性に基づいて、ファイルのリストをソートできます。最後にバックアップを取った日付でファイルをソートすると、特定時点機能で使用する日付と時刻を決める際に便利です。
- アクティブ・ファイルは、最後のバックアップを実行した時点でユーザーのワークステーション上に存在していたファイルの最新のバックアップ・バージョンです。そのファイルのその他のバックアップ・

バージョンは、すべて非アクティブ状態です。「**アクティブ/非アクティブ・ファイルの表示**」メニュー・オプションを選択しない限り、ファイルのアクティブ・バックアップ・バージョンのみが表示されます。このファイルをユーザーのワークステーションから削除すると、次に増分バックアップを実行した時点でアクティブ・バージョンは非アクティブとなります。

コマンド・ライン・クライアントで **query** コマンドを **inactive** オプションと一緒に使用すると、アクティブ状態と非アクティブ状態の両方のオブジェクトを表示できます。**restore** コマンドを **pick** および **inactive** オプションと一緒に使用すると、アクティブ状態と非アクティブ状態のバックアップのリストを生成して、そのリストから選択できます。

関連資料

445 ページの『Inactive』

inactive オプションを使用すると、活動状態と非活動状態の両方のオブジェクトを表示することができます。

499 ページの『Pick』

pick オプションは、入力したファイル指定と一致するバックアップ・バージョン、またはアーカイブ・コピーのリストを作成します。

オンライン・ヘルプの表示

オンライン・ヘルプは、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI、Web クライアント、あるいは **dsmc** コマンド・ラインのいずれの方法でも表示することができます。

このタスクについて

- バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI:
 - ヘルプ・メニューを開く。「ヘルプ」をクリックするか、F1 を押します。
 - 現行ウィンドウで「ヘルプ」ボタンをクリックする。
 - Mac システムでは、GUI の疑問符 (?) アイコンをクリックして、現行操作に関するオンライン情報を表示する。
- **dsmc** コマンド・ライン: **help** コマンドを入力する。使用可能なヘルプ・テキストの完全な目次が表示されます。

関連資料

688 ページの『Help』

help コマンドを使用して、コマンド、オプション、およびメッセージに関する情報を表示します。

セッションの終了

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI から、または **dsmc** コマンド・ラインから、クライアント・セッションを終了することができます。

このタスクについて

- バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI からは次のようにします。
 - 「ファイル」メニューを開いて、「終了 (Quit)」を選択する。
 - Command+Q を押す。
 - 「ファイル」メニューをオープンし、「終了」を選択する。
 - 「システム」メニューを開いて、「クローズ」を選択する。
 - Web クライアントから: 別の URL をオープンするか、ブラウザをクローズする。
- DSMC コマンド・ラインからは次のようにします。
 - バッチ・モードでは、ユーザーが入力する各 **dsmc** コマンドは完全セッションです。クライアントは、コマンドの処理を終了すると、セッションを終了します。

- 対話セッションを終了するには、Protect> プロンプトで **quit** と入力する。
- クライアントが処理を終了する前に **dsmc** コマンドを中断するには、IBM Spectrum Protect コンソールで **QQ** と入力します。すべての場合ではありませんが多くの場合、これでコマンドは中断されます。コマンドを中断できない場合は、Ctrl-C を押すか、UNIX **kill -15** コマンドを使用します。

注：UNIX および Linux での **dsmc** コマンドの信号ハンドラー設計の制限のため、Ctrl-C を押すか UNIX **kill -15** コマンドを使用すると、コア・メモリー・ダンプが行われる可能性があります。そのようなコア・メモリー・ダンプを回避する必要がある場合は、使用可能なコマンド・ラインから UNIX **kill -9** コマンドを使用してください。

関連資料

696 ページの『Loop』

loop コマンドは、quit を入力するまで維持される対話式コマンド・ライン・セッションを開始します。

オンライン・フォーラム

IBM Spectrum Protect 製品のユーザー・ディスカッションに参加するために、ADSM-L リスト・サーバーに加入することができます。

このタスクについて

これは、Marist College が維持しているユーザー・フォーラムです。IBM は公式にはサポートしていませんが、製品開発者その他の IBM サポート・スタッフも、非公式ですが、最大限の努力をはかって参加しています。これは公式に IBM でサポートしているチャンネルではありませんから、特に IBM からの応答が必要な場合は IBM テクニカル・スタッフに連絡を取ってください。直接の問い合わせでない場合は、IBM はリスト・サーバー上でのユーザーの質問にお答えするとは限りません。

次の電子メール・アドレスへメモを送信すると加入することができます。

```
listserv@vm.marist.edu
```

その場合、メッセージ本体には以下の情報を含めてください。

```
SUBSCRIBE ADSM-L yourfirstname yourlastname
```

リスト・サーバーは、加入要求を確認したい旨の応答をユーザーに送信します。加入要求を確認すると、リスト・サーバーはユーザーにさらに指示を送信します。その後、電子メールを次のアドレスに送信して、リスト・サーバーにメッセージを通知することができます。

```
ADSM-L@vm.marist.edu
```

その後、ユーザーが ADSM-L からのアンサブスクライブを希望する場合は、次の電子メール・アドレスにメモを送信してください。

```
listserv@vm.marist.edu
```

その場合、メッセージ本体には以下の情報を含めてください。

```
SIGNOFF ADSM-L
```

また、次の URL から ADSM-L アーカイブを読んだり検索したり、ディスカッション・フォーラムに参加したり、他のリソースにアクセスしたりすることができます。

```
http://www.adsm.org
```

第4章 データのバックアップ

バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してユーザーのファイルのバックアップ・バージョンを IBM Spectrum Protect サーバーに保管します。元のファイルが失われたり、損傷したりした場合、これらのバックアップ・バージョンをリストアすることができます。

すべてのクライアントのバックアップとリストアの手順は、Web クライアントにも適用されます。

制約事項: Web クライアントでは、クライアント・オプションを設定するためのプリファレンス・エディターが提供されていません。

以下は 1 次バックアップ・タスクのリストです。

- [161 ページの『バックアップの計画』](#)
- [163 ページの『バックアップ前の考慮事項 \(UNIX および Linux\)』](#)
- [175 ページの『増分、選択、または日付による増分バックアップの実行 \(UNIX および Linux\)』](#)
- [189 ページの『バックアップ・データの削除』](#)
- [190 ページの『グループ・バックアップのための 1 つ以上のファイル・スペースからのファイルのバックアップ \(UNIX および Linux\)』](#)
- [197 ページの『イメージ・バックアップ』](#)
- [210 ページの『Network Data Management Protocol を使用した NAS ファイル・システムのバックアップ』](#)

バックアップの計画

初めてのユーザーや、あまり頻繁にファイルのバックアップを行わない方の場合、データのバックアップ前に検討する準備手順のチェックリストとして、このトピックの表を利用してください。

データのバックアップ準備ができていかどうかを判断するには、次のタスク・リストをお読みください。

- ファイルのバックアップを行いたいのか、またはアーカイブを行いたいのかを決定する。詳しくは、[162 ページの『いつファイルをバックアップおよびアーカイブするか』](#)を参照してください。
- ファイルおよびディレクトリーをバックアップする 前の重要な考慮事項については、[163 ページの『バックアップ前の考慮事項 \(UNIX および Linux\)』](#)を参照してください。
- バックアップ・サービスからファイルを除外する必要があるか? 詳しくは、[166 ページの『処理を制御するための include-exclude オプション』](#)を参照してください。

関連概念

[IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール](#)

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ワークステーション上の情報を保護するために役立ちます。

どのファイルをバックアップするか

バックアップを要求すると、クライアントは特定の要件が満たされた場合に、ファイルをバックアップします。

ファイルをバックアップするには、クライアントが以下の要件を満たしている必要があります。

- バックアップ・コピー・グループが、選択した管理クラスに含まれる。
- バックアップ対象ファイルが、バックアップ・コピー・グループで定義されている逐次化要件を満足する。コピー・グループの逐次化パラメーターが **static** (静的) または **shrstatic** (共用静的) である場合に、バックアップ中にファイルが変更されると、そのファイルはバックアップされません。
- バックアップ対象ファイルが、バックアップ・コピー・グループで定義されている **mode** 要件を満足する。コピー・グループの **mode** パラメーターが **modified** (変更) の場合、ファイルは最後のバックアップ

ブ以降に変更されている必要があります。**mode** が **Absolute**（絶対）の場合は、変更されていないファイルもバックアップすることができます。

- バックアップ対象ファイルが、バックアップ・コピー・グループで定義されている頻度要件を満足する。ファイルをバックアップするには、最後のバックアップ以降、指定された最少日数が経過している必要があります。
- ファイルが **exclude** ステートメントによってバックアップから除外されていない。
- ファイルがオペレーティング・システムによってバックアップから除外されていない。このような除外ファイルは、レジストリー・サブキー **HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Control¥BackupRestore ¥FilesNotToBackup** で見つけることができます。

Windows システム状態の一部であるファイルは、システム状態がバックアップされる場合にのみバックアップ対象になります。システム状態コンポーネント間には依存関係があるため、システム状態は単一エンティティーとしてのみバックアップできます。ファイルを個別にバックアップまたはリストアすることはできません。例えば、**C:¥windows¥system32¥ntoskrnl.exe** は Windows システム状態の一部のため、**C:¥** ドライブの増分バックアップまたは選択バックアップ中にはバックアップされません。

関連概念

297 ページの『ストレージ管理ポリシー』

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

298 ページの『管理クラスおよびコピー・グループ』

管理クラスとは、データのバックアップおよびアーカイブに関して特定のストレージ管理要件を設定し、保管してあるバックアップおよびアーカイブ・コピー・グループの集合です。

関連資料

341 ページの『Absolute』

incremental コマンドで **absolute** オプションを使用すると、オブジェクトが最後の増分バックアップ以降に変更されていない場合でも、ファイル指定または **domain** に一致するすべてのファイルおよびディレクトリーが強制的にバックアップされます。

いつファイルをバックアップおよびアーカイブするか

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ファイルをバックアップまたはアーカイブするとき、ファイルのコピーと、それに関連付けられた属性をサーバーに送信します。ただし、バックアップ操作とアーカイブ操作の結果は異なります。

ファイルを不測の損傷から保護するにはバックアップを使用し、より多くのバージョンのファイルを永続的に保持するにはアーカイブを使用します。

バックアップ・データは、事前定義されたポリシー・ベースの規則を使用して、バージョン別に管理されます。IBM Spectrum Protect の管理者は、これらの規則を使用して以下のプロセスを管理できます。

- IBM Spectrum Protect サーバー上に維持されているバージョンの数
- 各追加バックアップ・コピーの保持日数
- クライアント・システムでファイルが削除されたときの、バックアップ・バージョンに対する処置

サーバーに保管されているファイルの各コピーは、独立した固有のバージョンのファイルと考えられます。

アーカイブは、長期データを保管するための強力な柔軟なメカニズムです。アーカイブ・データ（アーカイブ・コピーと呼ばれます）は、指定した日数の間保持されます。アーカイブ機能にはバージョンの概念がなく、バージョンのサポートもありません。ユーザーまたは管理者は、アーカイブに追加するファイルを決定する責任があります。

ヒント：同一のアーカイブ記述を使用してファイルが複数回アーカイブされた場合、アーカイブ操作を実行するたびに、ファイルの新規コピーがそのアーカイブに追加されます。リトリート操作を簡単にするには、各アーカイブにはファイルのコピーを 1 つだけ保管します。

バックアップは、間違った削除、破壊、またはディスク・クラッシュで発生する可能性のあるファイルの損傷または損失から、ファイルを保護します。サーバーは、バックアップする各ファイルごとに 1 つ以上

のバックアップ・バージョンを維持しています。新しいバージョンが作成されると古いバージョンは削除されます。サーバーが維持するバックアップ・バージョンの数は、管理者によって設定されます。

アーカイブ・コピーは、長期保管のために保管されます。管理者はアーカイブ・コピーを保持する期間を制限することができます。サーバーには、ファイルのアーカイブ・バージョンを無制限に保管することができます。アーカイブは、ファイルの特定のバージョンに戻る必要がある場合や、ワークステーションからファイルを削除して、後で必要に応じてそのファイルをリトリブする場合に有効です。例えば、税務上の目的でスプレッドシートを保管しておく必要があるが、現在は使用していないので、ワークステーション上にそれらを置いておきたくないような場合です。

関連概念

269 ページの『データのアーカイブとリトリブ (UNIX および Linux)』

あまり使用されないファイルを IBM Spectrum Protect サーバーにアーカイブし、アーカイブしたファイルを必要に応じてリトリブすることができます。ファイルのアーカイブとリトリブは、ファイルのバックアップとリストアに似ています。多くのウィンドウや概念がよく似ています。

240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』

IBM Spectrum Protect 管理者は、バックアップ・セット (サーバー上にあるファイルのコレクション) を、クライアント装置と互換性のあるフォーマットを使用して、装置上に作成されたポータブル・メディア上に生成することができます。

バックアップ前の考慮事項 (UNIX および Linux)

ご使用のシステムまたは環境のさまざまな要因が、バックアップ/アーカイブ・クライアントがデータを処理する方法に影響を与える可能性があります。データをバックアップする前に、以下の考慮事項を検討してください。

LAN フリー・データ移動

LAN フリー・データ移動では、クライアント・データの移動を通信ネットワークからストレージ・エリア・ネットワーク (SAN) にシフトすることができます。これにより、IBM Spectrum Protect サーバー上のロードが減少します。

SAN では、SAN 接続ストレージ・デバイスとの間でデータを相互にバックアップ、リストア、アーカイブ、およびリトリブできるようにする経路を提供します。クライアント・データは、IBM Spectrum Protect ストレージ・エージェントを使用して、SAN を介してストレージ・デバイスに移動します。ストレージ・エージェントは、クライアントと同じシステムにインストールされる必要があります。

AIX、Linux、および Solaris クライアントは、LAN フリー・データ移動をサポートします。

制約事項: `include.encrypt` オプションを使用したクライアント暗号化は、IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.1 以降のレベルまたは V7.1.8 以降の V7 のレベルへの LAN フリーのバックアップとアーカイブの操作ではサポートされなくなりました。暗号化されたバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの LAN フリーのリストア操作およびリトリブ操作は引き続きサポートされます。データがサーバーへの送信前に暗号化される `include.encrypt` オプションを使用してデータを暗号化する必要がある場合は、LAN ベースのバックアップ操作またはアーカイブ操作を使用してください。

LAN フリーの前提条件

LAN フリー・サポートを有効にするには、IBM Spectrum Protect for SAN ストレージ・エージェントをクライアント・ワークステーションにインストールして構成する必要があります。

IBM Spectrum Protect for SAN は、別個の製品です。

ストレージ・エージェントのインストールおよび構成について詳しくは、IBM Spectrum Protect for SAN の資料を参照してください。

LAN フリー・データ移動オプション

LAN フリー・データ移動を有効にするには、複数のクライアント・オプションを使用することができます。最初に、クライアント・ワークステーションに IBM Spectrum Protect for SAN ストレージ・エージェントをインストールして構成する必要があります。

LAN フリー・データ移動を有効にするには、以下のオプションを使用します。

enablelanfree

SAN 接続ストレージ・デバイスへの使用可能な LAN フリー経路を使用可能にするかどうかを指定します。

lanfreecommmethod

クライアントとストレージ・エージェントの間の通信プロトコルを指定します。

lanfreeshmport

クライアントとストレージ・エージェントで使用される固有の番号を指定し、通信に使用される共用メモリー領域を識別します。

lanfreetcpport

ストレージ・エージェントが listen している TCP/IP ポート番号を指定します。

lanfreetcpserveraddress

ストレージ・エージェントの TCP/IP アドレスを指定します。

関連資料

408 ページの『[Enablelanfree](#)』

`enablelanfree` オプションは、ストレージ・エリア・ネットワーク (SAN) 接続ストレージ装置への有効な LAN フリー・パスを有効にするかどうかを指定します。

469 ページの『[Lanfreecommmethod](#)』

`lanfreecommmethod` オプションは、IBM Spectrum Protect クライアントとストレージ・エージェントの間の通信プロトコルを指定します。これにより、クライアントと SAN 接続ストレージ装置間の処理が可能になります。

470 ページの『[Lanfreeshmport](#)』

`lanfreeshmport` オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントとストレージ・エージェント間の通信に `lanfreecommmethod=SHAREdmem` が指定されている時に使用してください。これにより、クライアントと SAN 接続ストレージ装置間の処理が可能になります。

472 ページの『[Lanfreessl](#)』

`lanfreessl` オプションを使用すると、セキュアなクライアント/ストレージ・エージェント通信を可能にする Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと接続している場合、このオプションは非推奨です。

471 ページの『[Lanfreetcpport](#)』

`lanfreetcpport` オプションは、IBM Spectrum Protect ストレージ・エージェントが listen している TCP/IP ポート番号を指定します。

473 ページの『[Lanfreetcpserveraddress](#)』

`lanfreetcpserveraddress` オプションは、IBM Spectrum Protect ストレージ・エージェントの TCP/IP アドレスを指定します。

メモリー制約があるシステムでの増分バックアップ

バックアップの開始前に、システムに使用可能なメモリーの量が少ない場合は、増分バックアップのパフォーマンスが悪化します。

システムにメモリー制約がある場合は、クライアント・オプション・ファイルで `memoryefficientbackup yes` オプションを指定します。このオプションを指定すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントは一度に 1 つのディレクトリーのみを処理するため、メモリー使用量は減りますが、バックアップ時間は長くなります。`yes` を指定すると、クライアントは、バックアップ処理をする際に一度に 1 つのディレクトリーのみを分析します。それでもパフォーマンスが低い場合は、通信バッファの設定値、およびシステムと IBM Spectrum Protect サーバーの間の通信リンクを調べてください。システムにメモリーの制約がな

い場合は、`memoryefficientbackup` オプションを `yes` に設定すると、バックアップのパフォーマンスが低下します。

関連資料

480 ページの『[Memoryefficientbackup](#)』

`memoryefficientbackup` オプションは、ファイル・スペースのフルバックアップを 処理するために使用するメモリー節約アルゴリズムを指定します。

ファイル数が多いシステムでの増分バックアップ

クライアントは、特にファイルの数が多いファイル・システムでは、増分バックアップ操作を実行するのに大量のメモリーを使用することがあります。

ここで使用するメモリー という用語は、クライアント・プロセスで利用できるアドレス可能メモリーを指します。アドレス可能メモリーは、物理 RAM と仮想メモリーの組み合わせです。

クライアントが使用するメモリーは、平均でオブジェクト (ファイルまたはディレクトリー) 当たり約 700 バイトです。そのため、100 万個のファイルとディレクトリーがあるファイル・システムでは、クライアントは平均で約 700 MB のメモリーを必要とします。使用される正確なオブジェクト当たりのメモリー量は、オブジェクト・パスと名前の長さ、またはディレクトリーのネストの深さによって異なります。バックアップ/アーカイブ・バックアップ・クライアントのメモリー所要量を決定する上で、データのバイト数は重要な要因ではありません。

ファイルの最大数は、処理に使用できるメモリーの最大量をオブジェクト当たりに必要な平均メモリー量で除算することによって判別できます。

メモリー所要量の合計は、以下の方法によって減らすことができます。

- ・クライアント・オプション **memoryefficientbackup diskcachemethod** を使用します。これを選択すると、メモリー使用量は最小限に抑えられますが、パフォーマンスが低下し、バックアップに必要なディスク・スペースが大幅に増えます。サーバーからのファイル記述データは、メモリーではなく、ディスク常駐の一時データベースに保管されます。ワークステーション上のディレクトリーがスキャンされる際、各オブジェクトをバックアップするか、更新するか、または期限切れにするかどうかを判別するためにデータベースが調べられます。バックアップの完了時に、データベース・ファイルは削除されます。
- ・クライアント・オプション **memoryefficientbackup yes** を使用します。クライアントが使用する平均メモリー量は、700 バイトにディレクトリー数を乗算した数値に、処理されているディレクトリー内のファイル当たり 700 バイトを加算した数値になります。ディレクトリーの数が多い (数百万個) ファイル・システムでは、**memoryefficientbackup yes** を指定しても、クライアントが増分バックアップを実行するのに十分なメモリーを割り振ることができない可能性があります。
- ・UNIX クライアントと Linux クライアントは、**virtualmountpoint** クライアント・オプションを使用して、単一のファイル・システム内で複数の仮想マウント・ポイントを定義することができます。これらは、それぞれクライアントによって別々にバックアップされます。
- ・クライアント・オプション **resourceutilization** が 4 より大きい値に設定されていて、複数のファイル・システムがバックアップされている場合、**resourceutilization** を 4 以下に減らすことによって、処理を一度に 1 つのファイル・システムの増分バックアップに制限することができます。この設定により、メモリー所要量が減ります。パフォーマンス上の理由から複数のファイル・システムを並行してバックアップする必要があり、メモリー所要量の合計が処理限界を超える場合は、バックアップ・クライアントの複数インスタンスを使用して複数のファイル・システムを並行してバックアップすることができます。例えば、2 つのファイル・システムを同時にバックアップする必要があり、メモリー所要量が単一プロセスの制限を超える場合は、クライアントの 1 つ目のインスタンスを開始して 1 つのファイル・システムをバックアップし、クライアントの 2 番目のインスタンスを開始してもう 1 つのファイル・システムをバックアップします。
- ・**-incrbydate** クライアント・オプションを使用して、「日付による増分」バックアップを実行します。
- ・バックアップする必要のないディレクトリーの全探索とバックアップをクライアントが行わないようにするには、**exclude.dir** クライアント・オプションを使用します。
- ・Mac OS X 以外は、クライアント・イメージ・バックアップ機能を使用して、ボリューム全体をバックアップします。イメージ・バックアップを使用すると、小さいファイルが多数あるファイル・システムの増分バックアップよりも、実際に使用するシステム・リソースが少なくなり、実行時間が速くなります。

- データを複数のファイル・システムに分散させることによって、1 ファイル・システム当たりのファイルの数を減らします。

関連資料

[546 ページの『Snapdiff』](#)

snappdiff (スナップショット 差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

[416 ページの『Exclude オプション』](#)

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

[465 ページの『Incrbydate』](#)

incrbydate オプションは、ファイルをバックアップから除外しない限り、新規ファイルおよび修正日付がサーバーで保管された最終増分バックアップより後の変更済みファイルをバックアップするために **incremental** コマンドで使用します。

[480 ページの『Memoryefficientbackup』](#)

memoryefficientbackup オプションは、ファイル・スペースのフルバックアップを 処理するために使用するメモリー節約アルゴリズムを指定します。

[525 ページの『Resourceutilization』](#)

オプション・ファイルの resourceutilization オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーおよびクライアントが処理中に使用できるリソースのレベルを調整するために使用します。

[595 ページの『Virtualmountpoint』](#)

virtualmountpoint オプションは、あるファイル・システム内の特定のディレクトリーから始まるファイルをバックアップ処理対象にしたい場合に、そのファイル・システムに仮想マウント・ポイントを定義します。

処理を制御するための include-exclude オプション

ファイル・システムには、バックアップを取りたくないファイルも存在します。そのようなファイルとしては、コア・ファイル、ネットワーク・ファイル・システムのローカル・キャッシュ、該当プログラムの再インストールによって容易に回復できるオペレーティング・システム・ファイルまたはアプリケーション・ファイル、あるいは容易に再作成できるそれ以外のファイルなどがあります。

include-exclude オプション・リスト内の exclude オプションおよび include オプションを使用してどのファイルをバックアップ処理から除外するかを指定することができます。

増分バックアップ処理や選択バックアップ処理に包含または除外するファイルを定義する場合は、dsm.sys 内の include および exclude オプションを使用します。exclude オプションで除外しなければ、ファイルはバックアップの対象となります。このため、バックアップ対象として特定ファイルを包含するために include オプションを使用する必要はありません。ただし、これらのバックアップ対象として包含するファイルが、除外対象の他ファイルを収容するディレクトリー内に存在する場合は、その限りではありません。

IBM Spectrum Protect は、管理クラスを使用して、サーバー上のバックアップを管理する方法を決めます。ファイルをバックアップするごとにそのファイルに管理クラスが割り当てられます。管理クラスは、自動的に選択されるデフォルトか、または include-exclude リスト内で include オプションを使用してユーザーがファイルに割り当てたものです。管理クラスを割り当てるには、その管理クラスにバックアップするファイルのバックアップ・コピー・グループが含まれていなければなりません。

関連タスク

[125 ページの『include-exclude リストの作成』](#)

include-exclude リストを作成しなければ、バックアップ/アーカイブ・クライアントはすべてのファイルがバックアップ・サービスの対象であると判断し、バックアップおよびアーカイブ・サービスにデフォルトの管理クラスを使用します。

[286 ページの『クライアント・スケジューラー・プロセスをバックグラウンド・タスクとして実行し始動時に自動的に開始するための設定』](#)

IBM Spectrum Protect クライアント・スケジューラーを構成し、システムの開始時に自動的に開始するバックグラウンド・システム・タスクとして実行することができます。

バックアップまたはアーカイブ操作時のデータの暗号化

データ・セキュリティを保証する方法として、データを暗号化します。バックアップまたはアーカイブ操作中にデータを保護するにはデータ暗号化を使用します。Advanced Encryption Standard (AES) 128 ビット暗号化が、デフォルトの暗号化オプションです。最高レベルの暗号化のために、256 ビット Advanced Encryption Standard (AES) データ暗号化を **encryptiontype** オプションを指定して使用します。

含まれているデータは暗号化形式で保管されます。暗号化は送受信されるデータ量に影響を及ぼしません。

バックアップ/アーカイブ・クライアント上で暗号化を使用可能にする唯一の方法は、**include.encrypt** オプションを用いることです。**include.encrypt** ステートメントが使用されていない場合は、暗号化を実行できません。

暗号化は、永久増分バックアップ・モード (**MODE=IFIncremental** および **MODE=IFFull**) を使用する VMware 仮想マシンのバックアップとは両立しません。クライアントが暗号化用に構成されている場合、永久増分バックアップは使用できません。

増分バックアップ処理や選択バックアップ処理に包含または除外するファイルを定義する場合は、**dsm.sys** 内の **include** および **exclude** オプションを使用します。**exclude** オプションで除外しなければ、ファイルはバックアップの対象となります。このため、バックアップ対象として特定ファイルを包含するために **include** オプションを使用する必要はありません。ただし、これらのバックアップ対象として包含するファイルが、除外対象の他ファイルを収容するディレクトリー内に存在する場合は、その限りではありません。

ファイル・データを暗号化する場合は、暗号鍵パスワードを選択する必要があります。クライアントは、この暗号鍵を使用して、ファイル・データの暗号化および暗号化解除のための暗号鍵を生成します。後で使用するために暗号鍵パスワードを保管します。**encryptkey** オプションを使用することによって、暗号鍵パスワードを **TSM.sth** と呼ばれるファイルに保管するかどうかを指定できます。

IBM Spectrum Protect クライアントの暗号化を使用すると、最大 63 文字の長さの値を入力できます。この暗号化パスワードは、バックアップ・ファイルを暗号化するときを確認する必要があります。また、この暗号化パスワードは、暗号化されたファイルをリストアするときにも入力する必要があります。

暗号化されたファイルのリストア時には、次のような場合に、クライアントは、ユーザーに対してプロンプトを出して、ファイルの暗号化解除のための鍵パスワードの入力を指示します。

- **encryptkey** オプションが Prompt に設定されている場合。
- 前のケースでユーザーが提供した鍵が一致しない場合。
- **encryptkey** オプションが Save に設定され、ローカルに保存された鍵パスワードが暗号化されたファイルと一致しない場合。

制約事項: **include.encrypt** オプションを使用したクライアント暗号化は、IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.1 以降のレベルまたは V7.1.8 以降の V7 のレベルへの LAN フリーのバックアップとアーカイブの操作ではサポートされなくなりました。暗号化されたバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの LAN フリーのリストア操作およびリトリブ操作は引き続きサポートされます。データがサーバーへの送信前に暗号化される **include.encrypt** オプションを使用してデータを暗号化する必要がある場合は、LAN ベースのバックアップ操作またはアーカイブ操作を使用してください。

関連資料

[410 ページの『Encryptiontype』](#)

encryptiontype オプションを使用して、データ暗号化のアルゴリズムを指定します。

[410 ページの『Encryptkey』](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップまたはアーカイブされるファイルを暗号化するためのオプションをサポートします。このオプションは、**include.encrypt** オプションを使用して有効にします。

[416 ページの『Exclude オプション』](#)

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

447 ページの『include オプション』

include オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

ファイル・システムおよび ACL サポート

特殊ファイル・システムには、オペレーティング・システムによって生成された動的情報が含まれます。これらには、データまたはファイルは含まれません。UNIX および Linux クライアントは、特殊ファイル・システムおよびそれらの内容を無視します。

スタンドアロン・パッケージ LSCqfs

特殊ファイル・システムには以下のタイプがあります。

- ほとんどの UNIX プラットフォーム上にある /proc ファイル・システム
- Solaris 上にある /dev/fd ファイル・システム
- Linux 上にある /dev/pts

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、一般に使用される特定のファイル・システム・タイプで機能することができます。サポートされるファイル・システム・タイプについては、[168 ページの表 33](#) を参照してください。

制約事項: 以下のテーブルには、ACL と拡張属性の保持の有無も含め、AIX 上の NFS のフル・サポートを表示します。その他のオペレーティング・システムでは、NFS バックアップはサポートされますが、バックアップには、標準 POSIX メタデータ (アクセス許可、作成日など) のみ含まれます。NFS ファイル・システムのバックアップについて詳しくは、[215 ページの『ネットワーク・ファイル・システムのバックアップ』](#) を参照してください。

表 33. サポートされるファイル・システムおよび ACL サポート

プラットフォーム	ファイル・システム	ACL サポート
AIX	GPFS	Yes
	JFS	Yes
	JFS2	Yes
	JFS2 NFSV4	Yes
	VxFS	Yes
Linux x86_64	Btrfs	Yes
	XFS	Yes
	EXT2	Yes
	EXT3	Yes
	EXT4	Yes
	ReiserFS	Yes
	GPFS	Yes
	JFS	No
	VxFS	No
	NSS	Yes

表 33. サポートされるファイル・システムおよび ACL サポート (続き)

プラットフォーム	ファイル・システム	ACL サポート
Linux on Power Systems Servers	Btrfs	Yes
	XFS	Yes
	EXT2	Yes
	EXT3	Yes
	EXT4	Yes
	ReiserFS	Yes
	JFS	No
	GPFS	Yes
Linux on z Systems®	Btrfs	Yes
	XFS	Yes
	EXT2	Yes
	EXT3	Yes
	EXT4	Yes
	ReiserFS	Yes
	JFS	No
	GPFS	Yes
macOS	HFS 標準 (HFS)	Yes
	HFS 拡張 (HFS+)	Yes
	HFS 拡張 (大/小文字の区別) (HFSX)	Yes
	Xsan (XSAN) UNIX	Yes
	ユニバーサル・ディスク・フォー マット (UDF)	Yes
	ISO9660	Yes
	Apple File System, Case Sensitive (APFS)	Yes
	Apple File System (APFS)	Yes
Solaris	UFS	Yes
	VxFS	Yes
	QFS	No
	ZFS	Yes

NFS V4 ACL を定義して使用しているファイル・システム (Solaris ZFS および AIX JFS2 V2) では、標準 UNIX 許可または ACL のみが (CHMOD コマンドなどを使用して) 変更された場合でも、該当のファイルまたはディレクトリーは再び完全にバックアップされます。その他のファイル・システムの場合、この種の変更では、IBM Spectrum Protect サーバー上で属性が更新されるだけです。

その他すべてのファイル・システムを処理するには、virtualmountpoint オプションを使用して、以下の項目に対するサポートを使用可能にします。

- ファイル・データのバックアップ、リストア、アーカイブ、およびリトリブ
- 基本的な UNIX および Linux 許可
- 変更、アクセス、および修正のタイム・スタンプ、およびディレクトリー・ツリー構造

ACL など、その他のファイル・システム固有の属性は無効です。このようなファイル・システムのファイル・システム・タイプは、"UNKNOWN" に設定されます。

例えば、/media/abc/DATA1 ファイル・システムが クライアントでサポートされていない場合、このファイル・システムのデータをバックアップまたはアーカイブするには、以下のステートメントを `dsm.sys` に追加します。

```
VIRTUALMOUNTPOINT /media/abc/DATA1
```

このサポートは、ファイル・システムがシステム上で読み取りまたは書き込み処理などの基本的な POSIX システム呼び出しを使用できる場合にのみ有効です。

クロスプラットフォームのバックアップおよびリストアはサポートされません。例えば、AIX クライアントによってバックアップされたデータを Windows クライアントでリストアすることはできません。逆も同様に不可能です。

注: Mac OS X クライアントがバックアップまたはアーカイブしたデータを、他のクライアントがリストアすることはできません。さらに、Mac OS X クライアントは他のクライアントからデータをリストアまたはリトリブすることができません。

元のファイル・システムおよび宛先ファイル・システムが両方とも互換性のある ACL をサポートしている場合、ACL 情報に対して、ファイル・システム間タイプのリストアまたはリトリブ方式を実行できます。例えば、Solaris では、VxFS ファイル・システムと UFS ファイル・システムは互換性のある ACL をサポートするため、VxFS ファイル・システムからバックアップされた ACL 情報は UFS ファイル・システムにリストアされます。元のファイル・システムと宛先ファイル・システムが ACL をサポートしない場合、ファイル・システム間のリストアまたはリトリブ操作時に ACL 情報はリストアされません。

QFS ファイル・システムには以下の制限があります。

- QFS ファイル・システムではイメージ・バックアップをサポートしません。
- Solaris バックアップ/アーカイブ・クライアントは、テープのような第三のバックグラウンド・ストレージにファイルをアーカイブするのに必要な QFS および SAM の組み合わせをサポートしません。代わりに、バックアップする際にマイグレーション済みファイルを検出すると、自動的にテープからディスクにファイルを再呼び出しします。
- QFS ファイル・システムにはバックアップできない 2 つの非表示システム・ファイルと 1 つのシステム・ディレクトリーが含まれていますが、これらのファイルのバックアップは不要であるため、問題はありません。そこにはファイル・システムを管理する内部データがあります。その内部データは自動的にバックアップから除外され、ファイル・システム自体によって自動的に再作成されます (そのファイル・システム内のファイルのリストアが完了している場合)。

AIX 上の Veritas ファイル・システムおよびその ACL でサポートされる処理は、増分バックアップ、選択バックアップ、ファイル・リスト・バックアップ、アーカイブ、リストア、およびリトリブです。Logical Volume Manager ボリューム上での Veritas ボリュームのリストア (およびその逆に Veritas ボリューム上での Logical Volume Manager ボリュームのリストア) は、両方のファイル・システム・タイプが同じ場合に実行できます。

次の情報は、Mac OS X システムのみに関連します。

- Mac OS X システムの場合、UFS および HFSX ファイル・システムでは大/小文字が区別されます。それに対し、HFS+ ファイル・システムでは大/小文字の区別はされませんが、大/小文字はそのまま保持されます。UFS または HFSX ファイル・システム (大/小文字を区別する) からバックアップしたファイルは、HFS+ ファイル・システム (大/小文字を区別しない) に正常にリストアされない場合があります。例えば、UFS ファイル・システムの場合、ファイル `Afile` と `afile` は別のファイルとみなされます。一方、HFS+ ファイル・システムではその 2 つのファイルは同一とみなされます。
- Mac OS X では、大/小文字を区別する HFS+ または UFS ファイル・システムが使用されている場合、HFSX または UFS ファイル・システムからのデータが IBM Spectrum Protect サーバー上で HFS+ ファイル・システムにバックアップされないことが重要です。新規名がシステムで使用されるか、IBM Spectrum

Protect サーバー上の既存のファイル・スペースが名前変更される必要があります。例えば、/Volumes/fs2 という名前のシステムが、大/小文字を区別する HFS+ ファイル・システムで再パーティショニングされているとします。IBM Spectrum Protect サーバー上の /Volumes/fs2 ファイル・システムが名前変更されるか、新規名がローカル・システムで使用される必要があります。この名前変更が行われない場合、HFSX の大/小文字を区別するデータと、IBM Spectrum Protect サーバーに既に保管されている HFS+ の大/小文字を区別しないデータが混合されます。

- Mac OS X では、別名およびシンボリック・リンクはバックアップされます。ただし、クライアントはシンボリック・リンクが指すデータはバックアップしません。
- Mac OS X では、HFS ボリュームからバックアップされたファイルが UFS ボリュームにリストアされた場合、リソース・フォークは正しいオーナーに割り当てられません。オーナーを変更するには、リソース・フォーク・ファイルで **chown** コマンドを使用してこの問題を修正してください。リソース・フォーク・ファイルにより、構造化されたデータがファイルに保管されます。

Linux on POWER および Linux on System z の場合、ACL をバックアップするにはクライアントに `libacl.so` をインストールする必要があります。

重要: マルチノード・クラスターで GPFS for AIX、GPFS for Linux x86_64、または GPFS for Linux on z Systems を実行していて、すべてのノードがマウント済み GPFS ファイル・システムを共有している場合には、クライアントはこのファイル・システムをローカル・ファイル・システムとして処理します。クライアントは、増分バックアップ中に、各ノード上のファイル・システムをバックアップします。これを避けるには、以下のいずれかの操作を実行できます。

- クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) 中の `domain` ステートメントを明示的に構成して、ノードをバックアップしたいファイル・システムをリストします。
- `dsm.sys` 内の `exclude.fs` オプションを、バックアップ・サービスから GPFS ファイル・システムを除外するように設定する。

GPFS クラスターに異なる種類のプラットフォームが含まれている場合、1つのプラットフォームのバックアップ/アーカイブ・クライアントのみを使用して、単一のファイル・システムを保護する必要があります。複数のプラットフォームのバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用して複数のプラットフォーム間で共有されている GPFS ファイル・システムを保護することは避けてください。

例えば、クラスターに、AIX、Linux x86、および Linux zSeries 各システム上のノードが含まれていると仮定します。AIX バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してファイル・システム A を保護し、Linux zSeries バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してファイル・システム B を保護することができます。あるいは、AIX バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してファイル・システム A とファイル・システム B を保護することができます。AIX バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してファイル・システム A を保護する場合、AIX 以外のプラットフォーム上のバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してファイル・システム A を保護してはなりません。

IBM Spectrum Scale ファイル・システムに保管されているファイルのクロスオペレーティング・システム・リカバリーのサポート

複数のタイプのオペレーティング・システムがある IBM Spectrum Scale クラスターでは、ACL メタデータまたは拡張属性メタデータを保持し、ソース・オペレーティング・システムにバックアップされたファイルを、ターゲット・オペレーティング・システムにリストアできます。ソースとターゲットの両方のタイプのオペレーティング・システムが同じバージョンの IBM Spectrum Scale を使用している場合、ACL メタデータまたは拡張属性メタデータは正しくリストアされます。

サポートされるソース・オペレーティング・システムのタイプは次のとおりです。

- AIX
- Linux for IBM System Power ビッグ・エンディアン (pBE)
- Linux x86
- Linux for IBM System z

サポートされるターゲット・オペレーティング・システムのタイプは次のとおりです。

- Linux for IBM System Power リトル・エンディアン (pLE)

- Linux x86
- Linux for IBM System z

影響を受けるユーザーとグループのセキュリティ設定は、ソース・システムとターゲット・システムの両方で一致する必要があります。

バックアップ・アクティビティに対して複数のタイプのオペレーティング・システムを混用しないでください。ご使用の IBM Spectrum Scale クラスターで使用可能な 1 つのオペレーティング・システム・タイプのみを選択し、すべてのバックアップ操作に使用してください。

操作の最大ファイル・サイズ

最大ファイル・サイズはファイル・システムのタイプによって異なります。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップ、アーカイブ、リストア、またはリトリブ操作中はファイル・サイズ制限のチェックを行いません。

ファイル・システムがファイルの作成を許す場合は、クライアントはファイルをバックアップまたはアーカイブします。

次の表は、UNIX および Linux プラットフォーム・プラットフォーム上のネイティブ・ファイル・システムの最大ファイル・サイズを指定します。

表 34. 最大ファイル・サイズ	
プラットフォーム	最大ファイル・サイズ (バイト)
AIX 6.1 (JFS2) のサイズ制限	JFS2 ファイル・システムの最大サイズ: 32 TB JFS2 ファイルの最大サイズ: 16 TB JFS2 ファイル・システムの最小サイズ: 16 MB
すべての Linux クライアント	9 223 372 036 854 775 807 (8 EB-1)
Mac OS X	HFS - 2 147 485 648 (2GB) HFS+, HFSX, XSAN、および UFS - 9 223 372 036 854 775 808 (8EB)
Solaris	1 099 511 627 775 (1 TB-1)
Solaris (ZFS)	18 446 744 073 709 551 616 (16 EB)

長いユーザー名およびグループ名

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、最大 64 文字のユーザー名およびグループ名を問題なく処理できます。ただし、名前が 64 文字より長くなる場合は、IBM Spectrum Protect による特殊な処理が必要です。

重要: ユーザー名とグループ名の 64 文字の長さ制限を超えないでください。制限を超えた場合、クライアントは、先頭の 53 文字にスラッシュ (/) を付加してから、文字ストリングとして数字の ID を付加する方法で変換を行うことによって、名前をこの制限内に短縮します。

長い名前および結果として短縮されたストリングの両方を含むエラー・メッセージがログに記録されます。大半の機能では、短縮された名前を認識する必要がありません。例外は、次のとおりです。

- **set access** コマンド
- **fromowner** オプション
- **users** および **groups** (許可) オプション

いずれの場合にも、名前を入力する必要があるときは、変換を含むエラー・メッセージを見つけるか、ここに概説されている規則に従って名前を作成する必要があります。

Mac OS X ボリューム名

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、その UNIX マウント・ポイント名に基づいてボリュームをバックアップします。

IBM Spectrum Protect は、各ボリューム名を、別々のリストアまたはリトリブ・ボリュームとして維持します。これらのボリューム名が、サーバー上のファイル・スペースの名前になります。

すでにバックアップ済みのボリュームの名前を変更する場合、クライアントはそれを新規ボリュームとみなして、前のものと関連付けることはしません。ボリュームのあらゆるバックアップは、ファイルを新規名でバックアップします。ボリュームの名前を変更したり、あるいはファイルをバックアップしたワークステーションとは異なるワークステーションから IBM Spectrum Protect にアクセスした場合に、不一致が発生する場合があります。

Mac OS X ボリューム命名の注意事項

IBM Spectrum Protect はサーバー上に、まったく新しいファイル・スペースを、ボリュームの UNIX マウント・ポイントで作成します。

「La Pomme」と「la pomme」などの名前の 2 つのボリュームがある場合、2 つの固有の UNIX マウント・ポイントが作成されます。

作成される 2 つのマウント・ポイントの例を次に示します。

```
/Volumes/La Pomme  
/Volumes/la pomme
```

デスクトップに重複ボリュームがある場合、UNIX マウント・ポイントは最後にクライアントがバックアップを行ったときと異なる場合があります。クライアントは、データを IBM Spectrum Protect サーバーの正しいファイル・システムにバックアップしない場合があります。

クライアントがデータをバックアップするファイル・システムを確認できます。

1. 「バックアップ」ウィンドウでファイル・システムを選択します。
2. 「ファイル」→「情報の表示 (Show Info)」をクリックします。

UNIX マウント・ポイントが情報ダイアログに表示されます。

命名で発生する可能性のあるあらゆる問題を回避する最善の方法は、ボリューム名が固有であることを確認することです。

重要:

- クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバー上の既存のファイル・スペース名を使用し続けます。新しいファイル・スペースだけが、名前に UNIX マウント・ポイントを使用します。
- 名前にピリオド (...) が含まれるボリュームを指定しないでください。クライアントは、ピリオドのシーケンスを include-exclude 処理の一部として使用します。クライアントは、ボリュームの名前にピリオドのシーケンスが含まれている場合、無効な include-exclude ステートメントを報告します。そのようなボリュームの名前を変更する必要があります。

デュアル・ブート・システム上の Mac OS X ボリューム命名の注意事項

Mac OS X のバージョンが複数あり切り替える場合は、クライアントが IBM Spectrum Protect サーバー上のファイル・スペース名に UNIX マウント・パスをどのように使用するかを理解することが重要です。

例えば、デュアル・ブート・システムに 2 つのボリューム (El Capitan および Sierra) があるとします。ファインダーおよびバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI は、これらを El Capitan および Sierra として表示します。ただし、UNIX マウント・ポイントはどのバージョンの Mac OS が稼働しているかによって異なります。El Capitan が始動ディスクの場合、UNIX パスは次のようになります。

```
/Volumes/Sierra
```

Sierra が始動ディスクの場合、UNIX パスは次のようになります。

```
/
/Volumes/El Capitan
```

バックアップ操作またはアーカイブ操作が実行された場合は、ファイル・スペース名も、どのバージョンの Mac OS X が稼働しているかによって異なります。

Mac OS X の両バージョンが、IBM Spectrum Protect サーバー上の / ファイル・システムにバックアップすることです。そうなった場合、システム・ファイルが混合します。

デュアル・ブート・システムにおける潜在的な問題を避けるために、以下のタスクの 1 つを実行してください。

1. インストールする Mac OS X のバージョンを 1 つ選択して、IBM Spectrum Protect を実行します。これによって、クライアントがバックアップを行うたびに、UNIX マウント・ポイントが同じであることが保証されます。
2. Mac OS X の各バージョンを、固有の IBM Spectrum Protect ノード名で構成します。それから Mac OS X の他のバージョンを、システム・オプション・ファイルの domain ステートメントでバックアップ処理から除外します。例えば、ボリューム Sierra が始動ディスクである場合は、次のオプションをシステム・オプション・ファイルに追加します。

```
DOMAIN -/Volumes/El Capitan
```

ボリューム El Capitan が始動ディスクである場合、以下をシステム・オプション・ファイルに追加します。

```
DOMAIN -/Volumes/Sierra
```

Mac OS X ユニコード使用可能

Mac OS X クライアントではユニコードが使用可能です。新規クライアントが初めてサーバーにデータを保管する場合、特殊なセットアップは必要ありません。

サーバーはユニコードが使用可能なファイルおよびディレクトリーを自動的に保管します。ただし、ユニコードが使用可能なクライアントにアップグレードする場合、ユニコードをサポートできるように既存のファイル・スペースのマイグレーションを計画する必要があります。

サーバー上にすでに存在するあらゆるファイル・スペースを、ユニコードが使用可能なファイル・スペースを作成できるように名前変更する必要があります。autofsrename オプションを使用して、既存のファイル・スペースを名前変更します。

関連資料

[351 ページの『Autofsrename』](#)

autofsrename オプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のユニコード対応ではない既存のファイル・スペースの名前を変更します。それにより、現在の操作で、元の名前のユニコード対応ファイル・スペースを作成することができます。

Mac OS X Time Machine のバックアップ・ディスク

Time Machine は、Mac OS X で使用できるバックアップ・アプリケーションです。

IBM Spectrum Protect を Mac OS X Time Machine アプリケーションと同時に使用することができます。ただし、Mac OS X Time Machine アプリケーションがデータをバックアップする方法には固有の性質があるため、バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用して Mac OS X Time Machine データをバックアップする前に、以下の項目を考慮してください。

- Mac OS X Time Machine バックアップ・ディスクは、ファイルおよびディレクトリー・ハード・リンクの両方を幅広く活用して、ディスク使用量を最小化します。例えば、Mac OS X Time Machine アプリケーションでバックアップしたディスクが 5 GB の場合、最初のバックアップで 5 GB のデータを Mac OS X Time Machine バックアップ・ディスクにコピーします。

その後のバックアップでは前のバックアップ以降に変更されたファイルだけをコピーします。変更されなかったファイルおよびディレクトリーはすべて、前のバックアップ中にコピーされたバージョンと一緒にハード・リンクされます。

ファインダーに、各バックアップが 5 GB、合計サイズが 10 GB と表示されます。ただし、ハード・リンクを使用するため、合計ディスク使用量は 5 GB より少し多いだけになります。

IBM Spectrum Protect サーバー上にまだないハード・リンクされたオブジェクトはすべてバックアップされます。

例えば、10 GB のデータが IBM Spectrum Protect サーバーに送信されたとします。

- リストアされたファイルがハード・リンクされると、クライアントは元のハード・リンクを再作成します。元のハード・リンクの再作成は、ハード・リンクされたファイルがすべて同時にリストアされた場合に限り可能になります。すべてのハード・リンク・ファイルの同時リストアは、Mac OS X Time Machine アプリケーションを使用する大容量のバックアップ・ディスクには実用的ではありません。
- Mac OS X Time Machine アプリケーションがファイルをバックアップ・ディスクにコピーすると、ファイルに ACL が追加されて削除されないようにします。バックアップ/アーカイブでは、ファイルと一緒に ACL をバックアップおよびリストアすることができます。一方、リストアされたファイルはこれらの ACL の制限が残ります。

ヒント: 最良の結果を得るには、Time Machine アプリケーションのバックアップ・データを除外してください。Time Machine アプリケーション・データはすべて、Backups.backupdb という名前のディレクトリーにあります。

関連概念

[129 ページの『除外するシステム・ファイル』](#)

除外するためにクライアント・オプション・ファイルに入れる必要があるシステム・ファイルがいくつかあります。

増分、選択、または日付による増分バックアップの実行 (UNIX および Linux)

管理者は、ユーザーのワークステーション上でファイルを自動的にバックアップするようにスケジュールを設定している場合もあります。以下のセクションでは、スケジュールを使用しないでファイルをバックアップを行う方法について説明します。

増分バックアップには、フル増分と部分増分の 2 つのタイプがあります。

関連タスク

[286 ページの『クライアント・スケジューラー・プロセスをバックグラウンド・タスクとして実行し始動時に自動的に開始するための設定』](#)

IBM Spectrum Protect クライアント・スケジューラーを構成し、システムの開始時に自動的に開始するバックグラウンド・システム・タスクとして実行することができます。

フル増分バックアップと部分増分バックアップ

増分バックアップは、新規ファイルおよび変更後のファイルのみのバックアップをとります。増分バックアップのタイプは、バックアップ対象として選択するオブジェクトによって異なります。

ファイル・システム全体を選択する場合、バックアップはフル増分バックアップになります。ディレクトリー・ツリーあるいは個々のファイルを選択する場合、バックアップは部分増分バックアップになります。

最初にフル増分バックアップを実行するときは、バックアップ/アーカイブ・クライアントは指定したファイルおよびディレクトリーをすべてバックアップします。ファイルの数が多い場合、または 1 つ以上の大きなファイルをバックアップする必要がある場合、バックアップ操作は長時間を要することがあります。後続のフル増分バックアップは、新規ファイルと変更ファイルのみバックアップを取ります。バックアップ・サーバーは、IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージに存在するファイルをバックアップすることにより、時間とスペースを浪費することなくファイルの現行バージョンを維持します。

ストレージ管理ポリシーによっては、IBM Spectrum Protect サーバーはユーザー・ファイルの複数のバージョンを保持します。最新のバックアップ済みファイルは、アクティブ・バックアップ・バージョンとな

ります。バックアップ済みファイルの古いコピーは、非アクティブ・バージョンとなります。しかし、ワークステーションから ファイルを削除する場合、次のフル増分バックアップが行われると、そのファイルのアクティブ・バックアップ・バージョンは非アクティブになります。ファイルの非アクティブ・バージョンはリストアップが可能です。サーバーが維持する非アクティブ・バージョンの数と、それらの保存期間は、IBM Spectrum Protect サーバー管理者が定義する管理ポリシーによって決まります。アクティブ・バージョンは、前回のバックアップ時点でファイル・システムに存在していたファイルを表します。

クライアント GUI を使用してフル増分バックアップまたは部分増分バックアップを開始するには、「バックアップ」を選択してから、「増分 (完全)」オプションを選択します。コマンド・ラインから **incremental** コマンドを使用して、バックアップに含めるファイル・システム、ディレクトリー・ツリー、または個々のファイルを指定します。

増分バックアップ中に、クライアントは、サーバーまたは ジャーナル・データベースに照会して、前回の増分バックアップ時点での ファイルの正確な状態を判別します。クライアントはこの情報を使用して、以下のタスクを実行します。

- 新規ファイルのバックアップをとる。
- 内容が最後のバックアップ以降に変更されたファイルをバックアップする。

以下のどの属性が変更されても、ファイルはバックアップされます。

- ファイル・サイズ
- 最後の修正日または時刻
- 拡張属性
- アクセス制御リスト

以下の属性のみが変更された場合、それらの属性は IBM Spectrum Protect サーバーで更新されますが、ファイルはバックアップされません。

- ファイル所有者
- ファイル許可
- i ノード
- グループ ID
- 変更時刻 (ctime) 属性 (GPFS ファイル・システムのためのオブジェクトの場合、および **updatectime** オプションが yes に設定される場合)。詳しくは、**updatectime** オプションを参照してください。
- アイコンのロケーション (Mac OS X のみ)
- タイプまたは作成者 (Mac OS X のみ)

- ディレクトリーをバックアップする。

ディレクトリーは、以下のどの状況でもバックアップされます。

- ディレクトリーがそれまでにバックアップされていなかった。
- 前回のバックアップ時からディレクトリーの許可が変更された。
- 前回のバックアップ時からディレクトリーのアクセス制御リストが変更された。
- 前回のバックアップ時からディレクトリーの拡張属性が変更された。
- 変更時刻 (ctime) 属性が、前回のバックアップ時から更新された (GPFS ファイル・システムの場合)。詳しくは、**updatectime** オプションを参照してください。

ディレクトリーは、バックアップされたオブジェクトの数にカウントされます。ディレクトリーおよびその内容をバックアップから除外する場合は、**exclude.dir** オプションを使用します。

- ワークステーション上に対応するファイルがないサーバー 上のファイルのバックアップ・バージョンを期限切れにする。その結果、ワークステーション上に存在しなくなったファイルには、サーバー上にアクティブ・バックアップ・バージョンがなくなります。ただし、非アクティブ・バージョンは、IBM Spectrum Protect の管理者が定義したルールに従って保存されます。

- ・管理クラス割り当てが変更されている場合にバックアップ・バージョンの再バインド。アクティブ・バックアップ・バージョンを持つオブジェクトのみが再バインドされます。非アクティブ・バックアップ・バージョンのみが存在するオブジェクトは再バインドされません。

部分的増分バックアップ操作中に、オブジェクトは以下のように再バインドされたり、または有効期限が切れます。

ファイル指定がパス内のすべてのファイルと一致する場合:

ファイル指定に一致するすべての適格バックアップ・バージョンで再バインドおよび有効期限切れが実施されます。これは `dsmc incr c:¥mydir¥ * -subdir=yes` などの増分コマンドの場合に実施されます。

ファイル指定がパス内のすべてのパスとは一致しない場合:

ファイル指定に一致するすべての適格バックアップ・バージョンで再バインドおよび有効期限切れが実施されます。ただし、適格バックアップ・バージョンが、クライアント・ファイル・システムに存在しなくなったディレクトリー内にあった場合、有効期限切れや再バインドが実施されません。

`dsmc incr c:¥mydir¥*.txt -subdir=yes` などの増分コマンドを使用したと考えます。 `c:¥mydir¥` の一部のファイルが `txt` ファイル・タイプではないと想定します。 `*.txt` 指定に一致して、クライアント・ファイル・システム上にそのディレクトリーが引き続き存在するファイルに対してのみ、再バインドと有効期限切れが実施されます。

`preservelastaccessdate` オプションを使用して、バックアップまたはアーカイブ操作後に最終アクセス日付を変更するかどうかを指定できます。デフォルトでは、バックアップまたはアーカイブ操作後にアクセス日が変更されます。

関連概念

[297 ページの『ストレージ管理ポリシー』](#)

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

関連資料

[416 ページの『Exclude オプション』](#)

`exclude` オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

[506 ページの『Preservelastaccessdate』](#)

`preservelastaccessdate` オプションを使用して、バックアップ操作またはアーカイブ操作により最終アクセス時刻が変更されるかどうかを指定します。

[590 ページの『Updatectime』](#)

`updatectime` オプションを使用して、増分バックアップ操作中の変更時刻 (`ctime`) 属性をチェックします。

AIX および Linux でのジャーナル・ベースのバックアップ

ジャーナル・ベースのバックアップとは、IBM Spectrum Protect ジャーナル・デーモン・プロセスによって維持される変更ジャーナルを使用する代替バックアップ・メソッドです。

AIX では、ジャーナル・ベースのバックアップは JFS および JFS2 ファイル・システムでサポートされます。

Linux では、ジャーナル・ベースのバックアップは、Ext2、Ext3、Ext4、XFS、ReiserFS、JFS、VxFS、および NSS でサポートされ、NFS により共有されるローカル・ファイル・システムでサポートされています。GPFS は、ジャーナル・ベースのバックアップではサポートされていません。

ジャーナル・ベースのバックアップをサポートするには、IBM Spectrum Protect ジャーナル・デーモンをインストールして構成する必要があります。

特定のファイル・システムのバックアップがジャーナル・ベースで行われるのは、ジャーナル・デーモンがインストールされ、特定のファイル・システムについてジャーナルするように構成してあって、そのファイル・システム用に有効なジャーナルが設定されている場合です。ジャーナル・ベースのバックアップは、フル増分バックアップが正常に完了すると有効になります。

従来の増分バックアップとジャーナル・ベースのバックアップの基本的な違いは、バックアップおよび期限切れの候補を選択するときの方法です。

従来の増分バックアップは、ローカル・オブジェクトの包括的リスト、およびバックアップされるファイル・システムのアクティブ・サーバー・オブジェクトのリストを作成することにより、バックアップおよび期限切れの候補のリストを取得します。ローカル・リストは、ローカル・ファイル・システム全体をスキャンして得られます。サーバー・リストは、すべてのアクティブ・オブジェクトのサーバー・インベントリー全体を照会して得られます。

この2つのリストが比較され、以下の基準に従って候補が選択されます。

- オブジェクトがローカル・リストに存在していれば、サーバー・リストに存在しない場合でも、そのオブジェクトはバックアップ候補として選択されます。両方のリストに存在するが、増分基準(属性変更や日付とサイズの変更など)に従って変更されているオブジェクトも、バックアップ候補です。
- サーバー・リストに存在しても、ローカル・リストに存在しないオブジェクトは、期限切れの候補として選択されます。

ジャーナル・ベースのバックアップでは、ジャーナル・デーモンに対して、バックアップされるファイル・システムの変更ジャーナルの内容を照会することによって、バックアップするオブジェクトおよび期限切れとするオブジェクトの候補リストを取得します。

変更ジャーナル項目は、バックアップ・クライアントによって処理され、IBM Spectrum Protect サーバーでコミットされると、クリア(「空き」とマーク)されます。

ジャーナル・ベースのバックアップは、バックアップ・サイクル間における変更アクティビティの量が少ないか中程度のファイル・システムをバックアップする場合に使用できます。バックアップ・サイクル間でファイル変更が多数行われた場合、変更ジャーナルの規模が非常に大きくなります。変更ジャーナルの規模が非常に大きい場合、メモリーとパフォーマンスの問題が生じ、ジャーナル・ベースのバックアップの利点が打ち消される可能性があります。例えば、非常に大きなディレクトリー・ツリーを作成、削除、名前変更、または移動した場合も、通常の増分バックアップの代わりにジャーナル・ベースのバックアップを使用する利点が打ち消される可能性があります。

ジャーナル・ベースのバックアップは、従来の増分バックアップをすべて置き換えることを目的としていません。ジャーナル・ベースのバックアップは、フル・プログレッシブ増分バックアップによって定期的に補足する必要があります。例えば、ジャーナル・ベースのバックアップを毎日行い、フル増分バックアップを毎週行う、などが考えられます。

以下に、ジャーナル・ベースのバックアップの制限をいくつか示します。

- ジャーナル・ベースのバックアップ中、個々のサーバー属性は使用できません。コピー頻度およびコピー・モードなどの特定のポリシー設定は実施されない場合があります。
- その他のプラットフォーム固有の動作により、オブジェクトの適正な処理が妨げられる場合があります。ファイル・システムのデフォルト動作を変更するその他のソフトウェアが原因で、ファイル・システムの変更が検出されない場合があります。
- ジャーナル・ベースのバックアップが進行中にファイル・システムが非常に活発に動作している場合、少数の削除済みファイルが期限切れにならない可能性があります。
- アクティブ・ジャーナルのあるファイル・システムにファイルをリストアすると、リストア以降にそれらのファイルが変更されていない場合でも、リストアされたファイルの一部が次のジャーナル・ベースのバックアップの実行時に再度バックアップされる場合があります。
- ジャーナル・ベースのバックアップの際は、545 ページの『[Skipaclupdatecheck](#)』 オプションは効果がありません。このオプションをどう設定してあっても、ファイル・システムのジャーナル・ベース・バックアップの実行時には、ファイルの ACL または拡張属性が前回のバックアップ以降に変更されていればクライアントは常にそのファイルをバックアップします。

フル増分バックアップを定期的に行い、それより頻繁にジャーナル・ベースのバックアップを行ってください。従来の増分バックアップは、ファイルのサーバー・インベントリー全体をローカル・ファイル・システム全体に照らして比較します。そのため、常に増分バックアップが最も包括的なバックアップ・メソッドです。

注: サーバー上のポリシー・ドメインまたはノードが変更されている場合に、ジャーナル・ベースのバックアップが従来の増分バックアップに戻ることができない場合があります。これは、ドメイン内のポリシ

ー・セットが更新された時刻および最後の増分バックアップ増分日付によって決まります。この場合、必ずフル増分バックアップを実行して、ファイルを新規ドメインに再バインドしなければなりません。デフォルトのジャーナル・ベース・バックアップの代わりに従来のフル増分バックアップを実行したいことを指定するには、`nojournal` オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用します。

ジャーナル・ベース・バックアップを使用したリストア処理 (AIX および Linux)

ジャーナル・サービスは、リストア操作の結果としてファイルに対して行われた変更を識別します。ファイルがリストアされてから変更されていない場合は、次のジャーナル・バックアップ時に再度バックアップされることはありません。必要なデータが含まれているファイルをリストアするという前提に基づいているため、次のジャーナル・バックアップが行われるときにそのファイルを再度バックアップしても意味がないからです。ファイルのリストア後に行われたリストア済みファイルへの変更は新しい変更として認識される必要があり、そのファイルは次のジャーナル・バックアップで処理されます。

特定のファイル・システムにアクティブなジャーナルが存在する場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントはファイルがまもなくリストアされる時にジャーナル・デーモンに通知します。ジャーナル・デーモンへの通知の後短時間内に行われたファイルへの変更は、ファイルのリストアの結果であると思なされます。このような変更は記録されず、ファイルは次のジャーナル・バックアップに含まれません。

ほとんどの場合、ジャーナル処理はファイルのリストアの結果として生成されたファイルの変更内容を正しく識別し、次のジャーナル・バックアップでそのファイルがバックアップされないようにします。

システム上のシステム遅延(入出力の集中またはファイル・システムの待ち時間のどちらで生じたかにかかわらず)によって、リストアがまもなく行われることが通知された時点でジャーナル・デーモンが割り当てた時間フレーム内にリストア操作が開始しない場合があります。このような遅延が生じた場合、ファイルへの変更はファイルのリストア後に行われた新しい変更であると思なされます。このような変更は記録され、ファイルは次のジャーナル・バックアップに含まれます。システム上の処理遅延やファイル・システムの待ち時間などは、バックアップ/アーカイブ・クライアントによる制御範囲を超えており、単にジャーナル・ベース・バックアップの制限と認識されます。

日付による増分バックアップ

日付による増分バックアップの対象のファイル・システムに対しては、少なくともそのファイル・システムのフル増分バックアップを一度は行っておく必要があります。ディレクトリー分岐または個別のファイルのみに増分バックアップを行っても、ファイル・システムは日付による増分バックアップの対象にはなりません。

クライアントがバックアップするファイルは、バックアップ対象ファイルが存在するファイル・システムを、最終的に増分バックアップした日時より後の変更日時を持ったファイルに限定されます。最終増分バックアップ後にクライアントが追加したファイルでも、最終増分バックアップより前の変更日付が付いたファイルは、バックアップされません。

最終増分バックアップ以降に名前は変更されたが、その他は変更されていないファイルは、バックアップされません。ファイル名を変更しても、そのファイルの変更日時は変更されないからです。ただし、ファイル名を変更すると、そのファイルが保存されているディレクトリーの修正日付は変更されます。この場合、ディレクトリーはバックアップされますが、そこに含まれるファイルはバックアップされません。

日付による増分バックアップをファイル・システム全体に対して行う場合、サーバーは最後の増分バックアップの日時を更新します。日付による増分バックアップをファイル・システムの一部に対してのみ行う場合、サーバーは、最後のフル増分バックアップの日付は更新しません。この場合は、次の日付による増分バックアップで、再度これらのファイルのバックアップが取られます。

注: 増分バックアップとは異なり、日付による増分バックアップでは、管理クラスを変更しても、削除済みファイルが無効になったりバックアップ・バージョンが新規管理クラスに再バインドされたりすることはありません。

関連タスク

[184 ページの『Java GUI を使用したデータのバックアップ』](#)

ディレクトリー・ツリーから特定のファイル、ディレクトリー全体、またはファイル・システム全体のバックアップを行うことができます。

日付による増分、ジャーナル・ベース、および NetApp スナップショット差分とフル増分および部分増分のバックアップの比較

日付による増分、ジャーナル・ベース、および NetApp スナップショット差分は、フル増分および部分増分のバックアップ方式の代替です。

日付による増分バックアップ

日付による増分バックアップの方がフル増分バックアップよりも、処理に要する時間は短く、必要なメモリーも少なくてすみます。

日付による増分バックアップは、以下の理由により、正確に同じバックアップ・ファイルをサーバー・ストレージに入れられない可能性があります。

- 日付による増分バックアップは、ワークステーションから削除するファイルのバックアップ・バージョンを期限切れにしない。
- 管理クラスを変更した場合、日付による増分バックアップは、新規管理クラスへバックアップ・バージョンを再バインドしない。
- 日付による増分バックアップは、修正日時も変更されているのでなければ、属性が変更されていてもそのファイルのバックアップを取らない。
- 日付による増分バックアップは、管理クラスのコピー・グループ頻度属性を無視する (ジャーナル・ベース・バックアップもこの属性を無視する)。

ジャーナル・ベースのバックアップ

初期ジャーナル処理環境のメモリー所要量は完全ファイル・スペース増分のメモリー所要量と同じです。ジャーナル・ベースのバックアップは、ジャーナル・データベースを有効なものとして設定し、ジャーナル処理のベースラインを設定するために、完全ファイル・スペース増分を完了する必要があるためです。

後続のジャーナル・ベースのバックアップのメモリー所要量は、それよりも少なくなります。ジャーナル・バックアップ・セッションは、並行して実行され、通常のバックアップ・セッションと同じ方法で `resourceutilization` オプションによって管理されます。ジャーナル・データベース・ファイルのサイズは、最後の項目がジャーナルから削除されると、最小サイズ (1 KB 未満) に戻されます。項目はクライアントによって処理されるとジャーナルから削除されるため、完全ジャーナル・バックアップの完了後にジャーナルが占有するディスク・サイズはわずかなものになります。ジャーナル処理がアクティブ状態のフル増分バックアップの方が、日付による増分バックアップよりも、処理に時間がかかりません。

AIX および Linux では、ジャーナル・ベースのバックアップにいくつかの制限があります。詳しくは、177 ページの『[AIX および Linux でのジャーナル・ベースのバックアップ](#)』を参照してください。

NetApp スナップショット差分

NAS および N シリーズのファイル・サーバーで ONTAP 7.3.0 以降を実行している場合、`snapdiff` オプションを使用して、フル・ボリューム増分バックアップの実行時に NetApp からスナップショット差分バックアップを呼び出すことができます。このオプションを使用すると、メモリー使用量を削減して、処理速度をアップできます。

データのバックアップが必要なときにそのバックアップが確実に行われるように、`snapdiff` オプションを使用してフル・ボリューム増分バックアップを実行しているときは、以下の制限について考慮してください。

- ファイルは、`include-exclude` ファイルの除外規則により除外されます。クライアントは、その除外規則が有効な状態で現行スナップショットをバックアップします。この状況は、ファイルを変更していなくても、そのファイルを除外する規則を削除した場合に発生します。NetApp は、2 つのスナップショット間のファイル変更だけを検出するので、この `include-exclude` 変更は削除しません。

- **include** ステートメントをオプション・ファイルに追加した場合は、そのファイルが変更されたことを NetApp が検出した場合を除いて、その **include** ステートメントの効果はありません。クライアントは、バックアップ時にボリューム上のすべてのファイルを検査するわけではありません。
- **dsmdc delete backup** コマンドを使用してファイルを明示的に IBM Spectrum Protect インベントリーから削除した場合、NetApp は、ファイルが IBM Spectrum Protect ストレージから手動で削除されたことを検出できません。したがって、そのファイルがボリューム上で変更されて、その変更が NetApp によって検出され、クライアントにもう一度バックアップするよう指示が出るまでは、IBM Spectrum Protect のストレージではそのファイルは無保護状態のままです。
- コピー・モードの **modified** から **absolute** への変更などのポリシー変更は検出されません。
- IBM Spectrum Protect インベントリーからファイル・スペース全体が削除されます。このアクションの結果、**snappdiff** オプションによって新しいスナップショットが作成され、これをソースとして使用して、フル増分バックアップが実行されます。
- スナップショット差分バックアップ操作は、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments 環境ではサポートされません。Data Protection for VMware または Data Protection for Microsoft Hyper-V データ・ムーバーもインストールされているホスト上の NetApp ファイラーにあるファイル・システムのスナップショット差分バックアップ操作を実行することはできません。

IBM Spectrum Protect ではなく、NetApp ソフトウェアが、何が変更済みオブジェクトかを判別します。

NFS マウントされた NetApp あるいは N シリーズ・ボリュームのフル・ボリューム・バックアップを実行すると、スナップショット・ディレクトリーの下にあるすべてのスナップショットもバックアップされる可能性があります。

スナップショット・ディレクトリーの下にあるすべてのスナップショットのバックアップが行われたいようにするには、以下のいずれかのアクションを行います。

- NDMP バックアップを実行する
- **snapshotroot** オプションを使用してバックアップを実行する
- **snappdiff** オプションを使用して増分バックアップを実行する

ヒント: **snappdiff** オプションを使用して増分バックアップを実行し、定期的な増分バックアップをスケジュールに入れた場合は、**createnewbase=yes** オプションを **snappdiff** オプションと一緒に使用して基本スナップショットを作成し、それをソースとして使用して増分バックアップを実行してください。

- スナップショット・ディレクトリーをバックアップから除外する

Linux システムの場合、スナップショット・ディレクトリーは **.snapshot** にあります。

注: **.snapshot** ディレクトリーは、Red Hat Linux のいくつかのバージョンではバックアップされないため、除外する必要はありません。

HTTPS 接続によるスナップショット差分バックアップ

スナップショット差分バックアップ時にバックアップ/アーカイブ・クライアントが NetApp ファイラーと通信するために、セキュア HTTPS 接続を使用することができます。

HTTPS プロトコルは NetApp ファイラーでデフォルトで使用可能になっており、使用不可にすることはできません。

スナップショット差分バックアップを実行する際に、バックアップ/アーカイブ・クライアントは NetApp ファイラーとの管理セッションを確立します。ファイラーの資格情報(ファイラーのホスト名または IP アドレス、ファイラーとの接続に使用されるユーザー名、ファイラーのパスワードなど)は、バックアップ/アーカイブ・クライアントにローカルで保管されます。認証された管理セッションを確立するには、この情報がファイラーに伝送される必要があります。ファイラーの管理セッションの認証ではクライアントが平文でファイラーのパスワードを伝送する必要があるため、セキュア接続を使用することが重要です。

HTTPS 通信プロトコルを使用してセキュア接続を確立するには、スナップショット差分バックアップを実行するたびに **snappdiffhttps** オプションを使用する必要があります。 **snappdiffhttps** オプションを使用しない場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントは HTTP プロトコルを使用するファイラー・セ

セッションのみを確立できます。この場合、ファイラーで HTTP 管理アクセスを有効にする必要が生じます。**snappdiffhttps** オプションを使用すると、NetApp ファイラーで HTTP 管理アクセスが有効になっているかどうかに関係なく、NetApp ファイラーとのセキュアな管理セッションを確立できます。

制約事項:

HTTPS を使用したスナップショット差分バックアップには、以下の制約事項が適用されます。

- HTTPS 接続は、バックアップ/アーカイブ・クライアントと NetApp ファイラーの間の管理セッションでデータを安全に送信するためにのみ使用されます。管理セッション・データには、ファイラー資格情報、スナップショット情報、スナップショット差分処理によって生成されるファイルの名前および属性などがあります。HTTPS 接続は、クライアントがファイル共有を介してアクセスするファイラー上の通常のファイル・データの送信には使用されません。HTTPS 接続は、クライアントが標準の IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー・プロトコルを使用して IBM Spectrum Protect サーバーに送信する通常のファイル・データにも適用されません。
- HTTPS プロトコルは NetApp vFiler 上でサポートされていないので、**snappdiffhttps** オプションは vFiler に適用されません。
- **snappdiffhttps** オプションは、コマンド・ライン・インターフェースでのみ有効です。バックアップ・アーカイブ・クライアント GUI では使用できません。

関連タスク

スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成

バックアップ/アーカイブ・クライアントでスナップショット差分増分バックアップ・コマンドを実行するには、NetApp ファイル・サーバー接続情報を構成する必要があります。また、**set password** コマンドを使用して、ファイル・サーバーのホスト名、およびファイル・サーバーにアクセスするために使用されるユーザー名とパスワードを指定する必要もあります。

HTTPS 接続を使用したスナップショット差分バックアップの実行

スナップショット差分バックアップを実行する場合、**snappdiffhttps** オプションを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントと NetApp ファイラーの間にセキュア HTTPS 接続を作成することができます。

関連資料

Snapdiffhttps

snappdiffhttps オプションは、スナップショット差分バックアップ時の NetApp ファイラーとの通信にセキュア HTTPS 接続を使用する場合に指定します。

Snapdiff

snappdiff (スナップショット差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

HTTPS 接続を使用したスナップショット差分バックアップの実行

スナップショット差分バックアップを実行する場合、**snappdiffhttps** オプションを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントと NetApp ファイラーの間にセキュア HTTPS 接続を作成することができます。

始める前に

HTTPS 接続を介したスナップショット差分バックアップを開始する前に、116 ページの『スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成』の説明に従ってクライアントを構成していることを確認してください。

この方法はコマンド・ライン・インターフェースでのみ使用できます。

手順

HTTPS 接続を介したスナップショット差分バックアップ操作を開始するには、コマンド・ライン・インターフェースで **snapdiff** および **snapdiffhttps** オプションを含めた **incremental** コマンドを指定します。

例えば、Linux システムを使用していて、NFS マウント・ファイル・システム `/vol/vol1` がファイル・サーバー `homestore.example.com` でホストされているとします。`/net/home1` ディレクトリーが `/vol/vol1` のマウント・ポイントです。次のコマンドを出します。

```
dsmc incr /net/home1 -snapdiff -snapdiffhttps
```

関連概念

[181 ページの『HTTPS 接続によるスナップショット差分バックアップ』](#)

スナップショット差分バックアップ時にバックアップ/アーカイブ・クライアントが NetApp ファイラーと通信するために、セキュア HTTPS 接続を使用することができます。

関連資料

[553 ページの『Snapdiffhttps』](#)

snapdiffhttps オプションは、スナップショット差分バックアップ時の NetApp ファイラーとの通信にセキュア HTTPS 接続を使用する場合に指定します。

選択バックアップ

特定ファイルの現行コピーがサーバー上に存在するかどうかにかかわらず、それらのファイルまたはディレクトリーをバックアップしたいときは、選択バックアップを使用します。

増分バックアップは通常、ファイル・システム全体をバックアップする自動化システムの一部です。それと比べて、選択バックアップでは、ファイルが最後の増分バックアップ以降変更されたかどうかにかかわらず、バックアップするファイル・セットを手動で選択することができます。

増分バックアップと違って、選択バックアップは以下のようになります。

- 選択バックアップの実施が原因で、サーバーが最終増分日時を更新することにはならない。
- サイズ、修正タイム・スタンプ、またはアクセス権が変更されていない場合も、ディレクトリー項目およびファイル項目をバックアップする。
- 削除済みのファイルを無効にしない。
- 管理クラスを変更した場合、日付による増分バックアップは、新規管理クラスへバックアップ・バージョンを再バインドしない。

関連タスク

[184 ページの『Java GUI を使用したデータのバックアップ』](#)

ディレクトリー・ツリーから特定のファイル、ディレクトリー全体、またはファイル・システム全体のバックアップを行うことができます。

関連資料

[764 ページの『Selective』](#)

selective コマンドは、指定されているファイルをバックアップします。これらのファイルを損傷した場合や配置場所を忘れた場合には、サーバーからのバックアップ・バージョンで置き換えることができます。

Solaris グローバル・ゾーン・バックアップおよび非グローバル・ゾーン・バックアップ

Solaris グローバル・ゾーンでは、ファイル・システムが作成されたゾーン内の、ファイル・システムの増分バックアップと選択バックアップを実行します。

各非グローバル・ゾーンは、その独自の IBM Spectrum Protect ノード名を持つ個別のシステムとして処理し、それぞれのゾーン内からバックアップを実行します。

グローバル・ゾーンから非グローバル・ゾーンの増分バックアップまたは選択バックアップを実行する場合、グローバル・ゾーン管理者は、非グローバル・ゾーン内のどのファイルをバックアップに含有または

除外するかを決定する必要があります。例えば、非グローバル・ゾーンのデバイス、システム、カーネル・ファイルは、バックアップから自動的に除外されませんが、これらはバックアップしてはなりません。これらのファイルをリストアすると、非グローバル・ゾーンが使用できなくなる可能性があります。

アクセス許可の保管

ファイルをバックアップすると、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ファイルに割り当てられている標準 UNIX アクセス許可も保存します。

オペレーティング・システムによっては、拡張許可も保存します。例えば、AIX ワークステーション上のファイルの場合、クライアントはアクセス制御リストを保存します。

許可ユーザーが他のユーザーのファイルのバックアップを取ることはできますが、これによって所有権の矛盾が起きないようにしなければなりません。バックアップ・サーバーは、ファイルが元の所有者に属することを正しく記録します。許可ユーザーは、元の所有者に対してバックアップ・バージョンへのアクセスを認可する必要はありません。

仮想マウント・ポイントの設定

許可ユーザーで、ファイル・システム内の特定ディレクトリーで開始するファイルをバックアップしたい場合は、仮想マウント・ポイントとしてそのディレクトリーを定義することができます。

ファイル・システム内部に仮想マウント・ポイントを定義することで、バックアップ対象のファイルへの直接パスが得られるため、処理時間を節約することができます。この方式は、`domain` オプションでファイル・システムを定義してから、`exclude` オプションを使用して、バックアップしたくないファイルを除外する方式よりも効率的です。また、これにより、別のストレージ・ファイル・スペース内の特定ディレクトリーにバックアップおよびアーカイブを保存することができます。

関連資料

595 ページの『[Virtualmountpoint](#)』

`virtualmountpoint` オプションは、あるファイル・システム内の特定のディレクトリーから始まるファイルをバックアップ処理対象にしたい場合に、そのファイル・システムに仮想マウント・ポイントを定義します。

Java GUI を使用したデータのバックアップ

ディレクトリー・ツリーから特定のファイル、ディレクトリー全体、またはファイル・システム全体のバックアップを行うことができます。

このタスクについて

検索およびフィルター操作によって、バックアップしたいファイルを見つけることができます。フィルター操作では、バックアップ用のフィルター基準に適合するファイルのみが表示されます。

バックアップ/アーカイブ・クライアント Java GUI を使用して、次のようにデータをバックアップします。

手順

1. 「IBM Spectrum Protect」ウィンドウの「バックアップ」をクリックします。「バックアップ」ウィンドウが表示されます。
2. 必要ならディレクトリー・ツリーを展開します。バックアップしたいオブジェクトの前の選択ボックスをクリックします。ファイルを検索あるいはフィルター操作するには、ツールバーの「検索」アイコンをクリックします。
3. 「ファイルの検索 (バックアップ)」ウィンドウで検索基準を入力する。
4. 「検索」ボタンをクリックする。「マッチング・ファイル (バックアップ)」ウィンドウが表示されます。
5. バックアップしたいファイルの隣の選択ボックスをクリックして、「マッチング・ファイル (バックアップ)」ウィンドウをクローズする。
6. 「ファイルの検出 (バックアップ)」ウィンドウでフィルター基準を入力する。

7. 「フィルター」 ボタンをクリックする。「バックアップ」 ウィンドウに、フィルター 操作済みファイルが表示されます。
8. バックアップするフィルター 操作済みファイルまたはディレクトリーの 前の選択ボックスを クリックする。
9. プルダウン・メニューから次のバックアップ・タイプの 1 つを選択する。(1) 増分バックアップを実行する場合は、「増分 (完全)」をクリックする。(2) 日付による増分バックアップを実行する場合は、「増分 (日付のみ)」をクリックする。(3) 選択バックアップを実行する場合は、「常時バックアップ」をクリックする。
10. 「バックアップ」をクリックします。バックアップの「タスク・リスト」ウィンドウにバックアップ処理の状況が表示されます。

タスクの結果

Java GUI を使用してデータをバックアップするときは、以下の項目を考慮してください。

- 特定のバックアップ・オプションを変更するには、「オプション」ボタンをクリックします。選択したオプションが有効なのは現行セッションの間だけです。
- IBM Spectrum Protect は、管理クラスを使用して、サーバー上のバックアップを管理する方法を決めます。ファイルをバックアップするごとにそのファイルに管理クラスが割り当てられます。使用される管理クラスは、自動的に選択されるデフォルトか、または include-exclude オプション・リスト内で **include** オプションを使用してユーザーがファイルに割り当てたものです。バックアップ/アーカイブ・クライアント Java GUI または Web クライアントの GUI から「ユーティリティー」→「ポリシー情報の表示」を選択すると、クライアント・ノードの IBM Spectrum Protect サーバーで定義されているバックアップ・ポリシーが表示されます。
- デフォルト・ドメインの自動増分バックアップを行うには、「アクション」→「ドメインのバックアップ」を選択します。ユーザーのデフォルト・ドメインは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) の **domain** オプションで設定されます。ユーザーが **domain** オプション・セットを保持していない場合、省略時のドメインは、すべてのローカル・ファイル・システムになります。
- プリファレンス・エディターを使用して、デフォルト・ドメイン内のファイル・システムをバックアップ処理から除外できます。

関連概念

297 ページの『ストレージ管理ポリシー』

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

関連資料

388 ページの『Domain』

domain オプションは、増分バックアップに何を組み込むかを指定します。

コマンド・ラインを使用したデータのバックアップ

incremental あるいは **selective** コマンドを使用してバックアップを取ることができます。

以下の表は、これらのコマンドを使用して各種タスクを実行する例を示しています。

表 35. コマンド・ライン・バックアップの例

タスク	コマンド	考慮事項
増分バックアップ		
クライアント・ドメインの増分バックアップの実行。	<code>dsmc incremental</code>	incremental オプションについて 詳しくは、689 ページの『Incremental』を参照してください。

表 35. コマンド・ライン・バックアップの例 (続き)

タスク	コマンド	考慮事項
クライアント・ドメイン内に定義された /home、/usr、および /datasave ファイル・システムに加えて、/fs1 および /fs2 ファイル・システムをバックアップ。	dsmc incremental -domain="/fs1 /fs2"	domain オプションについて 詳しくは、 388 ページの『Domain』 を参照してください。
クライアント・ドメインで定義されたボリュームに加えて、/Volumes/fs1 および /Volumes/fs2 ファイル・システムをバックアップ。	dsmc incremental -domain="/Volumes/fs1 /Volumes/fs2"	domain オプションについて 詳しくは、 388 ページの『Domain』 を参照してください。
/home ファイル・システム以外の、クライアント・ドメイン内に定義されているすべてのファイル・システムをバックアップ。	dsmc incremental -domain="all-local" -/home"	ドメイン・キーワード all-local の前に (-) 演算子を使用することはできません。詳しくは、 388 ページの『Domain』 を参照してください。Windows クライアントの場合は、この方法でバックアップ処理から systemstate ドメインを除外することもできます。
/fs1 および /fs2 ファイル・システムのみをバックアップ。	dsmc incremental /fs1 /fs2	None
/home ディレクトリーおよびそのすべてのサブディレクトリー内のすべてのファイルをバックアップ。	dsmc incremental /home/ -subdir=yes	subdir オプションについて 詳しくは、 569 ページの『Subdir』 を参照してください。
/Users ディレクトリーおよびそのすべてのサブディレクトリー内のすべてのファイルをバックアップ。	dsmc incremental /Users/ -subdir=yes	subdir オプションについて 詳しくは、 569 ページの『Subdir』 を参照してください。
/usr ファイル・システムのスナップショットを開始し、そのスナップショットを /snapshot/day1 としてマウントしたと想定し、ローカル・スナップショットの下ですべてのファイルとディレクトリーの増分バックアップを実行し、それを IBM Spectrum Protect サーバー上でファイル・スペース名 /usr の下で管理します。	dsmc incremental /usr -snapshotroot=/snapshot/day1	バックアップ/アーカイブ・クライアントは、snapshotroot 値を、ファイル・スペース名と見なします。詳しくは、 557 ページの『Snapshotroot』 を参照してください。
日付による増分バックアップ		

表 35. コマンド・ライン・バックアップの例 (続き)

タスク	コマンド	考慮事項
デフォルトのクライアント・ドメインの日付による増分バックアップの実行。	<code>dsmc incremental -incrbydate</code>	<code>incrbydate</code> オプションは、修正日がサーバーで保管された最終増分バックアップより後の新規および変更済みファイルをバックアップするために incremental コマンドで使用されます。 <code>incrbydate</code> オプションの詳細については、 465 ページの『Incrbydate』 を参照してください。
選択バックアップ		
<code>/home/proj</code> または <code>/Users/van/Documents</code> ディレクトリーおよびそのすべてのサブディレクトリー内のすべてのファイルをバックアップ。	<code>dsmc selective /home/proj/ または dsmc selective /Users/van/Documents/</code>	selective コマンドを使用すると、ファイルが最後の増分バックアップ以降変更されたかどうかにかかわらず、特定のファイルまたはディレクトリーをバックアップできます。ワイルドカードを使用して、同時に複数のファイルをバックアップすることができます。 selective オプションについて 詳しくは、 764 ページの『Selective』 を参照してください。
<code>/home/proj</code> ディレクトリーおよびそのすべてのサブディレクトリー内のすべてのファイルをバックアップ。	<code>dsmc selective /home/proj/ -subdir=yes</code>	特定のパスおよびファイルのバックアップ時に <code>-subdir=yes</code> を指定すると、クライアントはそのパスの下にあるすべてのサブディレクトリーおよびそのサブディレクトリーにある任意のサブディレクトリーに存在する指定されたファイルのインスタンスを、再帰的にバックアップします。 サブディレクトリーがマウント済みファイル・システムであれば、 <code>subdir=yes</code> オプションを使用してもクライアントはファイルをバックアップしません。 <code>subdir</code> オプションについて 詳しくは、 569 ページの『Subdir』 を参照してください。
<code>/Users/van/Documents</code> ディレクトリーおよびそのすべてのサブディレクトリー内のすべてのファイルをバックアップ。	<code>dsmc selective /Users/van/Documents/ -subdir=yes</code>	特定のパスおよびファイルのバックアップ時に <code>-subdir=yes</code> を指定すると、クライアントはそのパスの下にあるすべてのサブディレクトリーおよびそのサブディレクトリーにある任意のサブディレクトリーに存在する指定されたファイルのインスタンスを、再帰的にバックアップします。 サブディレクトリーがマウント済みファイル・システムであれば、 <code>subdir=yes</code> オプションを使用してもクライアントはファイルをバックアップしません。 <code>subdir</code> オプションについて 詳しくは、 569 ページの『Subdir』 を参照してください。

表 35. コマンド・ライン・バックアップの例 (続き)

タスク	コマンド	考慮事項
/home/dir1/h1.doc および /home/dir1/test.doc ファイルをバックアップ。	dsmc selective /home/dir1/h1.doc /home/dir1/test.doc	incremental または selective コマンドに removeoperandlimit オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。これにより、1 つのコマンドで 20 を超えるファイルを指定できるようになります。このオプションについて詳しくは、515 ページの『 Removeoperandlimit 』を参照してください。
/Users/ann/Documents/h1.doc および /Users/ann/Documents/test.doc ファイルをバックアップ。	dsmc selective /Users/ann/Documents/h1.doc /Users/ann/Documents/test.doc	incremental または selective コマンドに removeoperandlimit オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。これにより、1 つのコマンドで 20 を超えるファイルを指定できるようになります。このオプションについて詳しくは、515 ページの『 Removeoperandlimit 』を参照してください。
/home/filelist.txt ファイル内のファイルのリストをバックアップ。	selective -filelist=/home/filelist.txt	filelist オプションを使用して、ファイルのリストを処理します。詳しくは、429 ページの『 Filelist 』を参照してください。
/Users/filelist.txt ファイルにリストされたファイルをすべてバックアップ。	dsmc selective -filelist=/Users/filelist.txt	filelist オプションを使用して、ファイルのリストを処理します。詳しくは、429 ページの『 Filelist 』を参照してください。
/usr ファイル・システムのスナップショットを開始し、そのスナップショットを /snapshot/day1 としてマウントしたと想定し、/usr/dir1/sub1 ディレクトリー・ツリーをローカル・スナップショットから選択バックアップし、それを IBM Spectrum Protect サーバー上でファイル・スペース名 /usr の下で管理します。	dsmc selective /usr/dir1/sub1/-subdir=yes -snapshotroot=/snapshot/day1	クライアントは、 snapshotroot 値を、ファイル・スペース名と見なします。詳しくは、557 ページの『 Snapshotroot 』を参照してください。

関連資料689 ページの『[Incremental](#)』**incremental** コマンドは、バックアップ・サービスから除外されていないすべての新規または変更されたデータを指定されたロケーションにバックアップします。764 ページの『[Selective](#)』

selective コマンドは、指定されているファイルをバックアップします。これらのファイルを損傷した場合や配置場所を忘れた場合には、サーバーからのバックアップ・バージョンで置き換えることができます。

バックアップ・データの削除

管理者から権限を付与されている場合、ファイル・スペース全体を削除せずに、個々のバックアップ・コピーを IBM Spectrum Protect サーバーから削除することができます。この権限を所有しているかどうかを確認するには、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI または Web クライアントのメインメニューから、「ファイル」>「接続情報」を選択します。権限状況が、「バックアップ・ファイルの削除」フィールドに表示されます。

このタスクについて

重要: バックアップ・ファイルを削除すると、そのファイルをリストアできません。削除する前に、バックアップ・ファイルが不要であることを確認してください。クライアントは、削除を継続するかどうかのプロンプトを出します。yes を指定すると、指定したバックアップ・ファイルが IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージから即時に削除および除去されます。

手順

バックアップ・コピーをバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI または Web クライアントを使用して削除する場合は、以下のようになります。

1. メニューから「ユーティリティー」>「バックアップ・データの削除」を選択します。「バックアップ削除」ウィンドウが表示されます。
2. 展開したいオブジェクトの隣の (+) 符号または「フォルダー」アイコンをクリックして、ディレクトリー・ツリーを展開する。
3. 削除したいオブジェクトの隣の選択ボックスをクリックする。
4. 「バックアップ削除」ウィンドウの上部近くのドロップダウン・リストから項目を選択し、実行するバックアップ削除のタイプを指定する。アクティブ・バックアップ・バージョン、非アクティブ・バックアップ・バージョン、またはツリーで選択したすべてのオブジェクトを削除できます。
5. 「削除」をクリックして、選択した項目の削除を開始します。

タスクの結果

注:

- 「アクティブ・オブジェクトの削除 (Delete Active Objects)」または「非アクティブ・オブジェクトの削除 (Delete Inactive Objects)」を指定した場合は、ファイルのみが削除対象として見なされます。
- 「アクティブ・オブジェクトの削除 (Delete Active Objects)」または「非アクティブ・オブジェクトの削除 (Delete Inactive Objects)」を指定し、削除対象のファイルが含まれていないディレクトリーを選択した場合、バックアップ削除操作中に次のメッセージが表示されます。

```
ANS5030E No objects on server match query.
```

最後の非アクティブな親ディレクトリーは、サーバーの保存ポリシー設定に基づいて削除されます。

- ディレクトリーが削除されるのは、「すべてのオブジェクトの削除」を選択した場合だけです。
- ファイル・スペースを削除するには、メインウィンドウから「ユーティリティー」>「ファイル・スペースの削除」をクリックします。
- コマンド・ライン・クライアントを使用してバックアップ・コピーを削除するには、**delete backup** コマンドを使用します。

関連資料

680 ページの『Delete Backup』

delete backup コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージにバックアップされたファイル、イメージ、および仮想マシンを削除します。オブジェクトを削除するには、その権限を管理者から得る必要があります。

ファイル・スペースの削除

IBM Spectrum Protect 管理者がユーザーの権限を認可すると、このユーザーは、所有しているファイル・スペース全体をサーバーから削除することができます。ファイル・スペースを削除すると、そのファイル・スペース内に入っているすべてのファイルとイメージ、バックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの両方が削除されます。例えば、/tmp ファイル・スペースを削除すると、そのファイル・システム内の各ファイルのバックアップ、およびそのファイル・システムからアーカイブした各ファイルを削除することになります。本当にファイル・スペースを削除したいかどうか、よく検討してください。

このタスクについて

ファイル・スペースは、**delete filesystem** コマンドを使用して削除することもできます。class オプションを **delete filesystem** コマンドで使用して NAS ファイル・スペースを削除します。

delete backup コマンドを使用して、個々のバックアップ・バージョンを削除することができます。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI またはコマンド・ライン・クライアントを使用して、ファイル・スペースを削除することができます。NAS ファイル・スペースを削除するには、Web クライアントまたはコマンド・ライン・クライアントを使用します。

GUI を使用してファイル・スペースを削除するには、以下のステップを実行します。

手順

1. メイン・ウィンドウから「ユーティリティー」>「ファイル・スペースの削除」を選択します。
2. 削除したいファイル・スペースの隣の選択ボックスをクリックする。
3. 「削除」ボタンをクリックします。クライアントは、ファイル・スペースを削除する前に確認のプロンプトが出します。

関連資料

[358 ページの『Class』](#)

class オプションは、**delete filesystem**、**query backup**、および **query filesystem** コマンドを使用する時に、NAS オブジェクトまたはクライアント・オブジェクトのリストを表示するかどうかを指定します。

[680 ページの『Delete Backup』](#)

delete backup コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージにバックアップされたファイル、イメージ、および仮想マシンを削除します。オブジェクトを削除するには、その権限を管理者から得る必要があります。

[684 ページの『Delete Filespace』](#)

delete filesystem コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージ内のファイル・スペースを削除します。ファイル・スペースは、ユーザーがバックアップまたはアーカイブしたファイルを含むサーバー上の論理スペースです。

グループ・バックアップのための 1 つ以上のファイル・スペースからのファイルのバックアップ (UNIX および Linux)

backup group コマンドを使用して、1 つ以上のファイル・スペース起点から IBM Spectrum Protect サーバー上の仮想ファイル・スペースに、ファイルのリストを含むグループを作成してバックアップすることができます。

制約事項: **backup group** コマンドは Mac OS X には適用されません。

group backup を使用すると、複数のファイルを 1 つのグループにまとめて特定時点バックアップを作成し、これを 1 つの論理エンティティとして管理できます。

- グループ内のすべてのオブジェクトは、同じ管理クラスに割り当てられます。
- グループ内のファイルに対する既存の *exclude* ステートメントは、すべて無視されます。
- グループ内のすべてのオブジェクトは、まとめてエクスポートされます。
- グループ内のすべてのオブジェクトは、管理クラス内の指定に基づいてまとめて期限切れになります。
グループ内のオブジェクトは、オブジェクトが属する別のグループが期限切れになっても、グループ内のすべてのオブジェクトが期限切れにならない限り期限切れになりません。

グループ・バックアップは、バックアップ・セットに追加できます。

mode オプションを使用すると、完全または差分バックアップを実行できます。

例えば、/home/dir1/filelist1 ファイル内に指定されているすべてのファイルのフルバックアップを実行して、グループ・リーダーである /home/group1 ファイルが含まれている仮想ファイル・スペース /virtfs に格納するには、以下のように入力します。

```
dsmc backup group -filelist=/home/dir1/filelist1 -groupname=group1 -virtualfsname=
/virtfs -mode=full
```

関連概念

[240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』](#)

IBM Spectrum Protect 管理者は、バックアップ・セット (サーバー上にあるファイルのコレクション) を、クライアント装置と互換性のあるフォーマットを使用して、装置上に作成されたポータブル・メディア上に生成することができます。

関連資料

[661 ページの『Backup Group』](#)

backup group コマンドを使用して、1 つ以上のファイル・スペース・オリジンからのファイルのリストを含むグループを IBM Spectrum Protect サーバー上の仮想ファイル・スペースに作成してバックアップします。

[447 ページの『include オプション』](#)

include オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

[482 ページの『mode』](#)

mode オプションを使用して、特定のバックアップ操作の実行時にバックアップ・モードを指定します。

クライアント・ノード・プロキシ・サポートによるバックアップ (UNIX および Linux)

ストレージを共有する複数ノードのバックアップは、IBM Spectrum Protect サーバー上の共通のターゲット・ノード名に統合することができます。

このタスクについて

クラスター内のように、バックアップの実行に責任があるワークステーションが、時間がたつと変わる可能性がある構成では、複数のノードからのバックアップをサーバー上の共通ターゲット・ノード名に統合すると便利です。

エージェント・ノードは、ターゲット・ノードの代わりにクライアント操作を実行する権限が付与されたクライアント・ノードです。

ターゲット・ノードは、自分の代わりにクライアント操作を実行する権限を 1 つ以上のエージェント・ノードに付与するクライアント・ノードです。

適切なコマンドと共に **asnodename** オプションを使用して、サーバー上のターゲット・ノード名の下で、データのバックアップ、アーカイブ、リストア、およびリトリブを実行します。

asnodename オプションを指定すると、バックアップを実行したシステムとは異なるシステムから、データをリストアすることもできます。

プロキシ・ノードを使用して他のノード上のデータをバックアップまたはリストアする場合、以下の機能を検討してください。

- プロキシ操作は、IBM Spectrum Protect サーバーで定義されているターゲット・ノードの設定 (**maxnummp** および **deduplication** など) とスケジュールを使用します。エージェント・ノードの IBM Spectrum Protect サーバー・ノードの設定およびスケジュールは無視されます。
- 複数ノード環境内のすべてのエージェント・ノードは、同じオペレーティング・システム・タイプで稼働している必要があります。
- ファイルを暗号化してからサーバーにバックアップする場合は特に、ターゲット・ノードを従来のノードとして使用しないでください。
- (GUI ドロップダウンから、または **fromnode** オプションを使用して) 別のノードにアクセスすることはできません。
- NAS バックアップまたはリストアを実行することはできません。

手順

1. 共有データ環境のすべてのノードに、バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールします。
2. 各ノードを IBM Spectrum Protect サーバーに登録します。共有データ環境で使用される各エージェント・ノードが共有する共通のターゲット・ノード名に登録します。
3. 共有データ環境内の各ノードを IBM Spectrum Protect サーバーに登録します。認証のために使用されるエージェント・ノード名に登録します。asnodename オプションが使用されている場合、データはそのノード名を使用してサーバーに保管されません。
4. IBM Spectrum Protect サーバー管理者は、GRANT PROXYNODE コマンドを使用して、共有環境内のすべてのノードにプロキシ権限を付与し、ターゲット・ノード名にアクセスできるようにする必要があります。
5. QUERY PROXYNODE 管理クライアント・コマンドを使用して、GRANT PROXYNODE コマンドによって権限付与された許可ユーザーのクライアント・ノードを表示します。

関連資料

[344 ページの『Asnodename』](#)

asnodename オプションを使用すると、エージェント・ノードが別のノード (ターゲット・ノード) の代わりにデータのバックアップまたはリストアを行うことができます。これにより、複数のノードからの並行操作が可能になり、同じターゲット・ノードおよびファイル・スペースに並行してデータを保管することができます。

GUI からのマルチノード操作を使用可能にする

GUI でのマルチノード操作を使用可能にするには、プリファレンス・エディターを使用して、プロキシ権限を付与されているターゲット・ノードの名前を指定します。

手順

1. **QUERY PROXYNODE** 管理クライアント・コマンドを使用して、クライアント・ノードに、ターゲット・ノードに対するプロキシ権限 (またはターゲット・ノードとして機能する許可) が与えられていることを確認する。
2. 「編集」 > 「クライアント・プリファレンス」を選択して「プリファレンス」ウィンドウを開く。
3. 「一般」タブを選択して、「ノード別名」フィールドにターゲット・ノードの名前を入力する。
4. 「適用」をクリックしてから「OK」をクリックし、「プリファレンス」ウィンドウを閉じる。

次のタスク

ご使用のクライアント・ノードが現在ターゲット・ノードとしてサーバーにアクセスしていることを確認するには、以下のステップのいずれかを実行します。

- ツリー・ウィンドウを開いて、「ノード別名」フィールドで指定したターゲット・ノード名が、ウィンドウに表示されていることを確認する。

- ・「**接続情報**」ウィンドウの「**ノードとしてアクセス**」フィールドでターゲット・ノード名を確認する。

単一ノード操作に戻るには、「**一般**」>「**プリファレンス**」タブの「**ノードとしてアクセス**」フィールドから「**ノード別名**」を削除します。

暗号化のセットアップ

このトピックでは、**encryptkey** オプションを使用して暗号化をセットアップするために、実行する必要があるステップをリストします。

手順

1. オプション・ファイルで **encryptkey=save** を指定する。
2. **asnode=ProxyNodeName** を使用して、少なくとも 1 つのファイルをバックアップし、複数ノード環境内の各エージェント・ノード上で ローカル暗号鍵を作成する。

タスクの結果

encryptkey=prompt オプションを使用して暗号化をセットアップするには、以下のステップを実行します。

1. オプション・ファイルで **encryptkey=prompt** を指定する。
2. 複数ノード環境のエージェント・ノードのユーザーが同じ暗号鍵を使用していることを確認する。

重要:

- ・暗号鍵を変更する場合、前のステップを繰り返す必要がある。
- ・共用ノード環境でバックアップされたすべてのファイルに同一の暗号鍵を使用する。

クライアント・ノード・プロキシ・サポートによるバックアップのスケジュール

複数のノードを使用して、スケジューラーを使用したバックアップ操作を実行できます。

このタスクについて

プロキシ権限をエージェント・ノードに認可すると、エージェント・ノードが、ターゲット・ノードに代わって、スケジュールされたバックアップ操作を実行できるようになります。各エージェント・ノードは、**asnodename** オプションをそのスケジュール内で使用して、エージェント・ノードに対して複数ノード・バックアップを実行する必要があります。

dsmc sched クライアント・コマンドを使用してスケジュールを開始します。

以下の例では、複数のノードでスケジューラーを使用する管理クライアント・サーバー・コマンドを示しています。

- ・管理者は次のコマンドを実行して、使用するノードをすべて登録します。
 - **register node NODE-A**
 - **register node NODE-B**
 - **register node NODE-C**
- ・管理者は次のコマンドを使用して、各エージェント・ノードにプロキシ権限を付与します。
 - **grant proxynode target=NODE-Z agent=NODE-A**
 - **grant proxynode target=NODE-Z agent=NODE-B**
 - **grant proxynode target=NODE-Z agent=NODE-C**
- ・管理者は次のコマンドを使用して、スケジュールを定義します。

- define schedule standard proxy1 description="NODE-A proxy schedule"
action=incremental options="-asnode=NODE-Z" objects=/Volumes/Xsan1
startdate=05/21/2005 starttime=01:00
- define schedule standard proxy2 description="NODE-B proxy schedule"
action=incremental options="-asnode=NODE-Z" objects=/Volumes/Xsan2
startdate=05/21/2005 starttime=01:00
- define schedule standard proxy3 description="NODE-C proxy schedule"
action=incremental options="-asnode=NODE-Z" objects=/Volumes/Xsan3
startdate=05/21/2005 starttime=01:00

注: asnodename オプションはスケジュール定義にのみ配置します。クライアント・オプション・ファイル、コマンド・ライン、またはその他の場所に配置しないでください。

システム・オプション・ファイルで **managedservices** を **schedule** に設定して、クライアント・アクセプター・デーモン (**dsmcad**) を使用することもできます。

注:

- 各スケジュールは、別のワークステーションまたは LPAR から開始できる。
- スケジュールを実行後、プロキシとしての動きをするクライアントは、バックアップされたすべてのデータを照会およびリストアすることができます。
- プロキシ操作は、IBM Spectrum Protect サーバーで定義されているターゲット・ノードの設定 (**maxnummp** および **deduplication** など) とスケジュールを使用します。エージェント・ノードの IBM Spectrum Protect サーバー・ノードの設定およびスケジュールは無視されます。

関連資料

Asnodename

asnodename オプションを使用すると、エージェント・ノードが別のノード (ターゲット・ノード) の代わりにデータのバックアップまたはリストアを行うことができます。これにより、複数のノードからの並行操作が可能になり、同じターゲット・ノードおよびファイル・スペースに並行してデータを保管することができます。

プロキシ操作のセッションの設定およびスケジュール

エージェント・ノードが指定されたターゲット・ノードの代わりに asnodename *target_node_name* オプションを使用して操作を実行すると、プロキシ操作が実行されます。

DEFINE SCHEDULE コマンド

クラスター環境でバックアップをスケジュールする方法の例

このセクションでは、クラスター環境でバックアップを行う方法の例をいくつか示します。

このタスクについて

以下の例では、IBM PowerHA SystemMirror は、host_a および host_b という 2 つの AIX ホスト用に構成されています。所有するローカル・データ以外に、ホストは 2 つのファイル・スペース /disk1 および /disk2 を持つディスク・ストレージを共用しています。

この例では、現行の IBM PowerHA SystemMirror 環境でスケジュールされたバックアップを構成する方法を示します。

- 管理者は、次のコマンドを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーに host_a、host_b、cluster_group という 3 つのノードを定義する: (1) REGISTER NODE host_a mysecretpa5s、(2) REGISTER NODE host_b mysecretpa5s、(3) REGISTER NODE cluster_group mysecretpa5s。
- 管理者は次のコマンドを使用して、host_a および host_b に dsm.opt ファイルを定義する (opt ファイルは、ホストごとに異なるので注意してください)。 (1) NODENAME host_a (オプションはデフォルトのままで構いません)、(2) DOMAIN /home /usr ... その他。

- 管理者は次のコマンドを使用して、クラスター・ディスク・グループの 1 つ (例: /disk1/tsm/dsm.opt) のどこかにある dsm.opt ファイルを定義する。 (1) NODENAME cluster_group、 (2) DOMAIN /disk1 /disk2。
- 管理者は次のコマンドを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーにスケジュールを定義する。 DEFINE SCHEDULE STANDARD CLUSTER_BACKUP
- 管理者は次のコマンドを使用して、3 つのノードそれぞれに関連付けを定義する。 DEFINE ASSOC STANDARD CLUSTER_BACKUP host_a,host_b,cluster_group のどの時点でも、バックアップ/アーカイブ・クライアント・スケジュールの実行中のインスタンスが 3 つあります。(cluster_group 用のスケジューラーは、クラスター・グループ・ディスク・リソースがフェイルオーバーするときに必ずフェイルオーバーするクラスター・リソースの一部です。このため、host_a または host_b のいずれかで動作しますが、同時には動作しません)。
- 3 つのノード名のすべてに、IBM Spectrum Protect サーバーに関するデータが含まれている。

ASNODE の例は、サポートしていない UNIX クラスター・ソリューション (例えば Veritas Cluster Server for Solaris) に適用できる汎用ソリューションを示しています。

- 管理者は、IBM Spectrum Protect サーバーに host_a、host_b、および cluster_group という 3 つのノードを定義する。

```
REGISTER NODE host_a mysecretpa5s
REGISTER NODE host_b mysecretpa5s
REGISTER NODE cluster_group mysecretpa5s
```

- 管理者は、host_a と host_b の間のプロキシ・ノード関係を hacmp_cluster に定義する。

```
GRANT PROXYNODE TARGET=cluster_group AGENT=host_a,host_b
```

- 管理者は、ローカル・ファイル・システムを処理するための dsm.opt ファイルを、host_a および host_b に定義する。

```
NODENAME      host_a (option can be left as default)
DOMAIN        /home /usr ... etc.

NODENAME      host_b (option can be left as default)
DOMAIN        /home /usr ... etc.
```

- 管理者は、クラスター化されたリソースのバックアップを処理するための dsm.opt ファイル (/disk1/tsm/dsmcluster.opt など) をクラスター・リソースに定義する (ノード名は、特定の時点でどのワークステーションにクラスター・グループが含まれているかに応じて、デフォルトのノード名である host_a または host_b のいずれかになります)。

```
DOMAIN        /disk1 /disk2
ASNODE        cluster_group
```

- 管理者は、IBM Spectrum Protect サーバーにスケジュールを定義する。

```
DEFINE SCHEDULE STANDARD CLUSTER_BACKUP
```

- 管理者は、3 つのノードごとにアソシエーションを定義する。

```
DEFINE ASSOC STANDARD CLUSTER_BACKUP host_a,host_b,cluster_group
```

- どの時点でも、バックアップ/アーカイブ・クライアント・スケジュールのインスタンスが 3 つあり、host_a または host_b の (両方ではなく) いずれか一方で稼働しているノード hacmp_cluster のスケジューラーを使用して実行されている (フェイルオーバーするクラスター・リソースに含まれる)。このスケジューラーは、各ホストで定義されている dsmcluster.opt を指します。3 つのインスタンスは、以下のように開始されます。

```
[host_a]          dsmc sched
[host_b]          dsmc sched
[cluster_group] dsmc sched -optfile=/disk/tsm/dsmcluster.opt
```

- 3 つのノード名のすべてに、IBM Spectrum Protect サーバーに関するデータが含まれている。

サーバー・スケジューラー・コマンドについて詳しくは、サーバーの資料を参照してください。

GPFS ファイル・システムのバックアップのスケジューリング

GPFS ファイル・システムをバックアップするには、スケジューラーとプロキシ関係を使用します。

このタスクについて

GPFS クラスタ内の 3 つのノードがバックアップ操作に参加しているとします。ノード `node_1`、`node_2`、および `node_3` は認証用にのみ使用されます。オブジェクトは、ノード `node_gpfs` に属するファイル・スペースにバックアップされます。

手順

1. IBM Spectrum Protect サーバーで 4 つのノードを定義します。

```
REGISTER NODE node_1 mysecretpa5s
```

```
REGISTER NODE node_2 mysecretpa5s
```

```
REGISTER NODE node_3 mysecretpa5s
```

```
REGISTER NODE node_gpfs mysecretpa5s
```

2. ノード間のプロキシ関係を定義します。

```
GRANT PROXYNODE TARGET=node_gpfs AGENT=node_1, node_2, node_3
```

3. スケジュールを定義します。

```
DEFINE SCHEDULE STANDARD GPFS_SCHEDULE ACTION=incremental  
OBJECTS="/gpfs"
```

```
DEFINE ASSOCIATION STANDARD GPFS_SCHEDULE node_gpfs
```

4. スケジュールを実行するために、GPFS システムのいずれかを選択します。GPFS クラスタ内のすべてのシステムの `dsm.sys` オプション・ファイルに、**nodename** および **asnodename** オプションを指定します。**asnodename** オプションの値はすべてのシステムで同じでなければなりません。

ノード 1 の `dsm.sys` オプション・ファイル内の定義:

```
nodename node_1  
asnodename node_gpfs
```

ノード 2 の `dsm.sys` オプション・ファイル内の定義:

```
nodename node_2  
asnodename node_gpfs
```

ノード 3 の `dsm.sys` オプション・ファイル内の定義:

```
nodename node_3  
asnodename node_gpfs
```

5. スケジュールを実行するために選択されたシステムでスケジューラーを開始します。

```
DSMC SCHED
```

関連情報

[mmbackup コマンド: IBM Spectrum Protect の要件](#)

[IBM Spectrum Scale Active File Management 用の IBM Spectrum Protect の構成](#)

ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け (UNIX および Linux)

snapshotroot オプションを **incremental** および **selective** コマンドで使用し、併せて論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダーのアプリケーションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データと関連付けます。

snapshotroot オプションは、ボリューム・スナップショットが作成したデータを管理する機能のみを提供し、ボリューム・スナップショットを取る機能は提供しません。

関連資料

557 ページの『Snapshotroot』

論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダー・アプリケーションで、**incremental** コマンド、**selective** コマンド、または **archive** コマンドに snapshotroot オプションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データに関連付けます。

イメージ・バックアップ

ローカル・ワークステーションから、論理ボリュームをシステム上の単一オブジェクト (イメージ・バックアップ) としてバックアップできます。

従来の静的イメージ・バックアップでは、操作中に他のシステム・アプリケーションによるボリュームへの書き込みアクセスはできません。

このタスクを実行するには root ユーザーである必要があり、イメージ・バックアップは Mac OS X に適用されません。

イメージ・バックアップには、以下のような利点があります。

- 多数のファイルを含むファイル・システムを、ファイル・システム全体の増分バックアップよりも高速にバックアップします。
- クライアントが多くの小さいファイルを含むファイル・システムをリストアするときの速度を改善します。
- イメージに必要なエントリは 1 つだけなので、バックアップ時サーバー上のリソースを保護します。
- その時点の論理ボリュームをそのまま提供します。このバックアップは、企業でその情報を再呼び出しする必要が生じた場合に役に立ちます。
- 壊れたファイル・システムまたはロー論理ボリュームをリストアします。データは、最後の論理ボリューム・バックアップ時と同じ状態でリストアされます。

従来の静的イメージ・バックアップでは、操作中に他のシステム・アプリケーションによるボリュームへの書き込みアクセスはできません。dynamicimage オプションは、ボリュームを読み取り専用で再マウントせず、現状のままでバックアップするときに使用します。バックアップの実行中にアプリケーションがボリュームへの書き込みを続けた場合、バックアップが破壊される可能性があります。イメージ・バックアップの実行中にボリュームへの書き込みを行うと、リストア操作の実行後にデータの不整合やデータ損失が起こる可能性があります。dynamicimage オプションは、管理クラスのコピー逐次化の値を上書きして、イメージ・バックアップを行います。dynamicimage オプションを使用して取得したイメージ・バックアップをリストアした後は、必ず chkdsk ユーティリティを実行してください。

ボリュームのイメージ・バックアップをリストアするには、バックアップ/アーカイブ・クライアントが、リストアするボリュームに対する排他ロックを取得できる必要があります。

制約事項: ファイル・システムには、動的イメージ・バックアップを使用しないでください。ファイル・システム上の理由で、書き込みアクティビティがない場合でもデータの整合性が損なわれる可能性があります。

ます。また、動的イメージ・バックアップを行うとファジー・イメージが作成される可能性があり、リストアップ時にそのイメージの有効性または完全性が確保されない場合があります。

バックアップ/アーカイブ・クライアントがイメージのリストアップ後にファイル・システムのマウントに失敗する場合は、**fsck**を実行します。ただし、**fsck**を実行すると大量のデータの保全性に影響することがあります。AIX JFS2 ファイル・システムでは動的イメージ・バックアップを使用しないでください。クライアントでは、AIX JFS2 ファイル・システムでの動的イメージ・バックアップの使用は認められません。JFS2 ファイル・システムについて `dynamicimage=yes` を指定すると、クライアントは、スナップショット・ベースのイメージ・バックアップを実行します。何らかの理由でスナップショットを作成できない場合、クライアントは代わりに静的イメージ・バックアップを実行します。



重要: データ損失を防ぐには、`dynamicimage` オプションを使用しないようにしてください。また、バックアップの進行中にそのボリューム上で書き込みアクティビティが発生しないようにしてください。

AIX JFS2 ファイル・システムでは、ファイル・システムが使用したブロック数のみ、または `imagegapsize` オプションより小さい量のバックアップを指定することによって、静的またはスナップショット・イメージ・バックアップ時に IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップされるデータの量を減らすことができます。この方法でデータをバックアップすることによって、イメージ・バックアップのパフォーマンスが向上します。詳しくは、[444 ページの『Imagegapsize』](#)を参照してください。

AIX クライアントのみ: デフォルトでは、クライアントは JFS2 ファイル・システムのオンライン・スナップショット・イメージ・バックアップを実行します。その間、該当のボリュームは他のシステム・アプリケーションで使用することができます。

Linux クライアントのみ: デフォルトでは、クライアントは、Linux 論理ボリューム・マネージャーによって作成された論理ボリューム上に存在する、ファイル・システムのスナップショット・イメージ・バックアップを実行します。スナップショット・イメージ・バックアップの実行中、他のシステム・アプリケーションはそのボリュームを使用できます。

z Systems 上の Linux クライアントの場合: ロー・トラック・アクセス・モードを使用した DASD デバイスのイメージ・バックアップはサポートされません。フルトラック・アクセス・モードのみがサポートされます。

イメージ・バックアップ操作は、マルチパス・デバイスにあるパーティションではサポートされていません。



重要: IBM Spectrum Protect for Space Management によって管理されているファイル・システムは、イメージ・バックアップで使用できません。

関連タスク

[205 ページの『スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブとスナップショット・ベースのイメージ・バックアップ』](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントを AIX 5.3 以降の JFS2 ファイル・システムで root ユーザーとして実行している場合は、デフォルトでは、スナップショットを使用してスナップショット・ベースのイメージ・バックアップが作成されます。

イメージ・バックアップの作成前の前提タスクの実行

このトピックでは、イメージ・バックアップを実行する前に考慮する項目をいくつか示します。

このタスクについて

以下の項目が、イメージ・バックアップの考慮事項です。

- 静的イメージ・バックアップを実行するときに、他のアプリケーションがそのボリュームを使用していないことを確認してください。ボリューム上でファイル・スペースが検出された場合、バックアップ処理中にイメージの整合性を確保するために、クライアントは、他のアプリケーションがそのボリュームに書き込みできないようにボリュームをアンマウントし、読み取り専用として再マウントします。クライアントがアンマウントしようとしたときに、そのボリュームが使用中である場合は、バックアップは失敗します。ボリュームが使用中であるためアンマウントして読み取り専用として再マウントすることができず、スナップショット・イメージ・バックアップも使用可能でない場合は、`dynamicimage` オプション

を使用することができます。このオプションを使用すると、ボリュームをアンマウントして読み取り専用モードで再マウントする処理をせずに、クライアントでイメージ・バックアップを強制実行することができます。dynamicimage オプションは、include.image ステートメントまたはコマンド・ラインで設定します。バックアップの進行中にアプリケーションがボリュームに書き込んだ場合は、バックアップが破壊されることがあります。これは、破壊されたブロックを修正するためのリストアの後に fsck を稼働することによって訂正できます。

バックアップ対象のボリュームでファイル・システムが検出されない場合は、そのボリュームに対して書き込みを行うすべてのアプリケーションが静止していることを確認してください。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ファイル・システム・テーブルおよびマウント・テーブルを使用して、サポートされているファイル・システムを検出します。

アクティブ状態で使用されているシステム・ファイルはアンマウントできないので、イメージ・バックアップにはシステム・ファイルを含めないでください。

AIX および Linux のみ: マウント済みのファイル・システムのイメージ・バックアップを実行する際、そのファイル・システムが別のマウント・ポイントにマウントされ、ファイル・システム・テーブル内で指定されている場合、イメージ・バックアップの完了後、このファイル・システムのマウント・オプションは読み取り/書き込み状態を除きすべて失われます。

重要: マウント済みファイル・システムに、ネストされたマウント・ポイントがある場合は、バックアップしようとする前に、それらをアンマウントする必要があります。そうでない場合は、クライアントはボリュームをアンマウントできません。ファイル・システムは、何らかのマウントを含んでいる場合は、使用中 になります。

- ボリューム・イメージに管理クラスを割り当てるには、include.image オプションを使用します。管理クラスを割り当てないと、そのイメージにはデフォルト管理クラスが使用されます。
- イメージ・バックアップからボリュームを除外するために、exclude.image オプションを使用することができます。
- イメージ・バックアップを行うファイル・システム・ボリュームに、マウント・ポイントを割り当てる必要があります。クライアントはマウント・ポイントがないと、ファイル・システム・ボリュームをバックアップしません。マウント名を使用して、ファイル・システムをバックアップします。例えば、/dev/lv01 が /home でマウントされたファイル・システムとしてフォーマットされている場合、このボリュームのイメージ・バックアップを実行するには、以下のコマンドを入力します。

```
dsmc backup image /home
```

デバイス名を使用して、ロー・ボリュームをバックアップします。例えば、/dev/lv02 がロー・ボリュームの場合、このボリュームのイメージ・バックアップを実行するには、以下のコマンドを入力します。

```
dsmc backup image /dev/lv02
```

ファイル・システムとしてフォーマット済みのロー・ボリュームをバックアップする場合は、そのファイル・システムがマウントされていないこと、および /etc/filesystems にそのファイル・システムの項目が含まれていないことを確認してください。

関連概念

[297 ページの『ストレージ管理ポリシー』](#)

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

関連資料

[416 ページの『Exclude オプション』](#)

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

[447 ページの『include オプション』](#)

include オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

イメージ・バックアップ用ボリューム・デバイス・タイプ・サポート

このトピックでは、**backup image** コマンドによってサポートされるデバイスをいくつかリストします。

以下のテーブルは、**backup image** コマンドでサポートする装置のリストです。ロー・デバイスは、ディスク・スライス、区画、あるいは論理ボリュームです。

表 36. イメージ・バックアップ用ボリューム・デバイス・タイプ・サポート

論理ボリューム・マネージャー	ロー装置タイプ	サンプル・デバイス名	Backup image コマンド・サポート
AIX 論理ボリューム・マネージャー	論理ボリューム	/dev/lv00	AIX
Sun Solstice DiskSuite ボリューム・マネージャー	メタ・デバイス	/dev/md/dsk/dl	Solaris
Solaris ボリューム・マネージャー	メタ・デバイス	/dev/md/dsk/dl	Solaris
Veritas ボリューム・マネージャー	論理ボリューム	/dev/vx/dsk/rootdg/vol01 - AIX /dev/vg00/lvol01 - Solaris	Solaris AIX
ロー・ディスク	パーティション	/dev/hda1 /dev/sda3 /dev/dasd<x>x	すべての Linux
ロー・ディスク	ディスク装置	/dev/sda /dev/mapper/mpathX /dev/dasd<x>	すべての Linux
Linux 論理ボリューム・マネージャー	論理ボリューム	/dev/myvolgroup/ myvolume	すべての Linux
ロー・ディスク	ディスク・スライス	/dev/dsk/c0tld0s0	Solaris

ロー・デバイスの場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントはボリュームを現状のままバックアップします。すなわち、スナップショットは取られず、アプリケーションはバックアップ中にボリュームへの書き込みを継続できます。IBM Spectrum Protect は、物理ディスク・レベルでバックアップする場合はデータの整合性を保証できません。バックアップの進行中にボリューム上のデータが変更されると、データの破損が生じる可能性があります。

クライアントは、ロー装置のイメージ・バックアップを実行するために、特定のプラットフォーム上でロー装置タイプをサポートするものでなければなりません。ロー・デバイスにマウントされたファイル・システムのイメージ・バックアップを実行したい場合には、ロー・デバイスがサポートされている必要があります。ロー装置はブロック装置名で指定することを覚えておってください。

Linux クライアントの場合は、イメージ・バックアップは、id 0x83 の区画または Linux 論理ボリューム・マネージャーで作成された論理ボリュームでのみサポートされています。他のパーティション (マウントされたファイル・システムまたはデータベース・データを含む拡張パーティションなど) をバックアップする場合は、イメージ・バックアップ操作中にデータが変更されると、不整合バックアップ・データが作成されることがあります。

z Systems 上の Linux クライアントの場合、ロー・トラック・アクセス・モードを使用した DASD デバイスのイメージ・バックアップはサポートされません。フルトラック・アクセス・モードのみがサポートされます。

AIX、および Solaris の場合: Veritas Volume Manager を使用して作成されたボリュームで、イメージ・オペレーションを実行できます。クライアントは、最初は静的 (デフォルトの設定) および動的イメージ・タイプのバックアップをサポートします。

Solaris 10 クライアントの場合、イメージ・バックアップは、add device および set match を指定してデバイスをエクスポートすることによって、グローバル・ゾーンから非グローバル・ゾーンに割り当てられたファイル・システムの場合のみに使用します。非グローバル・ゾーンにはファイル・システムのマウントまたはアンマウントを行う権限がないため、非グローバル・ゾーンのその他のファイル・システムではイメージ・バックアップを使用しないでください。また、Solaris 10 クライアントでは、ルート・ディスク (c0t0d0s2) のオーバーラップ・デバイスをロー・デバイス・バックアップで使用しないでください。スワッピング・デバイスとして使用されているディスクまたはスライスでこの機能を使用しないでください。

Veritas Volume Manager によって作成されたメタデバイスは、ディスク・グループも含めて /etc/vfstab にリストし、ファイル・システムのイメージ・バックアップでバックアップ/アーカイブ・クライアントによって認識されるようにする必要があります。ファイル・システムをアンマウントする必要があります。ロー・デバイスは、/etc/vfstab にリストしないでください。例えば、/etc/vfstab ファイルで使用される正しいメタデバイス名は次のとおりです。

```
/dev/vx/dsk/<disk group>/<meta device name>
```

/dev/vx/dsk/ を指定しても正しく認識されず、エラー (ANS1134E) を受け取ります。

シリンダー 0 を含むディスク・スライスは、バックアップまたはリストアしないでください。この場合、VTOC が上書きされます。最初のディスク・スライスをバックアップする必要がある場合、ディスク・スライスをシリンダー 1 から開始してシリンダー 0 を除外してください (フォーマット・ユーティリティを使用します)。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、リストア時に上書きされるデバイスにシリンダー 0 が入っているかどうかを検査しません。

イメージ・バックアップを使用したファイル・システムの増分バックアップの実行

このトピックでは、イメージ・バックアップを使用してファイル・システムの増分バックアップを効率的に行うための方法および手順をリストしています。

これらのバックアップ方法によって、ファイル・システムの特定期点リストアを行うことができ、バックアップおよびリストアのパフォーマンスが向上します。バックアップはフォーマット済みボリュームのみで実行できます。ロー論理ボリュームでは実行できません。

マウント済みのファイル・システムを使用してボリュームのイメージ・バックアップを実行するためには、以下の方法のいずれかを使用することができます。

方法 1: ファイル・システム増分バックアップを指定したイメージ・バックアップの使用

このトピックでは、ファイル・システム増分バックアップでイメージ・バックアップを実行するステップをリストします。

このタスクについて

手順

1. ファイル・システムのフル増分バックアップを実行します。これにより、将来の増分バックアップの基本線が確立します。
2. 同一ファイル・システムのイメージ・バックアップを実行して、イメージ・リストアを可能にします。
3. サーバーが追加と削除を正確に記録するように、ファイル・システムの増分バックアップを定期的に実行します。

4. リストアを高速化するために、イメージ・バックアップを一定期間ごとに実行します。
5. 増分リストアを実行することによって、データをリストアします。リストアを開始する前に、「リストア・オプション」ウィンドウで「**イメージ、および増分ディレクトリーとファイル**」および「**ローカルからの非アクティブ・ファイルの削除**」オプションを選択します。リストア中にクライアントは次の処理を行います。

タスクの結果

- サーバーの最新のイメージをリストアします。
- 直前のステップでリストアされ、サーバーで非活動であるファイルをすべて削除します。これらは、イメージ・バックアップの時点では存在していましたが、その後削除され、後で行われた増分バックアップで記録されたファイルです。
- 増分バックアップから新規ファイルおよび変更されたファイルをリストアします。

注: イメージのバックアップ後に増分バックアップを数回実行する場合は、IBM Spectrum Protect サーバーのバックアップ・コピー・グループに、サーバーの既存ファイルと削除済みファイルのバージョンが十分に含まれていることを確認してください。これは、**incremental** および **deletefiles** オプションを使用する後続のリストア・イメージでファイルを正しく削除できるようにするためです。

関連タスク

[184 ページの『Java GUI を使用したデータのバックアップ』](#)

ディレクトリー・ツリーから特定のファイル、ディレクトリー全体、またはファイル・システム全体のバックアップを行うことができます。

[203 ページの『GUI を使用したイメージ・バックアップの実行』](#)

イメージ・バックアップ機能が構成されている場合、実ボリュームを他のシステム・アプリケーションで使うことが可能なイメージ・バックアップを作成できます。

[239 ページの『GUI を使用したイメージのリストア』](#)

GUI を使用して、ファイル・システムのイメージあるいはロー論理ボリュームをリストアできます。

方法 2: 日付による増分イメージ・バックアップを指定したイメージ・バックアップの使用

このトピックでは、日付による増分イメージ・バックアップでイメージ・バックアップを実行するステップをリストします。

手順

1. ファイル・システムのイメージ・バックアップを実行します。
2. ファイル・システムの日付による増分イメージ・バックアップを実行します。これは、最後のイメージ・バックアップ以後に追加または変更されたファイルのみをサーバーに送ります。
3. 定期的な完全イメージ・バックアップを実行します。
4. 増分リストアを実行することにより、ボリュームをリストアします。リストアを開始する前に、「リストア・オプション」ウィンドウで「**イメージ、および増分ディレクトリーとファイル**」オプションを選択します。このオプションでは、まず最新のイメージをリストアし、次にその日付以降に実行されたすべての増分バックアップをリストアします。

タスクの結果

注: 以下の場合には、フルイメージ・バックアップを定期的に行う必要があります。

- 前述の方法 1 のステップ 4 および方法 2 のステップ 3 に示したように、ファイル・システムが大きく変更された (40% を超える) 場合。定期的に行うことで、ファイル・システム・イメージは、最終日付の増分イメージ・バックアップの時点のものに近くなり、リストア時間も向上します。
- 使用環境での必要に応じたバックアップ。

このようにすると、増分バックアップから適用される変更が少なくなるため、リストア時間が短くなります。

方法 2 を使用する場合は、以下の制約事項が適用されます。

- ファイル・システムは、以前のフル増分バックアップを持つことができません。
- 日付による増分イメージ・バックアップは、サーバー上のファイルを非活動化しません。したがって、イメージを incremental オプションを指定してリストアすると、元のイメージ・バックアップ後に削除されたファイルは、リストア後に存在し続けます。
- これがファイル・システムにとって最初のイメージ・バックアップの場合には、フルイメージ・バックアップが実行されます。
- ファイル・システムが容量の限界近辺で稼働中の場合には、リストア中にスペース不足条件になる可能性があります。

関連タスク

203 ページの『GUI を使用したイメージ・バックアップの実行』

イメージ・バックアップ機能が構成されている場合、実ボリュームを他のシステム・アプリケーションで 사용할ことが可能なイメージ・バックアップを作成できます。

239 ページの『GUI を使用したイメージのリストア』

GUI を使用して、ファイル・システムのイメージあるいはロー論理ボリュームをリストアできます。

方法 1 と 2 の比較

ここでは、方法 1 と 2 ((1) ファイル・システム増分でのイメージ・バックアップの使用、または (2) 日付による増分イメージ・バックアップでのイメージ・バックアップの使用) を比較します。

以下の表で、方法 1 と方法 2 のいずれがご使用の環境に適しているかを判断するために方法を比較します。

表 37. 各種増分イメージ・バックアップの方法の比較	
方法 1: ファイル・システム増分を指定したイメージ・バックアップの使用	方法 2: 日付による増分イメージ・バックアップを指定したイメージ・バックアップの使用
ファイルは、ファイル・システムから削除されると、サーバーで有効期限切れとなります。リストア時には、サーバーで期限切れとなったファイルをイメージから削除するオプションを指定できます。	サーバーでは、ファイルは有効期限切れになりません。イメージの増分リストア完了後、イメージ・バックアップ後にファイル・システムから削除されたすべてのファイルは、リストア後に存在し続けます。ファイル・システムが容量の限界近辺で稼働中の場合には、スペース不足状態になる可能性があります。
増分バックアップ時間は、定期的な増分バックアップと同じです。	増分イメージ・バックアップのほうが、コピーするファイルごとにクライアントがサーバーに照会を行わないため、高速です。
ファイル・システムのフル増分リストアと比較すると、リストアははるかに高速です。	ファイル・システムのフル増分リストアと比較すると、リストアははるかに高速です。
最後のイメージ・バックアップ後にファイル・システムから削除されたディレクトリーは、有効期限切れになりません。	最後の完全イメージ・バックアップ後にファイル・システムから削除されたディレクトリーおよびファイルは、有効期限切れになりません。

GUI を使用したイメージ・バックアップの実行

イメージ・バックアップ機能が構成されている場合、実ボリュームを他のシステム・アプリケーションで 사용할ことが可能なイメージ・バックアップを作成できます。

このタスクについて

イメージ・バックアップ中は、該当ボリュームの整合性のあるイメージが維持されます。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI の「イメージ・バックアップ」オプションを使用してイメージ・バックアップを実行する場合、バックアップ操作は、snapshotproviderimage オプションの設定に従って実行されます。snapshotproviderimage オプションのデフォルトは、AIX の場合は AIX JFS2 ス

ナップショット、Linux の場合は Linux LVM スナップショットです。このデフォルトを指定変更するには、プリファレンス・エディターの「スナップショット」タブとイメージ・スナップショット・プリファレンスを使用します。

Solaris クライアントの場合、image backup オプションを選択すると、デフォルトで静的イメージ・バックアップが実行されます。静的イメージ・バックアップの場合は、他のアプリケーションからアクセスできないように、クライアントがそのボリュームをアンマウントし、読み取り専用として再マウントします。このデフォルト値を指定変更するには、include.image オプションを使用し、dynamicimage yes を選択します。動的イメージ・バックアップの場合は、クライアントは、ファイル・システムを読み取り専用 にせずに、イメージ・バックアップを実行します。

ファイル・システムあるいはロー 論理ボリュームのイメージ・バックアップを作成するには、次のステップを行います。

手順

- 1. IBM Spectrum Protect メイン・ウィンドウの「バックアップ」ボタンをクリックする。「バックアップ」ウィンドウが表示されます。
- 2. ディレクトリー・ツリーを展開し、バックアップしたいオブジェクトを選択する。ロー論理ボリュームをバックアップするために、RAW ディレクトリー・ツリー・オブジェクトを探し出して展開します。
- 3. 「バックアップ」をクリックします。バックアップの「タスク・リスト」ウィンドウにバックアップ処理の状況が表示されます。「バックアップ・レポート」ウィンドウに詳細状況報告が表示されます。

タスクの結果

- ・静的イメージ・バックアップを実行するには、ドロップダウン・リストから「イメージ・バックアップ」を選択する。
- ・AIX および Linux クライアントのみ: スナップショット・イメージ・バックアップを実行するには、snapshotproviderimage オプションを使用する。
- ・日付による増分イメージ・バックアップを実行するには、ドロップダウン・リストから「イメージ増分 (日付のみ)」を選択する。

以下はスナップショット・ベースのイメージ・バックアップを実行するとき考慮する項目です。

- ・特定のバックアップ・オプションを変更するには、「オプション」ボタンをクリックします。選択したオプションは、現行セッションの間のみ有効になります。
- ・特定のバックアップ・オプションを変更するには、「オプション」ボタンをクリックします。選択したオプションは、現行セッションの間のみ有効になります。

Linux のみ: IBM Spectrum Protect バージョン 5.4 (およびそれ以降の) クライアントは、イメージ操作で LVM1 ボリュームを認識しません。ただし、LVM1 ボリュームの以前のイメージ・バックアップを LVM2 ボリュームにリストアすることはできます。204 ページの表 38 に、さまざまなイメージ操作で LVM1 および LVM2 ボリュームを取り扱う古いクライアント・レベルと新しいクライアント・レベルの組み合わせを示します。

表 38. LVM1 および LVM2 イメージ操作の比較				
IBM Spectrum Protect クライアントのバージョン	LVM1 バックアップおよびリストア	LVM2 バックアップおよびリストア	混合ボリューム	
			バックアップ: LVM1、リストア: LVM2	バックアップ: LVM2、リストア: LVM1
V5.3 以前	YES	ファイル・システムの静的イメージのみ	NO	NO - ロー・ボリュームはサポートされません

表 38. LVM1 および LVM2 イメージ操作の比較 (続き)				
IBM Spectrum Protect クライアントのバージョン	LVM1 バックアップおよびリストア	LVM2 バックアップおよびリストア	混合ボリューム	
			バックアップ: LVM1、リストア: LVM2	バックアップ: LVM2、リストア: LVM1
V5.4 以上	NO エラー・メッセージ ANS1090E が 表示されます	YES	YES LVM1 ボリュームは 以前のクライ アントを使用して バックアップされて いる必要があります	NO LVM1 ボリューム へのリストアは 失敗します

関連資料

556 ページの『[Snapshotproviderimage](#)』

snapshotproviderimage オプションを使用して、スナップショット・ベースのイメージ・バックアップを有効にし、スナップショット・プロバイダーを指定します。

コマンド・ラインを使用したイメージ・バックアップの実行

backup image および **restore image** コマンドを使用して、単一ボリュームにイメージのバックアップおよびリストア操作を行います。

mode オプションを **backup image** コマンドで使用して、新規ファイル、および最後の完全イメージ・バックアップ後に変更されたファイルのみをバックアップする 日付による増分イメージ・バックアップを行います。しかし、これは、許可を変更されたファイルでなく、日付が変更されたファイルのみをバックアップします。

関連資料

663 ページの『[Backup Image](#)』

backup image コマンドは、システムの 1 つ以上の ボリュームのイメージ・バックアップを作成します。

482 ページの『[mode](#)』

mode オプションを使用して、特定のバックアップ操作の実行時にバックアップ・モードを指定します。

742 ページの『[Restore Image](#)』

restore image コマンドは、**backup image** コマンドを使用してバックアップされたファイル・システムまたはロー・ボリューム・イメージを リストアします。

スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブとスナップショット・ベースのイメージ・バックアップ

バックアップ/アーカイブ・クライアントを AIX 5.3 以降の JFS2 ファイル・システムで root ユーザーとして実行している場合は、デフォルトでは、スナップショットを使用してスナップショット・ベースのイメージ・バックアップが作成されます。

このタスクについて

必要に応じて、snapshotproviderfs オプションを指定することによって、スナップショット・ベースのファイル・レベルのバックアップおよびアーカイブ操作を使用可能にすることができます。なんらかの理由でスナップショットを取得できない場合、クライアントは、静的イメージ・バックアップまたは通常のファイル・バックアップを実行しようとします。

スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブを 指定したい場合は、オプション snapshotproviderfs を JFS2 に設定します。これはそのクライアントのすべての JFS2 ファイル・システムに適用されます。

重要: すべての AIX JFS2 ファイル・システムについて、スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブとスナップショット・ベースのイメージ・バックアップを使用してください。

例えば、クライアントのすべての JFS2 ファイル・システムに対してスナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブをオンにするには、`dsm.sys` ファイルのサーバー・スタンザで次のように指定します。

```
snapshotproviderfs JFS2
```

クライアントのすべての JFS2 ファイル・システムに対してスナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブを明示的にオフにするには、`dsm.sys` ファイルのサーバー・スタンザで次のように指定します。

```
snapshotproviderfs NONE
```

クライアントの 1 つの特定の JFS2 ファイル・システムのみに対してスナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブをオンにするには、`dsm.sys` ファイルのサーバー・スタンザで次のように指定します。

```
snapshotproviderfs NONE
include.fs /kalafs1 snapshotproviderfs=JFS2
```

クライアントの 1 つの特定の JFS2 ファイル・システムのみに対してスナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブをオフにするには、`dsm.sys` ファイルのサーバー・スタンザで次のように指定します。

```
snapshotproviderfs JFS2
include.fs /kalafs2 snapshotproviderfs=NONE
```

クライアントの 1 つの特定の操作のみに対してスナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブをオンにするには、コマンド・ラインで次のように指定します。

```
dsmc incr -snapshotproviderfs=JFS2 /kalafs1
```

クライアントの 1 つの特定の操作のみに対してスナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブをオフにするには、`dsm.sys` ファイルのサーバー・スタンザで次のように指定します。

```
snapshotproviderfs JFS2
```

その後、バックアップ・コマンドを実行します。例えば次のとおりです。

```
dsmc incr -snapshotproviderfs=NONE /kalafs2
```

関連資料

556 ページの『[Snapshotproviderfs](#)』

`snapshotproviderfs` オプションを使用して、スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブ操作を有効にし、スナップショット・プロバイダーを指定します。

Btrfs ファイル・システムの保護

Btrfs ファイル・システムは、バックアップ・コマンドとリストア・コマンド、アーカイブ・コマンドとリトリブ・コマンド、および **backup image** コマンドと **restore image** コマンドにファイル指定として含めることができます。Btrfs サブボリュームを、バックアップとリストア機能およびアーカイブとリトリブ機能にファイル指定として指定することもできます。Btrfs サブボリュームでは、バックアップ/アーカイブ・クライアントのイメージ・バックアップ・コマンドもイメージ・リストア・コマンドも使用できません。

Btrfs ファイル・システムは、SLES 11 SP2 以降、IBM System x、System p、および System z でサポートされます。

Btrfs ファイル・システム全体の静的イメージ・バックアップを作成する場合は、バックアップ/アーカイブ・クライアントがバックアップ処理中に Btrfs ファイル・システムをアンマウントまたはマウントできるように、すべてのサブボリュームをアンマウントする必要があります。静的イメージ・バックアップではなく、Btrfs ファイル・システムのスナップショット・ベースのイメージ・バックアップを実行する場合、マウントおよびアンマウントの要件を回避することができます。

Btrfs サブボリュームではイメージ・バックアップ機能およびイメージ・リストア機能は使用できません。**image backup** を使用してサブボリュームのバックアップを試みると、次のメッセージが表示されます。

ANS1162E ファイル・システムをマウントできませんでした

Btrfs サブボリュームをマウントするには、サブボリューム名またはサブボリューム ID を使用します。

Btrfs ファイル・システムでは、ジャーナル・バックアップをファイル・システム・レベルおよびサブボリューム・レベルの両方で実行できます。Btrfs ファイル・システムでジャーナル・ベース・バックアップを実行する場合、作成されるジャーナルはファイル・システム全体のものであり、サブボリュームごとの個別ジャーナルはありません。

制約事項: Linux システムで、ext2、ext3、ext4、btrfs、xfs などの一部のファイル・システムは、オペレーティング・システムによって汎用固有 ID (UUID) を使用して識別されます。このようなボリュームのイメージ・バックアップを作成して別の位置にリストアすると、同じ UUID を持つ 2 つのボリュームが存在するようになる可能性があります。/etc/fstab で UUID を使用してファイル・システムを定義している場合、UUID の競合により、バックアップ/アーカイブ・クライアントが、リストアされるファイル・システムを正しくマウントできない可能性があることに注意してください。この状態を回避するには、イメージをその元の位置にリストアしてください。イメージを別の位置にリストアする必要がある場合は、リストアされるファイル・システムをマウントする前に、元のボリュームまたはリストアされるボリュームのいずれかの UUID を変更してください。UUID の変更方法については、Linux の資料の該当する説明を参照してください。また、元のボリューム、リストアされるボリューム、またはその両方のボリュームをマウントできるように、/etc/fstab ファイルを手動で編集する必要がある場合もあります。

Btrfs ファイル・システムのバックアップとリストア

バックアップ/アーカイブ・クライアントの **incremental**、**selective**、**restore**、**archive**、および **retrieve** コマンドを使用して、Btrfs ファイル・システムをバックアップまたはリストア、あるいはアーカイブおよびリトリブすることができます。

このタスクについて

バージョン 7.1 より古いバージョンのバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用して Btrfs ファイル・システムをバックアップした場合、IBM Spectrum Protect サーバー GUI およびコマンド出力でファイル・システム・タイプが Unknown として示されていました。ファイル・システム・タイプが Unknown と表示される理由は、IBM Spectrum Protect 7.1 より前は Btrfs ファイル・システムが公式にサポートされていなかったことです。バックアップ/アーカイブ・クライアント V7.1 以降を使用して同じ Btrfs ファイル・システムをバックアップする場合、アクセス制御リスト (ACL) と拡張属性 (XATTR) を含むすべてのファイルは、古いバージョンのクライアントによって作成された最後のバックアップ以降にその内容が変更されていなくても、再度バックアップされます。また、Btrfs ファイル・システムが V7.1 以降のクライアントによってバックアップされると、IBM Spectrum Protect サーバー GUI およびコマンド出力でファイル・システム・タイプが正しく Btrfs と表示されます。

V7.1 以降のクライアントを使用する場合でも、Btrfs ファイル・システム上のファイルをコピーすると、そのファイルが次のバックアップ操作に含まれる可能性があります。例えば、**-p** または **-preserve** オプション (保存モード、所有権、およびタイム・スタンプ) を指定した **cp** コマンドを使用してファイルをコピーした場合、およびファイルの属性が変更された場合、アクセス ACL 拡張属性 (system.posix_acl_access) が変更されます。拡張属性が変更されているため、クライアントはファイルの属性を更新するだけでなく、ファイル全体をバックアップします。

手順

1. 保護またはリカバリーするファイル・システムをマウントします。

例えば、次の構文を使用してファイル・システムをマウントします。`mount /dev/sdb1 on /btreefs1 type btrfs (rw)`

2. 以下のいずれかの操作を実行して、ファイル・システムを保護またはリカバリーします。

操作	コマンド
ファイル・システムのバックアップ	<code>dsmc incr /btreefs1</code>
ファイル・システムのリストア	<code>dsmc restore /btreefs1/ -subdir=yes -replace=yes</code>
ファイル・システムのアーカイブ	<code>dsmc archive /btreefs1/ -subdir=yes</code>
ファイル・システムのリトリブ	<code>dsmc retrieve /btreefs1/ -subdir=yes -replace=yes</code>
ファイル・システムのスナップショットのバックアップ	<p>ファイル・システムのスナップショットを作成します。btrfs subvolume snapshot コマンドを使用します。この例に指定されているスナップショット・ディレクトリーは、/btreefs1 という名前のファイル・システム上の btreefs1_snap ディレクトリーです。</p> <pre>btrfs subvolume snapshot /btreefs1/ /btreefs1/btreefs1_snap</pre> <p>バックアップ/アーカイブ・クライアントの incremental コマンドを発行します。snapshotroot オプションおよび Btrfs スナップショットのロケーションを指定します。</p> <pre>\$DSM_DIR/dsmc incr /btreefs1 -snapshotroot=/btreefs1/btreefs1_snap</pre>
イメージ・バックアップの実行	<p>イメージ・バックアップを作成する前にすべてのサブボリュームをアンマウントする必要があります。</p> <pre>dsmc backup image /btreefs1 -snapshotproviderimage=none</pre> <p>サブボリュームのアンマウントを不要にするには、スナップショット・ベースのイメージ・バックアップを作成します。</p> <pre>dsmc backup image /btreefs1</pre>
イメージ・バックアップのリストア	<p>イメージ・バックアップをリストアする前にすべてのサブボリュームをアンマウントする必要があります。</p> <pre>dsmc restore image /btreefs1</pre>

Btrfs サブボリュームのバックアップとリストア

バックアップ/アーカイブ・クライアントの **incremental**、**selective**、**restore**、**archive**、および **retrieve** コマンドを使用して、Btrfs サブボリュームをバックアップまたはリストア、あるいはアーカイブおよびリトリブすることができます。

手順

1. サブボリュームをリストし、それらの ID を確認します。

```
btrfs subvolume list /btreefs1
ID 256 top level 5 path @
ID 262 top level 5 path @/btreefs1_sub1
```

2. サブボリュームのマウント・ポイントとして使用するディレクトリーを作成します。

```
mkdir /btreefs1_sub1
```

3. サブボリュームをマウントします。

例えば、サブボリュームを /btreefs1_sub1 にあるデバイス sdb1 にマウントするには、次の構文を使用します。 `mount -t btrfs -o subvolid=262 /dev/sdb1 /btreefs1_sub1`

以下の 1 つ以上の操作を使用して、サブボリュームを保護またはリカバリーします。

操作	コマンド
サブボリュームのバックアップ	増分バックアップと選択バックアップの両方がサポートされます。 <pre>dsmc incr /btreefs1_sub1</pre> <pre>dsmc sel /btreefs1_sub1/ -subdir=yes</pre>
サブボリュームのリストア	<pre>dsmc restore /btreefs1_sub1/ -subdir=yes -replace=yes</pre>
サブボリュームのアーカイブ	<pre>dsmc archive /btreefs1_sub1/ -subdir=yes</pre>
サブボリュームのリトリブ	<pre>dsmc retrieve /btreefs1_sub1/ -subdir=yes -replace=yes</pre>
Btrfs サブボリュームのスナップショットのバックアップ	サブボリュームのスナップショットを作成します。 btrfs subvolume snapshot コマンドを使用します。この例に指定されているスナップショット・ディレクトリーは、btreefs1_sub1 という名前のサブボリューム用の /btreefs1/btreefs1_sub1_snap ディレクトリーです。 <pre>btrfs subvolume snapshot /btreefs1/btreefs1_sub1 /btreefs1/btreefs1_sub1_snap</pre> バックアップ/アーカイブ・クライアントの incremental コマンドを発行します。スナップショット・ルート・オプションおよび Btrfs スナップショットのロケーションを指定します。 <pre>dsmc incr /btreefs1_sub1 -snapshotroot=/btreefs1 /btreefs1_sub1_snap</pre>

Network Data Management Protocol を使用した NAS ファイル・システムのバックアップ

Windows、AIX、および Solaris バックアップ/アーカイブ・クライアントは、Network Data Management Protocol (NDMP) を使用して、Network Attached Storage (NAS) ファイル・システム・イメージを効率的にバックアップおよびリストアすることができます。ファイル・システム・イメージは、ネットワーク・アプライアンスまたは EMC Celerra NAS ファイル・サーバーにローカル接続されている、自動化された磁気テープ・ドライブまたはライブラリーにバックアップしたり、ここからリストアしたりすることができます。あるいは、IBM Spectrum Protect サーバーにローカル接続されている磁気テープ・ドライブまたはライブラリーにバックアップしたり、ここからリストアしたりすることができます。

NDMP サポートは、IBM Spectrum Protect Extended Edition でのみ使用可能です。

Linux x86_64 クライアントの場合、増分バックアップは、NAS ファイル・システムのスナップショットのバックアップにも使用できます。詳細については、**incremental** コマンドおよび **snapshotroot**、**snappdiff**、**createnewbase**、および **diffsnapshot** オプションを参照してください。

NDMP サポートを構成後、サーバーは NAS デバイスに接続し、NDMP を使用して、それぞれのバックアップおよびリストア操作を開始、制御、モニターします。NAS 装置は、NAS ファイル・システムとの間の外部データ転送を、ローカル接続されたライブラリーに対して行います。

NDMP バージョン 4 をサポートする NAS デバイスでは、ファイラーからサーバーへのデータ転送が可能です。

NDMP を使用してバックアップを行うと次のような利点があります。

- LAN フリー・データ転送。
- ハイパフォーマンスでスケーラブルなバックアップとリストア。
- ネットワーク・トラフィックなしでのローカル磁気テープ装置へのバックアップ。

次のサポートが提供されています。

- NAS ファイル・システム内のすべてのファイルのファイル・システム・イメージ・バックアップ。
- 最後の完全イメージ・バックアップ以降に変更したすべてのファイルのファイル・システム差分イメージ・バックアップ。
- 複数 NAS ファイル・システムを処理するときの並列バックアップおよびリストア操作。
- バックアップおよびリストア操作の開始、モニター、取り消しで以下のインターフェースを選択可能。
 - バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI (IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.2 以降のサーバー、または V7.1.8 以降の V7 サーバーへの接続でのみ使用可能)
 - バックアップ/アーカイブ・クライアントのコマンド・ライン・インターフェース (IBM Spectrum Protect V8.1.1、V8.1.0、または V7.1.7 以前のサーバーへの接続でのみ使用可能)
 - 管理クライアント・コマンド・ライン・インターフェース (バックアップおよびリストア操作は、管理コマンド・スケジューラーを使用してスケジュールすることができます)
 - 管理 Web クライアント

以下の機能はサポートされません。

- アーカイブおよびリトリブ
- クライアント・スケジュール。NAS バックアップをスケジュールするにはサーバー・コマンドを使用してください。
- 損傷ファイルの検出。
- 以下のような IBM Spectrum Protect が保管した NAS データのデータ転送操作。
 - マイグレーション
 - レクラメーション
 - エクスポート
 - バックアップ・セット生成

関連概念

9 ページの『NDMP サポートの要件 (Extended Edition のみ)』

Network Data Management Protocol (NDMP) を使用すると、Network Attached Storage (NAS) ファイル・システムを、ネットワーク・アプライアンスおよび EMC Celerra NAS ファイル・サーバーにローカル接続されている磁気テープ装置またはライブラリーにバックアップおよびリストアすることができます。

454 ページの『NAS ファイル・システムの処理』

`include.fs.nas` オプションは、管理クラスを NAS ファイルシステムにバインドし、目次情報をファイル・システムのバックアップ用に保存するかどうかを制御するために使用します。

関連資料

382 ページの『Diffsnapshot』

`diffsnapshot` オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがスナップショット 差分増分バックアップを実行するときに、差分スナップショットを作成するかどうかを制御します。

689 ページの『Incremental』

incremental コマンドは、バックアップ・サービスから除外されていないすべての新規または変更されたデータを指定されたロケーションにバックアップします。

546 ページの『Snapdiff』

`snapdiff` (スナップショット 差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

557 ページの『Snapshotroot』

論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダー・アプリケーションで、**incremental** コマンド、**selective** コマンド、または **archive** コマンドに `snapshotroot` オプションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データに関連付けます。

NDMP プロトコルを使用したバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI での NAS ファイル・システムのバックアップ

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI およびクライアント・コマンド・ライン・インターフェースの両方とも、サーバーで、`passwordaccess=generate` と **set authentication=on** を指定する必要があります。

常にユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。NAS ノードを表示し、NAS 機能を行うには、許可された管理ユーザー ID とパスワードを入力する必要があります。許可された管理ユーザー ID は、コマンド・ラインまたはバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI から使用する NAS ノードおよびクライアント・ワークステーション・ノードの両方に対して少なくともクライアント所有者権限を持っていなければなりません。クライアント・ノードに対して NAS バックアップおよびリストア操作の権限を付与するように、IBM Spectrum Protect サーバーを構成する必要があります。

`toc` オプションをクライアント・オプション・ファイル内の `include.fs.nas` オプションと共に使用して、クライアントがファイル・システム・バックアップごとに目次 (TOC) 情報を保管するかどうかを指定できます。TOC 情報を保存する場合は、Windows バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用してファイル・システム・ツリー全体を調べ、リストアするファイルとディレクトリーを選択することができます。TOC を作成するには、バックアップ・イメージをバインドする管理クラスのバックアップ・コピー・グループで `TOCDESTINATION` 属性を定義する必要があります。TOC を作成するには、バックアップ操作中に追加の処理、ネットワーク・リソース、ストレージ・プール・スペース、および (通常は) マウント・ポイントが必要となります。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI は、IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.2 以降のサーバーまたは V7.1.8 以降の V7 サーバーに接続されている必要があります。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用して NAS ファイル・システムをバックアップするには、以下のようにします。

1. メイン・ウィンドウで「バックアップ」をクリックする。「バックアップ」ウィンドウが表示されます。

2. 必要ならディレクトリー・ツリーを展開します。

注:

- ノード** と呼ばれるルート・ノードは選択できません。このノードが表示されるのは、NAS プラグインがクライアント・ワークステーションに存在している場合だけです。
 - NAS ノードは、クライアント・ワークステーションのノードと同じレベルで表示されます。管理者が権限を持っているノードだけが表示されます。
 - NAS ノードを展開してファイル・スペースを表示することができますが、それ以上の展開はできません (ファイル名の表示は不可)。
- バックアップするノードまたはファイル・システムの横にある選択ボックスをクリックする。
 - バックアップ・タイプのプルダウン・メニューで、行いたいバックアップのタイプをクリックする。
NAS バックアップ・タイプ・リストがアクティブ状態であるのは、NAS バックアップ・オブジェクトを初めて選択した場合だけです。「**フルバックアップ**」は、ファイル・システム全体をバックアップします。「**差分**」は、最新のフルバックアップ以降の変更内容をバックアップします。
 - 「**バックアップ**」をクリックします。NAS バックアップの「**タスク・リスト**」ウィンドウにバックアップ処理の状況と 進行状況表示バーが表示されます。進行状況表示バーの横にある数値は、これまでにバックアップしたバイト数を示しています。バックアップの完了後に、処理の詳細 (バックアップした合計バイト数などのバックアップの実際のサイズを含む) が「**NAS バックアップ・レポート**」ウィンドウに表示されます。

注: バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI セッションのクローズが必要な場合は、切断後、現行の NAS 操作が続行されます。NAS バックアップの「**タスク・リスト**」ウィンドウの「**終了**」ボタンを使用して、現行操作を終了しないで、処理のモニターを終了することができます。

- (オプション) GUI メイン・ウィンドウから操作処理をモニターするには、「**アクション**」メニューをオープンして、「**IBM Spectrum Protect アクティビティー**」を選択する。バックアップ時には、ステータス・バーには処理状況が示されます。差分バックアップの推定パーセントは、表示されません。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用して NAS ファイル・システムをバックアップする場合は、以下の項目について考慮してください。

- 「**バックアップ**」ウィンドウで、ワークステーションおよびリモート (NAS) バックアップを同時に指定できません。バックアップの項目を選択した後、その後に選択する項目は同じタイプ (NAS または非 NAS のいずれか) でなければなりません。
- NAS ノードまたはファイル・システムの場合は、詳細は「**バックアップ**」ウィンドウの右側のフレームには表示されません。NAS ノードのオブジェクトに関する情報を表示させるには、そのオブジェクトを強調表示させ、メニューから「**表示**」 > 「**ファイル詳細**」を選択します。
- NAS ファイル・スペースを削除するには、「**ユーティリティー**」 > 「**ファイル・スペースの削除 (Delete Filespaces)**」を選択します。
- バックアップ・オプションは NAS ファイル・スペースには適用されず、NAS バックアップを実行する場合は無視されます。

関連概念

[454 ページの『NAS ファイル・システムの処理』](#)

`include.fs.nas` オプションは、管理クラスを NAS ファイルシステムにバインドし、目次情報をファイル・システムのバックアップ用に保存するかどうかを制御するために使用します。

[254 ページの『NAS ファイル・システムのリストア』](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI またはコマンド・ライン・インターフェースを使用して、NAS ファイル・システム・イメージをリストアします。

関連資料

[586 ページの『Toc』](#)

toc オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがファイル・システム・バックアップごとに目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定するために **backup nas** コマンドまたは **include.fs.nas** オプションとともに使用します。

関連情報

[クライアント・ノードに対して NAS バックアップおよびリストア操作の権限を付与するためのサーバーの構成](#)

コマンド・ラインを使用した NAS ファイル・システムのバックアップ

コマンド・ラインを使用して、NAS ファイル・システムのイメージをバックアップできます。

コマンド・ライン・クライアントは、IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.1、V8.1.0、および V7.1.7 以前のサーバーに接続している場合にのみ使用できます。IBM Spectrum Protect V8.1.2 以降のサーバーの場合は、管理コマンド・ライン・クライアント (**dsmadm**) でサーバー・コマンドを使用します。

213 ページの表 39 は、コマンド・ラインから NAS ファイル・システム・イメージをバックアップすることができる コマンドとオプションを示しています。

表 39. NAS オプションとコマンド

オプションまたはコマンド	定義	ページ
domain.nas	domain.nas オプションは、NAS バックアップ用にデフォルト・ドメインに包含するボリュームを指定します。	394 ページの『 Domain.nas 』
exclude.fs.nas	exclude.fs.nas オプションは、 backup nas コマンドと共に使用された場合に、NAS ファイル・サーバー上のファイル・システムを イメージ・バックアップから除外します。 このオプションは、AIX および Solaris クライアントの場合にのみ 使用します。	416 ページの『 Exclude オプション 』
include.fs.nas	include.fs.nas オプションは、管理クラスを Network Attached Storage (NAS) ファイル・システムにバインドするために使用します。クライアント・オプション・ファイルで include.fs.nas オプションと一緒に toc オプションを使用することで、NAS ファイル・システム・イメージ・バックアップ中に目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定することもできます。 このオプションは、AIX および Solaris クライアントの場合にのみ 使用します。	447 ページの『 include オプション 』
query node	query node コマンドは、特定の管理ユーザー ID が操作を実行する権限を持つ、すべてのノードを表示します。管理ユーザー ID は、使用する NAS ノードおよびクライアント・ワークステーション・ノードの両方に対して、少なくともクライアント所有者権限は持っている必要があります。	718 ページの『 Query Node 』
backup nas	backup nas コマンドは、Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属している 1 つ以上のファイル・システムのイメージ・バックアップを作成します。	668 ページの『 Backup NAS 』

表 39. NAS オプションとコマンド (続き)

オプションまたはコマンド	定義	ページ
toc	toc オプションは、ファイル・システム・バックアップごとに目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定するために、 backup nas コマンドまたは include.fs.nas オプションと一緒に使います。	586 ページの『Toc』
monitor process	monitor process コマンドは、管理ユーザーが権限を持つすべての NAS ノードの現行バックアップ・プロセスおよびリストア・プロセスを表示します。管理ユーザーは、そこで 1 プロセスを選択してモニターできます。	698 ページの『Monitor Process』
cancel process	cancel process コマンドは、管理ユーザーが権限を持つすべての NAS ノードの現行バックアップ・プロセスおよびリストア・プロセスを表示します。その表示から管理ユーザーは取り消すプロセスを 1 つ選択できます。	677 ページの『Cancel Process』
query backup	query backup コマンドで class オプションを使用して、NAS ファイル・サーバーでバックアップされたファイル・システム・イメージについての情報を表示します。	703 ページの『Query Backup』
query filesystem	query filesystem コマンドで class オプションを使用して、NAS ノードに属するファイル・スペースのリストを表示します。	710 ページの『Query Filespace』
delete filesystem	delete filesystem コマンドで class オプションを使用して、削除する対象を選択するために、NAS ノードに属するファイル・スペースのリストを表示します。	684 ページの『Delete Filespace』

- NAS ノードは新規ノード・タイプを表します。NAS ノード名は、NAS ファイル・サーバーとそのデータを IBM Spectrum Protect に対して固有に識別します。ファイル指定に NAS ノード名の接頭部を付けて、**include** ステートメントの適用されるファイル・サーバーを指定することができます。NAS ノード名を指定しないと、指定したファイル・システムがすべての NAS ファイル・サーバーに適用されます。
- クライアントのプラットフォームにかかわらず、NAS ファイル・システム 指定は、**/vol1/vol10** の例のように、スラッシュ (/) 区切り文字を使用します。

注: クライアント・コマンド・ライン・インターフェース、クライアント GUI、または Web クライアントを使用して NAS バックアップ操作を開始すると、サーバーは、操作を開始し、制御し、モニターするプロセスを開始します。データ移動が起こる前に、サーバーでマウント操作および他の必要なタスクを行わなければならないので、クライアント・コマンド・ライン・インターフェースの進行に気付くまでに少し時間がかかることがあります。

関連資料

[586 ページの『Toc』](#)

toc オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがファイル・システム・バックアップごとに目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定するために **backup nas** コマンドまたは **include.fs.nas** オプションとともに使用します。

ネットワーク・ファイル・システムのバックアップ

バックアップ/アーカイブ・クライアントを構成して、ネットワーク・ファイル・システム (NFS) プロトコルまたは共通インターネット・ファイル・システム (CIFS) プロトコルのいずれかを使用してアクセスされるファイルを保護することができます。

ファイル・システムが物理的に存在している場所にバックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールすると、バックアップのパフォーマンスは向上します。しかし、リモートの共用ドライブ上のデータをバックアップまたはリカバリーするために NFS または CIFS を使用してファイル・システムにアクセスすることが必要になる場合があります。AIX、Linux、Mac OS X、および Solaris オペレーティング・システム上のバックアップ/アーカイブ・クライアントは、NFS または CIFS でマウントされた共有ドライブ上のファイル・データをバックアップ、アーカイブ、リストア、およびリトリブすることができます。これらの操作は、NFS プロトコルと SMB プロトコルのすべてのバージョン (NFS バージョン 2、NFS バージョン 3、NFS バージョン 4、classic CIFS/SMBv1、SMB バージョン 2.002、SMB バージョン 2.1、および SMB バージョン 3.0) で有効です。

NFS バージョン 4 を使用するようにバックアップ/アーカイブ・クライアントが構成されている場合は、アクセス制御リストをバックアップおよびリストアすることができます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントでネットワーク・ファイル・システム・ボリューム上のデータを保護する場合には、以下の制約事項が適用されます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ネットワーク・ファイル・システム・ボリュームのイメージ・バックアップを実行することはできません。
- AIX 上のバックアップ/アーカイブ・クライアントは、ネットワーク・ファイル・システム・ボリュームのスナップショット・ベースのファイル・バックアップおよびファイル・アーカイブを実行することはできません。
- バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ネットワーク・ファイル・システム・ボリュームのジャーナル・ベースのバックアップを実行することはできません。
- NetApp ボリューム・スナップショットへのアクセスに NFS プロトコルが使用されている場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、それらのスナップショットにバックアップできない場合があります。NetApp ファイラーがそのボリューム・スナップショットに異なる装置 ID を提供している場合、これらのスナップショットはバックアップから除外される場合があります。この動作は、OS のバージョン、NetApp ファイラーのバージョン、およびその設定によって異なります。

グローバル名前空間機能を使用した NFS ファイル・システムのバックアップ

NFS V4 クライアントは、グローバル・ネームスペース機能 (参照と呼ばれます) を使用して マウントされた NFS ファイル・システムをバックアップできます。グローバル・ネームスペース内のすべてのファイル・システムは、単一のファイル・スペースの下にバックアップされます。

以下の例では、グローバル・ネームスペース内のファイル・システムが単一のファイル・スペースの下にバックアップされます。

```
server 'publications' has /doc file system
server 'projects' has /projects file system
server 'data' has /data file system
```

サーバー account1 は、参照を使用してこれらのすべてのファイル・システムをエクスポートするメインの NFS サーバーであり、すべてのクライアントが認識するサーバーです。account1 の /etc/exports ディレクトリーは次の例のようになります。

```
/doc -vers=4,refer=/doc@publications
/projects -vers=4,refer=/projects@projects
/data -vers=4,refer=/data@data
```

クライアント payroll は、account1 サーバーからディレクトリーをマウントし、次の 3 つのファイル・システムすべてにアクセスできます。

```
payroll: /#mount -o vers=4 account1: /mnt
payroll: /#ls /mnt
doc/ projects/ data/
```

クライアント payroll は、/mnt ファイルを 1 つの NFS ファイル・システムとしてバックアップすることで、他のすべてのファイル・システムをバックアップすることができます。

重要: virtualmountpoint オプションを使用すると、グローバル名前空間を使用して NFSV4 ファイル・システムをバックアップするときのシステム・パフォーマンスを向上することができます。dsm.sys 内のスタンザに次の項目を追加して、マウントされた各ディレクトリーを個別のファイル・スペースとしてバックアップします。

```
VIRTUALMOUNTPOINT /doc
VIRTUALMOUNTPOINT /projects
VIRTUALMOUNTPOINT /data
```

AIX ワークロード区画ファイル・システムのバックアップ

AIX でバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用すると、グローバル区画内部で使用可能なローカル区画名前空間を使用して、そのグローバル区画内のローカル区画ファイル・データをバックアップおよびリストアできます。

それぞれのワークロード区画 (WPAR) には独自のセキュリティー・ドメインがあるので、すべてのデータへのアクセス権を付与されているのはグローバル root ユーザーのみです。

WPAR は、完全にソフトウェア的に単一の AIX システム・イメージ内部に作成される区画で、以下の属性を持っています。

- 通常、WPAR は、完全なスタンドアロン AIX システムとみなされます。
- ハードウェア支援または構成はありません。

ワークロード区画は、プロセス、シグナル、およびファイル・システム・スペースという点から見てセキュアで分離された環境を、エンタープライズ・アプリケーションに提供します。ワークロード区画のコンテキスト内で実行されるソフトウェアは、独自の AIX の分離インスタンスを持つものとみなされます。

次の例は、グローバル WPAR 内部から指定した WPAR 構成を示しています。

Global partition:

System name: shimla
File system: /home /opt

WPAR #1 configuration:

Name: wpar1
File system: /home; name in global WPAR: /wpars/wpar1/home

WPAR #2 configuration:

Name: wpar2
File system: /data; name in global WPAR: /wpars/wpar2/data

以下のように、2 つの方法で WPAR データをバックアップできます。

- すべての WPAR ファイル・システムを、グローバル区画内のファイル・スペースとしてバックアップする。ファイル・スペース名を使用して、そのスペースが所属する WPAR を識別する必要があります。すべてのデータは、1 つのスケジュールを使用して 1 つのノードで管理されます。以下の例では構成例を使用しています。この例の dsm.sys ファイルでは、すべてのファイル・システム (グローバルとローカルの両方) について 1 つのサーバー・スタンザを指定しています。

```
Sservername shimla
TCPport 1500
TCPserveraddress server.example.com
nodename shimla
```

PasswordAccess	generate
Domain	/wpars/wpar1/home /wpars/wpar2/data /home /opt

- それぞれの WPAR ファイル・システムを異なるノード名でバックアップする。この方法では、それぞれの WPAR に別個のファイル・スペース名が与えられます。各 WPAR には、別個のノード名、およびグローバル区画の中で実行されるスケジューラーが必要です。また、3つのスケジューラー・サービスは、それぞれのサーバー・スタンザ名に対応する異なる dsm.opt ファイルを使用してセットアップする必要があります。この方式では、それぞれの WPAR バックアップ操作をその他の操作から独立させて管理することができます。以下の例では構成例を使用しています。この例の dsm.sys ファイルでは、3つのサーバー・スタンザ (wpar1 用、wpar2 用、およびグローバル区画 shimla 用) を指定しています。

```

SErvername  shimla_wpar1
TCPPort      1500
TCPSeveraddress  server.example.com
nodename      wpar1
PasswordAccess  generate
Domain        /wpars/wpar1/home

SErvername  shimla_wpar2
TCPPort      1500
TCPSeveraddress  server.example.com
nodename      wpar2
PasswordAccess  generate
Domain        /wpars/wpar2/data

SErvername  shimla
TCPPort      1500
TCPSeveraddress  server.example.com
nodename      shimla
PasswordAccess  generate
Domain        /home /opt

```

Solaris Zettabyte ファイル・システムのバックアップ

Solaris SPARC システムおよび Solaris x86 システムで、ZFS スナップショットを使用して、Zettabyte ファイル・システム (ZFS) をバックアップすることができます。通常の増分バックアップまたは選択バックアップでのこの手法の利点は、スナップショット内のファイルおよびフォルダーが常に読み取り専用状態であるため、それらをバックアップ中に変更できないことです。

このタスクについて

ZFS スナップショットは、Oracle Solaris ZFS コマンドを使用して作成します。例えば、次のようにします。

```
zfs snapshot tank/myZFS@mySnapshot
```

この例では、ZFS プール名は tank で、ZFS ファイル・システム名は myZFS です。この ZFS スナップショットに属するファイルは、tank/myZFS/.zfs/snapshot/mySnapshot/ というサブディレクトリー内にあります。

手順

以下の 2つの方法のいずれかを使用して、ZFS スナップショットをバックアップします。

- snapshotroot オプションを使用して、スナップショットの個々のファイルをバックアップする。例えば、次のようにします。

```
dsmc inc -snapshotroot=/tank/myZFS/.zfs/snapshot/mySnapshot /tank/myZFS
```

このオプションでは、管理者が、現行スナップショットのパスを ZFS ファイル・システムのパスに置き換えることができるため、ファイルおよびフォルダーが元のファイル・システムの下にバックアップされます。

- Oracle Solaris ZFS コマンドを使用して、完全なスナップショットをバックアップする。例えば次のとおりです。


```
zfs send tank/myZFS@mySnapshot > /tmpdir/mySnapshotFile
```

スナップショット全体をバックアップする利点は、災害復旧のシナリオでファイル・システム全体をリストアできることです。

関連概念

262 ページの『Solaris Zettabyte (ZFS) ファイル・システムのリストア』

Zettabyte ファイル・システム (ZFS) は、ストレージ・プールを使用して物理ストレージを管理します。

関連資料

557 ページの『Snapshotroot』

論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダー・アプリケーションで、**incremental** コマンド、**selective** コマンド、または **archive** コマンドに snapshotroot オプションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データに関連付けます。

AIX JFS2 暗号化ファイル・システムのバックアップ

AIX JFS2 暗号化ファイル・システム (EFS) は、ファイルを平文形式またはロー形式でバックアップするために使用します。平文形式の場合は、ファイルは、読み取られるにつれて EFS によって復号されます。ロー形式の場合は、データは復号されません。デフォルトはロー形式になりますが、**efsdecrypt** オプションを **yes** に設定すると、平文のバックアップを取得することができます。

このタスクについて

重要: EFS で暗号化されたファイルを含むバックアップを実行する場合は、必ず **efsdecrypt** オプションが正しく指定されていることを確認する必要があります。2 つの増分バックアップ間での **efsdecrypt** オプション値を変更した場合は、それらのバックアップが最後のバックアップ以降に変更されていなくても、EFS ファイル・システム上のすべての暗号化されたファイルは、再度、バックアップされます。例えば、ロー形式で前にバックアップされた暗号化ファイルの増分バックアップを実行する場合は、**efsdecrypt** を **no** に設定してあることを確認してください。**efsdecrypt** を **yes** に変更すると、ファイルが変更されていない場合でも、すべてのファイルが平文で再度バックアップされます。したがって、このオプションの使用には注意が必要です。

暗号化されたファイルを EFS をサポートしないワークステーションまたは EFS が活動状態でないファイル・システムにリストアしようとする、エラー・メッセージが書き込まれ、そのファイルはスキップされます。

EFS のバックアップに平文の暗号化を使用することには、理由がいくつかあります。

- このタイプの復号は IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアント暗号化や、別のタイプのハードウェア暗号化 (例えば、テープ・システム用のものなど) を使用したい場合に便利です。
- データがプラットフォームまたは暗号化方式とは独立して保管されるため、データの長期アーカイブには、平文を使用できます。

ファイルを平文でバックアップする場合には、以下のことを考慮する必要があります。

- バックアップ/アーカイブ・クライアントを起動するユーザーはその復号ができなければなりません。
- そのユーザーはファイルへの読み取り権限は持てますが、鍵へのアクセス権限を持つことはできません。

以下のシナリオでは、エラー・メッセージが出されます。

手順

1. ユーザーはルート・ガード・モードで実行中であり、EFS には 2 つのタイプのルートの概念があります。ルート管理は従来のモードです。ガード・モードのルートは、ユーザーがファイルの所有者であるかファイル・グループのメンバーでない限り、暗号化されていないデータにはアクセスできません。
2. ユーザーはルート以外のユーザー ID で実行中であり、自身が読み取り権限を持つファイルのアーカイブを試みているが、そのユーザーはファイルの所有者でもなく、ファイル・グループのメンバーでもありません。EFS はこのデータを復号することを許可しません。

タスクの結果

EFS 生データをバックアップする際の考慮事項は次のとおりです。

- バックアップ/アーカイブ・クライアントはクライアントの暗号化設定をサポートしません。これにより暗号化が二重に行われることはなくなり、クライアントのみで暗号化が行われます。サーバーはデータが暗号化されていることを認識しないため、テープ・ドライブなどで行われる暗号化もそのまま実施されます。
- クライアントは圧縮設定をサポートしないため、クライアントはデータを圧縮しません (圧縮しようとすることもありません)。
- クライアントは鍵ストア・ファイルを自動的にバックアップまたはリストアしません。暗号化されたファイルをリストアするときは、鍵ストアも暗号化しないとデータを復号できません。

ヒント:

1. 鍵ストアを保護するために、/var/efs の内容が定期バックアップに組み込まれていることを確認してください。
 2. 鍵ストア・データには、バージョン数に制限のない IBM Spectrum Protect ストレージ・ポリシーを使用してください。
- ロー・モード (デフォルト) でバックアップされた暗号化ファイル・システム・ファイルを、V5.5 より前のバックアップ/アーカイブ・クライアント、または別の UNIX プラットフォーム上のクライアントによってリストアすることはできません。

AIX JFS2 拡張属性のバックアップ


AIX Enhanced Journal File System (JFS2) は、名前付き拡張属性をサポートするすべてのファイル・システムに対して、名前付き拡張属性のバックアップを提供します。

これらの拡張属性は拡張属性データを含む各オブジェクトとともに自動的にバックアップされるため、追加のアクションは必要ありません。

ファイル・システムが v2 フォーマットで定義されている場合、名前付き拡張属性をサポートするファイル・システムは JFS2 のみです。ファイルおよびディレクトリーの拡張属性では JFS2 を使用できますが、シンボリック・リンク上の拡張属性では JFS2 を使用することはできません。

VMware 仮想マシンのバックアップ

バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用して、VMware 仮想マシン (VM) をバックアップおよびリストアできます。仮想マシンのフルバックアップは、ディスク・イメージ・レベルで動作します。増分バックアップでは、前回のフルバックアップ以降に変更されたデータのみがコピーされます。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

220 ページの表 40 には、バックアップ/アーカイブ・クライアントが Linux プラットフォームに実装できる VMware 仮想マシンのバックアップおよびリストア機能を示します。

表 40. Linux プラットフォームの VMware 仮想マシンのバックアップおよびリストア機能

機能	説明
フル VM 永久増分バックアップ:	<p>増分バックアップを作成する前に、フル VM バックアップが必要です。永久増分バックアップをスケジュールすれば、フルバックアップがまだ作成されていない場合、最初のバックアップでこのバックアップ・タイプが自動的に選択されます。増分バックアップからのデータは、フルバックアップからのデータと結合されて、合成のフルバックアップ・イメージを作成します。その後のフル VM 永久増分バックアップでは、すべての使用されたブロックを読み取り、それらのブロックを IBM Spectrum Protect サーバーにコピーします。各フル VM 永久増分バックアップでは、前回のバックアップ以降にブロックが変更されたかどうかに関係なく、すべての使用されたブロックを読み取り、コピーします。フルバックアップはもう必要ありませんが、フル VM バックアップをそれでもスケジュールできます。例えば、フル VM バックアップを実行して、別の保存設定を持つ別のノード名にバックアップを作成する場合があります。</p> <p>クライアントがバックアップ・データを暗号化するように構成されている場合、VMware 仮想マシンのバックアップにはこのバックアップ・モードを使用できません。</p>
増分永久増分 VM バックアップ:	<p>フル VM バックアップを 1 回のみ作成する必要があります。フル VM バックアップは、仮想マシンの所有する使用されたすべてのディスク・ブロックを IBM Spectrum Protect サーバーにコピーします。初期フルバックアップの完了後、その後のすべての仮想マシンのバックアップは、増分永久増分バックアップとなります。各増分永久増分バックアップは、前回のバックアップ (前回のバックアップのタイプにかかわらず) 以降、変更があったブロックのみをコピーします。サーバーは前回以前のバックアップからサーバーに既に保管されているデータに、最新のバックアップからの変更されたブロックを関連付けるグループ化技法を使用します。増分永久増分バックアップにより、変更されたブロックがサーバーにコピーされる毎に、新しいフルバックアップが結果として効率的に作成されます。</p> <p>増分永久増分バックアップ・モードには、以下の利点があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 仮想マシンのバックアップの効率を改善します。 ・ データ・リストア操作を単純にします。 ・ データ・リストア操作を最適化します。 <p>リストア操作時に、データをリカバリーする時刻指定と日指定のオプションを指定できます。データは、元のフルバックアップ、およびデータに関連付けられている変更されたブロックからリストアされます。</p> <p>クライアントがバックアップ・データを暗号化するように構成されている場合、VMware 仮想マシンのバックアップにはこのバックアップ・モードを使用できません。</p>
仮想マシンのフルバックアップからのファイルおよびフォルダーのアイテム・リカバリー:	<p>仮想マシンのフルバックアップからファイルおよびフォルダーをリカバリーできます。項目のリカバリーは、IBM Spectrum Protect リカバリー・エージェントでのみ使用可能です。</p>
仮想マシンのフルリストア:	<p>ファイル・システム、仮想ディスク、仮想マシン構成のすべてをリストアします。</p>

関連概念

[224 ページの『仮想マシンの並列バックアップ』](#)

並列バックアップ処理では、単一のデータ・ムーバー・ノードを使用して、複数の仮想マシン (VM) をバックアップすると同時に、バックアップ・パフォーマンスを最適化することができます。

関連タスク

221 ページの『VMware 仮想マシンのフルバックアップのための環境の準備』

VMware 仮想マシン全体のバックアップのための VMware 環境を準備するには、以下の手順を実行します。vStorage バックアップ・サーバーは、Windows または Linux クライアントのいずれかを実行できます。


222 ページの『VMware 仮想マシンのフルバックアップの作成』

VMware 仮想マシンのフルバックアップは、仮想ディスクおよび仮想マシン構成ファイルを含む仮想マシン全体のバックアップです。このタイプのバックアップは、イメージ・バックアップに似ています。フルバックアップを作成するには、vStorage バックアップ・サーバーのバックアップ/アーカイブ・クライアントを構成します。vStorage バックアップ・サーバーでは、Windows クライアントまたは Linux クライアントを実行している必要があります。

VMware 仮想マシンのフルバックアップのための環境の準備

VMware 仮想マシン全体のバックアップのための VMware 環境を準備するには、以下の手順を実行します。vStorage バックアップ・サーバーは、Windows または Linux クライアントのいずれかを実行できます。

始める前に

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

手順

- バックアップのためのストレージ環境を構成するには、以下の手順を実行します。
 - ESX サーバー・ファーム内のストレージ・ボリュームに vStorage バックアップ・サーバーがアクセスできるように、ストレージ環境を構成します。
 - Network Attached Storage (NAS) または直接制御機構ストレージを使用している場合は、必ず vStorage バックアップ・サーバーが、ネットワーク・ベースのトランスポートを使用してボリュームにアクセスしていることを確認してください。
 - オプション: データ・アクセスに対して、次の設定を行います。
 - vStorage バックアップ・サーバーが VMware データ・ストアをホスティングするストレージ 論理装置 (LUN) へのアクセスに使用できるストレージ・エリア・ネットワーク (SAN) ゾーンを作成します。
 - すべての ESX サーバーおよびバックアップ・プロキシが同一のディスク・ボリュームにアクセスできるように、ディスク・サブシステムのホスト・マッピングを構成します。
- vStorage バックアップ・サーバーを構成するには、以下の手順を実行します。
 - クライアント・インストール・ディレクトリーを指すように **LD_LIBRARY_PATH** 環境変数を設定し、エクスポートします。例えば、次のようにします。

```
export LD_LIBRARY_PATH=/opt/tivoli/tsm/client/ba/bin
```
 - バックアップ/アーカイブ・クライアントのコマンド (**dsmc**、**dsmcad**、または **dsmj** など) を使用する各アカウントのパスにクライアント・インストール・ディレクトリーを追加します。
- IBM Spectrum Protect を変更するには、以下の手順を実行します。
 - バックアップ/アーカイブ・クライアントの管理コマンド・ラインにアクセスします。
 - vStorage バックアップ・サーバー上のバックアップ/アーカイブ・クライアントから、次のコマンドを実行してノードを登録します。

```
register node my_server_name my_password
```

ここで、**my_server_name** は vStorage バックアップ・サーバーの完全なコンピューター名で、**my_password** はサーバーにアクセスするためのパスワードです。

関連タスク

[222 ページの『VMware 仮想マシンのフルバックアップの作成』](#)

VMware 仮想マシンのフルバックアップは、仮想ディスクおよび仮想マシン構成ファイルを含む仮想マシン全体のバックアップです。このタイプのバックアップは、イメージ・バックアップに似ています。フルバックアップを作成するには、vStorage バックアップ・サーバーのバックアップ/アーカイブ・クライアントを構成します。vStorage バックアップ・サーバーでは、Windows クライアントまたは Linux クライアントを実行している必要があります。

関連資料

[670 ページの『Backup VM』](#)

[723 ページの『Query VM』](#)

query VM コマンドは、正常に完了した仮想マシン (VM) のバックアップをリストし、検査するために使用します。

[747 ページの『Restore VM』](#)

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

[602 ページの『Vmchost』](#)

vmchost オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのホスト名を指定します。

[602 ページの『Vmcpsw』](#)

vmcpw オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、vmcuser オプションによって指定された VMware VirtualCenter または ESX ユーザー ID のパスワードを指定します。

[604 ページの『Vmcuser』](#)

vmcuser オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのユーザー名を指定します。


[639 ページの『Vmvstortransport』](#)

vmvstortransport オプションは、VMware 仮想マシンをバックアップまたはリストアする際に使用する、トランスポートの優先順序 (階層) を指定します。このオプションを使用して所定のトランスポートを組み込まない場合は、そのトランスポートは除外され、データの転送には使用されません。

VMware 仮想マシンのフルバックアップの作成

VMware 仮想マシンのフルバックアップは、仮想ディスクおよび仮想マシン構成ファイルを含む仮想マシン全体のバックアップです。このタイプのバックアップは、イメージ・バックアップに似ています。フルバックアップを作成するには、vStorage バックアップ・サーバーのバックアップ/アーカイブ・クライアントを構成します。vStorage バックアップ・サーバーでは、Windows クライアントまたは Linux クライアントを実行している必要があります。

始める前に

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合のみ使用可能です。

手順

1. 環境を準備するために、次のトピックの手順を実行します。

[221 ページの『VMware 仮想マシンのフルバックアップのための 環境の準備』](#)

2. vStorage バックアップ・サーバーのバックアップ/アーカイブ・クライアントを構成するために、以下の手順を実行します。
 - a) バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI のウェルカム・ページから、「編集」 > 「クライアント・プリファレンス」をクリックします。
 - b) 「**VM バックアップ**」タブを選択します。

- c) 「**VMWare フル VM**」を選択します。
- d) 「**ドメイン・バックアップ・タイプ**」リストから、「**ドメイン・フル VM**」を選択します。
- e) 「**ホスト**」フィールドに、各 ESX サーバーのホスト名、または Virtual Center のホスト名を入力します。Virtual Center を指定した場合は、その Virtual Center によって管理されているどの VMware サーバーからも仮想マシンをバックアップすることができます。
- f) 「**ホスト**」フィールドで指定したホストのユーザー ID とパスワード情報を入力します。
- g) オプション: フル仮想マシン・バックアップのデフォルト管理クラスをオーバーライドする場合には、使用する管理クラスを指定してください。
- h) 「**データ・ストア・ロケーション**」フィールドに、ファイルを格納するディレクトリーへのパスを入力します。
- i) 「**OK**」をクリックして変更を保存します。

3. いずれか 1 つの仮想マシンのバックアップを作成するために、以下の手順を実行します。

- a) vStorage バックアップ・サーバーのコマンド・ラインで、次のコマンドを実行します。

```
dsmc backup vm my_vm_name -mode=iffull -vmbackuptype=fullvm
```

ここで、*my_vm_name* は仮想マシンの名前です。

- b) コマンドがエラーなしで完了したことを確認してください。次のメッセージがあれば、正常に完了しています。

```
Backup VM command complete
Total number of virtual machines backed up successfully: 1
virtual machine vmname backed up to nodename NODE
Total number of virtual machines failed: 0
Total number of virtual machines processed: 1
```

4. 仮想マシンのファイルをリストアできることを確認するために、以下の手順を実行します。

- a) vStorage バックアップ・サーバーのコマンド・ライン・インターフェースで、次のコマンドを実行します。

```
dsmc restore vm my_vm_name
```

- b) リストア処理でエラーが発生した場合は、クライアント・エラー・ログで詳細情報を確認してください。

ヒント: ログ・ファイルは、`/opt/ibm/Tivoli/TSM/baclient/dsmerror.log` に保存されます。

関連概念

224 ページの『[仮想マシンの並列バックアップ](#)』

並列バックアップ処理では、単一のデータ・ムーバー・ノードを使用して、複数の仮想マシン (VM) をバックアップすると同時に、バックアップ・パフォーマンスを最適化することができます。

関連タスク

221 ページの『[VMware 仮想マシンのフルバックアップのための環境の準備](#)』

VMware 仮想マシン全体のバックアップのための VMware 環境を準備するには、以下の手順を実行します。vStorage バックアップ・サーバーは、Windows または Linux クライアントのいずれかを実行できます。

関連資料

670 ページの『[Backup VM](#)』

395 ページの『[Domain.vmfull](#)』

`domain.vmfull` オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

723 ページの『[Query VM](#)』

query VM コマンドは、正常に完了した仮想マシン (VM) のバックアップをリストし、検査するために使用します。

747 ページの『[Restore VM](#)』

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

482 ページの『mode』

mode オプションを使用して、特定のバックアップ操作の実行時にバックアップ・モードを指定します。

602 ページの『Vmchost』

vmchost オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのホスト名を指定します。

602 ページの『Vmcpw』

vmcpw オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、vmcuser オプションによって指定された VMware VirtualCenter または ESX ユーザー ID のパスワードを指定します。

604 ページの『Vmcuser』

vmcuser オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのユーザー名を指定します。

621 ページの『Vmmc』

vmmc オプションは、デフォルト管理クラス以外の管理クラスを使用して仮想マシン・バックアップを保管するために使用します。VMware VM バックアップでは、vmmc オプションは、vmbackuptype=fullvm オプションが設定されている場合にのみ有効です。

639 ページの『Vmvstortransport』

vmvstortransport オプションは、VMware 仮想マシンをバックアップまたはリストアする際に使用する、トランスポートの優先順序 (階層) を指定します。このオプションを使用して所定のトランスポートを組み込まない場合は、そのトランスポートは除外され、データの転送には使用されません。

仮想マシンの並列バックアップ

並列バックアップ処理では、単一のデータ・ムーバー・ノードを使用して、複数の仮想マシン (VM) をバックアップすると同時に、バックアップ・パフォーマンスを最適化することができます。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

並列バックアップ操作については、[複数の仮想マシンの並列バックアップ](#)を参照してください。

Tivoli Storage Manager FastBack のデータのバックアップおよびアーカイブ

短期保存用に最新のスナップショットをバックアップおよびアーカイブするには、Tivoli Storage Manager FastBack を使用します。

短期保存用に fbpolycyname、fbclientname、および fbvolumename オプションによって指定されたボリュームをアーカイブおよびバックアップするには、**archive fastback** および **backup fastback** コマンドを使用します。

関連概念

9 ページの『Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップおよびアーカイブするためのインストール要件』

FastBack クライアント・データをバックアップまたはアーカイブするには、必要なソフトウェアを事前にインストールしておく必要があります。

105 ページの『Tivoli Storage Manager FastBack データをバックアップおよびアーカイブするためのクライアントの構成』

Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップあるいはアーカイブする前に、構成タスクを完了する必要があります。

関連資料

424 ページの『Fbclientname』

fbclientname オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

425 ページの『Fbpolicyname』

fbpolicyname オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

428 ページの『Fbvolumename』

fbvolumename オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

バックアップ処理の状況の表示

増分バックアップ時には、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップを試みている各ファイルの状況をデフォルトとして表示します。

クライアントは、サイズ、パス、ファイル名、転送済みバイトの合計数、およびファイルのバックアップの試行が正常に行われたかどうかについて報告します。これらは、スケジュール・コマンドの `dsmsched.log` ファイルにも記録されます。

Web クライアントおよびバックアップ/アーカイブ・クライアント Java GUI には、処理中のファイルについての情報を表示する「タスク・リスト」ウィンドウがあります。タスクが完了すると、「バックアップ・レポート」ウィンドウに処理の詳細が表示されます。「バックアップ・レポート」ウィンドウの「ヘルプ」ボタンを押せば、コンテキスト・ヘルプを見ることができます。

バックアップ/アーカイブのコマンド・ラインには、サーバーに送信後の各ファイルの名前が表示されます。進行標識では、全体的な進行状況が示されます。

225 ページの表 41 では、一部の通知メッセージと意味を示しています。

表 41. クライアント・コマンド・ライン通知メッセージ

通知メッセージ	意味
Directory-->	バックアップするディレクトリーを示す。
Normal File-->.	ディレクトリー、シンボリック・リンクあるいは特殊ファイルを除く任意のファイル。
Special File-->	特殊ファイルは、システム用の装置またはプロセスによって作成される一時ファイルを定義する。特殊ファイルには、FIFO (先入れ先出し法)、ブロック、および文字という 3 つの基本型があります。FIFO ファイルはパイプとも呼ばれます。パイプは 1 つのプロセスによって作成され、一時的に別のプロセスとの通信を可能にします。これらのファイルは、最初のプロセスが終了すると無くなります。ブロックおよび文字ファイルは装置を定義します。クライアントは装置および名前付きパイプの特殊ファイルのみを処理します。ソケット特殊ファイルは処理されない。
Symbolic Link-->	クライアントがシンボリック・リンクをバックアップすることを示す。
Updating-->	データ自体でなく、ファイルのメタデータのみが送信されることを示す。
Expiring-->	クライアントに存在していないサーバー上のオブジェクト (ファイルまたはディレクトリー) が期限切れになり、サーバー上で非アクティブにされたことを示す。

表 41. クライアント・コマンド・ライン通知メッセージ (続き)

通知メッセージ	意味
Total number of objects inspected:	表示のとおり。ジャーナル・ベースのバックアップを使用する場合、検査済みのオブジェクト数がバックアップされたオブジェクト数より少ないことがあります。 スナップショット 差分増分バックアップの使用時には、検査済みオブジェクト数はゼロになります。数がゼロなのは、クライアントが、NetApp が変更済みと報告したファイルの増分バックアップを実行するからです。クライアントは、変更済みのファイルを探してボリュームをスキャンすることはありません。
Total number of objects backed up:	表示のとおり。
Total number of objects encrypted:	これは、バックアップまたはアーカイブの処理中に暗号化されたオブジェクトの数です。
Data encryption type:	1つ以上のオブジェクトをバックアップまたはアーカイブ処理中に暗号化する場合、暗号化アルゴリズム・タイプ (256 ビット AES など) を指定します。
Total number of objects updated:	これには、ファイル所有者やファイル許可などといった属性が変更されたファイルが含まれる。
Total number of objects rebound:	詳しくは、305 ページの『ファイルへの管理クラスのバインド』を参照してください。
Total number of objects deleted:	サーバーで正常にアーカイブされた後でクライアント・ワークステーションから削除されたオブジェクトのカウント。すべてのバックアップ・コマンドに対してはカウントはゼロである。
Total number of objects expired:	詳しくは、フルバックアップおよび増分バックアップのセクションを参照してください。
Total number of objects failed:	オブジェクトが失敗する理由としては、複数の要因が考えられる。詳細については、dsmerror.log を調べます。
Total snapshot difference objects:	スナップショット 差分の増分バックアップの場合、バックアップされたオブジェクトの総数および有効期限が切れたオブジェクトの総数を示す。
Total objects deduplicated:	重複排除されたファイルの数を示す。
Total number of bytes inspected:	その操作で選択されたファイルのサイズの合計を示す。例えば、このコマンドに関して検査されるバイトの合計数は、ボリューム / Volumes/BUILD: で使用されるバイト数です。 <pre>dsmc INCREMENTAL /Volumes/BUILD/* -SU=Yes</pre>
Total bytes before deduplication:	クライアントが冗長データを除去しない場合に、IBM Spectrum Protect サーバーに送信するバイトの数を示す。この数量を Total bytes after deduplication と比較してください。メタデータ・サイズを含み、検査されるバイトより大きい場合があります。
Total bytes after deduplication:	クライアント・コンピューター上のファイルの重複排除後に IBM Spectrum Protect サーバーに送信されるバイトの数を示す。メタデータ・サイズを含み、処理されるバイトより大きい場合があります。
Total number of bytes processed:	その操作で処理されるファイルのサイズの合計を示す。

表 41. クライアント・コマンド・ライン通知メッセージ (続き)

通知メッセージ	意味
Data transfer time:	<p>バックアップ、アーカイブ、リストア、またはリトリブの各セッションで、ネットワークを介してデータを送信するのに要した時間の合計。この数値には、データが送信される前にクライアントがディスクからデータを読み取るのに要した時間、およびサーバー・トランザクションが完了するまで待機した時間は含まれません。</p> <p>操作で複数の並行セッションを使用してデータを移動している場合 (マルチセッションのバックアップ操作やリストア操作など)、この数値が経過処理時間より大きくなる可能性があります。</p> <p>この数値には、バックアップ操作中にファイルが変更された場合など、再試行のために複数回データを送信するのに要した時間が含まれます。</p>
Network data transfer rate:	<p>ネットワークがクライアントとサーバーの間でデータを転送する平均速度。この統計は、転送された合計バイト数を、ネットワーク上でのデータ転送に要した時間で除算することで計算されます。この統計には、データが送信される前にクライアントがディスクからデータを読み取るのに要した時間、およびサーバー・トランザクションが完了するまで待機した時間は含まれません。</p>
Aggregate data transfer rate:	<p>バックアップ、アーカイブ、リストア、またはリトリブ操作中に転送された合計バイト数を、操作の合計経過時間で除算した値。</p>
Objects compressed by:	<p>ネットワーク上を送信されたデータのパーセンテージを、ディスク上のファイルの元のサイズで割った値で示す。例えば、ネットワーク・データ・バイト数が 10K で、ファイルが 100K の場合は、圧縮されたオブジェクトは、$== (1 - (10240/102400)) \times 100 == 90\%$ です。</p>
Total number of objects grew:	<p>圧縮の結果として増加した、圧縮されずに再送信されたファイルの総数。</p>
Deduplication reduction:	<p>検出された重複エクステンツのサイズを、初期ファイルまたはデータ・サイズで除算した値を示す。例えば、初期オブジェクト・サイズが 100 MB の場合、重複排除後は 25 MB になります。減少は $(1 - 25/100) \times 100 = 75\%$ の式で求められます。</p>
Total data reduction ratio:	<p>増分および圧縮の結果を追加する。例えば、検査されたバイト数が 100 MB で、送信されたバイト数が 10 MB の場合、減少は $(1 - 10/100) \times 100 = 90\%$ の式で求められます。</p>
Elapsed processing time:	<p>コマンドを完了するのに要する アクティブ処理時間。完了したコマンド・プロセスの終了時刻からコマンド・プロセスの開始時刻を引いて計算します。</p>
Total number of bytes transferred:	<p>バックアップ、アーカイブ、リストア、またはリトリブ操作中に転送された合計バイト数。この値には、バックアップ操作中にファイルが変更された場合など、再試行のために複数回送信されたデータが含まれます。</p>
LanFree bytes transferred:	<p>LAN フリー操作中に転送されたデータの合計バイト数。 enablelanfree オプションが no に設定されている場合、この行は表示されません。</p>
Total number of bytes inspected:	<p>その操作で選択されたファイルのサイズの合計。</p>

表 41. クライアント・コマンド・ライン通知メッセージ (続き)

通知メッセージ	意味
Total number of retries:	バックアップ操作中の再試行の総数。逐次化属性と changingretries オプションの設定によっては、別のプロセスによって開かれたファイルが、最初のバックアップ試行でバックアップされない場合があります。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップ操作中にファイルのバックアップを複数回試行する場合があります。このメッセージは、バックアップ操作に含まれているすべてのファイルに対する再試行の総数を示します。

バックアップ (UNIX および Linux): その他の考慮事項

データをバックアップする前に考慮する必要がある特殊状況がいくつか存在します。

保管されたファイル

ファイルをバックアップおよびアーカイブする場合は、IBM Spectrum Protect は、ファイル・スペース名が、ファイルの発生元ファイル・システムまたは仮想マウント・ポイントと同名が付けられた、ストレージ内のファイル・スペースにバックアップおよびアーカイブを保管します。

例えば、/home という名前のファイル・システムがあり、/home/monnett ディレクトリーの doc1 という名前のファイルをバックアップする場合、IBM Spectrum Protect は、そのファイルを /home という名前のファイル・スペースに保管します。後で /home/monnett を仮想マウント・ポイントとして定義した場合、/home/monnett ディレクトリーからバックアップするすべてのファイル (doc2 など) は、/home/monnett という名前のファイル・スペースに保管されます。次のコマンドを入力する場合:

```
dsmc query backup "/home/monnett/*"
```

IBM Spectrum Protect は、/home/monnett ファイル・スペース内のファイルを探します。それは、コマンドに含めたファイル指定に一致する長い名前を持つファイル・スペース内のファイルを常に探します。そして、仮想マウント・ポイントが定義された後でバックアップされた doc2 という名前のファイルを見つけます。しかし、doc1 という名前のファイルを見つけることはありません。なぜなら、このファイルは仮想マウント・ポイントが定義される前にバックアップ済みで、そのバックアップが /home ファイル・スペースに保管済みだからです。

コマンドを使用して、doc1 ファイルをリストあるいはリストアするためには、ファイル・スペース名を中括弧で囲んで明示的に指定する必要があります。例えば、次のようにします。

```
dsmc query backup "{/home}/monnett/*"
dsmc restore {/home}/monnett/doc1
```

この後で /home/monnett 仮想マウント・ポイントを除去してから、/home/monnett ディレクトリー内の追加ファイルをバックアップした場合、それらのバックアップは /home ファイル・スペースに再び保管されます。例えば、/home/monnett ディレクトリー内の doc3 という名前のファイルをバックアップした場合は、ファイルは /home ファイル・スペースに保管されます。既存の /home/monnett ファイル・スペースには保管されません。

しかし、/home/monnett ファイル・スペースは既に存在しているので、doc3 ファイルを照会またはリストアしようとするときは、正しいファイル・スペース名を指定しないと、IBM Spectrum Protect が /home/monnett ファイル・スペース内でそのファイルを探すことになります。例えば次のとおりです。

```
dsmc query backup "{/home}/monnett/*"
dsmc restore {/home}/monnett/doc2
```

注: ファイル指定に複数のレゾリューションがある場合のみ、ファイル・スペース名を明確に指定する必要があります。

例えば、ストレージに次のようなファイル・スペースがある場合、

```
/home  
/home/monnett  
/home/monnett/project1  
/home/monnett/project1/planning
```

次のように入力します。

```
dsmc query backup "/home/monnett/project1/planning/*"
```

IBM Spectrum Protect は、同一名のパスを含む他のファイル・スペースが 1 つ以上ある場合でも、/home/monnett/project1/planning ファイル・スペース内でのみ、ファイルを探します。しかし、次の 1 つを入力した場合:

```
dsmc query backup "{/home}/monnett/project1/planning/*"  
dsmc query backup "{/home/monnett}/project1/planning/*"  
dsmc query backup "{/home/monnett/project1}/planning/*"
```

上のどの形式を使用したかに応じて、IBM Spectrum Protect は、/home ファイル・スペース、/home/monnett ファイル・スペース、または /home/monnett/project1 ファイル・スペース内でのみ、ファイルを探します。

特殊ファイル・システム

特殊ファイル・システムには、オペレーティング・システムによって生成された動的情報が含まれます。これらには、データまたはファイルは含まれません。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、特殊ファイル・システムと その内容を無視します。

特殊ファイル・システムには以下のものがあります。

- ほとんどの UNIX プラットフォーム上にある /proc ファイル・システム
- Solaris 上にある /dev/fd ファイル・システム
- Linux 上にある /dev/pts

NFS または仮想マウント・ポイント

ファイルがファイル・システムまたは仮想マウント・ポイントからバックアップおよびアーカイブされた場合、クライアントはネストされた NFS または仮想マウント・ポイントに従いません (ファイル・システムに定義されているものがあれば)。ネストされた NFS または仮想マウント・ポイントは、バックアップまたはアーカイブされません。

管理クラス

IBM Spectrum Protect は、管理クラスを使用して、サーバー上のバックアップを管理する方法を決めます。

ファイルをバックアップするごとにそのファイルに管理クラスが割り当てられます。使用される管理クラスは、自動的に選択されるデフォルトか、または include-exclude オプション・リスト内で include オプションを使用してファイルに割り当てられたものです。ファイルがバックアップされるためには、選択された管理クラスにバックアップ・コピー・グループが含まれていなければなりません。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI から「ユーティリティー」→「ポリシー情報の表示」を選択すると、クライアント・ノードの IBM Spectrum Protect サーバーで定義されているバックアップ・ポリシーが表示されます。

関連概念

[297 ページの『ストレージ管理ポリシー』](#)

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

シンボリック・リンクのバックアップ

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、通常のファイルあるいはディレクトリーとは異なる方法でシンボリック・リンクをバックアップします。

クライアントがシンボリック・リンクをバックアップする方法は、オプションの設定 (ターゲット・ディレクトリーがアクセス可能かどうか、およびオブジェクトの指定方法) によって異なります。

UNIX シンボリック・リンクは、他のファイルあるいはディレクトリーへのポインターを含むファイルです。シンボリック・リンクが指すオブジェクトはターゲット・オブジェクトと呼ばれます。

シンボリック・リンクはターゲット・ディレクトリーへのパス情報として、またはディレクトリーとして、バックアップできます。シンボリック・リンクがディレクトリーとしてバックアップされると、ターゲット・ディレクトリー内のファイルおよびフォルダーもバックアップできます。

注: ここで説明されているシンボリック・リンクの処理は、Mac OS X には適用されません。シンボリック・リンクは常にファイルとしてバックアップされ、たどることはできません。

関連資料

344 ページの『Archsymlinkasfile』

archsymlinkasfile オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがシンボリック・リンクをたどり、それが指しているファイルまたはディレクトリーをアーカイブするのか、シンボリック・リンクのみをアーカイブするのかを指定します。このオプションは、**archive** コマンドで使用してください。

434 ページの『Followsymbolic』

バックアップ操作時に、followsymbolic オプションは、シンボリック・リンクを仮想マウント・ポイントとして使用するかどうかを指定します。リストアまたはリトリーブ操作時に、followsymbolic オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが、リストア・ターゲット・ファイル・システム上のシンボリック・リンクに名前が一致するディレクトリーをリストアする方法を指定します。

595 ページの『Virtualmountpoint』

virtualmountpoint オプションは、あるファイル・システム内の特定のディレクトリーから始まるファイルをバックアップ処理対象にしたい場合に、そのファイル・システムに仮想マウント・ポイントを定義します。

例: シンボリック・リンクの増分または選択バックアップ

クライアントがシンボリック・リンクをバックアップする方法は、シンボリック・リンクの宛先がファイルであるかディレクトリーであるか、そして増分バックアップまたは選択バックアップ・コマンドでシンボリック・リンクを指定する方法によって異なります。

シンボリック・リンクがファイルを指している場合、クライアントはパス情報のみをバックアップします。クライアントは、シンボリック・リンクの宛先であるファイルをバックアップしません。

シンボリック・リンクがディレクトリーを指している場合、バックアップの方法は、ディレクトリーがコマンドでどのように指定されているかにより異なります。

ディレクトリーが、選択または増分バックアップのコマンドで最後にスラッシュを付けて指定されている場合、クライアントはシンボリック・リンクをディレクトリーとして保存し、ターゲット・ディレクトリーの内容をバックアップします。

シンボリック・リンクの最後にスラッシュを付けずに入力した場合、またはシンボリック・リンクがバックアップ・ファイルの指定で明示されていない場合、クライアントはターゲット・ディレクトリーへのパス情報のみをバックアップします。ターゲット・ディレクトリーの内容はバックアップされません。

以下の例では、symdir がターゲット・ディレクトリー /fs1/guest/ へのシンボリック・リンクだとします。/fs1/guest/ には次のオブジェクトが含まれます。

```
/fs1/guest/file (ファイル)
/fs1/guest/dir1 (ディレクトリー)
```

```
/fs1/guest/dir1/file1(ファイル)
```

例 1

```
dsmc incr /home/gillis/symdir/
```

この例では、クライアントはシンボリック・リンクをディレクトリーとしてバックアップし、ターゲット・ディレクトリー /fs1/guest/ の内容をバックアップします。subdir=yes オプションを指定する場合、クライアントは /fs1/guest/ のサブディレクトリーをバックアップします。

例 2

```
dsmc incr /home/gillis/symdir/dir1
```

例 3

```
dsmc incr /home/gillis/symdir/dir1/
```

例 2 および例 3 では、クライアントはシンボリック・リンクをディレクトリーとしてバックアップし、ターゲット・ディレクトリーの /dir1/ サブディレクトリーをバックアップします。末尾のスラッシュは、シンボリック・リンクのみに必要であり、シンボリック・リンクのサブディレクトリーには必要ではありません。subdir=yes オプションを指定する場合、クライアントは /fs1/guest/dir1 のサブディレクトリーをバックアップします。IBM Spectrum Protect サーバーに保管されているバックアップ・コピーのパスは、/home/gillis/symdir/dir1/file1 のようになります。

例 4

```
dsmc incr /home/gillis/symdir
```

例 4 では、シンボリック・リンクの最後にスラッシュがないため、クライアントはターゲット・ディレクトリーへのパスだけをバックアップします。クライアントはシンボリック・リンクをディレクトリーとしてバックアップしませんし、ターゲット・ディレクトリーのファイルもフォルダーもバックアップしません。

例 5

```
dsmc incr /home/gillis/
```

例 5 では、シンボリック・リンクがバックアップ・ファイル指定で明示されていないため、クライアントはターゲット・ディレクトリーへのパスだけをバックアップします。クライアントはシンボリック・リンクをディレクトリーとしてバックアップしませんし、ターゲット・ディレクトリーのファイルもフォルダーもバックアップしません。

制約事項: シンボリック・リンクをディレクトリーとしてバックアップした場合、そのシンボリック・リンクをディレクトリーとしてバックアップしない今後の増分バックアップにおいて、そのシンボリック・リンクはディレクトリーとして無効になり、そのディレクトリー内のファイルおよびディレクトリーが無効になります。

例えば、まずシンボリック・リンク symdir をディレクトリーとしてバックアップして、そしてターゲット・ディレクトリーの内容をバックアップするとします。例 1 のコマンドがそれを実行します。クライアントは上位パス /home/gillis/symdir/ でバックアップ・コピーを作成します。この例では、クライアントは以下のパスでバックアップ・コピーを作成します。

```
/home/gillis/symdir/  
/home/gillis/symdir/file  
/home/gillis/symdir/dir1  
/home/gillis/symdir/dir1/file1
```

/home/gillis の内容は、次のコマンドを使用してバックアップされます。

```
dsmc inc /home/gillis/ -subdir=yes
```

このコマンドは、symdir をシンボリック・リンクとして処理し、シンボリック・リンクが指すオブジェクトは処理しません。したがって、クライアントは例 1 で作成された /home/gillis/symdir/ ディレクトリー内のバックアップ・コピーを無効にします。

ドメインのみの増分バックアップ

クライアントは、シンボリック・リンクが仮想マウント・ポイントとして定義され、`followsymbolic` オプションが `yes` に設定されている場合に、ドメインの増分バックアップ中にシンボリック・リンクをバックアップします。

クライアントが、以下の条件がすべて真の場合に、シンボリック・リンクおよびターゲット・ディレクトリーをバックアップします。

- クライアントはドメインの増分バックアップを実行します。
- シンボリック・リンクは、`virtualmountpoint` オプションを使用して仮想マウント・ポイントとして定義されます。
- `followsymbolic=yes`

`virtualmountpoint` および `followsymbolic` オプションによって、シンボリック・リンクをドメインに追加します。**incremental** コマンドがドメインをバックアップします。これにはシンボリック・リンクのターゲットが含まれます。

関連資料

434 ページの『[Followsymbolic](#)』

バックアップ操作時に、`followsymbolic` オプションは、シンボリック・リンクを仮想マウント・ポイントとして使用するかどうかを指定します。リストアまたはリトリブ操作時に、`followsymbolic` オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが、リストア・ターゲット・ファイル・システム上のシンボリック・リンクに名前が一致するディレクトリーをリストアする方法を指定します。

595 ページの『[Virtualmountpoint](#)』

`virtualmountpoint` オプションは、あるファイル・システム内の特定のディレクトリーから始まるファイルをバックアップ処理対象にしたい場合に、そのファイル・システムに仮想マウント・ポイントを定義します。

ハード・リンク

ハード・リンクされているファイルをバックアップすると、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、リンクされているファイルの各インスタンスをバックアップします。

例えば、ハード・リンクされている 2 つのファイルをバックアップする場合、クライアントはファイル・データを 2 度バックアップします。

ハード・リンク・ファイルをリストアすると、クライアントは、リンクを再確立しようと試行します。例えば、ファイルのハード・リンク・ペアがあり、かつ、ハード・リンク・ファイルの 1 つだけがワークステーション上にある場合、両方のファイルをリストアするとハード・リンクされます。また、両方のファイルを 1 つのコマンドでリストアする場合は、リストア時にどちらのファイルも存在しなくてもファイルはハード・リンクされます。この手順には 1 つの例外があり、それが発生する条件としては、ハード・リンクされている 2 つのファイルをバックアップしてから、ワークステーション上でそれらの間の接続を切断した場合です。標準(クラシック)のリストア・プロセスを使用してサーバーから 2 つのファイルをリストアした場合、クライアントは、現行ファイル・システムを尊重してハード・リンクを再確立しません。

重要: ハード・リンクされているすべてのファイルのバックアップとリストアを同時に行わないと、問題が発生します。ハード・リンクされたファイルがまだ同期化されているかを確認するには、すべてのハード・リンクを同時にバックアップし、それらの同じファイルを一緒にリストアしてください。

スパース・ファイル

スパース・ファイルではアドレス・スペース全体の各ブロックに対するディスク・スペースが割り当てられないため、ファイル内にホールが発生します。ホールは、その内容によって検出されます。内容は常にゼロとなり、これらのゼロがスペースを占有します。

デフォルトでは、ホールなしのスパース・ファイルがリストアされ、さらに多くのフリー・ディスク・スペースが残されます。バックアップ/アーカイブ・クライアントはバックアップ操作中にスパース・ファイルを検出し、IBM Spectrum Protect サーバーでスパースというマークを付けます。

注: スパース・ファイルは、Mac OS X には適用されません。

クライアント圧縮がオフの場合には、バックアップ/アーカイブ・クライアントはスパース・ファイルを通常ファイルとしてバックアップします。

関連資料

363 ページの『[Compression](#)』

`compression` オプションは、ファイルをサーバーに送る前に、それらのファイルを圧縮します。

475 ページの『[Makesparsefile](#)』

`makesparsefile` オプションは、スパース・ファイルの再作成方法を指定するために **restore** コマンドまたは **retrieve** コマンドで使います。

NFS ハード・マウントおよびソフト・マウント

バックアップ/アーカイブ・クライアントを NFS ファイル・システムに接続する場合、ハード・マウントまたはソフト・マウントのいずれかを使用することができます。

クライアントは、**nfstimeout** オプション値を使用して、NFS システム・コールをタイムアウトさせる前にこのシステム・コールが応答するのを待つ時間を決定します。この設定はハード・マウントとソフト・マウントに適用されます。デフォルトは 0 秒です。つまり、クライアントは NFS システム・コールのデフォルトの動作を使います。

マウントが失効した場合 (例えば、ファイル・システムのサーバーが使用できないなど)、ハード・マウントとソフト・マウントの結果を認識しておいてください。

ハード・マウント

NFS ファイル・システムをハード・マウントする場合、NFS デーモンは繰り返し、サーバーとの連絡を試行します。NFS デーモンの再試行は、タイムアウトにならず、システム・パフォーマンスに影響するので、それらに割り込むことはできませんが、制御は、**nfstimeout** 値に達すると、クライアントに戻されます。

ソフト・マウント

NFS ファイル・システムをソフト・マウントする場合、NFS は繰り返し、次のいずれかが起こるまでサーバーとの連絡を試行します。

- 接続が確立される
- NFS 再試行しきい値に達した
- **nfstimeout** 値に達した

これらのイベントが起これば、制御は呼び出し側プログラムに戻されます。

注: UNIX および Linux システム上では、NFS マウントがハードの場合、**nfstimeout** オプションが失敗することがあります。ハングした場合は、**nfstimeout** オプションを非活動化し、以下のようにして、ソフト・マウントされた NFS ファイルをマウントしてください。

```
mount -o soft,timeo=5,retry=5 machine:/filesystem /mountpoint
```

パラメーターは以下のように定義されています。

soft

NFS ファイル・システムのソフト・マウントを生成します。エラーが発生した場合、**stat()** 関数は、エラーで戻ります。**hard** オプションが使用されている場合は、ファイル・システムが使用可能になるまで **stat()** は戻りません。

timeo=n

ソフト・マウント・エラーのタイムアウト期間を $n/10$ 秒に設定します。

retry=n

マウントの試行回数を設定します。ここで、 n は整数です。デフォルトは 10000 です。

削除済みファイル・システム

ファイル・システムまたはドライブが削除された場合、またはバックアップ/アーカイブ・クライアントによるバックアップを以後はもう行わない場合は、各ファイルの既存のバックアップ・バージョンは、ポリ

シー属性 (非活動バックアップ・バージョンを保持する日数、および (活動バージョンがない場合は) 最新のバックアップ・バージョンを保持する日数) に従って管理されます

他に何もしなければ、アクティブ・バックアップ・バージョンは無期限に残ります。活動バージョンを無期限に保存する必要がない場合は、**expire** コマンドを使用して活動バージョンを非活動にしてください。

バックアップ・バージョンを何も保存する必要がない場合は、**delete backup** コマンドを使用して、ファイル・スペース内のすべてのバックアップ・バージョンを削除してください。IBM Spectrum Protect サーバー管理者から、このコマンドを使用する権限を受ける必要があります。「バックアップ削除」権限があるかどうかを調べるには、**query session** コマンドを使用してください。代わりに、IBM Spectrum Protect サーバー管理者に、該当のファイル・スペースを削除するように依頼することもできます。

関連概念

[297 ページの『ストレージ管理ポリシー』](#)

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

オープンされたファイル

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ファイルのバックアップの開始と完了の間に変更されたファイルを探します。

システム上のファイルには、バックアップを試みたとき使用中、あるいはオープン中であるものもあります。オープン・ファイルは変更可能なため、オープン・ファイルのバックアップは、指定時点のそのファイルの内容を正しく表しているとは限りません。

ファイルが重要かどうか、およびファイルを再度作成できるかどうかを検討します。ファイルが重要でなければ、バックアップしなくてもよい場合もあります。あるいは、そのファイルが重要な場合、ワークステーションの root ユーザーは、バックアップを取る前にファイルがクローズされていることを確認することができます。

バックアップをスケジュールに従って稼働している場合は、root ユーザーは **preschedulecmd** オプションを使用してファイルをクローズするコマンドを入力することができます。例えば、オープン・ファイルがデータベースの場合、データベースの **quiesce** コマンドを使用してデータベースをシャットダウンします。root ユーザーは、**postschedulecmd** オプションを使用して、そのファイルを使用するアプリケーションを、バックアップの完了後に再始動することができます。バックアップにスケジュールを使用していない場合は、バックアップを開始する前に、そのファイルを使用するアプリケーションをクローズしていることを確認してください。

バックアップ中にファイルがオープンされ、変更されていても、クライアントはそのファイルのバックアップを行うことができます。このバックアップ方法が役に立つ場合としては、そのファイルがバックアップ中に変更されてもそのファイルを使用できる場合に限ります。これらのファイルのバックアップを行うには、逐次化が *dynamic* または *shared dynamic* の管理クラスを割り当ててください。

関連概念

[299 ページの『管理クラスおよびコピー・グループについての情報の表示』](#)

ポリシー情報を、コマンド・ライン・インターフェースまたはグラフィカル・ユーザー・インターフェースで表示できます。

[303 ページの『ファイルの管理クラスの選択』](#)

デフォルトの管理クラスがワークステーションにあるすべてのファイルのバックアップ要件 およびアーカイブの要件を満たしている場合は、ユーザーはその管理クラスにファイルを 関連付ける処置は不要です。これは、ユーザーがファイルをバックアップまたはアーカイブしたときに 自動的に行われます。

ワイルドカード文字

バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、ファイル指定にオペレーティング・システムのワイルドカード文字を使用することができます。これらの文字を使用すると、同じような名前を持つファイルのグループを選択することができます。

コマンドでは、ファイル名またはファイル拡張子でのみワイルドカード文字を使用することができます。宛先ファイル、ファイル・システム、あるいはディレクトリーを指定するためには使用できません。ループ・モード以外でワイルドカード文字を使用する場合は、`dsmc sel "/home/ledger.*"`のように、アスタリスクを含むパラメーターを引用符で囲んで、システムがワイルドカード文字を解釈しないために予期せぬ結果が生じることがないようにします。ワイルドカード文字の情報を以下のテーブルに掲載します。

重要: マルチバイト・コード・ページでパターンの突き合わせを試行する場合は、予期しない結果を避けるために、疑問符 (?) ではなくアスタリスク (*) をワイルドカード文字として使用します。

この表では、いくつかのワイルドカード・パターンとその指定方法を示しています。

* (アスタリスク)	すべてのファイルを突き合わせるゼロか複数の文字
*.cpp	cpp 拡張子のあるもの
hm*.*	hm で開始し、拡張子は任意だが、! 文字を持つ 必要がある
hm*	hm で開始するもの、拡張子はあってもなくてもよい
h.*	ファイル名の中に h があり、拡張子は任意だが、.を持つ 必要がある
? (疑問符)	すべてのファイルを突き合わせる 1 文字
?cpp	拡張子が cpp で、ファイル名が 1 文字のみのもの
hm?.cpp	cpp 拡張子を持つ hm で始まる 3 文字の名前
*? (アスタリスクと疑問符)	アスタリスクと疑問符の組み合わせで突き合わせ
??hm.*	hm. で終わり、任意の拡張子を持つ 4 文字のすべてのファイル名

ファイル指定用のパス名の中では、名前にアスタリスク (*) あるいは疑問符 (?) を含むディレクトリーを指定することはできません。クライアントは、それらの文字をワイルドカード文字としてだけ認識します。

第5章 データのリストア

IBM Spectrum Protect を使用して、特定のファイル、類似した名前を持つファイルのグループ、またはディレクトリー全体のバックアップ・バージョンをリストアします。

元のファイルが失われたり、損傷したりした場合、これらのバックアップ・バージョンをリストアすることができます。ファイル指定(ファイル・パス、名前、および拡張子)、ディレクトリー・リスト、あるいはディレクトリーとそのサブディレクトリーへのサブディレクトリー・パスを使用して、リストアしたいファイルを選択します。

重要: IBM Spectrum Protect クライアントでバックアップされるデータは、データのバックアップに使用した同じバージョンまたはそれ以降のバージョンでのみリストアできます。

このトピックで参照するクライアントのバックアップとリストアの手順はすべて Web クライアントにも適用されます。ただし、Web クライアントでは、クライアント・オプションを設定するためのプリファレンス・エディターが提供されていません。



重要: ファイル・システムの実行中に、基本システム・ディレクトリー、カーネル・モジュール、パッチなどのオペレーティング・システム・ファイルを、それらの元のロケーションにリストアしないでください。オペレーティング・システムがハングまたは破壊される恐れがあります。

1 次リストア・タスクは以下のとおりです。

- [237 ページの『イメージのリストア』](#)
- [256 ページの『GUI を使用したデータのリストア』](#)
- [257 ページの『コマンド・ライン・リストアの例』](#)
- [240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』](#)
- [249 ページの『特定時点へのデータのリストア』](#)
- [254 ページの『NAS ファイル・システムのリストア』](#)
- [262 ページの『別のユーザーへの、ファイルのリストアまたはリトリートの許可』](#)
- [264 ページの『別のクライアント・ノードからのファイルのリストアまたはリトリート』](#)
- [265 ページの『別のワークステーションへのファイルのリストアまたはリトリート』](#)
- [265 ページの『ディスク損失の場合のディスクのリストア』](#)
- [266 ページの『ファイル・スペースの削除』](#)

マイグレーション済みファイルのリストアおよび `restoremigstate` オプションについて詳しくは、「*IBM Spectrum Protect for Space Management for UNIX and Linux*」を参照してください。

関連タスク

[151 ページの『Web クライアント・セッションの開始』](#)

Web クライアントは、Web ブラウザー・ソフトウェアとは別に開始および管理することができる Java Web Start アプリケーションです。ワークステーション上で Web クライアントをインストールおよび構成した後、Web クライアントを使用してリモート・アクセスし、クライアント・ノード上のデータをリモートからバックアップ、リストア、アーカイブ、あるいはリトリートすることができます。Web クライアントは、身体障害のあるユーザーを支援する装置を使用する機能を備え、キーボード・ナビゲーションが改善されています。

イメージのリストア

システム上のイメージのリストアを開始するには、事前に考慮する項目がいくつかあります。

イメージを(オフラインまたはオンラインで) リストアする場合は、事前にシステムの管理権限を持っている必要があります。

イメージをリストアする前に考慮する項目は以下のとおりです。

- ボリューム・イメージのリストアでは、データは最後にイメージ・バックアップを行った時点と同じ状態にリストアされます。現行ファイル・システム全体またはロー・ボリュームが、サーバー上のイメージに置き換えられるので、イメージをリストアする必要があることを必ず確認してください。
 - イメージをリストアしようとするボリュームが、少なくともリストアされているイメージと同じサイズであることを確認してください。
 - Linux システムで、ext2、ext3、ext4、btrfs、xfs などの一部のファイル・システムは、オペレーティング・システムによって汎用固有 ID (UUID) を使用して識別されます。このようなボリュームのイメージ・バックアップを作成して別の位置にリストアすると、同じ UUID を持つ 2 つのボリュームが存在するようになる可能性があります。/etc/fstab で UUID を使用してファイル・システムを定義している場合、UUID の競合により、バックアップ/アーカイブ・クライアントが、リストアされるファイル・システムを正しくマウントできない可能性があることに注意してください。この状態を回避するには、イメージをその元の位置にリストアしてください。イメージを別の位置にリストアする必要がある場合は、リストアされるファイル・システムをマウントする前に、元のボリュームまたはリストアされるボリュームのいずれかの UUID を変更してください。UUID の変更方法については、Linux の資料の該当する説明を参照してください。また、元のボリューム、リストアされるボリューム、またはその両方のボリュームをマウントできるように、/etc/fstab ファイルを手動で編集する必要がある場合もあります。
 - リストアしようとしているファイル・システムまたはボリュームは、元のタイプと同じである必要があります。
 - リストアのターゲット・ボリュームが使用中でないことを確認してください。クライアントはリストアを開始する前に、ボリュームをロックします。クライアントはリストアの完了後に、ボリュームをアンロックします。クライアントがファイル・システムをロックしようとしたときにボリュームが使用中の場合、リストアは失敗します。
 - IBM Spectrum Protect クライアント・プログラムがインストール済みのドライブにイメージをリストアすることはできません。
 - ファイル・システムのプログレッシブ増分バックアップおよびイメージ・バックアップを実行していた場合、ファイル・システムの増分イメージ・リストアを行うことができます。このプロセスでは、完全なイメージがリストアされた後、個々のファイルをリストアします。リストアされた個々のファイルは、元のイメージの後にバックアップされたものです。オプションでは、元のバックアップ後にファイルが削除されていた場合、増分リストアで基本イメージからそれらのファイルを削除することができます。
- ファイルの削除が正常に実行されるのは、IBM Spectrum Protect サーバーのバックアップ・コピー・グループ内に、既存ファイルおよび削除ファイルのバージョンが十分に含まれている場合です。増分バックアップと増分リストアは、ロー論理ボリューム上ではなく、マウントされたファイル・システム上でのみ行うことができます。
- 何らかの理由で、リストア・イメージが破壊されている場合は、fsck ツールを使用してイメージの修復を試みることができます。

verifyimage オプションを **restore image** コマンドで使用して、宛先ターゲット・ボリューム上の不良セクターの検出を使用可能にすることを指定できます。ターゲット・ボリューム上で不良セクターが検出された場合、クライアントは、コンソールとエラー・ログに警告メッセージを発行します。

ターゲット・ボリューム上に不良セクターが存在する場合、imagnetofile オプションを **restore image** コマンドで使用して、ソース・イメージをファイルにリストアすることを指定できます。選択したデータ・コピー・ユーティリティを後で使用すれば、イメージをファイルからディスク・ボリュームに変換できます。

関連資料

445 ページの『Imagetofile』

imagnetofile オプションとともに **restore image** コマンドを使用して、ソース・イメージをファイルへリストアすることを指定します。

594 ページの『Verifyimage』

restore image コマンドとともに **verifyimage** オプションを使用して、宛先ターゲット・ボリュームの不良セクター検出を有効にすることを指定します。

GUI を使用したイメージのリストア

GUI を使用して、ファイル・システムのイメージあるいはロー 論理ボリュームをリストアできます。

このタスクについて

ファイル・システムのイメージあるいはロー 論理ボリュームをリストアするには、以下のステップを実行します。

手順

1. メイン・ウィンドウから「**リストア**」をクリックする。「リストア」ウィンドウが表示されます。
2. ディレクトリー・ツリーを展開します。
3. 「**イメージ**」という名前のツリーでオブジェクトを探し出し、それを展開する。リストアしたいイメージの隣の選択ボックスをクリックします。オブジェクトの詳細情報を表示するには、そのオブジェクトを強調表示させて、メイン・ウィンドウから「**表示**」→「**ファイル詳細...**」を選択するか、あるいは「**ファイル詳細の表示 (View File details)**」ボタンをクリックします。
4. (**オプション**) 増分イメージ・リストアを行うには、「**オプション**」ボタンをクリックして「リストア・オプション」ウィンドウをオープンし、「**イメージ、および増分ディレクトリーと ファイル**」オプションを選択する。ローカル・ファイル・システムから非アクティブ・ファイルを削除したい場合、「**ローカルからの非アクティブ・ファイルの削除**」チェック・ボックスを選択します。「**OK**」ボタンをクリックします。
5. 「**リストア**」をクリックする。「リストアの宛先」ウィンドウが表示されます。イメージは、バックアップされた元のマウント・ポイントを持つボリュームに リストアすることができます。あるいは、リストア位置として別のボリュームを選択することができます。
6. 「**リストア**」ボタンをクリックしてリストアを開始する。「**タスク・リスト**」ウィンドウが現れ、リストアの進行状況が表示されます。「リストア・レポート」ウィンドウに詳細状況報告が表示されます。

タスクの結果

以下は、GUI を使用してイメージ・リストアを実行するときに考慮する項目です。

- メイン・ウィンドウから「**表示**」→「**ファイル詳細**」を選択するか、「**ファイル詳細の表示 (View File details)**」ボタンをクリックすると、クライアントによってバックアップされたファイル・システム・イメージに関する以下の統計が表示されます。
 - イメージ・サイズ - これはバックアップされたボリューム・サイズです。
 - 格納サイズ - これはサーバーに格納された実際のイメージ・サイズです。IBM Spectrum Protect サーバー上の格納イメージはボリューム容量と同じサイズです。
 - ファイル・システム・タイプ
 - バックアップ日時
 - イメージ・バックアップに割り当てられた管理クラス
 - イメージ・バックアップが活動か非活動コピーか
- 特定のリストア・オプションを修正するには、「**オプション**」ボタンをクリックする。オプションを変更した場合は、変更したオプションが有効なのは現行セッションの間だけです。
- 「リストア・オプション」ウィンドウで、イメージだけをリストアするか、イメージおよび増分ディレクトリー・ファイルをリストアするかを選択できます。「**イメージのみ**」を選択すると、イメージは最終イメージ・バックアップのみからリストアされることになります。これがデフォルトです。

ボリューム上でイメージの日付による増分バックアップを実行する場合、あるいは増分ボリューム上でイメージ・バックアップを実行する場合は、「**イメージ、および増分ディレクトリーとファイル**」オプションを選択できます。「**イメージ、および増分ディレクトリーとファイル**」を選択する場合には、ローカル・ファイル・システムにリストアされる非アクティブ・ファイルを削除するために、「**ローカルからの**

非アクティブ・ファイルの削除」も選択することができます。日付による増分イメージ・バックアップが、ファイル・システム上で実行される増分バックアップの唯一のタイプであった場合には、ファイルの削除は行われません。

重要: ファイル・システム全体がサーバーからのイメージによって置き換えられてから、増分イメージ・バックアップ操作を使用してバックアップしたファイルがリストアされるので、増分リストアを実行する必要があることは必ず確認してください。

コマンド・ラインを使用したイメージのリストア

IBM Spectrum Protect コマンド・ライン・クライアントを使用してイメージをリストアするには、**restore image** コマンドを使用します。

関連資料

445 ページの『Imagetofile』

imagetofile オプションとともに **restore image** コマンドを使用して、ソース・イメージをファイルへリストアすることを指定します。

594 ページの『Verifyimage』

restore image コマンドとともに **verifyimage** オプションを使用して、宛先ターゲット・ボリュームの不良セクター検出を有効にすることを指定します。

バックアップ・セットからのデータのリストア

IBM Spectrum Protect 管理者は、バックアップ・セット (サーバー上にあるファイルのコレクション) を、クライアント装置と互換性のあるフォーマットを使用して、装置上に作成されたポータブル・メディア上に生成することができます。

IBM Spectrum Protect サーバーから、またはバックアップ・セットがファイルとしてまたは磁気テープ装置上でローカルに使用可能な場合に、データをバックアップ・セットからリストアできます。

バックアップ・セットは、次の位置からリストアすることができます。

- IBM Spectrum Protect サーバーから
- クライアント・ワークステーションに接続された装置のポータブル・メディアから
- クライアント・ワークステーションのバックアップ・セット・ファイルから

バックアップ・セットは、下記のリストで説明するように即時アーカイブおよび急速リカバリー機能を提供します。

即時アーカイブ

この機能により、管理者は既にサーバー上に保管されているバックアップ・バージョンからアーカイブ・コレクションを作成することができます。

ローカル・バックアップ・セットによる迅速なリカバリー

一般的に、リストアはバックアップ・セット外の IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている通常のファイル・バックアップから実行されます。このリストア方法によって、各ファイルの最新のバックアップ・バージョンをリストアする機能が与えられます。バックアップ・セットに、ファイルの最新のバックアップ・バージョンが含まれていない場合があります。

場合によっては、バックアップ・セットからデータをリストアするほうが、IBM Spectrum Protect サーバー上の通常のバックアップ・ファイルからデータをリストアするよりも優れています。以下の理由により、バックアップ・セットからのリストアのほうが優れている場合があります。

- リストアに必要なファイルはすべて、少数のストレージ・ボリュームに含まれているため、バックアップ・セットのリストアによって迅速なリカバリーが実現する場合があります。
- バックアップ・セットは、ファイルの特定時点コレクションを実現します。サーバーからの通常のファイル・レベルのリストアで現在使用可能なものをリストアするよりも、特定時点にリストアできます。

IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットをリストアすることで、ローカル・バックアップ・セットからリストアするよりも大きなセットのリストア・オプションが可能になります。た

だし、以下のように、ローカル・バックアップ・セットからリストアするほうが望ましい場合があります。

- IBM Spectrum Protect サーバーへネットワーク接続できないときに、データのリストアが必要になる場合があります。災害復旧の場合にそのような状態があり得ます。
- ローカル・リストアのほうが、IBM Spectrum Protect サーバーへのネットワーク接続を介してリストアするよりも速い場合があります。

バックアップ・セット・ボリュームがサーバーで使用可能な間にバックアップ・セットを IBM Spectrum Protect サーバーからリストアすることが可能であり、またはそれらをローカル・バックアップ・セットのリストア用にクライアント・システムに移動することができます。バックアップ・セットは目次 (TOC) があってもなくても作成可能であり、ファイル・データまたはイメージ・データを含めることができます。

バックアップ・セットからデータをリストアする機能は、バックアップ・セットのロケーションおよびバックアップ・セット内のデータのタイプによって制限されます。コマンド・ライン・クライアントは GUI がリストアできないデータを一部リストアできますが、GUI はリストアするオブジェクトを参照して選択することができます。一般に、TOC のあるサーバーからのバックアップ・セットでは、リストア時にさらに多くのオプションが可能です。一方、ローカル・バックアップ・セットが提供するオプションのほうが、IBM Spectrum Protect サーバーからリストアする場合に優れていることがあります。

GUI を使用してバックアップ・セットからデータをリストアする場合の制約事項が、以下の表に要約されています。それぞれの内部セルが、データ・タイプとバックアップ・セット・ロケーションの 1 つの組み合わせを表します。それぞれの状態に対して、GUI を使用してバックアップ・セット全体だけのリストアやバックアップ・セット内のオブジェクトの選択が可能か、あるいはバックアップ・セットのリストアに GUI を使用できないかどうかを、セルが表します。

表 42. バックアップ・セットの GUI によるリストアの制約事項			
バックアップ・セット内のデータ・タイプ	バックアップ・セットのロケーション		
	ローカル (location=file または location=tape)	IBM Spectrum Protect サーバー (TOC が使用可能)	IBM Spectrum Protect サーバー (TOC が使用不可)
ファイル	バックアップ・セット全体のみをリストアします。	バックアップ・セット全体、またはバックアップ・セット内で選択したオブジェクトをリストアします。	バックアップ・セット全体のみをリストアします。
イメージ	リストアできません	バックアップ・セット全体、またはバックアップ・セット内で選択したオブジェクトをリストアします。	リストアできません
システム状態	バックアップ・セット全体のみをリストアします。	バックアップ・セット全体、またはバックアップ・セット内で選択したオブジェクトをリストアします。	バックアップ・セット全体のみをリストアします。

コマンド・ライン・クライアントを使用してバックアップ・セットからデータをリストアする場合の制約事項が、以下の表に要約されています。それぞれの内部セルが、データ・タイプとバックアップ・セット・ロケーションの 1 つの組み合わせを表します。それぞれの状態に対して、セルは使用可能なリストア・コマンドをリストします。特に記載のない限り、バックアップ・セット全体と同様に、バックアップ・セット内の特定のオブジェクトをリストアできます。

表 43. バックアップ・セットのコマンド・ラインによるリストアの制約事項			
バックアップ・セット内のデータ・タイプ	バックアップ・セットのロケーション		
	ローカル (location=file または location=tape)	IBM Spectrum Protect サーバー (TOC が使用可能)	IBM Spectrum Protect サーバー (TOC が使用不可)
ファイル	コマンド: restore restore backupset	コマンド: restore restore backupset	コマンド: restore backupset
イメージ	リストアできません	コマンド: restore image	リストアできません
システム 状態	コマンド: restore backupset	コマンド: restore backupset restore systemstate	コマンド: restore backupset

制約事項: **restore backupset** コマンドを使用してシステム状態データをリストアする場合、オブジェクトを個別に指定することはできません。システム状態全体のみをリストアできます。

関連資料

474 ページの『[Localbackupset](#)』

localbackupset オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI がスタンドアロン・ワークステーションでローカル・バックアップ・セットをリストアするために IBM Spectrum Protect サーバーによる初期ログオンをバイパスするかどうかを指定します。

706 ページの『[Query Backupset](#)』

query backupset コマンドは、ローカル・ファイル、テープ装置 (該当する場合)、または IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットを照会します。

714 ページの『[Query Image](#)』

query image コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されているか、**backupsetname** オプションが指定された場合は IBM Spectrum Protect サーバーのバックアップ・セット内部にあるファイル・システム・イメージに関する情報を表示します。

728 ページの『[Restore](#)』

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

733 ページの『[Restore Backupset](#)』

restore backupset コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー、ローカル・ファイル、またはローカル磁気テープ装置からバックアップ・セットをリストアします。バックアップ・セット全体、または場合によってはバックアップ・セット内の特定ファイルをリストアすることができます。

742 ページの『[Restore Image](#)』

restore image コマンドは、**backup image** コマンドを使用してバックアップされたファイル・システムまたはロー・ボリューム・イメージを リストアします。

バックアップ・セットのリストア: 考慮事項および制約事項

このトピックでは、バックアップ・セットをリストアする時に注意する必要がある考慮事項および制約事項をリストしています。

バックアップ・セットのリストアの考慮事項

バックアップ・セットをリストアする時には、以下のことを考慮してください。

- リストアしたいオブジェクトが現行ノードと異なる名前のクライアント・ノードから生成された場合、どのリストア・コマンドでも **filespace** パラメーターとともに元のノード名を指定してください。
- ポータブル・メディアからバックアップ・セットをリストアすることができない場合には、IBM Spectrum Protect 管理者に問い合わせ、互換性のあるフォーマットを使用してこのポータブル・メディアが装置上に作成されたことを確認してください。
- 最初のコマンド・ラインで **restore backupset** コマンドをパラメーター **-location=tape** または **-location=file** と一緒に使用した場合、クライアントは IBM Spectrum Protect サーバーへの接続を試行しません。
- グループをバックアップ・セットからリストアする時には、以下のことを考慮してください。
 - グループ全体または仮想ファイル・スペース内のすべてのグループがリストアされます。同じ仮想ファイル・スペース内に複数のグループがある場合、グループ名を指定して単一グループをリストアすることはできません。ファイル・パスを指定してグループの一部をリストアすることはできません。
 - 以下の値を使用してグループを指定します。
 - **filespace** パラメーターとともに仮想ファイル・スペース名を指定します。
 - サブディレクトリーを含めるには、**subdir** オプションを使用します。
- クライアント・システムに接続されたテープ装置からのバックアップ・セットのリストアに対するサポートは制限されています。装置の製造メーカーが提供する固有のデバイス・ドライバを必ず使用する必要があります。IBM Spectrum Protect サーバーで使用するために IBM によって提供されているデバイス・ドライバは、ローカル・バックアップ・セットをリストアするためにクライアント・システムで使うことができません。
- 複数の所有者のファイルがバックアップ・セットに含まれている場合、バックアップ・セット自体は root ユーザー ID が所有し、root ユーザー ID 以外はバックアップ・セットを見ることができません。この場合、root 以外のユーザー ID は、IBM Spectrum Protect 管理者からバックアップ・セット名を取得することにより、自分のファイルをリストアできます。root 以外のユーザーは自分のファイルのみをリストアできます。
- サーバー接続を必要とせずにバックアップ・セットをローカル・デバイスからリストアするためにクライアント GUI を有効にするには、**localbackupset** オプションを使用します。

バックアップ・セットのリストアの制約事項

バックアップ・セットをリストアする時には、以下の制約事項に注意してください。

- API を使用してバックアップされたバックアップ・セット・データは、リストアまたは使用することができません。
- **restore backupset** コマンドを使用してバックアップ・セットからイメージ・データをリストアすることはできません。バックアップ・セットからイメージ・データをリストアできるのは、**restore image** コマンドを使用する場合のみです。
- ローカル・バックアップ・セットからイメージ・データをリストアすることはできません (**location=tape** または **location=file**)。バックアップ・セットからイメージ・データをリストアできるのは、IBM Spectrum Protect サーバーからのみです。

関連資料

[474 ページの『Localbackupset』](#)

localbackupset オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI がスタンドアロン・ワークステーションでローカル・バックアップ・セットをリストアするために IBM Spectrum Protect サーバーによる初期ログオンをバイパスするかどうかを指定します。

[728 ページの『Restore』](#)

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

[742 ページの『Restore Image』](#)

restore image コマンドは、**backup image** コマンドを使用して バックアップされたファイル・システムまたはロー・ボリューム・イメージを リストアします。

733 ページの『Restore Backupset』

restore backupset コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー、ローカル・ファイル、またはローカル磁気テープ装置からバックアップ・セットをリストアします。バックアップ・セット全体、または場合によってはバックアップ・セット内の特定ファイルをリストアすることができます。

バックアップ・セットのリストア

IBM Spectrum Protect は、バックアップ・セットをファイル構造全体を含む 1 つのオブジェクトと見なします。バックアップ・セット全体をリストアできます。または場合によっては部分だけを選択できます。バックアップ・セット・メディアは、自己記述型であり、正常なリストアを行うのに必要なすべての情報を含みます。

Tivoli Storage Manager バージョン 5.4 以降のサーバーに接続している場合、サーバー管理者は、積み重なったバックアップ・セットを作成できます。積み重なったバックアップ・セットには複数のクライアント・ノードからのデータを含めることができ、特定のクライアント・ノードのさまざまなタイプのデータを含めることができます。データのタイプは、ファイル・データまたはイメージ・データの場合があります。

制約事項: イメージ・データおよびアプリケーション・データのリストア処理は、サーバーからリストアする場合にのみ有効です。クライアント・ローカル・バックアップ・セット・リストアからイメージ・データおよびアプリケーション・データをリストアすることはできません。

積み重なったバックアップ・セットの場合、所有するノードのデータのみをリストアできます。その他すべてのノードのデータはスキップされます。ローカル装置の積み重なったバックアップ・セットからデータをリストアする場合、所有するクライアント・ノードのファイル・レベル・データのみをリストアできます。nodename オプションを、スタック内のノードの 1 つに対してバックアップ・セットを生成するために使用するノード名に一致するように設定することが重要です。

重要: ローカル・バックアップ・セットのポータビリティのため、ポータブル・メディア上のローカル・バックアップ・セットを保護するために、追加ステップを取る必要があります。バックアップ・セットはサーバーの認証なしにローカルでリストアできるので、バックアップ・セット・メディアは、物理的に保護されている必要があります。各ユーザーは積み重なったバックアップ・セット上のすべてのデータにアクセスできるため、ユーザーはノード名を変更したり、バックアップ・セットをロー・フォーマットで表示することによって、自分が所有していないデータにアクセスできます。メディアの暗号化または物理的な保護はデータの保護を確実にするための最良の方式です。

サーバーからバックアップ・セット・データをリストアする場合、GUI またはコマンド・ラインから個々のファイル、ディレクトリー、またはバックアップ・セット・データ全体を 1 回の操作でリストアすることができます。ローカル側でバックアップ・セット・データをリストアする場合、GUI ではバックアップ・セット全体のみを表示およびリストアすることができます。コマンド・ラインは、ローカル側でバックアップ・セットに保管されている 個々のファイルまたはディレクトリーをリストアする場合に使用できます。

GUI を使用したバックアップ・セットのリストア

クライアント GUI は、サーバー、ローカル・ファイル、またはローカル磁気テープ装置からのバックアップ・セットから、データをリストアできます。GUI を使用して、TOC のある IBM Spectrum Protect サーバーからのバックアップ・セットから個々のファイルをリストアできますが、ローカル・バックアップ・セットや TOC のないサーバーからのバックアップ・セットからはリストアできません。

このタスクについて

重要: リストア操作を開始する前に、バックアップ・セットには複数のファイル・スペースについてのデータが含まれている可能性があることを認識しておいてください。元の位置以外の宛先を指定すると、すべてのファイル・スペースからのデータが、指定した位置にリストアされます。

GUI からバックアップ・セットをリストアするには、以下のステップを実行します。

1. GUI メイン・ウィンドウで「リストア」をクリックする。「リストア」ウィンドウが表示されます。

2. **バックアップ・セット** というディレクトリー・ツリー・オブジェクトを 探し出し、横にある正符号 (+) をクリックして展開する。
 - ・ローカル装置からバックアップ・セットをリストアする場合は、「**ローカル**」オブジェクトを展開すると、「バックアップ・セット位置の指定」を求めるウィンドウが表示されます。このウィンドウのリストから「**ファイル名:**」または「**テープ名:**」を選択して、テープ名またはファイル名の位置を入力します。また、「**参照**」ボタンをクリックして「**ファイル選択**」ウィンドウをオープンし、バックアップ・セットを選択できます。
 - ・サーバーからバックアップ・セットのデータをリストアするには、最初に「**サーバー**」オブジェクトを展開してから、要求するリストアのタイプに応じて「**ファイル・レベル**」または「**イメージ**」を展開する。
3. リストアするバックアップ・セット、またはバックアップ・セット内のディレクトリーまたはファイルの横にある選択ボックスをクリックする。

バックアップ・セットがサーバーにあり、目次がある場合は、バックアップ・セットからファイルを選択することができます。
4. 「**リストア**」をクリックする。「リストアの宛先」ウィンドウが表示されます。必要な情報を入力します。
5. 「**リストア**」をクリックする。「タスク・リスト」ウィンドウに、リストアの処理状況が表示されます。

注:

- ・リストアしたいオブジェクトがノード上に生成されたバックアップ・セットの一部であり、ノード名がサーバーで変更されている場合は、名前の変更前に生成された 任意のバックアップ・セット・オブジェクトは新規ノード名と一致しくくなります。ノード名がバックアップ・セットを生成したノードと同じものであることを確認してください。
- ・クライアントを使用して、サーバー接続の有無に関わらず、接続装置のバックアップ・セットをリストアすることができます。サーバー接続が失敗すると、ローカル・バックアップ・セット・リストアの目的で続行するためのプロンプトが表示されます。また、`localbackupset` オプションを使用して、クライアントにサーバー接続を試行させないようにすることもできます。
- ・磁気テープ装置のような特定のローカル装置 (Mac OS X に適用されない磁気テープ装置) の場合は、リストアを行うに先立って、デバイス・ドライバをセットアップする必要があります。このタスクの詳細については、装置のマニュアルを参照してください。またリストアを行うためには装置アドレスも知っていることが必要です。
- ・サーバーからのバックアップ・セット・リストアの以下の機能は、ローカル側でリストアする場合には使用できません。
 1. イメージ・リストア
 2. GUI での個々のファイルとディレクトリーの表示およびリストア。コマンド・ラインは、ローカル・バックアップ・セットから個々のディレクトリーまたはファイルをリストアするために使用できます。

クライアント・コマンド・ライン・インターフェースを使用したバックアップ・セットのリストア

クライアント・コマンド・ライン・インターフェースは、サーバー、ローカル・ファイル、またはローカル磁気テープ装置からのバックアップ・セットから、データをリストアできます。クライアント・コマンド・ライン・インターフェースを使用して、ローカル・バックアップ・セットから、またはバックアップ・セットから TOC なしでファイルを個別にリストアできます。

クライアント・コマンド・ライン・インターフェースからバックアップ・セットをリストアするには、**query backupset** コマンドを使用して使用可能なバックアップ・セット・データを表示してから、**restore** コマンドを使用してデータをリストアします。

以下のコマンドを使用して、バックアップ・セットからデータをリストアできます。

- ・ **restore**
- ・ **restore backupset**
- ・ **restore image**

バックアップ・セットのロケーションおよびバックアップ・セット内のデータに適したコマンドを使用します。詳しくは、[242 ページの表 43](#) を参照してください。

関連資料

706 ページの『[Query Backupset](#)』

query backupset コマンドは、ローカル・ファイル、テープ装置 (該当する場合)、または IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットを照会します。

714 ページの『[Query Image](#)』

query image コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されているか、backupsetname オプションが指定された場合は IBM Spectrum Protect サーバーのバックアップ・セット内部にあるファイル・システム・イメージに関する情報を表示します。

728 ページの『[Restore](#)』

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

733 ページの『[Restore Backupset](#)』

restore backupset コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー、ローカル・ファイル、またはローカル磁気テープ装置からバックアップ・セットをリストアします。バックアップ・セット全体、または場合によってはバックアップ・セット内の特定ファイルをリストアすることができます。

742 ページの『[Restore Image](#)』

restore image コマンドは、**backup image** コマンドを使用してバックアップされたファイル・システムまたはロー・ボリューム・イメージを リストアします。

フェイルオーバー時のデータのリストアまたはリトリブ

クライアントが 2 次サーバーにフェイルオーバーした場合、複製されたデータを 2 次サーバーからリストアまたはリトリブすることができます。

始める前に

フェイルオーバー時にデータのリストアまたはリトリブを開始する前に、以下を行います。

- クライアントが自動クライアント・フェイルオーバー用に構成されていることを確認します。
- クライアント・ノードを複製する IBM Spectrum Protect サーバーに接続されていることを確認します。フェイルオーバー要件について詳しくは、[98 ページの『自動クライアント・フェイルオーバーの要件』](#)を参照してください。

制約事項: フェイルオーバー・モードでは、データを 2 次サーバーにバックアップすることもアーカイブすることもできません。

手順

フェイルオーバー時にデータをリストアまたはリトリブするには、以下の手順を実行します。

1. 2 次サーバー上のクライアント・データの複製状況を確認します。複製状況は、最新のバックアップが 2 次サーバーに複製されたかどうかを示します。
2. クライアント GUI またはコマンド・ライン・インターフェースから、通常の場合と同様にデータをリストアまたはリトリブします。

ヒント: 2 次サーバーに接続されている場合、再始動可能リストア操作は想定どおりに機能します。ただし、1 次サーバーが停止したときに中断されたリストア操作は、クライアントのフェイルオーバー後に再開できません。クライアントが 2 次サーバーにフェイルオーバーした後にリストア操作全体を再実行する必要があります。

タスクの結果

2 次サーバー上の複製されたデータが最新でない場合、リストアまたはリトリブ操作を続行するか停止するかを決定するためのプロンプトが出されます。

例えば、コマンド・ライン・インターフェースで `build.sh` ディレクトリーをリストアするには、次のコマンドを発行します。

```
dsmc res /build.sh
```

次の出力が表示されます。

```
IBM Spectrum Protect
Command Line Backup-Archive Client Interface
  Client Version 8, Release 1, Level 0.0
  Client date/time: 11/16/2016 12:05:35
(c) Copyright by IBM Corporation and other(s) 1990, 2016. All Rights Reserved.

Node Name: MY_NODE_NAME
ANS2106I 1 次サーバー IBM Spectrum Protect server 192.0.2.1 への接続が失敗しました

ANS2107I 192.0.2.9 : 1501 にある 2 次サーバー TARGET への
接続を試行しています。

Node Name: MY_NODE_NAME
Session established with server TARGET: Windows
  Server Version 8, Release 1, Level 0.0
  Server date/time: 11/16/2016 12:05:35 Last access: 11/15/2016 14:13:32

  Session established in failover mode to secondary server
ANS2108I 2 次サーバー TARGET に接続しました。
Restore function invoked.

ANS2120W サーバー TARGET が報告した最後の保管操作の日付
05/16/2013 22:38:23 が、クライアントが保管している最後の保管操作の日付
05/21/2013 21:32:20 と一致しません。
Continue (Yes (Y)/No (N))
```

N と応答すると、次のメッセージが表示されます。

```
ANS1074W ユーザーが操作を停止しました。
```

Y と応答すると、リストア処理は通常どおり続行しますが、リストアするデータは最新でない可能性があります。

関連概念

自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

複製されたクライアント・データの状況の判別

2 次サーバーからクライアント・データをリストアまたはリトリブする前に、クライアントの最新のバックアップが 2 次サーバーに複製されているかどうかを確認することができます。

ファイルへのイメージのリストア

イメージをバックアップする場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントはボリュームの最初のセクターをバックアップしますが、データのリストア時には、宛先ボリュームの元の論理ボリューム制御ブロックを保持するために最初のセクターをスキップします。

イメージをファイルへリストアする場合は、最初のセクターを含むボリューム全体の内容がファイルにリストアされます。

元のボリューム・グループからの AIX LVM ボリュームには、ボリュームの最初のセクター (512 バイト) に Logical Volume Control Block (LVCB) があります。LVCB には、ボリュームを使用するアプリケーションによって保持される必要があるボリューム固有のメタデータが入っています。

イメージの入ったファイルを元のボリューム・グループから LVM ボリュームにコピーする場合、ファイルと宛先ボリュームの両方で LVCB をスキップする必要があります。次の **dd** コマンドをこの目的に使用することができます。

```
dd if=<filename> of=/dev/<vol> bs=512 skip=1 seek=1
```

dd コマンドではブロック・サイズが 512 バイトに設定されており、コピーが非常に低速になります。**bs=1m** などを使用することをお勧めします。イメージ・データをコピーする別の方法を次に示します。

1. 次のようにして、元の最初のセクターをファイルに保管します。

```
dd if=/dev/<vol> of=firstblk.tmp bs=512 count=1
```

2. 次のようにして、リストアされたイメージをコピーします。

```
dd if=<filename> of=/dev/<vol> bs=1m
```

3. 次のようにして、元の最初のセクターをリストアします。

```
dd if=firstblk.tmp of=/dev/<vol> bs=512 count=1
```

AIX で大容量のスケラブルなボリューム・グループ・フォーマットが導入されたため、論理ボリュームの最初のセクターに LVCB を入れることができず、これをデータに使用できる可能性があります。ご使用のシステムで大容量またはスケラブルなボリューム・グループを使用し、最初のセクターを含むボリューム全体をリストアする必要がある場合は、ボリュームをファイルにリストアしてから、宛先ボリュームにコピーしてください。次の **dd** コマンドをこの目的に使用することができます。

```
dd if=<filename> of=/dev/<vol> bs=1m
```

関連概念

240 ページの『[コマンド・ラインを使用したイメージのリストア](#)』

IBM Spectrum Protect コマンド・ライン・クライアントを使用してイメージをリストアするには、**restore image** コマンドを使用します。

関連タスク

239 ページの『[GUI を使用したイメージのリストア](#)』

GUI を使用して、ファイル・システムのイメージあるいはロー論理ボリュームをリストアできます。

ストレージ・プールを使用した GPFS ファイル・システム・データの管理

Global Parallel File Systems (GPFS) テクノロジーを使用すると、ストレージ・プールを使用してデータを管理することができます。ストレージ・プールは、プロパティが似ていて、1 つのグループとして一緒に管理されるディスクまたは RAID の集合です。

ストレージ・プールが一緒に管理されるグループはファイル・システムです。ストレージ・プール・レベルでの自動的なファイルの配置および管理は、ポリシーによって行われます。ポリシーは、ファイルの属性に基づいてユーザー・データのライフ・サイクルを記述する一連のルールです。

ファイルが作成されると、配置ポリシーによって、そのファイルのデータが最初に置かれる場所が決定され、ファイルはストレージ・プールに割り当てられます。そのファイルに書き込まれるすべてのデータは、割り当てられたストレージ・プールに配置されます。管理ポリシーによって、マイグレーションおよび削除といったファイル管理操作が決定されます。GPFS ファイル・システム内のファイルは、有効な配置ポリシーおよびマイグレーション・ポリシーに応じて、さまざまなストレージ・プールに分散されます。

ファイルはリストア時に正しいストレージ・プールに配置されます。IBM Spectrum Protect サーバーはプール間マイグレーションを認識しないため、ファイルはバックアップが行われた元のストレージ・プールに配置されます。ポリシー・エンジンは、マイグレーション・ポリシーに基づいてファイルを置換します。

ストレージ・プール ID がファイルの拡張属性に保管されていて、そのストレージ・プールが使用可能である場合、ファイルは常にそのストレージ・プールに配置されます。ストレージ・プールが使用不可である

場合、ファイルは配置ポリシーに従って配置されます。配置ポリシーがファイルと一致しない場合、ファイルはシステム・プールに配置されます。

GPFS は、次のようにしてリストア後にファイルの配置を処理します。

- ファイルは、保存済みのファイル属性を RESTORE ルールに突き合わせることによって選択可能なプールに配置されます。
- ファイルは、バックアップされた時点が入っていたプールに配置されます。
- ファイルは、現行の配置ポリシーに基づいて配置されます。
- ファイルはシステム・ストレージ・プールに配置されます。

GPFS RESTORE ルールを使用することで、現行のファイル属性ではなく保存済みの属性に照らして、ファイルの突き合わせをすることができます。ファイル属性が一致しない場合、GPFS は、上記の順でファイルをリストアしようとします。

GPFS RESTORE ルールについて詳しくは、ポリシーおよびルールに関する GPFS の資料をお読みください。

以下の制約事項が適用されます。

- スタブ・ファイルのリストアは、複数のストレージ・プールまたは ACL を持つファイルでは機能しません
- ファイル・セットのリンク解除は許可されません
- GPFS の ctime オプションを no (デフォルト) に設定して、プール間の GPFS ファイル・マイグレーションの後で不要なファイルのバックアップ/アーカイブ・バックアップを防止する必要があります

ストレージ・プールの使用については、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

関連資料

[ストレージ・プール内のデータ・ストレージ](#)

関連情報

[IBM Spectrum Scale 製品情報](#)

[mmbakup コマンド: IBM Spectrum Protect の要件](#)

[IBM Spectrum Scale mmbakup コマンドでの IBM Spectrum Protect の包含/除外オプション使用の考慮事項](#)

特定時点へのデータのリストア

特定時点 リストアを使用して、特定時点に存在していた状態でファイルをリストアします。

このタスクについて

特定時点リストアを使用すれば、既知の破損よりも前の時点のデータをリストアすることによってデータ破損の影響を除去したり、基本構成を以前の状態に回復することができます。

ファイル・スペース、ディレクトリーまたはファイルの 特定時点リストアを行うことができます。

またイメージ・バックアップの特定時点リストアを行うこともできます。

特定時点リストアをサポートするために増分バックアップを実行します。増分バックアップ時、ファイルがクライアント・ファイル・スペースまたはディレクトリーから削除されると、バックアップ/アーカイブ・クライアントはサーバーに通知します。選択バックアップおよび日付による増分バックアップでは、削除されたファイルについてサーバーに通知しません。想定されるリストア要件と整合した頻度で増分バックアップを実行してください。

IBM Spectrum Protect サーバーが維持する最も古いバージョンより前の日時で特定時点リストアを要求する場合は、オブジェクトはシステムにリストアされません。指定された特定時点より前にワークステーションから削除されたファイルは、リストアされません。

注:

1. 管理者は、ファイルを特定日時でリストア可能であることを保証するために、ファイルの非アクティブ・バージョンを維持するのに十分なコピー・グループ設定を定義する必要があります。十分なバージョン

ョンを維持していないと、クライアントは指定する特定時点にすべてのオブジェクトをリストアすることができない可能性があります。

2. ファイルまたはディレクトリーを削除する場合、次の増分バックアップ実行時点で、アクティブ状態のバックアップ・バージョンが非アクティブになり、管理クラスの *versions data deleted* (データが削除されたバージョン) 属性での指定数を超える古いバージョンは削除されます。

特定時点リストアを行う際には、以下の情報を考慮してください。

- クライアントは、指定した特定時点日付より前の最新バックアップからファイル・バージョンをリストアします。指定した特定時点が、このバックアップを行った日時と同一でないことを確認してください。
- リストアしようとしているオブジェクトに指定した日時がサーバー上に存在している最も古いバージョンより古い場合には、クライアントはそのオブジェクトをリストアできません。
- 特定時点リストアでリストアされるのは、クライアント・ワークステーションから特定時点日付後に削除されたファイルであり、特定時点日付前に削除されたファイルではありません。
- クライアントは、特定時点日時以降に作成されたファイルをリストアすることはできません。特定時点リストアの実行時、特定時点日付以降にクライアントで作成されたファイルは削除されません。

手順

クライアント GUI を使用して特定時点リストアを行うには、以下のステップを実行してください。

1. メイン・ウィンドウで「**リストア**」ボタンをクリックする。「**リストア**」ウィンドウが表示されます。
2. 「**リストア**」ウィンドウで「**特定時点**」ボタンをクリックする。「**特定時点リストア**」ウィンドウが表示されます。
3. 「**特定時点日付の使用 (Use a Point-in-Time Date)**」選択ボックスを選択する。日付および時刻を選択し、「**OK**」をクリックします。指定した特定時点が、「**リストア**」ウィンドウの「**特定時点表示**」フィールドに表示されます。
4. リストアするオブジェクトを表示します。名前によるオブジェクトの検索、ディレクトリー・ツリーのフィルター操作、あるいはディレクトリー・ツリー中のディレクトリーの処理を行うことができます。
5. リストアしたいファイルの隣の選択ボックスをクリックする。
6. 「**リストア**」ボタンをクリックします。「**リストアの宛先**」ウィンドウが表示されます。必要な情報を入力します。
7. 「**リストア**」ボタンをクリックしてリストアを開始します。「**タスク・リストのリストア**」ウィンドウに、リストア処理状況が表示されます。

タスクの結果

注: 指定する特定時点に対応したディレクトリーのバックアップ・バージョンがない場合、そのディレクトリー内のファイルは、GUI からはリストアできません。しかし、コマンド・ラインからはそれらのファイルをリストアできます。

`pitdate` オプションおよび `pittime` オプションを指定した **query backup** コマンドおよび **restore** コマンドを使用して、コマンド・ライン・クライアントから特定時点リストアを開始できます。例えば、`pitdate` および `pittime` オプションが **query backup** コマンドで使用されると、ファイル情報が戻される特定時点が確立されます。`pitdate` および `pittime` が **restore** コマンドで使用されると、指定された日時の値によって、ファイルが戻される特定時点が確立されます。`pittime` 値を指定しないで `pitdate` を指定した場合、`pittime` のデフォルトは 23:59:59 です。`pitdate` 値を指定しないで `pittime` を指定した場合、この指定は無視されます。

関連概念

[297 ページの『ストレージ管理ポリシー』](#)

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

関連資料

[663 ページの『Backup Image』](#)

backup image コマンドは、システムの 1 つ以上の ボリュームのイメージ・バックアップを作成します。

保存セットからのデータのリストア

特定時点 リストア操作を使用して、保存セットからデータをリストアすることができます。この操作では、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは IBM Spectrum Protect for Virtual Environments クライアント上で保存セットが作成されたときにサーバー上でアクティブであったデータをリストアします。

始める前に

保存セットからデータをリストアする前に、ファイルのリストア先のサーバーがオンラインであることを確認してください。

制約事項: ある特定時点で複数の保存セットに同じファイルが保管されている可能性がある場合でも、リストアできるのは 1 つの特定のノードの 1 つのファイル・セットのみです。

このタスクについて

バックアップ/アーカイブ・クライアントのコマンド・ラインから、またはクライアント GUI を使用して、特定時点リストア操作を実行します。

クライアント GUI を使用して特定時点リストア操作を開始するには、[249 ページの『特定時点へのデータのリストア』](#)の手順に従います。

手順

コマンド・ライン・クライアントを使用して保存セットからデータをリストアするには、以下のステップを実行します。

1. どの特定時点からデータをリストアするかを決定します。サーバーのコマンド・ラインで、**QUERY RESET** コマンドを発行します。例えば、保存セット ID が 42 の場合、次のコマンドを発行します。

```
query reset 42
```

```
Retention Set ID: 42
Retention Rule Name: XMP1
Point-In-Time Date: 01/07/2019 05:00:00 PM
Retention Period: 60
Expiration Date: 03/08/2019 05:00:00 PM
Retention Set State: Active
Total File Sizes (MB): 180
Last Update by (administrator): SERVER_CONSOLE
Last Update Date/Time: 01/07/2019 05:00:12 PM
Description: Example 1: weekly retention rule runs on Monday
              at 5:00pm
Retention Set Contents: GRASSHOPPER:/home GRASSHOPPER:/home/hannigan/build CRICKET:/home/hannigan/build FLEA:¥¥flea-¥c$
```

2. 保存セットのコンテンツをリストアするには、バックアップ/アーカイブ・クライアントのコマンド・ラインで、**query backup** コマンドを発行します。pitdate オプションと pittime オプションで保存セットのスナップショットの日時を指定します。例えば、次のようにします。

```
query backup {/home/hannigan/build}/* -su=y -pitdate=01/07/2019 -pittime=17:00:00
```

3. 保存セットのコンテンツをリストアします。クライアントのコマンド・ラインで、**restore** コマンドを発行します。pitdate オプションと pittime オプションで保存セットのスナップショットの日時を指定します。例えば次のとおりです。

```
restore {/home/hannigan/build}/* -su=y -pitdate=01/07/2019 -pittime=17:00:00
```

タスクの結果

データがサーバーにリストアされます。

関連タスク

[249 ページの『特定時点へのデータのリストア』](#)

特定時点 リストアを使用して、特定時点に存在していた状態でファイルをリストアします。

関連資料

[703 ページの『Query Backup』](#)

query backup コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されているか、**backupsetname** オプションが指定された場合はサーバーのバックアップ・セット内部にあるファイルのバックアップ・バージョンのリストを表示します。

[728 ページの『Restore』](#)

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

関連情報

[長期データ保存のためのルールの構成](#)

AIX 暗号化ファイルのリストア

ファイルが AIX JFS2 暗号化ファイル・システム (EFS) からロー形式でバックアップされている場合は、同一または別の JFS2 EFS へのみリストアできます。これらのファイルは、異なるファイル・システムや異なるプラットフォームにはリストアできません。

EFS ファイルが平文形式でバックアップされている場合は、どこにでもリストアすることができます。JFS2 EFS にリストアする場合、ファイルが自動的に再暗号化されるのは、ファイルのリストア先のディレクトリに AIX の「EFS 継承」オプションが設定されている場合のみです。

ロー形式でバックアップされたファイルをリストアした後で、ファイルを復号できなくなる場合があります。もともとはファイルに使用されていた暗号鍵が、ユーザーの鍵ストア内で使用できなくなっている場合があります。この場合は、バックアップ時に使用されていた鍵ストアをリストアすることが必要になります。

EFS データのバックアップについて詳しくは、[218 ページの『AIX JFS2 暗号化ファイル・システムのバックアップ』](#)を参照してください。

AIX ワークロード区画のファイル・システムのリストア

ローカル・ワークロード区画 (WPAR) で作成され、グローバル WPAR にインストールされたバックアップ/アーカイブ・クライアントによってバックアップされたすべてのファイルは、そのグローバル WPAR にインストールされたクライアントによってリストアすることができます。

以下は、グローバル区画とグローバル WPAR の構成例です。

```
Global partition:

  system name: shimla

  file system: /home /opt

WPAR #1 configuration:

  name: wpar1

  file system: /home; name in global WPAR: /wpars/wpar1/home

WPAR #2 configuration:

  name: wpar2

  file system: /data; name in global WPAR: /wpars/wpar2/data
```

WPAR データをリストアする方法は 2 つあります。どちらを使用するかは、WPAR データ・ファイルをバックアップする際に使用した方法によって決まります。

- すべての WPAR ファイル・システムを、グローバル区画内部のファイル・スペースとしてリストアします。ファイル・スペース名を使用して、そのスペースが所属する WPAR を識別する必要があります。すべてのデータは、1 つのスケジューラを使用して 1 つのノードで管理されます。以下の例では前に示した構成例を使用しています。この例の `dsm.sys` ファイルでは、すべてのファイル・システム (グローバルとローカルの両方) について 1 つのサーバー・スタンザを指定しています。

```
Sservername shimla
  TCPPort          1500
  TCPServeraddress server.example.com
  nodename         shimla
  PasswordAccess   generate
  Domain           /wpars/wpar1/home /wpars/wpar2/data /home /opt
```

以下のコマンドを使用して、それぞれのファイル・スペースをリストアします。

```
dsmc restore /wpars/wpar1/home/*
dsmc restore /wpars/wpar2/data/*
dsmc restore /home/*
dsmc restore /opt/
```

- 異なるノード名の下でバックアップした場合は、各 WPAR ファイル・システムを異なるノード名からリストアします。各 WPAR には、別個のノード名、およびグローバル区画の中で実行されるスケジューラが必要です。また、3 つのスケジューラ・サービスは、それぞれのサーバー・スタンザ名に対応する異なる `dsm.opt` ファイルを使用してセットアップする必要があります。この方式では、それぞれの WPAR リストア操作をその他の操作から独立させて管理することができます。以下の例では前に示した構成例を使用しています。この例の `dsm.sys` ファイルでは、3 つのサーバー・スタンザ (wpar1 用、wpar2 用、およびグローバル区画 shimla 用) を指定しています。

```
Sservername shimla_wpar1
  TCPPort          1500
  TCPServeraddress server.example.com
  nodename         wpar1
  PasswordAccess   generate
  Domain           /wpars/wpar1/home

Sservername shimla_wpar2
  TCPPort          1500
  TCPServeraddress server.example.com
  nodename         wpar2
  PasswordAccess   generate
  Domain           /wpars/wpar2/data

Sservername shimla
  TCPPort          1500
  TCPServeraddress server.example.com
  nodename         shimla
  PasswordAccess   generate
  Domain           /home /opt
```

表 44. `dsm.opt` ファイルを使用する WPAR リストア・コマンドのサンプル

dsm.opt ファイル内の指定	サンプル・リストア・コマンド
servername shimla_wpar1	dsmc restore /wpars/wpar1/home/*
servername shimla_wpar2	dsmc restore /wpars/wpar2/data/*
servername shimla	dsmc restore /home/* dsmc restore /opt/*

NAS ファイル・システムのリストア

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI または コマンド・ライン・インターフェースを使用して、NAS ファイル・システム・イメージをリストアします。

前にバックアップされていた完全あるいは差分 NAS ファイル・システム・イメージをリストアできます。差分イメージをリストアする場合、IBM Spectrum Protect は自動的に最初にフルバックアップ・イメージをリストアし、次に差分イメージをリストアします。クライアント・ノードが NAS ファイル・システムをマウントして、そのファイル・システムにバックアップとリストア 操作を行う必要はありません。

関連概念

454 ページの『NAS ファイル・システムの処理』

include.fs.nas オプションは、管理クラスを NAS ファイルシステムにバインドし、目次情報をファイル・システムのバックアップ用に保存するかどうかを制御するために使用します。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用した NAS ファイル・システムのリストア

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用して NAS ファイル・システムをリストアすることができます。

始める前に

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI は、IBM Spectrum Protect バージョン 8.1.2 以降のサーバーまたは V7.1.8 以降の V7 サーバーに接続されている必要があります。

手順

1. メイン・ウィンドウから「リストア」ボタンをクリックする。「リストア」ウィンドウが表示されます。
2. 必要ならディレクトリー・ツリーを展開します。ツリー内のノードを拡張するには、そのツリー内のオブジェクトの横にあるプラス符号 (+) をクリックしてください。表示されるノードは、バックアップされていて、それに対して管理者が権限をもつ、そのノードです。ノードと呼ばれるルート・ノードは選択できません。このノードが表示されるのは、NAS プラグインがクライアント・ワークステーションに存在している場合だけです。NAS ノードは、クライアント・ワークステーションのノードと同じレベルで表示されます。管理者が権限をもっているノードだけが表示されます。
3. NAS ノードを展開し、イメージ・オブジェクトを表示させる。
4. イメージ・オブジェクトを展開し、リストア可能なボリュームを表示させる。ボリューム・オブジェクトを展開することはできません。
5. リストアするイメージ・オブジェクトの下のボリュームの横にある選択ボックスをクリックする。特定の日付にバックアップした NAS イメージをリストアする場合は、「特定時点」ボタンをクリックします。その日付を選択した後、その日付かまたはそれ以前にバックアップされた最後のオブジェクトが表示され、非活動オブジェクトも含まれます。選択する前にすべてのイメージを (活動イメージとすべての非活動イメージを含めて) 表示する場合は、メニュー・バーから「表示」>「活動/非活動ファイルの表示」を選択します。
6. 「リストア」をクリックする。「リストアの宛先」ウィンドウが表示されます。「リストア宛先」ウィンドウで情報を入力します。別の宛先へのリストアを選択した場合は、一度に別の宛先にリストアできるのは 1 つのボリュームのみです。NAS ファイル・システム・イメージを、バックアップした NAS ファイル・サーバー上の任意のボリュームに リストアすることができます。他の NAS ファイル・サーバーにはイメージをリストアすることができません。
7. 「リストア」をクリックする。NAS リストアの「タスク・リスト」ウィンドウにリストア処理の状況と進行状況表示バーが表示されます。進行状況表示バーの横にある数値は、リストアのサイズを示しています (既知の場合)。リストアの完了後に、処理の詳細が「NAS リストア・レポート」ウィンドウに表示されます。バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI セッションのクローズが必要な場合は、切断後、現行の NAS 操作が続行されます。NAS リストアの「タスク・リスト」ウィンドウの「終了」ボタンを使用すると、現行操作を終了しないで、プロセスのモニターを終了することができます。

8. オプション: 操作の処理をモニターするには、メイン・ウィンドウから「アクション」>「IBM Spectrum Protect アクティビティ」を選択します。

タスクの結果

考慮事項:

- ワークステーションおよびリモート (NAS) バックアップは、「リストア」ウィンドウで相互に排他的です。リストアの項目を選択した後、その後に選択する項目は同じタイプ (NAS または非 NAS のいずれか) でなければなりません。
- NAS ノードまたはイメージの場合、詳細は「リストア」ウィンドウの右側のフレームには表示されません。NAS イメージに関する情報を表示するには、NAS イメージを強調表示し、メニューから「表示」>「ファイル詳細」を選択します。
- NAS ファイル・スペースを削除するには、「ユーティリティ」>「ファイル・スペースの削除 (Delete Filespaces)」を選択します。ワークステーション・オブジェクトおよびリモート・オブジェクトの両方を削除できます。

コマンド・ラインから NAS ファイル・システムをリストアするためのオプションおよびコマンド

このトピックでは、コマンド・ラインから NAS ファイル・システム・イメージをリストアするために使用できるオプションとコマンドの例をいくつか示します。

表 45. NAS オプションとコマンド

オプションまたはコマンド	定義	ページ
query node	特定の管理ユーザー ID が操作実行権限を保有する、全ノードを表示します。管理ユーザー ID は、コマンド・ラインまたは Web クライアントのいずれかから使用する NAS ノードとクライアント・ワークステーション・ノードの両方に対して、少なくともクライアント所有者権限を持っていなければなりません。	718 ページの『Query Node』
query backup	query backup コマンドで class オプションを使用して、NAS ファイル・サーバーでバックアップされたファイル・システム・イメージについての情報を表示します。	703 ページの『Query Backup』
query filesystem	query filesystem コマンドで class オプションを使用して、NAS ノードに属するファイル・スペースのリストを表示します。	710 ページの『Query Filespace』
restore nas	Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属しているファイル・システムのイメージをリストアします。	745 ページの『restore NAS』
monitor process	管理ユーザーが権限を持つすべての NAS ノードの現行バックアップ・プロセスおよびリストア・プロセスを表示します。管理ユーザーは、そこで 1 プロセスを選択してモニターできます。	698 ページの『Monitor Process』
cancel process	管理ユーザーが権限を持つすべての NAS ノードの現行バックアップ・プロセスおよびリストア・プロセスを表示します。その表示から管理ユーザーは取り消すプロセスを 1 つ選択できます。	677 ページの『Cancel Process』

表 45. NAS オプションとコマンド (続き)

オプションまたはコマンド	定義	ページ
delete filesystem	delete filesystem で class オプションを使用して、削除するものを選択するために、NAS ノードに属するファイル・スペースのリストを表示します。	684 ページの『Delete Filespace』

クライアントのプラットフォームにかかわらず、NAS ファイル・システム指定は、/vol/vol0 の例のように、スラッシュ (/) 区切り文字を使用します。

注: コマンド・ライン・クライアントまたは Web クライアントを使用して NAS リストア操作を開始すると、サーバーは、操作を開始し、制御し、モニターするプロセスを開始します。データ移動が起こる前に、サーバーでマウントおよび他の必要なタスクを行わなければならないので、クライアント・コマンド・ライン・インターフェースの進行に気付くまでに少し時間がかかることがあります。IBM Spectrum Protect コマンド・ライン・クライアントは、マウントが発生すると「割り込み中...」のメッセージを表示することがあります。このメッセージは無視できます。

アクティブまたは非アクティブ・バックアップのリストア

管理者は、IBM Spectrum Protect がワークステーション上の各ファイルごとに維持するバックアップ・バージョン数を決定します。

ファイルを複数バージョン持つことにより、最新のバックアップが損傷した場合に、古いバージョンをリストアすることができます。最新のバックアップ・バージョンは、アクティブ・バージョンです。その他のバックアップ・バージョンは、非アクティブ・バージョンです。

IBM Spectrum Protect がファイルをバックアップするごとに、新しいバックアップ・バージョンにアクティブ・バックアップのマークが付けられ、直前のアクティブ・バックアップは非アクティブ・バックアップとなります。IBM Spectrum Protect は、非アクティブ・バージョンがその最大数に達した時点で、最も古い非アクティブ・バージョンを削除します。

非アクティブ状態のバックアップ・バージョンをリストアする場合は、「表示」メニュー → 「**アクティブ/非アクティブ・ファイルの表示**」項目をクリックして、アクティブ・バージョンと非アクティブ・バージョンの両方を表示する必要があります。アクティブ・バージョンのみを表示 (デフォルト) するには、「表示」メニュー → 「**アクティブ・ファイルのみ表示**」項目をクリックします。一度に複数のバージョンをリストアしようとする、アクティブ・バージョンのみがリストアされます。

IBM Spectrum Protect コマンド・ラインで **inactive** オプションを使用すると、アクティブ状態と非アクティブ状態のオブジェクトの両方を表示できます。

関連資料

445 ページの『Inactive』

inactive オプションを使用すると、活動状態と非活動状態の両方のオブジェクトを表示することができます。

GUI を使用したデータのリストア

このセクションでは、個々のファイルまたはサブディレクトリーのバックアップ・バージョンをリストアするために実行するステップをリストします。

手順

1. メイン・ウィンドウから「**リストア**」をクリックする。「リストア」ウィンドウが表示されます。
2. ディレクトリー・ツリーを展開します。リストアしたいファイルまたはディレクトリーの隣の選択ボックスをクリックします。ファイルを検索あるいはフィルター操作するには、ツールバーの「**検索**」アイコンをクリックします。
3. 「ファイル (リストア) を検索」ウィンドウで検索基準を入力する。

4. 「**検索**」ボタンをクリックする。「マッチング・ファイル (リストア)」ウィンドウが表示されます。
5. リストアしたいファイルの隣の選択ボックスをクリックして、「一致ファイル (リストア) を検索」ウィンドウをクローズする。
6. 「ファイル (リストア) を検索」ウィンドウでフィルター 操作基準を入力する。
7. 「**フィルター**」ボタンをクリックする。「リストア」ウィンドウに、フィルター 操作済みファイルが表示されます。
8. リストアしたいフィルター 操作済みファイルまたはディレクトリーの隣の選択ボックスをクリックする。
9. 特定のリストア・オプションを修正するには、「**オプション**」ボタンをクリックする。オプションを変更した場合は、変更したオプションが有効なのは現行セッションの間だけです。
10. 「**リストア**」をクリックする。「リストアの宛先」ウィンドウが表示されます。「リストア宛先」ウィンドウで情報を入力する。
11. 「**リストア**」をクリックする。「リストア・タスク・リスト」ウィンドウに、リストア処理の状況が表示されます。

タスクの結果

注：Mac OS X の場合は、GUI を使用してデータをリストアするときに以下の項目を考慮してください。

1. **IBM Spectrum Protect Tools for Administrators** を使用してクライアントを開始するときは、クライアントはゼロの UID で稼働しています。これは、ファイルをリストアするためのフォルダーを作成すると、そのフォルダーは root が所有することを意味します。ファイルにアクセスするには、フォルダーの許可を変更する必要があります。端末ウィンドウから **sudo chown** コマンドを使用してフォルダーの所有者を変更できます。これを実行する方法の詳細については、ご使用のオペレーティング・システムの資料を参照してください。
2. **replace** オプションを **no** に設定してファイルのリストアを行うとき、既存のファイルは上書きされませんが、既存のディレクトリーは上書きされます。リストア操作中に既存のディレクトリーを変更しないようにするには、「**オプション**」ボタン⇒「**選択状態の全ファイルとディレクトリー**」ドロップダウン・メニュー⇒「**ファイルのみ**」オプションを選択します。
3. フォルダーが UFS または HFSX ファイル・システムから HFS ファイル・システムにリストアされたときに、大/小文字の違いしかない場合は、クライアントは両方のフォルダーのコンテンツを 1 つのフォルダーにリストアします。

コマンド・ライン・リストアの例

このトピックでは、特定のタスクに対して使用する **restore** コマンドの例を記載します。

次の表では、**restore** コマンドを使用して IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージからオブジェクトをリストアする例を示しています。

表 46. コマンド・ライン・リストアの例

タスク	コマンド	考慮事項
バックアップが非アクティブであっても、/Users/monnett/Documents/h1.doc ファイルの最新のバックアップ・バージョンをリストア。	dsmc restore /Users/monnett/Documents/h1.doc - latest	リストアしようとしているファイルがもはやワークステーションになく、さらに、そのファイルの削除後に増分バックアップを実行してある場合は、サーバー上にそのファイルのアクティブ・バックアップはありません。この場合は、latest オプションを使用して、最新のバックアップ・バージョンをリストアしてください。IBM Spectrum Protect は、最新バックアップ・バージョンがアクティブでも非アクティブでも、リストアします。詳しくは、 474 ページの『Latest』 を参照してください。
ファイルのアクティブおよび非アクティブ・バックアップ・バージョンのリストを表示し、その中からリストアするバージョンを選択。	dsmc restore "/Users/monnett/Documents/*"-pick - inactive	ファイルのアクティブ・バージョンと非アクティブ・バージョンを同時にリストアしようとした場合は、アクティブ・バージョンのみがリストアされます。詳しくは、 499 ページの『Pick』 および 445 ページの『Inactive』 を参照してください。
/Users/monnett/Documents/h1.doc ファイルを、元のディレクトリーにリストア。	dsmc restore /Users/monnett/Documents/h1.doc	宛先を指定しなかった場合は、ファイルは元の位置にリストアされます。
新規の名前とディレクトリーを使用して、/Users/monnett/Documents/h1.doc ファイルをリストア。	dsmc restore /Users/monnett/Documents/h1.doc / Users/gordon/Documents/h2.doc	None
/Users ディレクトリーおよびそのすべてのサブディレクトリー内のファイルをリストア。	dsmc restore /Users/ - subdir=yes	特定のパスおよびファイルのリストア時に、IBM Spectrum Protect は、そのパス下にあるすべてのサブディレクトリー、および任意のサブディレクトリーに存在する指定されたファイルのインスタンスを再帰的にリストアします。 subdir オプションについて詳しくは、 569 ページの『Subdir』 を参照してください。
/Users/gordon/Documents ディレクトリー内のすべてのファイルを、2003 年 8 月 17 日午後 1 時の状態にリストア。	dsmc restore - pitd=8/17/2003 - pitt=13:00:00 /Users/gordon/Documents/	pitdate および pittime オプションの詳細については、 500 ページの『Pitdate』 および 501 ページの『Pittime』 を参照してください。

表 46. コマンド・ライン・リストアの例 (続き)

タスク	コマンド	考慮事項
.bak で終わるすべてのファイルを、/Users/mike/Documents ディレクトリーから /Users/mike/projectn/ ディレクトリーにリストア。	<code>dsmc restore "/Users/mike/Documents/*.bak" /Users/mike/projectn/</code>	宛先がディレクトリーの場合には、宛先の最後の文字として区切り文字 (/) を指定します。区切り文字を省略して、指定したソースがディレクトリーまたはワイルドカード付きのファイル指定の場合には、エラーを受け取ることになります。 projectn ディレクトリーが存在しない場合には、このディレクトリーが作成されます。
restorelist.txt ファイルに指定されたファイルを別の場所にリストア。	<code>dsmc restore -filelist=/Users/user2/Documents/restorelist.txt /Users/NewRestoreLocation/</code>	ファイルのリストのリストアの詳細については、 429 ページの『Filelist』 を参照してください。

関連資料

728 ページの『Restore』

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

例: コマンド・ラインを使用した大量のデータのリストア

多数のファイルをリストアする必要がある場合は、GUI の代わりに **restore** コマンドを使用する方が、より良いパフォーマンスが得られます。さらに、一度に複数の **restore** コマンドを入力すると、パフォーマンスが向上します。

例えば、/home ファイルシステム内のすべてのファイルをリストアする場合は、次のように入力します。

```
dsmc restore /home/ -subdir=yes -replace=all -tapeprompt=no
```

ただし、/home ファイル・スペースのディレクトリーに対して複数のコマンドを入力すると、そのファイルをより速くリストアすることができます。

例えば、次のコマンド群を入力することができます。

```
dsmc restore /home/monnett/ -subdir=yes -replace=all -tapeprompt=no
dsmc restore /home/gillis/ -subdir=yes -replace=all -tapeprompt=no
dsmc restore /home/stewart/ -subdir=yes -replace=all -tapeprompt=no
```

また、quiet オプションを **restore** コマンドで使用して、処理時間を節減することもできます。しかし、個別ファイルに関する通知メッセージは出されません。

注: ユーザーのクライアント・オプション・ファイル内の `subdir`、`replace`、`tapeprompt`、および `quiet` の各オプションに対して、すでに適切な値を設定してある場合は、これらのオプションをコマンドに組み込む必要はありません。

複数コマンドを入力して各ファイルをリストアする場合、ファイル・スペースの固有部分をそれぞれの **restore** コマンドで指定しなければなりません。これらのコマンドでのファイル指定がオーバーラップしないようにしてください。

ファイル・スペースにあるディレクトリーのリストを表示するには、**query backup** コマンドを使用します。例えば、次のようにします。

```
dsmc query backup -dirsonly -subdir=no /Users/
```

一般的には、**restore** コマンドは一度に 2 から 4 個入力することができます。パフォーマンス低下を発生させずに一度に実行可能なこのコマンドの最大数は、ネットワーク使用状況およびメモリー容量などの要因により変わります。

各ファイルをリストアできるスピードも、そのサーバー上で使用可能な磁気テープ装置数と、管理者がコロケーションを使用して、ファイル・スペースに割り当てるボリューム数を可能なかぎり少なくしているかによって決まります。

例えば、/Users/user1 および /Users/user2 が同じテープ上にあると、/Users/user2 のリストアは、/Users/user1 のリストアが完了するまで待たなければなりません。しかし、/Users/user3 が別のテープにあり、少なくとも 2 つの磁気テープ装置が使用可能であれば、/Users/user3 のリストアを /Users/user1 のリストアと同時に開始することができます。

HSM またはバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用して非常に大きいファイル (2 GB) をリストアする場合は、システムの **ulimit** 値を無制限 (-1) に設定してください。こうすれば、クライアントは、これらの大容量ファイルを十分なシステム・リソースを使用してリストアすることができます。**ulimit** が低い値に設定されると、リストアは失敗する可能性があります。

標準照会リストア、無照会リストア、および再始動可能リストア

このトピックでは、標準 (クラシック) リストア方法、無照会リストア方法、および再始動可能リストア方法について説明します。

標準照会リストア・プロセス

標準照会リストア・プロセスは、クラシック・リストアとも呼ばれます。このトピックでは、標準照会リストアがどのように機能するかについて説明します。

標準照会リストアは次のように機能します。

- クライアントは、リストア対象のクライアント・ファイル・スペースに対応してバックアップされたファイル一覧をサーバーに照会する。
- サーバーは、リストア基準に一致するバックアップ済みファイルのリストを送信する。アクティブ/非アクティブの両方のファイルをリストアしたい場合は、サーバーは、すべてのバックアップ済みファイルに関する情報をクライアントに送信します。
- サーバーから戻されたファイルのリストがクライアントのメモリー内でソートされて、ファイル・リストアの順序が決められ、リストアの実行に要するテープのマウントが最小限に抑えられる。
- クライアントは、ファイル・データとディレクトリー・オブジェクトのリストアをサーバーに指示する。
- リストアしたいディレクトリーとファイルが、サーバーからクライアントに送信される。

無照会リストア・プロセス

無照会リストア・プロセスでは、各オブジェクトごとにサーバーに照会するのではなく、単一のリストア要求がサーバーに送られます。

1. クライアントは、無照会リストアが行われることをサーバーに通知し、ファイル・スペース、ディレクトリー、およびファイルについての詳細をサーバーに提供する。
2. サーバーは、リストアをガイドする項目を追跡するため、個別のテーブルを使用する。
3. リストアされるデータがクライアントに送信される。ディスクに保管されたファイル・オブジェクトおよびディレクトリー・オブジェクトは、オブジェクトがリストアされる前のそのデータのソートが不要であるため、即時に送信されます。
4. データのリストアには複数のセッションを使用できる。データが複数のテープに存在する場合、サーバーには選択可能なマウント・ポイントが複数あります。**resourceutilization** オプションと **MAXNUMMP** を組み合わせて使用すれば、複数のセッションが使用可能になります。

restore コマンドのソース・ファイル指定で無制限のワイルドカードを入力し、その際にオプション **inactive**、**latest**、**pick**、**fromdate**、**todate** のいずれも指定しなかった場合、クライアントは、無照会リストア方式でサーバーからファイルおよびディレクトリーをリストアします。この方法は、無照会リストアと呼ばれていますが、その理由は、この方法では、リストア対象の各オブジェクトごとにサーバ

ーに照会するのではなく、単一のリストア要求がサーバーに送られるからです。この場合、クライアントによるそれ以上のアクションなしに、サーバーは、クライアントにファイルとディレクトリーを返します。クライアントは、単にサーバーからの データを受け入れ、**restore** コマンドに名前が 指定されている宛先にリストアするだけです。

IBM Spectrum Protect GUI クライアントを使用する無制限ワイルドカード・コマンドの例としては、リストア・ツリー・ウィンドウからのフォルダーの選択があります。制限付きワイルドカード・コマンドの例として、フォルダーから個々のファイルを選択することがあります。

コマンド・ライン・クライアントを使用する無制限ワイルドカード・コマンドの例としては、以下のよう なものがあります。

```
"/Users/user1/Documents/2004/*"
```

```
/home/mydocs/2004/*
```

制限付きワイルドカード・ファイル指定の例は、以下のようになります。

```
/Users/user1/Documents/2004/sales.*
```

```
/home/mydocs/2004/sales.*
```

再始動可能リストア・プロセス

リストア・プロセスが電源異常あるいはネットワーク障害で停止した場合は、サーバーは停止が起こった個所を記録します。

このレコードは、再始動リストア としてクライアントに 認識されます。複数の再始動リストア・セッションを設定できます。クライアントのサーバー・データベースに再開可能なリストア・セッションがあるかを確認するには、**query restore** コマンドを使用するか、または「アクション」メニューから「再始動リストア」を選択してください。

ファイル・システムをさらにバックアップする 前に、再始動リストアを完了する必要があります。中断されたリストアの繰り返しを試みたり、宛先ファイル・スペースのバックアップを試行したりしても、元のリストアが完了していないため、そうした試みは失敗します。**restart restore** コマンドを入力すると、中断ポイントからリストアを再開 でき、**cancel restore** コマンドを使用すると、再始動リストアを削除できます。

IBM Spectrum Protect GUI の「再始動リストア」ダイアログ・ボックスから、中断されたリストアを選択して削除するか、リストアの再開を選択できます。中断されたリストアを再開した場合は、中断が生じた時点ではリストアが不完全であった、1 つ以上のファイルからなる最初のトランザクションで 再開します。このため、割り込まれたトランザクションのリストア済みのファイルについて、置換のプロンプトをいくつか受け取ることがあります。

GUI を使用して再始動リストアを行うためには、以下のステップに従います。

1. メインパネルで「アクション」->「再始動可能リストア」を選択します。
2. 完了したい再始動可能リストア・セッションを選択します。
3. パネルの下部にある「再始動 (Restart)」ボタンをクリックします。

関連資料

[525 ページの『Resourceutilization』](#)

オプション・ファイルの **resourceutilization** オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーおよびクライアントが処理中に使用できるリソースのレベルを調整するために使用します。

[728 ページの『Restore』](#)

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

Solaris Zettabyte (ZFS) ファイル・システムのリストア

Zettabyte ファイル・システム (ZFS) は、ストレージ・プールを使用して物理ストレージを管理します。

ZFS ファイル・システムのリストア方法は、どのようにバックアップされたかによって異なります。

- すべてのファイルおよびフォルダーを個別のオブジェクトとしてバックアップした場合は、ファイル・レベル・リストアを実行することにより、それらをリストアすることができます。例えば、次のようにします。

```
dsmc restore /tank/myZFS/ -subdir=yes -replace=all
```

ファイル・レベル・リストア操作は、災害復旧シナリオでは実行しないでください。バックアップ/アーカイブ・クライアントにより作成されたバックアップから、すべてのファイル・システムおよびフォルダーが正常にリストアされた場合でも、リストアされたシステムが不安定になったり障害が発生したりすることがあります。

- ZFS 全体のスナップショットを単一ファイルとしてバックアップした場合は、スナップショット・ファイルをサーバーから一時的なロケーションにリストアする必要があります。例えば、次のようにします。

```
dsmc restore /tmpdir/mySnapshotfile
```

その後、Oracle Solaris ZFS コマンドを使用して、スナップショット・ファイルからファイル・システムをリストアできます。例えば、次のようにします。

```
zfs receive tank/myZFS@mySnapshot < /tmpdir/mySnapshotFile
```

災害復旧のシナリオで、スナップショット・ファイルから ZFS をリストアする利点は、ファイル・システム全体をリストアできることです。

ZFS ファイル・システム上のデータのリストアについて詳しくは、Oracle から入手可能な製品資料を参照してください。ZFS ルート・プールをリストアする場合は、ルート・プールの再作成方法およびルート・プール・スナップショットのリカバリー方法が記載されているトピックを参照してください。

関連タスク

217 ページの『Solaris Zettabyte ファイル・システムのバックアップ』

Solaris SPARC システムおよび Solaris x86 システムで、ZFS スナップショットを使用して、Zettabyte ファイル・システム (ZFS) をバックアップすることができます。通常の増分バックアップまたは選択バックアップでのこの手法の利点は、スナップショット内のファイルおよびフォルダーが常に読み取り専用状態であるため、それらをバックアップ中に変更できないことです。

リストアの追加タスク

このセクションでは、データのリストアに関連するその他の考慮事項を説明しています。

別のユーザーへの、ファイルのリストアまたはリトリブの許可

同じワークステーションあるいは別のワークステーション上の別のユーザーを許可して、バックアップ・バージョンをリストアしたり、ユーザーのファイルのアーカイブ・コピーをリトリブすることができます。

このタスクについて

これにより、ファイルを他の人々と共用したり、異なるノード名で使用する他のワークステーションと共用したりすることができます。ユーザー所有のファイルをリストアまたはリトリブする許可を他のワークステーションのユーザーに与えるには、そのワークステーションで UNIX クライアントの 1 つが稼働していて、ご使用のサーバーにそのワークステーションが登録されている必要があります。

注: Mac OS X は、Mac OS X ノードのリストアのみを実行できます。

別ユーザーに、ユーザーのファイルをリストアまたはリトリートする許可を与えるには、次のように行います。

手順

1. メイン・ウィンドウから「**ユーティリティー**」→「**ノード・アクセス・リスト**」をクリックします。「ノード・アクセス・リスト」ウィンドウが表示されます。
2. 「**追加**」ボタンをクリックします。「アクセス規則」ウィンドウが現れます。
3. 「アクセス規則を追加」ウィンドウの「アクセスを許可」フィールドで項目を選択し、他のユーザーがアクセス可能なデータのタイプを指定します。「バックアップしたオブジェクト」と「アーカイブしたオブジェクト」のどちらかを選択できます。
4. データにアクセス可能なユーザーのホスト・ワークステーションのノード名を「ノードへのアクセスを許可」フィールドに入力します。
5. データにアクセス可能なノード上のユーザー名を「ユーザー」フィールドに入力します。
6. 「ファイル・スペースとディレクトリー」フィールドで、ユーザーがアクセス可能なファイル・スペースとディレクトリーを選択します。一度に選択できるのは、1つのファイル・スペースと1つのディレクトリーです。別のファイル・スペースやディレクトリーへのユーザー・アクセス権を与えたい場合は、別のアクセス規則を作成する必要があります。
7. ユーザー・アクセスをディレクトリー内の特定のファイルに限定したい場合は、サーバー上にある他のユーザーがアクセス可能なファイルの名前またはパターンを「ファイル名」フィールドに入力します。「ファイル名」フィールドに入力できる項目は1つのみです。1つのファイル名か、1つ以上のファイルと一致させるパターンのどちらかを入力できます。パターンの一部として、ワイルドカード文字を使用することができます。サーバー上に保管されているファイルと一致する項目を入力する必要があります。
8. Java GUI: 選択したディレクトリー (そのサブディレクトリーを含む) 内で、ファイル名指定と一致するすべてのファイルへのアクセス権を与える場合は、「**サブディレクトリーを含める**」をクリックします。
9. 「**OK**」ボタンをクリックして、アクセス規則を保管し、「アクセス規則」ウィンドウをクローズします。
10. 「ノード・アクセス・リスト」ウィンドウのリスト・ボックスに、作成したアクセス規則が表示されます。「ノード・アクセス・リスト」ウィンドウでの作業が終了したら、「**OK**」ボタンをクリックします。変更内容を保管しない場合は、「**キャンセル**」をクリックするかウィンドウをクローズします。

タスクの結果

クライアント・コマンド・ライン・インターフェースでは、別のノードでのファイルのリストアまたはリトリートする許可するには、**set access** コマンドを使用してください。また、**query access** コマンドを使用して現行リストを表示したり、**delete access** コマンドを使用してリストからノードを削除することもできます。

関連資料

678 ページの『Delete Access』

delete access コマンドは、サーバー上に保管されているファイルの許可規則を削除します。

700 ページの『Query Access』

query access コマンドは、特定のファイルのバックアップ・バージョンあるいはアーカイブ・コピーへのアクセス権が付与されたユーザーを表示します。

767 ページの『Set Access』

set access コマンドは、ユーザーのバックアップ・バージョンまたはアーカイブ済みコピーへのアクセス権を他のノードのユーザーに付与します。

別のクライアント・ノードからのファイルのリストアまたはリトリブ

サーバー上で別ユーザーのファイルへのアクセスをそのユーザーから認可されると、そのファイルをローカル・システムにリストアまたはリトリブすることができます。

このタスクについて

サーバー上の別ユーザーのファイル・スペースの表示、別ユーザーのバックアップ・バージョンのリストア、または別ユーザーのアーカイブ・コピーのローカル・ファイル・システムへのリトリブを行うことができます。

手順

1. メイン・ウィンドウから「**ユーティリティ**」をクリックする。
2. 「**別のノードにアクセス**」をクリックする。「別のノードにアクセス」ウィンドウが表示されます。
3. ユーザーのホスト・ワークステーションのノード名を「ノード名」フィールドに入力します。「ユーザー」名フィールドにユーザーの名前を入力します。
4. 「**設定 (Set)**」ボタンをクリックする。

タスクの結果

コマンドを使用している場合は、**fromnode** および **fromowner** オプションを使用して、ノード名とそれらのファイルを所有しているユーザーの名前を指示します。

例えば、Node1 という名前のワークステーションからバックアップされ、Ann という名前のユーザーが所有していたファイルがあるとします。そのファイルを今度は自分が所有するファイル・システムの 1 つにリストアするには、次のように入力します。

```
dsmc restore -fromn=node1 -fromo=ann "/home/proj/*" /home/gillis/
```

ファイル・スペースのリストを取得するには、**query filespace** コマンドを使用します。例えば、Node1 上の Ann が所有しているファイル・スペースのリストを入手するには、次のように入力します。

```
dsmc query filespace -fromn=node1 -fromo=ann
```

関連資料

[437 ページの『Fromnode』](#)

fromnode オプションは、あるノードで別のノードのためのコマンドを実行することを許可するために使用します。別のノードのユーザーは、その別のノードに対して **set access** コマンドを使用してファイルを照会、リストア、あるいはリトリブできるようにしなければなりません。

[710 ページの『Query Filespace』](#)

query filespace コマンドは、ノードのファイル・スペースのリストを表示します。ファイル・スペースは、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されるか、**backupsetname** オプションが指定されている場合は、サーバーのバックアップ・セット内部に保管されます。照会したい単一のファイル・スペース名を指定することもできます。

[728 ページの『Restore』](#)

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

[759 ページの『Retrieve』](#)

retrieve コマンドは、アーカイブ・ファイルのコピー を IBM Spectrum Protect サーバーから入手します。特定ファイルまたはディレクトリー全体をリトリブすることができます。

別のワークステーションへのファイルのリストアまたはリトリブ

自分自身のワークステーションでバックアップを取ったファイルを、別のワークステーションからリストアまたはリトリブできます。 ノードに割り当てられる IBM Spectrum Protect パスワードを知っている必要があります。

ファイルを別のワークステーションにリストアまたはリトリブするには、**virtualnodename** オプションを使用して、ファイルをバックアップしたときのワークステーションのノード名を指定します。**virtualnodename** オプションは、ワークステーションのホスト名には設定できません。IBM Spectrum Protectを開始するときに**virtualnodename** オプションを使用することができます。あるいは、**virtualnodename** オプションをクライアント・ユーザー・オプション・ファイル **dsm.opt** に追加することもできます。他のユーザーのワークステーションを借りていて、それらのクライアント・ユーザー・オプション・ファイルを更新したくない場合は、**virtualnodename** オプションを **dsmj** コマンドで使用します。

IBM Spectrum Protect は、ユーザーの元のノードのパスワードを要求するプロンプトを表示します。正しいパスワードを入力した後、ユーザーの元のワークステーションからのすべてのファイル・システムが、「リストアまたはリトリブ」ウィンドウに表示されます。ユーザーは自分の元のワークステーションで作業しているかのように、ファイルのリストアまたはリトリブを行うことができます。

重要: この方法を使用してファイルにアクセスすると、ワークステーションからバックアップおよびアーカイブしたすべてのファイルにアクセス可能です。仮想 root ユーザーを考えてみます。

コマンドで **virtualnodename** オプションを使用することができます。例えば、ユーザーの **projx** ファイルをリストアする場合は、次のように入力します。

```
dsmc restore -virtualnodename=nodeone 『/home/monnett/projx/*』
```

代替ワークステーション上の同じディレクトリー名にファイルをリストアまたはリトリブしたくない場合は、異なる宛先を入力します。

ファイルをリトリブする場合の考慮事項は、ファイルのリストアの場合と同じです。

ディスク損失の場合のディスクのリストア

クライアントが稼働可能な場合のみはファイルを回復できます。そのクライアントが含まれているディスクが (例えば盗難またはハードウェア障害により) 消失した場合は、そのクライアントを再インストールしてからでないとファイルを回復することはできません。オペレーティング・システムと通信ソフトウェアが入っているディスクが消失した場合は、それらを回復しないと、IBM Spectrum Protect サーバーに接続することはできません。

このタスクについて

この種の損失に対してユーザーを保護するには、使用できるインストール・メディアのセットと一緒にして、サーバーと連絡が取れ、データの回復を始める状態にシステムをリストアします。インストール・メディアには以下のものを含んでいる必要があります。

手順

1. 基本機能が行なえる始動可能オペレーティング・システム。
2. サーバーとの通信の確立を可能にする正しく構成された通信プログラム。
3. 適切なカスタマイズ・オプション・ファイルを持つクライアント。このタスクを完了するためにクライアント・コマンド・ライン・インターフェースを使用することができます。

タスクの結果

使用する通信パッケージでは、必要なファイルは何かを決定します。オペレーティング・システムと通信ソフトウェアのマニュアルを調べて、インストール・メディアを セットアップしてください。

ユーザーのワークステーションに IBM Spectrum Protect for Space Management がインストールされている場合は、インストール・メディアには、HSM コマンド・ライン・クライアントが含まれている必要があります。

注: お客様の管理者はリストア操作をスケジュールすることができます。このことは、大量ファイルをリストアする必要がある場合に非常に有効です。

関連概念

[スペース管理ファイル・システムでのバックアップおよびリストア](#)

ファイル・スペースの削除

IBM Spectrum Protect 管理者がユーザーの権限を認可すると、このユーザーは、所有しているファイル・スペース全体をサーバーから 削除することができます。

このタスクについて

ファイル・スペースを削除すると、そのファイル・スペース内に入っているすべてのファイルとイメージ、バックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの両方が削除されます。例えば、/home/monnet ファイル・システムのファイル・スペースを削除すると、そのファイル・システム内のすべてのファイルのバックアップ、およびそのファイル・システムからアーカイブしたすべてのファイルを 削除することになります。本当にファイル・スペースを削除したいかどうか、よく検討してください。このタスクを実行するには、許可ユーザーであることが必要です。

delete backup コマンドを使用して、個々のバックアップ・バージョンを削除することができます。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI またはクライアント・コマンド・ライン・インターフェースを使用してファイル・スペースを削除することができます。NAS ファイル・スペースを削除するには、Web クライアントまたはクライアント・コマンド・ライン・インターフェースを使用します。

GUI を使用してファイル・スペースを削除するには、以下のステップを実行します。

手順

1. メイン・ウィンドウから「ユーティリティ」→「ファイル・スペースの 削除」を選択する。
2. 削除したいファイル・スペースの隣の選択ボックスをクリックする。
3. 「削除」 ボタンをクリックする。クライアントは、ファイル・スペースを削除する前に確認のプロンプトが出します。

タスクの結果

ファイル・スペースは、**delete filespace** コマンドを使用して削除することもできます。 **class** オプションを **delete filespace** コマンドで使用して NAS ファイル・スペースを削除します。

関連資料

358 ページの『Class』

class オプションは、**delete filespace**、**query backup**、および **query filespace** コマンドを使用する時に、NAS オブジェクトまたはクライアント・オブジェクトのリストを表示するかどうかを指定します。

680 ページの『Delete Backup』

delete backup コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージにバックアップされたファイル、イメージ、および仮想マシンを削除します。オブジェクトを削除するには、その権限を管理者から得る必要があります。

684 ページの『Delete Filespace』

delete filespace コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージ内のファイル・スペースを削除します。ファイル・スペースは、ユーザーがバックアップまたはアーカイブしたファイルを含むサーバー上の論理スペースです。

SELinux を使用した Red Hat Enterprise Linux 5 クライアントのファイルのリストア

非 root ユーザーが Red Hat Enterprise Linux 5 クライアントのファイルをリストアしようとする場合は、まず SELinux を使用可能にする必要があります。

SELinux を使用可能にしないと、修正済み拡張属性を備えたファイルをリストアする場合に問題が生じます。

第 6 章 データのアーカイブとリトリブ (UNIX および Linux)

あまり使用されないファイルを IBM Spectrum Protect サーバーにアーカイブし、アーカイブしたファイルを必要に応じてリトリブすることができます。ファイルのアーカイブとリトリブは、ファイルのバックアップとリストアに似ています。多くのウィンドウや概念がよく似ています。

このトピックで説明する主なアーカイブ手順およびリトリブ手順は、プリファレンス・エディターの手順を除き、すべて Web クライアントにも適用されます。

実行できる主なアーカイブ・タスクおよびリトリブ・タスクは、以下のとおりです。

- [269 ページの『GUI を使用したデータのアーカイブ』](#)
- [270 ページの『コマンド・ラインを使用したデータのアーカイブの例』](#)
- [274 ページの『アーカイブ・データの削除』](#)
- [277 ページの『GUI を使用したデータのリトリブ』](#)
- [277 ページの『コマンド・ラインを使用したデータのリトリブの例』](#)

関連概念

[161 ページの『データのバックアップ』](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用してユーザーのファイルのバックアップ・バージョンを IBM Spectrum Protect サーバーに保管します。元のファイルが失われたり、損傷したりした場合、これらのバックアップ・バージョンをリストアすることができます。

関連タスク

[151 ページの『Web クライアント・セッションの開始』](#)

Web クライアントは、Web ブラウザー・ソフトウェアとは別に開始および管理することができる Java Web Start アプリケーションです。ワークステーション上で Web クライアントをインストールおよび構成した後、Web クライアントを使用してリモート・アクセスし、クライアント・ノード上のデータをリモートからバックアップ、リストア、アーカイブ、あるいはリトリブすることができます。Web クライアントは、身体障害のあるユーザーを支援する装置を使用する機能を備え、キーボード・ナビゲーションが改善されています。

ファイルのアーカイブ

ファイルをアーカイブするには、特にアーカイブするファイルを選択する必要があります。ファイルは、ファイル指定を使用して選択することも、ディレクトリー・ツリーから選択することもできます。

管理者が、ユーザーのワークステーション上で特定のファイルを自動的にアーカイブするようにスケジュールを設定する場合もあります。以下のセクションでは、スケジュールを使用しないで ファイルをアーカイブする方法について説明します。

関連タスク

[286 ページの『クライアント・スケジューラー・プロセスをバックグラウンド・タスクとして実行し始動時に自動的に開始するための設定』](#)

IBM Spectrum Protect クライアント・スケジューラーを構成し、システムの開始時に自動的に開始するバックグラウンド・システム・タスクとして実行することができます。

GUI を使用したデータのアーカイブ

ファイル名を使用してファイルまたはファイル・グループをアーカイブすることができます。ディレクトリー・ツリーを使用して、検索基準に一致するファイルを選択できます。

手順

以下の手順でファイルをアーカイブします。

1. メイン・ウィンドウで「**アーカイブ**」をクリックする。
2. 「**アーカイブ**」ウィンドウで、ツリーの中のオブジェクトの隣にある正符号 (+) または フォルダー・アイコンをクリックして、ディレクトリー・ツリーを展開する。 ファイルを検索 あるいは フィルター 操作するには、ツールバーの「**検索**」アイコンをクリックします。
3. 「**ファイルの検索**」ウィンドウで検索基準を入力する。
4. 「**検索**」をクリックする。
5. 「**マッチング・ファイル**」ウィンドウで、アーカイブしたいファイルの隣の選択ボックスをクリックし、「**マッチング・ファイル**」ウィンドウを閉じる。
6. 「**ファイルの検出**」ウィンドウでフィルター 基準を入力する。
7. 「**フィルター**」をクリックする。「**アーカイブ**」ウィンドウに、フィルター操作済みファイルが表示されます。
8. アーカイブしたいフィルター 操作済みファイルまたはディレクトリーの隣の選択ボックスをクリックする。
9. 説明を入力するか、デフォルトの説明を受け入れるか、あるいは「**説明**」ボックスにあるアーカイブ・パッケージの既存の説明を選択する。
この説明の最大長は 254 文字です。 既存のアーカイブ説明を使用する場合は、選択したファイルあるいはディレクトリーが アーカイブ・パッケージに追加されます。同じ説明を持つすべてのアーカイブ・パッケージは、リトリブ、照会、および削除用にグループ化されます。
10. 特定のアーカイブ・オプションを変更するには、「**オプション**」をクリックする。
オプションを変更した場合は、変更したオプションが有効なのは現行セッションの間だけです。
11. 「**アーカイブ**」をクリックする。
「アーカイブのタスク・リスト」ウィンドウにアーカイブ処理の状況が表示されます。

コマンド・ラインを使用したデータのアーカイブの例

後の使用に備えて、あるいは履歴または法律上の目的でファイルのコピーをそれぞれの現在の状態に保持する場合は、アーカイブ・サービスを要求します。 コマンド・ラインを使用したデータのアーカイブの例を示します。

単一ファイル、ファイルのグループ、あるいは1つのディレクトリーまたはサブディレクトリー 内のすべてのファイルをアーカイブできます。 ファイルをアーカイブ後、元のファイルをワークステーションから削除するよう選択できます。

以下の表に、**archive** コマンドを使用してオブジェクトをアーカイブする 例を示します。

表 47. コマンド・ライン・アーカイブの例

タスク	コマンド	考慮事項
/home/proj1 ディレクトリー内のファイル拡張子が .txt であるすべてのファイルをアーカイブします。	<code>dsmc archive "/home/proj1/*.txt"</code>	一度に複数のファイルをアーカイブする場合は、ワイルドカードを使用します。
/home/jones/proj/ ディレクトリー内のすべてのファイルのアーカイブとワークステーション上でのファイルの削除。	<code>dsmc archive /home/jones/proj/ -deletefiles</code>	アーカイブしたファイルは、再び必要になった時ワークステーションにリトリブします。 <code>deletefiles</code> オプションについて詳しくは、 379 ページの『Deletefiles』 を参照してください。

表 47. コマンド・ライン・アーカイブの例 (続き)

タスク	コマンド	考慮事項
/home/jones/h1.doc および /home/jones/test.doc ファイルをアーカイブ。	<code>dsmc archive /home/jones/h1.doc /home/jones/test.doc</code>	archive コマンドに <code>removeoperandlimit</code> オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。このオプションを使用すると、1 つのコマンドで 20 を超えるファイルを指定できるようになります。このオプションの詳細については、515 ページの『 Removeoperandlimit 』を参照してください。
/home/avi/filelist.txt ファイル内のファイルのリストをアーカイブ。	<code>dsmc archive -filelist=/home/avi/filelist.txt</code>	<code>filelist</code> オプションを使用して、ファイルのリストを処理します。詳しくは、429 ページの『 Filelist 』を参照してください。
/home/jones/ch1.doc ファイルをアーカイブし、そのアーカイブに記述を割り当てる。	<code>dsmc archive /home/jones/ch1.doc -description="Chapter 1, first version"</code>	archive コマンドで記述を指定しない場合のデフォルトは <code>Archive Date:x</code> です。ここで、x は現在のシステム日付です。 <code>description</code> オプションについて詳しくは、379 ページの『 Description 』を参照してください。
/home/jones/proj/ ディレクトリーおよびそのサブディレクトリー内のすべてのファイルをアーカイブ。	<code>dsmc archive /home/jones/proj/ -subdir=yes</code>	<code>subdir</code> オプションについて詳しくは、569 ページの『 Subdir 』を参照してください。
<code>relx</code> または <code>dir1</code> ディレクトリーではなく、/home/relx/dir1 ディレクトリー内のファイルのみをアーカイブするには、 archive コマンドで <code>v2archive</code> オプションを使用します。	<code>dsmc archive "/home/relx/dir1/" -v2archive</code>	バックアップ/アーカイブ・クライアントは、/home/relx/dir1 ディレクトリー内のファイルのみをアーカイブします。パス内にあるディレクトリーは処理されません。 <code>v2archive</code> オプションについて詳しくは、593 ページの『 V2archive 』を参照してください。
<code>archmc</code> オプションは、 archive コマンドで使用して、アーカイブ対象ファイルをバインドするポリシー・ドメインの使用可能な管理クラスを指定します。	<code>dsmc archive -archmc=ret2yrs /home/plan/proj1/budget.jan</code>	<code>archmc</code> オプションについて詳しくは、343 ページの『 Archmc 』を参照してください。管理クラスについて詳しくは、297 ページの『 第 9 章 ストレージ管理ポリシー 』を参照してください。

表 47. コマンド・ライン・アーカイブの例 (続き)

タスク	コマンド	考慮事項
/usr ファイル・システムのスナップショットを開始し、そのスナップショットを /snapshot/day1 としてマウントしたとします。/usr/dir1/sub1 ディレクトリー・ツリーをローカル・スナップショットからアーカイブし、それを IBM Spectrum Protect サーバー上でファイル・スペース名 /usr で管理します。	dsmc archive /usr/dir1/sub1/ -subdir=yes -snapshotroot=/snapshot/day1	クライアントは、snapshotroot 値を、ファイル・スペース名と見なします。詳しくは、557 ページの『Snapshotroot』を参照してください。

関連資料

654 ページの『Archive』

archive コマンドは、サーバー側のディレクトリーおよびそのサブディレクトリーに入っている単一のファイル、選択したファイル、またはすべてのファイルをアーカイブします。

ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け

ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データと関連付けるには、snapshotroot オプションを使用します。

snapshotroot オプションを **archive** コマンドで使用し、併せて論理ボリュームのスナップショットを提供するベンダーから取得したアプリケーションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データと関連付けることができます。

snapshotroot オプションはボリューム・スナップショットを取る場合には使用できませんが、ボリューム・スナップショットによって作成されたデータを管理する場合にこのオプションを使用できます。

関連資料

557 ページの『Snapshotroot』

論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダー・アプリケーションで、**incremental** コマンド、**selective** コマンド、または **archive** コマンドに snapshotroot オプションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データに関連付けます。

クライアント・ノード・プロキシを使用したデータのアーカイブ

ストレージを共用する複数ノードのアーカイブは、IBM Spectrum Protect サーバー上の 共通ターゲット・ノード名に統合することができます。

始める前に

複数ノード環境内のすべてのエージェント・ノードは、同じプラットフォーム・タイプである必要がある。ターゲット・ノードを従来のノードとして使用しない。複数ノード処理の場合にのみ使用してください。

プロキシ・セッションの以下の機能を検討してください。

- プロキシ操作は、IBM Spectrum Protect サーバーで定義されているターゲット・ノードの設定 (**maxnumpp** および **deduplication** など) とスケジュールを使用します。エージェント・ノードの IBM Spectrum Protect サーバー・ノードの設定およびスケジュールは無視されます。
- システム状態またはシステム・サービスのバックアップまたはリストアを実行することはできません。
- (GUI ドロップダウンから、または **fromnode** オプションを使用して) 別のノードにアクセスすることはできません。
- NAS バックアップまたはリストアを実行することはできません。

このタスクについて

アーカイブ・ファイルをサーバー上の共通ターゲット・ノード名に統合すると、Xsan またはクラスター使用時など、アーカイブの実行に責任があるワークステーションが、時間がたつと変わる可能性がある場合に便利です。 `asnodename` オプションを指定すると、バックアップを実行したシステムとは異なるシステムから、データをリストアすることもできます。適切なコマンドと共に `asnodename` オプションを使用して、IBM Spectrum Protect サーバー上のターゲット・ノード名の下で、データのバックアップ、アーカイブ、リストア、およびリトリブを実行します。このサポートは IBM Spectrum Protect V5.3 以降でのみ使用できます。

Tivoli Storage Manager FastBack クライアントもクライアント・ノード・プロキシを使用してバックアップされます。

プロキシ操作を行えるようにご使用の環境を構成するには、バックアップ/アーカイブ・クライアントとサーバーでのオプションおよびコマンドの設定などのいくつかのステップを含む手順を実行します。

手順

ステップ 273 ページの『1』から 273 ページの『5』を実行して、クライアントをインストールし、別のノードに代わってアーカイブ・プロシージャーを実行できるプロキシ権限をノードに付与します。

1. 共用データ環境のすべてのノードに、バックアップ/アーカイブ・クライアントをインストールする。
2. 各ノードが存在していない場合は、IBM Spectrum Protect サーバーにそのノードを登録する。共用データ環境で使用される各エージェント・ノードが共用する共通のターゲット・ノード名を登録します。
3. IBM Spectrum Protect サーバーに共用データ環境内の各ノードを登録する。これは、認証の目的に使用されるエージェント・ノード名です。 `asnodename` オプションが使用されている場合には、データはノード名を使用して保管されません。
4. `GRANT PROXYNODE` コマンドを使用して (IBM Spectrum Protect 管理者)、共用環境内のすべてのノードにプロキシ権限を付与し、IBM Spectrum Protect サーバー上のターゲット・ノード名にアクセスできるようにする。
5. `QUERY PROXYNODE` 管理クライアント・コマンドを使用して、`GRANT PROXYNODE` コマンドによって権限付与された、許可ユーザーのクライアント・ノードを表示する。

ステップ 273 ページの『6』で、サーバー上でアーカイブ・ファイルが確実に暗号化されるように設定します。

6. オプション・ファイルで `encryptkey` オプションを設定する。

オプション・ファイルで `encryptkey=save` を指定し、IBM Spectrum Protect パスワード・ファイルに暗号鍵を保存します。 `asnode=ProxyNodeName` を使用して、少なくとも 1 つのファイルをバックアップし、複数ノード環境内の各エージェント・ノード上でローカル暗号鍵を作成する。

ノード・ユーザーによって暗号鍵が管理されようになりたい場合は、オプション・ファイルで `encryptkey=prompt` と指定します。複数ノード環境のエージェント・ノードのユーザーが同じ暗号鍵を使用していることを確認する。

暗号鍵を変更する場合は、この手順を繰り返します。共用環境で、バックアップされたすべてのファイルに同じ暗号鍵を使用してください。

ステップ 273 ページの『7』からステップ 273 ページの『10』を実行して、GUI で、マルチノード操作を使用可能にします。

7. `QUERY PROXYNODE` 管理クライアント・コマンドを使用して、クライアント・ノードに、ターゲット・ノードに対するプロキシ権限 (またはターゲット・ノードとして機能する許可) が与えられていることを確認する。
 8. 「編集」 > 「プリファレンス」を選択して「プリファレンス」ウィンドウを開く。
 9. 「一般」タブを選択し、「ノード別名」フィールドに、プロキシを許可されているターゲット・ノードの名前を入力する。
 10. 「適用」をクリックしてから「OK」をクリックし、「プリファレンス」ウィンドウを閉じる。
- ステップ 274 ページの『11』を実行して、ご使用のクライアント・ノードが現在サーバーにターゲット・ノードとしてアクセスしていることを確認します。

11. ツリー・ウィンドウを開いて、「**ノード別名**」フィールドで指定したターゲット・ノード名が、ウィンドウに表示されていることを確認する。
あるいは、ターゲット・ノード名が「**接続情報**」ウィンドウの「**ノードとしてアクセス**」フィールドに表示されていることを確認することもできます。
12. オプション: 単一ノード操作に戻るには、「**一般**」 > 「**プリファレンス**」タブの「**ノードとしてアクセス**」フィールドから「**ノード別名**」を削除します。

関連資料

Asnodename

asnodename オプションを使用すると、エージェント・ノードが別のノード (ターゲット・ノード) の代わりにデータのバックアップまたはリストアを行うことができます。これにより、複数のノードからの並行操作が可能になり、同じターゲット・ノードおよびファイル・スペースに並行してデータを保管することができます。

プロキシ操作のセッションの設定およびスケジュール

エージェント・ノードが指定されたターゲット・ノードの代わりに asnodename *target_node_name* オプションを使用して操作を実行すると、プロキシ操作が実行されます。

アーカイブ・データの削除

個々のアーカイブ・オブジェクトを、それらのオブジェクトが属するファイル・スペース全体を削除せずに IBM Spectrum Protect サーバーから削除できます。

始める前に

アーカイブされたオブジェクトを削除するには、その権限が IBM Spectrum Protect 管理者から認可されている必要があります。この権限を所有しているかどうかを確認するには、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI または Web クライアントのメインメニューから、「**ファイル**」 > 「**接続情報**」を選択します。アーカイブ削除権限の状況が、「**アーカイブ・ファイルの削除**」フィールドにリストされます。このフィールドに「**いいえ**」が表示されている場合、アーカイブされたオブジェクトを削除する権限が管理者から認可されていない限り、それらを削除できません。

手順

アーカイブされたオブジェクトをサーバーから削除するには、Web クライアントまたは GUI で以下の手順を実行します。Web クライアントまたは GUI を使用する代わりに、コマンド・ラインから **delete archive** コマンドを使用してアーカイブされたオブジェクトを削除することもできます。

1. 「**ユーティリティー**」メニューから「**アーカイブ・データの削除**」を選択する。
2. 「**アーカイブ削除 (Archive Delete)**」ウィンドウで、展開したいオブジェクトの隣の正符号 (+) またはフォルダー・アイコンをクリックして、ディレクトリー・ツリーを展開する。ツリー上のオブジェクトは、アーカイブ・パッケージの説明によってグループ分けされています。
3. 削除したいアーカイブされたオブジェクトを選択する。
4. 「**削除**」をクリックする。

選択されたオブジェクトの削除を開始する前に、クライアントが確認のプロンプトを表示します。

「**アーカイブ削除タスク・リスト (Archive Delete Task List)**」ウィンドウに、削除操作の進行状況が表示されます。

関連資料

[679 ページの『Delete Archive』](#)

delete archive コマンドは、アーカイブ・ファイルを IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージから削除します。アーカイブ・ファイルを削除するには、その権限を管理者から得る必要があります。

その他のアーカイブ・タスク

アクセス許可、シンボリック・リンク、およびハード・リンクは、データをアーカイブする際に考慮すべき拡張機能です。

アクセス許可

ファイルをアーカイブすると、クライアントは、ファイルに割り当てられている標準 UNIX アクセス権を保存します。

オペレーティング・システムによっては、拡張許可も保存します。例えば、AIX ワークステーション上のファイルの場合、クライアントはアクセス制御リストを保存します。

読者が 1 ユーザーであり、かつ、そのユーザーが読み取りアクセス権限を持っているファイルをアーカイブすると、そのユーザーはそのファイルのアーカイブ・コピーを所有します。別ユーザーにアクセス権限を付与している場合を除き、アーカイブ対象ファイルのリトリブ可能なユーザーは、読者だけです。

シンボリック・リンクのアーカイブとリトリブ

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、通常のファイルおよびディレクトリーの場合とは異なる方法でシンボリック・リンクのアーカイブとリトリブを行います。

クライアントがシンボリック・リンクをアーカイブおよびリトリブする方法は、オプションの設定、ターゲット・ディレクトリーがアクセス可能かどうか、およびオブジェクトの指定方法によって異なります。

UNIX シンボリック・リンクは、他のファイルあるいはディレクトリーへのポインターを含むファイルです。シンボリック・リンクが指すオブジェクトはターゲット・オブジェクトと呼ばれます。

シンボリック・リンクはターゲット・ディレクトリーへのパス情報として、またはディレクトリーとして、バックアップできます。シンボリック・リンクがディレクトリーとしてバックアップされると、ターゲット・ディレクトリー内のファイルおよびフォルダーもバックアップできます。

何をリストアするかは、シンボリック・リンクがバックアップされた方法、リストアの範囲、**followsymbolic** オプションの設定、およびリストア時にターゲット・ディレクトリーがアクセス可能かどうかによって異なります。

シンボリック・リンクがアーカイブ中に操作される方法の詳細については、**archsymb linkasfile** オプションを参照してください。

注:ここで説明されているシンボリック・リンクの処理は、Mac OS X には適用されません。シンボリック・リンクは常にファイルとしてアーカイブされ、たどることはできません。

以下の表に、シンボリック・リンクのアーカイブおよびリトリブ機能と、取るべきアクションを示します。

表 48. アーカイブおよびリトリブのためのシンボリック・リンク管理表

機能	取るべきアクション
ファイル・リンクのアーカイブ。	シンボリック・リンクが指しているファイルのアーカイブ。
ディレクトリー・リンクのアーカイブ。	ITS (送信勧誘文字) とその内容のアーカイブ。
subdir=yes でのファイルのアーカイブ。	ファイル、ディレクトリー・パス、およびサブツリー内の同様の名前のファイルをすべてアーカイブする。
subdir=yes でのディレクトリーのアーカイブ。	ディレクトリー、その内容、およびサブディレクトリーの内容のアーカイブ。

表 48. アーカイブおよびリトリブのためのシンボリック・リンク管理表 (続き)

機能	取るべきアクション
存在しないファイルあるいはディレクトリーを指すシンボリック・リンクのアーカイブ。	シンボリック・リンクのアーカイブ。
ファイルを指しているシンボリック・リンクのリトリブ。ファイルおよびリンクは存在している。	replace=y が設定されている場合はファイルを置き換える。
ファイルを指しているシンボリック・リンクのリトリブ。シンボリック・リンクはもはや存在していない。	ファイル名をシンボリック・リンク名で置き換えてファイルをリトリブし、シンボリック・リンクが存在するディレクトリー内にそのファイルを収容する。
ディレクトリーを指すシンボリック・リンクのリトリブ。シンボリック・リンクとディレクトリーはもはや存在しない。	シンボリック・リンクが存在しているディレクトリーの中にディレクトリーを 1 つ作成し、すべてのファイルとサブディレクトリーをそのディレクトリーにリストアする。シンボリック・リンク名は新規ディレクトリー名として使用される。
ディレクトリーを指すシンボリック・リンクのリトリブ。シンボリック・リンクとディレクトリーはまだ存在している。	ディレクトリーは、シンボリック・リンクが存在している限りリトリブされない。

関連資料

344 ページの『Archsymlinkasfile』

archsymlinkasfile オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがシンボリック・リンクをたどり、それが指しているファイルまたはディレクトリーをアーカイブするのか、シンボリック・リンクのみをアーカイブするのかを指定します。このオプションは、**archive** コマンドで使用してください。

ハード・リンク

ハード・リンクされているファイルをアーカイブすると、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、リンクされているファイルの各インスタンスをアーカイブします。

例えば、ハード・リンクされている 2 つのファイルをアーカイブする場合、クライアントはファイル・データを 2 度アーカイブします。

ハード・リンクされているファイルをリトリブすると、クライアントは、リンクを再確立します。例えば、お客様にはハード・リンクされたペアのファイルがあり、かつ、そのハード・リンクされたファイルの 1 つだけがワークステーション上にある場合、両ファイルをリトリブする時点でそれらのファイルがハード・リンクされます。この手順には例外が 1 つだけあり、ハード・リンクされている 2 つのファイルをアーカイブし、その後ワークステーション上でそれらの間の接続を切断する場合に起こります。サーバーからこの 2 つのファイルをリトリブした場合、クライアントは、現行ファイル・システムを尊重してハード・リンクをリトリブしません。

ヒント: ハード・リンクされているすべてのファイルのアーカイブとリトリブを同時に行わないと、問題が発生する場合があります。ハード・リンクされたファイルがまだ同期化されているか確認するには、すべてのハード・リンクを同時にアーカイブし、それらの同じファイルを一緒にリトリブしてください。

アーカイブのリトリブ

サーバーからワークステーションにアーカイブ・コピーを戻したいとき、ファイルをリトリブします。

ファイルをリトリブする場合の多くのその他の考慮事項は、ファイルのリストアの場合と同じです。

重要:

- 何も指定せずにファイルをリトリブすると、複数のバージョンのアーカイブ・コピーがサーバーに存在した場合、クライアントはすべてのコピーをリトリブします。最初のコピーがリトリブされた後で、2 番目のコピーがリトリブされます。クライアント・ワークステーションに既存のコピーがある場合

は、それを置き換えるか、スキップするのか、またはキャンセルするのかを尋ねるプロンプトが出されます。

- IBM Spectrum Protect クライアントでアーカイブされるデータは、データのアーカイブに使用した同じバージョンまたはそれ以降のバージョンでのみリトリブできます。

関連概念

265 ページの『別のワークステーションへのファイルのリストアまたはリトリブ』

自分自身のワークステーションでバックアップを取ったファイルを、別のワークステーションからリストアまたはリトリブできます。ノードに割り当てられる IBM Spectrum Protect パスワードを知っている必要があります。

関連タスク

262 ページの『別のユーザーへの、ファイルのリストアまたはリトリブの許可』

同じワークステーションあるいは別のワークステーション上の別のユーザーを許可して、バックアップ・バージョンをリストアしたり、ユーザーのファイルのアーカイブ・コピーをリトリブすることができます。

264 ページの『別のクライアント・ノードからのファイルのリストアまたはリトリブ』

サーバー上で別ユーザーのファイルへのアクセスをそのユーザーから認可されると、そのファイルをローカル・システムにリストアまたはリトリブすることができます。

GUI を使用したデータのリトリブ

GUI を使用してアーカイブされたファイルをリトリブすることができます。

手順

1. クライアント Java GUI メイン・ウィンドウで「リトリブ」をクリックする。「リトリブ」ウィンドウが表示されます。
2. 展開したいオブジェクトの隣の (+) 符号またはフォルダー・アイコンをクリックして、ディレクトリー・ツリーを展開する。ファイルを検索 あるいは フィルター 操作するには、ツールバーの「検索」アイコンをクリックします。
3. 「ファイルの検索」ウィンドウで検索基準を入力する。
4. 「検索」をクリックする。「マッチング・ファイル」ウィンドウが表示されます。
5. リトリブしたいファイルの隣の選択ボックスをクリックして、「マッチング・ファイル」ウィンドウをクローズする。
6. 「ファイルの検出」ウィンドウでフィルター 基準を入力する。
7. 「フィルター」をクリックする。「リトリブ」ウィンドウに、フィルター 操作済みファイルが表示されます。
8. リトリブしたいフィルター 操作済みファイルまたはディレクトリーの選択ボックスをクリックする。
9. 特定のリトリブ・オプションを修正するには、「オプション」ボタンをクリックする。オプションを変更した場合は、変更したオプションが有効なのは現行セッションの間だけです。
10. 「リトリブ」をクリックする。「リトリブ宛先」ウィンドウが表示されます。「リトリブ宛先」ウィンドウで適切な情報を入力します。
11. 「リトリブ」をクリックする。「タスク・リスト」ウィンドウにリトリブ処理の状況が表示されます。

コマンド・ラインを使用したデータのリトリブの例

単一ファイル、ファイルのグループ、あるいは1つのディレクトリーまたはサブディレクトリー内のすべてのファイルをリトリブできます。

ファイルをリトリブすると、そのファイルのコピーが IBM Spectrum Protect サーバーから送信されます。アーカイブされたファイルはストレージ内にそのまま残ります。

retrieve コマンドを使用して、ストレージからワークステーションにファイルをリトリートします。以下の表に、**retrieve** コマンドを使用する例を示します。

表 49. アーカイブのリトリートのコマンド・ラインの例

タスク	コマンド	考慮事項
元のディレクトリーへの /home/jones/h1.doc ファイルのリトリート。	<code>dsmc retrieve /home/jones/h1.doc</code>	宛先を指定しなかった場合、ファイルはそれぞれの元の位置にリトリートされます。
新しい名前とディレクトリーでの /home/jones/h1.doc ファイルのリトリート。	<code>dsmc retrieve /home/jones/h1.doc /home/smith/h2.doc</code>	ありません。
文字 .bak で終わるすべてのファイルの、/home/jones ディレクトリーから /home/smith ディレクトリーへのリトリート。	<code>dsmc retrieve "/home/jones/*.bak" /home/smith/</code>	ありません。
/home/jones/ch1.doc ファイルをリトリートし、記述を割り当てる。	<code>dsmc retrieve /home/jones/ch1.doc -description="Chapter 1, first version"</code>	retrieve コマンドで記述を指定しなかった場合、デフォルトは Retrieve Date:x です。この場合、x は現在のシステム日付です。
リトリートするファイルを選択できるアーカイブのリストを表示するための、 <code>pick</code> オプションの使用。	<code>dsmc retrieve "/home/jones/*" -pick</code>	ありません。
<code>retrievelist.txt</code> ファイルに指定されたファイルのリストの、元のディレクトリーへのリトリート。	<code>dsmc retrieve -filelist=/home/dir2/retrievelist.txt</code>	ありません。

関連資料

759 ページの『[Retrieve](#)』

retrieve コマンドは、アーカイブ・ファイルのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーから入手します。特定ファイルまたはディレクトリー全体をリトリートすることができます。

379 ページの『[Description](#)』

`description` オプションは、アーカイブ、アーカイブ削除、リトリート、照会アーカイブ、または Query BACKUPSET の実行時に、ファイルに関する記述を割り当てまたは指定します。

429 ページの『[Filelist](#)』

`filelist` オプションを使用して、ファイルのリストを処理します。

499 ページの『[Pick](#)』

`pick` オプションは、入力したファイル指定と一致するバックアップ・バージョン、またはアーカイブ・コピーのリストを作成します。

管理クラスのアーカイブ

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、`include-exclude` オプション・リスト内の `include` オプションを検査して、アーカイブ済みファイルを割り当てる管理クラスを決定します。

`include` オプションを使用してファイルに管理クラスを割り当てない場合、クライアントは、デフォルト管理クラスをファイルに割り当てます。選択された管理クラスがアーカイブ・コピー・グループを含んでいる場合、クライアントはファイルのみをアーカイブできます。

デフォルト管理クラスを指定変更するには、**archmc** オプションを使用するか、または GUI の「**アーカイブ**」ウィンドウにある「**オプション**」をクリックし、「**include-exclude リストの上書き**」をクリックしてから、管理クラスを選択します。

バックアップ/アーカイブ・クライアント Java GUI ディレクトリー・ツリーまたは Web クライアント・ディレクトリー・ツリー内の include-exclude ステートメントを追加することもできます。**include-exclude** の **プレビュー・ユーティリティー** 機能を使用すると、データをサーバーに送信する前に、include-exclude リストをプレビューすることができます。

関連概念

[303 ページの『ファイルへの管理クラスの割り当て』](#)

管理クラスは、ファイルをいつバックアップの対象として包含するか、ファイルをいつまでサーバーに保持しておくか、ファイルのバージョンをいくつサーバーに保持しておくかを定義するものです。

[299 ページの『管理クラスおよびコピー・グループについての情報の表示』](#)

ポリシー情報を、コマンド・ライン・インターフェースまたはグラフィカル・ユーザー・インターフェースで表示できます。

関連資料

[698 ページの『Preview Archive』](#)

preview archive コマンドは、データをサーバーに送信せずに、アーカイブ・コマンドをシミュレートします。

[699 ページの『Preview Backup』](#)

preview backup コマンドは、データをサーバーに送信せずに、バックアップ・コマンドをシミュレートします。

第 7 章 IBM Spectrum Protect スケジューラーの概要

IBM Spectrum Protect セントラル・スケジューラーを使用すると、指定した時刻 (複数の場合あり) にクライアント操作を自動的に発生させることができます。

IBM Spectrum Protect におけるスケジューリングの理解のために、いくつかの用語を説明します。

スケジュール定義

IBM Spectrum Protect サーバー上のスケジュール定義で、アクションのタイプ、アクションを実行する時刻、アクションを実行する頻度など、自動化されたアクティビティの重要なプロパティを指定します。スケジュールに設定できるプロパティは、ほかにもたくさんあります。**DEFINE SCHEDULE** については、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

スケジュール・アソシエーション

スケジュール・アソシエーションによって、クライアント・ノードに特定のスケジュール定義を割り当てます。スケジュール・アソシエーションを複数設定することにより、単一のスケジュール定義が多くのクライアント・ノードで使用できるようになります。スケジュール定義は、特定のポリシー・ドメインを使って組み込まれます。このため、あるポリシー・ドメインに対して定義されたノードは、そのドメイン内に定義されているスケジュールに関連付けることだけが可能です。

スケジュールされたイベント

スケジュールされたイベントとは、ノードに対してスケジュールを実行する際の個々のオカレンスのことです。クライアントの自動スケジュールされたイベントが実行されるには、以下の条件を満たしていなければなりません。

- 特定のポリシー・ドメインに対してスケジュール定義が存在している。
- そのポリシー・ドメインに属する必須ノードに対してスケジュール・アソシエーションが存在している。
- クライアント・スケジューラー・プロセスがクライアント・システム上で稼働している。

IBM Spectrum Protect サーバー上でスケジュール定義を作成時に、増分、選択、アーカイブ、リストア、リトリブ、イメージ・バックアップ、イメージ・リストア、コマンドおよびマクロなどの選択可能なアクションをスケジュールします。スケジュールされたアクションで最も頻繁に使用されるのは、**objects** パラメーターを未定義のままにした **Incremental** です。この設定では、バックアップ/アーカイブ・クライアントはクライアント・ドメイン・オプションで定義されたすべてのファイル・システムのドメイン増分バックアップを実行します。**command** アクションを使用したスケジュール定義では、オペレーティング・システムのコマンドやシェル・スクリプトを実行できます。IBM Spectrum Protect for Data Protection クライアントのタスクを自動化する場合、**command** アクション・スケジュール定義を使用する必要があります。これによって、アプリケーション用のコマンド・ライン・ユーティリティーが起動されます。

スケジュールの開始時間帯は、スケジュール・イベントを何時から何時の間で開始したらよいかを指定します。開始時間帯は、スケジュール定義パラメーター **startdate**、**starttime**、**durunits**、および **duration** によって定義されます。**startdate** オプションおよび **starttime** オプションは、スケジュールされた最初のイベントの開始時間帯の開始日/開始時刻を定義します。後続のスケジュールされたイベントに対する開始時間帯の先頭時刻は、スケジュール定義の **period** および **perunit** の値によって異なります。**duration** パラメーターおよび **durunits** パラメーターでは、開始時間帯の長さを定義します。スケジュール・アクションは、開始時間帯の範囲内に開始する必要があります。わかりやすく説明するため、以下のスケジュール定義の結果を考えてみます。

```
define schedule standard test1 action=incremental starttime=12:00:00 period=1
perunits=hour dur=30 duru=minutes
```

イベント	時間帯の開始	時間帯の終了	実際の開始 (単なる例であり時刻はその都度異なる)
1	12:00:00	12:30:00	12:05:33
2	13:00:00	13:30:00	13:15:02

イベント	時間帯の開始	時間帯の終了	実際の開始 (単なる例であり時刻はその都度異なる)
3	14:00:00	14:30:00	14:02:00
以下省略			

実際の開始時刻は、IBM Spectrum Protect セントラル・スケジューラーによって提供されるランダム化機能によって変動し、IBM Spectrum Protect サーバー上でスケジュールされたセッションの負荷が分散されます。

例: スケジュール定義でのブランク・スペースを含むファイル名

ブランク・スペースが含まれているファイル指定を使用してスケジュールの **objects** パラメーターまたはスケジュールの **options** パラメーターを定義または更新する際は、ブランクが含まれている個々のファイル指定を引用符 (") で囲んだ後で、すべてのファイル指定を単一引用符 (') で囲みます。

次の例は、ファイル指定にスペース文字が含まれている場合にスケジュールの **object** パラメーターを区切る方法を示しています。

```
objects="/home/proj1/Some file.doc"
objects="/home/proj1/Some file.doc" "/home/Another file.txt" /home/noblanks.txt'
objects="/home/My Directory With Blank Spaces/"
objects="/Users/user1/Documents/Some file.doc"
objects="/Users/user1/Documents/Some file.doc"
"/Users/user5/Documents/Another file.txt" /Users/user3/Documents/noblanks.txt'
objects="/Users/user1/My Directory With Blank Spaces/"
```

この構文により /home/proj1/Some file.doc のようなスペースを含むファイル指定は、2 つの別のファイル (/home/proj1/Some と file.doc) でなく、単一のファイル名として扱われます。

次の例は、ファイル指定にスペース文字が含まれている場合にスケジュールの **options** パラメーターを区切る方法を示しています。

```
options='-preschedulecmd="/home/me/my files/bin/myscript"
-postschedulecmd="/home/me/my files/bin/mypostscript" -quiet'
options='-presched="/home/me/my files/bin/precmd" -postsched=finish'
```

DEFINE SCHEDULE コマンドと **UPDATE SCHEDULE** コマンドの **objects** パラメーターと **options** パラメーターの情報を参照することもできます。これらのコマンドおよびパラメーターの説明は、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

関連概念

150 ページの『ブランク・スペースまたは引用符を含む入力ストリングの指定』

ブランクまたは引用符を含む入力ストリングを指定する場合は、特定のルールに従う必要があります。

特定ノードに対する優先開始時刻

場合によっては、特定のノードにおいて、スケジュールで定義された開始時刻にできるだけ近い時刻に、スケジュールされたアクティビティを確実に開始するようにしたいことがあります。通常、これが必要になるのは、プロンプト・モードのスケジューリングを使用している場合です。

スケジュールに関連付けられているクライアント・ノード数および該当のノードのプロンプト順序によっては、ノードのプロンプトがスケジュール上の開始時刻から大幅に遅延することがあります。

この場合、以下のステップを実行できます。

1. スケジュールを別名の新規スケジュールにコピーします (または、Preferred 属性を指定して新規スケジュールを定義します)。
2. 新規のスケジューリング優先順位属性を設定し、元のスケジュールよりも高い優先順位を持つようにします。

3. 元のスケジュールからノードのアソシエーションを削除してから、ノードを新規のスケジュールに関連付けます。

これで、IBM Spectrum Protect サーバーは新規のスケジュールを最初に処理します。

スケジューラー処理オプション

スケジューラー処理オプションによって、スケジューラー・ジョブの開始時に実行される操作を決定します。

以下のスケジューラー処理オプションのほとんどは、クライアント・オプション・ファイルで定義できます。ただし、これらのオプションのいくつかは、すべてのクライアントで有効になるように、IBM Spectrum Protect サーバーで設定することができます。

次の表では、クライアントとサーバーで定義されるオプション、およびサーバーで指定変更されるオプションを示しています。列内の X は、オプションを指定できる場所を示しています。

オプション	クライアント定義	サーバー定義	サーバーからのグローバルな指定変更
manageservices	X		
maxcmdretries	X		SET MAXCMDRETRIES コマンド
maxschedsessions		X	
postschedulecmd、 postnschedulecmd	X		
preschedulecmd、 prenschedulecmd	X		
queryschedperiod	X		SET QUERYSCHEDPERIOD コマンド
randomize		X	
retryperiod	X		SET RETRYPERIOD コマンド
schedcmddisabled	X		
schedlogname	X		
schedlogretention	X		
schedmode	X		SET SCHEDMODES コマンド
sessioninitiation	X	X	UPDATE NODE コマンド

オプション	クライアント定義	サーバー定義	サーバーからのグローバルな指定変更
tcpclientaddress	X	X (ノード定義の一環として sessioninit=serveronly が 指定された場合、 サーバー上でも 定義されます)	
tcpclientport	X	X (ノード定義の一環として sessioninit=serveronly が 指定された場合、 サーバー上でも 定義されます)	

クライアント定義オプションは、オプションやプラットフォームに応じて `dsm.sys` または `dsm.opt` ファイルで定義されます。IBM Spectrum Protect サーバー側でも、クライアント・オプション・セットの一部のオプション、すなわちスケジュール定義のオプション・パラメーターの一部を定義できます。また、IBM Spectrum Protect サーバー側で、一部のオプションをすべてのクライアントに対してグローバルに設定できます。デフォルトでは、これらのオプションのクライアント設定に従います。IBM Spectrum Protect サーバー側でグローバルな指定変更を設定している場合、そのオプションに対するクライアント側の設定は無視されます。クライアント・オプションをスケジュール定義内で定義すると役に立つ場合とは、スケジュールされたアクションに対する固有のオプション (クライアント・ノードで通常使用するオプション設定とは異なるオプション) を使用したい場合、またはノードで実行する各スケジュールごとにオプションが異なる場合です。

`schedmode` オプションでは、IBM Spectrum Protect クライアントおよびサーバー間の通信を制御します。スケジュール・モードには、クライアント・ポーリングとサーバー・プロンプトの2つのバリエーションがあります。これらのバリエーションについては、IBM Spectrum Protect サーバーの資料で説明されています。

スケジュール・スクリプトのスケジュール戻りコードを評価

`preschedulecmd` または `postschedulecmd` クライアント・オプションを使用してスクリプトを実行する前に、環境変数を使用して、現在の IBM Spectrum Protect 戻りコードを判別することができます。

IBM Spectrum Protect は、`TSM_PRE_CMD_RC` と呼ばれる環境変数で戻りコードの現行値を提供します。`TSM_PRE_CMD_RC` 変数は、スケジュール・スクリプトを実行する前の、IBM Spectrum Protect 戻りコードの現行値です。`TSM_PRE_CMD_RC` 変数の値は、スケジュール・スクリプトの実行の後で IBM Spectrum Protect により発行される戻りコードと必ずしも同一ではありません。`TSM_PRE_CMD_RC` 変数をスケジュール・スクリプトで使用すると、スケジュールの現在の状態を判別できます。

`TSM_PRE_CMD_RC` 変数は、以下の各スケジュール・オプションで設定されます。`preschedule`、`prenschedule`、`postschedule`、および `postnschedule`。`TSM_PRE_CMD_RC` は、`ACTION=COMMAND` オプションが指定されたスケジュールに影響を与えます。

使用中の `TSM_PRE_CMD_RC` 変数の例:

```
if [[ -n ${TSM_PRE_CMD_RC} ]] ; then
    if [[ ${TSM_PRE_CMD_RC} == 0 ]] ; then
        echo "The TSM_PRE_CMD_RC is 0"

    elif [[ ${TSM_PRE_CMD_RC} == 4 ]] ; then
        echo "The TSM_PRE_CMD_RC is 4"

    elif [[ ${TSM_PRE_CMD_RC} == 8 ]] ; then
        echo "The TSM_PRE_CMD_RC is 8"

    elif [[ ${TSM_PRE_CMD_RC} == 12 ]] ; then
        echo "The TSM_PRE_CMD_RC is 12"
    else
        echo "The TSM_PRE_CMD_RC is an unexpected value: ${TSM_PRE_CMD_RC}"
    fi
else
    echo "The TSM_PRE_CMD_RC is not set"
fi
```

preschedulecmd および postschedulecmd スクリプトからの戻りコード

preschedulecmd および postschedulecmd オプションの使用時に表示される可能性がある戻りコードについて説明します。

- preschedulecmd オプションで指定されたコマンドがゼロ以外の戻りコードで終了した場合、IBM Spectrum Protect はコマンドが失敗したと見なします。この場合、スケジュールされたイベントも、任意の postschedulecmd コマンドまたは postnschedulecmd コマンドもいずれも実行されません。管理コマンド **query event** に `format=detailed` オプションを指定すると、イベントが戻りコード 12 で失敗したことが表示されます。
- postschedulecmd オプションで指定されたコマンドがゼロ以外の戻りコードで終了すると、IBM Spectrum Protect はコマンドが失敗したと見なします。管理コマンド **query event** に `format=detailed` オプションを指定すると、イベントが戻りコード 8 で完了したことが示されます。例外はスケジュールされた操作が 8 より大きい戻りコードで完了した場合です。その場合は、そのコードが優先されます。したがって、スケジュールされた操作が戻りコード 0 または 4 で完了して postschedulecmd コマンドが失敗した場合、管理コマンド **query event** は、イベントが戻りコード 8 で完了したことを示します。スケジュールされた操作が戻りコード 12 で完了した場合、この戻りコードが優先され、**query event** は、イベントが戻りコード 12 で失敗したことを示します。

IBM Spectrum Protect は、コマンドからの戻りコードを解釈する際に、0 を成功、それ以外を失敗と見なします。この動作は業界で一般に受け入れられていますが、100% というわけではありません。例えば、widget コマンドの開発者は、widget が正常に実行された場合に、戻りコード 3 で終了させるかもしれません。したがって、preschedulecmd または postschedulecmd コマンドがゼロ以外の戻りコードで終了しても成功である場合もあります。IBM Spectrum Protect がこのようなコマンドを失敗と見なすことがないようにするには、これらのコマンドをスクリプトでラップし、コマンドの戻りコードを正しく解釈できるようスクリプトをコーディングします。スクリプトは、コマンドが成功した場合に戻りコード 0 で終了します。失敗した場合はゼロ以外の戻りコードで終了します。例えば、widget を実行するスクリプトのロジックは次の例のようになります。

```
run 'widget'
if lastcc == 3
    exit 0
else
    exit 1
```

関連資料

502 ページの『[Postschedulecmd/Postnschedulecmd](#)』

postschedulecmd/postnschedulecmd オプションは、スケジュールを実行した後でクライアント・プログラムが処理すべきコマンドを指定します。

505 ページの『Preschedulecmd/Prenschedulecmd』

preschedulecmd オプションは、スケジュールを実行する前にクライアント・プログラムが処理すべきコマンドを指定します。

クライアント・アクセプターのスケジューラー・サービスと従来のスケジューラー・サービスの比較

IBM Spectrum Protect クライアントを構成し、IBM Spectrum Protect クライアント・アクセプター・デーモンを使用してスケジューラー・プロセスを管理できます。

クライアント・アクセプター・デーモンは、必要に応じてスケジューラー・プロセスを自動的に開始および停止する単純なタイマーを備えています。一方、従来方式では、IBM Spectrum Protect スケジューラー・プロセスは連続して稼働し続けます。一般的には、クライアント・アクセプター・デーモンを使用してスケジューラーを管理する方式の方が推奨されます。

以下の情報は、クライアント・アクセプター・デーモン管理のサービスと、従来のスケジューラー・サービス方式の比較です。

クライアント・アクセプター・デーモン管理サービス

- managedservices schedule オプションで定義し、クライアント・アクセプター・デーモン・サービス (dsmcad) を使用して開始します。
- クライアント・アクセプター・デーモンは、スケジュールされたアクションごとに必要に応じてスケジューラー・プロセスを開始および停止します。
- アイドル状態のときは必要なシステム・リソースが少なくなります。
- IBM Spectrum Protect クライアント・オプションおよび IBM Spectrum Protect サーバー指定変更オプションは、クライアント・アクセプター・デーモン・サービスが、スケジュールされたバックアップを開始するたびに更新されます。
- SESSIONINITiation=SERVEROnly バックアップと一緒に使用できません。

IBM Spectrum Protect の従来のスケジューラー・サービス

- dsmc sched コマンドで開始します。
- スケジュールされたバックアップが完了した後も、アクティブ状態のままになります。
- アイドル状態のときでもより多くのシステム・リソースを必要とします。
- IBM Spectrum Protect クライアント・オプション および IBM Spectrum Protect サーバーの上書きオプションは、dsmc sched が開始されたときに一度だけ処理されます。クライアント・オプション・セットからオプションを削除した場合は、スケジューラーがその削除を認識するようにスケジューラーを再始動する必要があります。

ヒント: 以前にシステム呼び出しで使用されていたシステム・リソースを解放するために、定期的に従来のスケジューラーを再始動してください。

クライアント・スケジューラー・プロセスをバックグラウンド・タスクとして実行し始動時に自動的に開始するための設定

IBM Spectrum Protect クライアント・スケジューラーを構成し、システムの開始時に自動的に開始するバックグラウンド・システム・タスクとして実行することができます。

このタスクについて

クライアント・アクセプターを使用してスケジューラーを管理する場合も、従来の方法を使用してスケジューラー・クライアント・スケジューラーを開始する場合でも、このタスクを実行することができます。

クライアント・アクセプターによって管理されるスケジュールを実行している場合は、始動時にスケジューラー・プロセスではなくクライアント・アクセプター・プロセスが自動的に開始されるように設定します。従来の方法を使用する場合は、始動時にスケジューラー・プロセスが自動的に開始されるように設定します。

クライアント・アクセプターは、その構成に指定することで、システムの始動時に自動的に開始するバックグラウンド・システム・タスクとして実行できます。スケジュール済みバックアップを管理するようクライアント・アクセプターを構成するには、`managedservices` オプションを使用して、クライアント・アクセプターがスケジューラーのみを管理するか、Web クライアントのみを管理するか、スケジューラーと Web クライアントの両方を管理するかを指定します。クライアント・アクセプターをシステム・タスクとして設定する方式はプラットフォームごとに異なります。

スケジューラーを不在モードで開始するには、`passwordaccess` オプションを **generate** に設定してクライアントがパスワードを格納できるようにし、簡単なクライアント・コマンド (`dsmc query session` など) を実行することでパスワードを格納できるようにする必要があります。テスト目的の場合は、コマンド・プロンプトから (`managedservices`) のスタンザ・セットを使用しないで) `dsmc sched` を実行し、いつでもフォアグラウンドでスケジューラーを開始することができます。

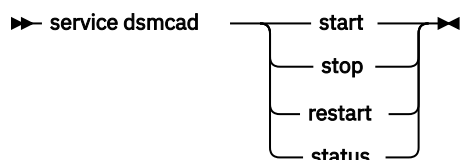
始動時にスケジューラーを自動的に開始するには、クライアント・アクセプターによって管理される方法または従来の方法のいずれかを使用します。

クライアント・アクセプターによって管理される方法

1. `dsm.sys` ファイル内で、`managedservices` オプションを **schedule** または **schedule webclient** に設定します。
2. クライアント・アクセプターを開始します。
 - a. AIX、および Solaris クライアントの場合、システム・スタートアップ・ファイル (大半のプラットフォームでは `/etc/inittab`) に以下の項目を追加します。

```
tsm::once:/usr/bin/dsmcad > /dev/null 2>&1 # TSM Client
Acceptor Daemon
```

- b. Linux クライアントの場合、インストール・プログラムが `/etc/init.d` にクライアント・アクセプター (`dsmcad`) の開始スクリプトを作成します。クライアント・アクセプター (`dsmcad`) でスケジューラー・タスクまたは Web クライアントを管理するには、事前にクライアント・アクセプターを開始する必要があります。root ユーザーとして以下のコマンドを使用し、クライアント・アクセプターを開始、停止、または再始動したり、クライアント・アクセプターの状況をチェックしたりします。



システムの再始動後にクライアント・アクセプターが自動的に開始できるようにするには、シェル・プロンプトで以下のようにサービスを追加します。

```
# chkconfig --add dsmcad
```

Linux オペレーティング・システムで `systemd` 初期化サービスを実行する場合、`dsmcad` を開始したいときやシステム始動時に実行されるようにしたいときには、以下のステップを実行します。

- i) `systemd` ユニット・リストを最新表示するには、次のコマンドを実行します。

```
systemctl daemon-reload
```

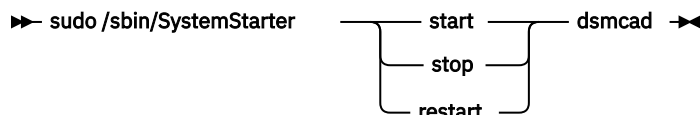
- ii) システム始動時にクライアント・アクセプターを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
systemctl enable dsmcad.service
```

iii) クライアント・アクセプターを開始するには、次のコマンドを実行します。

```
systemctl start dsmcad.service
```

- c. Mac OS X の場合、クライアント・アクセプターはスタートアップ項目としてインストールする必要があります。システム管理者は、IBM Spectrum Protect Tools for Administrators を使用して、クライアント・アクセプターをインストールおよび開始する必要があります。クライアント・アクセプターを開始、停止、または再始動するには、次のコマンドを使用します。



3. dsm.sys ファイル内で、passwordaccess オプションを **generate** に設定します。

4. dsmc query sess などのコマンドを実行して、ノード・パスワードを格納します。

従来の方法:

1. managedservices オプションを設定します。

- AIX、Linux、および Solaris クライアントの場合は、オプション全体を削除するか (デフォルトで **webclient** になります)、またはオプションを **webclient** に設定します。
- Mac OS X クライアントの場合は、managedservices オプションを **webclient** または **none** のいずれかに設定します。このオプションを **schedule** に設定しないでください。

2. AIX、Linux、および Solaris の場合、サポートされているシステム・スタートアップ・ファイル (/etc/inittab など) に以下の項目を追加します。

```
tsmsched::once:/usr/bin/dsmc sched > /dev/null 2>&1 # TSM scheduler
```

3. dsm.sys ファイル内で、passwordaccess オプションを **generate** に設定します。

4. dsmc query sess などのコマンドを実行して、ノード・パスワードを格納します。

5. クライアント・ノードでクライアント・スケジューラーを開始するには、サーバー・スケジュールに接続し、以下のコマンドを入力します。

```
dsmc schedule
```

現行ディレクトリーが PATH 環境変数内にはない場合は、以下のように入力します。

```
./dsmc schedule
```

クライアント・スケジューラーを開始すると、ウィンドウを閉じるか、プロセスを終了するか、またはシステムをログオフするまで、クライアント・スケジューラーは継続的に実行されます。

schedule コマンドをバックグラウンドで実行して、ユーザーがシステムからログオフしてもクライアント・スケジューラーが継続して実行されるようにするには、以下のコマンドを入力します。

```
nohup dsmc schedule 2> /dev/null &
```

関連資料

356 ページの『Cadlistenonport』

cadlistenonport オプションは、クライアント・アクセプターの listen ポートを開くかどうかを指定します。

例: スケジュールされた作業に関する情報の表示

スケジュールは、次の実行までのインターバルがどのように定義されているかによって、クラシックまたは拡張のいずれかになります。

クラシック・スケジュールを使用すると、時間間隔を 1 時間まで細かく指定できます。拡張スケジュールの場合は、特定の日 (複数可) にアクションを実行できます。

自分のクライアント・ノードに対して定義されたスケジュールを表示するには、次のように入力します。

```
dsmc query schedule
```

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ユーザーのクライアント・ノードに対してスケジュールされているすべての作業に関する 詳細な情報を表示します。289 ページの表 50 は、クラシックの **query schedule** の出力サンプルを示したものです。

表 50. クラシックの *query schedule* の出力サンプル

```
Schedule Name: DAILY_INC
Description: Daily System-wide backup
Schedule Style: Classic
Action: Incremental
Options: QUIET
Objects:
Priority: 1
Next Execution: 30 minutes
Duration: 4 Hours
Period: 1 Day
Day of Week: Any
Month:
Day of Month:
Week of Month:
Expire: Never

Schedule Name: WEEKLY_INC
Description: Weekly backup for project files
Schedule Style: Classic
Action: Incremental
Options: QUIET
Objects: /proj
Priority: 1
Next Execution: 60 minutes
Duration: 8 Hours
Period: 7 Days
Day of Week: Friday
Month:
Day of Month:
Week of Month:
Expire: Never
```

WEEKLY_INC という名前のスケジュールは、/proj ファイル・システムで 増分バックアップを毎週開始します。

DAILY_INC という名前のスケジュールは、増分バックアップを毎日開始します。次の増分バックアップは、30 分後に開始します。オブジェクトがリストされていないので、クライアントはユーザーのデフォルト・ドメイン上で増分バックアップを実行します。このスケジュールには有効期限がありません。

スケジュールされたイベントの状況をさらに詳しく判別するために、IBM Spectrum Protect バージョン 5.3 以上のクライアントでの拡張スケジュールに対する **query schedule** 出力には、新規のフィールドが含まれています。クラシック・スケジュールまたはバージョン 5.3 より前のサーバーの場合のバージョン 5.3 クライアント・セッションであっても、これらのフィールドは常に表示されます。ただし、新しいフィールドはブランクになります。注意すべきは、下位レベル(バージョン 5.3 よりも前)のクライアントの場合、サーバーは、時間間隔(「Period」)は不確定(「indefinite」)として、曜日(「Day of Week」)が正しくない(「illegal」)日として報告されることです。290 ページの表 51 は、拡張された **query schedule** の出力サンプルを示したものです。

表 51. 拡張された *query schedule* 出力のサンプル

```
Schedule Name: QUARTERLY_FULL
Description: Quarterly full backup
Schedule Style: Enhanced
Action: Selective
Options: subdir=yes
Objects: /* /Volumes/fs2/*
Priority: 5
Next Execution: 1744 Hours and 26 Minutes
Duration: 1 Day
Period:
Day of Week: Friday
Month: March, June, September, December
Day of Month: Any
Week of Month: Last
Expire: Never
```

完了した作業に関する情報の表示

フォアグラウンドで **schedule** コマンドを実行すると、スケジュールされたコマンドからの出力が画面に表示されます。

出力は、**schedlogname** オプションを使用してディレクトリーとファイル名を変更していなければ、インストール・ディレクトリーの **dsmsched.log** ファイルにも書き出されます。

schedule コマンドをバックグラウンドで実行すると、スケジュールされたコマンドからの出力は、現行ディレクトリーの **dsmsched.log** ファイル、またはユーザーが指定したパスおよびファイル名に出力されます。**dsmsched.log** は、シンボリック・リンクにはできません。

注：Mac OS X の場合、デフォルトでログはこれらのロケーションの 1 つにあります。

```
~/Library/Logs/tivoli/tsm
/Library/Logs/tivoli/tsm
```

スケジュールされた作業が実行された後、スケジュール・ログを調べて、すべての作業が正常に完了したかどうかを確認することができます。

スケジュールされたコマンドが処理されると、スケジュール・ログには、以下の項目が含まれます。

```
Scheduled event eventname completed successfully
```

スケジュールされたイベントが正常に完了しない場合、次のようなメッセージを受け取ります。

```
ANS1512E スケジュール・イベント eventname が失敗しました。戻りコード= code。
```

クライアントは、IBM Spectrum Protect が *eventname* (action=command) に関連する、スケジュールされたコマンドを正常に発行したかどうかを示します。そのコマンドの実行の成否を判別するための試みは行われていません。コマンドの実行結果の状況を判断するには、スケジュールされたコマンドからの戻りコードをスケジュール・ログの中で調べます。コマンドの戻りコードについてのスケジュール・ログ・エントリーの前には、次のテキストが付いています。

```
Finished command. Return code is:
```

スケジュール・ログは、**schedlogretention** オプションを使用して除去するか、**schedlogmax** オプションを使用して最大サイズを指定しない限り、増大し続けます。

関連概念

[291 ページの『スケジュールリング・オプションの指定』](#)

クライアント・オプション・ファイルまたはグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 内でスケジューリング・オプションを変更できます。

スケジューリング・オプションの指定

クライアント・オプション・ファイルまたはグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) 内でスケジューリング・オプションを変更できます。

しかし、管理者がこれらのオプションに値を指定すると、その値はクライアントの値を指定変更します。

関連概念

326 ページの『スケジュール・オプション』

ここでは、セントラル・スケジューリングを制御するのに使用するオプションについて説明します。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、スケジューラーが実行されている場合にのみスケジューリング・オプションを使用します。

コマンドのオプションのスケジューリング

スケジューラーは、ユーザー ID 0 (root) の下でコマンドを実行します。ただし、コマンドによっては、0 以外のユーザー ID の下で実行する必要があるものもあります。

この場合、IBM Spectrum Protect 管理者は、`schedcmduser` サーバー・オプションを使用して、スケジューラーのユーザー ID とは異なるユーザー ID の下で実行されるコマンドにスケジュールを定義できます。

`schedcmduser` オプションでは、スケジュールされたコマンドが実行されるシステムで有効なユーザーの名前を指定します。このオプションを定義できるのは IBM Spectrum Protect サーバー管理者のみです。このオプションが指定されている場合は、コマンドは、指定されたユーザーの権限で実行されます。そうでない場合は、スケジューラー許可で実行されます。

➡ SCHEDCMDUser — *user_name* ➡

user_name

スケジュールされたコマンドが実行されるシステムで有効なユーザーの名前を指定します。

注: `schedcmduser` オプションは、スケジュール前およびスケジュール後のコマンドに使用されるユーザー ID には影響しません。スケジュール前およびスケジュール後は、常に root (ユーザー ID 0) として実行します。

スケジュールされたコマンドの使用可能化と使用不能化

`schedcmddisabled` オプションを使用してサーバーによるコマンドのスケジューリングを使用不可にできます。

`action=command` オプションを `DEFINE SCHEDULE` サーバー・コマンドで使用するによって、コマンドはスケジュールされます。

`schedcmddisabled` オプションでは、`preschedulecmd` および `postschedulecmd` コマンドは使用不可になりません。しかし、`preschedulecmd` または `postschedulecmd` にブランクまたは空文字列を指定して、これらのコマンドのスケジュールを無効にすることができます。

`schedrestretrdisabld` オプションを使用して、IBM Spectrum Protect サーバー管理者がリストアまたはリトリブのスケジュールされた操作を実行できないように指定できます。

`srvprepostscheddisabld` オプションを使用して、スケジュールされた操作を実行する際、IBM Spectrum Protect サーバー管理者が事前スケジュール・コマンドおよび事後スケジュール・コマンドを実行できないように指定できます。

`srvprepostsnapdisabld` オプションを使用して、スケジュールされたイメージ・スナップショット・バックアップ操作を実行する際、IBM Spectrum Protect サーバー管理者が事前スナップショット・コマンドおよび事後スナップショット・コマンドを実行できないように指定できます。

関連資料

529 ページの『Schedcmddisabled』

schedcmddisabled オプションは、サーバーの define schedule サーバー・コマンドの action=**command** オプションによって、コマンドのスケジューリングを無効にするかどうかを指定します。

537 ページの『Schedrestretrdisabled』

schedrestretrdisabled オプションは、リストアまたはリトリブのスケジュールされた操作の実行を無効にするかどうかを指定します。

560 ページの『Srvprepostscheddisabled』

srvprepostscheddisabled オプションは、スケジュールされた操作を実行する際に、IBM Spectrum Protect 管理者によって指定された事前スケジュール・コマンドおよび事後スケジュール・コマンドをクライアント・システムで実行しないようにするかどうかを指定します。

561 ページの『Srvprepostsnapdisabled』

srvprepostsnapdisabled オプションは、スケジュールされたイメージ・スナップショット・バックアップ操作を実行する際に、IBM Spectrum Protect 管理者によって指定された事前スナップショット・コマンドおよび事後スナップショット・コマンドをクライアント・システムで実行しないようにするかどうかを指定します。

複数スケジュール要件の単一システム上での管理

状況によっては、クライアント・システムごとにスケジュールされた複数アクティビティを定義することが望ましい場合もあります。

このタスクについて

通常、これを可能にするには、1つのノードを複数スケジュール定義に関連付けます。これは、1つのシステム上で複数スケジュールを実行する標準的な方法です。

各スケジュールのスケジュール時間枠がオーバーラップしないようにしなければなりません。単一クライアントのスケジューラー・プロセスでは、スケジュールされた複数アクションを同時に実行できません。したがって、重なり合う部分がある場合、最初のスケジュールが2番目のスケジュールの開始時間帯の終わりまでに終了しないと、2番目に開始するスケジュールが実行されません。

クライアント・システム上の大多数のファイル・システムを毎日バックアップする必要があり、重大なデータを格納している1つのファイル・システムを毎時バックアップが必要であると仮定します。この場合、この要件に対応するためには2つのスケジュールを定義する必要があります。毎時のバックアップ・スケジュールと日次のバックアップ・スケジュールの競合を避けるため、それぞれのスケジュールの *starttime* を変える必要があります。

場合によっては、1つのシステム上で複数のスケジューラー・プロセスを実行する必要があります。複数のプロセスには、プロセスごとに別個にオプション・ファイルが必要であり、以下の情報を格納します。

- プロセスごとに固有のノード名を定義する。
- プロセスごとに固有のスケジュールおよびエラー・ログを指定する。
- プロンプト・モードで稼働中は、プロセスごとに固有のポートを指定するために tcpclientport オプションを使用する必要があります。

複数スケジュール・プロセスの利点は、以下のとおりです。

- 同時に複数のスケジュールされたバックアップを実行できる。
- IBM Spectrum Protect オプション・ファイルまたはサーバー上書きオプションによって、開始されるスケジュールごとに異なるバックアップ基準を指定できる。

複数スケジュール・プロセスの欠点は、以下のとおりです。

- 各ノード名ごとに固有のファイル・スペースが IBM Spectrum Protect サーバー上に作成される。
- データのリストア時に、バックアップに関連付けられているのと同じノード名を使用する必要がある。

UNIX および Linux プラットフォーム上で、クライアント・アクセプター・デーモン管理方式または従来方式のいずれかでスケジューラーを実行することによって、複数のスケジュール・プロセスを実行することができます。いずれの場合も、セットアップ要件がいくつかあります。

- 各プロセスは異なるノード名を使用して実行する必要がある。
- dsm.sys ファイル内に各スケジューラー・プロセスごとに複数のスタンザを作成する必要がある。各スタンザ内に固有のノード名を定義し、オプション `errorlogname` および `schedlogname` を固有の値にする必要がある。各スタンザに対して、カスタマイズされた `domain`、`include`、および `exclude` ステートメントを定義するという選択も可能です。
- dsm.sys ファイル内で、各スタンザの `passwordaccess` オプションを `generate` に設定する。パスワードは、`dsmc query sess` などのコマンドを実行することによって、スケジューラー・プロセスを実行するノード名ごとに生成されます。
- `schedmode` オプションを `prompt` に設定して実行する場合は、各スタンザに固有の `tcpclientport` 値を設定する必要がある。

dsm.sys 内の固有のスタンザ名を参照するには `-servername` オプションを指定して、`dsmc sched` コマンドまたはインスタンスを開始する必要があります。dsmcad の場合、固有のオプション・ファイルを参照するには dsmcad の各インスタンスに対して環境変数 `DSM_CONFIG` の定義が必要です。

以下に、dsm.sys ファイル内の、クライアント・アクセプター・デーモンで管理されるスケジュール・プロセスの構成例を 2 つ示します。ログ・ファイルがルート・ディレクトリーに書き出されることを防ぐため、ログ・ファイル名に対して絶対パスを指定する必要があります。

```
servername tsm1_sched1
  nodename      aixsvt01_sched1
  tcpserver     firebat
  tcpclientport 1507
  passwordaccess generate
  domain        /svt1
  schedmode     prompted
  schedlogname  /tsm/dsmsched1.log
  errorlogname  /tsm/dsmerror1.log
  managedservices schedule

servername tsm1_sched2
  nodename      aixsvt01_sched2
  tcpserver     firebat
  tcpclientport 1508
  passwordaccess generate
  domain        /svt1
  schedmode     prompted
  schedlogname  /tsm/dsmsched2.log
  errorlogname  /tsm/dsmerror2.log
  managedservices schedule
```

/test/dsm.opt1 の内容:

```
servername tsm1_sched1
```

/test/dsm.opt2 の内容:

```
servername tsm1_sched2
```

2 つのシェル・コマンド・ウィンドウを開きます。

- シェル・コマンド・ウィンドウ 1 で、以下のように入力します。

```
export DSM_CONFIG=/test/dsm.opt1
sudo dsmcad
```

- シェル・コマンド・ウィンドウ 2 で、以下のように入力します。

```
export DSM_CONFIG=/test/dsm.opt2
sudo dsmcad
```

注:dsmcad プロセスを /etc/inittab から直接開始したい場合は、これらのコマンドをシェル・スクリプトに入力します。それによって、dsmcad の起動前に適切な DSM_CONFIG 変数を設定できるようにします。

第 8 章 クライアント戻りコード

バックアップ/アーカイブ・コマンド・ライン・インターフェースおよびスケジューラーは、クライアント操作が成功したか失敗したかを正確に反映する戻りコードを返して終了します。

スクリプト、バッチ・ファイル、およびその他の自動化機能は、コマンド・ライン・インターフェースからの戻りコードを使用することができます。IBM Spectrum Protect スケジューラーを使用する操作では、戻りコードは **QUERY EVENT** 管理コマンドの出力に表示されます。

通常、戻りコードは、クライアント操作時の最高重大度メッセージに関係しています。

- 最高重大度メッセージが通知 (ANSnnnnI) なら、戻りコードは 0 です。
- 最高重大度メッセージが警告 (ANSnnnnW) なら、戻りコードは 8 です。
- 最高重大度メッセージがエラー (ANSnnnnE または ANSnnnnS) なら、戻りコードは 12 です。

これらの規則の例外として、個々のファイルを処理できなかったことを示す警告またはエラー・メッセージがあります。ファイルを処理できなかった場合、戻りコードは 4 です。dsmerror.log ファイルを調べて、クライアント操作中に発生するエラーの原因を判別してください。スケジュールされたイベント中に発生するエラーは、dsmsched.log ファイルに記録されます。

295 ページの表 52 に、戻りコードとその意味を示します。

表 52. クライアント戻りコードとその意味

コード	説明
0	すべての操作が正常に完了した
4	操作は正常に完了したが、一部のファイルが処理されなかった。他にエラーも警告もなかった。この戻りコードは一般的です。各種理由によりファイルは処理されていません。以下の理由が最も一般的です。 <ul style="list-style-type: none">• ファイルは、除外リストの項目を満たしている。除外されたファイルは、選択バックアップ中にのみログ項目を生成します。• ファイルは、別のアプリケーションによって使用中であり、クライアントがアクセスできなかった。• ファイルは、操作時に、コピー逐次化属性で禁止された範囲に変更された。301 ページの『コピーの逐次化属性』を参照してください。
8	操作は少なくとも 1 つの警告メッセージで完了した。スケジュール・イベントの場合、状況は、完了になります。dsmerror.log ファイル (スケジュールされたイベントの場合は dsmsched.log も) を確認して、発行された警告メッセージを特定し、操作への影響を調べてください。
12	操作は少なくとも 1 つのエラー・メッセージ (スキップ・ファイルのエラー・メッセージを除く) で完了した。スケジュールされたイベントの場合、状況は、失敗になります。dsmerror.log ファイル (スケジュールされたイベントの場合は dsmsched.log も) を確認して、発行されたエラー・メッセージを特定し、操作上の影響を調べてください。一般に、この戻りコードは、エラーが重大で操作が正常に終了できなかったことを意味します。例えば、エラーにより、ファイル・システム全体またはファイル指定の処理が妨げられる場合、戻りコード 12 が出されます。

表 52. クライアント戻りコードとその意味 (続き)

コード	説明
その他	<p>スケジュールされているアクションが COMMAND の場合、スケジュールされた操作では、戻りコードは実行されたコマンドからの戻りコードになる。戻りコードが 0 の場合、スケジュールされた操作の状況は完了 になります。戻りコードがゼロ以外の場合、状況は失敗 になります。</p> <p>一部のコマンドでは、正常に実行されたことを示すときに、ゼロ以外の戻りコードを発行 する場合があります。これらのコマンドでは、コマンドを開始し、結果を解釈し、終了す るスクリプトにコマンドをラップすることにより、失敗状況を回避できます。このスクリ プトは、コマンドが成功した場合は戻りコード 0 を生成し、コマンドが失敗した場合はゼ ロ以外の戻りコードを生成するはずです。この後、IBM Spectrum Protect サーバー管理者 に依頼して、コマンドではなくスクリプトを実行するようにスケジュール定義を変更して もらってください。</p>

クライアント・マクロの戻りコードは、マクロを含む個々のコマンド間で出される最も高い戻りコードに なります。例えば、マクロが以下のコマンドからなるとします。

```
selective "/home/devel/*" -subdir=yes
incremental "/home/devel/TestDriver/*" -subdir=yes
archive "/home/plan/proj1/*" -subdir=yes
```

最初のコマンドが戻りコード 0 で完了し、2 番目のコマンドが戻りコード 8 で完了し、3 番目のコマンドが 戻りコード 4 で完了した場合は、マクロの戻りコードは 8 になります。

QUERY EVENT コマンドについて詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

関連概念

291 ページの『[コマンドのオプションのスケジューリング](#)』

スケジューラーは、ユーザー ID 0 (root) の下でコマンドを実行します。ただし、コマンドによっては、0 以 外のユーザー ID の下で実行する必要があるものもあります。

第9章 ストレージ管理ポリシー

ストレージ管理ポリシーは、サーバー上のバックアップおよびアーカイブを管理するために管理者が定義する規則です。

ユーザー・データは、このようなポリシーに関連付け(またはバインド)されます。それ以後、データは、バックアップまたはアーカイブされる場合にポリシー基準に従って管理されます。ポリシーの基準には、ポリシー・ドメイン、ポリシー・セット、管理クラス、およびコピー・グループが含まれます。

ポリシーによって、次のことを判断します。

- ファイルがバックアップまたはアーカイブ・サービスに対して適切かどうか。
- バックアップ・バージョンをいくつ保持するか。
- 非アクティブ・バックアップ・バージョンおよびアーカイブ・コピーをどれだけの期間保存するか。
- コピーをストレージのどこに置くか。
- 増分バックアップの場合、ポリシーは以下のことも決定します。
 - どのくらいの頻度でファイルをバックアップできるか。
 - ファイルが再度バックアップされる前に、変更されている必要があるか。

IBM Spectrum Protect for Space Management クライアントがインストールされている場合は、管理者は、ファイルがユーザーのローカル・ファイル・システムからストレージにマイグレーションするのに適切であるかどうかを判断する規則も定義することができます。

このトピックでは、以下について説明します。

- ポリシー基準(ポリシー・ドメイン、ポリシー・セット、コピー・グループ、および管理クラス)。
- ポリシーの表示方法。
- データをポリシーに関連付ける方法。

ポリシー・ドメインおよびポリシー・セット

ポリシー・ドメインとは、データのバックアップおよびアーカイブに関して似たような要件を持つクライアントのグループです。

1つのポリシー・ドメインに、1つ以上のポリシー・セットを包含することができます。管理者は、ポリシー・ドメインを使用して、クライアント・ノードのグループを論理的な方法で管理します。

例えば、ポリシー・ドメインには次のものを含めることができます。

- アカウンティングなどの部門。
- 特定の建物や階のような、物理的な場所。
- すべてのクライアントが特定のファイル・サーバーに関連するような、ローカル・エリア・ネットワーク。

IBM Spectrum Protect には、*Standard* という名前のデフォルトのポリシー・ドメインがあります。最初、ユーザーのクライアント・ノードはデフォルトのポリシー・ドメインに関連付けられている場合があります。しかし、バックアップおよびアーカイブに関して独自の要件を持っているユーザーのグループがある場合、管理者は追加のポリシー・ドメインを定義することができます。

ポリシー・セットとは、1つ以上の管理クラスからなるグループです。各ポリシー・ドメインは、多数のポリシー・セットを保持することができます。管理者はポリシー・セットを使用して、業務およびユーザーの必要性に基づいたさまざまな管理クラスを設定します。これらのポリシー・セットのうち、アクティブ状態になるのは一度に1つのみです。これは、アクティブ・ポリシー・セットと呼ばれます。各ポリシー・セットには、デフォルトの管理クラスが1つ入っており、それ以外に任意の数の追加の管理クラスを入れることができます。

管理クラスおよびコピー・グループ

管理クラスとは、データのバックアップおよびアーカイブに関して特定のストレージ管理要件を設定し、保管してあるバックアップおよびアーカイブ・コピー・グループの集合です。

管理者は、次のようなさまざまな種類のデータのバックアップおよびアーカイブに関する要件に合うように、別々の管理クラスを設定することができます。

- 業務に密接に関連したシステム・データ
- 頻繁に変更されるアプリケーション・データ
- 管理者が毎月評価する報告書データ
- 長期保存が必要で、大量ディスク・スペースを必要とする法律的事柄に関する情報

注：IBM Spectrum Protect for Space Management がインストールされている場合は、ファイルをストレージにマイグレーションするための特定の要件も組み込むことができます。

ストレージ管理ポリシーで行うほとんどのタスクは、管理クラスで行うものです。バックアップする各ファイルとディレクトリー、およびアーカイブする各ファイルは、以下のように管理クラスに関連付け (またはバインド) されています。

- データが管理クラスに関連付けされていない場合、IBM Spectrum Protect は アクティブ・ポリシー・セット内のデフォルト管理クラスを使用します。
- ディレクトリーをバックアップする場合、*include* ステートメントまたは *dirmc* オプションで管理クラスを指定できます。管理クラスを指定しない場合、IBM Spectrum Protect は、最も長い「保存のみ」の保存期間を指定するアクティブ・ポリシー・セット内の管理クラスを使用します。この基準と一致する管理クラスが複数ある場合、IBM Spectrum Protect はアルファベット順で最後に見つかったものを使用します。
- アーカイブ・ディレクトリーの場合は、*include.archive* ステートメント または *archmc* オプションで管理クラスを指定できます。管理クラスを指定しない場合は、サーバーは、デフォルトの管理クラスをアーカイブ対象ディレクトリーに割り当てます。デフォルトの管理クラスにアーカイブ・コピー・グループがない場合は、サーバーは保存期間が最短のアーカイブ・コピー・グループを持っている 管理クラスを割り当てます。

ファイルを管理クラスに関連付けるには、*include-exclude* リスト内の *include* ステートメントを使用することができます。クライアント・オプション・ファイルの中で、*dirmc* オプションを使用してディレクトリーを管理クラスと関連付けることができます。

ある管理クラス内では、特定のバックアップおよびアーカイブに関する 要件は、コピー・グループにあります。コピー・グループは、バックアップまたはアーカイブされたデータをサーバーがどのように管理するかを記述する、特定のストレージ管理属性を定義します。コピー・グループには、バックアップ・コピー・グループ とアーカイブ・コピー・グループ の両方があります。1つの管理クラスには1つのバックアップ・コピー・グループ、1つのアーカイブ・コピー・グループ、その両方を入れることも、両方とも入れないことも可能です。

バックアップ・コピー・グループ には、バックアップ・プロセスの間に次の事項を決めるのに使用する属性が入っています。

- 次にバックアップを行うには、そのファイルが何日経過していなければならないか
- ファイルが使用中の場合、バックアップ時にファイルをどう処理するか

またコピー・グループには、サーバー上のユーザー・ファイルのバックアップ・バージョンを 管理するための属性も含まれています。それらの属性は、次の項目を制御します。

- サーバーがユーザーのファイルおよび ディレクトリーのバックアップ・バージョンを保管するメディア・タイプ。
- サーバーが保持する、ユーザーのファイルおよびディレクトリーのバックアップ・バージョンの数
- サーバーがユーザーのファイルおよび ディレクトリーのバックアップ・バージョンを保持する期間
- サーバーが非アクティブ・バックアップ・バージョンを保持する期間
- 最後に残った非アクティブ・バージョンのファイルを保持する期間

アーカイブ・コピー・グループには、次の項目を制御する属性が入っています。

- ファイルが使用中の場合、そのファイルをアーカイブするかどうか
- サーバーがファイルのアーカイブ・コピーを保管するメディア・タイプ
- サーバーがユーザー・ファイルのアーカイブ・コピーを保持する期間

関連概念

303 ページの『ファイルの管理クラスを選択』

デフォルトの管理クラスがワークステーションにあるすべてのファイルのバックアップ要件およびアーカイブの要件を満たしている場合は、ユーザーはその管理クラスにファイルを関連付ける処置は不要です。これは、ユーザーがファイルをバックアップまたはアーカイブしたときに自動的に行われます。

306 ページの『保存猶予期間』

また、IBM Spectrum Protect には、バックアップ保存猶予期間およびアーカイブ保存猶予期間が用意されているので、ファイルを適切な管理クラスに再バインドできないときは、バックアップ・データおよびアーカイブ・データの保護に役立ちます。

管理クラスおよびコピー・グループについての情報の表示

ポリシー情報を、コマンド・ライン・インターフェースまたはグラフィカル・ユーザー・インターフェースで表示できます。

グラフィカル・ユーザー・インターフェースでは、「ユーティリティ」メニューから「ポリシー情報の表示」をクリックします。「ポリシー情報」ウィンドウに使用可能な管理クラスが表示されます。コマンド・ラインでは、**query mgmtclass** コマンドを使用して使用可能な管理クラスを表示します。detail オプションでさらに詳細が表示されます。

299 ページの表 53 に、標準管理クラスにおけるバックアップおよびアーカイブ・コピー・グループのためのデフォルトを示します。

表 53. 標準管理クラスのデフォルト属性値

属性	バックアップのデフォルト	アーカイブのデフォルト
コピー・グループ名 (Copy group name)	Standard (標準)	Standard (標準)
コピー・タイプ (Copy type)	バックアップ	アーカイブ
コピー頻度 (Copy frequency)	0 日	CMD (コマンド)
データが存在するバージョン (Versions data exists)	2 バージョン	適用されません。
データが削除されたバージョン (Versions data deleted)	1 バージョン	適用されません。
非活動バックアップ・バージョン保存 (Retain extra versions)	30 日	適用されません。
バックアップ・バージョンのみ保存 (Retain only version)	60 日	適用されません。
コピー逐次化 (Copy serialization)	共用静的 (shared static)	共用静的 (shared static)
コピー・モード (Copy mode)	修正日	絶対
コピーの宛先 (Copy destination)	Backuppool	Archivepool
バージョン保持 (Retain versions)	適用されません。	365 日

表 53. 標準管理クラスのデフォルト属性値 (続き)

属性	バックアップのデフォルト	アーカイブのデフォルト
LAN フリー (Lan free)	宛先	No
重複排除使用可能 (Deduplication enabled)	No	No

コピー・グループ名属性

コピー・グループ名 属性は、コピー・グループの名前です。デフォルトは、バックアップおよびアーカイブともに *standard* です。

コピー・タイプ属性

コピー・タイプ 属性は、コピー・グループのタイプです。バックアップのための値は常に *backup* で、アーカイブのための値は常に *archive* です。

コピー頻度属性

copy frequency (コピー頻度) 属性は、ある増分バックアップと次の増分バックアップとの間の最小経過日数です。フル増分バックアップ時にはこの属性を使用してください。

コピー頻度は、**mode** パラメーターと連動します。例えば、**frequency=0** かつ **mode=modified** の場合、ファイルまたはディレクトリーは、最後の増分バックアップ以降に変更された場合にのみバックアップされます。**frequency=0** かつ **mode=absolute** の場合、オブジェクトは、増分バックアップが実行されるたびにバックアップされます。**frequency=0** かつ **mode=absolute** の場合、最後のバックアップ以降の変更や、最後のバックアップからの日数は、現行のバックアップ操作に影響しません。頻度属性は、選択バックアップでは検査されません。

アーカイブ・コピー・グループの場合は、コピー頻度は常に CMD (コマンド) です。オブジェクトのアーカイブを行う頻度に関する制限はありません。

ジャーナル・ベース・バックアップ中はコピー頻度が無視されます。

versions data exists (データが存在するバージョン) 属性

versions data exists (データが存在するバージョン) 属性は、ファイルおよびディレクトリーのために保持する異なるバックアップ・バージョンの最大数を指定します。

複数のバックアップ・バージョンを許可する管理クラスを選択した場合、最新バージョンをアクティブ・バージョンと呼びます。残りのバージョンはすべて非アクティブ・バージョンとなります。許可されるバージョンの最大数が 5 の場合に、6 番目のバージョンを作成するバックアップが実行されると、最も古いバージョンがサーバー・ストレージから削除されます。

versions data deleted (データが削除されたバージョン) 属性

versions data deleted (データが削除されたバージョン) 属性は、削除したファイルおよびディレクトリーのために保持する異なるバックアップ・バージョンの最大数を指定します。

このパラメーターは、ファイルまたはディレクトリーを削除するまで無視されます。

ファイルまたはディレクトリーを削除すると、次に増分バックアップを実施したときに、アクティブ・バックアップ・バージョンが非アクティブに変更されます。IBM Spectrum Protect サーバーは、このパラメーターで指定した数を超過した最も古いバージョンを削除します。

残りのバージョンの有効期限は、後述する *retain extra versions* (非アクティブ・バックアップ・バージョン保持) および *retain only version* (バックアップ・バージョンのみ保持) パラメーターに基づいています。

非アクティブ・バックアップ・バージョン保存属性

retain extra versions (非アクティブ・バックアップ・バージョン保存) 属性は、最新のバージョン以外のすべてのバックアップ・バージョンを保存する日数を指定します。

最新のバックアップ・バージョンとはアクティブ・バージョンのことであり、アクティブ・バージョンはいかなる場合にも削除されません。 *Nolimit* を指定すると、追加のバージョンは、バックアップ・バージョンの数が、 *versions data exists* (データが存在するバージョン) または *versions data deleted* (データが削除されたバージョン) パラメーター設定値を超えるまで保持されます。 この場合、最も古い追加のバージョンは即時に削除されます。

バックアップ・バージョンのみ保存属性

retain only version (バックアップ・バージョンのみ保存) 属性は、ファイルまたはディレクトリーの最後に残った非アクティブ・バージョンを保存する日数を指定します。

Nolimit が指定されている場合、最後のバージョンは永久に保持されます。

コピーの逐次化属性

コピーの逐次化 属性は、バックアップまたはアーカイブの実行中にファイルを使用中とするかどうか、また使用中の場合はどうするかを指定します。

この属性の値としては、次のいずれか 1 つを指定することができます。

- **Static (静的)**。 バックアップまたはアーカイブ中に、ファイルまたはディレクトリーを変更してはなりません。 バックアップまたはアーカイブの試行中にオブジェクトが変更された場合、そのオブジェクトはバックアップまたはアーカイブされません。
- **Shared static (共用静的)**。 バックアップまたはアーカイブ中に、ファイルまたはディレクトリーを変更してはなりません。 クライアントは、ユーザーのオプション・ファイルの *changingretries* オプションで指定された値に応じて、さらに最大 4 回まで、バックアップまたはアーカイブの実行を試みます。 各バックアップまたはアーカイブの試行中にそのオブジェクトが変更されている場合は、バックアップまたはアーカイブは行われません。
- **Dynamic (動的)**。 ファイルまたはディレクトリーは、その対象がバックアップまたはアーカイブ中に変更されるか否かに関係なく、最初の試行でバックアップまたはアーカイブされます。
- **Shared dynamic (共用動的)**。 ファイルまたはディレクトリーは、バックアップまたはアーカイブ中に変更されるか否かに関係なく、バックアップまたはアーカイブされます。 クライアントは、追加でさらに 4 回までバックアップまたはアーカイブを試みます。 試行回数は、オプション・ファイルの *changingretries* オプションで指定されている値によって異なります。この回数は、試行中にこのファイルが変更されずにバックアップまたはアーカイブされる回数です。 ファイルは、変更が行われていても、最後の試行でバックアップまたはアーカイブされます。

ファイルが使用中でもバックアップまたはアーカイブできる管理クラスを選択した場合は、サーバー上に保管されるバックアップ・バージョンやアーカイブ・コピーはファジー・コピーの可能性があります。ファジー・コピーは、現在のファイル内容を正確に反映していないバックアップ・バージョンまたはアーカイブ・コピーです。 その中には変更内容が、一部だけで、全部は入っていない場合があります。そのような状況が受け入れられない場合は、ファイルがバックアップまたはアーカイブ中に変更されない場合にのみバックアップ・バージョンまたはアーカイブ・コピーを作成するような管理クラスを選択してください。 静的逐次化を使用する場合、ファイルがバックアップされている間、アプリケーションは書き込みアクセスに対してそのファイルを開けません。

ファジー・コピーを含むファイルをリストアまたはリトリブすると、ファイルが使用できない場合があります。 リストアするファジー・コピーが使用できることが確かな場合を除き、ファイルのバックアップに動的または共用動的逐次化を使用しないでください。

重要: *shared dynamic* (共用動的) または *serialization dynamic* (逐次化動的) バックアップを指定するコピー・グループを含む管理クラスを選択するときは、注意が必要です。

関連資料

556 ページの『[Snapshotproviderimage](#)』

snapshotproviderimage オプションを使用して、スナップショット・ベースのイメージ・バックアップを有効にし、スナップショット・プロバイダーを指定します。

コピーの mode パラメーター

コピーの **mode** パラメーターは、ファイル・またはディレクトリーが、前回のバックアップの後で変更されたかどうかに関係なく、増分バックアップの対象と見なされるかどうかを決定します。

クライアントは、選択バックアップを実行する際には **mode** パラメーターを検査しません。

このパラメーターの値は、以下のいずれかの設定になります。

変更

オブジェクトは、前回のバックアップ後に変更された場合にのみ、増分バックアップの対象と見なされます。オブジェクトは、次のいずれかの条件にあてはまる場合に、変更されたものと見なされます。

- 最後の変更の日付または時刻が異なる
- サイズが異なる
- メタデータ (アクセス許可など) のみに変更された場合、クライアントはメタデータのためのバックアップをとることがあります。
- 所有者が異なる

absolute

オブジェクトは、最後のバックアップ後に変更されたかどうかに関係なく、増分バックアップの対象と見なされます。アーカイブ・コピー・グループの場合、モードは常に **absolute** です。このことは、オブジェクトが最後のアーカイブ要求以後変更されたかどうかに関係なく、アーカイブされるということを示しています。

関連資料

[341 ページの『Absolute』](#)

incremental コマンドで **absolute** オプションを使用すると、オブジェクトが最後の増分バックアップ以降に変更されていない場合でも、ファイル指定または **domain** に一致するすべてのファイルおよびディレクトリーが強制的にバックアップされます。

コピーの宛先属性

バックアップまたはアーカイブを保管する宛先のコピー宛先 属性名 (copy destination attribute name)。

宛先は、ディスク装置のストレージ・プール、またはテープのような 取り外し可能メディアをサポートする装置のストレージ・プールになります。

バージョン保持属性

retain versions 属性は、アーカイブ済みファイルがストレージに残される日数を指定します。

指定された日数がファイルのアーカイブ・コピーに関して経過すると、それはサーバー・ストレージから削除されます。

重複排除データ属性

重複排除データ 属性は、バックアップおよびアーカイブ処理中に冗長データを IBM Spectrum Protect サーバーに転送するかどうかを指定します。

関連概念

[90 ページの『クライアント・サイドのデータ重複排除』](#)

データ重複排除 は、冗長データを除去してストレージ必要量を削減する方法です。

関連資料

[377 ページの『Deduplication』](#)

deduplication オプションを使用して、バックアップおよびアーカイブ処理中 IBM Spectrum Protect サーバーにデータを転送するときに、冗長クライアント・サイド・データ除去を有効にするかどうかを指定します。

405 ページの『Enablededupcache』

enablededupcache オプションは、クライアント・サイドのデータ重複排除中にキャッシュを使用するかどうかを指定するために使用します。ローカル・キャッシュを使用すると、IBM Spectrum Protect サーバーとクライアントの間のネットワーク・トラフィックを削減できます。

416 ページの『Exclude オプション』

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

ファイルの管理クラスを選択

デフォルトの管理クラスがワークステーションにあるすべてのファイルのバックアップ要件 およびアーカイブの要件を満たしている場合は、ユーザーはその管理クラスにファイルを 関連付ける処置は不要です。これは、ユーザーがファイルをバックアップまたはアーカイブしたときに 自動的に行われます。

ユーザー・ファイルに対して異なる管理クラスを選択するときは、次のことを考慮します。

- その管理クラスにはバックアップ・コピー・グループが含まれているか。

バックアップ・コピー・グループを含まない管理クラスと関連付けられている ファイルのバックアップを試行しても、ファイルのバックアップはとられません。

- 管理クラスにアーカイブ・コピー・グループが含まれるかどうか。

アーカイブ・コピー・グループを含まない管理クラスに関連付けられたファイルを アーカイブすることはできません。

- ファイルのバックアップが十分な頻度でとられるような属性がバックアップ・コピー・グループに含まれているかどうか。

モードおよび頻度は連動して、ユーザーが増分バックアップを行うとき、どのくらいの頻度でファイルのバックアップをとるかを制御します。これらの属性は、選択バックアップではチェックされません。

- コピー・グループが使用する逐次化方法は何か。

逐次化方法によって、ファイルがバックアップ中に変更された場合に IBM Spectrum Protect がどのように機能するかが決まります。

- バックアップ・コピー・グループが適切な数のバックアップ・バージョンの保持と、適切な保存期間 とを併せて指定しているかどうか。

- アーカイブ・コピー・グループが、ファイルのアーカイブ・コピーを保持する妥当な長さの時間を指定しているかどうか。

関連概念

301 ページの『コピーの逐次化属性』

コピーの逐次化 属性は、バックアップまたはアーカイブの実行中にファイルを使用中とするかどうか、また使用中の場合はどうするかを指定します。

ファイルへの管理クラスの割り当て

管理クラスは、ファイルをいつバックアップの対象として包含するか、ファイルをいつまでサーバーに保持しておくか、ファイルのバージョンをいくつサーバーに保持しておくかを定義するものです。

サーバー管理者が、デフォルトの管理クラスを選択します。ユーザー自身の管理クラスを指定して、デフォルトの管理クラスを指定変更することができます。

デフォルト以外の管理クラスをディレクトリーに割り当てるには、オプション・ファイルで dirmc オプションを使用します。

オプション・ファイルで include ステートメントを使用することで、ファイルまたはファイル・グループに対して 管理クラスを割り当てることができます。incl excl オプションで指定した include-exclude フ

ファイルで **include** オプションを使用しても、管理クラスを割り当てることができます。管理クラスは大/小文字が区別されません。

コマンド・ラインを使用して、**costs** ディレクトリー内のすべてのファイルを **budget** という管理クラスに関連付けるには、以下のように入力します。

```
include /home/proj2/costs/* budget
```

managall という名前の管理クラスを、明示的に管理クラスが割り当てられていないすべてのファイルで使用するには、以下のように入力します。

```
include ../../* managall
```

以下の例は、管理クラスをファイルに割り当てる方法を示しています。

```
exclude ../../*.sno
include /home/winter/../../*.ice      mcweekly
include /home/winter/december/*.ice   mcdaily
include /home/winter/january/*.ice    mcmonthly
include /home/winter/february/white.sno
```

処理は、以下のように行われます。

1. ボトムアップ処理規則に従って、**winter** ディレクトリー内の **february** ディレクトリーにある **white.sno** ファイルがバックアップされます。このステートメントで管理クラスを指定していないので、ファイルはデフォルト管理クラスに割り当てられます。
2. **january** ディレクトリー内の、拡張子が **ice** のファイルは、**mcmonthly** という管理クラスに割り当てられます。
3. **december** ディレクトリー内の、拡張子が **ice** のファイルは、**mcdaily** という管理クラスに割り当てられます。
4. **winter** ディレクトリー内の任意のディレクトリーにある、拡張子が **ice** であるその他のファイルは、**mcweekly** という管理クラスに割り当てられます。
5. 拡張子が **sno** のファイルは、どのディレクトリーに置かれていてもバックアップから除外されます。この規則の例外は、**winter** ディレクトリー内の **february** ディレクトリーにある **white.sno** です。

明示的に包含されていないファイルに対してユーザー独自のデフォルト管理クラス **mgmt_class_name** を指定するには、以下のステートメントを包含リストの先頭に指定します。

```
include ../../* mgmt_class_name
```

グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用してファイルをアーカイブするときには、異なる管理クラスを選択してファイルに割り当てられた管理クラスを指定変更することができます。

関連資料

[384 ページの『Dirmc』](#)

dirmc オプションは、ディレクトリーに対して使用する管理クラスを指定します。

[447 ページの『include オプション』](#)

include オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

アーカイブ済みファイルの管理クラスの指定変更

ファイルをアーカイブするときは、グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) または **archive** コマンドの **archmc** オプションを使用して、割り当てられている管理クラスを指定変更できます。

GUI を使用して管理クラスを指定変更するのは、**archmc** コマンドで **archive** オプションを使用することと等価です。GUI を使用する場合は、アーカイブ・ツリーの「**オプション**」ボタンを押して、管理クラスを指定変更して別の管理クラスを選択します。

コマンド・ラインで、ファイル `budget.jan` を管理クラス **ret2yrs** に関連付けるには、次のコマンドを入力します。

```
dsmc archive -archmc=ret2yrs /home/jones/budget.jan
```

ディレクトリーの管理クラスの選択

最長の「バックアップ・バージョンのみ保存」(REONLY) 設定を含むアクティブ・ポリシー・セット内の管理クラスがディレクトリーのバックアップ要件を満たしている場合は、ディレクトリーをその管理クラスに関連付ける処置を取る必要はありません。管理クラスに関連付けは、ディレクトリーのバックアップ時に自動的に行われます。

最長の REONLY 設定値を含む管理クラスが複数ある場合、IBM Spectrum Protect クライアントは、名前がアルファベット順で最後の管理クラスを選択します。

デフォルトの管理クラスが要件に適合しない場合は、`retain only version` パラメーターで適切な保存期間が指定されている管理クラスを選択します。例えば、管理クラスがデータを直接テープにバックアップする場合、ディレクトリー・バックアップをディスクに収容するには、別の管理クラスを選択する必要があります。少なくとも、ディレクトリーに関連付けられたファイルを保持しているかぎり、それらのディレクトリーを保持してください。

バックアップ・ディレクトリーの場合、`dirmc` オプションを使用してディレクトリーをバインドする管理クラスを指定します。

アーカイブ・ディレクトリーの場合、`archmc` オプションを **archive** コマンドで使用します。

以下の方法を使用して、使用可能な管理クラスおよびその属性を表示することができます。

- GUI または Web クライアント: 「ユーティリティー」メニューから「ポリシー情報の表示」を選択します。
- コマンド・ライン・クライアント: `dsmc query mgmtclass -detail` を実行します。

注: IBM Spectrum Protect サーバーでの満了処理中に、アーカイブ済みディレクトリーが満了処理に適格となる場合は、サーバーは、既存のアーカイブ済みファイルのためにこのアーカイブ済みディレクトリーを残しておく必要があるかどうかを検査します。必要と判断された場合は、アーカイブ済みディレクトリーは期限切れとならず、バックアップ/アーカイブ・クライアントはアーカイブ済みディレクトリーの挿入日付を更新し、ディレクトリーのファイルより先にそのディレクトリーが期限切れにならないようにします。

ファイルへの管理クラスのバインド

バインドとは、ファイルを管理クラスに関連付けることです。

ユーザーがはじめてファイルのバックアップをとるとき、IBM Spectrum Protect ではこのファイルをデフォルトの管理クラスまたはユーザーの `include-exclude` リストで指定する管理クラスにバインドします。

管理クラスに対するバックアップ・コピー・グループが、そのファイルの複数バックアップ・バージョンを保持するように指定してあり、かつユーザーが複数バックアップを要求する場合、サーバーは常にそのファイルについて1つのアクティブ・バックアップ・バージョン(最新バージョン)と1つ以上の非アクティブ・バックアップ・バージョンを持ちます。1つのファイルのすべてのバックアップ・バージョンは同じ管理クラスにバインドされ、バックアップ・コピー・グループの属性に基づいて管理されます。

ファイルを初めてアーカイブする時、IBM Spectrum Protect はこのファイルをデフォルトの管理クラス、ユーザーの `include-exclude` リストで指定された管理クラス、または、アーカイブ中にアーカイブ・オプションを変更した場合はユーザーが指定する管理クラスにバインドします。

アーカイブ済みファイルは、異なる管理クラスに再バインドされることは決してありません。

`include.archive` ステートメント、`archmc` オプション、またはバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用してファイルの管理クラスを変更する場合、アーカイブしたファイルの以前のコピーはすべて、アーカイブしたときに指定した管理クラスにバインドされたままになっています。

ファイルがクライアント・システム上で削除されている場合、ファイルの非アクティブ・オブジェクトは再バインドされていません。

ファイルおよびディレクトリーを管理クラスに関連付ける方法については、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

ファイルのバックアップ・バージョンの再バインド

再バインドによって、ファイルまたは論理ボリューム・イメージが新しい管理クラスに関連付けられます。

ファイルのバックアップは、次の場合に異なる管理クラスに再バインドされます。それぞれの場合、ファイル(アクティブ状態または非アクティブ状態)は、次のバックアップまで再バインドされません。

- Include ステートメントに異なる管理クラスを指定して、ファイルの管理クラスを変更する場合。ユーザーが別のバックアップを実行するまで、古い管理クラスに基づいてバックアップが管理されます。
- 管理者がユーザーのアクティブ・ポリシー・セットからその管理クラスを削除する場合。ファイルを再度バックアップするときは、デフォルトの管理クラスを使用してバックアップ・バージョンを管理します。
- 管理者がクライアント・ノードを異なるポリシー・ドメインに割り当て、かつ、そのドメインにあるアクティブ・ポリシー・セットが同じ名前の管理クラスを持っていない場合。新しいポリシー・ドメインでは、デフォルトの管理クラスを使用してバックアップ・バージョンを管理します。

ファイルおよびディレクトリーを管理クラスに関連付ける方法については、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

保存猶予期間

また、IBM Spectrum Protect には、バックアップ保存猶予期間 および アーカイブ保存猶予期間 が用意されているので、ファイルを適切な管理クラスに再バインドできないときは、バックアップ・データおよびアーカイブ・データの保護に役立ちます。

バックアップ保存猶予期間は、以下の場合に使用されます。

- ファイルの管理クラスを変更するが、デフォルトの管理クラスにも新しい管理クラスにもバックアップ・コピー・グループが含まれていない。
- ファイルのバインド先の管理クラスはもはや存在しておらず、デフォルトの管理クラスの中にはバックアップ・コピー・グループが含まれていない。

バックアップ保存猶予期間はポリシー・ドメインに定義されていて、増分バックアップの実行時に始まります。デフォルトは 30 日です。しかし、管理者がこの期間を長くしたり短くしたりすることができます。

IBM Spectrum Protect サーバーがバックアップ保存猶予期間を使用してファイルを管理する場合は、ファイルの新規のバックアップ・バージョンは作成されません。ファイルの既存のバックアップ・バージョンはすべて、非アクティブとマークされた日から 30 日(またはポリシー・ドメインで指定された日数)で期限切れになります。

アーカイブ操作ごとに別のアーカイブ・コピーが作成されるため、アーカイブ・コピーが再バインドされることはありません。アーカイブ・コピーは、ユーザーがアーカイブしたときに指定した管理クラス名にバインドされたままになります。アーカイブ・コピーのバインド先管理クラスが存在しなくなった場合、またはアーカイブ・コピー・グループを含まなくなった場合は、サーバーはデフォルトの管理クラスを使用します。その後でデフォルトの管理クラスを変更または置換すると、サーバーは更新されたデフォルトの管理クラスを使用してアーカイブ・コピーを管理します。デフォルトの管理クラスがアーカイブ・コピー・グループを含まない場合は、サーバーは、そのポリシー・ドメインに指定されたアーカイブ保存猶予期間を使用します。

イベント・ベースのポリシー保存保護

アーカイブ・コピー・グループを含むすべての管理クラスは、アーカイブ・オブジェクトが削除前にサーバー上で保管される日数など、保存期間を指定する必要があります。

イベント・ベースのポリシーには、保存期間の開始をオブジェクトがアーカイブされた時刻にするか、後でそのオブジェクトのアクティビティ・イベントがサーバーに送信されたときにするオプションがあります。

コピー・グループ値を **RETINIT=CREATE** に設定すると、ファイルがアーカイブされたときにデータ保存期間が開始します。コピー・グループ値 **RETINIT=EVENT** を使用すると、イベント発生がサーバーに通知されたときにデータ保存期間が開始します。

次の例で、この概念を説明します。

ユーザーが2つのファイル **create.file** と **event.file** を持っているとしします。このユーザーには、2つの使用可能な管理クラス **CREATE (RETINIT=CREATE)** と **EVENT (RETINIT=EVENT)** があります。両方の管理クラスの保存期間は60日間です。ユーザーは、次のようにして同じ日に両方のファイルをアーカイブします。

```
dsmc archive create.file -archmc=CREATE
dsmc archive event.file -archmc=EVENT
```

10日後、ユーザーが **create.file** ファイルに対して **set event -type=hold** コマンドを発行したため、このファイルを削除できません。同じ日に、ユーザーは **event.file** ファイルに対して **set event -type=activate** を発行します。この時点で、**create.file** の保存期間は50日間残っており、**event.file** は60日間残っています。その他に処置が取られなければ、**create.file** はサーバー上に永久に残り、**event.file** は作成日から70日後に期限切れになります(イベント発生後60日)。しかし、最初のアーカイブから20日後に、ユーザーが **create.file** ファイルに対して **set event -type=release** を発行した場合、30日間の保存期間が経過したため、ファイルは30日で期限切れになります(holdを発行しても保存期間は延長されません)。

RETINIT コピー・グループ値については、IBM Spectrum Protect サーバーの資料を参照してください。

関連資料

769 ページの『[Set Event](#)』

set event コマンドを使用することで、アーカイブ・データが削除される状況を指定することができます。

データ保存サーバー上のファイルのアーカイブ

ここまで、通常のサーバーとデータ保存サーバーの間でファイルのアーカイブに違いはありません。

次の例では、2つのサーバーの相違点と、第5日に実行できる内容について説明します。

ファイルがデータ保存サーバー以外のサーバーでアーカイブされた場合、ユーザーは **delete archive create.file event.file** コマンドを発行して、両方のファイルを削除することができます。ファイルがデータ保存サーバーでアーカイブされた場合、同じコマンドを発行しても両方のファイルは失敗します。データ保存サーバーは、示されている保持基準に適合するまで、強制的にユーザーにアーカイブを保持させます。

ここで、第15日(hold発行後)における相違点を説明します。

データ保存サーバー以外のサーバーでは、**delete archive create.file event.file** コマンドは **event.file** を削除しますが **create.file** については保留状況であるため、「削除できない」というエラーを戻します。データ保存サーバーでは、同じコマンドを発行すると、両方のファイルの削除が拒否されます。

第 10 章 処理オプション

クライアントの処理オプションのデフォルトを使用することも、特定のニーズに合わせて処理オプションを調整することもできます。処理オプションの概要を読み、オプションの解説を参照して各オプションの詳細を確認してください。

関連概念

331 ページの『コマンドでのオプションの使用』

クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) のオプションの一部を上書きするには、適切なバックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンドとともにオプションを入力します。

関連資料

xxiv ページの『構文図の読み取り』

コマンドを入力するために構文図を読み取るには、線の経路に従ってください。左から右へ、上から下へと読んでください。

処理オプション概要

IBM Spectrum Protect は、処理オプション を使用して、通信、バックアップ/アーカイブ処理、およびその他のタイプの処理を制御します。

処理オプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt)、またはコマンド・ラインで設定できます。

次のタイプのオプションを設定できます。

- 通信オプション
- サーバーおよびノードのオプション
- バックアップおよびアーカイブ処理のオプション
- リストアおよびリトリブ処理のオプション
- スケジュール・オプション
- 形式オプション
- コマンド処理オプション
- 権限オプション
- エラー処理オプション
- トランザクション処理オプション
- Web クライアント・オプション
- 診断オプション

バックアップ/アーカイブ・クライアントには、コマンド・ラインで特定のコマンドでのみ入力できるクライアント・コマンド・オプション群も用意されています。オプション・ファイルの一部のオプションは、適切なバックアップ/アーカイブ・コマンドで入力することによって指定変更できます。

関連概念

331 ページの『コマンドでのオプションの入力』

コマンドでオプションを入力するための一般規則に従う必要があります。

関連タスク

61 ページの『クライアント・システム・オプション・ファイルの作成と変更』

クライアント・システム・オプション・ファイルは編集可能なファイルで、サーバーと通信方式を識別し、バックアップ、アーカイブ、階層ストレージ管理、およびスケジューリングの構成を提供します。

通信オプション

通信オプションは、クライアント・ノードが IBM Spectrum Protect サーバーと通信する方法を指定するために使用します。ここでは、使用可能な通信オプションのタイプについて説明します。

UNIX および Linux の場合は、以下の通信プロトコルのいずれかを使用します。

- TCP/IP
- 共用メモリー (AIX、Linux)

通信プロトコルを指定するには、commmethod オプションを使用します。

通信オプションの設定については、IBM Spectrum Protect 管理者に問い合わせてください。

関連資料

360 ページの『Commmethod』

commmethod オプションは、クライアントとサーバーとを接続して通信を行うために使用する通信方式を指定します。

TCP/IP オプション

TCP/IP 通信プロトコルを使用するには、クライアント・オプション・ファイルで tcpserveraddress オプションを指定する必要があります。

他の TCP/IP オプションにはデフォルト値があり、必要に応じて値を変更できます。ここでは、使用可能な通信オプションのタイプについて説明します。

表 54. TCP/IP オプション

オプション	説明
httpport 440 ページの『Httpport』	Web クライアントの TCP/IP ポート・アドレスを指定します。
lanfreetcpport 471 ページの『Lanfreetcpport』	IBM Spectrum Protect ストレージ・エージェントが listen する TCP/IP ポート番号を指定します。
lanfreetcpsserveraddress 473 ページの『Lanfreetcpsserveraddress』	IBM Spectrum Protect ストレージ・エージェントの TCP/IP アドレスを指定します。
tcpbuffsize 577 ページの『Tcpbuffsize』	内部 TCP/IP 通信バッファのサイズをキロバイト単位で指定します。
tcpnodelay 580 ページの『Tcpnodelay』	サーバーまたはクライアントがネットワーク上で連続する小さいパケットの遅延を使用不可にするかどうかを指定します。このオプションは、すべての UNIX クライアント用です。
tcpadminport 576 ページの『Tcpadminport』	サーバーが管理クライアント・セッション用の要求を待機するための専用の TCP/IP ポート番号を指定します。これにより、プライベート・ネットワーク内での安全な管理セッションが可能になります。
tcpcadaddress 578 ページの『Tcpcadaddress』	dsmcad の TCP/IP アドレスを指定します。
tcpport 581 ページの『Tcpport』	IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP ポート・アドレスを指定します。
tcpserveraddress 581 ページの『Tcpserveraddress』	IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP アドレスを指定します。

表 54. TCP/IP オプション (続き)

オプション	説明
tcpwindowsize 582 ページの『Tcpwindowsize』	クライアント・ノードの TCP/IP スライド・ウィンドウの サイズをキロバイト単位で指定します。
webports 641 ページの『Webports』	クライアント・アクセプター・デーモンおよび Web GUI との通信用の Web クライアント・エージェント・サービス (Web クライアント・エージェント・サービスは Mac OS X には適用されません) が使用する TCP/IP ポート番号を指定することによって、ファイアウォールの外側にある Web クライアントを使用できるようにします。

関連資料

[488 ページの『Nfstimeout』](#)

nfstimeout オプションは、タイムアウトになる前にクライアントが NFS ファイル・システムで状況システム呼び出しを待つ秒数を指定します。

共用メモリー・オプション

ここでは、使用可能な共用メモリーについて説明します。

表 55. 共用メモリー通信オプション

オプション	説明
lanfreeshmport 470 ページの『Lanfreeshmport』	クライアントとストレージ・エージェントで使用される固有の番号を指定し、通信に使用される共用メモリー領域を識別します。
lanfreeshmport 544 ページの『Shmport』	クライアントとサーバーで使用される固有の番号を指定し、通信に使用される共用メモリー領域を識別します。

サーバーのオプション

dsm.sys ファイルで servername オプションを使用すると、IBM Spectrum Protect サーバーに接続するために使用される 1 グループのオプション (スタンザ) が開始されます。

異なるサーバーに接続するために、dsm.sys ファイルで複数のグループのスタンザを設定できます。各サーバー名のスタンザの下には、サーバーとの通信を確立するために要求されるすべてのクライアント・オプション・スタンザをリストしておく必要があります。スタンザ・リストには、バックアップ/アーカイブ操作の他のオプションも含まれます。

クライアント・システム・オプション・ファイルにスタンザが 1 つのみ含まれる場合 - クライアント・ノードは、すべてのサービスについてそのスタンザで指定するサーバーに接続します。

クライアント・システム・オプション・ファイルに複数のスタンザが含まれる場合 - デフォルトのサーバーを defaultserver オプションを使用して指定することができます。デフォルト・サーバーを指定しない場合、IBM Spectrum Protect は、dsm.sys ファイルの最初のスタンザで指定したサーバーに接続します。

defaultserver オプションは、dsm.sys ファイルの先頭で、すべてのサーバー・スタンザの前に入れます。詳しくは、[378 ページの『Defaultserver』](#)を参照してください。

servername オプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) 内またはコマンド・ラインで使用して、バックアップ/アーカイブ・サービスを受けるために接続するサーバーを指定します。これにより、(dsm.sys) ファイルで指定したデフォルト・サーバーは指定変更されます。

注: クライアント・システム・オプション・ファイルで指定されたマイグレーション・サーバーは指定変更できません。

[312 ページの表 56](#) では、dsm.sys ファイルの例を示します。

表 56. クライアント・システム・オプション・ファイルの例

dsm.sys ファイルの例

```

DEFAULTServer          server2

SErvername      server1
  NODename
  COMMMethod    TCPip
  TCPPort       1500
  TCPServeraddress node.domain.company.com
  PASSWORDAccess generate
  GRoups        system adsm
  USERs        ashton stewart kaitlin
  INCLExcl      /adm/adsm/backup1.excl

SErvername      server2
  COMMMethod    SHAREdmem
  shmport       1520
  PASSWORDAccess prompt
  GRoups        system adsm
  USERs        danielle derek brant
  INCLExcl      /adm/adsm/backup2.excl

```

バックアップおよびアーカイブ処理のオプション

クライアント・オプションを指定して、バックアップ処理およびアーカイブ処理のいくつかの局面を制御できます。

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション

オプション	説明
afmskipuncachedfiles 342 ページの『Afmskipuncachedfiles』	afmskipuncachedfiles オプションを使用して、General Parallel File System (GPFS™) のアクティブ・ファイル管理ファイル・セット内のキャッシュに入っていないファイルおよびダーティー・ファイルがバックアップ操作、アーカイブ操作、およびマイグレーション操作で処理されるかどうかを指定します。
archmc 343 ページの『Archmc』	archmc オプションは、 archive コマンドで使用して、アーカイブ対象ファイルをバインドするポリシー・ドメインの使用可能な管理クラスを指定します。
archsymb linkasfile 344 ページの『Archsymb linkasfile』	クライアントがシンボリック・リンクをたどり、それが指すファイルまたはディレクトリをアーカイブするか、あるいはシンボリック・リンクのみをアーカイブするかを指定します。
asnodename 344 ページの『Asnodename』	asnodename オプションを使用すると、エージェント・ノードが別のノード (ターゲット・ノード) の代わりにデータのバックアップまたはリストアを行うことができます。このオプションにより、複数のノードからの並行操作が可能になり、同じターゲット・ノードおよびファイル・スペースに並行してデータを保管することができます。

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
automount 353 ページの『Automount』	<p>このオプションは、クライアントが 次の特定時点でマウントしようとするすべての自動マウント・ファイル・システムを 指定するために domain オプションとともに使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> バックアップ/アーカイブ・クライアントの開始時 バックアップが開始された時点 バックアップ/アーカイブ・クライアントがバックアップ中に自動マウント・ファイル・システムに達した時点
autofsrename 351 ページの『Autofsrename』	<p>現在の操作でユニコード可能ファイル・スペースを作成できるようにするために、ユニコード可能サーバー上の既存のファイル・スペースを名前変更するかどうかを 指定します。</p>
changingretries 357 ページの『Changingretries』	<p>クライアントが、使用中のファイルのバックアップまたはアーカイブを再試行する回数を指定します。</p>
compressalways 363 ページの『Compressalways』	<p>compressalways オプションは、圧縮中にオブジェクトが大きくなった場合も圧縮を続けるかどうかを指定します。このオプションは、compression オプションとともに使用します。</p>
compression 363 ページの『Compression』	<p>compression オプションは、ファイルをサーバーに送る前に それらのファイルを圧縮します。ファイルを圧縮すると、ファイルのバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーのためのデータ・ストレージが削減されます。</p>
createnewbase 366 ページの『Createnewbase』	<p>createnewbase オプションは基本スナップショットを作成し、それをソースとして使用してフル増分を実行します。このオプションを設定することにより、スナップショット差分の増分バックアップの実行中にスキップされた可能性があるすべてのファイルが確実にバックアップされます。</p>
deduplication 377 ページの『Deduplication』	<p>バックアップまたはアーカイブ処理中で、クライアントがデータを IBM Spectrum Protect サーバーに転送するときに、クライアント・サイドの冗長データを削除するかどうかを指定します。</p>
dedupcachepath 375 ページの『Dedupcachepath』	<p>enablededupcache=yes オプションが設定されている場合に、クライアント・サイドのデータ重複排除キャッシュ・データベースが作成されるロケーションを指定します。</p>
dedupcachesize 376 ページの『Dedupcachesize』	<p>データ重複排除キャッシュ・ファイルの最大サイズを決定します。</p>

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<p>enablededupcache 405 ページの『Enablededupcache』</p>	<p>クライアント・サイドのデータ重複排除キャッシュを使用可能にするかどうかを指定します。これによって、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、キャッシュから変更したデータを入手します。</p>
<p>deletefiles 379 ページの『Deletefiles』</p>	<p>deletefiles オプションは、アーカイブ後にワークステーションからファイルを削除するために archive コマンドで使用します。</p> <p>また、イメージが作成された後にファイルが削除された場合に、そのファイルをリストアされたイメージから削除するために、restore image コマンドおよび incremental オプションとともにこのオプションを使用することができます。</p>
<p>description 379 ページの『Description』</p>	<p>description オプションは、クライアントでのアーカイブ、削除、リトリブ、照会アーカイブ、または Query BACKUPSET 操作実行時に、ファイルに関する記述を割り当てまたは指定します。</p>
<p>detail 380 ページの『Detail』</p>	<p>detail オプションを使用すると、使用したコマンドに応じて管理クラス、ファイル・スペース、バックアップ、およびアーカイブの情報がリストされます。</p>
<p>diffsnapshot 382 ページの『Diffsnapshot』</p>	<p>diffsnapshot オプションを使用すると、クライアントで差分スナップショットを作成するかどうかを決定できます。</p>
<p>dirmc 384 ページの『Dirmc』</p>	<p>ディレクトリーに使用する管理クラスを指定します。このオプションを指定しない場合は、クライアントは、保持期間が最も長いポリシー・ドメインのアクティブ・ポリシー・セットの管理クラスを使用します。</p>
<p>dirsonly 385 ページの『Dirsonly』</p>	<p>ディレクトリーのみをバックアップ、リストア、アーカイブ、リトリブ、または照会します。</p>
<p>diskcachelocation 387 ページの『Diskcachelocation』</p>	<p>増分バックアップ中に memoryefficient=diskcachemethod オプションが設定してある場合、ディスク・キャッシュ・データベースを作成する位置を指定します。</p>
<p>domain 388 ページの『Domain』</p>	<p>増分バックアップの場合にデフォルト・クライアント・ドメインに含めるファイル・システムを指定します。</p>

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
domain.image 393 ページの『Domain.image』	イメージ・バックアップ用にクライアント・ドメインに組み込みたいマウント済みファイル・システムおよび ロー論理ボリュームを指定します。このオプションは、AIX、Linux x86_64、Linux on POWER、および Solaris 専用です。
domain.nas 394 ページの『Domain.nas』	NAS イメージ・バックアップ用のデフォルト・ドメインに含めるボリュームを指定します。
domain.vmfull 395 ページの『Domain.vmfull』	VMware 仮想マシンのフルイメージ・バックアップに組み込む仮想マシンを指定します。
efsdecrypt 403 ページの『Efsdecrypt』	AIX 暗号化ファイル・システム (EFS) で暗号化されたファイルを暗号化形式または復号形式のどちらで読み取るかを指定します。
enablearchiveretentionprotection 404 ページの『Enablearchiveretentionprotection』	クライアントをデータ保存サーバーに接続できるようにします。
enablelanfree 408 ページの『Enablelanfree』	ストレージ・エリア・ネットワーク (SAN) 接続ストレージ装置への有効な LAN フリー・パスを使用可能にするかどうかを指定します。
416 ページの『Exclude オプション』 exclude exclude.backup exclude.file exclude.file.backup	これらのオプションは、ファイルまたはファイルのグループをバックアップ・サービスおよびスペース管理サービス (HSM クライアントがインストールされている場合) から除外するために使用します。exclude.backup オプションでは、ファイルは通常バックアップから除外されるだけで、HSM からは除外されません。
encryptiontype 410 ページの『Encryptiontype』	AES-256 または AES-128 ビットのデータ暗号化を選択します。AES 256 ビット暗号化は、最高レベルのデータ暗号化を提供します。
encryptkey 410 ページの『Encryptkey』	クライアントでのバックアップ/アーカイブ操作実行時に 暗号鍵パスワードをローカルで保管するかどうか、あるいは暗号鍵パスワードを求めるプロンプトを出すかどうかを指定します。
exclude.archive 416 ページの『Exclude オプション』	パターンに一致するファイルまたはファイルのグループをアーカイブ・サービスのみから除外します。
exclude.attribute.symlink 416 ページの『Exclude オプション』	シンボリック・リンクまたは別名 (別名は Mac OS X の場合) であるファイルまたはファイルのグループを、バックアップ処理のみから除外します。

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
exclude.compression 416 ページの『Exclude オプション』	compression オプションを yes に設定すると、ファイルが圧縮処理から除外されます。このオプションは、バックアップおよびアーカイブに適用されます。
exclude.dir 416 ページの『Exclude オプション』	ディレクトリー、そのファイル、およびそのすべてのサブディレクトリーとそのファイルをバックアップ処理から除外します。
exclude.encrypt 416 ページの『Exclude オプション』	指定されたファイルを暗号化処理から除外します。
exclude.fs 416 ページの『Exclude オプション』	パターンと一致するファイル・スペースを除外します。このオプションは、すべての UNIX クライアントに有効です。
exclude.fs.nas 416 ページの『Exclude オプション』	backup nas コマンドで使用された場合に、NAS ファイル・サーバー上のファイル・システムをイメージ・バックアップから除外します。このオプションは、AIX および Solaris クライアントの場合にのみ使用します。
exclude.image 416 ページの『Exclude オプション』	指定のパターンと一致するマウント済みのファイル・システムとロー論理ボリュームをフルイメージ・バックアップ操作から除外します。このオプションは、AIX、Solaris、およびすべての Linux クライアントに有効です。
fbbranch 423 ページの『Fbbranch』	バックアップまたはアーカイブするリモート FastBack サーバーのブランチ ID を指定します。
fbclientname 424 ページの『Fbclientname』	バックアップ・プロキシーからバックアップする FastBack クライアントの名前を 1 つ以上指定します。
fbpolicyname 425 ページの『Fbpolicyname』	バックアップ・プロキシーからバックアップする Tivoli Storage Manager FastBack ポリシーの名前を 1 つ以上指定します。
fbreposlocation 426 ページの『Fbreposlocation』	MOUNT DUMP 、 MOUNT ADD および MOUNT DEL コマンドを発行するために接続する IBM Spectrum Protect クライアント・プロキシーの Tivoli Storage Manager FastBack リポジトリーのロケーションを指定します。
fbserver 427 ページの『Fbserver』	fbreposlocation オプションによって指定されたりポジトリーを所有する FastBack サーバー・ワークステーション、または FastBack 災害復旧ハブ・ワークステーションのホスト名を指定します。
fbvolumename 428 ページの『Fbvolumename』	バックアップ・プロキシーからバックアップする Tivoli Storage Manager FastBack ボリュームの名前を 1 つ以上指定します。

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンドについて処理されるファイルのリストを指定します。クライアントは指定されたファイル・リストをオープンし、それに含まれているファイルをコマンドに従って処理します。
filesonly 433 ページの『Filesonly』	ファイルのみをバックアップ、リストア、リトリブ、または照会します。
groupname 439 ページの『Groupname』	このオプションを backup group コマンドとともに使用して、グループのグループ・リーダーの完全修飾名を指定します。
ieobjtype 442 ページの『Ieobjtype』	クライアント・サイドのデータ重複排除操作のオブジェクト・タイプを指定します。このオプションは、include.dedup および exclude.dedup オプションと共に使用します。
imagegapsize 444 ページの『Imagegapsize』	イメージ・バックアップ中にスキップさせたいボリュームの空の領域の最小サイズを指定します。このオプションは、AIX JFS2 クライアントに有効です。
inlexcl 446 ページの『Inlexcl』	include-exclude オプション・ファイルのパスおよびファイル名を指定します。
447 ページの『include オプション』 include include.backup include.file	これらのオプションは、バックアップ処理のためにファイルを組み込んだり、管理クラスを割り当てるために使用します。
include.archive 447 ページの『include オプション』	アーカイブ処理の対象のファイルを組み込むか、または管理クラスを割り当てます。
include.attribute.symlink 447 ページの『include オプション』	シンボリック・リンクまたは別名 (別名は Mac OS X の場合) であるファイルまたはファイルのグループを、バックアップ処理専用の広範な除外対象ファイル・グループに含めます。
include.compression 447 ページの『include オプション』	compression オプションを yes に設定すると、ファイルが圧縮処理の対象に組み込まれます。このオプションは、バックアップおよびアーカイブに適用されます。
include.encrypt 447 ページの『include オプション』	指定されたファイルを暗号化処理に含めます。デフォルトには、クライアントは暗号化処理を実行しません。
include.fs 447 ページの『include オプション』	include.fs オプションを使用して、クライアントが増分バックアップのファイル・スペースを処理する方法を制御します。

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<code>include.fs.nas</code> 447 ページの『include オプション』	<code>include.fs.nas</code> オプションは、管理クラスを Network Attached Storage (NAS) ファイル・システムにバインドするために使用します。 <code>dsm.sys</code> ファイルで <code>include.fs.nas</code> オプションとともに <code>toc</code> オプションを使用することによって、NAS ファイル・システム・イメージ・バックアップ中にクライアントが目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定することもできます。詳しくは、 586 ページの『Toc』 を参照してください。このオプションは、AIX および Solaris クライアントの場合にのみ有効です。
<code>include.image</code> 447 ページの『include オプション』	イメージ・バックアップ処理の対象となるファイル・システムまたは論理ボリュームを指定します。このオプションでは、指定したファイル・システムまたは論理ボリュームの明示管理クラス割り当てを指定する方法も提供されます。 <code>backup image</code> コマンドでは、その他の <code>include</code> オプションがすべて無視されます。このオプションは、AIX、Solaris、およびすべての Linux クライアントに有効です。
<code>incrbydate</code> 465 ページの『Incrbydate』	日付による増分バックアップを要求するために incremental コマンドで使用します。
<code>incremental</code> 466 ページの『Incremental』	ベース・イメージに行われた変更がリストアされたイメージにも適用されるようにするために、 restore image コマンドで使用されます。このオプションは、AIX、Solaris、およびすべての Linux クライアントに有効です。
<code>memoryefficientbackup</code> 480 ページの『Memoryefficientbackup』	incremental コマンドで使用する と、増分バックアップの場合にメモリーを節約するバックアップ・アルゴリズムを指定します。

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<p>モード 482 ページの『mode』</p>	<p>mode オプションは、次のようにして、以下のコマンドで使用してください。</p> <p>backup image クライアント・ファイル・システムの選択イメージ・バックアップまたは増分イメージ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。</p> <p>backup nas NAS ファイル・システムのフルイメージ・バックアップまたは差分イメージ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。</p> <p>backup group 1 つ以上のファイル・スペースからのファイルのリストを含むフルグループ・バックアップまたは差分グループ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。</p> <p>backup vm VMware システムの選択バックアップまたは増分バックアップのどちらを実行するかを指定します。</p>
<p>monitor 485 ページの『Monitor』</p>	<p>Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属しているファイル・システムのイメージ・バックアップをモニターするかどうかを指定します。</p>
<p>noprompt 491 ページの『Noprompt』</p>	<p>delete group、delete archive、expire、および set event の各コマンドによって表示される確認プロンプトを抑止します。</p>
<p>noprompt 491 ページの『Noprompt』</p>	<p>delete group、delete archive、expire、restore image、および set event の各コマンドによって表示される確認プロンプトを抑止します。</p>
<p>nojournal 490 ページの『Nojournal』</p>	<p>このオプションは、incremental コマンドで使用して、デフォルトのジャーナル・ベースのバックアップの代わりに、従来のフル増分バックアップを実行することを指定します。</p>
<p>optfile 494 ページの『Optfile』</p>	<p>バックアップ/アーカイブ・クライアント・セッションの開始時に使用するクライアント・ユーザー・オプション・ファイルを指定します。</p>
<p>postsnapshotcmd 503 ページの『Postsnapshotcmd』</p>	<p>このオプションにより、スナップショット・ベースのバックアップ中、スナップショットが作成された後にアプリケーションを手動で開くことができます。このオプションは、AIX JFS2 または Linux LVM のスナップショット・ベースの処理にのみ有効です。</p>

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<p>preservelastaccessdate 506 ページの『Preservelastaccessdate』</p>	<p>このオプションは、指定のファイルの最終アクセス日付をバックアップまたはアーカイブ操作後の元の値にリセットするかどうかを指定するために、バックアップまたはアーカイブ操作中に使用します。デフォルトでは、クライアントは、バックアップまたはアーカイブしたファイルの最終アクセス日付をバックアップまたはアーカイブ操作前の元の値にリセットしません。</p>
<p>presnapshotcmd 510 ページの『Presnapshotcmd』</p>	<p>スナップショット・ベースのバックアップの際に、このオプションを使用すると、スナップショットを開始する前にアプリケーションを手動で静止することができます。このオプションは、AIX JFS2 または Linux LVM のスナップショット・ベースの処理にのみ有効です。</p>
<p>removeoperandlimit 515 ページの『Removeoperandlimit』</p>	<p>クライアントが 20 個のオペランド制限を除去することを指定します。 incremental、selective、archive、または backup image コマンドで removeoperandlimit オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。</p>
<p>skipacl 545 ページの『Skipacl』</p>	<p>ACL 処理を完全にスキップするかどうかを指定します。</p>
<p>skipaclupdatecheck 545 ページの『Skipaclupdatecheck』</p>	<p>バックアップ実行前後および増分処理実行中にチェックサムとサイズ比較を実行するかどうかを指定します。</p>
<p>snapdiff 546 ページの『Snapdiff』</p>	<p>ボリュームをスキャンして変更されたファイルを探すのではなく、NetApp によって変更を報告されたファイルの増分バックアップを行うことを指定します。このオプションは、NAS 完全ボリューム増分バックアップで使用してください。</p>
<p>snapshotcachesize 554 ページの『Snapshotcachesize』</p>	<p>Linux および AIX のみ: このオプションは、ファイルの変更と削除の際に、すべてのオリジナル・データ・ブロックを保管できるように適切なスナップショット・サイズを指定する場合に使用します。スナップショット・サイズ 100 % で、有効なスナップショットが保証されます。デフォルト値は 100 % です。</p>

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<p>snapshotproviderfs 556 ページの『Snapshotproviderfs』</p>	<p>snapshotproviderfs オプションを使用して、スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブ操作を有効にし、スナップショット・プロバイダーを指定します。スナップショット・ベースのファイルのバックアップまたはアーカイブ操作を実行するには、root ユーザーでなければなりません。root ユーザーでない場合、その操作は失敗し、エラー・メッセージが出されます。</p>
<p>snapshotproviderimage 556 ページの『Snapshotproviderimage』</p>	<p>snapshotproviderimage オプションを使用して、スナップショット・ベースのイメージ・バックアップを有効にし、スナップショット・プロバイダーを指定します。スナップショット・ベースのイメージ・バックアップ操作を実行するには、root ユーザーでなければなりません。root ユーザーでない場合、その操作は失敗し、エラー・メッセージが出されます。</p>
<p>snapshotroot 557 ページの『Snapshotroot』</p>	<p>論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダー・アプリケーションで、incremental コマンド、selective コマンド、または archive コマンドに snapshotroot オプションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データに関連付けます。このオプションは、すべての UNIX および Linux クライアントで有効です。</p>
<p>subdir 569 ページの『Subdir』</p>	<p>指定されたディレクトリーのサブディレクトリーを含めるかどうかを指定します。</p>
<p>tapeprompt 575 ページの『Tapeprompt』</p>	<p>バックアップ、アーカイブ、リストア、またはリトリート・プロセスでテープが必要になったとき、クライアントに対し、テープのマウントを待たせるか、プロンプトを出してユーザーに選択させるかを指定します。</p>

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<p>toc</p> <p>586 ページの『Toc』</p>	<p>toc オプションは、クライアントがファイル・システム・バックアップごとに目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定するために backup nas コマンド または include.fs.nas オプションとともに使用します。TOC 情報を保存した場合は、QUERY TOC サーバー・コマンドを使用してファイル・システム・バックアップの内容を判別したり、RESTORE NODE サーバー・コマンドを使用して個々のファイルまたはディレクトリー・ツリーをリストアしたりできます。Web クライアントを使用して、ファイル・システム・ツリー全体を検査し、リストアするファイルおよびディレクトリーを選択することもできます。</p>
<p>type</p> <p>589 ページの『Type』</p>	<p>type オプションは、照会するノードのタイプを指定するために query node コマンドで使用します。</p>
<p>v2archive</p> <p>593 ページの『V2archive』</p>	<p>v2archive オプションは、ファイルだけをサーバーにアーカイブするために、archive コマンドで使用します。クライアントは、ソース・ファイル指定のパス内に存在するディレクトリーを処理しません。</p>
<p>virtualfsname</p> <p>595 ページの『Virtualfsname』 (Mac OS X に適用されません)</p>	<p>このオプションを backup group コマンドとともに使用して、操作を実行したいグループのコンテナの名前を指定します。</p>
<p>virtualmountpoint</p> <p>595 ページの『Virtualmountpoint』</p>	<p>あるファイル・システム内の特定のディレクトリーから始まるファイルをバックアップ処理対象にしたい場合に、そのファイル・システムに仮想マウント・ポイントを定義します。</p>
<p>vmchost</p> <p>602 ページの『Vmchost』</p>	<p>backup VM、restore VM、または query VM コマンドで使用して、コマンドの送信先の VMware VirtualCenter または ESX サーバーのホスト名を指定します。</p>
<p>vmcpw</p> <p>602 ページの『Vmcpw』</p>	<p>backup VM、restore VM、または query VM コマンドで使用して、vmcuser オプションで指定された VirtualCenter または ESX ユーザーのパスワードを指定します。</p>
<p>vmcuser</p> <p>604 ページの『Vmcuser』</p>	<p>backup VM、restore VM、または query VM コマンドで使用して、コマンドの送信先の VMware VirtualCenter または ESX サーバーのユーザー名を指定します。</p>
<p>vmmaxvirtualdisks</p> <p>620 ページの『Vmmaxvirtualdisks』</p>	<p>backup VM コマンドを指定して使用して、バックアップ操作に含める VMware 仮想マシン・ディスク (VMDK) の最大サイズを指定します。</p>

表 57. バックアップおよびアーカイブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<code>vmskipmaxvirtualdisks</code> 629 ページの『 Vmskipmaxvirtualdisks 』	backup VM と一緒に指定して、バックアップ操作で最大ディスク・サイズを超えている VMware 仮想マシン・ディスク (VMDK) を処理する方法を指定します。V7.1.3 以前では、 <code>vmskipmaxvirtualdisks</code> オプションの名前は <code>vmskipmaxvmdks</code> でした。

リストアおよびリトリート処理のオプション

クライアント・オプションを指定して、リストア処理およびリトリート処理のいくつかの局面を制御できます。

323 ページの表 58 は、使用可能なリストアおよびリトリート処理オプションの一覧です。

表 58. リストアおよびリトリート処理のオプション

オプション	説明
<code>dirsonly</code> 385 ページの『 Dirsonly 』	ディレクトリのみを処理するように、操作 (バックアップ、アーカイブ、リストア、リトリート) を限定します。
<code>disablenqr</code> 386 ページの『 Disablenqr 』	バックアップ/アーカイブ・クライアントがサーバーからファイルとディレクトリをリストアするときに、照会なしのリストア方式を使用できるかどうかを指定します。
<code>filelist</code> 429 ページの『 Filelist 』	指定したコマンドによって処理されるファイルのリストが入っているファイルを指定します。
<code>filesonly</code> 433 ページの『 Filesonly 』	ファイルのみを処理するように、操作 (バックアップ、アーカイブ、リストア、リトリート) を限定します。
<code>followsymbolic</code> 434 ページの『 Followsymbolic 』	ファイルをシンボリック・リンクにリストアしたいか、またはシンボリック・リンクを仮想マウント・ポイントとして使用したいかを指定します。
<code>fromdate</code> 436 ページの『 Fromdate 』	<code>fromdate</code> オプションは <code>fromtime</code> オプションとともに使用して、リストア、リトリート、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を開始する日時を指定します。
<code>fromnode</code> 437 ページの『 Fromnode 』	あるノードで別のノードのための コマンドを実行することを許可します。別のノードのユーザーにより、 set access コマンドによって、別のノードのファイルまたはイメージを照会、リストア、あるいはリトリートするための権限が付与されている必要があります。
<code>fromowner</code> 438 ページの『 Fromowner 』	代替所有者のためのファイル・スペースを表示します。代替所有者 (ここからファイルをリストアまたはリトリートする) も指定します。
<code>fromtime</code> 439 ページの『 Fromtime 』	<code>fromtime</code> オプションは <code>fromdate</code> オプションとともに使用し、リストア、リトリート、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を開始する時刻を指定します。
<code>ifnewer</code> 443 ページの『 Ifnewer 』	バックアップ・バージョンが既存のファイルより新しい場合にのみ、既存のファイルを最新のバックアップ・バージョンに置き換えます。

表 58. リストアおよびリトリブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<code>imagnetofile</code> 445 ページの『Imagnetofile』	<code>imagnetofile</code> オプションとともに restore image コマンドを使用して、ソース・イメージをファイルへリストアすることを指定します。ターゲット・ボリューム上に不良セクターが存在する場合、またはイメージ・データを使用してなんらかの操作を行う場合に、イメージをファイルをリストアする必要が生じることがあります。このオプションは、AIX、Linux、および Solaris クライアントに有効です。
<code>inactive</code> 445 ページの『Inactive』	<code>pick</code> オプションとともに使用したときは、活動/非活動ファイルのリストを表示します。
<code>latest</code> 474 ページの『Latest』	ファイルの最新のバックアップ・バージョンを、それが活動または非活動のいずれであるかにかかわらず、リストアします。
<code>localbackupset</code> 474 ページの『Localbackupset』	バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI がスタンドアロン・ワークステーションでローカル・バックアップ・セットをリストアするためにサーバーによる初期ログオンをバイパスするかどうかを指定します。
<code>makesparsefile</code> 475 ページの『Makesparsefile』 (Mac OS X に適用されません)	<code>makesparsefile</code> オプションは、スパース・ファイルの再作成方法を指定するために restore コマンドまたは retrieve コマンドで使用します。
<code>monitor</code> 485 ページの『Monitor』	Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属する 1 つ以上のファイル・システムのイメージ・リストアをモニターするかどうかを指定します。
<code>noprompt</code> 491 ページの『Noprompt』	delete group 、 delete archive 、 expire 、および set event の各コマンドによって表示される確認プロンプトを抑制します。
<code>noprompt</code> 491 ページの『Noprompt』	delete group 、 delete archive 、 expire 、 restore image 、および set event の各コマンドによって表示される確認プロンプトを抑制します。
<code>optfile</code> 494 ページの『Optfile』	バックアップ/アーカイブ・クライアント・セッションの開始時に使用するクライアント・ユーザー・オプション・ファイルを指定します。
<code>pick</code> 499 ページの『Pick』	入力したファイル指定と一致する バックアップ・バージョン、イメージ、またはアーカイブ・コピーのリストを作成します。このリストから、処理するバージョンが選択できます。 <code>inactive</code> オプションを含めると、活動状態と非活動状態の両方のオブジェクトを表示することができます。
<code>pitdate</code> 500 ページの『Pitdate』	<code>pitdate</code> オプションは、バックアップの最新バージョンを表示またはリストアしたい特定時点を設定するために <code>pittime</code> オプションと一緒に使用します。
<code>pittime</code> 501 ページの『Pittime』	<code>pittime</code> オプションは、バックアップの最新バージョンを表示またはリストアしたい特定時点を設定するために <code>pitdate</code> オプションと一緒に使用します。

表 58. リストアおよびリトリブ処理のオプション (続き)

オプション	説明
<code>preservepath</code> 507 ページの『Preservepath』	ファイルを新しい場所にリストアまたはリトリブするときに、ターゲット・ディレクトリー・パスの一部としてソース・パスをどの程度再作成するかを指定するために使用します。
<code>replace</code> 516 ページの『Replace』	ファイルのリストアまたはリトリブ時に 既存のファイルを上書きするか、選択を求めるプロンプトを出力するかを指定します。
<code>showmembers</code> 544 ページの『Showmembers』 (Mac OS X には適用されません。)	グループのすべてのメンバーを表示します。
<code>subdir</code> 569 ページの『Subdir』	指定されたディレクトリーのサブディレクトリーを含めるかどうかを指定します。
<code>tapeprompt</code> 575 ページの『Tapeprompt』	バックアップ/アーカイブ・クライアントに対して、リストアまたはリトリブに必要なテープがマウントされるまで待機させるか、選択を求めるプロンプトを表示させるかを指定します。
<code>todate</code> 587 ページの『Todate』	<code>todate</code> オプションは、リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を終了する日時を指定するために、 <code>totime</code> オプションと一緒に使用します。
<code>totime</code> 588 ページの『Totime』	<code>totime</code> オプションは、リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を終了する日時を指定するために、 <code>todate</code> オプションと一緒に使用します。
<code>type</code> 589 ページの『Type』	<code>type</code> オプションは、照会するノードのタイプを指定するために query node コマンドで使用します。
<code>verifyimage</code> 594 ページの『Verifyimage』	restore image コマンドとともに <code>verifyimage</code> オプションを使用して、宛先ターゲット・ボリュームの不良セクター検出を有効にすることを指定します。ターゲット・ボリューム上で不良セクターが検出された場合、クライアントは、コンソールとエラー・ログに警告メッセージを発行します。

以下のオプションは、IBM Spectrum Protect HSM for Windows マイグレーション済みファイルに適用されるバックアップ/アーカイブ・クライアント・オプションです。これらのオプションについて詳しくは、IBM Knowledge Center のトピック ([IBM Spectrum Protect HSM for Windows](#)) を参照してください。

- `Checkreparsecontent`
- `Restorecheckstubaccess`
- `Restoremigstate`
- `Skipmigrated`

以下のオプションは、IBM Spectrum Protect for Space Management マイグレーション済みファイルに適用されるバックアップ/アーカイブ・クライアント・オプションです。これらのオプションについて詳しくは、IBM Knowledge Center のトピック ([IBM Spectrum Protect for Space Management](#)) を参照してください。

- `Restoremigstate`

- Skipmigrated

スケジュール・オプション

ここでは、セントラル・スケジューリングを制御するのに使用するオプションについて説明します。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、スケジューラーが実行されている場合にのみスケジューリング・オプションを使用します。

326 ページの表 59 は、使用可能なスケジューリング・オプションの一覧です。

表 59. スケジューリング・オプション	
オプション	説明
<code>cadlistenonport</code> 356 ページの『Cadlistenonport』	クライアント・アクセプターを使用してポーリング・モードでスケジュールを管理している場合に、クライアント・アクセプターの listen ポートを開くかどうかを指定します。
<code>managedservices</code> 476 ページの『Managedservices』	クライアント・アクセプターが管理する対象が Web クライアント、スケジューラー、またはこれら両方のいずれであるかを指定します。
<code>maxcmdretries</code> 478 ページの『Maxcmdretries』	スケジュールされたコマンドが失敗したとき、クライアント・スケジューラーがそのコマンドを処理しようとする最大回数を指定します。
<code>postschedulecmd/postnschedulecmd</code> 502 ページの『Postschedulecmd/Postnschedulecmd』	スケジュールの実行後に処理するコマンドを指定します。
<code>preschedulecmd/prenschedulecmd</code> 505 ページの『Preschedulecmd/Prenschedulecmd』	スケジュールの実行前に処理するコマンドを指定します。
<code>queryschedperiod</code> 511 ページの『Queryschedperiod』	スケジュールされた作業について、クライアント・スケジューラーがサーバーに接続しようと試みてから次に試みるまでの待ち時間を時間単位で指定します。
<code>retryperiod</code> 527 ページの『Retryperiod』	スケジュールされたコマンドが失敗したとき、そのコマンドの処理を試みてから次に試みるまで、あるいは結果をサーバーに報告する試みに失敗してから次の試みまでのクライアント・スケジューラーの待機時間を分単位で指定します。
<code>schedcmddisabled</code> 529 ページの『Schedcmddisabled』	IBM Spectrum Protect 管理者によって指定された汎用コマンドのスケジューリングを使用不可にするかどうかを指定します。
<code>schedcmduser</code> (サーバー定義のみ) 291 ページの『コマンドのオプションのスケジューリング』	スケジューラーは uid を 0 としてコマンドを実行しますが、ユーザー ID が異なるユーザーが存在していても構いません。この場合、このオプションを使用することによって、IBM Spectrum Protect 管理者は 0 以外の uid で実行するスケジュールを定義できます。IBM Spectrum Protect クライアント API はこのオプションをサポートしていません。
<code>schedlogmax</code> 532 ページの『Schedlogmax』	スケジューラー・ログおよび Web クライアント・ログの最大サイズ (M バイト単位) を指定します。
<code>schedlogname</code> 533 ページの『Schedlogname』	スケジュール・ログ情報を格納するパスおよびファイル名を指定します。

表 59. スケジューリング・オプション (続き)

オプション	説明
<code>schedlogretention</code> 534 ページの『Schedlogretention』	ログ・ファイル項目をスケジュール・ログおよび Web クライアント・ログに保存しておく日数、および除去した項目を保管するかどうかを指定します。
<code>schedmode</code> 536 ページの『Schedmode』	<i>polling</i> と <i>prompted</i> のどちらのスケジュール・モードを使用するかを指定します。
<code>schedrestretrdisabled</code> 537 ページの『Schedrestretrdisabled』	IBM Spectrum Protect のサーバー管理者がスケジュールされた操作のリストアまたはリトリブを実行できないようにするかどうかを指定します。
<code>sessioninitiation</code> 541 ページの『Sessioninitiation』	<code>sessioninitiation</code> オプションは、サーバーまたはクライアントがファイアウォール経由でセッションを開始するかどうかを制御するために使用します。デフォルトでは、クライアントがセッションを開始できます。
<code>srvprepostscheddisabled</code> 560 ページの『Srvprepostscheddisabled』	スケジュールされた操作を実行する際、IBM Spectrum Protect のサーバー管理者が事前スケジュール・コマンドおよび事後スケジュール・コマンドを実行できないようにするかどうかを指定します。
<code>srvprepostsnapdisabled</code> 561 ページの『Srvprepostsnapdisabled』	スケジュールされたイメージ・スナップショットのバックアップ操作を実行する際、IBM Spectrum Protect のサーバー管理者が事前スナップショット・コマンドおよび事後スナップショット・コマンドを実行できないようにするかどうかを指定します。
<code>tcpclientaddress</code> 578 ページの『Tcpclientaddress』	クライアント・ノードが 2 つ以上のアドレスを持っていて、最初のサーバーが接続するために使用したアドレスとは別のアドレスにサーバーを接続させたい場合に、TCP/IP アドレスを指定します。サーバーでプロンプトを出されるスケジュール操作を開始するとき、サーバーはこのアドレスを使用します。詳しくは、 <code>schedmode prompted</code> (536 ページの『Schedmode』) を参照してください。
<code>tcpclientport</code> 579 ページの『Tcpclientport』	サーバーがサーバーでプロンプトを出されるスケジュール操作を開始するときにサーバーがクライアントに接続する TCP/IP ポート番号を指定します。詳しくは、 <code>schedmode prompted</code> (536 ページの『Schedmode』) を参照してください。

形式および言語のオプション

形式および言語のオプションを使用すると、さまざまな言語に対して、日付、時刻、および数値の異なる形式を選択できます。

形式オプションを使用すると、日付、時刻、および数値について異なる形式を選択できます。

表 60. 形式および言語のオプション

オプション	説明
<code>dateformat</code> 371 ページの『Dateformat』	日付を表示する形式を指定します。

表 60. 形式および言語のオプション (続き)

オプション	説明
<code>numberformat</code> 492 ページの『Numberformat』	数値を表示する形式を指定します。
<code>timeformat</code> 583 ページの『Timeformat』	時刻を表示する形式を指定します。

コマンド処理オプション

ここでは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンドで利用できるオプションについて説明します。

コマンド処理オプションにより、端末画面上のデータのフォーマット設定をいくつか制御することができます。

表 61. コマンド処理オプション

オプション	説明
<code>quiet</code> 513 ページの『Quiet』	処理中に画面に表示されるメッセージの数を制限します。このオプションはサーバーが指定変更できます。
<code>scrolllines</code> 538 ページの『Scrolllines』	画面上に一度に表示する情報の行数を指定します。このオプションは、 <code>scrollprompt</code> を <code>yes</code> に設定した場合にのみ使用してください。
<code>scrollprompt</code> 539 ページの『Scrollprompt』	<code>scrolllines</code> オプションで指定した 行数の情報を表示した後でバックアップ/アーカイブ・クライアントを停止して待たせるか、あるいはすべての行を表示するまでスクロールさせ、リストの最後で停止させるかを指定します。
<code>setwindowtitle</code> 543 ページの『setwindowtitle』	IBM Spectrum Protect のサーバー名とホスト・サーバー名を管理クライアント・コマンド・ウィンドウのタイトルに表示するかどうかを指定します。
<code>verbose</code> 594 ページの『Verbose』	処理情報を画面に表示することを指定します。もう 1 つの選択肢は <code>quiet</code> です。このオプションはサーバーが指定変更できます。

権限オプション

権限オプションは IBM Spectrum Protect サーバーへのアクセスを制御します。

[328 ページの表 62](#) は、使用可能な権限オプションの一覧です。

表 62. 権限オプション

オプション	説明
<code>autodeploy</code> 350 ページの『Autodeploy』	再始動が必要な場合に、クライアントの自動デプロイメントを使用可能または使用不可にするかどうかを指定します。
<code>groups</code> 440 ページの『Groups (非推奨)』	サーバーからの IBM Spectrum Protect サービスの要求を許可するワークステーションのグループを指定します。
<code>password</code> 495 ページの『Password』	IBM Spectrum Protect パスワードを指定します。
<code>passwordaccess</code> 497 ページの『Passwordaccess』	生成されたパスワードを使用するか、クライアントを開始するごとに毎回パスワードを求めるプロンプトを出すかを指定します。

表 62. 権限オプション (続き)

オプション	説明
passworddir 498 ページの『Passworddir』	クライアント・ノード用に自動的に生成されたパスワードを格納するディレクトリーを指定します。暗号鍵およびパスワードは、暗号化されて TSM.sth ファイルに格納されます。
revokeremoteaccess 528 ページの『Revokeremoteaccess』	クライアント・アクセス特権を持った管理者が Web クライアントからワークステーションにアクセスすることを制限します。
users 592 ページの『Users (非推奨)』	ワークステーション上の特定のユーザーがサーバーにサービスを要求することを許可します。

エラー処理オプション

エラー処理オプションは、エラー・ログ・ファイルの名前 およびバックアップ/アーカイブ・クライアントによるログ・ファイル項目の処理方法を指定します。

329 ページの表 63 は、使用可能なエラー処理オプションの一覧です。

表 63. エラー処理オプション

オプション	説明
errorlogmax 412 ページの『Errorlogmax』	エラー・ログの最大サイズ (M バイト単位) を指定します。
errorlogname 414 ページの『Errorlogname』	処理中に発生したエラーに関する情報を保管する ファイルの完全修飾パスおよびファイル名を指定します。
errorlogretention 414 ページの『Errorlogretention』	エラー・ログ項目が除去されるまで保持される日数、および除去された項目を保管するかどうかを指定します。

トランザクション処理オプション

トランザクション処理オプションは、IBM Spectrum Protect クライアントとサーバーの間でトランザクションを処理する方法を制御します。

329 ページの表 64 は、使用可能なトランザクション処理オプションの一覧です。

表 64. トランザクション処理オプション

オプション	説明
collocatebyfilespec 359 ページの『Collocatebyfilespec』	バックアップ/アーカイブ・クライアントが 1 つのファイル指定から生成されたオブジェクトを送信する場合に、1 つのサーバー・セッションのみを使用するように指定します。collocatebyfilespec オプションを yes に設定すると、ファイル指定ごとにクライアントが 1 つのサーバー・セッションに限定されるため、ファイルが複数のファイル指定に分散することがなくなります。したがって、データをテープに保管する場合は、各ファイル指定のファイルが 1 つのテープにまとめて保管されます (容量が大きいために別のテープが必要になる場合を除く)。
commrestartduration 361 ページの『Commrestartduration』	通信エラーが発生した後、IBM Spectrum Protect サーバーへの再接続をクライアントに試行させる最大時間を分単位で指定します。
commrestartinterval 362 ページの『Commrestartinterval』	通信エラーが発生した後、IBM Spectrum Protect サーバーへの再接続をクライアントに試行させるまでの待機時間を秒単位で指定します。

表 64. トランザクション処理オプション (続き)

オプション	説明
diskbuffsize 387 ページの『Diskbuffsize』	ファイルを読み取る際にクライアントが使用できる最大ディスク入出力バッファ・サイズを指定します (キロバイト単位)。
largecommbuffers 387 ページの『Diskbuffsize』	このオプションは、diskbuffsize オプションで置き換えられています。今のところ、largecommbuffers は、新しいオプションへの移行が簡単になるように、バックアップ/アーカイブ・クライアントによって引き続き受け入れられます。ただし、largecommbuffers によって指定された値は、diskbuffsize 設定を使用するので、無視されます。 重要: クライアントの将来のリリースでは largecommbuffers が受け入れられなくなる可能性があるため、このオプションを使用するのはやめてください。
nfstimeout 488 ページの『Nfstimeout』	タイムアウトになる前にサーバーが NFS ファイル・システムで 状況システム呼び出しを待つ時間を秒単位で指定します。
resourceutilization 525 ページの『Resourceutilization』	dsm.sys ファイルに resourceutilization オプションを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーおよびクライアントが処理中に使用できるリソースのレベルを調整します。
txnbytelimit 588 ページの『Txnbytelimit』	クライアント・プログラムがトランザクションをサーバーに送信するまでにバッファに入れるキロバイト数を指定します。

Web クライアント・オプション

IBM Spectrum Protect Web クライアントの構成には、いくつかのバックアップ/アーカイブ・クライアントのオプションを使用します。

[330 ページの表 65](#) は、使用可能な Web クライアント・オプションの一覧です。

表 65. Web クライアント・オプション

オプション	説明
httpport 440 ページの『Httpport』	Web クライアントの TCP/IP ポート・アドレスを指定します。
managedservices 476 ページの『Managedservices』	クライアント・アクセプター・デーモンが管理する対象が Web クライアント、スケジューラー、またはこれら両方のいずれであるかを指定します。
revokeremoteaccess 528 ページの『Revokeremoteaccess』	Web クライアントを介したクライアント・ワークステーションでの管理者アクセスを制限します。
webports 641 ページの『Webports』	クライアント・アクセプター・デーモンおよび Web クライアントとの通信用の Web クライアント・エージェント・サービスが使用する TCP/IP ポート番号を指定することによって、ファイアウォールの外側にある Web クライアントを使用できるようにします。

診断オプション

query systeminfo コマンドを使用して、IBM Spectrum Protect システム情報を収集し、以下の 1 つ以上の項目についての情報を収集し、この情報をファイルまたはコンソールに出力します。

query systeminfo コマンドは、主に診断を支援するために使用します。得られた情報をテクニカル・サポート担当者に送信して、問題診断に役立てることができます。

[331 ページの表 66](#) は、使用可能な診断オプションの一覧です。

表 66. 診断オプション

オプション	説明
console 365 ページの『Console』	console オプションを query systeminfo コマンドで使用して、システム情報をコンソールに出力します。
filename 432 ページの『Filename』	filename オプションを query systeminfo コマンドで使用して、システム情報を格納するファイル名を指定します。

関連資料

[722 ページの『Query Systeminfo』](#)

query systeminfo コマンドを使用して情報を収集し、この情報をファイルまたはコンソールに出力します。

コマンドでのオプションの使用

クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) のオプションの一部を上書きするには、適切なバックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンドとともにオプションを入力します。

dsm.sys ファイルまたはクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) のオプションの一部を上書きするには、適切なバックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンドとともにオプションを入力します。

クライアントは、以下の順序 (優先順位) でオプションを処理します。

1. サーバーが強制するクライアント・オプションによって、サーバー上で定義されたオプション。サーバーはクライアント値を指定変更します。
2. コマンド・ラインでローカルに入力されたオプション。
3. オプション・パラメーターを使用して、スケジュールのためにサーバー上で定義されたオプション。
4. オプション・ファイルでローカルに入力されたオプション。
5. サーバーが強制的に設定しないクライアント・オプション・セットを使用してサーバーから受け取ったオプション。強制されない場合、クライアントの値はサーバーにより指定変更されません。
6. デフォルト・オプション値。

クライアントには、コマンド・ラインで特定のコマンドでのみ入力できるクライアント・コマンド・オプション群も用意されています。コマンド行オプション、説明、および詳細情報の参照先については、[332 ページの表 67](#) を参照してください。

コマンドでのオプションの入力

コマンドでオプションを入力するための一般規則に従う必要があります。

- コマンド、ダッシュ (-)、オプション名、等号 (=) およびオプション値またはパラメーターを入力します。= 記号のどちら側にもスペースを含めないでください。

この構文のクライアントごとの例を以下に記します。

```
dsmc archive -description="year end 1999" /home/
```

- パラメーターを含まないオプションの場合には、コマンド、ダッシュ (-)、およびオプション名を入力します。例えば次の例のようにします。

```
dsmc incremental -quiet
```

注: テキストがオプションの名前であることを示すには、その前にダッシュ (-) を使用します。オブジェクト名がダッシュで始まる場合は、必ず単一引用符 (') または引用符 (") のいずれかで囲む必要があります。ほとんどのオペレーティング・システムのコマンド・ライン・プロセッサは、コマンド・ライン引数が IBM Spectrum Protect クライアント・アプリケーションに実行依頼される前に引用符を削除します。このような場合は、エスケープ文字を使用するか、引用符を 2 重にすることによって、クライアン

トが引用符で囲まれたオブジェクト名を受け取ることができます。ループ・モードでは、このようなオブジェクトは単一引用符 (') または引用符 (") で囲んでください。

- オプション名を入力することも、オプション名の省略形を入力することもできます。例えば、latest オプションを入力するためには、-lat または -latest と入力します。各オプションの構文中の大文字は、そのオプション名の最小の省略形を表します。
- オプションは、コマンド・パラメーターの前または後に入力します。例えば、オプションは、ファイル指定の前でも後でも入力できます。

```
dsmc selective -subdir=yes "/home/devel/proj1/*"
dsmc selective "/home/devel/proj1/*" -subdir=yes
```

- コマンドに複数のオプションを入力する場合は、各オプションをブランク・スペースで分離します。
- 入力するオプション値がブランク・スペースを含む場合は、値を引用符 (" ") で囲みます。例えば次のとおりです。

```
dsmc archive -description="Project A" "/home/devel/proj1/*"
```

- 通常、コマンド・ラインでオプションを入力すると、プリファレンス・ファイル内の値のセットが指定変更されます。ただし、**incremental** コマンドで domain オプションを使用するときは、クライアント・オプション・ファイルで指定されたドメインにそれが追加され、現行値は指定変更されません。
- AIX、Solaris、Linux on z、および Mac の場合: ファイル名の最大文字数は 255 です。ファイル名とパス名の最大結合長は 1024 文字です。1 文字の Unicode 表記が複数のバイトを占める場合があるため、ファイル名に含まれる最大文字数は変化する可能性があります。
- Linux の場合: ファイル名の最大長は 255 バイトです。ファイル名とパス名の両方を結合した最大長は 4096 バイトです。この長さは、オペレーティング・システムでサポートされている PATH_MAX に一致します。1 文字の Unicode 表記が複数のバイトを占める場合があるため、パス名とファイル名を構成する最大文字数は変化する可能性があります。実際の制限はパス・コンポーネントとファイル・コンポーネント内のバイト数であり、これは同じ文字数に対応するかどうかはわかりません。

Linux の場合: アーカイブ操作またはリトリブ操作の場合、パス名とファイル名 (結合したもの) に指定できる最大長は 1024 バイトのままです。

- Mac OS X の場合、ファイル名の最大長は 504 バイト (文字ではない) に制限されます。1 文字の Unicode 表記が複数のバイトを占める場合があるため、ファイル名に含まれる最大文字数は変化する可能性があります。

332 ページの表 67 には、特定のコマンドを使用してコマンド・ラインに入力できるクライアント・コマンド・オプションもリストされています。

表 67. クライアント・コマンド・オプション

コマンド・オプション	説明	コマンド
archmc 343 ページの『Archmc』	archmc オプションは、 archive コマンドで使用して、アーカイブ対象ファイルをバインドするポリシー・ドメインの使用可能な管理クラスを指定します。	archive
class 358 ページの『Class』	以下のコマンドを使用した時に NAS オブジェクトまたはクライアント・オブジェクトのリストを表示するかどうかを指定します。	query backup delete filespace query filespace
console 365 ページの『Console』	console オプションを query systeminfo コマンドで使用して、システム情報をコンソールに出力します。	query systeminfo
deletetfiles 379 ページの『Deletetfiles』	ファイルがサーバーに保存されたあと、そのローカル・コピーをワークステーションから削除します。	archive

表 67. クライアント・コマンド・オプション (続き)

コマンド・オプション	説明	コマンド
deletefiles 379 ページの『Deletefiles』	ファイルがサーバーに保存されたあと、そのローカル・コピーをワークステーションから削除します。また、イメージが作成された後でファイル・スペースから削除されたファイルを、リストアされたイメージから削除するために、 restore image コマンドおよび incremental オプションで 사용할 수도 있습니다。	archive restore image
description 379 ページの『Description』	アーカイブ、削除、リトリブ、またはアーカイブの照会操作の実行時に、ファイルに関する記述を割り当てまたは指定します。	archive delete archive query archive query backupset retrieve
detail 380 ページの『Detail』	使用したコマンドに応じて管理クラス、ファイル・スペース、バックアップ、およびアーカイブの情報が表示されます。	delete filespace query archive query backup query filespace query mgmtclass
dirsonly 385 ページの『Dirsonly』	ディレクトリのみをバックアップ、リストア、アーカイブ、リトリブ、または照会します。	archive incremental query archive query backup restore restore backupset retrieve selective
dynamicimage 402 ページの『Dynamicimage』	動的イメージ・バックアップを実行します。	backup image
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンドについて処理されるファイルのリストを指定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントは指定されたファイル・リストをオープンし、それに含まれているファイルをコマンドに従って処理します。	archive backup group delete archive delete backup expire incremental query archive query backup restore retrieve selective
filename 432 ページの『Filename』	filename オプションを query systeminfo コマンドで使用して、システム情報を格納するファイル名を指定します。	query systeminfo

表 67. クライアント・コマンド・オプション (続き)

コマンド・オプション	説明	コマンド
filesonly 433 ページの『Filesonly』	ファイルのみをバックアップ、リストア、リトリブ、または照会します。	archive incremental query archive query backup restore restore backupset retrieve selective
fromdate 436 ページの『Fromdate』	fromdate オプションは fromtime オプションとともに使用して、リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を開始する日時を指定します。	delete backup query archive query backup restore restore group retrieve
fromnode 437 ページの『Fromnode』	あるノードで別のノードのためのコマンドを実行することを許可します。別のノードのユーザーは、その別のノードに対して set access コマンドを使用してファイルまたはイメージを照会、リストア、あるいはリトリブできるようにしなければなりません。	query archive query backup query filespace query group query image query mgmtclass restore restore group restore image retrieve
fromowner 438 ページの『Fromowner』	別の所有者のファイル・スペースを表示します。さらに、ファイルのリストアまたはリトリブ元の、別の所有者を指定します。	query archive query backup query group query image restore restore group restore image retrieve
fromtime 439 ページの『Fromtime』	指定された日付の開始時刻を指定する。fromdate オプションと一緒に使用する。このオプションは、fromdate オプションがない場合は無視されます。	query archive query backup restore restore group retrieve
groupname 439 ページの『Groupname』	グループの完全修飾名を指定します。	backup group

表 67. クライアント・コマンド・オプション (続き)

コマンド・オプション	説明	コマンド
ifnewer 443 ページの『Ifnewer』	バックアップ・バージョンが既存のバージョンより新しい場合、既存のファイルを最新のバックアップ・バージョンに置き換えます。	restore restore backupset restore group retrieve
imagnetofile 445 ページの『Imagnetofile』	imagnetofile オプションとともに restore image コマンドを使用して、ソース・イメージをファイルヘリストアすることを指定します。ターゲット・ボリューム上に不良セクターが存在する場合、またはイメージ・データを使用してなんらかの操作を行う場合に、イメージをファイルヘリストアする必要があることがあります。 このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。	restore image
inactive 445 ページの『Inactive』	pick オプションとともに使用したときは、活動/非活動ファイルのリストを表示します。	delete group query backup query group query image query nas restore restore group restore image restore nas
incrbydate 465 ページの『Incrbydate』	日付による増分バックアップを要求します。	incremental
incremental 466 ページの『Incremental』	元のイメージ・バックアップの後で行われた増分バックアップの情報を使用して、基本イメージに変更を適用します。 このオプションは、AIX、Linux x86_64、Linux on POWER、および Oracle Solaris のクライアントにのみ有効です。	restore image
latest 474 ページの『Latest』	ファイルの最新のバックアップ・バージョンを、それが活動または非活動のいずれであるかにかかわらず、リストアップします。	restore restore group

表 67. クライアント・コマンド・オプション (続き)

コマンド・オプション	説明	コマンド
mode 482 ページの『mode』	<p>mode オプションは、次のようにして、以下のコマンドで使用してください。</p> <p>backup image クライアント・ファイル・システムの選択イメージ・バックアップまたは増分イメージ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。</p> <p>backup nas NAS ファイル・システムのフルイメージ・バックアップまたは差分イメージ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。</p> <p>backup group 1 つ以上のファイル・スペースからのファイルのリストを含むフルグループ・バックアップまたは差分グループ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。</p>	<p>backup group backup nas backup image restore nas</p>
monitor 485 ページの『Monitor』	<p>Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属する 1 つ以上のファイル・システムのイメージ・バックアップまたはイメージ・リストアをモニターするかどうかを指定します。</p> <p>Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属する 1 つ以上のファイル・システムのリストアをモニターするかどうかを指定します。</p>	<p>backup nas restore nas</p>
nojournal 490 ページの『Nojournal』	このオプションは、 incremental コマンドで使用して、デフォルトのジャーナル・ベースのバックアップの代わりに、従来のフル増分バックアップを実行することを指定します。	incremental
noprompt 491 ページの『Noprompt』	delete group 、 delete archive 、 expire 、および set event の各コマンドによって表示される確認プロンプトを抑止します。	<p>delete archive delete backup delete group expire</p>
noprompt 491 ページの『Noprompt』	delete group 、 delete archive 、 expire 、 restore image 、および set event の各コマンドによって表示される確認プロンプトを抑止します。	<p>delete archive delete backup delete group expire restore image</p>
optfile 494 ページの『Optfile』	バックアップ/アーカイブ・クライアント・セッションの開始時に使用するクライアント・ユーザー・オプション・ファイルを指定します。	dsmc

表 67. クライアント・コマンド・オプション (続き)

コマンド・オプション	説明	コマンド
pick 499 ページの『Pick』	入力したファイル指定と一致する バックアップ・バージョン、イメージ、またはアーカイブ・コピーのリストを作成します。このリストから、処理するバージョンが選択できます。 inactive オプションを含めると、活動状態と非活動状態の両方のオブジェクトを表示することができます。	delete archive delete group expire query nas restore restore group restore image restore nas retrieve
pitdate 500 ページの『Pitdate』	pitdate オプションは、バックアップの最新バージョンを表示またはリストアしたい特定時点を 設定するために pittime オプションと一緒に使用します。	query backup query group query image query nas restore restore group restore image restore nas
pittime 501 ページの『Pittime』	pittime オプションは、バックアップの最新バージョンを表示またはリストアしたい特定時点を 設定するために pitdate オプションと一緒に使用します。	query backup query image query nas restore restore image restore nas
preservepath 507 ページの『Preservepath』	ファイルを新しい場所にリストアまたはリトリブするときに、ターゲット・ディレクトリー・パスの一部としてソース・パスをどの程度再作成するかを指定するために使用します。	restore restore backupset restore group retrieve
removeoperandlimit 515 ページの『Removeoperandlimit』	IBM Spectrum Protect が 20 個のオペランド制限を除去することを指定します。 incremental 、 selective 、 archive 、または backup image コマンドで removeoperandlimit オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。	incremental selective archive backup image
showmembers 544 ページの『Showmembers』	グループのすべてのメンバーを表示します。	query group restore group
todate 587 ページの『Todate』	todate オプションは、リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの 検索を終了する 日時を指定するために、 totime オプションと一緒に使用します。	query archive query backup restore restore group retrieve

表 67. クライアント・コマンド・オプション (続き)

コマンド・オプション	説明	コマンド
totime 588 ページの『Totime』	totime オプションは、リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を終了する日時を指定するために、todate オプションと一緒に使用します。	query archive query backup restore restore group retrieve
type 589 ページの『Type』	type オプションは、照会するノードのタイプを指定するために query node コマンドで使用します。	query node
v2archive 593 ページの『V2archive』	v2archive オプションは、ファイルだけをサーバーにアーカイブするために、 archive コマンドで使用します。クライアントは、ソース・ファイル指定のパス内に存在するディレクトリーを処理しません。	archive
verifyimage 594 ページの『Verifyimage』	restore image コマンドとともに verifyimage オプションを使用して、宛先ターゲット・ボリュームの不良セクター検出を有効にすることを指定します。ターゲット・ボリューム上で不良セクターが検出された場合、クライアントは、コンソールとエラー・ログに警告メッセージを発行します。 このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。	restore image
virtualfsname 595 ページの『Virtualfsname』	操作の実行対象グループの仮想ファイル・スペース名を指定します。	backup group

初期コマンド・ラインのみのオプション

クライアント・オプションのサブセットは、初期コマンド・ラインでのみ有効です。commethod および optfile オプションなど、これらのオプションの多くは、ランタイム環境を確立します。このカテゴリーのオプションは、対話式、マクロ、またはスケジューラー・モードでは無効です。これらのオプションによって、エラーが生成され、処理が停止します。

[339 ページの表 68](#) では、初期コマンド・ラインでのみ有効なオプションをリストします。

表 68. 初期コマンド・ラインでのみ有効なオプション

初期コマンド・ラインで有効なオプション

commmethod	preschedulecmd/prenschedulecmd (スケジュール定義に組み込むことができます)
重複排除	
diskbuffsize	queryschedperiod
editor	resourceutilization
enablededupcache	retryperiod
enablelanfree	schedlogmax
errorlogmax	schedlogname
errorlogname	schedlogretention
errorlogretention	schedmode
lanfreecommmethod	servername
lanfreeshmport	sessioninitiation
lanfreetcpport	setwindowtitle
maxcmdretries	tcpbuffsize
nfstimeout	tcpcadaddress
nodename	tcpclientaddress
optfile	tcpclientport
password	tcpwindowsize
postschedulecmd/postnschedulecmd (スケジュール定義に組み込むことができます)	txnbytelimit
	virtualnodename

IBM Spectrum Protect サーバーが設定できるクライアント・オプション

一部のクライアント・オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーが設定できます。

[340 ページの表 69](#) では、サーバーが設定できるオプションをリストします。

表 69. IBM Spectrum Protect サーバーが設定できるオプション

IBM Spectrum Protect サーバーが設定できるオプション

- [342 ページの『Afmskipuncachedfiles』](#)
- [344 ページの『Archsymlinkasfile』](#)
- [357 ページの『Changingretries』](#)
- [359 ページの『Collocatebyfilespec』](#)
- [363 ページの『Compressalways』](#)
- [363 ページの『Compression』](#)
- [377 ページの『Deduplication』](#)
- [384 ページの『Dirmc』](#)
- [386 ページの『Disablenqr』](#)
- [387 ページの『Diskcachelocation』](#)
- [388 ページの『Domain』](#)
- [393 ページの『Domain.image』](#)
- [394 ページの『Domain.nas』](#)
- [410 ページの『Encryptiontype』](#)
- [410 ページの『Encryptkey』](#)
- [416 ページの『Exclude オプション』](#)
- [446 ページの『Incl excl』](#)
- [447 ページの『include オプション』](#)
- [maxcandprocs](#)
- [maxmigrators](#)
- [480 ページの『Memoryefficientbackup』](#)
- [488 ページの『Nfstimeout』](#)
- [502 ページの『Postschedulecmd/Postnschedulecmd』](#)
- [503 ページの『Postsnapshotcmd』](#)
- [505 ページの『Preschedulecmd/Premschedulecmd』](#)
- [506 ページの『Preservelastaccessdate』](#)
- [510 ページの『Presnapshotcmd』](#)
- [511 ページの『Queryschedperiod』](#)
- [513 ページの『Quiet』](#)
- [525 ページの『Resourceutilization』](#)
- [527 ページの『Retryperiod』](#)
- [536 ページの『Schedmode』](#)
- [538 ページの『Scrolllines』](#)
- [539 ページの『Scrollprompt』](#)
- [554 ページの『Snapshotcachesize』](#)
- [556 ページの『Snapshotproviderfs』](#)
- [556 ページの『Snapshotproviderimage』](#)
- [568 ページの『Stagingdirectory』](#)
- [569 ページの『Subdir』](#)
- [575 ページの『Tapeprompt』](#)
- [588 ページの『Txnbytelimit』](#)
- [594 ページの『Verbose』](#)
- [602 ページの『Vmchost』](#)
- [604 ページの『Vmcuser』](#)
- [626 ページの『Vmprocessvmwithindependent』](#)
- [627 ページの『Vmprocessvmwithprdm』](#)

注:

1. IBM Knowledge Center (<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSERBH/welcome>) の IBM Spectrum Protect for Space Management 製品資料を参照してください。
2. IBM Knowledge Center (<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSERBW/welcome>) の IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection for Microsoft Exchange Server 製品資料を参照してください。

関連タスク

[クライアント・オプション・セットによるクライアント 操作の制御](#)

クライアント・オプションの解説

以下の各セクションでは、IBM Spectrum Protect 処理オプションのそれぞれについての詳細な説明を記載します。

それぞれのオプションに関する情報には、以下が含まれています。

- 説明
- 構文図
- パラメーターの詳細な説明
- クライアント・オプション・ファイルでのオプションの使用例 (該当する場合)
- コマンド・ラインでのオプションの使用例 (該当する場合)

コマンド・ラインの例が「適用しません」のオプションは、コマンド・ラインやスケジュールされたコマンドで使用できません。

注：

1. オプション値がスペースまたはワイルドカード文字を含むファイル指定でない限り、この値を単一引用符または二重引用符で囲まないでください。例えば、以下のオプションは無効です。

```
passwordaccess "generate"
```

2. dsm.sys ファイル内のすべてのオプションは、defaultserver オプションを除き、サーバー・スタンザ内に入れる必要があります。サーバー・スタンザは、SERVERName オプションで始まり、次の SERVERName オプションかファイルの終わりで終了する、dsm.sys 内のオプション・ステートメントのコレクションです。

Absolute

incremental コマンドで **absolute** オプションを使用すると、オブジェクトが最後の増分バックアップ以降に変更されていない場合でも、ファイル指定または **domain** に一致するすべてのファイルおよびディレクトリーが強制的にバックアップされます。

このオプションは、バックアップ・コピー・グループに対する管理クラス・コピー・グループの **mode** パラメーターをオーバーライドします。**frequency** パラメーターまたはその他のバックアップ・コピー・グループ・パラメーターには影響しません。このオプションは、**exclude** ステートメントをオーバーライドしません。したがって、バックアップから除外されたオブジェクトは、**absolute** オプションが指定されている場合でもバックアップ対象にはなりません。

重要: **absolute** オプションを使用する前に、バックアップ操作および IBM Spectrum Protect サーバー操作に対してこのオプションが与える可能性のある、以下の影響について検討してください。

- バックアップでは、より多くのサーバー・ストレージおよびデータベース・リソースが消費される。
- バックアップでは、より多くのネットワーク帯域幅が消費される。
- インベントリーの期限切れ、ストレージ・プールのバックアップ、ストレージ・プールのマイグレーション、レクラメーション処理、およびノードの複製などのサーバー操作を完了するには、より多くの時間が必要である。データ重複排除は、これらの影響を一部軽減するのに役立つ可能性がありますが、重複排除されていないストレージにストレージ・プールをマイグレーションまたはバックアップする際に、重複排除されたデータを元の形式に再構成するために必要となる処理は避けられません。

このオプションは、以下の操作を実行している時に **incremental** コマンドのコマンド・ライン・パラメーターとしてのみ有効です。

- ファイル・システムまたはディスク・ドライブのフル・プログレッシブ増分バックアップまたは部分プログレッシブ増分バックアップ。
- **createnewbase=yes** も指定されている場合のスナップショット差分バックアップ。

ジャーナル・ベース・バックアップを使用するファイル・システムのフルバックアップを強制的に実行するには、`nojournal` オプションと `absolute` オプションの両方を **incremental** コマンドに指定してください。

スケジュールされている増分バックアップで `absolute` オプションを使用するには、IBM Spectrum Protect サーバー管理者は、スケジュールの `options` パラメーターに `absolute` オプションを含む別個のバックアップ・スケジュールを作成する必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、**incremental** コマンドのコマンド・ライン・パラメーターとしてすべてのクライアントに有効です。このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のクライアント・オプション・セットには追加できません。

構文

➡ ABSolute ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc incr -absolute "/Users/sparky/source/*.c"
```

Afmskipuncachedfiles

`afmskipuncachedfiles` オプションは、General Parallel File System (GPFS) Active File Management ファイル・セット内のキャッシュされていないファイルおよびダーティー・ファイルをバックアップ操作、アーカイブ操作、およびマイグレーション操作で処理するかどうかを指定します。

GPFS Active File Management、およびキャッシュされていないファイルとダーティー・ファイルの状態については、[IBM Spectrum Scale 製品情報](#)で説明しています。

Active File Management ファイル・セットを使用する GPFS ファイル・システムでの HSM の実行については、[IBM Spectrum Scale Active File Management 用の IBM Spectrum Protect の構成](#)で説明しています。

Active File Management ファイル・セットが含まれるファイル・システムからファイルをバックアップ、アーカイブ、またはマイグレーションする場合、`afmskipuncachedfiles=yes` を設定します。

制約事項: Active File Management がローカル更新 (LU) モードで稼働している場合、キャッシュ・ファイル・セット内の **afmskipuncachedfiles** オプションが **No** に設定されている必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX システムおよび Linux システム上で稼働するバックアップ/アーカイブ・クライアントに対して有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、`dsm.sys` ファイルでサーバー・スタンザの前に配置してください。

構文



パラメーター

NO

Active File Management ファイルの状態は、バックアップ操作、アーカイブ操作、およびマイグレーション操作中に無視されます。キャッシュされていないファイルまたはダーティー・ファイルに対するマイグレーション操作は失敗し、エラー・メッセージ ANS9525E が発行されます。キャッシュされていないファイルに対するバックアップ操作およびアーカイブ操作には、Active File Management フェッチ操作が必要です。フェッチ操作により、Active File Management ホームとキャッシュとの間で顕著なネットワーク・トラフィックが発生する可能性があります。このパラメーターがデフォルトです。

YES

Active File Management ファイル・セット内のキャッシュされていないファイルおよびダーティー・ファイルは、バックアップ処理、アーカイブ処理、およびマイグレーション処理でスキップされます。

Archmc

archmc オプションは、**archive** コマンドで使用して、アーカイブ対象ファイルおよびディレクトリーをバインドするポリシー・ドメインの使用可能な管理クラスを指定します。

ファイルをアーカイブするときに、**archive** コマンドで archmc オプションを使用するか、Web クライアントを使用して、割り当て済みの管理クラスを指定変更することができます。Web クライアントを使用して管理クラスを指定変更するのは、archmc コマンドで **archive** オプションを使用することと同等です。

archmc オプションを使用しなかった場合は、サーバーはアーカイブされているディレクトリーを、デフォルトの管理クラスにバインドします。アーカイブ・コピー・グループがデフォルトの管理クラスにない場合は、サーバーはアーカイブされているディレクトリーを、保存期間が最短の管理クラスにバインドします。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ ARCHMc = — *managementclass* ➡

パラメーター

managementclass

ポリシー・ドメインの活動ポリシー・セット内で使用可能な管理クラスを指定します。この管理クラスは、デフォルトの管理クラス、およびアーカイブするファイルおよびディレクトリーの include ステートメントを指定変更します。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc archive -archmc=ret2yrs /Users/van/Documents/budget.jan
```

```
dsmc archive -archmc=ret2yrs /home/plan/proj1/budget.jan
```

Archsymlinkasfile

archsymlinkasfile オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがシンボリック・リンクをたどり、それが指しているファイルまたはディレクトリーをアーカイブするのか、シンボリック・リンクのみをアーカイブするのかを指定します。このオプションは、**archive** コマンドで使用してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX クライアントに有効です。またサーバーもこのオプションを定義できます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文



パラメーター

Yes

クライアントがシンボリック・リンクをたどり、関連付けられているファイルまたはディレクトリーをアーカイブすることを指定します。これはデフォルトです。

No

クライアントがシンボリック・リンクをアーカイブし、関連付けられているファイルまたはディレクトリーはアーカイブしないことを指定します。

例

オプション・ファイル:

```
archsymlinkasfile no
```

コマンド・ライン:

```
-archsyml=no
```

Asnodename

asnodename オプションを使用すると、エージェント・ノードが別のノード (ターゲット・ノード) の代わりにデータのバックアップまたはリストアを行うことができます。これにより、複数のノードからの並行操作が可能になり、同じターゲット・ノードおよびファイル・スペースに並行してデータを保管することができます。

クライアント・ノードに、IBM Spectrum Protect サーバー管理クライアントの **grant proxynode** コマンドで、ターゲット・ノードへのアクセス権を与える必要があります。この場合、asnodename オプションを使用するには、root ユーザーである必要があります。

IBM Spectrum Protect 管理者がノードにプロキシ権限を付与しており、ユーザーが asnodename オプションを使用してそのノードになると、ユーザーは root 権限を持っているかのようにすべてのファイルを照会およびリストアすることができます。

エージェント・ノードは、ターゲット・ノードの代わりにクライアント操作を実行する権限が付与されたクライアント・ノードです。

ターゲット・ノードは、自分の代わりにクライアント操作を実行する権限を 1 つ以上のエージェント・ノードに付与するクライアント・ノードです。

プロキシ操作は、サーバーで定義されているターゲット・ノードの設定 (**maxnummp** および **deduplication** など) とスケジュールを使用します。エージェント・ノードの IBM Spectrum Protect サーバー・ノードの設定およびスケジュールは無視されます。

例えば、次のコマンドを使用すると、ノード名 **MyCluster** の下で保管されている、ファイル・スペースの共有データをバックアップすることができます。

```
/cluster1/mydata
```

```
dsmc incremental /Users -asnodenodename=MyCluster
```

また、**asnodenname** オプションを使用すると、サーバー上の別のノード名に属するデータをリストアすることもできます。所有するデータのみをリストアできます。

asnodenname オプションは、以下に示しているように、**nodename** オプションとは異なります。

- **nodename** オプションを使用する場合は、指定するノード名のパスワードを入力する必要があります。
- **asnodenname** オプションを使用する場合、クライアント・ターゲット・ノード用に保管されたデータにアクセスするには、クライアント・エージェント・ノードのパスワードを入力する必要があります。

制約事項: **asnodenname** オプションを **-fromnode** を指定して使用することはできません。また、**asnodenname** を使用して NAS バックアップを実行することはできません。さらに、**asnodenname** はクラスター・システムに対して使用できますが、特定のクラスター・ソフトウェアはサポートされていません。

制限: IBM Spectrum Scale クラスター環境などで **asnodenname** オプションを使用すると、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI に、「バックアップが見つかりません。この UI を使用する前にバックアップを作成してください (No backups found. Create backups before using this UI)」というメッセージが表示されます。バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI が **asnodenname** オプションを直接使用できるようにするには、最初に、特定のサーバー・スタンザが **dsmcad** コマンドで使用されるように構成する必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux クライアントで有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の **dsm.sys** ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブで設定できます。

構文

➡ **ASNODENAME** *targetnode* ➡

パラメーター

targetnode

IBM Spectrum Protect サーバー上のどのノード名の下に、データをバックアップまたはリストアするのかを指定します。

例

オプション・ファイル:

asnodenname mycluster

コマンド・ライン:

-asnodenname=mycluster

このオプションは、対話モードでは無効ですが、スケジュール定義のオプション部分で定義できます。

プロキシ操作のセッションの設定およびスケジュール

エージェント・ノードが指定されたターゲット・ノードの代わりに `asnodename target_node_name` オプションを使用して操作を実行すると、プロキシ操作が実行されます。

プロキシ操作は、IBM Spectrum Protect サーバーで定義されているターゲット・ノードの設定 (**maxnummp**、**cloptset**、および **deduplication** など) とスケジュールを使用します。エージェント・ノードのサーバー・ノードの設定およびスケジュールは無視されます。

プロキシ操作には、以下の考慮事項が適用されます。

- エージェント・ノードが別のドメインに属している場合でも、すべての操作がターゲット・ノードのポリシー・ドメイン設定および構成を使用します。エージェント・ノードのポリシー・ドメイン設定および構成は無視されます。
- エージェント・ノードは、エージェント・ノードのパスワードを使用して IBM Spectrum Protect サーバーに認証されます。
- プロキシ操作を実行するには、エージェント・ノードおよびターゲット・ノードがサーバーでロックされてはなりません。
- プロキシ・ノードの関係は推移しません。ターゲット・ノード自体が他のノードのプロキシ・ノードとして定義されている場合、エージェントもその他のノードのプロキシ・ノードとして定義されていない限り、エージェント・ノードを使用して操作を実行することはできません。

例えば、ノード TAURUS、SCORPIO、および GEMINI の間に以下のプロキシ定義があるとします。

- TAURUS は SCORPIO のプロキシ・ノードです。
- TAURUS は GEMINI のプロキシ・ノードではありません。
- SCORPIO は GEMINI のプロキシ・ノードです。

これらのプロキシ定義により、以下の結果が生じます。

- TAURUS は、SCORPIO の代わりに操作を実行できます。
- SCORPIO は、GEMINI の代わりに操作を実行できます。
- TAURUS は、GEMINI の代わりに操作を実行することはできません。

Auditlogging

`auditlogging` オプションを使用すると、増分、選択、アーカイブ、リストア、またはリトリブ操作時に処理される各ファイルの項目が入った監査ログが生成されます。

監査ログを構成することにより、基本レベルの情報を取り込むか、またはより包括的な (フル) レベルの情報を取り込むかを選ぶことができます。

基本レベルの監査ログ機能では、スケジュール・ログ内の情報が取り込まれ、さらに、増分バックアップ、選択バックアップ、アーカイブ、リストア、またはリトリブ操作時におけるファイルのバックアップ、アーカイブ、更新、リストア、リトリブ、有効期限切れ、削除、スキップ、または障害発生が記録されます。さらに、基本レベルの監査ログでは、バックアップ/アーカイブ・コマンド・ラインまたはスケジューラー・クライアントによって実行されたコマンドの入力コマンドが取り込まれます。

完全レベルの監査ログでは、バックアップ/アーカイブ・クライアントによって処理された各ファイルのアクションが記録されます。基本レベルの監査ログによって記録されたすべてのイベントに加えて、フルレベルの監査ログでは、変更されていなかったためにプログレッシブ増分バックアップ操作時に除外された、または送信されなかったファイルの情報が記録されます。

以下に、監査ログが基本レベルの情報を取り込むように構成されている場合に発行されるメッセージの例を示します。

```
04/21/07 15:25:05 ANS1650I コマンド:
    sel /home/spike/test/*
04/21/07 15:25:05 ANS1651I バックアップ済み:
    /home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1652I アーカイブ済み:
    /home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1653I 更新済み:
```

```
/home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1654E 失敗しました:
/home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1655I リストア済み:
/home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1656I リトリブ済み:
/home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1657I 有効期限切れ:
/home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1658I 削除済み:
/home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1659I スキップ:
/home/spike/test/file.txt
```

監査ログがフルレベルの情報を取り込むように構成されている場合に、以下のメッセージ (基本レベルの監査ログで発行されるすべてのメッセージにさらに追加されるもの) が発行される場合があります。

```
04/21/07 15:25:05 ANS1660I 除外:
/home/spike/test/file.txt
04/21/07 15:25:05 ANS1661I 未変更:
/home/spike/test/file.txt
```

監査ログは、標準エラー・ログ (dsmerror.log) またはスケジュール・ログ (dsmsched.log) の代用または置き換えとなるものではありません。ファイルの処理ができなくなるエラーが発生すると、エラーが発生したことを示すメッセージが監査ログに書き込まれますが、そのメッセージはエラーの性質を示すわけではありません。問題の診断を行うには、やはり標準エラー・ログを使用する必要があります。

監査ログの項目にはタイム・スタンプとオブジェクト名のみが含まれます。ファイルとディレクトリーを区別するための情報や、オブジェクトのサイズに関する情報はありません。

Mac OS X のバックアップ・アーカイブ・クライアントでは、監査ログはユニコード (UTF-16) ファイルとして作成されます。

デフォルトには、監査ログの名前は dsmaudit.log となり、エラー・ログ dsmerror.log と同じディレクトリーに入れられます。監査ログの名前とロケーションは、auditlogname オプションを使用して構成可能です。監査ログのサイズを制御するパラメーター、または監査ログのプルーニングを行うパラメーターはありません。auditlogname オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーのクライアント・オプション・セットに含まれるオプションとして設定することはできません。

ただし **auditlogging** コマンドは、ファイル・レベル・オブジェクトと対話するバックアップ・コマンド (**backup groups** など) ではサポートされます。

auditlogging コマンドは、イメージ・レベル・オブジェクトと対話するバックアップ・コマンド (**backup image**、**restore image** など) ではサポートされません。ただし **auditlogging** コマンドは、ファイル・レベル・オブジェクトと対話するバックアップ・コマンド (**backup groups** など) ではサポートされます。

操作に対して監査のログを有効にした場合に、監査ログへの書き込みに失敗すると (例えば、監査ログのあるディスクのスペース不足)、監査のログは以降の操作に対して無効になり、操作の戻りコードは操作結果に関わらず 12 に設定されます。

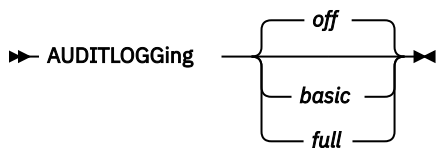
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

off

監査ログ機能を実行しないことを指定します。これはデフォルトです。

basic

監査ログで基本レベルの情報を取り込むことを指定します。

full

監査ログでより詳細なレベルの情報を取り込むことを指定します。

例

監査ログを有効にして増分バックアップを実行します。

コマンド・ライン:

```
dsmc i -auditlogging=basic
```

監査の最大レベルを使用してファイルのリストをバックアップします。これによって Perl スクリプトなど別のアプリケーションが結果を検証できるようになります。

Auditlogname

auditlogname オプションは、監査ログ情報を保管するファイルのパスとファイル名を指定します。このオプションは、監査ログが有効な場合に適用されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

```
➡ AUDITLOGName — filespec ⇌
```

パラメーター

filespec

バックアップ/アーカイブ・クライアントで監査ログ情報を保管するパスおよびファイル名を指定します。

ファイル名のみを指定した場合には、ファイルは現行ディレクトリーに保管されます。デフォルトは、ファイル名が dsmaudit.log のインストール・ディレクトリーです。dsmaudit.log ファイルをシンボリック・リンクにすることはできません。

例

監査ログを有効にして増分バックアップを実行します。

出力例

以下は、実行および出力ファイルの例です。

```
> dsmc inc /SMSVT/mfs1 -auditlogging=full
-auditlogname=/home/cliv3/audit.log
IBM Spectrum Protect
Command Line Backup-Archive Client Interface
  Client Version 8, Release 1, Level 0.0
  Client date/time: 11/16/2016 12:05:35
(c) Copyright by IBM Corporation and other(s) 1990, 2016.
  All Rights Reserved.

Node Name: NAXOS_CLUSTER
Session established with server
  ODINHSMSERV: AIX-RS/6000
  Server Version 8, Release 1, Level 0.0
  Server date/time: 11/16/2016 12:05:35
  Last access: 11/15/2016 12:01:57

Incremental backup of volume '/SMSVT/mfs1'
Directory--> 4,096 /SMSVT
/mfs1/ [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test0 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test1 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test2 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test3 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test4 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test5 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test6 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test7 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test8 [Sent]
Normal File--> 32,768 /SMSVT
/mfs1/test9 [Sent]
Successful incremental backup of '/SMSVT/mfs1'

Total number of objects inspected: 11
Total number of objects backed up: 11
Total number of objects updated: 0
Total number of objects rebound: 0
Total number of objects deleted: 0
Total number of objects expired: 0
Total number of objects failed: 0
Total number of bytes transferred: 320.31 KB
Data transfer time: 0.01 sec
Network data transfer rate: 17,141.84 KB/sec
Aggregate data transfer rate: 297.43 KB/sec
Objects compressed by: 0%
Elapsed processing time: 00:00:01
```

以下は、監査ログの内容です。

```
07/03/07 12:05:14 ANS1650I コマンド:
inc /SMSVT/mfs1
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:
/SMSVT/mfs1/
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:
/SMSVT/mfs1/test0
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:
/SMSVT/mfs1/test1
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:
/SMSVT/mfs1/test2
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:
/SMSVT/mfs1/test3
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:
/SMSVT/mfs1/test4
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:
/SMSVT/mfs1/test5
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:
/SMSVT/mfs1/test6
```

```
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:  
/SMSVT/mfs1/test7  
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:  
/SMSVT/mfs1/test8  
07/03/07 12:05:15 ANS1651I バックアップ済み:  
/SMSVT/mfs1/test9
```

関連情報

監査ログ機能について詳しくは、[346 ページの『Auditlogging』](#)を参照してください。

Autodeploy

autodeploy オプションを使用して、再始動が必要な場合にクライアントの自動デプロイメントを有効または無効にします。

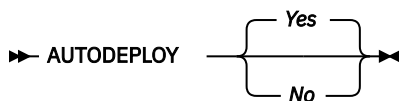
サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、Mac、および Solaris クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに含めることによって設定できます。また、Java GUI を使用して、「編集」>「クライアント・プリファレンス」をクリックし、「一般」タブで適切なオプションを選択することによって設定することもできます。

構文



パラメーター

Yes

クライアントがサーバーから自動的にデプロイされることを指定します。Yes がデフォルトです。

No

クライアントがサーバーから自動的にデプロイされないことを指定します。

例

オプション・ファイル:

```
autodeploy no
```

コマンド・ライン:

適用しません。

重要: スケジューラーがクライアント・デプロイメント・スケジュールをすぐに処理できるようにするには、schedmode prompted を autodeploy オプションとともに使用します。

関連概念

[2 ページの『自動バックアップ/アーカイブ・クライアント・デプロイメント』](#)

IBM Spectrum Protect サーバー管理者は、バックアップ/アーカイブ・クライアントを自動的にデプロイして、バックアップ/アーカイブ・クライアントが既にインストールされたワークステーションを更新することができます。

Autofsrename

autofsrename オプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のユニコード対応ではない既存のファイル・スペースの名前を変更します。それにより、現在の操作で、元の名前のユニコード対応ファイル・スペースを作成することができます。

クライアント・オプション・ファイルに autofsrename yes を指定していて、autofsrename のサーバーの値が client に設定されている場合には、IBM Spectrum Protect サーバーは、現在の操作で指定されているファイル・スペース名に _OLD を付加することによって固有の名前を生成します。例えば、サーバーはファイル・スペース Jaguar を Jaguar_OLD に名前変更します。新規のファイル・スペース名が長すぎる場合は、ファイル・スペース名の最後のいくつかの文字が接尾部で置き換えられます。例えば、mylongfilesystemname というファイル・スペース名は、次のように名前が変更されます。

```
mylongfilesystem_OLD
```

新規のファイル・スペース名が既にサーバー上に存在している場合、サーバーは新規のファイル・スペースを Jaguar_OLDx (ここで x は固有の番号) に名前変更します。

サーバーは、現在の操作で指定されたデータのみを含む新規のユニコード対応ファイル・スペースを作成します。例えば、Jaguar が始動ディスクの名前で、/Users/user5/Documents ディレクトリー内のすべての .log ファイルをアーカイブするとします。アーカイブが行われる前に、サーバーはファイル・スペースを Jaguar_OLD に名前変更します。アーカイブでは、現在の操作で指定されたデータをユニコード対応ファイル・スペース、Jaguar に置きます。その新しいユニコード対応ファイル・スペースには、現在、操作で指定された /Users/user5/logs ディレクトリーおよび *.log ファイルしか入っていません。サーバーは、後続のフル増分バックアップ、部分増分バックアップ、選択バックアップ、およびアーカイブ・データのすべてを新しいユニコード対応ファイル・スペースに保管します。

例えば、Jaguar が始動ディスクの名前で、/Users/user5/Documents ディレクトリー内のすべての .log ファイルをアーカイブするとします。アーカイブが行われる前に、サーバーはファイル・スペースを Jaguar_OLD に名前変更します。アーカイブでは、現在の操作で指定されたデータをユニコード対応ファイル・スペース、Jaguar に置きます。その新しいユニコード対応ファイル・スペースには、現在、操作で指定された /Users/user5/logs ディレクトリーおよび *.log ファイルしか入っていません。後続のすべてのフル増分バックアップ、部分増分バックアップ、選択バックアップ、およびアーカイブ・データが新しいユニコード対応ファイル・スペースに保管されます。

名前変更されたファイル・スペースは、安定化されたファイル・スペースとしてサーバー上に残ります。これらのファイル・スペースには元のすべてのデータが含まれ、サーバー上に残っている限りリストアできます。

注: ユニコード変換中に既存のファイル・スペースが名前変更された場合、ファイル・スペースに対して定義されたすべてのアクセス規則は、元のファイル・スペースに対して引き続き適用されます。新規のアクセス規則を定義して、新規のユニコード・ファイル・スペースに適用する必要があります。

インストール後、フル増分バックアップを実行し、ユニコード対応でないすべての既存のファイル・スペースを名前変更し、それらのファイル・スペース内のファイルおよびディレクトリーを新しいユニコード対応ファイル・スペースの下にバックアップしてください。この操作には、長い処理時間とサーバー上の大きなストレージが必要です。

ユニコードに対応していないファイル・スペースは、ファイルのバックアップ元のロケールの文字セットで表示することができます。別のロケールで実行しているワークステーションでは、これらのファイル・スペースからは表示またはリストアできない場合があります。あるロケールでバックアップされているユニコード対応ファイル・スペースを他のすべてのロケールで表示できるのは、ワークステーションに適切なフォントがインストールされている場合です。

サーバーは、autofsrename オプションを定義して、クライアントの autofsrename 設定を指定変更できます。

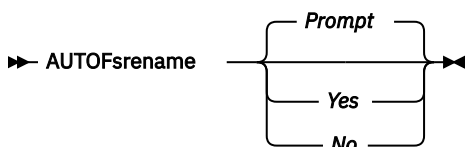
サポートされるクライアント

このオプションは Mac OS X の場合にのみ有効です。サーバーは、autofsrename オプションを定義して、クライアントの autofsrename 設定を指定変更できます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブの「バックアップ/アーカイブ中に非ユニコード・ファイル・スペースの名前を変更する」ドロップダウン・リスト・ボックスで設定できます。

構文



パラメーター

Yes

現在のバックアップまたはアーカイブ操作で、ユニコード対応でないすべてのファイル・スペースを IBM Spectrum Protect サーバーが自動的に名前変更することを指定します。

No

現在のバックアップまたはアーカイブ操作で、ユニコード対応でないファイル・スペースをサーバーが名前変更しないことを指定します。

Prompt

現在の操作で、ユニコードに対応していないファイル・スペースを名前変更するかどうかを尋ねるプロンプトを表示することを指定します。これはデフォルトです。

考慮事項:

- このオプションは、サーバーが autofsrename オプションを client に設定した時のみ適用されます。
- クライアント・スケジューラーが実行中である場合、デフォルトの動作ではプロンプトは出ません。次の対話式セッションでプロンプトが出され、ファイル・スペースが名前変更されます。
- クライアントは、ファイル・スペースごとに一度だけプロンプトを出します。プロンプトで no を指定した場合は、クライアントは今後ファイル・スペースを名前変更できなくなります。しかし、IBM Spectrum Protect 管理者は、サーバー上でファイル・スペースの名前変更を行うことができます。
- ファイルをユニコード対応でないファイル・スペースにバックアップしている場合には、ユニコード対応クライアントは、現在のロケールと異なるコード・ページからの文字を含む名前を持つファイルおよびディレクトリーをスキップします。
- 現在のロケールではないコード・ページからの文字を含む名前のファイルおよびディレクトリーが、ユニコード対応でないクライアントで以前にバックアップされていた場合、それらのファイルおよびディレクトリーは期限切れになる可能性があります。ファイル・スペースをユニコード対応ファイル・スペースにマイグレーションしない場合には、ユニコード対応クライアントがこれらのファイルを期限切れにします。これらのファイルは、ユニコード対応ファイル・スペースにバックアップおよびアーカイブすることができます。

例

オプション・ファイル:

```
autofsrename yes
```

Automount

automount オプションは、自動マウント・ファイル・システムをマウントすることによって、それを追加してドメイン内に入れます。このオプションは、domain オプションと一緒に使用します。

このオプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが次の特定時点でマウントしようとするすべての自動マウント・ファイル・システムを指定するために使用します。

- クライアントの開始時
- バックアップが開始された時点
- クライアントがバックアップ中に自動マウント・ファイル・システムに達した時点

クライアントがファイル・システムのバックアップを実行する前に、そのファイル・システムをマウントします。バックアップが実行される前にファイル・システムが常にマウントされている場合は、自動マウント・ファイル・システムを automount オプションで明示的に指定する必要はありません。ただし、ファイル・システムが上記のすべての特定時点でマウントされていることを確認するには、このファイル・システムを automount オプションに追加する必要があります。自動マウント・ファイル・システムは、バックアップの間にオフラインになっていれば、再マウントされます。

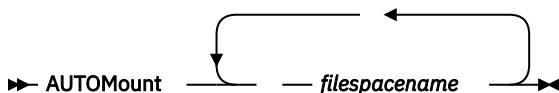
サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX プラットフォームで有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文



パラメーター

filespacename

ドメインにマウントされ、追加される 1 つ以上の完全修飾自動マウント・ファイル・システムを指定します。

例

オプション・ファイル:

```
automount /home/Fred /home/Sam
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連情報

自動マウント・ファイル・システムおよび domain オプションの処理についての詳細は、[388 ページの『Domain』](#)を参照してください。

Backmc

backmc オプションは、保存の目的で **backup fastback** コマンドに適用される管理クラスを指定します。

backmc オプションは、**backup fastback** コマンドに使用します。

オブジェクトを複数回バックアップし、それぞれのバックアップに対して異なる管理クラスを指定した場合、そのオブジェクトのすべてのバックアップ・バージョンは、指定された最後の管理クラスに再バインドされます。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

オプション・ファイル

ありません。このオプションは、コマンド・ラインまたはスケジューラーでのみ指定できます。

構文

➡ BACKMc= — *management_class_name* ➡

パラメーター

management_class_name

管理クラス名を指定します。

例

コマンド・ライン:

dsmc backup fastback -fbpolicyname=policy1 -fbserver=server1 -backmc=ret2yrs

Backupsetname

backupsetname オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットの名前を指定します。

backupsetname オプションは、以下のコマンドで 사용할 수 있습니다。

- **query backup**
- **query filespace**
- **query image**
- **restore image**

注: 以下のコマンドは、backupsetname を定位置パラメーターとして受け入れます。backupsetname 定位置パラメーターの動作は、backupsetname オプションとは異なります。以下の各コマンドへの backupsetname 定位置パラメーターの影響については、コマンドの説明を参照してください。

query backupset

restore

restore backupset

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

ありません。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。

構文

➡ BACKUPSETName — *backupsetname* ➡

パラメーター

backupsetname

IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットの名前を指定します。ワイルドカードを使用することはできません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc query backup /Volumes/bkSets/file.1  
-backupsetname=YEAR_END_ACCOUNTING.12345678
```

```
dsmc query backup /usr/projects -subdir=yes  
-backupsetname=YEAR_END_ACCOUNTING.12345678
```

```
dsmc restore image /home/proj  
-backupsetname=ACCOUNTING_2007.12345678
```

```
dsmc query image -backupsetname=WEEKLY_BSET.21435678
```

関連情報

240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』

Basesnapshotname

basesnapshotname オプションは、NetApp ファイラー・ボリュームのスナップショット差分 (snapdiff) バックアップを実行するときに基本スナップショットとして使用するスナップショットを指定します。このオプションを指定する場合、snapdiff オプションも使用する必要があります。使用しないとエラーが発生します。basesnapshotname が指定されない場合、useexistingbase オプションは、ファイラー・ボリューム上の最新のスナップショットを基本スナップショットとして選択します。

指定したスナップショットが見つからない場合、エラーが報告され、バックアップ操作が失敗します。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルまたはコマンド・ラインで指定できます。

構文

➡ BASESNAPSHOTName — — *snapshot_name* ➡

パラメーター

snapshot_name

基本スナップショットとして使用する既存のスナップショットの名前を指定します。指定した名前は、スナップショット名 (vol1_snap など)、あるいは、nightly.x などの、スケジュール済みの

NetApp バックアップの名前にすることができます。(ここで x はシーケンス番号を示し、nightly.0 は最も古いスナップショットです)。

ワイルドカード文字を含むパターンを使用して、スナップショットを選択することもできます。ワイルドカード文字には、以下のいずれかを指定できます。

アスタリスク (*) は任意の文字と一致します。

?

疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。

ワイルドカードは、スナップショットが特定のパターン (例えば、スナップショット名の一部として日付または日時を含める) で命名されている場合に便利です。例えば、2012 年 11 月 12 日 11:10:00 AM に作成されたスナップショットは、UserDataVol_121103111000_snapshot として保存されます。パターンに一致する最新のスナップショットが、既存のベースとして選択されます。例えば、保存されているスナップショットが 2 つ (UserDataVol_121103111000_snapshot と UserDataVol_121103231000_snapshot) 存在する場合、UserDataVol_121103231100_snapshot の方が、もう一方のスナップショットよりも 12 時間新しいために選択されます。

```
-basesnapshotname="UserDataVol_*_snapshot"
```

疑問符 (?) は、一貫性のある名前パターンに従う、スケジュールされたバックアップに適しています。この構文は、既存のベースとして使用するスナップショットに最新の「nightly」バックアップを選択します。

```
-basenameshotname="nightly.?"
```

例

オプション・ファイル:

```
basesnapshotname nightly.?
```

```
basesnapshotname volum_base_snap
```

コマンド・ライン:

```
dsmd incr ¥¥DRFile¥¥UserDataVol_Mirror_Share -snapdiff  
-useexistingbase -basesnapshotname="nightly.?"
```

関連情報

[Useexistingbase](#)

Cadlistenonport

cadlistenonport オプションは、クライアント・アクセプターの listen ポートを開くかどうかを指定します。

listen ポートが開いている場合、すべてのインバウンド接続を受け入れることができます。ただし、クライアント・アクセプター・メッセージがスケジューラーのみを管理し、スケジューラーがポーリング・モードで実行されている場合、このポートは使用されません。このオプションを使用すると、アクセプターが未使用のポートを開かないようにすることができます。

このオプションのデフォルト設定は yes です。managedservices schedule と schedmode polling が使用されている場合、cadlistenonport no のみを使用します。

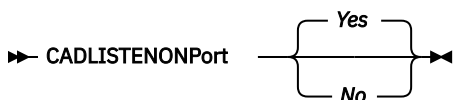
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

Yes

クライアント・アクセプターが listen ポートを開くことを指定します。このパラメーターがデフォルトです。

No

クライアント・アクセプターが listen ポートを開かないことを指定します。スケジューラーをポーリング・モードで管理するためにのみクライアント・アクセプターを使用する場合、この設定を使用します。

この設定は、クライアント・アクセプターに依存するその他のクライアント機能 (Web クライアントのバックアップおよびリストア操作、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware vSphere GUI 操作、および IBM Spectrum Protect Snapshot バックアップおよびリストア操作など) を効率的に使用不可にします。

例

オプション・ファイル:

```
cadlistenonport no
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連資料

[476 ページの『Managedservices』](#)

managedservices オプションは、IBM Spectrum Protect クライアント・アクセプター・サービスが、スケジューラー、Web クライアント、またはその両方のいずれを管理するかを指定します。

[536 ページの『Schedmode』](#)

schedmode オプションは、ポーリング・モード (クライアント・ノードが定期的にサーバーにスケジュールされた作業を問い合わせる) またはプロンプト・モード (スケジュールされた操作を開始する時間になると、サーバーがクライアント・ノードに接続する) のいずれを使用するかを指定します。

Changingretries

changingretries オプションは、使用中のファイルのバックアップまたはアーカイブをクライアントにさらに何回試行させたいかを指定します。このオプションは、**archive**、**incremental**、および **selective** コマンドと一緒に使用します。

このオプションが適用されるのは、コピー逐次化 (管理クラスのコピー・グループ内の属性) が共有静的または共有動的であるときだけです。

共有静的 逐次化では、操作中にファイルがオープンされると、指定した回数だけ操作が繰り返されます。このファイルが試行のたびにオープンされていると、操作は完了しません。

共有動的 逐次化では、操作中にファイルがオープンされると、指定した回数だけ操作が繰り返されます。最後の試行時には、ファイルがオープンされていなくても、バックアップまたはアーカイブが実行されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「バックアップ」タブの、「ファイルが使用中の場合の再試行回数」フィールドで設定できます。

構文

► CHangingretries *numberretries* ◄

パラメーター

numberretries

ファイルが使用中である時、バックアップまたはアーカイブ操作を試行する回数を指定します。値の範囲は 0 から 4 で、デフォルトは 4 です。

例

オプション・ファイル:
changingretries 3

コマンド・ライン:
-cha=3

Class

class オプションは、**delete filespace**、**query backup**、および **query filespace** コマンドを使用する時に、NAS オブジェクトまたはクライアント・オブジェクトのリストを表示するかどうかを指定します。

例えば、NAS ノードに属するファイル・スペースのリストを表示するには、次のコマンドを入力します。

```
query filespace -class=nas
```

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

ありません。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。

構文

► CLASS = { client } ◄
 { nas }

パラメーター

client

クライアント・ノードのファイル・スペースのリストを表示することを指定します。これはデフォルトです。

nas

NAS ノードのファイル・スペースのリストを表示することを指定します。

例

なし。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。

コマンド・ライン:

```
q backup -nasnodename=nodename -class=nas
```

Collocatebyfilespec

バックアップ/アーカイブ・クライアントが 1 つのファイル指定から生成されたオブジェクトを送信する場合に、1 つのサーバー・セッションのみを使用するかどうかを指定するには、**collocatebyfilespec** オプションを使用します。

collocatebyfilespec オプションに **yes** を設定すると、クライアントが 1 つのファイル指定につき 1 つのサーバー・セッションに限定されるので、各種のファイル指定からファイルが分散しないようになります。したがって、データをテープに保管する場合は、各ファイル指定のファイルが 1 つのテープにまとめて保管されます (容量が大きいため別のテープが必要になる場合を除く)。

考慮事項:

- **collocatebyfilespec** オプションは、ストレージ・プールが直接テープに送られる場合に使用します。このオプションを使用して、ディスク・ストレージ・プールにアクセスすると、何らかのロード・balancing に影響を与える可能性があり、したがって、パフォーマンスにも影響が出る可能性があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文



パラメーター

Yes

クライアントが 1 つのファイル指定から生成されたオブジェクトを送信する場合に、1 つのサーバー・セッションのみを使用するように指定します。したがって、データをテープに保管する場合は、容量が大きくてさらにテープが必要な場合を除き、各ファイル指定のファイルはまとめて 1 つのテープに保管されます。その結果、リストアのパフォーマンスが向上します。

No

クライアントが (実行の動的性および 3 以上の **resourceutilization** オプションの設定に応じて) 複数のサーバー・セッションを使用して 1 つのファイル指定からファイルを送信できることを指定します。これがデフォルトです。

その結果、バックアップのパフォーマンスが向上する可能性があります。ファイルをテープにバックアップする場合、ファイルは複数のテープに保管されます。一般的には、その場合でもファイル指定で指定されたファイルは連続しています。

例

オプション・ファイル:

```
collocatebyfilespec yes
```

コマンド・ライン:

```
-collocatebyfilespec=yes
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Commmethod

commmethod オプションは、クライアントとサーバーとを接続して通信を行うために使用する通信方式を指定します。

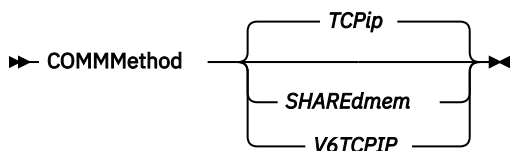
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブで設定できます。

構文



パラメーター

TCPip

伝送制御プロトコル/インターネット・プロトコル (TCP/IP) 通信方式。これはデフォルトです。

V6Tcpip

システム構成およびドメイン名サービスの検索結果に応じて、TCP/IP V4 または V6 のどちらを使用するかを示します。この場合、有効な DNS 環境が使用可能でなければなりません。

SHAREdmem

共有メモリ通信方式は、クライアントとサーバーが同じシステム上で実行している時に使用します。この方式では、TCP/IP プロトコルより高いパフォーマンスが提供されます。

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。

AIX でこの通信方式を指定する場合は、サーバーが root として稼働している限り、クライアントは root または root 以外としてログインできます。サーバーが root として実行していない場合は、クライアントを実行しているユーザー ID は、サーバーを実行しているユーザー ID に一致する必要があります。

重要: commmethod sharedmem を Linux で使用しているときに、サーバーまたはストレージ・エージェント・コンソールで、「ANR8294W 共有メモリ・セッションを初期化できません」というエラー・メッセージを受け取ることがあります。デフォルトで Linux は、メッセージ・キューを作成するのに十分なシステム・リソースでセットアップされません。カーネル・パラメーター MSGMNI を 128 に増や

する必要があります (デフォルトは 16)。以下のコマンドを実行すると、このパラメーターを変更できます。

```
echo 128 > /proc/sys/kernel/msgmni
```

このパラメーターを有効にして、システムのリブート後持続させるために、次の行をファイル `/etc/sysctl.conf` に追加してからシステムをリブートします。

```
kernel.msgmni=128
```

現行 ipc 設定を表示するには、次のコマンドを実行します。

```
ipcs -l
```

max queues system wide 値を見ます。デフォルトは 16 です。

例

オプション・ファイル:

TCP/IP V4 のみを使用します。

```
commethod tcpip
```

システムの構成方法とドメイン名サービスの検索結果に応じて、TCP/IP V4 または V6 のどちらかを使用します。

```
commethod V6Tcpip
```

注: `dsmc schedule` コマンドは、`SCHEDMODE prompt` および `commethod V6Tcpip` が両方とも指定されている場合は使用できません。

コマンド・ライン:

`-commm=tcpip`

`-commm=V6Tcpip`

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Commrestartduration

`commrestartduration` オプションは、通信エラーが発生した後、IBM Spectrum Protect サーバーへの再接続をクライアントに試行させる最大時間を分単位で指定します。

注: イベントの始動ウィンドウを経過した後であっても、`commrestartduration` 値が経過する前にクライアントがサーバーに再接続されれば、スケジュールされたイベントは続行されます。

使用中または不安定なネットワーク環境では、`commrestartduration` オプションおよび `commrestartinterval` を使用して、接続障害を減らすことができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブの「共通オプション」セクションで設定できます。

構文

►► COMMRESTARTDuration *minutes* ◄◄

パラメーター

minutes

通信エラーが発生した後、サーバーとの再接続をクライアントに試行させる最大時間を分単位で指定します。値の範囲は 0 から 9999 で、デフォルトは 60 です。

例

オプション・ファイル:

commrestartduration 90

コマンド・ライン:

適用しません。

Commrestartinterval

commrestartinterval オプションは、通信エラーが発生した後、クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーへの再接続を試みてから次に試みるまでの待ち時間を秒単位で指定します。

注: このオプションは、commrestartduration がゼロより大きい値の時にだけ使用します。

使用中または不安定なネットワーク環境では、commrestartduration オプションおよび commrestartinterval を使用して、接続障害を減らすことができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブの「共通オプション」セクションで設定できます。

構文

►► COMMRESTARTInterval *seconds* ◄◄

パラメーター

seconds

通信エラーが発生した後、クライアントがサーバーとの再接続を試みてから次に試みるまでの待ち時間 (秒単位)。値の範囲は 0 から 65535 で、デフォルトは 15 です。

例

オプション・ファイル:

commrestartinterval 30

コマンド・ライン:

適用しません。

Compressalways

compressalways オプションは、圧縮中にオブジェクトが大きくなった場合も圧縮を続けるかどうかを指定します。

このオプションは、compression オプション、および **archive**、**incremental**、および **selective** コマンドで使用します。

compressalways オプションは、クライアント・サイドの重複排除が有効になっている場合は無視されます。

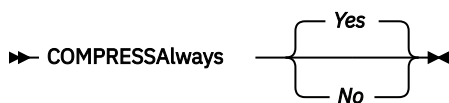
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「バックアップ」タブの「オブジェクトが増大する場合でも圧縮を続行」チェック・ボックスで設定できます。

構文



パラメーター

Yes

圧縮の結果ファイルが大きくなっても、ファイル圧縮を続けます。これはデフォルトです。

No

バックアップ/アーカイブ・クライアント・オブジェクトは、圧縮中に大きくなった場合に圧縮しないで再送されます。API の動作はアプリケーションによって異なります。アプリケーションのバックアップは失敗する場合があります。

例

オプション・ファイル:

```
compressalways yes
```

コマンド・ライン:

```
-compressa=no
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Compression

compression オプションは、ファイルをサーバーに送る前に、それらのファイルを圧縮します。

ファイルを圧縮すると、ファイルのバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーのためのデータ・ストレージが削減されます。しかし、圧縮を行うと、IBM Spectrum Protect スループットに影響します。低速ネットワーク接続上の高速プロセッサで圧縮を行うと有利ですが、高速ネットワーク接続上の低速プロセッサではそうとは言えません。

compression オプションは、**archive**、**incremental**、および **selective** コマンドで使用します。

backup image コマンドは、`dsm.sys` ファイル内で指定された **compression** オプション値を使用します。このオプションは、初期コマンド・ラインおよび対話モードでのみ有効です。また、サーバーはこのオプションを定義することで、クライアント値を指定変更できます。

クライアント圧縮がオフの場合には、バックアップ/アーカイブ・クライアントはスパース・ファイルを通常ファイルとしてバックアップします。スパース・ファイルのバックアップ時にファイル圧縮を有効にし、ネットワーク・トランザクション時間を最小限にして、サーバー・ストレージ・スペースを最大にするには、**compression yes** に設定します。

compressalways yes に設定すると、ファイル・サイズが増えても圧縮は続行されます。ファイル・サイズが増大した場合に圧縮を停止し、圧縮を解除してファイルを再送するには、**compressalways no** に設定します。

compression yes に設定すると、次のようにして圧縮処理を制御することができます。

- クライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) で **exclude.compression** オプションを使用し、特定のファイルまたはファイルのグループを圧縮処理から除外します。
- クライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) で **include.compression** オプションを使用し、幅広く指定した除外ファイルのグループ内のファイルを圧縮処理に組み込みます。

このオプションを使って圧縮が制御されるのは、各ファイルをサーバーに送信前にそのファイルをクライアント・ノードで圧縮可能なことを管理者が指定している場合のみです。

クライアントが使用する圧縮のタイプは、バックアップまたはアーカイブの処理中に使用される圧縮とクライアント・サイドのデータ重複排除の有無の組み合わせによって決まります。以下の圧縮タイプが使用されます。

LZ4

以下のいずれかの状況でクライアントが使用する高速で効率的な圧縮方式です。

- クライアント・サイドの重複排除オブジェクトが、IBM Spectrum Protect サーバーのコンテナ・ストレージ・プールに送信される場合。サーバーのバージョンは 7.1.5 以降でなければなりません。
- オブジェクトがクライアント・サイドのデータ重複排除を実行していない場合。(クライアント・サイドで重複排除されたデータのみを圧縮できる Data Protection for VMware および Data Protection for Microsoft Hyper-V には適用されません。)
- オブジェクトが従来のサーバー・サイドのデータ重複排除のみを実行している場合。(クライアント・サイドで重複排除されたデータのみを圧縮できる Data Protection for VMware および Data Protection for Microsoft Hyper-V には適用されません。)

LZW

クライアントが使用する従来型の圧縮は、クライアントにより重複除外されたオブジェクトがサーバーの従来の (非コンテナ) ストレージ・プールに送信される場合に使用されます。

None

オブジェクトはクライアントによって圧縮されません。**compression** オプションは、`no` に設定されているか、オプションはバックアップまたはアーカイブの処理中に指定されていないため、このオブジェクトは圧縮されません。オブジェクトはクライアントによって圧縮されませんが、サーバーによって圧縮される可能性があります。

圧縮タイプを設定する必要はありません。圧縮タイプは、バックアップまたはアーカイブの処理時にバックアップ/アーカイブ・クライアントによって判別されます。

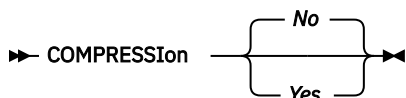
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「バックアップ」タブの「オブジェクトの圧縮」チェック・ボックスで設定できます。

構文



パラメーター

No

ファイルはサーバーへ送信される前に圧縮されません。これはデフォルトです。

Yes

ファイルはサーバーへ送信される前に圧縮されます。

例

オプション・ファイル:

compression yes

コマンド・ライン:

-compressi=no

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連資料

[377 ページの『Deduplication』](#)

deduplication オプションを使用して、バックアップおよびアーカイブ処理中 IBM Spectrum Protect サーバーにデータを転送するときに、冗長クライアント・サイド・データ除去を有効にするかどうかを指定します。

[416 ページの『Exclude オプション』](#)

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

[447 ページの『include オプション』](#)

include オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

Console

console オプションを **query systeminfo** コマンドで使用して、情報をコンソールに出力します。

- DSMOPTFILE - dsm.opt ファイルの内容。
- DSMSYSFILE - dsm.sys ファイルの内容。
- ENV - 環境変数。
- ERRORLOG - IBM Spectrum Protect エラー・ログ・ファイル。
- FILE - 指定されるファイル名の属性。
- INCLEXCL - バックアップおよびアーカイブ操作の実行中に処理される順序で include-exclude リストをコンパイルします。
- OPTIONS - コンパイルされたオプション。
- OSINFO - クライアント・オペレーティング・システムの名前とバージョン (UNIX および Linux の場合 ULIMIT 情報を含む)。
- POLICY - ポリシー・セット・ダンプ。
- SCHEDLOG - IBM Spectrum Protect スケジュール・ログ (通常は、dsmsched.log) の内容。
- CLUSTER - AIX クラスター情報。

注: **query systeminfo** コマンドは、主に IBM サポートが問題を診断する際に支援するための補助機能用ですが、この情報で扱われている概念に通じているユーザーにも役立つ場合があります。console オプションを使用する場合は、画面の高さまたは幅に合わせるための出力のフォーマット設定は特に行われま

せん。したがって、長さで行折り返しが原因でコンソール出力が読みにくくなることがあります。この場合は、`filename` オプションを **query systeminfo** コマンドで使用して、出力をファイルに書き込み、その後でそのファイルを IBM サポートに送信することができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ CONsole ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
query systeminfo dsmdptfile errorlog -console
```

関連情報

[432 ページの『Filename』](#)

Createnewbase

`createnewbase` オプションは基本スナップショットを作成し、それをソースとして使用してフル増分バックアップを実行します。

スナップショット差分の増分バックアップ・コマンドを実行したときに一部のファイルがバックアップされない可能性があります。ファイルがスキップされる場合は、`createnewbase` オプションを指定してスナップショット差分の増分バックアップを実行してこれらのファイルをバックアップすることができます。スナップショット差分コマンドを実行したときにファイルがバックアップされない可能性があります。その理由を示すリストについては、[546 ページの『Snapdiff』](#)を参照してください。

バックアップ処理中にファイルがスキップされる理由の 1 つは、そのファイル名が NetApp Data ONTAP でサポートされないことが考えられます。NetApp Data ONTAP バージョン 8.0 および 7.3.3 より前のバージョンでは、7 ビット ASCII 文字セット内に入っているファイル名のみがサポートされます。NetApp Data ONTAP バージョン 7.3.3 および 8.0.0 よりあとのバージョンでは、Unicode のファイル名がサポートされます。NetApp Data ONTAP を、Unicode のファイル名をサポートしないバージョンからサポートするバージョンへアップグレードした場合は、`createnewbase=migrate` オプションを指定してフル増分バックアップを実行します。

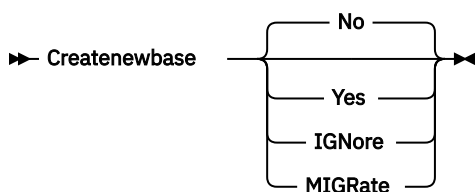
サポートされるクライアント

このオプションは、以下のクライアントに有効です。

- Linux x86_64 クライアント

コマンド・ラインで、`createnewbase` オプションを入力します。このオプションは、`snapdiff` オプションと一緒に指定します。

構文



パラメーター

No

スナップショット差分の増分が実行されることを指定します。Unicode のファイル名をサポートしないバージョンからサポートするバージョンに NetApp Data ONTAP ファイル・サーバーがマイグレーションされたことをバックアップ/アーカイブ・クライアントが検出すると、警告メッセージがエラー・ログおよび IBM Spectrum Protect サーバー・アクティビティ・ログに記録されます。この警告メッセージはフル増分バックアップの実行が必要なことを示し、操作が正常に完了した場合でも戻りコード 8 をログに記録します。

このパラメーターがデフォルト値です。

Yes

新規の基本スナップショットを作成し、それを使用してスキャン・ベースの増分バックアップを実行することにより、フル増分が実行されることを指定します。スナップショット差分 API によって検出されていない可能性のあるすべてのファイル変更をバックアップするには、このオプションを使用します。

操作が正常に終了すると、コマンドは戻りコード 0 で終了します。

日次スナップショット差分バックアップを実行するスケジュールには、`createnewbase=yes` を設定しないでください。代わりに、`createnewbase=yes` オプションを指定した別個の月次スケジュールを作成してください。

IGNORE

NetApp Data ONTAP ファイル・サーバーがアップグレードされて Unicode のファイル名をサポートするようになったことをバックアップ/アーカイブ・クライアントが検出すると、スナップショット差分の増分バックアップが実行されることを指定します。

`ignore` オプションの場合は警告メッセージを抑止するので、`ignore` オプションは `no` パラメーターとは異なります。代わりに、フル増分バックアップを実行するようにユーザーに通知する情報メッセージが、エラー・ログと IBM Spectrum Protect アクティビティ・ログに記録されます。

コマンドが正常に終了すると、コード 0 が戻されます。

Unicode をサポートするように NetApp Data ONTAP ファイル・サーバーをアップグレードしているが、フル増分バックアップをまだ実行していない場合には、`ignore` オプションを使用してください。このオプションは、ファイル・サーバーがマイグレーションされ、フル増分がまだ実行されていないことをバックアップ/アーカイブ・クライアントが検出した場合にのみ使用されます。それ以外の場合はすべて、このオプションは無視されます。

MIGRate

NetApp Data ONTAP ファイル・サーバーが、Unicode のファイル名をサポートするバージョンにアップグレードされた場合に、基本スナップショットを作成し、スキャン・ベースの増分バックアップを実行することを指定します。`migrate` オプションは `yes` オプションとは異なります。その理由は、`migrate` オプションの場合、NetApp Data ONTAP ファイル・サーバーのバージョンが更新されたことをクライアントが検出した場合にのみ基本スナップショットを作成するからです。`yes` オプションの場合は、コマンドが実行されるたびに基本スナップショットを作成します。

増分バックアップが終了した後、マイグレーション関連の追加メッセージがエラー・ログまたは IBM Spectrum Protect サーバー・アクティビティ・ログに記録されることはありません。操作が終了すると、コマンドは戻りコード 0 で終了します。

Unicode をサポートするように NetApp Data ONTAP ファイル・サーバーをアップグレードしているが、フル増分バックアップをまだ実行していない場合には、`migrate` オプションを使用してください。

NetApp Data ONTAP ファイル・サーバーをアップグレードしていない場合は、**migrate** オプションは無視されます。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc incremental -snapdiff -createnewbase=yes /net/home1
```

関連タスク

[116 ページの『スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成』](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントでスナップショット差分増分バックアップ・コマンドを実行するには、NetApp ファイル・サーバー接続情報を構成する必要があります。また、**set password** コマンドを使用して、ファイル・サーバーのホスト名、およびファイル・サーバーにアクセスするために使用されるユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

関連資料

[546 ページの『Snapdiff』](#)

snapdiff (スナップショット差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

Csv

csv オプションを使用すると、クライアントはコンマ区切り値 (csv) ファイルを使用して、さまざまなリストア設定を定義し、一連の仮想マシン・リストア操作に適用することができます。

指定された .csv ファイルで列見出しを定義し、その設定値で同等のクライアント・オプションをオーバーライドすることができます。列名は大/小文字を区別します。

CSV 列を使用すると、以下のように同等のコマンド・ライン・オプションがオーバーライドされます。同等のオプションは **restore vm -csv** コマンドと共に使用される場合は無視されます。

- 「New Virtual Machine Name」は、リストアでの **-vmname** オプションをオーバーライドします。
- 「New Datastore」は、リストアでの **-datastore** オプションをオーバーライドします。
- 「New Datacenter」は、リストアでの **-datacenter** オプションをオーバーライドします。
- 「New Host」は、リストアでの **-host** オプションをオーバーライドします。
- 「PITDATE」は、リストアでの **-pitdate** オプションをオーバーライドします。
- 「PITTIME」は、リストアでの **-pittime** オプションをオーバーライドします。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) 内、または **Restore VM** のコマンド・ラインで有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文

➡ Csv — — — csvfilespec ➡

パラメーター

csvfilespec

CSV 列を使用すると、以下のように同等のコマンド・ライン・オプションがオーバーライドされます。同等のオプションはいずれも `restore vm -csv` コマンドと共に使用される場合は無視されます。

例えば、コマンド `restore vm "restore_vm_list.csv" -csv -datacenter="Mambo 5"` を指定したときに、「New Datacenter」列が CSV ファイルですでに指定されている場合、`-datacenter` オプションは無視されます。

以下のリストに、同等クライアント・オプションをオーバーライドする CSV 列のリストを示します。

表 70. 列見出しの名前

見出し	説明	使用法
Virtual Machine Name	リストアする仮想マシンの名前。	ワイルドカード文字は使用できません。大/小文字を区別します。この列は必須です。
New Virtual Machine Name	リストアする仮想マシンの名前。	この列は、 <code>-vmname</code> オプションと同じ構文を使用します。オプションです。既存の名前を再使用する場合は、この列をブランクにすることができます。
New Datastore	仮想ハード・ディスクのリストア先となる新規データ・ストア。	この列は、 <code>-datastore</code> オプションと同じ構文を使用します。オプションです。既存のデータ・ストアを再使用する場合は、この列をブランクにすることができます。
New Datacenter	仮想マシンを関連付ける必要がある新規データ・センター。	<code>-datacenter</code> オプションと同じ構文を使用します。オプションです。既存のデータ・センターを再使用する場合は、この列をブランクにすることができます。
New Host	仮想マシンのリストア先となる新規ホスト。	この列は、 <code>-host</code> オプションと同じ構文を使用します。オプションです。既存のホストを再使用する場合は、この列をブランクにすることができます。
PITDATE	バックアップを指定する元のポイント・イン・タイムの日付。	この列は、 <code>-pitdate</code> オプションと同じ構文を使用します。オプションです。アクティブ・バックアップをリストアするように指示する場合は、この列をブランクにすることができます。CSV ファイルで <code>PITTIME</code> が指定されている場合、この列は必須です。PITDATE の日付は、 <code>DATEFORMAT</code> オプションで設定された形式を使用する必要があります。Windows の場合、デフォルトはロケールによって異なります。Linux の場合、デフォルトは <code>DATEFORMAT 1</code> です。

表 70. 列見出しの名前 (続き)

見出し	説明	使用法
PITTIME	バックアップを指定する元のポイント・イン・タイムの時刻。	この列は、-pittime オプションと同じ構文を使用します。オプションです。アクティブ・バックアップをリストアするように指示する場合、あるいは PITDATE のみを指定する場合は、この列をブランクにすることができます。PITTIME の時刻は、TIMEFORMAT オプションで設定された形式を使用する必要があります。Windows の場合、デフォルトはロケールによって異なります。Linux の場合、デフォルトは TIMEFORMAT 1 です。

アスタリスク * は、リストアする VM の名前のワイルドカード構成の一部として元の VM 名を再使用することを示します。

以下のコマンド・ライン規則も監視されます。

- **<date>** は、リストアの日付に置き換えられます。
- **<time>** は、リストアの時刻に置き換えられます。
- **<timestamp>** は、**<date>** と **<time>** の出力の組み合わせに置き換えられます。

要素は、引用符で囲むことができます。例えば、名前にコンマや引用符が含まれる VM などです。

```
"Poem Repository "A-F" 20th Century"
```

ここでは、引用符 (") 文字を表すのに二重引用符が使用されています。

例

以下の例は、CSV ファイルをスプレッドシート・ビューで開いたときにどのように表示されるかを示しています。

Virtual Machine Name	New Virtual Machine Name	New Host	New Datastore	New Datacenter	NOTES1	NOTES2
PITDATE	PITTIME					
VM1	*-DR_restore	esx4.ibm.com	DS_8	DC_RecoverSite1	group1	
VM2	*-DR_restore	esx4.ibm.com	DS_8	DC_RecoverSite1	group1	
VM3	*-DR_restore	esx4.ibm.com	DS_8	DC_RecoverSite1	group1	
VM4	*-DR_restore	esx5.ibm.com	DS_10	DC_RecoverSite1	group2	
VM5	*-DR_restore	esx5.ibm.com	DS_10	DC_RecoverSite1	group2	

以下の例は、CSV ファイルからエクスポートされたコンマ区切りテキスト・ファイルを示しています。

例 1:

```
Virtual Machine Name,New Virtual Machine Name,New Host,New Datastore,New
Datacenter,NOTES1,NOTES2,PITDATE,PITTIME
VM1,*-DR_restore,esx4.ibm.com,DS_8,DC_RecoverSite1,group1
VM2,*-DR_restore,esx4.ibm.com,DS_8,DC_RecoverSite1,group1
VM3,*-DR_restore,esx4.ibm.com,DS_8,DC_RecoverSite1,group1
VM4,*-DR_restore,esx5.ibm.com,DS_10,DC_RecoverSite1,group2
VM5,*-DR_restore,esx5.ibm.com,DS_10,DC_RecoverSite1,group2
```

例 2:

```
Virtual Machine Name,New Virtual Machine Name,New Host,New Datastore,New
Datacenter,NOTES1,NOTES2,PITDATE,PITTIME
Tiny Linux VM,Tiny Linux VM -restore,,,,,
lucasTestVM10,* -restore,,,,,10/03/2017,10:35 AM
big-cet-4TB,,devesx06.storage.tucson.ibm.com,,,10/05/2017,,
```


関連資料

747 ページの『Restore VM』

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

Datacenter

リストアされたマシンのデータを収容するデータ・センターの宛先ロケーションを指定します。

このオプションは、**restore vm** コマンドで使用します。

データ・センターを編成するためにフォルダーを仮想センター内で使用する場合は、フォルダー名をスラッシュで区切ってデータ・センター指定に組み込む必要があります。

仮想センターではなく ESX サーバーを使用してリストアする場合は、**-datacenter=ha-datacenter** オプションを使用する必要があります。

デフォルトのターゲット・ロケーションは、仮想マシンがバックアップ時に保管されたデータ・センターです。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

例

仮想マシンを、仮想センターの Production という名前のフォルダーのもとで編成される USEast データ・センターにリストアします。

```
dsmc restore vm my_vm -datacenter=Production/USEast
```

仮想センターから取られる仮想マシン・バックアップを、リストア時に ESX サーバーを使用してリストアします。


```
restore vm my_vm -datacenter=ha-datacenter
```

仮想マシンを USWest データ・センターにリストアします。

```
restore vm my_vm -datacenter=USWest
```

Datastore

VMware リストア操作時に使用されるデータ・ストア・ターゲットを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

例

仮想マシンを ds8k_prod1 という名前のデータ・ストアにリストアします。

```
restore vm my_vm -datastore=ds8k_prod1
```

Dateformat

dateformat オプションは、日付の表示または入力に使用する形式を指定します。

デフォルトの場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントと管理クライアントは、クライアントの開始時に有効なロケール定義からフォーマット情報を取得します。ロケール定義のセットアップ方法の詳細については、ローカル・システム側のドキュメンテーションを参照してください。

注：

1. `dateformat` オプションは、Web クライアントには影響しません。Web クライアントは、ブラウザを実行中のロケールの日付形式を使用します。サポートされるロケールでブラウザが実行されていない場合には、Web クライアントは米国英語用の日付形式を使用します。
2. 日付形式を変更し、スケジュール・ログを除去するために `schedlogretention` オプションを使用した場合には、クライアントはそのログの除去時に、スケジュール・ログ中の日付形式が異なるすべての項目を除去します。日付形式を変更し、エラー・ログを除去するために `errorlogretention` オプションを使用した場合には、クライアントはそのログの除去時に、エラー・ログ中の日付形式が異なるすべての項目を除去します。日付形式を変更している時に、異なる日付形式が入っているログ項目を保存したい場合には、スケジュール・ログおよびエラー・ログをコピーしてください。

`dateformat` オプションは、次のコマンドで使用してください。

- `delete archive`
- `delete backup`
- `expire`
- `query archive`
- `query backup`
- `query filespace`
- `query image`
- `restore`
- `restore image`
- `restore nas`
- `retrieve`
- `set event`

コマンドとともに `dateformat` オプションを組み込む場合は、そのオプションの前に、`fromdate`、`pitdate`、および `todate` オプションを指定する必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「地域設定」タブの「日付形式」ドロップダウン・リストで設定できます。

構文

➡ `DATEformat` — — *format_number* ➡

パラメーター

format_number

次のフォーマットの 1 つを使用して日付を表示します。使用したい日付形式に対応する番号を選択します。

0

ロケール指定の日付形式を使用 (Mac OS X には適用されません)。

AIX および Solaris の場合: これは、ロケール指定の日付形式が数字と区切り文字から構成される場合のデフォルトです。

1

MM/DD/YYYY

AIX および Solaris の場合: これは、ロケール指定の日付形式が数字と区切り文字以外の任意の文字から構成される場合のデフォルトです。

これは、以下の使用可能翻訳の場合のデフォルトです。

- 米国英語
- 中国語 (繁体字)
- 韓国語

2

DD-MM-YYYY

これは、以下の使用可能翻訳の場合のデフォルトです。

- ブラジル・ポルトガル語
- イタリア語

3

YYYY-MM-DD

これは、以下の使用可能翻訳の場合のデフォルトです。

- 日本語
- 中国語 (簡体字)
- ポーランド語

4

DD.MM.YYYY

これは、以下の使用可能翻訳の場合のデフォルトです。

- ドイツ語
- フランス語
- スペイン語
- チェコ語
- ロシア語

5

YYYY.MM.DD

これは、以下の使用可能翻訳の場合のデフォルトです。

- ハンガリー語

6

YYYY/MM/DD

7

DD/MM/YYYY

例

オプション・ファイル:

dateformat 3

コマンド・ライン:

-date=3

このオプションは、初期コマンド・ラインおよび対話モードでのみ有効です。このオプションを対話モードで使用した場合には、このオプションが指定されたコマンドにのみ影響が及びます。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値に戻ります。この値は、初期コマンド・ラインまたはサーバーが強制するオプションによって指定変更されない限り、dsm.opt ファイルの値です。

日時形式の指定についてのその他の考慮事項

このオプションで指定する日時形式は、日時を入力データとして処理するオプションの使用時に使用する必要があります。例: `totime`、`fromtime`、`todate`、`fromdate`、および `pitttime`。

例えば `timeformat` オプションを `TIMEFORMAT 4` と指定する場合、`fromtime` や `totime` オプションに指定する値は、`12:24:00pm` のような時刻に指定する必要があります。 `TIMEFORMAT 4` で指定する時刻の整数は 12 以下でなければならないため、`13:24:00` と指定しても無効です。 オプションに指定できる時間の値を最大で 24 とし、コンマを区切り文字として使用したい場合は、 `TIMEFORMAT 2` を指定する必要があります。

システム・ロケール構成ファイルでの日時形式の構成

ご使用のシステムのロケール・ファイルで日時形式を構成して指定することができます。 ロケール・ファイルに日時形式を指定する場合、C 言語の `strftime()` 関数でサポートされている数値生成型の形式指定子のサブセットを使用して定義する必要があります。 ご使用のロケールでは、以下の指定子を使用して構成設定に日時形式を設定することができます。

日付指定子

- `%Y` - 4 桁の年。 例: 2011
- `%y` - 下二桁のみの年。 例: 11 (2011 ではない)
- `%m` - 10 進数の月 (1-12)
- `%d` - 日付 (1-31)

日付指定子のうち、年に指定できる指定子は 1 件だけです。 `%Y` と `%y` の両方を指定することはおやめください。 E 修飾子 (大文字 E) を日付指定子の前に指定して、ご使用のロケールの年、月、または日の代替形式を生成することができます。 代替形式が存在しなければ、E 修飾子は無視されます。 各指定子は、単一の 7 ビット ASCII 文字で分離してください。 一般に使用される区切り文字には、コロン (:)、コンマ (,)、ピリオド (.)、ハイフン (-)、またはスラッシュ (/) 文字が含まれます。 マルチバイト文字を区切り文字に使用しないでください。

時刻指定子

- `%H` - 24 時間形式の時間 (00-23)
- `%I` - 12 時間形式の時間 (00-12)
- `%M` - 時間の隣に表示される分 (00-59)
- `%S` - 分の隣に表示される秒 (00-59)
- `%p` - AM (午前) または PM (午後) の記号を追加します

時刻指定子のうち、時間に指定できる指定子は 1 件だけです。 `%I` と `%H` の両方を指定することはおやめください。

O 修飾子 (大文字 O) を時刻指定子の前に指定して、ご使用のロケールの時、分、または秒の代替形式を生成することができます。 O 修飾子を `%p` 指定子の前に指定することはできません。 各指定子は、単一の 7 ビット ASCII 文字で分離してください。 一般に使用される区切り文字には、コロン (:)、コンマ (,)、またはピリオド (.) が含まれます。 マルチバイト文字を区切り文字に使用しないでください。 `%p` 指定子とその前後の区切り文字の間には、区切り文字を指定しないでください。

ロケール設定で構成する時刻形式の例

特定の時刻形式を設定するには、ご使用のロケールの構成ファイルを編集し、お客様のニーズに合わせて `t_fmt` 行を変更します。 どの時刻形式を選択した場合も、その時刻形式は出力と入力の両方に適用されます。 ロケール構成ファイルの編集が完了したら、`localedef` コマンドを実行して最終ロケール・ファイルを作成してください。

表 71. ロケール構成での時刻形式設定のサンプル (t_fmt 行)	
例	結果
"%H:%M:%S"	hh:mm:ss のフォーマットで時刻を表示します。hh の範囲は 0 から 23 です。
"%H,%M,%S"	hh,mm,ss のフォーマットで時刻を表示します。hh の範囲は 0 から 23 です。
"%I,%M,13p"	時刻を hh,mm,ssA/P の形式で表示します。hh の範囲は 1-12 です。A/P は午前 (英語で AM) または午後 (英語で PM) のローカル省略形です。

ロケール設定で構成する日付形式の例

特定の日付形式を設定するには、構成ファイルを編集し、お客様のニーズに合うように必要に応じて d_fmt 行を変更します。どの日付形式を選択した場合も、その日付形式は出力と入力 の両方に適用されます。

表 72. ロケール構成での日付形式設定のサンプル (d_fmt 行)	
例	結果
"%m/%d/%y"	MM/DD/YY の形式で日付を表示します。
"%d.%m.%Y"	DD.MM.YYYY の形式で日付を表示します。

Dedupcachepath

dedupcachepath オプションを使用して、クライアント・サイド・データのデータ重複排除キャッシュ・データベースが作成されるロケーションを指定します。

バックアップまたはアーカイブ処理中に enablededupcache=no オプションが設定されると、このオプションは無視されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。また、このオプションは IBM Spectrum Protect API にも有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「重複排除キャッシュのロケーション」フィールドで設定できます。このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のクライアント・オプション・セットで設定することもできます。

構文

►► DEDUPCACHEPath — path ◄◄

パラメーター

path

enablededupcache オプションが yes に設定されている場合に、クライアント・サイドのデータ重複排除キャッシュ・データベースが作成されるロケーションを指定します。デフォルト・ロケーションの場合、データ重複排除キャッシュ・ファイルはバックアップ/アーカイブ・クライアントまたは API インストール・ディレクトリーに作成されます。

例

オプション・ファイル:

dedupcachepath /volumes/temp

コマンド・ライン:

適用しません。

関連資料

[405 ページの『Enablededupcache』](#)

enablededupcache オプションは、クライアント・サイドのデータ重複排除中にキャッシュを使用するかどうかを指定するために使用します。ローカル・キャッシュを使用すると、IBM Spectrum Protect サーバーとクライアントの間のネットワーク・トラフィックを削減できます。

Dedupcachesize

dedupcachesize オプションは、データ重複排除のキャッシュ・ファイルの最大サイズを決定するために使用します。キャッシュ・ファイルがその最大サイズに達すると、キャッシュの内容が削除されて新規項目が追加されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。また、このオプションは IBM Spectrum Protect API にも有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「重複排除」>「重複排除キャッシュ」>「最大サイズ」フィールドで設定できます。このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のクライアント・オプション・セットで設定することもできます。

構文

► DEDUPCACHESize — *dedupcachesize* ◄

パラメーター

dedupcachesize

データ重複排除キャッシュ・ファイルの最大サイズ (メガバイト単位) を指定します。値の範囲は 1 から 2048 で、デフォルトは 256 です。

例

オプション・ファイル:

dedupcachesize 1024

コマンド・ライン:

適用しません。

関連資料

[377 ページの『Deduplication』](#)

deduplication オプションを使用して、バックアップおよびアーカイブ処理中 IBM Spectrum Protect サーバーにデータを転送するときに、冗長クライアント・サイド・データ除去を有効にするかどうかを指定します。

Deduplication

deduplication オプションを使用して、バックアップおよびアーカイブ処理中 IBM Spectrum Protect サーバーにデータを転送するときに、冗長クライアント・サイド・データ除去を有効にするかどうかを指定します。

enablelanfree オプションが設定されている場合、データ重複排除は無効になっています。バックアップ/アーカイブ・クライアントの暗号化されたファイルは、クライアント・サイドのデータ重複排除からは除外されます。また、暗号化ファイル・システムからのファイルも除外されます。

クライアント・サイドのデータ重複排除をサポートするためには、以下の基準が満たされている必要があります。

- サーバーでノードのクライアント・サイドのデータ重複排除が有効になっている。
- データのストレージ・プール宛先が、データ重複排除が有効になったストレージ・プールになっている。ストレージ・プールの装置タイプは、「file」でなければなりません。
- ファイルをクライアント・サイドのデータ重複排除処理から除外できる (デフォルトでは、すべてのファイルが処理対象に含まれます)。
- サーバー上の CLIENTDEDUPTXNLIMIT オプションを設定することによって、データ重複排除の最大トランザクション・サイズをサーバーが制限できる。このオプションについて詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバー資料を参照してください。
- ファイル・サイズは 2 KB より大きくする必要があります。

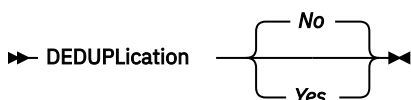
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。また、IBM Spectrum Protect API が使用することもできます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「重複排除」>「重複排除を有効にする」チェック・ボックスを選択することによって設定できます。このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のクライアント・オプション・セットで設定することもできます。

構文



パラメーター

No

バックアップおよびアーカイブ処理でクライアント・サイドのデータ重複排除を有効にしないことを指定します。No はデフォルトです。

Yes

バックアップおよびアーカイブ処理でクライアント・サイドのデータ重複排除を有効にすることを指定します。

例

オプション・ファイル:
deduplication yes

コマンド・ライン:
-deduplication=yes

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連資料

[447 ページの『include オプション』](#)

include オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

[416 ページの『Exclude オプション』](#)

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

Defaultserver

dsm.sys ファイルで複数のサーバーが定義されている場合、バックアップ・アーカイブ・サービスのために接続する IBM Spectrum Protect サーバーの名前を指定するには、defaultserver オプションを使用します。

デフォルトでは、バックアップ/アーカイブは、dsm.sys ファイル内の先頭のスタンザで定義されたサーバーに接続します。このオプションは、クライアントのユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に、servername オプションが指定されていない場合にのみ使用します。

HSM クライアントがワークステーションにインストールされていて、migrateserver オプションを使用してマイグレーション・サーバーを指定していない場合には、ファイルのマイグレーション先としたいサーバーを指定するために、このオプションを使用します。詳しくは、IBM Knowledge Center (<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSERBH/welcome>) の IBM Spectrum Protect for Space Management 製品資料を参照してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、dsm.sys ファイルの先頭で、サーバー・スタンザの前に入れます。

構文

➡ DEFAULTServer — — servername ➡

パラメーター

servername

ファイルのバックアップまたはアーカイブ先のデフォルト・サーバーの名前を指定します。ローカル・ファイル・システムからファイルをマイグレーションする先のサーバーは、このオプションでも指定できます。

例

オプション・ファイル:
defaults server_a

コマンド・ライン:
適用しません。

Deletetfiles

deletetfiles オプションは、アーカイブ後にワークステーションからファイルを削除するために **archive** コマンドで使います。

また、イメージが作成された後にファイルが削除された場合に、そのファイルをリストアされたイメージから削除するために、**restore image** コマンドおよび **incremental** オプションとともにこのオプションを使用することができます。ファイルの削除が正常に実行されるのは、IBM Spectrum Protect サーバーのバックアップ・コピー・グループ内に、既存ファイルおよび削除ファイルのバージョンが十分に含まれている場合です。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ DELetetfiles ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc archive "/Users/dgordon/Documents/*.c" -deletetfiles
```

```
dsmc archive "/home/foo/*.c" -deletetfiles  
dsmc restore image /local/data -incremental -deletetfiles
```

Description

description オプションは、アーカイブ、アーカイブ削除、リトリート、照会アーカイブ、または Query BACKUPSET の実行時に、ファイルに関する記述を割り当てまたは指定します。

例えば、budget.jan という名前のファイルをアーカイブし、そのファイルに "2002 Budget for Proj 1" という記述を割り当てる場合には、次のように入力します。

```
dsmc archive -des="2003 Budget for Proj 1" /home/plan/  
proj1/budget.jan
```

注:

1. この説明の最大長は 254 文字です。
2. 入力するオプション値がブランク・スペースを含む場合は、値を引用符 (" ") で囲みます。

description オプションは、次のコマンドで使います。

- **archive**
- **delete archive**
- **query archive**
- **query backupset**
- **retrieve**

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ Description = — — description ➡

パラメーター

description

アーカイブするファイルに、記述を割り当てます。**archive** コマンドで記述を指定しない場合のデフォルトは **Archive Date:x** です。ここで、x は現在のシステム日付です。日付の長さは常に 10 文字です。日付形式として年が 2 桁の形式を使用する場合は、日付の末尾に 2 つの空白・スペースを置きます。例えば、年が 4 桁の形式を使用するデフォルト記述は "Archive Date: 2002/05/03" となり、年が 2 桁の場合の同じデフォルトは "Archive Date: 02/05/03 " となります (末尾に 2 つのスペースがあります)。年が 2 桁の記述を使用してファイルをリトリートする場合は、以下のいずれの方法でも **-description** オプション・ストリングを入力できます。

```
-description="ArchiveDate: 02/05/03 "  
または  
-description="ArchiveDate: 02/05/03*"
```

archive コマンドを使用して 2 つ以上のファイルをアーカイブする場合は、入力した記述は各ファイルに適用されます。例えば、ファイルのグループをアーカイブし、*Project X* という同じ記述を各ファイルに割り当てするには、次のように入力します。

```
dsmc archive -description="Project X" "/Users/van/Documents/*.x"
```

```
dsmc archive -description="Project X" "/home/allproj/*.x"
```

この記述を使用すると、ファイルのすべてをリトリートできます。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc archive "/Users/van/Documents/*.prj" -des="2003 Budget for Proj 1"
```

```
dsmc archive "/home/foo/*.prj" -des="2003 Budget for Proj 1"  
dsmc query backupset -loc=server -descr="My Laptop"
```

Detail

detail オプションを使用すると、一緒に使用するコマンドに応じて、管理クラス、ファイル・スペース、バックアップ、アーカイブ情報、および追加情報が表示されます。

query mgmtclass コマンドで **detail** オプションを使用すると、活動ポリシー・セット内の各管理クラスに関する詳細情報が表示されます。**detail** オプションを使用しない場合には、管理クラス名と簡単な記述のみが画面に表示されます。**detail** オプションを指定すると、それぞれの管理クラスに含まれるそれぞれのコピー・グループの属性についての情報が画面に表示されます。管理クラスには、バックアップ・コピー・グループ、アーカイブ・コピー・グループ、またはその両方を含むことができ、両方とも含まないこともできます。

サーバーがユニコード名を表示できない場合には、ユニコード対応ファイル・スペースは正しく表示されないことがあります。この場合、サーバーのこれらのファイル・スペースを識別するためには、ファイル・

スペースのファイル・スペース ID (fsID) を使用してください。ファイル・スペースの fsID を判別するには、**delete filespace** コマンドおよび **query filespace** コマンドで **detail** オプションを使用してください。fsID は、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI のファイル情報ダイアログにも表示されます。

detail オプションを **query backup** コマンドおよび **query archive** コマンドで使用すると、指定したファイルの次の属性が表示されます。

- 最終修正日付
- 最終アクセス日付
- 圧縮
- 暗号化タイプ
- クライアント・サイドのデータ重複排除
- HSM クライアントがファイルをマイグレーションしたか 事前マイグレーションしたか

detail を **query vm** コマンドと共に使用すると、以下の統計が表示されます。

- バックアップのすべてのメガブロックにおいて、単一メガブロックの記述に必要な IBM Spectrum Protect オブジェクトの平均数。
- ファイル・スペースのすべてのメガブロックに対して、単一メガブロックの記述に必要な IBM Spectrum Protect オブジェクトの平均数。
- ある特定のバックアップで、実際にバックアップされたデータ量に対する、Change Block Tracking により報告されたデータ量の率
- このファイル・スペースのすべてのバックアップで、実際にバックアップされたデータ量に対する、Change Block Tracking により報告されたデータ量の率
- 前回のフルバックアップが実動ディスクから作成された以降に作成されたバックアップの数。

query vm で戻る値は、ヒューリスティック (Mbpctrefreshthresh オプションおよび Mbpctrefreshthresh オプションを参照) を微調整する際に役立ち、メガブロックの最新表示用の値トリガーを微調整できます。

detail オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **delete filespace**
- **incremental**
- **query archive**
- **query backup**
- **query filespace**
- **query inclexcl**
- **query mgmtclass**
- **query vm**

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。このオプションは、クライアント・オプション・ファイルには設定されません。オプションをサポートするコマンドのいずれかを入力するときに、コマンド・ラインに追加して使用します。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ DETail ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc query mgmtclass -detail
```

```
dsmc query filespace -detail
```

```
dsmc query backup file1 -detail
```

```
dsmc query vm -detail
```

Diffsnapshot

diffsnapshot オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがスナップショット 差分増分バックアップを実行するときに、差分スナップショットを作成するかどうかを制御します。

差分スナップショットがクライアントによって作成されない場合、ボリューム上で検出された最新のスナップショットを差分スナップショットおよびバックアップ操作のソースとして使用します。

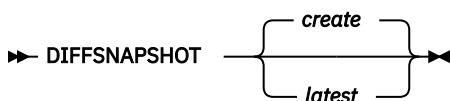
デフォルト値では、差分スナップショットが作成されます。このオプションは、**snapdiff** オプションの初回使用時には無視されます。ボリュームで初めて **snapdiff** オプションが使用される場合は、スナップショットが作成されてフル増分バックアップのソースとして使用される必要があります。バックアップ/アーカイブ・クライアントによって作成されたスナップショットは、次のスナップショット 差分増分バックアップが完了した後に、クライアントによって削除されます。

スナップショットは Network Appliance FilerView ツールで作成することができます。クライアントがこの方法または別の方法で作成された最新のスナップショットを使用するようにしたい場合は、**latest** パラメーターを使用します。IBM Spectrum Protect の外部の方法で作成されたスナップショットが、クライアントによって削除されることは絶対にありません。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

構文



パラメーター

create

ソース・スナップショットとして使用する新しい永続スナップショットを作成することを指定します。この値がデフォルトです。

latest

ソース・スナップショットとしてファイル・サーバーで検出された最近のスナップショットを使用することを指定します。

例

コマンド・ライン:

ファイル・サーバー `homestore.example.com` でホストされている NFS マウント・ファイル・システム `/vol/vol1` のスナップショットの差分による増分バックアップを実行します。ここで、`/net/home1` は `/vol/vol1` のマウント・ポイントです。

```
incremental -snapdiff -diffsnapshot=latest /net/home1
```

`-diffsnapshot` オプション値 `latest` は、最新のスナップショット (活動スナップショット) を使用して操作が行われることを意味します。

関連概念

181 ページの『[HTTPS 接続によるスナップショット差分バックアップ](#)』

スナップショット差分バックアップ時にバックアップ/アーカイブ・クライアントが NetApp ファイラーと通信するために、セキュア HTTPS 接続を使用することができます。

関連タスク

116 ページの『[スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアントでスナップショット 差分増分バックアップ・コマンドを実行するには、NetApp ファイル・サーバー接続情報を構成する必要があります。また、**set password** コマンドを使用して、ファイル・サーバーのホスト名、 およびファイル・サーバーにアクセスするために使用されるユーザー名とパスワードを指定する必要があります。

関連資料

546 ページの『[Snapdiff](#)』

`snapdiff` (スナップショット 差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

553 ページの『[Snapdiffhttps](#)』

`snapdiffhttps` オプションは、スナップショット 差分バックアップ時の NetApp ファイラーとの通信にセキュア HTTPS 接続を使用する場合に指定します。

366 ページの『[Createnewbase](#)』

`createnewbase` オプションは基本スナップショットを作成し、それをソースとして使用してフル増分バックアップを実行します。

Diffsnapshotname

`diffsnapshotname` オプションを使用すると、スナップショット 差分バックアップ時に使用するターゲット・ファイラー・ボリューム上の差分スナップショットを指定できます。このオプションは、`diffsnapshot=latest` も指定する場合のみ、指定されます。

このオプションを指定しない場合、`diffsnapshot=latest` により、ファイラー・ボリューム上の最新の既存スナップショットが選択され、差分スナップショットとして使用されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルまたはコマンド・ラインで指定できます。

構文

```
➡ DIFFSNAPSHOTName — — snapshot_name ➡
```

パラメーター

snapshot_name

差分スナップショットとして使用する既存スナップショットの名前を指定します。

ワイルドカード文字を含むパターンを使用して、スナップショットを選択することもできます。ワイルドカードは、以下のいずれかの文字です。

アスタリスク (*) は任意の文字と一致します。

?

疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。

そのワイルドカード・パターンに一致する最新のスナップショットが、差分スナップショットとして選択されます。

例

オプション・ファイル:

```
diffsnapshotname volume_base_snap
```

```
diffsnapshotname nightly.?
```

コマンド・ライン:

```
dsmc incr ¥¥DRFile¥¥UserDataVol_Mirror_Share -snapdiff  
-useexistingbase -basenameshotname="nightly.?"  
-diffsnapshot=latest -diffsnapshotname="nightly.?"
```

関連情報

[Basesnapshotname](#)

[Useexistingbase](#)

Dirmc

dirmc オプションは、ディレクトリーに対して使用する管理クラスを指定します。

管理クラスをディレクトリーと関連付けるこのオプションを指定しない場合、クライアント・プログラムは、ポリシー・ドメインの活動ポリシー・セットの中にある保存期間が最も長い管理クラスを使用します。少なくともディレクトリーに関連付けられているファイルの保持期間と同じ期間、そのディレクトリーを保持している個々のディレクトリーの管理クラスを選択してください。

このオプションによって管理クラスを指定した場合には、バックアップ操作で指定されたすべてのディレクトリーがその管理クラスにバインドされます。

dirmc オプションは、バックアップされるディレクトリーの管理クラスを指定するもので、アーカイブされるディレクトリーには影響しません。アーカイブされているディレクトリーおよびファイルのバインド先のポリシー・ドメインに対して使用できる管理クラスを指定する場合は、archmc オプションを **archive** コマンドで使用してください。archmc オプションを使用しなかった場合は、サーバーはアーカイブされているディレクトリーを、デフォルトの管理クラスにバインドします。アーカイブ・コピー・グループがデフォルトの管理クラスにない場合は、サーバーはアーカイブされているディレクトリーを、保存期間が最短の管理クラスにバインドします。

重要: ストレージ・プールには、拡張属性と ACL のみが保管されます。拡張属性と ACL 以外のディレクトリー情報は、データベースに残されます。Windows システムでは、ディレクトリーはストレージ・プール・スペースを占有します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「バックアップ」タブの「ディレクトリー管理クラス」セクションで設定することができます。

構文

➡ DIRMc — — *mgmtclassname* ➡

パラメーター

mgmtclassname

ディレクトリーと関連付けたい管理クラスの名前を指定します。クライアントは、指定の管理クラス名をバックアップ対象の全ディレクトリーに対して使用します。このオプションを指定しない場合は、クライアントは、保持期間が最も長い管理クラスをディレクトリーに関連付けます。

例

オプション・ファイル:

`dirm managdir`

コマンド・ライン

適用しません。

関連情報

管理クラスに対して特定のファイルをバックアップする場合については、[303 ページの『ファイルへの管理クラスの割り当て』](#)を参照してください。

Dirsonly

`dirsonly` オプションは、ディレクトリーのみを処理します。クライアントはファイルを処理しません。

`dirsonly` オプションは、次のコマンドで使用してください。

- `archive`
- `incremental`
- `query archive`
- `query backup`
- `restore`
- `restore backupset`
- `retrieve`
- `selective`

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ DIrsonly ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc query backup -dirsonly "/Users/*"
```

コマンド・ライン:

```
dsmc query backup -dirsonly "*"
```

Disablenqr

disablenqr オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがサーバーからファイルとディレクトリーをリストアするときに照会なしリストア方式を使用できるかどうかを指定します。

disablenqr オプションを no (デフォルト) に設定すると、クライアントは照会なしリストアのプロセスを使用することができます。

disablenqr オプションを yes に設定すると、クライアントは「標準リストア」プロセス (「クラシック・リストア」とも呼ばれます) のみを使用できます。

注: クライアントが照会なしリストア方式のみを使用できるように指定するオプションまたは値はありません。

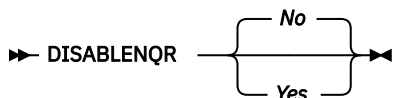
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、dsm.opt ファイルに入れます。

構文



パラメーター

No

クライアントが照会なしリストア方式を使用できることを指定します。これはデフォルトです。

Yes

クライアントが標準リストア方式のみを使用することを指定します。照会なしリストア方式は使用できません。

例

オプション・ファイル:

```
disablenqr yes
```

コマンド・ライン

```
-disablenqr=yes
```

Diskbuffsize

diskbuffsize オプションは、ファイルの読み取り時にクライアントが使用できる、最大のディスク入出力バッファー・サイズ (キロバイト単位) を指定します。diskbuffsize オプションが largecommbuffers オプションに置き換わります。

通常、このオプションの値がクライアント・ファイル・システムによって提供されるファイル先読みサイズ以下の場合は、最適なバックアップ、アーカイブ、または HSM マイグレーションのクライアント・パフォーマンスが得られます。それよりも大きなバッファーの場合は、さらに多くのメモリーが必要になり、パフォーマンスは改善されない可能性があります。

重要: IBM サポート担当員の指示がない限り、デフォルト設定を使用してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

➡ DISKBuffsize — — size ➡

パラメーター

size

ファイルを読み取る際にクライアントが使用する最大ディスク入出力バッファー・サイズを指定します (キロバイト単位)。値の範囲は、16 から 1023 で、デフォルトは 256 です。enablelanfree yes が設定されている場合、diskbuffsize のデフォルト・サイズは 32 です。

例

オプション・ファイル:
diskbuffsize 64

コマンド・ライン:
適用しません。

Diskcachelocation

diskcachelocation オプションは、オプション memoryefficientbackup=diskcachemethod が設定してある場合、増分バックアップ中に、ディスク・キャッシュ・データベースを作成する位置を指定します。

オプション・ファイルに diskcachelocation オプションを使用するか、または include.fs オプションと一緒に指定します。diskcachelocation オプションがオプション・ファイルに現れる場合、その値が diskcachelocation オプションを含む include.fs オプションで表示されないすべてのファイル・システムに使用されます。

ディスク・キャッシュは、**incremental** コマンドが実行された後に削除される一時ファイルです。このオプションを使用して、以下のいずれかを選択します。

1. memoryefficientbackup=diskcachemethod の使用時に、十分なディスク・スペースが無いため、ディスク・キャッシュ・ファイルが作成できないことを伝えるメッセージが表示された場合には、より多くの空きディスク・スペースがある位置。
2. ディスク・アクセス機構の競合を削減してパフォーマンスを改善するには、別の物理ボリュームの位置。

重要: パフォーマンス上の理由から、`diskcachelocation` をリモート・ドライブには使用しないでください。

ディスク・キャッシュ増分バックアップで作成されるディスク・キャッシュ・ファイルに必要な実際のディスク・スペース量は、バックアップに含まれるファイルおよびディレクトリーの数とバックアップされるファイルおよびディレクトリーの平均パス長によって決まります。UNIX と Linux では、パス名で文字当たり 1 バイトを見積もってください。Mac OS X では、パス名で文字当たり 4 バイトを見積もってください。例えば、バックアップされるファイルおよびディレクトリーが 1,000,000 個あり、平均パス長が 200 文字である場合、データベースは、UNIX と Linux では約 200 MB を占有し、Mac OS X クライアントでは約 800 MB を占有します。計画の目的で見積もるためのもう 1 つの方法では、ファイルおよびディレクトリーの数に最長パスの長さを掛けて、最大データベース・サイズを設定します。

HSM 管理対象ファイル・システムをバックアップする場合、マイグレーション済みファイルのリスト用に 2 番目のディスク・キャッシュ・ファイルが作成されます。ディスク・キャッシュ増分バックアップと HSM 管理対象ファイル・システム・バックアップの組み合わせによって作成されるディスク・キャッシュ・ファイルには、バックアップされる 100 万個のファイルごとに 400 MB を超えるディスク・スペースが必要になる場合があります。ディスク・キャッシュ・ファイルは、非常に大きくなる場合があります。ディスク・キャッシュ・ファイルに使用されているファイル・システム上でラージ・ファイル・サポートを有効にする必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。

構文

➡ `DISKCACHELocation` — — *path* ➡

パラメーター

path

`memoryefficientbackup=diskcachemethod` の場合に作成されるディスク・キャッシュ・データベースの位置を指定します。デフォルト位置では、処理されるファイル・スペースのルートにディスク・キャッシュ・ファイルを作成します。

例

オプション・ファイル:

```
diskcachelocation /home
diskcachelocation /Volumes/hfs2
```

コマンド・ライン:

適用しません。

`include.fs` について詳しくは、[447 ページの『include オプション』](#)を参照してください。

Domain

`domain` オプションは、増分バックアップに何を組み込むかを指定します。

ドメイン・オブジェクトは、ファイル指定なしで **incremental** コマンドを開始した場合にのみバックアップされます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、以下の状態では、ドメイン値を使用して、増分バックアップ中に処理するファイル・システムを決定します。

- **incremental** コマンドを使用して増分バックアップを実行し、処理するファイル・システムを指定しない場合。
 - IBM Spectrum Protect 管理者がユーザーの代わりに増分バックアップを実行するスケジュールを定義していて、処理するファイル・システムを指定しない場合。
 - バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI からドメインのバックアップ・アクションを選択した場合
 - **incremental** コマンドを使用して増分バックアップを実行し、処理するドライブを指定しない場合。
 - IBM Spectrum Protect 管理者がユーザーの代わりに増分バックアップを実行するスケジュールを定義していて、処理するドライブを指定しない場合。
 - バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI からドメインのバックアップ・アクションを選択した場合
- domain オプションは、以下の場所で定義することができます。
- オプション・ファイル。
 - コマンド・ラインでのクライアント・コマンドとの入力。
 - **define clientopt** コマンドによってサーバーに定義されたクライアント・オプション・セット内。
 - **define schedule** コマンドによってサーバーに定義された、スケジュールされたコマンドのオプションとして。

上記のソースのいずれかにドメイン定義が含まれる場合、クライアントはそのドメインをバックアップします。複数のソースが1つのドメインを指定する場合、クライアントは指定されたすべてのドメインをバックアップします。同じドメイン・オブジェクトを複数回にわたって定義することはできますが、その結果は1回のみ定義するのと同じです。ドメインを指定しない場合、クライアントはデフォルトのドメインをバックアップします (all-local パラメーターを参照)。

オブジェクトの前に排他演算子 (-) を指定することによって、オブジェクトをドメインから除外することができます。いずれかのドメイン定義がオブジェクトを除外する場合、そのオブジェクトは別の定義に含まれている場合でもドメインから除外されます。all- で始まるドメイン・キーワードの前にドメイン排他演算子 (-) を使用することはできません。

ドメイン・ステートメントが1つ以上のオブジェクトを除外しており、いずれのドメイン・ステートメントにもオブジェクトが含まれていない場合、結果は空ドメイン (なにもバックアップされない) になります。いずれかのドメイン・ステートメントがオブジェクトを除外している場合、オブジェクトを指定してドメインに組み込む必要があります。

例 1: この例では、1つのドメイン・ステートメントを使用して、/fs1 を除くすべてのローカル・ファイル・システムをバックアップします。

```
domain all-local -/fs1
```

例 2: この例では、複数のドメイン・ステートメントを使用して、/fs1 を除くすべてのローカル・ファイル・システムをバックアップします。

```
domain all-local domain -/fs1
```

例 3: この例では、バックアップ操作時に /fs1 を除外します。その他のドメイン・ステートメントを使用しない場合、結果は空ドメインになります。なにもバックアップされません。

```
domain -/fs1
```

ファイルを指定して incremental コマンドを開始すると、クライアントはすべてのドメイン定義を無視し、ファイル指定のみをバックアップします。

クライアント・ドメインには仮想マウント・ポイントを組み込むことができます。

重要: マルチノード・クラスターで GPFS for AIX または GPFS for Linux x86_64 を実行していて、すべてのノードがマウント済み GPFS ファイル・システムを共有している場合には、クライアントはこのファイル・システムをローカル・ファイル・システムとして処理します。クライアントは、増分バックアップ中に、

各ノード上のファイル・システムをバックアップします。この状態を避けるには、次のタスクのいずれか1つを実行することができます。

- クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) 中の domain ステートメントを明示的に構成して、ノードをバックアップしたいファイル・システムをリストします。
- クライアント・システム・オプション・ファイル内の exclude.fs オプションを、バックアップ・サービスから GPFS ファイル・システムを除外するように設定する。

自動マウント・ファイル・システム

domain オプションを all-local に設定してバックアップを実行した場合、自動マウント機能およびループバック・ファイル・システムによって処理されたファイルはバックアップされません。

domain オプションを all-local に設定してファイル・システムをバックアップした場合、自動マウント・ファイル・システム (AutoFS) のマウント・ポイントであるサブディレクトリーは、バックアップ操作から除外されます。自動マウントされたサブディレクトリー用にサーバー上に存在するファイルは、有効期限切れになります。

domain オプションを all-lofs に設定してバックアップを実行した場合、すべての明示的ループバック・ファイル・システム (LOFS) がバックアップされ、すべての自動マウント・ファイル・システムは除外されます。自動マウント機能によって処理されるループ装置およびローカル・ファイル・システムについては、domain オプションを all-auto-lofs に設定します。

1つ以上の自動マウント・ファイル・システムをマウントしてドメインに追加するように指定するには、domain パラメーター (all-auto-nfs および all-auto-lofs) と一緒に automount オプションを使用します。automount オプションを指定すると、自動マウント・ファイル・システムは、**incremental** コマンドの実行中にオフラインになった場合、再マウントされます。

仮想マウント・ポイントは、自動マウント・ファイル・システムには使用できません。

重要: 一部の Linux ディストリビューションでは、自動マウント・ファイル・システムのマウント・ポイント、あるいはファイル・システム・タイプのマップ (AutoFS) が、現行マウント表にリストされない場合があります。その結果、バックアップ処理またはアーカイブ処理中にアンマウントされた自動マウント・ファイル・システムが、適切に処理されず、ドメイン all-local、all-nfs、あるいは all-lofs など (実際のファイル・システム・タイプによって異なります) の誤ったドメインの一部として保管される可能性があります。したがって、そのような Linux ディストリビューション環境では、すべてのポイント・イン・タイムでドメイン・オプション設定が正しく処理されるように、適切な automount オプション設定を指定する必要があります。

Mac OS X の場合、自動マウント・ファイル・システムはサポートされていません。自動マウント・ファイル・システムが domain ステートメントの一部である場合、バックアップが失敗し、その自動マウント・ファイル・システム内のどのファイルも処理されません。ホスト・システムから自動マウント・ファイル・システムをバックアップし、リストアします。自動マウント・ファイル・システムをネットワーク接続を介してバックアップまたはリストアしないでください。

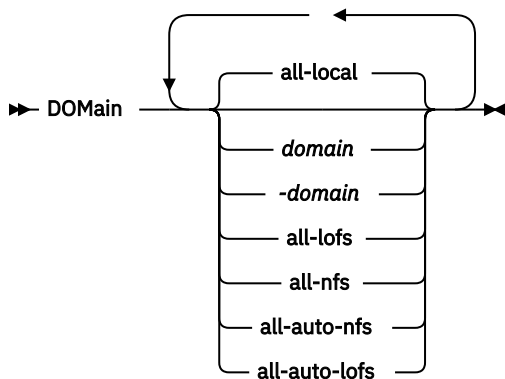
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、オプション・ファイル dsm.opt または dsm.sys に入れます。dsm.sys ファイルでは、このオプションはサーバー・スタンザ内に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「バックアップ」タブの「バックアップするドメイン」セクションで設定することができます。

構文



パラメーター

all-local

LOFS ファイル・システムと自動マウント機能を介した LOFS を除く、すべてのローカル・ファイル・システムをバックアップします。このパラメーターがデフォルトです。/tmp ディレクトリーは含まれていません。

domain

デフォルトのクライアント・ドメインに含めるファイル・システムを定義します。

domain を **incremental** コマンドに使用すると、これらのファイル・システムは、デフォルト・クライアント・ドメイン内で指定したファイル・システムに加えて処理されます。

-domain

デフォルト・クライアント・ドメインで除外するファイル・システムを定義します。

all-lofs

自動マウント機能が扱うファイル・システムを除いて、すべてのループバック・ファイル・システムをバックアップします。このパラメーターは、Mac OS X ではサポートされません。

注: Linux では、該当する /etc/fstab 項目を構成して、**bind mount** を all-lofs ドメインに組み込む必要があります。

all-nfs

自動マウント機能が扱うファイル・システムを除いて、すべてのネットワーク・ファイル・システムをバックアップします。このパラメーターは、Mac OS X ではサポートされません。

all-auto-nfs

自動マウント機能が扱う、すべてのネットワーク・ファイル・システム (ローカル・ファイル・システムを除く) をバックアップします。このパラメーターは、Mac OS X ではサポートされません。

all-auto-lofs

自動マウント機能によって扱う、すべてのループ・デバイスおよびローカル・ファイル・システムをバックアップします。このパラメーターは、Mac OS X ではサポートされません。

object

ドメインに組み込むドメイン・オブジェクトを指定します。

オブジェクト名にスペースが含まれる場合には、オブジェクト名を引用符で囲む必要があります。

-object

ドメインから除外するドメイン・オブジェクトを指定します。

オブジェクト名にスペースが含まれる場合には、オブジェクト名を引用符で囲む必要があります。

例

オプション・ファイル:

オプション・ファイルに複数の **domain** ステートメントを含めることができます。ただし、それぞれの **domain** ステートメントは、オプション・ファイル内の単一のステートメントの例です。

```
domain all-local
domain all-local -/Volumes/volume2
domain all-local '-/Volumes/Macintosh HD'
```

```
domain /tst /datasave /joe
"domain all-local"
domain ALL-LOCAL -/home
domain ALL-NFS -/mount/nfs1
```

単一のドメイン・ステートメントはドメインの 1 つ以上のオブジェクトをリストすることができます。複数のドメイン・ステートメントを使用することができます。2 つのオプション・ファイルからの下記の 2 つの例では、ドメインの結果が同じになります。

例 1

```
...
domain fs1
domain all-local
domain -fs3
...
```

例 2

```
...
domain all-local fs1 -fs3
...
```

コマンド・ライン:

```
-domain="/ /Volumes/volume2"
-domain="all-local -/Volumes/volume2"
```

```
-domain="/fs1 /fs2"
-domain=/tmp
-domain="ALL-LOCAL -/home"
```

ドメイン定義の相互作用

ドメインは複数のソースで定義することができ、その結果はすべてのドメイン定義の合計です。ドメイン定義の相互作用の例のように、複数のソースのドメイン定義がさまざまなバックアップの結果を引き起こすことを考慮してください。表内の、**FS** の後に番号が付けられているもの (例えば、**FS1**) はファイル・システムです。この表には、コマンド・ラインで入力されるコマンドのみが示されています。スケジュール・コマンドの場合、コマンド・ラインの列は関連がないため、スケジュール・コマンドのオプションを検討する必要があります。

表 73. 複数ソースからのドメイン定義の相互作用			
オプション・ファイル	コマンド・ライン	クライアント・オプション・セット	incremental コマンドを使用してバックアップされるオブジェクト
domain FS1	incremental - domain=FS2	domain FS3	FS1 FS2 FS3
domain FS1	incremental	domain FS3	FS1 FS3

表 73. 複数ソースからのドメイン定義の相互作用 (続き)			
オプション・ファイル	コマンド・ライン	クライアント・オプション・セット	incremental コマンドを使用してバックアップされるオブジェクト
	incremental -domain=FS2		FS2
	incremental -domain=FS2	domain FS3	FS2 FS3
	incremental	domain FS3	FS3
	incremental		all-local
domain all-local	incremental	domain FS3	all-local + FS3
domain all-local domain -FS1	incremental		all-local (FS1 は除く)
domain -FS1	incremental		なし
domain FS1 FS3	incremental	domain -FS3	FS1
domain all-local	incremental	domain -FS3	all-local (FS3 は除く)
	incremental FS1 -domain=all-local		FS1
	incremental FS1	domain all-local	FS1
domain -FS1	incremental FS1		FS1

関連情報

仮想マウント・ポイントの定義については、[595 ページの『Virtualmountpoint』](#)を参照してください。

ドメインにマウントされ、追加される 1 つ以上の自動マウント・ファイル・システムの指定について詳しくは、[353 ページの『Automount』](#)を参照してください。

Domain.image

domain.image オプションは、イメージ・バックアップ用にクライアント・ドメインに何を組み込むかを指定します。

ファイル・システムを **backup image** コマンドに指定しない場合には、domain.image オプションで指定したファイル・システムがバックアップされます。

ファイル・システムを **backup image** コマンドに指定した場合には、domain.image オプションは無視されます。

クライアント・オプション・ファイルで domain.image オプションを使用してファイル・システムを指定せず、ファイル・システムを **backup image** コマンドで指定しない場合には、メッセージが出され、バックアップは実行されません。

サポートされるクライアント

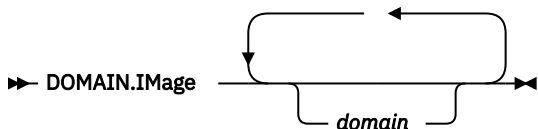
このオプションは、AIX、Linux x86_64、Linux on POWER、および Solaris で有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

このオプションは、サポートされるすべての Windows クライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「バックアップ」>「バックアップ用ドメイン」ボックスで設定できます。

構文



パラメーター

domain

デフォルト・クライアント・イメージ・ドメインに含めるファイル・システムまたは ロー論理ボリュームを定義します。

例

オプション・ファイル:

domain.image /fs1 /fs2

コマンド・ライン:

適用しません。

Domain.nas

domain.nas オプションは、NAS イメージ・バックアップに組み込むボリュームを指定します。

all-nas を指定すれば、exclude.fs.nas オプションによって除外するものを除き、NAS ファイル・サーバー上のすべてのマウント済みファイル・システムを組み込むことができます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ユーザーが **backup nas** コマンドを実行し、処理するボリュームを指定しない場合に、この NAS イメージ・バックアップ用のドメインを使用します。

このオプションをクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) で使用した場合、domain.nas オプションによって NAS イメージ・バックアップ用のデフォルト・ドメインが定義されます。 **backup nas** コマンドを使用して NAS ファイル・システム・イメージ・バックアップを実行した場合には、クライアントはコマンド・ラインに指定されたボリュームを dsm.sys ファイルに定義されているボリュームに追加します。例えば、dsm.sys ファイルに domain.nas nas1/vol/vol0 nas1/vol/vol1 を入力し、コマンド・ラインに dsmc backup nas -nasnodename=nas1/vol/vol2 を入力すると、クライアントは、ノード nas1 上の vol/vol0、vol/vol1、および vol/vol2 ボリュームをバックアップします。

dsm.opt ファイル内の domain.nas オプションを all-nas に設定した場合には、クライアントは NAS ファイル・サーバー上のすべてのマウントされたボリュームをバックアップします。バックアップの実行時に、ファイル指定を使用し、dsm.sys ファイル内の domain.nas オプションに all-nas を設定した場合、all-nas が優先します。

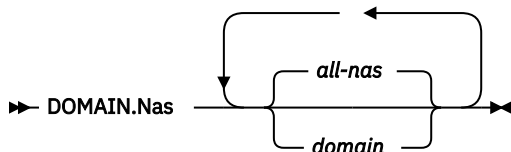
サポートされるクライアント

このオプションは、AIX クライアントおよび Solaris クライアントにのみ有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

domain

処理したいボリュームを定義します。ダッシュ (-) オペレーターを指定して、ボリュームを除外できません。

all-nas

exclude.fs.nas オプションによって除外する場合を除き、NAS ファイル・サーバー上のすべてのマウント済みファイル・システムを処理します。これがデフォルトです。dsm.opt ファイル内に domain.nas ステートメントが存在せず、コマンド・ラインにボリュームが指定されていない場合、クライアントは NAS サーバー上のマウントされたボリュームをすべてバックアップします。

例

オプション・ファイル:

```
domain.nas nas1/vol/vol0 nas1/vol/vol1
domain.nas all-nas
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Domain.vmfull

domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

VMware 仮想マシンの Domain.vmfull

VMware 仮想マシンのバックアップでは、domain.vmfull オプションは vmchost オプションと連携します。vmchost オプションは、vCenter サーバーまたは保護する仮想マシンを含む ESX サーバーを特定します。domain.vmfull パラメーターを使用すると、システムで稼働している、vmchost で特定した仮想マシンのサブセットに操作のフォーカスを絞り込むことができます。

次のいずれかの方法を使用して、どの仮想マシンが処理されるかを指定します。

- VM= オプションを使用して仮想マシンの名前を指定します。
- 複数の仮想マシン名をコンマ区切りのリストで与えます。
- ワイルドカード構文を使用して、名前のパターンに一致する仮想マシンを処理させます。
- 以下のドメイン・レベルのパラメーターの 1 つを使用します。

```
all-vm
all-windows
schedule-tag
vmchost
vmfolder
vmhostcluster
```

```
vmdatastore
vmresourcepool
vmhostfolder
vmdatacenter
```

ドメイン・レベルのパラメーターを使用すると、ドメイン内に作成される仮想マシンが、次のバックアップ実行時に自動的に組み込まれます。例えば、フォルダー内に組み込まれるすべての仮想マシンをバックアップするのに **vmfolder** パラメーターを使用した場合、そのフォルダーに追加される新しい仮想マシンはすべて、次のバックアップに組み込まれます。ワイルドカード一致により含まれたパターン一致の名前の場合でも同じことになります。

domain.vmfull オプションで指定する仮想マシンが処理されるのは、仮想マシンまたは仮想マシンのリストを指定せずに **backup vm** コマンドをコマンド・ラインで入力した場合のみです。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

サーバーもこのオプションを定義することができます。

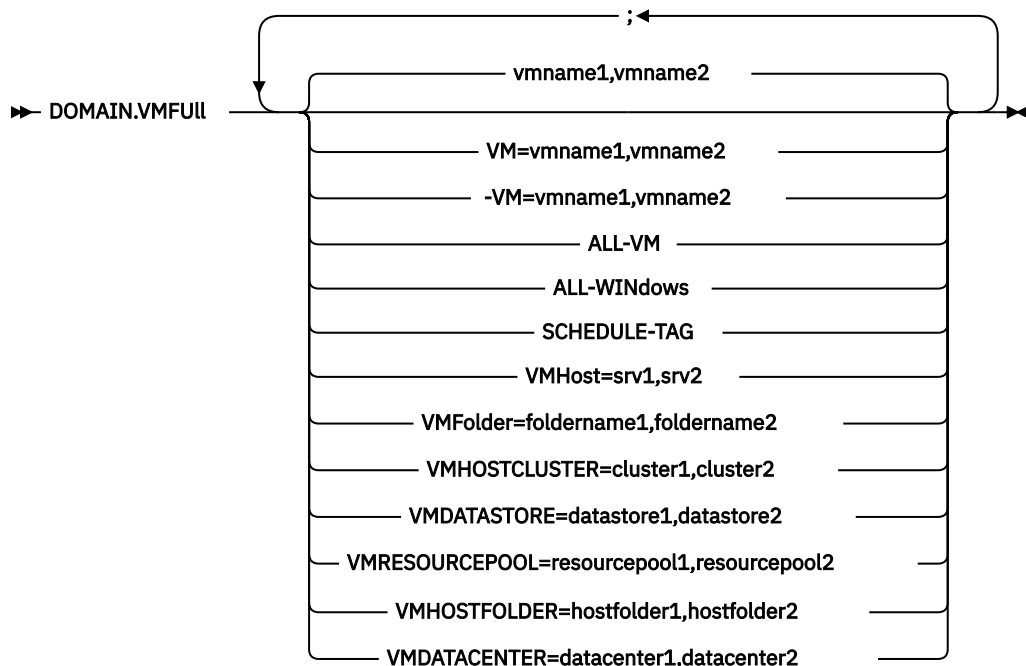
オプション・ファイル

このオプションは、コマンド・ラインを使用するかまたはプリファレンス・エディターの「**VM バックアップ**」タブを使用して、クライアント・オプションに設定します。

制約事項: 以下のパラメーターは、プリファレンス・エディターには設定できません。この設定は、オプション・ファイルに設定するか、**backup vm** コマンドの実行時にコマンド・ラインに指定してください。

```
vmname:vmname1,vmname2
schedule-tag
vmresourcepool
vmhostfolder
vmdatacenter
```

VMware 仮想マシンの構文



構文規則: 複数のキーワードを指定する場合は、セミコロンで区切る必要があります。セミコロンの後にスペースを含めないでください。複数の仮想マシン名やドメイン・ネームはコンマで区切り、スペース文字は入れないでください。例えば、`vm=vmname` を参照してください。複数の仮想マシンまたはドメイン名についての規則は、"Schedule-Tag" キーワードを使用している場合には適用されません。

パラメーター

vmname

処理する仮想マシン名を指定します。この名前は、仮想マシンの表示名です。仮想マシンのホスト名のリストはコンマで名前を区切って指定できます (`vm1,vm2,vm5`)。この名前は大/小文字を区別します。

vm=vmname

`vm=` キーワードは、次の値のセットが、仮想マシンの名前のリストであることを指定します。`vm=` キーワードはデフォルトであり、必須ではありません。

次の例では、`vm=` が指定されておらず、コンマがマシン名の区切りに使用されています。

```
domain.vmfull my_vm1,my_vm2
```

`vm=` および `vmfolder=` などの複数のキーワードを指定する場合、キーワードが参照する値はセミコロンで区切り、間にスペース文字は入れないでください。

```
domain.vmfull vm=my_vm1;vm=my_vm2
domain.vmfull vm=my_vm1;vmfolder=folder1;vmfolder=folder2
```

ワイルドカード文字を使用すると、パターンに一致する仮想マシン名を選択できます。アスタリスク (*) は任意の文字のシーケンスと一致します。疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。

- ホスト名に「test」が含まれているすべてのファイルを除外する: `-vm=*test*`
- 「test20」、「test25」、「test29」、「test2A」などの名前を持つすべての仮想マシンを組み込む:
`vm=test2?`

`vm=` キーワードの前に除外演算子 (-) を指定すると、バックアップ操作から仮想マシンを除外することができます。例えば、`-vm` は、ドメイン・レベル・バックアップ ALL-Windows、ALL-VM、VMFolder から特定のマシン (1 つまたは複数) を除外するために使用されます。例えば、「accountingDept」という名前のフォルダー内の 1 つの仮想マシンの名前が「vm1」の場合、フォルダー内のすべての仮想マシンをバックアップするが、仮想マシン「vm1」はバックアップしないようにすることができます。次のオプションを設定します。

```
domain.vmfull VMFolder=accountingDept;-vm=vm1
```

除外演算子 (-) は、ALL-VM、ALL-Windows、または VMFolder などのドメインを除外するためには使用できません。除外演算子は、仮想マシン名レベルでのみ機能します。

vmname:vmdbk=vmdbk_label

`:vmdbk=` キーワードは、VMware 仮想マシンにのみ適用され、使用するには IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のライセンスが必要です。

通常、このオプションは、バックアップ対象からディスクを除外するために使用されます (`: -vmdbk` 構文を参照)。また、INCLUDE.VMDISK オプションを使用して仮想マシンのディスクを組み込む、あるいは、EXCLUDE.VMDISK オプションを使用して仮想マシンのディスクを除外することもできます。

仮想マシン内の仮想ディスクは、各仮想ディスクを一意的に識別するディスク・ラベルを持っています。`:vmdbk=` キーワードを使用して、**Backup VM** 操作に組み込む仮想ディスクのラベルを指定します。`:vmdbk=` およびディスク・ラベルを指定しないと、仮想マシン内のすべての仮想ディスクがバックアップされます。

「my_vm_example」という名前の仮想マシンがあると仮定します。この仮想マシンには、4 つのディスク (ラベルはそれぞれ Hard Disk 1、Hard Disk 2、Hard Disk 3、Hard Disk 4) があるとします。Hard Disk 2 と Hard Disk 3 のみをバックアップに組み込むには、`:vmdbk=` キーワードとそれらのデ

ディスクのディスク・ラベルを追加します。ディスク・ラベルにはスペース文字が含まれているので、パラメーターを引用符で囲む必要があります。例えば次のとおりです。

```
domain.vmfull "my_vm_example:vmdk=Hard Disk 2:vmdk=Hard Disk 3"
```

次の例では、VM1 上の Hard Disk 1 と Hard Disk 2、および VM2 上の Hard Disk 3 と Hard Disk 4 をバックアップします。仮想マシン情報を区切るにはコンマを使用します。

```
domain.vmfull "vm1:vmdk=Hard Disk 1:vmdk=Hard Disk 2",  
"vm2:vmdk=Hard Disk 3:vmdk=Hard Disk 4"
```

-vm= キーワードと同様に、:vmdk= と共に除外演算子(-)を使用しても、バックアップ操作からディスクを除外することができます。

仮想マシン (vm1) をバックアップし、Disk 3 および 4 を除外するには、次の構文を使用します。

```
domain.vmfull "vm1:-vmdk=Hard Disk 3:-vmdk=Hard Disk 4"
```

2 つの仮想マシン、vm1 および vm2 をバックアップし、各マシンの最初の 2 つのディスクを除外する場合には、次の構文を使用します。

```
domain.vmfull "vm1 :-vmdk=Hard Disk 1:-vmdk=Hard Disk 2",  
"vm2:-vmdk=Hard Disk 1:-vmdk=Hard Disk 2"
```

domain.vmfull ステートメントで 1 つ以上のディスクを組み込むことができます。

domain.vmfull ステートメントで 1 つ以上のディスクを除外することができます。同じステートメントに組み込むディスクと除外するディスクを混在させることができます。例えば、次のステートメントは有効です。

```
domain.vmfull  
"vm1:vmdk=Hard Disk 1:-vmdk=Hard Disk 2:vmdk=Hard Disk 3:vmdk:Hard Disk 4"
```

include ステートメントが存在する場合、他のディスクも include ステートメントで指定しない限りは、仮想マシンの他のすべてのディスクはバックアップ操作から除外されます。例えば、次のステートメントは、Hard Disk 1 以外の vm1 上のすべてのハード・ディスクを除外します。

```
domain.vmfull "vm1:vmdk=Hard Disk 1"
```

次の例のいずれも、vm1 のバックアップから Hard Disk 4 を除外します。

```
domain.vmfull "vm1:vmdk=Hard Disk 1:vmdk=Hard Disk 2:vmdk=Hard Disk 3"  
domain.vmfull "vm1:-vmdk=Hard Disk 4"
```

all-vm

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center または ESX サーバーに対して定義されているすべての仮想マシンを処理します。

all-windows

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center または ESX サーバーに対して定義されているすべての仮想マシンを処理します。また、仮想マシンのゲスト・オペレーティング・システム・タイプが Windows である必要があります。

schedule-tag

VMware 仮想マシンのスケジュール済みバックアップの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center サーバーに定義されているすべての仮想マシンを処理します。

IBM Spectrum Protect サーバー管理者は、このオプションをスケジュール定義に追加して、スケジュールが Schedule (IBM Spectrum Protect) カテゴリおよびタグと互換性があることを指定します。Schedule タグで割り当てられている VMware オブジェクト内の仮想マシンは、そのスケジュールに従ってバックアップされます。

要件: タグ付けとの互換性を確保するには、スケジュール定義の -domain.vmfull オプションに、Schedule-Tag パラメーター以外の追加のドメイン・レベル・パラメーターが含まれてはなりません。

せん。それ以外の場合、Schedule (IBM Spectrum Protect) タグは無視されます。このオプションは、大/小文字を区別しません。また、スペースが含まれていてはなりません。Schedule-Tag パラメーターを囲む引用符はオプションです。非互換スケジュールでタグ付けされた VMware コンテナ内の仮想マシンはバックアップされません。

Schedule タグについて詳しくは、「サポートされるデータ保護タグ」を参照してください。

vmhost=hostname

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center または ESX サーバーに対して定義されているすべての仮想マシンを処理します。指定するホスト名は、vCenter サーバーの「ホストおよびクラスター」ビューで指定されている完全修飾ホスト名または IP アドレスと一致していなければなりません。

このホストに追加される仮想マシンはすべてバックアップおよびリストア 処理に自動的に組み込まれます。仮想マシンを組み込むためには、仮想マシンが、ホスト名により指定された ESX サーバーでも稼働している必要があります。パワーオフしてはいけません。

このパラメーターには、複数の ESX サーバーをコンマで区切って指定することができます。Virtual Center に複数の ESX サーバーが含まれる場合、このオプションはスナップショットの取得元の ESX サーバーを判別しません。スナップショットの取得元の ESX サーバーは、VMware VirtualCenter Web サービスにより判別されます。

ユーザーが ESXi または ESX ホストに直接接続しているときに vmchost オプションが適用されるのは、**vmhost** がその接続先のサーバーである場合のみです。そうでない場合は、警告レベルのメッセージがコンソールに送信されて、dsmerror.log ファイルに記録されます。サーバー・イベント・メッセージとしても記録されます。

vmenabletemplatebackups オプションが yes に設定されており、VM テンプレートがドメインの一部の場合は、そのテンプレートがバックアップに組み込まれます。

制約事項: 仮想マシンの VMware テンプレートが、ESX または ESXi ホスト内にある場合にはバックアップできません。ESX および ESXi ホストがテンプレートをサポートしていないためです。

vmfolder=foldername

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center または ESX サーバーに対して定義されているすべての仮想マシンを処理します。仮想マシンは、フォルダー名で指定された VMware フォルダー内にも存在している必要があります。フォルダー名には、複数の VMware フォルダーをコンマで区切って指定することができます。

vmhostcluster=hostclustername

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center または ESX サーバーに対して定義されているすべての仮想マシンを処理します。仮想マシンは、ホスト・クラスター名によって指定された ESX ホスト・クラスターでも稼働している必要があります。複数のホスト・クラスター名を組み込むには、クラスター名を次のようにコンマで区切ります。

VMHOSTCLUSTER=cluster1,cluster2

vmenabletemplatebackups オプションが yes に設定されており、VM テンプレートがドメインの一部の場合は、そのテンプレートがバックアップに組み込まれます。ユーザーが ESXi または ESX ホストに直接接続している場合は、VMware ホスト・クラスターは使用可能ではありません。ESXi/ESX ホストに直接接続した状態でホスト・クラスターを含むドメインが処理されると、警告レベルのメッセージがコンソールに送信されて、dsmerror.log ファイルに記録されます。サーバーのイベント・メッセージとしても記録されます。

vmdatastore=datastorename

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center または ESX サーバーに対して定義されているすべての仮想マシンを処理します。仮想マシン用に構成されたデータ・ストア・ロケーションは、datastorename で指定されたデータ・ストア名と一致していなければなりません。データ・ストア名には、コンマで区切られた複数のデータ・ストアを指定できます。VMDATASTORE=datastore1,datastore2

仮想マシンは、複数のデータ・ストア上にそれぞれのディスク (vmdk ファイル) を持つことが可能ですが、デフォルトのデータ・ストア・ロケーションは 1 つだけです。そのデフォルトのデータ・ストア・

ロケーションが、仮想マシン構成で定義され、仮想マシン構成ファイル (.vmx file) が常に位置する場所となります。ドメイン・キーワードを使用してバックアップするマシンを選択する場合、仮想マシン構成ファイル、および仮想マシンのディスクのすべてがバックアップに組み込まれ、その中にはドメインとして指定したデータ・ストアとは異なるデータ・ストアにあるディスクも組み込まれます。

vmresourcepool=resourcepoolname

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center サーバーに定義されているすべての仮想マシンを処理します。仮想マシンは、リソース・プール名で指定された VMware リソース・プール内にも存在している必要があります。リソース・プール名には、VMRESOURCEPOOL=resourcepool1,resourcepool2 のようにコンマで区切られた複数のリソース・プールを指定できます。

vmhostfolder=hostfoldername

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center サーバーに定義されているすべての仮想マシンを処理します。仮想マシンは、フォルダー名で指定された VMware ホスト・フォルダー内にも存在している必要があります。ホスト・フォルダー名には、VMHOSTFOLDER=hostfolder1,hostfolder2 のようにコンマで区切られた複数の VMware ホスト・フォルダーを指定できます。

vmdatacenter=datacentername

VMware 仮想マシンの場合。このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center サーバーに定義されているすべての仮想マシンを処理します。仮想マシンは、データ・センター名で指定された VMware データ・センター内にも存在している必要があります。データ・センター名には、VMDATACENTER=datacenter1,datacenter2 のようにコンマで区切られた複数のデータ・センターを指定できます。

ヒント: 複数のコンテナ・タイプ (vmfolder=folder1 および vmhostcluster=cluster2 など) を指定する場合、folder1 および cluster2 に含まれているすべての仮想マシンは保護されます。仮想マシンは folder1 と cluster2 の両方に含まれている必要はありません。

この例に示されているように、仮想マシンを指定することができます。
domain.vmfull=vmfolder=folder1;vmhostcluster=cluster2

VMware 仮想マシンの例

オプション・ファイル:

すべての仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull all-vm
```

名前の接尾部が _test である仮想マシン以外のすべての仮想マシンをフル VM バックアップに組み込みます。

```
domain.vmfull all-vm;-vm=*_test
```

オペレーティング・システムが Windows であるすべての仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull all-windows
```

クラスター・サーバー 1、2、および 3 のすべての仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull vmhostcluster=cluster1,cluster2,cluster3
```

datastore1 内のすべての仮想マシン・データをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull vmdatastore=datastore1
```

すべての仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みますが、仮想マシン testvm1 および testvm2 は除外します。

```
domain.vmfull all-vm;-VM=testvm1,testvm2
```

lab1 および lab2 という名前の VM フォルダー内で定義されている仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull vmfolder=lab1,lab2
```

「brovar」、「doomzoo」、および「kepler」という名前の ESX ホスト上にあるすべての仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull vmhost=brovar.example.com,  
doomzoo.example.com,kepler.example.com
```

VMware リソース・プール resourcepool_A および resourcepool_B 内の仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull vmresourcepool=resourcepool_A,resroucepool_B
```

VMware ホスト・フォルダー hostfolder1 および hostfolder2 で定義されている仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull vmhostfolder=hostfolder1,hostfolder2
```

VMware データ・センター dc1 内のすべての仮想マシンをフル VM バックアップ操作に組み込みます。

```
domain.vmfull vmdatacenter=dc1
```

関連資料

[780 ページの『サポートされるデータ保護タグ』](#)

IBM Spectrum Protect データ保護タグを VMware インベントリー・オブジェクトに割り当てることで、仮想マシン・バックアップを管理する方法を制御することができます。

[420 ページの『Exclude.vmdisk』](#)

EXCLUDE.VMDISK オプションは、仮想マシン・ディスクをバックアップ操作から除外します。

[456 ページの『Include.vmdisk』](#)

INCLUDE.VMDISK オプションは、バックアップ操作に仮想マシン (VM) ディスクを組み込みます。ディスク・ラベルを指定しない場合は、VM のすべてのディスクがバックアップされます。

Dontload

x86_64 Linux クライアントでは、dontload オプションを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントの開始時に特定のプラグイン・ライブラリーがロードされないようにすることができます。

Linux x86_64 ディストリビューションで提供される TIVsm_BAhdw.x86_64 パッケージには、NetAPP および N-Series ファイル・サーバーのスナップショット増分バックアップをサポートするために必要なソフトウェアが含まれています。仮想マシンのデータ・ムーバー操作を実行するために使用する Linux x86_64 システムにこのパッケージをインストールすると、パッケージ内のファイルが原因となってすべての VMware バックアップ操作が失敗します。この種の失敗が発生すると、以下のメッセージが表示されます。

ANS8811E

ハードウェア・プラグイン製品 TIVsm-BAhdw がインストールおよびロードされると、VMware 操作を実行できません。ハードウェア・プラグイン製品 TIVsm-BAhdw をアンインストールするか、ハードウェア・プラグインがロードされないようにオプション・ファイルでオプション DONTLOAD PIHDW を設定してください。

このオプションを使用して、クライアントの開始時にプラグイン・ライブラリーが RAM にロードされないようにします。別の方法として、TIVsm_BAhdw パッケージがスナップショット操作に不要な場合は、このパッケージをアンインストールすることができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントにのみ有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

►► DONTLoad — PIHDW ◄◄

パラメーター

PIHDW

クライアントの開始時にハードウェア・プラグイン (TIVsm-BAhbw) を RAM にロードしないことを指定します。ハードウェア・プラグインをインストール済みのバックアップ/アーカイブ・クライアントでこのオプションを使用すると、VMware 仮想マシンでバックアップ・アーカイブ操作を実行する際にこのプラグインが原因でエラーになる事態を防止できます。dontload オプションにはデフォルト値はありません。

プラグインがインストールされているかどうかを判別するには、以下のコマンドを入力して出力を調べてください。

```
rpm -q -a | grep TIV
```

出力に「TIVsm-BAhbw」で始まる (その後にバージョンを示すストリングが続く) パッケージが含まれていれば、このハードウェア・プラグイン・パッケージがインストールされています。

例

オプション・ファイル:

```
DONTLoad PIHDW
```

コマンド・ライン:

適用しません。このオプションはコマンド・ラインからは使用しないでください。

関連資料

[670 ページの『Backup VM』](#)

[747 ページの『Restore VM』](#)

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

Dynamicimage

dynamicimage オプションを **backup image** コマンドまたは **include.image** オプションと一緒に使用して、動的イメージ・バックアップを実行することを指定します。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Solaris、およびすべての Linux クライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

dynamicimage 値を含む **include.image** ステートメントを、システム・オプション・ファイル dsm.sys 内のサーバー・スタンザに入れてください。このオプションはプリファレンス・エディターを使用して設定することもできます。

構文

► DYNAMICImage — — value ◄

パラメーター

value

以下の値の 1 つを指定します。

yes

ボリュームが読み取り専用としてアンマウントおよび再マウントできない場合にのみ、このオプションを使用してください。クライアントは、ボリュームを読み取り専用として再マウントせずに現状のままバックアップします。バックアップが進行中のときにアプリケーションがボリュームに書き込みを行った場合には、バックアップが破壊される可能性があります。この場合は、リストア後に `fsck` を実行し、ボリュームへのアクセスを回復するためにファイル・システムを手動でマウントしてください。このオプションは、AIX、Solaris、およびすべての Linux クライアントに有効です。

注：このオプションは、AIX JFS2 ファイル・システムでは使用できません。

no

このオプションは、動的イメージ・バックアップを実行しない場合に使用します。これがデフォルトです。デフォルトの動作は、プラットフォームおよびファイル・システムのタイプによって異なります。スナップショットをサポートするプラットフォームおよびファイル・システム (具体的には AIX JFS2 ファイル・システムおよび LINUX LVM ファイル・システム) の場合、デフォルトはスナップショット・ベースのイメージ・バックアップです。それ以外のすべての UNIX プラットフォームおよびファイル・システムのデフォルトは、静的イメージ・バックアップです。

例

オプション・ファイル:

```
include.image /kalafs1 dynamicimage=yes
```

バックアップ・イメージでのコマンド・ライン:

```
dynamicimage=yes
```

Efsdecrypt

`efsdecrypt` オプションを使用すると、AIX 暗号化ファイル・システム (EFS) で暗号化されたファイルを暗号化形式または復号形式で読み取るかどうかを制御できます。

`efsdecrypt` オプションのデフォルトは `no` です。これは、暗号化されたデータ (またはロー・データ) をバックアップすることを指定します。`yes` を指定すると、ファイルは平文としてバックアップされます。つまり、このファイルは、ファイル・システムに暗号化されていない形式で存在しているかのように、通常のファイルとしてバックアップされます。

重要: EFS で暗号化されたファイルを含むバックアップを実行する場合は、必ず `efsdecrypt` オプションが正しく指定されていることを確認する必要があります。2 つの増分バックアップ間での `efsdecrypt` オプション値を変更した場合は、それらのバックアップが最後のバックアップ以降に変更されていなくても、EFS ファイル・システム上のすべての暗号化されたファイルは、再度、バックアップされます。例えば、「ロー」として前にバックアップされた暗号化ファイルの増分バックアップを実行する場合は、`efsdecrypt` が `no` に指定されていることを確認してください。`efsdecrypt` を `yes` に変更すると、すべてのファイルが、変更されていなくても、平文で再度バックアップされます。よって、このオプションは慎重に使用してください。

注：これは、バックアップ全体に適用されるグローバル・オプションです。暗号化されたファイルの一部をロー・データとしてバックアップし、他を平文としてバックアップするには、クライアントを 2 回別個に呼び出す必要があります。

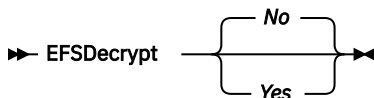
サポートされるクライアント

このオプションは、AIX クライアントで有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、dsm.sys ファイルまたはクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。dsm.sys ファイルでは、このオプションはサーバー・スタンザ内に入れます。

構文



パラメーター

No

暗号化されたファイルは、暗号化データ (またはロー・データ) 形式で読み取られ、IBM Spectrum Protect の暗号化および圧縮は強制的にオフになります。これはデフォルトです。

Yes

暗号化されたファイルは復号 (平文) 形式で読み取られます。

例

オプション・ファイル:

EFSDecrypt yes

コマンド・ライン:

-EFSDecrypt=no

Enablearchiveretentionprotection

enablearchiveretentionprotection オプションを使用すると、クライアントは、IBM Spectrum Protect for Data Retention サーバーに接続することができます。アーカイブ・オブジェクトは、そのオブジェクトのポリシー・ベースの保存要件が満たされるまでサーバーから削除されません。

保存保護が有効になっていないサーバーにクライアントが接続する場合は、このオプションは無視されます。このオプションが「no」(デフォルト)の場合、データ保存サーバーに接続しようとする、接続が拒否されます。

データ保存サーバーは、該当するタスク用に特別に構成されています。そのため、通常のバックアップまたはリストア処理は、サーバーにより拒否されます。クライアントがデータ保存サーバーに接続しているときは、以下のコマンドを使用できません。これらのコマンドを使用しようすると、このサーバーではそれらのコマンドが有効でないという旨のメッセージが表示されます。

- **incremental**
- **backup** (すべてのサブコマンド)
- **selective**
- **restore** (**restore backupset** -location=file または -location=tape を除くすべてのサブコマンド)

注: **restore backupset** -location=file または -location=tape は、どのサーバーにも接続しないので (仮想サーバーは除く)、どの環境でもブロックされません。

- **restart restore**
- **delete backup**
- **delete group**
- **expire**
- 以下を除く すべての query
 - **query access**

- query archive
- query filespace
- query inclexcl
- query managementclass
- query node
- query options
- query schedule
- query session
- query systeminfo
- query tracestatus

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルでのみ有効であり、サーバーからのクライアント・オプション・セット内では無効です。このオプションは、コマンド・ラインでは無効です。

構文



パラメーター

No

データ保存サーバーへの接続が拒否されます。これはデフォルトです。

Yes

クライアントがデータ保存サーバーに接続します。

Enablededupcache

`enablededupcache` オプションは、クライアント・サイドのデータ重複排除中にキャッシュを使用するかどうかを指定するために使用します。ローカル・キャッシュを使用すると、IBM Spectrum Protect サーバーとクライアントの間のネットワーク・トラフィックを削減できます。

データ重複排除キャッシュを有効にしてバックアップまたはアーカイブ操作を実行すると、バックアップまたはアーカイブされたデータ・エクステントの指定がキャッシュ・データベースに保存されます。次回バックアップまたはアーカイブを実行すると、クライアントはデータ重複排除キャッシュを照会して、以前にサーバーに保存されたデータのエクステントを識別します。サーバー上のデータ・エクステントと同じデータ・エクステントはサーバーに再送されません。

サーバーとキャッシュが同期化されていない場合は、そのキャッシュが除去されて新規キャッシュが作成されます。

分散データ重複排除キャッシュにアクセスできるプロセスは、1 回に 1 つのみです。同じサーバーとストレージ・プールを使用する、ワークステーション上の並行バックアップ・インスタンスは、固有のノード名または固有のキャッシュ指定のいずれかを使用する必要があります。こうすると、すべてのインスタンスがローカル・キャッシュを使用し、クライアント・サイドのデータ重複排除を最適化することができます。

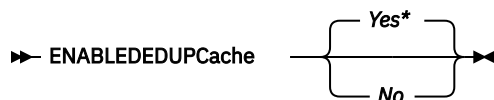
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API では、このオプションもサポートされます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「重複排除」>「重複排除キャッシュを有効にする」チェック・ボックスで設定できます。このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のクライアント・オプション・セットで設定することもできます。

構文



パラメーター

Yes

データ重複排除キャッシュを有効にすることを指定します。データ重複排除が有効になっていないと、この設定は無効です。Yes が、バックアップ/アーカイブ・クライアントのデフォルトです。No は、IBM Spectrum Protect API のデフォルトです。

No

データ重複排除キャッシュを有効にしないことを指定します。

例

オプション・ファイル:

```
enablededupcache no
```

コマンド・ライン:

```
-enablededupcache=no
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連資料

[377 ページの『Deduplication』](#)

deduplication オプションを使用して、バックアップおよびアーカイブ処理中 IBM Spectrum Protect サーバーにデータを転送するときに、冗長クライアント・サイド・データ除去を有効にするかどうかを指定します。

[375 ページの『Dedupcachepath』](#)

dedupcachepath オプションを使用して、クライアント・サイド・データのデータ重複排除キャッシュ・データベースが作成されるロケーションを指定します。

[376 ページの『Dedupcachesize』](#)

dedupcachesize オプションは、データ重複排除のキャッシュ・ファイルの最大サイズを決定するために使用します。キャッシュ・ファイルがその最大サイズに達すると、キャッシュの内容が削除されて新規項目が追加されます。

Enableinstrumentation

デフォルトでは、バックアップ/アーカイブ・クライアントおよび IBM Spectrum Protect API によってインスツルメンテーション・データが自動的に収集され、バックアップ処理およびリストア処理中のパフォーマンス・ボトルネックを識別します。インスツルメンテーションを無効にしたり、後で有効にしたりするには、enableinstrumentation オプションを使用します。

このオプションを有効にすると、問題の発生時に、お客様サービス担当員にパフォーマンス・データの収集を指示されるのを待つ必要がなくなります。その代わり、バックアップ操作やリストア操作を実行するたびにデータを収集できます。この機能は、パフォーマンス・データを収集するだけのために問題を再現する必要がなくなるので、非常に役立ちます。情報はクライアントによって既に収集されています。

このオプションは、旧バージョンのクライアントおよび API で使用されていた -TESTFLAG=instrument:detail、-TESTFLAG=instrument:API、および -TESTFLAG=instrument:detail/API の各オプションに取って代わるものです。

プロセスごとに、以下のタイプのパフォーマンス・インスツルメンテーション・データが収集されます。

- 各スレッド・アクティビティの名前 (File I/O、Data Verb、Compression、および Transaction など)、アクティビティごとの平均経過時間、およびアクティビティの頻度。
- 各スレッドのアクティビティ時間の合計。
- 発行されたコマンドと使用されたオプション。
- backup、restore、または query の各コマンドの要約

デフォルトでは、パフォーマンス・データは、DSM_LOG 環境変数 (IBM Spectrum Protect for Databases: Data Protection for Microsoft SQL Server や IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection for Microsoft Exchange Server などの API 依存製品の DSMI_LOG 環境変数) に指定されたディレクトリーのインスツルメンテーション・ログ・ファイル (dsminstr.log) 内に保管されます。DSM_LOG 環境変数を設定していない場合、インスツルメンテーション・ログ・ファイルは、現行ディレクトリー (**dsmc** コマンドを発行したディレクトリー) に保管されます。

必要に応じて、instrlogname オプションを使用してインスツルメンテーション・ログ・ファイルの名前と場所を変更することができます。instrlogmax オプションを指定すると、ログ・ファイルのサイズも制御できます。

パフォーマンス・データは、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI および Web クライアント GUI では収集されません。

クライアント・オプション・ファイルで enableinstrumentation オプションが指定されている場合、以下の製品のパフォーマンス・データが収集されます。

- バックアップ/アーカイブ・クライアントを使用したスケジュール済みのファイル・レベルのバックアップ操作
- IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware バックアップ
- IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for Microsoft Hyper-V バックアップ
- IBM Spectrum Protect for Databases: Data Protection for Microsoft SQL Server バックアップ
- IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection for Microsoft Exchange Server バックアップ

アーカイブ処理およびリトリート処理中にもパフォーマンス・データが収集されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントと IBM Spectrum Protect API に有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

ヒント: このオプションはデフォルトで有効にされているため、通常は、このオプションを無効にする必要がない限りは、クライアント・オプション・ファイルで指定する必要はありません。

構文



パラメーター

Yes

バックアップおよびリストアの操作中にパフォーマンス・データを収集することを指定します。デフォルト値はYesです。つまり、このオプションを指定しない場合でもパフォーマンス・データは収集されます。

デフォルトでは、パフォーマンス・データは、DSM_LOG 環境変数に指定されたディレクトリーのインスツルメンテーション・ログ・ファイル (dsminstr.log) 内に保管されます。DSM_LOG 環境変数を設定していない場合、インスツルメンテーション・ログ・ファイルは、現行ディレクトリー (**dsmc** コマンドを発行したディレクトリー) に保管されます。ファイルが存在しない場合、クライアントはファイルを作成し、パフォーマンス・データをそのファイルに追加します。

No

バックアップおよびリストアの操作中にパフォーマンス・データを収集しないことを指定します。インスツルメンテーション・ログが存在する場合、ファイルにこれ以上のデータは追加されません。

例

オプション・ファイル:

```
enableinstrumentation yes
```

コマンド・ライン:

```
dsmc sel /home/mydir/* -subdir=yes -enableinstrumentation=yes
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連タスク

[クライアント・インスツルメンテーション・データの収集](#)

[API インスツルメンテーション・データの収集](#)

関連資料

[Instrlogmax](#)

instrlogmax オプションは、インスツルメンテーション・ログ (dsminstr.log) の最大サイズ (MB 単位) を指定します。enableinstrumentation オプションが yes に設定されると、バックアップ処理またはリストア処理時にクライアントのパフォーマンス・データが dsminstr.log ファイルに収集されます。

[Instrlogname](#)

instrlogname オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが収集したパフォーマンス情報を保管するファイルのパスとファイル名を指定します。

Enablelanfree

enablelanfree オプションは、ストレージ・エリア・ネットワーク (SAN) 接続ストレージ装置への有効な LAN フリー・パスを有効にするかどうかを指定します。

LAN フリー・パスを使用すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントと SAN 接続ストレージ装置間でバックアップ、リストア、アーカイブ、およびリトリブ処理が可能です。

LAN フリー・データ移動をサポートするには、IBM Spectrum Protect for SAN ストレージ・エージェントをクライアント・ワークステーションにインストールして構成する必要があります。

注:

- クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) に enablelanfree オプションを入れているのに、操作中に SAN を介して転送されたバイト数がゼロ (0) の場合には、データを LAN フリー使用可能な管理クラスにバインドしていることを確認してください。
- SAN 環境でバックアップ・セットをリストアするための詳細については、[733 ページの『Restore Backupset』](#)を参照してください。
- LAN フリーのパスが有効になっている場合、SAN ストレージ・エージェントの設定が、クライアントの tcpserveraddress、tcpport、および ssl オプションを指定変更します。この指定変更アクションは、クライアントとストレージ・エージェントが同じサーバー通信オプションを使用することを確かにするために起こります。
- include.encrypt オプションを使用したクライアント暗号化は、IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.1 以降のレベルまたは V7.1.8 以降の V7 のレベルへの LAN フリーのバックアップとアーカイブの操作ではサポートされなくなりました。暗号化されたバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの LAN フリーのリストア操作およびトリート操作は引き続きサポートされます。データがサーバーへの送信前に暗号化される include.encrypt オプションを使用してデータを暗号化する必要がある場合は、LAN ベースのバックアップ操作またはアーカイブ操作を使用してください。

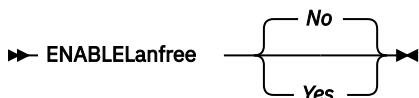
サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux x86_64、Linux on Power Systems、Linux on z Systems、および Solaris の各クライアントで有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブの「**LAN フリーを有効にする**」チェック・ボックスを選択することによっても設定できます。

構文



パラメーター

Yes

SAN 接続ストレージ装置への有効な LAN フリー・パスを有効にしたいことを指定します。

No

SAN 接続ストレージ装置への LAN フリー・パスを有効にしたくないことを指定します。これはデフォルトです。

例

オプション・ファイル:

```
enablelanfree yes
```

コマンド・ライン:

```
-enablelanfree=yes
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

バックアップ/アーカイブ・クライアントとストレージ・エージェントの間の通信プロトコルを指定するには、[469 ページの『Lanfreecommmethod』](#)を参照してください。

Encryptiontype

encryptiontype オプションを使用して、データ暗号化のアルゴリズムを指定します。

encryptiontype は、バックアップ操作およびアーカイブ操作にのみ影響します。含まれているデータは暗号化形式で保管されます。暗号化は送受信されるデータ量に影響を及ぼしません。リストア操作およびリトリブ操作中には、このオプションの設定にかかわらず、暗号化されたデータは適切な暗号化アルゴリズムによって暗号化解除されます。

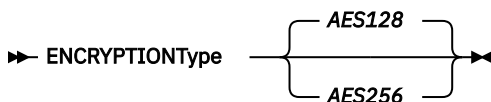
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「許可」タブでも設定できます。サーバーはこのオプションを上書きできます。

構文



パラメーター

AES128

AES 128 ビットのデータ暗号化。AES 128 ビットがデフォルトです。

AES256

AES 256 ビットのデータ暗号化。AES 256 ビット暗号化は、バックアップ操作およびアーカイブ操作で使用可能な最高レベルのデータ暗号化を提供します。

例

オプション・ファイル:

```
encryptiontype aes128
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Encryptkey

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップまたはアーカイブされるファイルを暗号化するためのオプションをサポートします。このオプションは、include.encrypt オプションを使用して有効にします。

include.encrypt 仕様のパターンと一致するすべてのファイルは、データがサーバーに送信される前に暗号化されます。ファイルの暗号化に使用される鍵を管理するために、prompt、save、および generate の 3 つのオプションがあります。この 3 つのオプションはすべて、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは IBM Spectrum Protect API のどちらでも使用することができます。

暗号鍵パスワードは、大/小文字の区別をして、長さが最大 64 文字です。

以下の文字を暗号鍵パスワードに含めることができます。

A から Z

A から Z の大文字または小文字の任意の文字。各国語の言語文字は指定できません。

0 から 9

0 から 9 までの任意の数字

- + プラス
- ・ ピリオド
- 下線
- ハイフン
- & アンパーサンド

注:

1. API には、代わりに `encryptkey=generate` を指定する方法があります。ただし、前の `enableclientencryptkey=yes` オプションも、暗号化生成処理を要求するために指定することができます。
2. `enableclientencryptkey= yes` API オプションも引き続きサポートされているため、この API を使用する場合に 2 つの競合するオプションを指定する可能性が生じます。例えば、`enableclientencryptkey=yes` と、`encryptkey=prompt` または `encryptkey=save` を指定する場合などです。
3. 競合する値が指定されると、API はエラー・メッセージを返します。



重要: `prompt` オプションを使用すると、UNIX 上の IBM Spectrum Protect パスワード・ファイル内に暗号鍵が保存されません。したがって、鍵を忘れるとデータをリカバリーできません。

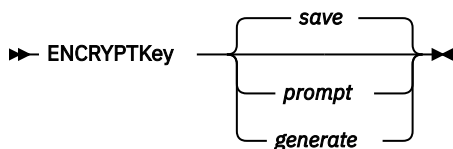
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「許可」タブの「暗号鍵パスワード」セクションで設定できます。

構文



パラメーター

save

暗号鍵パスワードはバックアップ/アーカイブ・クライアントのパスワード・ファイルに保存されます。初めて使用する暗号鍵パスワードにはプロンプトが出され、その最初のプロンプト後は、`include.encrypt` 仕様と一致するファイルのバックアップおよびアーカイブには、パスワード・ファイルに保存されている暗号鍵パスワードが使用されます。この鍵は、リストアおよびリトリブ操作時にパスワード・ファイルから取り出されます。

パスワードの長さは最大 64 バイトです。

API アプリケーションに `save` オプションを指定する場合、初期鍵パスワードは `dsmInitEx` 関数呼び出しで API を使用して、このアプリケーションが提供しなければなりません。API 自体がユーザーに

プロンプトを出すことはありませんが、必要に応じてアプリケーションを介してユーザーにプロンプトを出します。

このパラメーターがデフォルトです。

注: 以下の制約事項が適用されます。

- このオプションは `passwordaccess generate` も同時に指定されている場合に限り使用することができます。
- root ユーザーまたは許可ユーザーは初期暗号鍵パスワードを指定する必要があります。

prompt

ユーザーが暗号鍵パスワードの管理を行います。クライアントがバックアップまたはアーカイブを開始すると、暗号鍵パスワードの入力を求めるプロンプトがユーザーに出されます。暗号化されたファイルのリストアまたはリトリブ時には、同じパスワードを求めるプロンプトが出されます。

このパスワードの長さは最大 64 バイトです。

API アプリケーションに `prompt` オプションを指定する場合、鍵パスワードは `dsmInitEx` 関数呼び出しで API を使用して、このアプリケーションが提供しなければなりません。API 自体がユーザーにプロンプトを出すことはありませんが、必要に応じてアプリケーションを介してユーザーにプロンプトを出します。

generate

暗号鍵パスワードは、クライアントがバックアップまたはアーカイブを開始するときに動的に生成されます。こうして生成された鍵パスワードは、`include.encrypt` 仕様と一致するファイルのバックアップ用に使用されます。生成された鍵パスワードは、暗号化形式で IBM Spectrum Protect サーバーに保持されます。この鍵パスワードは、リストアおよびリトリブ操作時にファイルを暗号化解除できるようにするためにクライアントに返されます。

例

オプション・ファイル:

`encryptkey prompt`

コマンド・ライン:

適用しません。

Errorlogmax

`errorlogmax` オプションは、エラー・ログの最大サイズ (M バイト単位) を指定します。エラー・ログのデフォルト名は `dsmerror.log` です。

ログ折り返しは `errorlogmax` オプションで制御します。`errorlogmax` をゼロ (0) に設定していない場合、ログのサイズは無制限になります。ログに記録された項目の「折り返し」は行われず、以前のログ項目の上書きが開始されます。`errorlogmax` をゼロに設定していない場合は、ログ・ファイルが最大サイズに達すると、最も古いログ項目が最新のログ項目で上書きされます。

ログの除去は、`errorlogretention` オプションで制御します。除去されたログは折り返しません。代わりに、`errorlogretention` オプションで指定された日数より古いログ項目はログ・ファイルから削除されます。

ログ折り返し (`errorlogmax` オプション) からログの除去 (`errorlogretention` オプション) に変更すると、既存のすべてのログ項目は保存され、ログは新規 `errorlogretention` 基準を使用して除去されます。除去されたログ項目は、`dsmerlog.pru` という名前のファイルに保存されます。

ログの除去の使用 (`errorlogretention` オプション) からログ折り返しの使用 (`errorlogmax` オプション) に変更すると、既存のログ内のすべてのレコードが `dsmerlog.pru` ログ・ファイルにコピーされ、既存のログは空になり、新しいログ折り返し基準を使用してロギングが開始されます。

`errorlogmax` オプションの値を変更すると、新しいサイズに合うように、既存のログが拡張または縮小されます。値が小さくなった場合には、一番古い項目が削除され、ファイルは新しいサイズまで縮小されます。

errologmax も errorlogretention も指定しなかった場合は、エラー・ログのサイズが際限なく大きくなる可能性があります。ログがディスク・リソースを使い果たすのを防ぐため、ログ内容を手動で管理する必要があります。どちらのオプションも指定せずにログを作成し、後でコマンドを出して errorlogretention オプションを指定した場合は、指定した保存値を使用してログが除去されます。どちらのオプションも指定せずにログを作成し、後でコマンドを出して errologmax オプションを指定した場合は、既存のログは除去されたログと同様に処理されます。つまり、dsmerror.log ファイルの内容が dsmerlog.pru というファイルにコピーされ、新しいログ項目が dsmererror.log に作成され、ログはその最大サイズに達すると折り返します。

注: errologmax (ログ折り返しを有効にする) にゼロ以外の値を指定した場合は、除去されたログを作成する errorlogretention オプションを指定することはできません。ログは、除去または折り返しのいずれかの処理はできますが、両方はできません。

errologmax オプションで作成されたログには、以下のレコード例に似た情報が入っているログ・ヘッダー・レコードが含まれています。

```
LOGHEADERREC 661 104857600 IBM Spectrum Protect 8.1.0 Fri Dec 9 06:46:53 2011
```

LOGHEADERREC テキスト内の日付およびタイム・スタンプは、dateformat または timeformat オプションで指定された設定により変換またはフォーマット設定されないことに注意してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

GUI の「クライアント・プリファレンス」タブで、「エラー・ログ・ファイルの折り返しを有効にする」を選択し、ログ・ファイルの「最大サイズ」にゼロ以外の値を指定することによって、このオプションを設定することもできます。ログ・ファイルの折り返しを禁止するには、「最大サイズ」をゼロに設定します。最大折り返しをゼロに設定した場合、「エラー・ログ・ファイルの折り返しを有効にする」オプションをクリアしても設定しても効果はありません。「最大サイズ」をゼロに設定した場合は、ログ折り返しは行われません。

構文

►► ERRORLOGMAX — — size ◄◄

パラメーター

size

ログ・ファイルの最大サイズ (M バイト単位) を指定します。値の範囲は 0 から 2047 です。デフォルトは 0 で、これを指定すると、ログ・ファイルの折り返しが不可になり、ログ・ファイルを無限に大きくすることができるようになります。

例

オプション・ファイル:
errorlogmax 2000

コマンド・ライン:
-errorlogmax=2000

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Errorlogname

このオプションは、エラー・メッセージが含まれるファイルの、完全修飾パスおよびファイル名を指定します。

このオプションの値は、DSM_LOG 環境変数をオーバーライドします。dsmwebcl.log および dsmsched.log ファイルは、errorlogname オプションで指定するエラー・ログ・ファイルと同じディレクトリーに作成されます。

Mac OS X の場合、デフォルトのロケーションは、次のいずれかになります。

```
~/Library/Logs/tivoli/tsm/  
/Library/Logs/tivoli/tsm/
```

dsmerror.log をシンボリック・リンクにすることはできません。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブ、「エラー・ログの選択」ボタンで設定できます。

構文

► ERRORLOGName — — filespec ◄

パラメーター

filespec

エラー・ログ情報を保管する場所を示す完全修飾パスおよびファイル名です。指定されたパスのいずれかの部分が存在していないと、クライアントはそれを作成しようとします。

dsmerror.log ファイルをシンボリック・リンクにすることはできません。

例

オプション・ファイル:

```
errorlogname /tmp/tsmerror.log
```

コマンド・ライン:

```
-errorlogname=/tmp/tsmerror.log
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Errorlogretention

errorlogretention オプションでは、エラー・ログ項目を除去するまでに保持される日数、および除去された項目を別のファイルに保存するかどうかを指定します。

エラー・ログは、クライアント・セッションが開始された後に、最初のエラーがログに書き込まれた時に除去されます。実行するセッションがクライアント・スケジューラーのみで、1 日に 24 時間実行する場合は、エラー・ログは期待したように除去されない場合もあります。セッションを停止し再び開始すると、スケジューラーがエラー・ログを除去することができます。

ログの除去 (errorlogretention オプション) からログ折り返し (errorlogmax option) に変更すると、既存のログ内のすべてのレコードが dsmerlog.pru ログ・ファイルにコピーされ、既存のログは空になり、新しいログ折り返し基準を使用してロギングが開始されます。

ログ折り返し (errorlogmax オプション) からログの除去 (errorlogretention オプション) に変更すると、既存のすべてのログ項目は保存され、ログは新規 errorlogretention 基準を使用して除去されます。除去されたログ項目は、dsmerlog.pru という名前のファイルに保存されます。

errologmax も errorlogretention も指定しなかった場合は、エラー・ログのサイズが際限なく大きくなる可能性があります。ログがディスク・リソースを使い果たすのを防ぐため、ログ内容を手動で管理する必要があります。どちらのオプションも指定せずにログを作成し、後でコマンドを出して errorlogretention オプションを指定した場合は、指定した保存値を使用してログが除去されます。どちらのオプションも指定せずにログを作成し、後でコマンドを出して errorlogmax オプションを指定した場合は、既存のログは除去されたログと同様に処理されます。つまり、dsmerror.log ファイルの内容が dsmerlog.pru というファイルにコピーされ、新しいログ項目が dsmerror.log に作成され、ログはその最大サイズに達すると折り返します。

注: 除去されたログを作成する errorlogretention オプションを使用する場合は、errorlogmax オプションは指定できません。ログは、除去または折り返しのいずれかの処理はできますが、両方はできません。

サポートされるクライアント

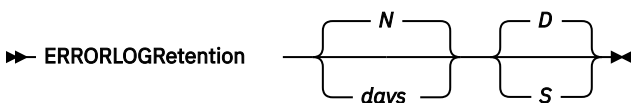
このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

GUI の「クライアント・プリファレンス」タブで、「旧項目を除去」を選択し、「次より古い項目の除去」に値を指定することによって、このオプションを設定することもできます。「除去済み項目を保存」オプションを選択すると、除去されたログ項目が dsmerlog.pru ログ・ファイルに保存されます。

構文



パラメーター

N または days

エラー・ログを除去するまでの待機する長さを指定します。

N

エラー・ログを除去しません。そのために、エラー・ログは無限に大きくなっていきます。これはデフォルトです。

days

ログを除去する前にログ・ファイル項目を保持する日数。値の範囲は 0 から 9999 です。

D または S

除去した項目を保存するかどうかを指定します。このパラメーターを直前のパラメーターと区切るためには、スペースまたはコンマを使用します。

D

ログを除去する時に、エラー・ログ項目を廃棄します。これはデフォルトです。

S

ログを除去する時に、エラー・ログ項目を保存します。

除去された項目は、エラー・ログから、dsmerror.log ファイルと同じディレクトリーにある dsmerlog.pru ファイルにコピーされます。

例

オプション・ファイル:

365 日より古いログ項目を `dsmerror.log` ファイルから除去し、除去された項目を `dsmerlog.pru` に保存します。

```
errorlogretention 365 S
```

コマンド・ライン:

```
-errorlogr=365,S
```

オプション・ファイル:

365 日より古いログ項目を `dsmerror.log` ファイルから除去しますが、除去された項目を保存しません。

```
errorlogretention 365 D
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Exclude オプション

`exclude` オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

例えば、次のタイプの情報は、除外することをお勧めします。

- すべての一時ファイル
- ネットワーク・ファイルのローカル・キャッシュ
- 他の方法を使用して容易に複製できる、コンパイルされたオブジェクト・コードを含むすべてのファイル。
- オペレーティング・システム・ファイル

バックアップ時に特定のファイルを暗号化処理から除外することができます。

注:

1. `exclude.fs` を除いて、前に組み込まれていたファイルを除外すると、既存のバックアップ・バージョンは、次の増分バックアップ時に非活動になります。
2. サーバーでは、`inclexcl` オプションを使用して `exclude` オプションを定義することができます。

回復した時にオペレーティング・システムを破壊する恐れのあるシステム・ファイルまたはイメージを除外します。また、IBM Spectrum Protect クライアント・ファイルが入っているディレクトリーも除外します。

ワイルドカード文字を使用すると、広い範囲のファイルを除外することができます。

`/any/test` という名前のディレクトリー全体を除外するには、以下を入力します。

```
exclude.dir /any/test
```

`/any` ディレクトリーの下にある `test` で始まるサブディレクトリーを除外するには、以下を入力します。

```
exclude.dir /any/test*
```

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。これらのオプションは、プリファレンス・エディターの「**include-exclude オプションの定義**」セクションの「**包含/除外**」タブで設定できます。

構文

➡ *options* — — *pattern* ➡

exclude, exclude.backup, exclude.file, exclude.file.backup

これらのオプションは、ファイルまたはファイルのグループをバックアップ・サービスおよびスペース管理サービス (HSM クライアントがインストールされている場合) から除外するために使用します。exclude.backup オプションでは、ファイルは通常バックアップから除外されるだけで、HSM からは除外されません。

exclude.archive

パターンに一致するファイルまたはファイルのグループをアーカイブ・サービスのみから除外します。

exclude.attribute.symlink

シンボリック・リンクまたは別名 (別名は Mac OS X の場合) であるファイルまたはファイルのグループを、バックアップ処理のみから除外します。

注: Mac OS X の場合、別名は除外されます。

exclude.compression

compression オプションが yes に設定されている場合に、ファイルを圧縮処理の対象から除外します。このオプションは、バックアップおよびアーカイブに適用されます。

exclude.dedup

クライアント・サイドのデータ重複排除からファイルを除外します。クライアント・サイドのデータ重複排除を制御するには、exclude.dedup オプションの値として ieobjtype を指定します。

有効な ieobjtype パラメーターは次のとおりです。

File

Image

デフォルトは File です。

exclude.dir

ディレクトリー、そのファイル、およびそのすべてのサブディレクトリーとそのファイルをバックアップ処理から除外します。例えば、ステートメント exclude.dir /test/dan/data1 は、/test/dan/data1 ディレクトリーとその中のファイル、およびそのすべてのサブディレクトリーとその中のファイルを除外します。

前に組み込まれていたディレクトリーを除外すると、サーバーは次の増分バックアップ時に、その下にあるファイルとディレクトリーの既存のバックアップ・バージョンを有効期限切れにします。このオプションは、バックアップの基礎となるファイルがないデータの部分を除外するために使用します。

注: 除外ディレクトリー内の個々のファイルについて、選択バックアップや部分増分バックアップを実行することは避けてください。次回に増分バックアップを実行すると、この方法でバックアップされたファイルは有効期限切れになります。

exclude.encrypt

指定されたファイルを暗号化処理から除外します。このオプションは、ファイルがバックアップまたはアーカイブ処理から除外されているかどうかには影響せず、ファイルが暗号化処理から除外されているかどうかだけに影響します。

exclude.fs

指定されたパターンと一致したファイル・システムを、バックアップ、増分イメージ・バックアップ、およびアーカイブ操作から除外します。除外されたファイル・システム内のファイルが以前にバックアップされたことがある場合は、管理クラスが再バインドされたり、削除されたファイルが期限切れになったりすることはありません。ただし、既存のバックアップ・バージョンは、関連する管理クラス

の設定に従ってサーバー上に残ります。除外されたファイル・システムから以前にアーカイブされたファイルは、アーカイブ・コピーとしてサーバー上に残ります。

exclude.fs オプションは、除外されたファイル・システムのサブディレクトリーである 仮想マウント・ポイントのバックアップまたはアーカイブを阻止しません。

フルイメージ・バックアップ操作からファイル・システムを除外するには、**exclude.image** を使用します。

exclude.fs.nas

backup nas コマンドで使用された場合に、NAS ファイル・サーバー上のファイル・システムをイメージ・バックアップから除外します。NAS ノード名はファイル・システム名の前に付ける必要があります。例: **netappsj1/vol/vol1**。すべての NAS ノードにこの除外を適用するには、NAS ノード名をワイルドカードと置き換えます。例: ***/vol/vol1**。**backup nas** コマンドは、**exclude.fs** および **exclude.dir** ステートメントを含めて、他のすべての **exclude** ステートメントを無視します。このオプションは、AIX および Solaris クライアントの場合にのみ有効です。

exclude.image

マウント済みのファイル・システムと、指定のパターンに一致するロー論理ボリュームを、フルイメージ・バックアップ操作から除外します。このオプションは、AIX、すべての Linux クライアント、および Solaris にのみ有効です。増分イメージ・バックアップ操作からファイル・システムを除外するには、**exclude.fs** を使用します。

制約事項: このオプションは、Mac OS X には適用されません。

パラメーター

pattern

除外したいファイルまたはファイルのグループを指定します。

注: NAS ファイル・システムの場合: **exclude** ステートメントの適用されるファイル・サーバーを指定するには、ファイル指定に NAS ノード名の接頭部を付ける必要があります。NAS ノード名を指定しないと、識別されたファイル・システムは、クライアント・システム・オプション・ファイル (**dsm.sys**) または コマンド・ラインで指定された NAS ノード名を参照します。

パターンが単一引用符や二重引用符で始まる場合、または埋め込まれたブランクや等号がある場合は、値を単一引用符 (') または二重引用符 (") で囲まなければなりません。始まりと終わりの引用符は同じタイプの引用符でなければなりません。

exclude.image オプションの場合、パターンはマウントされたファイル・システムまたはロー論理ボリュームの名前です。

例

オプション・ファイル:

```
exclude /unix/
exclude ../../core
exclude /home/jones/proj1/*
exclude.archive ../../core
exclude.backup /home/jones/proj1/devplan/
exclude.dir /home/jones/tmp
exclude.backup /users/home1/file1
exclude.image /usr/*/*
exclude.encrypt /users/home2/file1
exclude.compression /home/gordon/proj1/*
exclude.fs.nas netappsj/vol/vol0
exclude.attribute.symlink ../../*
exclude.dedup /Users/Administrator/Documents/Important/.../*
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連情報

常に除外すべきファイルのリストについては、[129 ページの『除外するシステム・ファイル』](#)を参照してください。

446 ページの『[Inclxcl](#)』

使用できるワイルドカード文字のリストについては、[131 ページの『ワイルドカード文字を使用したファイル・グループの包含および除外』](#)を参照してください。その場合、必要ならば、例外を設けるために `include` オプションを使用できます。

シンボリック・リンクおよび別名処理の制御

バックアップ・アーカイブ・クライアントは、シンボリック・リンクおよび別名 (別名は Mac OS X の場合のみ) を実際のファイルとして処理し、これらをバックアップします。ただし、シンボリック・リンクで参照されるファイルは、バックアップされません。シンボリック・リンクの再作成が容易であり、バックアップが不要な場合もあります。

また、これらのシンボリック・リンクをバックアップすると、バックアップ処理時間が増大し、IBM Spectrum Protect サーバーのスペースが大量に占有されることがあります。
`exclude.attribute.symlink` オプションを使用すると、シンボリック・リンクであるファイルまたはファイル・グループをバックアップ処理から除外することができます。必要であれば、`include.attribute.symlink` オプションを使用して、バックアップ処理から除外されたファイルの広いグループに、シンボリック・リンクを含めることができます。

例えば、`/home/spike` ディレクトリ下にあるものを除き、すべてのシンボリック・リンクをバックアップ処理から除外するには、これらのステートメントを `dsm.sys` ファイルに入れておきます。

```
exclude.attribute.symlink /.../*
include.attribute.symlink /home/spike/.../*
```

関連資料

447 ページの『[include オプション](#)』

`include` オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

圧縮処理の制御

ここでは、バックアップまたはアーカイブ操作時に、特定のファイルまたはファイル・グループを圧縮処理の対象から除外する場合に、考慮する項目をリストします。

- バックアップ/アーカイブ・クライアントは、処理するファイルと `include/exclude` ステートメントで指定したパターンとを比較し、オプション・ファイルを下部から上部へと読み取ることを忘れないでください。
- 圧縮処理を有効にするためには、`compression` オプションを `yes` に設定しなければなりません。`compression` オプションを指定しないか、あるいは `compression` オプションを `no` に設定すると、クライアントは圧縮処理を実行しません。

`compression` オプションを `yes` に設定した場合に `exclude.compression` ステートメントが存在しないときは、クライアントはすべてのファイルを圧縮処理の対象と見なします。

- クライアントは、`exclude.fs`、`exclude.dir`、および他の `include/exclude` ステートメントを最初に処理します。その後、クライアントは `exclude.compression` ステートメントを検討します。例えば、次の `include-exclude` リストを見てください。

```
exclude /home/jones/proj1/*.*
exclude.compression /home/jones/proj1/file.txt
include /home/jones/proj1/file.txt
```

クライアントは、ステートメントを調べて (下から上へと読んで) `/home/jones/proj1/file.txt` ファイルがバックアップの候補であるが圧縮処理の候補ではないことを判別します。

- 包含/除外圧縮処理はバックアップおよびアーカイブ処理の場合にのみ有効です。`exclude.compression` オプションは、ファイルがバックアップまたはアーカイブ処理から除外されているかどうかには影響せず、ファイルが圧縮処理から除外されているかどうかだけに影響します。

関連資料

363 ページの『[Compression](#)』

`compression` オプションは、ファイルをサーバーに送る前に、それらのファイルを圧縮します。

NAS ファイル・システムの処理

ファイル・システムを NAS イメージ・バックアップ処理から除外するには、`exclude.fs.nas` オプションを使用します。

注: `exclude.fs.nas` オプションは、スナップショットの差分による増分バックアップには適用されません。

NAS ファイル・システム指定は、以下の規則を使用しています。

- NAS ノードは固有のノード・タイプを表します。NAS ノード名は、NAS ファイル・サーバーとそのデータをバックアップ・アーカイブ・クライアントに対して固有に識別します。ファイル指定に NAS ノード名の接頭部を付けて、`exclude` ステートメントの適用されるファイル・サーバーを指定することができます。NAS ノード名を指定しないと、識別されたファイル・システムがすべての NAS ファイル・サーバーに適用されます。
- クライアント・プラットフォームとは無関係に、NAS ファイル・システムの指定には、次の例のようにスラッシュ (/) の区切り文字が使用されます。/vol/vol0。

例えば、すべての NAS ノードのバックアップ・サービスから /vol/vol1 を除外するには次のような `exclude` ステートメントを指定します。

```
exclude.fs.nas */vol/vol1
```

仮想マシン exclude オプション

仮想マシンの `include` オプションと `exclude` オプションは、仮想マシンのバックアップおよびリストア操作の動作に影響を与えます。これらのオプションが処理された後にコマンド・ライン・オプションが処理されるため、コマンド・ラインのオプションが仮想マシンの `include` オプションまたは仮想マシンの `exclude` オプションに指定されたオプションを指定変更する可能性があります。オプションの詳細については、個々のオプションの説明を参照してください。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

関連資料

420 ページの『[Exclude.vmdisk](#)』

`EXCLUDE.VMDISK` オプションは、仮想マシン・ディスクをバックアップ操作から除外します。

Exclude.vmdisk

`EXCLUDE.VMDISK` オプションは、仮想マシン・ディスクをバックアップ操作から除外します。

`EXCLUDE.VMDISK` オプションは、**backup vm** 操作から除外される仮想マシンのディスクのラベルを指定します。**backup vm** コマンドでディスクを除外する場合、コマンド・ライン・パラメーターが、オプション・ファイルの `EXCLUDE.VMDISK` ステートメントをすべてオーバーライドします。

このオプションは、ライセンス交付を受けた IBM Spectrum Protect for Virtual Environments 製品を使用している場合にのみ使用可能です。このオプションについて詳しくは、IBM Knowledge Center (<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSERB6/welcome>) の IBM Spectrum Protect for Virtual Environments 製品資料を参照してください。

VMware 仮想マシンの EXCLUDE.VMDISK

`EXCLUDE.VMDISK` オプションを使用して、VMware 仮想マシン・ディスクをバックアップ操作から除外します。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定します。コマンド・ライン・パラメーターがオプション・ファイルのステートメントをオーバーライドします。

VMware 仮想マシンの構文

➡ EXCLUDE.VMDISK — *vmname* *vmdk_label* ➡

パラメーター

vmname

Backup VM 操作から除外するディスクを含む仮想マシンの名前を指定します。この名前は、仮想マシンの表示名です。各 EXCLUDE.VMDISK ステートメントに指定できるのは仮想マシン名 1 つだけです。除外する仮想マシンごとに、追加の EXCLUDE.VMDISK ステートメントを指定してください。

仮想マシン名に入れることができるアスタリスク (*) は任意の文字ストリングと一致し、疑問符 (?) は任意の単一文字と一致します。VM 名がスペース文字を含む場合は、VM 名を引用符 (") で囲みます。

ヒント: 仮想マシン名が大括弧文字 ([]) または (()) のような特殊文字を含む場合は、仮想マシン名は正しく一致しないことがあります。仮想マシン名が、名前の中に特殊文字を使用している場合は、疑問符文字 (?) を使用して、VM 名の中の特殊文字を一致させる必要がある場合があります。

例えば、"Windows VM3 [2012R2]" という名前の仮想マシンのバックアップで「Hard Disk 1」を除外するには、オプション・ファイルに次の構文を使用します。EXCLUDE.VMDISK "Windows VM3 ? 2012R2?" "Hard Disk 1"

vmdk_label

除外するディスクのディスク・ラベルを指定します。ワイルドカード文字は使用できません。特定の仮想マシンのディスクのディスク・ラベルを判別するには、-preview オプションを指定して **Backup VM** コマンドを使用します。構文については、「**VM のバックアップ**」のトピックを参照してください。

ディスクがアプリケーション・データを含む場合、INCLUDE.VMTSMVSS オプションで保護している仮想マシンのディスクを除外してはいけません。

例

オプション・ファイル

vm1 という名前の仮想マシンに ラベルがそれぞれ Hard Disk 1、Hard Disk 2、Hard Disk 3、および Hard Disk 4 の 4 つのディスクが含まれると仮定します。Disk 2 を **Backup VM** 操作から除外するには、オプション・ファイルに次のステートメントを指定します。

```
EXCLUDE.VMDISK "vm1" "Hard Disk 2"
```

Disk 2 および 3 を **Backup VM** 操作から除外します。

```
EXCLUDE.VMDISK "vm1" "Hard Disk 2"
EXCLUDE.VMDISK "vm1" "Hard Disk 3"
```

コマンド・ライン

以下のコマンド・ラインには、ディスクが除外されることを示すために、vmdk= キーワードの前に除外演算子 (-) を使用する例が示されています。

単一ディスクを除外します。

```
dsnc backup vm "vm1:-vmdk=Hard Disk 1"
```

Disk 2 と Disk 3 を除外します。

```
dsmc backup vm "vm1:-vmdk=Hard Disk 2:-vmdk=Hard Disk 3"
```

vm1 の Disk 1 と Disk 2 を除外します。

```
dsmc backup vm "vm1:-vmdk=Hard Disk 1:-vmdk=Hard Disk 2"
```

関連資料

670 ページの『Backup VM』

747 ページの『Restore VM』

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

395 ページの『Domain.vmfull』

domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

456 ページの『Include.vmdisk』


INCLUDE.VMDISK オプションは、バックアップ操作に仮想マシン (VM) ディスクを組み込みます。ディスク・ラベルを指定しない場合は、VM のすべてのディスクがバックアップされます。

463 ページの『INCLUDE.VMTSMVSS』

INCLUDE.VMTSMVSS オプションは、仮想マシンのアプリケーションに、バックアップがまもなく実行されることを通知します。このオプションにより、アプリケーションでは、トランザクション・ログの切り捨てとトランザクションのコミットが可能になるため、バックアップ完了時には整合性のある状態から再開できます。トランザクション・ログの切り捨てを抑止するためのオプション・パラメーターを指定することもできます。

Exclude.vmlocalsnapshot

このオプションは、ローカル・バックアップ操作から VMware 仮想マシンを除外します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

このオプションは、仮想ボリューム (VVOL) データ・ストアに保管されている仮想マシンにのみ使用できます。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンをバックアップするように構成された、サポートされている Linux クライアントで使用できます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定します。

構文

```
➡ EXCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT — — vmname ➡
```

パラメーター

vmname

ローカル・バックアップ操作から除外する仮想マシンの名前を指定します。この名前は、仮想マシンの表示名です。

それぞれの EXCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT ステートメントには、1 つの仮想マシンのみを指定できます。ただし、複数の仮想マシンを除外するためには、いくつでも必要な数の EXCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT ステートメントを指定できます。

仮想マシン名にはワイルドカードを含めることができます。アスタリスク (*) は任意の文字ストリングに一致します。疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。仮想マシン名にスペース文字が含まれている場合は、名前を二重引用符 (") で囲んでください。

ヒント: 仮想マシン名に特殊文字が含まれている場合は、仮想マシン名を指定する時に特殊文字の代わりに疑問符のワイルドカードを入力してください。

例

クライアント・オプション・ファイルの以下の `EXCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT` ステートメントにより、ローカル・バックアップ操作から `VM1` という名前の仮想マシンを除外します。

```
exclude.vmlocalsnapshot VM1
```

関連資料

670 ページの『Backup VM』

Fbbranch

`fbbranch` オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

`fbbranch` オプションは、バックアップまたはアーカイブするリモート FastBack サーバーのブランチ ID を指定します。`fbbranch` オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが FastBack 災害復旧ハブにインストール済みの場合、または専用プロキシが複製 FastBack 災害復旧ハブ・リポジトリに接続している場合にのみ必要です。バックアップ/アーカイブ・クライアントが FastBack サーバーにインストールされている場合は、`fbbranch` オプションを指定しないでください。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

オプション・ファイル

ありません。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。サーバーもこのオプションを定義または指定変更できます。

構文

➡ `FBBbranch=` — *branch_ID* ➡

パラメーター

branch_ID

FastBack サーバーのブランチ ID を指定します。この値は、FastBack サーバーの災害復旧構成の一部です。

例

コマンド・ライン:

`-FBBbranch=oracle`

FastBack 災害復旧ハブにインストールされているバックアップ/アーカイブ・クライアント上:

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname=policy1 -fbserver=myFbServer  
-fbbranch=oracle
```

コマンド・ライン:

リモート FastBack 災害復旧ハブのリポジトリに接続されているバックアップ/アーカイブ・クライアント上:

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname=policy1 -fbserver=server1  
-Fbreposlocation=¥¥myDrHub.company.com¥REP  
-fbbranch=oracle
```

fbbranch オプションが、FastBack サーバーにインストールされているバックアップ/アーカイブ・クライアント・ワークステーションに指定されている場合は、fbbranch オプションは無視されます。

Fbclientname

fbclientname オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

fbclientname オプションは、バックアップ・プロキシからバックアップまたはアーカイブされる、コンマで区切られた 1 つ以上の FastBack クライアントの名前です。fbpolicyname オプションに複数のポリシーが指定された場合、fbclientname オプションの値は無効です。

fbclientname オプション値にはスペースを含めることはできません。

fbvolumename オプションの値を指定しないと、指定されているポリシー内のすべての FastBack クライアントのすべてのボリュームがバックアップされます。fbclientname オプションで複数の FastBack クライアントを指定する場合、fbvolumename オプションに値を指定することはできません。

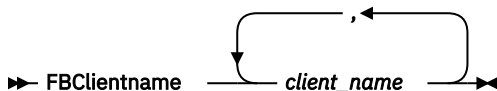
サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

オプション・ファイル

ありません。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。

構文



パラメーター

client_name

1 つ以上の FastBack クライアントの名前を指定します。最大 10 個の FastBack クライアント名を指定することができます。

重要:

archive fastback コマンドまたは **backup fastback** コマンドを指定する場合:

1. 少なくとも 1 個の FBpolicyName が常に必要です。
2. FBClientName および FBVolumeName の両方に値が指定されていない場合は、FBPolicyName に最大 10 個の値を指定できます。
3. FBClientName 値を指定する場合は、FBPolicyName の値は 1 つのみでなければなりません。
4. PolicyName が 1 つのみ指定されていて、FBVolumeName の値が指定されていない場合は、FBClientName に最大 10 個の値を指定できます。
5. FBVolumeName オプションを指定する場合、1 つのみの FBPolicy と 1 つのみの FBClientName を指定することができます。

6. 条件 5 が満たされている場合は、複数の FBVolumeName を指定することができます。
7. Linux の場合は、常に FBReposLocation オプションを指定する必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmsc backup fastback -fbpolicyname=Policy1
                        -fbclientname=fbclient1,fbclient2
                        -fbserver=myFbServer
                        -fbreposlocation=/mnt/FBLocation
```

ポリシー Policy1 で検出される FastBack クライアント fbclient1 および fbclient2 のすべてのボリュームをバックアップします。

Fbpolicyname

fbpolicyname オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

fbpolicyname オプションは、バックアップ・プロキシからバックアップまたはアーカイブする、コンマで区切られた 1 つ以上の FastBack ポリシーの名前です。少なくとも 1 つのポリシー名を指定する必要があります。複数のポリシー名を指定するには、コンマ区切りのポリシーのリストを使用します。デフォルト値はありません。

1 つ以上の FB ポリシー名にスペースが含まれている場合は、それらを引用符で囲む必要があります。例えば、次のようにします。"FB Policy NAME1, FBPolicy Name 2"。

fbclientname オプションと fbvolumename オプションの値を指定しないと、指定されているポリシー内のすべての FastBack クライアントのすべてのボリュームがバックアップされます。fbpolicyname オプションに複数のポリシーを指定した場合は、fbclientname オプションおよび fbvolumename オプションの値を指定することはできません。

ポリシー指定に Windows クライアントと Linux FastBack クライアントの両方が含まれている場合は、Linux バックアップ/アーカイブ・クライアントにより、Linux ボリュームのみが IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップまたはアーカイブされます。

dsmsc コマンドを発行する前に、アーカイブまたはバックアップされる FastBack ポリシーの FastBack リポジトリに、少なくとも 1 つのスナップショットが存在している必要があります。

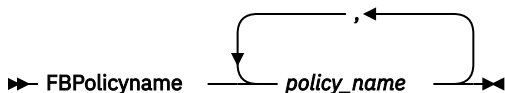
サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

オプション・ファイル

ありません。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。

構文



パラメーター

policy_name

FastBack ポリシーの名前を指定します。最大 10 個の FastBack ポリシー名を指定することができます。

重要:

archive fastback コマンドまたは **backup fastback** コマンドを指定する場合:

1. 少なくとも 1 個の FBpolicyName が常に必要です。
2. FBClientName および FBVolumeName の両方に値が指定されていない場合は、FBPolicyName に最大 10 個の値を指定できます。
3. FBClientName 値を指定する場合は、FBPolicyName の値は 1 つのみでなければなりません。
4. PolicyName が 1 つのみ指定されていて、FBVolumeName の値が指定されていない場合は、FBClientName に最大 10 個の値を指定できます。
5. FBVolumeName オプションを指定する場合、1 つのみの FBPolicy と 1 つのみの FBClientName を指定することができます。FBClientName を 1 つだけ指定する必要があります。省略することはできません。
6. 条件 5 が満たされている場合は、複数の FBVolumeName を指定することができます。
7. Linux の場合は、常に FBReposLocation オプションを指定する必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname=Policy1,Policy2,Policy3  
-fbserver=myFbServer  
-fbreposlocation=¥¥myFbServer.company.com¥REP
```

ポリシー Policy1、Policy2 および Policy3 で検出されるすべての FastBack クライアントのすべてのボリュームをバックアップします。

スペースを使用してポリシーを指定するには、二重引用符でそれらを囲んでください。例えば、次のようになります:

```
-fbpolicyname="Policy 1,Policy2,Policy3"
```

Fbreposlocation

fbreposlocation オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

fbreposlocation オプションは、適切なスナップショットをマウントするために必要な Tivoli Storage Manager FastBack シェル・コマンドを発行するために接続するバックアップ/アーカイブ・クライアント・プロキシの Tivoli Storage Manager FastBack リポジトリのロケーションを指定します。

Linux システムでは、このオプションが必須です。デフォルト・ロケーションはありません。

FastBack サーバー上のスナップショットに対して fbreposlocation オプションを指定する場合は、server_name@WORKGROUP のフォーマットを使用します。

FastBack 災害復旧ハブに FastBack リポジトリ・ロケーションを指定するには、次の 2 つの方法があります。

- オプション -fbreposlocation=¥¥DR_Hub¥rep_server によって、完全なリポジトリ・ロケーションを指定する。このフォーマットを使用する場合、DR_Hub は FastBack 災害復旧ハブ・マシン名、rep_server は DR ハブ上の複製 FastBack サーバー・リポジトリの名前です。
- -fbreposlocation= オプションと -fbbranch オプションの組み合わせを使用して、リポジトリ・ロケーションを指定する。このフォーマットを使用する場合、オプション -fbreposlocation=DR_Hub@WORKGROUP によって DR ハブ・リポジトリ・ロケーションを指定し、-fbbranch オプションを使用して DR ハブ上の複製 FastBack サーバー・リポジトリの名前を指定します。

フォーマット -fbr=¥¥<fbserver>¥REP を使用する場合、バックアップ・アーカイブ・クライアントを対話モードで使用する際には、<fbserver> の前に 2 つの円記号を指定し、さらに REP の前に 1 つの

円記号を指定します。このフォーマットを Linux コマンド `dsmc backup fastback -fbr=¥¥¥¥<fbserver>¥¥REP` のように使用する場合は、`<fbserver>` の前に 4 つの円記号を指定し、さらに REP の前に 2 つの円記号を指定する必要があります。これは Linux シェルが円記号をエスケープ文字として解釈するためであり、最初の円記号は、直後の円記号に対するエスケープ文字として処理されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

オプション・ファイル

ありません。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。サーバーもこのオプションを定義または指定変更できます。

構文

➡ FBReposlocation — repository_location ➡

パラメーター

repository_location

Tivoli Storage Manager FastBack リポジトリ・ロケーションを指定します。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname=Policy1
-fbclientname=fbclient1,fbclient2 -fbserver=myFbDrHub
-fbreposlocation=¥¥myFbDrHub¥rep_myFbServer
```

注: Linux は専用プロキシー構成としてのみサポートされるため、Linux では常にリポジトリ・ロケーションが必要です。

コマンド・ライン:

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname=Policy1
-fbclientname=fbclient1,fbclient2 -fbserver=myFbDrHub
-fbreposlocation=myFbDrHub -fbbranch=rep_myFbServer
```

注: Linux は専用プロキシー構成としてのみサポートされるため、Linux では常にリポジトリ・ロケーションが必要です。

Fbserver

fbserver オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

fbserver オプションは、fbreposlocation オプションによって指定されたりポジトリを所有する Tivoli Storage Manager FastBack サーバー・ワークステーションの短縮ホスト名を指定します。DR ハブの場合、fbserver オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントの接続先であるブランチ・リポジトリを所有する FastBack サーバー・ワークステーションの短縮名を指定します。

fbserver オプションは、マウント処理のために FastBack サーバー・リポジトリまたは DR ハブ・サーバー・リポジトリに接続するのに必要なユーザー資格情報をリトリブするためのキーです。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

オプション・ファイル

ありません。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。

構文

➡ -FBServer — — server_name →

パラメーター

server_name

FastBack サーバーがインストールされているマシンの短縮ホスト名を指定します。

例

コマンド・ライン:

バックアップ/アーカイブ・クライアントが Linux プロキシ・クライアント・マシンにインストールされます。次のコマンドを使用して、FastBack policy1 に定義されているすべての Linux FastBack クライアントのすべての FastBack ボリュームをアーカイブします。

```
dsmc archive fastback -fbpolicyname=Policy1
-fbserver=myfbserver
-fbreposlocation=myfbserver@WORKGROUP
```

リポジトリ・ロケーションは必須です。リポジトリ・ロケーションを指定しないと、このコマンドは失敗します。

FastBack サーバー名 -myfbserver は、リポジトリが配置されている FastBack サーバーの短縮ホスト名です。

コマンド・ライン:

リポジトリ rep_server1 が FastBack 災害復旧ハブ myFbDrHub 上に配置されます。

```
dsmc archive fastback -fbpolicyname="Policy 1"
-fbserver=myFbDrHub
-fbreposlocation=¥¥myFbDrHub¥rep_server1
```

FastBack サーバー名 -myFbDrHub は、リポジトリが配置されている FastBack 災害復旧ハブ サーバーの短縮ホスト名です。

-fbreposlocation は、リポジトリのロケーションを指定します。リポジトリ・ロケーションは必須です。リポジトリ・ロケーションを指定しないと、このコマンドは失敗します。

この場合、-fbserver は FastBack DR ハブの短縮ホスト名を指している必要があります。

コマンド・ライン:

policy1 という名前の FastBack ポリシーによって保護されているすべてのボリュームを basil という名前の FastBack サーバーからアーカイブします。

```
dsmc archive fastback -Fbpolicyname=policy1
-FBServer=basil -ARCHMC="my_tsm_mgmt_class"
-fbreposlocation=basil@WORKGROUP
```

Fbvolumename

fbvolumename オプションは、**backup fastback** コマンドまたは **archive fastback** コマンドに使用します。

fbvolumename オプションは、バックアップ・プロキシからバックアップまたはアーカイブされる、コンマで区切られた 1 つ以上の Tivoli Storage Manager FastBack ボリュームの名前です。fbclientname オプションで複数の FastBack クライアントが指定される場合、fbvolumename オプションの値は無効です。

fbclientname オプションで複数の FastBack クライアントを指定する場合、fbvolumename オプションに値を指定することはできません。

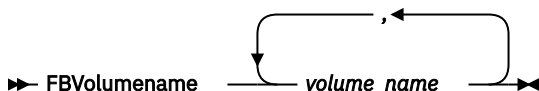
サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

オプション・ファイル

ありません。このオプションはコマンド・ラインでのみ指定できます。

構文



パラメーター

volume_name

Tivoli Storage Manager FastBack ボリュームの名前を指定します。最大 10 個の FastBack ボリューム名を指定することができます。

重要:

archive fastback コマンドまたは **backup fastback** コマンドを指定する場合:

1. 少なくとも 1 個の FBpolicyName が常に必要です。
2. FBClientName および FBVolumeName の両方に値が指定されていない場合は、FBPolicyName に最大 10 個の値を指定できます。
3. FBClientName 値を指定する場合は、FBPolicyName の値は 1 つのみでなければなりません。
4. PolicyName が 1 つのみ指定されていて、FBVolumeName の値が指定されていない場合は、FBClientName に最大 10 個の値を指定できます。
5. FBVolumeName オプションを指定する場合、1 つのみの FBPolicy と 1 つのみの FBClientName を指定することができます。FBClientName を 1 つだけ指定する必要があります。省略することはできません。
6. 条件 5 が満たされている場合は、複数の FBVolumeName を指定することができます。
7. FBReposLocation オプションを指定する必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname=Policy1 -fbclientname=client1  
-fbvolumename=data1,data2 -fbserver=myFbDrHub  
-fbreposlocation=¥¥myFbDrHub¥rep_server1
```

ポリシー Policy1 で検出される FastBack クライアント client1 からボリューム data1 と data2 をバックアップします。

Filelist

filelist オプションを使用して、ファイルのリストを処理します。

filelist オプションは、次のコマンドで使用できます。

- **archive**
- **backup group**

- **delete archive**
- **delete backup**
- **expire**
- **incremental**
- **query archive**
- **query backup**
- **restore**
- **retrieve**
- **selective**

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、このオプションで指定したファイルをオープンし、特定のコマンドに従ってファイルのリストを処理します。**restore** および **retrieve** コマンドを除けば、**filelist** オプションを使用した場合には、クライアントはコマンド・ラインでの他のすべてのファイル指定を無視します。

filelist にリストされたファイル (項目) は、以下の規則に従っている必要があります。

- 各項目は、ファイルまたはディレクトリーに対する完全修飾パス、あるいは相対パスでなければなりません。ディレクトリーをファイル・リスト項目に含めた場合には、ディレクトリーはバックアップされますが、そのディレクトリーの内容はバックアップされないことに注意してください。
- 各パスは単一行に指定する必要があります。1 行に含めることができるパスは 1 つのみです。
- パスには、0x18 (CTRL-X)、0x19 (CTRL-Y) および 0x0A (改行) などの制御文字を含めることはできません。
- デフォルトでは、パスにワイルドカード文字を含めることはできません。パスの指定には、アスタリスク (*) も疑問符 (?) も使用しないでください。

この制限は、**wildcardsareliteral** というオプションを有効にした場合に、指定変更できます。このオプションについて詳しくは、[642 ページの『Wildcardsareliteral』](#)を参照してください。

- **filelist** は、MBCS ファイルかまたはすべてがユニコード項目であるユニコード・ファイルとすることができます。Mac OS X の場合、現行のオペレーティング・システム言語または UTF-16 を使用して、ファイル・リストをエンコードできます。
- **quotessareliteral** というクライアント・オプションを設定すると、ファイル指定内の引用符は、区切り文字としてではなく、そのまま引用符として解釈されます。このオプションについて詳しくは、[514 ページの『Quotesareliteral』](#)を参照してください。**quotesareliteral** も **wildcardsareliteral** も設定されていない場合、引用符およびワイルドカードは通常どおりに処理されます。
- 引用符およびワイルドカードの処理は、以下のリストで説明されているように行われます。
 - パスまたはファイル名にスペースが含まれる場合、パス全体を引用符 (") または単一引用符 (') で囲みます。例えば、"C:¥My Documents¥spreadsheet.xls" または 'C:¥My documents ¥spreadsheet.xls' のようにします。
 - パスに 1 つ以上の単一引用符 (') が含まれている場合には、項目全体を引用符 (") で囲みます。パスに 1 つ以上の引用符が含まれている場合には、パス全体を単一引用符で囲みます。ファイル・リスト処理では、引用符と単一引用符が混在するパスはサポートしません。

以下の例は、パスにおける引用符と単一引用符の正しい使い方と間違った使い方を示しています。

このパスの例では、単一引用符が含まれていますので、以下のようにパスを引用符で囲む必要があります。

```
"/home/gatzby/mydir/gatzby's_report.out"
```

このパスの例では、引用符が含まれていますので、以下のように単一引用符で囲む必要があります。

```
'/home/gatzby/mydir/"top10".out'
```

このパスの例では、スペース文字が含まれていますので、以下のように引用符または単一引用符のいずれかで囲む必要があります。

```
"/home/gatzby/mydir/top 10.out"
```

または

```
'/home/gatzby/mydir/top 10.out'
```

このパスの例は、同じ区切り文字でないもの (" および ') が含まれているため、ファイル・リスト処理ではサポートされません。

```
/home/gatzby/mydir/andy's_"top 10" report.out
```

以下のパスは、ワイルドカード文字が含まれているため、ファイル・リスト処理ではサポートされません。

```
/home/gatzby*  
/home/*/20??.txt
```

- 上記の規則に準拠していない IBM Spectrum Protect ファイル・リスト項目はいずれも無視されます。

以下は、ファイル・リストで有効なパスの例です。

```
/home/dir/file1  
/usr/tivoli/file2  
/usr/avi/dir1  
/fs1/dir2/file3  
"/fs2/Ha Ha Ha/file.txt"  
"/fs3/file.txt"
```

引用符およびワイルドカード文字の標準処理の指定変更については、[514 ページ](#)の『[Quotesareliteral](#)』および [642 ページ](#)の『[Wildcardsareliteral](#)』を参照してください。

オープン・ファイル・サポート操作中に、**filelist** オプションを使用できます。この場合、クライアントは **filelist** 中の項目を実ボリュームからではなく仮想ボリュームから処理します。

filelist 中の項目がディレクトリーを示していると、処理されるのはそのディレクトリーだけで、ディレクトリー内のそのファイルは処理されません。

filelist オプションで指定したファイル名 (**filelistspec**) が存在していない場合には、コマンドは失敗します。クライアントは、**filelist** 中の有効なファイルまたはディレクトリーでない項目があった場合には、それらをスキップします。クライアントはエラーをログに記録し、次の項目まで処理は続行されます。

ファイル指定は、リストアされた **filelist** 項目の宛先を指示するのに、**restore** および **retrieve** コマンドで使用します。例えば、次の **restore** コマンドで、ファイル指定 **/user/record/** は、ファイル・リストのすべての項目に対するリストアの宛先を表します。

```
restore -filelist=/home/dir/file3 /usr/record/
```

ただし、次の **selective** コマンドでは、ファイル指定 **/usr/record/** は無視されます。

```
selective -filelist=/home/dir/file3 /usr/record/
```

delete archive コマンドまたは **delete backup** コマンドの **filelist** でディレクトリーを指定した場合には、そのディレクトリーは削除されません。 **delete archive** コマンドまたは **delete backup** コマンドで使用する **filelist** には、ディレクトリーは組み込まれません。

リスト内の項目は、**filelist** に現れた順に処理されます。処理のパフォーマンスを最適にするには、**filelist** をファイル・スペース名によって事前ソートしてください。

注: クライアントは、以下の条件が存在する場合にはディレクトリーを 2 回バックアップすることがあります。

- **filelist** にディレクトリーの項目が含まれる

- `filelist` にそのディレクトリー内のファイルの 1 つ以上の項目が含まれる
- ディレクトリーのバックアップが存在しない

例えば、`filelist` にエントリー `/home/dir/file1` および `/home/dir` が含まれているとします。`/dir` ディレクトリーがサーバーに存在しない場合、2 度目に `/home/dir` ディレクトリーがサーバーに送信されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ `FILEList = — — filelistspec ➡`

パラメーター

filelistspec

コマンドで処理するファイルのリストに入っているファイルの位置と名前を指定します。

注: コマンド・ラインで `filelist` オプションを指定した場合は、`subdir` オプションは無視されます。

例

コマンド・ライン:

```
sel -filelist=/home/avi/filelist.txt
```

関連資料

514 ページの『[Quotesareliteral](#)』

`quotesareliteral` オプションは、単一引用符 (') または二重引用符 (") が `filelist` オプションのファイル・リスト指定に含まれている場合に、それらを文字どおりに解釈するかどうかを指定します。

642 ページの『[Wildcardsareliteral](#)』

`wildcardsareliteral` オプションは、疑問符 (?) およびアスタリスク (*) が `filelist` オプションのファイル・リスト指定に含まれている場合に、それらを文字どおりに解釈するかどうかを指定します。

Filename

`filename` オプションを **query systeminfo** コマンドで使用して、情報を格納するファイル名を指定します。

以下の 1 つ以上の項目から収集された情報を保管できます。

- `DSMOPTFILE` - `dsm.opt` ファイルの内容。
- `DSMSYSFILE` - `dsm.sys` ファイルの内容。
- `ENV` - 環境変数。
- `ERRORLOG` - IBM Spectrum Protect エラー・ログ・ファイル。
- `FILE` - 指定されるファイル名の属性。
- `INCLEXCL` - バックアップおよびアーカイブ操作の実行中に処理される順序で `include-exclude` リストをコンパイルします。
- `OPTIONS` - コンパイルされたオプション。
- `OSINFO` - クライアント・オペレーティング・システムの名前とバージョン (UNIX および Linux の場合 `ULIMIT` 情報を含む)。
- `POLICY` - ポリシー・セット・ダンプ。
- `SCHEDLOG` - スケジュール・ログ (通常は、`dsmsched.log`) の内容。

- CLUSTER - AIX クラスター情報。

注: **query systeminfo** コマンドは、主に IBM サポートが問題を診断する際に支援するための補助機能用ですが、この情報で扱われている概念に通じているユーザーにも役立つ場合があります。console オプションを使用する場合は、画面の高さまたは幅に合わせるための出力のフォーマット設定は特に行われません。したがって、長さで行折り返しが原因でコンソール出力が読みにくくなることがあります。この場合は、filename オプションを **query systeminfo** コマンドで使用して、出力をファイルに書き込み、その後でそのファイルを IBM サポートに送信することができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

構文

▶ FILEName = — — outputfilename ▶

パラメーター

outputfilename

情報の保管先となるファイル名を指定します。ファイル名を指定しない場合、デフォルトでは情報は dsminfo.txt ファイルに保管されます。

例

コマンド・ライン:

```
query systeminfo dsmoptfile errorlog -filename=tsminfo.txt
```

関連情報

[365 ページの『Console』](#)

Filesonly

filesonly オプションは、バックアップ、リストア、リトリブ、または照会処理をファイルのみに制限します。

restore または **retrieve** コマンドで **filesonly** オプションを使用している時には、IBM Spectrum Protect サーバーからディレクトリーをリストアまたはリトリブすることができません。ただし、必要であれば、リストアまたはリトリブするファイルのプレースホルダーとして、デフォルトの属性を持つディレクトリーが作成されます。

また、filesonly オプションを、次のコマンドで 사용할 ことができます。

- **archive**
- **incremental**
- **query archive**
- **query backup**
- **restore**
- **restore backupset**
- **restore group**
- **retrieve**
- **selective**

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

► FILESOnly ◄

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:
dsmc incremental -filesonly

Followsymbolic

バックアップ操作時に、**followsymbolic** オプションは、シンボリック・リンクを仮想マウント・ポイントとして使用するかどうかを指定します。リストアまたはリトリブ操作時に、**followsymbolic** オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが、リストア・ターゲット・ファイル・システム上のシンボリック・リンクに名前が一致するディレクトリーをリストアする方法を指定します。

バックアップ操作の場合、**followsymbolic** オプションは **virtualmountpoint** オプション設定に影響を与える場合があります。 **virtualmountpoint** オプションを使用して、シンボリック・リンクを仮想マウント・ポイントとして指定する場合、**followsymbolic** オプションも設定する必要があります。

リストアおよびリトリブ操作時に、**followsymbolic** は、クライアントがファイル・システム上のシンボリック・リンクを処理する方法に影響を与える場合があります。 **followsymbolic** は、クライアントが、リストア・ターゲット・ファイル・システム上のシンボリック・リンクに名前が一致するディレクトリーをリストアしようとする場合にのみ設定します。

followsymbolic=no (デフォルト) を指定した場合、クライアントはディレクトリーの内容をリストアしないで、このエラー・メッセージを戻します。

```
ANS4029E 'file space name path-name file-name' の処理中にエラー:  
ディレクトリー・パスを構築できません。ディレクトリーと同じ名前のパスが  
存在しています。
```

followsymbolic=yes を指定した場合、クライアントはディレクトリーの内容を、シンボリック・リンクのターゲットにリストアします。

例えば、クライアントがパス **/fs1/dir1/subdir1/file1** でファイルをバックアップしたと想定します。また、リストア・ターゲット・ファイル・システムにシンボリック・リンク **/fs1/dir1** が存在し、ディレクトリー **/fs88/dir88/subdir88** にリンクしていると想定します。コマンドでファイルをリストアします。

```
restore /fs1/dir1/subdir1/file1
```

followsymbolic=no を指定した場合、クライアントはファイルをリストアしないで、前記のエラー・メッセージを戻します。 **followsymbolic=yes** を指定した場合は、クライアントは **file1** を **/fs88/dir88/subdir88/subdir1/file1** ディレクトリーにリストアします。

名前がリストア・ターゲット・ファイル・システム上のシンボリック・リンクに一致するシンボリック・リンク (ディレクトリーではない) をリストアすると、クライアントはそのシンボリック・リンクをリストアします。

シンボリック・リンクが仮想マウント・ポイントとして使用されている場合、リンク・ターゲットへのパスは、絶対ファイル・パスを使用して指定する必要があります。

このオプションは、**restore** および **retrieve** コマンドと共に使用するか、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) で使用してください。

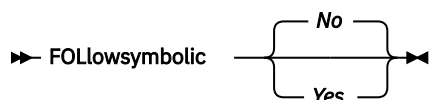
サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX クライアントで有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文



パラメーター

No

シンボリック・リンクになっている仮想マウント・ポイントは、バックアップしません。リストア・ターゲット・ファイル・システムに名前が一致するシンボリック・リンクが含まれている場合は、リストアしません。これはデフォルトです。

Yes

ディレクトリーの内容をシンボリック・リンクのターゲットにリストアします。

例

オプション・ファイル:

followsymbolic Yes

コマンド・ライン:

-fol=Yes

関連情報

344 ページの『[Archsymlinkasfile](#)』 オプションは、アーカイブ時に、クライアントがシンボリック・リンクを処理する方法を決定します。

Mac OS X 以外のオペレーティング・システムの場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントがシンボリック・リンクを処理する方法について詳しくは、[230 ページの『シンボリック・リンクのバックアップ』](#)を参照してください。

Forcefailover

forcefailover オプションを使用すると、クライアントを即時に 2 次サーバーにフェイルオーバーさせることができます。

forcefailover オプションを使用して、1 次サーバーがまだオンラインの場合でも、即時に 2 次サーバーに接続することができます。例えば、このオプションを使用して、バックアップ・アーカイブ・クライアントが、予期された 2 次サーバーにフェイルオーバーすることを確認できます。

このオプションを通常の操作時に編集しないでください。

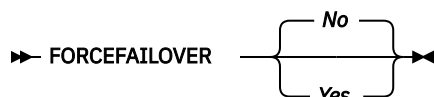
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

Yes

クライアントを 2 次サーバーに即時に接続することを指定します。

No

1 次サーバーが使用不可である場合、クライアントが次のログオン時に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることを指定します。この値がデフォルトです。

例

オプション・ファイル:

FORCEFAILOVER yes

コマンド・ライン:

-FORCEFAILOVER=yes

関連概念

[自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

[自動フェイルオーバー用のクライアントの構成](#)

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Fromdate

fromdate オプションは fromtime オプションとともに使用して、リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を開始する日時を指定します。

ファイルをリストアまたはリトリブするために必要であればこの日時より古いディレクトリーを含めることはありますが、この日時より前にバックアップまたはアーカイブされたファイルは処理には組み込まれません。

fromdate オプションは、次のコマンドで使用してください。

- delete backup
- query archive
- query backup
- restore
- restore group
- retrieve

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➤ FROMDate = — — date ➤

パラメーター

date

バックアップ・コピーまたはアーカイブ済みファイルを検索する時の開始日付を指定します。日付は、dateformat オプションで選択したフォーマットで入力します。

コマンドに dateformat を組み込む場合には、fromdate、pitdate、および todate オプションの前に入れる必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc query backup -fromdate=12/11/2003 "/Users/van/Documents/*"
```

コマンド・ライン:

```
dsmc query backup -fromdate=12/11/2003 /home/dilbert/*
```

Fromnode

fromnode オプションは、あるノードで別のノードのためのコマンドを実行することを許可するために使用します。別のノードのユーザーは、その別のノードに対して **set access** コマンドを使用してファイルを照会、リストア、あるいはリトリブできるようにしなければなりません。

fromnode オプションは、次のコマンドで使用してください。

- query archive
- query backup
- query filespace
- query image
- query mgmtclass
- restore
- restore group
- restore image
- retrieve

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➤ FROMNode = — — node ➤

パラメーター

node

アクセスしたいバックアップ・コピーまたはアーカイブ済みファイルの元のファイルを持っているワークステーションまたはファイル・サーバーのノード名を指定します。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc query archive -fromnode=bob -subdir=yes "/Users/van/Documents/*"
```

コマンド・ライン:

```
dsmc query archive -fromnode=bob -subdir=yes "/home/jones/*"
```

Fromowner

fromowner オプションは、バックアップ・バージョンまたはアーカイブ済みのファイルまたはイメージのリストア元の代替所有者を指定します。ファイルまたはイメージを使用するには、所有者が別のユーザーにアクセス権を与える必要があります。

例えば、システム **puma** 上の **usermike** に属している **/home/devel/proja** ディレクトリーからファイルをリストアし、リストアしたファイルを自分の所有する **/home/id/proja** という名前のディレクトリーに入れるには、次のコマンドを入力します。

```
dsmc restore -fromowner=usermike -fromnode=puma /home/devel/proja/  
/home/id/proja/
```

注: イメージ・リストアのアーカイブは、Mac OS X オペレーティング・システムには適用されません。

非 root ユーザーは、root ユーザーからアクセス権が与えられていれば、**fromowner=root** を指定して、root ユーザーの所有するファイルにアクセスすることができます。

注: **fromowner** オプションを **fromnode** オプションなしで指定する場合は、アクティブ・ユーザーは **fromowner** ユーザーと同じノードにいる必要があります。

fromowner オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **query archive**
- **query backup**
- **query group**
- **query image**
- **restore**
- **restore image**
- **restore group**
- **retrieve**

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

構文

➡ FROMOwner = — — owner ➡

パラメーター

owner

代替所有者の名前。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc query archive "/home/id/proja/*" -fromowner=mark
```

Fromtime

fromtime オプションは fromdate オプションとともに使用し、リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を開始する時刻を指定します。

fromdate を指定しない場合には、バックアップ/アーカイブ・クライアントはこのオプションを無視します。

fromtime オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **delete backup**
- **query archive**
- **query backup**
- **restore**
- **restore group**
- **retrieve**

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ FROMTime = — — *time* ➡

パラメーター

time

バックアップ済みファイルまたはアーカイブ済みファイルを検索する時の特定の日付の開始時刻を指定します。時刻を指定しないと、デフォルトの 00:00:00 になります。時刻は、timeformat オプションで選択したフォーマットで指定します。

コマンドに timeformat オプションを組み込む場合には、fromtime、pittime、および totime オプションの前に入れる必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc q b -timeformat=4 -fromt=11:59AM -fromd=06/30/2003 -tot=11:59PM -  
tod=06/30/2003 /home/*
```

Groupname

groupname オプションは **backup group** コマンドで使用し、グループの名前を指定します。この操作は、新規グループまたはグループの現行活動バージョンにのみ実行できます。

サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

構文

▶ GROUPName = — — name ▶

パラメーター

name

filelist オプションを使用して、バックアップされているファイルを入れるグループの名前を指定します。グループ名はファイル指定ではなく、名前フィールドなので、グループ名にディレクトリーの区切り文字を使用することはできません。

例

コマンド・ライン:

```
backup_group -filelist=/home/dir1/filelist1 -groupname=group1  
-virtualfsname=virtfs -mode=full
```


Groups (非推奨)

このオプションは推奨されていません。

Host

host オプションは、VMware のリストア操作中に新規仮想マシンが作成されるターゲット ESX サーバーの場所を指定します。

このオプションは **restore vm** コマンドで使用して、データのリストア先である ESX ホスト・サーバーを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

例

仮想マシンを、vmesxbld1 という名前の ESX サーバーにリストアします。

```
restore vm -host=vmesxbld1.us.acme.com
```

Httpport

httpport オプションは、Web クライアント用の TCP/IP ポート・アドレスを指定します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「**Web クライアント**」タブの「**HTTP ポート**」フィールドで設定できます。

構文

▶ HTTPport — — port_address ▶

パラメーター

port_address

Web クライアントと通信するために使用される TCP/IP ポート・アドレスを指定します。値の範囲は、1000 から 32767 で、デフォルトは 1581 です。

例

オプション・ファイル:

httpport 1502

コマンド・ライン:

適用しません。

Hsmreparsetag

hsmreparsetag オプションは、お客様のシステムにインストールされた HSM 製品によって作成される固有のリパース・タグを指定します。

HSM 製品の多くは、リパース・ポイントを使用してマイグレーション済みのファイルの検索または再呼び出しを行います。ファイルがマイグレーションされると、ファイル・システムには、オリジナル・ファイルと同じ名前の小さなスタブ・ファイルが残ります。スタブ・ファイルは、ユーザーまたはアプリケーションがこのスタブ・ファイルにアクセスした時に、オリジナル・ファイルを再呼び出しするトリガーとなるリパース・ポイントです。リパース・ポイントには、ファイルをマイグレーションした HSM 製品を識別するための、「リパース・タグ」と呼ばれる固有の ID が含まれています。

IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントがスタブ・ファイル内のリパース・タグを認識しない場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントによって HSM 製品がオリジナル・ファイルの再呼び出しを行います。hsmreparsetag オプションを使用してリパース・タグを指定すると、ファイルが再呼び出しされないようにすることができます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、以下の会社の HSM 製品のリパース・タグを認識します。

- International Business Machines Corp.
- Wisdata System Co. Ltd.
- BridgeHead Software Ltd.
- CommVault Systems, Inc.
- Data Storage Group, Inc.
- Enigma Data Solutions, Ltd.
- Enterprise Data Solutions, Inc.
- Global 360
- GRAU DATA AG
- Hermes Software GmbH
- Hewlett Packard Company
- International Communication Products Engineering GmbH
- KOM Networks
- Memory-Tech Corporation
- Moonwalk Universal
- Pointsoft Australia Pty. Ltd.
- Symantec Corporation

ご使用の HSM 製品が上記リストにない場合は、hsmreparsetag オプションを使用してリパース・タグを指定してください。その製品が使用するリパース・タグについては、HSM 製品の該当ベンダーにお問い合わせください。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての Windows クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文

➡ HSMREPARSETAG — *reparse_tag_value* →

パラメーター

reparse_tag_value

リパース・タグを指定する 10 進数 (基数 10) または 16 進数 (基数 16) の値。

例

オプション・ファイル:

HSM リパース・タグを 10 進形式で指定します。

```
hsmreparsetag 22
```

HSM リパース・タグを 16 進形式で指定します。

```
hsmreparsetag 0x16
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Ieobjtype

ieobjtype オプションは、include/exclude ステートメント内にクライアント・サイドのデータ重複排除操作のオブジェクト・タイプを指定するために使用します。

ieobjtype オプションは、include.dedup オプションまたは exclude.dedup オプションに対する追加パラメーターです。


サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API では、このオプションもサポートされます。

オプション・ファイル

このオプションは、システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「**Include/Exclude**」タブで設定できます。このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のクライアント・オプション・セットで設定することもできます。

構文

➡ IEObjtype —  →

パラメーター

File

クライアント・サイドのデータ重複排除処理にファイルを組み込む、またはその処理からファイルを除外することを指定します。File がデフォルトです。

Image

クライアント・サイドのデータ重複排除処理にイメージを組み込む、またはその処理からイメージを除外することを指定します。

例

オプション・ファイル:

```
exclude.dedup /home/*/* ieobjtype=image
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連資料

416 ページの『[Exclude オプション](#)』

exclude オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

447 ページの『[include オプション](#)』

include オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

Ifnewer

ifnewer オプションは、バックアップ・バージョンが既存のファイルより新しい場合に、既存のファイルを最新のバックアップ・バージョンで置き換える場合にのみ使用します。

inactive または latest オプションも 使用していなければ、活動バックアップのみが対象と見なされます。

注: バックアップ・バージョンが既存のバージョンよりも新しいか古いかには関係なく、ディレクトリー項目は最新のバックアップ・バージョンで置き換えられます。

ifnewer オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **restore**
- **restore backupset**
- **restore group**
- **retrieve**

注: replace オプションが No に設定されている場合、このオプションは無視されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ IFNewer ⇐

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/Users/grover/Documents/*" -sub=y -rep=y -ifnewer
dsmc restore "/home/grover/*" -sub=y -rep=y -ifnewer
```

Imagegapsize

イメージ・バックアップ時にスキップしたいボリューム上の空領域の最小サイズを指定するには、**imagegapsize** オプションをオプション・ファイルの中で **backup image** コマンドで使用するか、あるいは **include.image** オプションと一緒に使用します。

このオプションは、LAN ベース、LAN フリーのイメージ・バックアップに使用します。

例えば、ギャップ・サイズに 10 に指定した場合、ディスク上の 10 KB を超える空の領域はバックアップされません。ちょうど 10 KB のギャップはバックアップされます。10 KB 以下の空領域は、データが含まれていなくてもバックアップされます。ただし、10 KB より小さい空領域は、データが含まれていなくてもバックアップされます。イメージ・ギャップ・サイズを小さくすると、転送する必要があるデータが少なくなります。スループットが低下する場合があります。イメージ・ギャップ・サイズを大きくすると転送されるデータが多くなります。スループットが向上します。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および JFS2 クライアントのみに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (**dsm.sys**) のサーバー・スタンザか、**dsm.sys** ファイルの **include.image** ステートメントに入れます。

構文

➡ **IMAGEGapsize** — — **size** ➡

パラメーター

size

イメージ・バックアップ中にスキップする AIX JFS2 ファイル・システム内の空領域の最小サイズを指定します。値とともに k (キロバイト)、m (メガバイト)、または g (ギガバイト) の修飾子を指定することもできます。修飾子がないと、値はキロバイトとして解釈されます。有効な値は 0 KB から 4294967295 KB です。0 の値を指定した場合は、ボリュームの終わりにある未使用のブロックを含むすべてのブロックがバックアップされます。0 以外の値を指定した場合、ボリュームの終わりにある未使用ブロックはバックアップされません。LAN ベースおよび LAN フリーのイメージ・バックアップの場合、デフォルト値は 32 KB です。このオプションは、静的およびスナップショット・ベースのイメージ・バックアップの両方に適用されます。

注: このオプションは、AIX JFS2 ファイル・システムで有効です。AIX JFS2 以外のファイル・システムで 0 より大きい **imagegapsize** を指定した場合は、警告メッセージが出力されます。

例

オプション・ファイル:

以下を **dsm.sys** ファイル内のサーバー・スタンザに追加します: **imagegapsize 1m**

Include-exclude リスト例: **include.image /kalafs1 imagegapsize=-128k**

コマンド・ライン:

-imagegapsize=64k

Imagetofile

imagemetofile オプションとともに **restore image** コマンドを使用して、ソース・イメージをファイルヘリストアすることを指定します。

ターゲット・ボリューム上に不良セクターが存在する場合や、イメージ・データを操作する必要がある場合には、イメージをファイルにリストアしなければならないことがあります。選択したデータ・コピー・ユーティリティを後で使用すれば、イメージをファイルからディスク・ボリュームに変換できます。

Linux は、論理ボリュームとしてイメージ・ファイルをマウントすることをサポートしているので、イメージ内のファイル・データにアクセスすることができます。以下にいくつかの例を上げます。

- ファイル・システム **/usr** は、バックアップ/アーカイブ・クライアントによってバックアップされています。次のコマンドは、ファイル・システム・イメージをファイル **/home/usr.img** にリストアします。

```
# dsmc restore image /usr /home/usr.img -imagemetofile
```

- イメージ・ファイルを **/mnt/usr** ディレクトリーにマウントするには、次の **mount** コマンドを実行することができます。

```
# mount /home/usr.img /mnt/usr -o loop=/dev/loop0
```

これで、通常のファイル・システムがそのディレクトリーにマウントされたかのように、イメージ・コンテンツは **/mnt/usr** から使用可能になります。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Oracle Solaris、およびすべての Linux クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ **IMAGETOFILE** ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc restore image /usr /home/usr.img -imagemetofile
```

Inactive

inactive オプションを使用すると、活動状態と非活動状態の両方のオブジェクトを表示することができます。

inactive オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **delete group**
- **query backup**
- **query group**
- **query image**
- **query nas**
- **restore**
- **restore group**
- **restore image**

• restore nas

重要: リストア操作中に `inactive` オプションを使用するときは、`latest` オプションと異なり、すべてのバージョンが予測できない順序でリストアされるため、`pick` オプション、またはその他のフィルター・オプションも使用してください。 `pitdate` を使用する場合、このオプションは暗黙的なオプションになります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。 IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

▶▶ INActive ◀◀

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/Users/zoe/Documents/*" -inactive -pick
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/home/zoe/*" -inactive -pick
```

Incl excl

`incl excl` オプションは、`include-exclude` オプション・ファイルのパスとファイル名を指定します。

複数の `incl excl` ステートメントが許可されます。しかし、このオプションを `include-exclude` ファイルのそれぞれに指定する必要があります。

`include-exclude` オプション・ファイルは、必ずすべてのユーザーが読み取りアクセスできるディレクトリー (/etc など) に保管してください。

処理が始まると、`include-exclude` ファイル内にある `include` ステートメントまたは `exclude` ステートメントは、 `incl excl` オプションによって指定されたリスト位置に同じ順序で置かれ、適宜処理されます。

ワークステーションに HSM クライアントがインストールされている場合は、`include-exclude` オプション・ファイルを使用してバックアップおよびスペース管理から、バックアップのみから、あるいはスペース管理のみからファイルを除外することができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。 サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。 このオプションは、プリファレンス・エディターの「**包含/除外**」タブで設定できます。

構文

▶▶ INCLExcl — — filespec ◀◀

パラメーター

filespec

1つの include-exclude オプション・ファイルのパスおよびファイル名を指定します。

例

オプション・ファイル:

```
INCLExcl /Users/user1/Documents/backup.excl
```

```
inclexcl /usr/dsm/backup.excl  
inclexcl /etc/inclexcl.def
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連情報

include-exclude オプション・ファイルについて詳しくは、[125 ページの『include-exclude リストの作成』](#)を参照してください。

ユニコード対応クライアントの考慮事項

include-exclude ファイルはユニコード・フォーマットでも非ユニコード・フォーマットでもかまいません。

include-exclude リスト・ファイルを作成するために使用するコード・セットがクライアント・コンピューターで使用されるコード・セットと一致しない場合、そのクライアントのコード・セットによって表示可能文字にマップすることができないファイル内の文字は、バックアップの実行時に処理することができません。

include-exclude リストを含んでいるファイルに対して Unicode エンコード方式を使用するとマップされない文字の問題が除去されるので、認識されない文字に対する置換文字としてワイルドカード文字を使用する必要はなくなりました。

Mac ユーザーの場合: ユニコード・フォーマットで include-exclude ファイルを作成するには、次のステップを実行してください。

1. 「テキスト・エディター」をオープンします。「フォーマット」>「プレーン・テキストの作成」をクリックします。
2. include および exclude ステートメントを入力します。
3. ファイルをクリックし、次に「名前を付けて保存」をクリックします。
4. 「プレーン・テキストのエンコード方式」から、「Unicode (UTF-8)」または「Unicode (UTF-16)」を選択し、ファイルおよびターゲット・ディレクトリーを指定してファイルを保存します。拡張子 .txt は追加しないでください。
5. 今作成した include-exclude ファイルを指定する inclexcl オプションを dsm.sys ファイルに入れます。
6. バックアップ/アーカイブ・クライアントを再始動します。

include オプション

include オプションは、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクトを指定します。

include オプションは、次のいずれかを指定します。

- 幅広く指定した除外オブジェクトのグループ内にあり、バックアップおよびアーカイブ・サービスに組み込むオブジェクト。
- 幅広く指定した除外オブジェクトのグループ内にあり、バックアップ、アーカイブ、イメージ、およびスペース管理サービスに組み込むオブジェクト。

include.attribute.symlink

シンボリック・リンクまたは別名であるファイルまたはファイルのグループを、バックアップ処理専用の幅広く指定した除外ファイル・グループに含めます。

注: Mac OS X の場合、別名は含まれます。

include.compression

compression オプションを yes に設定した場合は、ファイルを圧縮処理の対象に組み込みます。このオプションは、バックアップおよびアーカイブに適用されます。

include.dedup

クライアント・サイドのデータ重複排除用のファイルを組み込みます。クライアント・サイドのデータ重複排除操作を制御するために、include.dedup オプションの値として ieobjtype を指定します。デフォルトでは、すべてのデータ重複排除適格オブジェクトが、クライアント・サイドのデータ重複排除用に組み込まれます。

有効な ieobjtype パラメーターは次のとおりです。

File

Image

デフォルトは File です。

include.encrypt

指定されたファイルを暗号化処理に含めます。デフォルトには、クライアントは暗号化処理を実行しません。

重要: バックアップ/アーカイブ・クライアント上で暗号化を有効にする唯一の方法は、include.encrypt オプションを用いることです。include.encrypt ステートメントを使用しないと、暗号化は実行されません。

制約事項:

- 暗号化は、クライアント・サイドの重複排除と両立しません。暗号化用に含まれているファイルは、クライアント・サイドの重複排除によって重複排除されません。
- include.encrypt オプションを使用したクライアント暗号化は、IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.1 以降のレベルまたは V7.1.8 以降の V7 のレベルへの LAN フリーのバックアップとアーカイブの操作ではサポートされなくなりました。暗号化されたバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの LAN フリーのリストア操作およびリトリブ操作は引き続きサポートされます。データがサーバーへの送信前に暗号化される include.encrypt オプションを使用してデータを暗号化する必要がある場合は、LAN ベースのバックアップ操作またはアーカイブ操作を使用してください。
- 暗号化は、永久増分バックアップ・モード (MODE=IFIncremental および MODE=IFFull) を使用する VMware 仮想マシンのバックアップとは両立しません。クライアントが暗号化用に構成されている場合、永久増分バックアップは使用できません。
- 暗号化は、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments Data Protection for VMware Recovery Agent と両立しません。クライアントが暗号化用に構成されている場合、V7.1 クライアントを使用して、フルバックアップ・モードまたは増分バックアップ・モード (MODE=Full および MODE=Incremental) を指定して作成されたバックアップをリストアできます。ただし、暗号化されたバックアップを Recovery Agent を使用してリストアすることはできません。

include.fs

AIX JFS2 ファイル・システムの場合: snapshotcachesize オプションを dsm.sys ファイル内で使用するか、または include.fs オプションとともに使用して、スナップショット・ベース・ファイルのバックアップまたはアーカイブが行われている間に、すべての旧データ・ブロックを保管できるように適切なスナップショット・サイズを指定します。

クライアントが増分バックアップのファイル・スペースを処理する方法を制御するために、これらの追加オプションを dsm.sys ファイルで include.fs オプション (diskcachelocation および memoryefficientbackup) の値として指定できます。

include.fs、memoryefficientbackup、および diskcachelocation の各オプションは、オプション・ファイルの同一行になければなりません。

```
include.fs /home
memoryefficientbackup=diskcachemethod
diskcachelocation=/usr
include.fs /usr
memoryefficientbackup=diskcachemethod
diskcachelocation=/home
include.fs /Volumes/hfs3
memoryefficientbackup=diskcachemethod
diskcachelocation=/Volumes/hfs2
AIX JFS2 ファイル・システムのみ: include.fs
/kalafs1 snapshotproviderfs=JFS2
```

これらのオプションが、オプション・ファイルと include.fs オプションの両方に表示されている場合、include.fs の値はオプション・ファイルまたはコマンド行の値の代わりに、指定されたファイル・スペース用として使用されます。

include.fs.nas

include.fs.nas オプションは、管理クラスを Network Attached Storage (NAS) ファイル・システムにバインドするために使用します。dsm.sys ファイルで include.fs.nas オプションとともに toc オプションを使用することによって、NAS ファイル・システム・イメージ・バックアップ中にクライアントが目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定することもできます。このオプションは、AIX クライアントおよび Solaris クライアントにのみ有効です。

include.image

ファイル・スペースまたは論理ボリュームを組み込むか、あるいは **backup image** コマンドで使用する時には、管理クラスを割り当てます。**backup image** コマンドは、他の組み込みオプションをすべて無視します。

Linux x86_64 クライアントでは、以下の状況には snapshotcachesize オプションを使用します。

- **backup image** コマンドに使用する
- dsm.sys ファイルで使用する
- include.image オプションとともに使用する

snapshotcachesize オプションをこのような状態で使用すると、イメージ・バックアップの実行中にすべての旧データ・ブロックを保管できるように、適切なスナップショット・サイズを指定できます。

スナップショット・サイズ 100 % で、有効なスナップショットが保証されます。

AIX JFS2 ファイル・システムでは、以下の場合には snapshotcachesize オプションを使用します。

- **backup image** コマンドに使用する
- dsm.sys ファイルで使用する
- include.image オプションとともに使用する

snapshotcachesize オプションをこのような状態で使用すると、イメージ・バックアップの実行中にすべての旧データ・ブロックを保管できるように、適切なスナップショット・サイズを指定できます。

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。

パラメーター

pattern

バックアップまたはアーカイブ処理のために組み込むか、あるいは特定の管理クラスを割り当てるオブジェクトを指定します。

注: NAS ファイル・システムの場合: include ステートメントの適用されるファイル・サーバーを指定するには、ファイル指定に NAS ノード名の接頭部を付ける必要があります。NAS ノード名を指定しない

と、識別されたファイル・システムは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) または コマンド・ラインで指定された NAS ノード名を参照します。

パターンが単一引用符や二重引用符で始まる場合、または埋め込まれたブランクや等号がある場合は、値を単一引用符 (') または二重引用符 (") で囲まなければなりません。始まりと終わりの引用符は同じタイプの引用符でなければなりません。

include.image オプションの場合、パターンはマウントされたファイル・システムまたはロー論理ボリュームの名前です。

optional_parameter

management_class_name

オブジェクトに割り当てたい管理クラスの名前を指定します。管理クラスが指定されないと、デフォルト管理クラスが使用されます。include ステートメントで管理クラスをバックアップ・グループに関連付けるには、以下の構文を使用します。

```
include virtual_filespace_name%group_name management_class_name
```

ここで、

virtual_filespace_name

Backup Group コマンドで、グループと関連付けた IBM Spectrum Protect サーバー仮想ファイル・スペースを指定します。

group_name

Backup Group コマンドの実行時に作成したグループの名前です。

management_class_name

グループ内のファイルと関連付ける管理クラスの名前です。

例えば、MyGroup という名前のグループが、MyVirtualFileSpace という名前の仮想ファイル・スペースに保管されているとします。TEST という名前の管理クラスをこのグループに関連付けるには、次の構文を使用してください。

```
include MyVirtualFileSpace/MyGroup TEST
```

表 74. その他のオプション・パラメーター

optional_parameter	以下のオプションと一緒に使用
ieobjtype 442 ページの『Ieobjtype』	include.dedup
memoryefficientbackup 480 ページの『Memoryefficientbackup』	include.fs
diskcachelocation 387 ページの『Diskcachelocation』	include.fs
dynamicimage 402 ページの『Dynamicimage』	include.image
postsnapshotcmd 503 ページの『Postsnapshotcmd』	include.image

表 74. その他のオプション・パラメーター (続き)	
optional_parameter	以下のオプションと一緒に使用
presnapshotcmd 510 ページの『Presnapshotcmd』	include.image
snapshotcachesize 554 ページの『Snapshotcachesize』	include.image
snapshotproviderfs 556 ページの『Snapshotproviderfs』	include.image
snapshotproviderimage 556 ページの『Snapshotproviderimage』	include.image

例

オプション・ファイル:

```
include /home/proj/text/devel.*
include /home/proj/text/* textfiles
include * managall
include /WAS_ND_NDNODE mgmtclass
include /WAS_APPNODE mgmtclass
include.image /home
include.archive /home/proj/text/
    * myarchiveclass
include.backup /home/proj/text/
    * mybackupclass
include.compression /home/proj/text/
    devel.*
include.encrypt /home/proj/gordon/*
include.fs.nas netappsj/vol/vol0
    homemgmtclass
```

```
include.dedup /Users/Administrator/Documents/Important/.../*
```

AIX のみ:

```
include.image /home
    MGMTCLASSNAME
    snapshotproviderimage=JFS2
    snapshotcachesize=40
include.image /home
    snapshotproviderimage=NONE
include.fs /kalafs1
    snapshotproviderfs=JFS2
```

LINUX のみ:

```
include.image /home
    snapshotproviderimage=LINUX_LVM
include.image /myfs1 dynamicimage=yes
include.image /home MGMTCLASSNAME
    snapshotproviderimage=NONE
include.image /myfs1 dynamicimage=yes
include.attribute.symlink /home/spike/.../*
include.fs /usr
    memoryefficientbackup=diskcachemethod
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連資料

[Snapshotcachesize](#)

`snapshotcachesize` オプションを使用して、スナップショットを作成するための適切なサイズを指定します。

[Toc](#)

`toc` オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがファイル・システム・バックアップごとに目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定するために **backup nas** コマンドまたは `include.fs.nas` オプションとともに使用します。

関連情報

[mmbbackup コマンド: IBM Spectrum Protect の要件](#)

[IBM Spectrum Scale Active File Management 用の IBM Spectrum Protect の構成](#)

[IBM Spectrum Scale mmbbackup コマンドでの IBM Spectrum Protect の包含/除外オプション使用の考慮事項](#)

シンボリック・リンクおよび別名処理の制御

IBM Spectrum Protect は、シンボリック・リンクおよび別名 (別名は Mac OS X の場合のみ) を実際のファイルとして処理し、これらをバックアップします。ただし、シンボリック・リンクで参照されるファイルは、バックアップされません。

シンボリック・リンクおよび別名の再作成が容易であり、バックアップが不要な場合もあります。また、これらのシンボリック・リンクまたは別名をバックアップすると、バックアップ処理時間が増大し、IBM Spectrum Protect サーバーのスペースが大量に占有されることがあります。

`exclude.attribute.symlink` オプションを使用すると、シンボリック・リンクまたは別名であるファイルまたはファイル・グループをバックアップ処理から除外することができます。必要であれば、`include.attribute.symlink` オプションを使用して、バックアップ処理から除外されたファイルの広いグループに、シンボリック・リンクまたは別名を含めることができます。例えば、`/home/spike` ディレクトリ下にあるものを除き、すべてのシンボリック・リンクまたは別名をバックアップ処理から除外するには、これらのステートメントを `dsm.sys` ファイルに入れておきます。

```
exclude.attribute.symlink /.../*
include.attribute.symlink /home/spike/.../*
```

関連資料

[416 ページの『Exclude オプション』](#)

`exclude` オプションを使用して、バックアップ、イメージ、またはアーカイブ・サービスからオブジェクトを除外します。

圧縮および暗号化バックアップ処理

バックアップまたはアーカイブの操作時に特定のファイルまたはファイルのグループを圧縮および暗号化の処理に組み込む場合、以下の情報を検討してください。

- 圧縮処理を有効にするためには、`compression` オプションを `yes` に設定しなければなりません。`compression` オプションを指定しないか、あるいは `compression` オプションを `no` に設定すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントは圧縮処理を実行しません。
- クライアントは、`exclude.fs`、`exclude.dir`、および他の `include/exclude` ステートメントを最初に処理します。その後、クライアントは `include.compression` および `include.encrypt` ステートメントを検討します。例えば、次の `include-exclude` リストを見てください。

```
exclude /home/jones/proj1/file.txt
include.compression /home/jones/proj1/file.txt
include.encrypt /home/jones/proj1/file.txt
```

クライアントは最初に `exclude /home/jones/proj1/file.txt` ステートメントを調べて、`/home/jones/proj1/file.txt` がバックアップ処理から除外され、したがって圧縮および暗号化処理の候補ではないことを判別します。

- 包含/除外圧縮および暗号化処理は、バックアップおよびアーカイブ処理の場合にのみ有効です。
- `include.encrypt` オプションを使用したクライアント暗号化は、IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.1 以降のレベルまたは V7.1.8 以降の V7 のレベルへの LAN フリーのバックアップとアーカイブの操作ではサポートされなくなりました。暗号化されたバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの LAN フリーのリストア操作およびリトリブ操作は引き続きサポートされます。データがサーバーへの送信前に暗号化される `include.encrypt` オプションを使用してデータを暗号化する必要がある場合は、LAN ベースのバックアップ操作またはアーカイブ操作を使用してください。

関連資料

363 ページの『[Compression](#)』

`compression` オプションは、ファイルをサーバーに送る前に、それらのファイルを圧縮します。

NAS ファイル・システムの処理

`include.fs.nas` オプションは、管理クラスを NAS ファイルシステムにバインドし、目次情報をファイル・システムのバックアップ用に保存するかどうかを制御するために使用します。

NAS ファイル・システム指定は、以下の規則を使用しています。

- NAS ノードは新規ノード・タイプを表します。NAS ノード名は、NAS ファイル・サーバーとそのデータをバックアップ・アーカイブ・クライアントに対して固有に識別します。ファイル指定に NAS ノード名の接頭部を付けて、`include` ステートメントの適用されるファイル・サーバーを指定することができます。NAS ノード名を指定しないと、指定したファイル・システムがすべての NAS ファイル・サーバーに適用されます。
- クライアント・オペレーティング・システムとは関係なく、NAS ファイル・システムの指定には、`/vol/vol0` のようにスラッシュ (/) の区切り文字が使用されます。

次の構文を使用してください。

➡ **`pattern`** — **`mgmtclassname`** **`toc=value`** ➡

各構成要素について説明します。

`pattern`

バックアップ・サービス用に組み込むオブジェクト、特定の管理クラスを割り当てるオブジェクト、または TOC 作成を制御するためのオブジェクトを指定します。 `pattern` には、ワイルドカードを使用できます。

`mgmtclassname`

オブジェクトに割り当てたい管理クラスの名前を指定します。管理クラスが指定されないと、デフォルト管理クラスが使用されます。

`toc=value`

詳しくは、[586 ページの『Toc』](#)を参照してください。

例 1: `netappsj` という名前の NAS ノードの `/vol/vol1` ファイル・システムに管理クラスを割り当てるには、次のように `include` ステートメントを指定します。

```
include.fs.nas netappsj/vol/vol1 nasMgmtClass toc=yes
```

例 2: `netappsj` という名前の NAS ノード上の `/vol/` ファイル・システムに従属するすべてのパス (例えば、`/vol/vol1`、`/vol/vol2`、および `/vol/vol3`) に同じ管理クラスを割り当てるには、次のように `include` ステートメントを指定します。

```
include.fs.nas netappsj/vol/* nasMgmtClass toc=yes
```

仮想マシン include オプション

仮想マシンの `include` オプションと `exclude` オプションは、仮想マシンのバックアップおよびリストア操作の動作に影響を与えます。これらのオプションが処理された後にコマンド・ライン・オプションが処理されるため、コマンド・ラインのオプションが仮想マシンの `include` オプションまたは仮想マシンの `exclude`

オプションに指定されたオプションを指定変更する可能性があります。オプションの詳細については、個々のオプションの説明を参照してください。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

関連資料

456 ページの『[Include.vmdisk](#)』

INCLUDE.VMDISK オプションは、バックアップ操作に仮想マシン (VM) ディスクを組み込みます。ディスク・ラベルを指定しない場合は、VM のすべてのディスクがバックアップされます。

463 ページの『[INCLUDE.VMTSMVSS](#)』

INCLUDE.VMTSMVSS オプションは、仮想マシンのアプリケーションに、バックアップがまもなく実行されることを通知します。このオプションにより、アプリケーションでは、トランザクション・ログの切り捨てとトランザクションのコミットが可能になるため、バックアップ完了時には整合性のある状態から再開できます。トランザクション・ログの切り捨てを抑止するためのオプション・パラメーターを指定することもできます。

461 ページの『[INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS](#)』

INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS オプションを使用して、スナップショットの障害が原因で失敗した仮想マシン (VM) バックアップ操作についてのスナップショット試行の合計回数を決定します。

Include.vm

仮想マシン操作の場合、このオプションは、vmc オプションに指定された管理クラスをオーバーライドします。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

vmc オプションで指定された管理クラスは、すべての VMware バックアップに適用されます。

include.vm オプションを使用して、1 つ以上の仮想マシンに対してその管理クラスをオーバーライドすることができます。vmctlmc オプションで指定された管理クラスについては、include.vm オプションがオーバーライドしたり影響を及ぼしたりすることはありません。vmctlmc オプションは、バックアップされた仮想マシンの制御ファイルを特定の管理クラスにバインドします。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンをバックアップするように構成された、サポートされている Linux クライアントで使用できます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定します。

構文

➡ INCLUDE.VM — — *vmname* — — *mgmtclassname* ➡

パラメーター

vmname

必須のパラメーターです。指定した管理クラスにバインドする仮想マシンの名前を指定します。この名前は、仮想マシンの表示名です。それぞれの include.vm ステートメントには、1 つの仮想マシンのみを指定できます。ただし、各仮想マシンを特定の管理クラスにバインドするためには、いくつでも必要な数の include.vm ステートメントを指定することができます。

仮想マシン名にはワイルドカードを含めることができます。アスタリスク (*) は任意の文字ストリングに一致します。疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。仮想マシン名にスペース文字が含まれている場合は、名前を二重引用符 (") で囲んでください。

ヒント: 仮想マシン名に特殊文字が含まれている場合は、仮想マシン名を指定する時に特殊文字の代わりに疑問符のワイルドカードを入力してください。

mgmtclassname

オプションのパラメーターです。指定された仮想マシンをバックアップする時に使用する管理クラスを指定します。このパラメーターが指定されていない場合、管理クラスはデフォルトで、vmmc オプションによって指定されたグローバル仮想マシン管理クラスに設定されます。

例

IBM Spectrum Protect サーバーに以下の管理クラスが存在しており、アクティブになっていると想定します。

- MCFORTESTVMS
- MCFORPRODVMS
- MCUNIQUEVM

例 1

クライアント・オプション・ファイルに含まれている以下の `include.vm` ステートメントは、VMTEST で始まる名前を持つすべての仮想マシンを、MCFORTESTVMS と呼ばれる管理クラスにバインドします。

```
include.vm vmtest* MCFORTESTVMS
```

例 2

クライアント・オプション・ファイルに含まれている以下の `include.vm` ステートメントは、WHOPPER VM1 [PRODUCTION] という名前の仮想マシンを、MCFORPRODVMS と呼ばれる管理クラスにバインドします。

```
include.vm "WHOPPER VM1 ?PRODUCTION?" MCFORPRODVMS
```

この仮想マシン名はスペース文字を含んでいるため、引用符で囲む必要があります。さらに、仮想マシン名の中の特殊文字に一致させるために、疑問符のワイルドカードが使用されています。

例 3

クライアント・オプション・ファイル内の以下の `include.vm` ステートメントは、VM1 という名前の仮想マシンを、MCUNIQUEVM という名前の管理クラスにバインドします。

```
include.vm VM1 MCUNIQUEVM
```

Include.vmdisk

INCLUDE.VMDISK オプションは、バックアップ操作に仮想マシン (VM) ディスクを組み込みます。ディスク・ラベルを指定しない場合は、VM のすべてのディスクがバックアップされます。

このオプションは、ライセンス交付を受けた IBM Spectrum Protect for Virtual Environments 製品を使用している場合にのみ使用可能です。このオプションについて詳しくは、IBM Knowledge Center (<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SSERB6/welcome>) の IBM Spectrum Protect for Virtual Environments 製品資料を参照してください。

INCLUDE.VMDISK オプションは、**backup vm** 操作に組み込む VM ディスクのラベルを指定します。

backup vm コマンドでディスクを組み込む場合、コマンド・ライン・パラメーターが、オプション・ファイルの INCLUDE.VMDISK ステートメントをすべてオーバーライドします。

VMware 仮想マシンの INCLUDE.VMDISK

INCLUDE.VMDISK オプションを使用して、VMware 仮想マシン・ディスクをバックアップ操作に組み込みます。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定します。 コマンド・ライン・パラメーターがオプション・ファイルのステートメントをオーバーライドします。

VMware 仮想マシンの構文

➡ INCLUDE.VMDISK — *vmname* *vmdk_label* ➡

パラメーター

vmname

Backup VM 操作に組み込むディスクを含む仮想マシンの名前を指定します。 この名前は、仮想マシンの表示名です。 各 INCLUDE.VMDISK ステートメントに指定できるのは仮想マシン名 1 つだけです。 組み込む仮想マシン・ディスクごとに、追加の INCLUDE.VMDISK ステートメントを指定してください。

仮想マシン名に入れることができるアスタリスク (*) は任意の文字ストリングと一致し、疑問符 (?) は任意の単一文字と一致します。 VM 名がスペース文字を含む場合は、VM 名を引用符 (" ") で囲みます。

ヒント: 仮想マシン名が大括弧文字 ([または]) のような特殊文字を含む場合は、仮想マシン名は正しく一致しないことがあります。 仮想マシン名が、名前の中に特殊文字を使用している場合は、疑問符文字 (?) を使用して、VM 名の中の特殊文字を一致させる必要がある場合があります。

例えば、"Windows VM3 [2012R2]" という名前の仮想マシンのバックアップに「Hard Disk 1」を含めるには、オプション・ファイルに次の構文を使用します。 INCLUDE.VMDISK "Windows VM3 ? 2012R2?" "Hard Disk 1"

vmdk_label

組み込むディスクのディスク・ラベルを指定します。 ワイルドカード文字は使用できません。 特定の仮想マシンのディスクのディスク・ラベルを判別するには、-preview オプションを指定して **Backup VM** コマンドを使用します。 構文については、「**VM のバックアップ**」を参照してください。

例

オプション・ファイル

vm1 という名前の仮想マシンに、4 つのディスク (ラベルはそれぞれ Hard Disk 1、Hard Disk 2、Hard Disk 3、および Hard Disk 4) があると仮定します。 Disk 2 のみを **Backup VM** 操作に組み込むには、オプション・ファイルに次のように指定します。

```
INCLUDE.VMDISK "vm1" "Hard Disk 2"
```

Disk 2 および 3 を **Backup VM** 操作に組み込みます。

```
INCLUDE.VMDISK "vm1" "Hard Disk 2"  
INCLUDE.VMDISK "vm1" "Hard Disk 3"
```

コマンド・ライン

vm1 をバックアップする場合に単一のディスクを組み込みます。

```
dsmc backup vm "vm1:vmdk=Hard Disk 1"
```

vm1 の Disk 2 と Disk 3 を組み込みます。

```
dsmc backup vm "vm1:vmdk=Hard Disk 2:vmdk=Hard Disk 3"
```

関連資料

[670 ページの『Backup VM』](#)

[747 ページの『Restore VM』](#)

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

[395 ページの『Domain.vmfull』](#)

domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

[420 ページの『Exclude.vmdisk』](#)

EXCLUDE.VMDISK オプションは、仮想マシン・ディスクをバックアップ操作から除外します。

Include.vmlocalsnapshot

このオプションは、VMware 仮想マシンのローカル・バックアップに適用される管理クラスを指定します。管理クラスはローカル・バックアップの保存ポリシーを定義します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

このオプションは、仮想ボリューム (VVOL) データ・ストアに保管されている仮想マシンにのみ使用できます。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンをバックアップするように構成された、サポートされている Linux クライアントで使用できます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定します。

構文

➡ **INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT** — — **vmname** — — **mgmtclassname** ➡

パラメーター

vmname

ローカル・バックアップ操作のために、指定した管理クラスにバインドする仮想マシンの名前を指定します。この名前は、仮想マシンの表示名です。

それぞれの **INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT** ステートメントには、1 つの仮想マシンのみを指定できます。ただし、各 VM を特定の管理クラスにバインドするためには、いくつでも必要な数の **INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT** ステートメントを指定することができます。

仮想マシン名にはワイルドカードを含めることができます。アスタリスク (*) は任意の文字ストリングに一致します。疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。仮想マシン名にスペース文字が含まれている場合は、名前を二重引用符 (") で囲んでください。

ヒント: 仮想マシン名に特殊文字が含まれている場合は、仮想マシン名を指定する時に特殊文字の代わりに疑問符のワイルドカードを入力してください。

mgmtclassname

仮想マシンのローカル・バックアップに使用する管理クラスを指定します。このパラメーターが指定されていない場合、管理クラスはデフォルトで、**vmmc** オプションによって指定されたグローバル仮想マシン管理クラスに設定されます。

例

IBM Spectrum Protect サーバーに以下の管理クラスが存在しており、アクティブになっていると想定します。

- MCFORTESTVMS
- MCFORPRODVMS
- MCUNIQUEVM

例 1

クライアント・オプション・ファイルに含まれている以下の `INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT` ステートメントは、`VMTEST` で始まる名前を持つすべての仮想マシンを、`MCFORTESTVMS` と呼ばれる管理クラスにバインドします。

```
include.vmlocalsnapshot vmtest* MCFORTESTVMS
```

例 2

クライアント・オプション・ファイルに含まれている以下の `INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT` ステートメントは、`WHOPPER VM1 [PRODUCTION]` という名前の仮想マシンを、`MCFORPRODVMS` と呼ばれる管理クラスにバインドします。

```
include.vmlocalsnapshot "WHOPPER VM1 ?PRODUCTION?" MCFORPRODVMS
```

この仮想マシン名はスペース文字を含んでいるため、引用符で囲む必要があります。さらに、仮想マシン名の中の特殊文字に一致させるために、疑問符のワイルドカードが使用されています。

例 3

クライアント・オプション・ファイル内の以下の `INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT` ステートメントは、`VM1` という名前の仮想マシンを、`MCUNIQUEVM` という名前の管理クラスにバインドします。

```
include.vmlocalsnapshot VM1 MCUNIQUEVM
```

関連資料

670 ページの『Backup VM』

621 ページの『Vmmc』

`vmmc` オプションは、デフォルト管理クラス以外の管理クラスを使用して仮想マシン・バックアップを保管するために使用します。VMware VM バックアップでは、`vmmc` オプションは、`vmbackuptype=fullvm` オプションが設定されている場合にのみ有効です。

Include.vmresetcbt

`include.vmresetcbt` は、仮想マシン (VM) または VM グループの変更ブロック・トラッキング (CBT) メカニズムをリセットするために使用します。


VM または VM セットの変更ブロック・トラッキングをリセットする必要がある場合は、このオプションを使用してリセット対象の VM を管理することで、すべての VM が同時にリセットされないようにします。VM の変更ブロック・トラッキングをリセットすると、その VM では強制的にフルバックアップが行われるため、どの VM の変更ブロック・トラッキングをリセットするかを管理することは重要です。

変更ブロック・トラッキングはさまざまな理由でリセットされますが、その理由の 1 つは、VM で初めて変更ブロック・トラッキングが有効にされたときにスナップショットが存在していたことが疑われる場合です。Data Protection for VMware で変更ブロック・トラッキングを有効にすることは、増分バックアップ (常時) 操作を実行することを意味します。

スナップショットが存在しているときに変更ブロック・トラッキングを有効にすることは、VMware 変更ブロック・トラッキングの既知の問題です。この既知の問題は、バックアップ操作中に不完全あるいは無効な変更ブロック情報が返される原因となる可能性があります。この問題を解決するには、増分バックアップ (常時) 操作を実行する前に、VM のすべての既存のスナップショットを削除し、VM の変更ブロック・トラッキングをリセットする必要があります。

後続の増分バックアップでは、最後のバックアップ操作以降に変更されたブロックをトラッキングします。

このオプションは、VM または VM グループに対して 1 回のみ指定します。増分バックアップ (常時) 操作を実行して VM の変更ブロック・トラッキングをリセットした後、オプション・ファイルから `include.vmresetcbt` オプションを削除します。このオプションは、1 つ以上のサード・パーティーのスナップショットまたは手動スナップショットが VM 上に存在する場合など、VM の変更ブロック・トラッキングをリセットする必要がある場合にのみ使用します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる Windows および Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に入れます。

構文

➡ `INCLUDE.VMResetcbt` `— vmname` ➡

パラメーター

vmname

変更ブロック・トラッキングをリセットする対象の VM の名前を指定します。この名前は VM 表示名です。このパラメーターは必須です。

それぞれの `include.vm` ステートメントには、1 つの VM のみを指定できます。ただし、いくつでも必要な数の `include.vmresetcbt` ステートメントを指定できます。

VM 名にはワイルドカードを含めることができます。アスタリスク (*) は任意の文字ストリングに一致します。疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。VM 名にスペース文字が含まれている場合は、名前を二重引用符 (") で囲んでください。

ヒント: 変更ブロック・トラッキングのリセットから VM を除外する同等のオプションはありません。したがって、VM グループの変更ブロック・トラッキングをリセットする場合は、より精細な VM 名を指定する必要があります。例えば、`include.vmresetcbt` ステートメントを指定して「EXEC」から始めるすべての VM を組み込み、`exclude` ステートメントを指定して「EXECTEST」から始まる VM を除外することはできません。

例

タスク 1

「Prod」から始まり、その後に任意の 1 文字が続く名前を持つすべての VM で変更ブロック・トラッキングをリセットするには、次のように指定します。

```
INCLUDE.VMRESETCBT Prod?
```

タスク 2

任意の 2 文字から始まり、その後に「Prod」が続き、さらにその後に 0 文字以上の文字が続く名前を持つすべての VM で変更ブロック・トラッキングをリセットするには、次のように指定します。

```
INCLUDE.VMR ??Prod*
```

タスク 3

1 文字以上の文字から始まり、末尾が「Prod」の名前を持つすべての VM で変更ブロック・トラッキングをリセットするには、次のように指定します。

```
INCLUDE.VMRESETCBT ?*Prod
```


または

```
INCLUDE.VMRESETCBT *?Prod
```

タスク 4

「Corporate Mail」から始まり、その後に 0 文字以上の文字が続く名前を持つすべての VM で変更ブロック・トラッキングをリセットするには、次のように指定します。

```
include.vmr "Corporate Mail*"
```

タスク 5

すべての VM で変更ブロック・トラッキングをリセットするには、次のように指定します。

```
include.vmresetcbt *
```


関連資料

622 ページの『Vmnocbtcontinue』

vmnocbtcontinue オプションは、VM 上に 1 つ以上のスナップショットが既に存在しており、変更ブロック・トラッキングを有効にするかリセットする必要がある場合に、変更ブロック・トラッキング機能を使用せずに仮想マシン (VM) をバックアップするかどうかを指定するために使用します。

INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS

INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS オプションを使用して、スナップショットの障害が原因で失敗した仮想マシン (VM) バックアップ操作についてのスナップショット試行の合計回数を決定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンをバックアップするように構成された、サポートされている Linux クライアントで使用できます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) で有効です。サーバー上でクライアント・オプション・セットに組み込むこともできます。このオプションは、コマンド・ラインでは無効です。

構文

```
➡ INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS — vmname — num_with_quiescing →  
  
← num_without_quiescing ⇐
```

パラメーター

vmname

スナップショットの障害によってバックアップ試行が失敗した場合の、スナップショット試行の合計回数を指定する仮想マシンの名前を指定する必須の定位置パラメーター。この名前は、仮想マシンの表示名です。

各 INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS ステートメントで指定することができる仮想マシンは 1 つだけです。ただし、別の仮想マシンについてスナップショット試行の合計回数を構成する場合は、以下の方法を使用することができます。

- このオプションを適用する各仮想マシンに対し、失敗したスナップショットを再試行するために必要な数の INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS ステートメントを指定します。

- *vmname* パラメーター値にワイルドカード文字を使用して、ワイルドカード・パターンに一致する仮想マシン名を選択します。アスタリスク (*) は任意の文字ストリングに一致します。疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。仮想マシン名にスペース文字が含まれている場合は、名前を二重引用符 (") で囲んでください。

ヒント: 仮想マシン名に特殊文字が含まれている場合は、仮想マシン名を指定する時に特殊文字の代わりに疑問符 (?) のワイルドカードを入力してください。

num_with_quiescing

以下のアクションを指定する定位置パラメーターです。

VMware バックアップ操作の場合:

- IBM Spectrum Protect アプリケーション保護が有効にされた Windows 仮想マシンの場合、*num_with_quiescing* は、IBM Spectrum Protect VSS 静止および Microsoft Windows システム・プロバイダー VSS 静止を使用してスナップショットを試行する回数を指定します。VSS 静止は、Windows 仮想マシンにのみ適用されます。

指定した回数によっては、最初のスナップショット試行が必ず IBM Spectrum Protect VSS 静止を使用して行われます。後続のスナップショット試行は、Windows システム・プロバイダー VSS 静止を使用して行われます。

- IBM Spectrum Protect アプリケーション保護が有効にされていない Windows 仮想マシン、および Linux 仮想マシンの場合、*num_with_quiescing* は、VMware Tools ファイル・システム静止を使用してスナップショットを試行する回数を指定します。

指定できる最大値は 10 です。デフォルト値は 2 です。指定できる最小値は 0 です。

num_without_quiescing

VMware バックアップ操作の場合:

VSS 静止を使用して指定された回数 (*num_with_quiescing*) の試行が完了した後に、VMware Tools ファイル・システム静止およびアプリケーション (VSS) 静止を無効にしてスナップショットを試行する回数を指定する定位置パラメーターです。例えば、ゲスト仮想マシンにインストールされた IBM Data Protection エージェントによって既に保護されている仮想マシンに対して、このパラメーターを指定することができます。

指定できる最大値は 10 です。指定可能な最小値は 0 です。これがデフォルト値です。

重要: このパラメーターが仮想マシン・バックアップに適用された場合、そのバックアップは整合性が崩壊したと見なされます。その結果、オペレーティング・システム、ファイル・システム、およびアプリケーションの整合性は保証されなくなります。include.vmsnapshotattempts 0 0 エントリは無効です。バックアップ操作では、少なくとも 1 つのスナップショットが必要です。

例

VMware の例:

例 1

クライアント・オプション・ファイル内の以下の INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS ステートメントは、仮想マシン VM_a に対して合計 2 回のスナップショット試行 (VSS 静止を使用) を行います。

```
INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS VM_a 2 0
```

例 2

クライアント・オプション・ファイル内の以下の INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS ステートメントは、vmServer_Dept* ストリングに一致する Windows 仮想マシンに対して合計 3 回のスナップショット試行を行います。

- 最初の試行は、IBM Spectrum Protect VSS 静止を使用して行われます。
- 2 回目の試行は、Windows システム・プロバイダー VSS 静止を使用して行われます。

- 3 回目のスナップショット試行は、VSS 静止を使用せずに行われます。

```
INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS vmServer_Dept* 2 1
```

例 3

クライアント・オプション・ファイル内の以下の INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS ステートメントは、vmDB_Dept* スtring に一致する仮想マシンに対して合計 1 回のスナップショット試行 (VSS 静止を使用) を行います。

```
INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS vmDB_Dept* 1 0
```

例 4

クライアント・オプション・ファイル内の以下の INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS ステートメントは、すべての仮想マシンに対して合計 2 回のスナップショット試行 (VSS 静止を使用) を行います。

- 最初の試行は、IBM Spectrum Protect VSS 静止を使用して行われます。
- 2 回目の試行は、Windows システム・プロバイダー VSS 静止を使用して行われます。

```
INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS * 2 0
```

例 5

この例では、仮想マシン DB15 には IBM Data Protection エージェントがゲスト仮想マシンにインストールされており、アプリケーション整合スナップショットは不要です。クライアント・オプション・ファイル内の以下の INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS ステートメントは、仮想マシン DB15 に対して合計 1 回のスナップショット試行 (VSS 静止を使用しない) を行います。

```
INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS DB15 0 1
```

関連資料

463 ページの『INCLUDE.VMTSMVSS』

INCLUDE.VMTSMVSS オプションは、仮想マシンのアプリケーションに、バックアップがまもなく実行されることを通知します。このオプションにより、アプリケーションでは、トランザクション・ログの切り捨てとトランザクションのコミットが可能になるため、バックアップ完了時には整合性のある状態から再開できます。トランザクション・ログの切り捨てを抑止するためのオプション・パラメーターを指定することもできます。

INCLUDE.VMTSMVSS

INCLUDE.VMTSMVSS オプションは、仮想マシンのアプリケーションに、バックアップがまもなく実行されることを通知します。このオプションにより、アプリケーションでは、トランザクション・ログの切り捨てとトランザクションのコミットが可能になるため、バックアップ完了時には整合性のある状態から再開できます。トランザクション・ログの切り捨てを抑止するためのオプション・パラメーターを指定することもできます。

このオプションによって仮想マシンが組み込まれている場合、IBM Spectrum Protect はアプリケーション保護を提供します。つまり、クライアントは、VSS ライターを凍結してから解凍し、オプションで、アプリケーション・ログを切り捨てます。

VMware 仮想マシンがこのオプションによって保護されていない場合、アプリケーション保護は VMware によって提供されます。VMware は、VSS ライターを凍結してから解凍します。ただし、アプリケーション・ログは切り捨てられません。

Hyper-V 仮想マシンがこのオプションにより保護されていない場合、アプリケーション保護は、Hyper-V によって提供されます。Hyper-V は、VSS ライターを凍結してから解凍しますが、アプリケーション・ログを切り捨てません。

重要: diskshadow revert 操作がリストア中に必要である場合、アプリケーション保護バックアップを開始する前に、Microsoft SQL Server データベースまたは Microsoft Exchange Server データベースなどのアプリケーション・データベースが非ブート・ドライブ (ブート・ドライブ以外のドライブ) 上にあることを確認してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定します。このオプションは、プリファレンス・エディターやコマンド・ラインで設定することはできません。

構文

➡ INCLUDE.VMTSMVSS — *vmname* — — OPTions=KEEPSqllog ➡

パラメーター

vmname

静止させるアプリケーションが含まれている仮想マシンの名前を指定します。この名前は、仮想マシンの表示名です。INCLUDE.VMTSMVSS ステートメントごとに 1 つの仮想マシンを指定します。例えば、Windows VM3 [2012R2] という名前の仮想マシンを含めるには、オプション・ファイルで INCLUDE.VMTSMVSS "Windows VM3 [2012R2]" という構文を使用します。

このオプションですべての仮想マシンを保護するには、ワイルドカードとしてアスタリスクを使用します (INCLUDE.VMTSMVSS *)。任意の単一文字に一致する疑問符 (?) も使用することができます。例えば、INCLUDE.VMTSMVSS vm?? は、vm で始まり、その後に任意の 2 文字が続く名前 (vm10、vm11、vm17 など) を持つすべての仮想マシンを保護します。

ヒント: 仮想マシン名が大括弧文字 ([または]) のような特殊文字を含む場合は、仮想マシン名は正しく一致しないことがあります。仮想マシン名に特殊文字を使用する場合は、疑問符文字 (?) を使用して、仮想マシン名の中の特殊文字を一致させることができます。

このパラメーターにはデフォルト値はありません。アプリケーション保護を有効にするには、保護する仮想マシンを 1 つ以上の INCLUDE.VMTSMVSS ステートメントに組み込む必要があります。ディスクに保護したいアプリケーション・データが入っている場合は、仮想マシンのディスクを除外 (EXCLUDE.VMDISK オプションを使用して) していないことを確認します。

OPTions=KEEPSqllog

INCLUDE.VMTSMVSS ステートメントで OPTions KEEPSqllog パラメーターを指定した場合、このパラメーターは、データ・ムーバー・ノードにインストールされているバックアップ/アーカイブ・クライアントが SQL サーバーを実行している仮想マシンをバックアップする際に、SQL サーバー・ログが切り捨てられることを防止します。このパラメーターを指定すると、SQL サーバー管理者は SQL サーバー・ログを手動で管理する (バックアップ、および場合によっては切り捨てる) ことができるため、ログを保存し、仮想マシンがリストアされた後に特定のチェックポイントに SQL トランザクションをリストアするために使用できます。

このオプションを指定すると、SQL ログは切り捨てられず、サーバーに次のメッセージが表示されてログに記録されます。

ANS4179I IBM Spectrum Protect アプリケーション保護は、
did not truncate the Microsoft SQL Server logs on VM 'VM'.

OPTIONS=KEEPSQLLOG オプションを除去して、バックアップ完了時の SQL ログの切り捨てを有効にすることができます。

注: クライアントは SQL ログ・ファイルをバックアップしません。SQL 管理者は、ログ・ファイルをバックアップして、データベースがリストアされた後に適用できるようにする必要があります。

例

オプション・ファイル



この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

vm_example という名前の仮想マシンのアプリケーション保護を構成します。

```
INCLUDE.VMTSMVSS vm_example
```

vm11、vm12、および vm15 のアプリケーション保護を構成します。

```
INCLUDE.VMTSMVSS vm11  
INCLUDE.VMTSMVSS vm12  
INCLUDE.VMTSMVSS vm15 options=keepsqlllog
```

コマンド・ライン

適用外; このオプションはコマンド・ラインで指定することはできません。

関連資料

640 ページの『Vmtimeout』

VMTIMEOut は、INCLUDE.VMTSMVSS オプションがアプリケーションを保護するために使用される場合、**backup vm** 操作を中止するまでに待機する最大時間を秒単位で指定します。このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments ライセンスがインストールされている必要があります。

420 ページの『Exclude.vmdisk』

EXCLUDE.VMDISK オプションは、仮想マシン・ディスクをバックアップ操作から除外します。

456 ページの『Include.vmdisk』

INCLUDE.VMDISK オプションは、バックアップ操作に仮想マシン (VM) ディスクを組み込みます。ディスク・ラベルを指定しない場合は、VM のすべてのディスクがバックアップされます。

461 ページの『INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS』

INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS オプションを使用して、スナップショットの障害が原因で失敗した仮想マシン (VM) バックアップ操作についてのスナップショット試行の合計回数を決定します。

Incrbydate

incrbydate オプションは、ファイルをバックアップから除外しない限り、新規ファイルおよび修正日付がサーバーで保管された最終増分バックアップより後の 変更済みファイルをバックアップするために **incremental** コマンドで使用します。

重要: 対応するディレクトリーがバックアップ/アーカイブ・クライアントによって処理された後 (ただし日付による増分バックアップが完了する前) に変更または作成されたファイルはバックアップされず、ファイルが再度変更されない限り、将来の日付による増分バックアップでもバックアップされません。このため、incrbydate オプションを指定せずに、通常の増分バックアップを定期的に実行してください。

日付による増分によって、サーバーでの最終増分の日時が更新されます。日付による増分バックアップをファイル・システムの一部に対してのみ実行している場合、最後の全体的増分バックアップの日付は更新されず、次に日付による増分バックアップを実行すると、再度これらのファイルのバックアップが取られます。

重要:

最終増分バックアップ時間はサーバー時間を指し、ファイル変更時間はクライアント時間を指しています。クライアントとサーバーの時間が同期化されていないか、クライアントとサーバーが異なる時間帯にある場合、このことは mode=incremental を指定した incremental-by-date バックアップに影響を及ぼします。

最終増分バックアップ時間はサーバー時間を指し、ファイル変更時間はクライアント時間を指しています。クライアントとサーバーの時間が同期化されていないか、クライアントとサーバーが異なる時間帯にある場合、このことは incremental-by-date バックアップおよび mode=incremental を指定したイメージ・バックアップに影響を及ぼします。

フル増分バックアップと日付による増分バックアップは両方とも、新規ファイルと変更済みファイルをバックアップします。日付による増分バックアップの方が完全増分バックアップよりも、処理に有する時間は短く、必要なメモリーも少なくてすみます。ただし、フル増分バックアップと異なり、日付による増分

は、以下の理由により、すべてのワークステーション・ファイルの現行サーバー・ストレージを維持しません。

- ワークステーションから削除されたファイルのバックアップ・バージョンを期限切れにしない。
- 管理クラスが変更されていた場合に、新規管理クラスへの再バインドを行わない。
- アクセス・コントロール・リスト (ACL) データなどの属性が変更されているファイルは、修正日時も変更されていなければ、バックアップは取られない。
- 管理クラスのコピー・グループ頻度属性を無視する。

ヒント: 平日はバックアップを実行する時間が制限されているが週末には時間の余裕がある場合は、平日に `incrbydate` オプションを指定して増分バックアップを実行し、週末にフル増分バックアップを実行することにより、ワークステーション・ファイルの現行サーバー・ストレージを維持することができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ `INCRbydate` ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:
`dsmc incremental -incrbydate`

Incremental

`incremental` オプションは、ベース・イメージに行われた変更がリストアされたイメージにも適用されるようにするために、**restore image** コマンドで使用されます。

`deletefiles` オプションも使用した場合には、元のイメージにあり、後でワークステーションから削除されたファイルおよびディレクトリーの削除が変更に含まれます。

注: **restore image** コマンドに `incremental` オプションを使用して動的イメージ・バックアップを実行することは、サポートされていません。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux x86_64、Linux on POWER、および Solaris にのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ `INCRemental` ➡

例

コマンド・ライン:
`res i "/home/devel/projecta/*" -incremental`

Instrlogmax

instrlogmax オプションは、インスツルメンテーション・ログ (dsminstr.log) の最大サイズ (MB 単位) を指定します。enableinstrumentation オプションが yes に設定されると、バックアップ処理またはリストア処理時にクライアントのパフォーマンス・データが dsminstr.log ファイルに収集されます。

instrlogmax オプションの値を変更すると、新しいサイズに合うように、既存のログが拡張または縮小されます。値が小さくなった場合には、一番古い項目が削除され、ファイルは新しいサイズまで縮小されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントと IBM Spectrum Protect API に有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

➡ INSTRLOGMAX — — size ➡

パラメーター

size

インスツルメンテーション・ログ・ファイルの最大サイズ (MB 単位) を指定します。値の範囲は 0 から 2047 です。デフォルト値は 25 です。

dsminstr.log ファイルのサイズが最大サイズを超えると、ログ・ファイルの名称が dsminstr.log.bak に変更されます。後続のインスツルメンテーション・データは、引き続き dsminstr.log ファイルに保存されます。

0 を指定した場合、ログ・ファイルのサイズは無制限に増大します。

例

オプション・ファイル:

```
instrlogmax 100
```

コマンド・ライン:

```
dsmc sel /home/mydir/* -subdir=yes -enableinstrumentation=yes -  
instrlogmax=100
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連資料

Enableinstrumentation

デフォルトでは、バックアップ/アーカイブ・クライアントおよび IBM Spectrum Protect API によってインスツルメンテーション・データが自動的に収集され、バックアップ処理およびリストア処理中のパフォーマンス・ボトルネックを識別します。インスツルメンテーションを無効にしたり、後で有効にしたりするには、enableinstrumentation オプションを使用します。

Instrlogname

`instrlogname` オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが収集したパフォーマンス情報を保管するファイルのパスとファイル名を指定します。

Instrlogname

`instrlogname` オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが収集したパフォーマンス情報を保管するファイルのパスとファイル名を指定します。

バックアップ操作およびリストア操作時にパフォーマンス・データを収集するため `enableinstrumentation yes` オプションを使用すると、クライアントはログ・ファイルに自動的に情報を保管します。

デフォルトでは、パフォーマンス・データは、`DSM_LOG` 環境変数 (IBM Spectrum Protect for Databases: Data Protection for Microsoft SQL Server や IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection for Microsoft Exchange Server などの API 依存製品の `DSMI_LOG` 環境変数) に指定されたディレクトリーのインスツルメンテーション・ログ・ファイル (`dsminstr.log`) 内に保管されます。`DSM_LOG` 環境変数を設定していない場合、インスツルメンテーション・ログ・ファイルは、現行ディレクトリー (`dsmc` コマンドを発行したディレクトリー) に保管されます。

このオプションは、インスツルメンテーション・ログ情報のファイル名と場所を変更したい場合に限り使用してください。

ログ・ファイルのサイズを制御したい場合、`instrlogmax` オプションを使用します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントと IBM Spectrum Protect API に有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れます。

重要: `DSM_LOG` 環境変数を設定して、ログを配置するディレクトリーの名前を指定してください。指定するディレクトリーには、クライアントを実行するアカウントから書き込みアクセスが可能な許可が必要です。ルート・ディレクトリーは `DSM_LOG` に有効な値ではありません。

構文

➡ `INSTRLOGNAME` — — *filespec* ➡

パラメーター

filespec

バックアップ処理またはリストア処理時に、パフォーマンス情報を保管したいパスとファイル名を指定します。指定されたパスのいずれかの部分が存在していないと、クライアントはそれを作成しようとします。

ファイル名のみを指定した場合には、ファイルは `DSM_LOG` 環境変数に指定されたディレクトリーに保管されます。`DSM_LOG` 環境変数を設定していない場合、インスツルメンテーション・ログ・ファイルは、現行ディレクトリー (`dsmc` コマンドを発行したディレクトリー) に保管されます。インスツルメンテーション・ログ・ファイルをシンボリック・リンクにすることはできません。

Mac OS X の場合、ファイル名のみを指定すると、ファイルはユーザーのデフォルト・フォルダーに保管されます。デフォルトのディレクトリーは、以下のとおりです。

```
~/Library/Logs/tivoli/tsm  
/Library/Logs/tivoli/tsm
```


以前に TESTFLAG=instrument:detail オプションまたは instrument:API オプションによって作成されたインスツルメンテーション・ログ・ファイル名 dsminstr.report.pXXX は、このインスツルメンテーション・ログ・ファイル名に置き換わります。

例

オプション・ファイル:

AIX、Linux、および Oracle Solaris の各クライアントの場合:

```
instrlogname /home/user1/mydir/mydsminstr.log
```

Mac OS X クライアントの場合:

```
instrlogname /Users/user1/Library/Logs/mydsminstr.log
```

コマンド・ライン:

AIX、Linux、および Oracle Solaris の各クライアントの場合:

```
dsmc sel /home/user1/mydir/* -subdir=yes -instrlogname=/usr/log/mydsminstr.log
```

Mac OS X クライアントの場合:

```
dsmc sel /Users/user1/mydir/* -subdir=yes -instrlogname=/Users/user1/Library/Logs/  
mydsminstr.log
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連資料

Enableinstrumentation

デフォルトでは、バックアップ/アーカイブ・クライアントおよび IBM Spectrum Protect API によってインスツルメンテーション・データが自動的に収集され、バックアップ処理およびリストア処理中のパフォーマンス・ボトルネックを識別します。インスツルメンテーションを無効にしたり、後で有効にしたりするには、enableinstrumentation オプションを使用します。

Instrlogmax

instrlogmax オプションは、インスツルメンテーション・ログ(dsminstr.log)の最大サイズ(MB単位)を指定します。enableinstrumentation オプションが yes に設定されると、バックアップ処理またはリストア処理時にクライアントのパフォーマンス・データが dsminstr.log ファイルに収集されます。

Lanfreecommmethod

lanfreecommmethod オプションは、IBM Spectrum Protect クライアントとストレージ・エージェントの間の通信プロトコルを指定します。これにより、クライアントと SAN 接続ストレージ装置間の処理が可能になります。

LAN フェイルオーバーを使用している場合は、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに lanfreecommmethod を入れる必要があります。

AIX、Linux および Solaris の場合、ストレージ・エージェントが listen する共有メモリー・ポート番号を指定するには、lanfreeshmport オプションを使用します。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。

構文

➡ LANFREECommmethod — — commmethod ➡

パラメーター

commmethod

バックアップ/アーカイブ・クライアントのためにサポートされているプロトコルを指定します。

TCPip

伝送制御プロトコル/インターネット・プロトコル (TCP/IP) 通信方式。

ストレージ・エージェント が listen している TCP/IP ポート番号を指定するには、**lanfreetcpport** オプションを使用します。TCP/IP 通信方式は、サポートされるすべてのプラットフォームにおける非 root ユーザーのデフォルトです。

V6Tcpip

システム構成およびドメイン名サービスの検索結果に応じて、TCP/IP V4 または V6 のどちらを使用するかを示します。これが該当しない唯一の場合は、**dsmc schedule** が使用されており、かつ **schedmode** が **prompt** である場合です。この場合、有効な DNS 環境が使用可能でなければなりません。

SHAREdmem

共有メモリ通信方式は、クライアントおよびストレージ・エージェントが同じシステム上で実行している時に使用します。共有メモリでは、TCP/IP プロトコルより良好なパフォーマンスが得られます。これは、AIX、Linux、および Solaris root ユーザーのデフォルトの通信方式です。AIX でこの通信方式を指定する場合は、ストレージ・エージェントが root として稼働している限り、バックアップ/アーカイブ・クライアントのユーザーは root または root 以外としてログインできます。ストレージ・エージェントが root として実行していない場合は、バックアップ・アーカイブ・クライアントを実行しているユーザー ID は、ストレージ・エージェントを実行しているユーザー ID に一致している必要があります。

例

オプション・ファイル:

```
lanfreecommmethod tcp
```

TCP/IP V4 のみを使用します。

```
lanfreecommmethod V6Tcpip
```

システムの構成方法とドメイン名サービスの検索結果に応じて、TCP/IP v4 または v6 のどちらかを使用します。

コマンド・ライン:

```
-lanfreec=tcp
```

```
-lanfreec=V6Tcpip
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

[470 ページの『Lanfreeshmport』](#)

[471 ページの『Lanfreetcpport』](#)

Lanfreeshmport

lanfreeshmport オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントとストレージ・エージェント間の通信に lanfreecommmethod=SHAREdmem が指定されている時に使用してください。これにより、クライアントと SAN 接続ストレージ装置間の処理が可能になります。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

▶ LANFREEShmpport — — *port_address* ◀

パラメーター

port_address

ストレージ・エージェントへの接続に使用する番号を指定します。値の範囲は 1 から 32767 です。

Windows クライアントの場合、デフォルトは 1 です。

Windows クライアントを除くすべてのクライアントの場合、デフォルトは 1510 です。

例

オプション・ファイル:

lanfrees 1520

コマンド・ライン:

-lanfrees=1520

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

[469 ページの『Lanfreecommmethod』](#)

Lanfreetcppport

lanfreetcppport オプションは、IBM Spectrum Protect ストレージ・エージェントが listen している TCP/IP ポート番号を指定します。

このオプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントとストレージ・エージェント間の通信に lanfreecommmethod =TCPip が指定されている時に使用してください。LAN フリー通信に NAMedpipes 通信方式を使用したい場合は、lanfreetcppport オプションは指定しないでください。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux x86_64、Linux on POWER、および Oracle Solaris のクライアントにのみ有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。

構文

▶ LANFREETCPPort — — *port_address* ◀

パラメーター

port_address

ストレージ・エージェントが listen している TCP/IP ポート番号を指定します。値の範囲は 1 から 32767 で、デフォルトは 1500 です。

注: クライアントの lanfreetcppport 値は、ストレージ・エージェント (仮想サーバー) と通信するための、そのストレージ・エージェントの tcpport 値に一致する必要があります。クライアントの tcpport 値は、実サーバーと通信するためのサーバーの tcpport 値に一致する必要があります。

例

オプション・ファイル:

lanfreetcpp 1520

コマンド・ライン:

-lanfreetcpp=1520

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

469 ページの『[Lanfreecommmethod](#)』

Lanfreessl

lanfreessl オプションを使用すると、セキュアなクライアント/ストレージ・エージェント通信を可能にする Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと接続している場合、このオプションは非推奨です。

データ移動で SSL を有効にするには、クライアントとストレージ・エージェントで SSL YES を設定します。データ移動で SSL を無効にするには、クライアントとストレージ・エージェントで SSL NO を設定します。クライアントとストレージ・エージェントが同じシステム上にある場合、パフォーマンス上の理由からそれらの間での SSL の使用は推奨されません。代わりに共有メモリーまたは名前付きパイプを使用してください。

クライアントの SSL オプションは、クライアント・オプション・ファイルで設定されます。詳しくは、[562 ページの『Ssl』](#)を参照してください。

ストレージ・エージェントの SSL オプションは、**DSMSTA SETSTORAGESERVER** コマンドによる定義時に設定されます。詳しくは、[SSL を使用するためのストレージ・エージェントの構成](#)を参照してください。

注: SSL オプションの設定に関係なく、認証には常に SSL が使用されます。

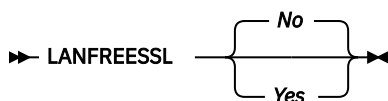
サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X クライアントを除くすべてのクライアントでサポートされます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに入れます。このオプションは GUI またはコマンド・ラインでは設定できません。

構文



パラメーター

No

ストレージ・エージェントとの通信時にバックアップ/アーカイブ・クライアントが SSL を使用しないことを指定します。No がデフォルトです。

Yes

ストレージ・エージェントとの通信時にバックアップ/アーカイブ・クライアントが SSL を有効にすることを指定します。SSL を有効にするには、lanfreessl=yes を指定して lanfreetcppport オプションの値を変更します。lanfreetcppport オプションの値の変更が必要なのは、IBM Spectrum Protect ストレージ・エージェントが通常は別のポート上の SSL 接続を listen するようにセットアップされているためです。

例

オプション・ファイル:

```
lanfreessl yes
lanfreessl no
```

コマンド・ライン:

適用されません。このオプションはコマンド・ラインでは設定できません。

Lanfreetcpserveraddress

lanfreetcpserveraddress オプションは、IBM Spectrum Protect ストレージ・エージェントの TCP/IP アドレスを指定します。

このオプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントとストレージ・エージェント間の通信に lanfreecommmethod=TCPIP または V6Tcpip が指定されている時に使用します。

クライアントとストレージ・エージェントが別々のシステムで実行されている環境で LAN フリーを構成するときは、このオプションのデフォルトを指定変更するのが便利です。このストレージ・エージェントのアドレスは、管理者から入手してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux x86_64、Linux on POWER、および Oracle Solaris のクライアントにのみ有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイルに入れます。

構文

►► LANFREETCPServeraddress — — stagent_address ◄◄

パラメーター

stagent_address

サーバーの TCP/IP アドレスを 1 - 64 文字で指定します。TCP/IP ドメイン名または数値の IP アドレスを指定します。数値の IP アドレスは TCP/IP v4 アドレスまたは TCP/IP v6 アドレスのいずれかです。デフォルト値は 127.0.0.1 (ローカル・ホスト) です。

例

オプション・ファイル:

```
LANFREETCPServeraddress stagent.example.com
```

LANFREETCPServeraddress 192.0.2.1

コマンド・ライン:
適用しません。

Latest

latest オプションは、バックアップが非活動状態であっても、ファイルの最新のバックアップ・バージョンをリストアする場合に使用します。

latest オプションは、次のコマンドで使用できます。

- **restore**
- **restore group**

(pitdate オプションを使用して) 特定時点リストアを実行する場合は、latest を指定する必要はありません。なぜなら、pitdate を使用するときは、このオプションは暗黙的なオプションになるからです。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

►► LATEST ◄◄

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:
dsmc restore "/Users/devel/projecta/*" -latest

コマンド・ライン:
dsmc restore "/home/devel/projecta/*" -latest

Localbackupset

localbackupset オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI がスタンドアロン・ワークステーションでローカル・バックアップ・セットをリストアするために IBM Spectrum Protect サーバーによる初期ログオンをバイパスするかどうかを指定します。

localbackupset オプションを yes に設定すると、GUI はサーバーによる初期ログオンを試みません。この場合には、GUI はリストア機能のみを有効にします。

localbackupset オプションを no (デフォルト) に設定すると、GUI はサーバーによる初期ログオンを試み、すべての GUI 機能を有効にします。

注: **restore backupset** コマンドは、localbackupset オプションを使用しないで、スタンドアロン・ワークステーションでのローカル・バックアップ・セットのリストアをサポートします。

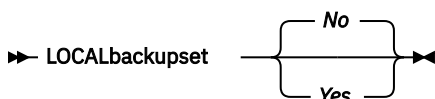
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

No

GUI がサーバーによる初期ログオンを試み、すべての機能を有効にすることを指定します。これはデフォルトです。

Yes

GUI がサーバーによる初期ログオンを試みないで、リストア機能のみを有効にすることを指定します。

例

オプション・ファイル:

```
localbackupset yes
```

このオプションは、**dsmc** コマンド・ライン・クライアントでは無効です。

関連情報

[733 ページの『Restore Backupset』](#)

Makesparsefile

makesparsefile オプションは、スパース・ファイルの再作成方法を指定するために **restore** コマンドまたは **retrieve** コマンドで使います。

スパース・ファイルではアドレス・スペース全体の各ブロックに対するディスク・スペースが割り当てられないため、ファイル内にホールが発生します。バックアップ/アーカイブ・クライアントはバックアップ操作中にスパース・ファイルを検出し、IBM Spectrum Protect サーバーでスパースというマークを付けます。ホールは内容によって検出され、常にゼロとなります。

makesparsefile オプションを **yes** (デフォルト) に設定した場合は、ファイル内のホールがディスクに書き込まれないため、リストア中に余分なディスク・スペースは割り当てられません。

makesparsefile オプションを **no** に設定した場合は、ホールは再作成されず、アドレス・スペース全体についてディスク・ブロックが割り当てられます。これにより、使用されるディスク・スペースが大きくなる場合があります。すべてのデータをリストアするのに十分なディスク・スペースがあることを確認してください。

一部の UNIX および Linux システムでは、システム固有のファイルを非スパース・ファイルとしてバックアップしなければならない場合があります。Solaris の ufsboot (ブート中に実行されます) などの物理ディスク・ブロックの存在が必要なファイルには、makesparsefile オプションを使用してください。オペレーティング・システムのブート・ファイル・ローダーは、物理ディスク・ブロックに直接アクセスし、スパース・ファイルをサポートしません。

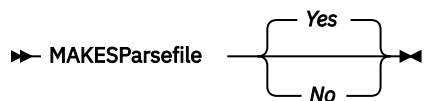
サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文



パラメーター

Yes

ファイル内のホールに書き込まず、リストア中に余分なディスク・スペースを割り当てないことを指定します。これはデフォルトです。

No

ホールを再作成せず、アドレス・スペース全体に対して ディスク・ブロックを割り当てることを指定します。

例

オプション・ファイル:

```
makesparsefile no
```

コマンド・ライン:

```
-makesparsefile=no
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Managedservices

managedservices オプションは、IBM Spectrum Protect クライアント・アクセプター・サービスが、スケジューラー、Web クライアント、またはその両方のいずれを管理するかを指定します。

制約事項: sessioninitiation オプションを serveronly に設定した場合には、スケジューリング用に dsmcad は使用できません。

クライアント・アクセプター・デーモンは、スケジューラーの外部タイマーとして役立ちます。スケジューラーが開始されると、スケジュールされた次のイベントをサーバーに照会します。このイベントは、即時にかまたはスケジューラーの終了時に実行されます。クライアント・アクセプター・デーモンは、スケジュールされたイベントを実行する時刻になると、スケジューラーを再始動します。

注:

1. schedmode オプションを prompt に設定した場合には、スケジュールを実行する時刻になるとサーバーがクライアント・アクセプター・デーモンにプロンプトを出します。スケジューラーは、クライアント・アクセプター・デーモンが最初に開始された時に、サーバーに接続およびサーバーから切断されます。

dsmc schedule コマンドは、schedmode prompt および commethod V6Tcpip が両方とも指定されている場合は使用できません。

2. Mac OS X の場合、managedservices オプションを指定しなければ、デフォルトにより、クライアント・アクセプター・デーモンはスケジューラー・プログラムと Web クライアントの両方を管理します。
3. dsm.sys ファイル内で passwordaccess オプションを generate に設定し、パスワードを生成すると、IBM Spectrum Protect がそのパスワードを自動的に管理できるようになります。

クライアント・アクセプター・デーモンを使用してスケジューラー・サービスを管理すると、以下のよう
な利点が得られます。

- このスケジューラーを従来の方法で実行しているときに起こる可能性のあるメモリー保存上の問題が解決されます。クライアント・アクセプター・デーモンを使ってこのスケジューラーを管理すれば、スケジュールされた操作間のメモリーが非常に少なくて済みます。
- クライアント・アクセプター・デーモンは、スケジューラー・プログラムおよび Web クライアントの両方を管理できるので、ワークステーションでのバックグラウンド・プロセスの数を減らすことができます。
- Web クライアントを使用するには、クライアント・システム・オプション・ファイルでこのオプションを指定する必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「**Web クライアント**」タブで設定することができます。

構文

➡ MANAGEDServices — モー ←

パラメーター

mode

クライアント・アクセプター・デーモンが、スケジューラー、Web クライアント、またはその両方のいずれを管理するかを指定します。

webclient

クライアント・アクセプター・デーモンが Web クライアントを管理することを指定します。これは UNIX および Linux でのデフォルトです。Mac OS X では、webclient と schedule の両方がデフォルトです。

schedule

クライアント・アクセプター・デーモンがスケジューラーを管理することを指定します。Mac OS X では、webclient と schedule の両方がデフォルトです。

none

Mac OS X の場合、クライアント・アクセプター・デーモンが Web クライアントおよびスケジューラーを管理しないことを指定します。**dsmc schedule** コマンドを有効にするには、managedservices を none に設定します。

例

オプション・ファイル:

以下は、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に managedservices オプションがどのように指定されるかの例です。

タスク

クライアント・アクセプター・デーモンが Web クライアントのみを管理することを指定します。

```
managedservices webclient
```

タスク

クライアント・アクセプター・デーモンがスケジューラーのみを管理することを指定します。

```
managedservices schedule
```

タスク

クライアント・アクセプター・デーモンが Web クライアントとスケジューラーの両方を管理することを指定します。

```
managementservices schedule webclient
```

注: これらの値を指定する順序は重要ではありません。

タスク

Mac OS X で **dsmc schedule** コマンドを使用する場合は、次のように指定します。

```
managementservices none
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連情報

497 ページの『[Passwordaccess](#)』

スケジューラーを管理するためのクライアント・アクセプター・デーモンのセットアップ方法については、71 ページの『[スケジューラーの構成](#)』を参照してください。

541 ページの『[Sessioninitiation](#)』

356 ページの『[Cadlistenonport](#)』

Maxcmdretries

maxcmdretries オプションは、スケジュールされたコマンドが失敗した時、クライアント・スケジューラー (ワークステーション上の) がそのコマンドを処理しようとする最大回数を指定します。

コマンド再試行が開始されるのは、クライアント・スケジューラーがまだファイルをバックアップしていないか、サーバーと接続されたことがないか、ファイルをバックアップする前に失敗した場合のみです。このオプションは、スケジューラーが実行している場合にしか使用されません。

また、IBM Spectrum Protect 管理者もこのオプションを設定できます。管理者がこのオプションに値を指定している場合は、クライアント・ノードが正常にサーバーに接続した後で、その値が、クライアント・オプション・ファイルで指定されている値を指定変更します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「最大コマンド試行回数」フィールドで設定できます。

構文

➡ MAXCMDRetries — — maxcmdretries ➡

パラメーター

maxcmdretries

スケジュールされたコマンドが失敗した時、クライアント・スケジューラーが、そのコマンドを処理しようとする回数を指定します。値の範囲は 0 から 9999 で、デフォルトは 2 です。

例

オプション・ファイル:

maxcmdr 4

コマンド・ライン:

-maxcmdretries=4

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Mbobjrefreshthresh

mbobjrefreshthresh (メガブロック・オブジェクト最新表示しきい値) オプションは、しきい値を定義する数値です。任意の 128 MB のメガブロックを記述するのに必要な IBM Spectrum Protect オブジェクトの数がこの値を超えた場合、メガブロック全体が最新表示され、前のバックアップでそのエリアを表すのに使用されたオブジェクトは有効期限が切れます。

仮想マシンをバックアップすると、データは IBM Spectrum Protect サーバーに 128 MB 単位 (メガブロックと呼ばれる) で保管されます。実動ディスク上のエリアが変更し、新しい増分バックアップが実行される場合、以前にバックアップされたデータに行われた変更を表す新しいメガブロックが作成されます。増分バックアップのたびに新しいメガブロックが作成されるため、結果的にメガブロックは IBM Spectrum Protect データベースのパフォーマンスに悪影響を与え、さらには、ほとんどの IBM Spectrum Protect 操作に悪影響を及ぼす可能性があります。

仮想マシンのバックアップごとの実動データを表す IBM Spectrum Protect オブジェクトの数を見積もる場合に、このオプションを使用します。例えば、IBM Spectrum Protect オブジェクトの数がこの値を超える場合、メガブロックは最新表示されます。このアクションは、128 MB ブロック全体がサーバーにコピーされ、単一の IBM Spectrum Protect オブジェクトとして表されることを意味しています。最小値は 2 で、最大値は 8192 です。デフォルト値は、50 です。

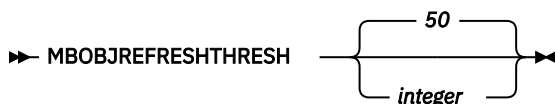
サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンを保護するデータ・ムーバーに有効です。このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware を使用するためのライセンス交付を受けている必要があります。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) で有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。このオプションは、コマンド・ラインでは無効です。

構文



パラメーター

指定できる最小値は 2 メガブロックで、最大値は 8192 メガブロックです。デフォルトは 50 メガブロックです。

例

このオプションを設定すると、更新されたメガブロックを表すのに必要なオブジェクトの数が 20 を超える場合に、メガブロックの最新表示を起動します。

```
MBOBJREFRESHTHRESH 20
```

Mbpctrefreshthresh

mbpctrefreshthresh (メガブロック・パーセンテージ最新表示しきい値) オプションは、しきい値を定義する数値です。任意の 128 MB のメガブロックを記述するのに必要な IBM Spectrum Protect オブジェクトのパーセンテージがこの値を超えた場合、メガブロック全体が最新表示され、前のバックアップでそのエリアを表すのに使用されたオブジェクトは有効期限が切れます。

仮想マシンをバックアップすると、データは IBM Spectrum Protect サーバーに 128 MB 単位 (メガブロックと呼ばれる) で保管されます。実動ディスク上のエリアが変更し、新しい増分バックアップが実行される場合、以前にバックアップされたデータに行われた変更を表す新しいメガブロックが作成されます。増分バックアップのたびに新しいメガブロックが作成されるため、結果的にメガブロックは IBM Spectrum Protect データベースのパフォーマンスに悪影響を与え、さらには、ほとんどの IBM Spectrum Protect 操作に悪影響を及ぼす可能性があります。

仮想マシンごとにバックアップされる追加データの量を見積もる場合にこのオプションを使用します。例えば、実動ディスクの 128 MB ブロックが指定されたパーセンテージを超えて変更された場合、128 MB ブロック全体がサーバーにコピーされます。ブロックは、単一の IBM Spectrum Protect オブジェクトとして表示されます。

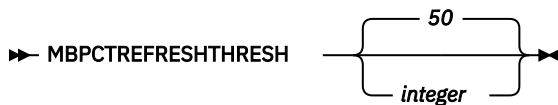
サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンを保護するデータ・ムーバー・ノードとして機能するクライアントに有効です。このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware を使用するためのライセンス交付を受けている必要があります。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) で有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。このオプションは、コマンド・ラインでは無効です。

構文



パラメーター

指定できる最小値は 1 パーセントで、最大値は 99 パーセントです。デフォルトは 50 パーセントです。

例

このオプションを設定すると、実動ディスク上のメガブロックのオブジェクトの 50 パーセント (またはそれ以上) が変更された場合に、メガブロック最新表示を起動します。

MBPCTREFRESHTHRESHOLD 50

Memoryefficientbackup

memoryefficientbackup オプションは、ファイル・スペースのフルバックアップを処理するために使用するメモリー節約アルゴリズムを指定します。

1 つの方式は、より少ないメモリーを使用して、一度に 1 つのディレクトリーをバックアップします。もう 1 つの方式は、使用するメモリーはもっと少ないのですが、より多くのディスク・スペースを必要とします。

memoryefficientbackup オプションは、ワークステーションのメモリーに制約がある時に **incremental** コマンドで使用してください。バックアップ/アーカイブ・クライアントがファイル・スペ

ースごとに使用するアルゴリズムを選択するための `include.fs` オプションへのパラメーターとして、このオプションを使用することもできます。

クライアント用のファイルが多すぎるファイル・スペースの場合、`memoryefficientbackup=diskcachemethod` を使用して、デフォルト設定 (`memoryefficientbackup=no`) または `memoryefficientbackup=yes` のいずれかにして増分バックアップを実行します。

ディスク・キャッシュ増分バックアップで作成されるディスク・キャッシュ・ファイルに必要な実際のディスク・スペース量は、バックアップに含まれるファイルおよびディレクトリーの数とバックアップされるファイルおよびディレクトリーの平均パス長によって決まります。UNIX と Linux では、パス名で文字当たり 1 バイトを見積もってください。Mac OS X では、パス名で文字当たり 4 バイトを見積もってください。例えば、バックアップされるファイルおよびディレクトリーが 1,000,000 個あり、平均パス長が 200 文字である場合、データベースは、UNIX と Linux では約 200 MB を占有し、Mac OS X クライアントでは約 800 MB を占有します。計画の目的で見積もるためのもう 1 つの方法では、ファイルおよびディレクトリーの数に最長パスの長さを掛けて、最大データベース・サイズを設定します。

HSM 管理対象ファイル・システムをバックアップする場合、マイグレーション済みファイルのリスト用に 2 番目のディスク・キャッシュ・ファイルが作成されます。ディスク・キャッシュ増分バックアップと HSM 管理対象ファイル・システム・バックアップの組み合わせによって作成されるディスク・キャッシュ・ファイルには、バックアップされる 100 万個のファイルごとに 400 MB を超えるディスク・スペースが必要になる場合があります。ディスク・キャッシュ・ファイルは、非常に大きくなる場合があります。ディスク・キャッシュ・ファイルに使用されているファイル・システム上でラージ・ファイル・サポートを有効にする必要があります。

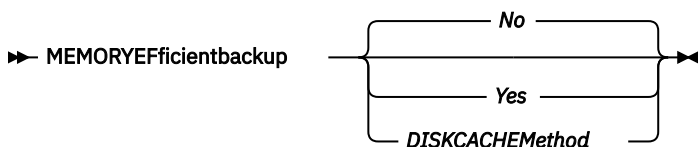
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、`dsm.opt` および `dsm.sys` のサーバー・スタンザ内で使用できますが、`dsm.opt` 内の値が `dsm.sys` にもある場合、その値は無視されます。このオプションは、初期コマンド・ラインに入れることもできます。対話モードでは、このオプションは **incremental** コマンドで使用することができます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「パフォーマンス調整」タブで「メモリー節約アルゴリズムの使用」チェック・ボックスを選択して設定することもできます。

構文



パラメーター

No

クライアント・ノードは、増分バックアップを処理する時、より高速で使用メモリーを多くする方式を使用します。これはデフォルトです。

Yes

クライアント・ノードは、増分バックアップを処理する時、使用メモリーを少なくする方式を使用します。

Diskcachemethod

クライアント・ノードは、フルファイル・システムの増分バックアップを処理する時、より少ないメモリーですみますが、より多くのディスク・スペースを必要とする方式を使用します。

例

オプション・ファイル:

```
memoryefficientbackup yes
memoryefficientbackup diskcachem
```

コマンド・ライン:

```
-memoryef=no
```

関連情報

[447 ページの『include オプション』](#)

mode

mode オプションを使用して、特定のバックアップ操作の実行時にバックアップ・モードを指定します。

mode オプションは、ロー論理装置のバックアップ時には影響を与えません。

mode オプションは、以下のバックアップ・コマンドで使用できます。

backup image

クライアント・ファイル・システムの選択イメージ・バックアップまたは増分イメージ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。

backup nas

NAS ファイル・システムのフルイメージ・バックアップまたは差分イメージ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。

backup group

1 つ以上のファイル・スペースからのファイルのリストを含むフルグループ・バックアップまたは差分グループ・バックアップのどちらを実行するかを指定します。

backup vm

VMware 仮想マシンの場合、このパラメーターは、VMware 仮想マシンの永久増分のフルバックアップ、または永久増分の増分バックアップのいずれを実行するかを指定します。



この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS を除く、すべてのサポートされるクライアントで使用可能です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

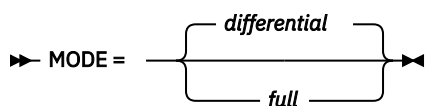
このオプションは、VMware 仮想マシンを保護するデータ・ムーバーに有効です。このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware を使用するのためのライセンス交付を受けている必要があります。

構文

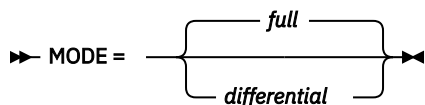
クライアント・ファイル・システムのイメージ・バックアップの場合



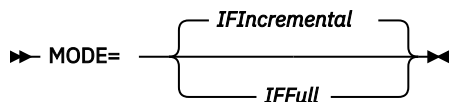
NAS ファイル・システムのイメージ・バックアップの場合



グループ・バックアップの場合



VMware 仮想マシンのバックアップの場合



パラメーター

イメージ・バックアップ・パラメーター

selective

完全 (選択) イメージ・バックアップを実行することを指定します。これはクライアント・ファイル・システムのイメージ・バックアップの場合のデフォルト・モードです。

incremental

前回のイメージ・バックアップ以降に変更されたデータのみバックアップすることを指定します。イメージ・バックアップがまだ作成されていない場合、最初のバックアップは指定した mode オプションとは関係なく、完全イメージ・バックアップ (mode=selective) になります。

NAS バックアップ・パラメーター

differential

これは NAS オブジェクトの場合のデフォルトです。前回のフルバックアップ以降に変更されたファイルの NAS バックアップを実行することを指定します。IBM Spectrum Protect サーバーにフルイメージのコピーが格納されていない場合は、フルバックアップが行われます。フルイメージが存在する場合は、そのフルイメージ・バックアップが、リストア可能であるか、有効期限が切れているが関連する差分イメージがあるために保持されているかにかかわらず、MODE =differential を指定すると差分イメージ・バックアップが送信されます。差分バックアップ中にフルイメージが送信される場合は、QUERY NASBACKUP サーバー・コマンドを使用してフルイメージとして反映されます。

フルイメージはバージョン管理または保存 (verexists retextra) により期限切れの対象となりますが、関連する差分イメージをリストアできるように、引き続きサーバーに保持されます。期限切れの対象となるフルイメージはリストアの対象としては選択できないため、QUERY NASBACKUP サーバー・コマンドを使用しても表示されません。「有効期限が切れた」フルイメージに依存する差分イメージ・バックアップはリストアできます。

full

NAS ファイル・システムのフルバックアップを実行することを指定します。

グループ・バックアップ・パラメーター

full

グループ・オブジェクトのフルバックアップを実行することを指定します。これがグループ・バックアップのデフォルトです。

differential

最後のフルバックアップ以降に変更されたファイルのグループ・バックアップを実行することを指定します。IBM Spectrum Protect サーバーにフルイメージのコピーが格納されていない場合は、フルバックアップが行われます。フルイメージが存在する場合は、そのフルイメージ・バックアップが、リストア可能であるか、有効期限が切れているが関連する差分イメージがあるために保持されているかにかかわらず、MODE =differential を指定すると差分イメージ・バックアップが送信されます。差分バックアップ中にフルイメージが送信される場合は、QUERY GROUP サーバー・コマンドを使用してフルイメージとして反映されます。

フルイメージはバージョン管理または保存 (verexists retextra) により期限切れの対象となりますが、関連する差分イメージをリストアできるように、引き続きサーバーに保持されます。期限

切れの対象となるフルイメージはリストアの対象としては選択できないため、QUERY GROUP サーバー・コマンドを使用しても表示されません。「有効期限が切れた」フルイメージに依存する差分イメージ・バックアップはリストアできます。

VMware 仮想マシン・パラメーター

IFFull

仮想マシンの永久増分フルバックアップを実行することを指定します。永久増分フルバックアップは、VMware 仮想マシンのディスク上で使用されているブロックすべてをバックアップします。

デフォルトでは、mode=ifincremental を指定した場合 (あるいは mode オプションをデフォルトのままにした場合) でも、VMware 仮想マシンの最初のバックアップは永久増分のフルバックアップ (mode=iffull) になります。後続のバックアップは、デフォルトの mode=ifincremental になります。

クライアントがバックアップ・データを暗号化するように構成されている場合、仮想マシンのバックアップにはこのバックアップ・モードを使用できません。

VMware 仮想マシンの永久増分バックアップ戦略について詳しくは、[バックアップおよびリストアのタイプ](#) を参照してください。

IFIncremental

仮想マシンの永久増分の増分バックアップを実行することを指定します。永久増分の増分バックアップでは、前回のバックアップ以降に変更されたディスク・ブロックのみをバックアップします。

このモードは、VMware 仮想マシン・バックアップのデフォルトのバックアップ・モードです。

クライアントがバックアップ・データを暗号化するように構成されている場合、仮想マシンのバックアップにはこのバックアップ・モードを使用できません。

例

タスク

前回のバックアップ以降に変更されたデータのみバックアップする永久増分の増分モードを使用して、vm1 という名前の VMware 仮想マシンのバックアップを実行します。

```
dsmc backup vm vm1 -mode=ifincremental  
-vmbackuptype=full
```

タスク

ファイル・システム全体の NAS イメージ・バックアップを実行します。

```
dsmc backup nas -mode=full -nasnodename=nas1  
/vol/vol10 /vol/vol11
```

タスク

新規ファイル、および最後のフルイメージ・バックアップ後に変更されたファイルのみをバックアップするイメージ増分バックアップを使用して、/home/test ファイル・スペースをバックアップします。

```
dsmc backup image /home/test -mode=incremental -snapshotproviderimage=none
```

タスク

ファイル・リスト /home/dir1/filelist1 にあるすべてのファイルのフルバックアップを実行して、グループ・リーダーである /home/group1 ファイルが置かれている仮想ファイル・スペース名 /virtfs に格納します。

```
dscm backup group -filelist=/home/dir1/filelist1  
-groupname=group1 -virtualfsname=/virtfs -mode=full
```

関連資料

670 ページの『Backup VM』

661 ページの『Backup Group』

backup group コマンドを使用して、1つ以上のファイル・スペース・オリジンからのファイルのリストを含むグループを IBM Spectrum Protect サーバー上の仮想ファイル・スペースに作成してバックアップします。

663 ページの『Backup Image』

backup image コマンドは、システムの 1つ以上の ボリュームのイメージ・バックアップを作成します。

668 ページの『Backup NAS』

backup nas コマンドは、Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属している 1つ以上のファイル・システムのイメージ・バックアップを作成します。これは NDMP バックアップとも呼ばれます。IBM Spectrum Protect 管理者 ID を求めるプロンプトが表示されます。

Monitor

monitor オプションは、Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属しているファイル・システムのイメージ・バックアップまたはリストアを モニターするかどうかを指定します。

monitor=yes を指定した場合には、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、現行 NAS イメージのバックアップまたはリストア操作をモニターして、画面に処理情報を表示します。これはデフォルトです。

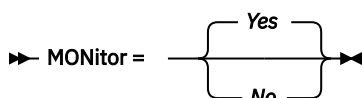
monitor=no を指定した場合には、クライアントは、現行 NAS イメージのバックアップまたはリストア操作をモニターせず、次のコマンドを処理できます。

このオプションは、**backup nas** または **restore nas** コマンドで使用します。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Solaris クライアントにのみ有効です。

構文



パラメーター

Yes

現行 NAS イメージ・バックアップまたはリストア操作をモニターして、画面に処理情報を表示することを指定します。これはデフォルトです。

No

現行 NAS イメージ・バックアップまたはリストア操作をモニターしないことを指定します。

例

コマンド・ライン:

```
backup nas -mode=full -nasnodename=nas1 -monitor=yes  
/vol1/vol0 /vol1/vol1
```

Myreplicationserver

myreplicationserver オプションは、クライアントがフェイルオーバー時に使用する 2 次サーバー・スタンザを指定します。

2 次サーバー・スタンザは **replservername** オプションによって識別され、2 次サーバーに関する接続情報を含んでいます。

このオプションは、クライアント・ノードについて IBM Spectrum Protect サーバー管理者によって設定されます。このオプションは、通常の (フェイルオーバーではない) ログオン・プロセス時にクライアントに送信され、クライアント・オプション・ファイルに保存されます。

このオプションを通常の操作時に編集しないでください。

このオプションは、以下のような状況においてのみ編集します。

- 1 次サーバーがオフラインで、2 次サーバーの情報がオプション・ファイルにない。
- 2 次サーバーの情報が、古い情報または誤った情報である。

編集した値は、次に 1 次サーバーにログインしたときに、すべて削除または更新されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、dsm.sys ファイル内のサーバー・スタンザに入れます。

構文

➡ MYREPLICATIONServer — repl_servername ➡

パラメーター

repl_servername

フェイルオーバー時に使用される 2 次サーバーのスタンザの名前を指定します。通常、この値は 2 次サーバーの名前です。そのサーバーのホスト名ではありません。また、repl_servername パラメーターの値には、大/小文字の区別はありませんが、REPLSERVERName オプションで指定されている値と一致している必要があります。

例

オプション・ファイル:

MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer1

コマンド・ライン:

適用しません。

オプション・ファイル:

以下の例は、dsm.sys ファイル内の 3 つの異なるサーバーに対するオプションの指定方法、および 2 次サーバーの参照方法を示しています。

複数の 2 次サーバーに関する接続情報は、スタンザの中で示されます。各スタンザは **replservername** オプション、および 2 次サーバーの名前によって識別されます。

servername スタンザには、**replservername** スタンザで指定されている 2 次サーバーを指す **myreplicationserver** オプションが含まれていなければなりません。

1 つの **servername** スタンザにつき 1 つの 2 次サーバーのみを指定できます。

```
REPLSERVERNAME TargetReplicationServer1
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer1
REPLTCPSPORT 1505
REPLSSLPORT 1506
REPLSERVERGUID 91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00.00

REPLSERVERNAME TargetReplicationServer2
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer2
REPLTCPSPORT 1505
REPLSSLPORT 1506
REPLSERVERGUID 91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00.02

Servername server_a
```

COMMMethod		TCPip
TCPPort		1500
TCPServeraddress		server_hostname1.example.com
PASSWORDAccess		prompt
MYREPLICATIONServer		TargetReplicationServer1
Servename	server_b	
COMMMethod		TCPip
TCPPort		1500
TCPServeraddress		server_hostname2.example.com
PASSWORDAccess		generate
INCLExcl		/adm/tsm/archive.excl
MYREPLICATIONServer		TargetReplicationServer2
Servename	server_c	
COMMMethod		TCPip
TCPPort		1500
TCPServeraddress		server_hostname3.example.com
PASSWORDAccess		generate
MYREPLICATIONServer		TargetReplicationServer1

関連概念

自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

自動フェイルオーバー用のクライアントの構成

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Nasnodename

nasnodename オプションは、NAS ファイル・システムの処理時に NAS ファイル・サーバーのノード名を指定します。クライアントは、管理者 ID を要求するプロンプトを出します。

このノード名は、IBM Spectrum Protect サーバーに対して NAS ファイル・サーバーを識別するものです。このサーバーで NAS ファイル・サーバーを登録する必要があります。

このオプションは、コマンド・ラインまたはクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) で指定することができます。

dsm.sys ファイルのデフォルトは、コマンド・ラインに別の値を入力して指定変更することができます。dsm.sys ファイルで nasnodename オプションを指定しない場合には、NAS ファイル・システムの処理時に、コマンド・ラインでこのオプションを指定する必要があります。

nasnodename オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **backup nas**
- **delete filesystem**
- **query backup**
- **query filesystem**
- **restore nas**

delete filesystem コマンドを使用して、NAS ファイル・スペースをサーバー・ストレージから対話式で削除することができます。

nasnodename オプションは、NAS ファイル・サーバーのノード名を識別するのに使用します。

nasnodename オプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。クライアント・システム・オプション・ファイルの値はデフォルトですが、この値は、コマンド・ラインで指定変更することができます。nasnodename オプションがクライアント・システム・オプション・ファイルで指定されていない場合には、NAS ファイル・システムを処理する時にコマンド・ラインでこのオプションを指定しなければなりません。

`class` オプションは、削除するファイル・スペースのクラスを指定するために使用します。NAS ノードに属するファイル・スペースのリストを表示して、削除するファイル・スペースを選択できるようにするには、`-class=nas` オプションを使用してください。

Web クライアントを使用して NAS ファイル・スペースを削除するには、データのバックアップのトピックを参照してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Solaris クライアントでのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブで設定できます。

構文

➡ NASNodeName — — *nodename* ➡

パラメーター

nodename

NAS ファイル・サーバーのノード名を指定します。

例

オプション・ファイル:

`nasnodename nas2`

コマンド・ライン:

`-nasnodename=nas2`

Nfstimeout

`nfstimeout` オプションは、タイムアウトになる前にクライアントが NFS ファイル・システムで状況システム呼び出しを待つ秒数を指定します。

このオプションを使用して、ファイル・システム上における状況呼び出しのデフォルトの動作を軽減することができます。例えば、NFS ファイル・システムが不整合であると、状況システム呼び出しは、NFS (ソフトマウント) によってタイムアウトにされるか、プロセス (ハードマウント) をハングします。

このオプションの値がゼロ以外の値に変更されると、状況システム呼び出しを出すために、呼び出し側によって新しいスレッドが作成されます。新規スレッドは呼び出し側スレッドによってタイムアウトにされ、操作を続行することができます。

注: Solaris では、NFS マウントがハード・マウントの場合は、`nfstimeout` オプションが失敗することがあります。ハングした場合は、`nfstimeout` オプションを非活動化し、以下のようにして、ソフト・マウントされた NFS ファイルをマウントしてください。

```
mount -o soft,timeo=5,retry=5 machine:/filesystem /mountpoint
```

パラメーターは以下のように定義されています。

soft

NFS ファイル・システムのソフト・マウントを生成します。エラーが発生した場合、`stat()` 関数は、エラーで戻ります。hard オプションが使用されている場合は、ファイル・システムが使用可能になるまで `stat()` は戻りません。

timeo=n

ソフト・マウント・エラーのタイムアウトを $n \times 1/10$ 秒に設定します。

retry=n

内部再試行およびマウント再試行を *n* 回に設定します (デフォルトは、10000)。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux クライアント用です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションをサーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルか クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に入れます。

構文

➡ `NFSTIMEout` — — *number* ➡

パラメーター

number

タイムアウトになる前にクライアントがファイル・システムで状況システム呼び出しを待つ秒数を指定します。値の範囲は 0 から 120 であり、デフォルトは 0 秒です。

例

オプション・ファイル:

`nfstimeout 10`

コマンド・ライン:

`-nfstimeout=10`

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

NFS ハード・マウントおよびソフト・マウントの取り扱い方法については、[233 ページの『NFS ハード・マウントおよびソフト・マウント』](#)を参照してください。

Nodename

クライアント・オプション・ファイル内で `nodename` オプションを使用して、ご使用のワークステーションをサーバーに対して識別します。異なるノード名を使用して、ワークステーション上の複数のオペレーティング・システムを識別することができます。

`nodename` オプションを使用すると、パスワードが必要な場合には、指定したノードに割り当てられたパスワードを要求するプロンプトが表示されます。

別のワークステーションから作業を行っている途中で、サーバーからファイルをリストアまたはリトリブしたい場合には、`virtualnodename` オプションを使用してください。管理者が `asnodename` オプションをセットアップしている場合は、オプションを使用することも可能です。

サーバーへの接続時には、クライアントは自分自身をサーバーに対して識別する必要があります。このログイン識別は、次のように判別されます。

- `dsm.sys` ファイルの `nodename` 項目、またはクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) の `virtualnodename` 項目、あるいはコマンド・ラインで指定した仮想ノード名がない場合には、デフォルトのログイン ID は **hostname** コマンドが戻す名前になります。
- `nodename` 項目が `dsm.sys` ファイルに存在する場合には、その `nodename` 項目が **hostname** コマンドの戻す名前を指定変更します。
- `virtualnodename` 項目がクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に存在するか、コマンド・ラインで仮想ノード名が指定されている場合には、その名前が **hostname** コマンドで返される

名前と同じであってはなりません。サーバーが仮想ノード名を受け入れると、`passwordaccess` オプションが `generate` でも、(認証がオンである場合) パスワードが要求されます。サーバーとの接続が確立されると、このログイン ID を使用すれば、バックアップしたすべてのファイルへのアクセスが許可されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブの「ノード名」フィールドで設定できます。

構文

➡ NOName — — *nodename* ➡

パラメーター

nodename

IBM Spectrum Protect サービスを受けさせたいノードのノード名を、1 から 64 文字で指定します。デフォルトは、**hostname** コマンドで戻される値です。

ノード名を指定しない場合は、ノード名がワークステーションのホスト名にデフォルト設定されます。

例

オプション・ファイル:
`nodename cougar`

[597 ページの『Virtualnodename』](#)

Nojournal

デフォルトのジャーナル・ベース・バックアップの代わりに従来のフル増分バックアップを実行したいことを指定するには、`nojournal` オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用します。

ジャーナル・ベース増分バックアップは、以下の点で従来のフル増分バックアップとは異なります。

- デフォルト以外のコピー頻度 (0 以外) は、IBM Spectrum Protect サーバーでは実施されません。
- UNIX 特殊ファイルの変更はジャーナル・デーモンにより検出されないため、この変更はバックアップされません。

これらの理由により、`nojournal` オプションを定期的に使用して、従来のフル増分バックアップを実行します。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX および Linux バックアップ/アーカイブ・クライアントに有効です。

構文

➡ NOJournal ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc incr /home -nojournal
```

関連概念

693 ページの『[ジャーナル・ベースのバックアップ](#)』

IBM Spectrum Protect ジャーナル・デーモンがインストールされており、ファイル・システムをジャーナル処理するように構成してあって、有効なジャーナルが確立されている場合、特殊なファイル・システムのバックアップはジャーナル・ベースになります。

Noprompt

noprompt オプションは、**delete group**、**delete archive**、**expire**、**restore image**、および **set event** コマンドによって表示される確認プロンプトを抑止します。

- **delete archive**
- **delete backup**
- **delete group**
- **expire**
- **restore image**

注: **restore image** コマンドは、Mac OS X オペレーティング・システムには適用されません。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ NOPrompt ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc delete archive -noprompt "/Users/van/Documents/*"
```

コマンド・ライン:

```
dsmc delete archive -noprompt "/home/project/*"
```

Nrtablepath

nrtablepath オプションは、クライアント上のノード複製テーブルのロケーションを指定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントはこのテーブルを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーへの各バックアップ操作またはアーカイブ操作に関する情報を保管します。

データのバックアップ先のサーバーは、バージョン 7.1 以降でなければならず、クライアント・ノードのデータを 2 次サーバーに複製する必要があります。

フェイルオーバーが発生した時、フェイルオーバーの前に複製が行われていなかった場合は、2 次サーバーにある情報は最新バージョンでない可能性があります。クライアントはノード複製テーブルの情報を 2 次サーバー上の情報と比較して、サーバー上のバックアップが最新のバックアップ・バージョンかどうかを判別することができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上に設定されたクライアント・オプション内で構成することもできます。

構文

➡ NRTABLEPath — path ➡

パラメーター

path

ノード複製テーブルのデータベースが作成されるロケーションを指定します。デフォルト・ロケーションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール・ディレクトリーです。

root ユーザー以外のユーザーの場合は、一時ディレクトリーなどの、ユーザー ID が書き込み権限をもっているパスを指定する必要があります。root 以外のユーザーのほとんどは、クライアントのインストール・ディレクトリーへのアクセス権を持っていません。

制約事項: ノード複製テーブルは、ルート・ディレクトリー (/) には作成できません。ノード複製テーブルのロケーションを指定することを選択した場合は、ルート・ディレクトリーを指定しないでください。

例

オプション・ファイル:

nrtablepath /Volumes/nrtbl

コマンド・ライン:

適用しません。

関連タスク

複製されたクライアント・データの状況の判別

2 次サーバーからクライアント・データをリストアまたはリトリブする前に、クライアントの最新のバックアップが 2 次サーバーに複製されているかどうかを確認することができます。

自動フェイルオーバー用のクライアントの構成

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Numberformat

numberformat オプションは、数値を表示する際に使用するフォーマットを指定します。

AIX、および Solaris のクライアントは、ロケーションまたは言語によって異なるすべてのユーザー・インターフェースを表す英語以外のロケールをサポートします。

デフォルトの場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントと 管理クライアントは、クライアントの呼び出し時に有効なロケール定義からフォーマット情報を取得します。ロケール定義のセットアップ方法の詳細については、ローカル・システム側のドキュメンテーションを参照してください。

注: numberformat オプションは、Web クライアントには影響しません。Web クライアントは、ブラウザーを実行中のロケールの数値形式を使用します。ブラウザーがサポートされているロケールで実行されていない場合には、Web クライアントは米国英語用の数値形式を使用します。

numberformat オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **delete archive**

- delete backup
- expire
- query archive
- query backup
- query image
- query nas
- restore
- restore image
- restore nas
- retrieve
- set event

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「地域設定」タブの「数値形式」フィールドで設定できます。

構文

➡ NUMBERformat — — *number* ➡

パラメーター

number

次のフォーマットのいずれかを使用して数値を表示します。使用したい数値形式と対応する数値 (0-6) を指定してください。

0

ロケール指定の日付形式を使用します。これがデフォルトです (Mac OS X には適用されません)。

1

1,000.00

これは、以下の使用可能翻訳の場合のデフォルトです。

- 米国英語
- 日本語
- 中国語 (繁体字)
- 中国語 (簡体字)
- 韓国語

2

1,000,00

3

1 000,00

これは、以下の使用可能翻訳の場合のデフォルトです。

- フランス語
- チェコ語
- ハンガリー語

- ポーランド語
- ロシア語

4

1 000.00

5

1.000,00

これは、以下の使用可能翻訳の場合のデフォルトです。

- ブラジル・ポルトガル語
- ドイツ語
- イタリア語
- スペイン語

6

1'000,00

AIX および Solaris の場合: 数値フォーマットを定義するには、ご使用のロケールのソース・ファイルで次の行を修正します。どのフォーマットを選択した場合も、そのフォーマットは出力と入力両方に適用されます。

decimal_point

整数と小数部を区切る文字。

thousands_sep

100 の単位を 1000 の単位から区別し、1000 の単位を 100 万の単位から区別する文字。

grouping

thousands_sep 文字によって区切られた各グループ内の桁数。

例

オプション・ファイル:

num 4

コマンド・ライン:

-numberformat=4

このオプションは、初期コマンド・ラインおよび対話モードでのみ有効です。このオプションを対話モードで使用した場合には、このオプションが指定されたコマンドにのみ影響が及びます。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値に戻ります。この値は、初期コマンド・ラインまたはサーバーが強制するオプションによって指定変更されない限り、dsm.opt ファイルの値です。

Optfile

optfile オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアント・セッションの開始時に使用するクライアント・オプション・ファイルを指定します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➤ OPTFILE = — — *file_name* ➤

パラメーター

file_name

完全修飾パス名を使用する場合は、代替のクライアント・オプション・ファイルを指定します。ファイル名のみを指定した場合、クライアントは、指定したファイル名が現行作業ディレクトリーにあるものと想定します。デフォルトは `dsm.opt` です。

制約事項: クライアント・アクセプター・デーモン (`dsmcad`) でこのオプションを使用する場合は、絶対パスを指定してください。これは、クライアント・アクセプター・デーモンが初期化後に作業ディレクトリーを `root ("/")` に変更するためです。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc query session -optfile=myopts.opt
```

クライアント・アクセプター・デーモン:

```
dsmcad -optfile=/usr/tivoli/tsm/client/ba/bin/myopts.opt
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Password

`password` オプションは、IBM Spectrum Protect のパスワードを指定します。

このオプションを指定せずに、管理者が認証をオンに設定していた場合には、バックアップ/アーカイブ・クライアント・セッションの開始時にパスワードを求めるプロンプトが出されます。

注:

1. サーバーがパスワードを求めるプロンプトを出した場合には、パスワードを入力しても表示されません。ただし、コマンド・ラインで `password` オプションを使用した場合、パスワードはその入力時に表示されます。
2. IBM Spectrum Protect サーバー名が変更され、あるいはバックアップ/アーカイブ・クライアントが別のサーバーにダイレクトされる場合には、保管されている暗号化パスワードを再生成する必要があるため、すべてのクライアントがサーバーの再認証を受ける必要があります。

`passwordaccess` オプションが `generate` に設定されている場合、`password` オプションは無視されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に入れます。

構文

➡ PASsword — — password ➡

パラメーター

password

IBM Spectrum Protect サーバーへのログオンに使用するパスワードを指定します。

パスワードの長さは、最大で 63 文字です。パスワードに関する制約は、パスワードが保管および管理される場所、そしてクライアントの接続先となるサーバーのバージョンによって異なります。

ご使用の **IBM Spectrum Protect** サーバーがバージョン **6.3.3** 以降で、パスワードの認証に **LDAP ディレクトリー・サーバー**を使用する場合、以下が適用されます。

パスワードの作成には、以下に挙げる文字のいずれかを使用してください。

```
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 . ! @ # $ % ^ & * _ - + = ` ( )
| { } [ ] : ; < > , ? / ~
```

パスワードは大/小文字の区別があり、LDAP ポリシーにより設定されるより多くの制約事項に従います。

ご使用の **IBM Spectrum Protect** サーバーがバージョン **6.3.3** 以降で、パスワードの認証に **LDAP ディレクトリー・サーバー**を使用しない場合、以下が適用されます。

パスワードの作成には、以下に挙げる文字のいずれかを使用してください。

```
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 . ! @ # $ % ^ & * _ - + = ` ( )
| { } [ ] : ; < > , ? / ~
```

パスワードは、IBM Spectrum Protect サーバー・データベースに保管され、大文字小文字を区別しません。

ご使用の **IBM Spectrum Protect** サーバーがバージョン **6.3.3** より古い場合は、以下が適用されます。

パスワードの作成には、以下に挙げる文字のいずれかを使用してください。

```
a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9
_ - & + .
```

パスワードは、IBM Spectrum Protect サーバー・データベースに保管され、大文字小文字を区別しません。

要確認:

コマンド・ラインでは、1 つ以上の特殊文字を含むすべてのパラメーターを引用符で囲ってください。引用符を指定しないと、特殊文字はシェルのエスケープ文字、ファイルのリダイレクト文字、またはオペレーティング・システムにとって重要なその他の文字として解釈される可能性があります。

AIX、Linux、および Solaris システムの場合:

コマンド・パラメーターを単一引用符 (') で囲みます。

コマンド・ライン例:

```
dsmc set password -type=vmguest 'Win 2012 SQL' 'tsml2dag
¥administrator' '7@#$$%^&7'
```

特殊文字が含まれるパスワードをオプション・ファイルに入力する場合は、引用符は必要ではありません。

例

オプション・ファイル:

```
password secretword
```

コマンド・ライン:

```
-password=secretword
-password='my>pas$word'
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Passwordaccess

passwordaccess オプションは、パスワードを自動的に生成したいか、あるいはユーザー・プロンプトに応じて設定したいかを指定します。

管理者は、認証機能を有効にすることによって、クライアント・ノードにパスワードを要求することができます。クライアント・ノードにパスワードが必要かどうかは、管理者に問い合わせてください。

パスワードが必要な場合、次のいずれかの方法を選択できます。

- クライアント・ノードのためのパスワードを自分自身で設定し、サービスを要求するたびにクライアントにプロンプトを出させます。
- パスワードの有効期限が切れるたびにクライアントによってクライアント・ノードのための新しいパスワードが自動的に生成され、暗号化されてファイルに保管され、サービスを要求した時にそのファイルからパスワードがリトリブされます。パスワードを求めるプロンプトは出されません。
- ログオン時にパスワードが必要となるようにサーバーが構成されていない場合でも、バックアップ/アーカイブ・クライアントがサーバーとの接続を確立する際には、ノード・パスワードを入力するようプロンプト指示される可能性があります。この動作は、オプション passwordaccess がデフォルトのままに設定されているか、オプションを passwordaccess prompt に設定している場合に発生します。プロンプトに回答して指定するパスワードは、ログイン情報の暗号化のみに使用されます。サーバーへのログオンには使用されません。この構成では、このオプションを passwordaccess generate に設定することで、パスワードの入力を回避できます。passwordaccess generate と設定すると、クライアントにより自動的にパスワードが作成、保管、および発行されます。passwordaccess generate が設定されると、password オプションは無視されます。

以下の状態では、passwordaccess オプションを generate に設定する必要があります。

- HSM クライアントの使用時。
- Web クライアントの使用時。
- NAS 操作の実行時。
- IBM Spectrum Protect for Workstations の使用時。

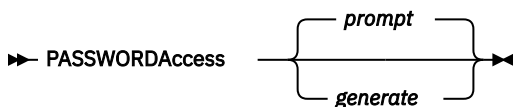
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「許可」タブの「パスワード・アクセス」セクションで設定できます。

構文



パラメーター

prompt

クライアントがサーバーに接続するたびに、クライアント・ノードのパスワードを要求するプロンプトが出ます。これがデフォルトです。

クライアント・ノードのパスワードのセキュアを保持するには、パスワードなしでコマンドを入力し、クライアントがパスワードを求めるプロンプトを出すのを待ちます。

各ユーザーがクライアント・ノードの IBM Spectrum Protect パスワードを知っていなければなりません。クライアント・ノードのパスワードを知っているすべてのユーザーが、そのクライアント・ノード

から作成したすべてのバックアップおよびアーカイブにアクセスできます。例えば、ユーザーが別のクライアント・ノードから、そのクライアント・ノードのノード名とパスワードを入力すると、そのユーザーは仮想 root ユーザーになります。

セッションが開始される時、API アプリケーションはパスワードを提供しなければなりません。パスワードを入手するのは、アプリケーションの責任です。

generate

パスワードを暗号化してローカルに保管しておき、古いパスワードが期限切れになった時新しいパスワードを生成します。新規パスワードは、クライアントによってランダムに生成されます。パスワードに関する制約は、パスワードが保管および管理される場所、そしてクライアントの接続先となるサーバーのバージョンによって異なります。生成されたパスワードは、63 文字で、以下の文字のうち少なくとも 2 つが含まれています。

- 英大文字
- 英小文字
- 数字
- 特殊文字

さらに、生成されたパスワードの先頭と末尾の文字は、大文字小文字どちらかの英字です。生成されたパスワードに反復文字は含まれません。

サーバーでのオープン 登録を使用したワークステーションの登録時、または管理者がパスワードを手作業で変更した場合には、パスワード・プロンプトが出されます。

ローカルにログインするときに、ユーザーがクライアント・ノードのパスワードを知っている必要はありません。ただし、リモート・ノードで `nodename` オプションを使用することによって、ユーザーは自分の所有するファイル、および他のユーザーがアクセスを認可したファイルにアクセスすることができます。

例

オプション・ファイル:
`passwordaccess generate`

コマンド・ライン:
適用しません。

関連情報

パスワードがどこに保管されているかについては、[498 ページの『Passworddir』](#)を参照してください。

Passworddir

`passworddir` オプションは、暗号化パスワード・ファイルを保管しておくディレクトリーの位置を指定します。このディレクトリーの位置は、サーバーのパブリック証明書を `dsmcert.kdb` ファイルに保管するために鍵データベースにも使用されます。

デフォルト・ディレクトリーは、AIX の場合は `/etc/security/adsm` であり、その他の UNIX および Linux プラットフォームの場合は `/etc/adsm` です。Mac のデフォルト・ディレクトリーは `/Library/Preferences/Tivoli Storage Manager` です。クライアントによって作成されたパスワード・ファイルは、それがどこに保管されているかには関係なく、常に `TSM.sth` という名前になります。パスワード・ファイルは 3 つのファイルから構成されています。TSM.KDB には暗号化されたパスワードが保管されています。TSM.sth は、TSM.KDB ファイルのパスワードを暗号化するために使用されるランダム暗号鍵が保管されます。このファイルはファイル・システムによって保護されています。TSM.IDX は、TSM.KDB ファイルのパスワードを追跡するために使用される索引ファイルです。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

➡ PASSWORDDIR — — *directoryname* ➡

パラメーター

directoryname

暗号化されたパスワード・ファイルを保管するパスを指定します。パスワード・ファイルの名前は TSM.sth です。指定されたパスのいずれかの部分が存在していないと、IBM Spectrum Protect はそれを作成しようとします。

注: passworddir オプションが指定されていない場合、dsmcert.kdb ファイルについて以下のロケーションが確認されます。

1. IBM Spectrum Protect アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) クライアント・インストール・ディレクトリー (API がスタンドアロン製品として、IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントなしでインストールされる場合)。
2. IBM Spectrum Protect バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール・ディレクトリー。
3. HOME 環境変数が \$HOME/IBM/SpectrumProtect/certs/ パスの下のユーザー・プロファイルに定義されている場合。

dsmcert.kdb ファイルが見つからない場合は、ユーザーが書き込み権限を持つ最初のディレクトリーに作成されます。

例

オプション・ファイル:

```
passworddir "/Users/user1/Library/Preferences/Tivoli Storage Manager/"
```

```
passworddir /etc/security/tsm
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Pick

pick オプションは、入力したファイル指定と一致するバックアップ・バージョン、またはアーカイブ・コピーのリストを作成します。

このリストから、処理するバージョンが選択できます。inactive オプションを含めると、活動状態と非活動状態の両方のオブジェクトを表示することができます。

イメージの場合には、ソース・ファイル・スペースおよび宛先ファイル・スペースを指定しないと、ピック・リストにすべてのバックアップ・イメージが含まれます。この場合、ピック・リストから選択されたイメージはそれぞれの元の位置にリストアされます。ソース・ファイル・スペースと宛先ファイル・スペースを指定した場合には、ピック・リストから選択できる項目は1つだけです。

pick オプションは、次のコマンドで使用してください。

- delete archive
- delete backup
- delete group
- expire

- **restore**
- **restore group**
- **restore image**
- **restore nas**
- **retrieve**

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

►► P!ck ◄◄

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/Users/van/Documents/*" -pick -inactive
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/home/project/*" -pick -inactive
```

Pitdate

pitdate オプションは、バックアップの最新バージョンを表示またはリストアしたい特定時点を設定するために pittime オプションと一緒に使用します。

指定された日時またはそれ以前にバックアップされていて、指定の日時以前に削除されていないファイルが処理されます。この日付と時刻より後で作成されたバックアップ・バージョンは無視されます。

pitdate オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **delete backup**
- **query backup**
- **query group**
- **query image**
- **restore**
- **restore group**
- **restore image**
- **restore nas**

pitdate を使用する場合、inactive オプション と latest オプションは、暗黙的なオプションになります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

►► PITDate = — — *date* ◄◄

パラメーター

date

適切な日付を指定します。日付は、`dateformat` オプションで選択したフォーマットで入力します。

コマンドに `dateformat` を組み込む場合には、`fromdate`、`pitdate`、および `todate` オプションの前に入れる必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/Volumes/proj4/myproj/*" -sub=y -pitdate=08/01/2003 -  
pittime=06:00:00
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/fs1/*" -sub=y -pitdate=08/01/2003 -pittime=06:00:00
```

Pittime

`pittime` オプションは、最新バージョンのバックアップを表示またはリストアする特定時点を設定するために `pitdate` オプションと共に使用します。

指定された日時またはそれ以前にバックアップされていて、指定の日時以前に削除されていないファイルが処理されます。この日付と時刻より後で作成されたバックアップ・バージョンは無視されます。

`pitdate` オプションを指定しない場合は、このオプションは無視されます。

`pittime` オプションは、次のコマンドで使用してください。

- `delete backup`
- `query backup`
- `query image`
- `restore`
- `restore image`
- `restore nas`

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

►► PITTime = — — *time* ◄◄

パラメーター

time

指定された日付の時刻を指定します。時刻を指定しないと、デフォルトの 23:59:59 になります。時刻は、`timeformat` オプションで選択したフォーマットで指定します。

コマンドに `timeformat` オプションを組み込む場合には、`fromtime`、`pittime`、および `totttime` オプションの前に入れる必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc query backup -pitt=06:00:00 -pitd=08/01/2003 "/Volumes/proj5/myproj/*"
```

コマンド・ライン:

```
dsmc q b "/fs1/*" -pitt=06:00:00 -pitd=08/01/2003
```

Postschedulecmd/Postnschedulecmd

postschedulecmd/postnschedulecmd オプションは、スケジュールを実行した後でクライアント・プログラムが処理すべきコマンドを指定します。

クライアント・プログラムがコマンドが完了するのを待ってから他の処理を続けるようにするには、postschedulecmd オプションを使用します。コマンドが完了するのを待たずに他の処理を続ける場合は、postnschedulecmd オプションを指定します。

戻りコードの処理およびスケジュールされているアクションの動作は、指定されたオプションとスケジュールされた操作のタイプの両方によって決まります。

- スケジュールされているアクションが **COMMAND** 以外の場合のスケジュールされた操作の場合:

postschedulecmd コマンドが戻りコード 0 (ゼロ) で完了しない場合、スケジュールされたイベントの戻りコードは、8 あるいはスケジュールされた操作の戻りコードの、どちらか大きい方になります。postschedulecmd コマンドにこの規則を使用させない場合、コマンドを始動して戻りコード 0 で終了するスクリプトまたはバッチ・ファイルを作成できます。その後、そのスクリプトまたはバッチ・ファイルを始動するように postschedulecmd オプションを構成してください。

- スケジュールされているアクションが **COMMAND** の場合のスケジュールされた操作の場合:

postschedulecmd オプションで指定したコマンドからの戻りコードは、スケジュールされたイベントが完了したときに、サーバーに報告される戻りコードには影響を与えません。postschedulecmd 操作の結果が、スケジュールされたイベントの戻りコードに影響を与えるようにするには、postschedulecmd オプションを使用する代わりに、スケジュールされたアクションのコマンド・スクリプトに postschedulecmd 操作を組み込みます。

- スケジューラ・アクションが開始できず、preschedulecmd オプションに指定したコマンドが戻りコード 0 (ゼロ) で完了する場合、postschedulecmd オプションに指定したコマンドが実行されます。
- postnschedulecmd オプションに指定した操作の戻りコードは追跡されず、スケジュールされたイベントの戻りコードには影響しません。

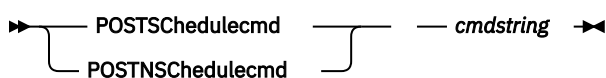
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「**schedule コマンド**」テキスト・ボックスの「**スケジューラ**」タブで設定できます。サーバーでもこれらのオプションを定義できます。

構文



パラメーター

cmdstring

処理するコマンドを指定します。このオプションを使用すると、スケジュールの後に実行するコマンドを入力することができます。使用できる `postschedulecmd` オプションは 1 つだけです。

コマンド・ストリングに空白が入っている場合、そのコマンド・ストリングを引用符で囲ってください。コマンド・ストリング内に引用符がある場合は、コマンド・ストリング全体を単一引用符で囲ってください。

IBM Spectrum Protect サーバー管理者が、`postschedulecmd` または `preschedulecmd` に使用するコマンドが実行されないようにしたい場合は、*cmdstring* に空白またはヌルのストリングを使用します。いずれかのオプションで空白またはヌル・ストリングを指定すると、管理者は両方のオプションでコマンドを使用できなくなります。

管理者が `postschedulecmd` オプションで空白またはヌル・ストリングを指定すると、ユーザーはスケジュール後のコマンドを実行できなくなります。

Mac OS X では、`postschedulecmd` スケジュール・コマンドが AppleScript の場合は、スクリプトを実行するために **osascript** コマンドを使用する必要があります。例えば、「Database Script」が AppleScript の場合は、次のコマンドを入力します。

```
postschedulecmd osascript "/Volumes/La Pomme/Scripting/
Database Script"
```

例

オプション・ファイル:

Mac OS X の場合: `postschedulecmd "/Volumes/La Pomme/Scripting/postsched.sh"`

オプション・ファイル:

`postschedulecmd "restart database"`

このコマンド・ストリングはデータベースを再始動する時の有効なコマンドです。

コマンド・ライン:

`-postschedulecmd="/Volumes/La Pomme/Scripting/postsched.sh"`

コマンド・ライン:

`-postschedulecmd="'restart database'"`

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連概念

[295 ページの『クライアント戻りコード』](#)

バックアップ/アーカイブ・コマンド・ライン・インターフェースおよびスケジューラーは、クライアント操作が成功したか失敗したかを正確に反映する戻りコードを返して終了します。

関連資料

[DEFINE SCHEDULE コマンド](#)

Postsnapshotcmd

`postsnapshotcmd` オプションを使用すると、スナップショット・ベースのバックアップ操作中にバックアップ/アーカイブ・クライアントがスナップショットを開始した後で、オペレーティング・システム・シェル・コマンドまたはスクリプトを実行することができます。

AIX のみ: このオプションは、JFS2 スナップショット・ベース・ファイルのバックアップまたはアーカイブ、およびスナップショット・ベース・イメージ・バックアップにのみ適用可能です。スナップショット・ベース・ファイルのバックアップまたはアーカイブの場合、このオプションは **backup** コマンド、`include.fs` オプションと一緒に使用するか、あるいは `dsm.sys` ファイルの中で使用します。

Linux のみ: このオプションは、LVM がシステムにインストールされて構成され、スナップショット・ベース・イメージ・バックアップ操作を実行できるようになっている場合にのみ有効です。

AIX および Linux のみ: スナップショット・ベース・イメージ・バックアップの場合、このオプションは、**backup image** コマンド、`include.image` オプションと一緒に使用するか、あるいは `dsm.sys` ファイルの中で使用します。

`postsnapshotcmd` が操作の続行に失敗した場合であっても、該当する警告がログに記録されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX クライアント、および Linux x86_64 クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「イメージ・スナップショット」タブでも設定できます。

構文

➡ POSTSNAPshotcmd — — "*cmdstring*" ➡

パラメーター

"*cmdstring*"

処理するコマンドを指定します。

IBM Spectrum Protect サーバー管理者がクライアント・システムでオペレーティング・システム・コマンドを実行しないようするためには、`srvprepostsnapdisabled` オプションを使用します。

コマンド・ストリングに空白が入っている場合、そのコマンド・ストリングを引用符で囲んでください。

```
"resume database myDb"
```

コマンド・ストリング内に引用符がある場合は、次のようにコマンド・ストリング全体を単一引用符で囲んでください。

```
'resume database "myDb"'
```

例

オプション・ファイル:

```
postsnapshotcmd "any command"
```

このコマンド・ストリングは、アプリケーションを再始動する時の有効なコマンドです。

コマンド・ライン:

```
backup image -postsnapshotcmd="any command"
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

[447 ページの『include オプション』](#)

[560 ページの『Srvprepostscheddisabled』](#)

Preschedulecmd/Premschedulecmd

preschedulecmd オプションは、スケジュールを実行する前にクライアント・プログラムが処理すべきコマンドを指定します。

クライアント・プログラムは、コマンドが完了するまで待ってからスケジュールを開始します。待たせない場合は、premschedulecmd を指定します。

注：

1. preschedulecmd コマンドの正常終了は、スケジュールされた操作を実行するための前提条件と考えられます。preschedulecmd コマンドが戻りコード 0 で完了しない場合は、スケジュールされた操作および postschedulecmd と postnschedulecmd コマンドはいずれも実行されません。クライアントはスケジュールされたイベントが失敗し、戻りコードが 12 であると報告します。preschedulecmd コマンドにこの規則を使用させない場合は、コマンドを起動し、戻りコード 0 で終了するスクリプトまたはバッチ・ファイルを作成できます。その後、そのスクリプトまたはバッチ・ファイルを起動するように preschedulecmd を構成してください。premschedulecmd コマンドの戻りコードは追跡されず、スケジュールされたイベントの戻りコードには影響しません。
2. preschedulecmd オプション (および premschedulecmd オプション) は、サーバーでも定義できます。

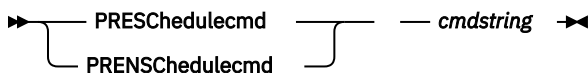
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「スケジュール・コマンド」ダイアログ・ボックスで設定できます。

構文



パラメーター

cmdstring

処理するコマンドを指定します。使用できる preschedulecmd オプションは 1 つだけです。このオプションを使用すると、スケジュールの前に実行するコマンドを入力することができます。

コマンド・ストリングに空白が入っている場合、そのコマンド・ストリングを引用符で囲んでください。コマンド・ストリング内に引用符がある場合は、コマンド・ストリング全体を単一引用符で囲んでください。

IBM Spectrum Protect サーバー管理者が postschedulecmd および preschedulecmd で使用しているコマンドが実行されないようにするには、cmdstring に空白またはヌル・ストリングを使用します。いずれかのオプションで空白またはヌル・ストリングを指定すると、管理者は両方のオプションでコマンドを使用できなくなります。

管理者が preschedulecmd オプションで空白またはヌル・ストリングを指定すると、ユーザーはスケジュール前のコマンドを実行できなくなります。

Mac OS X では、`preschedulecmd` スケジュール・コマンドが AppleScript の場合は、スクリプトを実行するために **osascript** コマンドを使用する必要があります。例えば、「Database Script」が AppleScript の場合は、次のコマンドを入力します。

```
preschedulecmd osascript "/Volumes/La Pomme/Scripting/  
Database Script"
```

例

オプション・ファイル:

```
preschedulecmd "<the quiesce command of your database product>  
database"
```

このコマンド・ストリングはデータベースを静止する時の有効なコマンドです。

コマンド・ライン:

```
-preschedulecmd="'quiesce database'"
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連概念

クライアント戻りコード

バックアップ/アーカイブ・コマンド・ライン・インターフェースおよびスケジューラーは、クライアント操作が成功したか失敗したかを正確に反映する戻りコードを返して終了します。

Preservelastaccessdate

`preservelastaccessdate` オプションを使用して、バックアップ操作またはアーカイブ操作により最終アクセス時刻が変更されるかどうかを指定します。

バックアップ操作またはアーカイブ操作により、ファイルの最終アクセス時刻が変更されることがあります。操作後に、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、最終アクセス時刻を操作前の値にリセットできます。最終アクセス時刻は、バックアップ/アーカイブ・クライアントによって修正せずに保持することができます。最終アクセス時刻をリセットする場合、バックアップまたはアーカイブされるファイルごとに、追加処理が必要になります。

オープン・ファイル・サポートを使用可能にしている場合、ファイルの最終アクセス日付は `preservelastaccessdate` の設定にかかわらず保管されます。オープン・ファイル・サポートが使用可能な場合は、`preservelastaccessdate` オプションを使用しないでください。

このオプションは、**incremental**、**selective**、または **archive** コマンドで使用します。

注:

1. このオプションが適用されるのはファイルのみです。ディレクトリーには適用されません。
2. 最終アクセス日付のリセットは、バックアップおよびアーカイブのパフォーマンスに影響します。
3. 最終アクセス日付のリセットは、ストレージ・リソース管理 (SRM) アプリケーションなどの 最終アクセス日付が正確であることを前提として動作する アプリケーションには関係する可能性があります。
4. IBM Spectrum Protect for Space Management クライアントに管理されないファイル・システム上、または非ルート・ユーザーがバックアップやアーカイブを行う場合は、`ctime` 属性はリセットされます。最終変更日時 (`ctime`) 属性は、バックアップまたはアーカイブ操作の日時にリセットされます。
5. `updatectime` オプションの方が、`preservelastaccessdate` オプションより優先されます。どちらのオプションも `yes` に設定されている場合、`preservelastaccessdate` オプションは無視されます。
6. IBM Spectrum Protect for Space Management クライアントに管理されないファイル・システム上では、`preservelastaccessdate yes` と `GPFS mmbbackup` コマンドは使用しないでください。`mmbbackup` コマンドと `preservelastaccessdate yes` は、バックアップ操作のたびにすべてのファイルを選択します。
7. 読み取り専用ファイルの最後のアクセス日付はリセットできません。`preservelastaccessdate` オプションは読み取り専用ファイルを無視し、その日付を変更しません。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「バックアップ」タブで設定できます。

構文



パラメーター

No

バックアップ操作またはアーカイブ操作は、最終アクセス日付を変更できます。この値がデフォルトです。

Yes

バックアップ操作またはアーカイブ操作は、最終アクセス日付を変更しません。

例

オプション・ファイル:

```
preservelastaccessdate yes
```

コマンド・ライン:

```
Incremental /proj/test/test_file -preservelastaccessdate=yes
```

関連情報

[mmbackup コマンド: IBM Spectrum Protect の要件](#)

[IBM Spectrum Scale Active File Management 用の IBM Spectrum Protect の構成](#)

[IBM Spectrum Scale mmbackup コマンドでの IBM Spectrum Protect の包含/除外オプション使用の考慮事項](#)

Preservepath

preservepath オプションは、ファイルを新しい場所にリストアまたはリトリートする場合に、ターゲット・ディレクトリー・パスの一部としてソース・パスをどの程度再作成するかを指定するために使用します。

-subdir=yes オプションを使用すると、リストアされるソースとして、ソース・ディレクトリーのサブツリー全体(最下位のソース・ディレクトリーの下のディレクトリーおよびファイル)が含まれます。必要なターゲット・ディレクトリーが存在しない場合は、作成されます。ターゲット・ファイルがソース・ファイルと同じ名前であれば、上書きされます。-replace=prompt オプションを使用すると、ファイルを上書きする前にクライアントにプロンプトを出させることができます。

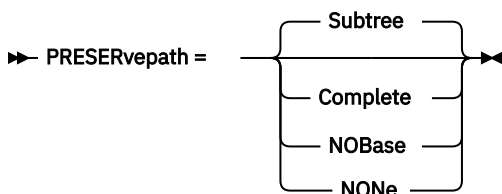
preservepath オプションは、次のコマンドで使用してください。

- **restore**
- **restore backupset**
- **restore group**
- **retrieve**

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

構文



パラメーター

Subtree

これを指定すると、最下位のソース・ディレクトリーが ターゲット・ディレクトリーのサブディレクトリーとして作成されます。ソース・ディレクトリーからのファイルは新しいサブディレクトリーに保管されます。これはデフォルトです。

Complete

ルートから始まるパス全体を、指定されたディレクトリーにリストアします。パス全体には、ファイル・スペース名を除くすべてのディレクトリーが含まれます。

NOBase

最下位、またはベースのディレクトリーなしで、ソース・ディレクトリーの内容を指定された宛先ディレクトリーにリストアします。

NONE

選択したソース・ファイルのすべてをターゲット・ディレクトリーにリストアします。ソース・ディレクトリーより上のソース・パスについては、ターゲットには再作成されません。

SUBDIR=yes を指定した場合には、クライアントは、ソース・ディレクトリー内のすべてのファイルを単一のターゲット・ディレクトリーにリストアします。

例

コマンド・ライン:

サーバー・ファイル・スペースに次のバックアップ・コピーが含まれると仮定します。

```
/fs/h1/m1/file.a  
/fs/h1/m1/file.b  
/fs/h1/m1/l1/file.x  
/fs/h1/m1/l1/file.y
```

このコマンド:

```
dsmc res /fs/h1/m1/ /u/ann/ -preser=complete
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/h1/m1/file.a  
/u/ann/h1/m1/file.b
```

このコマンド:

```
dsmc res /fs/h1/m1/ /u/ann/ -preser=nobase
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/file.a  
/u/ann/file.b
```

このコマンド:

```
dsmc res backupset /fs/h1/m1/ /u/ann/ -su=yes  
-preser=nobase -loc=file
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/file.a  
/u/ann/file.b  
/u/ann/file.x  
/u/ann/file.y
```

このコマンド:

```
dsmc res /fs/h1/m1/ /u/ann/ -preser=subtree
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/m1/file.a  
/u/ann/m1/file.b
```

このコマンド:

```
dsmc res /fs/h1/m1/ /u/ann/ -preser=none
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/file.a  
/u/ann/file.b
```

このコマンド:

```
dsmc res /fs/h1/m1/ /u/ann/ -su=yes -preser=complete
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/h1/m1/file.a  
/u/ann/h1/m1/file.b  
/u/ann/h1/m1/l1/file.x  
/u/ann/h1/m1/l1/file.y
```

このコマンド:

```
dsmc res /fs/h1/m1/ /u/ann/ -su=yes -preser=nobase
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/file.a  
/u/ann/file.b  
/u/ann/l1/file.x  
/u/ann/l1/file.y
```

このコマンド:

```
dsmc res /fs/h1/m1/ /u/ann/ -su=yes -preser=subtree
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/m1/file.a  
/u/ann/m1/file.b  
/u/ann/m1/l1/file.x  
/u/ann/m1/l1/file.y
```

このコマンド:

```
dsmc res /fs/h1/m1/ /u/ann/ -su=yes -preser=none
```

は、次のディレクトリーおよびファイルをリストアします。

```
/u/ann/file.a  
/u/ann/file.b  
/u/ann/file.x  
/u/ann/file.y
```

Presnapshotcmd

presnapshotcmd オプションを使用すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントがスナップショットを開始する前に、オペレーティング・システム・コマンドを実行することができます。

これによって、スナップショット・ベースのバックアップまたはアーカイブ中に、クライアントがスナップショットを開始する前にアプリケーションを静止させることができます。

AIX のみ: このオプションは、JFS2 スナップショット・ベース・ファイルのバックアップまたはアーカイブ、およびスナップショット・ベース・イメージ・バックアップにのみ適用可能です。スナップショット・ベース・ファイルのバックアップまたはアーカイブの場合、このオプションは **backup** コマンド、**include.fs** オプションと一緒に使用するか、あるいは **dsm.sys** ファイルの中で使用します。

Linux のみ: このオプションは、LVM がシステムにインストールされて構成され、スナップショット・ベース・イメージ・バックアップを実行できるようになっている場合にのみ有効です。

AIX および Linux のみ: スナップショット・ベース・イメージ・バックアップの場合、このオプションは、**backup image** コマンド、**include.image** オプションと一緒に使用するか、あるいは **dsm.sys** ファイルの中で使用します。

presnapshotcmd に失敗した場合には、アプリケーションは一貫性のある状態ではないと見なされ、クライアントは操作を停止して、該当するエラー・メッセージを表示します。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX JFS2 クライアント、および Linux x86_64 クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (**dsm.sys**) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「イメージ・スナップショット」タブでも設定できます。

構文

➡ PRESNAPshotcmd — — "cmdstring" ➡

パラメーター

"cmdstring"

処理するコマンドを指定します。

IBM Spectrum Protect サーバー管理者がクライアント・システムでオペレーティング・システム・コマンドを実行しないようするためには、**srvprepostsnapdisabled** オプションを使用します。

コマンド・ストリングにブランクが入っている場合、そのコマンド・ストリングを引用符で囲んでください。

```
"quiesce database myDb"
```

コマンド・ストリング内に引用符がある場合は、次のようにコマンド・ストリング全体を単一引用符で囲んでください。


```
'resume database "myDb"'
```

例

オプション・ファイル:

```
presnapshotcmd "any shell command or script"
```

コマンド・ライン:

```
backup image -presnapshotcmd="any shell command or script"
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

[447 ページの『include オプション』](#)

[560 ページの『Srvprepostscheddisabled』](#)

Queryschedperiod

queryschedperiod オプションは、スケジュールされた作業のためにサーバーに接続するのを試みてから次に試みるまでクライアント・スケジューラーを待たせる時間を時間単位で指定します。

このオプションは、schedmode オプションを polling に設定した時のみ適用されます。このオプションは、スケジューラーの実行中にのみ使用されます。

管理者はこのオプションも設定できます。管理者がこのオプションに値を指定している場合は、クライアント・ノードが正常にサーバーに接続した後で、その値が、クライアント・オプション・ファイルで設定された値を指定変更します。

ヒント: queryschedperiod オプションによって設定された期間が、サーバー管理者が設定したスケジュールのランダム化時間枠より大幅に短い場合、スケジュールの開始が延期されます。そのような延期を回避するには、以下の値を調整します。

- クライアント・アクション期間 (SET CLIENTACTDURATION サーバー・コマンドを使用)
- スケジュールされた開始時刻のランダム化 (SET RANDOMIZE サーバー・コマンドを使用)
- queryschedperiod オプションの値

クライアント・アクション期間およびスケジュールのランダム化時間枠の設定について考える場合、以下の例は、照会スケジュール期間の計算方法を示しています。

例 1:

```
Client Action Duration: 1 Days
Schedule Randomization Percentage: 25%
Query Schedule Period: 6 hours

Client Action Duration of 1 day = 24 hours
24 hours x .25 = 6 hours
Use a query schedule period of 6 hours or higher.
```

例 2:

```
Client Action Duration: 3 Days
Schedule Randomization Percentage: 10%
Query Schedule Period: 8 hours

Client Action Duration of 3 days = 72 hours
72 x .10 = 7.2
Use a query schedule period of 8 hours or higher.
```

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

►► QUERYSChedperiod — — hours ►►

パラメーター

hours

スケジュールされた作業について、クライアント・スケジューラーがサーバーに接続しようと試みてから次に試みるまでの待ち時間を時間単位で指定します。値の範囲は 1 から 9999 で、デフォルトは 4 です。

例

オプション・ファイル:
querysch 6

Querysummary

querysummary オプションは、**query backup** または **query archive** コマンドで戻されたファイル、ディレクトリー、およびオブジェクトに関する統計情報を提供します。

querysummary オプションでは、次の統計情報が提供されます。

- query backup または query archive コマンドで戻されたファイルおよびディレクトリーの合計数量。
- query backup または query archive コマンドで戻されたデータ・オブジェクトの合計数量。
- query backup または query archive コマンドで戻されたオブジェクトをリストアするのに必要なクラシック・リストア・メモリー使用量の推定値。
- query コマンドで戻されたオブジェクトがある固有のサーバー・ボリュームの合計数。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

►► QUERYSUMMARY ►►

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc q ba '/usr/fs1/*' -sub=yes -querysummary
```

```
[root@kaveri:/home/cpark] $ dsmc q ba '/kalafs1/*' -sub=yes -querysummary
IBM Spectrum Protect
Command Line Backup-Archive Client Interface
Client Version 8, Release 1, Level 0.0
Client date/time: 12/09/2016 12:05:35
(c) Copyright by IBM Corporation and other(s) 1990, 2016. All Rights Reserved.
```

```
Node Name: KAVERI
Session established with server TEMPLAR: AIX-RS/6000
Server Version 8, Release 1, Level 0.0
Server date/time: 12/09/2016 12:05:35 Last access: 12/07/2016 07:48:59
```

Size	Backup Date	Mgmt Class	A/I File
4,096 B	08/07/08 12:07:30	BASVT2	A /kalafs1/
256 B	08/07/08 12:07:30	BASVT2	A /kalafs1/dir1
10,485,760 B	08/07/08 12:07:30	DEFAULT	A /kalafs1/info1
5,242,880 B	08/07/08 12:07:30	DEFAULT	A /kalafs1/info2
1,044 B	08/07/08 12:07:30	DEFAULT	A /kalafs1/dir1/subfile1
1,044 B	08/07/08 12:07:30	DEFAULT	A /kalafs1/dir1/subfile2

Summary Statistics

Total Files	Total Dirs	Avg. File Size	Total Data	Memory Est.
4	2	3.75 MB	15.00 MB	1.07 KB

Estimated Number of Volumes: 2

```
[root@kaveri:/home/cpark] $
```

Quiet

quiet オプションは、処理中に画面に表示されるメッセージの数を制限します。

例えば、**incremental**、**selective**、または **archive** コマンドを実行した場合には、バックアップされる各ファイルに関する情報が表示されることがあります。quiet オプションは、この情報を表示させたくない場合に使用します。

quiet オプションを使用すると、エラーおよび処理情報が画面に表示され、メッセージがログ・ファイルに書き込まれます。quiet を指定しないと、デフォルト・オプションである verbose が使用されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーでは、また、quiet オプションを定義し、クライアントの設定を指定変更することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「コマンド・ライン」タブの「プロセス情報を画面に表示しない」チェック・ボックスで設定できます。

構文

➡ QUIET ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

オプション・ファイル:
quiet

コマンド・ライン:
-quiet

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Quotesareliteral

quotesareliteral オプションは、単一引用符 (') または二重引用符 (") が **filelist** オプションのファイル・リスト指定に含まれている場合に、それらを文字どおりに解釈するかどうかを指定します。

通常、クライアントで、単一引用符または二重引用符は、スペース文字が含まれているファイル指定の区切り文字として使用されます。IBM Spectrum Scale (旧称 GPFS) ファイル・システムなどの一部のファイル・システムでは、ファイルとディレクトリの名前に単一引用符および二重引用符の使用が許可されています。

filelist オプションにファイル指定が含まれており、そのファイル指定に単一引用符 (') または二重引用符 (") が含まれている場合は、誤った解釈によるエラーが発生しないように **quotesareliteral yes** を設定してください。quotesareliteral が **yes** に設定されていると、**filelist** オプションのファイル・リスト指定に含まれている引用符が文字どおりに (区切り文字としてではなく引用符として) 解釈されます。

このオプションは、コマンド・パラメーターとして **filelist** オプションを指定できるすべてのコマンドに適用されます。

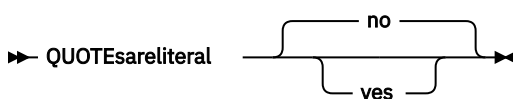
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされているすべての UNIX プラットフォームおよび Linux プラットフォームで有効です。このオプションは、パラメーターとしてファイル・リスト指定が有効なすべてのコマンドに適用されます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文



パラメーター

no

filelist オプションに含まれているファイル・リスト指定内の単一引用符 (') および二重引用符 (") を区切り文字として解釈することを指定します。デフォルト設定は **No** です。

yes

filelist オプションに含まれているファイル・リスト指定内の単一引用符 (') および二重引用符 (") を区切り文字としてではなく文字どおりに解釈することを指定します。ファイル名またはディレクトリ名に引用符を使用できるファイル・システムからファイルをバックアップする場合は、この値を指定します。

例

オプション・ファイル:

QUOTESARELITERAL YES

コマンド・ライン:

ファイル・システムでパスに引用符を使用できるものとします。以下の例に示すファイル・リスト指定内のファイルは、QUOTESARELITERAL を YES に設定すると、正常に処理することができます。

実行されるコマンドは、`dsmc sel -filelist=/home/user1/important_files` で、`important_files.txt` には処理するファイルのリストが含まれているものとします。

```
/home/user1/myfiles/"file"1000  
/home/user1/myfiles/'file'  
/home/user1/myfiles/file'ABC  
/home/user1/myfiles/ABC"file"
```

関連情報

`filelist` オプションについては、[429 ページの『Filelist』](#)を参照してください。

ファイル指定の構文については、[150 ページの『ブランク・スペースまたは引用符を含む入力ストリングの指定』](#)を参照してください。

[642 ページの『Wildcardsareliteral』](#)

Removeoperandlimit

`removeoperandlimit` オプションは、クライアントがオペランド数 20 の制限を除去することを指定します。

incremental、**selective**、**archive**、または **backup image** コマンドで `removeoperandlimit` オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。

`removeoperandlimit` オプションは、多くのオペランドを指定してコマンド・ライン・クライアントを呼び出すことのできるスクリプトを生成する場合に役に立つことがあります。例えば、バックアップするファイルを探しながらディレクトリー・ツリーを事前走査することができます。適格なファイルが見つかり、そのたびにそのファイルが **selective** コマンドのオペランド・リストに追加されます。この **selective** コマンドは、後で制御スクリプトによって実行依頼されます。この場合、`removeoperandlimit` オプションを指定すると、オペランド数 20 の制限は除去されます。

注:

1. `removeoperandlimit` オプションは、**incremental**、**selective**、**archive**、または **backup image** コマンドの直後、いずれのファイル指定よりも前に配置する必要があります。
2. このオプションは、値を取りません。このオプションをコマンドで指定すると、オペランド数 20 の制限は除去されます。
3. このオプションはシェルにワイルドカードを展開させる場合のパフォーマンスに悪影響を及ぼすので、`removeoperandlimit` オプションは、ワイルドカードが使用されないバックアップ操作またはアーカイブ操作で使用されます。
4. `removeoperandlimit` オプションは、バッチ・モードの **incremental**、**selective**、**archive**、および **backup image** コマンドでのみ有効です。このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) または `dsm.sys` ファイルでは無効です。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux クライアントで有効です。

構文

➡ REMOVEOPerandlimit ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:
-removeoperandlimit

Replace

replace オプションは、ファイルのリストアまたはリトリブ時にワークステーション上の既存のファイルを上書きするか、選択を求めるプロンプトを出力するかを指定します。

重要: replace オプションは、ディレクトリー・オブジェクトのリカバリーに影響を与えません。ディレクトリー・オブジェクトは、replace=no を指定している場合でも、常にリカバリーされます。既存のディレクトリーを上書きしないようにするには、filesonly オプションを使用してください。

このオプションは、以下のコマンドで 사용할 ことができます。

- restore
- restore backupset
- restore group
- retrieve

注: スケジュールされた操作中に replace プロンプトが出ることはありません。replace オプションを prompt に設定した場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントはスケジュールされた 操作中にプロンプトを出さずにファイルをスキップします。

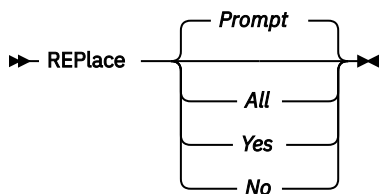
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル(dsm.opt)に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「リストア」タブの、「既存のファイルに対するアクション」セクションで設定できます。

構文



パラメーター

Prompt

スケジュールされていない操作の場合、既存のファイルを上書きするかどうか指定します。スケジュールされている操作の場合、既存のファイルは上書きされず、プロンプトは表示されません。これはデフォルトです。

All

読み取り専用ファイルも含めて、すべての既存のファイルを上書きします。ファイルのアクセスが否認されている場合、ファイルをスキップするか上書きするかのプロンプトが出されます。このプロンプトに応答するまで一切処置が行われません。

Yes

読み取り専用ファイル以外の既存のファイルを上書きします。スケジュールされていない操作の場合、既存の読み取り専用ファイルを上書きするかどうか指定します。スケジュールされている操作の場合、既存の読み取り専用ファイルは上書きされず、プロンプトは表示されません。ファイルのアクセスが否認されている場合、ファイルをスキップします。

No

既存のファイルを上書きしません。プロンプトは表示されません。

例

オプション・ファイル:

replace all

コマンド・ライン:

-replace=no

このオプションは、初期コマンド・ラインおよび対話モードでのみ有効です。このオプションを対話モードで使用した場合には、このオプションが指定されたコマンドにのみ影響が及びます。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値に戻ります。この値は、初期コマンド・ラインまたはサーバーが強制するオプションによって指定変更されない限り、dsm.opt ファイルの値です。

Replserverguid

replserverguid オプションは、フェイルオーバー時にクライアントが 2 次サーバーに接続する際に使用されるグローバル固有 ID (GUID) を指定します。GUID は、2 次サーバーが予期されたサーバーであることを確認するための検証に使用されます。

複製 GUID は、サーバーのマシン GUID とは異なります。これは、複製を行うサーバーに対して一度生成されると、変更されることはありません。

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルの **replservername** スタンザ内に指定する必要があります。**replservername** スタンザには、2 次サーバーに関する接続情報が含まれています。

このオプションは、クライアント・ノードについて IBM Spectrum Protect サーバー管理者によって設定されます。このオプションは、通常の (フェイルオーバーではない) ログオン・プロセス時にクライアントに送信され、クライアント・オプション・ファイルに保存されます。

このオプションを通常の操作時に編集しないでください。

このオプションは、以下のような状況においてのみ編集します。

- 1 次サーバーがオフラインで、2 次サーバーの情報がオプション・ファイルにない。
- 2 次サーバーの情報が、古い情報または誤った情報である。

編集した値は、次に 1 次サーバーにログインしたときに、すべて削除または更新されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、replservername スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。

構文

➡ replserverguid — serverguid ➡

パラメーター

serverguid

フェイルオーバー時に使用される 2 次サーバーの GUID を指定します。

例

オプション・ファイル:

REPLSERVERGUID 91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae. 34.08.00.00.00.00.02

コマンド・ライン:

適用しません。

オプション・ファイル:

以下の例は、dsm.sys ファイル内の 3 つの異なるサーバーに対するオプションの指定方法、および 2 次サーバーの参照方法を示しています。

複数の 2 次サーバーに関する接続情報は、スタンザの中で示されます。各スタンザは **replservername** オプション、および 2 次サーバーの名前によって識別されます。

servername スタンザには、**replservername** スタンザで指定されている 2 次サーバーを指す **myreplicationserver** オプションが含まれていなければなりません。

1 つの **servername** スタンザにつき 1 つの 2 次サーバーのみを指定できます。

```
REPLSERVERNAME    TargetReplicationServer1
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer1
REPLTCPPOrt       1505
REPLSSLPORT       1506
REPLSERVERGUID    91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00

REPLSERVERNAME    TargetReplicationServer2
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer2
REPLTCPPOrt       1505
REPLSSLPORT       1506
REPLSERVERGUID    91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.02

SErvername        server_a
COMMMethod        TCPip
TCPPOrt           1500
TCPSErveraddress  server_hostname1.example.com
PASSWORDAccess    prompt
MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer1

SErvername        server_b
COMMMethod        TCPip
TCPPOrt           1500
TCPSErveraddress  server_hostname2.example.com
PASSWORDAccess    generate
INCLExcl          /adm/tsm/archive.excl
MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer2

SErvername        server_c
COMMMethod        TCPip
TCPPOrt           1500
TCPSErveraddress  server_hostname3.example.com
PASSWORDAccess    generate
MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer1
```

関連概念

[自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

[自動フェイルオーバー用のクライアントの構成](#)

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Replservername

replservername オプションは、フェイルオーバー時にクライアントが接続する 2 次サーバーの名前を指定します。

replservername オプションは、クライアント・オプション・ファイル内で、2 次サーバーに関する接続情報が含まれているスタンザを開始します。

このオプションは、クライアント・ノードについて IBM Spectrum Protect サーバー管理者によって設定されます。このオプションは、通常の (フェイルオーバーではない) ログオン・プロセス時にクライアントに送信され、クライアント・オプション・ファイルに保存されます。

このオプションを通常の操作時に編集しないでください。

このオプションは、以下のような状況においてのみ編集します。

- 1 次サーバーがオフラインで、2 次サーバーの情報がオプション・ファイルにない。
- 2 次サーバーの情報が、古い情報または誤った情報である。

編集した値は、次に 1 次サーバーにログインしたときに、すべて削除または更新されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション `dsm.sys` 内に入れます。

構文

➡ replservername — repl_servername ➡

パラメーター

repl_servername

フェイルオーバー時に使用される 2 次サーバーの名前を指定します。通常、この値は 2 次サーバーの名前です。そのサーバーのホスト名ではありません。

例

オプション・ファイル:

```
REPLSERVERName TargetReplicationServer1
```

コマンド・ライン:

適用しません。

オプション・ファイル:

以下の例は、`dsm.sys` ファイル内の 3 つの異なるサーバーに対するオプションの指定方法、および 2 次サーバーの参照方法を示しています。

複数の 2 次サーバーに関する接続情報は、スタンザの中で示されます。各スタンザは **replservername** オプション、および 2 次サーバーの名前によって識別されます。

servername スタンザには、**replservername** スタンザで指定されている 2 次サーバーを指す **myreplicationserver** オプションが含まれていなければなりません。

1 つの **servername** スタンザにつき 1 つの 2 次サーバーのみを指定できます。

```
REPLSERVERNAME TargetReplicationServer1
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer1
REPLTCPPOINT 1505
```

```

REPLSSLPORT          1506
REPLSERVERGUID       91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00

REPLSERVERNAME       TargetReplicationServer2
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer2
REPLTCPSPORT         1505
REPLSSLPORT          1506
REPLSERVERGUID       91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.02

Sservername          server_a
COMMMethod            TCPip
TCPport              1500
TCPserveraddress      server_hostname1.example.com
PASSWORDAccess        prompt
MYREPLICATIONServer   TargetReplicationServer1

Sservername          server_b
COMMMethod            TCPip
TCPport              1500
TCPserveraddress      server_hostname2.example.com
PASSWORDAccess        generate
INCLExcl              /adm/tsm/archive.excl
MYREPLICATIONServer   TargetReplicationServer2

Sservername          server_c
COMMMethod            TCPip
TCPport              1500
TCPserveraddress      server_hostname3.example.com
PASSWORDAccess        generate
MYREPLICATIONServer   TargetReplicationServer1

```

関連概念

自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

自動フェイルオーバー用のクライアントの構成

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Replsslport

replsslport オプションは、SSL に対応した 2 次サーバー上の TCP/IP ポートを指定します。

replsslport オプションは、フェイルオーバー時にクライアントが 2 次サーバーに接続する際に使用されます。IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと接続している場合、このオプションは非推奨です。

replsslport オプションは、2 次サーバーが SSL 用に構成されている場合にのみ、1 次サーバーによってクライアントに送信されます。

このオプションは、クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーとクライアントの間のセキュア通信に SSL を使用するように構成されている場合にのみ適用可能です。クライアントが SSL を使用するように構成されていない場合は、repltcpport オプションで指定されているポートが使用されます。クライアントが SSL を使用するかどうかは、SSL クライアント・オプションを検査することによって判別できます。

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルの **replservername** スタンザ内に指定する必要があります。**replservername** スタンザには、2 次サーバーに関する接続情報が含まれています。

このオプションは、通常の (フェイルオーバーではない) ログオン・プロセス時にクライアントに送信され、クライアント・オプション・ファイルに保存されます。

このオプションを通常の操作時に編集しないでください。

このオプションは、以下のような状況においてのみ編集します。

- 1 次サーバーがオフラインで、2 次サーバーの情報がオプション・ファイルにない。

- 2 次サーバーの情報が、古い情報または誤った情報である。

編集した値は、次に 1 次サーバーにログインしたときに、すべて削除または更新されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、`replservername` スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。

構文

➡ `replsslport` — `port_address` ➡

パラメーター

`port_address`

2 次サーバーと通信するために使用される、SSL に対応した TCP/IP ポート・アドレスを指定します。

例

オプション・ファイル:

`REPLSSLPORT 1506`

コマンド・ライン:

適用しません。

オプション・ファイル:

以下の例は、`dsm.sys` ファイル内の 3 つの異なるサーバーに対するオプションの指定方法、および 2 次サーバーの参照方法を示しています。

複数の 2 次サーバーに関する接続情報は、スタンザの中で示されます。各スタンザは **replservername** オプション、および 2 次サーバーの名前によって識別されます。

servername スタンザには、**replservername** スタンザで指定されている 2 次サーバーを指す **myreplicationserver** オプションが含まれていなければなりません。

1 つの **servername** スタンザにつき 1 つの 2 次サーバーのみを指定できます。

```
REPLSERVERNAME TargetReplicationServer1
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer1
REPLTCPSPORT 1505
REPLSSLPORT 1506
REPLSERVERGUID 91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00.00

REPLSERVERNAME TargetReplicationServer2
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer2
REPLTCPSPORT 1505
REPLSSLPORT 1506
REPLSERVERGUID 91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00.02

Servername server_a
COMMethod TCPip
TCPPort 1500
TCPServeraddress server_hostname1.example.com
PASSWORDAccess prompt
MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer1

Servername server_b
COMMethod TCPip
TCPPort 1500
TCPServeraddress server_hostname2.example.com
PASSWORDAccess generate
INCLExcl /adm/tsm/archive.excl
MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer2

Servername server_c
COMMethod TCPip
```

TCPPort	1500
TCPServeraddress	server_hostname3.example.com
PASSWORDAccess	generate
MYREPLICATIONServer	TargetReplicationServer1

関連概念

自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

自動フェイルオーバー用のクライアントの構成

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Repltcpport

repltcpport オプションは、クライアントがフェイルオーバー時に 2 次サーバーに接続する際に使用する 2 次サーバー上の TCP/IP ポートを指定します。

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルの **replservername** スタンザ内に指定する必要があります。**replservername** スタンザには、2 次サーバーに関する接続情報が含まれています。

このオプションは、クライアント・ノードについて IBM Spectrum Protect サーバー管理者によって設定されます。このオプションは、通常の (フェイルオーバーではない) ログオン・プロセス時にクライアントに送信され、クライアント・オプション・ファイルに保存されます。

このオプションを通常の操作時に編集しないでください。

このオプションは、以下のような状況においてのみ編集します。

- 1 次サーバーがオフラインで、2 次サーバーの情報がオプション・ファイルにない。
- 2 次サーバーの情報が、古い情報または誤った情報である。

編集した値は、次に 1 次サーバーにログインしたときに、すべて削除または更新されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、replservername スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。

構文

```
➡ repltcpport — port_address ➡
```

パラメーター

port_address

2 次サーバーと通信するために使用する TCP/IP ポート・アドレスを指定します。

例

オプション・ファイル:
REPLTCPport 1500

コマンド・ライン:
適用しません。

オプション・ファイル:

以下の例は、dsm.sys ファイル内の 3 つの異なるサーバーに対するオプションの指定方法、および 2 次サーバーの参照方法を示しています。

複数の 2 次サーバーに関する接続情報は、スタンザの中で示されます。各スタンザは **replservername** オプション、および 2 次サーバーの名前によって識別されます。

servername スタンザには、**replservername** スタンザで指定されている 2 次サーバーを指す **myreplicationserver** オプションが含まれていなければなりません。

1 つの **servername** スタンザにつき 1 つの 2 次サーバーのみを指定できます。

```
REPLSERVERNAME    TargetReplicationServer1
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer1
REPLTCPPOrt       1505
REPLSSLPORT       1506
REPLSERVERGUID    91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00

REPLSERVERNAME    TargetReplicationServer2
REPLTCPSERVERADDRESS TargetReplicationServer2
REPLTCPPOrt       1505
REPLSSLPORT       1506
REPLSERVERGUID    91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.02

SErvername        server_a
COMMMMethod       TCPip
TCPPOrt           1500
TCPSErveraddress  server_hostname1.example.com
PASSWORDAccess    prompt
MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer1

SErvername        server_b
COMMMMethod       TCPip
TCPPOrt           1500
TCPSErveraddress  server_hostname2.example.com
PASSWORDAccess    generate
INCLExcl          /adm/tsm/archive.excl
MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer2

SErvername        server_c
COMMMMethod       TCPip
TCPPOrt           1500
TCPSErveraddress  server_hostname3.example.com
PASSWORDAccess    generate
MYREPLICATIONServer TargetReplicationServer1
```

関連概念

[自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

[自動フェイルオーバー用のクライアントの構成](#)

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Repltcpsrveraddress

repltcpsrveraddress オプションは、クライアントがフェイルオーバー時に 2 次サーバーに接続する際に使用する 2 次サーバーの TCP/IP アドレスを指定します。

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルの **replservername** スタンザ内に指定する必要があります。**replservername** スタンザには、2 次サーバーに関する接続情報が含まれています。

このオプションは、クライアント・ノードについて IBM Spectrum Protect サーバー管理者によって設定されます。このオプションは、通常の (フェイルオーバーではない) ログオン・プロセス時にクライアントに送信され、クライアント・オプション・ファイルに保存されます。

このオプションを通常の操作時に編集しないでください。

このオプションは、以下のような状況においてのみ編集します。

- 1 次サーバーがオフラインで、2 次サーバーの情報がオプション・ファイルにない。
- 2 次サーバーの情報が、古い情報または誤った情報である。

編集した値は、次に 1 次サーバーにログインしたときに、すべて削除または更新されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、replservername スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。

構文

➡ REPLTCPServeraddress — *server_address* ➡

パラメーター

server_address

サーバーの TCP/IP アドレス (長さが 1 から 64 文字) を指定します。TCP/IP ドメイン名または数値の IP アドレスを指定します。数値の IP アドレスは TCP/IP v4 アドレスまたは TCP/IP v6 アドレスのいずれかです。commethod V6Tcpip オプションを指定した場合は、IPv6 アドレスのみを使用できます。

例

オプション・ファイル:

```
REPLTCPServeraddress dsmchost.example.com
```

コマンド・ライン:

適用しません。

オプション・ファイル:

以下の例は、dsm.sys ファイル内の 3 つの異なるサーバーに対するオプションの指定方法、および 2 次サーバーの参照方法を示しています。

複数の 2 次サーバーに関する接続情報は、スタンザの中で示されます。各スタンザは **replservername** オプション、および 2 次サーバーの名前によって識別されます。

servername スタンザには、**replservername** スタンザで指定されている 2 次サーバーを指す **myreplicationserver** オプションが含まれていなければなりません。

1 つの **servername** スタンザにつき 1 つの 2 次サーバーのみを指定できます。

```
REPLSERVERNAME TargetReplicationServer1
REPLTCPSEVERADDRESS TargetReplicationServer1
REPLTCPPOINT 1505
REPLSSLPORT 1506
REPLSERVERGUID 91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00.00

REPLSERVERNAME TargetReplicationServer2
REPLTCPSEVERADDRESS TargetReplicationServer2
REPLTCPPOINT 1505
REPLSSLPORT 1506
REPLSERVERGUID 91.0f.ef.90.5c.cc.11.e1.ae.34.08.00.00.00.00.02

SErvername server_a
COMMethod TCPip
TCPPOINT 1500
TCPSEVERADDRESS server_hostname1.example.com
PASSWORDACCESS prompt
MYREPLICATIONSERVER TargetReplicationServer1

SErvername server_b
```


COMMMethod	TCPip
TCPPort	1500
TCPServeraddress	server_hostname2.example.com
PASSWORDAccess	generate
INCLExcl	/adm/tsm/archive.excl
MYREPLICATIONServer	TargetReplicationServer2
Servername	server_c
COMMMethod	TCPip
TCPPort	1500
TCPServeraddress	server_hostname3.example.com
PASSWORDAccess	generate
MYREPLICATIONServer	TargetReplicationServer1

関連概念

自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

自動フェイルオーバー用のクライアントの構成

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Resourceutilization

オプション・ファイルの `resourceutilization` オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーおよびクライアントが処理中に使用できるリソースのレベルを調整するために使用します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブの「リソース使用率」フィールドで設定できます。

構文

➡ RESOURceutilization — — *number* ➡

パラメーター

number

処理中に IBM Spectrum Protect サーバーおよびクライアントが使用できるリソースのレベルを指定します。指定できる値の範囲は 1 から 100 です。デフォルト値は 2 です。

例

オプション・ファイル:

`resourceutilization 7`

コマンド・ライン:

`-resourceutilization=7`

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

バックアップおよびアーカイブ・セッションの規制

バックアップまたはアーカイブが要求されると、クライアントは、サーバーへの複数のセッションを使用することができます。

デフォルトは、1つをサーバーの照会に、もう1つをファイル・データの送信に、最大2つのセッションを使用することです。 **resourceutilization** オプションを1に設定した場合、クライアントが使用できるサーバー・セッションは1つのみにになります。

クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーに接続されている場合、デフォルトのセッション数より多くのセッションを使用することができます。例えば、**resourceutilization 10** では、サーバーとの最高8つまでのセッションが許可されます。サーバーの照会およびファイル・データの送信に複数セッションを使用できます。

複数のファイル指定をバックアップまたはアーカイブ・コマンドで使用する場合は、複数の照会セッションを使用します。例えば、次のコマンドを入力して **resourceutilization 5** と指定すると、クライアントは2番目のセッションを開始してファイル・スペース B 上でファイルを照会する場合があります。

```
inc /Volumes/filespaceA /Volumes/filespaceB
```

2番目のセッションが開始されるかどうかは、クライアントがファイル・スペース A 上のバックアップされたファイルについてサーバーを照会するのに要する時間によって決まります。また、クライアントは、ファイル・システムからデータを読み取って、複数セッションでサーバーに送信しようとする場合があります。

注：バックアップ操作中に、複数のファイル指定を入力すると、あるファイル指定のファイルが複数のテープに保管され、別のファイル指定のファイルと混在することがあります。これにより、リストアのパフォーマンスが低下してしまう可能性があります。 **collocatebyfilespec** オプションを **yes** に設定すると、ファイル指定ごとにクライアントが1つのサーバー・セッションに限定されるため、ファイルが複数のファイル指定に分散することがなくなります。したがって、データをテープに保管する場合は、各ファイル指定のファイルが1つのテープにまとめて保管されます (容量が大きいため別々のテープが必要になる場合を除く)。

関連資料

359 ページの『[Collocatebyfilespec](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアントが1つのファイル指定から生成されたオブジェクトを送信する場合に、1つのサーバー・セッションのみを使用するかどうかを指定するには、**collocatebyfilespec** オプションを使用します。

リストア・セッションの規制

リストアを要求したときのデフォルトは、1つのセッションを最大限使用することです。

追加のリストア・セッションは、以下を基にします。

- **resourceutilization** 値
- 要求データが保管されているテープの数
- 使用可能なテープ装置の数
- ノードに対して許可されているマウント・ポイントの最大数

注：

1. すべてのファイルがディスクにある場合は、1つのセッションのみが使用されます。純粋なディスク・ストレージ・プールのリストアの場合、マルチセッションにはなりません。ただし、ファイルが4つのテープに存在し、その他のファイルがディスクに存在する場合にリストアを実行すると、リストア中に最大5つのセッションが使用されます。
2. IBM Spectrum Protect サーバーは、**MAXNUMMP** パラメーターを使用して、ノードがサーバーで使用できるマウント・ポイントの最大数を設定できます。 **resourceutilization** オプションの値がノードに対するサーバーの **MAXNUMMP** 値を超えている場合は、バックアップが「不明なシステム・エラー」メッセージを出力して失敗する場合があります。

3. 1つの **restore** コマンドから、およびサーバー上の 1つのボリュームから (ただし、そのボリュームが装置クラスの FILE である場合) マルチセッション・リストアを行うことができます。

例えば、リストアしたいデータが 5 つの異なるテープ・ボリューム上にあり、ノードのマウント・ポイントの最大数は 5 であって、**resourceutilization** が 3 に設定されている場合には、リストアには 3 つのセッションが使用されます。**resourceutilization** の設定を 5 に増やした場合には、リストアに 5 つのセッションが使用されます。許可されているリストア・セッション数と **resourceutilization** 設定の間には 1 対 1 の関係があります。複数のリストア・セッションは、照会リストア操作がない場合にのみ許可されます。

複数クライアント・セッションの考慮事項

ここでは、複数のクライアント・セッションを処理する場合に考慮する項目をリストします。

複数のセッションのスループットには、次の要素が影響することがあります。

- 複数のクライアント・セッションを処理できるサーバーの機能。バックアップのスループットを向上させる、十分なメモリー、複数のストレージ・ボリューム、およびプロセッサ・サイクルがありますか？
- 複数のセッションを駆動できるクライアントの機能 (十分なプロセッサ・サイクル、メモリーなど)
- クライアントのストレージ・サブシステムの構成。ソフトウェア・ストライピングまたは RAID-5 を使用して複数のディスクにまたがりストライプされるファイル・システムでは、ランダム読み取り要求の増加を単一ドライブ・ファイル・システムより良好に処理することができます。さらに、単一のドライブ・ファイル・システムで多くのランダム読み取り要求を並行して処理しようとする場合は、パフォーマンスの改善が見られない可能性があります。
- 増加する通信量を十分にサポートできるネットワークの帯域幅。

複数のセッションを実行するに当たって潜在的に望ましくない面として次のようなものがあります。

- クライアントが複数の会計レコードを作成することがある。
- サーバーが十分な数の並行セッションを開始しない可能性がある。そうならないようにするためには、サーバーの **maxsessions** パラメーターを検討して、場合によってはこれを変更しなければならないことがあります。
- **query node** コマンドがクライアントの活動を要約しないことがある。
- ハード・リンクではなくファイルがリストアされる可能性がある。

以下の条件がすべて真である場合に、ハード・リンクの代わりにファイルがリストアされる可能性があります。

- ファイル・システム全体をリストアする。
- リストア操作時に **resourceutilization** オプションの値が 1 より大きい。
- ファイル・システムのバックアップ時に、ファイル・システムにハード・リンクが含まれていた。

セッション数が増加すると、ハード・リンクの代わりにリンク済みファイルをリストアする機会が増加します。ファイル・システムのバックアップ時にハード・リンクが含まれていたファイル・システムをリストアする場合、**resourceutilization=1** を設定して、確実にハード・リンクがリストアされるようにします。

Retryperiod

retryperiod オプションは、スケジュールされたコマンドが失敗した時、そのコマンドの処理を試みてから次に試みるまで、あるいは結果をサーバーに報告する試みに失敗してから次の試みまでクライアント・スケジューラーを待たせる時間を分単位で指定します。このオプションは、スケジューラーの実行中にのみ使用してください。

管理者はこのオプションも設定できます。管理者がこのオプションに値を指定した場合には、クライアント・ノードが正常にサーバーに接続した後で、その値がクライアント・システム・オプション・ファイルの値を指定変更します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「再試行時間間隔」フィールドで設定できます。

構文

➡ RETRYPeriod — — minutes ➡

パラメーター

minutes

サーバーに接続することを試みてから次の試みまで、あるいはスケジュールされたコマンドが失敗した時そのコマンドの処理を試みてから次に試みるまでクライアント・スケジューラーを待たせる時間を分単位で指定します。値の範囲は 1 から 9999 で、デフォルトは 20 です。

例

オプション・ファイル:

retryp 10

コマンド・ライン:

-retryperiod=10

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Revokeremoteaccess

revokeremoteaccess オプションは、クライアント・アクセス特権を持った管理者が、Web クライアントを実行しているクライアント・ワークステーションにアクセスすることを制限します。

クライアントの所有者、システム、またはポリシー特権を持つ管理者の場合には、このオプションによって、Web クライアントを介したワークステーションへのアクセスを制限されません。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「Web クライアント」タブで設定できます。

構文

➡ REVOKErremoteaccess — { None Access } ➡

パラメーター

None

クライアントのクライアント・アクセス権限を持っている管理者のアクセス許可を取り消しません。
これはデフォルトです。

Access

クライアントのクライアント・アクセス権限を持っている管理者のアクセス許可を取り消します。

例

オプション・ファイル:

```
revokeremoteaccess none
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Schedcmddisabled

schedcmddisabled オプションは、サーバーの `define schedule` サーバー・コマンドの `action=command` オプションによって、コマンドのスケジューリングを無効にするかどうかを指定します。

このオプションは、`preschedulecmd` および `postschedulecmd` コマンドを無効にしません。しかし、`preschedulecmd` または `postschedulecmd` に ブランクまたは空文字列を指定して、これらのコマンドのスケジューリングを無効にすることができます。

schedcmddisabled オプションを `yes` に設定すると、IBM Spectrum Protect 管理者が定義したコマンドのスケジューリングを無効にすることができます。

管理者が定義したスケジューリングを照会するには、`query schedule` コマンドを使用します。

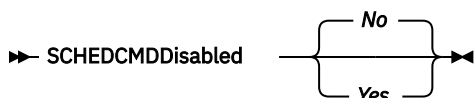
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。

構文



パラメーター

Yes

DEFINE SCHEDULE サーバー・コマンドの `action=command` オプションを使用するコマンドのスケジューリングをサーバーが無効にすることを指定します。

No

DEFINE SCHEDULE サーバー・コマンドの `action=command` オプションを使用するコマンドのスケジューリングをサーバーが無効にしないことを指定します。これはデフォルトです。

例

オプション・ファイル:

```
schedcmddisabled no
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連情報

[721 ページの『Query Schedule』](#)

Schedcmexception

schedcmexception オプションは、特定のコマンド・ストリングを除き、サーバーの DEFINE SCHEDULE サーバー・コマンドの action=**command** オプションによってコマンドのスケジューリングを無効にするために、schedcmddisabled オプションと一緒に使用されます。

スケジュールされたサーバー・コマンドが受け入れられるようにするには、スケジュールの "objects" 定義と一致する正確なストリングを指定する必要があります。ストリングが正確に一致しない場合 (例えば、余分なスペースが入っていたり、大/小文字が異なる場合)、スケジュールされたコマンド・アクションはブロックされます。

オプション・ファイルで複数の schedcmexception オプションを指定することができます。

schedcmddisabled が有効になっていない場合、このオプションは受け入れられません。オプション・ファイル内でのこのオプションの配置は、schedcmddisabled オプションの配置とは無関係です。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバーのクライアント・オプション・セットでは無効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。

構文

► SCHEDCMDException — string ◄

パラメーター

string

DEFINE SCHEDULE サーバー・コマンドの action=command オプションによってスケジュールされるコマンドの場合、このパラメーターは、schedcmddisabled=yes オプションが指定される場合に有効にするオブジェクト・パターンを示します。このパラメーターは、大/小文字が区別され、IBM Spectrum Protect サーバーのスケジュール定義のコマンド・ストリングと一致している必要があります。

例

オプション・ファイル:

```
schedcmddisabled yes
```

```
schedcmexception "start echo hello, world!"
```

関連情報

[529 ページの『Schedcmddisabled』](#)

Schedgroup

schedgroup オプションでは、スケジュールをグループに割り当てます。

このオプションの使用例としては、単一のサーバー・バックアップ・スケジュールによって複数の日次ローカル・バックアップ・スケジュールをグループ化する場合があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、サーバーの **DEFINE SCHEDULE** コマンドのコマンド・ライン・オプションとしてすべてのクライアントに有効です。このオプションは、IBM Spectrum Protect サーバー上のクライアント・オプション・セットには追加できません。

構文

➤ SCHEDGROUP — — *schedule_group_name* ➤

パラメーター

schedule_group_name

スケジュール・グループの名前を指定します。この名前は、30 文字以内で指定することができます。

スケジュール・グループ名に使用できる有効な文字のリストについては、[IBM Spectrum Protect オブジェクトの命名](#)を参照してください。

例

以下のコマンド例では、スケジュール SCHED_A_1、SCHED_A_2、SCHED_A_3、および SCHED_A_4 を、スケジュール・グループ GROUP_A にグループ化します。

コマンド・ライン:

次の例は、6 AM のローカル・バックアップを示します。

```
define schedule standard SCHED_A_1 Type=Client ACTION=Backup SUBACTION=VM  
OPTIONS='-vmfulltype=vstor -vmbackuptype=fullvm -vmbackuplocation=local -  
domain.vmfull="SCHEDULE-TAG" -asnodename=DC_SARTRE_WB -SCHEDGROUP=GROUP_A'  
STARTDate=02/06/2017 STARTTime=06:00:00 SCHEDStyle=Enhanced DAYofweek=ANY
```

次の例は、12 PM のローカル・バックアップを示します。

```
define schedule standard SCHED_A_2 Type=Client ACTION=Backup SUBACTION=VM  
OPTIONS='-vmfulltype=vstor -vmbackuptype=fullvm -vmbackuplocation=local -  
domain.vmfull="SCHEDULE-TAG" -asnodename=DC_SARTRE_WB -SCHEDGROUP=GROUP_A'  
STARTDate=02/06/2017 STARTTime=12:00:00 SCHEDStyle=Enhanced DAYofweek=ANY
```

次の例は、6 PM のローカル・バックアップを示します。

```
define schedule standard SCHED_A_3 Type=Client ACTION=Backup SUBACTION=VM  
OPTIONS='-vmfulltype=vstor -vmbackuptype=fullvm -vmbackuplocation=local -  
domain.vmfull="SCHEDULE-TAG" -asnodename=DC_SARTRE_WB -SCHEDGROUP=GROUP_A'  
STARTDate=02/06/2017 STARTTime=18:00:00 SCHEDStyle=Enhanced DAYofweek=ANY
```

次の例は、0 AM のローカル・バックアップおよびサーバー・バックアップを示します。

```
define schedule standard SCHED_A_4 Type=Client ACTION=Backup SUBACTION=VM  
OPTIONS='-vmfulltype=vstor -vmbackuptype=fullvm -vmbackuplocation=both -  
domain.vmfull="SCHEDULE-TAG" -asnodename=DC_SARTRE_WB -SCHEDGROUP=GROUP_A'  
STARTDate=02/06/2017 STARTTime=00:00:00 SCHEDStyle=Enhanced DAYofweek=ANY
```

ヒント: グループ内の各スケジュールが、次のスケジュールの開始が設定される前に確実に完了できるようにしてください。

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Schedlogmax

schedlogmax オプションは、スケジュール・ログ (dsmsched.log) および Web クライアント・ログ (dsmwebcl.log) の最大サイズ (M バイト単位) を指定します。

このオプションを指定すると、スケジューラー・イベント用に作成されるログ・ファイル (dsmsched.log) および Web クライアント・イベント用に作成されるログ・ファイル (dsmwebcl.log) は、その最大サイズに達すると折り返します。スケジューラー・イベントと Web クライアント・イベントがログに記録されるにつれて、ログ・レコードは、指定された最大サイズに達するまでログ・ファイルの終わりに追加されます。指定された最大サイズに達すると、「ファイルの先頭から継続」というログ・レコードがファイルの最後のレコードとして入れられます。後続のロギングは、ファイルの先頭から再開されます。折り返されたログの終わりは、「END OF DATA」というレコードによって示されます。

schedlogmax オプションを設定すると、スケジューラーおよび Web クライアント・ログ・メッセージは除去ファイルに保存されません。ログを除去し、除去されたログ項目を別のファイルに保存したい場合は、schedlogretention オプションを参照してください。

ログ折り返し (schedlogmax オプション) からログの除去 (schedlogretention オプション) に変更すると、既存のすべてのログ項目が保存され、ログは新しい schedlogretention 基準を使用して除去されます。

ログの除去 (schedlogretention オプション) からログ折り返し (schedlogmax オプション) に変更すると、既存のすべてのログが、除去された項目が入っているファイルにコピーされます。例えば、dsmsched.log ファイルから除去されたログ・レコードは、dsmsched.pru にコピーされます。dsmwebcl.log から除去されたログ・レコードは、dsmweblog.pru にコピーされます。既存のログ (dsmsched.log および dsmwebcl.log) は空になり、新しいログ折り返し基準を使用してロギングが開始されます。

schedlogmax オプションの値を変更すると、新しいサイズに合うように、既存のログが拡張または縮小されます。値が小さくなった場合には、一番古い項目が削除され、ファイルは新しいサイズまで縮小されます。

schedlogmax も schedlogretention も指定しなかった場合は、エラー・ログのサイズが際限なく大きくなる可能性があります。ログがディスク・リソースを使い果たすのを防ぐため、ログ内容を手動で管理する必要があります。どちらのオプションも指定せずにログを作成し、後でコマンドを出して schedlogretention オプションを指定した場合は、指定した保存値を使用してログが除去されます。どちらのオプションも指定せずにログを作成し、後でコマンドを出して schedlogmax オプションを指定した場合は、既存のログは除去されたログと同様に処理されます。つまり、dsmsched.log ファイルの内容は dsmsched.pru というファイルにコピーされ、dsmwebcl.log の内容は dsmwebcl.pru というファイルにコピーされて、新しいログ項目が dsmsched.log および dsmwebcl.log に作成され、両方のファイルはその最大サイズに達すると折り返します。

注: schedlogmax (ログ折り返しを有効にする) にゼロ以外の値を指定した場合、除去されたログを作成する schedlogretention オプションを指定することはできません。ログは、除去または折り返しのいずれかの処理はできますが、両方はできません。

schedlogmax オプションで作成されたログには、以下のレコード例に似た情報が入っているログ・ヘッダー・レコードが含まれています。

```
LOGHEADERREC 661 104857600 IBM Spectrum Protect 8.1.0.0 Fri Dec 9 06:46:53 2014
```

LOGHEADERREC テキスト内の日付およびタイム・スタンプは、dateformat または timeformat オプションで指定された設定により変換またはフォーマット設定されないことに注意してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

GUI の「クライアント・プリファレンス」>「スケジューラー」タブで、「スケジューラー・ログ・ファイルの折り返しを有効にする」を選択し、ログ・ファイルの「最大サイズ」にゼロ以外の値を指定することによって、このオプションを設定することもできます。ログ・ファイルの折り返しを禁止するには、「最大サイズ」をゼロに設定します。最大折り返しをゼロに設定した場合、「スケジューラー・ログ・ファイルの折り返しを有効にする」オプションをクリアしても設定しても効果はありません。「最大サイズ」をゼロに設定した場合は、ログ折り返しは行われません。

構文

► SCHEDLOGMAX — — size ◄

パラメーター

size

ログ・ファイルの最大サイズ (M バイト単位) を指定します。値の範囲は 0 から 2047 です。デフォルトは 0 で、これを指定すると、ログ・ファイルの折り返しが不可になり、ログ・ファイルを無限に大きくすることができるようになります。

例

オプション・ファイル:
schedlogmax 100

コマンド・ライン:
-schedlogmax=100

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Schedlogname

schedlogname オプションは、スケジュール・ログ情報を保管したいファイルのパスとファイル名を指定します。

このオプションは、スケジュール・ログ情報を保管したい場合に限り使用してください。このオプションは、スケジューラーの実行中に適用します。

このオプションを使用しない場合は、dsmerror.log ファイルと同じディレクトリー内に dsmsched.log ファイルが作成されます。

schedule コマンドを実行すると、スケジュールされたコマンドからの出力が画面に表示されます。出力は、このオプションで指定されたファイルへも送られます。指定されたパスのいずれかの部分が存在していないと、クライアントはそれを作成しようとします。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「スケジュール・ログ」テキスト・ボックスで設定できます。

注: DSM_LOG 環境変数を設定して、ログを配置するディレクトリーの名前を指定してください。指定するディレクトリーには、クライアントを実行するアカウントから書き込みアクセスが可能な許可が必要です。ルート・ディレクトリーは DSM_LOG に有効な値ではありません。

構文

➡ SCHEDLOGName — — filespec ➡

パラメーター

filespec

スケジュールされた作業の処理時に、スケジュール・ログ情報を保管したいパスおよびファイル名を指定します。指定されたパスのいずれかの部分が存在していないと、クライアントはそれを作成しようとします。

ファイル名のみを指定した場合には、ファイルは現行ディレクトリーに保管されます。デフォルトは、dsmsched.log というファイル名がある現行作業ディレクトリーです。dsmsched.log ファイルをシンボリック・リンクにすることはできません。

Mac OS X の場合、ファイル名のみを指定すると、ファイルはユーザーのデフォルト・フォルダーに保管されます。デフォルトのディレクトリーは、以下のとおりです。

```
~/Library/Logs/tivoli/tsm  
/Library/Logs/tivoli/tsm
```

例

オプション・ファイル:

```
SCHEDLOGN /Users/user1/Library/Logs/schedlog.jan
```

```
schedlogname /home/mydir/schedlog.jan
```

コマンド・ライン:

```
-schedlogname=/Users/user1/Library/Logs/schedlog.jan
```

コマンド・ライン:

```
-schedlogname=/home/mydir/schedlog.jan
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

dsmsched.log ファイルの配置については、[414 ページの『Errorlogname』](#) を参照してください。

Schedlogretention

schedlogretention オプションは、スケジュール・ログ (dsmsched.log) および Web クライアント・ログ (dsmwebcl.log) に項目を保存しておく日数、および除去した項目を別のファイルに保存するかどうかを指定します。

スケジュール・ログ (dsmsched.log) は、スケジューラーが開始されたとき、およびスケジュール済みイベントが完了したときに除去されます。除去された項目は、dsmsched.pru というファイルに書き込まれます。

Web クライアント・ログ (dsmwebcl.log) は、クライアント・アクセプター・デーモンを初回に開始するときに除去されます。除去された項目は、dsmwebcl.pru というファイルに書き込まれます。

ログの除去 (schedlogretention オプション) からログ折り返し (schedlogmax オプション) に変更すると、既存のログ内のすべてのレコードが除去されたログ (dsmsched.pru および dsmwebcl.pru) にコ

ピーされ、既存のログ (dsmsched.log および dsmwebcl.log) が空になり、新しいログ折り返し基準を使用してロギングが開始されます。

ログ折り返し (schedlogmax オプション) からログの除去 (schedlogretention オプション) に変更すると、既存のすべてのログ項目が保存され、ログは新しい schedlogretention 基準を使用して除去されます。除去された項目は、それぞれに対応する *.pru ファイルに保存されます。

schedlogmax も schedlogretention も指定しなかった場合は、ログのサイズが際限なく大きくなる可能性があります。ログがディスク・リソースを使い果たすのを防ぐため、ログ内容を手動で管理する必要があります。どちらのオプションも指定せずにログを作成し、後でコマンドを出して schedlogretention オプションを指定した場合は、指定した保存値を使用してログが除去されます。どちらのオプションも指定せずにログを作成し、後でコマンドを出して schedlogmax オプションを指定した場合は、既存のログは除去されたログと同様に処理されます。つまり、dsmsched.log ファイルの内容は dsmsched.pru というファイルにコピーされ、dsmwebcl.log の内容は dsmwebcl.pru にコピーされ、新規ログ項目が dsmsched.log と dsmwebcl.log の両方に作成されます。両方のファイルは、その最大サイズに達すると折り返します。

注: 除去されたログを作成する schedlogretention オプションを使用する場合は、schedlogmax オプションは指定できません。ログは、除去または折り返しのいずれかの処理はできますが、両方はできません。

サポートされるクライアント

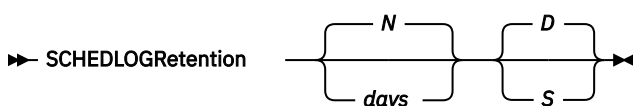
このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

GUI の「クライアント・プリファレンス」>「スケジューラー」タブで、「旧項目を除去」を選択し、「次より古い項目の除去」に値を指定することによって、このオプションを設定することもできます。「除去済み項目を保存」オプションを選択すると、除去されたスケジューラー・ログ項目が dsmsched.pru ログ・ファイルに保存されます。「除去済み項目を保存」を選択すると、Web クライアント・ログ項目も dsmwebcl.pru ログ・ファイルに保存されます。

構文



パラメーター

N または days

ログを除去するまでの待機する長さを指定します。

N

ログを除去しません。これにより、ログは無制限に増大します。これはデフォルトです。

days

スケジュール・ログを除去するまでログ・ファイルを保存しておく日数を指定します。値の範囲は 0 から 9999 です。

D または S

除去した項目を保存するかどうかを指定します。このパラメーターを、直前のパラメーターと区切るためにコンマまたはスペースを使用します。

D

ログを除去する時に、ログ項目を廃棄します。これはデフォルトです。

S

ログを除去する時に、ログ項目を保存します。

除去された項目は、ログと同じディレクトリーに保管される除去済み項目の ファイル (dsmsched.pru または dsmsched.pru) にコピーされます。

例

オプション・ファイル:

 schedlogretention 30 S

コマンド・ライン:

 -schedlogretention=30,S

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Schedmode

schedmode オプションは、ポーリング・モード (クライアント・ノードが定期的にサーバーにスケジュールされた作業を問い合わせる) またはプロンプト・モード (スケジュールされた操作を開始する時間になると、サーバーがクライアント・ノードに接続する) のいずれを使用するかを指定します。

クライアント・ポーリング・モードはすべての通信方式で使用できますが、サーバー・プロンプト・モードを使用できるのは TCP/IP のみです。

このオプションが適用されるのは、TCP/IP 通信方式を使用していて、**schedule** コマンドが実行中である場合だけです。

管理者は、サーバーに両方のモードをサポートさせるか、または一方のモードだけをサポートさせるかを指定することができます。管理者が両方のモードのサポートを指定した場合には、ユーザーはどちらかのスケジュールリング・モードを選択できます。管理者が1つのモードしか指定していない場合は、そのモードを dsm.sys ファイルで指定する必要があります。そうでないと、スケジュールされた作業は処理されません。

prompted モードを指定する場合は、dsm.sys ファイルまたはスケジュール・コマンドで tcpclientaddress および tcpclientport オプションの値を入力することを考慮する必要があります。これにより、クライアントは選択したとおりのアドレスまたはポートで接続することができます (複数のネットワーク・インターフェース・カードを備えるクライアント・マシンに有用です)。

注:

1. dsm.sys ファイルでこのオプションの設定を変更するときは、スケジューラー・サービスを停止して再始動しなければ設定値は有効になりません。
2. サーバーもこのオプションを定義することができます。

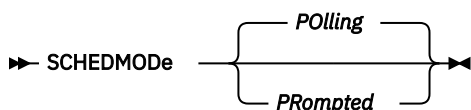
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジュール・モード」セクションの「スケジューラー」タブで設定できます。

構文



パラメーター

Polling

クライアント・スケジューラーは一定の時間間隔でサーバーに スケジュールされた作業を照会します。これがデフォルトです。この時間間隔は、`querschedperiod` オプションを使用して設定できます。

Prompted

クライアント・スケジューラーは、スケジュールされた作業を行う 必要がある時、サーバーがクライアント・ノードに接続するのを待ちます。

注:

1. **dsmc schedule** コマンドを使用し、`schedmode prompted` と `commethod V6Tcpip` の両方を指定する場合、クライアントおよび IBM Spectrum Protect サーバーで IPv6 が構成されている必要があります。さらに、クライアント・ホスト名が IPv6 アドレスに対してセットアップされている必要があります。

例

オプション・ファイル:

`schedmode prompted`

コマンド・ライン:

`-schedmod=po`

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連資料

[356 ページの『Cadlistenonport』](#)

`cadlistenonport` オプションは、クライアント・アクセプターの `listen` ポートを開くかどうかを指定します。

[578 ページの『Tcpclientaddress』](#)

`tcpclientaddress` オプションは、クライアント・ノードが2つ以上のアドレスを持っていて、最初のサーバーが 接続するために使用したアドレスとは別のアドレスにサーバーを接続させたい場合に、TCP/IP アドレスを指定します。

[579 ページの『Tcpclientport』](#)

`tcpclientport` オプションは、サーバーでプロンプトが出されるスケジュール操作をサーバーが開始するときにクライアントに接続するサーバーの TCP/IP ポート番号を指定します。

Schedrestretrdisabled

`schedrestretrdisabled` オプションは、リストアまたはリトリブのスケジュールされた 操作の実行を無効にするかどうかを指定します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーはこのオプションを定義することができません。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、スケジューラーのサーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「スケジュール・コマンド」セクションで設定できます。

構文



パラメーター

No

クライアントがリストアおよびリトリブのスケジュールされた 操作の実行を無効にしないように指定します。このパラメーターがデフォルトです。

Yes

クライアントがリストアおよびリトリブのスケジュールされた 操作の実行を無効にするように指定します。

例

オプション・ファイル:

schedrestretrdisabled yes

コマンド・ライン:

適用しません。

Scrolllines

scrolllines オプションは、画面上に一度に表示する情報の行数を指定します。

このオプションは、scrollprompt オプションを Yes に設定する時に使用します。

scrolllines オプションは、以下のコマンドでのみ使用できます。

- delete filespace
- query archive
- query backup
- query backupset
- query filespace
- query group
- query image
- query nas
- query node
- query options

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「コマンド・ライン」>「画面に表示する行数」で設定できます。

構文

➡ SCROLLLines — — *number* ⇐

パラメーター

number

画面上に一度に表示する情報の行数を指定します。値の範囲は 1 - 80 で、デフォルトは 20 です。

例

オプション・ファイル:
scrolllines 25

コマンド・ライン:
-scroll=25

このオプションは、初期コマンド・ラインおよび対話モードでのみ有効です。このオプションを対話モードで使用了場合には、このオプションが指定されたコマンドにのみ影響が及びます。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値に戻ります。この値は、初期コマンド・ラインまたはサーバーが強制するオプションによって指定変更されない限り、dsm.opt ファイルの値です。

Scrollprompt

scrollprompt オプションは、scrolllines オプションで指定した行数の情報を表示した後でバックアップ/アーカイブ・クライアントを停止して待たせるか、あるいはすべての行を表示するまでスクロールさせ、情報リストの最後で停止させるかを指定します。

scrollprompt オプションは、以下のコマンドでのみ使用できます。

- delete filesystem
- query archive
- query backup
- query backupset
- query filesystem
- query group
- query image
- query nas
- query node
- query options

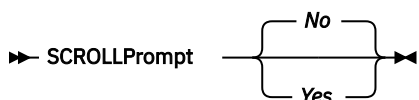
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「コマンド・ライン」タブの「以下の行数を表示後、一時停止する」フィールドで設定できます。

構文



パラメーター

No

リストの最後までスクロールして停止します。これはデフォルトです。

Yes

`scrolllines` オプションで指定された行数を表示した後、停止し、待機します。画面には次のプロンプトが表示されます。

```
Press 'Q' to quit, 'C' to continuous scroll, or 'Enter' to
continue.
```

例

オプション・ファイル:

```
scrollprompt yes
```

コマンド・ライン:

```
-scrollp=yes
```

このオプションは、初期コマンド・ラインおよび対話モードでのみ有効です。このオプションを対話モードで使用した場合には、このオプションが指定されたコマンドにのみ影響が及びます。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値に戻ります。この値は、初期コマンド・ラインまたはサーバーが強制するオプションによって指定変更されない限り、`dsm.opt` ファイルの値です。

Servername

`dsm.sys` ファイルにおいて、`servername` オプションは、サーバーを識別して、そのサーバーのオプションを含むスタンプを開始するために、使用したい名前を指定します。複数のサーバーに対して名前指定とオプション指定をすることができます。

次の例は、2つの異なるサーバーの場合のオプションの指定の仕方を示しています。

```
Servername      server_a
COMMMethod      TCPip
TCPPort         1500
TCPServeraddress server_hostname2.domain.company.com
PASSWORDAccess  prompt
GRoups          tsm
USERS           sullivan mushock tallan
INCLExcl        /adm/tsm/backup.excl

Servername      server_b
COMMMethod      SHAREdmem
shmport         1520
PASSWORDAccess  generate
GRoups          system tsm
INCLExcl        /adm/tsm/archive.excl
```

クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) において、`servername` オプションは、`dsm.sys` ファイルに名前の指定されたどのサーバーがバックアップ/アーカイブ・サービスを得るために連絡するかを指定します。`servername` オプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) またはコマンド・ラインで指定されると、クライアント・システム・オプション・ファイルで指定されたデフォルト・サーバーを指定変更します。

注:

1. `servername` オプションは、マイグレーションのためにクライアント・システム・オプション・ファイルに指定されているサーバーを指定変更するためには使用できません。
2. IBM Spectrum Protect サーバー名が変更され、あるいはバックアップ/アーカイブ・クライアントが別の IBM Spectrum Protect サーバーにダイレクトされる場合には、すべてのクライアントが新しいサーバー名に対して初期化された新規パスワードを持つ必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux クライアント用です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) とクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。 dsm.sys ファイルでは、servername オプションはサーバー・スタンザの先頭です。

バックアップ/アーカイブ・クライアントをコマンド・ライン・セッションで稼働している場合、あるいは、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を実行している場合は、dsm.opt でこのオプションを変更しないでください。

構文

➡ SErvername — — servername ➡

パラメーター

servername

dsm.sys ファイルでは、特定のサーバーに割り当てたい名前を指定します。 クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ラインに、バックアップ/アーカイブ・サービス用に接続したいサーバーの名前を指定します。 dsm.opt の servername の値は、dsm.sys の servername の値と一致しなければなりません。さもないと、クライアントがサーバーと接続できません。

サーバー名には大文字小文字の区別がなく、最大で 64 文字まで使用することができます。

例

オプション・ファイル:

```
servername server_a
```

コマンド・ライン:

```
-se=server_b
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Sessioninitiation

sessioninitiation オプションは、サーバーまたはクライアントがファイアウォール経由でセッションを開始するかどうかを制御するために使用します。 デフォルト値では、クライアントがセッションを開始します。 このオプションは、**schedule** コマンドで使用できます。

クライアント・スケジューラーの場合、ファイアウォール上でどのポートもオープンする必要はありません。 sessioninitiation オプションを serveronly に設定した場合は、クライアントはサーバーに接続しません。すべてのセッションは、tcpclientport オプションを使ってクライアント側で定義されたポートで、サーバー主導スケジューリングによって開始する必要があります。 sessioninitiation オプションは、プロンプト・モードで実行しているクライアント・スケジューラーの動作のみに影響します。 sessioninitiation オプションを serveronly に設定した場合、クライアント・アクセプター・デーモン管理スケジューラーを除き、コマンド・ライン・クライアントおよびバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI は、引き続きセッションの開始を試行します。



重要: sessioninitiation オプションを serveronly に設定した場合には、スケジューリング用に **dsmcad** は使用できません。

注: sessioninitiation オプションを serveronly に設定している場合、クライアント・セットアップ・ウィザードおよびスケジューラー・サービスは、IBM Spectrum Protect サーバーに対して認証できません。 この場合は、コマンド・ラインからスケジューラーを実行し (dsmc schedule)、プロンプトが表示されたらノードのパスワードを入力できます。

バックアップ操作に暗号鍵が必要になる場合も、同様の問題が生じる可能性があります。 この場合は、コマンド・ラインからスケジューラーを実行し (dsmc schedule)、プロンプトが表示されたら暗号鍵を入力することができます。パスワードおよび暗号鍵が更新された後に、スケジューラーを再始動する必要があります。

sessioninitiation オプションを client に設定した場合は、クライアントはサーバー・オプションである tcpport で定義されている TCP/IP ポートを使用して通信を行うことにより、サーバーとのセッションを開始します。これがデフォルトです。サーバー主導スケジューリングを使用してクライアントにサーバーへの接続を促すことができます。

注:

1. IBM Spectrum Protect サーバーは、**register node** コマンドおよび **update node** コマンドで、SESSIONINITiation=clientorserver または SESSIONINITiation=serveronly を指定することができます。サーバーが SESSIONINITiation= clientorserver を指定していると、どちらの方法を使用するかはクライアントが決定することができます。サーバーが SESSIONINITiation=serveronly を指定している場合は、すべてのセッションはサーバーによって開始されます。
2. sessioninitiation が serveronly に設定された場合、tcpclientaddress クライアント・オプションの値は、**update node** または **register node** サーバー・コマンドの HAddress オプションの値と同じにする必要があります。tcpclientport クライアント・オプションの値は、**update node** または **register node** サーバー・コマンドの LAddress オプションの値と同じにする必要があります。

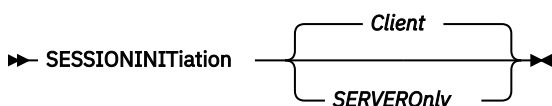
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「セッション開始」フィールドで設定できます。

構文



パラメーター

Client

クライアントが、サーバー・オプション TCPPORT で定義された TCP/IP ポートで通信することによってサーバーとのセッションを開始することを指定します。これがデフォルトです。サーバー主導スケジューリングを使用してクライアントにサーバーへの接続を促すことができます。

SERVEROnly

サーバーがセッションに対するクライアント要求を受け入れないことを指定します。すべてのセッションは、tcpclientport オプションを使ってクライアント側で定義されたポートで、サーバー主導スケジューリングによって開始する必要があります。クライアント・アクセプター・デーモン管理スケジューラーを除き、コマンド・ライン・クライアントおよびバックアップ/アーカイブ・クライアント GUI は、引き続きセッションの開始を試行します。

サーバーの AUTHENTICATION オプションが LDAP に設定されている場合は、クライアントの sessioninitiation オプションを serveronly に設定しないでください。これを設定すると、スケジュールを実行できません。

例

オプション・ファイル:

```
sessioninitiation serveronly
```

コマンド・ライン:

```
schedule -sessioninitiation=serveronly
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

関連情報

[71 ページの『スケジューラーの構成』](#)

[579 ページの『Tcpclientport』](#)

setwindowtitle

setwindowtitle オプションを使用して、処理中に管理クライアント・コマンド・ウィンドウのタイトルを変更します。

例えば、クライアント・ノードで管理クライアント・コマンド (**dsmadm**) を実行していて、管理クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーに接続すると、コマンド・ウィンドウのタイトルに以下のテキストが表示されます。

```
CONNECTED TO SERVER: servername(serverhostname)
```

ここで、*servername* は IBM Spectrum Protect サーバーの名前、*serverhostname* は IBM Spectrum Protect のホスト名です。

setwindowtitle オプションを使用すると、コマンド・ウィンドウのユーザー定義のタイトルがすべて上書きされます。管理クライアントを IBM Spectrum Protect サーバーから切断すると、ウィンドウ・タイトルはユーザー定義のウィンドウ・タイトルにリセットされます。

AIX、Linux、および Oracle Solaris の各オペレーティング・システムでは、サーバーからの切断後に端末ウィンドウ・タイトルは「Terminal」にリセットされます。

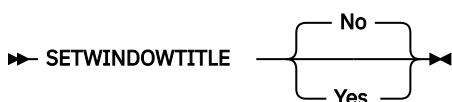
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

No

管理クライアント・コマンド・ウィンドウのタイトルは、処理中に変更されません。このパラメーターがデフォルトです。

Yes

IBM Spectrum Protect のサーバー名とホスト・サーバー名が管理クライアント・コマンド・ウィンドウのタイトルに表示されます。

例

オプション・ファイル:

```
SETWINDOWTITLE YES
```

コマンド・ライン:
-setwindowtitle=yes

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Shmport

shmport オプションは、共有メモリーを使用するときのサーバーの TCP/IP ポート・アドレスを指定します。すべての共有メモリー通信は TCP/IP 接続で開始します。

注: dsm.sys ファイル内の shmport オプションに指定されている値は、サーバー・オプション・ファイルの shmport に指定された値と一致しなければなりません。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

➡ SHMPort — — *port_number* ➡

パラメーター

port_number

ポート番号を指定します。1000 から 32767 までの値を指定することができます。デフォルト値は 1510 です。

例

オプション・ファイル:

shmport 1580

コマンド・ライン:

適用しません。

Showmembers

showmembers オプションを使用して、グループのすべてのメンバーを表示します。

showmembers オプションは、**query group**、および **restore group** コマンドで使用できます。

showmembers オプションは、inactive オプションが指定されていると無効です。現在活動状態でないグループのメンバーを表示する場合、pitdate および pittime オプションを使用してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

構文

➡ SHOWMembers ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

```
restore group /virtfs/* -pick -showmembers
```

Skipacl

skipacl オプションを使用すると、バックアップまたはアーカイブの操作中にアクセス制御リスト (ACL) データの組み込みまたは除外が可能です。デフォルトでは ACL データは組み込まれます。

このオプションを yes に設定すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ファイルとディレクトリーのバックアップまたはアーカイブ時に ACL データを組み込みません。デフォルトの no に設定すると、オブジェクトがサーバーにコピーされるときに ACL データを組み込みます。ファイル・システムに ACL が定義されていない場合、またはファイルのリトリーブやリストア時に ACL データを必要としないことが明らかな場合のみ、skipacl を yes に設定する必要があります。

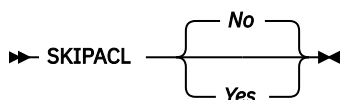
サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。Linux および AIX システムでは、skipacl を yes に設定すると拡張属性も省略されます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション (dsm.opt) ファイルに入れます。

構文



パラメーター

No

No を指定すると、ACL データはバックアップされます。これはデフォルトです。

Yes

Yes に設定すると ACL データはバックアップされず、その結果リストアできません。skipacl=yes は skipaclupdatecheck 設定を指定変更します。

例

オプション・ファイル:

```
skipacl yes
```

Skipaclupdatecheck

skipaclupdatecheck オプションは、ACL データのチェックサムとサイズの比較を無効にします。

yes に設定すると (デフォルトは no)、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップの実行前後と、ACL 更新を検出するための (以前のバックアップと現在の ACL の ACL チェックサムの) 増分処理中に、チェックサムおよびサイズ比較を実行しません。ただし、その他の理由でファイルがバックアップ対象として選択されている場合は、現行 ACL データがバックアップされます。ファイルの ACL のみが更新されている場合、次の増分バックアップではこの ACL 更新が認識されず、ファイルはバックアップされません。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション (dsm.opt) ファイルに入れます。

構文



パラメーター

No

No を指定すると、クライアントはバックアップ実行前後と増分処理実行中に ACL データのチェックサムとサイズ比較を実行します。これはデフォルトです。

Yes

Yes を指定すると、クライアントは ACL データのチェックサムとサイズ比較を実行しません。

例

オプション・ファイル:
skipaclup yes

Snapdiff

snapdiff (スナップショット差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

snapdiff オプションは、NFS に接続されている NAS/N シリーズのファイル・サーバー・ボリュームのバックアップ用です。

スナップショット差分処理を可能にするには、バックアップ/アーカイブ・クライアント上でユーザー ID とパスワードを構成する必要があります。snapdiff オプションのセットアップについて詳しくは、[116 ページの『スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成』](#)を参照してください。

NAS ファイル・サーバーで ONTAP V7.3.0 以降を実行しているときは必ず、NAS ファイル・サーバー・ボリュームの増分バックアップには、snapshotroot オプションを指定した簡易増分バックアップや増分バックアップではなく、このオプションを使用します。snapdiff と snapshotroot オプションを一緒に使用しないでください。

制約事項: スナップショット差分処理を使用した増分バックアップは、Linux x86_64 バックアップ/アーカイブ・クライアントでのみ使用可能です。

スナップショット差分オプションを使用して初めて増分バックアップを実行するときに、スナップショットが作成され (基本スナップショット)、このスナップショットをソースとして使用して従来の増分バックアップが実行されます。作成されたスナップショットの名前は、IBM Spectrum Protect サーバー・データベースに記録されます。次のバックアップ操作でスナップショット差分処理を使用するためには、初期増分バックアップが失敗せずに完了している必要があります。

2 回目にこのオプションを指定して増分バックアップを実行する場合は、新しいスナップショットが作成されるか、既存のスナップショットが使用されて (diffsnapshot オプションに設定された値により異なる)、これらの 2 つのスナップショット間の相違が検出されます。この 2 回目のスナップショットは diffsnapshot または差分スナップショットと呼ばれます。その後、クライアントは、NetApp によって変更

を報告されたファイルを IBM Spectrum Protect サーバーに増分バックアップします。スナップショット差分処理のために選択されたファイル・システムは、ボリュームのルートにマウントされている必要があります。ボリュームのルートにマウントされていないファイル・システムには、`snappdiff` オプションは使用できません。`snappdiff` オプションを使用してデータをバックアップした後、基本スナップショットとして使用されたスナップショットは、スナップショット・ディレクトリーから削除されます。

Linux システムの場合、スナップショット・ディレクトリーは `.snapshot` にあります。

クライアントは、作成していないスナップショットは削除しません。

スナップショット差分増分バックアップ操作が完了すると、クライアントにより、最後に登録された基本スナップショットのみがファイラー・ボリューム上に存続することが保証されます。バックアップ/アーカイブ・クライアント上でスナップショット差分増分バックアップによって作成されるスナップショットは、すべて先頭の文字が「TSM_」です。バックアップ/アーカイブ・クライアント以外のスナップショット・ツールを使用する場合、スナップショット名の先頭にストリング「TSM_」を使用しないようにしてください。スナップショット名の先頭が「TSM_」である場合、クライアントが次のスナップショット差分増分バックアップ操作を開始するときに、そのファイルは削除されます。

読み取り専用の NetApp ファイラー・ボリュームのスナップショット差分増分バックアップを実行するには、読み取り専用ボリュームにスナップショットを作成しないように `useexistingbase` オプションを指定する必要があります。また、(`basesnapshotname` オプション)を使用するには、基本スナップショットの名前、および (`basesnapshotname` オプション)を使用するには、差分スナップショットの名前を指定します。

ONTAP 7.3.0 以降を実行している NAS および N シリーズのファイル・サーバーの場合、`createnewbase` オプションを使用して、次のいずれかの理由によりスキップされたすべてのファイルをバックアップすることができます。

- `include-exclude` ファイルで除外規則が有効である場合は、ファイルは除外されます。`include-exclude` ファイルは変更していないが、ファイルを除外した規則を除去した場合、そのファイルは除外されます。NetApp API は、2 つのスナップショット間のファイル変更のみを検出し、`include-exclude` ファイルへの変更は検出しません。
- `include` ステートメントをオプション・ファイルに追加しても、そのファイルが変更されたことを NetApp が検出しない限り、その `include` オプションの効果はありません。クライアントは、バックアップ時にボリューム上の各ファイルを検査するわけではありません。
- `dsmc delete backup` コマンドを使用して、IBM Spectrum Protect サーバー・インベントリーからファイルを明示的に削除したとします。NetApp は、サーバーからファイルが手動で削除されたことを検出しません。したがって、そのファイルがボリューム上で変更されて、その変更が NetApp によって検出され、クライアントにもう一度バックアップするよう指示が出るまでは、IBM Spectrum Protect のストレージではそのファイルは無保護状態のままです。
- コピー・モードの `modified` から `absolute` への変更などのポリシー変更は検出されません。
- IBM Spectrum Protect インベントリーからファイル・スペース全体が削除されます。このアクションにより、スナップショット差分オプションによってソースとして使用するスナップショットが作成され、フル増分バックアップが実行されます。
- ファイルは、そのファイル名に 7 ビット ASCII 文字セットにはない文字が含まれているためにバックアップから除外されます。`createnewbase` オプションは基本スナップショットを作成し、それをソースとして使用してフル増分バックアップを実行します。NetApp は、変更済みオブジェクトを構成するものをコントロールします。

ヒント: `snappdiffhttps` オプションを使用して、セキュアな HTTPS 接続による NetApp ファイラーのスナップショット差分増分バックアップを実行できます。以前のリリースのバックアップ/アーカイブ・クライアントでは、スナップショット差分増分バックアップを正常に実行するために、NetApp ファイラーで HTTP 管理アクセスが有効になっている必要がありました。`snappdiffhttps` オプションを使用すると、ファイラーで HTTP 管理アクセスが有効になっているかどうかに関係なく、NetApp ファイラーとのセキュアな管理セッションを確立できます。

スナップショット差分バックアップ操作は、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments 環境ではサポートされません。Data Protection for VMware または Data Protection for Microsoft Hyper-V データ・ムーバ

ーもインストールされているホスト上の NetApp ファイラーにあるファイル・システムのスナップショット差分バックアップ操作を実行することはできません。

従来の **incremental** コマンドで使用するオプションを示す以下のリストで、最後の列は、各オプションと **snappdiff** オプションの相互作用を示しています。以下の情報は、有効、無効、および効果なしの定義について説明しています。

有効

オプションを使用すると処理が正常に実行されます。

無効

オプションに **snappdiff** オプションを付けると、エラー・メッセージが生成されます。

効果なし

オプションを使用できますが無視されます。

表 75. *Incremental* コマンド: 関連オプション

オプション	指定場所	snappdiff の使用
asnodename 344 ページの『Asnodename』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。	有効
automount 353 ページの『Automount』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt)。	効果なし
basesnapshotname 355 ページの『Basesnapshotname』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。	有効
changingretries 357 ページの『Changingretries』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。	効果なし
compressalways 363 ページの『Compressalways』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。	有効
compression 363 ページの『Compression』	サーバー・スタンザ内、またはコマンド・ライン上のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)。	有効
createnewbase 366 ページの『Createnewbase』	コマンド・ラインのみ。	有効
diffsnapshot 382 ページの『Diffsnapshot』	コマンド・ラインのみ。	有効
diffsnapshotname 383 ページの『Diffsnapshotname』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。	有効
dirsonly 385 ページの『Dirsonly』	コマンド・ラインのみ。	有効
domain 388 ページの『Domain』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt)、またはコマンド・ライン。	有効

表 75. *Incremental* コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	指定場所	snapdiff の使用
efsdecrypt 403 ページの『Efsdecrypt』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt)、またはコマンド・ライン。	効果なし
enablelanfree 408 ページの『Enablelanfree』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。	有効
encryptiontype 410 ページの『Encryptiontype』	サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys)。	有効
encryptkey 410 ページの『Encryptkey』	サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys)。	有効
exclude.fs.nas 416 ページの『Exclude オプション』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)。	効果なし
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。	無効
filesonly 433 ページの『Filesonly』	コマンド・ラインのみ。	有効
followsymboliclink 434 ページの『Followsymbolic』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt)。	効果なし
include.fs.nas 447 ページの『include オプション』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。	効果なし
inllexcl 446 ページの『Inllexcl』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)。	有効。ただし、ファイル変更が NetApp で検出された場合のみ。
incrbydate 465 ページの『Incrbydate』	コマンド・ラインのみ。	無効
memoryefficientbackup 480 ページの『Memoryefficientbackup』	このオプションは、dsm.sys と dsm.opt の両方に使用できますが、dsm.opt 内の値が dsm.sys にもある場合、dsm.opt の値は無視されます。このオプションは、サーバー・スタンザ内または初期コマンド・ラインに入れることもできます。	効果なし
monitor 485 ページの『Monitor』	コマンド・ラインのみ。	無効
nojournal 490 ページの『Nojournal』	コマンド・ラインのみ。	無効
postsnapshotcmd 503 ページの『Postsnapshotcmd』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) または include.fs オプション。	有効

表 75. *Incremental* コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	指定場所	snappdiff の使用
preservelastaccessdate 506 ページの『Preservelastaccessdate』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) または コマンド・ライン。	有効
presnapshotcmd 510 ページの 『Presnapshotcmd』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) または include.fs オプション。	有効
removeoperandlimit 515 ページの 『Removeoperandlimit』	コマンド・ラインのみ。	有効
skipaclupdatecheck 545 ページの 『Skipaclupdatecheck』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt)。	有効
snappdiffhttps 553 ページの『Snappdiffhttps』	コマンド・ラインのみ。	有効
snapshotcachesize 554 ページの 『Snapshotcachesize』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) または include.fs オプション。	効果なし
snapshotproviderfs 556 ページの 『Snapshotproviderfs』	サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys) または include.fs オプション。	無効
snapshotproviderimage 556 ページの 『Snapshotproviderimage』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) または include.image オプション。	無効
snapshotroot 557 ページの『Snapshotroot』	コマンド・ラインのみ。	無効
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ ライン。	無効
tapeprompt 575 ページの『Tapeprompt』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ ライン。	有効
toc 586 ページの『Toc』	コマンド・ラインのみ。	無効
useexistingbase 591 ページの 『Useexistingbase』	コマンド・ラインのみ。	有効
virtualfsname 595 ページの『Virtualfsname』	コマンド・ラインのみ。	無効
virtualmountpoint 595 ページの 『Virtualmountpoint』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)。	無効

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

構文

➡ SNAPDiff ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

ファイル・サーバー `homestore.example.com` でホストされている NFS マウント・ファイル・システム `/vol/vol1` のスナップショット差分増分バックアップを実行します。ここで、`/net/home1` は `/vol/vol1` のマウント・ポイントです。

```
incremental -snapdiff -diffsnapshot=latest /net/home1
```

コマンド・ライン:

NetApp サーバーが、Unicode のファイル名をサポートしていなかったサーバーから、Unicode 対応のファイル・サーバーにマイグレーションされたことを検出した後に、1 回限りのフル増分バックアップを実行します。

```
dsmc incremental -snapdiff -createnewbase=migrate /net/home1
```

NetApp サーバーが、Unicode のファイル名をサポートしていなかったサーバーから、Unicode 対応のファイル・サーバーにマイグレーションされたことを検出した後に、スナップショット差分増分バックアップを実行します。このコマンドでは、警告メッセージは抑止されます。

```
dsmc incremental -snapdiff -createnewbase=ign /net/home1
```

いくつかの `include` または `exclude` を変更したため、フル増分バックアップを実行します。

```
dsmc incremental -snapdiff -createnewbase=yes /net/home1
```

関連概念

[HTTPS 接続によるスナップショット差分バックアップ](#)

スナップショット差分バックアップ時にバックアップ/アーカイブ・クライアントが NetApp ファイラーと通信するために、セキュア HTTPS 接続を使用することができます。

[スナップショットを使用した NetApp プログレッシブ増分バックアップに対する SnapMirror サポート \(snapdiff\)](#)

NetApp の SnapDiff バックアップ処理を NetApp の SnapMirror 複製と併用して、NetApp ソース・ファイラー・ボリュームまたは宛先ファイラー・ボリュームをバックアップできます。

関連タスク

[スナップショット差分の増分バックアップのための NetApp および IBM Spectrum Protect の構成](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントでスナップショット差分増分バックアップ・コマンドを実行するには、NetApp ファイル・サーバー接続情報を構成する必要があります。また、**set password** コマンドを使用して、ファイル・サーバーのホスト名、およびファイル・サーバーにアクセスするために使用されるユーザー名とパスワードを指定する必要もあります。

関連資料

[Snapdiffhttps](#)

`snapdiffhttps` オプションは、スナップショット差分バックアップ時の NetApp ファイラーとの通信にセキュア HTTPS 接続を使用する場合に指定します。

[Basesnapshotname](#)

`basesnapshotname` オプションは、NetApp ファイラー・ボリュームのスナップショット差分 (snapdiff) バックアップを実行するときに基本スナップショットとして使用するスナップショットを指定します。このオプションを指定する場合、`snapdiff` オプションも使用する必要があります。使用しないとエラーが発生します。`basesnapshotname` が指定されない場合、`useexistingbase` オプションは、ファイラー・ボリューム上の最新のスナップショットを基本スナップショットとして選択します。

[Diffsnapshotname](#)

diffsnapshotname オプションを使用すると、スナップショット差分バックアップ時に使用するターゲット・ファイラー・ボリューム上の差分スナップショットを指定できます。このオプションは、**diffsnapshot=latest** も指定する場合のみ、指定されます。

Useexistingbase

useexistingbase オプションは、NetApp ファイラー・ボリューム上にあるスナップショットをバックアップする場合に使用されます。**useexistingbase** オプションは、バックアップされるボリューム上に存在する最新のスナップショットが、スナップショット差分バックアップ操作中に、基本スナップショットとして使用されることを指定します。

Diffsnapshot

diffsnapshot オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがスナップショット差分増分バックアップを実行するときに、差分スナップショットを作成するかどうかを制御します。

Set Password

set password コマンドを使用して、ワークステーションの IBM Spectrum Protect パスワードの変更、別のサーバーへのアクセスに使用する資格情報の設定を行います。

Snapdiffchangelogdir

snapdiffchangelogdir オプションは、スナップショット差分バックアップ操作に使用される永続変更ログをクライアントが保管する場所を定義します。

重要: バージョン 8.1.2 より古いバックアップ/アーカイブ・クライアントでスナップショット差分バックアップを使用した場合、V8.1.2 以降のクライアントで実行する最初のスナップショット差分バックアップは、フルプログレッシブ増分バックアップになります。このフルプログレッシブ増分バックアップを回避するには、最初のスナップショット差分バックアップを実行する前に既存の変更ログ・ファイルを、**stagingdirectory** オプションで指定された古い場所から **snapdiffchangelogdir** オプションで指定された新しい場所に移動します。

例えば、次のコピー・コマンドを実行します。

```
cp -R /tmp/TSM/TsmSnapDiff /opt/tivoli/tsm/client/ba/TsmSnapDiff
```

変更ログ・ファイルの命名パターンは以下のとおりです。

```
.../TSM/TsmSnapDiff/.TsmSnapdiffChangeLogs/NetAppFiler/  
SnapdiffChangeLog__VolumeName__.tsmDB  
.../TSM/TsmSnapDiff/.TsmSnapdiffChangeLogs/NetAppFiler/  
SnapdiffChangeLog__VolumeName__.tsmDB.Lock
```

ここで、

- **NetAppFiler** は、クラスター管理サーバーまたは 7 モード・ファイラー・サーバーのストレージ仮想マシン (SVM) のホスト名または IP アドレスです。
- **VolumeName** は、保護するボリュームです。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。このオプションはサーバーでも定義できます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (**dsm.opt**) に入れます。コマンド・ラインで **snapdiffchangelogdir** が指定された場合、オプション・ファイルで指定された値は指定変更されます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブで設定できます。

構文

➡ **SNAPDIFFCHANGELOGDir** — *path* ➡

パラメーター

path

スナップショット差分バックアップ操作の永続変更ログをクライアントが保管するディレクトリー・パスを指定します。 `snappdiffchangelogdir` オプションを指定しないと、クライアントは、クライアントがインストールされているディレクトリーを使用します。デフォルトのインストール・ディレクトリーは、次のとおりです。

```
/opt/tivoli/tsm/client/ba
```

変更ログ・ファイルの正確な名前は次のフォーマットを使用します。

```
snappdiff_change_log_dir/TsmSnapDiff/.TsmSnapdiffChangeLogs/NetAppFiler/  
SnapdiffChangeLog__VolumeName__.tsmDB
```

ここで、

- `snappdiff_change_log_dir` は、`snappdiffchangelogdir` オプションで指定したスナップショット差分変更ログを保管するためのディレクトリーの名前です。
- `NetAppFiler` は、クラスター管理サーバーまたは 7 モード・ファイル・サーバーのストレージ仮想マシン (SVM) のホスト名または IP アドレスです。
- `VolumeName` は、保護するボリュームです。

同時に実行する別のスナップショット差分バックアップによって変更ログ・ファイルが更新されないように、ロック・ファイルも作成されます。

例

オプション・ファイル:

```
snappdiffchangelogdir /tmp/tsmdata
```

コマンド・ライン:

```
-snappdiffchangelogd=/tmp/tsmdata
```

関連資料

[382 ページの『Diffsnapshot』](#)

`diffsnapshot` オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがスナップショット差分増分バックアップを実行するときに、差分スナップショットを作成するかどうかを制御します。

[546 ページの『Snapdiff』](#)

`snappdiff` (スナップショット差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

Snappdiffhttps

`snappdiffhttps` オプションは、スナップショット差分バックアップ時の NetApp ファイラーとの通信にセキュア HTTPS 接続を使用する場合に指定します。

このオプションを指定すると、バックアップ・アーカイブ・クライアントは、NetApp ファイラーで HTTP 管理アクセスが有効になっているかどうかに関係なく、NetApp ファイラーとのセキュアな管理セッションを確立できます。

重要: バックアップ/アーカイブ・クライアントが NetApp ファイラーとの管理セッションを確立するために使用するデフォルトの通信プロトコルは、HTTP です。セキュアな HTTPS 接続を使用するには、スナップショット差分バックアップを実行するたびに `snappdiffhttps` オプションを指定する必要があります。

制約事項:

HTTPS を使用したスナップショット差分バックアップには、以下の制約事項が適用されます。

- HTTPS 接続は、バックアップ/アーカイブ・クライアントと NetApp ファイラーの間の管理セッションでデータを安全に送信するためにのみ使用されます。管理セッション・データには、ファイラー資格情報、

スナップショット情報、スナップショット差分処理によって生成されるファイルの名前および属性などがあります。HTTPS 接続は、クライアントがファイル共有を介してアクセスするファイラー上の通常のファイル・データの送信には使用されません。HTTPS 接続は、クライアントが標準の IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー・プロトコルを使用して IBM Spectrum Protect サーバーに送信する通常のファイル・データにも適用されません。

- HTTPS プロトコルは NetApp vFiler 上でサポートされていないので、**snappdiffhttps** オプションは vFiler に適用されません。
- **snappdiffhttps** オプションは、コマンド・ライン・インターフェースでのみ有効です。バックアップ・アーカイブ・クライアント GUI では使用できません。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

オプション・ファイル

このオプションはコマンド・ライン・インターフェースのみで有効です。このオプションをオプション・ファイルに入力することはできません。

構文

▶ SNAPDIFFHTTPS ◀

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:

Linux システムで、ファイル・サーバー `homestore.example.com` 上でホストされている NFS マウント・ファイル・システム `/vol/vol1` を使用する場合、次のコマンドを発行します。ここで、`/net/home1` は `/vol/vol1` のマウント・ポイントです。

```
dsmc incr /net/home1 -snappdiff -snappdiffhttps
```

関連概念

HTTPS 接続によるスナップショット差分バックアップ

スナップショット差分バックアップ時にバックアップ/アーカイブ・クライアントが NetApp ファイラーと通信するために、セキュア HTTPS 接続を使用することができます。

関連資料

Snapdiff

snappdiff (スナップショット差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

Snapshotcachesize

snapshotcachesize オプションを使用して、スナップショットを作成するための適切なサイズを指定します。

スナップショットが作成された時点における、変更済みデータおよび削除済みデータの元のデータ・ブロックを保管するための適切なサイズを推定する必要があります。

スナップショット・ベースのファイルのバックアップまたはアーカイブでは、`snapshotcachesize` オプションを `include.fs` オプションと一緒に使用するか、または `dsm.sys` ファイル内のサーバー・スタンザ内で使用します。

スナップショット・ベースのイメージ・バックアップの場合、`snapshotcachesize` オプションは、**backup image** コマンド、または `include.image` オプションとともに使用するか、あるいは `dsm.sys` ファイルで使用してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX および Linux クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、`dsm.sys` ファイルのサーバー・スタンザに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「イメージ・スナップショット」タブで設定できます。

構文

▶ `SNAPSHOTCACHESize` — — *size* ▶

パラメーター

size

スナップショットが作成された時点における変更済みデータおよび削除済みのデータ用の元のデータ・ブロックを保管できるように、作成するスナップショットの適切なサイズを指定します。この値は、ファイル・システム・アクティビティーが行われたために変更されたファイル・システム・サイズのパーセントです。値の範囲は 1 から 100 パーセントです。AIX JFS2 および Linux でのデフォルト値はファイル・システム・サイズの 100 % です。スナップショットを作成するための十分な量のフリー・スペースがない場合、このコマンドは失敗してエラー・メッセージが出されます。ボリューム・グループのサイズを増やすか、または操作を再試行することができます。ご使用の AIX JFS2 ファイル・システムのアクティビティーに関する経験に基づいて、スナップショット・サイズの 100 % を使い切っていないと判断した場合には、この値を微調整することができます。

例

オプション・ファイル:

```
snapshotcachesize 95
AIX のみ: include.fs /kalafs1
          snapshotproviderfs=JFS2 snapshotcachesize=95
```

```
AIX のみ: include.image /kalafs2
          snapshotcachesize=95
```

```
Linux のみ: include.image /linuxfs1
            snapshotcachesize=100
```

コマンド・ライン:

```
-snapshotcachesize=95
```

関連情報

`include.fs` について詳しくは、[447 ページの『include オプション』](#)を参照してください。

Snapshotproviderfs

snapshotproviderfs オプションを使用して、スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブ操作を有効にし、スナップショット・プロバイダーを指定します。

スナップショット・ベースのファイルのバックアップまたはアーカイブ操作を実行するには、root ユーザーでなければなりません。root ユーザーでない場合、その操作は失敗し、エラー・メッセージが出されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションをシステム・オプション・ファイル dsm.sys のサーバー・スタンザに指定すると、クライアント上のすべての JFS2 ファイル・システムでスナップショットが有効になります。このオプションをバックアップおよびアーカイブ・コマンドのコマンド・ラインに指定すると、特定の操作に関してクライアント全体のオプションを指定変更することができます。また、dsm.sys ファイルの include.fs ステートメントを使用することにより、特定のファイル・システムに関してクライアント全体のオプションを指定変更することができます。このオプションはプリファレンス・エディターを使用して設定することもできます。

構文

➡ SNAPSHOTPROVIDERFs — — value ➡

パラメーター

value

以下の値の 1 つを指定します。

JFS2

ファイル・システムが他のシステム・アプリケーションで使用できるときに、スナップショット・ベースのファイルのバックアップまたはアーカイブを実行することを指定します。AIX クライアント上の JFS2 ファイル・システムのみで有効です。

NONE

スナップショットを使用してはならないことを指定します。指定されたファイル・システムを使用してファイルのバックアップまたはアーカイブ操作が実行されます。これはデフォルトです。

例

オプション・ファイル:

```
snapshotproviderfs JFS2
include.fs /kalafs1 snapshotproviderfs=JFS
```

コマンド・ライン:

```
-SNAPSHOTPROVIDERFs=JFS2
```

Snapshotproviderimage

snapshotproviderimage オプションを使用して、スナップショット・ベースのイメージ・バックアップを有効にし、スナップショット・プロバイダーを指定します。

スナップショット・ベースのイメージ・バックアップ操作を実行するには、root ユーザーでなければなりません。root ユーザーでない場合、その操作は失敗し、エラー・メッセージが出されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX および Linux クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションをシステム・オプション・ファイル `dsm.sys` のサーバー・スタンザに指定すると、クライアント上のすべてのファイル・システムでスナップショットが有効になります。このオプションを **backup image** コマンドのコマンド・ラインに指定すると、特定の操作に関してクライアント全体のオプションを指定変更することができます。また、`dsm.sys` ファイルの `include.image` ステートメントを使用することにより、特定のファイル・システムに関してクライアント全体のオプションを指定変更することができます。このオプションはプリファレンス・エディターを使用して設定することもできます。

構文

▶ **SNAPSHOTPROVIDERImage** — — *value* ▶

パラメーター

value

以下の値の 1 つを指定します。

JFS2

ファイル・システムが他のシステム・アプリケーションで使用できるときに、スナップショット・ベースのイメージ・バックアップを実行することを指定します。これは JFS2 ファイル・システムでのデフォルトです。AIX クライアントのみで有効です。

LINUX_LVM

ファイル・システムが他のシステム・アプリケーションで使用できるときに、スナップショット・ベースのイメージ・バックアップを実行することを指定します。これは、Linux Logical Volume Manager によって作成された論理ボリューム上にあるファイル・システムでのデフォルトです。Linux クライアントのみで有効です。

NONE

スナップショット・ベースのイメージ・バックアップ操作を実行しないことを指定します。これにより、指定したファイル・システムを使用して静的イメージ・バックアップ操作が実行されます。これは、AIX JFS2 および Linux LVM 以外のファイル・システムの場合のデフォルトです。

例

オプション・ファイル:

```
snapshotprovideri JFS2
include.image /kalafs1 snapshotprovideri=JFS2
```

コマンド・ライン:

```
-SNAPSHOTPROVIDERImage=NONE
```

Snapshotroot

論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダー・アプリケーションで、**incremental** コマンド、**selective** コマンド、または **archive** コマンドに **snapshotroot** オプションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データに関連付けます。

snapshotroot オプションを使用して、NFS でマウントされたファイル・システムをバックアップできます。バックアップ指定(ソース)と **snapshotroot** 値は両方とも、NFS マウント・ファイル指定にすることができます。例えば、**snapshotroot** オプションを使用して、スナップショットをサポートするネットワーク接続ストレージ (NAS) 上にホストされた NFS ファイル・システムをバックアップすることができます。

パフォーマンス上の理由から NAS ファイル・サーバーで ONTAP V7.3 を実行しているときは必ず、NAS ファイル・サーバー・ボリュームの増分バックアップには、`snapshotroot` オプションの簡易増分や増分ではなく、このオプションを使用する必要があります。`snappdiff` と `snapshotroot` のオプションは、同時に使用しないでください。

次の例では、`filesystem test495` は NAS ファイル・サーバー `philo` から NFS でマウントされ、`/philo/test945/.snapshot/backupsnap` は NAS ファイル・サーバーで作成されたスナップショットを表します。

```
dsmc i /philo/test945 -snapshotroot=/philo/test945/.snapshot/backupsnap
```

各ファイル・セットを別々のファイル・スペースとしてバックアップする場合は、`snapshotroot` オプションを使用してディレクトリーを指定することもできます。

`snapshotroot` オプションは、ボリューム・スナップショットが作成したデータを管理する機能のみを提供し、ボリューム・スナップショットを取る機能は提供しません。

例えば、`/usr file system` のスナップショットを取って、これを `/snapshot/day1` にマウントするアプリケーションがあるとします。次のコマンドを使用して、このデータをバックアップすると、`/snapshot/day1` という固有ファイル・スペースがサーバー上に作成されます。

```
dsmc incremental /snapshot/day1
```

ただし、このスナップショット・データを、`/usr` ファイル・システムで既に処理されたデータと関連付けることもできます。データは、`snapshotroot` オプションを使用して、IBM Spectrum Protect サーバー上の `/usr` ファイル・システムに対応するファイル・スペースと関連付けできます。

```
dsmc incremental /usr -snapshotroot=/snapshot/day1
```

この日以降、別のロケーションに書き込まれたスナップショットをバックアップできますが、このスナップショットはサーバー上の今までと同じファイル・スペースで管理されます。

```
dsmc incremental /usr -snapshotroot=/snapshot/day2
```

単一のディレクトリー、ディレクトリー構造、または単一のファイルについて、`snapshotroot` オプションを使用して、増分バックアップ、選択バックアップ、またはアーカイブを実行できます。すべてのインスタンスにおいて、`snapshotroot` オプションで、スナップショットが作成した論理ボリュームのルートを識別する必要があります。例えば次のとおりです。

```
dsmc incremental /usr/dir1/* -subdir=yes
-snapshotroot=/snapshot/day1
dsmc selective /usr/dir1/sub1/file.txt
-snapshotroot=/snapshot/day1
dsmc archive /usr/dir1/sub1/*.txt
-snapshotroot=/snapshot/day1
```

特定のファイル指定を包含または除外する場合、`include` および `exclude` ステートメントには、スナップショットのターゲットの名前 (`/snapshot/day1`) ではなく、スナップショットのソース (`/usr` ファイル・システム) となったファイル・システムの名前を指定する必要があります。これにより、スナップショットが書き込まれる論理ボリュームの名前にかかわらず、`include` ステートメントと `exclude` ステートメントのセットを保持することができます。以下は、`include` および `exclude` ステートメントの例です。

```
include /usr/dir1/*.txt 1yrmgmtclass
exclude /usr/mydocs/*.txt
```

以下の `include/exclude` ステートメントはスナップショット名が含まれていないため、無効です。

```
include /snapshot/day1/dir1/*.txt 1yrmgmtclass
exclude /snapshot/day1/mydocs/*.txt
```

増分操作、選択操作、またはアーカイブ操作には、単一ファイル指定とともに、**snapshotroot** オプションを使用する必要があります。複数のファイル指定を指定できません。また、ファイル指定は必ず指定してください。例えば、有効なコマンドは次のとおりです。

```
dsmc incremental /usr -snapshotroot=/snapshot/day1
dsmc incremental /usr/dir1/* -snapshotroot=/snapshot/day1
```

次のコマンドには、ファイル指定が2つ含まれるため無効です。

```
dsmc incremental /usr/dir1/* /home/dir2/*
-snapshotroot=/snapshot/day1
```

次のコマンドには、ファイル指定が無いため無効です。

```
dsmc incremental -snapshotroot=/snapshot/day1
```

注：

1. **snapshotroot** オプションが正しいボリュームのスナップショットを参照していることを確認します。**snapshotroot** ロケーションがスナップショットのルートを参照していることを確認してください。これらの規則に従わないと、ファイルが誤って期限切れになるなどの、意図しない結果になる可能性があります。
2. **filelist** オプションと **snapshotroot** オプションを指定すると、**filelist** オプションに指定されたすべてのファイルが同じファイル・システムにあると見なされます。**filelist** の項目が別のファイル・システム内にある場合は、その項目はスキップされ、エラーがログに記録されます。**filelist** に、スナップショットがとられた後にファイル・システム内で作成されたファイルが含まれている場合は、これらの項目もスキップされ、エラーがログに記録されます。
3. **snapshotroot** オプションは、**snapdiff** オプションと使用することはできません。
4. **snapshotroot** オプションは、**preschedulecmd** オプションおよび **postschedulecmd** オプションとともに使用するか、クライアント・スケジューラーで実行する自動化スクリプトで使用することができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、以下のクライアントに有効です。

- Mac OS X を除く UNIX および Linux クライアント。

構文

➡ **SNAPSHOTRoot** = — — *snapshot_volume_name* ➡

パラメーター

snapshot_volume_name

独立系ソフトウェア・ベンダーのスナップショット・アプリケーションによって作成された論理ボリュームのルートを指定します。

例

コマンド・ライン：

```
dsmc incremental /usr -SNAPSHOTRoot=/snapshot/day1
```

Srvoptsetencryptiondisabled

srvoptsetencryptiondisabled オプションを使用すると、クライアントは IBM Spectrum Protect サーバーからのクライアント・オプション・セットの暗号化オプションを無視することができます。

クライアント・オプション・ファイルでこのオプションが **yes** に設定される場合、クライアントは、サーバーからのクライアント・オプション・セットにある以下のオプションを無視します。

- encryptkey

注: クライアントが無視するのは、encryptkey generate オプション設定のみです。その他の可能性がある encryptkey オプション設定 (encryptkey prompt または encryptkey save など) は無視されません。

- encryptiontype
- exclude.encrypt
- include.encrypt

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

yes

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーからのクライアント・オプション・セットにリストされた暗号化オプションの値を無視します。

no

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーからのクライアント・オプション・セットにリストされた暗号化オプションの設定値を処理します。これはデフォルトです。

例

オプション・ファイル:

```
srvoptsetencryptiondisabled no
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Srvprepostscheddisabled

srvprepostscheddisabled オプションは、スケジュールされた操作を実行する際に、IBM Spectrum Protect 管理者によって指定された事前スケジュール・コマンドおよび事後スケジュール・コマンドをクライアント・システムで実行しないようにするかどうかを指定します。

srvprepostscheddisabled オプションは、schedcmddisabled オプションおよび srvprepostscheddisabled オプションと一緒に使用し、クライアント・ノード上での IBM Spectrum Protect 管理者による望ましくないオペレーティング・システム・コマンドの実行を行わないようにすることができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、IBM Spectrum Protect クライアント・スケジューラーを使用するすべてのバックアップ/アーカイブ・クライアントに有効です。サーバーはこのオプションを定義することができません。

オプション・ファイル

このオプションは、スケジューラーのサーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「スケジュール・コマンド」セクションで設定できます。

構文



パラメーター

No

クライアントが、スケジュールされた操作を実行する際に、IBM Spectrum Protect 管理者によって定義された事前スケジュール・コマンドおよび事後スケジュール・コマンドのクライアント・マシンでの実行を許可することを指定します。事前スケジュール・コマンドまたは事後スケジュール・コマンドが、クライアントと IBM Spectrum Protect 管理者の両方によって定義されている場合、管理者が定義したコマンドが、クライアント・オプション・ファイルに定義された対応するコマンドを上書きします。これはデフォルトです。

Yes

クライアントが、スケジュールされた操作を実行する際に、IBM Spectrum Protect 管理者によって定義された事前スケジュール・コマンドおよび事後スケジュール・コマンドのクライアント・マシンでの実行を防止することを指定します。事前スケジュール・コマンドまたは事後スケジュール・コマンドが、クライアントと IBM Spectrum Protect 管理者の両方によって定義されている場合、管理者が定義したコマンドは、クライアント・オプション・ファイルに定義された対応するコマンドを上書きしません。このオプションは、`schedcmddisabled` オプションおよび `srvprepostscheddisabled` オプションと連結して使用できます。

例

オプション・ファイル:

```
srvprepostscheddisabled yes
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Srvprepostsnapdisabled

`srvprepostsnapdisabled` オプションは、スケジュールされたイメージ・スナップショット・バックアップ操作を実行する際に、IBM Spectrum Protect 管理者によって指定された事前スナップショット・コマンドおよび事後スナップショット・コマンドをクライアント・システムで実行しないようにするかどうかを指定します。

`srvprepostsnapdisabled` オプションは、`schedcmddisabled` オプションおよび `srvprepostsnapdisabled` オプションと一緒に使用し、クライアント・ノード上での IBM Spectrum Protect 管理者による望ましくないオペレーティング・システム・コマンドの実行を行わないようにすることができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、イメージ・スナップショット・バックアップ・コマンドをサポートする、Linux クライアントで有効です。サーバーはこのオプションを定義することができません。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、スケジューラーのサーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スナップショット」タブの「スナップショット・オプション」セクションで設定できます。

構文



パラメーター

No

クライアントが、スケジュールされたイメージ・スナップショット・バックアップ操作を実行する際に、IBM Spectrum Protect 管理者によって定義された事前スナップショット・コマンドおよび事後スナップショット・コマンドのクライアント・マシンでの実行を許可することを指定します。事前スナップショット・コマンドまたは事後スナップショット・コマンドが、クライアントと IBM Spectrum Protect 管理者の両方によって定義されている場合、管理者が定義したコマンドが、クライアント・オプション・ファイルに定義された対応するコマンドを上書きします。これはデフォルトです。

Yes

クライアントが、スケジュールされたイメージ・スナップショット・バックアップ操作を実行する際に、IBM Spectrum Protect 管理者によって定義された事前スナップショット・コマンドおよび事後スナップショット・コマンドのクライアント・マシンでの実行を許可しないことを指定します。事前スナップショット・コマンドまたは事後スナップショット・コマンドが、クライアントと IBM Spectrum Protect 管理者の両方によって定義されている場合、管理者が定義したコマンドは、クライアント・オプション・ファイルに定義された対応するコマンドを上書きしません。このオプションは、`schedcmddisabled` オプションおよび `srvprepostsnapdisabled` オプションと連結して使用できます。

例

オプション・ファイル:

```
srvprepostsnapdisabled yes
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Ssl

`ssl` オプションを使用すると、セキュアなクライアント/サーバー間通信を行うための Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.1 以前の V8 レベル、および V7.1.7 以前のレベルと通信する場合、SSL を有効にするかどうかを決定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルと通信する場合、SSL は常に使用されるため、このオプションはオブジェクト・データが暗号化されるかどうかを制御します。パフォーマンス上の理由から、オブジェクト・データは暗号化しないことを推奨します。

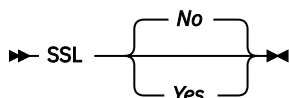
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされるすべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブでも設定できます。

構文



IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.1 以前の V8 レベル、および V7.1.7 以前のレベルと通信するためのパラメーター

No

バックアップ/アーカイブ・クライアントが情報を暗号化するのに SSL を使用しないことを指定します。No がデフォルトです。

Yes

バックアップ/アーカイブ・クライアントが情報を暗号化するのに SSL を使用することを指定します。

SSL を有効にするには、SSL Yes を指定して TCPPOPT オプションの値を変更します。通常、IBM Spectrum Protect サーバーが別のポート上の SSL 接続を listen するようにセットアップされているため、TCPPOPT オプションの値の変更が必要になります。

IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと通信するためのパラメーター

No

バックアップ/アーカイブ・クライアントがサーバーとの通信時にオブジェクト・データを暗号化するために SSL を使用しないことを指定します。他の情報はすべて暗号化されます。No がデフォルトです。

Yes

バックアップ/アーカイブ・クライアントが、サーバーとの通信時に、オブジェクト・データを含むすべての情報を暗号化するために SSL を使用することを指定します。

すべてのデータの SSL を使用するには、SSL Yes を指定します。

例

オプション・ファイル:

ssl yes

コマンド・ライン:

適用しません。

関連情報

[78 ページの『Secure Sockets Layer \(SSL\) による IBM Spectrum Protect クライアント/サーバー通信の構成』](#)

[566 ページの『Sslrequired』](#)

[581 ページの『Tcpport』](#)

Sslacceptcertfromserv

sslacceptcertfromserv オプションを使用して、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは API アプリケーションが初回接続時に IBM Spectrum Protect サーバーの Secure Sockets Layer (SSL) パブリック証明書を受け入れ、信頼するかどうかを制御します。このオプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントまたは API アプリケーションが初めて IBM Spectrum Protect サーバーに接続するときのみ適用されます。SSL パブリック証明書が受け入れられると、その証明書に対する以降の変更は自動的に受け入れられないため、手動でバックアップ/アーカイブ・クライアントにインポートする必要があります。このオプションを使用して、接続できるのは IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルのみです。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされるすべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

Yes

バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーのパブリック証明書を自動的に受け入れることを指定します。Yes がデフォルトです。

No

バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーのパブリック証明書を自動的に受け入れないことを指定します。

SSLACCEPTCERTFROMSERV を無効にするには、`sslacceptcertfromserv no` を指定します。

例

オプション・ファイル:

```
sslacceptcertfromserv no
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連情報

[562 ページの『Ssl』](#)

[566 ページの『Sslrequired』](#)

Ssldisablelegacytls

ssldisablelegacytls オプションは、TLS 1.2 未満の SSL プロトコルの使用を禁止するために使用します。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされるすべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、dsm.sys ファイルに入れます。プリファレンス・エディターの「通信」タブの「**TLS 1.2 以上が必要**」チェック・ボックスを選択して、GUI でこのオプションを設定することも可能です。このオプションはコマンド・ラインでは設定できません。

構文



パラメーター

No

バックアップ/アーカイブ・クライアントが SSL セッションで TLS 1.2 を必要としないことを指定します。TLS 1.1 以下の SSL プロトコルでの接続を許可します。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.1 以前の V8 レベル、および V7.1.7 以前のレベルと通信する場合、No がデフォルトです。

Yes

バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、すべての SSL セッションで TLS 1.2 (以上) のプロトコルの使用が必要であることを指定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.2 以降のレベル、および V7.1.8 以降の V7 レベルと通信する場合、Yes がデフォルトです。

例

オプション・ファイル:

```
ssldisablelegacytls yes
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連資料

[562 ページの『Ssl』](#)

ssl オプションを使用すると、セキュアなクライアント/サーバー間通信を行うための Secure Sockets Layer (SSL) が有効になります。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーの V8.1.1 以前の V8 レベル、および V7.1.7 以前のレベルと通信する場合、SSL を有効にするかどうかを決定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントが IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルと通信する場合、SSL は常に使用されるため、このオプションはオブジェクト・データが暗号化されるかどうかを制御します。パフォーマンス上の理由から、オブジェクト・データは暗号化しないことを推奨します。

[566 ページの『Sslrequired』](#)

sslrequired オプションは、クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーまたはストレージ・エージェントにログオンするときに、SSL が必要か、必要でないかの条件を指定します。クライアントからサーバーへ、およびクライアントからストレージ・エージェントへの通信がセキュアとなるように SSL を実際に設定するためには、クライアントの ssl オプションを yes に設定する必要があります。IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルと通信している場合、SSL が常に使用されるため、このオプションは適用されなくなります。

[581 ページの『Tcpport』](#)

tcpport オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP ポート・アドレスを指定します。このアドレスは管理者から入手することができます。

Sslfipsmode

sslfipsmode オプションは、クライアントがサーバーとの Secure Sockets Layer (SSL) 通信に SSL 連邦情報処理標準 (FIPS) モードを使用するかどうかを指定します。デフォルトは no です。

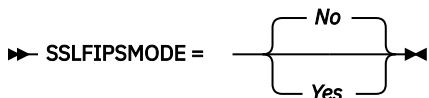
サポートされるクライアント

このオプションはすべてのクライアントでサポートされています。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定します。このオプションは、コマンド・ライン・パラメーターとして指定することはできず、さらにクライアント・オプション・セット内に設定することもできません。

構文



パラメーター

No

クライアントがサーバーとのセキュア通信に SSL FIPS モードを使用しないことを指定します。FIPS モードの SSL は、バージョン 6.3 以降のサーバーでのみサポートされます。クライアントが SSL を使用して V6.3 またはそれ以降のバージョンではないサーバーに接続する場合は、このクライアント・オプションを no に設定します。

Yes

クライアントがサーバーとのセキュア通信に SSL FIPS モードを使用することを指定します。このオプションを yes に設定すると、FIPS 認証暗号スイートのみを使用する SSL セッション・ネゴシエーションが制限されます。SSL FIPS モードは、V6.3 以降のサーバーでのみサポートされます。

例

クライアントで SSL FIPS モードを有効にするには、次のように入力します。

```
SSLFIPSMODE yes
```

Sslrequired

sslrequired オプションは、クライアントが IBM Spectrum Protect サーバーまたはストレージ・エージェントにログオンするときに、SSL が必要か、必要でないかの条件を指定します。クライアントからサーバーへ、およびクライアントからストレージ・エージェントへの通信がセキュアとなるように SSL を実際に設定するためには、クライアントの ssl オプションを yes に設定する必要があります。IBM Spectrum Protect サーバー V8.1.2 以降のレベルおよび V7.1.8 以降の V7 レベルと通信している場合、SSL が常に使用されるため、このオプションは適用されなくなります。

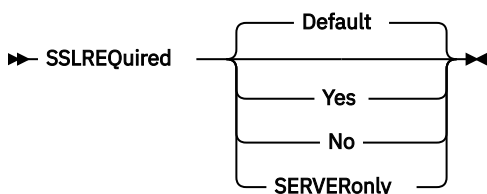
サポートされるクライアント

このオプションはすべてのクライアントでサポートされています。

オプション・ファイル

このオプションは、「通信」タブのクライアント・オプション・ファイルまたは GUI に入れてください。このオプションはコマンド・ラインでは設定できません。

構文



パラメーター

Default

この設定は、AUTHENTICATION=LDAP がサーバーに設定されている場合に、クライアントとサーバー、およびクライアントとストレージ・エージェント間の通信をセキュアにするために SSL が必要であることを示します。SSL を使用して通信をセキュアにするためには、クライアントにも `ssl=yes` の設定が必要です。

サーバーに AUTHENTICATION=LOCAL が設定されている場合は、この設定は SSL の必要がないということを示します。AUTHENTICATION=LOCAL および `sslrequired=default` の設定で SSL の必要がないと指定されている場合でも、クライアントの `ssl` オプションを `yes` に設定して SSL を使用できます。

Yes

クライアントとサーバー間、およびクライアントとストレージ・エージェント間の通信をセキュアにするために SSL が常に必要であることを示します。`sslrequired=yes` はサーバーの AUTHENTICATION オプションに依存しません。クライアントに `sslrequired=yes` を設定する場合は、クライアントに `ssl=yes` の設定も必要です。

No

クライアントとサーバー間、およびクライアントとストレージ・エージェント間の通信をセキュアにするために SSL を使用する必要はないことを示します。仮想プライベート・ネットワーク (VPN) あるいはセッション通信をセキュアにする他の方法を使用している場合のみ、このオプションを選択します。クライアントで `ssl=yes` を設定することによって、それでも SSL を有効にできます。しかし、`sslrequired=no` は SSL が前提条件ではないことを指定します。

SERVERonly

クライアントからサーバーへの通信では SSL が必須ですが、サーバーからストレージ・エージェントへの通信では SSL が必須ではないことを示します。クライアントからサーバーへの通信で SSL を使用するには、`sslrequired=serveronly` および `ssl=yes` を設定します。AUTHENTICATION オプションのサーバー設定は、LOCAL または LDAP のいずれかとなります。

クライアントからストレージ・エージェントへの通信に対して、SSL を有効にするには、クライアントの `lanfreessl` オプションを使用します。

次の表は、サーバー、およびクライアントの SSLREQUIRED オプションの設定、そしてクライアントの `ssl` オプションの設定に応じて、認証が成功するまたは失敗する状態を説明しています。表の結果は、有効な資格情報が提供されていることを前提としています。

表 76. サーバーおよびクライアントの SSL 設定がログイン試みの成功または失敗に及ぼす影響			
SSLREQUIRED オプション (サーバーの設定)	sslrequired オプション (クライアントの設定)	ssl オプション (クライアントの設定)	認証の成功または失敗
Yes	Yes	Yes	認証が成功しました
Yes	Yes	No	認証が失敗しました。クライアントはセッションを拒否します
Yes	No	Yes	認証が成功しました
Yes	No	No	認証が失敗しました。サーバーはセッションを拒否します
No	Yes	Yes	認証が成功しました

表 76. サーバーおよびクライアントの SSL 設定がログイン試みの成功または失敗に及ぼす影響 (続き)

SSLREQUIRED オプション (サーバーの設定)	sslrequired オプション (クライアントの設定)	ssl オプション (クライアントの設定)	認証の成功または失敗
No	Yes	No	認証が失敗しました。クライアントはセッションを拒否します
No	No	Yes	認証が成功しました
No	No	No	認証が成功しました

次の説明は、サーバーの SSLREQUIRED=DEFAULT と SSLREQUIRED=SERVERONLY の設定がクライアントの ssl オプションにどのように影響するかを説明します。

サーバーが SSLREQUIRED=DEFAULT および AUTHENTICATION=LDAP に設定されている場合は、クライアントは ssl=yes に設定する必要があります。そうしないと認証は失敗します。

サーバーが SSLREQUIRED=DEFAULT および AUTHENTICATION=LOCAL に設定されている場合は、クライアントは ssl=yes あるいは ssl=no に設定できます。

サーバーが SSLREQUIRED=SERVERONLY を設定する場合は、クライアントに ssl=yes の設定が必要です。クライアントの lanfreessl オプションは、ストレージ・エージェントとの通信をセキュアにするためには yes に、ストレージ・エージェントとのセキュア通信が必要でない場合は no に設定できます。

例

オプション・ファイル:

```
sslrequired yes
sslrequired no
sslrequired default
sslrequired serveronly
```

コマンド・ライン:

適用外; このオプションはコマンド・ラインでは設定できません。

Stagingdirectory

stagingdirectory オプションは、クライアントが操作を実行するために生成するすべてのデータを保管するロケーションを定義します。データは、処理が完了すると削除されます。

重要: バージョン 8.1.2 以降、スナップショット差分バックアップ操作のための変更ログを保管するロケーションを指定する際は snapdiffchangelogdir オプションを使用します。この目的のために stagingdirectory オプションが使用されることはなくなりました。詳しくは、[552 ページの『Snapdiffchangelogdir』](#)を参照してください。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux クライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。コマンド・ラインで stagingdirectory が指定された場合、オプション・ファイルで指定された値は指定変更されます。

構文

➤ STAGINGDIRectory — path ➤

パラメーター

path

クライアントがステージング・データを書き込むディレクトリー・パスを指定します。ステージング・ディレクトリーを指定しない場合、クライアントは一時ファイル・システム (通常は、/tmp) に一時データを保管します。

例

オプション・ファイル:

stagingdirectory /usr/tsmdata

stagingdirectory /private/tmp

コマンド・ライン:

-stagingdir="/tmp/tsmtempdata"

関連資料

382 ページの『Diffsnapshot』

diffsnapshot オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがスナップショット 差分増分バックアップを実行するときに、差分スナップショットを作成するかどうかを制御します。

546 ページの『Snapdiff』

snappdiff (スナップショット 差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのボリュームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

Subdir

subdir オプションは、指定したディレクトリーのサブディレクトリーを 処理の対象に含めるかどうかを指定します。

subdir オプションは、次のコマンドで使用できます。

- **archive**
- **delete archive**
- **delete backup**
- **incremental**
- **query archive**
- **query backup**
- **restore**
- **restore backupset**
- **restore group**
- **retrieve**
- **selective**

特定のパスおよびファイルのバックアップ時に **subdir** オプションを **yes** に設定した場合には、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、そのパスの下にあるすべてのサブディレクトリーを再帰的に検索し、そのサブディレクトリーの下に存在する指定されたファイルのすべてのインスタンスを検索します。例え

ば、あるクライアントの次のディレクトリーに、`myfile.txt` というファイルが存在するケースについて考えます:

```
//myfile.txt
/dir1/myfile.txt
/dir1/dir_a/myfile.txt
/dir1/dir_b/myfile.txt
```

次のようにそのファイルの選択バックアップを実行すると、`myfile.txt` の 4 件のインスタンスのすべてのバックアップが取られます:

```
dsmc sel /myfile.txt -subdir=yes
```

同様に、クライアント・オプション・ファイルやクライアント・オプション・セットに `subdir=yes` が指定されている場合に次のコマンドを実行すると、`myfile.txt` のすべてのインスタンスが表示されます。

```
dsmc restore /myfile.txt -pick
```

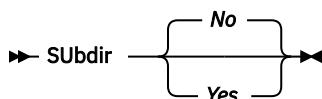
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に入れます。

構文



パラメーター

No

サブディレクトリーは処理されません。これはデフォルトです。

Yes

サブディレクトリーは処理されます。クライアント・プログラムは処理しているディレクトリーのすべてのサブディレクトリーを検索するので、処理を完了するのに時間がかかります。必要な場合にだけ `Yes` を指定します。

`subdir=yes` に加えて `preservepath` オプションを使用する場合は、それによって処理されるサブディレクトリーが異なってきます。

サブディレクトリーがマウント済みファイル・システムであれば、`subdir =yes` を指定しても、そのサブディレクトリーは処理されません。

注:

1. `-subdir=yes` オプションを使用した状態でクライアントを対話モードで実行すると、この設定は `Quit` を入力して対話モードを終了するまで、対話モードで実行されるすべてのコマンドに対して有効になります。
2. 複数のファイルをリストアップするときに `subdir=yes` が有効になっている場合は、宛先ファイルの指定の末尾にディレクトリー区切り文字を入れてください。区切り文字を省略すると、クライアントは宛先ファイルの指定が無効であることを示すメッセージを表示します。
3. クライアント・オプション・ファイルやクライアント・オプション・セットの `subdir` には、できるだけデフォルト値 (`No`) だけを使用するようにしてください。

例

オプション・ファイル:

subdir no

コマンド・ライン:

構造をリストアするには:

```
/Users/mike/dir1
/Users/mike/dir1/file1
/Users/mike/dir1/dir2
/Users/mike/dir1/dir2/file1
```

その場合、次のコマンドを入力します。

```
dsmc rest "/Users/van/dir1/*" /Users/mike/ -su=yes
dsmc rest "/Users/van/dir1/file*" /Users/mike/ -su=yes
dsmc rest "/Users/van/dir1/file1*" /Users/mike/ -su=yes
```

構造をリストアするには:

```
/path2/dir1
/path2/dir1/file1
/path2/dir1/dir2
/path2/dir1/dir2/file1
```

その場合、次のコマンドを入力します。

```
dsmc rest "/path/dir1/*" /path2/ -su=yes
dsmc rest "/path/dir1/file*" /path2/ -su=yes
dsmc rest "/path/dir1/file1*" /path2/ -su=yes
```

このオプションは、初期コマンド・ラインおよび対話モードでのみ有効です。このオプションを対話モードで使用した場合には、このオプションが指定されたコマンドにのみ影響が及びます。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値に戻ります。この値は、初期コマンド・ラインまたはサーバーが強制するオプションによって指定変更されない限り、dsm.opt ファイルの値です。

関連情報

507 ページの『[Preservepath](#)』

Tagschedule

-tagschedule オプションは、VM をバックアップまたは再平衡化するために使用します。

指定された vSphere Web Client GUI および VMware タグを使用して、スケジュールとデータ・ムーバーに割り当てられたり、関連付けられたりしている VM をバックアップまたは再平衡化することができます。-tagschedule オプションは、以下の 2 つのシナリオで **backup VM** コマンドと一緒に使用することができます。

- 随時バックアップ操作を実行する場合。例えば、スケジュール・バックアップ操作を再実行あるいはプレビューすることができます。
- タグ付きスケジュールでデータ・ムーバーを再平衡化する場合。-VMREBALANCESCHEDULEONLY オプションを使用して、随時にデータ・ムーバーを再平衡化することができます。あるいは、-VMREBALANCESCHEDULEPERIOD オプションを使用して、定期的にデータ・ムーバーを再平衡化することもできます。

-tagschedule オプションは、タグ・ベースのスケジュール名でのみ機能します。

サポートされるクライアント

このオプションは、Windows および Linux のデータ・ムーバーで有効です。

オプション・ファイル

コマンド・ラインで、`-tagschedule` オプションを使用します。また、オプション・ファイルを使用して、定期的な再平衡化操作をスケジュールすることも可能です。

関連資料

[UPDATE SCHEDULE \(クライアント・スケジュールの更新\)](#)

随時バックアップ操作での `tagschedule` オプションの使用

スケジュールされたバックアップ操作が失敗した場合は、`-tagschedule` オプションを使用して、そのスケジュールに関連付けられているすべての VM でバックアップを実行できます。

`-tagschedule` オプションを使用してバックアップ操作を実行すると、`backup vm` コマンドは、バックアップする VM のリストを生成します。このリストには、以下の VM が含まれます。

- VM の「**スケジュール (IBM Spectrum Protect)**」タグの値が `-tagschedule` オプションによって渡されたものと一致している。
- 「**VM データ・ムーバー (IBM Spectrum Protect)**」タグの値がデータ・ムーバー・ノード名に一致している。

両方とも一致した場合、その VM がバックアップ用に選択されます。`-preview` オプションを使用して、選択された VM を確認することもできます。

例えば、`SCHEDULE1` が夜間に実行されたものの失敗した場合、任意のデータ・ムーバーに対して `dsmc backup vm -tagschedule=SCHEDULE1` コマンドを発行できます。次に、そのデータ・ムーバーでは、ストリング `SCHEDULE1` を使用して VM インベントリーをフィルタリングして、「**スケジュール (IBM Spectrum Protect)**」タグの値に `SCHEDULE1` が設定された VM を選択します。

選択された VM は、さらに、使用中のデータ・ムーバーのノード名と一致する「**データ・ムーバー (IBM Spectrum Protect)**」タグ値を持つ VM のみが含まれるようにフィルタリングされます。使用されているデータ・ムーバーがデフォルト・データ・ムーバーとして指定されている場合は、データ・ムーバー・タグが割り当てられていない VM もバックアップに含まれます。`opt` ファイルで指定されたか、またはコマンド・ラインで渡された `-vmtagdefaultdatamover` オプションを使用して、データ・ムーバーはデフォルトとして指定されます。

このスケジュールに関連付けられているすべての VM を組み込む場合は、スケジュールに関連付けられたすべてのデータ・ムーバーに対して `backup vm` コマンドを実行します。これらのデータ・ムーバーの少なくとも 1 つが、デフォルトのデータ・ムーバーとして実行されていることを確認してください。必ずしもデフォルト・データ・ムーバー・オプションを使用する必要はありません。VE GUI により作成されるスケジュールでは、必ずデフォルトが設定されます。ただし、随時に `backup vm` コマンドを実行する場合は、データ・ムーバーの `-optfile` に明示的に指定されていない限りデフォルト値は設定されません。デフォルトでは、構成ウィザードでは、最初に追加されたデータ・ムーバーをデフォルトの `TAGschedule` データ・ムーバーとして設定します。

ヒント：「**スケジュールのモニター**」パネルの「**モニター**」テーブルの照会結果には、タグ付きスケジュールが実行されたことが反映されません。ただし、個々の VM 状況は、バックアップ操作が発生したことを示します。

`SCHEDULE1` のスケジュール全体は再実行されません。「**データ・ムーバー (IBM Spectrum Protect)**」タグが渡されたスケジュール名に設定されているマシンのみがバックアップされます。他のデータ・ムーバー上では別個のコマンドを実行して、それらのデータ・ムーバーに割り当てられた VM をバックアップする必要があります。

構文

```
►► TAGSCHEDULE= — schedule_name ————— -ASNODENAME= ►►
                        |
                        |— -preview —|
                        |
► — datacenter_name — -OPTFILE= — datamover_option_file_name —►
```

パラメーター

-preview

指定されたフィルターを使用してコマンドを実行した場合に取得されるリストをプレビューする場合、このパラメーターを指定します。

-schedule_name

指定されたフィルターを使用してスケジュールを実行した場合に取得されるリストを実行するスケジュール名を指定します。

-ASNODENAME

このパラメーターをオプション・ファイルで使用して、データ・センターの名前を指定します。

-OPTFILE

このパラメーターを使用してオプション・ファイルの名前を指定します。

バックアップ・シナリオの例

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm -OPTFILE=dsm.MM1_DATACENTER1_DM1.opt -ASNODE=MM1_DATACENTER1  
-tagschedule=SCHEDULE1
```

スケジュール・タグ SCHEDULE1 を持つすべての VM をバックアップします。

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm -OPTFILE=dsm.MM1_DATACENTER1_DM1.opt -ASNODE=MM1_DATACENTER1  
-tagschedule='DAILY_5AM' -preview
```

「**スケジュール (IBM Spectrum Protect)**」タグの値に DAILY_5AM を含む VM を使用し、データ・ムーバー MM1_DATACENTER1_DM1 のノード MM1_DATACENTER1 をターゲットとするバックアップ操作の対象となる VM をリストします。

関連資料

[UPDATE SCHEDULE \(クライアント・スケジュールの更新\)](#)

スケジュール操作を再平衡化するための tagschedule オプションの使用

タグ付きスケジュール操作を最適化するために、選択したスケジュールの VM のサイズ (合計ストレージ・スペース) に従ってタグ付きスケジュールを平衡化することができます。タグ付きスケジュールを再平衡化することで、スケジュールに従ってバックアップされる各 VM を処理するデータ・ムーバーをリセットします。

VM のスケジュールへの追加時に vSphere Web Client プラグインによってデータ・ムーバーが VM に割り当てられます。GUI を使用してタグ付きスケジュールを再平衡化するには、スケジュールを編集し、保存時にスケジュールを再平衡化するためのチェック・ボックスが選択されていることを確認する必要があります。VM は他の方法でスケジュールに追加されます。例えば、デフォルトのデータ・ムーバーによる初回バックアップ後に、新しい VM にもデータ・ムーバーが割り当てられます。定期的に全体の再平衡化を行いたいことがあります。タグ付きスケジュールを再平衡化する利点は、ストレージ・リソース間でバックアップが均等に分散されることです。これは、vSphere Web Client プラグイン、またはデータ・ムーバー・コマンド・ライン・インターフェースを使用して実行できます。

再平衡化操作が必要になることはほとんどありません。VM はスケジュールに追加される際に平衡化され、新しい VM にも平衡化されたデータ・ムーバーが割り当てられます。ただし、大量の VM が削除されたり移動されたりした場合に、全体の再平衡化操作が必要になることがあります。スケジュールに関連付けられているすべてのデータ・ムーバーおよび VM を再平衡化する必要がある場合は、VMREBALANCESCHEDULEONLY オプションを使用します。

再平衡化操作を自動化する場合、スケジュール・オプション・ストリングのパラメーターとして、またはオプション・ファイルで、VMREBALANCESCHEDULEPERIOD オプションを手動で追加することができます。このオプションは、デフォルトのデータ・ムーバーのオプション・ファイルに入れることができますが、スケジュールの OPTion ストリングに追加するほうが推奨されます。この方法では、1 つのデータ・ムーバーが複数のスケジュールにサービスを提供する際に生じるあいまいさを排除できます。

スケジュールに複数のデータ・ムーバーが割り当てられている場合にのみ、**VMREBALANCESCHEDULEPERIOD** オプションを指定します。このオプションは、デフォルトのデータ・ムーバーでのみ使用されます。データ・ムーバーをスケジュールに追加するときに、デフォルトのデータ・ムーバーが割り当てられます。スケジュールは、**VMREBALANCESCHEDULEPERIOD** オプションで指定された日数を経過し、現行のバックアップ操作が完了した後でなければ、再平衡化されません。

構文

```
➡ TAGSCHEDULE= — schedule_name — -VMREBALANCESCHEDULEONLY — -ASNODENAME= ➡  
  
➡ — datacenter_name — -OPTFILE= — datamover_option_file_name ➡
```

パラメーター

-VMREBALANCESCHEDULEONLY

このパラメーターは、VM のサイズに従ってタグ・スケジュールのデータ・ムーバーを平衡化する場合に使用します。データ・ムーバーは VM のサイズによって VM に割り当てられます。最も大きな VM がリスト内の最初のデータ・ムーバーに割り当てられ、2 番目に大きな VM が次のデータ・ムーバーに割り当てられます (以降も同様)。既存のデータ・ムーバーの割り当ては、各 VM のデータ・ムーバー・タグを再割り当てすることで上書きされます。

-VMREBALANCESCHEDULEPERIOD

オプション・ファイルでこのパラメーターを使用して、クライアントによる再平衡化操作の間の期間 (日数) を指定します。0 から 365 の範囲で値を指定できます。0 (デフォルト) を指定した場合、再平衡化は行われません。365 を指定した場合、再平衡化はほぼ年に 1 回行われます。スケジュールされた再平衡化操作は、デフォルトのデータ・ムーバーで実行されます。

-ASNODENAME

このパラメーターを使用してデータ・センターの名前を指定します。

-OPTFILE

このパラメーターを使用してオプション・ファイルの名前を指定します。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm -OPTFILE=dsm.MM1_DATACENTER1_DM1.opt -tagschedule=VMWARE01 -  
vmrebalancescheduleonly -asnodename=MY_DATACENTER_NODE
```

VMWARE01 という名前のスケジュールを再平衡化します。これは、ノード MY_DATACENTER_NODE をターゲットにしています。再平衡化操作の後、データ・ムーバー間で非対称的に割り当てられていた VM は、対称的に割り当てられるようになります。データ・ムーバーに未割り当てだった VM も割り当てられます。

以下の出力は、**vmware_sxf1_cldev** という名前のスケジュールの再平衡化操作の前後のシナリオを示しています。

```
dsmc backup vm -tagschedule=vmware_sxf1_cldev -vmrebalancescheduleonly -  
asnode=sxf1_cldev  
Node Name: DEFENDER1  
Accessing as node: SXF1_CLDEV  
ANS4313I Rebalance Schedule VMWARE_SXF1_CLDEV Type: Full  
  
Before Rebalance  
-----  
Data Mover Name           : DEFENDER1  
Total Bytes Protected     : 432.16 GB  
Virtual Machines Protected : 10  
  
Data Mover Name           : SXF1_CLDEV_DM  
Total Bytes Protected     : 116.04 GB  
Virtual Machines Protected : 3
```

```

Virtual Machines not assigned : 1

After Rebalance
-----
Data Mover Name           : DEFENDER1
Total Bytes Protected     : 332.08 GB
Virtual Machines Protected : 7

Data Mover Name           : SXF1_CLDEV_DM
Total Bytes Protected     : 316.12 GB
Virtual Machines Protected : 7

Virtual Machines not assigned : 0

```

再平衡化の出力情報は、スケジュール・ログ、およびサーバー・アクティビティ・ログに記録されます。

```

UPDate SChedule domain_name schedule_name OPTions="-vmfulltype=vstor
-vmbackuptype=fullvm -asnodenname=sxf1_cldev -mode=IFIncremental
-domain.vmmfull=SCHEDULE-TAG -vmtagdefaultdatamover=DEFENDER1
-vmrebalancescheduleperiod=1"

```

デフォルトのデータ・ムーバーが、毎日スケジュールを再平衡化することを指定します。

関連資料

[UPDATE SCHEDULE \(クライアント・スケジュールの更新\)](#)

Tapeprompt

tapeprompt オプションは、バックアップ、アーカイブ、リストア、またはリトリブ・プロセスでテープが必要になったとき、バックアップ/アーカイブ・クライアントに対し、テープのマウントを待たせるか、プロンプトを出してユーザーに選択させるかを指定します。

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI では、標準の(「クラシック」とも呼ばれています) リストアまたはリトリブ操作を実行する場合は、「メディア・マウント」ダイアログの「装置」および「ボリューム・ラベル」フィールドに、「使用できない情報 (Information Not Available)」という値を表示することができます。この値が意味するところは、この情報は無照会リストアまたはリトリブ操作でのみ使用可能であり、標準のリストアまたはリトリブ操作では使用できない、ということです。「装置」フィールドには、オブジェクトの処理に必要なメディアをマウントする装置の名前が表示されます。「ボリューム・ラベル」フィールドには、オブジェクトの処理に必要なボリュームの名前が表示されます。

テープ・プロンプトはスケジュールされた操作の時は、tapeprompt オプションの設定値に関係なく、出されません。

tapeprompt は、オプション次のコマンドで 사용할 ことができます。

- **archive**
- **delete archive**
- **delete backup**
- **incremental**
- **restore**
- **retrieve**
- **selective**

注: サーバーもこのオプションを定義することができます。

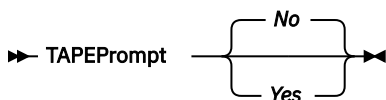
サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブの、「テープのマウント前にプロンプトを表示」チェック・ボックスで設定できます。

構文



パラメーター

No

選択を求めるプロンプトは出されません。サーバーは適切なテープがマウントされるまで待ちます。これがデフォルトです。

注：API アプリケーションの場合、これによりテープへの直接バックアップが許可されます。

Yes

データをバックアップ、アーカイブ、リストア、またはリトリブするためにテープが必要になった時、プロンプトが出されます。このプロンプトを受けて、適切なテープがマウントされるまで待ったり、常にテープがマウントされるのを待ったり、特定のオブジェクトをスキップしたり、単一テープ上のすべてのオブジェクトをスキップしたり、すべてのテープ上のすべてのオブジェクトをスキップしたり、あるいは操作全体をキャンセルしたりすることができます。

例

オプション・ファイル:
tapedprompt yes

コマンド・ライン:
-tapep=yes

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Tcpadminport

tcpadminport オプションは、管理クライアント・セッションでサーバーが要求を待機する TCP/IP ポート番号を個々に指定するときに使用します。これにより、プライベート・ネットワーク内で管理セッションを安全に実行できます。

クライアントの tcpadminport 設定は、IBM Spectrum Protect サーバーの tcpadminport オプションと adminonclientport オプションの構成内容に応じて異なります。サーバーの tcpadminport 設定は、管理セッションでサーバーが listen するポートを示します。adminonclientport 設定には、yes または no を指定します。

tcpadminport がサーバー上に設定されていない場合、クライアント・セッションと同じポート上で、管理用セッションが許可されます。

サーバーで tcpadminport が設定されている場合は、その設定で指定されたポート上で管理セッションが許可されます。この場合、adminonclientport yes が有効になっていると、管理セッションは通常のクライアント・ポートまたは tcpadminport で指定されたポートのいずれかで接続できます。adminonclientport no が有効になっている場合は、管理セッションは、tcpadminport で指定されたポートでのみ接続できます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブの「管理ポート」フィールドで設定できます。

構文

➡ TCPADMINPort ———— admin_port_address ———— ➡

パラメーター

admin_port_address

サーバーのポート番号を指定します。デフォルト値は、`tcpport` オプションの値です。

例

オプション・ファイル:

```
tcpadminport 1502
```

Tcpbuffsize

`tcpbuffsize` オプションは、クライアント・ノードとサーバーの間でのデータ転送に使用する 内部 TCP/IP 通信バッファのサイズを指定します。使用するメモリーは多くなりますが、バッファを大きくすると通信パフォーマンスが向上します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブの「バッファ・サイズ」フィールドで設定できます。

構文

➡ TCPBuffsize — size ➡

パラメーター

size

内部 TCP/IP 通信バッファ用に使用したいサイズを、キロ (K) バイト単位で指定します。値の範囲は 1 から 512 で、デフォルトは 32 です。

オペレーティング・システムの通信設定によっては、システムが 1 - 512 の範囲にあるすべての値を受け入れない場合があります。

例

オプション・ファイル:

```
tcpb 32
```

コマンド・ライン:

```
-tcpbuffsize=32
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Tcpcadaddress

tcpcadaddress オプションは、dsmcad の TCP/IP アドレスを指定します。通常、このオプションは必要ありません。このオプションを使用するのは、クライアント・ノードが複数の TCP/IP アドレスを持つ場合、またはデフォルトの通信方式が TCP/IP ではない場合のみです。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。

構文

➡ TPCADAddress — — cad_address ➡

パラメーター

cad_address

TCP/IP インターネット・ドメイン名または数値 IP アドレスを指定します。IPv6 アドレスを指定する場合、commethod V6Tcpip オプションを指定する必要があります。

例

オプション・ファイル:

```
tcpcada dsmclnt.example.com
```

コマンド・ライン:

```
-tcpcadaddress=192.0.2.0
```

```
-tcpcadaddress=mycompany.example.com
```

```
-tcpcadaddress=2001:0DB8:0:0:0:0:0:0
```

このオプションは、dsmcad プログラムの最初のコマンド・ラインでのみ有効です。その他の dsm モジュールでは無効です。

関連情報

クライアント・ノードが複数の TCP/IP アドレスを持つか、またはデフォルトの通信方式が TCP/IP ではないかを判別する場合は、[360 ページの『Commmethod』](#)を参照してください。

Tcpclientaddress

tcpclientaddress オプションは、クライアント・ノードが 2 つ以上のアドレスを持っていて、最初のサーバーが 接続するために使用したアドレスとは別のアドレスにサーバーを接続させたい場合に、TCP/IP アドレスを指定します。

サーバーでプロンプトを出されるスケジュール操作を開始するとき、サーバーはこのアドレスを使用します。

このオプションを使用するのは、schedmode オプションで prompted パラメーターを使用している場合のみです。

sessioninitiation が serveronly に設定された場合、tcpclientaddress クライアント・オプションの値は、HLAddress サーバー設定の値と同じでなければなりません。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「TCP/IP アドレス」フィールドで設定できます。

構文

➡ TCPCLIENTAddress — — *client_address* ➡

パラメーター

client_address

クライアント・ノードに接続するためにサーバーに使用させる TCP/IP アドレスを指定します。TCP/IP インターネット・ドメイン名または数値の IP アドレスを指定します。数値 IP アドレスは TCP/IPv4 または TCP/IPv6 アドレスのいずれかです。commethod V6Tcpip オプションを指定した場合は、IPv6 アドレスのみを使用できます。

例

オプション・ファイル:

```
tcpclienta dsmclnt.example.com
または
tcpclienta 192.0.2.21
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Tcpclientport

tcpclientport オプションは、サーバーでプロンプトが出されるスケジュール操作をサーバーが開始するときにクライアントに接続するサーバーの TCP/IP ポート番号を指定します。

このオプションを使用するのは、schedmode オプションで prompted パラメーターを指定している場合のみです。

sessioninitiation が serveronly に設定された場合、tcpclientport クライアント・オプションの値は、LLAddress サーバー・オプションの値と同じにする必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「スケジューラー」タブの「TCP/IP ポート」フィールドで設定できます。

構文

➡ TCPCLIENTPort — — *client_port_address* ➡

パラメーター

client_port_address

クライアント・ノードに接続するためにサーバーが使用する TCP/IP アドレスを 指定します。 値の範囲は 1 から 32767 で、デフォルトは 1501 です。

例

オプション・ファイル:

tcpclienttp 1502

コマンド・ライン:

```
-tcpclientport=1492
```

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Tcpnodelay

tcpnodelay オプションは、クライアントがネットワーク上で連続する小さいパケットの送信遅延を無効にするかどうかを、トランザクションごとに指定します。

値をデフォルトの yes から変更するのは、次の条件のいずれかが当てはまる場合だけにしてください。

- IBM テクニカル・サポートからオプションを変更するように指示された場合。
- ネットワーク伝送での TCP Nagle アルゴリズムの影響を完全に理解している場合。このオプションを no に設定すると、Nagle アルゴリズムが有効になり、連続する小さいパケットの送信が遅延します。

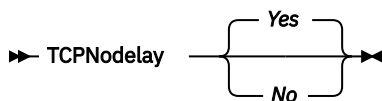
サポートされるクライアント

このオプションは、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブで設定できます。「トランザクションをサーバーに即時に送信」を選択します。

構文



パラメーター

No

サーバーが、ネットワークを介して即時に送られる連続する小さいパケットを許可しないことを指定します。このオプションを no に設定すると、パフォーマンスが低下することがあります。

Yes

サーバーまたはクライアントが、ネットワークを介して即時に送られる連続する小さいパケットを許可することを指定します。デフォルトは yes です。

例

オプション・ファイル:

tcpnodelay yes

コマンド・ライン:

適用しません。

Tcppport

tcppport オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP ポート・アドレスを指定します。このアドレスは管理者から入手することができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブの「サーバー・ポート」フィールドで設定できます。

構文

➡ TCPPort — — port_address ➡

パラメーター

port_address

サーバーと通信するために使用される TCP/IP ポート・アドレスを指定します。値の範囲は 1 から 32767 で、デフォルトは 1500 です。

例

オプション・ファイル:

tcpp 1501

コマンド・ライン:

適用しません。

Tcpserveraddress

tcpserveraddress オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP アドレスを指定します。このサーバー・アドレスは管理者から入手することができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブの「サーバー・アドレス」フィールドで設定できます。

このオプションを指定しない場合、クライアントは、バックアップ/アーカイブ・クライアントと同じコンピュータ上で稼働しているサーバーと接続しようとします。

構文

➡ TCPServeraddress — — server_address ➡

パラメーター

server_address

サーバーの TCP/IP アドレスを 1 - 64 文字で指定します。TCP/IP ドメイン名または数値の IP アドレスを指定します。数値の IP アドレスは TCP/IP v4 アドレスまたは TCP/IP v6 アドレスのいずれかで、commethod V6Tcpip オプションを指定した場合は、IPv6 アドレスのみを使用できます。

例

オプション・ファイル:

tcps dsmchost.example.com

コマンド・ライン:

適用しません。

Tcpwindowsize

tcpwindowsize オプションは、クライアント・ノードの TCP/IP スライド式ウィンドウに使用したいサイズをキロバイト単位で指定するために使用します。

送信側ホストは、肯定応答および TCP 受信ウィンドウ更新を受け取るまで、それ以上のデータを送信することはできません。各 TCP パケットには、接続で公示された TCP 受信ウィンドウが含まれています。ウィンドウを大きくすると、送信側がデータの送信を続行でき、通信パフォーマンスが改善される場合があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「通信」タブの「ウィンドウ・サイズ」フィールドで設定できます。

構文

➡ TCPWindowsize — — window_size ➡

パラメーター

window_size

クライアント・ノードの TCP/IP スライド・ウィンドウに使用したいサイズを、キロバイト単位で指定します。値の範囲は 0 から 2048 です。0 の値を指定すると、クライアントで、オペレーティング・システムのデフォルト TCP ウィンドウ・サイズを使用できます。1 から 2048 の値は、ウィンドウ・サイズが 1KB から 2MB の範囲内であることを示します。1 未満の値を指定すると、TCP ウィンドウのサイズはデフォルト設定で 1 になります。2048 より大きな値を指定すると、TCP ウィンドウのサイズはデフォルト設定で 2048 になります。

バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、このパラメーターのデフォルト値は、AIX と Solaris の場合は 63 KB、その他のプラットフォームの Linux と Mac の場合は、0 (OS デフォルト) です。

IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware では、Linux の場合、このパラメーターのデフォルト値は 512 KB です。

注:

- TCP ウィンドウは、ネットワーク上でバッファーとして機能します。これは、tcpbuffsize オプションにも、クライアントまたはサーバーのメモリーで割り振られた送信および受信バッファーにも関連していません。

- ネットワーク・アダプター上のバッファ・スペースより大きいウィンドウ・サイズは、アダプター上で失われた再送パケットのために、スループットを低下させる可能性があります。
- オペレーティング・システムの通信設定によっては、システムが値の範囲にあるすべての値を受け入れない場合があります。
- `tcpwindowsize` オプションは、オペレーティング・システムのデフォルトの TCP/IP セッション送受信ウィンドウ・サイズをオーバーライドします。

例

オプション・ファイル:
`tcpwindowsize 63`

コマンド・ライン:
`-tcpw=63`

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Timeformat

`timeformat` オプションは、システム時刻を表示および入力する形式を指定します。

デフォルトの場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントと 管理クライアントは、クライアントの呼び出し時に有効なロケール定義からフォーマット情報を取得します。ロケール定義のセットアップ方法の詳細については、ローカル・システム側のドキュメンテーションを参照してください。

注:`timeformat` オプションは、Web クライアントには影響しません。Web クライアントは、ブラウザを実行中のロケールの時刻形式を使用します。クライアントがサポートするロケールでブラウザが実行されていない場合には、Web クライアントは米国英語用の時刻形式を使用します。

`timeformat` オプションは、次のコマンドで使用できます。

- **delete archive**
- **delete backup**
- **expire**
- **query archive**
- **query backup**
- **query filespace**
- **query image**
- **query nas**
- **restore**
- **restore image**
- **restore nas**
- **retrieve**
- **set event**

コマンドに `timeformat` オプションを組み込む場合には、`fromtime`、`pittime`、および `totime` オプションの前に入れる必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「地域設定」タブの「時刻形式」フィールドで設定できます。

構文

➤ TIMEformat — — format_number ➤

パラメーター

format_number

ここにリストされたフォーマットの 1 つで時刻を表示します。使用するフォーマットに対応するフォーマット番号を選択します。コマンドに timeformat オプションを組み込む場合には、fromtime、pittime、および totime オプションの前に入れる必要があります。

0

ロケール定義の時刻形式を使用 (Mac OS X には適用されません)。この値はロケール指定の形式が数字、区切り文字、および AM または PM スtring (該当する場合) から構成されている場合のデフォルトです。

1

23:00:00

これはロケール指定の形式が数字、区切り文字、および AM または PM スtring (該当する場合) から構成されていない場合のデフォルトです。

2

23,00,00

3

23.00.00

4

12:00:00 A/P

5

A/P 12:00:00

例

オプション・ファイル:

timeformat 4

コマンド・ライン:

-time=3

このオプションは、初期コマンド・ラインおよび対話モードでのみ有効です。このオプションを対話モードで使用した場合には、このオプションが指定されたコマンドにのみ影響が及びます。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値に戻ります。この値は、初期コマンド・ラインまたはサーバーが強制するオプションによって指定変更されない限り、dsm.opt ファイルの値です。

日時形式の指定についてのその他の考慮事項

このオプションで指定する日時形式は、日時を入力データとして処理するオプションの使用時に使用する必要があります。例: totime、fromtime、todate、fromdate、および pittime。

例えば timeformat オプションを TIMEFORMAT 4 と指定する場合、fromtime や totime オプションに指定する値は、12:24:00pm のような時刻に指定する必要があります。TIMEFORMAT 4 で指定する時刻の整数は 12 以下でなければならないため、13:24:00 と指定しても無効です。オプションに指定できる時間の値を最大で 24 とし、コンマを区切り文字として使用したい場合は、TIMEFORMAT 2 を指定する必要があります。

システム・ロケール構成ファイルでの日時形式の構成

ご使用のシステムのロケール・ファイルで日時形式を構成して指定することができます。ロケール・ファイルに日時形式を指定する場合、C 言語の strftime() 関数でサポートされている数値生成型の形式指定

子のサブセットを使用して定義する必要があります。ご使用のロケールでは、以下の指定子を使用して構成設定に日時形式を設定することができます。

日付指定子

- %Y - 4 桁の年。例: 2011
- %y - 下二桁のみの年。例: 11 (2011 ではない)
- %m - 10 進数の月 (1-12)
- %d - 日付 (1-31)

日付指定子のうち、年に指定できる指定子は 1 件だけです。%Y と %y の両方を指定することはおやめください。E 修飾子 (大文字 E) を日付指定子の前に指定して、ご使用のロケールの年、月、または日の代替形式を生成することができます。代替形式が存在しなければ、E 修飾子は無視されます。各指定子は、単一の 7 ビット ASCII 文字で分離してください。一般に使用される区切り文字には、コロン (:)、コンマ (,)、ピリオド (.)、ハイフン (-)、またはスラッシュ (/) 文字が含まれます。マルチバイト文字を区切り文字に使用しないでください。

時刻指定子

- %H - 24 時間形式の時間 (00-23)
- %I - 12 時間形式の時間 (00-12)
- %M - 時間の隣に表示される分 (00-59)
- %S - 分の隣に表示される秒 (00-59)
- %p - AM (午前) または PM (午後) の記号を追加します

時刻指定子のうち、時間に指定できる指定子は 1 件だけです。%I と %H の両方を指定することはおやめください。

O 修飾子 (大文字 O) を時刻指定子の前に指定して、ご使用のロケールの時、分、または秒の代替形式を生成することができます。O 修飾子を %p 指定子の前に指定することはできません。各指定子は、単一の 7 ビット ASCII 文字で分離してください。一般に使用される区切り文字には、コロン (:)、コンマ (,)、またはピリオド (.) が含まれます。マルチバイト文字を区切り文字に使用しないでください。%p 指定子とその前後の区切り文字の間には、区切り文字を指定しないでください。

ロケール設定で構成する時刻形式の例

特定の時刻形式を設定するには、ご使用のロケールの構成ファイルを編集し、お客様のニーズに合わせて `t_fmt` 行を変更します。どの時刻形式を選択した場合も、その時刻形式は出力と入力の両方に適用されます。ロケール構成ファイルの編集が完了したら、**localedef** コマンドを実行して最終ロケール・ファイルを作成してください。

表 77. ロケール構成での時刻形式設定のサンプル (<code>t_fmt</code> 行)	
例	結果
"%H:%M:%S"	<code>hh:mm:ss</code> のフォーマットで時刻を表示します。hh の範囲は 0 から 23 です。
"%H,%M,%S"	<code>hh,mm,ss</code> のフォーマットで時刻を表示します。hh の範囲は 0 から 23 です。
"%I,%M,13p"	時刻を <code>hh,mm,ssA/P</code> の形式で表示します。hh の範囲は 1-12 です。A/P は午前 (英語で AM) または午後 (英語で PM) のローカル省略形です。

ロケール設定で構成する日付形式の例

特定の日付形式を設定するには、構成ファイルを編集し、お客様のニーズに合うように必要に応じて `d_fmt` 行を変更します。どの日付形式を選択した場合も、その日付形式は出力と入力の両方に適用されます。

表 78. ロケール構成での日付形式設定のサンプル (d_fmt 行)	
例	結果
"%m/%d/%y"	MM/DD/YY の形式で日付を表示します。
"%d.%m.%Y"	DD.MM.YYYY の形式で日付を表示します。

Toc

toc オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがファイル・システム・バックアップごとに目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定するために **backup nas** コマンドまたは **include.fs.nas** オプションとともに使用します。

目次情報を保存するかどうかを決定する場合は、以下の点を考慮してください。

- TOC 情報を保存した場合は、QUERY TOC サーバー・コマンドを使用してファイル・システム・バックアップの内容を判別したり、RESTORE NODE サーバー・コマンドを使用して個々のファイルまたはディレクトリー・ツリーをリストアしたりできます。
- Windows バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI を使用して、ファイル・システム・ツリー全体を検査し、リストアするファイルおよびディレクトリーを選択することもできます。
- TOC を作成するには、バックアップ・イメージをバインドする管理クラスのバックアップ・コピー・グループで TOCDESTINATION 属性を定義する必要があります。TOC を作成するには、バックアップ操作中に追加の処理、ネットワーク・リソース、ストレージ・プール・スペース、および (通常は) マウント・ポイントが必要となります。
- TOC 情報を保存しない場合でも、RESTORE NODE サーバー・コマンドを使用して、個々のファイルまたはディレクトリー・ツリーをリストアできます。ただし、各ファイルまたはディレクトリーの完全修飾名およびそのオブジェクトのバックアップが格納されているイメージ名の情報が必要です。

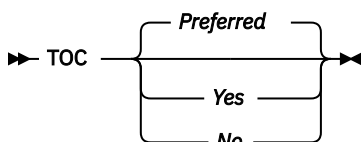
サポートされるクライアント

このオプションは、AIX クライアントおよび Solaris クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

toc 値を含む include.fs.nas ステートメントは、サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイルに入れます。

構文



パラメーター

Yes

NAS ファイル・システム・イメージ・バックアップ中にクライアントが TOC 情報を保存することを指定します。しかし、TOC 作成中にエラーが発生するとバックアップは失敗します。

No

NAS ファイル・システム・イメージ・バックアップ中にクライアントが TOC 情報を保存しないことを指定します。

Preferred

NAS ファイル・システム・イメージ・バックアップ中にクライアントが TOC 情報を保存することを指定します。TOC 作成中にエラーが発生しても バックアップは失敗しません。これはデフォルトです。

注: mode オプションを differential に設定し、toc オプションを preferred または yes に設定しても、最後のフルイメージに TOC がない場合は、クライアントはフルイメージ・バックアップを実行して TOC を作成します。

例

オプション・ファイル:

```
include.fs.nas netappsj/vol/vol0 homemgmtclass toc=yes
```

コマンド・ライン:

```
backup nas -nasnodename=netappsj /vol/vol0 -toc=yes
```

Todate

todate オプションは、 リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を終了する 日時を指定するために、totime オプションと一緒に使用します。

todate と totime オプションを fromtime と fromdate オプションと一緒に使用して、一定の期間内にバックアップまたはアーカイブされたファイルのリストを要求することができます。例えば、2002 年 7 月 1 日午前 6:00 から 2002 年 7 月 30 日午後 11:59 までの間にバックアップされたファイルのリストを要求することができます。

todate オプションは、次のコマンドで使用してください。

- delete backup
- query archive
- query backup
- restore
- restore group
- retrieve

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

➡ TODate = — — date ➡

パラメーター

date

終了日付を指定します。日付は、dateformat オプションで選択したフォーマットで入力します。

コマンドに dateformat を組み込む場合には、fromdate、pitdate、および todate オプションの前に入れる必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/Users/agordon/Documents/*" -todate=12/11/2003
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/home/user1/*" -todate=12/11/2003
```


Totime

totime オプションは、リストア、リトリブ、または照会操作中にバックアップまたはアーカイブの検索を終了する日時を指定するために、todate オプションと一緒に使用します。todate オプションを指定しない場合には、バックアップ/アーカイブ・クライアントはこのオプションを無視します。

totime と todate オプションを fromtime と fromdate オプションと一緒に使用して、一定の期間内にバックアップされたファイルのリストを要求することができます。例えば、2003 年 7 月 1 日午前 6:00 から 2003 年 7 月 30 日午後 11:59 までの間にバックアップされたファイルのリストを要求することができます。

totime オプションは、次のコマンドで使用してください。

- delete backup
- query archive
- query backup
- restore
- restore group
- retrieve

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

► TTime = — — *time* ►

パラメーター

time

終了時刻を指定します。時刻を指定しないと、デフォルトの 23:59:59 になります。時刻は、timeformat オプションで選択したフォーマットで指定します。

コマンドに timeformat オプションを組み込む場合には、fromtime、pittime、および totime オプションの前に入れる必要があります。

例

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/Users/van/Documents/myfiles/*" -todate=09/17/2003 -  
totime=23:00:00
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore "/home/user1/*" -todate=09/17/2003 -totime=23:00:00
```

Txnbytelimit

txnbytelimit オプションは、クライアント・プログラムがトランザクションをサーバーに送信するまでにバッファに入れるキロ (K) バイト数を指定します。

transaction とは、クライアントとサーバーの間でやりとりされる作業の単位です。トランザクションには、トランザクション・グループと呼ばれる複数のファイルまたはディレクトリーを含めることができます。

txnbytelimit オプションを使用すると、サーバーがデータと変更をサーバー・データベースにコミットする前に、クライアントとサーバーの間で送信されるデータ量を制御することができます。送信されるデータ量を制御することにより、クライアントがトランザクションを実行する速度が変更されます。送信さ

れるデータの量は、バックアップの実行時にファイルをまとめてバッチ化する時、またはリストア手順の実行時にサーバーからファイルを受信する時にも、適用されます。

txngroupmax 数に達すると、トランザクションのバイト制限に達していなくても、クライアントはファイルをサーバーに送信します。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「一般」タブの「トランザクション・バッファー・サイズ」フィールドで設定できます。

構文

►► TXNBytelimit — — *number* ◄◄

パラメーター

number

クライアント・プログラムがトランザクションをコミットする前にサーバーに送信するキロバイト数を指定します。値の範囲は 300 から 34359738368 (32 GB) です。デフォルトは 25600 KB です。この数は整数として指定するか、次のいずれかの単位修飾子の付いた整数として指定できます。

K または k (キロバイト)

M または m (メガバイト)

G または g (ギガバイト)

単位の修飾子が指定されていない場合、その整数はキロバイト単位となります。

制約事項: txnbytelimit オプションでは 10 進数はサポートされておらず、1 文字の単位文字のみが許可されます。例: K、M、または G。

例

オプション・ファイル:

txnb 25600

txnb 2097152

txnb 2097152k

txnb 2048m

txnb 2g

txnb 32G

コマンド・ライン:

-txnb=25600

-txnb=16G

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Type

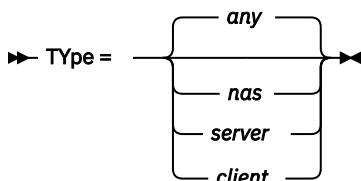
type オプションは、照会するノードのタイプを指定するために **query node** コマンドで使用します。このオプションは、**set event** コマンドでを使用して、活動化、保持、またはリリースを行います。

このオプションは、AIX クライアントで TSM タイプを指定する **set password** コマンドでも有効です。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX クライアントおよび Solaris クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文



パラメーター

nas

サーバーで登録されたすべての NAS ノードを指定します。

server

他の IBM Spectrum Protect サーバーであるクライアント・ノードを指定します。

client

バックアップ/アーカイブ・クライアントであるクライアント・ノードを指定します。

例

コマンド・ライン:

```
query node -type=nas
```

Updatectime

updatectime オプションを使用して、増分バックアップ操作中の変更時刻 (ctime) 属性をチェックします。

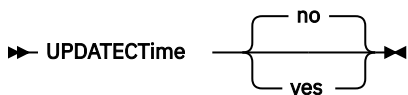
サポートされるクライアント

このオプションは、GPFS ファイル・システム上の AIX および Linux クライアントにのみ有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文



パラメーター

no

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップ操作中の変更時刻 (ctime 属性) をチェックしません。この値がデフォルトです。

yes

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、バックアップ操作時の変更時刻 (ctime 属性) をチェックします。ctime 属性が、前回のバックアップ操作以降変更されている場合、IBM Spectrum Protect サ

ーバー上の `ctime` 属性が更新されます。オブジェクトは ACL または拡張属性のどちらかが含まれる場合を除いて、バックアップされません。クライアントは、ファイルおよびディレクトリーを検査します。

例

オプション・ファイル:

`updatect yes`

コマンド・ライン:

`dsmc incr /proj/gpfs/test/ -updatectime=yes`

Useexistingbase

`useexistingbase` オプションは、NetApp ファイラー・ボリューム上にあるスナップショットをバックアップする場合に使用されます。`useexistingbase` オプションは、バックアップされるボリューム上に存在する最新のスナップショットが、スナップショット差分バックアップ操作中に、基本スナップショットとして使用されることを指定します。

このオプションを指定しない場合は、バックアップされるボリューム上に新しいスナップショットが作成されます。ターゲット・ファイラー・ボリュームは読み取り専用のボリュームのため、ターゲット・ファイラー・ボリュームのスナップショット差分バックアップを実行している場合は、`useexistingbase` を指定する必要があります。`useexistingbase` を指定しないと、新しいスナップショットを読み取り専用のボリュームで作成できないため、ターゲット・ファイラー・ボリュームのスナップショット差分バックアップは失敗します。

ターゲット・ファイラー・ボリュームをバックアップする場合は、`useexistingbase` オプションと `diffsnapshot=latest` オプションを両方使用して、最新の基本スナップショットと最新の差分スナップショットがボリューム・バックアップ中に使用されるようにします。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、コマンド・ラインでのみ有効です。

構文

➡ USEEXISTINGBase ➡

パラメーター

このオプションにはパラメーターがありません。

例

オプション・ファイル:

適用しません。

コマンド・ライン:

```
dsmc incr ¥¥DRFile¥¥UserDataVol_Mirror_Share -snapdiff
-useexistingbase -basenameshotname="nightly.?"
```

関連情報

[Basesnapshotname](#)

Usereplicationfailover

usereplicationfailover オプションは、クライアント・ノードで自動クライアント・フェイルオーバーを行うかどうかを指定します。

このオプションを使用して、クライアント・ノードをフェイルオーバー用に有効にするか、2 次サーバーにフェイルオーバーしないようにします。このオプションは、1 次サーバーで IBM Spectrum Protect サーバー管理者設定によって指定されている構成をオーバーライドします。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、dsm.sys ファイル内のサーバー・スタンザに入れます。

構文



パラメーター

Yes

1 次サーバーが使用不可になった場合に、クライアントが自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることを指定します。クライアントは、1 次サーバーによって指定された構成を使用して、2 次サーバーに接続します。この値がデフォルトです。

No

クライアントが自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーしないことを指定します。

例

オプション・ファイル:

```
USEREPLICATIONFailover no
```

コマンド・ライン:

適用しません。

関連概念

自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

自動フェイルオーバー用のクライアントの構成

2 次サーバーに自動的にフェイルオーバーするように、クライアントを手動で構成することができます。

Users (非推奨)

このオプションは推奨されていません。

V2archive

v2archive オプションは、ファイルだけをサーバーにアーカイブするために、**archive** コマンドで使
します。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ソース・ファイル指定のパス内に存在するディレクトリーを
処理しません。

このオプションは、**filesonly** オプションとは違い、**filesonly** オプションではソース・ファイル指定
のパス内に存在するディレクトリーがアーカイブされます。

v2archive オプションと **dirsonly** オプションは相互に排他的で、両方のオプションを同じ **archive** コ
マンドで使した場合には、エラー・メッセージが表示されます。

このオプションを使用する場合には以下を考慮してください。

- このオプションでアーカイブされた多量のデータをリトリブするとパフォーマンス上の問題が起こる
可能性があります。
- このオプションは、アーカイブされた多量のデータを既に含んでいるサーバーでの期限切れのパフォー
マンスについて考慮中の場合にのみ使用してください。
- v2archive オプションの同じ名前をもつファイルが複数ある場合には、それらのファイルは、それぞ
れのディレクトリー構造で複数回アーカイブされます。v2archive オプションは、ファイルだけをアー
カイブします。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションを
サポートしていません。

構文

➡ V2archive ➡

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

このコマンド:

```
dsmc archive "/Users/user2/Documents/*" -v2archive -su=y.
```

以下のファイルをアーカイブします。

```
/Users/user2/Documents/file1  
/Users/user2/Documents/file2  
/Users/user2/Documents/file3  
/Users/user2/Documents/dir2/file4  
/Users/user2/Documents/dir2/file5
```

注: クライアントは、/Users/user2/Documents および /Users/user2/Documents/dir2 をアー
カイブしません。

このコマンド:

```
dsmc archive "/home/relx/dir1/*" -v2archive -su=y .
```

以下のファイルをアーカイブします。

```
/home/relx/dir1/file1  
/home/relx/dir1/file2  
/home/relx/dir1/file3  
/home/relx/dir1/dir2/file4  
/home/relx/dir1/dir2/file5
```

注: クライアントは、/home/relx/dir1 および /home/relx/dir1/dir2 をアーカイブしません。

Verbose

verbose オプションは、画面に詳細な処理情報を表示したいことを指定します。これはデフォルトです。

incremental、**selective**、または **archive** コマンドを実行すると、バックアップされる各ファイルに関する情報が表示されます。quiet オプションは、この情報を表示させたくない場合に使用します。

以下の動作は、verbose オプションおよび quiet オプションを使用する場合に適用されます。

- サーバーで quiet か verbose オプションのいずれかがサーバー・クライアント・オプション・セットに指定された場合には、そのサーバーで **force** が *no* に設定された場合であっても、そのサーバーの設定がクライアントの値を指定変更します。
- dsm.opt ファイルで quiet を指定し、コマンド・ラインで **-verbose** を指定すると、**-verbose** が適用されます。
- 同じコマンドに対して **-quiet** と **-verbose** の両方を指定した場合は、オプション処理中に最後に検出されたオプションが適用されます。**-quiet -verbose** と指定した場合は、**-verbose** が適用されます。**-verbose -quiet** と指定した場合は、**-quiet** が適用されます。

情報は画面上の「スケジューラー状況」ウィンドウに表示されます。このオプションは、スケジューラーを実行していて、クライアントがスケジュールされた作業を実行している時にのみ適用されます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。このオプションは、プリファレンス・エディターの「コマンド・ライン」タブの「プロセス情報を画面に表示しない」チェック・ボックスで設定できます。

構文

►► VErbose ◄◄

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

オプション・ファイル:
verbose

コマンド・ライン:
-verbose

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Verifyimage

restore image コマンドとともに **verifyimage** オプションを使用して、宛先ターゲット・ボリュームの不良セクター検出を有効にすることを指定します。

ターゲット・ボリューム上で不良セクターが検出された場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、コンソールとエラー・ログに警告メッセージを発行します。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Oracle Solaris、およびすべての Linux クライアントにのみ有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

構文

▶ VERIFyImage ◀

パラメーター

このオプションにパラメーターはありません。

例

コマンド・ライン:
dsmc restore image /usr -verifyimage

Virtualfsname

backup group コマンドで **virtualfsname** オプションを使用して、操作を実行するグループ用の仮想ファイル・スペース名を指定します。 **virtualfsname** は既存のファイル・スペース名と同じにすることはできません。

サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

構文

▶ VIRTUALFsname = — — *fsname* ◀

パラメーター

fsname

操作を実行するグループに対してコンテナ名を指定します。

例

コマンド・ライン:

```
backup group -filelist=/Users/van/Documents/filelist1 -groupname=group1  
-virtualfsname=virtfs -mode=full
```

```
backup group -filelist=/home/dir1/filelist1 -groupname=group1  
-virtualfsname=virtfs -mode=full
```

Virtualmountpoint

virtualmountpoint オプションは、あるファイル・システム内の特定のディレクトリーから始まるファイルをバックアップ処理対象にしたい場合に、そのファイル・システムに仮想マウント・ポイントを定義します。

virtualmountpoint オプションを使用してファイル・システム内のディレクトリーを識別すると、バックアップするファイルへの直接のパスが得られるので、処理時間が短縮されることになります。ファイル・システム内に仮想マウント・ポイントを定義しておいた方が、**domain** オプションを使用してファイル・システムを定義し、その後で **exclude** オプションを **include-exclude** オプション・リストで使用するバックアップする必要がないファイルを除外するよりも効率的です。

virtualmountpoint オプションを使用すると、複数のファイル・システムの仮想マウント・ポイントと、ローカルおよびリモート・ファイル・システムの仮想マウント・ポイントが定義でき、また、同じファイル・システム内に複数の仮想マウント・ポイントが定義できます。仮想マウント・ポイントは、自動マウンターの処理するファイル・システムでは使用できません。

virtualmountpoint オプションを使用して、ある制限は付きますが、サポートされないファイル・システムをバックアップできます。サポートされないファイル・システムでの virtualmountpoint の使用については、168 ページの『ファイル・システムおよび ACL サポート』を参照してください。

注: 仮想マウント・ポイントとして指定したいディレクトリーがシンボリック・リンクの場合は、followsymbolic オプションを Yes に設定します。そのオプションが no (デフォルト) に設定されていると、シンボリック・リンクを仮想マウント・ポイントとして使用することはできません。また、ファイル・システムをバックアップして、仮想マウント・ポイントを追加し、ファイル・システムで他の増分を実行した場合、仮想マウント・ポイント・ディレクトリー内のファイルとディレクトリーの有効期限が切れます。これは、それらのファイルとディレクトリーは仮想マウント・ポイント・ディレクトリー内に論理的に含まれていますが、ファイル・システムには含まれていないためです。

仮想マウント・ポイントを定義した後、デフォルトのクライアント・オプション・ファイルの中で、あるいは **incremental** コマンドで domain オプションを使用してパスとディレクトリー名を指定すると、その仮想マウント・ポイントを増分バックアップ・サービスに組み込むことができます。

virtualmountpoint オプションを使用してバックアップまたはアーカイブを行う場合は、**query filesystem** コマンドによって他のファイル・システムとともに仮想マウント・ポイントが応答にリストされます。一般に、仮想マウント・ポイントとして定義したディレクトリーは実際のファイル・システムと見なされ、そのデータのリストアまたはリトリブを行うには dsm.sys ファイルで virtualmountpoint オプションを指定する必要があります。

注: virtualmountpoint オプションを指定すると、そのオプションによって指定されるパスが、デフォルトのバックアップ・ドメイン (domain all-local) に追加されます。virtualmountpoint パスは、それが指している実際のファイル・システムのタイプには関係なく、常にローカルの「マウント・ポイント」と見なされます。

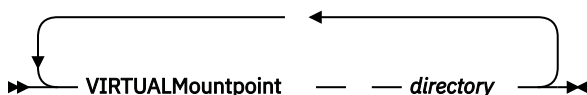
サポートされるクライアント

このオプションは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX クライアントで有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

directory

ファイル・システムの仮想マウント・ポイントとして使用したいディレクトリーのパスおよびディレクトリー名を指定します。パスおよびディレクトリー名には、ワイルドカード文字は使用できません。

クライアント・システム・オプション・ファイルに組み込む各 virtualmountpoint オプションごとに、仮想マウント・ポイントを1つだけ定義します。virtualmountpoint オプションを必要なだけ複数回使用すれば、使用したい仮想マウント・ポイントをすべて定義することができます。

例

オプション・ファイル:

```
virtualmountpoint /afs/xyzcorp.com/home/ellen  
virtualmountpoint /afs/xyzcorp.com/home/ellen/test/data
```

コマンド・ライン:

適用しません。

Virtualnodename

virtualnodename オプションは、別のワークステーションにファイルをリストアまたはリトリブしたい時に、このワークステーションのノード名を指定します。

クライアント・オプション・ファイルまたはコマンドで virtualnodename オプションを使用する場合:

- クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) の nodename オプションで指定した名前を指定する必要があります。この名前は、ワークステーションで **hostname** コマンドが戻した名前とは異なるものでなければなりません。
- パスワードが必要な場合には、クライアントが、指定されたノードに割り当てられたパスワードを求めるプロンプトを出します (passwordaccess オプションが generate に設定されている場合でも)。正しいパスワードを入力すると、指定されたノードからバックアップおよびアーカイブされたすべてのファイルにアクセスすることができます。

サーバーへの接続時には、クライアントは自分自身をサーバーに対して識別する必要があります。このログイン識別は次のように判別されます。

- nodename および virtualnodename オプションが指定されていない、あるいは仮想ノード名がコマンド・ラインに指定されていない場合には、デフォルトのログイン ID は **hostname** コマンドによって戻された名前となります。
- nodename オプションが指定されていると、nodename オプションで指定された名前が **hostname** コマンドによって戻された名前をオーバーライドします。
- virtualnodename オプションが指定されているか、あるいはコマンド・ラインで仮想ノード名が指定されると、その名前を、**hostname** コマンドによって戻された名前と同じにすることはできません。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れます。

構文

►► VIRTUALNodename — — *nodename* ◀◀

パラメーター

nodename

どのノードのために IBM Spectrum Protect サービスを要求するのかを、1 から 64 の文字の名前で指定します。デフォルト値はありません。

例

オプション・ファイル:

```
virtualnodename cougar
```

コマンド・ライン:
-virtualn=banshee

このオプションは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードでは無効です。

Vmbackdir

vmbackdir オプションは、クライアントが仮想マシンのフル VM バックアップおよびリストア操作中に作成される制御ファイルを保存する一時ディスク・ロケーションを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

データ・ムーバー・ノード上のクライアントは、仮想マシンのフル VM バックアップを開始するときに、バックアップされる仮想マシンとそのデータに関連付けられたファイル内にメタデータを作成します。メタデータを含むファイルは制御ファイルと呼ばれます。

フル VM バックアップ操作中、バックアップが完了し、仮想マシンのデータと制御ファイルの両方がサーバー・ストレージに保存されるまで、メタデータはデータ・ムーバー・ノード上のディスクに保存されます。フル VM リストア操作では、制御ファイルがサーバーからコピーされ、データ・ムーバー・ディスクに一時保管されます。制御ファイルはそこで仮想マシンとそのデータのリストアに使用されます。バックアップまたはリストア操作が完了すると、制御ファイルは不要になり、クライアントは一時ディスク・ロケーションから制御ファイルを削除します。

このオプションで指定するディレクトリーは、フル VM バックアップからの制御情報を収容するのに十分なフリー・スペースがあるドライブ上になければなりません。

サポート対象のデータ・ムーバー

このオプションは、vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている Linux および Windows のデータ・ムーバーに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定するか、**backup vm** または **restore vm** コマンドのオプションとしてコマンド・ラインに指定します。

構文

➡ VMBACKDir — directory →

パラメーター

directory

制御ファイルが保管されるバックアップ・サーバー上のパスを指定します。

デフォルトは、/tmp/tsmvmbackup/fullvm/ です。

例

オプション・ファイル:

VMBACKD /tmp/tmsvmbakup/

コマンド・ライン:

dsmc backup vm -VMBACKUPT=fullvm -VMBACKD=/home/vmware/control_files

dsmc restore vm -VMBACKUPT=fullvm -VMBACKD=/home/mine/bkup_ctrl

vmbackuplocation

vmbackuplocation オプションを **backup vm** コマンドまたは **restore vm** コマンドで使用して、仮想マシンのバックアップ操作とリストア操作のバックアップ・ロケーションを指定します。

このオプションは、VMware 仮想マシンのみ有効です。このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware を使用するためのライセンス交付を受けている必要があります。

リストア操作では、**vmrestoretype** オプションが mountcleanup または mountcleanupall に設定されている場合、このオプションは無視されます。

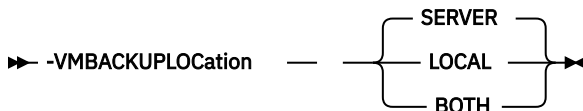
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用できます。

オプション・ファイル

このオプションは、**backup vm** コマンドまたは **restore vm** コマンドのコマンド・ラインで指定する必要があります。このオプションをクライアント・オプション・ファイルの中で設定することはできません。

構文



パラメーター

SERVER

バックアップ操作では、仮想マシンが IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップされることを指定します。

リストア操作では、仮想マシンが IBM Spectrum Protect サーバーからリストアされることを指定します。

この値がデフォルトです。

LOCAL

バックアップ操作では、仮想マシンがハードウェア・ストレージ上でバックアップされることを指定します。このバックアップは、増分バックアップが指定されている場合でも仮想マシンのフル・イメージ・スナップショットになります。

ローカル・バックアップを作成するには、仮想マシンが VMware 仮想ボリューム (VVOL) データ・ストアに保管されている必要があります。仮想マシンの仮想ディスクが VVOL データ・ストア内でない場合、ローカル・バックアップは許可されません。

リストア操作では、仮想マシンがハードウェア・ストレージ上の永続スナップショットからリストアされることを指定します。

ローカル・スナップショットからリストアする場合、復帰できるのは既存の仮想マシンのみです。削除した仮想マシンをリストアすることはできません。また、仮想マシンを別の名前またはロケーションにリストアすることもできません。

restore vm コマンドに以下のパラメーターが使用されている場合、ローカル・リストアは無効です。

- **VMNAME**
- **DATACENTER**
- **HOST**
- **DATASTORE**
- **:vmdk**

この値は、`vmrestoretype` オプションが以下の値のいずれかに設定されている場合も無効です。これらの値が設定されていると、エラー・メッセージが表示されます。

- `instantaccess`
- `instantrestore`
- マウント

ローカル・スナップショットではネットワーク・データ移動が必要ではないため、バックアップ操作およびリストア操作は、サーバーへのバックアップ操作およびリストア操作より高速で行うことができます。

BOTH

バックアップ操作では、仮想マシンが IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップされ、さらにローカルでもバックアップされることを指定します。サーバーに対して増分バックアップが構成されている場合でも、ローカル・バックアップは、常に VM のフル・イメージ・スナップショットです。

リストア操作では、ローカル・バックアップかサーバー・バックアップかに関係なく、最新の活動バージョンから仮想マシンがリストアされることを指定します。どちらの活動バックアップもタイム・スタンプが同じである場合、リストアにはローカル・バックアップが使用されます。

この値は、LOCAL 値に関して上記でリストされているパラメーター値および `vmrestoretype` オプション値を使用する場合、無効になります。

例

コマンド・ライン:

仮想マシン `vm1` のサーバーでのフルバックアップおよびローカルでのフルバックアップを 実行します。

```
dsmc backup vm vm1 -vmbackuplocation=BOTH -vmbackuptype=Fullvm
```

仮想マシン `vm1` のローカル・リストアを実行します。

```
dsmc restore vm vm1 -vmbackuplocation=LOCAL
```

Vmbackupmailboxhistory

`vmbackupmailboxhistory` オプションは、仮想マシン (VM) 上で IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection for Microsoft Exchange Server が検出された場合に、VM バックアップを使用してメールボックス履歴を自動的にアップロードするかどうかを指定します。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware ゲスト・バックアップのデータ・ムーバーとして機能するクライアントに有効です。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れます。

構文



パラメーター

Yes

VM 上で IBM Spectrum Protect for Mail: Data Protection for Microsoft Exchange Server が検出された場合に、VM バックアップを使用してメールボックス履歴を自動的にアップロードします。

No

VM バックアップを使用してメールボックス履歴を自動的にアップロードしません。


例

オプション・ファイル:

```
vmbackupmailboxhistory yes
```

Vmbackuptype

vmbackuptype オプションは、**backup VM** コマンドまたは **restore VM** コマンドで使用して、実行する仮想マシンのバックアップまたはリストアのタイプを指定します。また、このオプションを **query VM** コマンドで使用して、特定のバックアップ・タイプでバックアップされた仮想マシンのみを照会結果に含めるようにフィルタリングすることもできます。例については、**query VM** コマンドの説明を参照してください。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

VMware のフル VM バックアップを指定できます。


サポートされるクライアント

このオプションは、vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている Linux データ・ムーバーに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文

➡ VMBACKUPTYPE  ➡

パラメーター

Fullvm

この値は、VMware 仮想マシンの従来のフル VM バックアップを実行する場合に指定します。これは、Linux クライアントのデフォルトのバックアップ・タイプです。

例

オプション・ファイル:

```
VMBACKUPT full
```

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm vm1 -VMBACKUPT=full -vmchost=virtctr -vmcuser=virtctr_admin -  
vmcpw=xxxxxx
```

VMware VirtualCenter マシン virtctr.example.com を使用して、IBM Spectrum Protect サーバーへの vm1.example.com のフル仮想マシン・バックアップをマシン名 vm1 で実行します。

Vmchost

vmchost オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのホスト名を指定します。

VirtualCenter が使用可能であれば使用してください。VirtualCenter サーバーを使用できず、複数の ESX サーバーで複数システムのバックアップを実行する必要がある場合は、このオプションを指定せずに、それぞれの ESX サーバーごとに変わることができるように、コマンドでオプションを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このコマンドは、VMware 仮想マシンのオフホスト・バックアップを実行するように構成されたクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt)、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れるか、コマンド・ラインに指定してください。

構文

▶ VMCHost — — hostname ◀

パラメーター

hostname

バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのホスト名を指定します。

例

オプション・ファイル:

VMCH vcenter.storage.usca.example.com

コマンド・ライン:

-VMCH=esx1.storage.usca.example.com

Vmcpw

vmcpw オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、vmcuser オプションによって指定された VMware VirtualCenter または ESX ユーザー ID のパスワードを指定します。

VirtualCenter が使用可能であれば使用してください。VirtualCenter サーバーを使用できず、複数の ESX サーバーで複数システムのバックアップを実行する必要がある場合は、このオプションを指定せずに、それぞれの ESX サーバーごとに変わることができるように、コマンドでオプションを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンのバックアップに使用される vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている、サポートされる Linux クライアントでのみ有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れるか、コマンド・ラインに指定してください。

1. 「編集」 > 「クライアント・プリファレンス」 > 「VM バックアップ」をクリックします。「パスワード」フィールドに、保存するパスワードを入力します。
2. 「OK」をクリックします。

プリファレンス・エディターを使用しない場合は、それに代わる手段として、**set password** コマンドを使用して、パスワードをローカルに保存することもできます。例えば、次のようにします。

```
dsmc SET PASSWORD -type=vm  
vcenter.us.ibm.com Administrator secret
```

構文

➡ VMCPw — — pwname ➡

パラメーター

pwname

バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのパスワードを指定します。

例

オプション・ファイル:

VMCPw SECRET

コマンド・ライン:

-VMCPw=SECRET

関連資料

772 ページの『Set Password』

set password コマンドを使用して、ワークステーションの IBM Spectrum Protect パスワードの変更、別のサーバーへのアクセスに使用する資格情報の設定を行います。

Vmctlmc

このオプションは、仮想マシンの制御ファイルのバックアップ時に使用する管理クラスを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

デフォルトでは、仮想マシンの制御ファイルは、デフォルト管理クラスにバインドされています。vmmc オプションを使用すると、仮想マシンのデータ・ファイルと仮想マシンの制御ファイルのバインド先に異なる管理クラスを指定できます。vmctlmc オプションは、仮想マシンの制御ファイルのデフォルト管理クラスと vmmc オプションをオーバーライドします。

ある特定の状況では、制御ファイルを、データ・ファイルとは異なる管理クラスにバインドすることが適切または必要な場合があります。

仮想マシン・データ・ファイルがテープにバックアップされる場合は、vmctlmc オプションが必要です。仮想マシンの制御ファイルは、テープにマイグレーションしないディスク・ベースのストレージ・プールにバックアップする必要があります。ストレージ・プールは、ランダム・アクセス・ボリュームと順次ファイル・ボリュームで構成できます。また、ストレージ・プールは重複排除プールにすることもできます。vmctlmc オプションを使用して、そのようなストレージ・プールにデータを保存する管理クラスを指定します。

制約事項: `vmctlmc` オプションに指定される管理クラスは、仮想マシンの制御ファイルの宛先ストレージ・プールのみ決定します。制御ファイルの保存は、`vmmc` オプション (指定した場合)、またはデフォルト管理クラスによって決定されます。仮想マシンの制御ファイルの保存は、常に仮想マシン・データ・ファイルの保存と一致します。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンを保護するデータ・ムーバー・ノードとして機能するクライアントに有効です。

このオプションは、永久増分バックアップ・モードを使用する仮想マシン・バックアップにのみ使用することができます。

このオプションは、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware または IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for Microsoft Hyper-V を使用するライセンスがある場合にのみ使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、システム・オプション・ファイル `dsm.sys` に入れます。

構文

➡ `VMCTLmc` — *class_name* ➡

パラメーター

class_name

仮想マシンの制御ファイルのバックアップに適用する管理クラスを指定します。このオプションを設定しない場合、`vmmc` オプションで指定された管理クラスが使用されます。このオプションを設定せず、`vmmc` オプションも設定されていない場合は、ノードのデフォルト管理クラスが使用されます。

例

オプション・ファイル:
`vmctlmc diskonlymc`

コマンド・ライン:
適用しません。

Vmcuser

`vmcuser` オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのユーザー名を指定します。

VirtualCenter が使用可能であれば使用してください。VirtualCenter サーバーを使用できず、複数の ESX サーバーで複数システムのバックアップを実行する必要がある場合は、このオプションを指定せずに、それぞれの ESX サーバーごとに変わることができるように、コマンドでオプションを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンのオフホスト・バックアップを実行するように構成されたクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt)、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れるか、コマンド・ラインに指定してください。

構文

➡ VMCUser — — username ➡

パラメーター

username

バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのユーザー名を指定します。

Virtual Center を操作する場合は、その Virtual Center をホスティングする Windows システムへのアクセス権限を持つユーザー ID が必要です。このユーザー ID は、管理者特権、あるいは[技術情報 1659544](#) で識別された最小の特権のいずれかを持っていることが必要です。

例

オプション・ファイル:

VMCUser administrator

コマンド・ライン:

```
backup vm -VMCUser=domainname¥administrator
```

コマンド・ライン:


ESX サーバーへの接続の例:

```
backup vm -VMCUser=root
```

Vmdatastorethreshold

仮想マシンの VMware データ・ストアごとにスペース使用量のしきい値のパーセントを設定するには、vmdatastorethreshold オプションを使用します。

このオプションを指定する場合、仮想マシンのスナップショットが作成される前にスペース使用量を検査します。このしきい値を超えると、仮想マシンはバックアップされません。このオプションを設定して、仮想マシンのバックアップ時のスペース不足エラーを防止します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) または **backup vm** コマンドを使用してコマンド・ラインで指定できます。クライアント・オプション・セットの IBM Spectrum Protect バージョン 7.1.5 以降のサーバー上でもこのオプションを含められます。このオプションはプリファレンス・エディターでも設定できます。

構文

➡ VMDATASTOREThreshhold — パーセン★

パラメーター

percent

バックアップされる仮想マシンの各 VMware データ・ストアのしきい値のパーセントを指定します。0 から 100 の整数を指定できます。デフォルト値は 100 です。このオプションを設定しない場合、クライアントは、最初に既存のスペース使用量を検証せずに仮想マシンのバックアップを開始します。

要件:

- スナップショットが VMware データ・ストアの使用可能なスペースをすべて使い尽くすことがないように、十分に低いしきい値が設定されていることを確認してください。そうでなければ、VMware データ・ストアでスペース不足が発生し、スナップショットが作成されません。
- データ・ムーバー・ノードとして機能する複数のクライアントを使用する場合は、各データ・ムーバーのオプション・ファイルにこのオプションを追加する必要があります。
- クライアントは、仮想マシンのディスクのスナップショットを含む VMware データ・ストアのデータ使用量を検査します。デフォルトでは、スナップショットは、親仮想ディスク (.vmdk) ファイルと同じディレクトリー内に作成されます。

VM 構成ファイルで `workingDir` オプションを使用して、スナップショットのロケーションを同じデータ・ストアまたは別のデータ・ストア上の新規ディレクトリーに変更する場合は、作業ディレクトリーのパスが正しいことを確認してください。パスに誤りがある場合、クライアントは正しくないデータ・ストアのデータ使用量を検証する可能性があります。

`EXCLUDE.VMDISK` オプションを使用して 1 つ以上のディスクをバックアップから除外する場合、しきい値検査はそれらのディスクでも実行されます。これらのディスクはバックアップされませんが、VMware はこれらのディスクのスナップショットを作成します。

独立ディスクは、これらのディスクのスナップショットが VMware データ・ストアのスペースを使用しないため、スペース検証処理中に検査されません。

例 1

仮想マシン `vm1` は、`datastore1` および `datastore2` にまたがっています。仮想マシンがバックアップされる前に両方の VMware データ・ストアの使用率が多くても 90% であるようにするために、`vmdatastorethreshold` オプションを 90 に設定します。

オプション・ファイル:

```
vmdatastorethreshold 90
```

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm vm1 -vmdatastorethreshold=90
```

例 2

`datastore2` のデータ・ストアしきい値が 85 に設定されています。仮想マシン `vm5` のバックアップ中にデータ・ストアのしきい値を超過しました。エラー・メッセージは次の通りです:

```
ANS14200E 仮想マシン 'vm5'は、データ・ストア 'datastore2'
のデータ使用率がデータ・ストアのしきい値である 85% を超えているため、
バックアップできませんでした。
```

`vmdatastorethreshold` オプションの値を 95 に増やして、バックアップを再開します。

オプション・ファイル:

```
vmdatastorethreshold 95
```

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm vm5 -vmdatastorethreshold=95
```

関連資料

[670 ページの『Backup VM』](#)

Vmdefaultdvportgroup

このオプションを使用して、バックアップ時には分散仮想ポート・グループに接続されていたが、リストア操作のターゲット・ホストに同様の分散仮想ポート・グループが含まれていない仮想マシンについて、**restore vm** 操作時に使用する NIC のポート・グループを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

このオプションは、Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップ操作およびリストア操作には適用されません。

サポートされるクライアント

このオプションは、vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) とクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れるか、**restore vm** コマンドのコマンド・ライン・パラメーターとして指定してください。

構文

➡ VMDEFAULTDVPORTGROUP — *portgroup_name* ➡

パラメーター

portgroup name

使用するポート・グループの名前を指定します。ポート・グループ名は、大/小文字を区別します。

例

オプション・ファイル:

```
VMDEFAULTDVPORTGROUP dvPortGroup
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore vm vm123 -VMDEFAULTDVPORTGROUP=dvPortGroup
```

関連資料

[608 ページの『Vmdefaultnetwork』](#)

このオプションを使用して、バックアップ時には分散仮想ポート・グループに接続されていたが、リストア操作のターゲット・ホストで分散スイッチ・ポートが構成されていない仮想マシンについて、**restore vm** 操作時に使用する NIC のネットワークを指定します。

[608 ページの『Vmdefaultdvswitch』](#)

このオプションを使用して、`vmdefaultdvportgroup` オプションで設定したポート・グループが含まれる分散仮想スイッチ (dvSwitch) を指定します。このオプションは、`vmdefaultdvportgroup` オプションも指定しない限り、効果がありません。

Vmdefaultdvswitch

このオプションを使用して、`vmdefaultdvportgroup` オプションで設定したポート・グループが含まれる分散仮想スイッチ (dvSwitch) を指定します。このオプションは、`vmdefaultdvportgroup` オプションも指定しない限り、効果がありません。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) とクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れるか、**restore vm** コマンドのコマンド・ライン・パラメーターとして指定してください。

構文

➡ VMDEFAULTDVSWITCH — *dvSwitch* ➡

パラメーター

dvSwitch

使用する仮想スイッチの名前を指定します。仮想スイッチ名は、大/小文字を区別します。

例

オプション・ファイル:

```
VMDEFAULTDVSWITCH dvSwitch
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore vm vm123 -VMDEFAULTDVSWITCH=dvSwitch -VMDEFAULTDVPORTGROUP=dvPortGroup
```


関連資料

[607 ページの『Vmdefaultdvportgroup』](#)

このオプションを使用して、バックアップ時には分散仮想ポート・グループに接続されていたが、リストア操作のターゲット・ホストに同様の分散仮想ポート・グループが含まれていない仮想マシンについて、**restore vm** 操作時に使用する NIC のポート・グループを指定します。

Vmdefaultnetwork

このオプションを使用して、バックアップ時には分散仮想ポート・グループに接続されていたが、リストア操作のターゲット・ホストで分散スイッチ・ポートが構成されていない仮想マシンについて、**restore vm** 操作時に使用する NIC のネットワークを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) とクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れるか、**restore vm** コマンドのコマンド・ライン・パラメーターとして指定してください。

構文

➡ VMDEFAULTNETWORK — *vm_network_name* ➡

パラメーター

vm_network_name

使用する仮想マシン・ネットワークの名前を指定します。ネットワーク名は、大/小文字を区別します。名前にスペース文字が含まれる場合は、名前を引用符で囲みます。

例

オプション・ファイル:

```
VMDEFAULTNETWORK "VM Network"
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore vm vm123 -VMDEFAULTNETWORK="VM Network"
```

関連資料

607 ページの『Vmdefaultdvportgroup』

このオプションを使用して、バックアップ時には分散仮想ポート・グループに接続されていたが、リストア操作のターゲット・ホストに同様の分散仮想ポート・グループが含まれていない仮想マシンについて、**restore vm** 操作時に使用する NIC のポート・グループを指定します。


608 ページの『Vmdefaultdvswitch』

このオプションを使用して、vmdefaultdvportgroup オプションで設定したポート・グループが含まれる分散仮想スイッチ (dvSwitch) を指定します。このオプションは、vmdefaultdvportgroup オプションも指定しない限り、効果がありません。

Vmenabletemplatebackups

vmenabletemplatebackups オプションは、クライアントが vCenter サーバーの仮想マシンを保護するときに、VMware テンプレート仮想マシンをバックアップするかどうかを指定します。VMware テンプレート仮想マシンは ESXi ホスト内にある場合にはバックアップできません。ESXi がテンプレートをサポートしていないためです。

このオプションを有効にすると、VMware テンプレート・マシンをフル VM バックアップ操作に組み込むことができます。既存の **Backup VM** コマンドと DOMAIN.VMFULL オプションを使用して、バックアップ操作に組み込む仮想マシンを指定することができます。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

増分バックアップはサポートされておらず、スナップショットも取得されないため、MODE=IFFULL を使用する必要があります。VMware テンプレート仮想マシンが前回のバックアップ以降に変更されていないくても、それらの新規バックアップを強制実行するには、MODE=IFFULL を使用します。

vmenabletemplatebackups が有効にされている場合、MODE=IFINCREMENTAL を使用して開始されたバックアップ処理は、すべて MODE=IFFULL を使用して処理されます。VMware テンプレート VM は、前回のバックアップが実施されて以降に変更された場合のみバックアップに組み込まれます。

このオプションが有効である場合、vmvstortransport オプションに NBDSSL または NBD が含まれていることを確認してください。このオプションが有効な状態で SAN または HOTADD トランスポート・モードのみを使用すると、テンプレート・マシンのバックアップが失敗します。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt)、またはクライアント・オプション・セットのサーバーのコマンド・ラインで設定できます。

「VM バックアップ」タブのプリファレンス・エディターでも設定できます (「仮想マシン・テンプレートのバックアップ」オプションを選択します)。

構文



パラメーター

No

テンプレート仮想マシンがフル VM バックアップ操作に組み込まれないことを指定します。これはデフォルト設定です。

Yes

テンプレート VM がフル VM バックアップ操作に組み込まれることを指定します。

例

オプション・ファイル

```
vmenabletemplatebackups yes
```

コマンド・ライン

VMware テンプレート VM をバックアップします

```
dsmc backup vm vmname -VMENABLETEMPLATEBACKUPS=YES
```

ここで *vmname* はテンプレート・マシン名です。

コマンド・ライン

VMware テンプレート VM を同じロケーションと名前にリストアします

```
dsmc restore vm vmname -VMENABLETEMPLATEBACKUPS=YES
```

ここで *vmname* はテンプレート・マシン名です。

コマンド・ライン

テンプレート仮想マシンを新しいロケーションにリストアします

```
dsmc restore vm vmname -vmname=win7x64  
-datastore=datastore22 -host=supersht.labx.com  
-datacenter="Lab Center" -VMENABLETEMPLATEBACKUPS=YES
```

ここで *vmname* はテンプレート・マシン名です。「win7x64」は新しいテンプレート VM 名です。新しいデータ・センター、ホスト、およびデータ・ストアも組み込まれます。

関連資料

670 ページの『Backup VM』

747 ページの『Restore VM』

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

395 ページの『Domain.vmfull』


domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

Vmlimitperdatastore

vmlimitperdatastore オプションは、最適化されたバックアップ操作中に並列で処理できる、データ・ストア内の仮想マシン (VM) と仮想ディスクの数を指定します。

最適化されたバックアップ操作とは、VM レベル、仮想ディスク・レベル、あるいはサブディスク・レベルでの並列バックアップ機能が有効にされたバックアップ操作です。

vmlimitperdatastore オプションは、*vmmaxparallel* オプション、*vmmaxbackupsessions* オプション、および *vmlimitperhost* オプションと連携して、バックアップ操作を最適化し、vSphere インフラストラクチャーのホストでバックアップにより発生する可能性があるリソースの量を制御できます。これらのオプションの値を調整して、ご使用の環境におけるバックアップで最適なパフォーマンスを得られる値を見つけてください。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

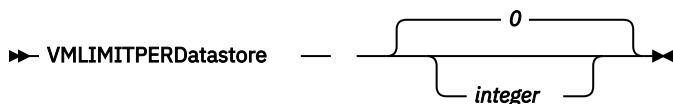
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (*dsm.sys*)、またはクライアント・オプション・ファイル (*dsm.opt*) あるいは **Backup VM** のコマンド・ラインで有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

integer

最適化されたバックアップ操作時に組み込まれる、データ・ストアごとの VM の最大数を指定します。指定できる最大数は、50 の VM です。デフォルトは 0 (ゼロ) です。

0 の指定は、データ・ストアから並列でバックアップできる VM の数を考慮しないことを意味します。代わりに、*vmmaxparallel* オプションで指定する値を使用して、バックアップに組み込む VM の最大数を制限します。*vmlimitperdatastore* オプションは、VM データが複数のデータ・ストアに存在する場合でも適用されます。

例

オプション・ファイル

VMLIMITPERD 5

コマンド・ライン:

dsmc backup vm -VMLIMITPERD=5

関連資料

[670 ページの『Backup VM』](#)

[395 ページの『Domain.vmfull』](#)

domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

[613 ページの『Vmmxbackupsessions』](#)

vmmxbackupsessions オプションは、最適化されたバックアップ操作に組み込むことができる、仮想マシン (VM) データをサーバーに移動する IBM Spectrum Protect サーバー セッションの最大数を指定します。

[615 ページの『Vmmxparallel』](#)

vmmxparallel オプションを使用すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントの単一インスタンスを使用して、複数の仮想マシンの最適化されたバックアップを構成できます。このオプションは、ある時点で IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップできる仮想マシンの最大数を指定します。

[612 ページの『Vmlimitperhost』](#)

vmlimitperhost オプションは、最適化されたバックアップ操作中に並列で処理できる、ホスト内の仮想マシン (VM) と仮想ディスクの数を指定します。

関連情報

[複数の仮想マシンの並列バックアップ](#)

Vmlimitperhost

vmlimitperhost オプションは、最適化されたバックアップ操作中に並列で処理できる、ホスト内の仮想マシン (VM) と仮想ディスクの数を指定します。

最適化されたバックアップ操作とは、VM レベル、仮想ディスク・レベル、あるいはサブディスク・レベルでの並列バックアップ機能が有効にされたバックアップ操作です。

vmlimitperhost オプションは、vmmxparallel オプション、vmmxbackupsessions オプション、および vmlimitperdatastore オプションと連携して、バックアップ操作を最適化し、vSphere インフラストラクチャーのホストでバックアップにより発生する可能性があるリソースの量を制御できます。これらのオプションの値を調整して、ご使用の環境におけるバックアップで最適なパフォーマンスを得られる値を見つけてください。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合에만使用可能です。

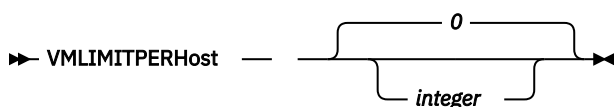
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、またはクライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) あるいは **Backup VM** のコマンド・ラインで有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

integer

最適化されたバックアップ操作に組み込むことができる、ESX サーバーごとの VM の最大数を指定します。指定できる最大数は、50 の VM です。デフォルトは 0 (ゼロ) です。

0 の指定は、ESX サーバーから並列でバックアップできる VM の数を考慮しないことを意味します。代わりに、vmmxparallel オプションで指定する制限を使用して、バックアップに組み込む VM の最大数を制限します。

例

オプション・ファイル

VMLIMITPERH 5

コマンド・ライン:

dsmc backup vm -VMLIMITPERH=5

関連資料

670 ページの『Backup VM』

395 ページの『Domain.vmfull』

domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

615 ページの『Vmmxparallel』

vmmxparallel オプションを使用すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントの単一インスタンスを使用して、複数の仮想マシンの最適化されたバックアップを構成できます。このオプションは、ある時点で IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップできる仮想マシンの最大数を指定します。

612 ページの『Vmlimitperhost』

vmlimitperhost オプションは、最適化されたバックアップ操作中に並列で処理できる、ホスト内の仮想マシン (VM) と仮想ディスクの数を指定します。

関連情報

[複数の仮想マシンの並列バックアップ](#)

Vmmxbackupsessions

vmmxbackupsessions オプションは、最適化されたバックアップ操作に組み込むことができる、仮想マシン (VM) データをサーバーに移動する IBM Spectrum Protect サーバー セッションの最大数を指定します。

最適化されたバックアップ操作とは、VM レベル、仮想ディスク・レベル、あるいはサブディスク・レベルでの並列バックアップ機能が有効にされたバックアップ操作です。

VMware VM の場合、vmmxbackupsessions オプションは、vmmxparallel オプション、vmlimitperdatastore オプション、および vmlimitperhost オプションと連携して、バックアップ操作を最適化し、vSphere インフラストラクチャーのホストでバックアップにより発生する可能性があるリソースの量を制御できます。これらのオプションの値を調整して、ご使用の環境におけるバックアップで最適なパフォーマンスを得られる値を見つけてください。

サポートされるクライアント

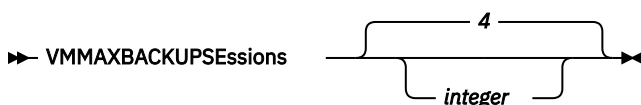
 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

VMware VM の場合、このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、またはクライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) あるいは **Backup VM** のコマンド・ラインで有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

integer

バックアップ操作中に作成できる IBM Spectrum Protect サーバー セッションの最大数を指定します。デフォルトは 4 です。最大値は 100 です。

vmmaxbackupsessions オプションを vmmaxparallel オプションまたは maxnummp サーバー・パラメーターと一緒に使用する方法について、以下の情報を確認してください。

vmmaxparallel

vmmaxparallel オプションは、ある一時点で IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップできる仮想マシンの最大数を指定します。vmmaxbackupsessions オプションの値は、vmmaxparallel オプションの値以上である必要があります。

この値が vmmaxparallel オプションより小さい場合、次のメッセージが返され、値が vmmaxparallel オプションと同じ値に変更されます。

ANS9995W VMMAXBACKUPSESSIONS オプションの値は *number_value* です。この値は、VMMAXPARALLEL オプションの値 *number_value* 以上である必要があります。値は、VMMAXPARALLEL オプションの値に設定されます。

maxnummp

maxnummp サーバー・パラメーターは、ストレージ・プールのコピー宛先が FILE または TAPE の場合に、ノードがサーバーで使用できるマウント・ポイントの最大数を指定します。maxnummp パラメーターは、vmmaxparallel および vmmaxbackupsessions のオプション設定値以上である必要があります。クライアントの複数インスタンスがファイルをバックアップしている場合、あるいは単一クライアントが並列バックアップ操作を実行する場合に、追加のマウント・ポイントが必要になることがあります。

vmmaxparallel または vmmaxbackupsessions の値が maxnummp の値を超えている場合、ANS0266I およびその他のメッセージが表示されます。メッセージに応じて、クライアントは、maxnummp パラメーターで指定された数に一致するように vmmaxparallel オプションの値を減らすか、指定された VM に対して追加セッションが開かれることを禁止します。いずれの場合も、バックアップ操作は続行されます。

追加の ANS0266I エラーが検出された場合、クライアントは、vmmaxparallel 値を 1 ずつ減らし、バックアップの続行を試行します。vmmaxparallel を 1 まで減らしてもクライアントが ANS0266I エラーを受け取る場合、クライアントは、バックアップを終了して次のエラーを発行します。

ANS5228E バックアップ VM 操作は失敗しました。VMMAXPARALLEL が 1 に減らされ、クライアントがいまだにサーバー・マウント・ポイントを取得できません。

現在 maxnummp に設定されている値を増やす必要がある場合は、サーバー管理者に連絡し、ノードが追加の並列バックアップ・セッションをサポートできるようにしてください。

指定できる最大数は 100 セッションです。デフォルトは、vmmaxparallel オプションで設定された値です。

例

オプション・ファイル

VMMAXBACKUPS 10

コマンド・ライン:

dsmc backup vm -VMMAXBACKUPS=10

関連資料

[670 ページの『Backup VM』](#)

[395 ページの『Domain.vmfull』](#)

domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

[615 ページの『Vmmaxparallel』](#)

vmmaxparallel オプションを使用すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントの単一インスタンスを使用して、複数の仮想マシンの最適化されたバックアップを構成できます。このオプションは、ある時点で IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップできる仮想マシンの最大数を指定します。

[611 ページの『Vmlimitperdatastore』](#)

vmlimitperdatastore オプションは、最適化されたバックアップ操作中に並列で処理できる、データ・ストア内の仮想マシン (VM) と仮想ディスクの数を指定します。

[612 ページの『Vmlimitperhost』](#)

vmlimitperhost オプションは、最適化されたバックアップ操作中に並列で処理できる、ホスト内の仮想マシン (VM) と仮想ディスクの数を指定します。

関連情報

[複数の仮想マシンの並列バックアップ](#)

Vmmaxparallel

vmmaxparallel オプションを使用すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントの単一インスタンスを使用して、複数の仮想マシンの最適化されたバックアップを構成できます。このオプションは、ある時点で IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップできる仮想マシンの最大数を指定します。

最適化されたバックアップ操作とは、VM レベル、仮想ディスク・レベル、あるいはサブディスク・レベルでの並列バックアップ機能が有効にされたバックアップ操作です。

vmmaxparallel オプションは、vmmaxbackupsessions オプション、vmlimitperhost オプション、および vmlimitperdatastore オプションと連携して、バックアップ操作を最適化し、vSphere インフラストラクチャーのホストでバックアップにより発生する可能性があるリソースの量を制御できます。これらのオプションの値を調整して、ご使用の環境におけるバックアップで最適なパフォーマンスを得られる値を見つけてください。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

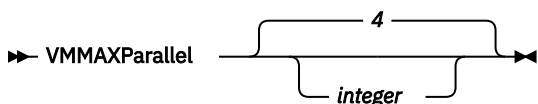
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) または **Backup VM** コマンドのコマンド・ラインで有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

integer

最適化されたバックアップ操作中に、ある一時点でバックアップできる仮想マシンの最大数を指定します。

デフォルトは 4 です。最大値は 50 です。

ヒント: クライアント・サイドのデータ重複排除を使用している場合は、データ重複排除セッションが各 VM で開始されます。このデータ重複排除セッションは、vmmxparallel セッションの 1 つとしてカウントされません。

vmmxparallel オプションを vmmxbackupsessions オプションまたは maxnummp サーバー・パラメーターと組み合わせて使用する方法について、以下の情報を確認してください。

vmmxbackupsessions

Data Protection for VMware では、vmmxbackupsessions は、最適化されたバックアップ操作に組み込むことができる、仮想マシン・データをサーバーに移動するセッションの最大数を指定します。vmmxbackupsessions オプションの値は、vmmxparallel オプションの値以上である必要があります。

maxnummp

maxnummp サーバー・パラメーターは、ストレージ・プールのコピー宛先が FILE または TAPE の場合に、ノードがサーバーで使用できるマウント・ポイントの最大数を指定します。maxnummp パラメーターは、vmmxparallel および vmmxbackupsessions のオプション設定値以上である必要があります。クライアントの複数インスタンスがファイルをバックアップしている場合、あるいは単一クライアントが並列バックアップ操作を実行する場合に、追加のマウント・ポイントが必要になることがあります。

vmmxparallel または vmmxbackupsessions の値が maxnummp の値を超えている場合、ANS0266I およびその他のメッセージが表示されます。メッセージに応じて、クライアントは、maxnummp パラメーターで指定された数に一致するように vmmxparallel オプションの値を減らすか、指定された VM に対して追加セッションが開かれることを禁止します。いずれの場合も、バックアップ操作は続行されます。

追加の ANS0266I エラーが検出された場合、クライアントは、vmmxparallel 値を 1 ずつ減らし、バックアップの続行を試行します。vmmxparallel を 1 まで減らしてもクライアントが ANS0266I エラーを受け取る場合、クライアントは、バックアップを終了して次のエラーを発行します。

ANS5228E バックアップ VM 操作は失敗しました。VMMAXPARALLEL が 1 に減らされ、クライアントがいまだにサーバー・マウント・ポイントを取得できません。

現在 maxnummp に設定されている値を増やす必要がある場合は、サーバー管理者に連絡し、ノードが追加の並列バックアップ・セッションをサポートできるようにしてください。

例

オプション・ファイル
VMMAXP 10

関連資料

[670 ページの『Backup VM』](#)

[395 ページの『Domain.vmfull』](#)

domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

[612 ページの『Vmlimitperhost』](#)

vmlimitperhost オプションは、最適化されたバックアップ操作中に並列で処理できる、ホスト内の仮想マシン (VM) と仮想ディスクの数を指定します。

[611 ページの『Vmlimitperdatastore 』](#)

vmlimitperdatastore オプションは、最適化されたバックアップ操作中に並列で処理できる、データ・ストア内の仮想マシン (VM) と仮想ディスクの数を指定します。

関連情報

[複数の仮想マシンの並列バックアップ](#)

Vmmaxrestoresessions

vmmaxrestoresessions オプションは、IBM Spectrum Protect サーバー 最適化リストア操作に割り振られるセッションの総数を定義します。

最適化されたリストア操作とは、仮想ディスクのサブディスク・レベルでの並列リストア機能が有効にされたリストア操作です。

注: リストアされるディスクごとに、1つ以上のセッションを割り振る必要があります。

注: vmmaxrestoresessions の値が、vmmaxrestoreparalleldisks の値と

vmmaxrestoreparallelvms の値を乗算した数より小さい場合、実行時に

vmmaxrestoreparalleldisks の値と vmmaxrestoreparallelvms の値を乗算した数に自動的に調整されます。

サポートされるクライアント

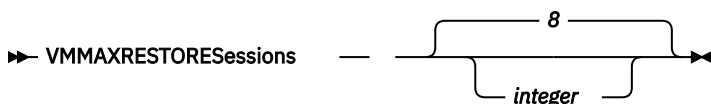
このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、またはクライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) あるいは **Restore VM** のコマンド・ラインで有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

integer

リストア操作中に作成される IBM Spectrum Protect サーバー セッションの数を指定します。デフォルトは 8 です。最大値は 100 です。

例

オプション・ファイル
VMMAXRESTORES 5

コマンド・ライン:
dsmc restore vm webserver1 -VMMAXRESTORES=5

注: このオプションのこのコマンド・ライン例は、Windows と Linux の両方のサポート対象クライアントで有効です。

関連資料

747 ページの『Restore VM』

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

Vmmaxrestoreparalleldisks

vmmaxrestoreparalleldisks オプションを使用すると、IBM Spectrum Protect クライアント は、仮想マシンごとに特定の複数の仮想ディスクを同時にリストアできます。


オープンするディスク・セッションの数を最大 10 個指定できます。セッションは、オプション **vmvstortransport** のトランスポート・タイプに基づいて、ディスクごとに割り振られます。使用可能なセッションは、vmmaxrestoreparalleldisks によって指定されたディスク・セッション数の間で割り振られ、ディスク当たりのセッション数は直近の整数に切り下げられます。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

注:

すべてのソースから同一 ESXi ホストへのリストア操作の総数が 26 を超えていないことを確認する必要があります。ESXi ホストの問題により、この並列リストア数を超過すると操作が失敗する可能性があります。例えば、それぞれ VMMAXRESTOREPARALLELDISKS 10 を設定されている 3 つの異なるインスタンス・リストアを同一の ESXi ホストに使用する場合、接続の総数は 30 になるのでリストアは失敗する可能性があります。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) 内、または **Restore VM** のコマンド・ラインで有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

integer

同時にリストアできる仮想ハード・ディスクの数を指定します。デフォルトは 2 です。最大数は 10 です。

例

タスク

仮想マシン **vm1** のリストア操作における仮想ディスクに対し、同時リストア操作する数を最大 2 に設定します。

```
dsmc restore vm vm1 -vmmaxrestoreparalleldisks=2 -vmmaxrestoresessions=8
```

これにより、仮想ディスク当たり 4 つの同時リストア・セッションが割り当てられます。

関連資料

747 ページの『Restore VM』

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

Vmmaxrestoreparallelvms

vmmaxrestoreparallelvms オプションは、IBM Spectrum Protect クライアント が同時にリストアできる仮想マシンの数を制御します。

このオプションは、並行してリストアする仮想マシンの数を増やして、リストア・パフォーマンスを向上させるために使用します。

同時にリストアする仮想マシンの数として最大 10 を指定できます。デフォルト値は 2 です。

サポートされるクライアント

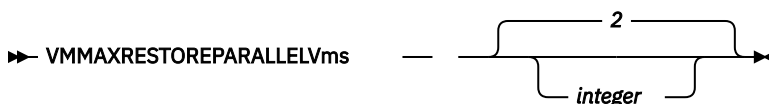
このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) 内、または **Restore VM** のコマンド・ラインで有効です。クライアント・オプション・セットのサーバーにも組み込むことができます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

integer

同時にリストアできる仮想マシンの最大数を指定します。デフォルトは 2 です。最大値は 10 です。

注: リストア・セッションの数を制限するために Vmmaxrestoresessions オプションを使用する場合、そのセッション数は仮想マシンの数以上でなければなりません。これにより、仮想マシンごとに少なくとも 1 つのセッションが使用可能であることが保証されます。

注: 同時に複数の仮想ディスクをリストアするために、オプション Vmmaxparalleldisks を使用する場合、その仮想ディスクの数はセッションの数以下でなければなりません。

例

タスク

マシン **vm1**、**vm2**、**vm3**、**vm4**、および **vm5** に関して最大 5 台の仮想マシンの同時リストアを設定します。

```
dsmc restore vm1,vm2,vm3,vm4,vm5 -VMMAXRESTOREPARALLELVms=5  
VMMAXRESTORESessions=10 -VMMAXRESTOREPARALLELDisks=2
```

これにより、一度に仮想マシンごとに並列で最高 2 つの仮想ディスクをリストアし、仮想マシンごとに 2 つのセッションを割り当てられる 5 台の仮想マシンの同時リストアが割り当てられます。

タスク

マシン **vm1** および **vm2** に関して最大 2 台の仮想マシンの同時リストアを設定します。

```
dsmc restore vm1,vm2 -VMMAXRESTOREPARALLELVms=2  
VMMAXRESTORESessions=10 -VMMAXRESTOREPARALLELDisks=1
```

これにより、一度に仮想マシンごとに 1 つ以上のディスク、および仮想マシンごとに 5 つのセッションを使用する、2 台の仮想マシンの同時リストアが割り当てられます。

タスク

マシン **vm1**、**vm2**、**vm3**、および **vm4** に関して最大 2 台の仮想マシンの同時リストアを設定します。

```
dsmc restore vm1,vm2,vm3,vm4 -VMMAXRESTOREPARALLELVms=2  
VMMAXRESTORESessions=16 -VMMAXRESTOREPARALLELDisks=2
```

これにより、一度に仮想マシンごとに 2 つのディスク、および仮想マシンごとに 8 つのセッションを使用する 2 台の仮想マシンの同時リストアが割り当てられます。

関連資料

[747 ページの『Restore VM』](#)

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

[617 ページの『Vmmxrestoresessions』](#)


vmmxrestoresessions オプションは、IBM Spectrum Protect サーバー 最適化リストア操作に割り振られるセッションの総数を定義します。

[618 ページの『Vmmxrestoreparalleldisks』](#)

vmmxrestoreparalleldisks オプションを使用すると、IBM Spectrum Protect クライアント は、仮想マシンごとに特定の複数の仮想ディスクを同時にリストアできます。

Vmmxvirtualdisks

vmmxvirtualdisks オプションは、バックアップ操作に組み込む VMware 仮想マシン・ディスク (VMDK) の最大サイズを指定します。**vmmxvirtualdisks** オプションは、バックアップ操作に組み込む仮想マシン・ディスクの最大サイズを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

vmmxvirtualdisks オプションと **vmskipmaxvirtualdisks** オプションを一緒に使用して、データ・ムーバーがバックアップ操作時に大容量の仮想マシン (VM) ディスクを処理する方法を指定します。

- **vmmxvirtualdisks** オプションを設定して、組み込む VM ディスクの最大サイズを指定します。
- **vmskipmaxvirtualdisks** オプションを設定して、最大サイズを超えていない VM ディスクをバックアップします (このサイズを超える VM ディスクは除外されます)。設定しない場合、操作は失敗します。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンをバックアップするデータ・ムーバーとして構成されている 64 ビット Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) で `vmmaxvirtualdisks` オプションを設定します。このオプションは、コマンド・ライン・パラメーターとして **backup vm** コマンドにも指定できます。

構文



パラメーター

size

バックアップ操作に組み込む VM ディスクの最大サイズをテラバイト (TB) 単位で指定します。この範囲は 2 から 8 の整数 (デフォルトは 2) です。最大は 8 TB (8192 GB に相当) です。

バックアップ操作に組み込まれる VM ディスク・サイズが常に最大サイズであるようにするには、999 を指定します。常に最大値が設定されるようにするには、この値を使用することが最も効率的な方法です。この値を使用すると、オプション・ファイルを何度も変更する必要がなくなります。

`vmskipmaxvirtualdisks yes` オプションも指定した場合、指定された最大サイズ以下の VM ディスクはバックアップされ、指定された最大サイズより大きい VM ディスクは除外されます。

`vmskipmaxvirtualdisks no` オプションも指定すると、指定された最大サイズより VM ディスクが大きい場合はバックアップ操作が失敗します。

例

オプション・ファイル:

```
vmmaxvirtualdisks 3
```

コマンド・ライン:

5 TB 以下の VM ディスクをバックアップし、5 TB より大きい VM ディスクを除外するには、次のようにします。

```
backup vm VM1 -vmmaxvirtualdisks=5 -vmskipmaxvirtualdisks=yes
```

3 TB 以下の VM ディスクをバックアップし、VM ディスクが 3 TB より大きい場合はバックアップ操作が失敗するようにするには、次のようにします。

```
backup vm VM1 -vmmaxvirtualdisks=3 -vmskipmaxvirtualdisks=no
```

8 TB 以下の VM ディスクをバックアップし、8 TB より大きい VM ディスクを除外するには、次のようにします。

```
backup vm VM1 -vmmaxvirtualdisks=8 -vmskipmaxvirtualdisks=yes
```

または、

```
backup vm VM1 -vmmaxvirtualdisks=999 -vmskipmaxvirtualdisks=yes
```

Vmmc

`vmmc` オプションは、デフォルト管理クラス以外の管理クラスを使用して仮想マシン・バックアップを保管するために使用します。VMware VM バックアップでは、`vmmc` オプションは、`vmbackuptype=fullvm` オプションが設定されている場合にのみ有効です。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンをバックアップするために構成されたクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル `dsm.opt` とクライアント・システム・オプション・ファイル `dsm.sys` に入れるか、コマンド・ラインに指定してください。

構文

➡ VMMC — *management_class_name* ➡

パラメーター

management_class_name

バックアップされた仮想マシン・データに適用する管理クラスを指定します。このオプションを設定しない場合、ノードのデフォルト管理クラスが使用されます。

例

タスク:

`myVirtualMachine` という名前の仮想マシンのバックアップを実行し、`myManagmentClass` という名前の管理クラスに従ってバックアップを保存します。

```
dsmc backup vm "myVirtualMachine" -vmc=myManagmentClass
```


Vmnocbtcontinue

`vmnocbtcontinue` オプションは、VM 上に1つ以上のスナップショットが既に存在しており、変更ブロック・トラッキングを有効にするかリセットする必要がある場合に、変更ブロック・トラッキング機能を使用せずに仮想マシン (VM) をバックアップするかどうかを指定するために使用します。

VM 上で増分バックアップ (常時) を実行する際に、変更ブロック・トラッキングを有効化または再有効化する必要があり、1つ以上のスナップショットが VM 上に存在している場合、変更ブロック・トラッキングを有効にすることはできません。VMware は、VM のスナップショットが存在している場合の変更ブロック・トラッキングの有効化をサポートしていません。

変更ブロック・トラッキングを有効にできるようにするために、初めて増分バックアップ (常時) を実行する前に、既存のスナップショットをすべて削除する必要があります。変更ブロック・トラッキングを有効にせずにバックアップ操作を続行するには、`vmnocbtcontinue yes` オプションを指定することができます。ただし、このオプション設定を使用してバックアップ操作を実行すると、VM の各バックアップはフルバックアップになります。これには、VM の各ディスクの使用済みブロックと未使用ブロックの両方が含まれます。バックアップ操作の完了後、VM 上にスナップショットが存在していないと、変更ブロック・トラッキングが有効になり、増分バックアップ (常時) が取得されます。

VM または VM グループの変更ブロック・トラッキングをリセットしたい場合は、`include.vmresetcbt vmname` オプションを使用します。詳しくは、[459 ページの『Include.vmresetcbt』](#)を参照してください。

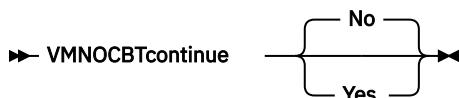
 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に入れます。

構文



パラメーター

No

変更ブロック・トラッキングを有効にできないため、バックアップ操作は失敗します。この値がデフォルトです。


Yes

変更ブロック・トラッキングを使用せずにバックアップ操作を続行します。

この値を指定すると、VM の各バックアップは、VM の各ディスクの使用済みブロックと未使用ブロックの両方が含まれるフルバックアップになります。

Vmnoprmdisks

このオプションは、ボリュームに関連付けられている LUN が見つからない場合でも、VMware 仮想マシンに関連付けられている pRDM ボリュームの構成情報をクライアントがリストアできるようにします。pRDM ボリュームは仮想マシン・スナップショットに含まれないため、構成情報のみをリストアすることができ、ボリューム上のデータはリストアできません。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

このオプションは、Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップには適用されません。

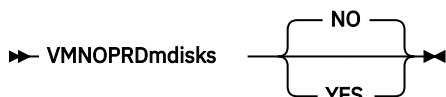
サポートされるクライアント

このオプションは、vStorage バックアップ・サーバーにインストールされている Windows および Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) とクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れるか、**restore vm** コマンドのコマンド・ライン・パラメーターとして指定してください。

構文



パラメーター

YES

-vmprocesswithprdm=yes を使用してバックアップした仮想マシンをリストアする必要があり、ロー・デバイス・マッピング・ファイルによってマップされた元の LUN が見つからない場合に、この値を指定します。この設定を使用すると、クライアントは pRDM ボリュームによって使用される欠落 LUN を見つける試行をスキップし、それらのボリュームに関連付けられた構成情報 (ディスク・ラベル) をリストアします。pRDM ボリュームは、シン・プロビジョニング VMFS VMDK としてリストアされます。その後、vSphere クライアントを使用して、必要な pRDM マッピングを作成することができます。

NO

このオプションを `vmnoprdmdisk=no` に設定すると、ロー・デバイス・マッピング・ファイルによるマッピング先であった元の LUN 見つからない場合には、`-processvmwithprdm=yes` を使用してバックアップされた仮想マシンのリストア操作が失敗します。この値がデフォルト値です。

例

オプション・ファイル:

```
VMNOPRDMDISKS YES
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore vm vm123 -vmnoprdmdisks=yes
```

Vmnovrdmdisks

このオプションは、ボリュームに関連付けられている LUN が見つからない場合でも、VMware 仮想マシンに関連付けられている vRDM ボリュームの構成情報およびデータをクライアントがリストアできるようにします。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

このオプションは、Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップには適用されません。

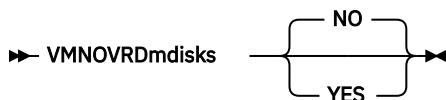
サポートされるクライアント

このオプションは、vStorage バックアップ・サーバーにインストールされている Windows および Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) とクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に入れるか、**restore vm** コマンドのコマンド・ライン・パラメーターとして指定してください。

構文



パラメーター

YES

バックアップした仮想マシンをリストアする必要がある、ロー・デバイス・マッピング・ファイルによってマップされた元の LUN が見つからない場合に、この値を指定します。この設定を使用すると、クライアントは vRDM ボリュームによって使用される欠落 LUN を見つける試行をスキップし、バックアップされた構成情報 (ディスク・ラベル) およびデータをリストアします。vRDM ボリュームは、シン・プロビジョニング VMFS VMDK としてリストアされます。

NO

`-vmnovrdmdisk=no` を設定すると、ロー・デバイス・マッピング・ファイルによってマップされた LUN が見つからない場合、vRDM ボリュームを持つ仮想マシンのリストア操作は失敗します。この値がデフォルト値です。

例

オプション・ファイル:

```
VMNOVRDMDISKS YES
```

コマンド・ライン:

```
dsmc restore vm vm123 -vmnovrdmdisks=yes
```

Vmpreferdagpassive

vmpreferdagpassive オプションは、Microsoft Exchange Server Database Availability Group (DAG)) に属しているデータベースのアクティブ・コピーをバックアップするか、パッシブ・コピーをバックアップするかを指定します。

このオプションは、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments によって保護されている仮想マシン・ゲスト内で実行されている Microsoft Exchange Server ワークロードに適用されます。

backup vm オプションは、**vmpreferdagpassive** コマンドに使用します。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware ゲスト・バックアップのデータ・ムーバーとして機能するクライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内のクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。

構文



パラメーター

No

アクティブ・コピーであるかパッシブ・コピーであるかに関係なく、DAG 内の Microsoft Exchange Server データベースをバックアップします。この値がデフォルトです。

Yes

別のサーバー上に使用できる有効なパッシブ・コピーがある場合は、DAG 内のアクティブ・データベース・コピーのバックアップをスキップします。使用できる有効なパッシブ・コピーがない場合は、アクティブ・データベース・コピーがバックアップされます。

例

オプション・ファイル:

```
vmpreferdagpassive yes
```

Vmprocessvmwithindependent

このオプションは、1つ以上の独立ディスクを使用してプロビジョニングされた VMware 仮想マシン (VM) をバックアップするかどうかを指定するために使用されます。デフォルトでは、独立ディスクを使用する VM はバックアップされません。

独立ディスクはスナップショットをサポートしないため、バックアップすることができません。したがって、vmprocessvmwithindependent オプションを yes に設定する前に、以下の考慮事項を確認してください。

- 通常ディスクのボリュームのみがバックアップされます。独立ディスク上のデータはバックアップされません。
- 独立ディスクの構成情報はバックアップされません。独立ディスクは、リストアされたマシンで手動で再作成する必要があります。
- 通常ディスクと独立ディスクの両方にまたがってボリュームがストライピングされている場合、通常ディスク上のボリューム・データの部分のみがリストア可能です。したがって、VM のリストア後は、独立ディスク上のストライプが失われるため、ボリュームは破損します。
- 通常ディスクと独立ディスクの両方にまたがってストライピングされたボリュームがない場合は、通常ディスクと独立ディスクを持つ VM に対するファイル・レベル・リストアがサポートされます。通常ディスク上のファイルのみがリストア可能です。
- 通常ディスクと独立ディスクの両方にまたがってストライピングされたボリュームが 1 つ以上ある VM に対しては、ファイル・レベル・リストアはサポートされません。そのような VM には、フル VM リストアを使用します。

仮想マシンに、物理互換モード (pRDM) でプロビジョニングされたロー・デバイス・マッピング (RDM) ボリュームが 1 つ以上含まれている場合は、vmprocessvmwithprdm オプションを使用して、pRDM ディスクが存在する場合にクライアントが仮想マシンをバックアップするかどうかを指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合에만使用可能です。

このオプションは、VMware バックアップにのみ有効であり、Microsoft Hyper-V バックアップには適用しません。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware バックアップ・データ・ムーバーとして構成されている Windows および Linux のクライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) とクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れるか、コマンド・ラインに指定してください。

構文



パラメーター

No

1 つ以上の独立ディスク・ボリュームが検出されると、VM のバックアップは失敗します。No がデフォルトです。

Yes

1 つ以上の独立ディスク・ボリュームが検出されても、VM のバックアップを続行します。Yes を使用する前に、上記の考慮事項を確認してください。

例

オプション・ファイル:

```
VMPROCESSVMWITHINDEPENDENT Yes
```

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm vmlocal -vmbackuptype=fullvm -vmprocessvmwithindependent=yes
```

Vmprocessvmwithprdm

このオプションは、VMware 仮想マシンに物理互換モード (pRDM) でプロビジョニングされた 1 つ以上のロー・デバイス・マッピング (RDM) ボリュームがある場合に、その仮想マシンのフルバックアップを処理するかどうかを制御するために使用します。

pRDM ボリュームはスナップショットをサポートしません。仮想マシン上で pRDM ボリュームが検出されても、それらはバックアップ操作の一環としては処理されません。仮想マシンがリストアされると、バックアップ/アーカイブ・クライアントはその仮想マシンを復旧します。この時、スナップショット操作に関わったボリュームのみがリストアされます。構成情報と pRDM ボリュームの内容は、IBM Spectrum Protect サーバーに保管される情報の中には保持されません。ユーザーは、リストアされたマシン上に pRDM ボリュームを再作成する必要があります。

このオプションは、仮想互換モード (vRDM) でプロビジョニングされた 1 つ以上の RDM ボリュームがある仮想マシンには適用されません。vRDM ボリュームはスナップショット操作をサポートしないので、フル VMware 仮想マシン・バックアップに含まれます。

仮想マシンに 1 つ以上の独立ディスクも含まれている場合には、vmprocessvmwithindependent オプションを使用して、独立ディスクが存在したときに仮想マシン上のすべてのファイルをクライアントがバックアップするかどうかを制御します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

このオプションは、VMware バックアップにのみ有効であり、Microsoft Hyper-V バックアップには適用しません。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware バックアップ・サーバーとして構成されている Windows および Linux クライアントに有効です。サーバーもこのオプションを定義することができます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) とクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れるか、コマンド・ラインに指定してください。

構文



パラメーター

No

1 つ以上の pRDM ボリュームが検出されると、仮想マシンのバックアップは失敗します。No がデフォルトです。

Yes

物理互換モード (pRDM) でプロビジョニングされた 1 つ以上のロー・デバイス・マッピング (RDM) ボリュームがある仮想マシンがバックアップされます。ただし、これらの pRDM ボリュームは仮想マシンのバックアップ操作の一環としては処理されません。

仮想マシンに 1 つ以上の独立ディスクもある場合は、`vmprocessvmwithindependentdisk` オプションも指定する必要があります。

例

オプション・ファイル:

```
VMPROCESSVMWITHPRDM Yes
```

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm vmlocal -vmbackuptype=fullvm -vmprocessvmwithprdm=yes
```

Vmskipctlcompression

`vmskipctlcompression` オプションを VM バックアップに使用して、VM バックアップ中に制御ファイル (*.ctl) を圧縮するかどうかを指定します。このオプションは、データ・ファイル (*.dat) の圧縮には影響しません。

仮想マシンの制御ファイルとデータ・ファイルの圧縮は、それらのファイルが、クライアント・サイド重複排除が有効になったストレージ・プールに保管されている場合にのみ可能です。データ・ファイルは圧縮するが、制御ファイルは圧縮しない場合は、以下のオプション構成を使用します。

```
compression yes  
vmskipctlcompression yes
```

データ・ファイルは、クライアント・サイド重複排除が有効になったストレージ・プールに宛先指定する必要があります。制御ファイルは、クライアント・サイド重複排除が有効になっていないストレージ・プールに宛先指定することができます。

このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments 使用のライセンス交付を受ける必要があります。

サポートされるクライアント

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) に入れるか、コマンド・ラインに指定してください。

構文



パラメーター

Yes

VM バックアップ中に制御ファイル (*.ctl) を圧縮しません。このオプションは、データ・ファイル (*.dat) の圧縮には影響しません。

No

VM バックアップ中に制御ファイル (*.ctl) を圧縮できます。制御ファイルを圧縮するかどうかは、compression オプションの値によって決まります。

Vmskipmaxvirtualdisks

vmskipmaxvirtualdisks オプションは、バックアップ操作で最大ディスク・サイズを越えている仮想マシン (VM) ディスクを処理する方法を指定します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

vmskipmaxvirtualdisks オプションと vmmaxvirtualdisks オプションを一緒に使用して、データ・ムーバーがバックアップ操作時に大容量の VM ディスクを処理する方法を指定します。

- vmskipmaxvirtualdisks オプションを設定して、最大サイズを超えていない VM ディスクをバックアップします (このサイズを超える VM ディスクは除外されます)。設定しない場合、操作は失敗します。
- vmmaxvirtualdisks オプションを設定して、組み込む VM ディスクの最大サイズを指定します。

Data Protection for VMware V7.1.3 以前では、vmskipmaxvirtualdisks オプションは vmskipmaxvmdks という名前でした。V7.1.4 以降では、vmskipmaxvirtualdisks が優先のオプション名です。ただし、クライアントは、引き続き vmskipmaxvmdks 名でもバックアップ操作を処理します。

サポートされるクライアント

このオプションは、VMware 仮想マシンをバックアップするデータ・ムーバーとして構成されている 64 ビット Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) で vmskipmaxvirtualdisks オプションを設定します。このオプションは、コマンド・ライン・パラメーターとして **backup vm** コマンドにも指定できます。

構文



パラメーター

No

仮想マシンに最大サイズより大きい VM ディスクが 1 つ以上ある場合に、バックアップ操作が失敗することを指定します。この設定がデフォルト値です。

Yes

バックアップ操作に最大サイズ以下の VM ディスクを含め、最大サイズより大きい VM ディスクを除外することを指定します。

例

オプション・ファイル:

`vmskipmaxvirtualdisks yes`

コマンド・ライン:

VM ディスクが 2 TB より大きい場合にバックアップ操作が失敗するようにするには、次のようにします。

```
backup vm VM1 -vmskipmaxvirtualdisks=no
```

VM ディスクが 5 TB より大きい場合にバックアップ操作が失敗するようにするには、次のようにします。

```
backup vm VM1 -vmskipmaxvirtualdisks=no -vmmaxvirtualdisks=5
```


8 TB 以下の VM ディスクをバックアップし、8 TB より大きい VM ディスクを除外するには、次のようにします。

```
backup vm VM1 -vmskipvirtualdisks=yes -vmmaxvirtualdisks=8
```

Vmskipmaxvmdks


`vmskipmaxvmdks` オプションは、バックアップ操作で最大ディスク・サイズを超えている VMware 仮想マシン・ディスク (VMDK) を処理する方法を指定します。

V7.1.4 以降では、`vmskipmaxvmdks` は、`vmskipmaxvirtualdisks` に名前変更されています。`vmskipmaxvirtualdisks` が優先名ですが、クライアントは、引き続き `vmskipmaxvmdks` 名でもバックアップ操作を処理します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

Vmtagdatamover

バックアップ/アーカイブ・クライアント (データ・ムーバー) でのタグ付けサポートを有効にするには、`vmtagdatamover` オプションを使用します。このオプションが有効にされている場合、クライアントは、vSphere Web クライアントの IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン あるいは VMware vSphere PowerCLI バージョン 5.5 R2 以降などのツールによって設定されたデータ保護タグに従って、VMware インベントリ・オブジェクト内の仮想マシンのバックアップを管理します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

データ保護タグについて詳しくは、「データ保護タグ付けの概要」を参照してください。

データ・ムーバーは、`vmtagdatamover` オプションが `yes` に設定されている場合に、データ保護タグを処理します。次の要件を満たしているようにしてください。

要件:

- データ・ムーバーの場合:
 - VMware vCenter Server は、バージョン 6.0 Update 1 以上でなければなりません。
 - バックアップ操作またはリストア操作に使用するアカウントには、追加の許可が必要です。カテゴリ操作およびタグ付け操作を実行するには、以下の新規 vCenter 許可が必要です。ルート vCenter Server で以下のユーザー許可が設定されていることを確認してください。

```
Inventory Service > vSphere Tagging > Assign or Unassign vSphere Tag
Inventory Service > vSphere Tagging > Create vSphere Tag
Inventory Service > vSphere Tagging > Create vSphere Tag Category
Inventory Service > vSphere Tagging > Delete vSphere Tag
Inventory Service > vSphere Tagging > Delete vSphere Tag Category
Inventory Service > vSphere Tagging > Modify UsedBy Field For Tag
```

```
Inventory Service > vSphere Tagging > Modify UsedBy Field For Category
Inventory Service > vSphere Tagging > Edit vSphere Tag
Inventory Service > vSphere Tagging > Edit vSphere Tag Category
```

バックアップ操作およびリストア操作の vCenter 許可の設定について詳しくは、[技術情報 7047438](#) を参照してください。

- Data Protection for VMware vSphere GUI がタグ付けサポートで正しく機能するためには、GUI のインストール時に以下の要件が満たされている必要があります。
 - 少なくとも 1 つのデータ・ムーバーと Data Protection for VMware vSphere GUI は、同じサーバー上にインストールされている必要があります。このデータ・ムーバー・ノードは、vCenter サーバーの資格情報が保存されるように構成する必要があります。構成ウィザードを実行してデータ・ムーバー・ノードのパスワードを保存するか、データ・ムーバーのコマンド・ラインで **dsmc set password** コマンドを使用することで、資格情報を保存できます。

仮想マシンまたは物理マシン上で稼働している他のデータ・ムーバーを追加データ・ムーバーとして使用する場合、そのデータ・ムーバーを他のサーバーにインストールすることができます。タグ付けをサポートするには、これらのすべてのデータ・ムーバーが **vmtagdatamover=yes** オプションで構成されている必要もあります。これらの追加のデータ・ムーバーがタグ・ベースのデータ・ムーバーとして正しく機能するために、同じサーバー上に Data Protection for VMware vSphere GUI がインストールされている必要はありません。
 - Linux データ・ムーバーの場合、データ・ムーバーのインストール・ディレクトリーおよび **LD_LIBRARY_PATH** 環境変数に Java™ 共有ライブラリー **libjvm.so** を指定したことを確認してください。データ・ムーバーで **vmtagdatamover** オプションが有効にされている場合、タグ付けサポートには **libjvm.so** へのパスが使用されます。手順については、「vSphere 環境でのデータ・ムーバー・ノードのセットアップ」を参照してください。
 - Linux オペレーティング・システムでは、デフォルトのユーザー名 (**tdpvmware**) を使用して Data Protection for VMware vSphere GUI をインストールする必要があります。
 - Linux データ・ムーバー・ノード上では、デフォルトのパスワード・ファイル (**/etc/adsm/TSM.sth**) を使用する必要があります。

サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (**dsm.sys**)、またはコマンド・ラインでの **backup vm** コマンドで指定することができます。クライアント・オプション・セットの IBM Spectrum Protect サーバー上でもこのオプションを含められます。このオプションはプリファレンス・エディターでも設定できます。

構文



パラメーター

No

クライアントは、VMware 資産に起因するデータ保護設定およびタグを無視します。この値がデフォルトです。

Yes

クライアントは、IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン のデータ保護設定、または VMware 資産に起因するタグ値に基づいて、バックアップを管理します。

タグ付けサポートが有効にされている場合、一部のクライアント・オプションがデータ保護設定の影響を受ける可能性があります。影響を受けるオプションに関する情報は、「サポートされるデータ保護タグ」を参照してください。

以下の例は、データ保護タグによってクライアント・オプションがどのように影響を受ける可能性があるかを示しています。

- データ保護設定またはタグを使用してバックアップする VMware 資産を制御する場合、タグ値が domain.vmfull クライアント・オプション設定と競合する場合があります。domain.vmfull オプションが、クライアントが保護する仮想マシンを定義する一方で、Excluded タグおよび Included タグが domain.vmfull オプションで定義された内容をオーバーライドします。

例えば、以下のオプション・ファイル・ステートメントは、フル仮想マシン・バックアップ操作でバックアップする対象を指定します。

```
DOMAIN.VMFULL VMHOSTCLUSTER=cluster01,cluster02;VM=Dept20*
```

データ保護設定またはタグを使用して仮想マシン Dept204 を除外した場合、Dept204 仮想マシンはバックアップされません。

- IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン での保存ポリシー設定や、Management Class (IBM Spectrum Protect) カテゴリーのタグ設定は、include.vm クライアント・オプションおよび vmc クライアント・オプションをオーバーライドしますが、vmctlmc オプションはオーバーライドしません。

ヒント: デフォルトのデータ・ムーバーとしてデータ・ムーバーをセットアップする場合、Vmtagdefaultdatamover オプションを使用してください。

例

オプション・ファイル:

vmtagdat yes

コマンド・ライン:

-vmtagdat=yes

関連概念

[779 ページの『データ保護のタグ付けの概要』](#)

仮想マシンのデータ保護を管理するために、IBM Spectrum Protect タグを VMware インベントリー・オブジェクトに割り当てることができます。VMware オブジェクトにタグを割り当てるには、vSphere Web クライアントの IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン でデータ保護設定を指定します。IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用しない場合は、VMware Power CLI などのスクリプト・ツールを使用して、タグを割り当てることができます。

関連資料

[780 ページの『サポートされるデータ保護タグ』](#)

IBM Spectrum Protect データ保護タグを VMware インベントリー・オブジェクトに割り当てることで、仮想マシン・バックアップを管理する方法を制御することができます。

[633 ページの『Vmtagdefaultdatamover』](#)

vmtagdefaultdatamover オプションは、スケジュールで定義されており、Data Mover カテゴリーおよびタグが割り当てられておらず、継承もしていない仮想マシンを保護するために使用します。

[395 ページの『Domain.vmfull』](#)

domain.vmfull オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

[455 ページの『Include.vm』](#)

仮想マシン操作の場合、このオプションは、vmc オプションに指定された管理クラスをオーバーライドします。

[621 ページの『Vmmc』](#)

vmmc オプションは、デフォルト管理クラス以外の管理クラスを使用して仮想マシン・バックアップを保管するために使用します。VMware VM バックアップでは、vmmc オプションは、vmbackuptype=fullvm オプションが設定されている場合にのみ有効です。

603 ページの『Vmctlmc』

このオプションは、仮想マシンの制御ファイルのバックアップ時に使用する管理クラスを指定します。

778 ページの『set vmtags』

set vmtags コマンドは、VMware インベントリ・オブジェクトに追加できるデータ保護タグおよびカテゴリを作成します。VMware vSphere PowerCLI バージョン 5.5 R2 以降などのツールでタグを指定することで、これらの VMware オブジェクト内の仮想マシンの IBM Spectrum Protect バックアップを管理することができます。

関連情報

[タグ・サポートの有効化](#)

Vmtagdefaultdatamover

vmtagdefaultdatamover オプションは、スケジュールで定義されており、Data Mover カテゴリおよびタグが割り当てられておらず、継承もしていない仮想マシンを保護するために使用します。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

vmtagdefaultdatamover オプションおよび vmtagdatamover yes オプションを使用してデータ・ムーバー・ノードを指定すると、データ・ムーバーは、データ・センター内のコンテナが既に保護セットに属している場合、そのコンテナに追加されたすべての新規仮想マシンをバックアップします。保護セットは、Schedule (IBM Spectrum Protect) カテゴリおよびタグが割り当てられたコンテナ内の仮想マシンから構成されます。デフォルトのデータ・ムーバーは、Data Mover タグが割り当てられていない保護セット内の仮想マシンもバックアップします。

複数のデータ・ムーバーがスケジュールに関連付けられている場合、vmtagdefaultdatamover オプションを使用して、1つのデータ・ムーバーをデフォルトのデータ・ムーバーとして定義します。1つのデータ・ムーバーのみがスケジュールに関連付けられている場合は、そのデータ・ムーバーをデフォルトとして割り当てます。

ヒント: 各スケジュールについて、その関連データ・ムーバー・リスト内の1つのデータ・ムーバーのみをデフォルトとして指定します。そうしないと、新規の仮想マシン、および Data Mover タグが割り当てられていない仮想マシンが、複数回バックアップされます。

データ保護タグを vSphere インベントリに割り当てることで、仮想マシンの保護を管理することができます。サポートされるカテゴリおよびタグのリストについては、「サポートされるデータ保護タグ」を参照してください。

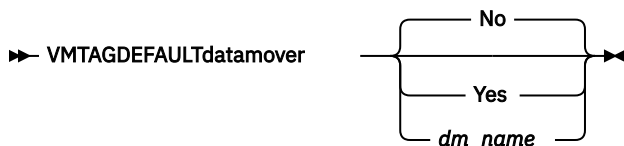
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux データ・ムーバーで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、またはコマンド・ラインでの **backup vm** コマンドで指定することができます。クライアント・オプション・セットの IBM Spectrum Protect サーバー上でもこのオプションを含められます。このオプションはプリファレンス・エディターでも設定できます。

構文



パラメーター

No

ローカル・データ・ムーバーは、デフォルトのデータ・ムーバーとして機能しません。Data Mover タグが割り当てられていない仮想マシンは、このデータ・ムーバーによって保護されません。この値がデフォルトです。

Yes

ローカル・データ・ムーバー (このオプションを指定しているデータ・ムーバー) がデフォルトのデータ・ムーバーとして機能することを指定します。

`vmtagdatamover yes` オプションを指定して、データ・ムーバーのタグ付けサポートも有効にする必要があります。

dm_name

デフォルトのデータ・ムーバーとして使用するデータ・ムーバーの名前。このオプションは、デフォルトのデータ・ムーバーのオプション・ファイルでこのオプションを設定する場合にのみ必要です。デフォルトのデータ・ムーバーではないデータ・ムーバーでは、このオプションは無視されます。

サーバー・スケジュール・コマンドですべてのデータ・ムーバーにこのオプションを受け渡したり、このオプションをすべてのデータ・ムーバー・オプション・ファイルに組み込んだりすることは可能です。デフォルトのデータ・ムーバーのみが、このオプションを使用します。したがって、デフォルトのデータ・ムーバーを 1 つだけ定義してください。

デフォルトのデータ・ムーバーとして指定するデータ・ムーバー上のオプション・ファイルで、`vmtagdatamover yes` オプションを指定する必要もあります。

例

Windows Data Protection for VMware 構成が、2 つのデータ・ムーバー `VC1_DC1_DM1` と `VC1_DC1_DM2` を使用しているとします。データ・ムーバー `VC1_DC1_DM1` をデフォルトのデータ・ムーバーとして指定するには、以下のステップを実行します。

1. データ・ムーバー `VC1_DC1_DM1` のオプション・ファイル (`dsm.VC1_DC1_DM1.opt`) で、以下のステートメントを追加します。

```
vmtagdatamover yes
vmtagdefaultdatamover yes
```

または

```
vmtagdatamover yes
vmtagdefaultdatamover VC1_DC1_DM1
```

2. データ・ムーバー `VC1_DC1_DM2` のオプション・ファイル (`dsm.VC1_DC1_DM2.opt`) で、以下のステートメントを追加します。

```
vmtagdatamover yes
vmtagdefaultdatamover VC1_DC1_DM1
```

`vmtagdefaultdatamover` オプションをスケジュール定義あるいはコマンドに渡して、デフォルトのデータ・ムーバーを割り当てることもできます。スケジュール定義でデフォルトのデータ・ムーバーが定義されると、そのスケジュールに関連付けられたすべてのデータ・ムーバーが、保護セットのデフォルトのデータ・ムーバーを識別することができます。

例: `dsmc backup vm -vmtagdefaultdatamover=VC1_DC1_DM1`

関連資料

395 ページの『Domain.vmfull』

`domain.vmfull` オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

630 ページの『Vmtagdatamover』

バックアップ/アーカイブ・クライアント (データ・ムーバー) でのタグ付けサポートを有効にするには、`vmtagdatamover` オプションを使用します。このオプションが有効にされている場合、クライアントは、vSphere Web クライアントの IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン あるいは VMware vSphere PowerCLI バージョン 5.5 R2 以降などのツールによって設定されたデータ保護タグに従って、VMware インベントリー・オブジェクト内の仮想マシンのバックアップを管理します。

778 ページの『set vmtags』

set vmtags コマンドは、VMware インベントリー・オブジェクトに追加できるデータ保護タグおよびカテゴリを作成します。VMware vSphere PowerCLI バージョン 5.5 R2 以降などのツールでタグを指定することで、これらの VMware オブジェクト内の仮想マシンの IBM Spectrum Protect バックアップを管理することができます。

関連情報

[タグ・サポートの有効化](#)

Vmverifyifaction

このオプションを使用して、データ・ムーバーが仮想マシンの最新の CTL およびビットマップ・ファイルで整合性の問題を検出した場合に実行されるアクションを指定します。

このオプションは、以下のすべての条件が真である場合にのみ、VM ゲストのバックアップ処理に影響します。

- VM ゲストに対する前回のバックアップ操作が、「永久増分 - 増分」バックアップ (`mode=ifincremental`) であった
- VM ゲストに対する現在のバックアップ操作が、「永久増分 - 増分」バックアップである
- データ・ムーバーが、前回の「永久増分 - 増分」バックアップ操作から得られた CTL およびビットマップ・データで整合性の問題を検出した
- `vmverifyiflatest` オプションが `yes` に設定されている

仮想マシンでこれらのすべての条件が真ではない場合、バックアップは通常の方法で行われ、このオプションで指定されたアクションは開始されません。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

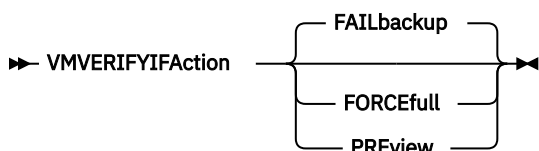
このオプションは、VMware ゲスト・バックアップのデータ・ムーバーとして機能する Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) またはクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に設定します。

このオプションは、クライアント・オプション・セットに **backup vm** コマンドのオプションとして組み込むことも、スケジュール定義での **options** パラメーターに組み込むこともできます。

構文



パラメーター

FAILbackup

このアクションは、バックアップ操作が失敗します。次のメッセージがデータ・ムーバー・エラー・ログ・ファイル (dsmerror.log) に書き込まれます。

ANS9921E 仮想マシン・ディスク *vm_name* (*disk_label*) の検証チェックが失敗しました (*xxx/yyy*)。

メッセージ内の *xxx/yyy* は、ビットマップ (*xxx*) および CTL ファイル (*yyy*) のサイズを示します。

ANS9919E *vm_name* について期待される制御ファイルが見つかりませんでした。

影響を受ける仮想マシンに対して、選択した時刻にフル VM バックアップ (-mode=IFFull を設定) を実行します。スケジュールされたバックアップ・ウィンドウにこれらの VM のフル VM バックアップを含めることができると判断した場合は、代わりに、次にスケジュールされた「永久増分・増分」操作で -vmverifyifaction=forcefull を使用して、それらの VM のフルバックアップを強制的に実行することもできます。この値がデフォルトのアクション値です。

FORCEfull

このアクションは、バックアップ・モードを -mode=ifincremental から -mode=iffull に変更します。現在のバックアップがフル VM バックアップになります。フル VM バックアップが開始されます。次のメッセージがデータ・ムーバー・エラー・ログ・ファイル (dsmerror.log) に書き込まれます。

ANS9921E 仮想マシン・ディスク *vm_name* (*disk_label*) の検証チェックが失敗しました (*xxx/yyy*)。

メッセージ内の *xxx/yyy* は、ビットマップ (*xxx*) および CTL ファイル (*yyy*) のサイズを示します。

ANS9919E *vm_name* について期待される制御ファイルが見つかりませんでした。

ANS9922I *vm_name* に対して VMVERIFYIFlatest が有効にされました (アクション: FORCEFULL)。

ANS9920W *vm_name* のフル VM バックアップを強制実行します。

影響を受けた仮想マシンのフル VM バックアップを現在のバックアップ・ウィンドウに含めることができる場合は、このオプションを使用します。

PREview

このアクションは、いずれのバックアップも実行しません。代わりに、**backup vm** コマンドによって処理された各 VM ゲストの CTL およびビットマップ・データが、一時ロケーションにリストアされ、整合性のチェックが行われます。整合性チェックが失敗した場合、次のメッセージがデータ・ムーバー・エラー・ログ・ファイル (dsmerror.log) に書き込まれます。

ANS9921E 仮想マシン・ディスク *vm_name* (*disk_label*) の検証チェックが失敗しました (*xxx/yyy*)。

メッセージ内の *xxx/yyy* は、ビットマップ (*xxx*) および CTL ファイル (*yyy*) のサイズを示します。

ANS9919E *vm_name* について期待される制御ファイルが見つかりませんでした。

ANS9922I *vm_name* に対して VMVERIFYIFlatest が有効にされました (アクション: PREVIEW)。

このオプションを使用して、以前に1つ以上の仮想マシンについて作成した「永久増分・増分」バックアップ (-mode=ifincremental) の整合性を検証します。

一部の VM で整合性チェックが失敗したことをメッセージが示している場合、選択した時刻にフル VM バックアップ (-mode=iffull) を開始します。あるいは、次にスケジュールされた「永久増分・増分」

操作で `-vmverifyifaction=forcefull` を設定し、それらの VM のフルバックアップを強制的に実行することもできます。1つ以上のフル VM バックアップに対応するために、バックアップ・ウィンドウが十分に大きくなければなりません。

Vmverifyiflatest

このオプションは、「永久増分 - 増分」バックアップ・モード (`-mode=IFIncremental` を指定した **backup vm** コマンド) を使用する VMware 仮想マシン (VM) バックアップ操作にのみ適用されます。この `vmverifyiflatest` オプションが有効にされている場合、データ・ムーバーは、前回のバックアップが「永久増分 - 増分」バックアップであった場合に、そのバックアップ時にサーバー上で作成された CTL およびビットマップ・ファイルに対して整合性チェックを実行します。

ファイルが整合性テストにパスした場合、仮想マシンはリストア可能です。現在のバックアップが続行され、次のスナップショットが仮想マシンのスナップショットのチェーンに追加されます。

ファイルが整合性テストに失敗した場合、仮想マシンはリストアできません。その後、データ・ムーバーは、`vmverifyifaction` オプションで指定した次のアクションを実行します。`vmverifyifaction` を設定してフル VM バックアップを即時に作成することも、バックアップを完全に失敗させてフル VM バックアップを別の機会に実行することもできます。3つ目のパラメーターは、新規のバックアップ・スナップショットを作成することなく仮想マシンの CTL およびビットマップ・ファイルを検証するためだけに設定することができます。

検証は、VM の前回のバックアップ操作が `mode=IFIncr` を使用しており、現在のバックアップ操作も `mode=IFIncr` を使用する場合にのみ実行することができます。このオプションは、他の仮想マシン・バックアップ・モードには効果はありません。

重要:

このオプションが `no` に設定されている場合、検証テストを行わずに VM バックアップ処理が続行されます。整合性チェックの実行に関連する処理リソースは、非常に少ないために無視することができます。「永久増分 - 増分」バックアップ・チェーンの整合性を確実に維持するには、デフォルト値 (`vmverifyiflatest yes`) を設定または使用します。IBM サポートに指示されない限りは、このオプションを `no` に設定しないでください。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

サポートされるクライアント

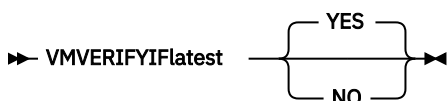
このオプションは、VMware ゲスト・バックアップのデータ・ムーバーとして機能する Linux クライアントに有効です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) またはクライアント・システム・オプション・ファイル (`dsm.sys`) に設定します。

このオプションは、クライアント・オプション・セットに **backup vm** コマンドのオプションとして組み込むことも、スケジュール定義での **options** パラメーターに組み込むこともできます。

構文



パラメーター

YES

この設定は、その VM の前回のバックアップ操作も「永久増分 - 増分」バックアップである場合に、現在の「永久増分 - 増分」(mode=IFIncr) バックアップ操作で処理される各 VM について CTL およびビットマップ・データの検証を実行することを指定します。この値がデフォルト値です。

NO

この設定は、「永久増分 - 増分」バックアップ処理中に CTL およびビットマップ・データの検証を行わないことを指定します。IBM サポートに指示されない限りは、この値を設定しないでください。

例

オプション・ファイル:

```
vmverifyiflatest yes
```

コマンド・ライン:

```
dsmc backup vm vm1 -mode=ifincremental -vmverifyiflatest=yes
```

vmvstorcompr

vmvstorcompr オプションは、バックアップ操作およびリストア操作中の IBM Spectrum Protect クライアントによる圧縮の使用を制御します。


このオプションを使用すると、NBD (ネットワーク・ブロック・デバイス) プロトコルを使用することで、転送パフォーマンスが向上します。

3 つの圧縮タイプ (**ZLIB**、**FASTLZ**、および **SKIPZ**) が使用可能です。圧縮を使用するには、**Vmvstortransport** オプションを使用して転送オプションを **NBDSSL** に設定する必要があります。

NBDSSL 圧縮は、vSphere 6.5 以上で使用可能です。

サポートされるクライアント

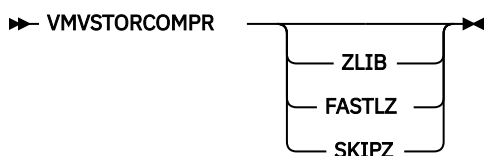
このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) 内、または **Backup VM** のコマンド・ラインで有効です。サーバー上でクライアント・オプション・セットに組み込むこともできます。プリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

ZLIB

圧縮タイプを NBDSSL 転送を指定した ZLIB に設定します。

FASTLZ

圧縮タイプを NBDSSL 転送を指定した FASTLZ に設定します。

SKIPZ

圧縮タイプを NBDSSL 転送を指定した SKIPZ に設定します。

例

コマンド・ライン:

NBDSSL 転送を指定した VM バックアップおよびリストアの操作の圧縮のタイプおよび転送モードを設定するには、次のコマンドを発行します。

```
dsmc backup vm myVM -VMVSTORCOMPR=SKIPZ -VMVSTORTRANSPORT=NBDSSL
```

この例では、必須の転送設定 NBDSSL が指定され、SKIPZ 圧縮プロトコルを使用して VM myVM がバックアップされるようになります。

オプション・ファイル:

```
VMVSTORCOMPR SKIPZ
```

関連資料

670 ページの『Backup VM』

639 ページの『Vmvstortransport』

vmvstortransport オプションは、VMware 仮想マシンをバックアップまたはリストアする際に使用する、トランスポートの優先順序(階層)を指定します。このオプションを使用して所定のトランスポートを組み込まない場合は、そのトランスポートは除外され、データの転送には使用されません。

Vmvstortransport

vmvstortransport オプションは、VMware 仮想マシンをバックアップまたはリストアする際に使用する、トランスポートの優先順序(階層)を指定します。このオプションを使用して所定のトランスポートを組み込まない場合は、そのトランスポートは除外され、データの転送には使用されません。

指定したトランスポートの順序によって VMware API for Data Protection (VADP) が仮想ディスクのデータにアクセスする方法が決まりますが、バックアップ/アーカイブ・クライアントと IBM Spectrum Protect サーバーの間で使用されるデータ・パスには影響しません。有効なトランスポートには、以下のオプションを任意の順序で、あるいはオプションの任意の組み合わせを組み込みます。

nbd

ネットワーク・ベースのデータ転送。仮想ディスク・データは、LAN を使用してアクセスされます。このトランスポート・パスは、ほとんどの場合、すべての構成で使用可能です。

nbdssl

これは nbd と同じですが、データは、LAN 経由で送信される前に暗号化されます。暗号化によってパフォーマンスが低下する可能性があります。

san

ストレージ・エリア・ネットワーク転送。仮想ディスク・データは、SAN を使用してアクセスされます。

hotadd

仮想マシンでバックアップ/アーカイブ・クライアントを使用する場合、hotadd トランスポートを使用することにより、動的に追加されるストレージにバックアップ・データをトランスポートすることができます。

それぞれのトランスポート・オプションを他のオプションと分離するには、san:nbd:nbdssl:hotadd の例のように、コロンを使用します。

トランスポートの階層を指定しない場合、トランスポート選択のデフォルトの順序は san:hotadd:nbdssl:nbd となります。

使用可能な最初のトランスポートが、データの転送に使用されます。特定のパスを介したデータ・トランスポートを行いたくない場合は、トランスポート・リストに含めないでください。例えば、LAN トラフィックを中断させないことが重要である場合は、nbd トランスポートを階層から除外します。

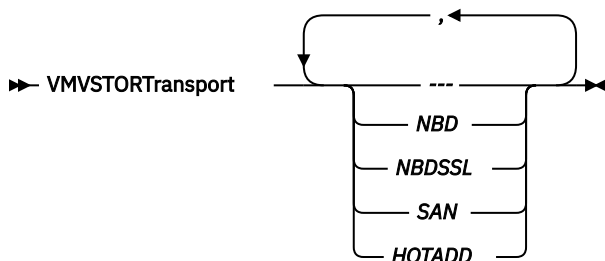
 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

このオプションは、`dsm.sys` に設定します。

サポートされるクライアント

このオプションは、VADP を使用して仮想マシンのファイルをバックアップまたはリストアするように構成された Linux クライアントに有効です。

構文



例

SAN が使用可能な場合は、バックアップやリストアを **LAN** 経由でトランスポートしないでください。

```
VMVSTORTRANSPORT SAN
```

バックアップ/アーカイブ・クライアントは仮想マシンで稼働していますが、**hotadd** トランスポートは使用しません。

```
VMVSTORTRANSPORT nbdssl:nbd
```

より良いパフォーマンスを得るために、**nbdssl** が使用可能であっても **LAN** トランスポートを使用してください。

```
VMVSTORTRANSPORT nbd
```

SAN トランスポートが優先されますが、**SAN** が使用可能でない場合は **nbd** を使用し、**nbdssl** や **hotadd** は使用しません。

```
VMVSTORTRANSPORT san:nbd
```

関連資料

638 ページの『[vmvstorcompr](#)』

`vmvstorcompr` オプションは、バックアップ操作およびリストア操作中の IBM Spectrum Protect クライアントによる圧縮の使用を制御します。

Vmtimeout

`VMTIMEOut` は、`INCLUDE.VMTSMVSS` オプションがアプリケーションを保護するために使用される場合、**backup vm** 操作を中止するまでに待機する最大時間を秒単位で指定します。このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments ライセンスがインストールされている必要があります。

`INCLUDE.VMTSMVSS` オプションで保護されている仮想マシンで実行される **backup vm** 操作は、いずれもタイマーに従います。タイマー値は、アプリケーションが活動を静止させてそのログを切り捨て、バックアップを実行できるようになるまでクライアントが待機する秒数を決定します。デフォルトのタイムアウト値は、ほとんどの環境にとって十分な値です。ただし、アプリケーションがスナップショットの準備用にさらに時間を必要とするため、アプリケーション・データをバックアップできない場合、タイムアウト値を増やすことができます。このタイマーは、`INCLUDE.VMTSMVSS` オプションが仮想マシン用に設定されている場合、**backup vm** 操作にのみ適用できます。

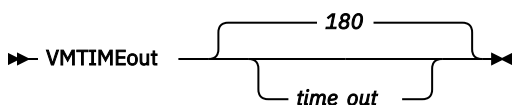
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされる x86_64 Linux クライアントで使用可能です。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・オプション・ファイルに入れます。 コマンド・ラインまたはプリファレンス・エディターには設定できません。

構文



パラメーター

time_out

仮想マシンがアプリケーション保護オプション `INCLUDE.VMTSMVSS` で保護されている場合に、バックアップ操作を完了できる時間 (秒) を指定します。指定される値は、180 から 500 までの整数である必要があります。デフォルトは 180 秒です。

例

オプション・ファイル

`VMTIMEout 500`

コマンド・ライン

適用外; このオプションはコマンド・ラインで設定することはできません。

関連資料

463 ページの『[INCLUDE.VMTSMVSS](#)』

`INCLUDE.VMTSMVSS` オプションは、仮想マシンのアプリケーションに、バックアップがまもなく実行されることを通知します。このオプションにより、アプリケーションでは、トランザクション・ログの切り捨てとトランザクションのコミットが可能になるため、バックアップ完了時には整合性のある状態から再開できます。トランザクション・ログの切り捨てを抑止するためのオプション・パラメーターを指定することもできます。

Webports

`webports` オプションを使用すると、ファイアウォールの外側にある Web クライアントを使用できるようになります。

`webports` オプションを使用すると、IBM Spectrum Protect クライアント・アクセプター・サービスおよび Web クライアントとの通信のための Web クライアント・エージェント・サービスが使用する TCP/IP ポート番号を指定することにより、ファイアウォールの外でも Web クライアントを使用することができます。

クライアント・アクセプターおよび Web クライアント・エージェント・サービスの両方の値が必要です。

このオプションを指定しない場合には、デフォルト値のゼロ (0) が両方のポートに使用されます。これにより、TCP/IP は、クライアント・アクセプターおよび Web クライアント・エージェント・サービスにフリー・ポート番号をランダムに割り当てます。

サポートされるクライアント

このオプションは、すべてのクライアントに有効です。IBM Spectrum Protect API は、このオプションをサポートしていません。

オプション・ファイル

このオプションは、サーバー・スタンザ内の `dsm.sys` ファイルに入れます。このオプションをクライアント・プリファレンス・エディターに設定するには、「編集」>「クライアント・プリファレンス」>「Web クライアント」の順にクリックし、「Web エージェント・ポート」フィールドと「Web クライアント・アクセプター・ポート」フィールドにポートを指定します。

構文

➡ WEBPorts — — *cadport* — — *agentport* ➡

パラメーター

cadport

必要なクライアント・アクセプター・ポート番号を指定します。値の範囲は 1000 から 32767 です。値が指定されないと、デフォルトのゼロ (0) によって、TCP/IP がランダムにフリー・ポート番号を割り当てます。

agentport

必須 Web クライアント・エージェント・サービスのポート番号を指定します。値の範囲は 1000 から 32767 です。値が指定されないと、デフォルトのゼロ (0) によって、TCP/IP がランダムにフリー・ポート番号を割り当てます。

例

オプション・ファイル:

`webports 2123 2124`

コマンド・ライン:

適用しません。

Wildcardsareliteral

`wildcardsareliteral` オプションは、疑問符 (?) およびアスタリスク (*) が `filelist` オプションのファイル・リスト指定に含まれている場合に、それらを文字どおりに解釈するかどうかを指定します。

通常、クライアントは、`filelist` オプションに含まれているファイル・リスト指定で、ワイルドカード文字 (? および *) を受け入れません。IBM Spectrum Scale (旧称 GPFS) ファイル・システムなどの一部のファイル・システムでは、ファイルとディレクトリーの名前に単一引用符および二重引用符の使用が許可されています。`filelist` オプションにファイル指定が含まれており、そのファイル指定にワイルドカード文字が含まれている場合は、誤った解釈によるエラーが発生しないように `wildcardsareliteral yes` を設定してください。`wildcardsareliteral` が `yes` に設定されると、`filelist` オプションのファイル・リスト指定に含まれている疑問符 (?) とアスタリスク (*) は、ワイルドカード文字ではなく文字どおりに解釈されます。

このオプションは、コマンド・パラメーターとして `filelist` オプションを指定できるすべてのコマンドに適用されます。

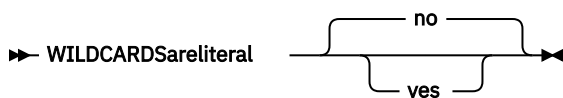
サポートされるクライアント

このオプションは、サポートされているすべての UNIX プラットフォームおよび Linux プラットフォームで有効です。このオプションは、パラメーターとしてファイル・リスト指定が有効なすべてのコマンドに適用されます。

オプション・ファイル

このオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に入れます。

構文



パラメーター

no

filelist オプションに含まれているファイル・リスト指定で疑問符およびアスタリスクが使用されている場合に、それらをワイルドカードとして解釈することを指定します。デフォルト設定は No です。filelist オプションのファイル・リスト指定に疑問符またはアスタリスクが含まれている場合、エラーが発生し、ファイル指定を処理できません。

yes

filelist オプションに含まれているファイル・リスト指定内のアスタリスクおよび疑問符を、ワイルドカード文字としてではなく、文字どおりに解釈することを指定します。ファイル名またはディレクトリー名でのワイルドカード文字の使用が許可されているファイル・システムからファイルをバックアップする場合は、この値を指定します。

例

オプション・ファイル:

WILDCARDSARELITERAL YES

コマンド・ライン:

ファイル・システムで、パスへのワイルドカード文字の使用が許可されていると仮定した場合、以下の例に示すファイル・リスト指定内のファイルは、WILDCARDSARELITERAL を YES に設定すると正常に処理することができます。

実行されるコマンドは、`dsmc sel -filelist=/home/user1/important_files` で、`important_files.txt` には処理するファイルのリストが含まれているものとします。

`important_files.txt` には、以下のファイル・リストが含まれています。

```
/home/user1/myfiles/file?9000  
/home/user1/myfiles/?file  
/home/user1/myfiles/**README**version2  
/home/user1/myfiles/ABC?file*
```

WILDCARDSARELITERAL と QUOTESARELITERAL の両方が YES に設定されている場合、以下のバックアップは正常に処理できます。

```
/home/user1/myfiles/"file?  
/home/user1/myfiles/?file'  
/home/user1/myfiles/**"README Tomorrow"***  
/home/user1/myfiles/file*
```

関連情報

filelist オプションについては、[429 ページの『Filelist』](#)を参照してください。

ファイル指定の構文については、[150 ページの『ブランク・スペースまたは引用符を含む入力ストリングの指定』](#)を参照してください。

[514 ページの『Quotesareliteral』](#)

第 11 章 コマンドの使用

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、グラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) の代わりに使用できるコマンド・ライン・インターフェース (CLI) を提供します。ここでは、クライアント・コマンド・セッションの開始方法または終了方法、およびコマンドの入力方法について説明します。

下記は、コマンドの入力と関連したタスクのリストです。

- [648 ページの『クライアント・コマンド・セッションの開始と終了』](#)
- [650 ページの『クライアント・コマンド名、オプション、およびパラメーターの入力』](#)
- [653 ページの『ワイルドカード文字』](#)

以下のテーブルには、コマンドのアルファベット順のリスト、および要旨が示されています。

表 79. コマンド

コマンド	説明
archive 654 ページの『Archive』	ファイルをワークステーションから IBM Spectrum Protect ストレージにアーカイブします。
backup fastback 658 ページの『Backup FastBack』	長期保存のために、fbpolicyname オプション、fbclientname オプション、および fbvolumename オプションによって指定されたボリュームをバックアップします。
backup group 661 ページの『Backup Group』	1 つ以上のファイル・スペースからのファイルのリストを含むグループを IBM Spectrum Protect サーバー上の仮想ファイル・スペースに作成してバックアップします。
backup image 663 ページの『Backup Image』	指定された 1 つ以上のファイル・システムまたは 論理ボリュームのイメージ・バックアップを作成します。
backup nas 668 ページの『Backup NAS』	Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属している 1 つ以上の ファイル・システムのイメージ・バックアップを作成します。
backup vm 670 ページの『Backup VM』	vmlist オプションで指定された仮想マシンをバックアップします。
cancel process 677 ページの『Cancel Process』	管理ユーザーが権限を持つ 現行の NAS (NDMP サポートが有効な場合) イメージ・バックアップおよび リストア・プロセスのリストを表示します。
cancel restore 677 ページの『Cancel Restore』	再始動可能リストア・セッションのリストを表示します。このリストから取り消すセッションを選択できます。
delete access 678 ページの『Delete Access』	サーバー上に保管されているファイルの許可規則を削除します。 イメージ・バックアップをサポートするクライアント上で、このコマンドはサーバー上に保管されているイメージの許可規則を削除します。
delete archive 679 ページの『Delete Archive』	アーカイブ・ファイルを IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージから削除します。
delete backup 680 ページの『Delete Backup』	活動または非活動バックアップ・ファイルを IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージから削除します。
delete filespace 684 ページの『Delete Filespace』	IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージ中のファイル・スペースを削除します。

表 79. コマンド (続き)

コマンド	説明
delete group 685 ページの『Delete Group』	IBM Spectrum Protect サーバー上のグループ・バックアップを削除します。
expire 686 ページの『Expire』	ファイル指定で指定されたバックアップ・オブジェクト、あるいは filelist オプションで指定されたバックアップ・オブジェクトを非活動化します。
help 688 ページの『Help』	コマンド・ライン・クライアント用にヘルプ・トピックの目次を表示します。
incremental 689 ページの『Incremental』	デフォルト・クライアント・ドメイン内、あるいは指定されているファイル・システム、ディレクトリー、またはファイルから、バックアップ・サービスから除外されていないすべての新規または変更ファイルまたはディレクトリーをすべてバックアップします。
loop 696 ページの『Loop』	対話式コマンド・セッションを開始します。
macro 697 ページの『Macro』	指定されたマクロ・ファイル内でコマンドを実行します。
monitor process 698 ページの『Monitor Process』	現在の NAS イメージ・バックアップおよび リストア・プロセスのリストを表示します。このリストから取り消すプロセスを選択できます。
preview archive 698 ページの『Preview Archive』	データをサーバーに送信せずに、アーカイブ・コマンドをシミュレートします。
preview backup 699 ページの『Preview Backup』	データをサーバーに送信せずに、バックアップ・コマンドをシミュレートします。
query access 700 ページの『Query Access』	現行の許可規則のリストを表示します。
query archive 701 ページの『Query Archive』	アーカイブ・ファイルのリストを表示します。
query backup 703 ページの『Query Backup』	バックアップ・バージョンのリストを表示します。
query backupset 706 ページの『Query Backupset』	ローカル・ファイルまたは IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットを照会します。テープ装置をサポートするクライアントで、このコマンドはテープ装置からバックアップ・セットを照会できます。
query filespace 710 ページの『Query Filespace』	IBM Spectrum Protect ストレージ中のファイルのリストを表示します。照会したい単一のファイル・スペース名を指定することもできます。
query group 712 ページの『Query Group』	グループ・バックアップおよびそのメンバーに関する情報を表示します。
query image 714 ページの『Query Image』	イメージ・バックアップに関する情報を表示します。
query inclexcl 716 ページの『Query Inclexcl』	バックアップおよびアーカイブ操作の実行中に処理される順序で include ステートメントまたは exclude ステートメントのリストを表示します。
query mgmtclass 717 ページの『Query Mgmtclass』	使用可能な管理クラスについての情報を表示します。

表 79. コマンド (続き)

コマンド	説明
query node 718 ページの『Query Node』	管理ユーザー ID が操作の実行権限をもつすべてのノードを表示します。
query options 719 ページの『Query Options』	使用するオプションおよびその現在の設定のすべてまたは一部を表示します。
query restore 720 ページの『Query Restore』	サーバー・データベースにある再始動可能リストア・セッションのリストを表示します。
query schedule 721 ページの『Query Schedule』	ノードのスケジュールされたイベントについての情報を表示します。
query session 721 ページの『Query Session』	セッションに関する情報 (現行ノード名、セッションが確立された時刻、サーバー情報、およびサーバー接続情報を含む) を表示します。
query systeminfo 722 ページの『Query Systeminfo』	IBM Spectrum Protect システム情報を収集し、この情報をファイルまたはコンソールに出力します。
query vm 723 ページの『Query VM』	vStorage バックアップ・サーバーからの仮想マシンのバックアップが正常に行われたか検証します。
restart restore 727 ページの『Restart Restore』	再始動可能リストア・セッションのリストを表示します。このリストから再始動するセッションを選択できます。
restore 728 ページの『Restore』	ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーからリストアします。
restore backupset 733 ページの『Restore Backupset』	IBM Spectrum Protect サーバーまたはローカル・ファイルからバックアップ・セットをリストアします。テープ装置をサポートするクライアントで、このコマンドはテープ装置からバックアップ・セットをリストアできます。
restore group 740 ページの『Restore Group』	グループ・バックアップの特定のメンバーまたはすべてのメンバーをリストアします。
restore image 742 ページの『Restore Image』	ファイル・システムまたはロー・ボリューム・イメージ・バックアップをリストアします。
restore nas 745 ページの『restore NAS』	Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属しているファイル・システムのイメージをリストアします。
restore vm 747 ページの『Restore VM』	フル VM バックアップをリストアして、vStorage バックアップ・サーバー上の vmbakdir ディレクトリーにそのフル VM バックアップ・ファイルを戻します。
retrieve 759 ページの『Retrieve』	アーカイブ・ファイルのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーから入手します。
schedule 762 ページの『Schedule』	ワークステーション上のクライアント・スケジューラーを開始します。
selective 764 ページの『Selective』	選択したファイルをバックアップします。

表 79. コマンド (続き)

コマンド	説明
set access 767 ページの『Set Access』	バックアップ・バージョンまたはアーカイブ・コピーへのアクセスを別のユーザーに許可します。 イメージ・バックアップをサポートするクライアント上で、このコマンドはサーバー上に保管されているイメージの許可規則を設定できます。
set event 769 ページの『Set Event』	アーカイブ・データを削除する時間の詳細を指定できるようにします。
set netappsvm Set Netappsvm	クラスター管理サーバーのログイン資格情報を NetApp ストレージ仮想マシンとデータ SVM 名 (データ Vserver) に関連付けます。クラスター化 NetApp ボリュームのスナップショット差分増分バックアップを作成するには、事前にこのコマンドを入力する必要があります。
set password 772 ページの『Set Password』	ワークステーションの IBM Spectrum Protect パスワードを変更します。

操作が適切に行われるために、was ノードは同じ名前と同じ場所にリストアする必要があります。

重要: 問題を回避するには、Network Deployment Manager ノードまたは Application Server ノード・レベルでのみデータをリストアします。

関連資料

[xxiv ページの『構文図の読み取り』](#)

コマンドを入力するために構文図を読み取るには、線の経路に従ってください。左から右へ、上から下へと読んでください。

クライアント・コマンド・セッションの開始と終了

クライアント・コマンド・セッションは、バッチ・モードか対話モードで開始または終了することができます。

単一のクライアント・コマンドを入力する場合には、バッチ・モードを使用してください。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、コマンドを処理して、コマンド・プロンプトに戻ります。

一連のコマンドを入力する場合には、対話モードを使用してください。対話モードの場合に、クライアントは一度だけサーバーへの接続を確立するので、一連のコマンドをより迅速に処理することができます。クライアントは、コマンドを処理して、Protect> プロンプトに戻ります。

バッチ・モードでのコマンドの処理

一部のオプションは初期コマンド・ラインでのみ有効であり、対話モードでは有効ではありません。これらのオプションは通常セッション全体の操作に影響します。

例えば、コマンド **dsmc query session -errorlogname=myerror.log** は受理されて、エラー・ログに名前を付けます。しかし、QUERY コマンドのオプションが無効であっても、単に初期コマンドで現れるという理由で受理されます。

対話モードでの個々のコマンドと同様、初期コマンド・ラインで常に有効なオプションもあります。そのために、入力されるコマンドに影響がなくても、初期コマンド・ラインで特定のオプションが受理されます。例えば、**dsmc query session -subdir=yes** は有効なコマンドですが、**-subdir** オプションの場合は、入力されたコマンドに影響がありません。

単一の コマンドをバッチ・モードで入力するときには、その前に実行可能プログラム名の **dsmc** を入力してください。例えば、**incremental** コマンドをバッチ・モードで処理するには、次のように入力します。

```
dsmc incremental
```

passwordaccess オプションが *prompt* に設定されていて、サーバー上の認証が *On* に設定されている場合は、バックアップ/アーカイブ・クライアントはユーザーがコマンドを入力するたびにプロンプトを出します。パスワードを入力して、Enter キーを押してください。

コマンドと一緒に **password** オプションを使用してパスワードを入力することもできますが、その場合はパスワードが画面上に表示されます。例えば、パスワードが **secret** である場合には、次のように入力します。

```
dsmc incremental -password=secret
```

dsm.opt ファイルの中で **passwordaccess** オプションを *generate* に設定した場合には、コマンドと一緒にパスワードを指定する必要はありません。クライアントは、ユーザーがサーバーでワークステーションを登録しているか、あるいはパスワードを手動で変更している場合にのみ、パスワードを求めるプロンプトを出します。

関連概念

309 ページの『[処理オプション](#)』

クライアントの処理オプションのデフォルトを使用することも、特定のニーズに合わせて処理オプションを調整することもできます。処理オプションの概要を読み、オプションの解説を参照して各オプションの詳細を確認してください。

対話モードでのコマンドの処理

一連のコマンドを入力するには、対話式 モード (またはループ・モード) を使用してください。

コマンド・ラインに **dsmc** を入力して Enter キーを押します。Protect> コマンド・プロンプトが表示されたら、コマンド名を入力して Enter キーを押してください。各コマンドの前に実行可能プログラム名 **dsmc** を入れないでください。代わりに、コマンド・ラインに **dsmc loop** を入力して、クライアント・コマンド・セッションを対話モードで開始することができます。Loop は、**dsmc** のデフォルトのコマンドです。

パスワードが必要なときは、バックアップ/アーカイブ・クライアントは最初のコマンドの入力前にプロンプトを出します。

ユーザー ID とパスワードを入力して、Enter キーを押してください。

パスワードは、**password** オプションを **loop** コマンドで使用して入力することもできますが、その場合には、パスワードが画面に表示されます。例えば、パスワードが **secret** である場合には、次のように入力します。

```
dsmc loop -password=secret
```

対話式セッションを終了するには、プロンプトで **quit** と入力します。

UNIX および Linux クライアントへの注記:

ループ・モードでは、テープからリストア操作を直接行ったあと、目的のボリュームに別のリストア要求がなされた場合は、マウント・ポイントがリリースされません。同じセッション内でバックアップ操作を要求したときに、このマウント・ポイントのみが使用可能な場合は、バックアップ操作が停止し、次のメッセージが表示されます。

```
オフライン・メディアのマウントを待機中
```

この場合は、次のいずれかの条件が満たされるまで、マウント・ポイントは解放されません。

- 装置クラス MOUNTRETENTION 制限が満たされている。
- クライアントのアイドル・タイムアウト期間が満たされている。

- リストア操作の完了後に dsmc ループ・セッションがクローズされ、バックアップ操作を実行するために以降のループ・モード・セッションを開始できるようになる。

クライアント・コマンド名、オプション、およびパラメーターの入力

クライアント・コマンドには、構成要素の コマンド名、オプション、およびパラメーター の 1 つ以上を含むことができます。以下のトピックでは、これらの各構成要素を説明しています。

コマンド名

コマンドの最初の部分は、コマンド名です。コマンド名は、**help** や **schedule** のように、1 つの単語からなる場合と、**query archive** のように、アクションの語とそのアクションの対象とからなる場合があります。

完全なコマンド名、またはその最小の省略形を入力してください。

例えば、**query schedule** コマンドの場合は、次の任意のバージョンを入力することができます。

```
query schedule
q sc
q sched
query sc
```

オプション

コマンドとともにオプションを入力する場合には、常にオプションの前にダッシュ (-) を入れてください。ダッシュとオプション名の間にスペースを入れないでください。

複数のオプションは、ファイル指定の前または後にコマンドで任意の順序で入力します。複数のオプションはブランク・スペースで区切ります。

コマンドで利用できるオプション・グループには、クライアント・オプション (オプション・ファイルに設定)、またはクライアント・コマンド・オプション (コマンド・ラインで使用) の 2 つがあります。

- **クライアント・オプション**: クライアント・オプション・ファイルに設定されるオプションのグループ。コマンド・ラインでコマンドとともにオプションを入力するときに、クライアント・オプション・ファイルのオプションを指定変更することができます。
- **クライアント・コマンド・オプション**: クライアント・コマンド・オプションは、コマンド・ラインでコマンドとともにオプションを入力するときにのみ使用してください。これらのオプションをオプション・ファイルで設定することはできません。

関連概念

341 ページの『クライアント・オプションの解説』

以下の各セクションでは、IBM Spectrum Protect 処理オプションのそれぞれについての詳細な説明を記載します。

対話モードでのオプション

対話モードでは、初期コマンド・ラインに入力したオプションは、オプション・ファイルで指定した値を指定変更します。

この値は、他の対話式コマンドで別の値によって指定変更されない限り、対話式セッション全体にわたって有効となります。

例えば、dsm.opt ファイルまたは dsm.sys ファイルで **subdir** オプションを **yes** に設定し、初期コマンド・ラインで **subdir=no** を指定した場合は、他の対話式コマンドで **subdir=yes** 値で指定変更しない限り、**subdir=no** の設定が対話式セッション全体で有効になります。ただし、対話式セッションで **subdir=yes** 値を指定しても、入力したコマンドにしか影響しません。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値 **subdir=no** に戻ります。

パラメーター

コマンドには、必須パラメーター、任意指定パラメーターを含めたり、パラメーターをまったく含めないことができます。

必須パラメーターはタスクを実行するための情報を指定します。最も一般的な必須パラメーターはファイル指定です。

例えば、ファイル `budget.fin` を `project` ディレクトリーからアーカイブする 場合には、次のように入力します。

```
dsmc archive /project/budget.fin
```

いくつかのコマンドは任意パラメーターを持っています。任意指定パラメーターの値を入力しなかった場合には、バックアップ・アーカイブ・クライアントはデフォルト値を使用します。例えば、**restore** コマンドには、リストアしたいストレージ内のパスおよびファイル名を指定する必須パラメーターの **sourcefilespec** があります。任意指定パラメーターの **destinationfilespec** は、リストアされたファイルを入れたいパスを指定します。**destinationfilespec** を指定しない場合には、デフォルトによりクライアントはそのファイルをオリジナル・ソース・パスにリストアします。ファイルを別のディレクトリーにリストアしたい場合には、**destinationfilespec** に値を入力してください。

例: ファイル `/project/budget.fin` を新しいパス `/newproj/newbudg.fin` にリストアします。

```
dsmc restore /project/budget.fin /newproj/
```

パラメーターはコマンド構文図に示す順序で入力します。

ファイル指定の構文

filespec、**sourcefilespec**、および **destinationfilespec** などのファイル指定パラメーターを入力する場合は、いくつかの構文規則を理解していることが必要です。

以下は、構文規則です。

- ファイル・スペース名の一部として、あるいは **destinationfilespec** の中ではワイルドカードを使用しないようにしてください。この規則のただ 1 つの例外は、ファイル指定の最低 2 つのレベルでワイルドカードを使用することができる **set access** コマンドです。

例: `/home` ディレクトリー内のすべてのディレクトリーおよびその従属ディレクトリー内にあるすべてのファイルへのアクセスを許可します。

```
set access backup /home/* * *
set access backup /home/*/* * *
```

UNIX クライアントでは、次のように、ワイルドカードをディレクトリー・パス名で使用することはできません。

```
/home/j*asler/file1.c
```

- コマンド当たりのファイル指定には最大数があります。
 - **Query** コマンドが受け入れることのできるのは、ただ 1 つのファイル指定だけです。
 - **restore** コマンドおよび **retrieve** コマンドが、ソース・ファイル指定と宛先ファイル指定を受け入れることができます。
 - 一部のコマンドには、20 個のオペランドの制限があります。この制限は、ワイルドカードが UNIX シェル・コマンド・プロセッサによって展開された場合にセッション数が過多になることを回避するためのものです。

シェルの展開により 20 個のオペランドの制限を超えないようにするには、リストア・コマンドでソース・ファイル指定拡張文字を引用符で囲みます。

注: 引用符を使用すると、照会なしリストアを引き起こすという副次作用があります。

removeoperandlimit オプションを使用して、バックアップ・アーカイブ・クライアントが、20 個のオペランド制限を除去することを指定できます。**incremental**、**selective**、**archive**、または **backup image** コマンドで **removeoperandlimit** オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。

- ファイル指定の長さは制限されます。
 - AIX、Solaris、および Mac の場合: ファイル名の最大文字数は 255 です。ファイル名とパス名の最大結合長は 1024 文字です。1 文字の Unicode 表記が複数のバイトを占める場合があるため、ファイル名に含まれる最大文字数は変化する可能性があります。
 - Linux の場合: ファイル名の最大長は 255 バイトです。ファイル名とパス名の両方を結合した最大長は 4096 バイトです。この長さは、オペレーティング・システムでサポートされている `PATH_MAX` に一致します。1 文字の Unicode 表記が複数のバイトを占める場合があるため、パス名とファイル名を構成する最大文字数は変化する可能性があります。実際の制限はパス・コンポーネントとファイル・コンポーネント内のバイト数であり、これは同じ数の文字に対応する場合があります。

Linux の場合: アーカイブ操作またはリトリブ操作の場合、パス名とファイル名 (結合したもの) に指定できる最大長は 1024 バイトのままです。

- **sourcefilespec** を入力するときに、ディレクトリー名が / で終わる場合は、/* が暗黙指定されます。

destinationfilespec を入力する時に、その名前が / で終わる場合は、それはディレクトリーと見なされ、そうでない場合はファイルと見なされます。

次の例は、この 2 つの規則を例示しています。mydir および yourdir がディレクトリーであっても、mydir の後で /* が暗黙指定されるのでコマンドは失敗し、yourdir はファイルと見なされます。

```
restore /home/mydir/ /away/yourdir
```

```
restore c:\home\mydir\ c:\away\yourdir
```

- ファイル指定がディレクトリー区切り文字で始まらない場合は、そのファイル指定は現行作業ディレクトリーのサブディレクトリーであると仮定されます。クライアントは、ファイル指定を作業ディレクトリーに付加して、完全なパスを作成します。

例えば、現行作業ディレクトリーが /home/me で、コマンドが `dsmc res "/fs/dir1/*" mydir/` である場合、完全なリストア・パスは /home/me/mydir になります。

- 単純なファイル・スペース名を受け入れる唯一のコマンドは、**incremental** コマンドです。次の例は有効です。

```
dsmc i /Users
```

次の例は、コマンドが **selective** コマンドであるため、無効です。

```
dsmc sel /Users
```

関連資料

429 ページの『[Filelist](#)』

filelist オプションを使用して、ファイルのリストを処理します。

515 ページの『[Removeoperandlimit](#)』

removeoperandlimit オプションは、クライアントがオペランド数 20 の制限を除去することを指定します。

ワイルドカード文字

類似した名前を持つ複数のファイルを 1 つのコマンドで指定するためには、ワイルドカード文字を使用してください。ワイルドカード文字を使用しなければ、各ファイルごとにコマンドを繰り返す必要があります。

コマンドの中では、ファイル名またはファイル拡張子の中でのみワイルドカード文字を使用することができます。これらは宛先ファイル、ファイル・システム、またはサーバー名の指定には使用できません。名前にアスタリスク (*) または疑問符 (?) が使用されているディレクトリーは指定できません。

使用できる有効なワイルドカード文字には、次のものがあります。

アスタリスク。ゼロ個または 1 個以上の文字と突き合わせます。

?

疑問符。現在位置にある任意の 1 文字と突き合わせます。

次の表はそれぞれのワイルドカードについての例を示しています。

表 80. ワイルドカード文字		
パターン	一致	一致しない
アスタリスク (*)		
ab*	ab, abb, abxxx	a, b, aa, bb
ab*rs	abrs, abtrs, abrsrs	ars, aabrs, abrss
ab*ef*rs	abefrs, abefghrs	abefr, abers
abcd.*	abcd.c, abcd.txt	abcd, abcdc, abcdtxt
疑問符 (?)		
ab?	abc	ab、abab、abzzz
ab?rs	abfrs	abrs, abllrs
ab?ef?	abdefjrs	abefrs, abdefrs, abefjrs
ab??rs	abcdrs, abzzrs	abrs, abjrs, abkkrs

重要: マルチバイト・コード・ページでパターンの突き合わせを試行する場合は、予期しない結果を避けるために、疑問符 (?) ではなくアスタリスク (*) をワイルドカード文字として使用します。

注: バッチ・モードでは、ワイルドカードを含む値を引用符で囲みます。そうでないと、UNIX シェルは引用符で囲まれていないワイルドカードを展開するため、20 個のオペランドの制限を容易に超えます。タスクを完了するには、より少ないサーバーによる多数の対話が必要となるため、クライアントに対してワイルドカードによるファイル指定の処理を許可すると効率が増します。例えば、次のようにします。

```
dsmc selective "/home/me/*.c"
```

クライアント・コマンドの解説

以下の各項には、バックアップ/アーカイブ・クライアント・コマンドのそれぞれについての詳細な説明が含まれています。

それぞれのコマンドに関する情報には、以下が含まれています。

- コマンドの説明。
- コマンドの構文図。

- コマンド・パラメーターの詳細な説明。パラメーターが定数(変更されない値)の場合には、最小の省略形を大文字で示します。
- コマンドの使用例。

Archive

archive コマンドは、サーバー側のディレクトリーおよびそのサブディレクトリーに入っている単一のファイル、選択したファイル、またはすべてのファイルをアーカイブします。

現在の状態で保存したいファイルをアーカイブしてください。ワークステーション上のストレージ・スペースを解放するには、**deletefiles** オプションを使用してファイルのアーカイブ時にファイルを削除します。アーカイブしたファイルは、再び必要になった時ワークステーションにリトリーブします。

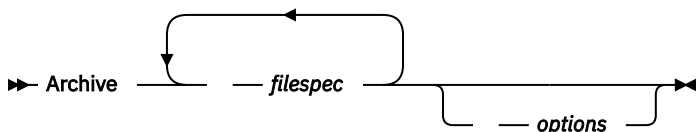
archive コマンドで **snapshotroot** オプションを使用し、併せて論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダー・アプリケーションを使用することで、ローカル・スナップショット上のデータを IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データと関連付けます。**snapshotroot** オプションは、ボリューム・スナップショットが作成したデータを管理する機能のみを提供し、ボリューム・スナップショットを取る機能は提供しません。

AIX のみ: スナップショット・ベース・ファイルのアーカイブを有効にするには、オプション **snapshotproviderfs=JFS2** を使用します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec

アーカイブしたいファイルのパスと名前を指定します。ディレクトリー内のファイルのグループまたはすべてのファイルを含めるには、ワイルドカード文字を使用してください。

複数のファイル指定を含めるには、各 **filespec** パラメーターを 1 つのスペース文字で区切ります。複数のファイル指定が含まれており、その指定のうちの複数の親ディレクトリーを持つ場合、共通ディレクトリー・オブジェクトを複数回アーカイブすることが可能です。この動作が発生する条件はランタイム依存ですが、動作そのものは悪影響を及ぼしません。

例えば、**filespec** が **/home/amr/ice.doc /home/amr/fire.doc** の場合、**/home** および **home/amr** は 2 回アーカイブされる可能性があります。ファイル・オブジェクト **ice.doc** および **fire.doc** は、1 回のみアーカイブされます。

共有親ディレクトリーを複数回含めないようにする場合は、別個の、重複しない **archive** コマンドを使用して、各ファイル指定をアーカイブします。

ファイル・システムをアーカイブする場合は、末尾のスラッシュ (**/home/**) を含めます。

20 個のオペランドの制限があります。この制限は、ワイルドカードが UNIX シェル・コマンド・プロセッサによって展開された場合にセッション数が過多になることを回避するためのものです。ワイルドカード (**/home/docs/***) が含まれているファイル指定を引用符で囲むことで、シェルが展開しても 20 個のオペランド制限を超えないようにすることができます。

removeoperandlimit オプションを使用して、20 個のオペランド制限を除去することを指定できます。**removeoperandlimit** オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可

能なりソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。例えば、21 個のファイル指定をアーカイブするには、次のようにして 20 個のオペランド制限を除去します。

```
selective -removeoperandlimit filespec1 filespec2 ... filespec21
```

ファイ指定の代わりに **filelist** オプションを使用して、この操作に含めるファイルを識別することができます。ただし、これらの 2 つの方法を、同時に使用することはできません。ファイル指定パラメーターを含め、かつ **filelist** オプションを使用することはできません。**filelist** オプションが指定された場合、含まれているファイル指定はいずれも無視されます。

表 81. Archive コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
archmc	コマンド・ラインのみ。
archsymb linkasfile	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
autofsrename	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) のみ。
changingretries	クライアント・システム・オプション・ファイルまたはコマンド・ライン。
compressalways	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
compression	サーバー・スタンザまたはコマンド・ライン内の dsm.sys ファイル。
deletefiles	コマンド・ラインのみ。
description	コマンド・ラインのみ。
dirsonly	コマンド・ラインのみ。
encryptiontype	サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイル。
encryptkey	サーバー・スタンザ内の dsm.sys ファイル。
filelist	コマンド・ラインのみ。
filesonly	コマンド・ラインのみ。
preserve lastaccessdate	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
removeoperandlimit	コマンド・ラインのみ。
snapshotcachesize	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) または include.fs オプション。
snapshotroot	コマンド・ラインのみ。
subdir	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
tapeprompt	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
v2archive	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

/home/proj1 ディレクトリー内の budget という名前の単一ファイルをアーカイブします。

コマンド: archive /home/proj1/budget

タスク

/home/proj1 ディレクトリー内のファイル拡張子が .txt であるすべてのファイルをアーカイブします。

コマンド: archive "/home/proj1/*.txt"

タスク

/home ディレクトリー以下のディレクトリー・ツリー内のすべてのファイルをアーカイブします。

コマンド: archive -subdir=yes "/home/*"

タスク

/usr ファイル・システムのスナップショットを開始し、そのスナップショットを /snapshot/day1 としてマウントしたと想定し、/usr/dir1/sub1 ディレクトリー・ツリーをローカル・スナップショットからアーカイブし、それを IBM Spectrum Protect サーバー上でファイル・スペース名 /usr で管理します。

コマンド: dsmc archive /usr/dir1/sub1/ -subdir=yes -snapshotroot=/snapshot/day1

関連概念

[168 ページの『ファイル・システムおよび ACL サポート』](#)

特殊ファイル・システムには、オペレーティング・システムによって生成された動的情報が含まれます。これらには、データまたはファイルは含まれません。UNIX および Linux クライアントは、特殊ファイル・システムおよびそれらの内容を無視します。

関連資料

[556 ページの『Snapshotproviderfs』](#)

snapshotproviderfs オプションを使用して、スナップショット・ベースのファイルのバックアップおよびアーカイブ操作を有効にし、スナップショット・プロバイダーを指定します。

Archive FastBack

長期保存のために fbpolycname オプション、fbclientname オプション、および fbvolumename オプションで指定された Tivoli Storage Manager FastBack ボリュームをアーカイブする場合に、**archive fastback** コマンドを使用します。

このコマンドを使用する前に、Tivoli Storage Manager FastBack データをバックアップおよびアーカイブするクライアントを構成します。また、このコマンドを発行する前に、少なくとも 1 つのスナップショットが、アーカイブまたはバックアップされる FastBack ポリシー用の FastBack リポジトリに存在している必要があります。

ポリシー指定に Windows クライアントと Linux FastBack クライアントの両方が含まれている場合は、Linux バックアップ/アーカイブ・クライアントにより、Linux ボリュームのみが IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップまたはアーカイブされます。

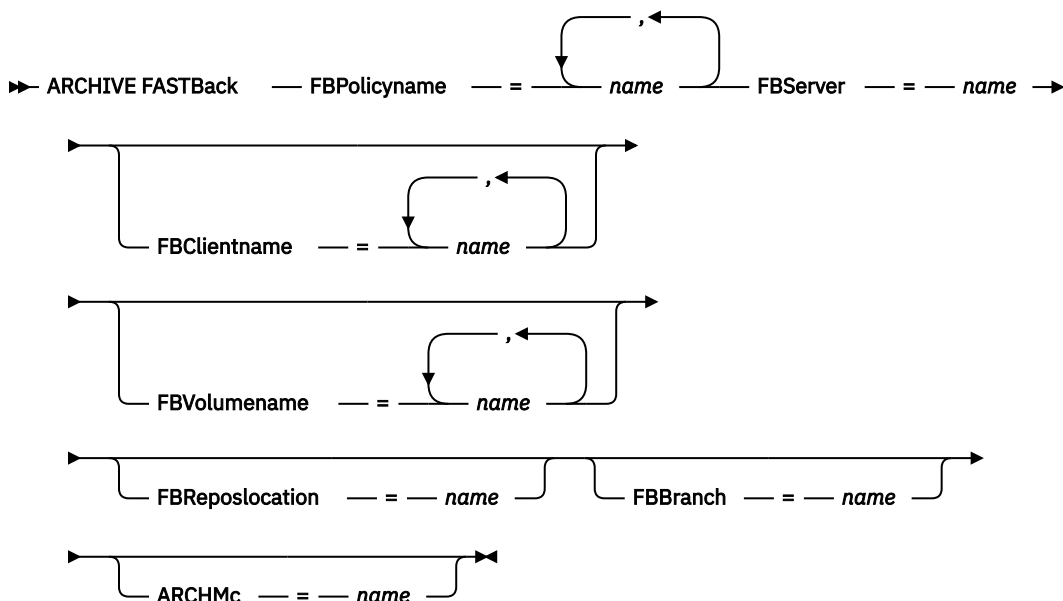
Tivoli Storage Manager FastBack オプションを使用して、以下のボリュームの最新のスナップショットをアーカイブすることができます。

- 特定の FastBack ポリシーまたは FastBack ポリシーのリストに関連付けられたすべてのクライアントおよびボリューム。
- 特定の FastBack ポリシーについて、特定の FastBack クライアントまたは FastBack クライアントのリストに関連付けられたすべてのボリューム。
- 特定の FastBack ポリシーについて、特定の FastBack クライアントと関連付けられた特定のボリューム。

サポートされるクライアント

このオプションは、Linux x86_64 クライアントで有効です。

構文



重要:

1. 少なくとも 1 個の FBpolicyName が常に必要です。
2. FBClientName および FBVolumeName の両方に値が指定されていない場合は、FBPolicyName に最大 10 個の値を指定できます。
3. FBClientName 値を指定する場合は、FBPolicyName の値は 1 つのみでなければなりません。
4. PolicyName が 1 つのみ指定されていて、FBVolumeName の値が指定されていない場合は、FBClientName に最大 10 個の値を指定できます。
5. FBVolumeName オプションを指定する場合、1 つのみの FBPolicy と 1 つのみの FBClientName を指定することができます。
6. 条件 5 が満たされている場合は、複数の FBVolumeName を指定することができます。
7. Linux の場合は、常に FBReposLocation オプションを指定する必要があります。

パラメーター

表 82. Archive FastBack コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
fbpolicyname 425 ページの『Fbpolicyname』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbserver 427 ページの『Fbserver』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbclientname 424 ページの『Fbclientname』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbvolumename 428 ページの『Fbvolumename』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbreposlocation 426 ページの『Fbreposlocation』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbbranch 423 ページの『Fbbranch』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。

表 82. Archive FastBack コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
archmc 343 ページの『Archmc』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。

例

コマンド・ライン:

バックアップ/アーカイブ・クライアントが Linux プロキシ・クライアント・マシンにインストールされます。次のコマンドを使用して、FastBack policy1 に定義されているすべての Linux FastBack クライアントのすべての FastBack ボリュームをアーカイブします。

```
dsmc archive fastback -fbpolicyname=Policy1
-fbserver=myfbserver -fbreposlocation=myfbserver@WORKGROUP
```

FastBack サーバー名 -myFbDrHub は、リポジトリが配置されている FastBack 災害復旧ハブ・サーバーの短縮ホスト名です。

-fbreposlocation パラメーターは、リポジトリのロケーションを指定します。リポジトリ・ロケーションは必須です。リポジトリ・ロケーションを指定しないと、このコマンドは失敗します。

この場合、FBServer は FastBack DR ハブの短縮ホスト名を指している必要があります。

コマンド・ライン:

リポジトリ rep_server1 が FastBack DR ハブ myFbDrHub 上に配置されます。

```
dsmc archive fastback -fbpolicyname="Policy 1"
-fbserver=myFbDrHub -fbreposlocation=¥¥myFbDrHub¥rep_server1
```

リポジトリ・ロケーションは必須です。リポジトリ・ロケーションを指定しないと、このコマンドは失敗します。

FastBack サーバー名 -myFbDrHub は、リポジトリが配置されている FastBack 災害復旧ハブの短縮ホスト名です。

この場合、FBServer は FastBack DR ハブの短縮ホスト名を指している必要があります。

コマンド・ライン:

policy1 という名前の FastBack ポリシーによって保護されているすべてのボリュームを basil という名前の FastBack サーバーからアーカイブします。

```
dsmc archive fastback -Fbpolicyname=policy1
-FBServer=basil -ARCHMC="my_tsm_mgmt_class"
-fbreposlocation=basil@WORKGROUP
```

関連概念

[Tivoli Storage Manager FastBack データをバックアップおよびアーカイブするためのクライアントの構成](#)
Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップあるいはアーカイブする前に、構成タスクを完了する必要があります。

Backup FastBack

長期保存のために、fbpolicyname オプション、fbclientname オプション、および fbvolumename オプションによって指定された Tivoli Storage Manager FastBack ボリュームをバックアップするには、**backup fastback** コマンドを使用します。

このコマンドを使用する前に、Tivoli Storage Manager FastBack データをバックアップおよびアーカイブするクライアントを構成します。また、このコマンドを発行する前に、少なくとも 1 つのスナップショットが、アーカイブまたはバックアップされる Tivoli Storage Manager FastBack ポリシー用の Tivoli Storage Manager FastBack リポジトリに存在している必要があります。

ポリシー指定に Windows クライアントと Linux FastBack クライアントの両方が含まれている場合は、Linux バックアップ/アーカイブ・クライアントにより、Linux ボリュームのみが IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップまたはアーカイブされます。

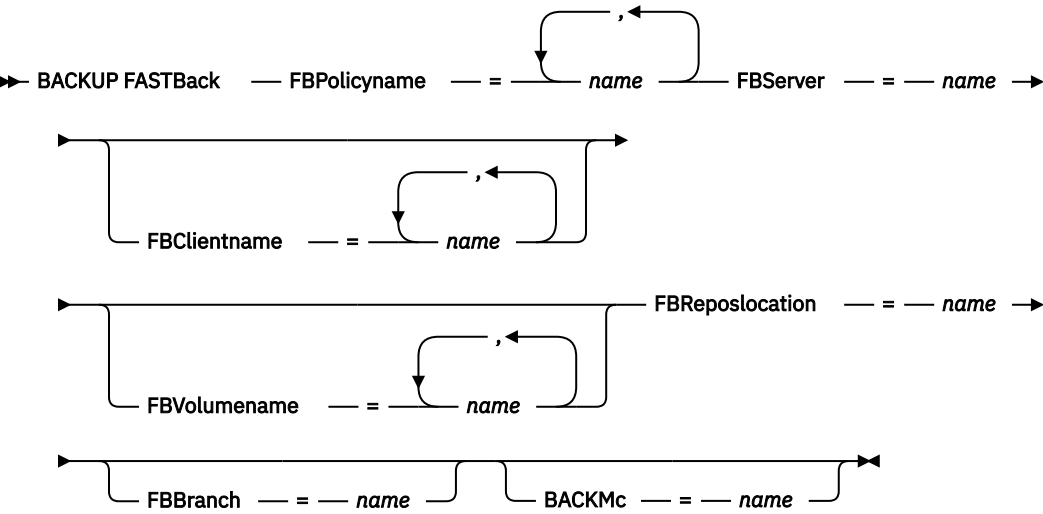
Tivoli Storage Manager FastBack オプションは、指定されたオプションに応じて、以下のように最新のスナップショットの増分バックアップに対してサポートされています。

- FastBack ポリシーまたは FastBack ポリシーのリストに関連付けられたすべてのクライアントおよびボリューム。
- 特定の FastBack ポリシーについて、特定の FastBack クライアントまたは FastBack クライアントのリストに関連付けられたすべてのボリューム。
- 特定の FastBack ポリシーについて、特定の FastBack クライアントと関連付けられた特定のボリューム。

サポートされるクライアント

このコマンドは、Tivoli Storage Manager FastBack 専用プロキシとして構成されている Linux x86_64 クライアントに有効です。

Linux クライアントの場合の構文



重要:

1. 少なくとも 1 個の FBpolicyName が常に必要です。
2. FBClientName および FBVolumeName の両方に値が指定されていない場合は、FBPolicyName に最大 10 個の値を指定できます。
3. FBClientName 値を指定する場合は、FBPolicyName の値は 1 つのみでなければなりません。
4. PolicyName が 1 つのみ指定されていて、FBVolumeName の値が指定されていない場合は、FBClientName に最大 10 個の値を指定できます。
5. FBVolumeName オプションを指定する場合、1 つのみの FBPolicy と 1 つのみの FBClientName を指定することができます。
6. 条件 5 が満たされている場合は、複数の FBVolumeName を指定することができます。
7. FBReposLocation オプションを指定する必要があります。

表 83. Backup FastBack コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
fbpolicyname 425 ページの『Fbpolicyname』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。

表 83. Backup FastBack コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
fbserver 427 ページの『Fbserver』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbclientname 424 ページの『Fbclientname』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbvolumename 428 ページの『Fbvolumename』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbreposlocation 426 ページの『Fbreposlocation』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
fbbranch 423 ページの『Fbranch』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。
backmc 353 ページの『Backmc』	コマンド・ラインおよびスケジューラー。

例

コマンド・ライン:

バックアップ/アーカイブ・クライアントが Linux プロキシ・クライアント・マシンにインストールされます。次のコマンドを使用して、FastBack policy1 に定義されているすべての Linux FastBack クライアントのすべての FastBack ボリュームをバックアップします。

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname=Policy1
-fbserver=myfbserver
-fbreposlocation=myfbserver@WORKGROUP
```

リポジトリ・ロケーションは必須です。リポジトリ・ロケーションを指定しないと、このコマンドは失敗します。

FastBack サーバー名 -myfbserver は、リポジトリが配置されている FastBack サーバーの短縮ホスト名です。

コマンド・ライン:

リポジトリ rep_server1 が FastBack 災害復旧ハブ myFbDrHub 上に配置されます。

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname="Policy 1"
-fbserver=myFbDrHub -fbreposlocation=¥¥myFbDrHub¥rep_server1
```

FastBack サーバー名 -myFbDrHub は、リポジトリが配置されている FastBack 災害復旧ハブサーバーの短縮ホスト名です。

-fbreposlocation オプションは、リポジトリのロケーションを指定します。リポジトリ・ロケーションは必須です。リポジトリ・ロケーションを指定しないと、このコマンドは失敗します。

この場合、FBServer オプションは FastBack DR ハブの短縮ホスト名を指している必要があります。

コマンド・ライン:

policy1 という名前の FastBack ポリシーによって保護されているすべてのボリュームを basil という名前の FastBack サーバーからバックアップします。

```
dsmc backup fastback -fbpolicyname=policy1
-FBServer=basil -BACKMC="my_tsm_mgmt_class"
-fbreposlocation=basil@WORKGROUP
```

関連概念

[Tivoli Storage Manager FastBack データをバックアップおよびアーカイブするためのクライアントの構成](#)

Tivoli Storage Manager FastBack クライアント・データをバックアップあるいはアーカイブする前に、構成タスクを完了する必要があります。

Backup Group

backup group コマンドを使用して、1 つ以上のファイル・スペース・オリジンからのファイルのリストを含むグループを IBM Spectrum Protect サーバー上の仮想ファイル・スペースに作成してバックアップします。

AIX のみ: スナップショット・ベースのグループ・バックアップを有効にするには、オプション `snapshotproviderfs=JFS2` を使用します。

group backup を使用すると、複数のファイルを 1 つのグループにまとめて特定時点バックアップを作成し、これを 1 つの論理エンティティとして管理できます。グループ内のオブジェクトは、次の処理ルールに従います。

- グループ化されたオブジェクトの管理クラスの再バインド:
 - フルバックアップ中、バックアップ・グループのすべてのオブジェクトは、同じ管理クラスに割り当てられます。
 - 差分バックアップ中、既存のバックアップ・グループ用の新規管理クラスが `include` ステートメントで指定された場合、以下の動作が生じます。
 - バックアップ・グループ内の新規オブジェクトおよび変更されたオブジェクトはどれも、新規管理クラスにバインドされます。
 - グループの未変更のメンバー・オブジェクトは、新規管理クラスにバインドされていないように示されます。これらの未変更のオブジェクトは、**Backup Group** コマンドの完了時に表示される「**Total number of objects rebound**」統計には含まれません。
 - 未変更のオブジェクトは、新しく作成されたバックアップ・グループに再割り当てされ、その新しいバックアップ・グループが新規管理クラスにバインドされます。ただし、未変更グループ・オブジェクトの元の管理クラス名は、そのまま表示されます。
未変更オブジェクトの元の管理クラス名が表示されている場合でも、そのオブジェクトは実際にはバックアップ・グループの新規管理クラスにバインドされています。
- グループ内のファイルに対する既存の `exclude` ステートメントは、すべて無視されます。
- グループ内のすべてのオブジェクトは、まとめてエクスポートされます。
- グループ内のすべてのオブジェクトは、管理クラス内の指定に基づいてまとめて期限切れになります。グループ内のオブジェクトは、オブジェクトが属する別のグループが期限切れになっても、グループ内のすべてのオブジェクトが期限切れにならない限り期限切れになりません。
- 順次デバイスに対するフルグループ・バックアップおよび差分グループ・バックアップを実行する場合、リストア中にデータが存在する場所は 2 つ以内に制限されます。リストア時間を最適化するには、定期的にフルバックアップを実行して、順次メディア上の 1 つの場所にデータをバックアップします。
- フルグループ・バックアップでは、ファイル・リスト内のすべてのオブジェクトがサーバーに送信されます。差分グループ・バックアップでは、最後のフルバックアップ以降に変更されたデータのみがサーバーに送信されます。最後のフルバックアップ以降に変更されていないファイル・リスト内のオブジェクトは、差分グループ・バックアップのメンバーとして割り当てられます。このデータはサーバーに再送されないため、バックアップ時間が短縮されます。

backup group コマンドは、次のオプションを必要とします。

filelist

新規のグループに追加されるファイルのリストを指定します。

groupname

ファイルのリストが入っているグループの完全修飾名を指定します。

virtualfsname

操作の実行対象グループの仮想ファイル・スペース名を指定します。virtualfsname オプションは既存のファイル・スペース名と同じにすることはできません。

mode

ファイル・リスト内のすべてのファイルをバックアップするか、最後のフルバックアップ以降に変更されたファイルのみをバックアップするかを指定します。

注:

1. グループ・バックアップ内のファイルで障害が起こると、グループ・バックアップ全体が失敗します。
2. **query group** コマンドを使用して、IBM Spectrum Protect サーバー上のグループ・バックアップのメンバーを照会します。
3. **restore group** コマンドを使用して、サーバー上のグループ・バックアップの特定のメンバーまたはすべてのメンバーをリストアします。
4. Mac OS X を稼働していない限り、**delete group** コマンドを使用して、サーバーから特定のグループ・バックアップを削除します。
5. **query filespace** コマンドは、サーバーに保管されているノードの仮想ファイル・スペース名を表示するために使用します。
6. グループ・バックアップは、バックアップ・セットに追加できます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

構文

➡ Backup GRoup — — options ➡

パラメーター

表 84. Backup Group コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
groupname 439 ページの『Groupname』	コマンド・ラインのみ。
mode 482 ページの『mode』	コマンド・ラインのみ。
snapshotproviderfs 556 ページの『Snapshotproviderfs』	サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys) または include.fs オプション。
virtualfsname 595 ページの『Virtualfsname』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

/home/dir1/filelist1 ファイルにあるすべてのファイルのフルバックアップを実行して、グループ・リーダーである /home/group1 ファイルが置かれている仮想ファイル・スペース名 accounting に格納します。

コマンド:

```
backup group -filelist=/home/dir1/filelist1 -groupname=group1  
-virtualfsname=virtfs -mode=full
```

関連情報

[447 ページの『include オプション』](#)

[712 ページの『Query Group』](#)

[740 ページの『Restore Group』](#)

[685 ページの『Delete Group』](#)

[710 ページの『Query Filespace』](#)

Backup Image

backup image コマンドは、システムの 1 つ以上の ボリュームのイメージ・バックアップを作成します。

backup image コマンドを使用して、NTFS または ReFS、あるいはフォーマットされていない RAW ボリュームをバックアップすることができます。ボリュームが NTFS でフォーマットされている場合は、ファイル・システムによって使用されているブロックのみがバックアップされます。ReFS ボリュームでは、すべてのブロックがバックアップされます。

imagegapsize オプションを 0 に設定した場合、ボリュームの終わりにある未使用ブロックを含むすべてのブロックがバックアップされます。

イメージ・バックアップに対して AIX JFS2 ファイル・システムを指定すると、このファイル・システムによって使用されているブロックのみがバックアップされます。**imagegapsize** オプションをゼロに指定すると、ボリュームの終わりにあるブロックを含め、すべてのブロックがバックアップされます。

注:

1. デフォルトにより、JFS2 ボリュームに対してスナップショット・ベースのイメージ・バックアップが有効になっています。スナップショット・ベースのイメージ・バックアップをオフにするには、このコマンドに **-snapshotproviderimage=NONE** を設定します。
2. Linux クライアントの場合は、イメージ・バックアップは、id 0x83 の区画または Linux 論理ボリューム・マネージャーで作成された論理ボリュームでのみサポートされています。他の区画(マウントされたファイル・システムまたはデータベース・データを含む拡張区画など)をバックアップする場合、イメージ・バックアップ操作中にデータが変更されると、不整合なバックアップ・データが作成される場合があります。
3. z Systems 上の Linux クライアントの場合、ロー・トラック・アクセス・モードを使用した DASD デバイスのイメージ・バックアップはサポートされません。フルトラック・アクセス・モードのみがサポートされます。
4. バックアップ・イメージは、どの GPFS ファイル・システムでもサポートされません。
5. **backup image** コマンドを使用するには、IBM Spectrum Protect API がインストールされていなければなりません。
6. JFS2 ファイル・システムの属性を HSM 管理対象のファイル・システムに変更する場合は、そのファイル・システムに対してイメージ・バックアップは実行されません。
7. イメージ・バックアップ操作は、マルチパス・デバイスにあるパーティションではサポートされていません。

重要: 最終増分バックアップ時間はサーバー時間を指し、ファイル変更時間はクライアント時間を指しています。クライアントとサーバーの時間が同期化されていないか、クライアントとサーバーが異なる時間帯にある場合、このことは **incremental-by-date** バックアップおよび **mode=incremental** を指定したイメージ・バックアップに影響を及ぼします。

クライアントがバックアップするファイルは、そのファイルの(クライアント上の)変更日時が、そのファイルを保管しているファイル・システムの最終増分バックアップの(サーバー上の)日時より後のファイルです。

サーバー時間がクライアント時間よりも前である場合、日付による増分バックアップまたは **mode=incremental** を指定したイメージ・バックアップは、最終増分タイム・スタンプより早い変更日付が付いた最終増分またはイメージのバックアップの後に作成または変更されたファイルをスキップします。

クライアント時間がサーバー時間より前である場合、最終増分バックアップまたは最終イメージ・バックアップより前に作成または変更され、最終増分バックアップのタイム・スタンプより後の変更タイム・スタンプを持つファイルはすべて再度バックアップされます。通常、これらのファイルは既にバックアップされているので、バックアップされないはずですが。

バックアップ日付は、**query filespace** コマンドによって検査できます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ロー装置のイメージ・バックアップを実行するのに、特定のプラットフォーム上でロー装置タイプをサポートするものでなければなりません。ローカル装置でのみイメージ・バックアップを実行することができます。複数のシステム間で共有されている装置またはファイル・システムと同じように、クラスター装置またはファイル・システムはサポートされていません。ロー・デバイスにマウントされたファイル・システムのイメージ・バックアップを実行したい場合には、ロー・デバイスがサポートされている必要があります。

include.image オプションは、イメージ・バックアップのファイル・システムまたは論理ボリュームを組み込むため、あるいはイメージ・バックアップのボリューム固有オプションを指定するために使用されます。

backup image コマンドは、**compression** オプションを使用します。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec

1 つ以上の論理ボリュームの名前を指定します。複数のファイル・システムをバックアップしたい場合には、それらの名前をスペースで区切ってください。パターン・マッチング文字を使用してはいけません。ボリューム名を指定しないと、**domain.image** オプションで指定した論理ボリュームが処理されます。**domain.image** オプションを使用して処理するファイル・システムを指定しないと、エラー・メッセージが表示されてイメージ・バックアップは行われません。

論理ボリュームがマウントされているファイル・スペースまたは論理ボリューム名を指定します。指定されたボリュームのシステム内にファイル・システムが構成されている場合は、その装置名ではボリュームをバックアップできません。

例えば、`/dev/lv01` ファイル・スペースが `/home` ボリュームにマウントされている場合は、**backup image /home** を発行できますが、**backup image /dev/lv01** は失敗し、次のエラーが表示されます。

ANS1063E 無効なパスが指定されました

20 個のオペランドの制限があります。この制限により、ワイルドカードが UNIX シェル・コマンド・プロセッサによって展開された場合に、セッション数が過多になることが回避されます。ワイルドカード (`"home/docs/*"`) が含まれているファイル指定を引用符で囲むことで、シェルが展開しても 20 個のオペランド制限を超えないようにすることができます。

removeoperandlimit オプションを使用して、20 個のオペランド制限を除去することを指定できます。**removeoperandlimit** オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。例えば、21 個のファイル指定をバックアップするには、次のようにして 20 個のオペランド制限を除去します。

```
backup image -removeoperandlimit filespec1 filespec2 ... filespec21
```


注: Sun システムの場合、ファイル・システム名かロー装置名(ブロック・デバイス・タイプ)のいずれかを指定します。

表 85. Backup Image コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
asnodename 344 ページの『Asnodename』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
compressalways 363 ページの『Compressalways』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
compression 363 ページの『Compression』	クライアント・オプション・ファイルまたはコマンド・ライン。
dynamicimage 402 ページの『Dynamicimage』	オプション・ファイル内で backup image コマンドまたは include.image オプションとともに使用する。
imagegapsize 444 ページの『Imagegapsize』	backup image コマンド、 include.image オプションとともに使用するか、オプション・ファイルで使用する。
mode 482 ページの『mode』	コマンド・ラインのみ。
postsnapshotcmd 503 ページの『Postsnapshotcmd』	backup image コマンド、 include.image オプションとともに使用するか、オプション・ファイルで使用する。
presnapshotcmd 510 ページの『Presnapshotcmd』	backup image コマンド、 include.image オプションとともに使用するか、オプション・ファイルで使用する。
removeoperandlimit	コマンド・ラインのみ。
snapshotcachesize 554 ページの『Snapshotcachesize』	backup image コマンド、 include.image オプションとともに使用するか、オプション・ファイルで使用する。
snapshotproviderimage 556 ページの『Snapshotproviderimage』	クライアント・オプション・ファイルまたは include.image オプション。

例

タスク

論理ボリュームがマウントされて、新規ファイル、および最後のフルイメージ・バックアップ後に変更されたファイルのみをバックアップするイメージ増分バックアップを実行する、/home/test ファイル・スペースをバックアップします。

```
dsmc backup image /home/test -mode=incremental
```

タスク

/home ディレクトリーでマウントされた論理ボリュームの静的イメージ・バックアップを実行します。

```
dsmc backup image /home -snapshotproviderimage=none
```

タスク

/home ディレクトリーでマウントされた論理ボリュームの動的イメージ・バックアップを実行します。

```
コマンド: dsmc backup image /home -dynamicimage=yes
```

タスク

/home ディレクトリーのスナップショット・イメージ・バックアップを実行します。

AIX クライアント: dsmc backup image /home

```
-snapshotproviderimage=JFS2
Linux クライアント: dsmc backup image /home
-snapshotproviderimage=LINUX_LVM
```

タスク

/dev/lv01 ロー論理ボリュームをバックアップします。

```
dsmc backup image /dev/lv01
```

タスク

/dev/mapper/mpath1 マルチパス・デバイスを使用してディスクまたは区画全体のロー・イメージ・バックアップを実行します。

```
dsmc backup image /dev/mapper/mpath1 -snapshotproviderimage=none
```

関連情報

[444 ページの『Imagegapsize』](#)

[556 ページの『Snapshotproviderimage』](#)

[554 ページの『Snapshotcachesize』](#)

[482 ページの『mode』](#)

[203 ページの『方法 1 と 2 の比較』](#) (環境に対して適切な方法を判別する)

静的、動的、およびスナップショット・イメージ・バックアップ

従来のイメージ・バックアップでは、操作中に別のシステム・アプリケーションによるそのボリュームへの書き込みアクセスはできません。

`dynamicimage` オプションは、ボリュームを読み取り専用で再マウントせず、現状のままでバックアップするときに使用します。バックアップが進行中のときにアプリケーションがボリュームに書き込みを行った場合には、バックアップが破壊される可能性があります。この場合、リストア後に **fsck** を実行してください。

`dynamicimage` オプションは JFS2 ボリュームではサポートされていません。

Linux x86_64 クライアントのみ: デフォルトで、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、Linux 論理ボリューム・マネージャーによって作成された論理ボリュームが他のシステム・アプリケーションによって使用できる状態のときに、そのボリューム上にあるファイル・システムのスナップショット・イメージ・バックアップを実行します。スナップショット・イメージ・バックアップにはバージョン 5.1 の IBM Spectrum Protect サーバーが必要です。

AIX クライアントのみ: デフォルトで、バックアップ/アーカイブ・クライアントは、JFS2 ボリュームが他のシステム・アプリケーションによって使用できる状態のときに、そのボリュームのスナップショット・イメージ・バックアップを実行します。AIX では、JFS2 ボリュームがまだオンラインの間にそのボリュームのスナップショットの作成が可能です。スナップショットは、ソース・ボリュームと同じボリューム・グループ内に作成されます。ボリューム・グループがスナップショットを作成するのに十分な空きディスク・スペースを提供することを確認しなければなりません。スナップショットには旧データ・ブロックが含まれますが、修正されたデータはソース・ボリュームに保管されます。`snapshotcachesize` オプションを `backup image` コマンド (`dsm.sys` ファイル内) で、または `include.image` オプションとともに使用して、イメージ・バックアップの実行中にすべての旧データ・ブロックを保管できるように適切なスナップショット・サイズを指定します。

Linux 論理ボリューム・マネージャーを使用すると、論理ボリューム自体がまだオンライン中に、その論理ボリュームのスナップショットを作成することができます。スナップショットは、ソース論理ボリュームと同じボリューム・グループ内に作成されます。ボリューム・グループがスナップショットを作成するのに十分な空きディスク・スペースを提供することを確認しなければなりません。スナップショットには、旧データ・ブロックが含まれますが、修正されたデータはソース論理ボリュームに保管されます。`snapshotcachesize` オプションを **backup image** コマンド (`dsm.sys` ファイル内) で、または `include.image` オプションとともに使用して、イメージ・バックアップの実行中にすべての旧データ・

ブロックを保管できるように適切なスナップショット・サイズを指定します。スナップショット・サイズ 100 % で、有効なスナップショットが保証されます。

イメージ・バックアップを使用したファイル・システムの増分バックアップの実行

イメージ・バックアップを利用してファイル・システムを効率的に増分バックアップするには、2つの方法があります。これらのバックアップ方法によって、ファイル・システムの特定時点リストアを行うことができ、バックアップおよびリストアのパフォーマンスが向上します。

バックアップはフォーマット済みボリュームのみで実行できます。ロー論理ボリュームでは実行できません。マウント済みファイル・システムでボリュームのイメージ・バックアップを行う場合、ファイル・システム増分でのイメージ・バックアップまたはイメージ増分モードでのイメージ・バックアップのいずれかを使用できます。

以下は、ファイル・システム増分でのイメージ・バックアップの使用例です。

- ファイル・システムのフル増分バックアップを実行する場合: `dsmc incremental /myfilesystem`
- 同じファイル・システムのイメージ・バックアップを実行する場合: `dsmc backup image /myfilesystem`
- 増分バックアップを定期的に行う場合: `dsmc incremental /myfilesystem`

サーバーが追加と削除を確実に正確に記録するよう示された順序で、次のステップに従わなければなりません。

ファイル・システムを、その最後の増分バックアップの状態に正確にリストアする場合には、コマンド `dsmc restore image /myfilesystem -incremental -deletefiles` を使用してください。

リストア中にクライアントは次の処理を行います。

- サーバーの最新のイメージをリストアします。
- 直前のステップでリストアされ、サーバーで非活動であるファイルをすべて削除します。これらは、イメージ・バックアップの時点では存在していましたが、その後削除され、後で行われた増分バックアップで記録されたファイルです。
- 増分バックアップから新規ファイルおよび変更されたファイルをリストアします。

上記のステップを正確に行わなかった場合には、以下の2点が起こる可能性があります。

1. 元のイメージがリストアされた後で、**incremental** コマンドでバックアップされたすべてのファイルが個別にリストアされます。
2. **backup image** を、**incremental** の実行前に実行すると、元のイメージから削除されたファイルは、最終的にリストアされたファイル・システムから削除されません。

以下は、イメージ増分モードでのイメージ・バックアップの使用例です。

- 同じファイル・システムのイメージ・バックアップを実行する場合: `dsmc backup image /myfilesystem`
- ファイル・システムの増分イメージ・バックアップを実行する場合: `dsmc backup image /myfilesystem -mode=incremental`

これは、最後のイメージ・バックアップ以後に追加または変更されたファイルのみをサーバーに送ります。

- フルイメージ・バックアップを定期的に行う場合: `dsmc backup image /myfilesystem`
- イメージをリストアする場合: `dsmc restore image /myfilesystem -incremental`

リストア時にイメージおよびイメージ増分バックアップ技法が使用された場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントは `deletefiles` オプションを無視します。このリストアには、最後のフルイメージ・バックアップ後に削除されたファイルと、最後のイメージのバックアップ後に追加または変更されたファイルの最新バージョンが含まれます。

注: 以下の場合、定期的にフルイメージ・バックアップを行う必要があります。このようにすると、増分から適用される変更が少なくなるため、リストア時間が短くなります。

- ファイル・システムの大幅な変更 (40% を超える) を行うとき
- 月に一度のバックアップ。
- 使用環境での必要に応じたバックアップ。

イメージ増分モードによるイメージ・バックアップを使用する場合は、以下の制約事項が適用されます。

- ファイル・システムは、**incremental** コマンドによって作成された以前のフル増分バックアップをもつことができません。
- 日付による増分イメージ・バックアップは、サーバー上のファイルを非活動化しません。したがって、ファイルがリストアされると、すべて削除できなくなります。
- これがファイル・システムにとって最初のイメージ・バックアップの場合には、フルイメージ・バックアップが実行されます。
- `mode=incremental` を使用すると、許可を変更されたファイルでなく、日付が変更されたファイルのみがバックアップされます。
- ファイル・システムが容量の限界近辺で稼働中の場合には、リストア中にスペース不足条件になる可能性があります。

Backup NAS

backup nas コマンドは、Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属している 1 つ以上のファイル・システムのイメージ・バックアップを作成します。これは NDMP バックアップとも呼ばれます。IBM Spectrum Protect 管理者 ID を求めるプロンプトが表示されます。

NAS ファイル・サーバーは、外部データ移動を実行します。バックアップを実行するために、サーバー・プロセスが開始されます。

`nasnodename` オプションは、NAS ファイル・サーバーのノード名を指定するのに使用します。NAS ノード名は、IBM Spectrum Protect サーバーに対する NAS ファイル・サーバーを識別するので、NAS ノード名がサーバーで登録されていなければなりません。クライアント・オプション・ファイル (`dsm.opt`) に `nasnodename` オプションを入れてください。クライアント・オプション・ファイルの値はデフォルトですが、コマンド・ラインで指定変更することができます。

`toc` オプションは、IBM Spectrum Protect サーバーがファイル・システム・バックアップごとに目次 (TOC) 情報を保存するかどうかを指定するために **backup nas** コマンドまたは `include.fs.nas` オプションとともに使用します。TOC 情報を保存した場合は、**RESTORE NODE** サーバー・コマンドを使用して個々のファイルまたはディレクトリー・ツリーをリストアするだけでなく、**QUERY TOC** サーバー・コマンドを使用してファイル・システム・バックアップの内容を判別することができます。

IBM Spectrum Protect Web クライアントを使用して、ファイル・システム・ツリー全体を検査し、リストアするファイルおよびディレクトリーを選択することもできます。TOC を作成するには、バックアップ・イメージをバインドする管理クラスのバックアップ・コピー・グループで **tocdestination** 属性を定義する必要があります。TOC を作成するには、バックアップ操作中に追加の処理、ネットワーク・リソース、ストレージ・プール・スペース、および (通常は) マウント・ポイントが必要となります。TOC 情報を保存しない場合でも、**RESTORE NODE** サーバー・コマンドを使用することにより個別のファイルまたはディレクトリー・ツリーをリストアできます。ただし、各ファイルまたはディレクトリーの完全修飾名およびそのオブジェクトのバックアップが格納されているイメージ名の情報が必要です。

`toc` オプションは、バージョン 5.2 以降のクライアントおよびサーバーでバックアップされたイメージでのみサポートされます。

フルイメージが存在しない場合に **BACKUP NODE** サーバー・コマンドまたは **backup nas** コマンドに `mode = differential` を指定すると、フルバックアップが開始されたことが示されます。**QUERY PROCESS** サーバー・コマンドを使用すると、フルバックアップが処理中であることが示されます。

`mode` オプションは、フル NAS イメージ・バックアップを実行するか、差分 NAS イメージ・バックアップを実行するかを指定するのに使用します。フルイメージ・バックアップは、ファイル・システム全体をバ

ックアップします。デフォルトは、最後のフルイメージ・バックアップ後に変更されたファイルでの差分 NAS イメージ・バックアップです。適格なフルイメージ・バックアップが存在しない場合には、フルイメージ・バックアップが実行されます。フルイメージが存在する場合は、リストア可能であるか、有効期限が切れているが関連する差分イメージがあるために保持されているかにかかわらず、`mode =differential` を指定すると差分イメージ・バックアップが送信されます。差分バックアップ中にフルイメージが送信される場合は、**QUERY NASBACKUP** サーバー・コマンドを使用してフルイメージとして反映されます。また、**QUERY NASBACKUP** サーバー・コマンドは、リストア可能な NAS イメージも表示し、オブジェクト・タイプとしてフルイメージまたは差分イメージを表示します。

`monitor` オプションは、NAS ファイル・システム・イメージ・バックアップをモニターして、画面に処理情報を表示するかどうかを指定するのに使用します。

monitor process コマンドは、管理ユーザー ID が権限を持っているすべてのプロセスのリストを表示するのに使用します。管理ユーザー ID は、コマンド・ラインまたは Web から使用する NAS ノードおよびクライアント・ワークステーション・ノードの両方に対して少なくともクライアント所有者権限を持っていなければなりません。

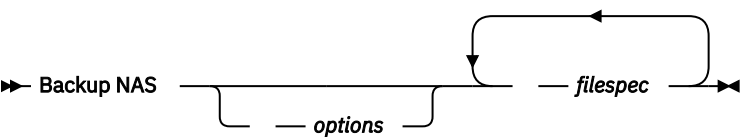
cancel process コマンドは、NAS バックアップ処理を停止するのに使用します。

クライアントのプラットフォームにかかわらず、NAS ファイル・システム指定は、`/vol1/vol10` の例のように、スラッシュ (/) 区切り文字を使用します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、AIX、および Solaris クライアントのみに有効です。

構文



パラメーター

filespec

NAS ファイル・サーバー上の 1 つ以上のファイル・システムの名前を指定します。このパラメーターを指定しない場合、バックアップ/アーカイブ・クライアントが `domain.nas` オプションによって定義されたすべてのファイル・システムを処理します。

filespec または `domain.nas` オプションを指定しない場合は、デフォルトの **all-nas** 値が `domain.nas` に使用され、NAS ファイル・サーバー上のファイル・システムがすべてバックアップされます。

表 86. Backup NAS コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
<code>mode</code> 482 ページの『 mode 』	コマンド・ラインのみ。
<code>monitor</code> 485 ページの『 Monitor 』	コマンド・ラインのみ。
<code>nasnodename</code> 487 ページの『 Nasnodename 』	クライアント・オプション・ファイル (<code>dsm.sys</code>) またはコマンド・ライン。
<code>toc</code> 586 ページの『 Toc 』	コマンド・ライン、またはクライアント・オプション・ファイル (<code>dsm.sys</code>) 内の <code>include.fs.nas</code> オプションとともに。

例

タスク

ファイル・システム全体の NAS イメージ・バックアップを実行します。

コマンド: `backup nas -mode=full -nasnodename=nas1 /vol/vol0 /vol/vol2`

タスク

ファイル・サーバー全体の NAS イメージ・バックアップを実行します。

コマンド: `backup nas -nasnodename=nas1`

タスク

ファイル・システム全体の NAS イメージ・バックアップを実行し、ファイル・システム・バックアップの目次 (TOC) 情報を保存します。

コマンド: `backup nas -mode=full -nasnodename=netappsj /vol/vol0 -toc=yes`

関連情報

[487 ページの『Nasnodename』](#)

[586 ページの『Toc』](#)

[482 ページの『mode』](#)

[485 ページの『Monitor』](#)

[677 ページの『Cancel Process』](#)

[394 ページの『Domain.nas』](#)

Backup VM

backup vm コマンドを使用して、仮想マシンのフルバックアップを開始します。

VMware 仮想マシンのバックアップ

backup vm コマンドを使用して、VMware 仮想マシンをバックアップします。

1 つ以上の仮想マシンが、IBM Spectrum Protect データ・ムーバー・ノードによってバックアップされます。データ・ムーバー・ノードは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが vStorage バックアップ・サーバー上で実行され、Virtual Center または ESX/ESXi サーバー内の仮想マシンを保護するように構成されている構成に付けられる名前です。このコマンドを使用する前に、VMware 仮想マシンを構成する必要があります。VMware 仮想マシンの構成については、[221 ページの『VMware 仮想マシンのフルバックアップのための環境の準備』](#)を参照してください。

フル VM バックアップは、仮想マシンのすべての仮想ディスク・イメージおよび構成情報のバックアップ・コピーを保管します。フル VM バックアップにより、仮想マシン全体の完全なリストアを実行できますが、増分バックアップよりも処理にかかる時間は長くなり、サーバー・スペースも多くなります。

`vmenabletemplatebackups` オプションを **yes** に設定する場合、**backup vm** 操作にはテンプレート VM が組み込まれますが、これは vStorage バックアップ・サーバーが ESX または ESXi ホストにではなく vCenter サーバーに接続されている場合のみ行われます。

バックアップ処理中にスナップショットが失敗した場合、クライアントは VMware 仮想マシンのバックアップを再試行します。スナップショット試行の合計回数を制御するには、クライアント・オプション・ファイルで `INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS` オプションを設定します。

データ保護タグは、VMware オブジェクト内の仮想マシンのバックアップ・ポリシーを構成するために使用されます。以下のいずれかの方法を使用すると、タグおよびカテゴリが作成されます。

- `vmtagdatamover` オプションを指定して **backup vm** コマンドを実行し、データ・ムーバー・ノード上でタグ付けサポートを有効にします。
- IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用して、IBM Spectrum Protect バックアップを管理します。

- 任意のデータ・ムーバー・ノード上で **set vmtags** コマンドを実行します。

vmtagdatamover オプションが **yes** に設定されている場合、仮想マシンに割り当てられたすべてのタグが **backup vm** 操作中にバックアップされます。これらのタグは、**restore vm** コマンドを実行するとリストアされます。他のインベントリー・オブジェクトに割り当てられたタグは、バックアップされず、リストアすることができません。

データ保護について詳しくは、[779 ページの『データ保護のタグ付けの概要』](#)を参照してください。

フル VM バックアップは VMware Changed Block Tracking (CBT) を使用してコンテンツ・アウェア (使用されたブロックのみ) バックアップを作成します。クライアントは、バックアップの開始時に ESX または ESXi サーバーで Changed Block Tracking (CBT) を有効にします。VMware CBT には、Virtual Hardware 7 以降が搭載された ESX 4.1 以降のホストが必要です。CBT をサポートしない仮想マシン上では、増分バックアップまたはフル VM コンテンツ・アウェア・バックアップは実行できません。

CBT は、有効になっていると、以下のディスク上の ESX または ESXi サーバー・ストレージ・スタックによって入出力操作が処理されるときにディスクの変更を追跡します。

- VMFS に保管されている仮想ディスク。このディスクは、iSCSI ディスク、ローカル・ディスク、または SAN 上のディスク場合があります。
- NFS に保管されている仮想ディスク
- 仮想互換モードの RDM

入出力操作が ESX または ESXi ストレージ・スタックによって処理されていない場合、Changed Block Tracking を使用してディスクの変更を追跡することはできません。以下のディスクでは CBT を使用できません。

- 物理互換モードの RDM
- VM 内部から直接アクセスされるディスク。例えば、vSphere は、仮想マシンの iSCSI イニシエーターによってアクセスされる iSCSI LUN に対して行われる変更を追跡できません。

Changed Block Tracking の要件についての詳細は、VMware 製品資料の「*VMware Virtual Disk API Programming Guide*」を参照してください。このガイドで、「Low Level Backup Procedures」を検索して、『Changed Block Tracking on Virtual Disks』セクションを読んでください。

CBT をサポートしない VMware サーバーの場合、使用済みと未使用の両方のディスク領域がバックアップされ、dsmererror.log ファイルに通知メッセージが記録されます。**backup vm** コマンドで **-preview** オプションを使用すると、現在の CBT 状況が表示されます。CBT 状況には以下の 3 つの値があります。

オフ

CBT 構成パラメーター (**ctkEnabled**) が仮想マシンの構成パラメーターで有効にされていないことを示します。**Off** はデフォルトの状態です。

サポートされない

仮想マシンが CBT をサポートしないことを示します。変更されたブロックのみのバックアップはできません。

オン

仮想マシンが CBT をサポートし、CBT が仮想マシンの構成パラメーターで有効になっていることを示します (**ctkEnabled=true**)

クライアントはバックアップ試行のたびに CBT をオンにします (**ctkEnable=true** と設定)。クライアントが CBT をオンにした後、仮想マシンが IBM Spectrum Protect サーバーから削除されても CBT はオンのまま残ります。CBT を有効にした状態で最初のフル VM バックアップが実行されると、ディスク上の変更されたブロックのみがバックアップまたはリストアされます。

仮想マシンの IBM Spectrum Protect バックアップをそれ以上実行しない場合は、CBT をオフにできます。CBT をオフにするには、vSphere クライアント内の CBT をオフにする仮想マシンを右クリックします。「**設定の編集**」>「**オプション**」>「**一般**」>「**構成パラメーター**」をクリックします。次に、**ctkEnabled** 構成パラメーターを **false** に設定します。

ヒント: クライアント側の重複排除が有効になっているストレージ・プールにバックアップが保存される場合にのみ、バックアップで圧縮オプションを使用することができます。

-vmbackuptype オプションおよび -mode オプションを指定して、バックアップの実行方法を指示します。フル VM バックアップの場合、-vmbackuptype=fullvm を使用して、以下のモード・オプションのいずれかを指定します。

IFFull

「永久増分 - フル」モード。このモードでは、仮想マシンのディスク上で使用されたブロックすべてのスナップショットがサーバーにバックアップされます。このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware、または IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for Microsoft Hyper-V を使用するためのライセンス交付を受けている必要があります。

IFIncremental

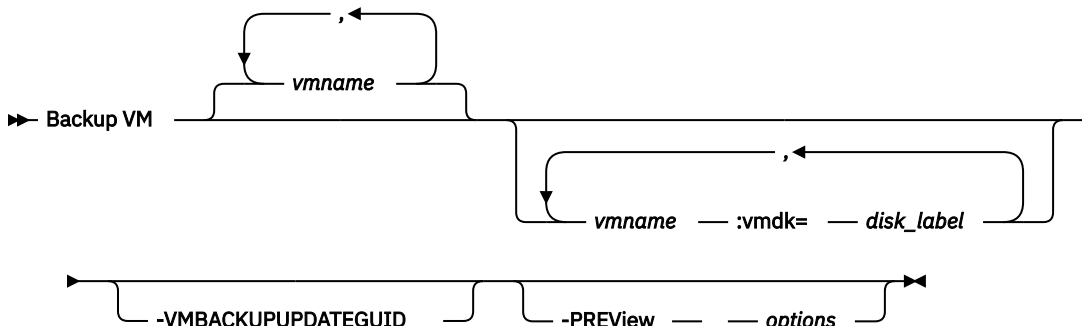
「永久増分 - 増分」モード。このモードでは、前回のバックアップ以降に変更されたブロックのスナップショットが作成されます。このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware、または IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for Microsoft Hyper-V を使用するためのライセンス交付を受けている必要があります。

永久増分バックアップ戦略については、[Backup and restore types](#) を参照してください。

サポートされるクライアント

このコマンドは、VMware 仮想マシンを保護する vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている、サポートされる Linux クライアントでのみ有効です。

構文



パラメーター

vmname

バックアップする 1 つ以上の仮想マシンの名前を指定します。この名前は、仮想マシンの表示名です。複数の仮想マシン名はコンマで区切ります。vmenabletemplatebackups オプションを **yes** に設定した場合、vmname にはバックアップするテンプレート VM の名前を指定することができます。

VMware vCenter では、複数の仮想マシンが同じ表示名を持つことが可能です。しかし、バックアップ/アーカイブ・クライアントでは、vCenter サーバー構成内のすべての仮想マシン名が固有である必要があります。処理中にエラーが発生しないようにするために、すべての仮想マシンが固有の表示名を持つことを確認してください。

このパラメーターで指定する仮想マシン名には、ワイルドカード文字を使用することができます。ただし、ワイルドカードの処理は、使用するバックアップ・モードによって異なります。

- mode=iffull または mode=ifincremental を使用するバックアップの場合、ワイルドカードは、VM 名パターンに一致するように使用することができます。例えば次のとおりです。
 - backup vm VM_TEST* には、VM_TEST で始まる名前を持つすべての仮想マシンが含まれます。
 - backup vm VM?? には、文字「VM」で始まり、その後 2 文字が続く名前を持つすべての仮想マシンが含まれます。

制約事項:「aggregate」という単語を VM 名として使用しないでください。「aggregate」という単語は、IBM Spectrum Protect のメッセージの VM 名フィールド用に予約されます。単語「aggregate」が VM 名として含まれているメッセージには、データ・ムーバーごとにバックアップされるすべての VM ゲストの合計値を表す統計が表示されます。

`vmname` を指定しない場合、`domain.vmfull` オプションを使用して仮想マシンを識別することができません。

:vmdk=disk_label

このキーワードは、`vmname` の拡張機能です。バックアップ操作に組み込む仮想マシン・ディスクのラベル(名前)を指定します。キーワードの先頭に除外演算子(-)を指定すると、ディスクを除外できます。処理にディスクを組み込むまたは処理からディスクを除外する他の方法については、`Domain.vmfull`、`Exclude.vmdisk`、`Include.vmdisk` を参照してください。

-VMBACKUPUPDATEGUID

このオプションを使用するには、IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware を使用するためのライセンス交付を受けている必要があります。

このオプションは、バックアップしている仮想マシンのグローバル固有 ID (GUID) を更新します。このパラメーターは、以下のシナリオのみで使用するためのものです。

以前にバックアップされた ORION という名前の仮想マシンをリストアします。しかし、実動環境で稼働している ORION をシャットダウンしてコピーを置き換える前に、リストアされた仮想マシンの構成を、既存の ORION と置き換えて使用する前に検証したいと考えています。

1. 次のように、ORION 仮想マシンをリストアし、新規の名前を付けます。`dsmc restore vm Orion -vmname=Orion2`
2. ORION2 仮想マシンを更新して検証し、ORION という名前の既存の仮想マシンを置き換える準備ができているかを判別します。
3. ORION の電源をオフにして削除します。
4. ORION2 の名前を ORION に変更します。
5. 「永久増分 - フル」バックアップまたは「永久増分 - 増分」バックアップを使用して次に ORION をバックアップするときに、**-VMBACKUPUPDATEGUID** パラメーターを **backup vm** コマンドに追加します。このオプションにより、IBM Spectrum Protect サーバー上の GUID が更新され、ORION 仮想マシンの保管済みバックアップに新規 GUID が関連付けられます。増分バックアップのチェーンは保持されます。既存のバックアップを削除し、新規バックアップを置き換える必要はありません。

-PREVIEW

このオプションは、仮想マシンのハード・ディスクのラベルや仮想マシンの管理クラス情報など、仮想マシンについての情報を表示します。

:vmdk= または **:-vmdk=** キーワードと一緒にディスク・ラベルを使用して、バックアップ操作にディスクを組み込んだり、バックアップ操作からディスクを除外したりすることができます。以下のテキストは、**-preview** パラメーターの出力例です。

```
backup vm vm1 -preview
Full BACKUP VM of virtual machines 'VM1'

vmName:vm1
VMDK[1]Label: Hard disk 1
VMDK[1]Name: [ds5k_svt_1] tsmcetlnx14/tsmcetlnx14.vmdk
VMDK[1]Status: Included
VMDK[2]Label: Hard disk 2
VMDK[2]Name: [ds5k_svt_1] tsmcetlnx14/tsmcetlnx14_1.vmdk
VMDK[2]Status: Excluded - user,Independent,pRDM
```

この **-preview** の出力例は、VMDK 2 が以前のバックアップで除外されたことを示しています。バックアップに組み込まれたディスクの状況は **Included** です。バックアップから除外されたディスクの状況は **Excluded** で、その後に理由コードが示されます。理由コードは、以下のいずれかになります。

user

コマンド・ライン、あるいはクライアント・オプション・ファイル内の `domain.vmfull` ステートメントでそのディスクが除外されたためにスキップされたことを示します。

Independent

ディスクが独立ディスクであることを示します。独立ディスクはスナップショットの一部にすることができないため、**backup vm** 操作から除外されます。 `vmprocessvmwithindependent` オプションを **yes** に設定するようにしてください。設定しないと、仮想マシンに 1 つ以上の独立ディスクが含まれている場合に、その仮想マシン全体がバックアップ操作の対象から除外されてしまいます。

pRDM

ディスクが物理 Raw Device Mapped (pRDM) ディスクであることを示します。pRDM ディスクはスナップショットの一部にすることができないため、**backup vm** 操作から除外されます。`vmprocessvmwithprdm` オプションを **yes** に設定するようにしてください。設定しないと、仮想マシンに物理互換モード (pRDM) でプロビジョニングされたロー・デバイス・マッピング (RDM) ボリュームが 1 つ以上含まれている場合に、その仮想マシン全体がバックアップ操作の対象から除外されてしまいます。

-preview パラメーターからの出力には、仮想マシンに関連付けられている管理クラス名と、管理クラスが設定された場所に関する情報も表示されます。この情報は、ドメインおよびタグの値が管理クラスに対して適切に設定されているかを確認するのに役立ちます。例えば、次のようにします。

```
backup vm -preview
Full BACKUP VM of virtual machines specified in DOMAIN.VMFULL option.

1. vmName: tag_vm_2
   DomainKeyword: all-vm
   toolsRunningStatus: guestToolsNotRunning
   toolsVersionStatus: guestToolsNotInstalled
   consolidationNeeded: No
   Change Block Tracking: On
   managementClassName: STANDARD
   managementClassLocation: Node Default

   VMDK[1]Label: 'Hard disk 1' (Hard Disk 1)
   VMDK[1]Name: '[Raid1-lannds2] tag_vm_2/tag_vm_2.vmdk'
   VMDK[1]Status: Included
...

12. vmName: vm-jean
   DomainKeyword: all-vm
   toolsRunningStatus: guestToolsNotRunning
   toolsVersionStatus: guestToolsNotInstalled
   consolidationNeeded: No
   Change Block Tracking: On
   managementClassName: MGMTCLASS1 (invalid)
   managementClassLocation: VM Tag Management Class (IBM Spectrum Protect)

   VMDK[1]Label: 'Hard disk 1' (Hard Disk 1)
   VMDK[1]Name: '[Raid1-lannds2] vm-jean/vm-jean.vmdk'
   VMDK[1]Status: Included
```

ここで、

managementClassName

仮想マシンがバインドされている管理クラスの名前を表示します。

管理クラス名の横に「(invalid)」ラベルが表示されている場合、名前が誤って指定されたか、IBM Spectrum Protect サーバー上で管理クラスが削除されたか、サーバー上の管理クラスでバックアップ・コピー・グループが見つかりませんでした。管理クラス名が無効の場合、仮想マシン・バックアップ操作は失敗します。

managementClassLocation

管理クラスが設定された場所を表示します。以下のロケーションのいずれかです。

Node Default

管理クラスは、VMware データ・センター・ノードのデフォルト・ドメインで設定されています。

VMware option

管理クラスは、vmware オプションを使用して設定されています。

VMCTLMC option

管理クラスは、vmctlmc オプションを使用して設定されています。

INCLUDE.VM option

管理クラスは、include.vm オプションを使用して設定されています。

VM Tag Management Class (IBM Spectrum Protect)

管理クラスは、Management Class (IBM Spectrum Protect) タグ・カテゴリのタグ値として設定されています。タグ値は、vSphere Web クライアントの IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン のデータ保護設定を使用するか、VMware vSphere PowerCLI バージョン 5.5 R2 以降などのツールを使用して設定することができます。

重要: タグに設定される管理クラス情報を表示するには、クライアント・オプション・ファイルの vmtagdatamover yes を設定するか、**dsmc backup vm** コマンドの実行時に - **vmtagdatamover=yes** パラメータを組み込む必要があります。vmtagdatamover オプションを設定しなかった場合、または no に設定した場合、クライアントはすべての管理クラスのタグ値を無視して、データ・センター・ノードのデフォルト・ドメインで設定される管理クラス定義 (vmware オプション、または include.vm オプション) を表示します。

仮想マシンのバックアップ操作に関する戻りコード

仮想マシンのバックアップ操作は、次の表で示された戻りコードで完了する可能性があります。

戻りコード	説明
0	1 つ以上の仮想マシンをバックアップするコマンドが正常に完了しました。
8	複数の仮想マシンをバックアップするコマンドが、そのコマンドの対象となっていた仮想マシンの一部でのみ成功しました。ログ・ファイルを調べて、対象の各仮想マシンの処理状況を判別してください。
12	以下のいずれかのエラー状態が発生したことを示します。 <ul style="list-style-type: none">バックアップ・コマンドが、バックアップ操作のターゲットであったいずれかの仮想マシンをバックアップできませんでした。バックアップ・コマンドが失敗し、指定されたすべての仮想マシンが検査される前に停止しました。 ログ・ファイルを調べて、障害の理由を判別してください。

最終統計に関するヒント: 複数のバックアップ・セッションを実行している場合、最終統計の「**Data transfer time**」フィールドに表示される値は、「**Elapsed processing time**」フィールドの値より高くなる場合があります。データ転送時間は、各バックアップでネットワークを介してデータを送信するのに要した時間の合計です。この数値には、データが送信される前にデータ・ムーバーがディスクからデータを読み取るのに要した時間も、サーバー・トランザクションが完了するまで待機した時間も含まれません。操作で複数の並行セッションを使用してデータを移動している場合 (マルチセッションのバックアップ操作など)、この数値が経過処理時間より大きくなる可能性があります。この値には、バックアップ操作中にファイルが変更された場合など、再試行のために複数回データを送信するのに要した時間が含まれます。

データ保護のための vStorage API のコマンド例

vm3 および vm4 という名前を持つ 2 つの VM の IFIncremental バックアップを実行します。

```
dsmc backup vm vm3,vm4 -vmbackuptype=fullvm -mode=ifincremental
```

vm1 という名前の VM の IFFull バックアップを実行します。

```
dsmc backup vm vm1 -vmbackuptype=fullvm -mode=iffull
```

vm1 という名前の VM の IFFull VM バックアップを実行しますが、バックアップ操作には Hard Disk 1 のみが組み込まれます。

```
dsmc backup vm "vm1:vmdk=Hard Disk 1" -vmbackuptype=fullvm -mode=iffull
```

vm1 という名前の仮想マシンの永久増分バックアップを実行しますが、バックアップ操作から Hard Disk 1 および Hard Disk 4 を除外します。

```
dsmc backup vm "vm1:-vmdk=Hard Disk 1:-vmdk=Hard Disk 4"  
-vmbackuptype=fullvm -mode=iffull
```

vm1 と vm2 という名前の 2 つの仮想マシンの永久増分フルバックアップを実行します。vm1 では、Hard Disk 2 および Hard Disk 3 のみをバックアップし、vm2 ではすべての仮想ディスクをバックアップします。

```
dsmc backup vm "vm1:vmdk=Hard Disk 2:vmdk=Hard Disk 3",  
vm2 -vmbackuptype=fullvm -mode=iffull
```

domain.vmfull ステートメントで選択基準 (ドメイン・パラメーター) を使用することにより、バックアップ対象として選択された VMware 仮想マシンの並列永久増分フルバックアップを実行します。並列バックアップの最大数を 5 仮想マシンおよび 10 セッションに設定し、バックアップをホスト当たり 5 VM およびデータ・ストア当たり 5 VM に制限します。

```
dsmc backup vm -vmbackuptype=fullvm -mode=iffull -vmmaxparallel=5  
-vmmaxbackupsessions=10 -vmlimitperhost=5 -vmlimitperdatastore=5
```

VMware 仮想マシンのバックアップの関連リンク

- [723 ページの『Query VM』](#)
- [747 ページの『Restore VM』](#)
- [395 ページの『Domain.vmfull』](#)
- [455 ページの『Include.vm』](#)
- [479 ページの『Mbjrefreshthresh』](#)
- [480 ページの『Mbpctrefreshthresh』](#)
- [482 ページの『mode』](#)
- [598 ページの『Vmbackdir』](#)
- [599 ページの『vmbakuplocation』](#)
- [600 ページの『Vmbakupmailboxhistory』](#)
- [601 ページの『Vmbackuptype』](#)
- [602 ページの『Vmchost』](#)
- [603 ページの『Vmctlmc』](#)
- [602 ページの『Vmcpw』](#)
- [604 ページの『Vmcuser』](#)
- [605 ページの『Vmdatastorethreshold』](#)
- [609 ページの『Vmenabletemplatebackups』](#)
- [611 ページの『Vmlimitperdatastore』](#)
- [612 ページの『Vmlimitperhost』](#)
- [613 ページの『Vmmaxbackupsessions』](#)
- [615 ページの『Vmmaxparallel』](#)
- [620 ページの『Vmmaxvirtualdisks』](#)
- [621 ページの『Vmmc』](#)
- [625 ページの『Vmpreferdagpassive』](#)
- [626 ページの『Vmprocessvmwithindependent』](#)

- [627 ページの『Vmprocessvmwithprdm』](#)
- [628 ページの『Vmskipctlcompression』](#)
- [629 ページの『Vmskipmaxvirtualdisks』](#)
- [630 ページの『Vmtagdatamover』](#)
- [633 ページの『Vmtagdefaultdatamover』](#)
- [635 ページの『Vmverifyifaction』](#)
- [637 ページの『Vmverifyiflatest』](#)
- [639 ページの『Vmvstortransport』](#)
- [638 ページの『vmvstorcompr』](#)
- [640 ページの『Vmtimeout』](#)
- [778 ページの『set vmtags』](#)
- [仮想マシン exclude オプション](#)
- [仮想マシン include オプション](#)

Cancel Process

cancel process コマンドは、管理ユーザーが権限を持っている現行の NAS (NDMP サポートが有効になっている場合) イメージ・バックアップおよびリストア・プロセスを表示します。IBM Spectrum Protect 管理者 ID を求めるプロンプトが表示されます。

管理ユーザーはリストから取り消すプロセスを 1 つ選択できます。クライアント所有者特権は、選択された NAS イメージ・バックアップまたはリストア・プロセスを取り消すのに十分な権限です。

サポートされるクライアント

このコマンドは、AIX、Linux、および Solaris クライアントのみに有効です。

構文

►► Cancel Process ◀◀

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

現行の NAS イメージ・バックアップまたはリストア・プロセスを取り消します。

コマンド: `cancel process`

Cancel Restore

cancel restore コマンドは、サーバー・データベースにある再始動可能リストア・セッションのリストを表示します。

一度に取り消すことができる再始動可能リストア・セッションは 1 つだけです。追加のリストアを取り消すには、**cancel restore** コマンドを再実行します。再始動可能リストア・セッションを再始動するには、**restart restore** コマンドを使用してください。

次の状況の場合は、**cancel restore** コマンドを使用してください。

- 再始動可能リストアによって影響を受けたファイルをバックアップできない場合。

- ・再始動可能リストア・セッションがファイル・スペースをロックしたため、 ファイルをサーバーの順次ボリュームから移動できない場合。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ Cancel Restore ➡

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

リストア操作をキャンセルします。

```
cancel restore
```

Delete Access

delete access コマンドは、サーバー上に保管されているファイルの許可規則を削除します。

許可規則を削除する場合は、その規則によって指定されたすべてのファイルまたはイメージに対するユーザー・アクセスを取り消します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ Delete — — Access ➡

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

現行の許可規則のリストを表示して、削除したい規則を選択します。

```
delete access
```

次の画面例を参照してください。

```

索引   タイプ   ノード 所有者  パス
-----
1      Backup   NODE1   USER1   home/dev/proja/list/
2      Archive  NODE3   LUIE    home/fin/budg/depta/
3      Backup   NODE4   USER2   home/plan/exp/deptc/
4      Archive  NODE5   USER2S  home/mfg/invn/parta/
Enter Index of rule(s) to delete, or quit to cancel:
```

luie および user2s によるファイルまたはイメージへのアクセスを許可している許可規則を削除するには、2 4 または 2,4 を入力し、Enter キーを押します。

Delete Archive

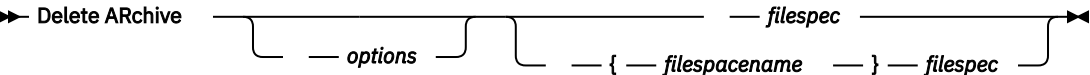
delete archive コマンドは、アーカイブ・ファイルを IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージから削除します。アーカイブ・ファイルを削除するには、その権限を管理者から得る必要があります。

重要: アーカイブしたファイルを削除すると、そのファイルはリトリブすることができません。ファイルを削除する前に、それが古いものであることを確認してください。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec

ストレージから削除したいパスとファイル名を指定します。ディレクトリー内のファイルのグループまたはすべてのファイルを指定するには、ワイルドカード文字を使用してください。 **filelist** オプションを使用してファイルのリストを処理することもできます。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、このオプションで指定したファイルをオープンし、特定のコマンドに従ってファイルのリストを処理します。

注: **filespace** を示す場合には、ファイル指定にドライブ文字を組み込まないようにしてください。

{filespace}

サーバーで削除したいファイルが入っているファイル・スペースを (中括弧で囲んで) 指定します。これは、アーカイブされたファイルが入っていたワークステーション・ドライブ上の名前です。

名前が変更された場合、あるいはユーザーのものとは異なるドライブ・ラベルを持つ別のノードからアーカイブされたファイルを削除する場合は、 **filespace** を使用してください。

表 87. Delete Archive コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
dateformat 371 ページの『Dateformat』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
description 379 ページの『Description』	コマンド・ラインのみ。
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
noprompt 491 ページの『Noprompt』	コマンド・ラインのみ。
numberformat 492 ページの『Numberformat』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
pick 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
tapeprompt 575 ページの『Tapeprompt』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

表 87. Delete Archive コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

budget という名前のファイルを削除します。

```
dsmc delete archive /user/home/proj1/budget
```

タスク

/user/home/proj1 ディレクトリーからアーカイブされたファイルのうち、ファイル拡張子が .txt であるすべてのファイルを削除します。

```
dsmc del arch "/user/home/proj1/*.txt"
```

タスク

pick オプションを使用してファイル指定に一致するアーカイブ・コピーのリストを表示し、/user/project ディレクトリーからアーカイブされたファイルを削除します。このリストから、処理するバージョンが選択できます。

```
dsmc delete archive "/user/project/*" -pick
```

タスク

/user/projects およびそのサブディレクトリーにある、記述「Monthly Budgets 2010」を持つアーカイブ済みのファイルのグループから選択したファイルを削除します。

```
dsmc delete ar "/user/projects/*" -description="Monthly Budgets 2010" -pick -subdir=yes
```

関連情報

Delete Backup

delete backup コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージにバックアップされたファイル、イメージ、および仮想マシンを削除します。オブジェクトを削除するには、その権限を管理者から得る必要があります。

ファイルを削除すると、IBM Spectrum Protect サーバーは、指定された **filespec** オプションおよび **delttype** オプションに適合するすべてのバックアップ済みファイルを選択し、それらのファイルを非活動化します。また、サーバーは、非活動化の日付 *infinite-minus* を割り当てて、後続のファイルの満了が実行されるとすぐにファイルがリストアに使用できなくなり、消去されるようにします。ファイルは満了処理が実行されるまで物理的に除去されません。

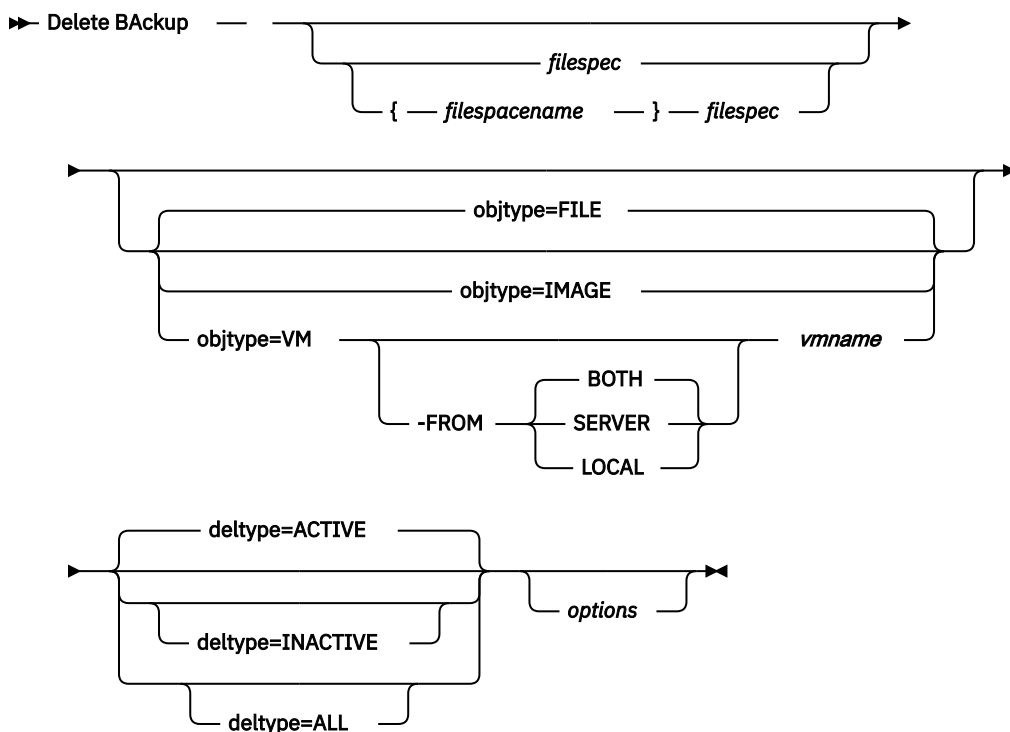
重要: バックアップ・ファイルを削除すると、そのファイルをリストアできません。削除する前に、バックアップ・ファイルが不要であることを確認してください。削除を続行するかどうかの選択を要求するプロンプトが表示されます。**yes** を指定すると、指定したバックアップ・ファイルの削除がスケジュールされ、サーバー・ストレージから除去されます。

制約事項: 保存セットに含まれているファイルは、**delete backup** コマンドを発行しても削除されません。これらのファイルは、長期間のデータ保持要件を満たすようにサーバー・ストレージに保持され、保存セットの独自の有効期限の日付 (この日付を過ぎると削除の対象) に従って有効期限が切れます。そのため、保存セットの有効期限が切れるまで、照会やリストア操作などの通常のファイル処理操作にファイルを引き続き使用できます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespace/filespec *filespec*

ストレージから削除したいパスとファイル名を指定します。別のファイル・スペース内のファイルを指定するには、ファイル名の前にファイル・スペース名を付けます。ディレクトリー内のファイルのグループまたはすべてのファイルを指定するには、ワイルドカード文字を使用してください。ファイル指定はスペースで区切ります。filelist オプションを使用して、ファイルのリストを処理することもできます。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、このオプションで指定されたファイルをオープンし、具体的なコマンドに従って、その中のファイルのリストを処理します。

注: *filespacefilename* を示す場合には、ファイル指定にドライブ文字を組み込まないようにしてください。

-deltype=inactive または -deltype=active を使用する場合、ディレクトリー内のファイルのグループまたはすべてのファイルを指定するには、ワイルドカード文字を使用してください。

-deltype=all を使用する場合、ワイルドカードのみでディレクトリーを指定してください。

objtype

削除したいオブジェクトのタイプを指定します。次のいずれかの値を指定できます。

FILE

ディレクトリーとファイルを削除したいことを指定します。この値が、デフォルトのオブジェクト・タイプです。

IMAGE

イメージ・バックアップを削除したいことを指定します。イメージ・バックアップを削除したいことを指定します。Objtype=image は、Mac OS X ではサポートされません。

VM *vmname*

仮想マシン・バックアップの 1 つ以上のバージョンを削除することを指定します。仮想マシンは、*vmname* 変数パラメーターによって識別されます。仮想マシン名にワイルドカード文字を含めることはできません。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

objtype=VM を指定するときは、filelist オプションを使用できません。objtype=VM を指定すると、-deltype オプションの動作が変更されます。objtype=vm が指定された場合、-deltype=active または -deltype=inactive を使用することができます。-deltype=all を使用することはできません。-deltype=inactive を指定すると、非アクティブ・バックアップとアクティブ・バックアップの両方のリストが表示されます。このリストを使用して、削除したい仮想マシン・バックアップを指定することができます。アクティブな仮想マシン・バックアップのみを削除するには、-deltype=active を使用します。

-objtype=VM を指定した場合、このコマンドは、IFINCR および IFFULL のいずれかのモードを使用して作成された仮想マシン・バックアップのみを削除します。

バージョン 7.1 以前のクライアントで作成されたバックアップの場合: フルバックアップの実行後に作成された個々の増分バックアップ (MODE=INCR を使用して作成されたバックアップ) は、このコマンドで削除することができません。ただし、フル仮想マシン・イメージ・バックアップ (MODE=FULL を使用して作成) を削除する場合、かつフルバックアップ後にこの VM について作成された増分バックアップ (MODE=INCR) がサーバーにある場合は、フル VM バックアップを削除すると、MODE=INCR バックアップによって作成されたファイルも削除されます。

仮想マシンの活動バックアップを削除した場合は、最新の非活動コピーが活動バックアップになります。-pick オプションまたは -inactive オプションを指定した場合は、指定したバックアップのみが削除されます。MODE=IFINCR によって作成されたバックアップを選択した場合は、選択した増分バックアップのみが削除されます。仮想マシンのそれ以外の増分バックアップは削除されません。

-FROM

仮想マシン・バックアップが削除されるバックアップ・ロケーションを指定します。次のいずれかの値を指定することができます。

SERVER

仮想マシンのバックアップは、IBM Spectrum Protect サーバーから削除されます。

LOCAL

仮想マシンの永続スナップショットは、ハードウェア・ストレージから削除されます。

BOTH

ハードウェア・ストレージ上の IBM Spectrum Protect サーバーとスナップショットにある仮想マシンのバックアップは、削除されます。この値がデフォルトです。

この値を指定すると、バックアップ・ロケーションのリストが表示されます。そのリストから、仮想マシン・バックアップを削除するロケーションを選択することができます。

deltype

削除タイプを指定します。以下の値の 1 つを指定します。

ACTIVE

活動ファイル・オブジェクトのみを削除します。ディレクトリー・オブジェクトは削除されません。この値が、デフォルトの削除タイプです。

注: 非活動オブジェクトがある場合は、活動オブジェクトが削除された後、最新の非活動オブジェクトが非活動から活動に変更されます。

ファイルのすべてのバージョンを削除するには、まず -deltype=inactive を指定して **delete backup** コマンドを発行し、次に -deltype=active を指定して再度このコマンドを入力します。

INACTIVE

非活動ファイル・オブジェクトのみを削除します。ディレクトリー・オブジェクトは削除されません。

ALL

特定のディレクトリーの下にあるすべての活動オブジェクトと非活動オブジェクトを、すべてのサブディレクトリーとそのファイルも含めて削除します。

注: 削除されたファイルとサブディレクトリーの親ディレクトリーは、削除されません。
 deltype=ALL を指定する場合は、pick オプションを使用することはできません。これは
 deltype=ALL と pick オプションを同時に指定することができないためです。

表 88. Delete Backup コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
description 379 ページの『Description』	コマンド・ラインのみ。
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
fromdate 436 ページの『Fromdate』	コマンド・ラインおよび GUI 検索機能。
fromtime 439 ページの『Fromtime』	コマンド・ラインおよび GUI 検索機能。
noprompt 491 ページの『Noprompt』	コマンド・ラインのみ。
pick 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
pitdate 500 ページの『Pitdate』	コマンド・ラインおよび GUI 検索機能。
pittime 501 ページの『Pittime』	コマンド・ラインおよび GUI 検索機能。
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
tapeprompt 575 ページの『Tapeprompt』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
todate 587 ページの『ToDate』	コマンド・ラインおよび GUI 検索機能。
totime 588 ページの『Totime』	コマンド・ラインおよび GUI 検索機能。

例

タスク

ディレクトリー /data/plan/proj1 にある budget という名前のすべてのアクティブ・ファイル・オブジェクトおよび非アクティブ・ファイル・オブジェクトを削除します。

コマンド:

```
delete backup /data/plan/proj1/budget.jan
  -deltype=inactive
delete backup /data/plan/proj1/budget.jan
  -deltype=active
```

タスク

/data/plan/proj1 ディレクトリーおよびそのサブディレクトリーからバックアップされたファイルのうち、.txt 拡張子を持つすべての非アクティブ・ファイルを削除します。

コマンド: delete backup "/data/plan/proj1/*.txt" -deltype=inactive -subdir=yes

タスク

/home/marymb/project ディレクトリーからバックアップされた、選択された活動ファイルを削除します。ファイル指定に一致するバックアップ・コピーのリストを表示するには、-pick オプションを使用します。このリストから、削除するバージョンが選択できます。

コマンド: `delete backup "/home/marymb/project/*" -pick`

タスク

/home/storman/myproject ディレクトリー内の活動バージョンおよび非活動バージョンのファイルとサブディレクトリーをすべて削除します。その後、/user/myproject ディレクトリーの活動バージョンと非活動バージョンをすべて削除します。

コマンド:

```
delete backup "/home/storman/myproject*"
-deltypes=all
```

関連資料

429 ページの『Filelist』

filelist オプションを使用して、ファイルのリストを処理します。

Delete Filespace

delete filespace コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージ内のファイル・スペースを削除します。ファイル・スペースは、ユーザーがバックアップまたはアーカイブしたファイルを含むサーバー上の論理スペースです。

このコマンドを使用するには、許可ユーザーであることが必要です。

IBM Spectrum Protect は、ユーザーがファイルをバックアップまたはアーカイブする各ワークステーション・ファイル・システムのサーバーに別個のファイル・スペースを割り当てます。ファイル・スペース名は、ファイル・システム名と同じものです。

delete filespace コマンドを入力すると、ファイル・スペースのリストが表示されます。このリストから、削除したいファイル・スペースを選択します。

ファイル・スペースを削除するには、その権限を IBM Spectrum Protect 管理者から入手する必要があります。削除したいファイル・スペースにバックアップ・バージョンが含まれている場合には BACKDEL 権限が必要であり、ファイル・スペースにアーカイブ・コピーが含まれている場合には ARCHDEL 権限が必要です。ファイル・スペースにバックアップ・バージョンとアーカイブ・コピーの両方が含まれている場合には、その両方のタイプの権限が必要です。

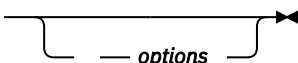
重要: ファイル・スペースを削除する時は、そのファイル・スペース内のすべてのバックアップ・バージョンおよびアーカイブ・コピーを削除してください。ファイル・スペースを削除すると、**ファイルをリストアすることができません**。ファイルを削除する前に、それが古いものであることを確認してください。

delete filespace コマンドを使用して、NAS ファイル・スペースをサーバー・ストレージから対話式で削除することができます。nasnodename オプションは、NAS ファイル・サーバーのノード名を識別するのに使用します。class オプションは、削除するファイル・スペースのクラスを指定するために使用します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ Delete Filespace  `options`

パラメーター

表 89. Delete Filespace コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
class 358 ページの『Class』	コマンド・ラインのみ。
detail 380 ページの『Detail』	コマンド・ラインのみ。
nasnodename 487 ページの『Nasnodename』	クライアント・システム・オプション・ファイルまたはコマンド・ライン。
scrolllines 538 ページの『Scrolllines』	クライアント・システム・オプション・ファイルまたはコマンド・ライン。
scrollprompt 539 ページの『Scrollprompt』	クライアント・システム・オプション・ファイルまたはコマンド・ライン。

例

タスク

ファイル・スペースを削除します。

コマンド: `delete filesystem`

タスク

サーバーに保管された **dagordon** NAS ファイル・サーバーから NAS ファイル・スペースを削除します。

コマンド: `delete filesystem -nasnodename=dagordon -class=nas`

関連情報

487 ページの『Nasnodename』

358 ページの『Class』

Delete Group

delete group コマンドを使用して、IBM Spectrum Protect サーバー上のグループ・バックアップを削除します。

グループを削除した後も、グループ・リーダー (virtualfsname) は IBM Spectrum Protect サーバー上に残ります。これにはメンバー (ファイルまたはディレクトリー) は含まれていませんが、以降の **query filesystem** コマンドで報告されます。showmembers オプションが追加された場合、ファイルはリストされません。グループを削除しても、そのグループが属するファイル・スペースは除去されません。これは、別のグループがそのファイル・スペースに存在する可能性があるためです。ファイル・スペースと、そこに含まれているすべてのデータを除去する場合は、**delete filesystem** を使用します。

注:

1. **inactive** オプションを使用して、活動状態と非活動状態の両方のグループ・バックアップ・バージョンを表示します。デフォルトでは、クライアントは活動状態のバージョンを表示します。
2. **pick** オプションを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーから削除する特定のグループを選択します。
3. グループ・バックアップ・バージョンを削除する前に通常は表示される確認プロンプトを抑止する場合は、**noprompt** オプションを使用します。デフォルトでは、グループ・バックアップを削除する前にクライアントが確認のプロンプトを表示します。このオプションを使用すると、削除操作が高速化されます。しかし、保存しておくはずのグループ・バックアップ・バージョンを、誤って削除してしまうという危険も多くなります。このオプションの使用には、注意が必要です。
4. **query filesystem** コマンドは、サーバーに保管されているノードの仮想ファイル・スペース名を表示するために使用します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、Mac OS X を除いて、すべての UNIX および Linux のクライアントで有効です。

構文

► Delete GRoup — — *filespec* —————►
 └— *options* ┘

パラメーター

filespec

サーバー・ストレージから削除したい仮想ファイル・スペース名とグループ名を指定します。

表 90. Delete Group コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
inactive 445 ページの『Inactive』	コマンド・ラインのみ。
noprompt 491 ページの『Noprompt』	コマンド・ラインのみ。
pick 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
pitdate 500 ページの『Pitdate』	コマンド・ラインのみ。
pittime 501 ページの『Pittime』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

現行の活動バージョンの /virtfs/group1 グループを削除します。

コマンド:

```
delete group /virtfs/group1
```

タスク

バックアップ・バージョンの /virtfs/group1 グループを活動バージョンおよび非活動バージョンのリストから削除します。

コマンド:

```
delete group /virtfs/group1 -inactive -pick
```

関連情報

[445 ページの『Inactive』](#)

[499 ページの『Pick』](#)

[491 ページの『Noprompt』](#)

[710 ページの『Query Filespace』](#)

Expire

expire コマンドは、ファイル指定か、**filelist** オプションで指定されたバックアップ・オブジェクトを非活動化します。期限切れにする個々のファイルを指定するか、期限切れにするファイルのリストが入っ

ているファイルを指定できます。OBJTYPE=VM の場合、このコマンドは仮想マシンの現行バックアップを非活動化します。

対話モードで作業しているときには、ファイルが期限切れになる前にプロンプトで通知されます。

expire コマンドは、ワークステーション・ファイルを除去しません。ワークステーション上にまだ存在しているファイルまたはディレクトリーを有効期限切れにした場合、そのファイルまたはディレクトリーは、オブジェクトをバックアップ処理から除外しない限り、次の増分バックアップ時に再びバックアップされます。

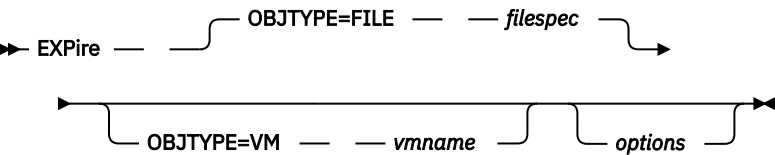
活動ファイルを含むディレクトリーを期限切れにした場合、それらのファイルは GUI からのそれ以降の照会には表示されません。ただし、ディレクトリーのワイルドカード文字を使用して正しい照会を指定した場合、それらのファイルはコマンド・ラインに表示されます。

注：**expire** コマンドは、クライアント・ファイル・システムを変更することなくクライアント・ファイル・システムのサーバー・ピクチャーを変更するため、IBM Spectrum Protect ジャーナル・デーモンによってモニターされているファイル・システム上のファイルに対しては、**expire** コマンドは許可されません。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

OBJTYPE=FILE filespec

満了させたいパスおよびファイル名を指定します。このコマンドで入力できるファイル指定は1つだけです。ただし、ワイルドカードを使用すると、ファイルのグループまたはディレクトリー内のすべてのファイルを選択できます。filelist オプションを指定した場合には、filespec 指定は無視されます。

OBJTYPE=VM vmname

vmname は、仮想マシンの名前を指定します。指定した仮想マシンの活動バックアップは期限切れにされます。仮想マシン名にワイルドカード文字を含めることはできません。

objtype=VM を指定した場合、expire コマンドは vmname パラメーターで指定された仮想マシンのフル仮想マシン・バックアップ (MODE=IFFULL) のみを期限切れにします。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

表 91. Expire コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
dateformat 371 ページの『Dateformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
noprompt 491 ページの『Noprompt』	コマンド・ラインのみ。

表 91. *Expire* コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
numberformat 492 ページの『Numberformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
pick 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

home ディレクトリーの `letter1.txt` ファイルを非活動化します。

コマンド: `expire "/home/letter1.txt"`

タスク

`/admin/mydir` ディレクトリー内のすべてのファイルを非活動化します。

コマンド: `expire /admin/mydir/*`

タスク

`/home/avi/filelist.txt` ファイル内で指定されたすべてのファイルを非活動化します。

コマンド: `expire -filelist=/home/avi/filelist.txt`

Help

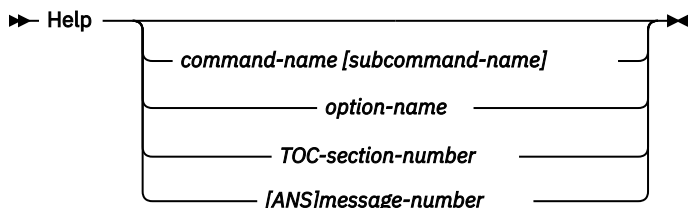
help コマンドを使用して、コマンド、オプション、およびメッセージに関する情報を表示します。

ヒント: 初期コマンド・ラインで **help** コマンドを使用する場合は、サーバーへの接続が実行されないため、パスワードは不要です。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



引数を指定せずに **help** コマンドを入力すると、help によって完全な目次が表示されます。最初のコマンドで、または HELP がプロンプトを表示するときに、以下のパラメーターを入力することができます。

パラメーター

command-name [**subcommand-name**]

コマンド名を指定します。また、オプションでサブコマンド名を指定したり、これらを省略形で指定したりすることもできます (例: **backup image** あるいは **b i**)。この場合、組み合わせは固有でなければなりません。非固有の省略形を指定すると、省略形と一致するヘルプ・ファイル全体の最初のセクションが表示されます。このパラメーターはオプションです。

option-name

オプションの名前 (例えば、domain または do) を指定します。このパラメーターはオプションです。

TOC-section-number

目次のセクション番号 (例えば、1.5.3) を指定します。このパラメーターはオプションです。

[ANS]message-number

接頭部付きまたは接頭部なしのメッセージ番号 (例えば、ans1036 または 1036) を指定します。このパラメーターはオプションです。重大度コードは常に不要です。ans1036E を入力すると、見つからないという応答が戻されます。

重要: これらの説明に適合しない引数を入力すると、予期しない結果が表示される (または結果が表示されない) 可能性があります。2 つより多くの引数を入力すると、ヘルプ要求は拒否されます。コマンド名とオプション名が同じ場合 (例えば、**incremental** (コマンド) と incremental (オプション))、目次のセクション番号を入力することによってオプションのヘルプを表示することができます。

要求されたヘルプ・テキストは、コマンド・ウィンドウで可能な表示行数に応じて 1 つ以上のセクションで表示されます。表示スペースが埋まるまで行が表示された場合、または要求されたヘルプ・テキストの末尾が表示された場合、プロンプトとそのプロンプトで入力できる内容に関する説明が表示されます。現行の選択に関するテキストの表示を続行するには、Enter キーを押すか、'd' キーを入力してスクロールダウンします。現行の選択でスクロールアップするには、'u' キーを押してから、Enter キーを押します。その他の選択項目が表示される場合もあるため、プロンプトの説明をお読みください。

ヘルプ・テキストを正しく表示するには、使用可能な表示幅を 72 文字にする必要があります。表示幅が 72 文字未満の場合、幅が 72 文字の文は次の行に折り返されることになります。これにより、表示されたヘルプ・テキストが先頭ではなく、セクションの途中から始まることになります。表示されない行は、端末の上方移動スクロール機能を使用して表示することができます。

例

タスク

ヘルプ・トピックの目次を表示します。

コマンド: dsmc help

タスク

ヘルプ・トピック 2.1.2 の情報を表示します。

コマンド: dsmc help 2.1.2

タスク

archive コマンドのヘルプ情報を表示します。

コマンド: dsmc help archive

タスク

メッセージ ANS1036 のヘルプ情報を表示します。

コマンド: dsmc help 1036

コマンド: dsmc help ANS1036

Incremental

incremental コマンドは、バックアップ・サービスから除外されていないすべての新規または変更されたデータを指定されたロケーションにバックアップします。

デフォルト・クライアント・ドメイン内、あるいはファイル・システム、ディレクトリー、またはファイルから、新規または変更ファイルまたはディレクトリーをすべてバックアップできます。

選択したファイルまたはディレクトリーを増分バックアップするには、コマンドでファイル指定を入力してください。ファイル指定を入力しない場合には、デフォルトで、デフォルト・ドメイン内のファイルまたはディレクトリーをバックアップすることになります。

AIX のみ: `snapshotproviderfs=JFS2` オプションを使用して、スナップショット・ベースの増分バックアップを有効にすることができます。

ファイルまたはディレクトリーに割り当てられた管理クラス内の次の属性は、データをバックアップするかどうかに影響を与えます。

頻度

オブジェクトの連続したバックアップの間に経過していなければならない日数。 **frequency** 属性は、フル増分バックアップのみに適用されます。

ジャーナル・ベースのバックアップ中、この管理クラス属性は無視されます。

モード

前回のバックアップ操作以降の変更が処理に影響するかどうかを指定します。 `mode=modified` の場合、前回のバックアップ操作以降に変更されたオブジェクトのみが処理されます。 `mode=absolute` の場合、オブジェクトが前回のバックアップ操作以降に変更されたかどうかに関係なく、すべてのオブジェクトが処理されます。

コピー・グループ・モードが `modified` に設定されている場合は、クライアントの **absolute** オプションを使用してオーバーライドすることができます。 **absolute** オプションについて詳しくは、[341 ページの『Absolute』](#)を参照してください。

逐次化

次の値にしたがって、ファイルまたはディレクトリーのバックアップを許可または否認します。

- 静的: バックアップするには、バックアップまたはアーカイブ中にデータが変更されてはいけません。
- 共有静的: ファイルまたはディレクトリー内のデータが、許可されたバックアップまたはアーカイブの各試行中に変更された場合、ファイルまたはディレクトリーはバックアップまたはアーカイブされません。 `changingretries` オプションの値は、行われる試みの回数を決定します。デフォルトは、4 です。
- 動的: プロセス中のデータの変更に関係なく、最初の試みでオブジェクトがバックアップまたはアーカイブされます。
- 共有動的: プロセス中にデータが変更されても、最後の試みでオブジェクトがバックアップまたはアーカイブされます。

`include-exclude` リストで **include** オプションを使用すると、ファイルまたはファイル・グループのデフォルト管理クラスを上書きできます。

実行できるのは、フル増分バックアップまたは日付による増分バックアップのいずれか一方です。デフォルトは、フル増分バックアップです。

ファイル・システムをジャーナル処理していて、ジャーナルが有効である場合は、フル増分バックアップはジャーナル・ベースのバックアップを行います。複数のジャーナル・ベースのバックアップ・セッションを開始できますが、進行できるジャーナル・ベースのバックアップ・セッションは1つだけです。同じファイル・スペースへのアクセスが必要な他のすべてのジャーナル・ベース・バックアップ・セッションは、現行のジャーナル・ベース・バックアップ・セッションが完了するまで待たない限り、次のセッションは開始できません。 **nojournal** オプションを使用することにより、ジャーナルなしにフル増分バックアップを実行できます。

さらに、**selective** コマンドを使用して、指定したファイル、ディレクトリー、または空のディレクトリーのみを、変更されたかどうかに関係なくバックアップするバックアップを実行することもできます。

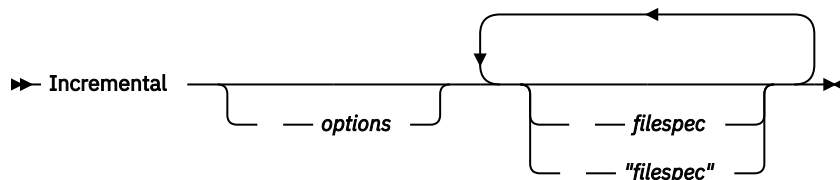
フル増分は、前回の増分バックアップ以降に新規に作成または変更されたすべてのファイルおよびディレクトリーをバックアップします。フル増分バックアップ中、クライアントはサーバーを照会します。IBM Spectrum Protect は、以下のアクションを実行する時にこの情報を使用します。

- 新規ファイルまたはディレクトリーのバックアップ。
- 前回のバックアップ以降に内容が変更されたファイルまたはディレクトリーのバックアップ。
- ワークステーションから削除される、サーバー上のファイルまたはディレクトリーの非活動バックアップ・バージョンのマーク付け。
- 管理クラス割り当てが変更されている場合に管理クラスへのバックアップ・バージョンの再バインド。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec

バックアップしたいパスおよびファイル名を指定します。ファイルのグループまたはディレクトリー内のすべてのファイルを選択するには、ワイルドカード文字を使用してください。ファイル指定を行わないと、**domain** オプションによって、バックアップ対象が決定されます。

ファイル・システムを指定した場合には、新規および変更済みのファイルがすべてバックアップされます。さらに、ファイル・スペースの最後の増分日付は、サーバー上で更新されます。ファイルまたはディレクトリーが指定されていると、最終増分日付は更新されません。後から **incrbydate** オプションを使用してバックアップを実行すると、そのファイルまたはディレクトリーが再びバックアップされる場合があります。ファイル・システムを指定する場合は、ファイル・システムの後にはスラッシュを付けずに指定してください。

表 92. *Incremental* コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
absolute 341 ページの『Absolute』	コマンド・ラインのみ。
changingretries 357 ページの『Changingretries』	dsm.sys ファイルまたはコマンド・ライン。
compressalways 363 ページの『Compressalways』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
compression 363 ページの『Compression』	サーバー・スタンザまたはコマンド・ライン内の dsm.sys ファイル。
detail 380 ページの『Detail』	コマンド・ラインのみ。
diffsnapshot 382 ページの『Diffsnapshot』	コマンド・ラインのみ。
dirsonly 385 ページの『Dirsonly』	コマンド・ラインのみ。
domain 388 ページの『Domain』	dsm.sys ファイルまたはクライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
encryptiontype 410 ページの『Encryptiontype』	サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys)。
encryptkey 410 ページの『Encryptkey』	サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys)。
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
filesonly 433 ページの『Filesonly』	コマンド・ラインのみ。

表 92. *Incremental* コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
incrbydate 465 ページの『Incrbydate』	コマンド・ラインのみ。
memoryefficientbackup 480 ページの『Memoryefficientbackup』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt)、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys)、サーバー、またはコマンド・ライン。
nojournal 490 ページの『Nojournal』	コマンド・ラインのみ。
preservelastaccessdate 506 ページの『Preservelastaccessdate』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
removeoperandlimit 515 ページの『Removeoperandlimit』	コマンド・ラインのみ。
snapdiff 546 ページの『Snapdiff』	コマンド・ラインのみ。
snapshotcachesize 554 ページの『Snapshotcachesize』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) または include.fs オプション。
snapshotproviderfs 556 ページの『Snapshotproviderfs』	サーバー・スタンプザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys) または include.fs オプション。
snapshotroot 557 ページの『Snapshotroot』	コマンド・ラインのみ。
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
tapeprompt 575 ページの『Tapeprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) に指定されたクライアント・ドメインの増分バックアップを実行します。

```
Incremental
```

前回のバックアップ以降に変更されたかどうかに関係なく、ドメイン内のすべてのファイルをバックアップする増分バックアップを実行します。

```
Incremental -absolute
```

タスク

/home、/usr、および /proj ファイル・システムの増分バックアップを実行します。

```
Incremental /home /usr /proj
```


タスク

/proj/test ディレクトリーの増分バックアップを実行します。

```
Incremental /proj/test/
```

タスク

/home ファイル・システムの日付による増分バックアップを実行します。

```
Incremental -incrbydate /home
```

タスク

/fs/dir1 ディレクトリー内の abc ファイルの増分バックアップを実行します。

```
Incremental -subdir=yes /fs/dir1/abc
```

タスク

ディレクトリー・オブジェクト /fs/dir1 の増分バックアップを実行しますが、/fs/dir1 ディレクトリー内のファイルのいずれも増分バックアップを実行しません。

```
Incremental /fs/dir1
```

タスク

ディレクトリー・オブジェクト /fs/dir1、fs/dir1 ディレクトリー内のすべてのファイル、および /fs/dir1 の下にあるすべてのファイルとサブディレクトリーの増分バックアップを実行します。

```
Incremental -subdir=yes /fs/dir1/
```

タスク

/usr ファイル・システムのスナップショットを開始し、そのスナップショットを /snapshot/day1 としてマウントしたと想定し、ローカル・スナップショットの下ですべてのファイルとディレクトリーの増分バックアップを実行し、それを IBM Spectrum Protect サーバー上でファイル・スペース名 /usr の下で管理します。

```
dsmc inc /usr -snapshotroot=/snapshot/day1
```

タスク

snapdiff オプションを使用して、/home ファイル・システムの増分バックアップを実行し、差分スナップショットを作成するためのオプションを指定します。以下の例では、/home は NAS/N シリーズ・ファイル・サーバー・ボリュームの NFS マウント・ポイントです。

```
incremental /home -snapdiff -diffsnapshot=create
```

関連情報

[341 ページの『Absolute』](#)

[693 ページの『ジャーナル・ベースのバックアップ』](#)

[764 ページの『Selective』](#)

[447 ページの『include オプション』](#)

ジャーナル・ベースのバックアップ

IBM Spectrum Protect ジャーナル・デーモンがインストールされており、ファイル・システムをジャーナル処理するように構成してあって、有効なジャーナルが確立されている場合、特殊なファイル・システムのバックアップはジャーナル・ベースになります。

ジャーナル・ベースのバックアップは、JFS および JFS2 のファイル・システムの AIX バックアップ/アーカイブ・クライアントでサポートされます。

ジャーナル・ベースのバックアップは、Ext2、Ext3、Ext4、XFS、ReiserFS、JFS、VxFS、および NSS の Linux バックアップ/アーカイブ・クライアントでサポートされます。GPFS は、Linux のジャーナル・ベースのバックアップではサポートされません。

ジャーナル・デーモンがインストールおよび実行されている場合、**incremental** コマンドは、ジャーナル・エンジン・デーモンでモニターされているファイル・システム上で、ジャーナル・ベースのバックアップを実行します (デフォルト設定)。ジャーナル・ベースのバックアップを正常に実行するには、以下の条件が必要です。

- バックアップされるファイルおよびディレクトリーを含むファイル・システムをモニターするために、ジャーナル・デーモンをセットアップする必要があります。
- フル増分バックアップは、バックアップされるファイル・システム上で少なくとも一度正常に実行されている必要があります。
- サーバー上のファイル・システムのファイル・スペース・イメージが、最後のフル増分バックアップ以降、管理コマンドによって変更されてはいけません。
- バックアップされるファイルのストレージ管理ポリシーが、最後のフル増分バックアップ以降、更新されてはいけません。

ジャーナル・デーモンは、オブジェクトまたはオブジェクトの属性の変更をジャーナル・データベースに記録します。ジャーナル・ベース・バックアップ中に、クライアントは、ジャーナル・データベースからバックアップに適切なファイルのリストを獲得します。処理するファイルを判別するためにクライアントによるローカル・ファイル・システムの走査またはサーバーへの連絡が行われなため、ジャーナル・ベース・バックアップはバックアップ・パフォーマンスを増やすことができます。また、ジャーナル基本バックアップは、クライアントおよびサーバー間のネットワーク・トラフィックも削減します。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、現行 include-exclude リストに基づいてリストをフィルターに掛け、ポリシー制約 (逐次化など) に従って結果ファイル进行处理、満了、および更新します。しかし、クライアントはジャーナル・ベース・バックアップの最中はサーバーの頻度属性を無視します。これは、ジャーナル・ベース・バックアップでは、サーバーへのバックアップ・バージョン照会を排除するからです。そのために、クライアントはファイルの最後のバックアップ以降に経過した日数を判断できません。

ジャーナル・デーモンは UNIX の特殊ファイルに変更を記録しません。

ジャーナル・デーモンは、ジャーナルへの変更の記録から、特定のシステム・ファイルを除外します。これらのファイルの変更はジャーナル処理されないため、クライアントはこれらのファイルをバックアップしません。除外された特定のファイル・システムについては、バックアップ/アーカイブ・クライアントのインストール・ディレクトリーにあるジャーナル・デーモン構成ファイル (tsmjbbd.ini) を参照してください。

注:

1. アンチウィルス・ソフトウェアを使用する場合、ジャーナル・ベース・バックアップには制限があります。一部のアンチウィルス・ソフトウェアは、IBM Spectrum Protect ジャーナル・サービスに対して変更通知を間違えて生成し、ジャーナル・ベース・バックアップ時に変更されていないファイルを間違えてバックアップする可能性があります。この問題を回避するには、Norton Anti-Virus Corporate Edition 8.0 以降を使用してください。
2. サーバー上のポリシー・ドメインまたはノードが変更されている場合に、ジャーナル・ベースのバックアップが従来の増分バックアップに戻ることができない場合があります。これは、ドメイン内のポリシー・セットが更新された時刻および最後の増分バックアップ増分日付によって決まります。この場合、必ずフル増分バックアップを実行して、ファイルを新規ドメインに再バインドしなければなりません。デフォルトのジャーナル・ベース・バックアップの代わりに従来のフル増分バックアップを実行したいことを指定するには、nojournal オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用します。

スナップショット除外ステートメントを AIX 6.1 (またはそれ以降) の tsmjbbd.ini ファイルに追加して、JFS2 内部スナップショット・ディレクトリーがジャーナル・ベースのバックアップ・デーモンによってモニターされないようにします。スナップショット・ディレクトリーを除外しない場合、そのディレクトリーにあるファイルはバックアップされます。スナップショット・ディレクトリーのバックアップは冗長であるため、サーバー・スペースが浪費されます。

以下の条件において、ジャーナル・データベースは無効と見なされ、クライアントは従来のフル増分バックアップに復帰されます。

- ジャーナル処理されたファイル・スペース名が変更された。
- クライアント・ノード名が変更された。
- クライアントがバックアップを実行するために別のサーバーにアクセスした。
- ポリシー変更が起こった (新規ポリシー・セットの活動化)。
- ジャーナルが壊れている (スペース不足状態、ディスク・エラー)。
- ジャーナルが実行されていない。

ジャーナル・ベースのバックアップは、以下のことから従来のフル増分バックアップとは異なります。

- IBM Spectrum Protect はデフォルトでないコピー頻度 (0 以外) を強制しません。
- UNIX 特殊ファイルの変更は検出されません。

nojournal オプションを **incremental** コマンドで使用して、デフォルトのジャーナル・ベースのバックアップの代わりに従来のフル増分バックアップを実行することができます。

日付による増分

日付による増分バックアップは、ファイルが **exclude** ステートメントによってバックアップから除外されていない限り、修正日付がサーバーに保管された最終増分バックアップの日付より後の新規ファイルおよび変更済みファイルをバックアップします。

日付による増分バックアップをファイル・システムの一部に対してだけ実行している場合、最後の全体的増分バックアップの日付は更新されず、次に日付による増分バックアップを実行すると、再度これらのファイルのバックアップが取られます。アクセス制御リスト (ACL) または拡張属性を変更しても、日付による増分時にはファイルがバックアップされません。ファイル・システム全体に対する最後の増分バックアップの日時を確認するには、**query filespace** コマンドを使用します。

日付による増分バックアップを実行するには、**incremental** コマンドで **incrbydate** オプションを使用してください。

フル増分とは異なり、次の理由で、日付による増分はすべてのワークステーション・ファイルの現行サーバー・ストレージを保守しません。

- ワークステーションから削除されたファイルのバックアップ・バージョンを期限切れにしない。
- 管理クラスが変更されていた場合に、新規管理クラスへの再バインドを行わない。
- 変更の日付および時刻が変更されていなければ、属性が変更されていてもそのファイルのバックアップを取らない。
- 管理クラスのコピー・グループ頻度属性を無視する。

上記の理由により、平日はバックアップを行う時間が限られているが、週末には時間に余裕がある場合には、平日には日付による増分バックアップを、週末にはフル増分バックアップを実行して、ワークステーション・ファイルの現行サーバー・ストレージを保持することができます。

通信障害またはセッション消失が原因で **incremental** コマンドが再試行される場合には、すべてのコマンドが試みている間にクライアントが転送しようとしたバイト数が転送統計に表示されます。したがって、転送済みバイト数の統計がファイル・サイズの統計などのファイル統計と一致しない場合があります。

ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け

snapshotroot オプションを **incremental** コマンドで使用し、併せて論理ボリュームのスナップショットを提供するベンダー提供アプリケーションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・データと関連付けます。

snapshotroot オプションは、ボリューム・スナップショットが作成したデータを管理する機能のみを提供し、ボリューム・スナップショットを取る機能は提供しません。

Loop

loop コマンドは、quit を入力するまで維持される対話式コマンド・ライン・セッションを開始します。

パスワードを入力する必要がある場合は、ループ・モードのプロンプトが表示される前に、パスワードの入力を求めるプロンプトが出されます。

注：有効なサーバー接続なしにループ・モードに入ることはできません。この結果、有効なサーバーが使用可能でない場合、一部のコマンド (例えば、`restore backupset -location=file`) は、初期コマンド・ラインでのみ受け付けられます。

対話式コマンド・ライン・セッションでは、各コマンド名の前に **dsmc** および自分のパスワード (必要な場合) を付ける必要はありません。

対話モードでは、初期コマンド・ラインに入力したオプションは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) または `dsm.sys` ファイルで指定した値を指定変更します。この値は、他の対話式コマンドで別の値によって指定変更されない限り、対話式セッション全体にわたって有効となります。例えば、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (`dsm.opt`) で `subdir` オプションを `yes` に設定し、初期コマンド・ラインで `subdir=no` を指定した場合は、他の対話式コマンドで `subdir=yes` 値で指定変更しない限り、`subdir=no` の設定が対話式セッション全体で有効になります。ただし、`subdir=yes` 値は入力されたコマンドのみに影響を及ぼします。そのコマンドが完了すると、値は対話式セッションの開始時の値 `subdir=no` に戻ります。

対話モードでは、**schedule** および **loop** コマンドを除いた有効なすべてのコマンドを入力できます。

一部のオプションは、**loop** コマンドで作成された対話式セッション内では使用できず、オプションの記述に次のステートメントが示されます。このオプションは初期コマンド・ラインでのみ有効です。対話モードでは無効です。

注：

1. ループ・モードでは、テープからリストア操作を直接行ったあと、目的のボリュームに別のリストア要求がなされた場合は、マウント・ポイントがリリースされません。同じセッション内でバックアップ操作を要求したときに、このマウント・ポイントのみが使用可能な場合は、バックアップ操作が停止し、次のメッセージが表示されます。

オフライン・メディアのマウントを待機中

この場合は、次のいずれかの条件が満たされるまで、マウント・ポイントは解放されません。

- 装置クラス `MOUNTRETENTION` 制限が満たされている。
 - クライアントのアイドル・タイムアウト期間が満たされている。
 - リストア操作の完了後に `dsmc` ループ・セッションがクローズされ、バックアップ操作を実行するために以降のループ・モード・セッションを開始できるようになる。
2. 対話モードでは、各国語の言語文字を含むファイル指定を入力することはできません。コマンドに国別文字が含まれている場合は、コマンドの先頭に実行可能プログラム名 **dsmc** を付けて、コマンドをバッチ・モードで処理します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ **LOOP** ➡

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

対話式コマンド・ライン・セッションを開始します。

コマンド: `dsmc`

Protect> プロンプトで、コマンドを入力します。

対話式セッションを終了する方式は、次の 2 つです。

- `quit` を入力します
- `editor=yes` と設定すると、以下の操作ができます。

1. Escape キー (Esc) を押します。
2. Q を入力して、Enter キーを押してください。

注: デフォルトの設定値は `editor=yes` です。

注: クライアントが処理を終了する前に **dsmc** コマンドを中断するには、IBM Spectrum Protect コンソールで **QQ** と入力します。すべての場合ではありませんが多くの場合、これでコマンドは中断されます。

関連情報

309 ページの『[第 10 章 処理オプション](#)』(対話モードで使用できないオプションの場合)

Macro

macro コマンドは、マクロ・ファイルで指定された一連のコマンドを実行します。

macro コマンドをマクロ・ファイルに入れておくと、コマンドを 10 レベルまでネストすることができます。

コメント行は、**macro** コマンドに対して 指定したマクロ・ファイル内ではサポートされません。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

►► MACro — — *macroname* ◄◄

パラメーター

macroname

コマンドが入っているファイルの完全修飾名を指定します。

例

macro コマンドの使用法の例は、次のとおりです。

タスク

次のディレクトリー内のファイルを選択バックアップします。

- `/devel/project/proja`
- `/devel/project/projb`
- `/devel/project/projc`

コマンド: `macro backabc.mac`

ここで、backabc.mac に入っているステートメントは、次のとおりです。

```
Selective /devel/project/proja/  
Selective /devel/project/projb/  
Selective /devel/project/projc/
```

Monitor Process

monitor process コマンドは、管理ユーザーが権限を持っている現行の NAS (NDMP サポートが使用可能になっている場合) イメージ・バックアップおよびリストア・プロセスを表示します。IBM Spectrum Protect 管理者 ID を求めるプロンプトが表示されます。

管理ユーザーは、そこで 1 プロセスを選択してモニターできます。クライアント所有者特権は、選択された NAS イメージ・バックアップまたはリストア・プロセスをモニターするのに十分な権限です。

サポートされるクライアント

このコマンドは、AIX、Linux、および Solaris クライアントのみに有効です。

構文

➡ MONitor Process ➡

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

現行の NAS イメージ・バックアップまたはリストア・プロセスをモニターします。

コマンド: monitor process

Preview Archive

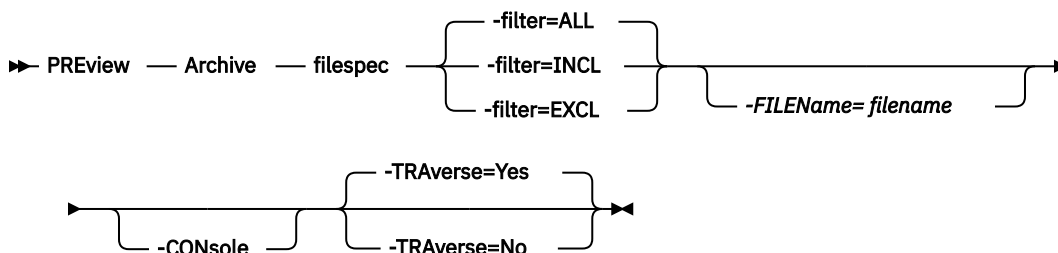
preview archive コマンドは、データをサーバーに送信せずに、アーカイブ・コマンドをシミュレートします。

preview archive コマンドは、スプレッドシート・プログラムにインポートできるタブで区切られたテキスト・ファイルを生成します。プレビューには、ファイルが除外されるのか、それとも包含されるのかなどの情報が含まれます。ファイルが除外される場合は、ファイルが除外されるパターンまたは理由がパターンのソースとともにリストされます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec

アーカイブしたいパスとファイル名を指定します。ファイルのグループまたはディレクトリー内のすべてのファイルを選択するには、ワイルドカード文字を使用してください。

-filter

表示する出力を指定します。包含されるオブジェクト、除外されるオブジェクト、またはその両方を表示することができます。

ALL

包含されるオブジェクトおよび除外されるオブジェクトの出力を表示します。これはデフォルトです。

INCLuded

包含されるオブジェクトの出力だけを表示します。

EXCLuded

除外されるオブジェクトの出力だけを表示します。

-FILENAME=

タブ区切りの出力が書き込まれるファイルの名前を指定します。デフォルトは dsmprev.txt です。

-CONsole

出力はコンソールおよびファイルに書き込まれます。

-TRAverse

現行ディレクトリーおよびサブディレクトリーをプレビューします。

Yes

現行ディレクトリーおよびサブディレクトリーをプレビューします。これはデフォルトです。

No

現行ディレクトリーのみをプレビューし、サブディレクトリーはプレビューしません。

重要： **-traverse** を指定した場合、 **exclude.dir** オプションを使用して除外されたディレクトリーはプレビューされません。

Preview Backup

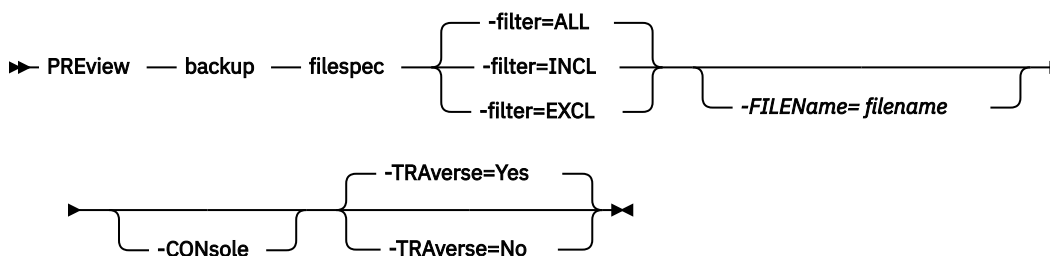
preview backup コマンドは、データをサーバーに送信せずに、バックアップ・コマンドをシミュレートします。

preview backup コマンドは、スプレッドシート・プログラムにインポートできるタブで区切られたテキスト・ファイルを生成します。プレビューには、ファイルが除外されるのか、それとも包含されるのかなどの情報が含まれます。ファイルが除外される場合は、ファイルが除外されるパターンまたは理由がパターンのソースとともにリストされます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec

バックアップしたいパスおよびファイル名を指定します。ファイルのグループまたはディレクトリー内のすべてのファイルを選択するには、ワイルドカード文字を使用してください。

-filter

表示する出力を指定します。包含されるオブジェクト、除外されるオブジェクト、またはその両方を表示することができます。

ALL

包含されるオブジェクトおよび除外されるオブジェクトの出力を表示します。これはデフォルトです。

INCLuded

包含されるオブジェクトの出力だけを表示します。

EXCLuded

除外されるオブジェクトの出力だけを表示します。

-FILENAME=

タブ区切りの出力が書き込まれるファイルの名前を指定します。デフォルトは dsmprev.txt です。

-CONsole

出力はコンソールおよびファイルに書き込まれます。

-TRAverse

現行ディレクトリーおよびサブディレクトリーをプレビューします。

Yes

現行ディレクトリーおよびサブディレクトリーをプレビューします。これはデフォルトです。

No

現行ディレクトリーのみをプレビューし、サブディレクトリーはプレビューしません。

重要 : **-traverse** を指定した場合、**exclude.dir** オプションを使用して除外されたディレクトリーはプレビューされません。

Query Access

query access コマンドは、特定のファイルのバックアップ・バージョンあるいはアーカイブ・コピーへのアクセス権が付与されたユーザーを表示します。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、**set access** コマンド、あるいはバックアップ/アーカイブ・クライアントのグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) の「**ユーティリティー**」>「**ノード・アクセス・リスト**」メニューを使用して定義した許可規則のリストを表示します。

以下の情報が含まれています。

- バックアップ・バージョンのリストあるいはアーカイブ・コピーのリトリブを行うためにユーザーに付与した権限。
- 権限を付与したユーザーのノード名。
- 許可を与えたノードにいるユーザーの ID。
- ユーザーにアクセス権があるファイル。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ Query ACcess ➡

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

ファイルにアクセス可能なユーザーのリストを表示します。

コマンド: `query access`

Query Archive

query archive コマンドは、アーカイブ・ファイルのリストおよび各ファイルについて、ファイル・サイズ、アーカイブ日付、ファイル指定、有効期限、およびアーカイブの説明の情報を表示します。

query archive コマンドで `detail` オプションを使用すると、以下の情報もクライアントに表示されます。

- 最終修正日付
- 最終アクセス日付
- 最終ファイル属性 (inode) 変更日
- 圧縮タイプ
- 暗号化タイプ
- クライアント・サイドのデータ重複排除
- 保持開始
- ファイルが保持状態かどうか
- ACL メタデータ (IBM Spectrum Scale) のサイズ (AIX および Linux クライアントの場合)
- サーバー・ストレージ情報 (メディア・クラス、ボリューム ID、およびリストア順序) (AIX および Linux クライアントの場合)

以下に、`detail` オプションを指定して **query archive** コマンドを発行した際の出力例を示します。

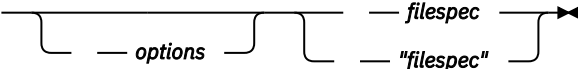
```
Size Archive Date - Time File - Expires on - Description
-----
219 B 08/15/2016 09:32:13 /Volumes/Data/info.txt 08/16/2016
Archive Date: 08/16/2016
RetInit:STARTED Obj
Held:NO
Modified: 03/02/2016 19:43:00 Accessed: 03/03/2016 09:31:23 Inode changed: 03/02/2016 19:43:00
Compression Type: LZ4 Encryption Type: None Client-deduplicated: YES
ACL Size: 0 Media Class: Fixed Volume ID: 0008 Restore Order:
00000000-0000001F-00000000-00600774
```

圧縮タイプについて詳しくは、[363 ページの『Compression』](#)を参照してください。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ Query ARchive 

パラメーター

filespec

照会したいパスとファイル名を指定します。ファイルのグループまたはディレクトリー内のすべてのファイルを指定するには、ワイルドカード文字を使用してください。ワイルドカード文字を使用する場合には、ファイル指定を二重引用符で囲んでください。現行ディレクトリー内のアーカイブ・ファイルをすべて照会するには、アスタリスク (*) を指定します。

表 93. Query Archive コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
<code>dateformat</code> 371 ページの『Dateformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
<code>description</code> 379 ページの『Description』	コマンド・ラインのみ。
<code>detail</code> 380 ページの『Detail』	コマンド・ラインのみ。
<code>dirsonly</code> 385 ページの『Dirsonly』	コマンド・ラインのみ。
<code>filelist</code> 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
<code>filesonly</code> 433 ページの『Filesonly』	コマンド・ラインのみ。
<code>fromdate</code> 436 ページの『Fromdate』	コマンド・ラインのみ。
<code>fromnode</code> 437 ページの『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
<code>fromowner</code> 438 ページの『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
<code>fromtime</code> 439 ページの『Fromtime』	コマンド・ラインのみ。
<code>numberformat</code> 492 ページの『Numberformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
<code>querysummary</code> 512 ページの『Querysummary』	コマンド・ラインのみ。
<code>scrolllines</code> 538 ページの『Scrolllines』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
<code>scrollprompt</code> 539 ページの『Scrollprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
<code>subdir</code> 569 ページの『Subdir』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
<code>timeformat</code> 583 ページの『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
<code>todate</code> 587 ページの『Todate』	コマンド・ラインのみ。

表 93. Query Archive コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
totime 588 ページの『Totime』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

現行作業ディレクトリー中のすべてのアーカイブ・ファイルのリストを表示します。

コマンド: `q archive "*"`

タスク

/devel ディレクトリーおよび そのサブディレクトリーのすべてにある、すべてのアーカイブ・ファイルのリストを表示します。

コマンド: `query archive "/devel/*" -subdir=yes`

タスク

現行ディレクトリー中のすべてのアーカイブ・ファイルのリストを表示します。日付および時刻のフォーマットを変更するには、`dateformat` および `timeformat` オプションを使用してください。

コマンド: `q ar -date=5 -time=1 "*"`

タスク

現行ディレクトリー中のすべてのアーカイブ・ファイルのリストを表示します。`detail` オプションを使用して、各ファイルの 最終修正日付および最終アクセス日付を表示させます。

コマンド: `q ar -detail "*"`

タスク

/home/proj ディレクトリー内で、ファイル名の先頭 4 文字が `proj` で始まっているアーカイブ・ファイルのリストを表示します。

コマンド: `q ar "/home/proj/proj*"`

Query Backup

query backup コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されているか、`backupsetname` オプションが指定された場合はサーバーのバックアップ・セット内部にあるファイルのバックアップ・バージョンのリストを表示します。

このコマンドは、以下のファイル情報を表示します。

- ファイル指定
- ファイル・サイズ
- バックアップ日
- ファイルが活動か非活動か
- ファイルに割り当てられた管理クラス。管理クラス名の最初の 10 文字のみが表示されます。

query backup コマンドに **detail** オプションを使用すると、クライアントは以下の追加情報を表示します。

- 最終修正日付
- 最終アクセス日付
- 最終ファイル属性 (inode) 変更日
- 圧縮タイプ
- 暗号化タイプ

- ・クライアント・サイドのデータ重複排除
- ・ファイルがマイグレーション済みまたは事前マイグレーション済みかどうか。Yes の値は、ファイルがマイグレーション済みまたは事前マイグレーション済みであることを示します。No の値は、ファイルがマイグレーション済みおよび事前マイグレーション済みではないことを示します。
- ・ファイルiノード番号 (AIX および Linux クライアントの場合)
- ・ACL メタデータ (IBM Spectrum Scale) のサイズ (AIX および Linux クライアントの場合)
- ・サーバー・ストレージ情報 (メディア・クラス、ボリューム ID、およびリストア順序) (AIX および Linux クライアントの場合)

以下に、detail オプションを指定して **query backup** コマンドを発行した際の出力例を示します。

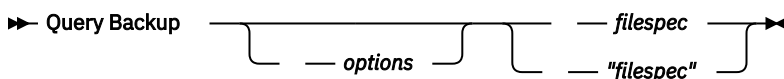
Size	Backup Date	Mgmt Class	A/I File
1,500,000 B	08/15/2016 16:01:25	DEFAULT	A /home/test/mydir/
myfile1.txt	Modified: 08/15/2016 16:00:10 Accessed: 08/16/2016 15:31:23 Inode changed: 08/15/2016 16:00:10		
Compression Type: LZ4 Encryption Type: None Client-deduplicated: YES Migrated: NO Inode#: 22691			
ACL Size: 0 Media Class: Fixed Volume ID: 0008 Restore Order: 00000000-0000001F-00000000-00600774			

圧縮タイプについて詳しくは、[363 ページの『Compression』](#)を参照してください。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec

照会したいパスとファイル名を指定します。ファイルのグループまたはディレクトリー内のすべてのファイルを指定するには、ワイルドカード文字を使用してください。ワイルドカード文字を使用する場合には、ファイル指定を二重引用符で囲んでください。現行ディレクトリー内のファイルのすべてのバックアップ・バージョンに関する情報を表示するには、アスタリスク (*) を指定してください。 - class=nas オプション設定を使用して NAS ファイル・システム・イメージを照会する時にはワイルドカード文字を使用しないでください。

表 94. Query Backup コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
backupsetname 354 ページの『Backupsetname』	コマンド・ラインのみ。
class 358 ページの『Class』	コマンド・ラインのみ。
dateformat 371 ページの『Dateformat』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
detail 380 ページの『Detail』	コマンド・ラインのみ。
dirsonly 385 ページの『Dirsonly』	コマンド・ラインのみ。

表 94. Query Backup コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
filesonly 433 ページの『Filesonly』	コマンド・ラインのみ。
fromdate 436 ページの『Fromdate』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 437 ページの『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 438 ページの『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
fromtime 439 ページの『Fromtime』	コマンド・ラインのみ。
inactive 445 ページの『Inactive』	コマンド・ラインのみ。
nasnodename 487 ページの『Nasnodename』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
numberformat 492 ページの『Numberformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
pitdate 500 ページの『Pitdate』	コマンド・ラインのみ。
pittime 501 ページの『Pittime』	コマンド・ラインのみ。
querysummary 512 ページの『Querysummary』	コマンド・ラインのみ。
scrolllines 538 ページの『Scrolllines』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
scrollprompt 539 ページの『Scrollprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
todate 587 ページの『Todate』	コマンド・ラインのみ。
totime 588 ページの『Totime』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

現行のディレクトリーにあるファイルのすべての活動および非活動のバックアップ・バージョンのリストを表示します。

```
dsmc query backup -inactive "*"
```

タスク

現行ディレクトリー中のすべてのバックアップのリストを表示します。 **detail** オプションを使用して、各ファイルの 最終修正日付および最終アクセス日付を表示させます。

```
dsmc q backup -detail "*"
```

タスク

/home/proj ディレクトリーから バックアップした、ファイル名が proj で始まっているファイルのリストを表示します。

```
dsmc q b "/home/proj/proj*"
```

タスク

/home ファイル・システム内の活動および非活動のバックアップ・ファイル・バージョンのリストを表示します。

```
dsmc q b -ina -su=yes /home/
```

タスク

nas2 NAS ファイル・サーバーからファイル・システム・イメージを照会します。

```
dsmc query backup -nasnodename=nas2 -class=nas
```

関連情報

[240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』](#)

NAS ファイル・システム・イメージの照会

query backup コマンドを使用して、NAS ファイル・サーバーでバックアップされたファイル・システム・イメージについての情報を表示することができます。クライアントは、管理者 ID を要求するプロンプトを出します。

nasnodename オプションがサポートされている場合、これを照会する NAS ファイル・サーバーの識別に使用します。nasnodename オプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。クライアント・システム・オプション・ファイルの値はデフォルトですが、この値は、コマンド・ラインで指定変更することができます。

class オプションは、照会するファイル・スペースのクラスを指定するために使用します。NAS ノードに属するイメージのリストを表示するには、-class=nas オプションを使用してください。

関連資料

[358 ページの『Class』](#)

class オプションは、**delete filespace**、**query backup**、および **query filespace** コマンドを使用する時に、NAS オブジェクトまたはクライアント・オブジェクトのリストを表示するかどうかを指定します。

[487 ページの『Nasnodename』](#)

nasnodename オプションは、NAS ファイル・システムの処理時に NAS ファイル・サーバーのノード名を指定します。クライアントは、管理者 ID を要求するプロンプトを出します。

Query Backupset

query backupset コマンドは、ローカル・ファイル、テープ装置 (該当する場合)、または IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットを照会します。

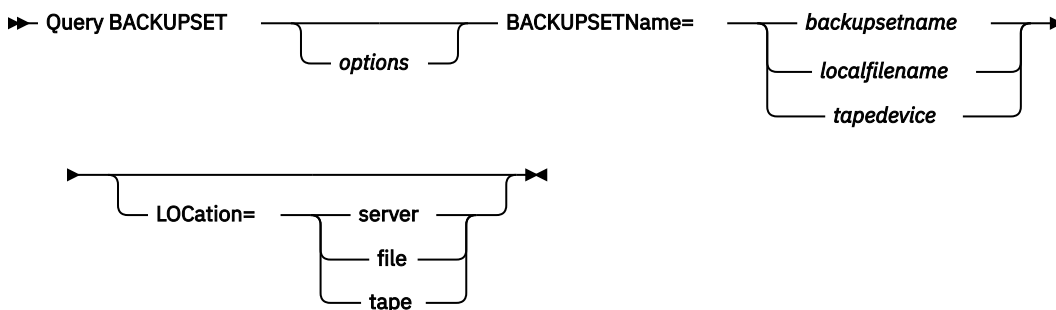
このコマンドにより、バックアップ・セット名、生成日、保持 (IBM Spectrum Protect サーバー上のバックアップ・セットの場合)、およびユーザー指定の記述が表示されます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

テープのサポートは、AIX、Solaris、 および Oracle Solaris の各クライアントでのみ利用できます。

構文



パラメーター

BACKUPSETName=

照会するバックアップ・セットの名前を指定します。ワイルドカードを使用してバックアップ・セット名を指定できます。ワイルドカードを使用した場合や、バックアップ・セット名を指定しなかった場合は、すべてのバックアップ・セットが表示されます。このパラメーターは必須です。

バックアップ・セットが作成されると、サーバーは、このバックアップ・セットの所有者として **root** を割り当てます。サーバー上でバックアップ・セットを照会する場合、**root** 以外のユーザーがバックアップ・セット名を知っており、これを照会で使用した場合でも、これらのユーザーにはバックアップ・セットは表示されません。

backupsetname の値は、バックアップ・セットのロケーションによって異なり、以下の 3 つの選択項目のいずれかに対応しています。

backupsetname

サーバーからバックアップ・セットの名前を指定します。**location** パラメーターが指定されている場合、**-location=server** を設定する必要があります。

localfilename

最初のバックアップ・セット・ボリュームのファイル名を指定します。**-location=file** を設定する必要があります。

tapedevice

バックアップ・セット・ボリュームを含むテープ装置の名前を指定します。IBM が提供するデバイス・ドライバではなく、Windows 固有のデバイス・ドライバを使用する必要があります。**-location=tape** を設定する必要があります。

LOCation=

バックアップ/アーカイブ・クライアントがバックアップ・セットを検索する場所を指定します。**location** パラメーターを指定しない場合、クライアントは IBM Spectrum Protect サーバーでバックアップ・セットを検索します。

server

クライアントがサーバーからバックアップ・セットを検索することを指定します。このロケーションがデフォルトです。

file

クライアントがローカル・ファイルからバックアップ・セットを検索することを指定します。

tape

クライアントがローカル・テープ装置からバックアップ・セットを検索することを指定します。

表 95. Query Backupset コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
description 379 ページの『Description』	コマンド・ラインのみ。
scrolllines 538 ページの『Scrolllines』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
scrollprompt 539 ページの『Scrollprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

IBM Spectrum Protect サーバーからすべてのバックアップ・セットを照会します。

コマンド: `query backupset -backupsetname=*`

タスク

IBM Spectrum Protect サーバーから `monthly_financial_data` と呼ばれるバックアップ・セットを照会します。

コマンド: `query backupset -backupsetname=monthly_financial_data.12345678`

タスク

ファイル `/home/budget/weekly_budget_data.ost` のバックアップ・セットを照会します。

コマンド: `dsmc query backupset -backupsetname="/home/budget/weekly_budget_data.ost" -loc=file`

タスク

`/dev/rmt0` テープ装置からバックアップ・セットを照会します。

コマンド: `dsmc query backupset -backupsetname=/dev/rmt0 -loc=tape`

関連情報

[240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』](#)

backupsetname パラメーターを指定しない Query Backupset

`query backupset` コマンドは、**backupsetname** パラメーターを指定せずに使用することができます。

`query backupset` コマンドの推奨構文では、**backupsetname** パラメーターが必要です。

backupsetname パラメーターの導入前は、バックアップ/アーカイブ・クライアントは別の構文でバックアップ・セットを照会していました。

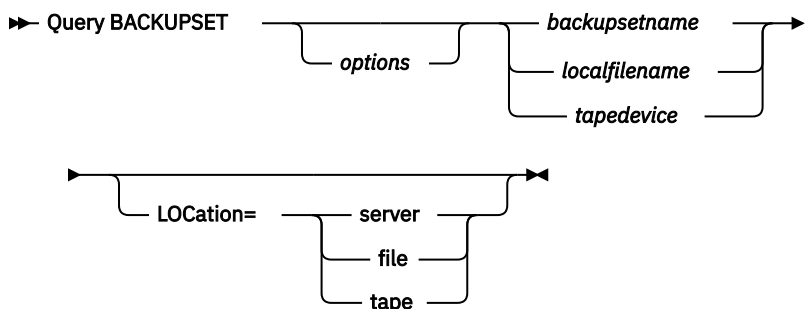
このコマンドには以前のリリースの構文を使用できますが、特定の必要性があり、古い構文を Tivoli Storage Manager バージョン 6.1 の構文で置き換えることができない場合を除いて、以前のリリースの構文は使用しないでください。最良の結果を得るには、**backupsetname** パラメーターを使用します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

テープのサポートは、AIX、Solaris、および Oracle Solaris の各クライアントでのみ利用できます。

構文



パラメーター

backupsetname

IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットの名前を指定します。**location** パラメーターが指定されている場合、**-location=server** を設定する必要があります。

localfilename

最初のバックアップ・セット・ボリュームのファイル名を指定します。**-location=file** を設定する必要があります。

tapedevice

バックアップ・セット・ボリュームを含むテープ装置の名前を指定します。IBM が提供するデバイス・ドライバーではなく、Windows 固有のデバイス・ドライバーを使用する必要があります。
-location=tape を設定する必要があります。

LOCation=

クライアントがバックアップ・セットを検索する場所を指定します。**location** パラメーターを指定しない場合、クライアントは IBM Spectrum Protect サーバーでバックアップ・セットを検索します。

server

クライアントがサーバーからバックアップ・セットを検索することを指定します。これはデフォルトです。

file

クライアントがローカル・ファイルからバックアップ・セットを検索することを指定します。

tape

クライアントがローカル・テープ装置からバックアップ・セットを検索することを指定します。

表 96. Query Backupset コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
description 379 ページの『Description』	コマンド・ラインのみ。
scrolllines 538 ページの『Scrolllines』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
scrollprompt 539 ページの『Scrollprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

IBM Spectrum Protect サーバーからすべてのバックアップ・セットを照会します。

コマンド: query backupset

タスク

IBM Spectrum Protect サーバーから `monthly_financial_data` と呼ばれるバックアップ・セットを照会します。

```
コマンド: query backupset monthly_financial_data.12345678
```

タスク

ファイル `/home/budget/weekly_budget_data.ost` のバックアップ・セットを照会します。

```
コマンド: dsmc query backupset /home/budget/weekly_budget_data.ost -loc=file
```

タスク

`/dev/rmt0` テープ装置からバックアップ・セットを照会します。

```
コマンド: dsmc query backupset /dev/rmt0 -loc=tape
```

関連情報

240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』

Query Filespace

query filespace コマンドは、ノードのファイル・スペースのリストを表示します。ファイル・スペースは、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されるか、`backupsetname` オプションが指定されている場合は、サーバーのバックアップ・セット内部に保管されます。照会したい単一のファイル・スペース名を指定することもできます。

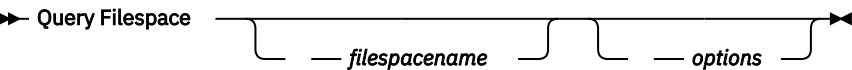
ファイル・スペースは、ユーザーがバックアップまたはアーカイブしたファイルを含むサーバー上の論理スペースです。分離ファイル・スペースは、ファイルをバックアップまたはアーカイブするワークステーションで、各ノードのサーバーに割り当てられます。

分離ファイル・スペースは、ファイルをバックアップまたはアーカイブするワークステーションで、各ファイル・システムのサーバーに割り当てられます。ファイル・スペース名は、ファイル・システム名と同じものです。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespace name

ワイルドカードを含む、任意の文字ストリングを指定します。この引数は、ファイル・スペースのサブセットを指定するために使用します。デフォルトでは、すべてのファイル・スペースが表示されます。

表 97. Query Filespace コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
<code>backupsetname</code> 354 ページの『Backupsetname』	コマンド・ラインのみ。
<code>class</code> 358 ページの『Class』	コマンド・ラインのみ。
<code>dateformat</code> 371 ページの『Dateformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (<code>dsm.opt</code>) またはコマンド・ライン。

表 97. Query Filespace コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
detail 380 ページの『Detail』	コマンド・ラインのみ。
fromnode 437 ページの『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 438 ページの『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
nasnodename 487 ページの『Nasnodename』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
scrolllines 538 ページの『Scrolllines』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
scrollprompt 539 ページの『Scrollprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

ファイル・スペースを表示します。日付および時刻のフォーマットを変更するには、dateformat および timeformat オプションを使用してください。

```
query filesystem -date=5 -time=4
```

/home ファイル・スペースを表示します。

```
query filesystem /home
```

パターン smith を含むファイル・スペース名を表示します。

```
query filesystem "*smith*"
```

nas2 NAS ファイル・サーバーからファイル・スペースを照会します。

```
query filesystem -nasnodename=nas2 -class=nas
```

フェイルオーバー中の複製状況を示す詳細ファイル・スペース情報を表示します。

コマンド:

```
query filesystem -detail
```

出力:

#	Last Incr Date	Type	fsID	Unicode	Replication	File Space Name
1	00/00/0000 00:00:00	HFS	3	Yes	Current	/
	Last Store Date	Server			Local	
	Backup Data :	04/29/2013 16:49:55			04/29/2013 16:49:55	
	Archive Data :	No Date Available			No Date Available	

関連概念

[240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』](#)

IBM Spectrum Protect 管理者は、バックアップ・セット (サーバー上にあるファイルのコレクション) を、クライアント装置と互換性のあるフォーマットを使用して、装置上に作成されたポータブル・メディア上に生成することができます。

97 ページの『自動クライアント・フェイルオーバーの概要』

IBM Spectrum Protect サーバーで障害が発生すると、バックアップ/アーカイブ・クライアントはデータ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。

関連タスク

103 ページの『複製されたクライアント・データの状況の判別』

2 次サーバーからクライアント・データをリストアまたはリトリブする前に、クライアントの最新のバックアップが 2 次サーバーに複製されているかどうかを確認することができます。

関連資料

487 ページの『Nasnodename』

nasnodename オプションは、NAS ファイル・システムの処理時に NAS ファイル・サーバーのノード名を指定します。クライアントは、管理者 ID を要求するプロンプトを出します。

358 ページの『Class』

class オプションは、**delete filespace**、**query backup**、および **query filespace** コマンドを使用する時に、NAS オブジェクトまたはクライアント・オブジェクトのリストを表示するかどうかを指定します。

491 ページの『Nrtablepath』

nrtablepath オプションは、クライアント上のノード複製テーブルのロケーションを指定します。バックアップ/アーカイブ・クライアントはこのテーブルを使用して、IBM Spectrum Protect サーバーへの各バックアップ操作またはアーカイブ操作に関する情報を保管します。

NAS ファイル・スペースの照会

nasnodename オプションは、照会する NAS ファイル・サーバーのノード名を識別するのに使用します。非管理 ID で対話式コマンド・ライン・セッションを使用する時には、クライアントは管理者 ID の入力を求めるプロンプトを出します。

nasnodename オプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。クライアント・システム・オプション・ファイルの値はデフォルトですが、この値は、コマンド・ラインで指定変更することができます。nasnodename オプションがクライアント・システム・オプション・ファイルで指定されていない場合には、NAS ファイル・システムを処理する時にコマンド・ラインでこれを指定しなければなりません。

class オプションは、照会するオブジェクトのクラスを指定するために使用します。NAS ノードに属するファイル・スペースのリストを表示するには、**-class=nas** オプションを使用してください。

Query Group

query group コマンドを使用して、グループ・バックアップとそのメンバーについての情報を表示します。

注:

1. **showmembers** オプションを使用して、照会したい個々のグループ・メンバーを表示および選択します。**showmembers** オプションは、**inactive** オプションが指定されていると無効です。現在活動状態ではないグループのメンバーを表示する場合は、**pitdate** および **pittime** オプションを使用して、照会したいメンバーのバックアップ日付と時間を指定します。
2. **query filespace** コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されているノードの仮想ファイル・スペース名を表示するために使用します。

3. フルグループ・バックアップと差分グループ・バックアップを実行する場合、`-inactive` オプションを使用したこのグループの照会では、同じ名前の 2 つの活動状態のバックアップが表示されます。1 つはタイプ FULL でもう 1 つはタイプ DIFF です。

```
Protect> q group {/fs}/v1 -inactive

サイズ   バックアップ日付   管理クラス  A/I   グループ
-----
 978 B 06/02/2007 11:57:04  DEFAULT    A   FULL /fs/v1
  32 B 06/05/2007 13:52:04  DEFAULT    A   DIFF /fs/v1
```

`-inactive` オプションなしでグループ・バックアップを照会する場合は、最後のグループ・バックアップ (タイプ FULL またはタイプ DIFF のいずれか) のみが表示されます。

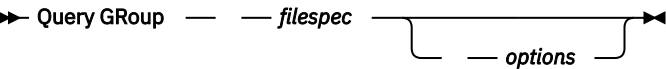
```
Protect> q group {/fs}/v1

サイズ   バックアップ日付   管理クラス  A/I   グループ
-----
  32 B 06/05/2007 13:52:04  DEFAULT    A   DIFF /fs/v1
```

サポートされるクライアント

このコマンドは、Mac OS X を除いて、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec
サーバー上で照会する仮想ファイル・スペース名とグループ名を指定します。

表 98. Query Group コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
fromnode 437 ページの『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 438 ページの『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
inactive 445 ページの『Inactive』	コマンド・ラインのみ。
pitdate 500 ページの『Pitdate』	コマンド・ラインのみ。
pittime 501 ページの『Pittime』	コマンド・ラインのみ。
showmembers 544 ページの『Showmembers』 (Mac OS X には適用されません。)	コマンド・ラインのみ。

例

タスク
`/virtfs` ファイル・スペース内のすべてのグループを表示します。

コマンド:

```
query group /virtfs/*
```

タスク

/virtfs/group1 ファイル・スペースの活動バージョンおよび非活動バージョンを表示します。

コマンド:

```
query group /virtfs/group1 -inactive
```

タスク

/virtfs/group1 ファイル・スペースを表示します。showmembers オプションを使用するとグループ・メンバーのリストが表示され、そのリストから照会する 1 つ以上のグループ・メンバーを選択できます。

コマンド:

```
query group /virtfs/group1 -showmembers
```

関連情報

710 ページの『Query Filespace』

Query Image

query image コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されているか、backupsetname オプションが指定された場合は IBM Spectrum Protect サーバーのバックアップ・セット内部にあるファイル・システム・イメージに関する情報を表示します。

ファイル・システム・イメージに関する以下の情報が表示されます。

- イメージ・サイズ - バックアップされたボリューム・サイズ。
- 保管サイズ - サーバー上に保管されている実際のイメージ・サイズ。IBM Spectrum Protect サーバー上の格納イメージはボリューム容量と同じサイズです。オンライン・スナップショット・ベースのイメージ・バックアップの場合、格納イメージはキャッシュ・ファイルのサイズに基づくファイル・システムより大きくなることがあります。サーバー上の格納イメージはボリューム容量と同じサイズです。
- ファイル・システム・タイプ
- バックアップ日時
- イメージ・バックアップに割り当てられた管理クラス
- イメージ・バックアップが活動か非活動コピーか
- イメージ名

注: **query image** コマンドを使用するには、IBM Spectrum Protect API がインストールされていなければなりません。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。

構文

► Query Image — options — logicalvolumename — filespace name

パラメーター

logicalvolumename

照会したい論理ボリュームの名前。イメージの正確な名前を指定しなければなりません。ワイルドカードを使用することはできません。デフォルトは、(1 つ以上のオプションによって制限されている場合は除き) すべての活動イメージです。

filespace

照会したいファイル・システム名を指定します。

logicalvolumename および *filespace* を省略すると、すべてのイメージが表示されることになります。

表 99. Query Image コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
backupsetname 354 ページ の『Backupsetname』	コマンド・ラインのみ。
dateformat 371 ページ の『Dateformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
fromnode 437 ページ の『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 438 ページ の『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
inactive 445 ページ の『Inactive』	コマンド・ラインのみ。
numberformat 492 ページ の『Numberformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
pitdate 500 ページ の『Pitdate』	コマンド・ラインのみ。
pittime 501 ページ の『Pittime』	コマンド・ラインのみ。
scrolllines 538 ページ の『Scrolllines』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
scrollprompt 539 ページ の『Scrollprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
timeformat 583 ページ の『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

すべてのバックアップ・イメージを表示します。

コマンド: `q image`

タスク

ノード avalon で kutras が所有するすべてのバックアップ・イメージを表示します。

コマンド: `query image -fromnode=avalon -fromowner=kutras`

タスク

/usr イメージの活動および非活動バージョンを表示します。

コマンド: `q i /usr -inactive`

タスク

バックアップ・セット weekly_backup_data.32145678 に入っているすべてのイメージを表示します。

コマンド: `query image -backupsetname=weekly_backup_data.32145678`

関連情報

[240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』](#)

Query Inclexcl

query inclexcl コマンドは、include/exclude ステートメントのリストを、バックアップおよびアーカイブ操作中に処理される順序で表示します。このリストには、オプションのタイプ、オプションの有効範囲 (archive、ALL など)、およびソース・ファイルの名前が表示されます。

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ファイル・システムのバックアップ操作およびリストア操作から一部のファイルを除外します。こうしたファイルのリストを表示するには、**query inclexcl** コマンドを使用できます。コマンドの出力で、これらのファイルにはパスの隣に Operating System があります。

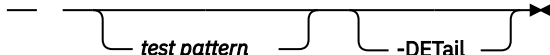
include-exclude リストで使用したいパターンの妥当性を、それらを実際にオプション・ファイルに挿入する前にテストすることができます。 *test pattern* の説明を参照してください。

include/exclude ステートメントと関連付けられている管理クラスを表示するには、**detail** オプションを使用します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ Query INClexcl — 

パラメーター

test pattern

include-exclude リストに使用したいパターンの妥当性テストに使用します。このコマンドでテスト・パターンを使用すると、以下のことが起こります。

- 内部 include-exclude リストが表示されない
- パターンは、すべての通常エラー検査を含む include/exclude ステートメントからのものと同様に処理される
- include-exclude リストで表示されるようにパターンが表示される

テスト・パターンにエラーがない場合には、コンパイルされたパターン結果はテスト・パターンと同じものとなります。

-DEtail

include/exclude ステートメントに関連付けられている管理クラスを表示します。

例

タスク

重複排除からファイルを除外するには、クライアント・オプション・ファイル内の該当のファイルを除外します。

```
Exclude Dedup *¥...¥file2
```

タスク

include/exclude ステートメントの基本リストを表示します。 コマンド:

```
query inclexcl
```

タスク

include/exclude ステートメントのリストを表示します。それぞれのステートメントと関連付けられている管理クラスを表示します。

```
query inclexcl -detail
```

タスク

以下のパターンの妥当性をテストします。 /.../?x?/*.log

```
query inclexcl /.../?x?/*.log
```

Query Mgmtclass

query mgmtclass コマンドは、活動ポリシー・セット内の 使用可能な管理クラスについての情報を表示します。

管理者は、ファイルがバックアップ・サービスまたはアーカイブ・サービスに対する適格性を持つかどうかを制御する属性が含まれる管理クラスを定義します。 また、管理クラスはバックアップおよびアーカイブがサーバーで管理される方法を判別します。

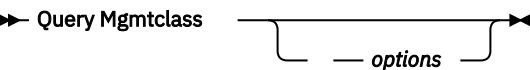
アクティブ・ポリシー・セットには、デフォルト管理クラスが含まれます。アクティブ・ポリシー・セットには、任意の数の追加管理クラスを含めることができます。 クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) にある **include** オプションを使用して、特定の管理クラスをファイルに割り当てることができます。 管理クラスをファイルに割り当てない場合、デフォルトの管理クラスが使用されます。

ファイルをアーカイブする時に、**archmc** オプションを使用することによって、割り当てられた管理クラスを変更することができます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

表 100. Query Mgmtclass コマンド: 関連オプション	
オプション	使用先
detail 380 ページの『Detail』	コマンド・ラインのみ。
fromnode 437 ページの『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

デフォルト管理クラスおよび使用可能管理クラスを表示します。

コマンド: query mgmtclass

Query Node

query node コマンドは、管理ユーザー ID が操作を実行する権限をもつ、すべてのノードを表示します。IBM Spectrum Protect 管理者 ID を求めるプロンプトが表示されます。

管理ユーザー ID は、コマンド・ラインまたは Web から使用するクライアント・ワークステーション・ノードに対して、少なくともクライアント所有者権限を持っていることが理想です。

type オプションは、フィルターに掛けるノードのタイプを指定するのに使用します。有効な値は以下のとおりです。

- nas
- client
- server
- any

デフォルトは **any** です。

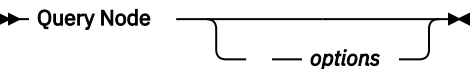
注：IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware ライセンス・ファイルが vStorage バックアップ・サーバーにインストールされている場合、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されているプラットフォーム・ストリングは、そのマシン上で使用されているすべてのノード名に対して「TDP VMware」に設定されています。プラットフォーム・ストリングは、PVU 計算のコンテキストで使用することができます。標準のバックアップ/アーカイブ・クライアント機能 (例えば、ファイル・レベル・バックアップやイメージ・バックアップ) を使用したマシンのバックアップにノード名が使用されている場合、このプラットフォーム・ストリングは、PVU 計算のために使用する場合は「クライアント」として解釈されます。

プロセッサ・バリュー・ユニットについて詳しくは、IBM Spectrum Protect サーバー資料の「プロセッサ・バリュー・ユニットの見積もり」を参照してください。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

表 101. Query Node コマンド: 関連オプション	
オプション	使用先
type 589 ページの『Type』	コマンド・ラインのみ。
scrolllines 538 ページの『Scrolllines』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
scrollprompt 539 ページの『Scrollprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

すべての NAS ノードを表示します。

コマンド: `query node -type=nas`

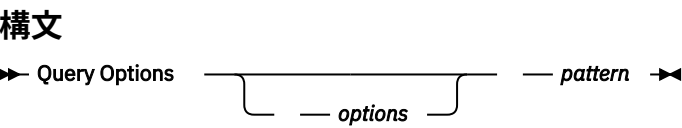
タスク
バックアップ/アーカイブ・クライアントであるすべてのクライアント・ノードを表示します。
コマンド: `query node -type=client`

関連情報
[589 ページの『Type』](#)

Query Options

query options コマンドは、コマンド・ライン・クライアントに関連するオプションとその現在の設定をすべてまたは部分的に表示する場合に使用します。

サポートされるクライアント
このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。



パラメーター
pattern
任意指定の文字ストリングであり、ワイルドカードを組み込むことができます。この引数を使用して、複数のオプションから成るサブセットを指定します。デフォルトは、すべてのオプションを表示します。

表 102. Query Options コマンド: 関連オプション	
オプション	使用先
<code>scrolllines</code> 538 ページの『Scrolllines』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
<code>scrollprompt</code> 539 ページの『Scrollprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例
タスク
すべてのオプションとその値を表示します。

```
query options
```

タスク
`comm` で始まるオプションのみを表示します。

```
query options comm*
```

タスク
replace オプションの値を表示します。

```
query options replace
```

タスク
すべてのオプションとその値を表示するには、このコマンドを発行します。フェイルオーバー 状況情報が表示されます。

```
query options
```

出力:

```
MYPRIMARYSERVERNAME: SERVER1
MYREPLICATIONSERVER: TARGET
  REPLSERVERNAME: TARGET
    Address: 192.0.2.9
    Port: 1501
    SSLPort: 1502
    GUID: 39.5a.da.d1.ae.92.11.e2.82.d3.00.0c.29.2f.07.d3
    Used: yes
```

関連概念

97 ページの『自動クライアント・フェイルオーバーの構成と用途』

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーが使用できない場合、データ・リカバリーのために自動的に 2 次サーバーにフェイルオーバーすることができます。クライアントは、自動フェイルオーバーするように構成することも、フェイルオーバーが抑制されるように設定することもできます。複製されたデータをリストアまたはリトリブする前に、2 次サーバーでのデータの複製状況を判別することもできます。

関連タスク

103 ページの『複製されたクライアント・データの状況の判別』

2 次サーバーからクライアント・データをリストアまたはリトリブする前に、クライアントの最新のバックアップが 2 次サーバーに複製されているかどうかを確認することができます。

Query Restore

query restore コマンドは、サーバー・データベースに入っている再始動可能リストア・セッションのリストを表示します。このリストには、owner、replace、subdir、preservepath、source、および destination のフィールドがあります。

ネットワーク障害、クライアント障害、サーバー障害、または同様の問題が原因でワイルドカード・リストア・コマンドが失敗した場合は、再始動可能リストア・セッションが作成されます。このような障害が発生した場合は、サーバーのファイル・スペースはロックされ、ファイルをサーバーの順次ボリュームから移動できなくなります。ファイル・スペースをアンロックするには、リストアを再始動して完了させる (**query restore** コマンド) か、リストアをキャンセルします (**cancel restore** コマンド)。**query restore** は、再開可能なりストア・セッションがあるかどうか、および影響を受けるファイル・スペースを判別するために使用します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

►► Query Restore ◄◄

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

サーバー・データベース内の再始動可能リストア・セッションを表示します。

コマンド: **query restore**

Query Schedule

query schedule コマンドは、ノードに対してスケジュールされたイベントを表示します。管理者は、自動バックアップと自動アーカイブを実行するスケジュールをセットアップすることができます。作業を計画するには、このコマンドを使用して、次にスケジュールされたイベントを行う時点を判別してください。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

►► Query SCHEDULE ◄◄

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

スケジュール済みイベントを表示します。

コマンド: `query schedule`

Query Session

query session コマンドは、セッションに関する情報 (現行ノード名、セッションが確立された時刻、サーバー情報、およびサーバー接続情報を含む) を表示します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

►► Query SESSION ◄◄

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

セッション情報を表示します。

コマンド: `query session`

以下に示すのは **query session** 表示の例です。

```
Server Name.....: HALLEY_SERVER1
Server Type.....: Windows
Archive Retain Protect...: "No"
Server Version.....: Ver. 6, Rel. 2, Lev. 0.0
Last Access Date.....: 09/03/2009 09:08:13
Delete Backup Files.....: "No"
Delete Archive Files.....: "Yes"
Deduplication.....: "Server Only"
```

```
Node Name.....: HALLEY
User Name.....:
```

クライアント・サイド重複排除には以下の値があります。

- None
 - Displayed when connected to a pre V6.1 IBM Spectrum Protect server
- Server Only
- Client Or Server

タスク

以下に示すのは、LAN フリーが有効な **query session** 表示の例です。

```
IBM Spectrum Protect Server Connection Information

Server Name.....: TEMPLAR
Server Type.....: AIX
Archive Retain Protect...: "No"
Server Version.....: Ver. 6, Rel. 1, Lev. 4.0
Last Access Date.....: 08/12/10   22:10:15
Delete Backup Files.....: "No"
Delete Archive Files.....: "Yes"

Node Name.....: LAN2
User Name.....: root

Storage Agent Name.....: TEMPLAR_STA
Storage Agent Type.....: AIX
Storage Agent Version...: Ver. 6, Rel. 1, Lev. 3.3
```

Query Systeminfo

query systeminfo コマンドを使用して情報を収集し、この情報をファイルまたはコンソールに出力します。

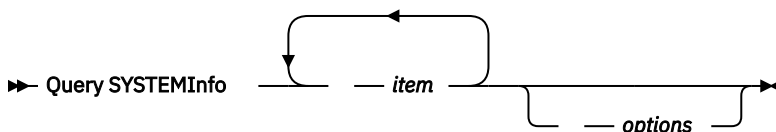
このコマンドは、主として IBM サポートが問題を診断する際の手助けとなるように用意されています。ただし、この情報で扱われている概念に精通しているユーザーにも役立つ場合があります。

console オプションを使用する場合は、画面の高さまたは幅に合わせるための出力のフォーマット設定は特に行われません。したがって、長さで行折り返しが原因でコンソール出力が読みにくくなる場合があります。コンソール出力が読みにくい場合は、**filename** オプションを **query systeminfo** コマンドで使います。この組み合わせを指定すると、出力がファイルに書き込まれます。そのファイルを IBM サポートに送信することができます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

item

情報を収集し、**filename** オプションで指定されたファイル名またはコンソールにその情報を出力するために、情報源として1つ以上の項目を指定します。デフォルトでは、すべての項目を収集します。

以下の1つ以上の項目について情報を収集できます。

- DSMOPTFILE - dsm.opt ファイルの内容。
- DSMSYSFILE - dsm.sys ファイルの内容。
- ENV - 環境変数。
- ERRORLOG - クライアント・エラー・ログ・ファイル。
- FILE - 指定されるファイル名の属性。
- INCLEXCL - バックアップおよびアーカイブ操作の実行中に処理される順序で include-exclude リストをコンパイルします。
- OPTIONS - コンパイルされたオプション。
- OSINFO - クライアント・オペレーティング・システムの名前およびバージョン (UNIX 用の ULIMIT 情報を含む) の名前およびバージョン。
- POLICY - ポリシー・セット・ダンプ。
- SCHEDLOG - スケジュール・ログ (通常は、dsmsched.log) の内容。
- CLUSTER - AIX クラスター情報。
- ENCRYPT - 使用可能な暗号化方式。

注：

1. filename オプションを使用して、指定された項目から収集された情報を格納するファイル名を指定します。ファイル名を指定しない場合、デフォルトの設定では、/Library/Application Support/tivoli/tsm/client/ba/bin/dsminfo.txt ファイル (Mac OS X の場合) または dsminfo.txt ファイル (他の UNIX および Linux の場合) に情報が保管されます。
2. コンソールに情報を出力する場合は、console オプションを使用します。

表 103. Query Systeminfo コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
console 365 ページの『Console』	コマンド・ラインのみ。
filename 432 ページの『Filename』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

dsm.opt ファイルおよび IBM Spectrum Protect エラー・ログ・ファイルの内容を収集し、tsminfo.txt ファイルに格納します。

コマンド: `query systeminfo dsmdptfile errorlog -filename=tsminfo.txt`

関連情報

[432 ページの『Filename』](#)

[365 ページの『Console』](#)

Query VM

query VM コマンドは、正常に完了した仮想マシン (VM) のバックアップをリストし、検査するために使用します。

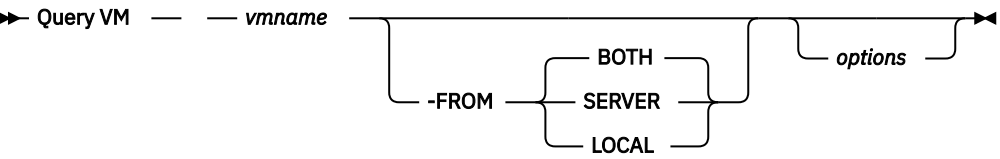
VMware 仮想マシンに対する Query VM

query vm コマンドを使用して、バックアップされた VMware 仮想マシンを判別します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている Linux クライアントに有効です。

構文



パラメーター

- vmname**
照会したい仮想マシンのホスト名を指定します。仮想マシン名を省略した場合、コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー上にあるすべての VM バックアップを表示します。
- FROM**
照会するバックアップ・ロケーションを指定します。次のいずれかの値を指定することができます。
- SERVER**
照会は、IBM Spectrum Protect サーバーにあるバックアップに限定されます。
 - LOCAL**
照会は、ハードウェア・ストレージ上にある永続スナップショットに制限されます。
 - BOTH**
照会は、IBM Spectrum Protect サーバーにあるバックアップおよびハードウェア・ストレージ上にあるスナップショットの両方の情報をリストします。この値がデフォルトです。

表 104. Query VM コマンド: VMware 仮想マシン照会の関連オプション	
オプション	使用先
detail 380 ページの『Detail』 vmbackuptype=fullvm の場合に有効	コマンド・ライン。
inactive 445 ページの『Inactive』 vmbackuptype=fullvm の場合に有効	コマンド・ライン。
pitdate 500 ページの『Pitdate』 vmbackuptype=fullvm の場合に有効	コマンド・ライン。
pittime 501 ページの『Pittime』 vmbackuptype=fullvm の場合に有効	コマンド・ライン。
vmbackuptype 601 ページの『Vmbackuptype』	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmchost 602 ページの『Vmchost』	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmcpw 602 ページの『Vmcpw』	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmcuser 604 ページの『Vmcuser』	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。

Query VM の例 (VMware)

以下は **query VM** コマンドを使用した例と、**-detail** オプションを使用した例です。

フル VM

```
q vm devesx04-24 -ina
Query Virtual Machine for Full VM backup
```

#	バックアップ日付	管理クラス	サイズ	タイプ	A/I	位置	仮想マシン
1	12/07/2016 14:45:24	DDMGMT	47.85 GB	IFFULL	I	SERVER	devesx04-24
2	12/14/2016 17:38:05	DDMGMT	47.85 GB	IFINCR	A	SERVER	devesx04-24
3	01/23/2017 14:07:44	DDMGMT	47.85 GB	SNAPSHOT	I	LOCAL	devesx04-24
4	02/01/2017 08:59:52	DDMGMT	47.85 GB	SNAPSHOT	A	LOCAL	devesx04-24

ANS1900I 戻りコード 0。

フル VM と -detail オプション

```
q vm devesx04-24 -ina -detail
Query Virtual Machine for Full VM backup
#   バックアップ日付   管理クラス   サイズ   タイプ   A/I   位置   仮想マシン
-----
1   12/07/2016 14:45:24   DDMGMT           47.85 GB   IFFULL   I   SERVER
devesx04-24
    The size of this incremental backup: n/a
    The number of incremental backups since last full: 0
    The amount of extra data: 0
    The IBM Spectrum Protect objects fragmentation: 0
    Backup is represented by: 79 TSM objects
    Application protection type: VMware
    Snapshot type: VMware Tools
    Disk[1]Label:   Hard Disk 1
    Disk[1]Name:    [TSMXIV11:vVOL_JOANNE]
rfc4122.750c6a3a-9c65-4a1f-9ed7-1b531aa204
af/devesx04-24-000003.vmdk
    Disk[1]Status: Protected
    Disk[2]Label:   Hard Disk 2
    Disk[2]Name:    [TSMXIV11:vVOL_JOANNE]
rfc4122.750c6a3a-9c65-4a1f-9ed7-1b531aa204
af/devesx04-24_1-000003.vmdk
    Disk[2]Status: Protected
    Disk[3]Label:   Hard Disk 3
    Disk[3]Name:    [TSMXIV11:vVOL_JOANNE]
rfc4122.750c6a3a-9c65-4a1f-9ed7-1b531aa204
af/devesx04-24_2-000003.vmdk
    Disk[3]Status: Protected
2   12/14/2016 17:38:05   DDMGMT           47.85 GB   IFINCR   A   SERVER
devesx04-24
    The size of this incremental backup: 186.43 MB
    The number of incremental backups since last full: 1
    The amount of extra data: 0
    The IBM Spectrum Protect objects fragmentation: 2
    Backup is represented by: 119 TSM objects
    Application protection type: VMware
    Snapshot type: VMware Tools
    Disk[1]Label:   Hard Disk 1
    Disk[1]Name:    [TSMXIV11:vVOL_JOANNE]
rfc4122.750c6a3a-9c65-4a1f-9ed7-1b531aa204
af/devesx04-24-000006.vmdk
    Disk[1]Status: Protected
    Disk[2]Label:   Hard Disk 2
    Disk[2]Name:    [TSMXIV11:vVOL_JOANNE]
rfc4122.750c6a3a-9c65-4a1f-9ed7-1b531aa204
af/devesx04-24_1-000006.vmdk
    Disk[2]Status: Protected
    Disk[3]Label:   Hard Disk 3
    Disk[3]Name:    [TSMXIV11:vVOL_JOANNE]
rfc4122.750c6a3a-9c65-4a1f-9ed7-1b531aa204
af/devesx04-24_2-000006.vmdk
    Disk[3]Status: Protected
3   01/23/2017 14:07:44   DDMGMT           47.85 GB   SNAPSHOT I   LOCAL
devesx04-24
    The size of this incremental backup: n/a
    The number of incremental backups since last full: 0
    The amount of extra data: 0
    The IBM Spectrum Protect objects fragmentation: 0
    Backup is represented by: 0 TSM objects
    Application protection type: VMware
    Snapshot type: VMware Tools
```

```

4 02/01/2017 08:59:52 DDMGMT 47.85 GB SNAPSHOT A LOCAL
devesx04-24
The size of this incremental backup: n/a
The number of incremental backups since last full: 0
The amount of extra data: 0
The IBM Spectrum Protect objects fragmentation: 0
Backup is represented by: 0 TSM objects
Application protection type: VMware
Snapshot type: VMware Tools
-----
above. All averages are calculated only for incremental forever backups displayed
The average size of incremental backup: 186.43 MB
The average number of incremental backups since last full: 1
The average overhead of extra data: 0
The average objects fragmentation: 0
The average number of objects per backup: 49
ANS1900I 戻りコード 0。

```

-vmbacktype=fullvm を使用してバックアップされたすべての VMware 仮想マシンを照会します。

```
q vm * -vmbackuptype=fullvm
```

関連タスク

221 ページの『VMware 仮想マシンのフルバックアップのための環境の準備』

VMware 仮想マシン全体のバックアップのための VMware 環境を準備するには、以下の手順を実行します。
vStorage バックアップ・サーバーは、Windows または Linux クライアントのいずれかを実行できます。

Restart Restore

restart restore コマンドは、サーバー・データベースにある再始動可能リストア・セッションのリストを表示します。

一度に再始動できる再始動可能リストア・セッションは 1 つだけです。追加のリストアを再始動するには、**restart restore** コマンドを再実行します。

再始動されたリストアは、失敗したリストアで使ったのと同じオプションを使用します。再始動されたリストアは、再始動される前のリストアが失敗した個所から続けられます。

再始動可能リストア・セッションを取り消すには、**cancel restore** コマンドを使用してください。以下のような場合は、**restart restore** コマンドを使用します。

- 再始動可能リストア・セッションがサーバーのファイル・スペースをロックしたため、ファイルをサーバーの順次ボリュームから移動できない場合。
- 再始動可能リストアによって影響を受けたファイルをバックアップできない場合。

失敗したセッションからのオプションは、再始動されたセッションで新たに指定されたオプションまたは変更されたオプションを無効にします。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

➡ REStArt Restore ➡

パラメーター

このコマンドにはパラメーターはありません。

例

タスク

リストアを再始動します。

コマンド: `restart restore`

Restore

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

ファイルをリストアするには、ディレクトリーまたは選択したファイルを指定するか、あるいはリストからファイルを選択します。ファイルをバックアップ元のディレクトリーまたは別のディレクトリーに戻します。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ファイルのリストア時のデフォルトとして、**subtree** 値とともに **preservepath** オプションを使用します。

注:

1. UNIX および Linux システムでは、シンボリック・リンクの作成時に、その修正時刻が現在のシステム時刻に設定され、変更することはできません。シンボリック・リンクのリストア時には、その修正日付と時刻は、リンクがバックアップされた日付と時刻でなく、リストアの日付と時刻に設定されます。結果として、その修正時刻は最後のバックアップ以後に変更されているので、クライアントは次の増分バックアップ時にシンボリック・リンクをバックアップします。

特定のパスおよびファイルのリストア時に **subdir** オプションを **yes** に設定した場合には、クライアントは、そのパスの下にあるすべてのサブディレクトリー、および任意のサブディレクトリーに存在する指定されたファイルのインスタンスを再帰的にリストアします。

ディレクトリーまたはディレクトリー・ツリーの全体をリストアし、**restore** コマンドで **inactive**、**latest**、**pick**、**todate**、および **fromdate** オプションが指定されていないと、クライアントはどのオブジェクトがリストアされるかを追跡します。なんらかの理由でリストア・プロセスが中断された時は、**restart restore** コマンドを入力して、中断ポイントからリストアを再始動させることができます。複数の再始動可能リストア・セッションを設定できます。リストアは、ファイル指定が完全にワイルドカード指定されている場合にのみ再始動可能です。再始動可能なリストアの場合、例えば次のように入力します。

```
dsmc rest /home/* -sub=yes
```

再始動可能でないリストアは、次のように入力します。

```
dsmc rest "/Users/user1/file?.c" -sub=yes
```

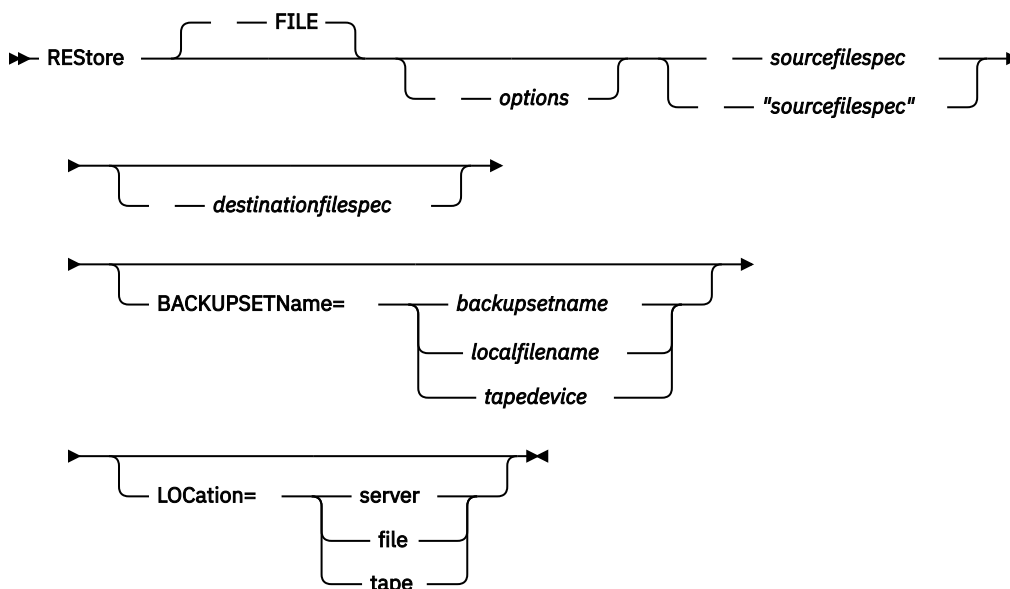
サーバー・データベースにある再始動可能リストア・セッションのリストを表示するには、**query restore** コマンドを使用します。再始動可能リストアが **restart restore** コマンドを使用して完了するか、あるいは **cancel restore** コマンドを使用して取り消される場合を除き、ファイル・システムのバックアップはそれ以上実行できません。

```
dsmc rest "/Users/user1/file?.c" -sub=yes
```

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

file

このパラメーターは、ソース・ファイル指定が明示的ファイル名であると指定します。このパラメーターは、現行パスからファイル名をリストアする時、相対または絶対パスを指定しない時、およびファイル名が予約された **restore** コマンド・キーワード (**restore backupset** など) と矛盾する時に必要です。

sourcefilespec

リストアしたいストレージのパスおよびファイル名を指定します。ファイルのグループまたはディレクトリー内のすべてのファイルを指定するには、ワイルドカード文字を使用してください。

{filespace name}

サーバー上の、リストアしたいファイルが入っているファイル・スペースを (中括弧で囲んで) 指定します。これは、ファイルのバックアップ元のワークステーション・ドライブ上の名前です。

ドライブ・ラベル名が変更された場合、または異なるドライブ・ラベルを持つ別のノードからバックアップされたファイルをリストアする場合は、ファイル・スペース名を使用してください。

destinationfilespec

リストア・ファイルを入りたいパスおよびファイル名を指定します。宛先の指定がないと、クライアントはファイルをオリジナル・ソース・パスにリストアします。

- *sourcefilespec* 名が単一ファイルの場合には、*destinationfilespec* はファイルかディレクトリーとすることができます。単一ファイルをリストアしようとしている場合には、リストア済みのファイルに新規名を付けたいならば、オプションで、指定をファイル名で終了できます。
- *sourcefilespec* にワイルドカードが使用されているか、あるいは *subdir=yes* が指定されている場合には、*destinationfilespec* はディレクトリーであり、ディレクトリー区切り文字 (¥) で終了していません。

注: 宛先パスまたはその一部が存在しない場合には、クライアントによって作成されます。

注: 宛先の指定がない場合は、クライアントは元のファイル・システムに到達可能かどうかを調べます。元のファイル・システムに到達できない場合は、クライアントはファイルをリストアしません。この場合、異なる宛先を指定して、コマンドを再試行できます。

BACKUPSETName=

バックアップ・セットの名前を指定します。このパラメーターはオプションです。 **restore** コマンドで **backupsetname** パラメーターを指定する場合、**pick** オプションを使用できません。

backupsetname の値は、バックアップ・セットのロケーションによって異なり、以下のオプションのいずれかに対応しています。

backupsetname

IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットの名前を指定します。**location** パラメーターが指定されている場合、**-location=server** を設定する必要があります。バックアップ・セットが IBM Spectrum Protect サーバー・ストレージにある場合、バックアップ・セットに TOC が必要です。

localfilename

最初のバックアップ・セット・ボリュームのファイル名を指定します。**-location=file** を設定する必要があります。

tapedevice

バックアップ・セット・ボリュームを含むテープ装置の名前を指定します。IBM が提供するデバイス・ドライバではなく、Windows が提供するデバイス・ドライバを使用する必要があります。**-location=tape** を設定する必要があります。

LOCation=

クライアントがバックアップ・セットを検索する場所を指定します。**location** パラメーターを指定しない場合、クライアントは IBM Spectrum Protect サーバーでバックアップ・セットを検索します。

server

クライアントがサーバーからバックアップ・セットを検索することを指定します。これはデフォルトのロケーションです。

file

クライアントがローカル・ファイルからバックアップ・セットを検索することを指定します。

tape

クライアントがローカル・テープ装置からバックアップ・セットを検索することを指定します。

表 105. *Restore* コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
dateformat 371 ページの『Dateformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
dirsonly 385 ページの『Dirsonly』	コマンド・ラインのみ。
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
filesonly 433 ページの『Filesonly』	コマンド・ラインのみ。
followsymbolic 434 ページの『Followsymbolic』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
fromdate 436 ページの『Fromdate』	コマンド・ラインのみ。
fromnode 437 ページの『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 438 ページの『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
fromtime 439 ページの『Fromtime』	コマンド・ラインのみ。
ifnewer 443 ページの『Ifnewer』	コマンド・ラインのみ。

表 105. *Restore* コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
inactive 445 ページの『Inactive』	コマンド・ラインのみ。
latest 474 ページの『Latest』	コマンド・ラインのみ。
numberformat 492 ページの『Numberformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
pick 注: restore コマンドで backupsetname パラメーターを指定する場合、pick オプションを使用できません。 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
pitdate 500 ページの『Pitdate』	コマンド・ラインのみ。
pittime 501 ページの『Pittime』	コマンド・ラインのみ。
preservepath 507 ページの『Preservepath』	コマンド・ラインのみ。
replace 516 ページの『Replace』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
tapeprompt 575 ページの『Tapeprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
todate 587 ページの『Todate』	コマンド・ラインのみ。
totime 588 ページの『Totime』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

/Users/user1/Documents ディレクトリーにある **budget** という名前の単一のファイルをリストアします。

```
restore /home/devel/projecta/budget
```

タスク

現行ディレクトリーに存在する、**budget** という名前の単一ファイルをリストアします。

```
restore file budget
```

タスク

ファイル拡張子が **.c** のすべてのファイルを /home/devel/projecta ディレクトリーから リストアします。

```
restore "/home/devel/projecta/*.c"
```

タスク

/user/project ディレクトリー内のファイルをリストアします。活動および非活動のバックアップ・バージョンを選択するには pick および inactive オプションを使用してください。

```
restore "/user/project/*" -pick -inactive
```

タスク

文字 .c で終わっているすべてのファイルを /home/newdevel/projectn/projecta ディレクトリーから /home/devel/projecta ディレクトリーに リストアします。projectn または projectn/projecta ディレクトリーが 存在しない場合には作成されます。

```
restore "/home/devel/projecta/*.c" /home/newdevel/projectn/
```

タスク

/home/mydir ディレクトリー内の すべてのファイルを、2002 年 8 月 17 日 1:00 PM 現在の状態にリストアします。

```
restore -pitd=8/17/2002 -pitt=13:00:00 /home/mydir/
```

タスク

/home/myid/ ディレクトリー内のすべてのオブジェクトを リストアします。このリストアは完全にワイルドカード化されているため、リストア処理が中断された場合は、再始動可能なリストア・セッションが作成されます。

```
res "/home/myid/*"
```

タスク

/home/mydir ディレクトリー内の すべてのファイルを、2002 年 8 月 17 日 1:00 PM 現在の状態にリストアします。

```
restore -pitd=8/17/2002 -pitt=13:00:00 /home/mydir/
```

関連情報

[240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』](#)

[507 ページの『Preservepath』](#)

[168 ページの『ファイル・システムおよび ACL サポート』](#)

ユニコード対応でないファイル・スペースからのリストア

ユニコード対応でないファイル・スペースからリストアする場合には、ユニコード対応のクライアントをインストールする前に、サーバー上のソース、およびクライアント上の宛先を指定する必要があります。

注：このユニコード・セクションは、Mac OS X にのみ適用されます。

例えば、Jaguar が始動ディスクの名前で、/Users/user5/Documents ディレクトリー内のすべての .log ファイルをバックアップするとします。バックアップが行われる前に、サーバーはファイル・スペースを Jaguar_OLD に名前変更します。バックアップでは、現在の操作で指定されたデータをユニコード対応ファイル・スペース、/ に置きます。その新しいユニコード対応ファイル・スペースには、現在、操作で指定された /Users/user5/Documents ディレクトリーおよび *.log ファイルしか入っていません。

ファイルを、名前変更された (古い) ファイル・スペースから、その元の位置にリストアしたい場合には、ソースと宛先の両方を、次のように指定しなければなりません。

```
restore Jaguar_OLD/Users/user5/Documents  
/mylog.log /Users/user5/Documents/
```

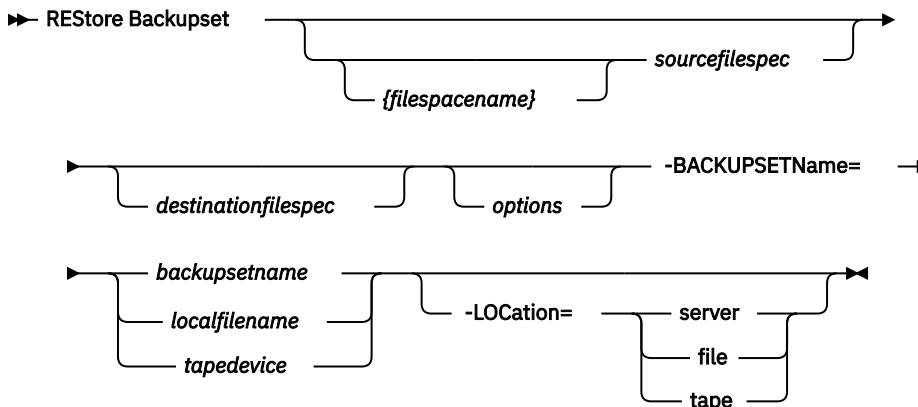
Restore Backupset

restore backupset コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー、ローカル・ファイル、またはローカル磁気テープ装置からバックアップ・セットをリストアします。バックアップ・セット全体、または場合によってはバックアップ・セット内の特定ファイルをリストアすることができます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

{filespace name}

サーバー上の、リストアしたいファイルが入っているファイル・スペースを (中括弧で囲んで) 指定します。これは、ファイルのバックアップ元のワークステーション・ドライブ上の名前、またはグループの仮想ファイル・スペース名です。

グループが入っているバックアップ・セットをリストアする場合は、ファイル・スペース名を指定してください。

sourcefilespec がターゲット・コンピューター上に存在しない場合は、ファイル・スペース名を指定してください。これは、ドライブのラベル名が変更された場合、または異なるドライブ・ラベルを持つ別のノードからバックアップされたファイルをリストアしている場合に起こる可能性があります。

sourcefilespec

バックアップ・セットの部分のソース・パスを指定します。デフォルトでは、バックアップ・セット全体をリストアします。

destinationfilespec

リストア済みファイルの宛先パスを指定します。 **sourcefilespec** を指定しない場合は、**destinationfilespec** を指定できません。宛先の指定がないと、バックアップ/アーカイブ・クライアントはファイルをオリジナル・ソース・パスにリストアします。複数のファイルをリストアする場合には、ファイル指定をディレクトリー区切り文字 (/) で終了する必要があります。そうしないと、クライアントは最後の名前をファイル名と見なしてエラーを報告します。単一ファイルをリストアしようとしている場合には、リストア済みファイルに新規名を付ければ、オプションで、宛先ファイル指定をファイル名で終了できます。 **sourcefilespec** がターゲット・ワークステーション上に存在しない場合は、**destinationfilespec** を指定する必要があります。

-BACKUPSETName=

リストア操作を実行するバックアップ・セットの名前を指定します。ワイルドカード文字を使用してバックアップ・セット名を指定することはできません。 **backupsetname** の値は、バックアップ・セットのロケーションによって異なり、以下の3つの選択肢のいずれかに対応しています。

backupsetname

リストア操作を実行するサーバー上のバックアップ・セットの名前を指定します。**location** オプションが指定されている場合、**-location=server** を設定する必要があります。

localfilename

最初のバックアップ・セット・ボリュームのファイル名を指定します。**-location=file** を設定する必要があります。

tapedevice

バックアップ・セット・ボリュームを含むテープ装置の名前を指定します。IBM が提供するデバイス・ドライバではなく、Windows が提供するデバイス・ドライバを使用する必要があります。**-location=tape** を設定する必要があります。

-lOCation=

バックアップ・セットのロケーションを指定します。location パラメーターを指定しない場合、クライアントは IBM Spectrum Protect サーバーでバックアップ・セットを検索します。location パラメーターを指定する場合、その値は以下の 3 つの選択肢のいずれかでなければなりません。

server

バックアップ・セットが IBM Spectrum Protect サーバー上にあることを指定します。server がデフォルト・ロケーションです。

file

バックアップ・セットが使用可能なファイル・システム上にあることを指定します。

tape

バックアップ・セットが使用可能なテープ装置にあることを指定します。

表 106. *Restore Backupset* コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
dirsonly 385 ページの『Dirsonly』	コマンド・ラインのみ。
filesonly 433 ページの『Filesonly』	コマンド・ラインのみ。
ifnewer 443 ページの『Ifnewer』	コマンド・ラインのみ。
preservepath 507 ページの『Preservepath』	コマンド・ラインのみ。
quiet 513 ページの『Quiet』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
replace 516 ページの『Replace』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例**タスク**

monthly_financial_data.87654321 というバックアップ・セット全体をサーバーからリストアします。

```
dsmc restore backupset
  -backupsetname=monthly_financial_data.87654321
  -loc=server
```


タスク

ファイル /home/budget/weekly_budget_data.ost に入っているバックアップ・セット全体をリストアします。

```
dsmc restore backupset
-backupsetname="/home/budget/weekly_budget_data.ost"
-loc=file
```

タスク

/dev/rmt0 装置からバックアップ・セット全体をリストアします。

```
dsmc restore backupset
"-backupsetname=/dev/rmt0" -loc=tape
```

タスク

/home/jones/budget.dev という名前の単一ファイルを /dev/rmt0 テープ装置から元のソース・パスにリストアします。

```
dsmc restore backupset
-backupsetname=/dev/rmt0 "/home/jones/budget.dev"
-loc=tape
```

タスク

ファイル拡張子 .txt を含む budget ディレクトリー中のすべてのファイルを /dev/rmt0 装置上の磁気テープからオリジナル・ソース・パスにリストアします。

```
dsmc restore backupset "/home/budget/*.txt"
-backupsetname=/dev/rmt0 -loc=tape
```

タスク

ローカル・ファイル "/home/jones/bset01.file" に入っているバックアップ・セット全体をリストアします。

```
dsmc restore backupset
-backupsetname="/home/jones/bset01.file"
-loc=file
```

タスク

グループを IBM Spectrum Protect サーバー上のバックアップ・セット mybackupset.12345678 から /home/devel/projectb ディレクトリーにリストアします。グループの仮想ファイル・スペースは accounting です。

```
dsmc restore backupset {/accounting}/*
/home/devel/projectb/
-backupsetname=mybackupset.12345678 -loc=server
-subdir=yes
```

タスク

グループをローカル・バックアップ・セット mybackupset.ost から /home/devel/projectb/ ディレクトリーにリストアします。グループの仮想ファイル・スペースは accounting です。

```
dsmc restore backupset {/accounting}/*
/home/devel/projectb/
-backupsetname=mybackupset.ost
-loc=server -subdir=yes
```

関連情報

[240 ページの『バックアップ・セットからのデータのリストア』](#)

バックアップ・セットのリストア: 考慮事項および制約事項

このトピックでは、バックアップ・セットをリストアする時に注意する必要がある考慮事項および制約事項をリストしています。

バックアップ・セットのリストアの考慮事項

バックアップ・セットをリストアする時には、以下のことを考慮してください。

- リストアしたいオブジェクトが現行ノードと異なる名前のクライアント・ノードから生成された場合、どのリストア・コマンドでも **filespace** パラメーターとともに元のノード名を指定してください。
- ポータブル・メディアからバックアップ・セットを リストアすることができない場合には、IBM Spectrum Protect 管理者に問い合わせ、互換性のあるフォーマットを使用してこのポータブル・メディアが装置上に作成されたことを確認してください。
- 最初のコマンド・ラインで **restore backupset** コマンドをパラメーター **-location=tape** または **-location=file** と一緒に使用した場合、クライアントは IBM Spectrum Protect サーバーへの接続を試行しません。
- グループをバックアップ・セットからリストアする時には、以下のことを考慮してください。
 - グループ全体または仮想ファイル・スペース内のすべてのグループがリストアされます。同じ仮想ファイル・スペース内に複数のグループがある場合、グループ名を指定して単一グループをリストアすることはできません。ファイル・パスを指定してグループの一部をリストアすることはできません。
 - 以下の値を使用してグループを指定します。
 - **filespace** パラメーターとともに仮想ファイル・スペース名を指定します。
 - サブディレクトリーを含めるには、**subdir** オプションを使用します。
- クライアント・システムに接続されたテープ装置からのバックアップ・セットのリストアに対するサポートは制限されています。装置の製造メーカーが提供する固有のデバイス・ドライバを必ず使用する必要があります。IBM Spectrum Protect サーバーで使用するために IBM によって提供されているデバイス・ドライバは、ローカル・バックアップ・セットをリストアするためにクライアント・システムで使うことができません。
- 複数の所有者のファイルがバックアップ・セットに含まれている場合、バックアップ・セット自体は root ユーザー ID が所有し、root ユーザー ID 以外はバックアップ・セットを見ることができません。この場合、root 以外のユーザー ID は、IBM Spectrum Protect 管理者からバックアップ・セット名を取得することにより、自分のファイルをリストアできます。root 以外のユーザーは自分のファイルのみをリストアできます。
- サーバー接続を必要とせずにバックアップ・セットをローカル・デバイスからリストアするためにクライアント GUI を有効にするには、**localbackupset** オプションを使用します。

バックアップ・セットのリストアの制約事項

バックアップ・セットをリストアする時には、以下の制約事項に注意してください。

- API を使用してバックアップされたバックアップ・セット・データは、リストアまたは使用することができません。
- **restore backupset** コマンドを使用してバックアップ・セットからイメージ・データをリストアすることはできません。バックアップ・セットからイメージ・データをリストアできるのは、**restore image** コマンドを使用する場合のみです。
- ローカル・バックアップ・セットからイメージ・データをリストアすることはできません (**location=tape** または **location=file**)。バックアップ・セットからイメージ・データをリストアできるのは、IBM Spectrum Protect サーバーからのみです。

関連資料

474 ページの『[Localbackupset](#)』

localbackupset オプションは、バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI がスタンドアロン・ワークステーションでローカル・バックアップ・セットをリストアするために IBM Spectrum Protect サーバーによる初期ログオンをバイパスするかどうかを指定します。

728 ページの『Restore』

restore コマンドは、ファイルのバックアップ・バージョンのコピーを IBM Spectrum Protect サーバーまたはバックアップ・セット内部から取得します。

742 ページの『Restore Image』

restore image コマンドは、**backup image** コマンドを使用して バックアップされたファイル・システムまたはロー・ボリューム・イメージを リストアします。

733 ページの『Restore Backupset』

restore backupset コマンドは、IBM Spectrum Protect サーバー、ローカル・ファイル、またはローカル磁気テープ装置からバックアップ・セットをリストアします。バックアップ・セット全体、または場合によってはバックアップ・セット内の特定ファイルをリストアすることができます。

SAN 環境でのバックアップ・セットのリストア

以下の方法で Storage Area Network (SAN) にあるバックアップ・セットをリストアすることができます。

- バックアップ・セットが SAN に接続されたストレージ装置上ある場合は、*filename* パラメーターを使用してその装置を指定し、*location=tape* に当てはまる場合はこのオプションを使用します。バックアップ・アーカイブ・クライアントは、高速リストア・パフォーマンスを取得して、SAN 接続ストレージ装置から直接バックアップ・セットをリストアします。

注: 正しいテープを SAN が付加された磁気テープ・ドライブにマウントして、**restore** コマンドを出していることを確認してください。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、テープを自動的にマウントする SCSI オートチェンジャーを開始しません。

- バックアップ・セットがローカル・メディアまたは SAN の付加されたストレージ・デバイス上でない場合は、*backupsetname* オプションを使用するバックアップ・セットを指定できます。LAN を使用してサーバーから直接バックアップ・セットをリストアするには、*location=server* オプションを使用します。

backupsetname パラメーターを指定しない Restore Backupset

restore backupset コマンドは、*backupsetname* パラメーターを指定せずに使用することができます。

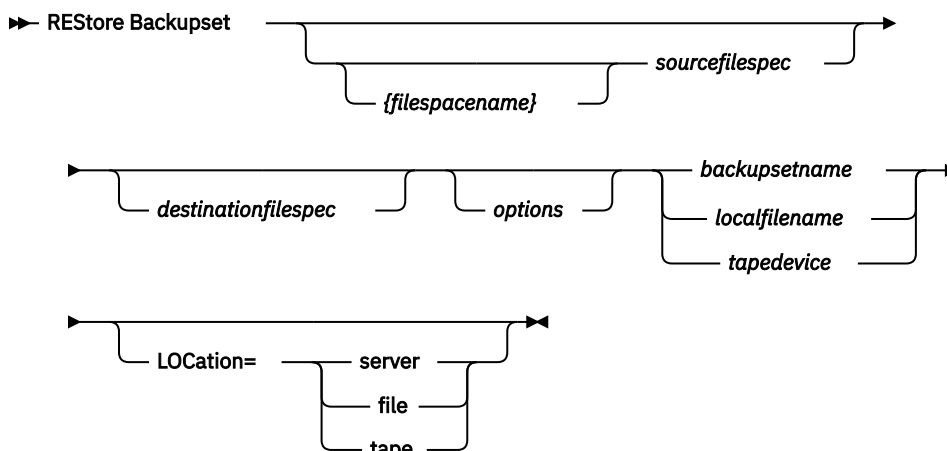
restore backupset コマンドの推奨構文では、*backupsetname* パラメーターが必要です。

backupsetname パラメーターの導入前は、バックアップ/アーカイブ・クライアントは別の構文でバックアップ・セットをリストアしていました。以前の構文はサポートされていますが、可能な場合は常に *backupsetname* パラメーターを必要とする構文に従ってください。以前の構文は、推奨構文に置き換えることができない場合のために記載されています。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

options

restore backupset の推奨構文で有効なオプションはいずれも **restore backupset** の以前の構文で有効です。

{filespace name}

サーバー上の、リストアしたいファイルが入っているファイル・スペースを (中括弧で囲んで) 指定します。これは、ファイルのバックアップ元のワークステーション・ドライブ上の名前、またはグループの仮想ファイル・スペース名です。

グループが入っているバックアップ・セットをリストアする場合は、ファイル・スペース名を指定してください。

sourcefilespec がターゲット・コンピューター上に存在しない場合は、ファイル・スペース名を指定してください。これは、ドライブのラベル名が変更された場合、または異なるドライブ・ラベルを持つ別のノードからバックアップされたファイルをリストアしている場合に起こる可能性があります。

sourcefilespec

バックアップ・セットの部分のソース・パスを指定します。デフォルトでは、バックアップ・セット全体をリストアします。

destinationfilespec

リストア済みファイルの宛先パスを指定します。 **sourcefilespec** を指定しない場合は、 **destinationfilespec** を指定できません。宛先の指定がないと、クライアントはファイルをオリジナル・ソース・パスにリストアします。複数のファイルをリストアする場合には、ファイル指定をディレクトリー区切り文字 (/) で終了する必要があります。そうしないと、クライアントは最後の名前をファイル名と見なしてエラーを報告します。単一ファイルをリストアしようとしている場合には、リストア済みのファイルに新規名を付ければ、オプションで、宛先ファイル指定をファイル名で終了できます。 **sourcefilespec** がターゲット・ワークステーション上に存在しない場合は、 **destinationfilespec** を指定する必要があります。

backupsetname

IBM Spectrum Protect サーバーからバックアップ・セットの名前を指定します。 **location** パラメーターが指定されている場合、 **-location=server** を設定する必要があります。

localfilename

最初のバックアップ・セット・ボリュームのファイル名を指定します。 **-location=file** を設定する必要があります。

tapedevice

バックアップ・セット・ボリュームを含むテープ装置の名前を指定します。IBM が提供するデバイス・ドライバーではなく、Windows が提供するデバイス・ドライバーを使用する必要があります。 **-location=tape** を設定する必要があります。

LOCation=

バックアップ・セットのロケーションを指定します。location パラメーターを指定しない場合、クライアントは IBM Spectrum Protect サーバーでバックアップ・セットを検索します。location パラメーターを指定する場合、その値は以下の 3 つの選択肢のいずれかでなければなりません。

server

バックアップ・セットがサーバー上にあることを指定します。server がデフォルト・ロケーションです。

file

バックアップ・セットが使用可能なファイル・システム上にあることを指定します。

tape

バックアップ・セットが使用可能なテープ装置にあることを指定します。

例

タスク

monthly_financial_data.87654321 というバックアップ・セット全体をサーバーからリストアします。

```
dsmc restore backupset monthly_financial_data.87654321 -loc=server
```

タスク

ファイル /home/budget/weekly_budget_data.ost に入っているバックアップ・セット全体をリストアします。

```
dsmc restore backupset "/home/budget/weekly_budget_data.ost" -loc=file
```

タスク

/dev/rmt0 装置からバックアップ・セット全体をリストアします。

```
dsmc restore backupset "/dev/rmt0" -loc=tape
```

タスク

/home/jones/budget.dev という名前の単一ファイルを /dev/rmt0 テープ装置から元のソース・パスにリストアします。

```
dsmc restore backupset /dev/rmt0 "/home/jones/budget.dev" -loc=tape
```

タスク

ファイル拡張子 .txt を含む budget ディレクトリー中のすべてのファイルを /dev/rmt0 装置上の磁気テープからオリジナル・ソース・パスにリストアします。

```
dsmc restore backupset /dev/rmt0 "/home/budget/*.txt" -loc=tape
```

タスク

ローカル・ファイル "/home/jones/bset01.file" に入っているバックアップ・セット全体をリストアします。

```
dsmc restore backupset "/home/jones/bset01.file" -loc=file
```

タスク

グループを IBM Spectrum Protect サーバー上のバックアップ・セット mybackupset.12345678 から /home/devel/projectb ディレクトリーにリストアします。グループの仮想ファイル・スペースは accounting です。

```
dsmc restore backupset mybackupset.12345678 {/accounting}/* /home/devel/projectb/ -loc=server -subdir=yes
```

タスク

グループをローカル・バックアップ・セット mybackupset.ost から /home/devel/projectb/ ディレクトリーにリストアします。グループの仮想ファイル・スペースは accounting です。

```
dsmc restore backupset mybackupset.ost {/accounting}/* /home/devel/projectb/ -loc=server -subdir=yes
```

Restore Group

restore group コマンドを使用して、グループ・バックアップの特定のメンバーまたはすべてのメンバーをリストアします。

注：

1. **pick** オプションを使用すると グループのリストが表示され、そのリストから リストアする 1 つのグループを選択できます。
2. **showmembers** オプションを **pick** オプションとともに使用して、グループの 1 つ以上のメンバーを表示およびリストアします。 その場合は、特定のメンバーをリストアしたいグループを 最初に選択してから、リストアする 1 つ以上のグループ・メンバーを選択します。
3. バックアップからグループをリストアできます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、Mac OS X を除いて、すべてのクライアントに有効です。

構文

```
➡ REStore GRoup  options  source  destination ➡
```

パラメーター

source

サーバー上でリストアする仮想ファイル・スペース名とグループ名を指定します。

destination

グループまたは 1 つ以上のグループ・メンバーを入りたいパスを指定します。宛先の指定がないと、クライアントはファイルをその元の位置にリストアします。

表 107. *Restore Group* コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
backupsetname 354 ページの『Backupsetname』	コマンド・ラインのみ。
followsymbolic 434 ページの『Followsymbolic』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
fromdate 436 ページの『Fromdate』	コマンド・ラインのみ。
fromnode 437 ページの『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 438 ページの『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
fromtime 439 ページの『Fromtime』	コマンド・ラインのみ。
ifnewer 443 ページの『Ifnewer』	コマンド・ラインのみ。

表 107. *Restore Group* コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
inactive 445 ページの『Inactive』	コマンド・ラインのみ。
latest 474 ページの『Latest』	コマンド・ラインのみ。
pick 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
pitdate 500 ページの『Pitdate』	コマンド・ラインのみ。
pittime 501 ページの『Pittime』	コマンド・ラインのみ。
preservepath 507 ページの『Preservepath』	コマンド・ラインのみ。
replace 516 ページの『Replace』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
showmembers 544 ページの『Showmembers』 (Mac OS X には適用されません)	コマンド・ラインのみ。
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
tapeprompt 575 ページの『Tapeprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
todate 587 ページの『Todate』	コマンド・ラインのみ。
totime 588 ページの『Totime』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

/virtfs/group1 グループ・バックアップ内のすべてのメンバーを、クライアント・システム上のその元の位置にリストアします。

コマンド:

```
restore group /virtfs/group1
```

タスク

/virtfs 仮想ファイル・スペース内のすべてのグループを表示します。showmembers オプションを使用するとグループ・メンバーのリストが表示され、そのリストから リストアする 1 つ以上のグループ・メンバーを選択できます。

コマンド:

```
restore group /virtfs/  
* -pick -showmembers
```

タスク

/virtfs 仮想ファイル・スペース内のグループのリストを表示します。このリストから、リストアする 1 つ以上のグループを選択できます。

コマンド:

```
restore group /virtfs/* -pick
```

関連情報

733 ページの『Restore Backupset』

Restore Image

restore image コマンドは、**backup image** コマンドを使用してバックアップされたファイル・システムまたはロー・ボリューム・イメージを リストアします。

リストアによって、IBM Spectrum Protect サーバーか、**backupsetname** オプションが指定された場合は IBM Spectrum Protect サーバーのバックアップ・セット内部からバックアップ・イメージを取得します。このコマンドは、活動基本イメージ、または特定時点の基本イメージを、関連するインクリメンタル更新と共にリストアすることができます。

注:

1. **restore image** コマンドに **incremental** オプションを使用して動的イメージ・バックアップを実行することは、サポートされていません。
2. IBM Spectrum Protect HSM for Windows または IBM Spectrum Protect for Space Management を使用しており、ファイル・システム・イメージ・バックアップをリストアし、調整を実行する予定である場合、イメージ・バックアップ後にバックアップされたファイルをリストアする必要があります。そうしないと、イメージ・バックアップ後に作成されたマイグレーション済みファイルが、IBM Spectrum Protect サーバー上の HSM アーカイブ・ストレージから有効期限切れになります。

verifyimage オプションを **restore image** コマンドで使用して、宛先ターゲット・ボリューム上の不良セクターの検出を有効にすることを指定できます。ターゲット・ボリューム上で不良セクターが検出された場合、クライアントは、コンソールとエラー・ログに警告メッセージを発行します。

ターゲット・ボリューム上に不良セクターが存在する場合、**imagetofile** オプションを **restore image** コマンドで使用して、ソース・イメージをファイルにリストアすることを指定できます。選択したデータ・コピー・ユーティリティを後で使用すれば、イメージをファイルからディスク・ボリュームに変換できます。

考慮事項:

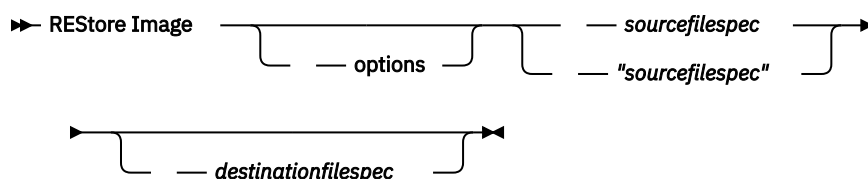
- **restore image** コマンドを使用するには、API がインストールされていなければなりません。
- イメージ・リストアは、Sun QFS ファイル・システムについてはサポートされていません。
- イメージ・リストアは、Linux x86_64、Linux on POWER、および Linux on System z 上の GPFS ファイル・システムではサポートされていません。
- Linux システムで、ext2、ext3、ext4、btrfs、xfs などの一部のファイル・システムは、オペレーティング・システムによって汎用固有 ID (UUID) を使用して識別されます。このようなボリュームのイメージ・バックアップを作成して別の位置にリストアすると、同じ UUID を持つ 2 つのボリュームが存在するようになる可能性があります。/etc/fstab で UUID を使用してファイル・システムを定義している場合、UUID の競合により、バックアップ/アーカイブ・クライアントが、リストアされるファイル・システムを正しくマウントできない可能性があることに注意してください。この状態を回避するには、イメージをその元の位置にリストアしてください。イメージを別の位置にリストアする必要がある場合は、リストアされるファイル・システムをマウントする前に、元のボリュームまたはリストアされるボリュームのいずれかの UUID を変更してください。UUID の変更方法については、Linux の資料の該当する説明を参照してください。また、元のボリューム、リストアされるボリューム、またはその両方のボリュームをマウントできるように、/etc/fstab ファイルを手動で編集する必要がある場合もあります。
- **pick** オプションを使用する場合、コマンドは、クライアントによってバックアップされたファイル・システム・イメージに関する以下の情報を表示します。
 - イメージ・サイズ

- 格納サイズ - この値は IBM Spectrum Protect サーバーに格納された実際のイメージ・サイズです。サーバー上の格納イメージはボリューム容量と同じサイズです。
 - ファイル・システム・タイプ
 - バックアップ日時
 - イメージ・バックアップに割り当てられた管理クラス
 - イメージ・バックアップが活動か非活動コピーか
 - イメージ名
- 何らかの理由で、リストア・イメージが破壊されている場合は、**fsck** ツールを使用してイメージの修復を試みることができます。

サポートされるクライアント

このオプションは、AIX、Linux、および Oracle Solaris のクライアントに有効です。

構文



パラメーター

sourcefilespec

リストアするソース・イメージ・ファイル・システムの名前を指定します。指定できるのは単一のソース・イメージだけです。ワイルドカード文字を使用することはできません。

destinationfilespec

ソース・ファイル・システムのリストア先の既存のマウント済みファイル・システムの名前またはリストア先のパスとファイル名を指定します。デフォルトはファイル・システムの元の位置です。

表 108. Restore Image コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
backupsetname 354 ページ の『Backupsetname』	コマンド・ラインのみ。
dateformat 371 ページ の『Dateformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
deletefiles 379 ページ の『Deletefiles』	コマンド・ラインのみ。
fromnode 437 ページ の『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 438 ページ の『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
imagetofile 445 ページ の『Imagetofile』	コマンド・ラインのみ。
inactive 445 ページ の『Inactive』	コマンド・ラインのみ。

表 108. *Restore Image* コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
incremental 466 ページの『Incremental』	コマンド・ラインのみ。
noprompt 491 ページの『Noprompt』	コマンド・ラインのみ。
pick 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
pitdate 500 ページの『Pitdate』	コマンド・ラインのみ。
pittime 501 ページの『Pittime』	コマンド・ラインのみ。
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
verifyimage 594 ページの『Verifyimage』	コマンド・ラインのみ。

restore image コマンドでは、宛先ファイル・スペースの定義やマウントは行いません。宛先ボリュームは、存在していなければならず、ソースを保持するのに十分大きくなければならず、またファイル・システムを含む場合にはマウントされていなければなりません。イメージ・バックアップがファイル・システムを含む場合に、異なる場所にリストアする場合は、以下の点に注意してください。

- 宛先ボリュームがソース・ボリュームより小さい場合、操作は失敗します。
- 宛先ボリュームがソースより大きい場合、リストア操作の後でサイズの差が無くなってしまいます。ボリュームのサイズを増やすことによって、喪失したスペースを回復することができます。その場合、リストアされたボリュームのサイズも大きくなります。

例

タスク

論理ボリュームがマウントされた `/home/test` ディレクトリドライブをその元の位置にリストアします。

コマンド: `dsmc rest image /home/test`

タスク

論理ボリュームがマウントされている `/home/proj` ディレクトリーをその元の位置にリストアして、サーバーに記録された元のイメージの最終増分バックアップから変更を適用します。変更には、ファイルの削除が含まれます。

コマンド: `dsmc restore image /home/proj -incremental -deletefiles`

タスク

`/usr` ファイル・システムを元の位置にリストアします。**verifyimage** オプションを使用して、ターゲット・ボリューム上の不良セクターの検出を有効にすることを指定します。

コマンド: `dsmc restore image /usr -verifyimage`

タスク

ターゲット・ボリューム上に不良セクターが存在する場合、**imagnetofile** オプションを使用して `/usr` ファイル・システムを `/home/usr.img` ファイルにリストアすることにより、データが破壊されないようにします。

コマンド: `dsmc restore image /usr /home/usr.img -imagnetofile`

関連情報

restore NAS

restore nas コマンドは、Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバーに属するファイル・システムのイメージをリストアします。非管理 ID で対話式コマンド・ライン・セッションを使用する場合、管理者 ID の入力を求めるプロンプトが表示されます。

NAS ファイル・サーバーは、外部データ移動を実行します。サーバー・プロセスがリストアを実行します。

toc オプションを **backup nas** コマンドまたは **include.fs.nas** オプションと一緒に使用して各ファイル・システム・バックアップの目次 (TOC) 情報を保存した場合は、**RESTORE NODE** サーバー・コマンドを使用して個々のファイルやディレクトリー・ツリーをリストアするだけでなく、**QUERY TOC** サーバー・コマンドを使用してファイル・システム・バックアップの内容を判別することができます。Web クライアントを使用して、ファイル・システム・ツリー全体を検査し、リストアするファイルおよびディレクトリーを選択することもできます。TOC 情報を保存しない場合でも、各ファイルまたはディレクトリーの完全修飾名とそのオブジェクトがバックアップが入っているイメージが既知であれば、**RESTORE NODE** サーバー・コマンドを使用して個々のファイルやディレクトリー・ツリーをリストアすることができます。

nasnodename オプションは、NAS ファイル・サーバーのノード名を指定するのに使用します。NAS ノード名は、IBM Spectrum Protect サーバーに対して NAS ファイル・サーバーを識別するものです。NAS ノード名はサーバーで登録しなければなりません。**nasnodename** オプションは、クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) に入れます。クライアント・システム・オプション・ファイルの値はデフォルトですが、この値は、コマンド・ラインで指定変更することができます。

pick オプションを使用して、指定した NAS ノードが所有する NAS イメージのリストを表示することができます。このリストから、リストアする 1 つ以上のイメージを選択することができます。**pick** オプションを使用してリストア対象として複数のイメージを選択する場合、**monitor** オプションを使用しないでください。あるいは、リストアを直列化してください。複数のイメージをリストアする場合に、複数のリストア処理を同時に開始するには、**monitor=yes** を指定しないでください。

monitor オプションは、NAS ファイル・システム・イメージ・リストアをモニターして、画面に処理情報を表示するかどうかを指定するのに使用します。

monitor process コマンドは、管理ユーザー ID が権限を持つすべての NAS ノードの現行リストアのリストを表示します。管理ユーザー ID は、コマンド・ラインまたは Web から使用する NAS ノードおよびクライアント・ワークステーション・ノードの両方に対して少なくともクライアント所有者権限を持っている必要があります。

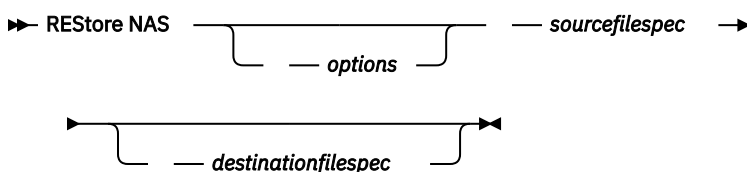
cancel process コマンドは、NAS リストア処理を停止するのに使用します。

クライアントのプラットフォームにかかわらず、NAS ファイル・システム指定は、/vol/vol0 の例のように、スラッシュ (/) 区切り文字を使用します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、AIX、および Solaris クライアントのみに有効です。

構文



パラメーター

sourcefilespec

リストアしたい NAS ファイル・システム・イメージの名前を指定します。このパラメーターは、pick オプションを使用して、選択する NAS イメージのリストを表示しない限り、必須です。sourcefilespec を指定する場合、ワイルドカード文字を使用することはできません。

destinationfilespec

イメージをリストアしたい NAS 装置上の既存のマウント済みファイル・システムの名前を指定します。このパラメーターはオプションです。デフォルトは、NAS 装置上のファイル・システムの元の位置です。

表 109. Restore NAS コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
dateformat 371 ページの『Dateformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
inactive 445 ページの『Inactive』	コマンド・ラインのみ。
mode 482 ページの『mode』	コマンド・ラインのみ。
monitor 485 ページの『Monitor』	コマンド・ラインのみ。
nasnodename 487 ページの『Nasnodename』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
numberformat 492 ページの『Numberformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
pick 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
pitdate 500 ページの『Pitdate』	コマンド・ラインのみ。
pittime 501 ページの『Pittime』	コマンド・ラインのみ。
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

nas1 と呼ばれる NAS ファイル・サーバー上で、NAS ファイル・システム・イメージ /vol/vol1 を /vol/vol2 ファイル・システムに リストアします。

コマンド: restore nas -nasnodename=nas1 /vol/vol1 /vol/vol2

タスク

非活動 NAS イメージをリストアします。

コマンド: restore nas -nasnodename=nas2 -pick -inactive

関連情報

[487 ページの『Nasnodename』](#)

[485 ページの『Monitor』](#)

[677 ページの『Cancel Process』](#)

Restore VM

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。



この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

VMware 仮想マシンに対する Restore VM

restore vm コマンドは、VMware 仮想マシン、あるいは VMware 仮想マシン・テンプレートをリストアする場合に使用できます。

vStorage バックアップ・サーバーとして構成されている別のシステムにバックアップ/アーカイブ・クライアントがインストールされている場合、フル仮想マシン・バックアップを元あった ESX または ESXi サーバー、あるいは別のサーバーにリストアすることができます。フル仮想マシン・バックアップを別のサーバーにリストアするには、**HOST** パラメーターを使用します。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、IBM Spectrum Protect サーバーから、LAN または SAN のいずれかを經由して、データをコピーします。次に、クライアントは、クライアント・オプション・ファイルで指定されたトランスポート・メソッドを使用して、ESX サーバーにデータを直接書き込みます。

フル仮想マシン・バックアップをリストアすると、新規仮想マシンが作成されます。この新規マシンの構成情報と内容は、バックアップが行われた時のものと同一です。仮想マシンのすべてのディスクは、指定した特定時点で、新規に作成された仮想マシンの仮想ディスクとしてリストアされます。

新しい仮想マシンを作成するには、**vmname** パラメーターを指定して、新しい仮想マシンの名前を指定します。**vmname** パラメーターは、バックアップが行われたときと同じ構成を使用して、新規の仮想マシンを作成します。

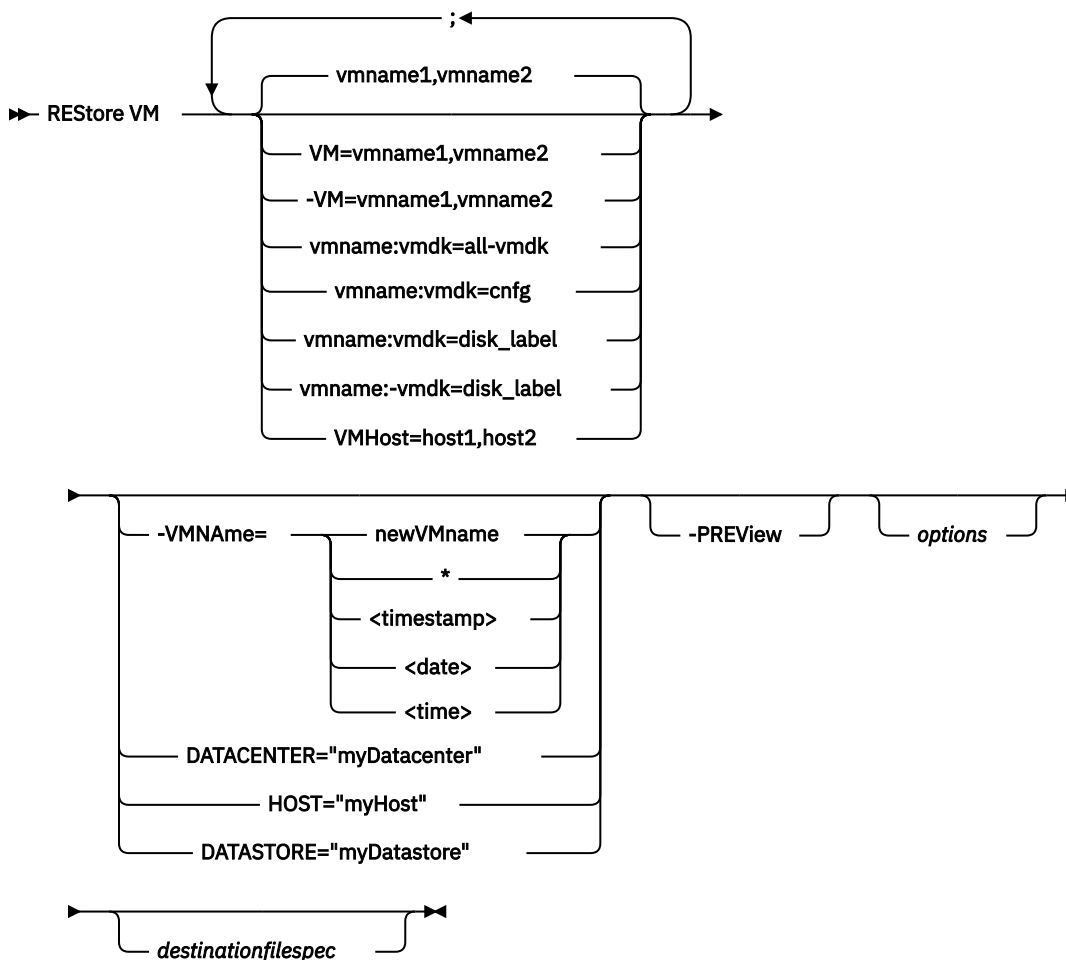
仮想マシンは、それぞれ元のリソース・プール、クラスター、またはフォルダーにリストアされます (コンテナが存在している場合)。リストア操作時に、宛先ターゲット (vCenter または ESXi ホスト) に必要なコンテナがない場合、VM はターゲットの ESXi ホストの最上位デフォルト・ロケーションにリストアされます。コマンド・ライン・クライアントを使用して仮想マシンをリストアしていて、仮想マシンを元のインベントリー・ロケーションにリストアできない場合、通知メッセージ (ANS2091I) が表示されます。Java GUI を使用して仮想マシンをリストアしていて、仮想マシンを元のインベントリー・ロケーションにリストアできない場合、通知メッセージは表示されませんが、仮想マシンは最上位デフォルト・ロケーションにリストアされます。

backup vm コマンドの実行によってバックアップされたデータ保護タグは、仮想マシンと一緒にリストアされます。データ保護タグは、バックアップからの仮想マシンの除外やバックアップの保存ポリシーの指定に使用されます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、VMware 仮想マシンの vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている、サポートされる Linux クライアントで有効です。

構文



パラメーター

スペースが含まれているパラメーターは、引用符 (" ") で囲む必要があります。

vmname

リストアする 1 つ以上の仮想マシンの名前を指定します。この名前は、仮想マシンの表示名です。複数の VM 名をコンマで区切ります (例: vm1,vm2,vm5)。テンプレート VM をバックアップしていた場合、*vmname* パラメーターではリストアするテンプレート VM の名前を指定できます。

ワイルドカード文字を使用すると、パターンに一致する VM 名を選択できます。アスタリスク (*) は任意の文字のシーケンスと一致します。疑問符 (?) は、以下のように任意の 1 文字に一致します。例えば次のとおりです。

- `restore vm VM_TEST*` は、「VM_TEST」で始まる名前を持つすべての仮想マシンをリストアします。
- `restore vm VM??` は、文字「VM」で始まり、その後に 2 文字が続く名前を持つすべての VM をリストアします。

リストアする 1 つ以上の VM を指定する必要があります。

vm=vmname

`vm=` キーワードは、次の値のセットが、仮想マシンの名前のリストであることを指定します。`vm=` キーワードはデフォルトであり、必須ではありません。

VM 名にはワイルドカード文字を使用できます。*vmname* パラメーターの指定については、[748 ページの『vmname』](#)を参照してください。

次の例では、`vm=` が指定されており、コンマがマシン名の区切りに使用されています。

```
restore vm vm=my_vm1,my_vm2
```

-vm=vmname

`vm=` キーワードの前に除外演算子 (-) を指定すると、リストア操作から仮想マシンを除外することができます。

任意の VM 名パターンで開始する VM グループなど、VM バックアップの大規模なグループから仮想マシンのリストを除外するには `-vm=` キーワードを使用します。例えば、名前の先頭に `Dept99_` が付くすべての VM をリストアする一方で `vm2` をリストアしないようにする必要がある場合、以下のコマンドを発行します。

```
restore vm vm=Dept99_*;-vm=vm2
```

`-vm=` キーワードを指定してワイルドカード文字を使用すると、パターンに一致する VM 名を除外できます。例えば次のとおりです。

- ホスト名に `test` が含まれているすべてのファイルを除外します。

```
-vm=*test*
```

- `test20`、`test25`、`test29`、`test2A` などの名前を持つすべての仮想マシンを組み込みます。

```
vm=test2?
```

注：除外演算子 (-) を使用して VM ホスト・ドメインを除外することはできません。除外演算子は、仮想マシン名レベルでのみ機能します。

vmname:vmdk=all-vmdk

このオプションは、すべての仮想ディスク (*.vmdk ファイル) が仮想マシンのリストア時に組み込まれることを指定します。このパラメーターは `vmdk` 指定のデフォルトです。

注：このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

vmname:vmdk=cnfg

このオプションは、仮想マシンの構成情報がリストアされることを指定します。構成情報は、新しい仮想マシンが作成されるときに必ずリストアされます。しかしながら、仮想ディスクを選択して既存の仮想マシンを更新しているときは、デフォルトで、構成はリストアされません。

通常、既存の仮想マシンへの構成情報のリストアは失敗します。リストアされた構成情報は既存の仮想マシンの構成情報と矛盾しているためです。ESXi サーバー上の仮想マシンの既存の構成ファイルが削除されていて、バックアップされた構成で再作成する場合に、このオプションを使用してください。

注：このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

vmname:vmdk=disk_label

このオプションは、リストア操作に組み込む仮想ディスクのディスク・ラベルを指定するために使用します。このオプションを指定するのは、すべてのディスクではなく、1 つ以上の特定のディスクをリストアする場合のみです。リストアするディスクごとにこのオプションを繰り返します。

リストアする各ディスクに、以下の考慮事項が適用されます。

- リストア操作を開始する前に、ディスクが VM 上に存在する必要があります。ディスクが存在しない場合、そのディスクを作成する必要があります。 **-preview** パラメーターを使用して、元のディスク・ラベル、容量、およびデータ・ストアを識別することができます。 **-preview** の出力には、プロビジョニング情報は含まれません。
- 既存のディスクが、リストアするディスク以上のサイズでなければなりません。
- 既存のディスク・ラベルは、リストアするディスクと同じでなければなりません。
- 既存のディスク上のデータは、すべて上書きされます。

指定されたディスクのみがリストアされます。VM 上のその他のディスクは変更されません。

ディスクのリストア先の VM は、リストア操作を開始する前に電源をオフにする必要があります。

必須: restore vm コマンドでは、**restore VM** 操作に組み込みたい vmdk ファイルのラベル名 (`vmname:vmdk=disk_label` パラメーターを使用) は、英語のラベル名として指定する必要があります。このラベル名は、**-preview** パラメーターの出力で表示されるラベル名でなければなりません。英語の vmdk ラベル名の例として「Hard Disk 1」、「Hard Disk 2」などがあります。

注: このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

vmname:-vmdk=disk_label

このオプションは、1 つ以上の仮想ディスクのディスク・ラベルを指定して、リストア操作から除外する場合に使用します。

必須: restore vm コマンドでは、**restore VM** 操作に組み込みたい vmdk ファイルのラベル名 (`vmname:vmdk=disk_label` パラメーターを使用) は、英語のラベル名として指定する必要があります。このラベル名は、**-preview** パラメーターの出力で表示されるラベル名でなければなりません。英語の vmdk ラベル名の例として「Hard Disk 1」、「Hard Disk 2」などがあります。

注: このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

vmhost=hostname

このオプションは、vmchost オプションで指定された Virtual Center または ESX サーバーに対して定義されているすべての仮想マシンをリストアします。指定するホスト名は、vCenter サーバーの「**ホストおよびクラスター**」ビューで指定されている完全修飾ホスト名または IP アドレスと一致していなければなりません。

複数ホスト名はコンマで区切ります (例: `host1,host2,host5`)。

このパラメーターには、複数の ESX サーバーをコンマで区切って指定することができます。

ユーザーが ESXi または ESX ホストに直接接続しているときに vmchost オプションが適用されるのは、**vmhost** がその接続先のサーバーである場合のみです。そうでない場合は、警告レベルのメッセージがコンソールに送信されて、`dsmererror.log` ファイルに記録されます。サーバー・イベント・メッセージとしても記録されます。

VM テンプレートをバックアップした場合、そのテンプレートはリストア操作に含まれます。

VMName=

VM= パラメーターで指定した名前を使用しない場合、リストア後の仮想マシンの新規名を指定します。

newVMname

リストアされた VM に使用する新規 VM 名を指定します。

リストアされた仮想マシンの名前では以下の文字はサポートされていません。

```
: ; ' \ / " ? , < > |
```

サポートされない文字を含む **restore** コマンドは、エラー・メッセージ **ANS9117E** で失敗します。

VMware は、80 文字より長い VM 名をサポートしていません。

***** (アスタリスク) 記号をワイルドカードとして使用して、リストアされている VM の元の名前を示します。アスタリスクの前後に有効な文字を指定すると、リストアされる VM の名前に接頭語または接尾語が作成されます。

リストアされた仮想マシンの名前では以下の文字はサポートされていません。

```
: ; ' \ / " ? , < > |
```

サポートされない文字を含む **restore** コマンドは、エラー・メッセージ **ANS9117E** で失敗します。

VMware は、80 文字より長い VM 名をサポートしていません。

＊記号は以下の方法で使用できます。

- ・リストアされた VM の元の VM 名を使用するには **vmname=＊** と指定します。
- ・リストアされた VM の元の VM 名に接尾部を追加します。例えば、元の VM 名が VM1 の場合、接尾部「_restored」を VM1 に追加するために、以下のコマンドを指定します。

```
dsmc restore vm VM1 -VMName=＊_restored
```

リストアされた VM の名前は VM1_restored になります。

- ・リストアされた VM の元の VM 名の前に接頭部を挿入します。例えば、元の VM 名が VM2 の場合、接頭部「new_」を VM2 に挿入するために、以下のコマンドを指定します。

```
dsmc restore vm VM2 -vmname=new_＊
```

リストアされた VM の名前は new_VM2 になります。

<timestamp>

リストアされた VM の名前にリストア操作の日時を示すタイム・スタンプを追加します。

<timestamp> パラメーターはキーワードなので、大括弧(「<」と「>」)で囲む必要があります。タイム・スタンプ・ストリングの形式は、dsm.opt ファイルの DATEFORMAT オプションと TIMEFORMAT オプションにより決まります。<timestamp> パラメーターによって返されるタイム・スタンプの区切り文字にはダッシュが使用されます。

例えば、VM5 と VM6 という名前の 2 台の VM をリストアし、リストアされた VM 名にリストアの日時を追加する場合、以下のコマンドを発行します。

```
dsmc restore vm VM5,VM6 -vmn=＊_<timestamp>
```

リストアされた VM の名前は VM5_06-22-2017_14-56-55 と VM6_06-22-2017_14-56-55 になります。

<date>

リストアされた VM の名前にリストア操作の日付を追加します。<date> パラメーターはキーワードなので、大括弧(「<」と「>」)で囲む必要があります。日付ストリングの形式は、dsm.opt ファイルの DATEFORMAT オプションにより決まります。<date> パラメーターによって返される日付の区切り文字にはダッシュが使用されます。

例えば、VM3 という名前の VM の前に接頭部「new_」を挿入し、リストアされた VM 名にリストアの日付を追加するには、以下のコマンドを発行します。

```
dsmc restore vm VM3 -vmname=new_＊_<date>
```

リストアされた VM の名前は new_VM3_06-22-2017 になります。

<time>

リストアされた VM の名前にリストア操作の時刻を追加します。<time> パラメーターはキーワードなので、大括弧(「<」と「>」)で囲む必要があります。タイム・ストリングの形式は、dsm.opt ファイルの TIMEFORMAT オプションにより決まります。<time> パラメーターによって返される時刻の区切り文字にはダッシュが使用されます。

例えば、VM8 という名前の VM の後に接尾部「_today_」を追加し、リストアされた VM 名にリストアの時刻を追加するには、以下のコマンドを発行します。

```
dsmc restore vm VM8 -vmn=＊_today_<time>
```

リストアされた VM の名前は VM8_today_14-56-55 になります。

注：このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンのリストアの場合、あるいは **FROM** パラメーターで LOCAL が指定される場合は無効です。

DATACENTER

vSphere vCenter に定義されている、仮想マシンのリストア先のデータ・センターの名前を指定します。データ・センターがフォルダーに含まれている場合、仮想マシンをリストアするときに **-datacenter** オプションを指定し、データ・センターのフォルダー構成をデータ・センター名に組み込む必要があります。例えば、次の構文は有効です。

```
-datacenter=folder_name/datacenter_name
```

GUI を使用して仮想マシンをリストアするときは、元の場所とは異なる場所にその仮想マシンをリストアする必要があります。元の場所にリストアする場合は、データ・センターのフォルダー名を指定できません。元のデータ・センターの場所の探索に使用するフォルダー名がなければ、リストア操作は失敗します。

注: このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

HOST

vSphere vCenter で定義されている、リストア対象の ESX ホスト・サーバーのドメイン名を指定します。

このパラメーターは大/小文字を区別します。また、VMware vSphere Web クライアントに表示されるホスト名と同じ値でなければなりません。vSphere Web クライアントでホスト名を確認するには、ホストを選択し、「管理」>「ネットワークング」>「TCP/IP 構成」>「DNS」をクリックします。

注: このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

DATASTORE

仮想マシンのリストア先となる VMware データ・ストアを指定します。データ・ストアは、SAN、NAS、iSCSI デバイス、または VMware 仮想ボリューム (VVOL) 上に配置することができます。仮想マシンをリストアする際に指定できるのは 1 つのデータ・ストアのみです。**datastore** パラメーターを指定しない場合、仮想マシンの VMDK ファイルは、バックアップの作成時にそのファイルが置かれていたデータ・ストアにリストアされます。

注: このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

-PREVIEW

このパラメーターは、どの VM もリストアせずにリストア操作の結果を確認する場合に使用します。**-preview** パラメーターは、リストアされる VM のリストと、VM に関する情報 (VM のハード・ディスクのラベルや、VM の管理クラスなど) を提供します。

restore vm コマンドで **-preview** パラメーターを発行した場合、リストア操作は開始されません。リストア操作は、**-preview** パラメーターがコマンドから削除された場合のみ開始されます。

詳しくは、[757 ページの『仮想マシンのリストア操作のプレビュー』](#)を参照してください。

表 110. *Restore VM* コマンド: VMware 仮想マシンのリストのために使用される関連オプション

オプション	使用先
datacenter	コマンド・ラインまたはオプション・ファイル。このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。
datastore	コマンド・ラインまたはオプション・ファイル。このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

表 110. *Restore VM* コマンド: VMware 仮想マシンのリストのために使用される関連オプション (続き)

オプション	使用先
host	コマンド・ラインまたはオプション・ファイル。このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。
inactive	コマンド・ライン。
pick	コマンド・ライン。このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。
pitdate	コマンド・ライン。このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。
pittime	コマンド・ライン。このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。
vmbackdir	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmbackuplocation	コマンド・ライン。
vmbackuptype	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmchost	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル
vmcpw	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル
vmcuser	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル
vmdefaultdvportgroup	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル
vmdefaultdvswitch	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル
vmdefaultnetwork	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル
vmdiskprovision このパラメーターは、 <code>instantrestore</code> が vmrestoretype 値に指定されている場合にのみ有効です。	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmexpireprotect このパラメーターは、 <code>instantaccess</code> または <code>instantrestore</code> が vmrestoretype 値に指定されている場合にのみ有効です。	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。

表 110. Restore VM コマンド: VMware 仮想マシンのリストのために使用される関連オプション (続き)

オプション	使用先
vmiscsiadapter このパラメーターは、instantaccess または instantrestore が vmrestoretype 値に指定されている場合にのみ有効です。	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmmaxrestoresessions	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmmaxrestoreparalleldisks	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmmaxrestoreparallelvms	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmmountage	コマンド・ライン。
vmnopridmdisks	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmnovridmdisks	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmstoragetype このパラメーターは、instantaccess または instantrestore が vmrestoretype 値に指定されている場合にのみ有効です。	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。
vmvstortransport	コマンド・ラインまたはクライアント・オプション・ファイル。このパラメーターは、VCB を使用してバックアップされた VMware 仮想マシンをリストアする場合は、有効ではありません。

最終統計に関するヒント: 複数のリストア・セッションを実行している場合、最終統計の「**Data transfer time**」フィールドに表示される値は、「**Elapsed processing time**」フィールドの値より高くなる場合があります。データ転送時間は、各リストア操作でネットワークを介してデータを送信するのに要した時間の合計です。この数値には、データが送信される前にデータ・ムーバーがディスクからデータを読み取るのに要した時間も、サーバー・トランザクションが完了するまで待機した時間も含まれません。操作で複数の並行セッションを使用してデータを移動している場合 (マルチセッションのリストア操作など)、この数値が経過処理時間より大きくなる可能性があります。この値には、再試行操作のために複数回データを送信するのに要した時間が含まれます。

例

タスク

myVM の最新バックアップ・バージョンを、その元の名前にリストアします。この構文を使用して元の仮想マシンをリストアする前に、VMware 管理インターフェースを使用してその仮想マシンを削除します。

```
dsmc restore vm myvm
```

タスク

myvm の最新バックアップ・バージョンを、「Test Machine」という名前で作成される新規仮想マシンにリストアします。この時、コマンドには、データ・センターのリストア・ターゲット、ESX ホスト、およびデータ・ストアをすべて指定します。

```
dsmc restore vm myvm -vmname="Test Machine"
-datacenter="myDatacenter" -host="myHostName"
-datastore="myDatastore"
```

タスク

myvm の最新のバックアップ・バージョンを新規名 *myvm_restored.* でリストアします

```
dsmc restore vm myvm -vmname="*_restored"
-datacenter="myDatacenter" -host="myHostName"
-datastore="myDatastore"
```

タスク

myvm の最新のバックアップ・バージョンを、日時を示す *myvm_03-22-2017_14-41-24* のような新規名でリストアします。

```
dsmc restore vm myvm -vmname="*_<timestamp>"
-datacenter="myDatacenter" -host="myHostName"
-datastore="myDatastore"
```

タスク

myvm の最新バックアップ・バージョンをリストアします。 *mydatacenter* という名前のデータ・センターにリストアします。データ・センターは vCenter 内にあるため、vCenter 内の相対パスは *dirA/datacenters/* です。

```
dsmc restore vm myvm -vmname="Test Machine"
-datacenter="dirA/datacenters/myDatacenter"
-host="myHostName" -datastore="myDatastore"
```

タスク

仮想マシン・テンプレートを元と同じロケーションと名前にリストアします。

```
dsmc restore vm vmTemplateName
```

タスク

仮想マシン・テンプレートを新しいロケーションにリストアします。

```
dsmc restore vm vmTemplateName -vmname=newName
-datastore=newDatastore -host=newHost
-datacenter=newDatacenter
```

タスク

Hard Disk 2 および Hard Disk 3 のみを *vm1* という名前の既存の仮想マシンにリストアします。

```
dsmc restore vm "vm1:vmdk=Hard Disk 2:vmdk=Hard Disk 3"
```

タスク

すべてのディスクを *vm1* という名前の仮想マシンにリストアします。但し、Hard Disk 4 からのデータはリストアしません。

```
dsmc restore vm "vm1:-vmdk=Hard Disk 4"
```

タスク

Hard Disk 1 からのデータのみ、既存の仮想マシン *vm1* にリストアします。構成情報は更新しません。

注: 既存の仮想マシンをリストアするとき、デフォルトの動作では、構成情報を更新しません。

```
dsmc restore vm "vm1:vmdk=Hard Disk 1:-vmdk=cnfg"
```

タスク

すべてのディスクを *vm1* という名前の既存の仮想マシンにリストアします。


```
dsmc restore vm "vm1:vmdk=all-vmdk"
```

このコマンドにより、vm1 という既存の仮想マシン上のすべての仮想ディスクが更新されます。このアクションは、vm1 という名前の新しい仮想マシンを作成する `dsmc restore vm vm1` により実行されるアクションとは異なります (`dsmc restore vm vm1` が正常に実行されるためには、vm1 が存在してはなりません)。

タスク

VM vm1 の仮想ディスクのリストア操作で使用するセッションの最大数を 3 に設定します。

```
dsmc restore vm vm1 -vmmaxrestoresessions=3
```

タスク

Accounts という名前の VM と、Dept99 で始まるすべての VM をリストアします。

```
dsmc restore vm Accounts,Dept99*
```

タスク

単語「Payroll」で開始するすべての VM をリストアするが、名前に単語「temp」が含まれるすべての VM を除外します。

```
dsmc restore vm vm=Payroll*;-vm=*temp*
```

タスク

元の VM 名をベースにした新規 VM 名を使用して仮想マシンの VM1、VM2、および VM3 をリストアします。VM 名に接尾部「_restored_」とリストア操作の日時を追加します。

```
dsmc restore vm vm=VM1,VM2,VM3 -vmname=*_restored_<timestamp>
```

リストアされた VM は VM1_restored_07-28-2017_13-28-00、VM2_restored_07-28-2017_13-28-00、および VM2_restored_07-28-2017_13-28-00 という名前になります。

タスク

IBM Spectrum Protect サーバーにバックアップされたホスト esx03 からすべての VM をリストアし、リストアされているすべての VM の中で、VM ディスク Hard Disk 1: を除外して esx03-02 という名前の VM をリストアします。

```
dsmc restore vm VMHOST=esx03.example.com;esx03-2:-vmdk=Hard Disk 1
```

タスク

brovar、doomzoo、および kepler という名前の ESXi ホストのすべての仮想マシンをリストアします。

```
dsmc restore vm  
vmhost=brovar.example.com,doomzoo.example.com,kepler.example.com
```

タスク

Dept99_VM1 という名前の VM について、VM をリストアすることなく適切にリストアされることを確認します。

```
dsmc restore vm VM=Dept99_VM1 -vmname=*_restored -preview
```

重要: Windows 仮想マシンの場合: 複数回のスナップショット試行によって作成されたアプリケーション保護バックアップのフル VM リストアを実行を試みる場合、リストアされた VM にはシステム・プロバイダー・スナップショットが存在します。アプリケーションがディスクに書き込むにつれて、シャドー・ストレージ・スペースは、ディスク・スペースを使い尽くすまで増大します。

通常、バックアップ時にアプリケーション保護が使用された場合は、アプリケーション保護リストアのみを使用してください。アプリケーションをリストアすると、ボリュームが自動的に復帰します。ただし、フル VM をリストアする必要がある場合は、シャドー・コピーを復帰または削除する必要があります。

VM 全体をリストアした後、リストアが正常に完了し、データが破損していないことを確認してください。データが破損していない場合は、シャドー・コピーを削除します。データが破損している場合は、シャドー・コピーを復帰させてデータ整合性を回復します。

リストアされた各ボリュームのルート・ディレクトリーにある `dsmShadowCopyID.txt` ファイルを確認することで、どのシャドー・コピーを削除あるいは復帰するかを判別することができます。このファイルには、スナップショット試行中に作成されたシャドー・コピーのスナップショット ID が含まれます。

diskshadow コマンド **delete shadows** を使用してこれらの ID を削除するか、**revert** コマンドを使用してシャドー・コピーを復帰させることができます。削除または復帰が完了したら、`dsmShadowCopyID.txt` ファイル削除することもできます。

詳しくは、[461 ページの『INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS』](#)を参照してください。

関連概念

仮想マシン `exclude` オプション

仮想マシンの `include` オプションと `exclude` オプションは、仮想マシンのバックアップおよびリストア操作の動作に影響を与えます。これらのオプションが処理された後にコマンド・ライン・オプションが処理されるため、コマンド・ラインのオプションが仮想マシンの `include` オプションまたは仮想マシンの `exclude` オプションに指定されたオプションを指定変更する可能性があります。オプションの詳細については、個々のオプションの説明を参照してください。

仮想マシン `include` オプション

仮想マシンの `include` オプションと `exclude` オプションは、仮想マシンのバックアップおよびリストア操作の動作に影響を与えます。これらのオプションが処理された後にコマンド・ライン・オプションが処理されるため、コマンド・ラインのオプションが仮想マシンの `include` オプションまたは仮想マシンの `exclude` オプションに指定されたオプションを指定変更する可能性があります。オプションの詳細については、個々のオプションの説明を参照してください。

関連タスク

VMware 仮想マシンのフルバックアップのための環境の準備

VMware 仮想マシン全体のバックアップのための VMware 環境を準備するには、以下の手順を実行します。vStorage バックアップ・サーバーは、Windows または Linux クライアントのいずれかを実行できます。

仮想マシンのリストア操作のプレビュー

-preview パラメーターを使用すると、どの仮想マシン (VM) もリストアすることなく、リストア操作の結果を検証できます。-preview パラメーターは、リストアされる VM のリストとそれら VM に関する情報を提供します。**restore vm** コマンドと共に -preview パラメーターを使用する方法を調べるには、示されているオプションに関する情報と、**restore vm -preview** コマンドの例を確認してください。

-preview パラメーターがオプションとその値を戻すのは、そのオプションがデフォルト値をオーバーライドするか、デフォルトが存在しない場合のみです。

表示されるオプションは、以下のように、さまざまな要因に応じて異なります。

- 以下のオプションはすべての VM リストア操作に適用されます。

```
VMNAME
DATACENTER
DATASTORE
HOST
```

- 以下のオプションは、クライアント・オプション・ファイルに設定される場合に表示されます。

```
VMDEFAULTDVPORTGROUP
VMDEFAULTDVSWITCH
VMDEFAULTNETWORK
```

- 以下のオプションが必ず表示されるのは、非インスタント・リストア操作のプレビュー中のみです。

```
VMBACKDIR
```

このオプションで返される値は、バックアップとリストアの両方の操作でキャッシュされるディレクトリー CTL ファイルです。

- 以下のオプションは、インスタント・アクセス・リストア操作のプレビュー中に設定される場合に表示されます。

```
VMDISKPROVISION
VMAUTOSTARTVM
```

restore vm コマンドで **-preview** パラメーターを発行した場合、リストア操作は開始されません。リストア操作は、**-preview** パラメーターがコマンドから削除された場合のみ開始されます。

例

タスク

VM8 という名前の VM をリストアし、ディスク Hard Disk 1 を除外する操作をプレビューします。VM は、末尾に **-restore** が付く新規 VM 名で ESXi ホスト・サーバー **esx03** にリストアされます。

コマンドは、使用する NIC のポート・グループ、そのポート・グループを含む分散仮想スイッチ (dvSwitch)、およびリストア操作中に使用する NIC のネットワークも表示します。

```
dsmc restore vm "VM8:-vmdk:Hard Disk 1" -vmname="*" -restore"
-vmdfaultdvportgroup=portgroup1 -vmdefaultdvswitch=switch1
-vmdefaultnetwork=network1 -host=esx03.example.com -preview
```

コマンド出力:

```
Restore function invoked.
```

```
Restore VM command started. Total number of virtual machines to process: 1
```

```
1.      VM Name: 'VM8'
      Mode: 'Incremental Forever - Full'
      Backup Time: IFFULL 05/22/2017 11:08:33

      Disk 1 Label:      'Hard Disk 1'
      Disk 1 Name:      '[TSMV5K2:DS1_VMDData (26TB)] VM8/TestVM8.vmdk'
      Disk 1 Status:     Excluded by user
      Disk 1 Capacity:   42,949,672,960
      Disk 1 Data to Send: 42,878,369,792

      Disk 2 Label:      'Hard Disk 2'
      Disk 2 Name:      '[TSMV5K2:DS1_VMDData (26TB)] VM8/TestVM8_1.vmdk'
      Disk 2 Status:     Selected
      Disk 2 Capacity:   10,737,418,240
      Disk 2 Data to Send: 10,737,418,240

      Destination Name:   'VM8 -restore'
      Destination Host:   'esx03.example.com'
      Destination vPortGroup: 'portgroup1'
      Destination Switch:  'switch1'
      Destination Network: 'network1'
      Destination CTL Folder: 'C:\mnt\tsmvmbackup'
```

タスク

VM8 という名前の VM のインスタント・リストア操作 (今回もディスク Hard Disk 1 を除外) をプレビューします。VM は、末尾に **-restore** が付く新規 VM 名で ESXi ホスト・サーバー **esx03** にリストアされます。

コマンドは、使用する NIC のポート・グループ、そのポート・グループを含む分散仮想スイッチ (dvSwitch)、およびリストア操作中に使用する NIC のネットワークも表示します。新規 VM は、シック VM としてプロビジョニングされ、リストア操作後に自動的に再始動されます。

```
restore vm "VM8:-vmdk=Hard Disk 1" -vmname="*" -restore"
-vmdefaultdvportgroup=portgroup1 -vmdefaultdvswitch=switch1
-vmdefaultnetwork=network1 -host=esx03.storage.example.com
-vmrestoretype=instantrestore -vmdiskprovision=thick
-vmautostartvm=yes -preview
```

コマンド出力:

```
1.      VM Name: 'VM8'
      Mode: 'Incremental Forever - Full'
      Backup Time: IFFULL 05/22/2017 11:08:33

      Disk 1 Label:      'Hard Disk 1'
      Disk 1 Name:      '[TSMV5K2:DS1_VMDData (26TB)] VM8/TestVM8.vmdk'
      Disk 1 Status:     Excluded by user
      Disk 1 Capacity:   42,949,672,960
      Disk 1 Data to Send: 42,878,369,792

      Disk 2 Label:      'Hard Disk 2'
      Disk 2 Name:      '[TSMV5K2:DS1_VMDData (26TB)] VM8/TestVM8_1.vmdk'
      Disk 2 Status:     Selected
      Disk 2 Capacity:   10,737,418,240
      Disk 2 Data to Send: 10,737,418,240

      Destination Name:   'VM8 -restore'
      Destination Host:   'esx03.example.com'
      Destination vPortGroup: 'portgroup1'
      Destination Switch:  'switch1'
      Destination Network: 'network1'
      Destination Provision: 'THICK'
      Destination Autostart: YES
```

関連資料

747 ページの『Restore VM』

restore vm コマンドを使用して、以前にバックアップされた仮想マシン (VM) をリストアします。

Retrieve

retrieve コマンドは、アーカイブ・ファイルのコピー を IBM Spectrum Protect サーバーから入手します。特定ファイルまたはディレクトリー全体をリトリブすることができます。

リトリブしたいファイルに割り当てられた記述を指定するには、**description** オプションを使用してください。

pick オプションを使用すると アーカイブのリストが表示され、そのリストから リトリブするアーカイブを選択できます。

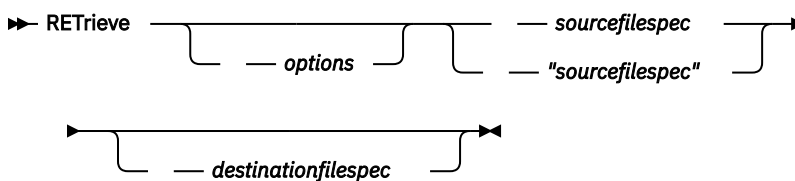
ファイルは、アーカイブ元と同じディレクトリーにリトリブすることも、別のディレクトリーにリトリブすることもできます。バックアップ/アーカイブ・クライアントは、ファイルのリストア時のデフォルトとして、**subtree** 値とともに **preservepath** オプションを使用します。

注: ディレクトリーをリトリブすると、その変更日時は、ディレクトリーがアーカイブされた 日時ではなく、リトリブの日時に設定されます。これは、バックアップ/アーカイブ・クライアントがまずディレクトリーをリトリブしてから、ファイルをディレクトリーに追加するためです。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

sourcefilespec

リトリブしたいパスおよびファイル名を指定します。ファイルのグループまたはディレクトリー内のすべてのファイルを指定するには、ワイルドカード文字を使用してください。

destinationfilespec

ファイルを書き込むパスおよびファイル名を指定します。宛先の指定がないと、クライアントはファイルをオリジナル・ソース・パスにリストアします。

注: 宛先の指定がない場合は、バックアップ/アーカイブ・クライアントは元のファイル・システムに到達可能かどうかを調べます。元のファイル・システムに到達できない場合、クライアントはファイルをリストアしません。

この問題は、dsm.sys ファイルから **virtualmountpoint** オプションを除去した場合にも発生する場合があります。この場合、異なる宛先を指定するか、元の **virtualmountpoint** オプションを dsm.sys ファイルにリストアし、クライアントを再始動してコマンドを再試行できます。

表 111. Retrieve コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
dateformat 371 ページの『Dateformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
description 379 ページの『Description』	コマンド・ラインのみ。
dirsonly 385 ページの『Dirsonly』	コマンド・ラインのみ。
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
filesonly 433 ページの『Filesonly』	コマンド・ラインのみ。
followsymbolic 434 ページの『Followsymbolic』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
fromdate 436 ページの『Fromdate』	コマンド・ラインのみ。
fromnode 437 ページの『Fromnode』	コマンド・ラインのみ。
fromowner 438 ページの『Fromowner』	コマンド・ラインのみ。
fromtime 439 ページの『Fromtime』	コマンド・ラインのみ。
ifnewer 443 ページの『Ifnewer』	コマンド・ラインのみ。
pick 499 ページの『Pick』	コマンド・ラインのみ。
preservepath 507 ページの『Preservepath』	コマンド・ラインのみ。
replace 516 ページの『Replace』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
subdir 569 ページの『Subdir』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

表 111. Retrieve コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
tapeprompt 575 ページの『Tapeprompt』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
timeformat 583 ページの『Timeformat』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
todate 587 ページの『Todate』	コマンド・ラインのみ。
totime 588 ページの『Totime』	コマンド・ラインのみ。

例

タスク

budget という名前の 単一ファイルをリトリートします。

```
retrieve /home/devel/projecta/budget
```

タスク

拡張子が .c のすべてのファイルを /home/devel/projecta ディレクトリーから リトリートします。

```
retrieve "/home/devel/projecta/*.c"
```

タスク

/home ディレクトリー内のすべてのファイルをリトリートします。

```
retrieve /home/
```

タスク

ファイル拡張子が .c のすべてのファイルを /home/devel/projecta ディレクトリーから /home/newdevel/projectn/projecta ディレクトリーに リトリートします。/projectn または /projectn/projecta ディレクトリーが 存在しない場合には作成されます。

```
retrieve "/home/devel/projecta/*.c" /home/newdevel/projectn/
```

タスク

/user/project ディレクトリー内のファイルをリトリートします。**pick** オプションを使用します。

```
ret "/user/project/*" -pick
```

タスク

/proj ディレクトリーからアーカイブされており、"2012 survey results" の記述が付いているすべてのファイルをリトリートします。

```
retrieve "/proj/*" -desc="2012 survey results"
```

タスク

記述が "my budget" のアーカイブされたファイル /home/devel/budget を /dev/rmt1 テープ装置に リトリートします。

```
mkfifo fifo
dd if=fifo of=/dev/rmt1&
dsmc retrieve -replace=yes -description="mybudget"
/home/devel/budget fifo
```

タスク

名前変更されたファイル・スペース Jaguar_OLD からその元の位置にファイルをリトリートします。次のようにソースと宛先の両方を入力してください。

```
ret Jaguar_OLD/user5/Documents/myresume.doc /Users/user5/Documents/
```

ユニコード対応でないファイル・スペースからのアーカイブのリトリブ

ユニコード対応クライアントによって名前変更されたファイル・スペースからアーカイブをリトリブしたい場合には、サーバー上のソース、およびクライアント上の宛先を指定する必要があります。

このセクションは、Mac OS X にのみ適用されます。例えば、Jaguar が始動ディスクの名前で、/Users/user5/Documents ディレクトリー内のすべての .log ファイルをアーカイブするとします。アーカイブが行われる前に、サーバーはファイル・スペースを Jaguar_OLD に名前変更します。アーカイブでは、現在の操作で指定されたデータをユニコード対応ファイル・スペース、/ に置きます。その新しいユニコード可能ファイル・スペースには、現在、操作で指定された Users/user5/Documents ディレクトリーおよび *.log ファイルしか入っていません。

ファイルを、名前変更された (古い) ファイル・スペースから、その元の位置にリトリブしたい場合には、ソースと宛先の両方を、次のように指定しなければなりません。

```
retrieve Jaguar_OLD/Users/user5/Documents/mylog.log /Users/user5/Documents/
```

Schedule

schedule コマンドは、ユーザーのワークステーションでクライアント・スケジューラーを開始します。クライアント・スケジューラーが実行していなければ、スケジュールされた作業は開始できません。

許可ユーザー: **schedule** コマンドは、ユーザーのワークステーションでクライアント・スケジューラーを開始します。クライアント・スケジューラーが実行していなければ、スケジュールされた作業は開始できません。

注:

1. **schedule** コマンドは、managedservices オプションが **schedule** に設定されている場合は使用できません。
2. Mac OSX の場合のみ、**schedule** コマンドを使用するには、dsm.sys ファイルで managedservices を none に指定します。
3. このコマンドは初期コマンド・ラインのみで有効です。対話モードまたはマクロ・ファイルでは無効です。

schedmode オプションがポーリングするよう設定されている場合には、クライアント・スケジューラーは、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) 中の **queryschedperiod** オプションで指定された時間間隔でスケジュールされたイベントをサーバーに連絡します。管理者がすべてのノードで **queryschedperiod** オプションを設定していれば、その設定値はクライアントの設定値に優先します。

TCP/IP 通信を使用している場合には、スケジュール済みイベントを実行する時になるとサーバーがプロンプトを出してワークステーションを促すことができます。そのためには、クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) または **schedule** コマンドで **schedmode** オプションを **prompted** に設定してください。

sessioninitiation オプションを **schedule** コマンドで使用して、サーバーまたはクライアントがファイアウォール経由でセッションを開始するかどうかを制御できます。

クライアント・スケジューラーの開始後は、「**Ctrl+C**」が押されるか、UNIX **kill** コマンドでスケジューラー・プロセスが停止されるか、ワークステーションが再び開始されるか、あるいは終了するためにワークステーションがオフにされるまで、スケジュールされたイベントの実行と開始が続行されます。

クライアント・スケジューラーの開始後は、「**Ctrl+C**」が押されるか、「**Q**」キーが 2 回押されるか、ワークステーションが再び開始されるか、あるいは終了するためにワークステーションがオフにされるまで、スケジュールされたイベントの実行と開始が続行されます。

注: このコマンドを対話モードで入力することはできません。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文

► SCHedule — options ►

パラメーター

表 112. スケジュール・コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
maxcmdretries 478 ページの『Maxcmdretries』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
password 495 ページの『Password』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt)
queryschedperiod 511 ページの『Queryschedperiod』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
retryperiod 527 ページの『Retryperiod』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
schedlogname 533 ページの『Schedlogname』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
schedmode 536 ページの『Schedmode』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
sessioninitiation 541 ページの『Sessioninitiation』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
tcpclientport 579 ページの『Tcpclientport』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。

例

タスク

クライアント・スケジューラーを開始します。

コマンド: `dsmc sch -password=notell`

タスク

AIX の場合: /etc/inittab ファイルにこのコマンドを入力することによって、システム・ブート時にスケジューラーを開始します。 **passwordaccess** オプションが **generate** に設定されていることを確認してください。

コマンド: `tsm::once:/usr/bin/dsmc sched > /dev/null 2>&1 #TSM`

タスク

スケジューラーを対話式に開始し、バックグラウンドで実行させておきます。

コマンド: `nohup dsmc sched 2> /dev/null &`

schedule コマンドを実行すると、スケジュール済みの作業に関するすべてのメッセージが `dsmsched.log` ファイル、またはクライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) の `schedlogname` オプションで指定したファイルに送信されます。 `schedlogname` オプションにファイル名を使用してディレクトリー・パスを指定しない場合、`dsmsched.log` は、Mac OS X の場合を除いて現行

作業ディレクトリー内に常駐することになります。Mac OS X の場合、dsmsched.log は /Library/Logs/tivoli/tsm/ ディレクトリーに常駐します。

重要: 特定の場合にログ書き込みの失敗やプロセスの終了が発生するのを避けるため、DSM_LOG 環境変数は、デフォルト許可で必要なアクセスが許可されるディレクトリーに設定してください。

関連情報

541 ページの『Sessioninitiation』

Selective

selective コマンドは、指定されているファイルをバックアップします。これらのファイルを損傷した場合や配置場所を忘れた場合には、サーバーからのバックアップ・バージョンで置き換えることができます。

選択バックアップを実行すると、ファイルをバックアップから除外したか、あるいはファイルが逐次化のための管理クラス要件を満たしていない場合を除き、すべてのファイルがバックアップの候補となります。

選択バックアップ中、ファイルが最後のバックアップ以後に変更されていない場合でも、そのファイルのコピーがサーバーへ送られます。これにより、サーバー上に同じファイルのコピーが複数存在することになる場合があります。これが起こると、サーバー上にファイルの異なる下位レベル・バージョンを意図した数だけもてない場合があります。このバージョン制限は同一ファイルからなる場合があります。これを避けるには、新規ファイルおよび変更後のファイルだけをバックアップするために **incremental** コマンドを使用してください。

単一のファイルまたはディレクトリーを選択的にバックアップすることができます。また、関連したファイルのグループをバックアップするために、ワイルドカード文字を使用することもできます。

特定のパスおよびファイルのバックアップ時に **subdir** オプションを **yes** に設定した場合には、クライアントは、そのパスの下にあるすべてのサブディレクトリー、および任意のサブディレクトリーに存在する指定されたファイルのインスタンスを再帰的にバックアップします。

選択バックアップ時には、バックアップのターゲットとなっている特定のファイルが見つからない場合でも、ディレクトリー・パスはバックアップされる場合があります。例えば、次のコマンドの場合、ファイル **bogus.txt** が存在しない場合でも **dir1** および **dir2 Documents/dir1** がバックアップされます。

```
selective /Users/user1/Documents/dir1/bogus.txt
```

```
selective "/dir1/dir2/bogus.txt"
```

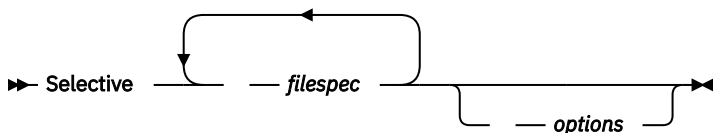
通信障害またはセッション消失が原因で **selective** コマンドが再試行される場合には、すべてのコマンドが試みている間にクライアントが転送しようとしたバイト数が転送統計に表示されます。したがって、転送済みバイト数の統計がファイル・サイズの統計などのファイル統計と一致しない場合があります。

removeoperandlimit オプションを使用して、20 個のオペランド制限を除去することを指定できます。**selective** コマンドに **removeoperandlimit** オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

filespec

バックアップしたいファイルのパスと名前を指定します。ディレクトリー内のファイルのグループまたはすべてのファイルを含めるには、ワイルドカード文字を使用してください。

複数のファイル指定を含めるには、各ファイル指定を1つのスペース文字で区切ります。複数のファイル指定が含まれており、その指定のうちの複数の親ディレクトリーを持つ場合、共通ディレクトリー・オブジェクトを複数回バックアップすることが可能です。この動作が発生する条件はランタイム依存ですが、動作そのものは悪影響を及ぼしません。

例えば、filespec が /home/amr/ice.doc /home/amr/fire.doc の場合、/home および /home/amr は 2 回バックアップされる可能性があります。ファイル・オブジェクト ice.doc および fire.doc は、1 回のみバックアップされます。

共有親ディレクトリーを複数回含めないようにする場合は、別個の、重複しない **selective** コマンドを使用して、各ファイル指定をバックアップします。

ファイル・システムをバックアップする場合は、末尾のスラッシュ (/home/) を含めます。

20 個のオペランドの制限があります。この制限は、ワイルドカードが UNIX シェル・コマンド・プロセッサによって展開された場合にセッション数が過多になることを回避するためのものです。ワイルドカード (「home/docs/*」) が含まれているファイル指定を引用符で囲むことで、シェルが展開しても 20 個のオペランド制限を超えないようにすることができます。

removeoperandlimit オプションを使用して、20 個のオペランド制限を除去することを指定できます。**removeoperandlimit** オプションを指定すると、20 個のオペランド制限は実行されず、使用可能なリソースまたはその他のオペレーティング・システム制限によってのみ制限されます。例えば、21 個のファイル指定をバックアップするには、次のようにして 20 個のオペランド制限を除去します。

```
selective -removeoperandlimit filespec1 filespec2 ... filespec21
```

ファイ指定の代わりに **filelist** オプションを使用して、この操作に含めるファイルを識別することができます。ただし、これらの 2 つの方法を、同時に使用することはできません。ファイル指定パラメーターを含め、かつ **filelist** オプションを使用することはできません。**filelist** オプションが指定された場合、含まれているファイル指定はいずれも無視されます。

表 113. Selective コマンド: 関連オプション

オプション	使用先
changingretries 357 ページの『Changingretries』	クライアント・システム・オプション・ファイル (dsm.sys) またはコマンド・ライン。
compressalways 363 ページの『Compressalways』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
compression 363 ページの『Compression』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
dirsonly 385 ページの『Dirsonly』	コマンド・ラインのみ。
filelist 429 ページの『Filelist』	コマンド・ラインのみ。
filesonly 433 ページの『Filesonly』	コマンド・ラインのみ。
preserveaccessdate 506 ページの『Preserveaccessdate』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

表 113. *Selective* コマンド: 関連オプション (続き)

オプション	使用先
<code>removeoperandlimit</code> 515 ページの 『 Removeoperandlimit 』	コマンド・ラインのみ。
<code>snapshotcachesize</code> 554 ページの 『 Snapshotcachesize 』	クライアント・オプション・ファイル (dsm.opt) または include.fs オプション。
<code>snapshotproviderfs</code> 556 ページの 『 Snapshotproviderfs 』	サーバー・スタンザ内のシステム・オプション・ファイル (dsm.sys) または include.fs オプション。
<code>snapshotroot</code> 557 ページ の『 Snapshotroot 』	コマンド・ラインのみ。
<code>subdir</code> 569 ページの 『 Subdir 』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。
<code>tapeprompt</code> 575 ページの 『 Tapeprompt 』	クライアント・ユーザー・オプション・ファイル (dsm.opt) またはコマンド・ライン。

例

タスク

/home/devel ディレクトリーの `proja` ファイルをバックアップします。

コマンド: `selective /home/devel/proja`

タスク

/home/devel ディレクトリー内で、ファイル名が `proj` で始まるすべてのファイルをバックアップします。

コマンド: `selective "/home/devel/proj*"`

タスク

/home/devel ディレクトリー内で、ファイル名が `proj` で始まるすべてのファイルをバックアップします。 /user/home ディレクトリー内の `budget` という名前の単一ファイルをバックアップします。

コマンド: `selective "/home/devel/proj*" /user/home/budget`

タスク

/home ファイル・システムをバックアップします。

コマンド: `selective /home/ -subdir=yes`

タスク

/usr ファイル・システムのスナップショットを開始し、そのスナップショットを /snapshot/day1 としてマウントしたと想定し、/usr/dir1/sub1 ディレクトリー・ツリーをローカル・スナップショットから選択バックアップし、それを IBM Spectrum Protect サーバー上でファイル・スペース名 /usr の下で管理します。

コマンド: `dsmc sel "/usr/dir1/sub1/*" -subdir=yes -snapshotroot=/snapshot/day1`

ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け

`snapshotroot` オプションを **selective** コマンドで使用し、併せて論理ボリュームのスナップショットを提供する独立系ソフトウェア・ベンダー・アプリケーションを使用することにより、ローカル・スナップショット上のデータを、IBM Spectrum Protect サーバーに保管されている実ファイル・スペース・デー

タと関連付けます。snapshotroot オプションは、ボリューム・スナップショットが作成したデータを管理する機能のみを提供し、ボリューム・スナップショットを取る機能は提供しません。

AIX のみ: スナップショット・ベースの選択バックアップを実行するには、オプション snapshotproviderfs=JFS2 を指定します。

Set Access

set access コマンドは、ユーザーのバックアップ・バージョンまたはアーカイブ済みコピーへのアクセス権を他のノードのユーザーに付与します。

set access コマンドを使用して、バックアップ・イメージへのアクセス権を他のノードのユーザーに与えることもできます。

ディレクトリー内の特定のファイルまたはイメージ、複数のファイルまたはイメージ、またはすべてのファイルに対するアクセス権を別のユーザーに与えることができます。他のユーザーにアクセスを許可すると、そのユーザーはオブジェクトをリストアまたはリトリブすることができます。アーカイブへのアクセスを許可するか、バックアップへのアクセスを許可するかは、このコマンドで定義します。

VMware 仮想マシンでは、別のノードのユーザーに、特定の仮想マシンのバックアップに対するアクセス権を与えることができます。

ノードが別の IBM Spectrum Protect サーバーにエクスポートされる場合、インポート・サーバー上でアクセス・ルールが変更される可能性があります。アクセス・ルールがエクスポート・サーバー上のすべてのファイル・スペースに適用される場合、インポート・サーバーでのアクセス・ルールは、インポートされるファイル・スペースのみに制限されます。ファイル・スペースはセキュリティ上の理由により、インポート・サーバー上のアクセス・ルールで制限されます。さらに、リストアまたはリトリブの実行時、ファイル指定の中のワイルドカード文字が最初に現れたときに、アクセス・ルールでは認識されません。つまり、ファイル指定にワイルドカード文字を使用してリストアまたはリトリブを実行した場合、サブディレクトリーは無視されます。

ヒント: 別の IBM Spectrum Protect サーバーにノードをエクスポートする場合は、アクセス・ルール内のファイル指定として単一のワイルドカード文字を使用しないでください。代わりに、それぞれのファイル・スペースごとにアクセス・ルールを作成してください。

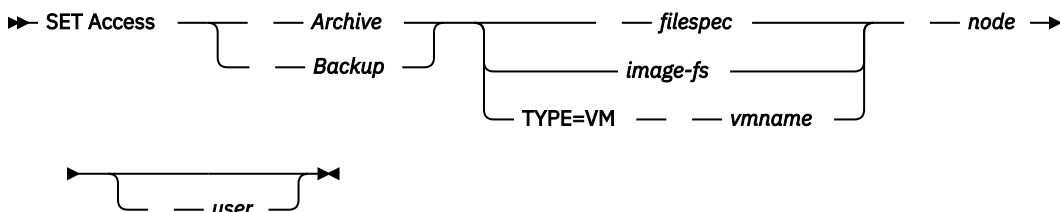
注: 単一コマンドを使用してアーカイブとバックアップの両方へのアクセス権を与えることはできません。

ユニコード変換中に既存のファイル・スペースが名前変更された場合、ファイル・スペースに対して定義されたすべてのアクセス規則は、元のファイル・スペースに対して引き続き適用されます。ただし、新規のユニコード・ファイル・スペースに適用するアクセス規則は、新規の規則を定義する必要があります。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

Archive

アーカイブしたファイルまたはイメージへのアクセスを許可します。

Backup

ファイルまたはイメージのバックアップ・バージョンへのアクセスを許可します。

filespec

別のノードまたはユーザーにアクセス権を付与しようとしているパス、ファイル、イメージ、またはディレクトリーを指定します。ファイルまたはイメージのグループ、もしくはディレクトリーのすべてのファイル、ディレクトリー・ブランチ内のすべてのオブジェクト、あるいはファイル・システムのすべてのオブジェクトを指定するには、ワイルドカード文字を使用します。ユーザーが所有し、サーバーにバックアップしたすべてのファイルまたはイメージに対するアクセス権を与えるには、ファイル指定に単一アスタリスク "*" を使用してください。コマンド `set access backup "*" node` を入力すると、サーバーで検査は行われず、バックアップされたオブジェクトが少なくとも1つのあると見なされます。

現行の作業ディレクトリーのブランチへのアクセスを許可する場合は、そのブランチを指定するだけで済みます。現行作業ディレクトリーのブランチにないオブジェクトへのアクセス権を与える場合には、完全なパスを指定しなければなりません。アクセス権を与えるファイル指定は、サーバー上に、少なくとも1つのバックアップ・バージョンあるいはアーカイブ・コピー・オブジェクト (ファイルまたはディレクトリー) を持っている必要があります。

指定されたディレクトリー内のすべてのファイルを指定するには、コマンド・ラインに `/home/mine/proj1/*` を入力してください。

あるレベルの下すべてのオブジェクトにアクセス権を与えるには、アスタリスク、ディレクトリー区切り文字、およびファイル指定の終わりにアスタリスクを使用してください。例えば、`home/test` の下すべてのオブジェクトにアクセス権を与えるには、ファイル指定 `home/test/*/*` を使用してください。

重要: 形式 `/*/*` を単独で使用した場合は、指定されたディレクトリーのオブジェクトに対するアクセス権は与えられず、指定されたディレクトリーの下ディレクトリーのオブジェクトのみにアクセス可能となります。

規則は、ルート・ディレクトリーを考慮する場合と本質的に同じです。別のユーザーがルート・ディレクトリー内およびその下すべてのファイルおよびディレクトリーにアクセスできるようにしたい場合は、1つの `set access` コマンドに `/*` を入力し、別のコマンドに `/*/*` を入力します。最初の `/*` は、ルート・ディレクトリーにある全ディレクトリーと全ファイルに対するアクセス権を与えます。2番目の `/*` は、ルート・ディレクトリーの下にある全ディレクトリーと全ファイルに対するアクセス権を与えます。

例えば、次のようにします。

- ディレクトリー構造は、`/home/sub1/subsub1` のようにマルチレベルです。
- `/home` ディレクトリーにはファイル `h1.txt` および `h2.txt` があります。
- `/home/sub1` ディレクトリーにはファイル `s1.htm` があります。
- `/home/sub1/sub2` ディレクトリーにはファイル `ss1.cpp` があります。

`/home/sub1/sub2` ディレクトリー のすべてのファイルへのアクセスを許可するには、次のように入力します。

```
set access backup /home/sub1/sub2/* * *
```

`/home` ディレクトリー のファイルへのアクセスのみを許可するには、次のように入力します。

```
set access backup /home/* * *
```

`/home` ディレクトリー内、およびその下すべてのディレクトリーにあるすべてのファイルへのアクセスを許可するには、次のように入力します。

```
set access backup /home/* * *  
set access backup /home/*/* * *
```

image-fs

共有するイメージ・ファイル・システムの名前。ここにアスタリスク (*) を指定すると、アクセスを認可するユーザーが所有するすべてのイメージへのアクセスが可能になります。

-TYPE=VM vmname

別のユーザーに VMware 仮想マシンのバックアップへのアクセス権を与えようとしてこのコマンドを使用している場合、このパラメーターが必要です。 *vmname* オプションは、-TYPE=VM が指定されている場合のみ、指定できます。 *vmname* はアクセスを許可しようとしている VMware 仮想マシンの名前です。

node

アクセスを許可しようとするユーザーのクライアント・ノードを指定します。ワイルドカードを使用すると、類似のノード名を持つ複数のノードにアクセスを許可することができます。すべてのノードにアクセスできるようにするには、アスタリスク (*) を使用します。

user

これは、指定されたノードにおいて指定されたユーザーへのアクセスを制限する任意指定パラメーターです。バックアップまたはアーカイブされたデータにすべての許可ユーザーがアクセスすることを許可するには、ユーザーとして **root** を指定します。

例

タスク

/home/user ディレクトリーから budget ファイルをリストアする権限 node_2 のユーザーに付与します。

```
set access backup /home/user/budget node_2
```

タスク

/home/devel/proja ディレクトリー のすべてのファイルをリトリブする権限を node_3 に付与します。

```
set ac archive /home/devel/proja/ node_3
```

タスク

名前の末尾が bldgb であるすべてのノードに、ファイル・スペース名が project のディレクトリーのすべてのバックアップ・バージョンをリストアする権限を与えます。

```
set ac b "{project}/*" "*bldgb"
```

タスク

node1 上のすべての許可ユーザーに、/home/devel/projb ディレクトリーのすべてのファイルをリトリブする権限を付与します。

```
set access archive /home/devel/projb/ node1 root
```

タスク

ディレクトリー /home/devel/proja にマウント済みファイル・スペースのすべてのイメージをリストアする権限を node_5 におけるユーザー serena に付与します。

```
set acc backup "home/devel/proja/*/*" node_5 serena
```

タスク

myTestVM という名前の VMware 仮想マシンでバックアップされたファイルをリストアする権限を、**myOtherNode** という名前のノードに与えます。

```
set access backup -TYPE=VM myTestVM myOtherNode
```

Set Event

set event コマンドを使用することで、アーカイブ・データが削除される状況を指定することができます。

set event コマンドは、以下の方法で 사용할 ことができます。

- 割り当て済み保存期間の終了時にデータが削除されないようにする (削除保留)
- アーカイブ・コピー・グループによって定義されたように有効期限を満了させる (削除保留の解除)
- 特定のイベントの発生時に期限切れクロックの実行を開始する (イベントの発生をサーバーに通知する)

影響を受けるオブジェクトを指定するときは、標準のファイル指定 (ワイルドカードを含む)、**filelist** オプションで指定したファイルに名前が含まれるファイルのリスト、または **description** オプションで指定した説明を含むアーカイブ・ファイルのグループを使用します。

注 : <filespec> のみを使用する場合は、ファイル指定に一致するファイルまたはフォルダーのすべてのアーカイブ・コピーが影響を受けます。特定バージョンのファイルに影響を与えるには、**-pick** オプションを使用して、表示されるリストから対象を選択します。

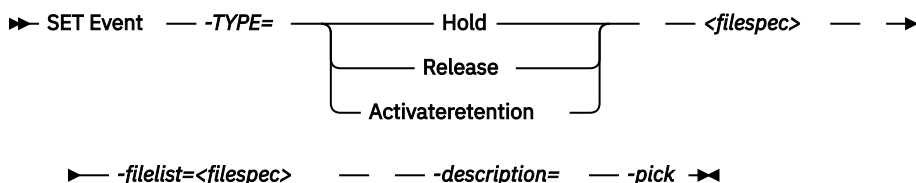
下位レベル・サーバーとの対話

イベント・ベースのポリシーをサポートしていないサーバー (IBM Spectrum Protect 5.2.2 より前) にクライアントが接続されているときに **set event** コマンドが発行された場合、コマンドは拒否され、現行サーバーがイベント・ベースのポリシーをサポートしていないことを示すエラー・メッセージが表示されます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

構文



パラメーター

TYPE=

イベント・タイプの設定を指定します。このパラメーターは、必ず指定する必要があります。

hold

期限切れポリシーとは無関係に、オブジェクトが削除されないようにします。

release

通常のイベント制御による期限切れを実行できるようにします。

activateretention

制御イベントが発生したことをサーバーにシグナル通知し、期限切れクロックの実行を開始します。

-pick

イベントを適用するためにユーザーが選択するオブジェクト・リストが表示されます。

以下のオプションを使用することも可能です。これらのオプションは、通常の目的を果たすように機能します。

- Dateformat
- Numberformat
- Noprompt
- Subdir
- Timeformat

例

タスク

以下の例は、オブジェクトを再バインドした場合の **set event** コマンド `set event type=hold /home/accounting/ledgers/*05.books` からの詳細な統計出力を示しています (アーカイブ済みの注釈またはその他の注釈と対照)。

```
Rebinding--> 274 /home/accounting/ledgers/
  jan05.books
Rebinding--> 290 /home/accounting/ledgers/
  feb05.books

Total number of objects archived:      0
Total number of objects failed:        0
Total number of objects rebound:      2
Total number of bytes transferred:    0 B
Data transfer time:                    0.00 sec
Network data transfer rate:            0.00 KB/sec
Aggregate data transfer rate:          0.00 KB/sec
Objects compressed by:                 0%
Elapsed processing time:                00:00:02
```

タスク

`set event` コマンド `set event type=activate /user/tsm521/common/unix` に `-pick` オプションを使用すると、コマンド名ではなくイベント・タイプが表示されます。

```
Scrollable PICK Window - Retention Event : ACTIVATE

#      Archive Date/Time      File Size  File
-----
1. | 08/05/2003 08:47:46      766 B      /user/tsm521
   |                       /common/unix
2. | 08/01/2003 10:38:11      766 B      /user/tsm521
   |                       /common/unix
3. | 08/05/2003 08:47:46     5.79 KB     /user/tsm521
   |                       /common/unix
4. | 08/01/2003 10:38:11     5.79 KB     /user/tsm521
   |                       /common/unix
5. | 08/05/2003 08:47:46    10.18 KB     /user/tsm521
   |                       /common/unix
```

関連情報

[371 ページの『Dateformat』](#)

[492 ページの『Numberformat』](#)

[491 ページの『Noprompt』](#)

[569 ページの『Subdir』](#)

[583 ページの『Timeformat』](#)

Set Netappsvm

set netappsvm コマンドは、**set password** コマンドで指定された、クラスター管理サーバーのログイン資格情報を、NetApp ストレージ仮想マシン、データ・ストレージ仮想マシン (SVM) 名 (データ Vserver) に関連付けます。このコマンドは、クラスター NetApp ボリュームのスナップショット差分増分バックアップを作成する前に入力する必要があります。

通常、このコマンドは 1 回のみ入力されます。パラメーターは保管され、ストレージ仮想マシンで管理されるクラスター化ボリュームの次回バックアップ時に再使用されます。ストレージ仮想マシンを別のクラスター管理サーバーに移動する場合、このコマンドを再入力して、新規クラスター管理サーバーを指定する必要があります。必要に応じて、**set password** コマンドを使用してログイン資格情報を変更します。

サポートされるクライアント

このコマンドは、clustered-data ONTAP C mode ファイル・サーバー・ボリュームのスナップショット差分バックアップを実行する Linux のバックアップ/アーカイブ・クライアントに対して有効です。

構文

```
➡ SET NETAPPSVM svm_hostname — cms_hostname — svm_name ➡
                  — -remove — svm_hostname
```

パラメーター

svm_hostname

保護したいボリュームのボリュームおよび論理インターフェース (LIF) を管理するストレージ仮想マシンのホスト名または IP アドレスを指定します。

cms_hostname

クラスター管理サーバーのホスト名または IP アドレスを指定します。 **set password** コマンドを使用してログイン資格情報を設定した場合は、このクラスター管理サーバーに対して指定したのと同じホスト名を指定します。

svm_name

マウントされたボリュームを管理するデータ SVM の名前を指定します。NetApp SVM 管理者に連絡して、仮想マシンに割り当てられたデータ SVM 名を確認してください。

-remove svm_hostname

以前に関連付けられていたクラスター管理サーバーから SVM の関連付けを解除します。SVM ホスト名を指定してください

誤ってストレージ仮想マシンを 7 モード・ファイル・サーバーに関連付けた場合は、このパラメーターを指定できます。7 モード・ファイル・サーバーを削除してから、クラスター管理サーバーに関連付けた場合、**set password** コマンドを使用してクラスター管理サーバーのログオン資格情報を設定します。

例

次のようにして、ストレージ仮想マシンに対する資格情報およびアクセス権を構成します。

```
set netappsvm svm_example.com cms_filer1.example.com svm_2
dsmc set password cms_filer1.example.com user_name password
```

ストレージ仮想マシン用に作成された関連付けを削除します。

```
set netappsvm -remove svm_example.com
```

関連タスク

117 ページの『[Clustered Data ONTAP NetApp ファイル・サーバー・ボリュームの保護](#)』

Clustered Data ONTAP 構成の一部である NetApp ファイル・サーバー (C-Mode ファイル・サーバー) 上にあるボリュームのスナップショット差分増分バックアップを作成できます。

Set Password

set password コマンドを使用して、ワークステーションの IBM Spectrum Protect パスワードの変更、別のサーバーへのアクセスに使用する資格情報の設定を行います。

set password コマンドを入力するときに旧および新規パスワードを省略した場合には、旧パスワードについては一度、新規パスワードについては 2 度プロンプトが出されます。

パスワードの長さは、最大で 63 文字です。パスワードに関する制約は、パスワードが保管および管理されている場所、およびクライアントが接続する IBM Spectrum Protect サーバーのバージョンによって異なります。

ご使用の IBM Spectrum Protect サーバーがバージョン 6.3.3 以降で、パスワードの認証に LDAP ディレクトリー・サーバーを使用する場合、以下が適用されます。

パスワードの作成には、以下に挙げる文字のいずれかを使用してください。

```

a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 . ! @ # $ % ^ & * _ - + = ` ( )
| { } [ ] : ; < > , ? / ~

```

パスワードは大/小文字の区別があり、LDAP ポリシーにより設定されるより多くの制約事項に従います。

ご使用の **IBM Spectrum Protect** サーバーがバージョン **6.3.3** 以降で、パスワードの認証に **LDAP ディレクトリー・サーバー** を使用しない場合、以下が適用されます。

パスワードの作成には、以下に挙げる文字のいずれかを使用してください。

```

a b c d e f g h i j k l m n o p q r s t u v w x y z
A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 . ! @ # $ % ^ & * _ - + = ` ( )
| { } [ ] : ; < > , ? / ~

```

パスワードは、IBM Spectrum Protect サーバー・データベースに保管され、大文字小文字を区別しません。

要確認:

コマンド・ラインでは、1 つ以上の特殊文字を含むすべてのパラメーターを引用符で囲んでください。引用符を指定しないと、特殊文字はシェルのエスケープ文字、ファイルのリダイレクト文字、またはオペレーティング・システムにとって重要なその他の文字として解釈される可能性があります。

AIX、Linux、および Solaris システムの場合:

コマンド・パラメーターを単一引用符 (') で囲みます。

コマンド・ライン例:

```

dsmc set password -type=vmguest 'Win 2012 SQL' 'tsml2dag¥administrator'
'7@#$$%^&7'

```

特殊文字が含まれるパスワードをオプション・ファイルに入力する場合は、引用符は必要ではありません。

制約事項: **set password** コマンドは、ローカルに保管されるパスワードに関して、連邦情報処理標準 (FIPS) 対応のオペレーティング・システム環境をサポートしていません。

FIPS サポートについては、[技術情報 2007756](#) を参照してください。

この制限は、AIX、Linux、および Solaris クライアントに適用されます。

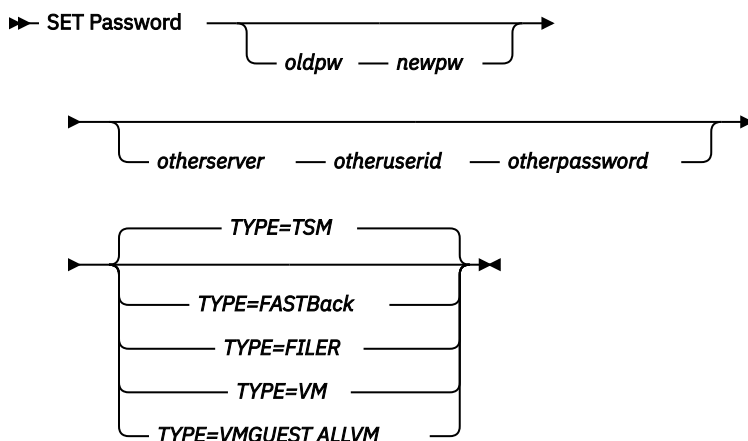
サポートされるクライアント

このコマンドは、すべてのクライアントに有効です。

以下のパラメーターは、VMware 操作に適用されます。これらの操作は、クライアントを IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして使用している場合にのみ使用可能です。

- TYPE=DOMAIN
- TYPE=VM
- TYPE=VMGUEST

構文



パラメーター

oldpw

ワークステーション用の現行パスワードを指定します。

newpw

ワークステーション用の新規パスワードを指定します。

other_server other_user_id other_password

これらの3つのパラメーターは、クライアントが別のサーバー（ファイラーや ESXi ホストなど）にアクセスするために使用する属性を指定します。

other_server

クライアントがファイルを保護するためにアクセスできるサーバーのホスト名または IP アドレスを指定します。

other_user_id

クライアントが他のサーバーにログオンするために使用するサーバー上のアカウントのユーザー ID。このアカウントは、ユーザーが他のサーバーにログオンした後に実行する操作を行うために必要な特権を持っている必要があります。

other_password

他のサーバー上のユーザー ID に関連付けられているパスワード。

TYPE

このパスワードがバックアップ/アーカイブ・クライアント用であるか、または別のタイプのサーバー用であるかを指定します。

ご使用のバックアップ/アーカイブ・クライアント用のパスワードを指定するには、TYPE=TSM を使用します。デフォルト・タイプは TYPE=TSM です。

Linux クライアントおよび Windows クライアントで、Windows FastBack 災害復旧ハブ サーバーの FastBack ボリュームをマウントおよびマウント解除するために必要な Tivoli Storage Manager FastBack 資格情報を保管するには、TYPE=FastBack を使用します。

vStorage バックアップ・サーバーのパスワード・ファイルには、VMware Virtual Center システム用の Windows 管理者 ID、または特定の ESX サーバー用の UNIX ユーザー ID のどちらかが必要です。FastBack のプロキシ・バックアップの場合、パスワード・ファイルに FastBack 管理者 ID およびパスワードが含まれている必要があります。以下にいくつかの例を挙げます。

```
dsmc set password 192.0.2.24 admin admin 123 -type=fastback
```

```
dsmc set password 192.0.2.24 WORKGROUP:admin admin 123 -type=fastback
```

```
dsmc set password windserv administrator windpass4 -type=fastback
```

重要: バックアップ/アーカイブ FastBack サブコマンドを入力する前に、リポジトリから バックアップ/アーカイブ・クライアントに FastBack ボリュームをマウントしたりアンマウントしたりするために必要なユーザー資格情報を定義する必要があります。資格情報を定義するには、fbserver オプションを使用します。

以下は、必要な各種構成および資格情報の簡単な説明です。

- バックアップ/アーカイブ・クライアントは、専用 vStorage バックアップ・サーバーにインストールされます。vStorage バックアップ・サーバー上の クライアントは、複数のネットワーク共有リポジトリに接続している必要があります。

クライアントが接続されているそれぞれのネットワーク共有リポジトリごとに、以下の手順に従ってください。

1. FastBack Manager からのリモート・ネットワーク・アクセス用にリポジトリを構成します。IBM Knowledge Center (<http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS9NU9/welcome>) の Tivoli Storage Manager FastBack 製品資料を参照してください。

この手順は、リモートからリポジトリに接続するためのドメイン名、ネットワーク共有ユーザー ID、およびネットワーク共有パスワードを確立します。

2. バックアップ/アーカイブ・クライアント・ワークステーションで、次のコマンドを手動で入力します。

```
dsmc set password type=fastback FBServer domain:networkaccessuserid  
networkaccesspassword
```

fbserver オプションは、FastBack サーバー・ワークステーションの短縮ホスト名を指定します。FastBack DR ハブの場合、fbserver オプションは、DR ハブがインストールされているワークステーションの短縮名を指定します。

Networkaccessuserid は、Windows 管理者 ID または FastBack 管理 ID です。

Domain はユーザー ID のドメイン名です。

Networkaccesspassword は、Windows 管理者パスワードまたは FastBack 管理パスワードです。

3. これらの資格情報は、fbserver オプションを使用して指定した短縮ホスト名に基づいて取得されます。

Linux、および Windows の各システムで、このパスワードがファイル・サーバー上でのスナップショット差分操作であることを指定する場合は、TYPE=FILER を使用します。

TYPE=FILER の場合は、ファイル・サーバー名、およびそのファイル・サーバーにアクセスするために使用するユーザー ID とパスワードを指定する必要があります。例: `dsmc set password -type=filer myfiler filerid filerpasswd`。

TYPE=FILER を指定すると、パスワードは、有効であるかを検証されずに、パスワード・ファイル (TSM.sth) に保管されます。TYPE=FILER を指定して保管されたパスワードは、クライアントのノード間で共有できます。例えば、NODE_A によって保管されたパスワードを NODE_B が使用できます。ファイル・サーバーごとに 1 つの資格情報のセットのみが保管されます。

TYPE=VM を使用して、ESX サーバーまたは vCenter サーバーへのログオンに使用するパスワードを設定します。

```
dsmc SET PASSWORD -type=VM hostname administrator password
```

ここで、

hostname

バックアップ、リストア、または照会する VMware VirtualCenter または ESX サーバーを指定します。このホスト名は、**vmchost** オプションで使用されているホスト名の構文と一致していなければなりません。つまり、**vmchost** でホスト名ではなく IP アドレスを使用している場合は、このコマンドでも、短縮ホスト名や完全修飾ホスト名ではなく、IP アドレスを指定する必要があります。

administrator

vCenter ホストまたは ESXi ホストへのログオンに必要なアカウントを指定します。

password

vCenter または ESXi の管理者に指定したログイン・アカウントに関連付けられたパスワードを指定します。

プリファレンス・エディターを使用して、vmchost オプション、vmcuser オプション、および vmcpw オプションを設定します。

さらに、クライアント・オプション・ファイルに **vmchost** オプションを設定してから、**set password** コマンドを使用して、そのホスト名を、そのホストへのログオンに使用される管理者アカウントおよび管理者アカウント・パスワードに関連付けることができます。例えば、**set password TYPE=VM myvmchost.example.com administrator_name administrator_password** と指定します。

Linux および Windows クライアントで、仮想マシンを保護するために **INCLUDE.VMTSMVSS** オプションを使用する場合は、**TYPE=VMGUEST** を使用します。**set password** コマンドでは、次の形式を使用します。

```
set password -type=vmguest guest_VM_name administrator password
```

ここで、

guest_VM_name

保護する仮想マシン・ゲストの名前を指定します。

administrator

ゲスト VM へのログオンに必要なアカウントを指定します。

password

ログイン・アカウントに関連付けるパスワードを指定します。

INCLUDE.VMTSMVSS オプションで保護されている複数の仮想マシンへ、同じ資格情報を使用してログオンする場合、**ALLVM** パラメーターを指定すると、すべての仮想マシンに対するパスワードを設定できます。**ALLVM** パラメーターによって、**INCLUDE.VMTSMVSS** オプションに組み込まれているどのゲストにクライアントがログオンする場合でも、同じ資格情報が使用されるように設定できます。次のコマンド **TYPE=TSM** は、**ALLVM** の使用例を示しています。この例では、**INCLUDE.VMTSMVSS** オプションに含めたどの仮想マシンへのログオンにも、ユーザー名『Administrator』とパスワード『Password』が使用されます。

```
set password -type=vmguest ALLVM Administrator Password
```

共有資格情報と個別資格情報の組み合わせも設定できます。例えば、使用環境では、大部分の仮想マシンは同じ資格情報を使用しているが、いくつかの仮想マシンは異なる資格情報を使用している場合に、複数の **set password** を使用して資格情報を指定できます。例えば、大部分の仮想マシンは、ログイン名として "Administrator1" を、パスワードとして "Password1" を使用しているとします。また、VM2 という名前の 1 つの仮想マシンは、ログイン名として "Administrator2" を、パスワードとして "Password2" を使用しているとします。このシナリオに対して、以下のコマンドを使用して資格情報を設定します。

```
set password -type=vmguest ALLVM Administrator1 Password1 (大部分の VM の資格情報を設定する)。
```

```
set password -type=vmguest VM2 Administrator2 Password2 (VM2 固有の資格情報を設定する)。
```

例

次の例では、**set password** コマンドを使用します。

タスク

パスワードを osecret から nsecret に変更します。


```
set password osecret nsecret
```

タスク

ファイル・サーバー myFiler.example.com の root ユーザーに、ユーザー ID とパスワードを設定します。

```
dsmc set password -type=fileer myFiler.example.com root
```

Please enter password for user id "root@myFiler.example.com": ***** Re-enter the password for verification:***** ANS0302I 正常に実行されました。

タスク

ファイル・サーバー myFiler.example.com の root ユーザーに、ユーザー ID とパスワードを設定します。

```
dsmc set password -type=fileer myFiler.example.com root secret
```

タスク

FastBack サーバー myFastBackServer のユーザー ID とパスワードをセットアップします。-fbserver オプションは、サーバー名のために **archive fastback** コマンドおよび **backup fastback** コマンドで使います。

```
dsmc set password -type=FASTBack myFastBackServer myUserId 'pa$sword'
```

重要:

1. dsmc set password -type=fastback コマンドは、専用クライアント・プロキシー・ワークステーションで、バックアップ/アーカイブ・クライアントが接続すると予期されている FastBack リポジトリごとに 1 回繰り返す必要があります。
2. ネットワーク共有リポジトリの場合は、dsmc set password -type=fastback コマンドを dsmc set password -type=fastback myFBServer domainName:userId password の形式で発行します。

指定するサーバー名 (この例では myFBServer) は、**backup fastback** コマンドあるいは **archive fastback** コマンドの **-fbserver** オプションで指定した名前と一致している必要があります。

3. FastBack サーバーまたは FastBack 災害復旧ハブの場合、指定されるユーザー ID とパスワードには FastBack 管理者特権が必要です。

dsmc set password -type=fastback コマンドは、バックアップ/アーカイブ・クライアントが接続すると予想される FastBack DR ハブ上の FastBack サーバー・ブランチ・リポジトリごとに 1 回発行する必要があります。

タスク

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、myFBServer という短縮ホスト名の FastBack サーバー・リポジトリに接続されています。user ID は、リポジトリ共有への読み取り/書き込みアクセス権限を持っている FastBack ネットワーク・ユーザー ID です。DOMAIN は、ユーザー ID が所属するドメインです。myNetworkPass は、そのユーザー ID に対応するパスワードです。

```
dsmc set password -type=fastback myFbServer DOMAIN:USERID myNetworkPass
```

タスク

バックアップ/アーカイブ・クライアントは、myFbDrHub という短縮ホスト名の DR ハブ・マシン上のリポジトリに接続されています。ユーザー ID は、Windows 管理者 ID です。DOMAIN は、DR Hub マシンが所属するドメインです。myNetworkPass は、その管理者 ID の対応するパスワードです。

```
dsmc set password -type=fastback myFbDrHub DOMAIN:administrator adminPasswd
```

関連資料


546 ページの『Snapdiff』

snapdiff (スナップショット差分) オプションを **incremental** コマンドと一緒に使用することにより、増分バックアップ処理が簡素化されます。このコマンドは、変更されたファイルについてすべてのポリシー

ームをスキャンするのではなく、NetApp によって変更が報告されたファイルの増分バックアップを実行します。

set vmtags

set vmtags コマンドは、VMware インベントリー・オブジェクトに追加できるデータ保護タグおよびカテゴリを作成します。VMware vSphere PowerCLI バージョン 5.5 R2 以降などのツールでタグを指定することで、これらの VMware オブジェクト内の仮想マシンの IBM Spectrum Protect バックアップを管理することができます。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

バックアップを管理するために IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用している場合、最初に **set vmtags** コマンドを実行する必要はありません。タグおよびカテゴリは自動的に作成されます。

これらのタグを VMware インベントリー・オブジェクトに適用するためにスクリプトを記述している場合、**set vmtags** コマンドを 1 回だけ発行すれば、データ保護タグが作成され、その後に VMware インベントリーに追加されます。

以下の VMware インベントリー・オブジェクト・レベルで仮想マシン・バックアップを管理することができます。

- データ・センター
- フォルダー（「ホストおよびクラスター」フォルダー、「VM およびテンプレート」フォルダー）
- ホスト
- ホスト・クラスター
- リソース・プール
- 仮想マシン

サポートされるタグのリストについては、「サポートされるデータ保護タグ」を参照してください。

スケジュールに関連するタグの場合、仮想マシンは、スケジュールによって保護されている保護セット内になければなりません。保護セットは、Schedule (IBM Spectrum Protect) タグが割り当てられたコンテナ内の仮想マシンから構成されます。

set vmtags コマンドを実行した後、タグを VMware オブジェクトに割り当て、仮想マシンの保護を管理することができます。例えば、スケジュールされたバックアップ・サービスでの仮想マシンの組み込みまたは除外、バックアップの保存ポリシーの指定、スナップショットのデータ整合性の設定、保護する仮想マシン・ディスクの選択などです。

データ保護タグが既に存在する場合、**set vmtags** コマンドを実行してもタグは再作成されません。

旧バージョンのデータ・ムーバーからアップグレードする場合、**set vmtags** コマンドを再実行すると、新規バージョンのデータ・ムーバーで使用可能な新規タグが作成されます。

要件: **set vmtags** コマンドを実行する前に、以下の要件が満たされていることを確認してください。

- VMware vCenter Server は、バージョン 6.0 Update 1 以上でなければなりません。
- vmchost オプションが、Windows データ・ムーバーの場合は dsm.opt ファイルで、Linux データ・ムーバーの場合は dsm.sys ファイルで構成されている必要があります。vmchost 値に関連付けられているユーザー名とパスワードも設定されている必要があります。まだ設定されていない場合、**dsmc set password** コマンドを使用して、ユーザー名とパスワードを設定することができます。

サポートされるクライアント

このコマンドは、VMware 資産を保護する vStorage バックアップ・サーバー上にインストールされている、サポートされる Linux x86_64 クライアントでのみ有効です。

構文

▶ SET VMTAGS ◀

パラメーター

このコマンドにパラメーターは必要ありません。

例

タスク

VMware インベントリー・オブジェクトに追加できるデータ保護タグおよびカテゴリを作成します。

```
dsmc set vmtags
```

関連概念

298 ページの『[管理クラスおよびコピー・グループ](#)』

管理クラスとは、データのバックアップおよびアーカイブに関して特定のストレージ管理要件を設定し、保管してあるバックアップおよびアーカイブ・コピー・グループの集合です。

関連資料

780 ページの『[サポートされるデータ保護タグ](#)』

IBM Spectrum Protect データ保護タグを VMware インベントリー・オブジェクトに割り当てることで、仮想マシン・バックアップを管理する方法を制御することができます。

602 ページの『[Vmchost](#)』

vmchost オプションを **backup VM**、**restore VM**、または **query VM** コマンドで使用して、バックアップ、リストア、あるいは照会の対象である VMware VirtualCenter または ESX サーバーのホスト名を指定します。

630 ページの『[Vmtagdatamover](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアント (データ・ムーバー) でのタグ付けサポートを有効にするには、vmtagdatamover オプションを使用します。このオプションが有効にされている場合、クライアントは、vSphere Web クライアントの IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン あるいは VMware vSphere PowerCLI バージョン 5.5 R2 以降などのツールによって設定されたデータ保護タグに従って、VMware インベントリー・オブジェクト内の仮想マシンのバックアップを管理します。

772 ページの『[Set Password](#)』

set password コマンドを使用して、ワークステーションの IBM Spectrum Protect パスワードの変更、別のサーバーへのアクセスに使用する資格情報の設定を行います。

データ保護のタグ付けの概要

仮想マシンのデータ保護を管理するために、IBM Spectrum Protect タグを VMware インベントリー・オブジェクトに割り当てることができます。VMware オブジェクトにタグを割り当てるには、vSphere Web クライアントの IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン でデータ保護設定を指定します。IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用しない場合は、VMware Power CLI などのスクリプト・ツールを使用して、タグを割り当てることができます。

タグ付けサポートを使用してバックアップを管理できるようにした場合、仮想マシンの保護を管理することができます。例えば、スケジュールされたバックアップ・サービスでの仮想マシンの組み込みまたは除外、あるいはコンテナ内の仮想マシンを保護するためのスケジュールの割り当てなどです。スケジュールに関連するタグの場合、仮想マシンは、スケジュールによって保護されている保護セット内になければなりません。保護セットは、Schedule (IBM Spectrum Protect) タグが割り当てられたコンテナ内の仮想マシンから構成されます。

また、バックアップの保存ポリシーの指定、スナップショットのデータ整合性の設定、保護する仮想マシン・ディスクの指定、あるいは IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用したアプリケーション保護の有効化も行うことができます。

以下の VMware インベントリー・オブジェクトは、仮想マシン・バックアップの管理に使用できるコンテナです。

- データ・センター
- フォルダー（「ホストおよびクラスター」フォルダー、「VM およびテンプレート」フォルダー）
- ホスト
- ホスト・クラスター
- リソース・プール
- 仮想マシン

タグ付けサポートが有効にされている場合、データ保護タグを VMware コンテナに割り当てることができます。IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用しない場合は、**set vmtags** コマンドを使用して、VMware インベントリー内にデータ保護カテゴリとタグを作成する必要があります。

vmtagdatamover オプションが **yes** に設定されている場合、仮想マシンに割り当てられたすべてのタグが **backup vm** 操作中にバックアップされます。これらのタグは、**restore vm** コマンドを実行するとリストアされます。他のインベントリー・オブジェクトに割り当てられたタグは、バックアップされず、リストアすることができません。

IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン でのタグの表記

IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン の「**IBM Spectrum Protect**」ウィンドウでデータ保護設定を指定すると、データ保護タグがインベントリー・オブジェクトに割り当てられます。

例えば、「バックアップからの除外」フィールドで「はい」を選択した場合、Backup Management (IBM Spectrum Protect) カテゴリと Excluded タグがインベントリー・オブジェクトに割り当てられます。割り当てられたタグとカテゴリは、インベントリー・オブジェクトの「要約」タブの「タグ」ポートレットに表示されます。

サポートされるデータ保護タグ

IBM Spectrum Protect データ保護タグを VMware インベントリー・オブジェクトに割り当てることで、仮想マシン・バックアップを管理する方法を制御することができます。

 この機能は、クライアントが IBM Spectrum Protect for Virtual Environments: Data Protection for VMware のデータ・ムーバーとして機能している場合にのみ使用可能です。

IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用してバックアップ・ポリシーを構成する場合、インベントリー・オブジェクトに手動でタグおよびカテゴリを割り当てる必要はありません。「**IBM Spectrum Protect**」ウィンドウを使用して、vSphere Web クライアント内のインベントリー・オブジェクトのデータ保護設定を指定することができます。このアクションは、インベントリー・オブジェクトにタグを割り当てるのと同様です。

スクリプト・ツールを使用してタグ付けを行う場合、データ・ムーバー・コマンド・ラインで **set vmtags** コマンドを使用して、vSphere インベントリーにタグおよびカテゴリを作成することができます。

別途記載されていない限り、データ保護タグは、以下のタイプのインベントリー・オブジェクトに割り当てることができます。

- データ・センター
- フォルダー（「ホストおよびクラスター」フォルダー、「VM およびテンプレート」フォルダー）
- ホスト
- ホスト・クラスター
- リソース・プール
- 仮想マシン

以下のデータ保護タグがサポートされます。

カテゴリー	タグ	タグの説明
Application Protection (IBM Spectrum Protect)	Enabled	IBM Spectrum Protect によってアプリケーション保護が提供されます
Application Protection (IBM Spectrum Protect)	EnabledKeepSqlLog	Microsoft SQL Server を保護し、ゲスト内ログ・ファイル管理のためにログ・ファイルを維持します
Backup Management (IBM Spectrum Protect)	Excluded	IBM Spectrum Protect によるバックアップからオブジェクトが常に除外されます
Backup Management (IBM Spectrum Protect)	Included	IBM Spectrum Protect によるバックアップにオブジェクトが常に組み込まれます
Data Mover (IBM Spectrum Protect)	<i>Datamover_name</i>	IBM Spectrum Protect でのバックアップに使用されるデータ・ムーバー
Data Mover (IBM Spectrum Protect)	Default Data Mover	スケジュールに割り当てられているデフォルトのデータ・ムーバーは（存在する場合）、IBM Spectrum Protect のバックアップに使用されます
Disk Backup List (IBM Spectrum Protect)	Include Exclude: <i>disk number,disk number,...</i>	IBM Spectrum Protect によるバックアップに組み込まれる、または除外される仮想ディスクのリスト
Local Backup Management (IBM Spectrum Protect)¹	LocalIncluded	オブジェクトは、ハードウェア・ストレージのローカル・バックアップに組み込まれます
Local Backup Management (IBM Spectrum Protect)¹	LocalExcluded	オブジェクトは、ハードウェア・ストレージのローカル・バックアップから除外されます
Local Management Class (IBM Spectrum Protect)¹	<i>Management_class_name</i>	ハードウェア・ストレージのローカル・バックアップの保存設定に使用されるポリシー
Management Class (IBM Spectrum Protect)	<i>Management_class_name</i>	IBM Spectrum Protect での保存設定に使用されるポリシー
Schedule (IBM Spectrum Protect)	<i>Schedule_name</i>	IBM Spectrum Protect によるバックアップに使用するスケジュール
Schedule (IBM Spectrum Protect)	<i>Schedule_group</i>	IBM Spectrum Protect によるバックアップに使用するスケジュール・グループ
Snapshot Attempts (IBM Spectrum Protect)	<i>quiesce,nonquiesce</i>	バックアップが失敗する前に IBM Spectrum Protect によって試行される静止スナップショットおよび非静止スナップショットの数

¹ このカテゴリとタグは、VVOL データ・ストアに保管される仮想マシンにのみ適用されます。

IBM Spectrum Protect カテゴリおよびタグの名前は、大/小文字を区別します。カテゴリとタグの組み合わせは、以下のように定義されます。

Application Protection (IBM Spectrum Protect)

Enabled

仮想マシンのアプリケーションに、バックアップがまもなく実行されることを通知します。このカテゴリとタグの組み合わせにより、アプリケーションでは、ログの切り捨てとトランザクションのコミットが可能になるため、バックアップ完了時には整合性のある状態から再開できます。

仮想マシンにこのカテゴリとタグが割り当てられた場合、アプリケーション保護は IBM Spectrum Protect によって提供されます。データ・ムーバーは、VSS ライターを凍結してから解凍し、アプリケーション・ログを切り捨てます。仮想マシンにこのタグが割り当てられていない場合、アプリケーション保護は、VMware によって提供されます。VMware は、VSS ライターを凍結してから解凍しますが、アプリケーション・ログを切り捨てません。

このタグとカテゴリは、仮想マシンにのみ割り当てることができます。

このカテゴリとタグを仮想マシンに割り当てる場合、追加の構成手順を実行する必要があります。仮想マシンのバックアップに使用している各データ・ムーバー上で、データ・ムーバーのコマンド・ラインから次のコマンドを実行して、ゲスト仮想マシンの資格情報を Data Protection for VMware に保管します。

```
dsmc set password -type=vmguest vm_guest_display_name guest_admin_ID  
guest_admin_pw
```

ここで、*vm_guest_display_name* は、VMware vSphere Web クライアントで示されているゲスト仮想マシンの名前を示します。

このコマンドは、データ・ムーバーをホストするシステム上で暗号化された、ゲスト仮想マシン資格情報を保管します。*guest_admin_ID* *guest_admin_pw* には、以下の最小権限が必要です。

バックアップ権限: Microsoft Exchange Server 2013 および 2016: 「組織の管理」権限 (管理役割グループ「組織の管理」のメンバーシップ)

バックアップ権限: Microsoft SQL Server 2014 および 2016: 「組織の管理」権限 (管理役割グループ「組織の管理」のメンバーシップ)

アプリケーション保護が有効にされている複数の仮想マシンに同じ資格情報を使用してログオンする場合、**allvm** パラメーターを指定すると、すべての仮想マシンに対するパスワードを設定できます。

```
dsmc set password -type=vmguest allvm guest_admin_ID guest_admin_pw
```

詳しくは、[Configuring Data Protection for VMware](#) を参照してください。

アプリケーション保護を有効にしない場合、*include.vmtsmvss* オプションの設定が使用されません。この設定を継承することはできません。

このタグは、*include.vmtsmvss* オプションをオーバーライドします。

EnabledKeepSqlLog

アプリケーション保護を提供し、データ・ムーバーが Microsoft SQL Server を実行する仮想マシンをバックアップする際に、Microsoft SQL Server ログが切り捨てられることを防ぎます。このタグを指定すると、SQL サーバー管理者は SQL サーバー・ログを手動で管理することができるため、ログを保存し、仮想マシンがリストアされた後に特定のチェックポイントに SQL トランザクションをリストアするために使用できます。SQL サーバー管理者は、ゲスト仮想マシン上の SQL Server ログを手動でバックアップし、場合によっては切り捨てる必要があります。

このタグとカテゴリは、仮想マシンにのみ割り当てることができます。このタグに加えて、**Enabled** タグを仮想マシンに割り当てする必要があります。

このタグを指定すると、SQL Server ログは切り捨てられず、IBM Spectrum Protect サーバーに次のメッセージが表示されてログに記録されます。

```
ANS4179I IBM Spectrum Protect アプリケーション保護は、  
VM 'VM' から Microsoft SQL Server ログを切り捨てませんでした。
```

バックアップの完了後に SQL Server ログの切り捨てを可能にする必要がある場合は、EnabledKeepSqlLog タグを削除し、Application Protection (IBM Spectrum Protect) Enabled カテゴリとタグを仮想マシンに割り当てます。この場合、データ・ムーバーは SQL ログ・ファイルをバックアップしません。

このタグを設定しない場合、アプリケーション保護が有効にされたバックアップ時には、Microsoft SQL Server ログは保存されません。このタグを継承することができません。

このタグは、include.vmtsmvss オプションの keepsqllog パラメーターをオーバーライドします。

Backup Management (IBM Spectrum Protect)

Excluded

インベントリー・オブジェクト内の仮想マシンをスケジュール・バックアップ・サービスから除外します。

Included

インベントリー・オブジェクト内の仮想マシンをスケジュール・バックアップ・サービスに組み込みます。このタグは、Backup Management (IBM Spectrum Protect) カテゴリのデフォルトで、通常は設定する必要はありません。

親オブジェクトに Excluded タグが割り当てられている場合や、継承設定にかかわらずオブジェクト内の仮想マシンが常にスケジュール・バックアップに組み込まれるようにする場合に、このタグを使用します。

これらのタグを割り当てず、継承された設定が存在しない場合、仮想マシンはスケジュール・バックアップに組み込まれます。

これらのタグは、domain.vmfull データ・ムーバー・オプションをオーバーライドします。

Data Mover (IBM Spectrum Protect)

Datamover_name

データ・ムーバーを割り当て、仮想マシンのバックアップを実行します。

IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用する場合、Schedule カテゴリおよびタグをコンテナに適用すると、データ・ムーバーが自動的に仮想マシンに割り当てられます。ただし、個々の仮想マシンのデータ・ムーバーを手動で更新することもできます。

IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用して Schedule タグをコンテナに適用しない場合、データ・ムーバー・タグをそのスケジュールに含まれている仮想マシンまたはその親コンテナに手動で割り当てる必要があります。

データ・ムーバーを仮想マシンに割り当てない場合、データ・ムーバーは、親オブジェクトから継承されます。継承された設定が存在しない場合、または「デフォルト・データ・ムーバー」タグが設定または継承されている場合、仮想マシンはスケジュールに割り当てられたデフォルトのデータ・ムーバー (存在する場合) によってバックアップされます。それ以外の場合は、仮想マシンはバックアップされず、仮想マシンにデータ・ムーバーが割り当てられるまでは IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン で「危険」状況として識別されます。

このタグは、nodename データ・ムーバー・オプションをオーバーライドします。

Default Data Mover

(存在する場合) スケジュールのデフォルト・データ・ムーバーを、仮想マシンのバックアップの実行のために割り当てます。スケジュールにデフォルトのデータ・ムーバーがない場合、仮想マシンにデータ・ムーバーが割り当てられるまで、またはスケジュールにデフォルトのデータ・ムーバーが割り当てられるまでは、仮想マシンはバックアップされず、IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン で「危険」状況として識別されます。

Disk Backup List (IBM Spectrum Protect)

Include | Exclude:*disk number,disk number,...*

仮想マシンのハード・ディスクのセットをバックアップ操作に組み込む、または除外します。仮想マシンのハード・ディスクは、仮想マシン内のディスク番号によって識別されます。例えば、ほとんどの場合、ディスク 1 はシステム・ディスクです。このタグを仮想マシンに割り当てない場合、仮想マシン内のすべてのハード・ディスクがバックアップされます。

使いやすさのために、Disk Backup List (IBM Spectrum Protect) カテゴリーには、一般的に使用されるいくつかのタグが事前に取り込まれています。

Include:*all*

すべてのディスクをバックアップに組み込みます。

Include:*1*

バックアップにディスク 1 のみを組み込み、他のすべてのディスクを明示的に除外します。

Exclude:*1*

ディスク 1 を除くすべてのディスクをバックアップに組み込みます。

ニーズに合わせてディスク番号を変更することができます。ディスク番号は、1 から 999 の範囲で指定することができます。ディスク番号は、コンマ区切り値としてリストする必要があります。コンマと数値の間にスペースを入れないでください。

例えば、ディスク 1、3、および 5 のみをバックアップに組み込む場合、Disk Backup List (IBM Spectrum Protect) カテゴリーと **Include:1,3,5** タグを仮想マシンに割り当てます。

1、2、および 4 を除くすべてのディスクをバックアップするには、Disk Backup List (IBM Spectrum Protect) カテゴリーと **Exclude:1,2,4** タグを仮想マシンに割り当てます。

組み込む、あるいは除外するディスクを指定せず、継承された設定が存在しない場合、すべての仮想マシン・ディスクがバックアップされます。

これらのタグは、`include.vmdisk` および `exclude.vmdisk` データ・ムーバー・オプションをオーバーライドします。

Local Backup Management (IBM Spectrum Protect)

LocalExcluded

インベントリー・オブジェクト内の仮想マシンのスナップショットをスケジュール・バックアップ・サービスから除外します。

LocalIncluded

インベントリー・オブジェクト内の仮想マシンのスナップショットをスケジュール・バックアップ・サービスに組み込みます。このタグは、Local Backup Management (IBM Spectrum Protect) カテゴリーのデフォルトで、通常は設定する必要はありません。

親オブジェクトに LocalExcluded タグが割り当てられている場合や、継承設定にかかわらずオブジェクト内の仮想マシンのスナップショットが常にスケジュール・バックアップに組み込まれるようにする場合に、このタグを使用します。

これらのタグを割り当てず、継承された設定が存在しない場合、仮想マシンはスケジュール・バックアップに組み込まれます。

これらのタグは、`domain.vmfull` データ・ムーバー・オプションをオーバーライドします。

Local Management Class (IBM Spectrum Protect)

Management_class_name

スナップショット・バージョンが失効するまで、スナップショット・バージョンをハードウェア・ストレージ上に保持する期間、またはストレージ上に保持できるバックアップ・バージョンの数を定義する保存ポリシーの名前を指定します。

管理クラスを指定しない場合、保存ポリシーは、親オブジェクトから継承されます。継承された設定が存在しない場合、`vmmc` オプションで指定された管理クラスが使用されます。`vmmc` オプションが設定されていない場合、データ・センター・ノードのデフォルトの保存ポリシーが使用されます。

このタグは、include.vmlocalsnapshot オプションをオーバーライドします。

Management Class (IBM Spectrum Protect)

Management_class_name

バックアップ・バージョンが失効するまで、バックアップ・バージョンを IBM Spectrum Protect サーバー上に保持する期間、またはサーバー上に保持できるバックアップ・バージョンの数を定義する保存ポリシーの名前を指定します。

管理クラスを指定しない場合、保存ポリシーは、親オブジェクトから継承されます。継承された設定が存在しない場合、vmmc オプションで指定された管理クラスが使用されます。vmmc オプションが設定されていない場合、データ・センター・ノードのデフォルトの保存ポリシーが使用されます。

このタグは、include.vm、vmmc、または vmctlmc オプションをオーバーライドします。

Schedule (IBM Spectrum Protect)

Schedule_name

IBM Spectrum Protect サーバーへの仮想マシン・バックアップに使用されるスケジュールの名前を指定します。スケジュール名は固有でなければなりません。

スケジュールは、vSphere インベントリーの仮想マシンを自動的にバックアップするように、IBM Spectrum Protect サーバー管理者または VMware 管理者によって設定されます。管理者は、IBM Spectrum Protect Operations Center バージョン 8.1 を使用して、容易にタグ付けと互換性のあるスケジュールを作成することができます。

このカテゴリとタグを仮想マシンに割り当てると、インベントリー・オブジェクト・レベルと子オブジェクト・レベルのすべての仮想マシンが、そのスケジュールに従ってバックアップされます。

スケジュール定義で (他のドメイン・レベルのパラメーターを使用せずに) -

domain.vmfull="Schedule-Tag" オプションを指定したスケジュールのみが、タグ付けサポートと互換性があります。それ以外の場合、Schedule タグは無視され、非互換スケジュールでタグ付けされたインベントリー・オブジェクトの仮想マシンはバックアップされません。

タグ付けと互換性があるものにするには、スケジュール定義に以下の基準が含まれている必要があります。

- オプション・ストリングで (他のドメイン・レベルのパラメーターを使用せずに) - domain.vmfull="Schedule-Tag" オプションが指定されている必要があります。このオプションは、大/小文字を区別しません。また、スペースが含まれてはなりません。Schedule-Tag パラメーターを囲む引用符はオプションです。
- スケジュールには、ACTION=BACKUP パラメーターおよび SUBACTION=VM パラメーターが含まれている必要があります。
- オプション・ストリングには、-asnodename=datacenter オプションが含まれている必要があります。ここで、datacenter パラメーターの値は、IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグインによって管理されているデータ・センターに対応している必要があります。
- オプション・ストリングで -vmbackuptype=backuptype オプションが指定されている場合、backuptype パラメーターの値は、FULLVM (大/小文字を区別しない) でなければなりません。

以下のサンプル・サーバー・コマンドは、タグ付けと互換性のあるスケジュールを定義します。

```
define schedule domain_name schedule_name
description=schedule_description action=backup subaction=VM
starttime=NOW+00:10 schedstyle=Classic period=1 perunits=Weeks
durunits=minutes duration=10 options='-vmbackuptype=fullvm
-asnodename=datacenter_node_name -mode=IFIncremental
-domain.vmfull="Schedule-Tag"
```

サーバー管理者は、次のサーバー・コマンドを使用して、データ・ムーバーをスケジュールに関連付ける必要もあります。

```
define association domain_name schedule_name data_mover_node_name
```

このカテゴリとタグは、データ・センター、フォルダー、ホスト、ホスト・クラスター、リソース・プール、および仮想マシンに割り当てることができます。

ヒント: IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン を使用せずに Schedule タグをコンテナに割り当てると、Data Mover カテゴリおよびタグは、コンテナ内の仮想マシンに自動的に割り当てられません。各仮想マシンに手動で Data Mover タグを割り当てする必要があります。あるいは、スケジュールが 1 つのデータ・ムーバーのみに関連付けられている場合は、スケジュールによって保護されているコンテナにデータ・ムーバーを直接割り当てることができます。

オブジェクトに対してこのタグを設定しない場合、Schedule タグは親オブジェクトから継承されます。継承された設定が存在しない場合、仮想マシンは、いずれのスケジュール・バックアップにも組み込まれません。

domain.vmfull データ・ムーバー・オプション内のドメイン・レベル・パラメーターは、タグ付けと互換性のあるスケジュールではすべて無視されます。

Schedule_group

仮想マシン・バックアップに使用されるスケジュール・グループの名前を指定します。スケジュール・グループには、複数のスケジュールが含まれます。IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグインを使用して、個別のスケジュールではなくスケジュール・グループを VMware vSphere Web クライアント内のオブジェクトに割り当てることができます。このオプションを使用する例として、単一の IBM Spectrum Protect サーバー・バックアップ・スケジュールを使用する複数の日次ローカル・バックアップ・スケジュールをグループ化する場合などがあります。

Snapshot Attempts (IBM Spectrum Protect)

quiesce,nonquiesce

このカテゴリとタグの組み合わせは、スナップショットの障害が原因で失敗した仮想マシンのバックアップ操作について、スナップショットを試行する合計回数を指定します。このタグ値は、試行中に実施するスナップショットの試行回数を示す定位置パラメーターと、データ整合性の試行回数を示す定位置パラメーターのペアで構成されます。

quiesce

静止を使用してスナップショットを試行する回数を指定する定位置パラメーター。静止を使用すると、アプリケーション整合スナップショットが作成されます。

- Application Protection タグが割り当てられた Windows 仮想マシンの場合、*quiesce* パラメーターは、IBM Spectrum Protect VSS 静止および Microsoft Windows システム・プロバイダー VSS 静止を使用してスナップショットを試行する回数を指定します。

指定した回数によっては、最初のスナップショット試行が必ず IBM Spectrum Protect VSS 静止を使用して行われます。後続のスナップショット試行は、Windows システム・プロバイダー VSS 静止を使用して行われます。

- Application Protection タグを使用しない Windows 仮想マシン、あるいは Linux 仮想マシンの場合、*quiesce* パラメーターは、VMware Tools ファイル・システム静止を使用してスナップショットを試行する回数を指定します。

0 から 10 の範囲で値を指定できます。デフォルト値は 2 です。

nonquiesce

静止を使用 (*quiesce* パラメーターによって指定) したスナップショット試行が完了した後に、静止を使用せずにスナップショットを試行する回数を指定する定位置パラメーター。スナップショット静止を使用しない場合、クラッシュ整合スナップショットが作成されます。クラッシュ整合スナップショットを使用した場合、オペレーティング・システム、ファイル・システム、およびアプリケーションの整合性は保証されません。

0 から 10 の範囲で値を指定できます。デフォルト値は 0 です。

制約事項: 入力値 0,0 は無効です。バックアップ操作では、少なくとも 1 つのスナップショットが必要です。

以下のスナップショット試行は、データ整合性を確保するために使用する一般的な選択です。

2,0 - 必ずアプリケーションが整合

バックアップが失敗する前に静止スナップショットを 2 回試行します。この組み合わせはデフォルトです。

2,1 - アプリケーションの整合を試行

静止スナップショットを 2 回試行し、最後に非静止のクラッシュ整合スナップショットを 1 回試行します。

0,1 - マシンの整合のみ

仮想マシンに対して非静止スナップショットを 1 回だけ試行します。静止スナップショットは実行されません。

スナップショット試行を指定せず、継承された設定が存在しない場合、`include.vmsnapshotattempts` オプションで指定されたスナップショット試行が使用されます。

このタグは、`include.vmsnapshotattempts` オプションをオーバーライドします。

ヒント: データ保護タグは、上位のインベントリー・オブジェクトから継承することができます。詳しくは、787 ページの『[データ保護設定の継承](#)』を参照してください。

関連資料

530 ページの『[Schedgroup](#)』

`schedgroup` オプションでは、スケジュールをグループに割り当てます。

630 ページの『[Vmtagdatamover](#)』

バックアップ/アーカイブ・クライアント (データ・ムーバー) でのタグ付けサポートを有効にするには、`vmtagdatamover` オプションを使用します。このオプションが有効にされている場合、クライアントは、vSphere Web クライアントの IBM Spectrum Protect vSphere Client プラグイン あるいは VMware vSphere PowerCLI バージョン 5.5 R2 以降などのツールによって設定されたデータ保護タグに従って、VMware インベントリー・オブジェクト内の仮想マシンのバックアップを管理します。

633 ページの『[Vmtagdefaultdatamover](#)』

`vmtagdefaultdatamover` オプションは、スケジュールで定義されており、Data Mover カテゴリーおよびタグが割り当てられておらず、継承もしていない仮想マシンを保護するために使用します。

395 ページの『[Domain.vmfull](#)』

`domain.vmfull` オプションは、仮想マシンのフル・イメージ・バックアップ操作に組み込む仮想マシン (VM) を指定します。

456 ページの『[Include.vmdisk](#)』

`INCLUDE.VMDISK` オプションは、バックアップ操作に仮想マシン (VM) ディスクを組み込みます。ディスク・ラベルを指定しない場合は、VM のすべてのディスクがバックアップされます。

461 ページの『[INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS](#)』

`INCLUDE.VMSNAPSHOTATTEMPTS` オプションを使用して、スナップショットの障害が原因で失敗した仮想マシン (VM) バックアップ操作についてのスナップショット試行の合計回数を決定します。

463 ページの『[INCLUDE.VMTSMVSS](#)』

`INCLUDE.VMTSMVSS` オプションは、仮想マシンのアプリケーションに、バックアップがまもなく実行されることを通知します。このオプションにより、アプリケーションでは、トランザクション・ログの切り捨てとトランザクションのコミットが可能になるため、バックアップ完了時には整合性のある状態から再開できます。トランザクション・ログの切り捨てを抑止するためのオプション・パラメーターを指定することもできます。

データ保護設定の継承

IBM Spectrum Protect データ保護設定 (タグ) は、vSphere Web クライアント・ナビゲーターで上位の親インベントリーから継承することができます。

vSphere Web クライアント内のインベントリー・オブジェクトにデータ保護タグを割り当てると、子オブジェクトは、タグが割り当てられた親インベントリー・オブジェクトと同じデータ保護タグを継承します。

以下のリストは、タグ付けすることができ、データ保護タグを継承することができる vSphere インベントリー・オブジェクトのリストを示しています。

- データ・センター
- フォルダー (「ホストおよびクラスター」フォルダー、「VM およびテンプレート」フォルダー)
- ホスト
- ホスト・クラスター
- リソース・プール
- 仮想マシン

例えば、Excluded タグをホスト・クラスターに割り当てた場合、そのホスト・クラスター・オブジェクトの子オブジェクト (ホスト、ホスト・フォルダー、および仮想マシン) は、すべて Excluded タグを継承します。この例では、ホスト・クラスター内のすべての仮想マシンが、スケジュール済みバックアップから除外されます。

子オブジェクトにタグが割り当てられている場合に、同じカテゴリーのタグを継承すると、子オブジェクトの割り当て済みのタグが継承したタグをオーバーライドします。子オブジェクトが複数の祖先オブジェクトから同じカテゴリーのタグを継承した場合は、最も近い祖先から継承したタグが他の祖先から継承したタグをオーバーライドします。

vSphere インベントリ階層にデータ保護タグが割り当てられていない場合、システムのデフォルトのタグ設定が適用されます。サポートされるタグおよびデフォルトのタグ設定については、[780 ページの『サポートされるデータ保護タグ』](#)を参照してください。

継承に関する優先順位

データ保護タグを割り当てる先のオブジェクト (ターゲット・オブジェクト) に応じて、複数の祖先からのタグの継承を処理する際にターゲット・オブジェクトからその祖先への距離を判別するための優先順位が存在します。以下の表には、ターゲット・オブジェクトと各ターゲット・オブジェクト・タイプの可能な祖先が示されています。これは、vSphere Web クライアント・ナビゲーターに存在するオブジェクトの階層に基づいています。

表 114. vSphere インベントリ・オブジェクトの優先順位	
ターゲット・オブジェクト	処理されるタグの優先順位
仮想マシン	Target virtual machine > Nested VM folders > Nested resource pools > Host > Host cluster > Nested host folders > Datacenter
VM フォルダー	Target VM folder > Other nested VM folders > Datacenter
ホスト・フォルダー	Target host folder > Other nested host folders > Datacenter
リソース・プール	Target resource pool > Other nested resource pool > Nested VM folders > Host > Host cluster > Nested host folders > Datacenter
ホスト	Target host > Nested host folders > Cluster > Datacenter
クラスター	Target cluster > Nested host folders > Datacenter
データ・センター	ターゲット・データ・センター

ターゲット・オブジェクトが仮想マシンである場合は、その仮想マシン自体、およびその祖先 (VM フォルダー、リソース・プール、ホスト、ホスト・クラスター、ホスト・フォルダー、データ・センターなど) の任意の組み合わせに同じカテゴリーのタグを割り当てることができます。処理の際には、優先順位に従って各オブジェクト・タイプがチェックされ、同じカテゴリーのタグが検出されるかリストの末尾に到達すると処理が停止されます。

例えば、Backup Management (IBM Spectrum Protect) カテゴリーの Excluded タグまたは Included タグのどちらが仮想マシンに適用されているかを判別するために、IBM Spectrum Protect は、データ・センター内のインベントリで Excluded タグおよび Included タグを検索します。仮想マシン・ターゲット・オブジェクトの優先順位に従って、Excluded タグおよび Included タグの検索はターゲット・オブジェクト (仮想マシン) 自体から開始され、その後可能性のある祖先のリストが続きます。リストの末尾に到達する前にタグが見つかった場合、このタグがターゲット・オブジェクトに適用されま

す。それ以外の場合は、Backup Management (IBM Spectrum Protect) カテゴリーのタグはターゲット仮想マシンに適用されません。

関連概念

[789 ページの『データ保護タグ付けのヒント』](#)

バックアップ・ポリシーは、vSphere インベントリー・オブジェクトに対するデータ保護タグの割り当てによって決まります。データ保護タグを処理するパフォーマンスは、vSphere インベントリーに適用されるタグの数およびタグの適用先の影響も受ける可能性があります。

関連資料

[780 ページの『サポートされるデータ保護タグ』](#)

IBM Spectrum Protect データ保護タグを VMware インベントリー・オブジェクトに割り当てることで、仮想マシン・バックアップを管理する方法を制御することができます。

データ保護タグ付けのヒント

バックアップ・ポリシーは、vSphere インベントリー・オブジェクトに対するデータ保護タグの割り当てによって決まります。データ保護タグを処理するパフォーマンスは、vSphere インベントリーに適用されるタグの数およびタグの適用先の影響も受ける可能性があります。

vSphere インベントリー内のオブジェクトのバックアップ・ポリシーを定義する際には、以下のアクションを実行することを検討してください。

- インベントリー・オブジェクトにタグ付けする優先順位を利用します。vSphere インベントリー階層内の最上位のコンテナでバックアップ・ポリシー (あるいはタグ) を設定することで、組織の一般ポリシー構成を作成します。ポリシーは、子コンテナおよびその仮想マシンに継承されます。通常は、個々の仮想マシンでポリシーを設定する必要はありません。

その後、子コンテナあるいは個々の仮想マシンでポリシーを変更して継承したポリシー設定をオーバーライドし、例外を作成します。

あるいは、全体のバックアップ・ポリシーを構成する必要がある場合は、データ保護タグを上位オブジェクトに割り当てないでください。データ保護タグを下位オブジェクトに割り当てます。

- 保守の容易性、パフォーマンス、およびユーザビリティを確保するために、多すぎるインベントリー・オブジェクトにタグを割り当てないでください。
- 保守を容易にし、複雑さを軽減するために、異なるオブジェクト・タイプにタグを割り当てないでください。例えば、クラスター、ホスト、ホスト・フォルダー、および VM のみにタグを割り当てたり、VM フォルダーと VM のみにタグを割り当てたりしますが、その両方を同時に行わないでください。
- タグ付けサポートにより、複数のスケジュールを複数のデータ・ムーバーに割り当てることができます。ただし、データ・ムーバーのスケジュールがオーバーラップしないようにしてください。そうしないと、一部のスケジュールがスキップされます。
- 管理者は、IBM Spectrum Protect Operations Center バージョン 8.1 を使用して、容易にタグ付けと互換性のあるスケジュールを作成することができます。

関連概念

[787 ページの『データ保護設定の継承』](#)

IBM Spectrum Protect データ保護設定 (タグ) は、vSphere Web クライアント・ナビゲーターで上位の親インベントリーから継承することができます。

付録 A IBM Spectrum Protect 製品ファミリーのアクセシビリティ機能

アクセシビリティ機能は、運動障害または視覚障害など身体に障害を持つユーザーが情報技術コンテンツを快適に使用できるように支援します。

概要

IBM Spectrum Protect ファミリーの製品は、以下の主なアクセシビリティ機能を提供します。

- キーボードのみによる操作
- スクリーン・リーダー (読み上げソフトウェア) を使用する操作

IBM Spectrum Protect ファミリー製品は、最新の W3C 標準 WAI-ARIA 1.0 (www.w3.org/TR/wai-aria/) が、US Section 508 (www.access-board.gov/guidelines-and-standards/communications-and-it/about-the-section-508-standards/section-508-standards) および Web Content Accessibility Guidelines (WCAG) 2.0 (www.w3.org/TR/WCAG20/) に準拠するように使用されています。アクセシビリティ機能を利用するには、最新リリースのスクリーン・リーダーと、この製品によってサポートされる最新の Web ブラウザーを使用してください。

IBM Knowledge Center の製品資料は、アクセシビリティに対応しています。IBM Knowledge Center のアクセシビリティ機能については、Accessibility section of the IBM Knowledge Center help (www.ibm.com/support/knowledgecenter/about/releasesnotes.html?view=kc#accessibility) に記載されています。

キーボード・ナビゲーション

この製品は、標準のナビゲーション・キーを使用します。

インターフェース情報

ユーザー・インターフェースには、1 秒当たり 2 回から 55 回の点滅を行うコンテンツはありません。

Web ユーザー・インターフェースでは、コンテンツを正しくレンダリングするために、また使いやすさを実現するために、カスケーディング・スタイル・シートが使用されています。このアプリケーションには、視覚に障害のあるユーザーがシステム表示設定を使用するための、同等の方式 (ハイコントラスト・モードなど) が用意されています。フォント・サイズの制御は、デバイスまたは Web ブラウザーの設定を使用し行うことができます。

Web ユーザー・インターフェースには、アプリケーションの機能領域に素早くナビゲートできる WAI-ARIA ナビゲーション・ランドマークが含まれています。

ベンダー・ソフトウェア

IBM Spectrum Protect 製品ファミリーには、IBM の使用許諾契約書の対象とならないベンダー・ソフトウェアが含まれます。IBM は、それらの製品のアクセシビリティ機能を保証するものではありません。ベンダーの製品のアクセシビリティ機能については、ベンダーにお問い合わせください。

関連アクセシビリティ情報

IBM では、標準の IBM ヘルプ・デスクとサポート Web サイトに加えて、聴覚に障害のあるお客様が営業担当者やサポート・サービスに連絡が取れるように TTY 電話サービスを開設しています。

TTY サービス
800-IBM-3383 (800-426-3383)
(北アメリカ内)

IBM のアクセシビリティに対する取り組みについて詳しくは、[IBM Accessibility \(www.ibm.com/able\)](http://www.ibm.com/able) を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。この資料は、IBM から他の言語でも提供されている可能性があります。ただし、これを入手するには、本製品または当該言語版製品を所有している必要がある場合があります。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒 103-8510

東京都中央区日本橋箱崎町 19 番 21 号

日本アイ・ビー・エム株式会社

法務・知的財産

知的財産権ライセンス涉外

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Director of Licensing

IBM Corporation

North Castle Drive, MD-NC119

Armonk, NY 10504-1785

US

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

本書に含まれるパフォーマンス・データは、特定の動作および環境条件下で得られたものです。実際の結果は、異なる可能性があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、このサンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても責任を負いません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生的創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。「© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。」© Copyright IBM Corp. _年を入れる_.

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com® は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

Adobe は、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標です。

Linear Tape-Open、LTO、および Ultrium は、HP、IBM Corp. および Quantum の米国およびその他の国における商標です。

Intel および Itanium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

登録商標 Linux は、世界中で商標の所有者である Linux Torvalds の独占的ライセンシーである Linux Foundation のサブライセンスに従って使用されています。

Microsoft、Windows、および Windows NT は、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

VMware、VMware vCenter Server、および VMware vSphere は VMware, Inc. または子会社の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

製品資料に関するご使用条件

これらの資料は、以下のご使用条件に同意していただける場合に限りご使用いただけます。

適用条件

IBM Web サイトの「ご利用条件」に加えて、以下のご使用条件が適用されます。

個人使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、非商業的な個人による使用目的に限り複製することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずに、これらの資料またはその一部について、二次的著作物を作成したり、配布 (頒布、送信を含む) または表示 (上映を含む) することはできません。

商業的使用

これらの資料は、すべての著作権表示その他の所有権表示をしていただくことを条件に、お客様の企業内に限り、複製、配布、および表示することができます。ただし、IBM の明示的な承諾をえずにこれらの資料の二次的著作物を作成したり、お客様の企業外で資料またはその一部を複製、配布、または表示することはできません。

権利

ここで明示的に許可されているもの以外に、資料や資料内に含まれる情報、データ、ソフトウェア、またはその他の知的所有権に対するいかなる許可、ライセンス、または権利を明示的にも黙示的にも付与するものではありません。

資料の使用が IBM の利益を損なうと判断された場合や、上記の条件が適切に守られていないと判断された場合、IBM はいつでも自らの判断により、ここで与えた許可を撤回できるものとさせていただきます。

お客様がこの情報をダウンロード、輸出、または再輸出する際には、米国のすべての輸出入 関連法規を含む、すべての関連法規を遵守するものとします。

IBM は、これらの資料の内容についていかなる保証もしません。これらの資料は、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任なしで提供されます。

プライバシー・ポリシーに関する考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品 (「ソフトウェア・オファリング」) では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。多くの場合、ソフトウェア・オファリングにより個人情報が収集されることはありません。IBM の「ソフトウェア・オファリング」の一部には、個人情報を収集できる機能を持つものがあります。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項をご確認ください。

この「ソフトウェア・オファリング」は、Cookie もしくはその他のテクノロジーを使用して個人情報を収集することはありません。

この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人を特定できる情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、このような情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意の要求も含まれますがそれらには限られません。

このような目的での Cookie などの各種テクノロジーの使用について詳しくは、「IBM プライバシー・ステートメント」 (<http://www.ibm.com/privacy/jp/ja/>)、「IBM オンライン・プライバシー・ステートメント」 (<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』というタイトルのセクション、および「IBM Software Products and Software-as-a-Service Privacy Statement」 (<http://www.ibm.com/software/info/product-privacy>) を参照してください。

用語集

IBM Spectrum Protect 製品ファミリーの用語と定義が記載されている用語集を使用できます。

[IBM Spectrum Protect 用語集](#) を参照してください。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。
なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アーカイブ

- オープン・ファイルのアーカイブの試行回数 [357](#)
- オプションの要約 [312](#)
- 管理クラスの指定変更 [304](#)
- 管理クラスのバインド [343](#)
- 管理方法 [278](#), [297](#)
- 基本タスク [269](#)
- 共用メモリーを使用しての速度の向上 [311](#)
- クライアント・ノード・プロキシ・サポートの構成 [272](#)
- コピー・グループ属性 [299](#)
- コピー・モード [302](#)
- コマンド [654](#)
- コマンドの使用 [270](#), [275](#)
- コマンド・ラインでの記述の割り当て [272](#)
- コマンド・ラインを使用したリトリブ [277](#)
- サーバー・ファイル・スペースからの個々のアーカイブの削除 [274](#), [679](#)
- 最終修正日付、最終アクセス日付、作成日、表示 [701](#)
- 削除前の確認プロンプトの抑止 [491](#)
- サブディレクトリー [272](#)
- 実行 [269](#)
- 情報の照会 [701](#)
- シンボリック・リンク [275](#)
- 説明の割り当て [379](#)
- 単一のノード名に属する複数のクライアント上の共有データ [272](#), [344](#)
- ディレクトリーのみを処理 (ファイルは処理しない) [385](#)
- ハード・リンク [276](#)
- ファイル・スペースの削除 [190](#), [266](#)
- ファイルの圧縮 [363](#)
- ファイルの組み込み [447](#)
- ファイルの削除 [379](#)
- ファイルのみ [593](#)
- ファイルのみ (ディレクトリーを除く) [272](#)
- ファイルのリスト [272](#), [429](#)
- ファイルへの管理クラスのバインド [272](#)
- 複数ファイル指定 [272](#)
- ユーザー・アクセスの照会 [700](#)
- 猶予期間保持 [298](#)
- ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け [272](#), [557](#)
- btrfs [206](#)
- removeoperandlimit [515](#)
- Web クライアント・セッションの開始 [151](#)
- Web ユーザー・インターフェース・セッションの開始 [153](#)
- アーカイブ・コピー・グループ [298](#)
- アーカイブ時のデータの暗号化 [167](#)
- アーカイブの最大ファイル・サイズ [172](#)
- アクセシビリティ機能 [791](#)
- アクセス
 - アーカイブでの許可 [275](#)

アクセス制御リスト

- バックアップの拡張許可 [184](#)
- バックアップの許可 [184](#)
- アクティブ・バックアップ・バージョン表示 [158](#), [256](#)
- 圧縮
 - 無効化処理 [453](#)
 - 有効化処理 [453](#)
 - include/exclude ステートメント [453](#)
- 圧縮および暗号化処理
 - バックアップ [453](#)
 - バックアップからの除外 [453](#)
 - exclude オプション [453](#)
- 圧縮処理
 - バックアップからの除外 [453](#)
 - ファイルの組み込み [447](#)
 - exclude オプション [453](#)
- アプリケーション・プログラム・インターフェース (API) 設定 [69](#)
- アンインストール
 - AIX クライアント [13](#)
 - HP-UX Itanium 2 API [16](#)
 - Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) クライアント [20](#)
 - Linux on Power Systems API [28](#)
 - Linux on System z クライアント [44](#)
 - Linux x86_64 クライアント [34](#), [39](#)
 - Mac OS X クライアントの IBM Spectrum Protect [47](#)
 - Oracle Solaris SPARC API の IBM Spectrum Protect [52](#)
 - Oracle Solaris x86_64 クライアントの IBM Spectrum Protect [50](#)
 - Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) API [25](#)
 - Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) クライアント [25](#)
- 暗号化
 - 単一のノード名に属する複数のクライアント [344](#)
 - 暗号鍵パスワードの保存 [410](#)
 - ファイル・データの [167](#)
- 暗号化処理
 - 使用可能な暗号化方式 [167](#)
 - 除外、ファイルの [416](#)
 - ファイルの組み込み [447](#)
 - query systeminfo コマンド [722](#)
- 暗号化の考慮事項 [58](#)
- 暗号化ファイル・システム (EFS)
 - ファイル・システムのバックアップ [218](#)
 - ファイル・システムのリストア [252](#)
- イベント・ベースのポリシー保存保護
 - アーカイブ [307](#)
 - バックアップ [307](#)
- イベント・ロギング
 - スケジューラー [290](#)
- イメージ
 - リストア [237](#)
 - chkdsk ツールを使用した修復 [742](#)
 - chkdsk を使用した修復 [237](#)

- イメージ (続き)
 - [fsck を使用した修復 237, 742](#)
- イメージ・バックアップ
 - [アクセスの取り消し 678](#)
 - [考慮事項 198](#)
 - [コマンド・ラインの使用 205](#)
 - [削除 680](#)
 - [実行 197](#)
 - [除外、ファイルの 416](#)
 - [静的、動的、スナップショット 197](#)
 - [選択または増分の指定 482](#)
 - [増分バックアップ 201, 667](#)
 - [特定時点リストア 667](#)
 - [日付による増分イメージ・バックアップ 203](#)
 - [日付による増分バックアップで使用 202](#)
 - [ファイル・システムでの使用、増分 203](#)
 - [ファイルの組み込み、管理クラスの割り当て 447](#)
 - [ボリューム・デバイス・タイプ・サポート 200](#)
 - [GUI の使用 203](#)
 - [include.dedup 447](#)
- イメージ・バックアップ、考慮事項 [198](#)
- インストールメンテーション・ログ
 - [サイズの制御 467](#)
 - [パフォーマンス情報の収集 406](#)
 - [パフォーマンス情報を保管するためのパスおよびファイル名の指定 468](#)
- インストール
 - [概要 1](#)
 - [バックアップ/アーカイブ・クライアント 10](#)
 - [AIX クライアント 10](#)
 - [HP-UX Itanium 2 API 14](#)
 - [Linux on Power Systems \(ビッグ・エンディアン\) API 26](#)
 - [Linux on Power Systems \(リトル・エンディアン\) クライアント 16](#)
 - [Linux on System z クライアント 41](#)
 - [Linux x86_64 クライアント 30](#)
 - [Mac OS X クライアント 46](#)
 - [Solaris SPARC API 51](#)
 - [Solaris x86_64 クライアント 48](#)
 - [Ubuntu Linux on Power Systems \(リトル・エンディアン\) API 22](#)
 - [Ubuntu Linux on Power Systems \(リトル・エンディアン\) クライアント 22](#)
 - [Ubuntu x86_64 クライアント 36](#)
- インストール IBM Spectrum Protect
 - [クラスター環境 106](#)
- インストール・ステップ
 - [Mac OS X クライアント 46](#)
 - [Oracle Solaris SPARC API の IBM Spectrum Protect 51](#)
 - [Oracle Solaris x86_64 クライアントの IBM Spectrum Protect 48](#)
- インストール要件
 - [クライアント 3](#)
 - [AIX クライアント 3](#)
 - [HP-UX Itanium 2 API 4](#)
 - [Linux for zSeries クライアント 6](#)
 - [Linux on Power Systems 5](#)
 - [Linux x86_64 クライアント 6](#)
 - [Solaris クライアント 8](#)
- [引用符を含む 150](#)
- [エラー処理オプションの要約 329](#)
- エラー・ログ
 - [除去する 414](#)
 - [パスおよびファイル名の指定 414](#)
- オープン登録 (open registration)
 - [許可 124](#)
 - [使用 124](#)
- オプション
 - [アーカイブの要約 312](#)
 - [圧縮 363](#)
 - [仮想マシン exclude オプション 420](#)
 - [仮想マシン include オプション 454](#)
 - [形式および言語の要約 327](#)
 - [形式の要約 327](#)
 - [権限オプション 328](#)
 - [コマンド処理の要約 328](#)
 - [コマンドで入力するときの一般規則 331](#)
 - [コマンドでの指定 331](#)
 - システム状態
 - [バックアップ処理からの除外 416](#)
 - [処理順序 \(優先順位\) 331](#)
 - [診断 330](#)
 - [セントラル・スケジューリングの要約 326](#)
 - [重複排除 377](#)
 - [通信の要約 310](#)
 - [ドメイン 388](#)
 - [トランザクション処理の要約 329](#)
 - [パスワード 495](#)
 - バックアップ
 - [システム状態の除外 416](#)
 - [バックアップの要約 312](#)
 - [リストアおよびリトリブの要約 323](#)
 - [absolute 341](#)
 - [afmskipuncachedfiles 342](#)
 - [archmc 343](#)
 - [archsymlinkasfile 344](#)
 - [asnodename 344](#)
 - [auditlogging 346](#)
 - [auditlogname 348](#)
 - [autodeploy 350](#)
 - [autofsrename 351](#)
 - [automount 353](#)
 - [backmc 353](#)
 - [backupsetname 354](#)
 - [basesnapshotname 355](#)
 - [cadlistenonport 356](#)
 - [changingretries 357](#)
 - [class 358](#)
 - [collocatebyfilespec 359](#)
 - [commmethod 360](#)
 - [commrestartduration 361](#)
 - [commrestartinterval 362](#)
 - [compressalways 363](#)
 - [console 365](#)
 - [createnewbase 366](#)
 - [csv ファイル 368](#)
 - [datacenter 371](#)
 - [datastore 371](#)
 - [dateformat 371](#)
 - [dedupcachepath 375](#)
 - [dedupcachesize 376](#)
 - [defaultserver 378](#)
 - [deletefiles 379](#)
 - [description 379](#)
 - [detail 380](#)
 - [diffsnapshot 382](#)
 - [diffsnapshotname 383](#)
 - [dirmc 384](#)

オプション (続き)

- [dironly 385](#)
- [disablenqr 386](#)
- [diskbuffsize 387](#)
- [diskcachelocation 387](#)
- [domain.image 393](#)
- [domain.nas 394](#)
- [domain.vmfull 395](#)
- [dontload 401](#)
- [dynamicimage 402](#)
- [efsdecrypt 403](#)
- [enablearchiveretentionprotection 404](#)
- [enablededupcache 405](#)
- [enableinstrumentation 406](#)
- [enablelanfree 408](#)
- [encryptiontype 167, 410](#)
- [encryptkey](#)
 - [encryptkey=generate 410](#)
 - [encryptkey=prompt 410](#)
 - [encryptkey=save 410](#)
- [errorlogmax 412](#)
- [errorlogname 414](#)
- [errorlogretention 414](#)
- [exclude](#)
 - [ワイルドカード文字 131, 132](#)
 - [exclude.archive 126, 416](#)
 - [exclude.attribute.symlink 126, 416](#)
 - [exclude.backup 126, 416](#)
 - [exclude.compression 126, 416](#)
 - [exclude.dir 126, 416](#)
 - [exclude.encrypt 416](#)
 - [exclude.file 126, 416](#)
 - [exclude.file.backup 126, 416](#)
 - [exclude.fs 126, 416](#)
 - [exclude.fs.nas 416](#)
 - [exclude.image 126, 416](#)
- [exclude.dedup 416](#)
- [EXCLUDE.VMDISK 420](#)
- [EXCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT 422](#)
- [fbbranch 423](#)
- [fbclient 424](#)
- [fbpolicyname 425](#)
- [fbreposlocation 426](#)
- [fbserver 427](#)
- [fbvolumename 428](#)
- [filelist 429](#)
- [filename 432](#)
- [filesonly 433](#)
- [followsymbolic 434](#)
- [forcefailover 435](#)
- [fromdate 436](#)
- [fromnode 437](#)
- [fromowner 438](#)
- [fromtime 439](#)
- [groupname 439](#)
- [host 440](#)
- [httpport 440](#)
- [ieobjtype 442](#)
- [ifnewer 443](#)
- [imagegapsize 444](#)
- [imagetofile 445](#)
- [inactive 445](#)
- [incl excl 446](#)
- [include](#)

オプション (続き)

- [include \(続き\)](#)
 - [ワイルドカード文字 131, 132](#)
- [include.archive 447](#)
- [include.attribute.symlink 447](#)
- [include.backup 447](#)
- [include.compression 447](#)
- [include.encrypt 447](#)
- [include.file 447](#)
- [include.fs.nas 447](#)
- [include.image 447](#)
- [include.vm 455](#)
- [INCLUDE.VMDISK 456](#)
- [INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT 458](#)
- [include.vmresetcbt 459](#)
- [include.vmsnapshotattempts 461](#)
- [include.vmtsmvss 463](#)
- [incrbydate 465](#)
- [incremental 466](#)
- [instrlogmax 467](#)
- [instrlogname 468](#)
- [lanfreecommmethod 469](#)
- [lanfreeshmport 311, 470](#)
- [lanfreessl 472](#)
- [lanfreetcpport 471](#)
- [lanfreetcpsserveraddress 473](#)
- [latest 474](#)
- [localbackupset 474](#)
- [makesparsefile 475](#)
- [managedservices 476](#)
- [maxcmdretries 478](#)
- [mbobjrefreshtresh 479](#)
- [mbpctrefreshtresh 480](#)
- [memoryefficientbackup 480](#)
- [mode 482](#)
- [monitor 485](#)
- [myreplicationserver 485](#)
- [nasnodename 487](#)
- [nfstimeout 488](#)
- [nodename 489](#)
- [nojournall 490](#)
- [noprompt 491](#)
- [nrtablepath 491](#)
- [numberformat 492](#)
- [optfile 494](#)
- [passwordaccess 497](#)
- [passworddir 498](#)
- [pick 499](#)
- [pitdate 500](#)
- [pittime 501](#)
- [postnschedulecmd 502](#)
- [postschedulecmd 502](#)
- [postsnapshotcmd 503](#)
- [preschedulecmd 505](#)
- [preschedulecmd 505](#)
- [preschedulecmd 505](#)
- [preservelastaccessdate 506](#)
- [preservepath 507](#)
- [presnapshotcmd 510](#)
- [queryschedperiod 511](#)
- [querysummary 512](#)
- [quiet 513](#)
- [quotesareliteral 514](#)
- [removeoperandlimit 515](#)
- [replace 516](#)

オプション (続き)

replserverguid [517](#)
replservername [519](#)
replsslport [520](#)
repltcpport [522](#)
repltcpserveraddress [523](#)
resourceutilization [525](#)
retryperiod [527](#)
revokeremoteaccess [528](#)
schedcmddisabled [529](#), [530](#)
schedcmduser (定義されたサーバーのみ)
[291](#)
schedgroup [530](#)
schedlogmax [532](#)
schedlogname [533](#)
schedlogretention [534](#)
schedmode [536](#)
schedrestretrdisabled [537](#)
scrolllines [538](#)
scrollprompt [539](#)
servername [540](#)
sessioninitiation [541](#)
setwindowtitle [543](#)
shmport [544](#)
showmembers [544](#)
skipacl [545](#)
skipaclupdatecheck [545](#)
snapdiff [116](#), [546](#)
snapdiffchangelogdir [552](#)
snapdiffhttps [553](#)
snapshotcachesize [554](#)
snapshotproviderfs [556](#)
snapshotproviderimage [556](#)
snapshotroot [557](#)
srvoptsetencryptiondisabled [559](#)
srvprepostscheddisabled [560](#)
srvprepostsnapdisabled [561](#)
ssl [562](#)
sslacceptcertfromserv [563](#)
sslrequired [566](#)
stagingdirectory [568](#)
subdir [569](#)
tagsched [571](#)–[573](#)
tapeprompt [575](#)
tcpadminport [576](#)
tcpbuffsize [577](#)
tcpcadaddress [578](#)
tcpclientaddress [578](#)
tcpclientport [579](#)
tcpnodelay [580](#)
tcpport [581](#)
tcpserveraddress [581](#)
tcpwindowsize [582](#)
timeformat [583](#)
toc [586](#)
todate [587](#)
totime [588](#)
txnbytelimit [588](#)
type [589](#)
updatectime [590](#)
useexistingbase [591](#)
usereplicationfailover [592](#)
v2archive [593](#)
verbose [594](#)

オプション (続き)

verifyimage [594](#)
virtualfsname [595](#)
virtualmountpoint [595](#)
virtualnodename [597](#)
vmbackdir [598](#)
vmbackuplocation [599](#)
vmbackupmailboxhistory [600](#)
vmbackuptype [601](#)
vmchost [602](#)
vmcpw [602](#)
vmcuser [604](#)
vmdatastorethreshold [605](#)
vmdefaultdvportgroup [607](#)
vmdefaultdvswitch [608](#)
vmdefaultnetwork [608](#)
vmenabletemplatebackups [609](#)
vmlimitperdatastore [611](#)
vmlimitperhost [612](#)
vmmaxbackupsessions [613](#)
vmmaxparallel [615](#)
vmmaxparallelrestoresessions [618](#)
vmmaxparallelrestorevms [619](#)
vmmaxrestoresessions [617](#)
vmmc [621](#)
vmnocbtcontinue [622](#)
vmnoprdmdisks [623](#)
vmnovrdmdisks [624](#)
vmpreferdagpassive [625](#)
vmprocessvmwithprdm [627](#)
vmprocesswithindependent [626](#)
vmskipctlcompression [628](#)
vmskipmaxvirtualdisks [629](#)
vmskipmaxvmdks [630](#)
vmtagdatamover [630](#)
vmtagdefaultdatamover [633](#)
vmtimeout [640](#)
vmverifyifaction [635](#)
vmverifyiflatest [637](#)
vmvstorcompr [638](#)
vmvstortransport [639](#)
Web クライアントの要約 [330](#)
webports [641](#)
wildcardsareliteral [642](#)

オペレーティング・システム 要件

クライアント [3](#)

オンライン・ヘルプ

オンライン・フォーラム [159](#)

サービスおよびテクニカル・サポート [159](#)
表示 [159](#)

[力行]

開始

自動

概要 [1](#)

拡張 query schedule コマンド [721](#)

拡張許可

アーカイブ [275](#)

拡張照会スケジュール [288](#)

仮想マウント・ポイントの設定 [184](#)

仮想マシン

exclude オプション [420](#)

include オプション [454](#)

活動バックアップ・バージョン

表示 [703](#)

リストア [256](#)

環境の前提条件

AIX クライアント [3](#)

HP-UX Itanium 2 API [4](#)

Linux for zSeries クライアント [6](#)

Linux on Power Systems [5](#)

Linux x86_64 クライアント [6](#)

Solaris クライアント [8](#)

環境変数

API の設定 [69](#)

Bourne および Korn シェルの設定 [68](#)

C シェルの設定 [69](#)

DSM_CONFIG [67](#)

DSM_DIR [67](#)

DSM_LOG [67](#)

LANG [67](#)

管理クライアント

プライベート・ネットワーク内でのセキュア・セッションの許可 [576](#)

管理クラス

アーカイブ処理中の指定変更 [304](#)

アーカイブ・ファイルのバインド [272](#)

考慮事項 [303](#)

指定、include オプションによる [303](#)

指定変更、デフォルトの [303](#)

情報の表示 [717](#)

使用例、管理クラスの [303](#)

処理 [303](#)

選択、ファイルのための [303](#)

デフォルト [298](#)

表示 [299](#)

ファイルのバインド [305](#)

割り当て [229](#)

割り当て、ディレクトリーへの [304](#), [305](#), [384](#)

割り当て、ファイルへの [303](#)

IBM Spectrum Protect による使用法 [166](#)

キーボード [791](#)

旧バージョンの製品からのバックアップ/アーカイブ・クライアントのアップグレード [1](#)

強制、増分バックアップの [341](#)

共通インターネット・ファイル・システム (CIFS)

ファイル・システムのバックアップ [215](#)

共有静的逐次化 [301](#), [357](#)

共有動的逐次化 [301](#), [357](#)

共用メモリー通信方式

オプション [311](#)

許可

アクセスの標準および拡張の保存 extended [275](#)

ファイルをリストアまたはリトリブするユーザーの [262](#)

許可ユーザー

暗号化の使用可能化 [58](#)

許可ユーザー (authorized user)

タスク [55](#)

定義 [55](#)

許可ユーザーに対する暗号化の使用可能化 [58](#)

クライアント

クライアント・ノードの TCP/IP スライディング・ウィンドウのサイズ [582](#)

最初のサーバー接続の場合とは異なる、クライアント

TCP/IP アドレス [578](#)

クライアント (続き)

最初のサーバー接続の場合とは異なる、クライアント

TCP/IP ポート番号 [579](#)

自動更新 [2](#)

登録、サーバーに [123](#)

パスワードの設定 [124](#)

クライアント/サーバー通信

確立 [61](#)

共有メモリー接続を確立する TCP/IP ポート・アドレス [544](#)

クライアント・ノードの TCP/IP スライディング・ウィンドウのサイズ [582](#)

サーバーにトランザクションを送信する前の、クライアント・バッファのキロバイト数 [588](#)

サーバーによるワークステーションの識別 [489](#)

サービスを受けるための接続先のサーバー名の指定 [540](#)

最初のサーバー接続の場合とは異なる、クライアント

TCP/IP アドレス [578](#)

最初のサーバー接続の場合とは異なる、クライアント

TCP/IP ポート番号 [579](#)

失敗の後の再接続間隔 [362](#)

失敗の後の再接続試行回数 [361](#)

小さいトランザクションを最初にバッファリングせずにサーバーに送信するかどうか [580](#)

デフォルト・サーバーの指定 [378](#)

内部 TCP/IP 通信バッファのサイズ [577](#)

ファイルの読み取りまたは書き込み時にクライアント・ユーザーが使用する最大ディスク入出力バッファ [387](#)

方式 [360](#)

dsmcad の TCP/IP アドレス [578](#)

IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP アドレス [581](#)

IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP ポート・アドレス [581](#)

クライアント・アクセプター・デーモン

スケジューラー、Web クライアント、または両方の管理 [476](#)

スケジューラーの管理の構成 [72](#)

クライアント・オプション

概要 [650](#)

現在の設定の表示 [719](#)

コマンドでの使用 [331](#)

コマンド・ラインを使用した指定変更 [331](#)

処理順序 (優先順位) [331](#)

exclude

exclude.archive [126](#)

exclude.attribute.symlink [126](#)

exclude.backup [126](#)

exclude.compression [126](#)

exclude.dir [126](#)

exclude.file [126](#)

exclude.file.backup [126](#)

exclude.fs [126](#)

exclude.image [126](#)

クライアント・オプションの解説 [341](#)

クライアント・オプション・ファイル

概要 [59](#)

作成と変更 [61](#)

必須指定のオプション [61](#)

クライアント管理サービス [53](#)

クライアント管理サービスのインストール [53](#)

クライアント構成要素

AIX クライアント [3](#)

Linux on Power Systems クライアント [5](#)

Linux on System z クライアント [6](#)

- クライアント 構成要素 (続き)
 - Linux x86_64 クライアント [6](#)
 - Mac OS X クライアント [7](#)
 - Oracle Solaris クライアント [8](#)
- クライアント・コマンド・オプション
 - 概要 [650](#)
- クライアント・システム・オプション
 - exclude
 - exclude.archive [126](#)
 - exclude.attribute.symlink [126](#)
 - exclude.backup [126](#)
 - exclude.compression [126](#)
 - exclude.dir [126](#)
 - exclude.file [126](#)
 - exclude.file.backup [126](#)
 - exclude.fs [126](#)
- クライアント・システム・オプション・ファイル (client system-options file)
 - コピーと変更 [61](#)
 - ファイル内での include-exclude オプションの指定 [125](#)
- クライアント・スケジューラー
 - オプション [291](#)
 - 開始 [74](#), [762](#)
 - 始動時に実行 [286](#)
 - 自動的に開始 [156](#)
 - 表示、スケジュールされた作業の [288](#), [290](#)
- クライアント・ノード・プロキシ
 - アーカイブの概要 [272](#)
 - サポート [272](#)
 - スケジューリング [193](#)
 - バックアップ [193](#)
- クライアント・ノード・プロキシ・サポート [191](#)
- クライアント・ノード・プロキシ・バックアップに対するサポートの構成 [191](#)
- クライアントの構成、データ重複排除の [94](#)
- クライアントの自動更新 [2](#)
- クライアント・ユーザー・オプション
 - カスタマイズ [65](#)
- クライアント・ユーザー・オプション・ファイル
 - コマンドを使用した指定変更 [331](#)
- クラシック (標準) リストア [260](#)
- クラスター環境
 - インストール IBM Spectrum Protect [106](#)
- グラフィカル・ユーザー・インターフェース
 - アクティブ/非アクティブ・バックアップ・バージョンの表示 [158](#), [256](#)
 - イメージ・バックアップの実行 [203](#)
 - オブジェクトのバックアップでの使用 [184](#)
 - オンライン・ヘルプの表示 [159](#)
 - サーバー・ファイル・スペースからの個々のファイルまたはイメージの削除 [680](#)
 - 処理状況の表示 [225](#)
 - セッションの開始 [147](#)
 - セッションの終了 [159](#)
 - パスワードの変更 [156](#)
 - ローカル・バックアップ・セットの使用可能化 [240](#)
 - ローカル・バックアップ・セット・リストアのために有効化 [474](#)
- グループ・バックアップ
 - 概要 [190](#)
 - 仮想ファイル・スペース名の指定 [595](#)
 - 活動/非活動オブジェクトの表示 [445](#)
 - グループの名前の指定 [439](#)
 - すべてのメンバーの表示 [544](#)

- グループ・バックアップ (続き)
 - フルまたは差分の指定 [482](#)
- クローズされた登録 (closed registration)
 - 許可 [124](#)
 - 使用 [124](#)
- 形式
 - オプションの要約 [327](#)
- 形式および言語
 - オプションの要約 [327](#)
- 権限
 - オプション [328](#)
- 言語ロケール
 - サポートされる [66](#)
- 構成
 - オプションのタスク [55](#)
 - クライアント・アクセプターによって管理されるスケジューラー [72](#)
 - クライアント・スケジューラー [71](#)
 - 必須のタスク [55](#)
 - ファイル・リストア
 - オプション [155](#)
- 構文図
 - 繰り返し値 [xxiv](#)
 - 必須選択項目 [xxiv](#)
 - 読み方 [xxiv](#)
- 異なる管理クラスへのファイルの再バインド [306](#)
- コピー・グループ
 - アーカイブ [298](#)
 - バックアップ [298](#)
- コピー・グループ名属性 [300](#)
- コピー・タイプ属性 [300](#)
- コピーの mode パラメーター
 - 変更 [302](#)
 - absolute [302](#)
- コピーの宛先属性 [302](#)
- コピーの逐次化属性 [301](#)
- コピー頻度属性 [300](#)

コマンド

- アーカイブ [654](#)
- オプションの使用 [331](#)
- オプションを入力するときの一般規則 [331](#)
- 可能なファイル指定の最大数 [651](#)
- コマンド・ラインでの入力 [650](#)
- シェル・スクリプトでの使用 [295](#)
- 実行可能ファイルでの使用 [295](#)
- 使用 [645](#)
- スケジュール [762](#)
- スケジュールされた、使用可能化と使用不能化 [291](#)
- 選択バックアップ [764](#)
- 対話式 (ループ) モード [649](#)
- 入力 [650](#)
- バッチ・モード [648](#)
- パラメーターの概要 [651](#)
- ファイル指定の指定 [651](#)
- ヘルプ [688](#)
- リストア [728](#)
- リトリート [759](#)
- ワイルドカード文字使用 [653](#)
- archive fastback [656](#)
- backup fastback [658](#)
- backup group [661](#)
- backup image [663](#)
- backup nas [668](#)
- backup vm [670](#)

コマンド (続き)

- cancel process [677](#)
- cancel restore [677](#)
- delete access [678](#)
- delete archive [679](#)
- delete backup [680](#)
- delete filespace [684](#)
- delete group [685](#)
- expire [686](#)
- incremental [689](#)
- loop [696](#)
- macro [697](#)
- monitor process [698](#)
- preview archive [698](#)
- preview backup [699](#)
- query access [700](#)
- query archive [701](#)
- query backup [703](#)
- query backupset [706](#), [708](#)
- query filespace [710](#)
- query group [712](#)
- query image [714](#)
- query inclexcl [716](#)
- query mgmtclass [717](#)
- query node [718](#)
- query options [719](#)
- query restore [720](#)
- query schedule [721](#)
- query session [721](#)
- query systeminfo [722](#)
- query VM [723](#)
- restart restore [727](#)
- restore backupset [733](#), [737](#)
- restore backupset の考慮事項 [242](#), [736](#)
- restore group [740](#)
- restore image [742](#)
- restore NAS [745](#)
- restore vm [747](#)
- set access [767](#)
- set event [769](#)
- set netappsvm [771](#)
- set password [772](#)
- set vmtags [778](#)

コマンド処理オプションの要約 [328](#)

コマンド・セッション

- 開始 [648](#)

- 終了 [648](#)

コマンド・パラメーター

- 概要 [651](#)

コマンド・ライン

- アーカイブ済みファイルのリトリブ [277](#)
- アーカイブするための記述の割り当て [272](#)
- アーカイブ中の管理クラスの指定変更 [304](#)
- イメージ・バックアップの実行 [205](#)
- クライアント・オプションの現在の設定の表示 [719](#)
- コマンドでオプションを入力するときの一般規則 [331](#)
- コマンドの入力 [650](#)
- セッション中のオプション・ファイルの指定 [494](#)
- セッションの開始 [148](#)
- セッションの終了 [159](#)
- 操作の戻りコード [295](#)
- 大量のリストア操作の実行 [259](#)
- 特定時点リストアの実行 [249](#)
- パラメーターの概要 [651](#)

コマンド・ライン (続き)

表示

- 処理状況 [225](#)

- ファイル指定の指定 [651](#)

- ファイルのアーカイブ [275](#)

- 保存セット・データのリストア [251](#)

- ワイルドカード文字使用 [653](#)

- NAS ファイル・システムの制限 [210](#)

- NAS ファイル・システムのバックアップ [213](#)

[サ行]

サーバー

- オプションを含むスタanzasを開始するための識別 [540](#)

- 確立、コミュニケーションの [61](#)

- サービスを受けるための接続先のサーバー名の指定 [540](#)

- 通信 [61](#)

- 通信の確立、Secure Sockets Layer (SSL) による [78](#)

- ファイアウォールを通して通信を確立 [76](#)

- IBM Spectrum Protect サーバーの TCP/IP アドレス [581](#)

- TCP/IP ポート・アドレス [581](#)

サーバー・オプション

- Sslfipmode [565](#)

- サーバー・ファイル・スペースからの個々のバックアップの

- 削除 [189](#)

- サービスおよびテクニカル・サポート [159](#)

- 災害復旧 [265](#)

- 再始動可能リストア [260](#)

- 再始動可能リストア・セッションの表示 [720](#)

- 最終アクセス日付

- バックアップまたはアーカイブ時に更新するかどうかの

- 指定 [175](#), [506](#)

- 最終アクセス日付を更新するかどうかの指定 [506](#)

- 削除

- サーバー・ファイル・スペースからの個々のアーカイブ
- の [274](#), [679](#)

- サーバー・ファイル・スペースからの個々のバックアップ
- の [680](#)

- 削除済みファイル・システム [233](#)

- サブディレクトリー

- アーカイブ [272](#)

- バックアップに含める [185](#)

- サポート

- システム情報の収集 [365](#), [432](#), [722](#)

- サポートされる言語ロケール [66](#)

- シェル・スクリプト

- コマンドの使用 [295](#)

- 戻りコード [295](#)

- 自己完結型のアプリケーション保護 [463](#)

- 時刻形式

- 指定 [583](#)

- システム状態

- 活動/非活動オブジェクトの表示 [445](#)

- システム情報

- 収集 [365](#), [432](#)

- システム・ファイル

- 除外 [129](#)

- システム要件、AIX [4](#)

- システム要件、HP-UX Itanium 2 [4](#)

- システム要件、Linux on Power Systems [5](#)

- システム要件、Linux System z [7](#)

- システム要件、Linux x86_64 [6](#)

- システム要件、Mac OS X [7](#)

- システム要件、Solaris [8](#)

システム・ログのダウンロード
Web ユーザー・インターフェース・セッションを使用し
た [154](#)
実行可能ファイル
からの戻りコード [295](#)
自動化、バックアップ・サービスの
オプション [291](#)
開始、クライアント・スケジューラーの [74](#)
バックアップ後のコマンドの処理 [502](#)
バックアップ前のコマンドの処理 [505](#)
表示、スケジュールされた作業の [288, 290](#)
自動クライアント・フェイルオーバー
回避 [104](#)
概要 [97](#)
構成 [100](#)
構成および使用 [97](#)
制約事項 [99](#)
接続のテスト [104](#)
その他のコンポーネント [100](#)
データのリストア [246](#)
データのリトリブ [246](#)
フェイルオーバーの強制 [104](#)
複製状況の判別 [103](#)
要件 [98](#)
自動更新 [350](#)
始動時にクライアント・スケジューラーを開始する [286](#)
ジャーナル構成ファイル
構成方法 [84](#)
ジャーナル・データベース・ファイル
errorlog [85](#)
journaldir [85](#)
ジャーナル・デーモン (journal daemon)
開始、ジャーナル・デーモンの [84](#)
ジャーナル構成ファイルの設定 [84](#)
停止、ジャーナル・デーモンの [84](#)
ジャーナル・ベースのバックアップ
開始、ジャーナル・デーモンの [84](#)
代わりに従来のフル増分を実行 [490, 693](#)
構成設定の指定 [84](#)
使用する時期 [180](#)
除外、ファイルの [127](#)
増分との比較、日付による [180](#)
停止、ジャーナル・デーモンの [84](#)
ディレクトリーの除外 [127](#)
リストア [179](#)
include-exclude オプション
ジャーナル・ベースのバックアップ [127](#)
従来のフル増分バックアップ [177](#)
従来のフル増分バックアップの実行 [693](#)
除外、データ重複排除ファイルの [96](#)
除外、ファイルの
システム・ファイル [129](#)
ワイルドカード文字 [131](#)
ワイルドカード文字使用 [132](#)
処理オプション
エラー処理 [329](#)
概要 [309](#)
形式 [327](#)
形式および言語 [327](#)
権限 [328](#)
コマンドでの指定 [331](#)
使用 [139, 142, 309](#)
診断 [330](#)
セントラル・スケジューリング [326](#)

処理オプション (続き)
通信 [310](#)
トランザクション処理 [329](#)
バックアップおよびアーカイブ [312](#)
リストアおよびリトリブ [323](#)
Web クライアント [330](#)
処理時間
見積もり [184](#)
資料 [xxiv](#)
身体障害 [791](#)
診断
オプション [330](#)
診断情報の収集 [53](#)
シンボリック・リンク
アーカイブとリトリブ [275](#)
処理 [453](#)
バックアップ [230, 453](#)
バックアップからの除外 [453](#)
リストア
UNIX および Linux の制約事項 [728](#)
exclude オプション [453](#)
シンボリック・リンクおよび別名
処理 [419, 453](#)
バックアップ [419, 453](#)
バックアップからの除外 [419, 453](#)
exclude オプション [419, 453](#)
シンボリック・リンクおよび別名の処理 [419](#)
シンボリック・リンクの処理 [453](#)
スケジューラー
イベント・ロギング [290](#)
オプション [291](#)
開始 [74](#)
クライアント・アクセプター・デーモンによって管理さ
れる [476](#)
構成 [71](#)
サーバーまたはクライアントのどちらかがファイアウォー
ルを経由してセッションを開始するの [541](#)
スケジュールされたコマンドの処理の試行間隔 (分数)
[527](#)
スケジュールされた作業を行うための、サーバーとの接
続間隔 (時間数) [511](#)
スケジュールされたバックアップ後のメモリー保持を解
決 [476](#)
表示、スケジュールされた作業の [288, 290](#)
ポーリング・モードまたはプロンプト・モード [536](#)
リストア操作またはリトリブ操作の実行を無効にする
かどうか [537](#)
スケジューラーの比較
クライアント・アクセプターと従来のスケジューラー
[71](#)
スケジューリング
クライアント・ノード・プロキシ [193](#)
クライアント・ノード・プロキシ・バックアップ [191](#)
GPFS ファイル・システム [196](#)
IBM PowerHA SystemMirror クラスタ [194](#)
スケジュール (自動) バックアップ
オプション [291](#)
開始 [74](#)
バックアップ後のアプリケーションの再始動 [234](#)
バックアップ後のコマンドの処理 [502](#)
バックアップ前のコマンドの処理 [505](#)
バックアップ前のファイルのクローズ [234](#)
表示、スケジュールされた作業の [288, 290](#)
スケジュール・コマンド [762](#)

- スケジュールされたイベントの表示 [721](#)
 - スケジュールされたコマンド
 - 使用可能化/使用不能化 [291](#)
 - スケジュールされたサービス
 - スケジュール済みコマンドを無効にする [529](#), [530](#)
 - 0 以外の UID の場合のスケジュールの定義 [291](#)
 - NAS ファイル・システムの制限 [210](#)
 - スケジュール・ログ
 - 項目の保持日数および除去された項目を保存するかどうかの指定 [534](#)
 - サイズの制御 [532](#)
 - スケジュール・ログ情報を保管するためのパスおよびファイル名の指定 [533](#)
 - ストレージ
 - 再始動可能リストア・セッションの表示 [720](#)
 - ストレージ・エージェント
 - LAN フリー・データ移動 [163](#)
 - LAN フリー・データ移動のために使用 [408](#)
 - ストレージ・エリア・ネットワーク
 - バックアップ・セットのリストアに使用 [408](#), [737](#)
 - LAN フリー・データ移動 [163](#)
 - LAN フリー・データ移動のために使用 [408](#)
 - ストレージ管理ポリシー
 - 管理クラス [298](#)
 - コピー・グループ [298](#)
 - デフォルト管理クラス [297](#)
 - バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI における表示 [229](#)
 - ファイルへの管理クラスの割り当て [229](#)
 - ポリシー・セット
 - アクティブ・ポリシー・セット (Active policy set) [297](#)
 - ポリシー・ドメイン
 - デフォルト [297](#)
 - 標準 [297](#)
 - include-exclude リスト [298](#)
 - ストレージ・プール
 - GPFS [248](#)
 - スナップショット
 - 構成 [115](#)
 - スナップショット-差分-増分バックアップ [546](#)
 - スナップショット、差分
 - HTTPS 使用 [181](#)
 - スナップショット差分バックアップ
 - HTTPS 使用 [181](#)
 - スナップショット差分バックアップの実行
 - HTTPS 使用 [182](#)
 - スパーズ・ファイル
 - バックアップ [232](#)
 - リストア [232](#)
 - リストア方法またはリトリブ方法の指定 [475](#)
 - 制御ファイル [598](#)
 - 静止アプリケーション [463](#)
 - 静的逐次化 (static serialization) [301](#)
 - 制約事項
 - クライアント・アクセプター・デーモンでの絶対パスの指定 [494](#)
 - プロキシ化されたセッション内 [192](#), [272](#)
 - asnodename オプション [344](#)
 - asnodename セッション設定 [346](#)
 - セッション情報の表示 [721](#)
 - セッションの開始
 - 対話モード [149](#)
 - バッチ・モード [149](#)
 - 設定
 - 必須の root ユーザー・タスク [61](#)
 - ユーザー特権 [152](#)
 - 設定、環境変数の
 - API、UNIX および Linux
 - DSMI_CONFIG [69](#)
 - DSMI_DIR [69](#)
 - DSMI_LOG [69](#)
 - 設定、言語ロケールの [66](#)
 - セットアップ
 - 必須の root ユーザー・タスク [61](#)
 - 選択バックアップ
 - 概要 [175](#), [183](#), [185](#)
 - クライアント Java GUI の使用 [184](#)
 - クライアントのコマンド・ライン [185](#)
 - コマンド・ライン [185](#)
 - シンボリック・リンク [230](#)
 - ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け [197](#)
 - セントラル・スケジューリング
 - オプションの要約 [326](#)
 - 操作の戻りコード [295](#)
 - 増分、ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け [197](#)
 - 増分バックアップ
 - イメージ・バックアップ [201](#), [667](#)
 - 概要 [175](#)
 - クライアント Java GUI の使用 [184](#)
 - クライアント・ドメイン [388](#)
 - クライアントのコマンド・ライン [185](#)
 - コマンド・ライン [185](#)
 - 新規および変更されたファイル [175](#)
 - 新規ファイル、および最後のバックアップよりも後の修正日付のある変更済みファイル [465](#)
 - 新規ファイル、および最後のバックアップよりも後の修正日付のある変更済みファイルのバックアップ [465](#)
 - シンボリック・リンク [230](#)
 - ディレクトリー、処理の概要 [175](#)
 - ディレクトリーの
 - 処理の概要 [175](#)
 - 日付による [185](#)
 - ファイルのリストの処理 [429](#)
 - フォルダー、概要 [175](#)
 - フォルダーの
 - 処理の概要 [175](#)
 - メモリー節約アルゴリズム [480](#)
 - メモリーの最適化 [166](#)
 - ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け [557](#)
 - ACL 更新チェックのスキップ [545](#)
 - description [175](#)
 - GPFS、マルチノード・クラスター環境 [168](#), [388](#)
 - ソフトウェア更新 [53](#)
 - ソフトウェア要件、AIX [4](#)
 - ソフトウェア要件、HP-UX Itanium 2 [4](#)
 - ソフトウェア要件、Linux System z [7](#)
 - ソフトウェア要件、Linux x86/x86_64 [6](#)
 - ソフトウェア要件、Linux on Power Systems [5](#)
 - ソフトウェア要件、Mac OS X [7](#)
 - ソフトウェア要件、Solaris [8](#)
- [タ行]
- 対話式セッション

対話式セッション (続き)

開始 [149, 696](#)

終了 [696](#)

使用 [696](#)

対話モード [649](#)

タスク

オープン登録 (open registration) [123](#)

管理クラスの表示 [299](#)

クローズされた登録 (closed registration) [123](#)

セッションの終了 [156](#)

ディレクトリーへの管理クラスの割り当て [305](#)

パスワードの変更 [156](#)

GUI、管理クラスの指定変更 [304](#)

root ユーザー [55](#)

逐次化

コピー逐次化 (Copy serialization)

共用静的 (shared static) [301](#)

静的 (static) [301](#)

動的 (dynamic) [301](#)

通信

確立、Secure Sockets Layer (SSL) による [78](#)

ファイアウォールを介しての確立 [76](#)

通信方式

インストール可能ソフトウェア [5-8](#)

共有メモリー

AIX クライアント [4](#)

HP-UX Itanium 2 API [5](#)

Linux on System z クライアント [7](#)

Linux x86_64 クライアント [6](#)

Oracle Solaris クライアント [8](#)

要約 [310](#)

TCP/IP

AIX クライアント [4](#)

HP-UX Itanium 2 API [5](#)

Linux on Power Systems クライアント [5](#)

Linux on System z クライアント [7](#)

Linux x86_64 クライアント [6](#)

Mac OS X クライアント [8](#)

Oracle Solaris クライアント [8](#)

ディスク回復 [265](#)

ディスク・スペース、AIX [4](#)

ディスク・スペース、HP-UX Itanium 2 [4](#)

ディスク・スペース、Linux on Power Systems [5](#)

ディスク・スペース、Linux System z [7](#)

ディスク・スペース、Linux x86_64 [6](#)

ディスク・スペース、Mac OS X [7](#)

ディスク・スペース、Solaris [8](#)

ディスク・スペース要件

クライアント [3](#)

ディレクトリー

管理クラスの割り当て [384](#)

コマンド・ラインでの指定 [651](#)

除外 [126](#)

増分バックアップ処理の概要 [175](#)

バックアップ処理からの除外 [416](#)

日付による増分バックアップ時の処理 [179](#)

データ

リストア [257](#)

データ重複排除 [90](#)

データ重複排除、クライアントの構成 [94](#)

データ重複排除ファイル

exclude [96](#)

データのバックアップ [221](#)

データ保護設定

データ保護設定 (続き)

継承 [787](#)

タグとして表記 [780](#)

バックアップ・ポリシーの構成のヒント [789](#)

データ保護タグ付け

概要 [779](#)

サポートされるリスト [780](#)

タグの継承 [787](#)

デフォルト管理クラス [297](#)

デフォルト・ドメイン

バックアップからのドメインの除外 [185, 388](#)

デフォルトのクライアント・ユーザー・オプション・ファイル

作成と変更 [63](#)

例 [63](#)

デフォルトのデータ・ムーバー [633](#)

デフォルトのポリシー・ドメイン [297](#)

デュアル・ブート・システム

重複名 [173](#)

動的および共用逐次化 [301](#)

登録

オープン登録の使用 [124](#)

クライアントをサーバーに [123](#)

クローズ登録の使用 [124](#)

特殊ファイル・システム [168, 229](#)

特定時点リストア

イメージ・バックアップ [667](#)

コマンド・ラインの使用 [249](#)

GUI の使用 [249](#)

ドメイン

イメージ・バックアップのための組み込み [393](#)

増分バックアップ [232](#)

増分バックアップの組み込み [388](#)

ドライブの指定、デフォルトの [184](#)

フル VM バックアップに組み込む [395](#)

GUI を使用するバックアップ [184](#)

NAS イメージ・バックアップのための組み込み [394](#)

トランザクション処理

オプションの要約 [329](#)

txnbytelimit オプション [588](#)

[ナ行]

入カストリング

ブランクを含む [150](#)

認証

IBM Spectrum Protect クライアント [146](#)

認証局

ルート証明書

認証局 [83](#)

ネットワーク・データ管理プロトコル (Network Data Management Protocol (NDMP)) [9](#)

ネットワーク・ファイル・システム (NFS)

ファイル・システムのバックアップ [215](#)

ノード

照会に対するタイプの指定 [589](#)

ノード名 [61](#)

ノード名 (フィールド) [264](#)

[ハ行]

バージョン・データ

deleted 属性 [300](#)

バージョン・データ (続き)

deleted パラメーター [301](#)

exists 属性 [300](#)

exists パラメーター [301](#)

バージョン保持属性 [302](#)

ハードウェア要件、AIX [4](#)

ハードウェア要件、HP-UX Itanium 2 [4](#)

ハードウェア要件、Linux on Power Systems [5](#)

ハードウェア要件、Linux System z [7](#)

ハードウェア要件、Linux x86_64 [6](#)

ハードウェア要件、Mac OS X [7](#)

ハードウェア要件、Solaris [8](#)

ハード・リンク

アーカイブおよびリトリブ [276](#)

バックアップ [232](#)

リストア [232](#)

始めに

オンライン・ヘルプの表示 [139](#)

クライアント・スケジューラー [139](#)

コマンド・ライン・セッション [139](#)

セッションの終了 [139](#)

パスワードの変更 [139](#)

ファイル・リストのソート [139](#)

GUI セッション [139](#)

Web クライアント・セッション [139](#)

パスワード

暗号化されたパスワード・ファイルを保管するためのディレクトリーの位置の指定 [498](#)

クライアントのための設定 [124](#)

自動的に生成するのか、ユーザー・プロンプトとして設定するのかの指定 [497](#)

使用 [148](#)

設定 [495](#)

変更 [156](#), [772](#)

文字数 [156](#)

有効な文字 [156](#)

パスワード・ストア [144](#)

パスワードのロケーション [144](#)

バックアップ

暗号化ファイル・システム (EFS) [218](#)

イメージ

クライアント・ドメイン [393](#)

増分バックアップ [667](#)

イメージ: 静的、動的、スナップショット [197](#)

オープン・ファイルのバックアップの試行回数 [357](#)

オプションの要約 [312](#)

概要 [161](#)

基本タスク [161](#)

共用メモリーを使用しての速度の向上 [311](#)

コピー・モード [302](#)

処理状況の表示 [225](#)

新規または変更されたファイル [175](#)

シンボリック・リンク [230](#)

選択バックアップ、クライアントのコマンド・ラインの使用 [185](#)

単一のノード名に属する複数のクライアント上の共有データ [344](#)

ディレクトリーのみを処理 (ファイルは処理しない) [385](#)

日付による増分

クライアントのコマンド・ライン [185](#)

ファイル指定ごとに1つのサーバー・セッション [359](#)

並列 [611-613](#), [615](#)

並列セッション [224](#)

バックアップ (続き)

マルチセッション、サーバーへのファイルの連続送信 [359](#)

ユーザー・アクセスの照会 [700](#)

猶予期間保持 [298](#)

ACL 処理のスキップ [545](#)

btrfs [206](#)

incremental

ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け [695](#)

Network Attached Storage (NAS) [668](#)

selective

ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け [766](#)

VM テンプレート [609](#)

Web クライアント・セッションの開始 [151](#)

Web ユーザー・インターフェース・セッションの開始 [153](#)

バックアップ、NAS

DSM_DIR の使用によるプラグイン・ライブラリーの指定 [67](#)

バックアップ、オープン・ファイルの [234](#)

バックアップ、クライアント・ノード・プロキシを使用した

エージェント・ノード (agent node) [191](#)

概要 [191](#)

ターゲット・ノード (target node) [191](#)

バックアップ、スパーズ・ファイルの [232](#)

バックアップ、ハード・リンク [232](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアント

GUI [211](#)

インストール [10](#)

概要 [1](#)

NAS

ファイル・システムのバックアップ [211](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI

ファイアウォールを通じて通信を確立 [76](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアント V8.1.12 の新機能 [xxvii](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントのアップグレード [1](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアントのマイグレーション [1](#)

バックアップ・イメージ、ボリューム・デバイス・タイプ・サポート [200](#)

バックアップ・コピー・グループ

属性 [299](#)

バックアップ・サービスからのファイルの除外 [166](#)

バックアップ時のデータの暗号化 [167](#)

バックアップ・セット

リストア [237](#), [240](#)

リストアの考慮事項 [242](#), [736](#)

ローカル・リストアのために GUI を使用可能化 [240](#)

ローカル・リストアのために GUI を有効化 [474](#)

SAN 環境でのリストア [737](#)

バックアップ・チェーンの整合性チェック [635](#), [637](#)

バックアップの計画 [161](#)

バックアップの考慮事項 [228](#)

バックアップの最大ファイル・サイズ [172](#)

バックアップの比較: 増分、日付による増分 [180](#)

バックアップ・バージョンのみ保存属性 [301](#)

バックアップ・ファイル

管理クラスの割り当て [303](#)

バッチ・モード

セッションの開始 [149](#)

- パフォーマンス
 - トランザクション・オプション [329](#)
 - トランザクション処理 [588](#)
 - バックアップ、リストア、アーカイブ、リトリブの速度の向上 [311](#)
- パラメーター
 - yes および no、代替値 [341](#)
- 非アクティブ・バックアップ・バージョン保存属性 [301](#)
- 非活動バックアップ・バージョン
 - 表示 [158](#), [256](#), [703](#)
 - リストア [256](#)
- 日付形式
 - 指定 [371](#)
- 日付による増分
 - 概要 [175](#)
 - クライアントのコマンド・ライン [185](#)
 - コマンド・ライン [185](#)
 - 使用する時期 [180](#)
 - 増分との比較 [180](#)
 - 増分との比較、ジャーナル・ベース [180](#)
 - ディレクトリーの
 - 処理の概要 [179](#)
 - description [179](#)
- 日付による増分バックアップ
 - イメージ・バックアップでの使用 [202](#)
 - クライアント Java GUI の使用 [184](#)
- 表示
 - アーカイブ情報 [701](#)
 - オンライン・ヘルプ [159](#)
 - 再始動可能リストア・セッション [720](#)
 - スケジュールされたイベント [721](#)
 - セッション情報 [721](#)
 - ポリシー情報 [299](#)
- 標準 (クラシック) リストア [260](#)
- 標準管理クラス
 - コピー・グループ名 [300](#)
 - コピー・タイプ [300](#)
 - コピー逐次化 (Copy serialization) [301](#)
 - コピーの宛先 [302](#)
 - コピー頻度 [300](#)
 - コピー・モード
 - 変更 [302](#)
 - absolute [302](#)
 - 重複排除データ属性 [302](#)
 - データが削除されたバージョン (Versions data deleted)
 - アクティブ・バージョン [300](#)
 - 非活動バージョン [300](#)
 - データが存在するバージョン [300](#)
 - デフォルト値 [299](#)
 - バージョン保持 [302](#)
 - バックアップ・バージョンのみ保存 [301](#)
 - 非アクティブ・バックアップ・バージョン保存 [301](#)
- 標準ポリシー・ドメイン [297](#)
- ファイアウォール
 - サーバーまたはクライアントのどちらかがセッションを開始するのか [541](#)
 - 通信の確立 [76](#), [440](#), [581](#)
 - Web クライアントの TCP/IP ポートの指定 [641](#)
 - Web クライアントを介した使用 [641](#)
- ファイル
 - アーカイブ [269](#), [654](#)
 - アーカイブ後の削除 [379](#)
 - アーカイブ情報の照会 [701](#)
 - アーカイブ済みの、管理クラスの指定変更 [304](#)

- ファイル (続き)
 - アーカイブ中またはバックアップ中の圧縮 [363](#)
 - アーカイブの管理方法 [278](#)
 - アーカイブのリトリブ [277](#)
 - 圧縮中の増大の管理 [363](#)
 - 暗号化 [167](#)
 - オープン時のバックアップ [234](#)
 - 管理クラスのバインド [305](#)
 - 管理クラスの割り当て [229](#)
 - グループの除外 [131](#), [132](#)
 - グループの包含 [131](#), [132](#)
 - コマンドを使用するアーカイブ [275](#)
 - コマンドを使用するリストア [262](#)
 - コマンドを使用するリトリブ [277](#)
 - サーバー・ファイル・スペースからの個々のアーカイブの削除 [274](#), [679](#)
 - サーバー・ファイル・スペースからの個々のバックアップの削除 [680](#)
 - スペースのリストア [232](#)
 - 操作の最大ファイル・サイズ [172](#)
 - 大量のリストア操作の実行 [259](#)
 - ハード・リンクされたバックアップ [232](#)
 - ハード・リンクされたリストア [232](#)
 - バックアップ情報の照会 [703](#)
 - 複数ファイル指定のアーカイブ [272](#)
 - 別のノードに属するファイルのリストア [264](#)
 - 別のノードに属するファイルのリトリブ [264](#)
 - 別のワークステーションへのリストアまたはリトリブ [265](#)
 - 変更の定義 [175](#)
 - ユーザー・アクセスの照会 [700](#)
 - ユニコードでないファイル・スペースをユニコード有効に名前変更する [351](#), [764](#)
 - リストア [256](#)
 - リストアまたはリトリブする別のユーザーの許可 [262](#)
 - リストのアーカイブ [272](#), [429](#)
 - リストのソート [158](#)
 - include-exclude
 - ユニコード・フォーマットで作成 [447](#)
 - include-exclude 処理 [136](#)
- ファイル・システム
 - イメージ・バックアップ [197](#)
 - 仮想マウント・ポイントの定義 [595](#)
 - 削除済み [233](#)
 - サポートされる [168](#)
 - バックアップ処理からの除外 [416](#)
 - ACL サポート [168](#)
 - Btrfs [168](#)
 - GPFS、マルチノード・クラスター環境 [168](#), [388](#)
 - QFS の制限 [168](#)
- ファイル指定
 - コマンドでの最大数 [651](#)
- ファイル・スペース
 - イメージ・バックアップの実行 [663](#)
 - 除外 [126](#)
 - delete [190](#), [266](#), [684](#)
 - fsID の判別 [380](#)
 - NAS またはクライアント・オブジェクト [358](#)
- ファイル・スペースをユニコードにマイグレーション [174](#)
- ファイルへのイメージ
 - リストア [247](#)
- ファイル・リストア
 - オプション [155](#)
 - オプションの構成 [155](#)

- ファジー・バックアップ (fuzzy backup) [301](#)
- フェイルオーバー (failover)
 - クライアント [97](#)
 - クライアントの構成 [100](#)
 - 構成および使用 [97](#)
 - 使用不可 [104](#)
 - 制約事項 [99](#)
 - その他のコンポーネント [100](#)
 - 複製状況の判別 [103](#)
 - 要件 [98](#)
 - リストア [246](#)
 - リトリブ [246](#)
- フォルダー
 - 増分バックアップ処理の概要 [175](#)
- 複数セッションの使用 [225](#)
- 部分的増分
 - 定義 [175](#)
 - 日付による増分
 - 実行 [185](#)
- プラグイン・ライブラリー
 - イメージまたは NAS バックアップまたはリストアのた
めの [67](#)
- プリファレンス・エディター
 - バックアップからのドメインの除外 [184](#)
- フル増分
 - ジャーナル・ベースと日付による増分の比較 [180](#)
 - 使用する時期 [180](#)
 - 定義 [175](#)
 - 日付による増分との比較 [180](#)
 - description [175](#)
- フルバックアップの作成 [222](#)
- プレビュー
 - include-exclude リスト [135](#)
 - restore vm [747](#), [757](#)
- プロキシ化されたセッションの制約事項 [192](#), [272](#)
- 並行バックアップ [224](#)
- 並列バックアップ [224](#), [611-613](#), [615](#)
- 別名の処理 [453](#)
- ヘルプ
 - インターネット・リソース [159](#)
 - オンラインの表示 [159](#)
 - オンライン・フォーラム [159](#)
 - サービスおよびテクニカル・サポート [159](#)
- ポータブル・メディア
 - リストア、バックアップ・セットの [240](#)
- 保守
 - 自動更新 [2](#)
- 保持猶予期間
 - アーカイブ [298](#), [306](#)
 - バックアップ [298](#), [306](#)
- 保守更新のダウンロード [53](#)
- 保存セットからのデータのリストア
 - コマンド・ラインの使用 [251](#)
 - GUI の使用 [251](#)
- 保存データのリストア [251](#)
- ボトムアップ処理
 - include-exclude オプション・ファイル [136](#)
 - include-exclude リスト [136](#)
- ポリシー、ストレージ管理 [297](#)
- ポリシー・セット
 - アクティブ・ポリシー・セット (Active policy set) [297](#)
- ポリシー・ドメイン
 - デフォルトのポリシー・ドメイン [297](#)
 - 標準ポリシー・ドメイン [297](#)

- ボリュームのバックアップ [173](#)
- ボリューム名 [173](#)
- ボリューム命名の注意事項
 - デュアル・ブート・システム [173](#)
 - UNIX マウント・ポイント [173](#)
- ボリューム・ラベル
 - 重複名 [173](#)

[マ行]

- マイグレーション
 - Web クライアント [1](#)
 - Web クライアント言語ファイル [1](#)
- 見積機能 [184](#)
- 無照会リストア [260](#)
- メッセージ
 - 画面上の表示 [594](#)
 - 表示の停止 [513](#)
- メモリー
 - 制約時の最適化 [166](#)
- モード
 - 対話式 (ループ) [649](#)
 - パッチ [648](#)
- モード・パラメーター [300](#)

[ヤ行]

- ユーザー特権
 - 設定 [152](#)
- ユニコード
 - ファイル・スペースをマイグレーション [174](#)
 - ユニコード対応でないファイル・スペースからのリスト
ア [732](#)
 - ユニコードでないファイル・スペースをユニコード有効
に名前変更する [351](#), [764](#)

[ラ行]

- リストア
 - アクティブ・バージョン [256](#)
 - 暗号化ファイル・システム (EFS) [252](#)
 - イメージ
 - 考慮事項 [742](#)
 - ターゲット・ボリュームの不良セクター検出を有効
にします。 [594](#)
 - ファイルへ [445](#)
 - chkdsk ツールを使用した修復 [237](#)
 - DSM_DIR の使用によるプラグイン・ライブラリーの
指定 [67](#)
 - fsck ツールを使用した修復 [237](#)
 - イメージ、確認プロンプトの抑止 [491](#)
 - オプション [155](#)
 - オプションの構成 [155](#)
 - オプションの要約 [323](#)
 - 概要 [237](#)
 - 活動/非活動オブジェクトの表示 [445](#)
 - 既存のファイルを最新のバックアップで置き換える [443](#)
 - 既存ファイルを上書きする前にプロンプトを出すかどう
か [516](#)
 - 基本タスク [237](#)
 - 共用メモリーを使用しての速度の向上 [311](#)
 - クラシック (標準とも呼ばれる) [260](#)
 - グループ

リストア (続き)

グループ (続き)

コマンド 740

コマンドの使用 262

コマンド・ラインを使用したデータ 257

再始動可能 260

最新のバックアップ・バージョン 474

使用可能 SELinux 267

「処理状況」ウィンドウ 256

シンボリック・リンク

UNIX および Linux の制約事項 728

大量の操作の実行 259

他のユーザーに許可 262

ディスク 265

ディレクトリーのみを処理 (ファイルは処理しない) 385

バックアップ、特定時点の確立 500, 501

バックアップ・セット

概要 240

サポートされるテープ装置 733, 737

バックアップの日時に基づく 436, 439

バックアップ・バージョンのリストの作成 499

非アクティブ・バージョン 256

標準 (クラシックとも呼ばれる) 260

ファイル 155

ファイルおよびディレクトリー 256

ファイルのリスト 429

ファイルへのイメージ 247

ファイル・リストのソート 158

フェイルオーバー時 246

別のノードに属するファイル 264

別のノードのファイル 437

別のユーザーのファイル 438

別のワークステーションへの 597

別のワークステーションへのファイルの 265

ポータブル・メディアからの

概要 240

無照会 260

ユニコード対応でないファイル・スペースから 732

ロー論理ボリューム (raw logical volume) 237

論理ボリューム (logical volume) 237, 247

btrfs 206

fsck ツールを使用した修復 742

GUI を使用したローカル・バックアップ・セット 240

GUI、アクティブ/非アクティブ・バージョンの表示 158

NAS

DSM_DIR の使用によるプラグイン・ライブラリーの指定 67

NAS ファイル・システム

コマンド・ライン 255

バックアップ/アーカイブ・クライアント GUI 254

RHEL 5 の非 root ユーザー 267

Web クライアント・セッションの開始 151

Web ユーザー・インターフェース・セッションの開始 153

リストア、スパス・ファイルの 232

リストア、ハード・リンク 232

リストアの最大ファイル・サイズ 172

リトリブ

アーカイブ・コピー 276

アーカイブの日時に基づく 436, 439

オプションの要約 323

既存のファイルの方が新しい場合は、既存のファイルを最新のアーカイブで置き換える 443

リトリブ (続き)

既存ファイルを上書きする前にプロンプトを出すかどうか 516

基本タスク 269

共用メモリーを使用しての速度の向上 311

コマンド使用のアーカイブ済みファイル 277

実行 277

シンボリック・リンク 275

他のユーザーに許可 262

ディレクトリーのみを処理 (ファイルは処理しない) 385

の説明 379

ハード・リンク 276

ファイルのリスト 429

ファイル・リストのソート 158

フェイルオーバー時 246

別のノードに属するファイル 264

別のノードのファイル 437

別のワークステーションへの 597

別のワークステーションへのファイルの 265

btrfs 206

Web クライアント・セッションの開始 151

Web ユーザー・インターフェース・セッションの開始 153

リトリブの最大ファイル・サイズ 172

ローカル・スナップショット

ローカル・スナップショットとサーバー・ファイル・スペースの関連付け 197

ローカル・バックアップ・セット

ローカル・リストアのために GUI を使用可能化 240

ロー論理ボリューム (raw logical volume)

イメージ・バックアップ 197

リストア 237

ログ

アプリケーション・ログの切り捨て 463

エラー・ログの除去 412

サイズの制御 467

パスおよびファイル名の指定 414, 468, 533, 762

DSM_LOG 環境変数 414, 468, 533

dsmsched.log 534

dsmsched.pru 534

dsmwebcl.log 534

dsmwebcl.pru 534

errorlogname オプション 414

errorlogretention オプション 414

instrlogmax オプション 467

intrlogname オプション 468

schedlogname オプション 533, 762

schedlogretention オプション 533, 762

Web クライアント 532

次も参照: スケジュール・ログ

論理ボリューム (logical volume)

イメージ・バックアップ 197

リストア 237, 247

[ワ行]

ワイルドカード文字

ガイドライン 653

コマンドでの使用 235

ファイル・グループの包含と除外 131

ファイル・グループを包含または除外するための 132

ファイル指定での使用 235

ファイルの包含または除外 130

dsm.opt でのドライブ指定の指定 131

[数字]

128 ビット AES 暗号化のサポート [167](#)
256 ビット AES 暗号化のサポート [167](#)

A

absolute オプション [341](#)
absolute モード (absolute mode) [302](#)
ACL
 サポートされるファイル・システム [168](#)
afmskipuncachedfiles [342](#)
AIX
 スナップショット用の構成 [115](#)
 ワークロード区画 (workload partition (WPAR))
 バックアップ [216](#)
 リストア [252](#)
AIX のシステム要件 [4](#)
AIX クライアント
 アンインストール [13](#)
 インストール [10](#)
 クライアント構成要素 [3](#)
 通信方式 [4](#)
AIX コンポーネント
 インストール可能 [3](#)
AIX ディスク・スペース [4](#)
AIX のソフトウェア要件 [4](#)
AIX のハードウェア要件 [4](#)
archive fastback
 コマンド [656](#)
archmc オプション [343](#)
archsymlinkasfile オプション [344](#)
asnodename オプション [344](#)
asnodename セッション設定 [346](#)
auditlogging オプション [346](#)
auditlogname オプション [348](#)
autodeploy オプション [350](#)
autofsrename オプション [351](#)
automount オプション [353](#)

B

backmc オプション [353](#)
backup fastback コマンド [658](#)
backup group コマンド [661](#)
backup image
 btrfs [206](#)
 DSM_DIR の使用によるプラグイン・ライブラリーの指定 [67](#)
backup image コマンド
 サポートされる装置 [200](#)
backup nas コマンド [668](#)
backup vm コマンド [670](#)
backupsetname オプション [354](#)
basesnapshotname オプション [355](#)
Bourne および Korn シェル
 クライアント・ユーザー・オプション・ファイルを指す [63](#)
Bourne および Korn シェル変数、設定 [68](#)
btrfs [237](#), [742](#)
Btrfs サブボリュームの保護 [209](#)
btrfs ファイル・システム
 アーカイブ [206](#)

btrfs ファイル・システム (続き)
 サブボリュームの保護 [209](#)
 バックアップ [206](#)
 保護 [207](#)
 リストア [206](#)
 リトリブ [206](#)
 backup image [206](#)
 restore image [206](#)
Btrfs ファイル・システムの保護 [207](#)

C

C シェル変数
 設定 [69](#)
C-Mode [117](#)
cadlistenonport オプション [356](#)
cancel process コマンド [677](#)
cancel restore コマンド [677](#)
changingretries オプション [357](#)
CIFS
 ファイル・システムのバックアップ [215](#)
class オプション [358](#)
Clustered Data ONTAP [117](#)
collocatebyfilespec オプション [359](#)
commmethod オプション [360](#)
commrestartduration オプション [361](#)
commrestartinterval オプション [362](#)
compressalways オプション [363](#)
compression オプション [363](#)
console オプション [365](#)
createnewbase [366](#)
createnewbase オプション [366](#)
csv オプション [368](#)

D

datacenter オプション [371](#)
datastore オプション [371](#)
dateformat オプション [371](#)
dedupcachepath オプション [375](#)
dedupcachesize オプション [376](#)
deduplication オプション [377](#)
defaultserver オプション [378](#)
delete
 ファイル・スペース [190](#), [266](#)
 NAS またはクライアント・オブジェクト [358](#)
delete access コマンド [678](#)
delete archive コマンド [679](#)
delete backup コマンド [680](#)
delete group コマンド [685](#)
deletefiles オプション [379](#)
description オプション [379](#)
detail オプション [299](#), [380](#)
diffsnapshot オプション [382](#)
diffsnapshotname オプション [383](#)
dirmc オプション [384](#)
dironly オプション [385](#)
disablenqr オプション [386](#)
diskbuffsize オプション [387](#)
diskcachelocation オプション [387](#)
domain オプション [388](#)
domain.image オプション [393](#)
domain.nas オプション [394](#)

domain.vmfull オプション [395](#)
dontload オプション [401](#)
DSM_CONFIG
クライアント・ユーザー・オプション・ファイルを指す
[63, 67](#)
Solaris の使用 [67](#)
.cshrc ファイルへの追加 [69](#)
DSM_DIR
イメージまたは NAS バックアップまたはリストアのため
の設定 [67](#)
実行可能ファイルへの指定 [67](#)
リソース・ファイルの指定 [67](#)
dsm.sys ファイルの指定 [67](#)
.cshrc ファイルへの追加 [69](#)
DSM_LOG
dsmerror.log、dsmwebcl.log、dsmsched.log を指すため
の設定 [67](#)
.cshrc ファイルへの追加 [69](#)
dsm.opt ファイル
カスタマイズ [65](#)
作成 [63](#)
作成と変更 [61](#)
必須指定のオプション [61](#)
例 [63](#)
ワイルドカードを使用したドライブ指定の指定 [131](#)
dsm.opt.smp ファイル [63](#)
dsm.smp ファイル
コピー、dsm.opt への [61](#)
ロケーション [61](#)
dsm.sys ファイル
作成 [61](#)
例 [61](#)
dsm.sys.smp ファイル [61](#)
dsmerlog.pru ファイル [412](#)
dsmerror.log
指示する DSM_LOG の設定 [67](#)
dsmerror.log ファイル [412](#)
DSMI_CONFIG 環境変数
API、UNIX および Linux [69](#)
DSMI_DIR 環境変数
API、UNIX および Linux [69](#)
DSMI_LOG 環境変数
API、UNIX および Linux [69](#)
dsmsched.log [532, 534](#)
dsmtca 実行可能ファイル
指示する DSM_DIR の設定 [67](#)
dsmwebcl.log [532, 534](#)
dynamicimage オプション [402](#)

E

efsdecrypt オプション [403](#)
enablearchiveretentionprotection オプション [404](#)
enablededupcache オプション [405](#)
enableinstrumentation オプション [406](#)
enablelanfree オプション [408](#)
encryptiontype オプション [167, 410](#)
encryptkey オプション
encryptkey=generate [410](#)
encryptkey=prompt
encryptkey=save [410](#)
errorlogmax オプション [412](#)
errorlogname オプション [414](#)
errorlogretention オプション [412, 414](#)

exclude
EXCLUDE.VMDISK [420](#)
EXCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT [422](#)
exclude オプション
処理 [136](#)
プレビュー [135](#)
ワイルドカード文字 [131, 132](#)
exclude.archive [126](#)
exclude.attribute.symlink [126](#)
exclude.backup [126](#)
exclude.compression [126](#)
exclude.dir [126](#)
exclude.file [126](#)
exclude.file.backup [126](#)
exclude.fs [126](#)
exclude.image [126](#)
exclude.image オプション [126](#)
EXCLUDE.VMDISK [420](#)
EXCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT [422](#)
expire コマンド [686](#)

F

fbbranch オプション [423](#)
fbclient オプション [424](#)
fbpolicyname オプション [425](#)
fbreposlocation オプション [426](#)
fbserver オプション [427](#)
fbvolumename オプション [428](#)
filelist オプション [429](#)
filename オプション [432](#)
filesonly オプション [433](#)
followsymbolic オプション [434](#)
forcefailover オプション [435](#)
fromdate オプション [436](#)
fromnode オプション [437](#)
fromowner オプション [438](#)
fromtime オプション [439](#)

G

GPFS ファイル・システム
スケジューリング [196](#)
ストレージ・プール [248](#)
マルチノード・クラスター環境 [168, 388](#)
groupname オプション [439](#)
GUI
アーカイブ中の管理クラスの指定変更 [304](#)
セッションの開始 [147](#)
セッションの終了 [159](#)
特定時点リストアの実行 [249](#)

H

help コマンド [688](#)
host オプション [440](#)
HP-UX Itanium 2 のハードウェア要件 [4](#)
HP-UX Itanium 2 API
アンインストール [16](#)
インストール [14](#)
通信方式 [5](#)
HP-UX Itanium 2 クライアント

HP-UX Itanium 2 クライアント (続き)
データ・セグメント・サイズ限界のデフォルトの増大 [15](#)
HP-UX Itanium 2 のシステム 要件 [4](#)
HP-UX Itanium 2 のソフトウェア要件 [4](#)
HP-UX Itanium 2 のディスク・スペース [4](#)
HP-UX コンポーネント
インストール可能 [4](#)
httpport オプション [440](#)
HTTPS 接続を使用したスナップショット 差分バックアップ [553](#)

I

IBM Spectrum Protect
アップグレード、製品の旧バージョンからの [1](#)
インストール要件 [7](#)
オンライン・フォーラム [160](#)
クライアント 構成要素
AIX クライアント [3](#)
Linux on Power Systems クライアント [5](#)
Linux on System z クライアント [6](#)
Linux x86_64 クライアント [6](#)
Mac OS X クライアント [7](#)
Oracle Solaris クライアント [8](#)
通信方式
AIX クライアント [4](#)
HP-UX Itanium 2 API [5](#)
Linux on Power Systems クライアント [5](#)
Linux on System z クライアント [7](#)
Linux x86_64 クライアント [6](#)
Mac OS X クライアント [8](#)
Oracle Solaris クライアント [8](#)
パスワード [148](#)
IBM Spectrum Protect クライアント
認証 [146](#)
IBM Spectrum Protectpassword
使用 [147](#)
IBM Knowledge Center [xxiv](#)
IBM PowerHA SystemMirror クラスター
スケジューリング [194](#)
ieobjtype オプション [442](#)
ifnewer オプション [443](#)
imagegapsize オプション [444](#)
imagetofile オプション [445](#)
inactive オプション [445](#)
inlexcl オプション [446](#)
include
INCLUDE.VMDISK [456](#)
INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT [458](#)
include オプション
管理クラス [303](#)
処理 [136](#)
ワイルドカード文字 [131](#), [132](#)
include-exclude オプション・ファイル
アーカイブの管理 [278](#)
概要 [166](#)
パスとファイル名の指定 [446](#)
ボトムアップ処理 [136](#)
ユニコード対応ファイル・スペース [446](#)
include-exclude 処理
オプション [126](#)
概要 [126](#)
include-exclude リスト

include-exclude リスト (続き)
サイズ制限 [136](#)
作成 [125](#)
処理の照会順序 [716](#)
プレビュー [135](#)
include.vm オプション [455](#)
INCLUDE.VMDISK [456](#)
INCLUDE.VMLOCALSNAPSHOT [458](#)
include.vmresetcbt オプション [459](#)
include.vmsnapshotattempts オプション [461](#)
include.vmtsmvss オプション [463](#)
incrbydate オプション [465](#)
incremental オプション [466](#)
incremental コマンド
ジャーナル・ベースのバックアップ [693](#)
instrlogmax オプション [467](#)
instrlogname オプション [468](#)

J

Java GUI
構成の制限 [148](#)
JournalSettings スタンザ [85](#)

K

Knowledge Center [xxiv](#)

L

LAN フリー・データ移動
オプション [164](#)
共有メモリー・ポート [470](#)
前提条件 [163](#)
通信の有効化 [163](#), [469](#), [471](#)
LAN ベースのイメージ・バックアップ
スナップショット・イメージ・バックアップ [663](#)
lanfreecommmethod オプション [469](#)
lanfreeshmport オプション [470](#)
lanfreessl オプション [472](#)
lanfreetcpport オプション [471](#)
lanfreetcpsveraddress オプション [473](#)
LANG 環境変数
設定、言語ロケールの [66](#)
latest オプション [474](#)
Linux System z のハードウェア要件 [7](#)
Linux x86_64 のハードウェア要件 [6](#)
Linux on Power Systems クライアント
クライアント 構成要素 [5](#)
通信方式 [5](#)
Linux on Power Systems (ビッグ・エンディアン) API
インストール [26](#)
Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) クライアント
アンインストール [20](#)
インストール [16](#)
Linux on Power Systems API
アンインストール [28](#)
Linux on Power Systems コンポーネント
インストール可能 [5](#)
Linux on Power Systems システム 要件 [5](#)
Linux on Power Systems ソフトウェア要件 [5](#)
Linux on Power Systems ディスク・スペース [5](#)

Linux on Power Systems ハードウェア要件 5

Linux on System z クライアント

アンインストール [44](#)

インストール [41](#)

クライアント構成要素 [6](#)

通信方式 [7](#)

Linux on System z のコンポーネント

インストール可能 [6](#)

Linux System z のソフトウェア要件 [7](#)

Linux System z のシステム要件 [7](#)

Linux System z のディスク・スペース [7](#)

Linux x86_64 のソフトウェア要件 [6](#)

Linux x86_64 クライアント

アンインストール [34, 39](#)

インストール [30](#)

クライアント構成要素 [6](#)

通信方式 [6](#)

Linux x86_64 のコンポーネント

インストール可能 [6](#)

Linux x86_64 のシステム要件 [6](#)

Linux x86_64 のディスク・スペース [6](#)

Linux 論理ボリューム・マネージャー

ボリュームのスナップショット・イメージ・バックアップ [197](#)

localbackupset オプション [474](#)

loop コマンド [696](#)

LVM

LVM の開始後のアプリケーションの立ち上げ [503](#)

LVM の開始前のアプリケーションの静止 [510](#)

M

Mac OS X のディスク・スペース [7](#)

Mac OS X のハードウェア要件 [7](#)

Mac OS X クライアント

インストール [46](#)

インストール・ステップ [46](#)

クライアント構成要素 [7](#)

通信方式 [8](#)

Mac OS X クライアントの IBM Spectrum Protect

アンインストール [47](#)

Mac OS X のコンポーネント

インストール可能 [7](#)

Mac OS X のシステム要件 [7](#)

Mac OS X のソフトウェア要件 [7](#)

Macintosh クライアント

インストール要件 [7](#)

環境の前提条件 [7](#)

macro コマンド [697](#)

makesparsefile オプション [475](#)

managedservices オプション [476](#)

maxcmdretries オプション [478](#)

mbobjrefreshthresh [479](#)

mbpctrefreshthresh [480](#)

memoryefficientbackup オプション [480](#)

mode オプション [482](#)

modified モード (modified mode) [300](#)

monitor process コマンド [698](#)

monitor オプション [485](#)

myreplicationserver オプション [485](#)

N

NAS

ファイル・システムのバックアップ [210](#)

ファイル・システムのリストア [254, 745](#)

ファイル・システムへの管理クラスの割り当て [447](#)

ファイル・スペースの削除 [190, 266, 684](#)

フルまたは差分バックアップの指定 [482](#)

query node コマンド [718](#)

restore NAS コマンド [745](#)

NAS ファイル・システムのバックアップ

コマンド・ライン [213](#)

バックアップ/アーカイブ・クライアント

GUI [211](#)

nasnodename オプション [487](#)

netapp ファイル・サーバー [117](#)

Network Attached Storage (NAS)

管理 ID が権限をもつノードの表示 [718](#)

サーバー上のファイル・スペースの表示 [710](#)

照会に対する指定 [589](#)

操作のためのノード名の指定 [487](#)

属するファイル・システム・イメージの照会 [703](#)

バックアップおよびリストア・プロセスのキャンセル [677, 698](#)

バックアップからのファイルの除外 [416](#)

バックアップまたはリストア操作のモニター [485](#)

ファイル・システムのバックアップ [210, 668](#)

ファイル・システムのバックアップごとに目次を保存するかどうかの指定 [586](#)

ファイル・システムのリストア [254, 745](#)

ファイル・スペースの削除 [684](#)

Network Attached Storage (NAS) ファイル・サーバー

ファイル・スペースの削除 [190, 266](#)

NFS

仮想マウント・ポイント [229](#)

ソフト・マウント [233](#)

ハード・マウント [233](#)

ファイル・システムのバックアップ [215](#)

NFS のソフト・マウント [233](#)

NFS のハード・マウント [233](#)

nfstimeout オプション [233, 488](#)

NLSPATH 環境変数

ユーザー言語ロケールにあるヘルプ・ブラウザー・メニューの表示 [66](#)

nodename オプション [489](#)

nojournel オプション [490](#)

noprompt オプション [491](#)

nrtablepath オプション [491](#)

numberformat

指定 [492](#)

numberformat オプション [492](#)

O

optfile オプション [494](#)

Oracle Solaris クライアント

クライアント構成要素 [8](#)

通信方式 [8](#)

Oracle Solaris SPARC API の IBM Spectrum Protect

アンインストール [52](#)

インストール・ステップ [51](#)

Oracle Solaris x86_64 クライアントの IBM Spectrum Protect

アンインストール [50](#)

Oracle Solaris x86_64 クライアントの IBM Spectrum Protect (続) [query schedule コマンド、拡張 721](#)
インストール・ステップ [48](#)
Oracle Solaris コンポーネント
インストール可能 [8](#)

P

password オプション [495](#)
passwordaccess オプション [497](#)
passworddir オプション [498](#)
pick オプション [499](#)
PIHDW プラグイン [401](#)
pitdate [500](#)
pittime オプション [501](#)
postnschedulecmd オプション [502](#)
postsnapshotcmd オプション [503](#)
preschedulecmd オプション [505](#)
preschedulecmd オプション [505](#)
preservelastaccessdate オプション [506](#)
preservepath オプション [507](#)
Presnapshotcmd オプション [510](#)
preview archive コマンド [698](#)
preview backup コマンド [699](#)

Q

QFS ファイル・システム
制約事項 [168](#)
query
活動/非活動オブジェクトの表示 [445](#)
画面に情報を表示した後のスクロールのプリファレンス [539](#)
画面に表示する情報量 [538](#)
クライアントが所有しているプロキシ権限の対象ノード [272](#)
クライアントがプロキシ・ノード権限を持つノード [191](#)
グループ
コマンド [712](#)
のメンバーを表示 [544](#)
システム情報 [722](#)
ディレクトリーのみを処理 (ファイルは処理しない) [385](#)
の説明 [379](#)
バックアップ、アーカイブの日時に基づく [436, 439](#)
バックアップ、特定時点の確立 [500, 501](#)
別のノードのファイル [437](#)
include-exclude リスト [716](#)
NAS またはクライアント・オブジェクト [358](#)
query access コマンド [700](#)
query archive コマンド [701](#)
query backup コマンド [703](#)
query backupset コマンド [706, 708](#)
query filespace コマンド [710](#)
query group コマンド [712](#)
query image コマンド [714](#)
query inclexcl コマンド [716](#)
query mgmtclass コマンド [299, 717](#)
query node コマンド [718](#)
query options コマンド [719](#)
query restore コマンド [720](#)
query schedule
拡張 [288](#)
query schedule コマンド [721](#)

query schedule コマンド、拡張 [721](#)
query session コマンド [721](#)
query systeminfo コマンド
暗号化処理 [722](#)
query VM コマンド [723](#)
querschedperiod オプション [511](#)
querysummary オプション [512](#)
quiet オプション [513](#)
quotesareliteral オプション [514](#)

R

removeoperandlimit オプション [515](#)
replace オプション [516](#)
replserverguid オプション [517](#)
replservername オプション [519](#)
replsslport オプション [520](#)
repltcpport オプション [522](#)
repltcpserveraddress オプション [523](#)
resourceutilization オプション [525](#)
restart restore コマンド
割り込みリストアの再始動 [262](#)
restore backupset コマンド [733, 737](#)
restore backupset コマンドの考慮事項 [242, 736](#)
restore group コマンド [740](#)
restore image
btrfs [206](#)
restore image コマンド [742](#)
restore NAS コマンド [745](#)
restore vm コマンド
プレビュー [747, 757](#)
restore コマンド
大量の操作の実行 [259](#)
retrieve コマンド [759](#)
retryperiod オプション [527](#)
revokeremoteaccess オプション [528](#)
root ユーザー
root ユーザー・アクセスの獲得 [55](#)
root ユーザー・タスク
セットアップ [61](#)
デフォルトのクライアント・ユーザー・オプション・ファイルの作成 [63](#)

S

SAN
バックアップ・セットのリストアに使用 [737](#)
schedcmddisabled オプション [529, 530](#)
schedcmduser オプション (定義されたサーバーのみ) [291](#)
schedgroup オプション [530](#)
schedlogmax オプション [532](#)
schedlogname オプション [533](#)
schedlogretention オプション [534](#)
schedmode オプション [536](#)
schedrestretretrdisabled オプション [537](#)
scrolllines オプション [538](#)
scrollprompt オプション [539](#)
Secure Sockets Layer (SSL)
確立、コミュニケーションの [78](#)
selective コマンド [764](#)
servername オプション [540](#)
sessioninitiation オプション [541](#)
set access コマンド

set access コマンド (続き)
リストア/リトリブ権限 [262](#)
set event コマンド [769](#)
set netappsvm [117](#)
set password コマンド [772](#)
set vmtags コマンド [778](#)
setwindowtitle [543](#)
shmport オプション [544](#)
showmembers オプション [544](#)
skipacl オプション [545](#)
skipaclupdatecheck オプション [545](#)
snapdiff オプション [116](#), [546](#)
snapdiffchangelogdir オプション [552](#)
snapdiffhttps オプション [553](#)
snapshotcachesize オプション [554](#)
snapshotproviderfs オプション [556](#)
snapshotproviderimage オプション [556](#)
snapshotroot オプション [557](#)
Solaris SPARC API
インストール [51](#)
Solaris ゾーンでのインストール [51](#)
Solaris x86_64 クライアント
インストール [48](#)
Solaris ゾーンでのインストール [48](#)
Solaris ゾーン [183](#)
Solaris のシステム要件 [8](#)
Solaris のソフトウェア要件 [8](#)
Solaris のディスク・スペース [8](#)
Solaris のハードウェア要件 [8](#)
srvoptsetencryptiondisabled オプション [559](#)
srvprepostscheddisabled オプション [560](#)
srvprepostsnapdisabled オプション [561](#)
SSL (Secure Socket Layer)
確立、コミュニケーションの [78](#), [81](#)
ssl オプション [562](#)
sslacceptcertfromserv オプション [563](#)
sslfipsmode オプション [565](#)
sslrequired オプション [566](#)
stagingdirectory オプション [568](#)
subdir option [569](#)
Swing 対応ブラウザ
Web クライアントの稼働に必要な [151](#), [153](#)

T

tagsched オプション [571-573](#)
tapeprompt オプション [575](#)
TCP/IP 通信方式
オプション [310](#)
tcpadminport オプション [576](#)
tcpbuffsize オプション [577](#)
tcpcadaddress オプション [578](#)
tcpclientaddress オプション [578](#)
tcpclientport オプション [579](#)
tcpnodelay オプション [580](#)
tcpserveraddress オプション [581](#)
tcpwindowssize オプション [582](#)
timeformat オプション [583](#)
Tivoli Storage Manager FastBack インストール要件 [9](#)
Tivoli Storage Manager FastBack データのバックアップ [224](#)
Tivoli Storage Manager FastBack データのリストア [224](#)
Tivoli Storage Manager FastBack の構成 [105](#)
toc オプション [586](#)
todate オプション [587](#)

totime オプション [588](#)
TSM.sth ファイル [410](#)
tsmjbbd.ini
構成 [84](#)
txnbytelimit オプション [588](#)
type オプション [589](#)

U

Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) API
アンインストール [25](#)
インストール [22](#)
Ubuntu Linux on Power Systems (リトル・エンディアン) ク
ライアント
アンインストール [25](#)
インストール [22](#)
Ubuntu x86_64 クライアント
インストール [36](#)
UNIX
標準アクセス許可の保存 [275](#)
ファイル・システム、ACL サポート [168](#)
UNIX および Linux
クラスター環境
インストール IBM Spectrum Protect [106](#)
制約事項
シンボリック・リンクのリストア [728](#)
updatectime オプション [590](#)
useexistingbase オプション [591](#)
usereplicationfailover オプション [592](#)

V

v2archive オプション [593](#)
verbose オプション [594](#)
verifyimage オプション [594](#)
virtualfsname オプション [595](#)
virtualmountpoint オプション [595](#)
virtualnodename オプション
別のワークステーションへのリストアまたはリトリブ
[265](#)
VM [219](#)
VM テンプレートをバックアップに組み込む [609](#)
vmbackdir オプション [598](#)
vmbackuplocation オプション [599](#)
vmbackupmailboxhistory [600](#)
vmbackuptype オプション [601](#), [621](#)
vmchost オプション [602](#)
vmcpw オプション [602](#)
vmctlmc オプション
オプション
vmctlmc [603](#)
vmcuser オプション [604](#)
vmdatastorethreshold
オプション [605](#)
vmdefaultdvportgroup オプション [607](#)
vmdefaultdvswitch オプション [608](#)
次も参照: vmdefaultdvportgroup
vmdefaultnetwork オプション [608](#)
vmenabletemplatebackups オプション [609](#)
vmlimitperdatastore オプション [611](#)
vmlimitperhost オプション [612](#)
vmmaxbackupsessions オプション [613](#)
vmmaxparallel オプション [615](#)

818 IBM Spectrum Protect UNIX および Linux バックアップ/アーカイブ・クライアント: インストールとユーザーのガイド

- vmmaxparallelrestoresessions オプション [618](#)
- vmmaxparallelrestorevms オプション [619](#)
- vmmaxrestoresessions オプション [617](#)
- vmnochtcontinue オプション [622](#)
- vmnoprdmdisks [623](#)
- vmnovrdmdisks [624](#)
- vmpreferdagpassive オプション [625](#)
- vmprocessvmwithprdm [627](#)
- vmprocesswithindependent [626](#)
- vmskipctlcompression オプション [628](#)
- vmskipmaxvirtualdisks [629](#)
- vmskipmaxvmdks [630](#)
- vmtagdatamover
オプション [630](#)
- vmtagdefaultdatamover
オプション [633](#)
- vmtimeout オプション [640](#)
- vmverifyifaction [635](#)
- vmverifyiflatest [637](#)
- vmvstorcompr オプション [638](#)
- vmvstortransport オプション [639](#)
- VMware 仮想マシンのバックアップ
タイプ [219](#)
- VMware タグ・サポート
有効 [630](#)
- VMware タグ付け
概要 [779](#)
継承 [787](#)
サポートされるデータ保護タグ [780](#)
データ保護設定として表記 [780](#)
バックアップ・ポリシーの構成のヒント [789](#)
- vStorage バックアップ・サーバー
オフホスト・バックアップ [221](#)

[特殊文字]

* ? [235](#)

W

- Web クライアント
オプションの要約 [330](#)
開始 [151](#)
管理者による Web クライアントを実行しているクライアントへのアクセスの制限 [528](#)
構成 [70](#)
構成の概要 [69](#)
サポートされない機能 [161](#)
サポートされるブラウザー [151](#)
ファイアウォールを介した使用 [641](#)
ファイアウォールを通して通信を確立 [440](#)
NAS ファイル・システムの制限 [210](#)
Swing 対応ブラウザーで稼働可能な [151](#)
TCP/IP ポート・アドレスの指定 [440](#)
- Web クライアントの構成 [70](#)
- Web クライアントの構成の概要 [69](#)
- Web ユーザー・インターフェース
開始 [153](#)
サポートされるブラウザー [153](#)
Swing 対応ブラウザーで稼働可能な [153](#)
- webports オプション [641](#)
- wildcardsareliteral オプション [642](#)

Z

- Zettabyte ファイル・システム (ZFS)
ファイル・システムのバックアップ [217](#)



プログラム番号: 5725-W98
5725-W99
5725-X15